

HP SiteScope

Windows, Solaris, および Linux オペレーティング・システム用

ソフトウェア・バージョン : 11.20

SiteScope の使用

ドキュメント・リリース日 : 2011 年 5 月 (英語版)

ソフトウェア・リリース日 : 2011 年 5 月 (英語版)



ご注意

保証

HP 製品、またはサービスの保証は、当該製品、およびサービスに付随する明示的な保証文によってのみ規定されるものとします。ここでの記載で追加保証を意図するものは一切ありません。ここに含まれる技術的、編集上の誤り、または欠如について、HP はいかなる責任も負いません。

ここに記載する情報は、予告なしに変更されることがあります。

権利の制限

機密性のあるコンピュータ・ソフトウェアです。これらを所有、使用、または複製するには、HP からの有効な使用許諾が必要です。商用コンピュータ・ソフトウェア、コンピュータ・ソフトウェアに関する文書類、および商用アイテムの技術データは、FAR12.211 および 12.212 の規定に従い、ベンダーの標準商用ライセンスに基づいて米国政府に使用許諾が付与されます。

著作権について

© Copyright 2005 - 2012 Hewlett-Packard Development Company, L.P.

商標について

Adobe® および Acrobat® は、Adobe Systems Incorporated の商標です。

Intel®, Pentium®, および Intel® Xeon® は、米国およびその他の国における Intel Corporation の商標です。

iPod は Apple Computer, Inc. の商標です。

Java は、Oracle Corporation およびその関連会社の登録商標です。

Microsoft®, Windows®, Windows NT®, および Windows® XP は、Microsoft Corporation の米国登録商標です。

Oracle は、Oracle Corporation およびその関連会社の登録商標です。

UNIX® は The Open Group の登録商標です。

謝辞

本製品には、Apache Software Foundation(<http://www.apache.org/>)(英語サイト)によって開発されたソフトウェアが含まれています。

本製品には、JDOM Project(<http://www.jdom.org/>)(英語サイト)によって開発されたソフトウェアが含まれています。

ドキュメントの更新情報

このマニュアルの表紙には、以下の識別番号が記載されています。

- ソフトウェアのバージョン番号は、ソフトウェアのバージョンを示します。
- ドキュメント・リリース日は、ドキュメントが更新されるたびに更新されます。
- ソフトウェア・リリース日は、このバージョンのソフトウェアのリリース期日を表します。

最新の更新のチェック、またはご使用のドキュメントが最新版かどうかの確認には、次のサイトをご利用ください。

<http://h20230.www2.hp.com/selfsolve/manuals>

このサイトを利用するには、HP Passport への登録とサインインが必要です。HP Passport ID の取得登録は、次の Web サイトから行なうことができます。

<http://h20229.www2.hp.com/passport-registration.html>

または、HP Passport のログイン・ページの[**New users - please register**]リンクをクリックします。

適切な製品サポート・サービスをお申し込みいただいたお客様は、更新版または最新版をご入手いただけます。詳細は、HP の営業担当にお問い合わせください。

サポート

次の HP ソフトウェアのサポート Web サイトを参照してください。

<http://www.hp.com/go/hpsoftwaresupport>

HP ソフトウェアが提供する製品、サービス、サポートに関する詳細情報をご覧ください。

HP ソフトウェア・オンラインではセルフソルブ機能を提供しています。お客様の業務の管理に必要な対話型の技術支援ツールに素早く効率的にアクセスいただけます。HP ソフトウェア・サポート Web サイトのサポート範囲は次のとおりです。

- 関心のある技術情報の検索
- サポート・ケースとエンハンスメント要求の登録とトラッキング
- ソフトウェア・パッチのダウンロード
- サポート契約の管理
- HP サポート窓口の検索
- 利用可能なサービスに関する情報の閲覧
- 他のソフトウェア・カスタマとの意見交換
- ソフトウェア・トレーニングの検索と登録

一部を除き、サポートのご利用には、HP Passport ユーザとしてご登録の上、ログインしていただく必要があります。また、多くのサポートのご利用には、サポート契約が必要です。HP Passport ID を登録するには、以下の Web サイトにアクセスしてください。

<http://h20229.www2.hp.com/passport-registration.html>

アクセス・レベルに関する詳細は、以下の Web サイトにアクセスしてください。

http://h20230.www2.hp.com/new_access_levels.jsp

PDF 版のオンライン・ヘルプに関する免責事項

本ドキュメントは PDF 版のオンライン・ヘルプです。この PDF は、ヘルプ情報から複数のトピックを簡単に印刷したり、オンライン・ヘルプを PDF 形式で閲覧できるようにするために提供されています。

注：トピックによっては、書式上の問題により正しく PDF に変換されていない場合があります。また、PDF 版では完全に削除されているオンライン・ヘルプの要素もあります。このような問題のあるトピックについては、オンライン・ヘルプから正しく印刷することができます。

目次

SiteScope の使用	1
目次	6
本書について	30
概要と管理	32
SiteScope の概要	33
SiteScope の概要	34
SiteScope の主な機能	34
SiteScope 監視モデル	37
SiteScope の設定および管理	38
作業開始の概要	39
サイレント・ログインの使用	40
SiteScope フェールオーバーの使用	41
JMX コンソールの使用	42
SiteScope 設定 API の使用	43
SiteScope の統合	46
SiteScope モバイル・アプリケーションの使用	48
SiteScope を使用した起動方法	50
SiteScope へのアクセス方法	52
SiteScope へのアクセスを制限する方法	53
サイレント・ログイン URL の作成方法	54
SiteScope の設定および管理方法	57
SiteScope の監視の設定方法	60
テンプレートを使用した SiteScope 監視ソリューションの設定方法 - フローチャート	62
SiteScope API 呼び出しの使用	63
SiteScope ユーザ・インタフェースの操作	64
SiteScope ユーザ・インタフェースについて	65
SiteScope 共通ツールバー	66

SiteScope コンテキスト・ボタン	66
コンテキスト・ツリーでのアクションの操作と実行	68
複数のグループやモニタに対するアクションの実行	69
SiteScope オブジェクトのコピーと移動	70
SiteScope キーボード・ショートカット	72
SiteScope ユーザ・インタフェースの操作	73
ツリー・ツールバーのボタン	73
[モニタとグループの管理] ダイアログ・ボックス	76
モニタ・ツリー	78
リモート・サーバ・ツリー	87
テンプレート・ツリー	88
プリファレンス・メニュー	95
[サーバ統計] メニュー	98
[ツール] メニュー	99
[警告] タブのショートカット・メニュー・オプション	102
[レポート] タブのショートカット・メニュー・オプション	103
SiteScope オブジェクトの検索とフィルタ処理	105
SiteScope オブジェクトの検索	106
詳細な内容	106
タスク	107
UI の説明	109
[新規タグ]/[タグの編集] ダイアログ・ボックス	111
SiteScope オブジェクトのフィルタ処理	113
詳細な内容	113
タスク	113
UI の説明	114
[モニタタイプのフィルタ] ダイアログ・ボックス	116
[ターゲット サーバのフィルタ] ダイアログ・ボックス	117
[フィルタタグ] ダイアログ・ボックス	117
グローバル検索と置換	119
グローバル検索と置換の概要	120
グローバル検索と置換の実行方法	122

[グローバル検索と置換]ウィザード	127
[SiteScope の選択] ページ	127
[タイプの選択] ページ	128
[サブタイプの選択] ページ	128
[置換モード] ページ	129
[変更の入力] ページ	130
[影響を受けるオブジェクト] ページ	133
[影響を受けるオブジェクトをフィルタ] ダイアログ・ボックス	134
[サマリの確認] ページ	135
[サマリ] ページ	136
SiteScope ツール	138
SiteScope ツールの概要	139
ユーザ権限	139
モニタの設定時またはトラブルシューティング時の SiteScope ツールの使用方法	140
ログ・ファイル・モニタの設定時またはトラブルシューティング時のログ分析ツールの使用 方法 - 使用ケースのシナリオ	141
SiteScope ツールのユーザ・インタフェース	143
データベース接続ツール	143
例	146
データベース情報ツール	146
DNS ツール	147
イベント・ログ・ツール	148
FTP ツール	150
LDAP 認証状態ツール	152
リンク・チェック・ツール	154
ログ分析ツール	157
メールの送受信ツール	159
Microsoft Windows Media Player ツール	162
ネットワーク状態ツール	163
ニュース・サーバ・ツール	164
パフォーマンス・カウンタ・ツール	165
Ping ツール	167

プロセス・ツール	168
Real Media Player ツール	169
正規表現ツール	170
解析された括弧および一致文字列テーブル	171
サービス・ツール	172
SiteScope ログ・グラバ・ツール	173
SNMP ブラウザ・ツール	175
SNMP ツール	177
SNMPトラップ・ツール	181
トレース・ルート・ツール	182
URL ツール	183
Web サービス・ツール	186
XSL 変換ツール	191
HP Live Network およびコンテンツ共有	194
HP Live Network およびコンテンツ共有の概要	195
コンテンツ共有のための HP Live Network の使用方法	196
正規表現の使用	198
正規表現の概要	199
正規表現の定義	200
文字列リテラルの照合	201
メタ文字を使用したパターンの照合	202
検索モード修飾子	205
内容の照合値の保持	206
SiteScopeの日付変数	207
ログ・ファイル監視の例	211
正規表現の使用時に発生する問題	215
統合	217
BSMを使った作業	218
SiteScopeとBSMの通信方法について	219
接続の設定	221
SiteScope データとBSMの構成アイテムとの統合	222
モニタ・タイプおよびトポロジ・レポート	222

検出されたトポロジの BSM へのレポート	227
サポート対象環境	227
CI のダウンタイム	229
SiteScope および BSM 間の統合の設定方法	231
SiteScope を SSL が必要な BSM サーバに接続する方法	235
クライアント証明書が必要な BSM サーバに SiteScope を接続する方法	236
トポロジ・レポートの設定方法	237
カスタム・モニタ用のトポロジ・レポートの設定方法	240
カスタム・モニタ用のカスタム・トポロジの設定方法	243
初期設定でトポロジ・データをレポートしないモニタ	249
測定値ごとに CI をレポートするモニタ	250
トラブルシューティングと制限事項	251
HP Operations Agent を使用した Operations Manager と BSM での作業	253
SiteScope と HPOM および BSM の通信方法について	254
イベントの送信	259
HP Operations Agent を使用した測定値の報告	265
SiteScope を使用して HPOM または BSM にイベントを送信する方法	268
HP Operations Agent を異なる HPOM または BSM サーバに再接続する方法	273
SiteScope モニタ・ディスカバリ・ポリシーを有効にする方法	275
HPOM for Windows で SiteScope にドリルダウン・ツールを有効にする方法	279
HPOM for UNIX/Linux/Solaris で SiteScope にドリルダウン・ツールを有効にする方法	280
SiteScope を使用して HP Operations Agent に測定値をレポートする方法	283
SiteScope-Operations エージェントの測定値の整合	285
SiteScope-Operations Manager 測定値統合のサイズ設定の推奨事項	289
定義	289
検証	289
例:	289
Network Node Manager i(NNMI)との連携	291
NNMI への SiteScope イベントの送信	292
対応バージョン	292
NNMI へのメトリックのレポート	294

サポートされているバージョン	294
サポートされている SiteScope モニタ	294
NNMi にイベント・データを送信するための SiteScope の設定方法	295
メトリック・データを NNMi にレポートするための SiteScope の設定方法	297
NNMi に送信される SiteScope オブジェクトの SNMP トラップ形式	300
NNMi にレポートされるモニタ・メトリック	303
トラブルシューティングおよび制限事項	306
負荷テストのための SiteScope	307
SiteScope for Load Testing の使用	308
対応バージョン	308
モニタ	309
SiteScope グループを使った作業	310
SiteScope グループの概要	311
グループの管理方法	313
[新規 SiteScope グループ] ダイアログ・ボックス	315
SiteScope モニタを使った作業	318
SiteScope モニタの概要	319
SiteScope モニタのカテゴリ	320
カスタム・モニタの使用	322
リモート・サーバの監視	328
グループの依存関係の監視	329
状態のしきい値の設定	332
ベースラインを使った状態しきい値の設定	335
ベースライン順守レベルの設定	336
良好な限度とエラー限度について	336
良好な限度	336
エラー限度	337
ベースラインしきい値について	337
注意事項および制限事項	339
モニタのデプロイ方法	341
ベースラインを使用したモニタしきい値の設定方法	344
モニタ・カテゴリ・リスト	350

Windows 環境にインストールされた SiteScopes のみでサポートされているモニタ	355
Windows Management Instrumentation(WMI)をサポートしているモニタ	356
EC2 上にインストールされていない SiteScope から Amazon EC2 インスタンスのモニタリ ングをサポートするサーバ・モニタ	357
SiteScope の監視に使用されるポート	359
廃止された SiteScope モニタのリスト	364
SiteScope モニタのユーザ・インタフェース	365
新規 モニタ・ダイアログ・ボックス	365
共通 モニタ設定	367
一般設定	369
モニタの実行設定	370
依存関係	372
しきい値の設定	374
HP 統合設定	380
イベント マッピング設定	390
モニタの有効化/無効化	391
関連する警告の有効化/無効化	392
タグの検索/フィルタ	394
ベースライン設定	395
[依存対象モニタの選択]ダイアログ・ボックス	396
[テンプレートの選択]ダイアログ・ボックス	397
[テンプレート ツリーにコピー]ダイアログ・ボックス	398
パーセンタイル範囲 マッピング・テーブル	399
[ベースラインの計算]ダイアログ・ボックス	400
[順守レベルの微調整 / 限度の設定]ダイアログ・ボックス	402
[ベースラインのアクティブ化]ダイアログ・ボックス	403
[設定のバックアップ]ダイアログ・ボックス	406
[ベースライン モニタ測定値 グラフ]ダイアログ・ボックス	406
[ベースラインの削除]ダイアログ・ボックス	409
ベースラインの状態レポート	409
XMLドキュメントの監視	412
XMLドキュメントの監視の概要	413

XMLドキュメントの内容の照合	414
モニタ設定でのXML内容照合値の使用	416
統合モニタ	417
SiteScope 統合モニタを使った作業	418
統合モニタの概要	419
フィールド・マッピングの構造について	422
CI 解決のヒントの形式	422
テクノロジー統合モニタのトポロジ設定	424
スクリプト編集に関する一般的なガイドライン	428
統合モニタに個別に関連するガイドライン	429
統合モニタのデプロイ方法	430
イベント・ハンドラの構造と構文	432
廃止された統合モニタのリスト	440
トラブルシューティングおよび制限事項	441
イベント・データを収集する統合モニタの設定	443
イベント・サンプルの統合モニタ・フィールドのマッピング	444
共通イベントのデータを収集する統合モニタの設定方法	446
レガシー・イベントのデータを収集する統合モニタの設定方法	450
共通イベント・サンプルのフィールドのマッピングの設定	454
レガシー・イベント・サンプルのフィールドのマッピングの設定	459
イベント・サンプルのホスト DNS 解決	461
トラブルシューティングおよび制限事項	464
測定値データを収集する統合モニタの設定	465
測定値サンプルの統合モニタ・フィールドのマッピング	466
コンピュータ・モニタ・トポロジを使ってメトリック・データを収集するための統合モニタの設定方法	467
例 - コンピュータ・モニタ・トポロジを使用した測定値フローの作成	471
カスタム・トポロジを使用して測定値データを収集する統合モニタの設定方法	474
例 - カスタム・トポロジを使用した測定値フローの作成	480
ノード・トポロジでメトリック・データを収集するための統合モニタの設定方法	489
例 - トポロジを使用しない測定値フローの作成	494
測定値サンプルのフィールドのマッピングの設定	501

チケット発行データを収集する統合モニタの設定	504
チケット発行サンプルの統合モニタ・フィールドのマッピング	505
チケット発行データを収集する統合モニタの設定方法	506
チケット・サンプルのフィールドのマッピングの設定	510
トラブルシューティングおよび制限事項	513
データなしのトポロジ報告	514
データなしのトポロジ報告の概要	515
データなしでトポロジをレポートする方法	516
HP Network Node Manager との統合	518
Network Node Manager 統合の概要	519
Network Node Manager データをエクスポートするスクリプトの作成	520
ログ・ファイルへの書き込みを行うサンプル・スクリプト	520
SNMP トラップ・データを送信するサンプル・スクリプト	520
Network Node Manager でのイベントの設定方法	521
リモート・サーバ	522
リモート・サーバを使った作業	523
リモート・サーバの概要	524
リモート Microsoft Windows サーバを監視するための SiteScope の設定方法	525
リモート Windows サーバ接続プロファイルの定義方法	527
SiteScope 監視のドメイン権限の設定方法	527
SiteScope サービスのユーザ・アカウントの変更方法	528
リモート監視用のユーザ権限の設定方法	528
リモート監視用の WMI サービスの設定方法	529
リモート UNIX サーバを監視するための SiteScope の設定方法	531
リモート UNIX サーバ接続プロファイルの定義方法	532
リモート・サーバのユーザ・インタフェース	533
リモート・サーバのプロパティ・ページ	533
[新規 Microsoft Windows リモート サーバ]/[Microsoft Windows リモート サーバの編集]ダイアログ・ボックス	535
[新規 UNIX リモート サーバ]/[UNIX リモート サーバの編集]ダイアログ・ボックス	541
トラブルシューティングと制限事項	550
SiteScope での IP バージョン 6 のサポート	556

IP バージョン 6 のサポート	557
SiteScope での IP バージョン 6 アドレスの優先の有効化方法	559
IP バージョン 6 アドレスがサポートされているモニタ	560
セキュア・シェル(SSH)を使用した SiteScope 監視	562
SiteScope および SSH の概要	563
SSH を使用したリモート Windows サーバの監視	566
リモート UNIX サーバでの SSH 監視の設定方法	568
リモート Windows サーバでの SSH 監視の設定方法	569
Windows での Cygwin OpenSSH のインストール	570
OpenSSH for Windows のインストール	575
SiteScope リモート Windows SSH ファイルのインストール	576
UNIX リモート・サーバの SSH 設定要件	578
(エージェントレスまたは SiteScope リモート Windows SSH ファイルを使用した) Windows SSH をサポートするモニタ	579
トラブルシューティングおよび制限事項	581
SSH クライアントを使った作業	583
統合された Java SSH クライアントの概要	584
統合された Java SSH クライアントの設定方法	586
鍵ベース認証の設定	586
UNIX オペレーティング・システム・アダプタ	590
UNIX オペレーティング・システム・アダプタの概要	591
アダプタの追加方法	592
SiteScope で提供される UNIX アダプタ	593
アダプタ・ファイルの形式	594
アダプタ・コマンド・リスト	595
プリファレンス	599
証明書管理	600
証明書管理の概要	601
証明書管理を使用したサーバ証明書のインポート方法	602
[証明書管理]のユーザ・インタフェース	603
[証明書管理]ページ	603
[証明書のインポート]ダイアログ・ボックス	604

[証明書の詳細]ダイアログ・ボックス	605
共通イベント・マッピング	607
共通イベント・マッピングの概要	608
HPOM または BSM 用の共通イベント・マッピングの設定方法	609
共通イベント・マッピングのユーザ・インタフェース	611
[共通イベント マッピング]ページ	611
[新規イベント マッピング] / [イベント マッピングの編集]ダイアログ・ボックス	612
資格情報のプリファレンス	619
資格情報のプリファレンスの概要	620
資格情報のプリファレンスの設定方法	623
[資格情報のプリファレンス]のユーザ・インタフェース	625
[資格情報のプリファレンス]ページ	625
[新規資格情報プロファイル] / [資格情報プロファイルの編集]ダイアログ・ボックス	626
電子メール・プリファレンス	629
電子メール・プリファレンスの概要	630
電子メール・プリファレンスのユーザ・インタフェース	631
[電子メール プリファレンス]ページ	631
[新規電子メール受信者] / [電子メール受信者の編集]ダイアログ・ボックス	632
[電子メール プリファレンスの標準設定]ダイアログ・ボックス	634
一般プリファレンス	637
一般プリファレンスの概要	638
[一般プリファレンス]ページ	639
高可用性プリファレンス	647
高可用性プリファレンスの概要	648
高可用性プリファレンスのユーザ・インタフェース	649
[高可用性プリファレンス]ページ	649
[新規フェイルオーバー プロファイル] / [フェイルオーバー プロファイルの編集]ダイアロ グ・ボックス	651
[標準設定のフェイルオーバー サーバ設定]ダイアログ・ボックス	655
HTTP プリファレンス	658
HTTP プリファレンスの概要	659
HTTP ユーザ・インタフェース	660

[HTTP プリファレンス] ページ	660
[新規 HTTP 受信者]/[HTTP 受信者の編集] ダイアログ・ボックス	661
インフラストラクチャ・プリファレンス	667
インフラストラクチャ・プリファレンスの概要	668
[インフラストラクチャ プリファレンス] ページ	669
統合 プリファレンス	696
統合 プリファレンスの概要	697
Amazon CloudWatch 統合 プリファレンス	698
HP Business Service Management 統合 プリファレンス	698
Diagnostics 統合 の概要	700
Diagnostics の測定単位	700
HP Operations Manager 統合 の概要	700
汎用データ統合 の概要	701
汎用イベント統合 の概要	702
アクセス不可プロファイルの SiteScope-BSM 統合 プリファレンスの設定方法	704
SiteScope 一般イベント統合 の設定方法	705
一般データおよびDiagnostics 統合 のXML タグの参照情報	708
[統合 プリファレンス] のユーザ・インタフェース	711
[統合 プリファレンス] ページ	711
[統合 プリファレンス タイプ] ダイアログ・ボックス	712
[Amazon CloudWatch 統合 プリファレンス] ダイアログ・ボックス	713
[BSM 統合 プリファレンス] ダイアログ・ボックス	718
[データ統合 プリファレンス] ダイアログ・ボックス	721
[Diagnostics 統合 プリファレンス] ダイアログ・ボックス	725
HP Operations Manager 統合 ダイアログ・ボックス	729
[一般イベント統合 プリファレンス] ダイアログ・ボックス	734
ログ・プリファレンス	737
ログ・プリファレンスの概要	738
データベースにログ記録されるデータのフィールド名の生成方法	739
SiteScope ログ・データベース・テーブルの構造	741
[ログ プリファレンス] ページ	742
トラブルシューティングおよび制限事項	744

ページャ・プリファレンス	745
ページャ・プリファレンスの概要	746
ページャ・プリファレンスのユーザ・インタフェース	747
[ページャ プリファレンス] ページ	747
[新規 ページャ受信者]/[ページャ受信者の編集] ダイアログ・ボックス	748
ページャ接続オプション	749
スケジュール・プリファレンス	752
スケジュール・プリファレンスの概要	753
スケジュール・プリファレンスのユーザ・インタフェース	755
時間指定スケジュール・ページ	755
範囲スケジュールのユーザ・ページ	756
タグの検索/フィルタ	760
タグの検索 / フィルタの概要	761
[タグの検索/フィルタ] ページ	762
SNMP プリファレンス	763
SNMP プリファレンスの概要	764
SNMP のユーザ・インタフェース	765
[SNMP プリファレンス] ページ	765
[SNMPトラップの送信]/[SNMPトラップの受信] ダイアログ・ボックス	767
ユーザ管理プリファレンス	772
ユーザ管理プリファレンスの概要	773
LDAP 認証と承認	776
サイレント認証	776
SiteScope ユーザ・プロファイルの作成方法	777
SiteScope がLDAP 認証を使用するように設定する方法	779
LDAP 認証の使用時にサイレント・ログインを設定する方法	781
パスワード要件パラメータ	784
ユーザ管理のユーザ・インタフェース	785
[ユーザ管理プリファレンス] ページ	785
[ユーザ管理設定] ダイアログ・ボックス	787
[新規ユーザプロファイル]/[ユーザプロファイルの編集] ダイアログ・ボックス	789

[新規ユーザロールプロファイル]/[ユーザロールプロファイルの編集]ダイアログ・ボックス	801
[CSV ファイル]ダイアログ・ボックスの SiteScope LDAP ユーザの保存 :	802
[ユーザの許可されているグループを選択]ダイアログ・ボックス	803
多言語化 (I18N)環境での SiteScope の使用	805
多言語 ユーザ(MLU)インタフェースのサポート	806
注意事項および制限事項	806
SiteScope の英語以外のロケールの設定方法	808
特定の言語での SiteScope ユーザ・インタフェースの表示方法	809
多言語化がサポートされているモニタ	810
トラブルシューティングと制限事項	812
SiteScope へのログインのための認証方法の設定	813
認証方法の概要	814
SiteScope にログオンするための認証方法の設定方法	815
Lightweight シングル・サインオン認証 (LW-SSO) - 一般的な参照	816
LW-SSO 認証の概要	817
LW-SSO のシステム要件	818
LW-SSO のセキュリティに関する警告	819
トラブルシューティングおよび制限事項	821
ユーザ定義のテンプレート	824
SiteScope テンプレート	825
SiteScope テンプレートの概要	826
SiteScope テンプレート使用の利点	826
テンプレートについて	828
テンプレート例	831
テンプレートの計画	832
テンプレート変数を使った作業	833
テンプレート変数の使用についてのガイドライン	833
変数の構文	833
テンプレート変数の参照	835
モニタ・テンプレートのカウンタ選択	837
例 - 正規表現の使用	838

テンプレートを使用した SiteScope 監視ソリューションの設定方法	840
既存の設定のコピーによるテンプレートの作成方法	847
正規表現を使用するためのカウンタ選択文字列の変更方法	848
予約済みテンプレート・グループ・タイプ	849
SiteScope テンプレートのユーザ・インタフェース	850
[SiteScope テンプレート] ページ	850
テンプレート・ツリー - [プロパティ] ページ	851
テンプレート・ツリー - [警告] タブ	852
[新規テンプレート コンテナ] ダイアログ・ボックス	853
[新規テンプレート] ダイアログ・ボックス	854
[新規変数] ダイアログ・ボックス	856
[新規テンプレート リモート サーバ] ダイアログ・ボックス	858
[新規テンプレート グループ] ダイアログ・ボックス	859
[新規テンプレート モニタ] ダイアログ・ボックス	863
[新規警告] ダイアログ・ボックス	865
[タグの検索/フィルタ] ダイアログ・ボックス	866
テンプレートのインポートまたはエクスポート	867
テンプレートのエクスポートおよびインポート	868
テンプレートのエクスポートとインポートの方法	869
PDF へのエクスポート時の Unicode フォントの有効化方法	871
テンプレートのインポートおよびエクスポートのユーザ・インタフェース	872
[テンプレートのエクスポート] ダイアログ・ボックス	872
[内容のインポート] ダイアログ・ボックス	873
テンプレートのデプロイ	875
SiteScope テンプレートのデプロイの概要	876
注意事項および制限事項	876
CSV ファイルを使用したテンプレートのデプロイ	877
ユーザ・インタフェースを使用したテンプレートのデプロイ方法	878
CSV ファイルを使用したテンプレートのデプロイ方法	880
テンプレートのデプロイのユーザ・インタフェース	883
[グループの選択] ダイアログ・ボックス	883
[複数のテンプレートのデプロイ] ダイアログ・ボックス	884

[デプロイメント値]ダイアログ・ボックス	885
[CSV ファイルの選択]ダイアログ・ボックス	887
ユーザ定義テンプレート変更の適用	889
テンプレート・デプロイメントの更新	890
関連グループ・デプロイメントへのテンプレートの更新適用方法	892
テンプレート変更適用ウィザード	897
[整合性の確認]ページ	897
[コンテンツの変更]ダイアログ・ボックス	898
[変数の変更]ページ	899
[結果サマリの適用]ページ	900
テンプレート変更適用サマリ・レポート	901
自動テンプレート・デプロイメント	904
自動テンプレート・デプロイメントの概要	905
XML ファイルの作成と操作	906
XML ファイルの例および変数	907
必須変数	908
グローバル変数またはインスタンス変数	909
XML バリデータ	910
XML を使用したテンプレート変更適用	911
デプロイメントの結果	913
XML ファイルを使用した監視構造のデプロイ方法	914
テキストの暗号化方法	917
デプロイメントの更新方法	918
XML タグ参照情報	920
[自動デプロイメント XML の生成] ユーザ・インタフェース	923
トラブルシューティングと制限事項	924
ソリューション・テンプレート	926
SiteScope ソリューション・テンプレート	927
ソリューション・テンプレートの概要	928
SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法	932
[ソリューション テンプレート] ページ	934
トラブルシューティングと制限事項	935

Active Directory ソリューション・テンプレート	936
Active Directory ソリューションの概要	937
ソリューション・テンプレート・モニタ	937
Active Directory ソリューション・テンプレートのデプロイ方法	939
[Active Directory ソリューション テンプレート] ページ	940
AIX Host ソリューション・テンプレート	942
AIX Host ソリューションの概要	943
ソリューション・テンプレート・モニタ	943
AIX Host ソリューション・テンプレートのデプロイ方法	944
[AIX Host ソリューション テンプレート] ページ	945
フェールオーバー監視ソリューション・テンプレート	946
フェールオーバー監視ソリューション・テンプレートの概要	947
フェールオーバー監視ソリューション・テンプレートのデプロイ方法	949
[フェールオーバー監視ソリューション テンプレート] ページ	951
HP Quality Center ソリューション・テンプレート	954
HP Quality Center ソリューション・テンプレートの概要	955
データベース・サーバの監視	956
アプリケーション/Web サーバの監視	956
HP Quality Center ソリューション・テンプレートのデプロイ方法	957
[HP Quality Center ソリューション テンプレート] ページ	959
トラブルシューティングおよび制限事項	966
HP Service Manager ソリューション・テンプレート	967
HP Service Manager ソリューションの概要	968
ソリューション・テンプレート・モニタ	968
HP Service Manager ソリューション・テンプレートのデプロイ方法	969
[HP Service Manager ソリューション テンプレート] ページ	971
JBoss Application Server ソリューション・テンプレート	975
JBoss Application Server ソリューションの概要	976
ソリューション・テンプレート・モニタ	976
JBoss Application Server ソリューション・テンプレートのデプロイ方法	977
JBoss ソリューション・テンプレート・ページ	979
Linux Host ソリューション・テンプレート	980

Linux Host ソリューションの概要	981
ソリューション・テンプレート・モニタ	981
Linux Host ソリューション・テンプレートのデプロイ方法	982
Linux Host ソリューション・テンプレート・ページ	983
Microsoft Exchange ソリューション・テンプレート	984
Microsoft Exchange ソリューションの概要	985
ソリューション・テンプレート・モニタ	985
Microsoft Exchange ソリューション・テンプレートのデプロイ方法	987
[Microsoft Exchange ソリューション テンプレート] ページ	988
Microsoft IIS ソリューション・テンプレート	990
Microsoft IIS ソリューション概要	991
IIS ソリューション・テンプレート・モニタ	991
Microsoft IIS ソリューション・テンプレートのデプロイ方法	992
[Microsoft IIS ソリューション テンプレート] ページ	994
Microsoft Lync Server 2010 ソリューション・テンプレート	995
Microsoft Lync Server 2010 ソリューションの概要	996
Microsoft Lync Server 2010 ソリューション・テンプレートのデプロイ方法	999
Microsoft Lync Server 2010 ソリューション・テンプレート・ページ	1000
Microsoft SharePoint 2010 ソリューション・テンプレート	1002
Microsoft SharePoint 2010 ソリューションの概要	1003
ソリューション・テンプレート・モニタ	1003
Microsoft SharePoint 2010 ソリューション・テンプレートのデプロイ方法	1004
[Microsoft SharePoint 2010 ソリューション テンプレート] ページ	1005
Microsoft SQL Server ソリューション・テンプレート	1007
Microsoft SQL Server ソリューションの概要	1008
ソリューション・テンプレート・モニタ	1008
Microsoft SQL Server ソリューション・テンプレートのデプロイ方法	1009
[Microsoft SQL Server ソリューション]テンプレート・ページ	1010
Microsoft Windows Host ソリューション・テンプレート	1013
Microsoft Windows Host ソリューションの概要	1014
ソリューション・テンプレート・モニタ	1014
Microsoft Windows Host ソリューション・テンプレートのデプロイ方法	1015

[Microsoft Windows Host ソリューション テンプレート] ページ	1016
.NET ソリューション・テンプレート	1017
.NET ソリューションの概 要	1018
ソリューション・テンプレート・モニタ	1018
.NET ソリューション・テンプレートのデプロイ方法	1019
.NET ソリューション・テンプレート・ページ	1020
Oracle Database Solution Templates	1021
Oracle Database ソリューションの概 要	1022
ソリューション・テンプレート・モニタ	1022
Oracle Database ソリューション・テンプレートのデプロイ方法	1024
Oracle Database ソリューション・テンプレートのツール	1025
Oracle Database ソリューション・テンプレート・ページ	1027
SAP ソリューション・テンプレート	1029
SAP ソリューションの概 要	1030
SAP ソリューション・テンプレートのデプロイ方法	1031
SAP ソリューション・テンプレート・ページ	1032
Siebel ソリューション・テンプレート	1034
Siebel ソリューションの概 要	1035
ソリューション・テンプレート・モニタ	1035
Siebel ソリューション・テンプレートのデプロイ方法	1037
[Siebel ソリューション テンプレート] ページ	1039
Solaris Host ソリューション・テンプレート	1045
Solaris Host ソリューションの概 要	1046
ソリューション・テンプレート・モニタ	1046
Solaris Host ソリューション・テンプレートのデプロイ方法	1047
[Solaris Host ソリューション テンプレート] ページ	1048
VMware キャパシティ管 理ソリューション・テンプレート	1049
VMware キャパシティ管 理ソリューションの概 要	1050
ソリューション・テンプレート・モニタ	1050
VMware キャパシティ管 理ソリューション・テンプレートのデプロイ方法	1053
[VMware キャパシティ管 理ソリューション・テンプレート] ページ	1054
VMware Host ソリューション・テンプレート	1058

VMware Host ソリューションの概要	1059
ソリューション・テンプレート・モニタ	1059
VMware Host ソリューション・テンプレートのデプロイ方法	1061
[VMware Host ソリューション テンプレート] ページ	1062
WebLogic ソリューション・テンプレート	1063
WebLogic ソリューションの概要	1064
ソリューション・テンプレート・モニタ	1064
WebLogic ソリューション・テンプレートのデプロイ方法	1065
監視対象の WebLogic モジュールの選択	1066
[WebLogic ソリューション・テンプレート] ページ	1067
WebSphere ソリューション・テンプレート	1069
WebSphere ソリューションの概要	1070
ソリューション・テンプレート・モニタ	1070
WebSphere ソリューション・テンプレートのデプロイ方法	1071
[WebSphere ソリューション・テンプレート] ページ	1072
SiteScope ダッシュボード	1074
SiteScope ダッシュボードを使った作業	1075
SiteScope ダッシュボードの概要	1076
ダッシュボード・フィルタの概要	1077
モニタの状態の確認	1078
SiteScope ツールへのアクセス	1079
SiteScope ダッシュボードのカスタマイズ方法	1080
SiteScope ダッシュボードのデータ分析方法	1082
SiteScope ダッシュボードのユーザ・インタフェース	1085
SiteScope ダッシュボード - [現在の状態]ビュー	1085
状態および可用性のレベル	1090
SiteScope ダッシュボード - [モニタ履歴]ビュー	1091
[グループ内のモニタを確認]ダイアログ・ボックス	1093
[ダッシュボードのお気に入り保存]ダイアログ・ボックス	1094
[ダッシュボードのお気に入りの削除]ダイアログ・ボックス	1094
[ダッシュボード フィルタ]ダイアログ・ボックス	1095
[ダッシュボードの設定]ダイアログ・ボックス	1097

診断ツール	1099
[グループ内のモニタの有効化 / 無効化] ダイアログ・ボックス	1101
サーバ中心のレポート	1103
サーバ中心のレポートの生成	1104
サーバ中心のレポートの作成方法	1105
サーバ中心のレポートの作成方法 - 使用例のシナリオ	1107
サーバ中心のレポートの測定値	1110
サーバ中心のレポート	1111
SiteScope サーバの状況	1114
SiteScope 状況の概要	1115
SiteScope 状況のグループ	1117
BAC 統合設定モニタ	1119
トラブルシューティングと制限事項	1119
BAC 統合統計モニタ	1120
接続統計モニタ	1121
ダイナミック・モニタリング統計	1122
ライセンス使用状況モニタ	1123
ログ・イベント・モニタ	1124
負荷チェッカー・モニタの監視	1125
SiteScope サーバの状況モニタ	1126
SiteScope の状況監視データの分析方法	1127
SiteScope の状況モニタのデプロイ	1129
SiteScope の状況のユーザ・インタフェース	1130
[BAC Integration Configuration Monitor] ページ	1130
[BAC 統合統計モニタ] ページ	1131
[Connection Statistics Monitor] ページ	1132
[ダイナミックモニタリング統計] ページ	1134
[ライセンス使用状況モニタ] ページ	1136
[ログイベント状況モニタ] ページ	1136
[モニタ負荷チェッカーモニタ] ページ	1138
[SiteScope サーバの状況モニタ] ページ	1139
[SSL 証書の状態モニタ] ページ	1143

サーバ統計の表示	1144
サーバ統計の使用	1145
SiteScope サーバの負荷を表す統計情報の解析	1146
ログ・ファイルの使用	1148
監査ログ・ファイルの使用	1149
監査ログの制限事項	1149
SiteScope サーバ統計の分析方法	1150
監査ログの設定方法	1151
SiteScope ログ・ファイルの列	1152
モニタ固有のログ列の内容	1152
監査ログのエントリ	1183
SiteScope サーバ統計のユーザ・インタフェース	1188
[ダイナミック モニタリング] ページ	1188
[一般] ページ	1190
[ログファイル] ページ	1191
[Perfex プロセス プール] ページ	1194
[実行中のモニタ数] ページ	1196
[SSH 接続] ページ	1197
[Telnet 接続] ページ	1199
[WMI 統計] ページ	1200
警告とレポート	1202
SiteScope 警告	1203
SiteScope 警告の概要	1204
警告アクションの作成	1207
SiteScope 警告が送信される時期について	1208
警告テンプレートのカスタマイズ	1211
データベース警告を使った作業	1213
モニタの無効化 / 有効化 警告を使った作業	1214
電子メール警告を使った作業	1215
ログ・イベント警告を使った作業	1216
ページャ警告を使った作業	1217
送信警告を使った作業	1218

スクリプト 警告を使った作業	1219
SMS 警告を使った作業	1222
SNMPトラップ警告を使った作業	1224
サウンド 警告を使った作業	1225
警告の設定方法	1226
警告メッセージ内容のカスタマイズ方法	1228
警告 テンプレートのタグ・スタイルのカスタマイズ方法	1230
SiteScope 警告 テンプレートのディレクトリ	1231
SiteScope 警告 テンプレートとイベントのプロパティのディレクトリ	1232
SiteScope 警告 ユーザ・インタフェース	1241
SiteScope 警告 ページ	1241
[新規 警告]/[警告の編集]ダイアログ・ボックス	1242
[アクション タイプ]ダイアログ・ボックス	1249
[警告 アクション]ダイアログ・ボックス	1252
アクション・タイプの設定 パネル	1252
[状態トリガ]パネル	1264
[トリガの頻度]パネル	1265
スクリプト 警告 のスクリプトの記述	1267
スクリプト 警告 のスクリプトの記述の概要	1268
SiteScope のスクリプトを使った作業	1269
SiteScope からスクリプトへのデータの引き渡し	1271
SiteScope レポート	1273
SiteScope レポートの概要	1274
SiteScope 監視データ・ログ・ファイル	1274
SiteScope のレポート・タイプ	1275
SiteScope 管理レポートを使った作業	1277
レポートの作成方法	1278
SiteScope レポートのユーザ・インタフェース	1279
[レポート] ページ	1279
[新規 SiteScope 管理レポート]/[SiteScope 管理レポートの編集]ダイアログ・ ボックス	1281
グラフの測定値のオプション	1288

[新規 SiteScope クイックレポート]ダイアログ・ボックス	1290
[新規 SiteScope モニタレポート]ダイアログ・ボックス	1294
[新規 SiteScope 警告レポート]ダイアログ・ボックス	1297
管理レポート	1301
クイック・レポート	1305
モニタ・サマリ・レポート	1307
警告レポート	1309
注釈ツール	1310
[Mail Details]ダイアログ・ボックス	1314
用語集	1316

本書について

本書では、分散 IT インフラストラクチャの可用性とパフォーマンスを監視できるように SiteScope のエージェントレス監視ソリューションを設定、使用する方法について説明します。

本書の構成

本書は、次の各項から構成されています。

- [32ページ「概要と管理」](#)

SiteScope の使用前および保守中に実施する管理手順について説明します。また、SiteScope user ユーザ・インタフェースの操作方法、検索およびフィルタ方法、グローバル検索と置換の使用方法、SiteScope ツール、HP Live Network およびコンテンツ共有、SiteScope の使用の作業順序について説明します。

- [217ページ「統合」](#)

SiteScope を Business Service Management, Operations Manager, NNMi, LoadRunner, パフォーマンス・センターのデータ・コレクタとしてを使用する方法について説明します。

- [309ページ「モニタ」](#)

SiteScope グループおよびモニタの操作方法について説明します。

- [417ページ「統合モニタ」](#)

Business Service Management 統合モニタを使用して、サードパーティのアプリケーションからデータをキャプチャして BSM に転送する方法を説明します。

- [522ページ「リモート・サーバ」](#)

リモート環境での監視用に接続プロパティをセットアップする方法、リモート環境にセキュア・シェル (Secure Shell : SSH) 接続を使用する方法、およびアダプタ・ファイルを UNIX 監視用に作成しカスタマイズする方法について説明します。

- [599ページ「プリファレンス」](#)

SiteScope の共通機能と管理機能の各設定を設定する方法について説明します。また、I18N 環境での SiteScope の使用や、SiteScope にログインするときの認証方式のセットアップについても説明します。

- [824ページ「ユーザ定義のテンプレート」](#)

固有のテンプレートを作成したりカスタマイズして、グループ、モニタ、リモート・サーバ、警告などの監視ソリューションを効率的にデプロイ、保守、更新する方法について説明します。XML ファイルを使用して SiteScope テンプレートを自動的にデプロイする方法も説明します。

- [926ページ「ソリューション・テンプレート」](#)

一般的に使用されるエンタープライズ・アプリケーションおよびネットワーク・システムを監視するために設計された、事前に定義された一連のソリューション・テンプレートをデプロイする方法を説明します。

- [1074ページ「SiteScope ダッシュボード」](#)

SiteScope ダッシュボードを使用して、最新のリアルタイム監視データを表示し、監視結果の表示をカスタマイズする方法について説明します。SiteScope サーバ状況の監視、およびサーバ統計情報とログの表示についても説明します。

- [1202ページ「警告とレポート」](#)

イベントの通知やインフラストラクチャのステータスの変化を送信する方法、および、監視中のサーバとアプリケーションが時間につれてどのように動作してきたかを示すレポートを作成する方法について説明します。

対象読者

本書は、次の SiteScope のユーザを対象としています。

- SiteScope/BSM 管理者
- SiteScope/BSM application 管理者
- SiteScope/BSM データ・コレクタ管理者
- SiteScope/BSM エンド・ユーザ

本書の読者は、エンタープライズ・システム管理、インフラストラクチャ監視システム、SiteScope に精通し、監視対象としてセットアップされる各システムを熟知している必要があります。さらに、BSM と統合する読者は、BSM、エンタープライズ監視および管理の概念を理解している必要があります。

第1部分

概要と管理

第1章

SiteScope の概要

本章の内容

概念

- 34ページ「SiteScope の概要」
- 37ページ「SiteScope 監視モデル」

SiteScope の概要

HP SiteScope は、サーバ、オペレーティング・システム、ネットワーク・デバイス、ネットワーク・サービス、アプリケーション、アプリケーション・コンポーネントなどから構成される、分散 IT インフラストラクチャの可用性とパフォーマンスの確保が可能になっているエージェントレス監視ソリューションです。SiteScope は Web ベースでインフラストラクチャを監視し、軽量で柔軟にカスタマイズでき、実運用システムにデータ収集エージェントをインストールする必要がありません。

SiteScope モニタは、幅広いバックエンド・インフラストラクチャ・コンポーネントの主要なパフォーマンスの測定値を収集し、トポロジをレポートします。モニタは、ネットワーク環境でのシステムおよびサービスのパフォーマンスと可用性を自動的にテストするように個々に設定されています。

SiteScope 監視には、監視対象の環境のリアルタイム画像用のダッシュボードとともに警告およびレポート機能が含まれます。SiteScope は、IT インフラストラクチャの問題を検出するたびに警告を送信するように設定できます。さらに、SiteScope は、時間の経過に伴う監視対象のサーバおよびアプリケーションのパフォーマンスに関する情報を表示するモニタまたはモニタ・グループのレポートを作成できます。

組織全体にわたり類似する監視設定の基準を用いたモニタのデプロイを支援するために、テンプレートを定義する、または事前設定した SiteScope ソリューション・テンプレートを使用できます。テンプレートを使用することにより、各オブジェクトを個別に更新しなくても、繰り返しデプロイし、簡単に更新可能な 1 つの構造に標準化された一連のモニタ・タイプと設定を開発および維持できます。

SiteScope にはまた、さまざまなメディアでイベント情報の通信と記録に使用できる警告テンプレート・タイプも用意されています。警告テンプレートは、組織のニーズに合わせてカスタマイズできます。

SiteScope の主な機能

SiteScope には次の機能があります。

- **エージェントレスな監視**：SiteScope では、監視対象のサーバ上にエージェント・ソフトウェアをデプロイすることなく監視を行います。この機能により、SiteScope のデプロイメントおよび保守は、ほかのパフォーマンス監視ソリューションに比べて非常に簡素です。
- **簡素なインストールとデプロイメント**：SiteScope は、サービスまたはプロセスとして稼動する 1 台のサーバ上にインストールされます。このため、インストールが迅速で、監視の設定も容易です。
- **直感的な管理**：SiteScope では、ユーザが使いやすいブラウザ・ベースのインタフェースで監視プラットフォームの表示と管理ができるため、監視環境の管理にかかる時間が短縮されます。詳細については、[65 ページ「SiteScope ユーザ・インタフェースについて」](#)を参照してください。
- **エンタープライズ対応アーキテクチャ**：SiteScope では、大量システムの同時監視、セキュリティ保護された接続のサポート、フェールオーバー機能を利用できます。SiteScope フェールオーバーの詳細については、[41 ページ「SiteScope フェールオーバーの使用」](#)を参照してください。
- **インフラストラクチャのパフォーマンスと可用性の監視**：SiteScope には 100 を超えるモニタ・タイプがあります。SiteScope は、さまざまなホスト・タイプやアプリケーション・プラットフォームの使用状況、応答時間、使用率、リソース可用性を監視できます。SiteScope モニタの詳細については、[319 ページ「SiteScope モニタの概要」](#)を参照してください。
- **統合**：SiteScope を使用して次のことができます。主要なパフォーマンス・メトリックスを収集し、トポロジを BSM にレポートします。HP Operations Agent を使用して、共通イベントとメトリックス・データを Operations Manager (HPOM) および BSM 内の操作管理に送信します。イベントとメ

リックス・データを Network Node Manager i (NNMi) に送信します。データを HP Diagnostics, Amazon CloudWatch, または直接統合が存在しないアプリケーションに転送します。詳細については、[46 ページ「SiteScope の統合」](#)を参照してください。

- **テンプレートを使用したモニタのデプロイメントと更新の標準化** : SiteScope は再利用可能なテンプレートを作成して公開する機能をサポートします。これにより、類似する監視設定基準を用いて複数の IT 要素を設定およびデプロイできます。テンプレート変更適用ウィザードを使用すれば、広範な手動による更新を実行することなく、組織全体にわたり監視環境を速やかに更新できます。SiteScope テンプレートの詳細については、[826 ページ「SiteScope テンプレートの概要」](#)を参照してください。
- **XML による自動デプロイメント** : SiteScope では、XML ファイルを使用してユーザ・インタフェースをバイパスしテンプレートをデプロイできます。これにより、単一操作で多数のモニタを導入することが可能となり、IT 部門は時間と経費を節約できます。テンプレートの自動デプロイの詳細については、[905 ページ「自動テンプレート・デプロイメントの概要」](#)を参照してください。
- **ベースライン管理** : SiteScope を使用して、ベースラインを作成したり、時間帯または日付に基づいて特定のしきい値をスケジュールできます。設定のために計算されたベースラインを実際のパフォーマンス状況に照らし合わせてテストして、計算されたベースラインによって削減されたエラーと警告を表示できます。グラフを使用して、パフォーマンスの改善の可能性を判断するために現在のしきい値設定と計算されたベースラインを比較できます。ベースラインの使用の詳細については、[335 ページ「ベースラインを使った状態しきい値の設定」](#)を参照してください。
- **予防的警告** : SiteScope は、IT インフラストラクチャの問題を検出するたびに警告するように設定できます。警告アクションには、電子メール・メッセージの送信、ページング、SNMP (Simple Network Management Protocol) トラップの送信、スクリプトの実行など、複数のタイプがあります。SiteScope 警告の詳細については、[1204 ページ「SiteScope 警告の概要」](#)を参照してください。
- **モバイル・アクセス** : SiteScope のモバイル・アプリケーションは、無料でダウンロードして、モバイル装置を使用して、コンピュータから離れているときも監視対象の IT インフラストラクチャを追跡できます。この機能により、グループやモニタの状態を確認して可用性の問題を検証すること、問題点について電子メールで通知を受信し是正処置をとること、モニタ統計を確認し検索結果に対する処置を実行して問題を軽減すること、さらに、一時的なレポートを作成してサーバとアプリケーションが時間の経過とともにどのように動作してきたか表示することができます。SiteScope のモバイル・アプリケーションの詳細については、[48 ページ「SiteScope モバイル・アプリケーションの使用」](#)を参照してください。
- **サーバベースのレポート** : SiteScope は特定のサーバから複数の事前に選択したメトリックスを収集し、ご使用の環境内の任意のサーバの主要なパフォーマンス監視データに素早くアクセスできる単一のグラフに結合します。サーバベースのレポートの主な利点の 1 つは、サーバ関連の問題のトラブルシューティングのためにレポートをドリルダウンが可能なことです。SiteScope レポートの詳細については、[1274 ページ「SiteScope レポートの概要」](#)を参照してください。
- **カスタマイズ機能** : SiteScope では、カスタム・データ・フィールドと HTML センシティブな記述タグを使用して、カスタマイズしたグループとモニタを表示できます。さらに、SiteScope では、テンプレートとユーザ定義変数を使用して警告テキストとレポート設定のカスタマイズが可能です。詳細については、[1232 ページ「SiteScope 警告テンプレートとイベントのプロパティのディレクトリ」](#)を参照してください。
- **自己監視** : SiteScope は自身の動作状況の主要要素を監視して、モニタ設定上の問題や重大なサーバ負荷を識別します。また、Business Service Management へのレポートが設定されている場合、自身の統合やデータのイベントも監視します。SiteScope サーバの状況の監視の詳細については、[1115 ページ「SiteScope 状況の概要」](#)を参照してください。

- **フェールオーバー機能** : SiteScope では, オプションのフェイルオーバー・サポートが提供されているため, SiteScope サーバが故障した場合には付加的冗長性や自動フェイルオーバーが機能します。

SiteScope 監視モデル

SiteScope の Web 対応 アーキテクチャでは、拡張性の高い監視環境の作成と継続的な管理が可能です。アーキテクチャは次の主要コンポーネントで構成されます。

- **ブラウザベースのインタフェース** : エンド・ユーザのステータス情報要求、設定変更要求、アクセス制御を管理します。
- **スケジューラ** : モニタ、警告作成、レポート生成の実行を調整します。詳細については、[753ページ「スケジュール・プリファレンスの概要」](#)を参照してください。
- **グループ** : グループは監視アセットのコンテナです。グループはモニタの整理に使用され、サブグループを含む場合があります。グループはモニタよりも前に作成されます。詳細については、[311ページ「SiteScope グループの概要」](#)を参照してください。
- **モニタ** : モニタは監視対象システムのパフォーマンスおよび可用性情報を収集します。サーバ・コンポーネント、主要なアプリケーション・プロセス、ログ・ファイル、ネットワーク・デバイスなどのステータスをチェックします。選択したメトリックスに基づいてデータも収集し、設定されたしきい値に対して正常、警告またはエラーのステータスを表示します。詳細については、[319ページ「SiteScope モニタの概要」](#)を参照してください。
- **警告** : 警告は、監視対象アセットのステータスが変化するとトリガされるアクションです。問題イベントや障害が発生すると必要なユーザに通知します。警告は、電子メール、ページャ、SMS (ショート・メッセージ・サービス)メッセージ、SNMPトラップなど、さまざまなメディアに送信できます。詳細については、[1204ページ「SiteScope 警告の概要」](#)を参照してください。
- **レポート** : レポートは傾向把握および分析を目的とした監視対象データの履歴表現です。SiteScope では、クイック・モニタ・レポートから詳細な管理レポートまで、さまざまなレポートを提供します。レポートを使用して、傾向と運用パフォーマンスの追跡や問題のトラブルシューティングを行うことができます。詳細については、[1274ページ「SiteScope レポートの概要」](#)を参照してください。

第2章

SiteScope の設定および管理

本章の内容

概念

- 39ページ「作業開始の概要」
- 40ページ「サイレント・ログインの使用」
- 41ページ「SiteScope フェールオーバーの使用」
- 42ページ「JMX コンソールの使用」
- 43ページ「SiteScope 設定 API の使用」
- 46ページ「SiteScope の統合」
- 48ページ「SiteScope モバイル・アプリケーションの使用」

タスク

- 50ページ「SiteScope を使用した起動方法」
- 52ページ「SiteScope へのアクセス方法」
- 53ページ「SiteScope へのアクセスを制限する方法」
- 54ページ「サイレント・ログイン URL の作成方法」
- 57ページ「SiteScope の設定および管理方法」
- 60ページ「SiteScope の監視の設定方法」
- 62ページ「テンプレートを使用した SiteScope 監視ソリューションの設定方法 - フローチャート」
- 63ページ「SiteScope API 呼び出しの使用方法」

作業開始の概要

ここでは、SiteScope の作業開始の概要と、監視ソリューションの設定および管理の推奨フローを説明します。

作業開始の詳細については、[50ページ「SiteScope を使用した起動方法」](#)を参照してください。

SiteScope の使用準備をする際の推奨作業順序については、[57ページ「SiteScope の設定および管理方法」](#)を参照してください。

SiteScope での基本的な監視構造の作成の作業順序については、[60ページ「SiteScope の監視の設定方法」](#)を参照してください。

組織の異なる IT 要素の監視を標準化するテンプレートを使用するには、[840ページ「テンプレートを使用した SiteScope 監視ソリューションの設定方法」](#)を参照してください。

サイレント・ログインの使用

サイレント・ログインは、ユーザ・ログイン名 およびパスワードを SiteScope のログイン・ページに入力することなく SiteScope を起動する自動プロセスです。サイレント・ログインにより、初期ログイン・ページをスキップして直接 SiteScope クライアントを表示できます。さらに、サイレント・ログインとブラウザのお気に入りのリストに保存したページ・オプション・ビューを併用すると、SiteScope の特定のグループまたはビューを直接表示できます。お気に入りのページ・オプション・ビューの設定の詳細については、[66ページ「SiteScope 共通ツールバー」](#)の「ページ・オプション」を参照してください。

サイレント・ログインを使用して SiteScope を起動するには、ユーザ・ログイン名 およびパスワードを SiteScope 暗号化ツールを使用して暗号化し、暗号化した情報をサイレント・ログイン URL に入力する必要があります。URL の形式は次のとおりです。

```
http://<サーバ名>:8080/SiteScope?sis_silent_login_  
type=encrypted&login=  
<暗号化ログイン名>&password=<暗号化パスワード>
```

SiteScope サイレント・ログイン URL の作成方法の詳細については、[54ページ「サイレント・ログイン URL の作成方法」](#)を参照してください。

SiteScope フェールオーバーの使用

SiteScope フェールオーバー・ソリューションを使用して、バックアップ、冗長性、フェールオーバーのメカニズムを使用できるようにすることにより、インフラストラクチャ監視用のフェールオーバー機能を実装できます。プライマリ・システムが異常停止したり、一時的に稼働を中止する場合に、自動的にプライマリ・システムの機能をスタンバイ・サーバに切り替えます。

従来の SiteScope フェールオーバー(自動ミラー化)ソリューションは、SiteScope 11.00 で導入された SiteScope Failover Manager(共有ドライブ・アーキテクチャ)ソリューションに代わるものとして再実装されました。Failover Manager はこのリリースではサポートされますが、将来サポートを停止する可能性があります。Failover Manager ソリューションを使用されている場合は、従来の SiteScope フェールオーバー・ソリューションへの移行を検討されることを推奨します。

今回改善を行ったことにより、従来の SiteScope フェールオーバーはより堅固なソリューションになっています。インストールと設定は簡単で、別のハードウェア(SiteScope の設定データを格納するためのネットワーク・ドライブ)は必要ありません。

SiteScope Failover のインストールおよび使用の詳細については、< SiteScope のルート・ディレクトリ> \sidsocs\pdfs\SiteScopeFailover.pdf の『HP SiteScope Failover Guide』を参照してください。

インストール後の SiteScope Failover の設定については、647ページ「高可用性プリファレンス」を参照してください。

SiteScope Failover Manager ソリューションの詳細については、< SiteScope のルート・ディレクトリ> \sidsocs\pdfs\FailoverManager.pdf にある『HP SiteScope Failover Manager Guide』を参照してください。

注:

- SiteScope フェールオーバーを使用するには、有効な SiteScope フェールオーバー・ライセンス・ファイルが必要です。有効なライセンス・ファイルがない場合、[HP Licensing Portal](https://webware.hp.com/Welcomesite.aspx) (https://webware.hp.com/Welcomesite.aspx)(英語 サイト)を使用して、ライセンスの更新またはアップグレードの要求を送信できます。
- 高可用性オプションを使用して SiteScope 用の HP Operations Manager 統合を設定する場合は、従来の SiteScope Failover ソリューションをお勧めします。

JMX コンソールの使用

SiteScope には、Java 監視および管理(JConsole)ツールが含まれています。このツールは、Java Management Extension (JMX) テクノLOGYを使用し、Java プラットフォーム上で実行されるアプリケーションのパフォーマンスおよびリソース消費に関する情報を提供します。

JConsole を使用して、リモート管理操作の実行、プロセスのパフォーマンス表示、SiteScope の問題領域のトラブルシューティングを行うことができます。このツールは、実運用環境のメモリ消費、スレッドなどに関する難しい問題のデバッグに役立つ場合があります。

JConsole ツールにアクセスするには、Windows プラットフォームの場合は **< SiteScope のルート・ディレクトリ> \java\bin\jconsole.exe** を実行します(UNIX プラットフォームの場合は **< SiteScope のルート・ディレクトリ> /java/bin/jconsole** バイナリ・ファイル)。監視対象の SiteScope に応じて、ローカル、またはリモートとポート **28006** を選択します(標準設定の JMX ポート)。

ヒント:

- JMX サーバへのアクセスはパスワードで保護されていないため(SiteScope の標準設定では JConsole パスワード認証は無効)、不正侵入を防ぐために JMX パスワード認証を有効にすることをお勧めします。詳細については、[59ページ「JMX サーバのパスワード保護の有効化\(任意指定\)」](#)を参照してください。
- その他の JConsole 設定は変更しないことをお勧めします。

SiteScope 設定 API の使用

SiteScope には、SiteScope ユーザ・インタフェースを使用しなくても、大規模で動的な環境の管理に役立つ拡張 SOAP ベースの API が含まれています。この API では、SiteScope テンプレート、グループ、モニタ、警告、リモート・サーバ、サーバの状況、タグの検索 / フィルタおよび設定を操作するためのサービスを提供します。

SiteScope API では次の操作がサポートされています。

SiteScope オブジェクト	アクション
テンプレート	<ul style="list-style-type: none">テンプレートの管理 (テンプレートの作成 / 削除, テンプレート・コンテナの作成 / 削除, テンプレートのインポート / エクスポート, テンプレートをインポートし, 指定したパス内にすでに存在する場合は上書き, すべてのテンプレートのスナップショットを取得)テンプレートのデプロイメント (モニタ, グループ, 警告, リモート・サーバ作成), デプロイメントの詳細を返す単一デプロイメントのデプロイテンプレート変更の適用 (グループ, モニタ, 警告, リモート・サーバ), ルートなしでデプロイされたテンプレートの更新 (新規変数で単一モニタのみの更新)
グループ	グループの有効化 / 無効化, グループの削除, 特定の条件によるグループの検索
モニタ	モニタの有効化 / 無効化, モニタの削除, モニタの実行, 特定の条件によるモニタの検索
警告	警告の有効化 / 無効化
リモート・サーバ	リモート・サーバ・プリファレンスの削除
状態	SiteScope サーバの状態 (アクティブ監視, 起動)に関する統計情報の取得
タグ	タグの作成, タグの値の追加, タグの詳細の編集, タグの値 (名前, 詳細)の編集, タグの削除
設定	<ul style="list-style-type: none">SiteScope 設定の取得SSH キーファイルの SiteScope へのインポート

SiteScope 設定 API は、Axis、WSIF など既知の Web サービス呼び出しフレームワークまたは任意のクライアント・アプリケーションによって呼び出すことができます。または、**examples** フォルダにある API は、Windows または UNIX プラットフォームのコマンド・ラインから実行できます。SiteScope ログイン名およびパスワードを使用して、API を呼び出し、設定変更やその他のアクションを実行することができます。

SiteScope API のサンプルは、< **SiteScope のインストール・ディレクト**

リ> \examples\integrations\lapi ディレクトリにあります。API の使用方法の詳細については、\lapi ディレクトリの **readme.txt** ファイルを参照してください。

SiteScope に含まれる API の詳細については、< SiteScope のインストール・ディレクトリ> \examples\integrations\api\doc\javadoc.zip にある『HP SiteScope API Reference』を参照してください。このガイドを開くには、index.html ファイルをダブルクリックします。

API を利用するためのサンプル Java コードは、< SiteScope のインストール・ディレクトリ> \examples\integrations\api\src にあります。

API 呼び出しの使用の詳細については、63ページ「SiteScope API 呼び出しの使用 方法」を参照してください。

SiteScope API の使用のベスト・プラクティス

SiteScope API を使用すると、SiteScope ユーザ・インタフェースを使用しなくても、さまざまなシナリオを自動的に実行できます。たとえば、テンプレートの作成とデプロイ、モニタ、グループ、警告の有効化と無効化、モニタ、グループ、リモート・サーバの削除を行うことができます。

1. 初期セットアップ

SiteScope のインストール

createTemplateContainer API メソッドを使用して、テンプレート・コンテナを作成します(一度だけ実行)。

2. テンプレートの作成またはインポート

SiteScope ユーザ・インタフェースでテンプレートを作成するか、または **importTemplate** API メソッドを使用してテンプレートをインポートします。

3. テンプレートのデプロイとモニタの実行

deploySingleTemplateWithConnectToServer API メソッドを使用して、リモート・サーバ用のテンプレートをデプロイします。

getConfigSnapshotEx API メソッドを使用して、デプロイしたすべてのモニタ、グループ、警告を取得します。

runExistingMonitorEx API メソッドを使用して、デプロイしたモニタを実行します。

4. ダウンタイム

disableAlertEx, **disableMonitorEx**, または **disableGroupFullPathEx** API メソッドを使用して、ダウンタイム期間の警告、モニタ、またはグループを無効化します。

5. 廃止

deleteGroupEx, **deleteMonitorEx**, または **deleteRemote** API メソッドを使用して、グループ、モニタ、またはリモート・サーバを削除します。

注意事項および制限事項

- この API のメソッドでは、メソッド呼び出しの一部として SiteScope ユーザおよびパスワードが要求されます。これらのメソッドを使用する前に、< SiteScope インストール> \groups\master.config のアクセス制御を定義する行を編集して「_accessControlled=true」に変更します。ユーザおよびパスワードは、平文でも暗号化してもかまいません。文字列を暗号化するには、< SiteScope インストール> \tools\AutoDeployment\encrypt_password.bat を使用します。
- ユーザ名およびパスワードを持たないすべての API メソッドは SiteScope の今後のバージョンでは廃止されます。ユーザおよびパスワード認証を使用する類似の API メソッドの名前はすべて変更され、ほかのパラメータで同じメソッド名を使用しないように、Ex サフィックスが付きます

(enableGroupEx など)。

- SiteScope ユーザのアクセス・レベルはメソッドの動作に影響します。たとえば、getConfigurationSnapshot と getFullConfigurationSnapshot を呼び出す場合、返されるマップにはユーザがアクセス権限を持つエンティティのみが含まれます。
- 以前のバージョンの API で作成されたアプリケーションを使用するには、_accessControlled=false を設定し、廃止された API を使用します。このような廃止されたメソッドは今後のバージョンではサポートされないため、セキュリティ保護されたバージョンの API メソッドを使用するようにアプリケーションを移行する必要があります。
- _accessControlled=true と設定して廃止された形式のメソッドを使用したり、_accessControlled=false と設定してセキュリティ保護されたメソッドを使用すると例外が発生します。
- .bat ファイル (UNIX の場合は .sh ファイル) はサンプル専用であり、実運用のスクリプトを目的とはしていません。スクリプトは、要件に合わせて変更できます。
- 特殊文字は、パラメータ値ではサポートされていません。
- [プリファレンス] > [ユーザ管理プリファレンス] > [権限] > [警告] で [警告を一時的に無効化] 権限が選択されていない場合、警告無効化 API はサポートされていません。
- サーバ上で一部の API 操作を無効にすることができます。これは、API を使用して設定をリモートで変更できないように、読み取り専用モードをサポートしています。

SiteScope の統合

SiteScope は、次のアプリケーションと統合することができます。

- **Amazon CloudWatch** : SiteScope は SiteScope モニタ測定 データを Amazon CloudWatch サービスに報告するのに使用できます。この統合を行うと、AWS がホストするアプリケーションの監視用に SiteScope を使用しているユーザは、SiteScope 測定値を Amazon CloudWatch サービスに報告できます。SiteScope 測定値データは、AWS の AutoScaling、報告、警告に使用できます。詳細については、[698ページ「Amazon CloudWatch 統合 プリファレンス」](#)を参照してください。
- **HP Business Service Management** : SiteScope は、BSM のデータ・コレクタとして使用できます。BSM は、エンド・ユーザ、ビジネス・プロセス、システムに関するデータを受信し、レポートおよび分析で使用します。すべてのモニタ、または選択したモニタのみが BSM に送信できる SiteScope 監視データを設定できます。詳細については、[218ページ「BSM を使った作業」](#)を参照してください。
- **HP Operations Manager** : SiteScope は HP Operations Manager 製品と連携できるため、エージェントレスとエージェント・ベースのインフラストラクチャ管理を組み合わせることが可能です。SiteScope は、HP Operations Agent を使用して次の処理を行います。
 - イベント・データを Operations Manager(HPOM)または BSM の操作管理 に転送するため、IT 運用の状況に関してより包括的で詳細な全容を把握できます。
 - SiteScope によって収集されたメトリック・データのストレージとして機能するため、データを Performance Manager(HPOM のレポート・コンポーネント)または BSM の PMi(操作管理 の[パフォーマンス パースペクティブ]タブにデータが表示される)から直接利用可能となります。

詳細については、[253ページ「HP Operations Agent を使用した Operations Manager と BSM での作業」](#)を参照してください。

ヒント: SiteScope と BSM および HPOM 製品との統合を使用および設定おけるベスト・プラクティスとトラブルシューティングについては、『[Integration with BSM and HPOM Best Practices](#)』を参照してください。

- **HP Network Node Manager i(NNMI)** : SiteScope は Network Node Manager i(NNMI)(ネットワーク監視に使用するイベント・コンソール)のデータ・コレクタとして使用できます。SiteScope は NNMI が監視しているシステムのアプリケーション側を監視し、SNMPトラップを使用して SiteScope モニタから NNMI にイベント・データを転送します。SiteScope はメトリックス・データを NNMI にレポートすることもできます。詳細については、[291ページ「Network Node Manager i\(NNMI\)との連携」](#)を参照してください。
- **HP LoadRunner / HP Performance Center** : SiteScope は HP LoadRunner または HP Performance Center のインストールで使用でき、ユーザが LoadRunner または Performance Center アプリケーションで、SiteScope モニタを定義して使用できるようにします。SiteScope は、ネイティブ LoadRunner および Performance Center のモニタを補足する追加のモニタを提供します。SiteScope を LoadRunner または Performance Center と統合するには、HP SiteScope for Load Testing セットアップ・タイプがインストールされている必要があります。詳細については、[308ページ「SiteScope for Load Testing の使用」](#)を参照してください。
- **HP Operations Orchestration(OO)** : HP Operations Orchestration(OO)SiteScope 統合によって、OO の管理者は、特定のイベントに接続または警告を SiteScope 内で OO フローの実行に関連付けすることができます。管理者は、OO Studio で SiteScope 操作 (SiteScope API 呼び出し

を使用)を使用して OO フローを構築します。たとえば、OO の管理者は、新規サーバが追加されたときに自動的に SiteScope にモニタを生成するフローを作成し、サーバが廃止されたときにモニタを削除できます。詳細については、OO ドキュメント・セットの『HP Operations Orchestration SiteScope Integration Guide』を参照してください。

- **Diagnostics** : Diagnostics では SiteScope を使用してアプリケーション・サーバを監視します。SiteScope がこれらのアプリケーション・サーバに関するデータを Diagnostics に転送し、アプリケーション・サーバのデプロイ先であるインフラストラクチャ・コンポーネントに関する洞察を得ることができます。Diagnostics ではデータをレポートやグラフで表示します。詳細については、[700ページ「Diagnostics 統合の概要」](#)を参照してください。
- **汎用データ統合** : SiteScope を使用して、XML ファイルを受信できるほかのアプリケーションにデータを転送できます。これらのファイルには、SiteScope のグループ、モニタ、測定値のステータスに関する情報が含まれています。詳細については、[701ページ「汎用データ統合の概要」](#)を参照してください。
- **汎用イベント統合** : SiteScope を使用して、サードパーティ製のアプリケーションまたは管理コンソールにイベントを転送できます。送信されたイベントには、イベントをトリガした状態の変更など、モニタとその測定値に関する情報が含まれています。詳細については、[702ページ「汎用イベント統合の概要」](#)を参照してください。

SiteScope モバイル・アプリケーションの使用

SiteScope はコンピュータから離れている間、監視対象の IT インフラストラクチャを追跡できる無料でダウンロード可能なアプリケーションを提供します。SiteScope モバイル・アプリケーションは、スマートフォン・デバイスの使用を通じて SiteScope へのチーム・アクセスを提供することにより、企業の従業員と情報を結びます。

SiteScope モバイル・アプリケーションにより、SiteScope スタッフはオフィス外で 24 時間 365 日のモバイルアクセスが可能です。したがって、次のことが可能です。

- 組織の監視対象アプリケーションに関連する問題について電子メール通知を受け取り、修正アクション(モニタの再実行、モニタ・レポートの表示、警告の確認、関連する警告の有効化/無効化、確認ログの表示)を実行できます。
- グループおよびモニタの状態を確認して、可用性に関する問題を事前に検証できます。これにより、その問題が業務に影響を与える前に解決できます。
- 検索を行ってモニタ統計にアクセスし、その検索結果にアクション(モニタ詳細の表示、モニタの有効化/無効化、モニタの実行、警告アクションの設定)を実行して、問題を軽減できます。
- モニタ、グループ、警告に関する一時的なレポートを作成できます。このレポートには、時間の経過に伴う監視対象のサーバとアプリケーションのパフォーマンスに関する情報が表示されます。
- 選択したモニタとグループをお気に入りリストに追加します。

SiteScope モバイル・アプリケーションは次のデバイスでサポートされます。

- **iPhone, iPad, または iPod touch** : SiteScope iPhone モバイル・アプリケーションは、iPhone App Store(<http://itunes.apple.com/jp/app/hp-sitescope/id410294629?mt=8#>)から入手できます。SiteScope iPhone アプリケーションのデモ・ムービーについては、<http://www.youtube.com/watch?v=MULAmO322nI>を参照してください。
- **Android 携帯電話およびタブレット** : The SiteScope Android モバイル・アプリケーションは Android Market から利用可能です (https://market.android.com/details?id=com.hp.sitescope.mobile.android&feature=search_result&rdid=com.hp.sitescope.mobile.android&rdot=1&pli=1)

モバイル・デバイスでの SiteScope 使用の詳細については、SiteScope モバイル・アプリケーションのヘルプを参照してください。SiteScope モバイル・アプリケーションで利用可能な機能の使用方法に関するその他の情報については、SiteScope ヘルプの関連トピックを参照してください。

本項の内容

- [48ページ「設定の要件」](#)
- [49ページ「注意事項および制限事項」](#)

設定の要件

- モバイル・デバイスに送信する警告を設定するには、< SiteScope のルート・ディレクトリ>**templates.mail** フォルダにある **MobileAppMail** テンプレートを使用します。このテンプレートには電子メールからのアプリケーションの起動に使用できるリンクが含まれています。
- モバイル・デバイスに送信する電子メール・テンプレートには html コンテンツを含める必要があります。これを有効にするには、< SiteScope のルート・ディレクトリ>\groups\master.config ファイルの **_defaultMailAlertContentType** プロパティの値を **=text/html** に設定します。

- モバイル・デバイスで SiteScope をセキュア・モードで使用するには、<SiteScope のルート・ディレクトリ> \groups\master.config ファイルで `_accessControlled` プロパティを `=true` に設定する必要があります。設定しないと、SiteScope のユーザ名とパスワードが無視されます。
- モバイル・デバイスが正確なローカル時刻に設定されていることを確認します。

注意事項および制限事項

- 一時期間無効になっているモニタ(SiteScope ユーザ・インタフェースでまたはモバイル・デバイスから無効化されていたかどうかに関係なく)は、サーバ時間に応じてモニタの詳細サマリに表示されます。
- モバイル・デバイスから SiteScope ユーザ・アカウントを削除すると、そのアカウントのお気に入り保存されたモニタまたはグループも削除されます。
- SiteScope ユーザ・アカウント設定を変更すると(たとえば、プロファイルのプロトコルを http から https に変更、または SiteScope ポートの変更)、そのプロファイルに関連するすべてのモニタがお気に入りリストに表示されなくなります。
- レポートの生成時にメモリ・リソースの不足メッセージを受信した場合、モバイル・デバイスのメモリ容量を空ける必要があります(実行中のアプリケーションを閉じるなど)。HP SiteScope の[iPhone Settings]または[Android Settings]の[**Minimum memory for reports (MB)**]スライダを動かして、SiteScope レポートで必要なメモリを増加または減少できます。
- 3G シグナルを使用して SiteScope にモバイル・アプリケーションを接続できず、ワイヤレス・ネットワーク(WiFi)を使用して接続できる場合は、SiteScope ポートを 80 に変更するようにしてください。サービス・プロバイダでは(初期設定の SiteScope ポート、8080 など)一部のポートをブロックする場合があります。

SiteScope を使用した起動方法

このタスクでは、SiteScope を使用した起動方法について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- [50ページ「SiteScope のインストール」](#)
- [50ページ「SiteScope へのログオン」](#)
- [50ページ「設定 API からの SiteScope の管理 - オプション」](#)
- [50ページ「SiteScope の設定 および管理」](#)
- [50ページ「その他のアプリケーションを使用して統合するための SiteScope の設定\(任意指定\)」](#)
- [50ページ「監視用の SiteScope の設定」](#)
- [51ページ「モバイル・デバイスから SiteScope へのアクセス\(任意指定\)」](#)

1. SiteScope のインストール

監視するアプリケーションおよびオペレーティング・システムにアクセスする際に、サーバまたはプロセスとして実行する単一のサーバに SiteScope をインストールします。SiteScope のインストールの詳細については、『HP SiteScope デプロイメント・ガイド』を参照してください。

SiteScope 障害時の自動バックアップ監視用に SiteScope Failover をインストールすることもできます。詳細については、[41ページ「SiteScope フェールオーバーの使用」](#)を参照してください。

2. SiteScope へのログオン

ブラウザまたは[スタート]メニューから SiteScope にアクセスするには、[52ページ「SiteScope へのアクセス方法」](#)を参照してください。

また、サイレント・ログインを使用して初期ログイン・ページをスキップして、直接 SiteScope クライアントに進むこともできます。概念の詳細については、[40ページ「サイレント・ログインの使用」](#)を参照してください。タスクの詳細については、[54ページ「サイレント・ログイン URL の作成方法」](#)を参照してください。

3. 設定 API からの SiteScope の管理 - オプション

SiteScope 設定 API を使用して Windows または UNIX プラットフォームのコマンド・ラインから大規模で動的な環境を管理できます。詳細については、[43ページ「SiteScope 設定 API の使用」](#)を参照してください。

4. SiteScope の設定 および管理

SiteScope の使用準備をする際の推奨作業順序については、[57ページ「SiteScope の設定 および管理方法」](#)を参照してください。

5. その他のアプリケーションを使用して統合するための SiteScope の設定(任意指定)

SiteScope ではその他のさまざまなアプリケーションで、データ・コレクタとして使用できます。詳細については、[46ページ「SiteScope の統合」](#)を参照してください。

6. 監視用の SiteScope の設定

SiteScope で基本的な監視構造を手動で作成、または SiteScope テンプレートを使用して一括デプロイメントできます。

- SiteScope で基本的な監視構造を(作成したグループに個別にモニタを追加して)作成するには、[60ページ「SiteScope の監視の設定方法」](#)を参照してください。
- 組織の異なるIT要素の監視を標準化するテンプレートを使用するには、[840ページ「テンプレートを使用した SiteScope 監視ソリューションの設定方法」](#)を参照してください。

7. **モバイル・デバイスから SiteScope へのアクセス(任意指定)**

コンピュータから離れているときに監視対象 IT インフラストラクチャを追跡して、監視の特定のアクションを実行するには、SiteScope モバイル・アプリケーションを使用できます。詳細については、[48ページ「SiteScope モバイル・アプリケーションの使用」](#)を参照してください。

SiteScope へのアクセス方法

このタスクでは、SiteScope にアクセスするための方法について説明します。

ブラウザから SiteScope へのアクセス - オプション

SiteScope にアクセスするには、Web ブラウザで SiteScope のアドレスを入力します。標準アドレスは、`http://<サーバ名>:8080/SiteScope` です。

[スタート]メニューから SiteScope へのアクセス(任意指定)

Windows プラットフォームでは、[スタート]メニューからも SiteScope にアクセスできます。[スタート]>[プログラム]>[HP SiteScope]>[HP SiteScope を開く]をクリックします。

リモート・ログインを使用した SiteScope へのアクセス(任意指定)

サイレント・ログインを使用して SiteScope にアクセスできます。これにより、ログイン・ページをスキップし、サイレント・ログイン・アドレスを使用して特定のユーザ名とパスワードに対するユーザ・アカウントを直接開くことができます。

概念の詳細については、40ページ「サイレント・ログインの使用」を参照してください。

タスクの詳細については、54ページ「サイレント・ログイン URL の作成方法」を参照してください。

結果

SiteScope が初めてデプロイされた場合は、インタフェース要素の初期化のために遅延が生じます。SiteScope に接続すると、SiteScope の[ダッシュボード]ビューが開きます。

注: このアカウントとその権限の使用を制限するには、ユーザ名とログイン・パスワードを含めるように管理者アカウント・プロファイルを編集する必要があります。SiteScope によって SiteScope にアクセスする前にログイン・ダイアログが表示されます。管理者ユーザにユーザ名およびパスワードが定義されていない場合、SiteScope はログイン・ページをスキップして自動的にログインします。管理者アカウント・プロファイルの編集方法の詳細については、773ページ「ユーザ管理プリファレンスの概要」を参照してください。

SiteScope へのアクセスを制限する方法

このタスクでは、特定の IP アドレスまたはホスト名について、SiteScope ユーザ・インタフェースへのアクセスを制限する方法について説明します。

1. < SiteScope のルート・ディレクトリ> \Tomcat\conf ディレクトリにある **server.xml** ファイルを開きます。
2. **RemoteAddress** 値と **RemoteHost** 値を探し、必要に応じて、それらの値を IP アドレスまたはホスト名を許可するか、拒否するかを設定します。これらの値を設定する方法の詳細については、**server.xml** ファイルの説明と例を参照してください。デフォルトでは、すべてのホストがアクセスを許可されます。
3. ユーザ・インターフェイスを通じて、リクエストが SiteScope に送信された IP アドレスとホスト名 (およびこれらのホストのアクセス状態) を記録するには、**Fast Common Access Log** 値のコメント行指定をはずします。
4. SiteScope のレポートへのアクセスをポート 8888 に制限するには、< SiteScope のルート・ディレクトリ> \groups\master.config ファイルで次のプロパティを設定します。
 - **_checkAddressAndLogin** 値を **=true** に設定します。
 - **_authorizedIP** レポートへのアクセスが許可されるすべての IP アドレスのカンマ区切りのリストを提供します。デフォルトでは、すべてのホストが SiteScope レポートへのアクセスを許可されます。

サイレント・ログイン URL の作成方法

このタスクでは、サイレント・ログイン URL の作成方法について説明します。サイレント・ログイン URL を使用すると、SiteScope のログイン・ページを表示せずに指定した SiteScope サーバに直接ログオンできます。

このタスクには次の手順が含まれています。

- 54ページ「ユーザ・プロファイルの作成」
- 55ページ「ユーザ権限の設定 - オプション」
- 55ページ「ユーザ・プロファイルの暗号化」
- 55ページ「ユーザ・プロファイル用 SiteScope サイレント・ログイン URL の作成」
- 56ページ「結果」

1. ユーザ・プロファイルの作成

[プリファレンス]コンテキストで、[ユーザ管理プリファレンス]メニューをクリックし、ユーザ・アカウントを作成します。

ユーザ・インタフェースの詳細については、785ページ「[ユーザ管理プリファレンス]ページ」を参照してください。

注: 管理者アカウントは標準設定のアカウントで、製品がインストールされると有効になります。ほかのアカウントを作成するには、ユーザ・ログイン名およびパスワードを含めるように最初に管理者アカウント・プロファイルを編集する必要があります。

例:

表示名「一般ユーザ」を持つユーザ・プロファイルが、ログイン名 Regular、パスワード Regular で追加されました。

2. ユーザ権限の設定 - オプション

[新規ユーザ]/[ユーザの編集]ダイアログ・ボックスの[権限]セクションで、ユーザのアクション権限を設定します。標準設定では、新規ユーザにはほかのユーザのプリファレンスの変更または削除権限を除く、すべての権限が与えられます。

ユーザ・インタフェースの詳細については、792ページ「権限」を参照してください。

3. ユーザ・プロファイルの暗号化

ユーザ・ログイン名およびパスワードを暗号化します。

- a. コマンド・プロンプトで、ログイン名についてコマンド **< SiteScope のルート・ディレクトリ > \tools\AutoDeployment\encrypt_password.bat < ログイン名 >** を実行します。

例を次に示します。

```
C:\SiteScope\tools\AutoDeployment\encrypt_password.bat Regular
```

Regular の暗号化値は (sisp)uqlzrG1lIms= です。

- b. <http://www.bloobery.com/indexdot/html/topics/urlencoding.htm> のリストに従って非標準の URL 文字をエンコードします。1 文字の URL エンコーディングは、% 記号とそれに続く 2 桁の文字表現で構成されます。

この例では、= が予約文字であるため %3D で置き換えます。その結果、Regular のエンコード値は (sisp)uqlzrG1lIms%3D になります。

- c. 暗号化値をサイレント・ログイン URL に追加できるように保存します。
- d. ログイン・パスワードについて暗号化プロセスを繰り返します(ログイン名と異なる場合)。

4. ユーザ・プロファイル用 SiteScope サイレント・ログイン URL の作成

Web ブラウザに SiteScope サイレント・ログイン URL を入力します。次の URL 形式を使用します。

```
http://<サーバ名>:8080/SiteScope?sis_silent_login_type=
encrypted&login=<暗号化ログイン名>&password=
<暗号化パスワード>
```

<暗号化ログイン名> と <暗号化パスワード> は暗号化したログイン名とパスワードで置き換えます。

5. 結果

SiteScope はログイン・ページをスキップし、指定されたユーザ名 およびパスワードに対するユーザ・アカウントを直接開きます。

注: ログイン名 およびパスワード・パラメータに入力した値がどちらも存在しないか見つからない場合、または認証が失敗した場合は、SiteScope のログイン・ページが表示されます。

SiteScope の設定および管理方法

このタスクでは、SiteScope の使用準備をする際の推奨作業順序について説明します。

注 :SiteScope Failover を使用してバックアップのインフラストラクチャ監視を利用可能にする場合、推奨作業順序については、< SiteScope のルート・ディレクトリ> \sisdocs\pdfs\SiteScopeFailover.pdf にある『HP SiteScope Failover Guide』を参照してください。

このタスクには次の手順が含まれています。

- 57ページ「SiteScope へのログオン」
- 57ページ「SiteScope ライセンスの入力」
- 57ページ「SiteScope のプリファレンスの設定」
- 58ページ「リモート・サーバの接続プロファイルの設定」
- 59ページ「ミドルウェア・ドライバのインストール(必要な場合)」
- 59ページ「JMX サーバのパスワード保護の有効化(任意指定)」
- 59ページ「結果」

1. SiteScope へのログオン

Web ブラウザで SiteScope のアドレスを入力します。標準アドレスは、`http://localhost:8080/SiteScope` です。

2. SiteScope ライセンスの入力

インストール時に SiteScope のライセンス情報を入力しなかった場合、[プリファレンス]>[一般プリファレンス]>[ライセンス]で入力します。

ユーザ・インタフェースの詳細については、641ページ「ライセンス」を参照してください。

3. SiteScope のプリファレンスの設定

SiteScope 内の管理タスクに関連する特定のプロパティと設定値を設定します。

- a. **ユーザ・アカウントを作成します。**管理者アカウントは標準設定のアカウントで、製品がインストールされると有効になります。このアカウントは SiteScope を管理するすべての権限を持ち、アカウントを制限しなければ、製品にアクセスするすべてのユーザが使用します。組織の要件に基づいて、その他のユーザ・アカウントを作成して設定します。タスクの詳細については、777ページ「SiteScope ユーザ・プロファイルの作成方法」を参照してください。

注 : 管理者ユーザにユーザ名およびパスワードが定義されていない場合、SiteScope はログイン・ページをスキップして自動的にログインします。

- b. **SiteScope の電子メール・プリファレンスでサーバを設定します。**管理者の電子メール・アドレスを設定し、SiteScope がユーザへの電子メール・メッセージや警告の送信に使用できるメール・サーバを指定します。ユーザ・インタフェースの詳細については、631ページ「[電子メールプリファレンス] ページ」を参照してください。

- c. **ログ・プリファレンスを調整します。**監視データを SiteScope サーバ上に保持する日数を設定します。標準では、SiteScope は 40 日以上経過したログを削除します。監視データを外部データベースにエクスポートする場合は、データベースと必要なドライバを準備し、ログのプリファレンスを適切に設定します。ユーザ・インタフェースの詳細については、[742ページ「\[ログプリファレンス\]ページ」](#)を参照してください。
- d. **SiteScope オブジェクトの資格情報を設定します。**[資格情報のプリファレンス]を使用して、ユーザ認証を必要とする SiteScope オブジェクトの資格情報を保存、管理します。タスクの詳細については、[623ページ「資格情報のプリファレンスの設定方法」](#)を参照してください。
- e. **SiteScope 統合を設定します(必要に応じて)。**
 - BSM に報告するよう SiteScope を設定します。これにより、BSM にレポートする SiteScope 監視データとトポロジを記録できます。タスクの詳細については、[231ページ「SiteScope および BSM 間の統合の設定方法」](#)を参照してください。
 - Operations Manager(HPOM)統合を設定します。これにより、SiteScope イベントの送信および HPOM と BSM 製品への測定値データのレポートが可能になります。HPOM および BSM へのイベント送信のタスク詳細については、[268ページ「SiteScope を使用して HPOM または BSM にイベントを送信する方法」](#)を参照してください。HPOM および BSM への測定値のレポートのタスク詳細については、[283ページ「SiteScope を使用して HP Operations Agent に測定値をレポートする方法」](#)を参照してください。
 - Network Node Manager i(NNMI)統合を設定します。これにより、SiteScope イベントの送信および NNMI への測定値データのレポートが可能になります。NNMI へのイベント送信のタスク詳細については、[295ページ「NNMI にイベント・データを送信するための SiteScope の設定方法」](#)を参照してください。NNMI への測定値のレポートのタスク詳細については、[297ページ「メトリック・データを NNMI にレポートするための SiteScope の設定方法」](#)を参照してください。
 - HP Diagnostics 統合を設定して、Diagnostics が監視するアプリケーション・サーバに関するより包括的な情報を表示できるようにします。ユーザ・インタフェースの詳細については、[725ページ「\[Diagnostics 統合プリファレンス\]ダイアログ・ボックス」](#)を参照してください。
 - 直接統合が存在しないアプリケーションに SiteScope の測定値を転送できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、[721ページ「\[データ統合プリファレンス\]ダイアログ・ボックス」](#)を参照してください。
 - 直接統合が存在しないサードパーティのアプリケーションまたは管理コンソールへの一般イベント統合を設定します。ユーザ・インタフェースの詳細については、[702ページ「汎用イベント統合の概要」](#)を参照してください。
- f. さらに、必要に応じてほかの SiteScope プリファレンスも設定できます。詳細については、[95ページ「プリファレンス・メニュー」](#)を参照してください。

4. リモート・サーバの接続プロファイルの設定

セキュリティ要件に応じて、監視するリモート・サーバの接続方法を指定します。

SiteScope によるリモート Windows サーバのデータ監視の有効化の詳細については、[525ページ「リモート Microsoft Windows サーバを監視するための SiteScope の設定方法」](#)を参照してください。

SiteScope によるリモート UNIX サーバのデータ監視の有効化の詳細については、[531ページ「リモート UNIX サーバを監視するための SiteScope の設定方法」](#) 参照してください。

5. ミドルウェア・ドライバのインストール(必要な場合)

リモート・データベースとの接続用のミドルウェア・ドライバと、ドライバを必要とするモニタ用のアプリケーションをインストールします。

詳細については、各モニタのヘルプを参照してください。

6. JMX サーバのパスワード保護の有効化(任意指定)

SiteScope に組み込まれた JMX サーバへの不正侵入を防止するため、次のシステム・プロパティを設定して JVM の起動時にパスワード保護を有効にします。

```
-Dcom.sun.management.jmxremote.authenticate=true
```

- Windows プラットフォームで、この因数を追加または置き換えするには、Windows レジストリ設定 **HKEY_LOCAL_MACHINE\SYSTEM\CurrentControlSet\Services\SiteScope\serviceParam** にします。

標準設定では、serviceParam の -

`Dcom.sun.management.jmxremote.authenticate` パラメータは `false` に設定されています。

- UNIX プラットフォームの場合、<SiteScope のルート・ディレクトリ>/bin/start-monitor スクリプトにこの引数を追加する必要があります。

JVM の設定の詳細については、次のサイトの [Java Oracle documentation](http://download.oracle.com/javase/1.5.0/docs/guide/management/agent.html) を参照してください。 <http://download.oracle.com/javase/1.5.0/docs/guide/management/agent.html> (英語サイト)

JMX コンソールの詳細については、[42ページ「JMX コンソールの使用」](#) を参照してください。

7. 結果

これで SiteScope を使用できるようになりました。

- SiteScope での基本的な監視構造の作成の詳細については、[60ページ「SiteScope の監視の設定方法」](#) を参照してください。
- 企業で異なる要素の監視を標準化するテンプレートの使用についての詳細は、[840ページ「テンプレートを使用した SiteScope 監視ソリューションの設定方法」](#) を参照してください。

SiteScope の監視の設定方法

このタスクでは、SiteScope で作成したグループにモニタを個別に追加して基本的な監視構造を作成する際の作業順序について説明します。

ヒント: または、SiteScope テンプレート、ソリューション・テンプレート、テンプレート変更適用ウィザード、自動テンプレート・デプロイメントを使用して、企業内のさまざまな IT 要素の監視を標準化できます。一括デプロイメントの場合、これらの方法は基本的な監視方法よりも効率的です。テンプレート・ワークフローの詳細については、[62ページ「テンプレートを使用した SiteScope 監視ソリューションの設定方法 - フローチャート」](#)を参照してください。

このタスクには次の手順が含まれています。

- [60ページ「前提条件」](#)
- [60ページ「グループとサブグループの作成」](#)
- [60ページ「モニタ・インスタンスの作成」](#)
- [60ページ「モニタの依存関係の設定 - オプション」](#)
- [60ページ「モニタのしきい値の設定 - オプション」](#)
- [61ページ「モニタおよびグループの警告のセットアップ - オプション」](#)
- [61ページ「モニタおよびグループのレポートのセットアップ - オプション」](#)
- [61ページ「結果」](#)

1. 前提条件

SiteScope に監視を設定する前に、インストール後の管理タスクの実行が終了していることを確認します。

タスクの詳細については、[57ページ「SiteScope の設定および管理方法」](#)を参照してください。

2. グループとサブグループの作成

実装するモニタ階層に従ってグループを作成します。これにより、モニタと関連付けられた警告のデプロイメントを管理しやすくし、環境や組織への有効性を高めることができます。たとえば、場所、サーバ・タイプ、ネットワーク・リソースなどのグループを作成できます。

タスクの詳細については、[313ページ「グループの管理方法」](#)を参照してください。

3. モニタ・インスタンスの作成

グループに追加するモニタ・インスタンスを選択します。

タスクの詳細については、[341ページ「モニタのデプロイ方法」](#)を参照してください。

4. モニタの依存関係の設定 - オプション

グループと主要なモニタの依存関係を作成し、過剰な警告を制御できるようにします。

概念の詳細については、[329ページ「グループの依存関係の監視」](#)を参照してください。

5. モニタのしきい値の設定 - オプション

ベースラインを使用して 1 つまたは複数のモニタのしきい値を設定するか、各モニタ・インスタンスについてレポートされるステータスを決定するロジック条件を手動で設定します。

- ベースラインを使用したモニタしきい値の設定方法の詳細については、[344ページ「ベースラインを使用したモニタしきい値の設定方法」](#)を参照してください。
- 手動でモニタしきい値を設定するためのユーザ・インタフェースの詳細については、[374ページ「しきい値の設定」](#)を参照してください。

6. モニタおよびグループの警告のセットアップ - オプション

イベントが発生したか、インフラストラクチャの要素やシステムのステータスが変化したときに通知を送信する警告を作成します。

タスクの詳細については、[1226ページ「警告の設定方法」](#)を参照してください。

7. モニタおよびグループのレポートのセットアップ - オプション

時間の経過に伴う監視対象のサーバおよびアプリケーションのパフォーマンスに関する情報を表示するレポートを作成します。

タスクの詳細については、[1278ページ「レポートの作成方法」](#)を参照してください。

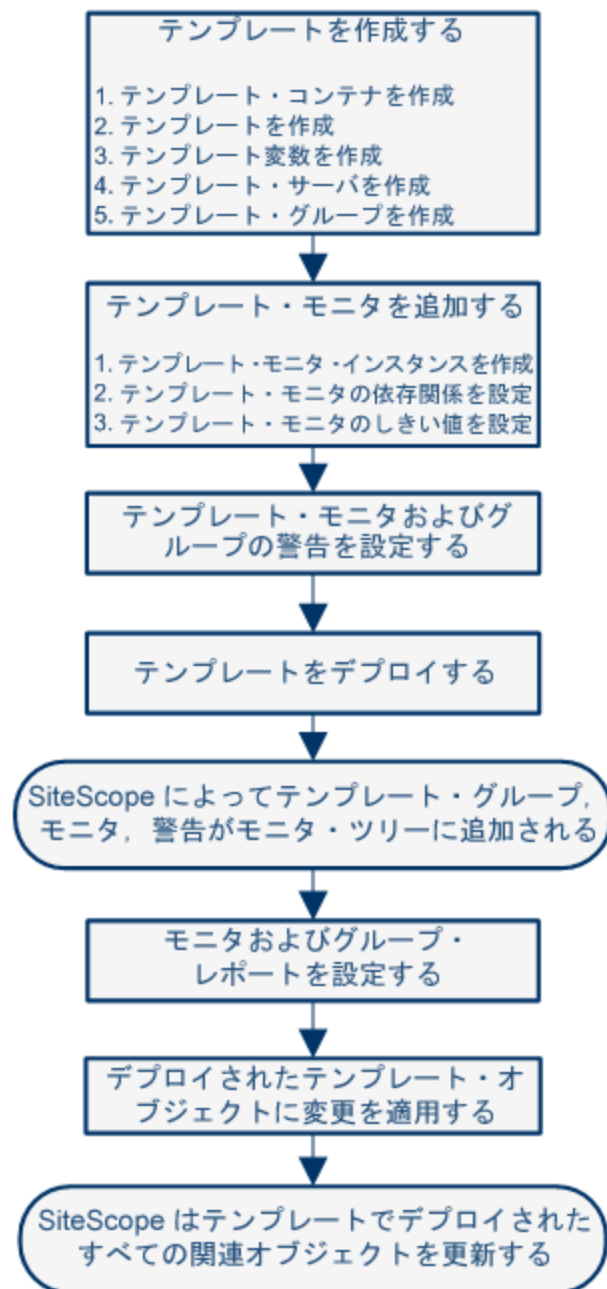
8. 結果

SiteScope は、モニタ・ツリーの指定されたコンテナにモニタ、警告、レポートを追加します。

テンプレートを使用した SiteScope 監視ソリューションの設定方法 - フローチャート

次のフロー・チャートは、SiteScope テンプレートおよびテンプレート変更適用ウィザードを使用して SiteScope 監視ソリューションを設定するために必要な手順を示します。テンプレートは、一連のグループ構造、モニタ・タイプ、設定を1つの構造に標準化し、繰り返しデプロイおよび更新できるようにするために使用します。

ワークフローの詳細については、840ページ「テンプレートを使用した SiteScope 監視ソリューションの設定方法」を参照してください。



SiteScope API 呼び出しの使用方法

このタスクでは、API 呼び出しの使用方法について説明します。API 呼び出しを使用すると、SiteScope ユーザ・インタフェースを使用しなくても、さまざまなシナリオを自動的に実行できます。

ヒント: API 使用のベスト・プラクティスについては、[44ページ「SiteScope API の使用のベスト・プラクティス」](#)を参照してください。

API 呼び出しを使用するには、次の手順を実行します。

1. 独自の Java プロジェクトを作成します。
2. すべての SiteScope クライアント jar をプロジェクトに追加します(この jar は < **SiteScope のインストール・ディレクトリ** > \examples\integrations\api\lib にあります)。
3. < **SiteScope のインストール・ディレクトリ** > \examples\integrations\api\src にある **SiteScopeCommandLineUtil.java** ファイルを使用して、SiteScope に接続します。**createConnection** メソッド・セクションで、ログインに必要な次の情報を入力します。

```
// SiteScope connection properties creation
SiteScopeConnectionPropertiesForExternal props = new
SiteScopeConnectionPropertiesForExternal(hostName, port, login,
password, isUseSSL); // SiteScope API Connector creation
SiteScopeExternalAPIConnector siteScopeExternalAPIConnector = new
SiteScopeExternalAPIConnector(); // Get the API instance using
connection properties IAPIConfiguration apiConfiguration =
siteScopeExternalAPIConnector.getAPIConfiguration(props);
```

4. 必要な API メソッドを実行します。例：

```
apiConfiguration.getConfigurationsSnapshotEx(login, password);
```

SiteScope API 使用の詳細については、[43ページ「SiteScope 設定 API の使用」](#)を参照してください。

第3章

SiteScope ユーザ・インタフェースの操作

本章の内容

概念

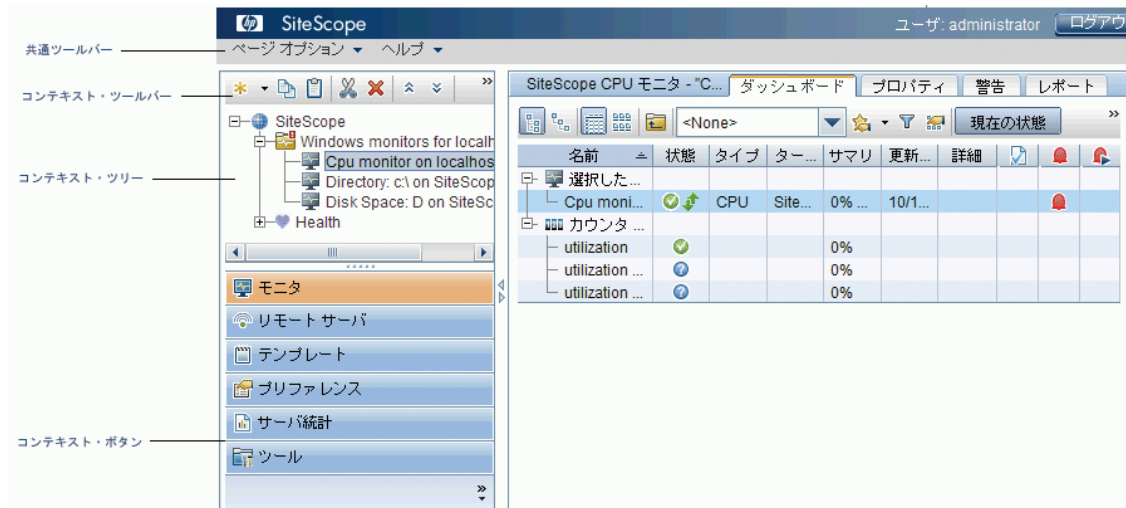
- 65ページ「SiteScopeユーザ・インタフェースについて」
- 68ページ「コンテキスト・ツリーでのアクションの操作と実行」
- 69ページ「複数のグループやモニタに対するアクションの実行」
- 70ページ「SiteScope オブジェクトのコピーと移動」

参照情報

- 72ページ「SiteScopeキーボード・ショートカット」
- 73ページ「SiteScope ユーザ・インタフェースの操作」

SiteScope ユーザ・インタフェースについて

SiteScope に接続すると、SiteScope の[ダッシュボード]ビューが次のように開きます。ユーザ名を入力して SiteScope にログインした場合は、ユーザ名がウィンドウの右上に表示されます。



SiteScope ウィンドウには、次の主要な要素が含まれます。

- **SiteScope 共通ツールバー** : ページ・オプション、ドキュメント、追加のリソースにアクセスできます。このツールバーはウィンドウの上部にあります。詳細については、[66ページ「SiteScope 共通ツールバー」](#)を参照してください。
- **SiteScope コンテキスト・ツールバー** : 選択した SiteScope コンテキスト内でよく使用されるコマンドのボタンが含まれます。詳細については、[73ページ「ツリー・ツールバーのボタン」](#)を参照してください。
- **SiteScope コンテキスト・ツリー** : ツリー構造で SiteScope オブジェクトを作成、管理できます。詳細については、[78ページ「モニタ・ツリー」](#)、[87ページ「リモート・サーバ・ツリー」](#)、[88ページ「テンプレート・ツリー」](#)を参照してください。
- **SiteScope コンテキスト・ボタン** : SiteScope のモニタ、リモート・サーバ、テンプレート、プリファレンス、サーバ統計、診断ツールにアクセスできます。詳細については、[66ページ「SiteScope コンテキスト・ボタン」](#)を参照してください。

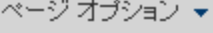


注 : SiteScope の以前のバージョンで利用できた SiteScope クラシック・インタフェース(URL は http://<sitescope_host>:8888)は、SiteScope の管理には使用できなくなりました。詳細については、『HP SiteScope デプロイメント・ガイド』の「SiteScope クラシック・インタフェース」を参照してください。

本項の内容

- [66ページ「SiteScope 共通ツールバー」](#)
- [66ページ「SiteScope コンテキスト・ボタン」](#)

SiteScope 共通ツールバー

SiteScope 共通 ツールバーは、SiteScope ウィンドウの上部にあり、すべてのコンテキストからアクセスできます。次のボタンが含まれます。


UI 要素	詳細
	次のページ・オプションを選択できます。 <ul style="list-style-type: none"> お気に入り に追加 : 現在の SiteScope ビューをブラウザのお気に入りのリストに追加できます。 ユーザのお気に入り にレイアウトを保存 : 現在のビューを特定の SiteScope ユーザの標準設定のレイアウトとして保存できます。
	SiteScope のヘルプ、特定のウィンドウのコンテキスト・センシティブ・ヘルプ、リリース・ノート、その他の追加オンライン・リソースにアクセスできます。 また、ほとんどのページまたはダイアログ・ボックスでユーザ・インタフェース要素の説明を表示できます。この機能を有効にするには、特定のページまたはダイアログ・ボックスで [クイック ヘルプ] ボタンをクリックし、マウス・ポインタを要素ボックスの上に置いてヒントの説明を表示します。この機能を利用不可にするには、 [クイック ヘルプ] ボタンをもう一度クリックします。
	SiteScope セッションからログアウトします。






モニタ・ツリーのビューをカスタマイズして、作業中の SiteScope 要素のみを表示することができます。また、検索/フィルタ・タグをグループ、モニタ、レポート、警告に割り当てて、選択内容をさらに絞り込むこともできます。このトピックの詳細については、[113ページ「SiteScope オブジェクトのフィルタ処理」](#)を参照してください。

SiteScope では、グローバル置換を使用して複数のモニタ、グループ、または複数の SiteScope を対象にモニタ設定を変更できます。グローバル置換のユーザ・インタフェースの詳細については、[127ページ「\[グローバル検索と置換\]ウィザード」](#)を参照してください。

SiteScope コンテキスト・ボタン :

SiteScope には次のコンテキストがあり、左側の表示枠から使用できます。

UI 要素	説明
 モニタ	モニタ・ツリーで表された階層で SiteScope グループおよびモニタの作成、管理できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、 78ページ「モニタ・ツリー」 を参照してください。

UI 要素	説明
 リモートサーバ	SiteScope がリモートの Windows 環境と UNIX 環境で実行されているシステムとサービスを監視できるように、接続プロパティを設定できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、 87ページ「リモート・サーバ・ツリー」 を参照してください。
 テンプレート	テンプレートを使用して、標準化した監視パターンを、インフラストラクチャの複数の要素へデプロイできます。事前に設定された SiteScope ソリューション・テンプレートを使用することも、独自のテンプレートを作成および管理することもできます。ユーザ・インタフェースの詳細については、 88ページ「テンプレート・ツリー」 を参照してください。
 プリファレンス	SiteScope 内のほとんどの管理タスクに関連する特定のプロパティおよび設定値を設定できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、 95ページ「プリファレンス・メニュー」 を参照してください。
 サーバ統計	主要な SiteScope サーバ・パフォーマンス測定値を表示できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、 98ページ「[サーバ統計]メニュー」 を参照してください。
 ツール	SiteScope の問題のトラブルシューティングや、モニタ設定に役立つ診断ツールを表示できます。利用可能なツールの詳細については、 139ページ「SiteScope ツールの概要」 を参照してください。

コンテキスト・ツリーでのアクションの操作と実行

コンテキスト・ツリーの操作、アクションの実行、オブジェクト・プロパティの編集にはいくつかの方法があります。

コンテキスト・ツールバーを使用してアクションを実行するか、またはコンテキスト・ツリー内でオブジェクトを選択して右クリックし、そのオブジェクトのメニュー・オプションにアクセスできます。たとえば、モニタ・ツリーで SiteScope ノードを右クリックした場合、その SiteScope ノードに対して実行できるアクションのみが表示されたメニューから選択します。複数のグループおよびモニタに対してアクションを実行することもできます。詳細については、[69ページ「複数のグループやモニタに対するアクションの実行」](#)を参照してください。

コンテキスト・ツリー・オブジェクトとツリーのオブジェクトごとに利用可能なショートカット・メニュー・オプションの詳細については、[78ページ「モニタ・ツリー」](#)、[87ページ「リモート・サーバ・ツリー」](#)、[88ページ「テンプレート・ツリー」](#)、[95ページ「プリファレンス・メニュー」](#)、[98ページ「\[サーバ統計\]メニュー」](#)、[99ページ「\[ツール\]メニュー」](#)を参照してください。

複数のグループやモニタに対するアクションの実行

複数の SiteScope オブジェクトに対して一括操作を実行するには、モニタとグループの管理機能を使用します。この機能では、モニタツリーの複数の SiteScope オブジェクトに対してモニタの移動、コピー、削除、実行、モニタの有効化/無効化、関連付けられた警告アクションの有効化/無効化を実行できます。フィルタ・オプションを使用し、フィルタ基準に基づいてフィルタしたグループとモニタのリストを作成することもできます。

[モニタとグループの管理] ダイアログ・ボックスを使用して、組織の展開可能な階層ビューから1つ以上のグループとモニタを選択し、実行するアクションを選択できます。

ユーザ・インタフェースの詳細については、[76ページ](#)「[モニタとグループの管理] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

SiteScope オブジェクトのコピーと移動


SiteScope オブジェクトをコンテキスト・ツリー内の別の場所にコピーできます。さらに、SiteScope オブジェクトをテンプレートにコピーできます。また、モニタとグループをその内容とともにモニタ・ツリーの別のグループに移動することもできます。

各オブジェクトを区別できるように、オブジェクト名は親コンテナ内で一意にする必要があります。たとえば、SiteScope オブジェクトをコピーまたは移動する場合、同じグループ内でまったく同じ名前を持つ2つのモニタは作成できません。SiteScope オブジェクトのコピーを作成し、その名前がコンテナ内の既存のオブジェクトと同じである場合、SiteScope では自動的にサフィックス(数字)がオブジェクト名の最後に追加されます。たとえば、モニタ Mail Flow のコピーを作成し、同じモニタ・グループ内に貼り付けると、SiteScope では自動的に名前が Mail Flow (1) に変更されます。

次の SiteScope オブジェクトをコピーまたは移動できます。

SiteScope オブジェクト	操作と説明
グループ	<p>コピー/貼り付け: モニタ・グループ(サブグループ、モニタ、警告、レポートを含む)を同じまたは別のモニタ・グループにコピーします。</p> <p>切り取り/貼り付け: モニタ・グループ(サブグループ、モニタ、警告、レポートを含む)を別のモニタ・グループに移動します。</p> <p>テンプレートにコピー: モニタ・グループ(モニタ、警告、レポートを含む)をテンプレートにコピーします。</p> <p>注:</p> <ul style="list-style-type: none">モニタ・グループをそのサブグループに移動またはコピーすることはできません。警告やレポートのターゲットであるグループを移動し、その警告やレポートを移動しないと、そのグループは警告やレポートのターゲットから削除されます。ベースラインを使用してしきい値を設定したモニタをコピーまたは移動する場合、ベースラインしきい値は一緒にコピーまたは移動されません。
モニタ	<p>コピー/貼り付け: モニタ(警告、レポートを含む)を同じまたは別のモニタ・グループにコピーします。</p> <p>コピー/貼り付け: モニタ(警告、レポートを含む)を別のモニタ・グループに移動します。</p> <p>テンプレートにコピー: モニタ(警告、レポートを含む)をテンプレートにコピーします。</p> <p>注:</p> <ul style="list-style-type: none">警告やレポートのターゲットであるモニタを移動し、その警告やレポートを移動しないと、そのモニタは警告やレポートのターゲットから削除されます。モニタをコピーしたら、通常はモニタが対象とするシステムまたはアプリケーションを変更する必要があります。変更しない場合、コピーされたモニタは元のモニタ・インスタンスの監視アクションを複製します。ベースラインを使用してしきい値を設定したモニタをコピーまたは移動する場合、ベースラインしきい値は一緒にコピーまたは移動されません。

SiteScope オブジェクト	操作と説明
リモート・サーバ	テンプレートにコピー : リモート・サーバ・プロファイルをテンプレートにコピーします。
テンプレート・コンテナ	コピー/貼り付け : テンプレート・コンテナをコピーして別のテンプレート・コンテナまたは SiteScope ルートに貼り付けます。
テンプレート	コピー/貼り付け : テンプレート(グループ、モニタ、警告、レポートを含む)をテンプレート・コンテナにコピーします。
テンプレート・グループ	コピー/貼り付け : テンプレート・グループ(サブグループ、モニタ、警告、レポートを含む)をテンプレート(テンプレートにまだテンプレート・グループが含まれていない場合)またはテンプレート・グループにコピーします。
テンプレート・モニタ	コピー/貼り付け : テンプレート・モニタ(警告、レポートを含む)をテンプレート・グループにコピーします。
警告	コピー/貼り付け : 警告定義を([警告]タブから)モニタ・ツリーまたはテンプレート・ツリーの同じまたは別の場所(グループまたはモニタ)にコピーします。
レポート	コピー/貼り付け : レポート定義を([レポート]タブから)モニタ・ツリーまたはテンプレート・ツリーの同じまたは別の場所(グループまたはモニタ)にコピーします。

注: また、モニタ・ツリー・ツールバーの[モニタとグループの管理]  ボタンをクリックしても、複数のモニタとグループをターゲット・グループに移動またはコピーできます。ユーザ・インタフェースの詳細については、[76ページ「\[モニタとグループの管理\]ダイアログ・ボックス」](#)を参照してください。

SiteScope オブジェクトのコピーと移動の詳細については、[73ページ「SiteScope ユーザ・インタフェースの操作」](#)で関連する SiteScope ビューのコンテキスト・メニュー・オプションを展開してください。

SiteScope キーボード・ショートカット

次のコマンドは、モニタ・ツリー、テンプレート・ツリー、リモート・サーバ・ツリーで対応するショートカット・キーを押して実行できます。

UI 要素	詳細
CTRL+A	[新規警告]ダイアログ・ボックスが開き、新規警告を作成できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、 1242ページ 「[新規警告]/[警告の編集]ダイアログ・ボックス」を参照してください。
CTRL+C	選択した項目をクリップボードにコピーします。
CTRL+D	選択した項目を削除します。
CTRL+F	[新規フィルタ]ダイアログ・ボックスが開き、新規フィルタを作成できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、 114ページ 「[新規フィルタ]/[フィルタの編集]ダイアログ・ボックス」を参照してください。
CTRL+G	[新規グループ]ダイアログ・ボックスが開き、新規グループを作成できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、 315ページ 「[新規 SiteScope グループ]ダイアログ・ボックス」を参照してください。
CTRL+J	[テンプレートの選択]/[グループの選択]ダイアログ・ボックスが開き、デプロイするテンプレート、またはテンプレートのデプロイ先にするグループを選択できます。[テンプレートの選択]のユーザ・インタフェースの詳細については、 397ページ 「[テンプレートの選択]ダイアログ・ボックス」を参照してください。[グループの選択]のユーザ・インタフェースの詳細については、 883ページ 「[グループの選択]ダイアログ・ボックス」を参照してください。
CTRL+M	[新規モニタ]ダイアログ・ボックスが開き、新規モニタを作成できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、 365ページ 「新規モニタ・ダイアログ・ボックス」を参照してください。
CTRL+R	[フィルタ]ダイアログ・ボックスで設定したフィルタをクリアします。ユーザ・インタフェースの詳細については、 114ページ 「[新規フィルタ]/[フィルタの編集]ダイアログ・ボックス」を参照してください。
CTRL+V	クリップボードの内容を選択した場所に貼り付けます。
CTRL+X	選択した項目を切り取ってクリップボードに置きます。
削除	選択内容を削除します。
F5	ツリーを最新の表示に更新します。

SiteScope ユーザ・インタフェースの操作

本項の内容



- 73ページ「ツリー・ツールバーのボタン」
- 76ページ「[モニタとグループの管理]ダイアログ・ボックス」
- 78ページ「モニタ・ツリー」
- 87ページ「リモート・サーバ・ツリー」
- 88ページ「テンプレート・ツリー」
- 95ページ「プリファレンス・メニュー」
- 98ページ「[サーバ統計]メニュー」
- 99ページ「[ツール]メニュー」
- 102ページ「[警告]タブのショートカット・メニュー・オプション」
- 103ページ「[レポート]タブのショートカット・メニュー・オプション」









ツリー・ツールバーのボタン




ツリー・ツールバーから、さまざまな SiteScope ビューで共通の機能を実行できます。


アクセス方法	[モニタ], [リモート サーバ], または[テンプレート]コンテキストを選択します。 ツリー・ツールバーが左上の表示枠に表示されます。
重要な情報	SiteScope ビューによっては使用できないツールバー・ボタンがあります。
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> • 78ページ「モニタ・ツリー」 • 87ページ「リモート・サーバ・ツリー」 • 88ページ「テンプレート・ツリー」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
	新規 : SiteScope オブジェクト(グループ, モニタ, 警告, リモート・サーバ, テンプレート)を関連するツリーに追加する。追加できるオブジェクトはコンテキストによって異なります。
	編集 : 次の編集オプションのいずれかを選択できます。 <ul style="list-style-type: none"> • コピー : 選択したオブジェクトのコピーを作成する。 • 貼り付け : オブジェクトをツリー内の選択した場所にコピーまたは移動する。 • 切り取り : 選択したオブジェクトをツリー内の別の場所に移動する。 • 削除 : 選択したオブジェクトをツリーから削除する。


UI 要素	説明
	<p>削除：選択したリモート・サーバをツリーから削除する。</p> <p>注：リモート・サーバ・ツリーのツールバーでのみ使用できます。</p>
	<p>テスト：サーバとの接続をテストする。</p> <p>注：リモート・サーバ・ツリーのツールバーでのみ使用できます。</p>
	<p>詳細テスト：リモート・サーバの実行コマンドの結果を表示するテストを実行する。このテストにより、定義済みユーザの権限を確認できます。</p> <p>注：UNIX サーバのリモート・サーバ・ツリーのツールバーでのみ使用できます。</p>
	<p>フィルタ：モニタ・ツリーをフィルタし、定義した基準を満たす SiteScope オブジェクトのみを表示する。</p> <p>フィルタ・オプションを次から選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 新規フィルタ。フィルタを作成できる[新規フィルタ]ダイアログ・ボックスを開く。ユーザ・インタフェースの詳細については、114ページ「[新規フィルタ]/[フィルタの編集]ダイアログ・ボックス」を参照してください。 ● フィルタをクリア。フィルタ設定をクリアする。 ● <既存のフィルタのリスト>：既存のフィルタのリストを表示する。次のオプションを指定できます。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 適用：左側のツリー表示枠にフィルタを適用する。 ■ 編集：フィルタを編集できる[フィルタの編集]ダイアログ・ボックスを開く。ユーザ・インタフェースの詳細については、114ページ「[新規フィルタ]/[フィルタの編集]ダイアログ・ボックス」を参照してください。 ■ 削除：フィルタ・リストからフィルタを削除する。 <p>注：モニタ・ツリーのツールバーでのみ使用できます。</p>
	<p>モニタとグループの管理：モニタ・ツリー内の複数のグループおよびモニタに対するアクション(コピー、移動、削除、モニタの実行、モニタの有効化/無効化、関連する警告の有効化/無効化)を実行できる。また、モニタ・ツリー内のオブジェクトのリストをフィルタできます。[モニタとグループの管理]ダイアログ・ボックスの詳細については、76ページ「[モニタとグループの管理]ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p> <p>注：モニタ・ツリーのツールバーでのみ使用できます。</p>
	<p>すべて折りたたみ：ツリーの分岐をすべて折りたたむ。</p> <p>注：モニタおよびテンプレート・ツリーのツールバーでのみ使用できます。</p>
	<p>すべて展開：ツリーの分岐をすべて展開する。</p> <p>注：モニタおよびテンプレート・ツリーのツールバーでのみ使用できます。</p>
	<p>更新：ツリーのデータを更新する。</p>

UI 要素	説明
	すべて表示 : 非表示のツールバー・ボタンを表示する。
	<p>クイック検索 : モニタ、テンプレート、リモート・サーバ、またはカウンタ・ツリー(参照可能な一部のカウンタ・モニタのモニタ・プロパティ内)の、特定のプロパティ名または値の設定オブジェクト(グループ、モニタ、リモート・サーバ、カウンタ)を検索できます。</p> <p>ボックスの左端をクリックすると、フィルタ・オプションのドロップダウン・メニューが開きます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [Case sensitive]を選択すると、入力したとおりのフィルタ文字列が検索されます。[Case insensitive]を選択すると、フィルタ文字列の大文字と小文字は区別されません。 • [Use wild cards]を選択すると、フィルタ文字列にワイルドカード記号(*)を使用できます。検索項目の一部分だけの入力で検索できるようにするために、検索文字列にアスタリスク(*)を使用できます。 • [Match from start]を選択すると、フィルタ文字列をプロパティの名前または値の先頭から検索します。[Match exactly]を選択すると、完全に一致するフィルタ文字列が検索されます。[Match anywhere]を選択すると、プロパティ内の任意の場所でフィルタ文字列が検索されます。 • [Match leaf node only]を選択すると、ツリーのリーフ・ノード(モニタと空のグループのみ)内のフィルタ文字列が検索されます。クリアすると、すべてのノードが検索されます。 • [Hide nodes without children]を選択すると、フィルタ文字列に一致するリーフ・ノードがないグループ(空のグループ)が非表示になります。 • [Keep the children if any of their ancestors match]を選択すると、フィルタ文字列と一致するグループに含まれるすべての子ノードが(子ノード自体が検索文字列に一致していなくても)表示されます。 • [自動フィルタの使用]を選択すると、検索テキストフィールドに文字が入力されると自動的に検索されます。自動フィルタが実行されるまでの遅延を、[プリファレンス] > [インフラストラクチャプリファレンス] > [一般設定] > [クイック検索自動フィルタ遅延(ミリ秒)]で設定できます。標準設定の遅延は 800 ミリ秒(0.8 秒)です。[自動フィルタの使用]が選択されていない場合は、検索を実行するたびに Enter キーを押す必要があります。 <p>ヒント : 高負荷環境では、[クイック検索自動フィルタ遅延]の遅延時間を増やすか、[自動フィルタの使用]オプションを無効することをお勧めします。</p> <p>注 :</p> <ul style="list-style-type: none"> • クイック検索が利用できるのは、モニタ、テンプレート、リモート・サーバ、およびカウンタ・ツリー(モニタ・プロパティ内)のツリー・ツールバーのみです。 • フィルタをツリーに適用すると、検索は現在表示されているレコードに制限されます。
	パネルを表示/非表示 : (左側と右側の表示枠の間)ツリーを表示または非表示にし、右側の表示枠を展開または縮小する。









UI 要素	説明
	<p>(コンテキスト・メニューの下)クリックしてコンテキスト・ボタンの表示を設定する。次のオプションを指定できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • Show More Buttons : クリックすると、次に表示率の高い SiteScope コンテキスト・ボタンが左側の表示枠に表示される。このボタンは、一部のコンテキスト・ボタンが表示されていない場合にのみ表示されます。 • Show Fewer Buttons : クリックすると、表示率の最も低い SiteScope コンテキスト・ボタンが左側の表示枠で非表示になる。このボタンは、少なくとも 1 つのコンテキスト・ボタンが表示されている場合にのみ表示されます。 • オプション : SiteScope コンテキスト・ボタンを表示する順序を選択する。順序を並べ替えるには、[上へ移動]ボタンと[下へ移動]ボタンを使用します。左側の表示枠でボタンを非表示にするには、コンテキストのチェック・ボックスをクリアします。標準設定では、すべてのコンテキスト・ボタンが選択されます(左側の表示枠に表示されます)。 • Add or Remove Buttons : コンテキスト・ボタンの表示 / 非表示の状態を表示する。標準設定では、すべてのコンテキスト・ボタンが選択されます(左側の表示枠に表示されます)。ボタンを非表示にするには、コンテキストのチェック・マークをクリアします。





[モニタとグループの管理]ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、1 つ以上のグループ、モニタ、または両方を選択し、選択したオブジェクトに対するアクション(コピー、移動、削除、モニタの実行、モニタの有効化/無効化、関連する警告の有効化/無効化)を実行できます。また、フィルタ・オプションを使用して、フィルタ基準に基づいてフィルタを適用したグループとモニタのリストを作成するか、モニタ・ツリー・フィルタで以前定義した既存のフィルタを選択することもできます。

アクセス方法	[モニタ]コンテキストを選択します。モニタ・ツリーのツールバーで、[モニタとグループの管理]  ボタンをクリックします。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> • ツールバー・アクションは、ユーザ権限と選択したオブジェクトに従って使用できる。 • 状況コンテナは削除できない。
関連タスク	<ul style="list-style-type: none"> • 313ページ「グループの管理方法」 • 341ページ「モニタのデプロイ方法」 • 107ページ「検索/フィルタ・タグを使用したオブジェクトの検索方法」
関連情報	69ページ「複数のグループやモニタに対するアクションの実行」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
 	<p>フィルタ: モニタ・ツリーをフィルタし、定義した基準を満たすSiteScopeオブジェクトのみを表示できる。フィルタを適用した後に、フィルタの名前がボタンに表示されます(フィルタを[モニタとグループの管理]ダイアログ・ボックスで作成した場合はカスタム、それ以外の場合は、モニタ・ツリー・フィルタで定義したフィルタの名前です)。</p> <p>[フィルタ]ボタン矢印をクリックして、フィルタ・オプションを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 新規フィルタ。フィルタを作成できる[新規フィルタ]ダイアログ・ボックスを開く。ユーザ・インタフェースの詳細については、114ページ「[新規フィルタ]/[フィルタの編集]ダイアログ・ボックス」を参照してください。 • フィルタをクリア。フィルタ設定をクリアする。 • <既存のフィルタのリスト>: モニタ・ツリー・フィルタで以前定義した既存のフィルタのリストを表示します。
	<p>すべて選択: 表示されたすべてのSiteScopeオブジェクトを選択します。</p>
	<p>選択範囲を解除: 選択をクリアします。</p>
	<p>切り取り: 選択したオブジェクトを宛先グループに移動します。</p> <p>注:</p> <ul style="list-style-type: none"> • 特定のモニタに定義された警告は、モニタと一緒に転送される。 • モニタを移動すると、モニタ履歴が再起動し、モニタに生成されるレポートはモニタを移動した時点から開始される。履歴データはログ・ファイルに残りますが、モニタの移動後はそのモニタのレポートからアクセスできなくなります。グループの移動は、履歴に影響しません。 • モニタを移動すると、グループとモニタの依存関係が壊れる可能性がある。移動するモニタの状態に依存するグループが1つ以上ある場合、モニタの移動後に依存関係を更新します。
	<p>コピー: 宛先グループに貼り付けるために選択したオブジェクトのコピーを作成します。</p>
	<p>貼り付け: 選択したオブジェクトを宛先グループに貼り付けます。SiteScope オブジェクトのコピーを作成し、その名前がコンテナ内の既存のオブジェクトと同じである場合、SiteScope では自動的にサフィックス(数字)がオブジェクト名の最後に追加されます。</p> <p>例: モニタ Mail Flow のコピーを作成し、同じモニタ・グループ内に貼り付けると、SiteScope では自動的に名前が Mail Flow (1) に変更されます。</p>
	<p>削除: 選択したオブジェクトをモニタ・ツリーから削除します。</p>

UI 要素	詳細
	モニタの実行 : 選択したモニタ, またはグループ内に設定されている任意のモニタを実行します。結果を表示する情報ウィンドウが開きます。
	モニタの有効化/無効化 : モニタ・プロパティの設定に関係なく, 選択したモニタまたはグループ内のすべてのモニタを有効化または無効化する[モニタの有効化/無効化]ダイアログ・ボックスを開く。[モニタを無効化]を選択すると, このダイアログ・ボックスに戻って[モニタを有効化]を選択するまでモニタは無効になります。ユーザ・インタフェースの詳細については, 1101ページ「[グループ内のモニタの有効化/無効化]ダイアログ・ボックス」を参照してください。
	関連する警告の有効化/無効化 : [関連する警告の有効化/無効化]ダイアログ・ボックスが開き, モニタやグループ内の全モニタに関連付けられているすべての警告を有効化または無効化できます。詳細については, 392ページ「関連する警告の有効化/無効化」を参照してください。
<SiteScope オブジェクト>	<p>アクションは, ツリーのチェック・ボックスを使用して選択したすべてのモニタとグループに適用される。ツリーの表示は, ダイアログ・ボックスへのアクセスおよび関連するアクション全体にわたって保存されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> オブジェクトを選択するには, オブジェクト名の左側にあるチェック・ボックスを選択する。グループまたはモニタの任意の組み合わせを選択できます。グループの左側に表示される  アイコンは, そのグループ内に含まれるモニタおよびサブグループのすべてが選択されていないことを示します。 オブジェクトのコピー先または移動先を選択するには, (チェック・ボックスではなく)オブジェクト名をクリックする。 <p>標準設定値: 最上位レベルのグループが表示されるが, オブジェクトは選択されません。</p>









モニタ・ツリー

モニタ・ツリーは, ネットワーク環境内のシステムとサービスの体系を表します。ツリーには, インフラストラクチャ内のコンテナとオブジェクトが含まれます。「ショートカット・メニュー・オプション」では, モニタ・ツリーの各オブジェクトで利用できるショートカット・メニュー・オプションについて説明します。

アクセス方法	[モニタ]コンテキストを選択します。モニタ・ツリーが左側の表示枠に表示されます。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> ツリーのルート・ノードは SiteScope コンテナである。モニタ・ツリーには, SiteScope ノードが1つだけ存在します。SiteScope ノードの下にツリーにその他の要素をすべて追加します。 ノードを選択し, ポップアップ検索ボックスに検索する文字を入力して, モニタ・ツリー内のオブジェクトを検索できる。検索ボックスを閉じるには, Esc キーをクリックします。
関連情報	318ページ「SiteScope モニタを使った作業」

モニタ・ツリー・オブジェクト

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
 SiteScope	<p>個々の SiteScope サーバを表します。</p> <p>親 : エンタープライズ・ノードまたはコンテナ。</p> <p>ツリーへの追加方法 : 空の SiteScope プロファイルをインポートまたは追加します。</p>
	<p>SiteScope モニタ・グループまたはサブグループ(有効化されたモニタを含む, モニタを含まない, または有効化されたモニタがない)を表します。</p> <p>モニタ・グループまたはサブグループに警告が設定されている場合, グループ・アイコンの横に警告  記号が表示されます。</p> <p>モニタ・グループまたはサブグループに管理レポートが設定されている場合, グループ・アイコンの横にレポート  記号が表示されます。</p> <p>親 : SiteScope または SiteScope グループ。</p> <p>ツリーへの追加方法 : グループが定義されている SiteScope を使用して作成, またはインポートします。</p>
	<p>SiteScope モニタ(有効/無効)を表します。</p> <p>モニタに警告が設定されている場合, モニタ・アイコンの横に警告  記号が表示されます。</p> <p>モニタに管理レポートが設定されている場合, モニタ・アイコンの横にレポート  記号が表示されます。</p> <p>親 : SiteScope グループまたはサブグループ, テンプレート, またはソリューション・テンプレート。</p> <p>ツリーへの追加方法 : モニタが設定されている SiteScope を使用して作成またはインポートする。</p>
	<p>SiteScope モニタの適切な機能をチェックするためにデプロイされる利用可能な状況モニタの集合を表します。</p> <p>親 : SiteScope。</p> <p>ツリーへの追加方法 : オブジェクトで SiteScope 自動的に追加されます。</p>

[SiteScope] のショートカット・メニュー・オプション

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

メニュー項目	詳細
ベースライン設定	<p>SiteScope の下にあるすべてのモニタで、応答時間の変動やインフラストラクチャのパフォーマンスの監視に使用するベースラインを作成できる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 計算 : モニタを選択し、ベースラインの計算に使用する関連時間とスケジュールを指定する。また、ベースラインの順守レベルを選択、微調整し、境界を定義できます。 ● レビューと有効化 : 計算したモニタとベースライン・データのサマリを表示する。現在のモニタ設定の保存、失敗した操作の表示と再試行、ベースライン測定値グラフの表示、ベースライン設定の適用もできます。 ● 削除 : ベースラインしきい値を削除、またはベースラインを計算した後に再計算できる。 ● 状態レポート : SiteScope の下にあるすべてのモニタのベースラインの状態に関する情報を表示する。 <p>このトピックの詳細については、335ページ「ベースラインを使った状態しきい値の設定」を参照してください。</p>
テンプレートのデプロイ	<p>グループにデプロイするテンプレートを選択できる[テンプレートの選択]ダイアログ・ボックスを開く。ユーザ・インタフェースの詳細については、397ページ「[テンプレートの選択]ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p>
CSV を使用してテンプレートをデプロイ	<p>CSV ファイルを使用してグループにデプロイするテンプレートを選択できる[テンプレートの選択]ダイアログ・ボックスを開く。ユーザ・インタフェースの詳細については、397ページ「[テンプレートの選択]ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p>
すべて展開	<p>SiteScope の下のすべてのサブツリーを開きます。</p>
グローバル検索と置換	<p>[グローバル検索と置換]ウィザードを開く。このウィザードでは、モニタ、警告、グループ、プリファレンス、警告アクション、レポートのプロパティのグローバル検索と置換を実行できます。このトピックの詳細については、127ページ「[グローバル検索と置換]ウィザード」を参照してください。</p>
モニタ・デプロイメント・ウィザード	<p>このメニュー項目は、BSM のシステム可用性管理 (SAM) から SiteScope にアクセスするユーザのみが使用できる。[モニタ デプロイメント ウィザード]が開きます。このトピックの詳細については、BSM ヘルプの『システム可用性管理の使用』の「モニタ・デプロイメント・ウィザード」を参照してください。</p>
[新規作成]>[警告]	<p>SiteScope の新しい警告を定義できる[新規警告]ウィンドウを開く。このトピックの詳細については、1203ページ「SiteScope 警告」を参照してください。</p>
[新規作成]>[グループ]	<p>新しい SiteScope グループを定義できる[新規グループ]ウィンドウを開く。ユーザ・インタフェースの詳細については、315ページ「[新規 SiteScope グループ]ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p>

メニュー項目	詳細
貼り付け	選択した(事前にコピーまたは切り取った)SiteScope オブジェクトを SiteScope ノードに貼り付けます。
別の SiteScope から貼り付ける	このメニュー項目は、複数の SiteScope が BSM に接続されている場合に SAM 管理からのみ使用できます。別の SiteScope から選択した(事前にコピーまたは切り取った)SiteScope オブジェクトを SiteScope ノードに貼り付けます。
[レポート] > [管理/クイック/モニタ/警告]	定義する SiteScope レポートのタイプを選択できる。これらのレポートの詳細については、 1273ページ「SiteScope レポート」 を参照してください。 注 :モニタおよび契約レガシー・レポートは、 showlegacyReports が[プリファレンス] > [インフラストラクチャ プリファレンス] > [カスタム設定]で true に設定された場合も、このメニューに表示されます。
レポート > サーバ中心	モニタの[サーバ中心のレポートを有効化]チェックボックスが選択されているという条件のもとで、Microsoft Windows リソースまたは Unix リソースによってリモート・サーバについてサーバ中心のレポートを作成することができます。詳細については、 1104ページ「サーバ中心のレポートの生成」 を参照してください。
[レポート] > [BSM 設定変更レポート]	このメニュー項目は、SiteScope が BSM に接続されている場合に SAM 管理からのみ使用できます。BSM の設定変更のログが表示されます。詳細については、 1275ページ「SiteScope のレポート・タイプ」 を参照してください。
ツール	特定のモニタの設定または編集時に利用可能です(SiteScope の管理者、または「モニタ・ツールを使用」権限を付与されたユーザのみ)。ツールが利用可能な場合には、クリックしてツールを開きモニタの既存のデータを入力として実行します。テスト結果は[結果]表示枠に表示されます。利用可能なツールの詳細については、 139ページ「SiteScope ツールの概要」 を参照してください。

グループのショートカット・メニュー・オプション

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

メニュー項目	詳細
ベースライン設定	<p>グループ内のすべてのモニタで、応答時間の変動やインフラストラクチャのパフォーマンスの監視に使用するベースラインを作成できる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 計算 : グループからモニタを選択し、ベースラインの計算に使用する関連時間とスケジュールを指定できます。また、ベースラインの順守レベルを選択、微調整し、境界を定義できます。 ● レビューと有効化 : グループの計算したモニタとベースライン・データのサマリを表示します。現在のモニタ設定の保存、失敗した操作の表示と再試行、ベースライン測定値グラフの表示、ベースライン設定の適用もできます。 ● 削除 : ベースラインしきい値を削除、またはベースラインを計算した後に再計算できる。 ● 状態レポート : グループ内のすべてのモニタのベースラインの状態に関する情報を表示します。 <p>このトピックの詳細については、335ページ「ベースラインを使った状態しきい値の設定」を参照してください。</p>
コピー	<p>グループとその内容(モニタ、警告、レポート)をモニタ・グループまたはテンプレートにコピーする。</p> <p>注 : ベースラインしきい値が設定されているモニタを含むグループをコピーすると、ベースラインしきい値は静的しきい値(現在のパーセンタイル値)に置換され、モニタはベースライン・モードではなくなります。</p>
別の SiteScope にコピーする	<p>このメニュー項目は、複数の SiteScope が BSM に接続されている場合に SAM 管理からのみ使用できます。別の SiteScope のグループとその内容(モニタ、警告、レポート)を SiteScope ノードのモニタ・グループまたはテンプレートにコピーします。</p> <p>注 : 依存関係のある複数のモニタをほかの SiteScope にコピーする場合、モニタ間の依存関係を保持する必要がある場合は、グループ・コンテナと一緒にそれらをコピーする必要があります。</p>
テンプレートにコピー	<p>グループとその内容(モニタ、警告、レポート)をテンプレート・グループにコピーする。このトピックの詳細については、847ページ「既存の設定のコピーによるテンプレートの作成方法」を参照してください。</p>
切り取り	<p>グループとその内容(モニタ、警告、レポート)またはモニタとその内容(警告とレポート)をモニタ・グループに移動する。</p> <p>注 : ベースラインしきい値が設定されているモニタを含むグループを移動すると、ベースラインしきい値は静的しきい値(現在のパーセンタイル値)に置換され、モニタはベースライン・モードではなくなります。</p>

メニュー項目	詳細
削除	<p>グループを削除する。</p> <p>注 :コンテナ・レベルで依存する警告またはレポートがある場合、グループは削除できません。依存関係があるグループを削除するには、各依存関係の[警告ターゲット]と[レポートのターゲット]からグループを削除してから、グループを削除する必要があります。子レベルの依存関係があるグループは削除できます。</p>
テンプレートのデプロイ	<p>グループにデプロイするテンプレートを選択できる[テンプレートの選択]ダイアログ・ボックスを開く。ユーザ・インタフェースの詳細については、397ページ「[テンプレートの選択]ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p>
CSVを使用してテンプレートをデプロイ	<p>CSVファイルを使用してグループにデプロイするテンプレートを選択できる[テンプレートの選択]ダイアログ・ボックスを開く。ユーザ・インタフェースの詳細については、397ページ「[テンプレートの選択]ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p>
モニタの有効化/無効化	<p>モニタ・プロパティの設定に関係なく、グループ内のモニタを有効化または無効化する[グループ内のモニタの有効化/無効化]ダイアログ・ボックスを開きます。[モニタを無効化]を選択すると、このダイアログ・ボックスに戻って[モニタを有効化]を選択するまでモニタは無効になります。[グループ内のモニタの有効化/無効化]のユーザ・インタフェースの詳細については、1101ページ「[グループ内のモニタの有効化 / 無効化]ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p>
すべて展開	<p>グループの下のすべてのサブツリーを開く。</p>
グローバル検索と置換	<p>[グローバル検索と置換]ウィザードを開く。このウィザードでは、モニタ、警告、グループ、プリファレンス、警告アクション、レポートのプロパティのグローバル検索と置換を実行できます。このトピックの詳細については、127ページ「[グローバル検索と置換]ウィザード」を参照してください。</p>
モニタ・デプロイメント・ウィザード	<p>このメニュー項目は、BSMのSAM管理からSiteScopeにアクセスするユーザのみが使用できる。[モニタデプロイメントウィザード]が開きます。このトピックの詳細については、BSMヘルプの『システム可用性管理の使用』の「モニタ・デプロイメント・ウィザード」を参照してください。</p>
[新規作成]>[警告]	<p>グループの新しい警告を定義できる[新規警告]ウィンドウを開く。このトピックの詳細については、1203ページ「SiteScope 警告」を参照してください。</p>
[新規作成]>[グループ]	<p>新しいSiteScopeグループを定義できる[新規グループ]ウィンドウを開く。ユーザ・インタフェースの詳細については、315ページ「[新規 SiteScope グループ]ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p>
[新規作成]>[モニタ]	<p>新しいSiteScopeモニタを定義できる[新規モニタ]ウィンドウを開く。ユーザ・インタフェースの詳細については、365ページ「新規モニタ・ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p>

メニュー項目	詳細
貼り付け	選択したグループとその内容(モニタ、警告、レポート)またはモニタとその内容(警告とレポート)を指定したモニタ・グループに貼り付ける。
別の SiteScope から貼り付ける	このメニュー項目は、複数の SiteScope が BSM に接続されている場合に SAM 管理からのみ使用できます。別の SiteScope から選択したグループとその内容(モニタ、警告、レポート)またはモニタとその内容(警告とレポート)を指定したモニタ・グループに貼り付けます。
[レポート] > [管理/クイック/モニタ/警告]	定義する SiteScope レポートのタイプを選択できる。このトピックの詳細については、 1273ページ「SiteScope レポート」 を参照してください。 注 :モニタおよび契約レガシー・レポートは、 showlegacyReports が[プリファレンス] > [インフラストラクチャ プリファレンス] > [カスタム設定]で true に設定された場合も、このメニューに表示されます。
レポート > サーバ中心	モニタの[サーバ中心のレポートを有効化]チェックボックスが選択されているという条件のもとで、指定されたモニタ・グループ内の Microsoft Windows リソースまたは Unix リソース・モニタによってモニタされているリモート・サーバについてサーバ中心のレポートを作成することができます。詳細については、 1104ページ「サーバ中心のレポートの生成」 を参照してください。
モニタの実行	グループ内に設定されている任意のモニタを実行し、結果を表示する情報ウィンドウを開く。

モニタのショートカット・メニュー・オプション

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

メニュー項目	詳細
ベースライン設定	<p>特定のモニタの応答時間の変動やインフラストラクチャのパフォーマンスの監視に使用するベースラインを作成できる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 計算 : モニタを選択し、ベースラインの計算に使用する関連時間とスケジュールを指定する。また、ベースラインの順守レベルを選択、微調整し、境界を定義できます。 ● レビューと有効化 : モニタとベースラインの算出データのサマリを表示する。現在のモニタ設定の保存、失敗した操作の表示と再試行、ベースライン測定値グラフの表示、ベースライン設定の適用もできます。 ● 削除 : ベースラインしきい値を削除、またはベースラインを計算した後に再計算できる。 ● 状態レポート : モニタのベースラインの状態に関する情報を表示します。 <p>このトピックの詳細については、335ページ「ベースラインを使った状態しきい値の設定」を参照してください。</p>

メニュー項目	詳細
コピー	<p>モニタとその内容(警告とレポート)をモニタ・グループまたはテンプレートにコピーする。</p> <p>注 : ベースラインしきい値が設定されているモニタをコピーすると、ベースラインしきい値は静的しきい値(現在のパーセンタイル値)に置換され、モニタはベースライン・モードではなくなります。</p>
別の SiteScope にコピーする	<p>このメニュー項目は、複数の SiteScope が BSM に接続されている場合に SAM 管理からのみ使用できます。別の SiteScope のモニタとその内容(警告とレポート)をモニタ・グループまたはテンプレートにコピーします。</p> <p>注 : 依存関係のある複数のモニタをほかの SiteScope にコピーする場合、モニタ間の依存関係を保持する必要がある場合は、グループ・コンテナで一緒にそれらをコピーする必要があります。</p>
テンプレートにコピー	<p>モニタとその内容(警告とレポート)をテンプレート・グループにコピーする。このトピックの詳細については、847ページ「既存の設定のコピーによるテンプレートの作成方法」を参照してください。</p>
切り取り	<p>モニタとその内容(警告とレポート)をモニタ・グループに移動する。</p> <p>注 : ベースラインしきい値が設定されているモニタを移動すると、ベースラインしきい値は静的しきい値(現在のパーセンタイル値)に置換され、モニタはベースライン・モードではなくなります。</p>
削除	<p>モニタを削除する。</p> <p>注 : モニタにコンテナ・レベルで依存する警告またはレポートがある場合、そのモニタは削除できません。依存関係があるモニタを削除するには、各依存関係の[警告ターゲット]と[レポートのターゲット]からモニタを削除してから、モニタを削除する必要があります。子レベルの依存関係があるモニタは削除できます。</p>
モニタの有効化/無効化	<p>モニタ・プロパティの設定に関係なく、モニタを有効化または無効化する[グループ内のモニタの有効化/無効化]ダイアログ・ボックスを開きます。[無効化]を選択すると、このダイアログ・ボックスに戻って[有効化]を選択するまでモニタは無効になります。[グループ内のモニタの有効化/無効化]のユーザ・インタフェースの詳細については、1101ページ「[グループ内のモニタの有効化 / 無効化]ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p>
グローバル検索と置換	<p>[グローバル検索と置換]ウィザードを開く。このウィザードでは、モニタ、警告、グループ、プリファレンス、警告アクション、レポートのプロパティのグローバル検索と置換を実行できます。このトピックの詳細については、127ページ「[グローバル検索と置換]ウィザード」を参照してください。</p>
[新規作成]>[警告]	<p>モニタの新しい警告を定義できる[新規警告]ウィンドウを開く。このトピックの詳細については、1203ページ「SiteScope 警告」を参照してください。</p>
貼り付け	<p>選択したモニタのコンテキスト・オブジェクトを指定したモニタに貼り付ける。</p>

メニュー項目	詳細
別の SiteScope から貼り付ける	このメニュー項目は、複数の SiteScope が BSM に接続されている場合に SAM 管理からのみ使用できます。別の SiteScope から選択したモニタのコンテキスト・オブジェクトを指定したモニタに貼り付けます。
[レポート] > [管理/クイック/モニタ/警告]	定義する SiteScope レポートのタイプを選択できる。このトピックの詳細については、 1273ページ「SiteScope レポート」 を参照してください。 注: モニタおよび契約レガシー・レポートは、 <code>showlegacyReports</code> が [プリファレンス] > [インフラストラクチャ プリファレンス] > [カスタム設定] で <code>true</code> に設定された場合も、このメニューに表示されます。
レポート > サーバ中心	モニタの [サーバ中心のレポートを有効化] チェックボックスが選択されているという条件のもとで、Microsoft Windows リソースまたは Unix リソース・モニタによってリモート・サーバについてサーバ中心のレポートを作成することができます。詳細については、 1104ページ「サーバ中心のレポートの生成」 を参照してください。
モニタの実行	モニタを実行し、結果を表示する情報ウィンドウを開く。

[SiteScope の状況] のショートカット・メニュー・オプション

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

メニュー項目	詳細
ログ記録の無効化	日次ログ・ファイルへの SiteScope サーバ状況データのログを無効にします。SiteScope サーバの状況の詳細は、 1114ページ「SiteScope サーバの状況」 を参照してください。
ログ記録の有効化	日次ログ・ファイルへの SiteScope サーバ状況データのログを有効にします。SiteScope サーバの状況の詳細は、 1114ページ「SiteScope サーバの状況」 を参照してください。
すべて展開	SiteScope 状況の下すべてのサブツリーを開く。
[新規作成] > [警告]	状況の新しい警告を定義できる [新規警告] ウィンドウを開く。このトピックの詳細については、 1203ページ「SiteScope 警告」 を参照してください。
[新規作成] > [グループ]	新しい SiteScope グループを定義できる [新規グループ] ウィンドウを開く。ユーザ・インタフェースの詳細については、 315ページ「[新規 SiteScope グループ] ダイアログ・ボックス」 を参照してください。
[新規作成] > [モニタ]	新しい SiteScope モニタを定義できる [新規モニタ] ウィンドウを開く。ユーザ・インタフェースの詳細については、 365ページ「新規モニタ・ダイアログ・ボックス」 を参照してください。
貼り付け	モニタおよびモニタ・グループを状況コンテナに貼り付ける。

メニュー項目	詳細
欠落している状況モニタの再作成	状況コンテナから削除された状況モニタを復元できる。
レポート	定義する SiteScope レポートのタイプを選択できる。このトピックの詳細については、 1273 ページ「SiteScope レポート」 を参照してください。
モニタの実行	状況モニタを実行し、結果を表示する情報ウィンドウを開く。



リモート・サーバ・ツリー

リモート・サーバ・ツリーは、ネットワーク環境内に設定されているリモート・サーバを表します。「ショートカット・メニュー・オプション」では、リモート・サーバ・ツリーの各オブジェクトで利用できるショートカット・メニュー・オプションについて説明します。

アクセス方法	[リモート サーバ] コンテキストを選択する。リモート・サーバ・ツリーが左側の表示枠に表示されます。
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> 523 ページ「リモート・サーバを使った作業」 533 ページ「リモート・サーバのプロパティ・ページ」

リモート・サーバ・ツリー・オブジェクト

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
	リモート・サーバ・ビューの Windows/UNIX リモート・サーバ・コンテナを表します。
	<p>Windows / UNIX リモート・サーバを表します。</p> <p>親 : Windows / UNIX リモート・サーバ・コンテナ。</p> <p>追加方法 : Windows / UNIX リモート・サーバ・コンテナまたはテンプレート・ツリーで作成する。</p>

リモート・サーバのショートカット・メニュー・オプション

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

メニュー項目	詳細
新規 Microsoft Windows/UNIX リモート・サーバ	新規 Microsoft Windows サーバまたは UNIX サーバを定義できる新規サーバ・ウィンドウを開く。

リモート・サーバのショートカット・メニュー・オプション

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

メニュー項目	詳細
テンプレートにコピー	リモート・サーバをテンプレート・グループにコピーする。このトピックの詳細については、 847ページ「既存の設定のコピーによるテンプレートの作成方法」 を参照してください。
削除	リモート・サーバを削除する。
詳細テスト	リモート・ホストで実行中のコマンドをテストし、定義されたユーザの権限を確認できる。UNIX サーバでのみ使用できます。
テスト	リモート・サーバへの接続をテストできる。



テンプレート・ツリー











テンプレート・ツリーには、ユーザ定義テンプレート、SiteScope ソリューション・テンプレート・セット、テンプレート例、および、モニタ・グループがデプロイに使用できる[モニタ デプロイメント ウィザード]テンプレートが表示されます。「ショートカット・メニュー・オプション」では、テンプレート・ツリーの各オブジェクトで使用するショートカット・メニュー・オプションについて説明します。

アクセス方法	[テンプレート]コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーが左側の表示枠に表示されます。
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> 825ページ「SiteScope テンプレート」 927ページ「SiteScope ソリューション・テンプレート」 850ページ「[SiteScope テンプレート] ページ」 852ページ「テンプレート・ツリー - [警告] タブ」

テンプレート・ツリー・オブジェクト

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
 SiteScope	<p>個々の SiteScope サーバを表します。</p> <p>親: エンタープライズ・ノードまたはコンテナ。</p> <p>ツリーへの追加方法: 空の SiteScope プロファイルをインポートまたは追加します。</p>
	<p>ソリューション・テンプレート・コンテナを表します(利用可能/利用不可)。利用可能アイコンのあるライセンスが供与されたソリューション・テンプレートのみを設定できます。</p> <p>親: SiteScope。</p>

UI 要素	詳細
	<p>テンプレート・コンテナを表します。テンプレート・コンテナは、デプロイメントの設定テンプレートの整理に使用されます。</p> <p>親 : SiteScope。</p> <p>テンプレート・ツリーへの追加方法 : テンプレート・コンテナが定義されている SiteScope を使用して作成またはインポートします。</p>
	<p>SiteScope オブジェクトのデプロイ用のテンプレート設定を表します。</p> <p>親 : テンプレート・コンテナ。</p> <p>テンプレート・ツリーへの追加方法 : 作成。</p>
	<p>SiteScope テンプレート・グループまたはサブグループ(モニタが有効/モニタなしまたはモニタが無効)を表します。</p> <p>警告がテンプレート・グループまたはサブグループに設定されている場合、グループ・アイコンの横に警告  記号が表示されます。</p> <p>管理レポートがテンプレート・グループまたはサブグループに設定されている場合、グループ・アイコンの横にレポート  記号が表示されます。</p> <p>親 : テンプレート。</p> <p>ツリーへの追加方法 : テンプレート・グループが定義されている SiteScope を使用して作成またはインポートします。</p>
	<p>SiteScope テンプレート・モニタを表します(有効/無効)。</p> <p>警告がテンプレート・モニタに設定されている場合、モニタ・アイコンの横に警告  記号が表示されます。</p> <p>管理レポートがテンプレート・モニタに設定されている場合、モニタ・アイコンの横にレポート  記号が表示されます。</p> <p>親 : テンプレート・グループ、テンプレート・サブグループ、テンプレート、またはソリューション・テンプレート。</p> <p>ツリーへの追加方法 : テンプレート・モニタが設定されている SiteScope を使用して作成またはインポートする。</p>
	<p>Windows / UNIX リモート・サーバを表します。</p> <p>親 : テンプレート。</p> <p>追加方法 : リモート・サーバ・ツリーまたはテンプレート・ツリーで作成する。</p>
	<p>テンプレートのデプロイ時に入力を促すプレースホルダとして使用する変数を表します。</p> <p>親 : テンプレート。</p> <p>テンプレート・ツリーへの追加方法 : 作成。</p>

[SiteScope] のルート・ショートカット・メニュー・オプション

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

メニュー 項目	詳細
すべて 展開	SiteScope の下のすべてのサブツリーを開きます。
インポート	[Content Import] ダイアログ・ボックスを開き、テンプレート・ファイルのインポートを有効にするか、または、コンテンツ・パッケージを開き、1 つ以上のテンプレートとそれらの依存関係を保存します(templates.os ファイル、.jar ファイル、.conf ファイルなど)。詳細については、 873 ページ「[内容のインポート] ダイアログ・ボックス」 を参照してください。
[新規作成] > [テンプレート コンテナ]	新しいテンプレート・コンテナを定義できる[新規テンプレート コンテナ] ウィンドウを開きます。
貼り付け	SiteScope ルートの下 のテンプレート・コンテナを貼り付けます。

ソリューション・テンプレート・コンテナのショートカット・メニュー・オプション

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

メニュー 項目	詳細
すべて 展開	コンテナ内のすべてのソリューション・テンプレートを表示するように、ソリューション・テンプレート・コンテナを展開します。

ソリューション・テンプレートのショートカット・メニュー・オプション

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

メニュー 項目	詳細
コピー	ソリューション・テンプレートをコピーします。テンプレート・ツリーのテンプレート・コンテナにソリューション・テンプレートを貼り付けられます。
テンプレートのデ プロイ	ソリューション・テンプレートをデプロイするグループを選択できる[グループの選択] ダイアログ・ボックスが開きます。ユーザ・インタフェースの詳細については、 883 ページ「[グループの選択] ダイアログ・ボックス」 を参照してください。

メニュー 項目	詳細
CSV を 使用し てテン プレー トをデ プロイ	CSV ファイルを使用してテンプレートをデプロイするグループを選択できる[グループの選択]ダイアログ・ボックスを開きます。ユーザ・インタフェースの詳細については、 883ページ「[グループの選択]ダイアログ・ボックス」 を参照してください。
すべて 展開	コンテナ内のすべてのソリューション・テンプレートを表示するように、ソリューション・テンプレート・コンテナを展開します。
XML の生成	ソリューション・テンプレートを自動的にデプロイするために使用する XML ファイルを作成できる自動デプロイメント XML の生成ウィンドウを開きます。このトピックの詳細については、 904ページ「自動テンプレート・デプロイメント」 を参照してください。ユーザ・インタフェースの詳細については、 923ページ「[自動デプロイメント XML の生成] ユーザ・インタフェース」 を参照してください。

テンプレート・コンテナのショートカット・メニュー・オプション

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

メニュー 項目	詳細
コピー	テンプレート・コンテナとその内容をコピーします。SiteScope ルートの下 のテンプレート・コンテナ、またはテンプレート・ツリー内で選択したテンプレート・コンテナを貼り付けられます。
切り取り	テンプレート・コンテナとその内容を移動します。SiteScope ルートの下 のテンプレート・コンテナ、またはテンプレート・ツリー内で選択したテンプレート・コンテナを貼り付けられます。
削除	テンプレート・コンテナを削除します。
テンプレートの デプロイ	1 つまたは複数のテンプレートをデプロイするグループを選択できる[グループの選択]ダイアログ・ボックスが開きます。ユーザ・インタフェースの詳細については、 883ページ「[グループの選択]ダイアログ・ボックス」 を参照してください。
すべて 展開	コンテナ内のすべてのテンプレート・オブジェクトを表示するように、テンプレート・コンテナを展開します。
エクスポート	テンプレート・ファイルをエクスポートできるテンプレートのエクスポート・ウィンドウを開きます。
XML の 生成	コンテナ内のテンプレートを自動的にデプロイするために使用する XML ファイルを作成できる自動デプロイメント XML の生成ウィンドウを開きます。

メニュー項目	詳細
インポート	[Content Import] ダイアログ・ボックスを開き、テンプレート・ファイルのインポートを有効にするか、または、コンテンツ・パッケージを開き、1つ以上のテンプレートとそれらの依存関係を保存します(templates.os ファイル, .jar ファイル, .conf ファイルなど)。詳細については、 873ページ「[内容のインポート] ダイアログ・ボックス」 を参照してください。
[新規作成] > [テンプレート]	新しいテンプレートを定義できる[新規テンプレート]ウィンドウを開きます。
[新規作成] > [テンプレート コンテナ]	新しいテンプレート・コンテナを定義できる[新規テンプレート コンテナ]ウィンドウを開きます。
貼り付け	テンプレートまたはテンプレート・コンテナをテンプレート・コンテナに貼り付けます。

テンプレートのショートカット・メニュー・オプション

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

メニュー項目	詳細
コピー	テンプレートとその内容をコピーします。テンプレートを、テンプレート・ツリー内のテンプレート・コンテナに貼り付けられます。
切り取り	テンプレートとその内容を移動します。テンプレートを、テンプレート・ツリー内のテンプレート・コンテナに貼り付けられます。
削除	テンプレートを削除します。
テンプレートのデプロイ	テンプレートをデプロイするグループを選択できる[グループの選択]ダイアログ・ボックスを開きます。ユーザ・インタフェースの詳細については、 883ページ「[グループの選択] ダイアログ・ボックス」 を参照してください。
CSV を使用してテンプレートをデプロイ	CSV ファイルを使用してテンプレートをデプロイするグループを選択できる[グループの選択]ダイアログ・ボックスを開きます。ユーザ・インタフェースの詳細については、 883ページ「[グループの選択] ダイアログ・ボックス」 を参照してください。
すべて展開	テンプレートのすべてのサブツリーを開きます。

メニュー項目	詳細
エクスポート	テンプレート・ファイルをエクスポートできるテンプレートのエクスポート・ウィンドウを開きます。
OM にエクスポート	<p>テンプレートを Operations Manager(HPOM)にエクスポートします。HPOM のポリシーの割り当てとデプロイメントを通じて SiteScope のテンプレートとモニタを設定できます。詳細については、256ページ「HPOM からのテンプレートの中央管理」を参照してください。</p> <p>注 :このメニュー・オプションは、次の場合だけ使用できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> HPOM および SiteScope が同じマシンにインストールされていて、SiteScope がサポートされているバージョンの HPOM に接続されている。この SiteScope リリースでサポートされている HPOM バージョンについては、SiteScope リリース・ノート (SiteScope で[ヘルプ] > [What's New?]を選択)で、「HP Operations Manager (HPOM)統合 サポート・マトリックスおよび共存 サポート」のテーブルを参照してください。 HP Operations Agent は、SiteScope サーバにインストールされます。SiteScope のインストール中かまたは SiteScope 設定ツールを使用してインストールできます。詳細については、『HP SiteScope デプロイメント・ガイド』の「SiteScope のインストール」または「SiteScope 設定ツールの使用」を参照してください。 HP Operations Manager 統合は SiteScope で設定され、HP Operations Manager 統合メイン設定で[HP Operations Manager へのテンプレートのエクスポートを有効にする]チェック・ボックスが選択されます。
[新規作成] > [グループ]	<p>新しいテンプレート・グループを定義できる新規グループ・ウィンドウを開きます。ユーザ・インタフェースの詳細については、315ページ「[新規 SiteScope グループ]ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p> <p>注 :このメニュー項目は、テンプレート・グループにテンプレートが含まれていない場合にだけ使用できます。</p>
[新規作成] > [UNIX サーバ]	<p>新しいリモート UNIX テンプレートを定義できる[新規 UNIX リモート サーバ]ウィンドウを開きます。</p> <p>注 :このメニュー項目は、テンプレートにリモート・サーバが含まれていない場合にのみ使用できます。</p>
[新規作成] > [変数]	新しいテンプレート変数を定義できる [新規変数] ウィンドウを開きます。
[新規作成] > [Microsoft Windows サーバ]	<p>新しいリモート Windows テンプレートを定義できる[新規 Microsoft Windows リモート サーバ]ウィンドウを開きます。</p> <p>注 :このメニュー項目は、テンプレートにリモート・サーバが含まれていない場合にのみ使用できます。</p>
貼り付け	テンプレートにテンプレート・グループ、モニタ、または警告を貼り付けます。

メニュー項目	詳細
変更の適用	テンプレート変更適用ウィザードが開き、デプロイしたグループのテンプレート・コンプライアンスをチェックします。また、テンプレートを更新するたびにテンプレートによってデプロイされる SiteScope オブジェクトを更新できます。

テンプレート変数のショートカット・メニュー・オプション

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

メニュー項目	詳細
コピー	テンプレート変数をコピーします。テンプレート変数を、テンプレート・ツリー内のテンプレートに貼り付けられます。
切り取り	テンプレート変数を移動します。テンプレート変数を、テンプレート・ツリー内のテンプレートに貼り付けられます。
削除	テンプレート変数を削除します。

テンプレート・リモートのショートカット・メニュー・オプション

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

メニュー項目	詳細
コピー	テンプレート・リモート・サーバをコピーします。テンプレート・リモート・サーバを、テンプレート・ツリー内のテンプレートに貼り付けられます。 注 : 1 つのテンプレートに追加できるのは 1 つのテンプレート・リモート・サーバのみです。これは、古いバージョンの SiteScope で作成されたテンプレートには適用されません。
切り取り	テンプレート・リモート・サーバを移動します。テンプレート・リモート・サーバを、テンプレート・ツリー内のテンプレートに貼り付けられます。 注 : 1 つのテンプレートに追加できるのは 1 つのテンプレート・リモート・サーバのみです。これは、古いバージョンの SiteScope で作成されたテンプレートには適用されません。
削除	テンプレート・リモートを削除します。

テンプレート・グループのショートカット・メニュー・オプション

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

メニュー項目	詳細
コピー	テンプレート・グループとその内容(モニタ、警告、およびサブグループ)をコピーします。テンプレート・グループを、テンプレート・ツリー内のテンプレートに貼り付けられます。

メニュー項目	詳細
切り取り	テンプレート・グループとその内容(モニタ, 警告, およびサブグループ)を移動します。テンプレート・グループを, テンプレート・ツリー内のテンプレートに貼り付けられます。
削除	テンプレート・グループを削除します。
すべて展開	テンプレート・グループのすべてのサブツリーを開きます。
[新規作成]>[警告]	テンプレート・グループの新しい警告を定義できる[新規警告]ウィンドウを開きます。このトピックの詳細については, 1203ページ「SiteScope 警告」 を参照してください。
[新規作成]>[グループ]	新しいテンプレート・サブグループを定義できる[新規グループ]ウィンドウを開きます。ユーザ・インタフェースの詳細については, 315ページ「[新規 SiteScope グループ]ダイアログ・ボックス」 を参照してください。
[新規作成]>[モニタ]	テンプレート・グループの新しい SiteScope モニタを定義できる新規モニタ・ウィンドウを開きます。ユーザ・インタフェースの詳細については, 365ページ「新規モニタ・ダイアログ・ボックス」 を参照してください。
貼り付け	選択したテンプレート・グループとその内容(モニタ, 警告, およびサブグループ)をテンプレートに貼り付けます。

テンプレート・モニタのショートカット・メニュー・オプション

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

メニュー項目	詳細
コピー	テンプレート・モニタとその内容(警告)をコピーします。テンプレート・モニタを, テンプレート・ツリー内のテンプレート・グループに貼り付けられます。
切り取り	テンプレート・モニタとその内容(警告)を移動します。テンプレート・モニタを, テンプレート・ツリー内のテンプレート・グループに貼り付けられます。
削除	テンプレート・モニタを削除します。
[新規作成]>[警告]	テンプレート・モニタの新しい警告を定義できる[新規警告]ウィンドウを開きます。このトピックの詳細については, 1203ページ「SiteScope 警告」 を参照してください。
貼り付け	選択したテンプレート・モニタとその内容(警告)をテンプレート・グループに貼り付けます。

プリファレンス・メニュー

プリファレンス・メニューは, SiteScope で使用できる大部分の管理タスクに関連する特定のプロパティと設定を設定できるプリファレンス・タイプを表します。

アクセス方法	[プリファレンス]コンテキストを選択します。[プリファレンス]メニュー・オプションが左側の表示枠に表示されます。
重要な情報	管理者、または「<プリファレンス・タイプ>の編集」権限を付与されたユーザのみが、SiteScope プリファレンスを作成または変更できます。ユーザ権限の詳細については、 773ページ「ユーザ管理 プリファレンスの概要」 を参照してください。

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
<プリファレンスのタイプ>	<ul style="list-style-type: none"> ● 証明書管理 : 各証明書で操作を変更した後に SiteScope を再起動せずに、サーバの証明書の追加と削除、およびキーストアの読み込みを行うために使用します。詳細については、600ページ「証明書管理」を参照してください。 ● 共通イベント・マッピング : SiteScope ランタイム・データと、HPOM / BSM サーバに送信されるイベント属性値間のイベント・マッピング・インスタンスを作成するために使用します。詳細については、607ページ「共通イベント・マッピング」を参照してください。 ● 資格情報のプリファレンス : SiteScope リソースの資格情報の作成と管理に使用します。詳細については、619ページ「資格情報のプリファレンス」を参照してください。 ● 電子メール・プリファレンス : SiteScope 電子メール警告と状態レポートに使用される、電子メール・サーバの設定とプロファイルの定義に使用します。詳細については、629ページ「電子メール・プリファレンス」を参照してください。 ● 一般プリファレンス : 標準と任意指定の SiteScope ライセンス・キーの入力、表示機能の制御、セキュリティ・オプションの設定など、設定後のタスクの実行に使用します。詳細については、637ページ「一般プリファレンス」を参照してください。 ● HTTP プリファレンス : 一般イベント統合を使用して管理コンソールにイベント・データを送信するとき、SiteScope で使用する設定の定義に使用します。詳細については、658ページ「HTTP プリファレンス」を参照してください。 ● 高可用性プリファレンス : SiteScope Failover の動作の設定、システムに障害が発生した場合、または一時的にサービスが停止している場合、SiteScope システムの機能を自動的に担うように設計された SiteScope の別々のインストールを設定するために使用されます。詳細については、647ページ「高可用性プリファレンス」を参照してください。 ● インフラストラクチャ・プリファレンス : SiteScope でグローバル設定の値の定義に使用します。詳細については、667ページ「インフラストラクチャ・プリファレンス」を参照してください。 ● 統合プリファレンス : SiteScope を BSM のデータ・コレクタとして設定するために使用します。詳細については、696ページ「統合プリファレンス」を参照してください。 ● ログ・プリファレンス : モニタのデータ・ログの累積と保管の制御に使用します。詳細については、737ページ「ログ・プリファレンス」を参照してください。 ● ページャ・プリファレンス : SiteScope でのページャ警告の送信に使用する設定と追加のページャ・プロファイルの設定に使用します。詳細については、745ページ「ページャ・プリファレンス」を参照してください。 ● SNMP プリファレンス : 管理コンソールへのデータ送信時に SiteScope SNMPトラップ警告で使用する設定の定義に使用します。詳細については、763ページ「SNMP プリファレンス」を参照してください。 ● スケジュール・プリファレンス : SiteScope モニタと警告の操作を、特定の時間でのみ、または特定の期間中のみ実行するようにカスタマイズするために使用します。詳細については、752ページ「スケジュール・プリファレンス」を参照してください。
97 / 1324 ページ	<div style="text-align: right;">HP SiteScope (11.20)</div> <ul style="list-style-type: none"> ● タグの検索 / フィルタ : SiteScope で定義されたタグの検索 / フィルタの管理に使用します。コンテキスト・ツリーとプリファレンス・プロファイルの1つ以

[サーバ統計]メニュー

[サーバ統計]メニューでは、いくつかの主要な SiteScopeサーバのパフォーマンス統計の概要を表示できます。このコンテキストには、SiteScope サーバの負荷、実行中のモニタや最近実行されたモニタのリスト、perfex プールのサマリおよび統計、WMI 統計、SSH 接続、Telnet 接続、ダイナミック・モニタリング統計が含まれます。また、SiteScope ログ・ファイルも表示されます。

アクセス方法	[サーバ統計]コンテキストを選択します。[サーバ統計]メニューのオプションが左側の表示枠に表示されます。
重要な情報	管理者、または「サーバ統計の表示」権限を付与されたユーザのみが、モニタ・パフォーマンス・データのページを表示できます。ユーザ権限の詳細については、 773ページ「ユーザ管理プリファレンスの概要」 を参照してください。
関連タスク	1150ページ「SiteScope サーバ統計の分析方法」
関連情報	1145ページ「サーバ統計の使用」


ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
<メ ニュー オブ ション>	<p>SiteScope で利用可能なモニタ・パフォーマンス・データ・オプションは次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● ダイナミック・モニタリング統計 : ダイナミック・モニタリング・メカニズムを使用してダイナミック・モニタリングのカウンタとしきい値を自動的に更新する時に統計が表示されます。ユーザ・インタフェースの詳細については、1188ページ「[ダイナミック モニタリング] ページ」を参照してください。 ● 一般 : SiteScope サーバの統計を表示します。SiteScope サーバの負荷(実行中モニタ数、待機中モニタ数、実行モニタ数/分)、タイプごとの実行中モニタ数のリストが含まれます。詳細については、1190ページ「[一般] ページ」を参照してください。 ● ログ・ファイル : SiteScope のパフォーマンスの問題の理解、モニタと警告の問題のトラブルシューティング、SiteScope の管理アクションの確認に役立つ、SiteScope のログ・ファイルのリストを表示します。ユーザ・インタフェースの詳細については、1191ページ「[ログファイル] ページ」を参照してください。 ● Perfex プロセス・プール : プロセス・マネージャ・サマリ、各プールのプール統計と状態テーブルを表示します。詳細については、1194ページ「[Perfex プロセスプール] ページ」を参照してください。 ● 実行中のモニタ数 : 実行中の SiteScope モニタ、最近実行されたモニタ、実行された時間、実行で返された状態のリストを表示します。詳細については、1196ページ「[実行中のモニタ数] ページ」を参照してください。 ● SSH 接続 : リモート UNIX または Windows サーバへの接続にセキュア・シェル(SSH)を使用した場合の SSH 統計と SSH 接続のサマリを表示します。詳細については、1197ページ「[SSH 接続] ページ」を参照してください。 ● Telnet 接続 : リモート UNIX または Windows サーバへの接続に Telnet を使用した場合の Telnet 統計を表示します。ユーザ・インタフェースの詳細については、1199ページ「[Telnet 接続] ページ」を参照してください。 ● WMI 統計 : Windows Management Instrumentation(WMI)統計のプロセス・マネージャ・サマリを表示します。詳細については、1200ページ「[WMI 統計] ページ」を参照してください。

[ツール]メニュー

[ツール]メニューには、SiteScope の問題のトラブルシューティングに役立ち、モニタ設定を容易にする診断ツールのリストが表示されます。

アクセス方法	[ツール]コンテキストを選択します。[ツール]メニューのオプションが左側の表示枠に表示されます。
--------	--

重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> 左側の表示枠の[ツール]コンテキストでツールを表示または使用するには、SiteScope の管理者、または「ツールを使用」権限を付与されたユーザーである必要があります。ユーザー権限の詳細については、773ページ「ユーザ管理プリファレンスの概要」を参照してください。 また、特定のモニタの設定または編集時にも、一部のツールが利用可能です(SiteScope の管理者、または「モニタ・ツールを使用」権限を付与されたユーザーのみ)。モニタの設定または編集時にツールが利用可能な場合、次の方法でツールにアクセスできます。 <ul style="list-style-type: none"> 新規モニタの設定時に新規モニタのダイアログ・ボックスで、または既存のモニタの設定時にモニタの[プロパティ 既存のモニタのテスト・ツールの実行中に、SiteScope ダッシュボードのツールバーで[ツール]ボタンをクリックします。この操作で、入力にモニタの既存のデータを使用したツールが開いて実行され、[結果]表示枠にテスト結果が表示されます。 SiteScope クライアントで SiteScope サーバと異なるマルチバイトのロケールを使用する場合の文字セットの問題を避けるには、<SiteScope ルート ディレクト>\groups\master.config ファイルの _httpCharset 設定の値を UTF-8 に設定します。標準設定では、_httpCharset の値は空で、標準設定のサーバのロケールが使用されます。
関連情報	139ページ「SiteScope ツールの概要」

含まれているツールは次のとおりです(ラベルのない要素は山括弧内に表示されます)。

UI 要素	詳細
アプリケーション・ツール	
Microsoft Windows Media Player ツール	Microsoft Windows Media Player のストリーミングをテストします。詳細については、 162ページ「Microsoft Windows Media Player ツール」 を参照してください。
ニュース・サーバ・ツール	ニュース・サーバが利用可能かどうかをチェックします。詳細については、 164ページ「ニュース・サーバ・ツール」 を参照してください。
Real Media Player ツール	Real Media Player のストリーミングをテストします。詳細については、 169ページ「Real Media Player ツール」 を参照してください。
共通ユーティリティ・ツール	
正規表現 ツール	監視する内容のサンプルに対して一致する内容の正規表現をテストします。詳細については、 170ページ「正規表現 ツール」 を参照してください。
XSL 変換 ツール	参照可能な XML モニタで監視する XML データのカスタム XSL 変換をテストします。詳細については、 191ページ「XSL 変換 ツール」 を参照してください。

UI 要素	詳細
ログ分析ツール	ログ・ファイル内のパターンを分析し、すべての定期パターンのリストを提供します。各パターンはログ・ファイル・モニタで使用する正規表現に転送できます。詳細については、 157ページ「ログ分析ツール」 を参照してください。
SiteScope ログ・グラバ・ツール	SiteScope のログ・ファイルや設定ファイルを取得、表示します。詳細については、 173ページ「SiteScope ログ・グラバ・ツール」 を参照してください。
データベース・ツール	
データベース接続ツール	JDBC または ODBC データベース接続の接続性と設定をチェックします。詳細については、 143ページ「データベース接続ツール」 を参照してください。
データベース情報ツール	製品とドライバのバージョン、SQL の互換性レベル情報、サポートされている SQL 関数などのデータベース・サーバ・メタデータを取得、表示します。詳細については、 146ページ「データベース情報ツール」 を参照してください。
LDAP 認証状態ツール	ユーザ認証を要求して LDAP サーバをテストします。詳細については、 154ページ「リンク・チェック・ツール」 を参照してください。
メール・ツール	
メールの送受信ツール	テスト・メッセージを送受信してメール・サーバをテストします。詳細については、 159ページ「メールの送受信ツール」 を参照してください。
ネットワーク・ツール	
DNS ツール	DNS サーバでドメイン名を解決できるかどうかをテストします。詳細については、 147ページ「DNS ツール」 を参照してください。
ネットワーク状態ツール	サーバのネットワーク・インタフェースの状態とアクティブな接続を表示します。詳細については、 163ページ「ネットワーク状態ツール」 を参照してください。 注: このツールは、UNIX プラットフォームにインストールされた SiteScope ではサポートされていません。
Ping ツール	ネットワーク全体で Ping の送受信テストを実行します。詳細については、 167ページ「Ping ツール」 を参照してください。
トレース・ルート・ツール	サーバから別の場所へのトレースルートを実行します。詳細については、 182ページ「トレース・ルート・ツール」 を参照してください。
オペレーティング・システム・ツール	
イベント・ログ・ツール	ローカルまたはリモート・サーバの Windows イベント・ログの一部を表示します。詳細については、 148ページ「イベント・ログ・ツール」 を参照してください。 注: このツールは、UNIX プラットフォームにインストールされた SiteScope ではサポートされていません。

UI 要素	詳細
パフォーマンス・カウンタ・ツール	Windows パフォーマンス・カウンタのレジストリへの接続性と値をチェックします。詳細については、 165ページ「パフォーマンス・カウンタ・ツール」 を参照してください。 注: このツールは、UNIX プラットフォームにインストールされた SiteScope ではサポートされていません。
プロセス・ツール	ローカルまたはリモート・サーバで現在実行中のプロセスのリストを表示します。詳細については、 168ページ「プロセス・ツール」 を参照してください。
サービス・ツール	現在実行中の Windows サービスのリストを表示します。詳細については、 172ページ「サービス・ツール」 を参照してください。 注: このツールは、UNIX プラットフォームにインストールされた SiteScope ではサポートされていません。
SNMP ツール	
SNMP ブラウザ・ツール	SNMP MIB を参照して利用可能な OID を表示します。詳細については、 175ページ「SNMP ブラウザ・ツール」 を参照してください。
SNMP ツール	指定した SNMP ホストに対して SNMP の get コマンドを実行して OID のリストを取得します。詳細については、 177ページ「SNMP ツール」 を参照してください。
SNMP トラップ・ツール	SNMP が利用可能なデバイスから SiteScope が受信した SNMP トラップのログを表示します。詳細については、 181ページ「SNMP トラップ・ツール」 を参照してください。
Web ツール	
FTP ツール	FTP サーバの可用性と、ファイルを取得可能かどうかをチェックします。詳細については、 150ページ「FTP ツール」 を参照してください。
リンク確認ツール	Web ページ上の内部リンクと外部リンクの可用性をチェックして、リンク先に到達することを確認します。詳細については、 154ページ「リンク・チェック・ツール」 を参照してください。
URL ツール	サーバから URL を要求して、返されたデータを印刷します。詳細については、 183ページ「URL ツール」 を参照してください。
Web サービス・ツール	SOAP が利用可能な Web サービスの可用性をテストします。詳細については、 186ページ「Web サービス・ツール」 を参照してください。

[警告] タブのショートカット・メニュー・オプション

[警告] タブのショートカット・メニュー・オプションには、警告で利用可能なショートカット・メニュー・オプションの説明が含まれます。

アクセス方法	[モニタ]または[テンプレート]コンテキストを選択します。[警告]タブが右側の表示枠に表示されます。
--------	--

関連タスク	1226ページ「警告の設定方法」
関連情報	1203ページ「SiteScope 警告」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

メニュー項目	説明
コピー	モニタ・ツリーの選択した場所に警告をコピーします。 注：[モニタの警告]/[グループの警告]テーブルの警告でのみ利用可能です。
別の SiteScope にコピーする	このメニュー項目は、複数の SiteScope が BSM に接続されている場合に SAM 管理からのみ使用できます。モニタ・ツリーの選択した場所に、別の SiteScope からの警告をコピーします。
削除	警告を削除します。
この警告を無効化する	警告を無効にします。
警告の編集	警告を編集するウィンドウが開き、警告の設定を編集できます。
この警告を有効化する	警告を有効にします。
新規警告	[新規警告]ダイアログ・ボックスが開き、新規警告の定義を作成できます。このタスクの実行方法の詳細については、1226ページ「警告の設定方法」を参照してください。 注：[モニタの警告]/[グループの警告]テーブルの警告でのみ利用可能です。
貼り付け	選択した警告を貼り付けます。 注：[モニタの警告]/[グループの警告]テーブルの警告でのみ利用可能です。
すべての子孫の警告を表示	選択したノードのすべての子孫の警告を表示します。
子の警告を表示	選択したノードの直接の子の警告のみを表示します。
テスト	[警告のテスト]ダイアログ・ボックスが開き、警告をテストできます。

[レポート]タブのショートカット・メニュー・オプション

[レポート]タブのショートカット・メニュー・オプションには、モニタ・ツリーの管理レポートで利用可能なオプションの説明が含まれます。

詳細	[モニタ]または[テンプレート]コンテキストを選択します。[レポート]タブが右側の表示枠に表示されます。
関連タスク	1278ページ「レポートの作成方法」
関連情報	1273ページ「SiteScope レポート」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

メニュー項目	詳細
選択を解除	選択をクリアする。
レポートのコピー	モニタ・ツリーの選択した場所にレポートをコピーします。 注：[モニタのレポート]/[グループのレポート]テーブルのレポートでのみ利用可能です。
レポートの新規作成	作成する SiteScope レポートのタイプを選択できます。このトピックの詳細については、1275ページ「SiteScope のレポート・タイプ」を参照してください。 注： <ul style="list-style-type: none"> [モニタのレポート]/[グループのレポート]テーブルのレポートでのみ利用可能です。 管理レポートのみが[レポート]タブに追加されます。
レポートを削除	レポートを削除します。
レポートの編集	レポートを編集するウィンドウが開き、レポートの設定を編集できます。
レポートの生成	レポートを生成します。
貼り付け	選択したレポートを貼り付けます。 注：[モニタのレポート]/[グループのレポート]テーブルのレポートでのみ利用可能です。
すべて選択	表示されたレポートをすべて選択します。
すべての子孫レポートの表示	選択したノードのすべての子孫レポートを表示します。
子レポートの表示	選択したノードの直接の子レポートのみを表示します。

第4章

SiteScope オブジェクトの検索とフィルタ処理


本章の内容

- 106ページ「SiteScope オブジェクトの検索」
- 113ページ「SiteScope オブジェクトのフィルタ処理」

SiteScope オブジェクトの検索

コンテキスト・ツリー内の任意のオブジェクトに検索/フィルタ・タグを割り当て、これらのタグを使用して表示を検索またはフィルタできます。たとえば、特定のオペレーティング・システムで実行されているすべてのモニタにタグを定義できます。SiteScope オブジェクト(グループ、モニタ、リモート・サーバ、テンプレート、プリファレンス・プロファイル)を検索およびフィルタするために、キーワード・タグが使用される。あるいは、クイック検索を使用して SiteScope オブジェクトを検索できます。

アクセス方法

- **タグを使用した検索** : SiteScope オブジェクト(グループ、モニタ、テンプレート、またはプリファレンス・プロファイル)を選択し、モニタの[プロパティ]タブまたはタグの検索/フィルタ・プリファレンス・ページの[タグの検索/フィルタ]パネルを開きます。[タグの追加]ボタンをクリックします。[プリファレンス]コンテキスト([プリファレンス]>[タグの検索/フィルタ])で既存のタグを編集できます。
- **クイック検索** : モニタ、テンプレート、リモート・サーバ、カウンタ・ツリーで(ブラウズ可能なカウンタ・モニタのモニタ・プロパティで)、ポップアップ検索ボックスまたは[クイック検索]  ボックスに検索する文字を入力します。

詳細な内容

検索およびフィルタの概要

左側のツリー表示枠の表示で SiteScope オブジェクト(グループ、モニタ、テンプレート、ターゲット・サーバ、警告、プリファレンス・プロファイル)をフィルタするために使用するカスタム検索タグまたはカスタム・フィルタ・タグを作成します。タグとその値を定義し、それらをエンタープライズ内のさまざまな要素に割り当てます。

たとえば、「Critical」、「High」、「Medium」、「Low」という値を使用する Priority というタグを定義します。これらのタグの値をインフラストラクチャ内のさまざまな要素に割り当てます。お客様からのアクセスを 24 時間年中無休でサポートする Web サーバおよびデータベースのモニタには、「Priority: Critical」のカテゴリ値を割り当てることができます。新しいフィルタ設定を追加するときには、[フィルタオプション]セクションで[タグ]を選択し、オブジェクトの値に「Priority:Critical」を入力して、[保存]をクリックします。このフィルタにより、このタグと値が割り当てられている要素のみが表示されます。

タグは、<tag> 属性を使用して警告テンプレートでも使用できます。<tag:[tagName]> プロパティを使用することで、フィルタ・タグ内の値を警告内のパラメータとして含めることができます。この方法により、SiteScope 10.00 で削除されたカスタム・プロパティ・メカニズムに似た機能を提供できます。

たとえば、値 Apache がモニタに割り当てられた AppServer というタグあり、モニタ用に設定された警告テンプレートに<tag:AppServer>を含めます。警告がトリガされた場合、警告テキストの新しいプロパティが Apache に置き換えられます。警告テンプレート・プロパティの詳細については、[1232 ページ「SiteScope 警告テンプレートとイベントのプロパティのディレクトリ」](#)を参照してください。

SiteScope にタグが作成されていない場合、このセクションは空白で表示されます。タグが作成されている場合はここに表示され、必要に応じてタグを選択できます。

SiteScope フィルタを使用して、フィルタ条件に基づいて表示するツリー内のオブジェクトを選択できます。さまざまな設定タスクに適用できる、異なる条件を使用した複数のフィルタを定義できます。

タスクの詳細については、107ページ「[検索/フィルタ・タグを使用したオブジェクトの検索方法](#)」を参照してください。

クイック検索の概要

特定のプロパティ名または値の設定オブジェクト(グループ、モニタ、リモート・サーバ、テンプレート、カウンタ)を検索できるクイック検索があります。クイック検索はモニタ、テンプレート、リモート・サーバ、カウンタ・ツリーで利用できます(ブラウズ可能なカウンタ・モニタのプロパティで)。クイック検索ボックスに文字列を入力して、プロパティの名前および値をフィルタします。ツリーでは、指定した文字列テキストを含むすべてのノードが展開されます。

クイック検索には、大文字と小文字の区別、ワイルドカード、一致オプション、ノード/子オプションで検索をフィルタできるオプションがあります。また、自動フィルタも用意されており、これを選択した場合、検索語を入力すると自動的に検索が実行されます。検索を実行するたびに Enter キーを押す必要はありません。

タスクの詳細については、108ページ「[クイック検索の使用方法](#)」を参照してください。

タスク

本項の内容

- 107ページ「[検索/フィルタ・タグを使用したオブジェクトの検索方法](#)」
- 108ページ「[クイック検索の使用方法](#)」

検索/フィルタ・タグを使用したオブジェクトの検索方法

このタスクでは、検索/フィルタ・タグを定義し、コンテキスト・ツリー内の1つ以上の要素に割り当ててから、これらのタグを使用して表示を検索またフィルタする手順について説明します。

1. 検索/フィルタ・タグを作成します。

検索/フィルタ・タグを追加するには、SiteScope オブジェクトの[[タグの検索/フィルタ](#)]パネルを使用します。ユーザ・インタフェースの詳細については、109ページ「[\[タグの検索/フィルタ\]パネル](#)」を参照してください。

2. SiteScope ツリー要素に検索/フィルタ・タグを割り当てます。

ビュー・フィルタの一部としてタグを使用するには、まずコンテキスト・ツリー内の1つ以上の要素またはプリファレンス・プロファイルにタグを割り当てる必要があります。タグは、コンテナ、モニタ、グループ、警告など、ツリー内の任意の項目に割り当てることができます。

タグの割り当ては、コンテキスト・ツリー・オブジェクトまたはプリファレンス・プロファイルを追加、インポート、または編集するときに行います。タグは、コンテキスト・ツリー内のすべての種類のオブジェクトのプロパティとして含まれます。

モニタ・ツリー内のオブジェクトの詳細については、78ページ「[モニタ・ツリー](#)」を参照してください。

テンプレート・ツリー内のオブジェクトの詳細については、88ページ「[テンプレート・ツリー](#)」を参照してください。

3. フィルタ設定のタグを定義します。

コンテキスト・ツリーまたはプリファレンス・プロファイルの1つ以上の項目にタグを割り当てたら、フィルタ用のオブジェクトとしてタグを使用できます。

ユーザ・インターフェイスでのフィルタの詳細については、113ページ「SiteScope オブジェクトのフィルタ処理」を参照してください。

例:

モニタが実行されているオペレーティング・システムの種類を示すタグを作成します。タグ Operating Systems には、Windows 2000、Windows XP、Solaris、Linux などの値を設定します。

新規タグ

メイン設定

タグは次のタグのリストに追加されます [タグの検索/フィルタプリファレンス](#)。
 タグの名前と説明を入力し、タグの値を追加してください。

* タグ名: Platform

タグの詳細:

* 値:

値の名前	値の詳細
Windows 2000	
Windows XP	
Linux	
Solaris	
AIX	

OK キャンセル Help

グループの検索/フィルタ設定を開き、Operating Systems タグの値として Windows 2000 を選択し、グループなどのモニタ・ツリーの要素にタグを割り当てます。

タグの検索/フィルタ

自分自身のキーワードを使用したフィルタや検索を有効にするには SiteScope オブジェクトにタグを適用してください。 [タグの追加](#)


既存のタグを [プリファレンス] のコンテキストから使用できます ([プリファレンス] > [タグの検索/フィルタ])。

- Platform
 - AIX
 - Linux
 - Solaris
 - ☒ Windows 2000
 - Windows XP

この新しいタグを使用して、Windows マシンで実行されているモニタのみが表示されるように、モニタ・ツリーのフィルタ設定を定義できます。

クイック検索の使用 方法

モニタ、テンプレート、リモート・サーバ、カウンタ・ツリーで(ブラウズ可能なカウンタ・モニタのモニタ・プロパ

ティで), **[クイック検索]**  ボックスの左端をクリックして、フィルタ・オプションのドロップダウン・メニューを開いて、検索文字列を入力します。クイック検索オプションの詳細については、[109ページ「クイック検索」](#)を参照してください。

関連タスク

- [113ページ「SiteScope オブジェクトのフィルタ処理」](#)

UI の説明


[タグの検索/フィルタ]パネル

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します(ラベルのない要素は山括弧内に表示されます)。

UI 要素	説明
<タグ名と値>	タグが作成されている場合は、タグの名前と値が表示されます。オブジェクトに割り当てるタグまたはタグの値を選択します。SiteScope にタグが作成されていない場合、このセクションは空白で表示されます。
タグの追加	[新規タグ]ダイアログ・ボックスを開き、新しいキーワード・タグを追加できる。ユーザ・インタフェースの詳細については、 111ページ「[新規タグ]/[タグの編集]ダイアログ・ボックス」 を参照してください。

クイック検索

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します(ラベルのない要素は山括弧内に表示されます)。





UI 要素	説明
	<p>クイック検索 : モニタ、テンプレート、リモート・サーバ、またはカウンタ・ツリー(参照可能な一部のカウンタ・モニタのモニタ・プロパティ内) の、特定のプロパティ名または値の設定オブジェクト(グループ、モニタ、リモート・サーバ、カウンタ) を検索できます。</p> <p>ボックスの左端をクリックすると、フィルタ・オプションのドロップダウン・メニューが開きます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [Case sensitive]を選択すると、入力したとおりのフィルタ文字列が検索されます。[Case insensitive]を選択すると、フィルタ文字列の大文字と小文字は区別されません。 • [Use wild cards]を選択すると、フィルタ文字列にワイルドカード記号(*)を使用できます。検索項目の一部分だけの入力でも検索できるようにするために、検索文字列にアスタリスク(*)を使用できます。 • [Match from start]を選択すると、フィルタ文字列をプロパティの名前または値の先頭から検索します。[Match exactly]を選択すると、完全に一致するフィルタ文字列が検索されます。[Match anywhere]を選択すると、プロパティ内の任意の場所でフィルタ文字列が検索されます。 • [Match leaf node only]を選択すると、ツリーのリーフ・ノード(モニタと空のグループのみ) 内のフィルタ文字列が検索されます。クリアすると、すべてのノードが検索されます。 • [Hide nodes without children]を選択すると、フィルタ文字列に一致するリーフ・ノードがないグループ(空のグループ) が非表示になります。 • [Keep the children if any of their ancestors match]を選択すると、フィルタ文字列と一致するグループに含まれるすべての子ノードが(子ノード自体が検索文字列に一致していなくても) 表示されます。 • [自動フィルタの使用]を選択すると、検索テキストフィールドに文字が入力されると自動的に検索されます。自動フィルタが実行されるまでの遅延を、[プリファレンス] > [インフラストラクチャプリファレンス] > [一般設定] > [クイック検索自動フィルタ遅延 (ミリ秒)] で設定できます。標準設定の遅延は 800 ミリ秒 (0.8 秒) です。[自動フィルタの使用] が選択されていない場合は、検索を実行するたびに Enter キーを押す必要があります。 <p>ヒント : 高負荷環境では、[クイック検索自動フィルタ遅延] の遅延時間を増やすか、[自動フィルタの使用] オプションを無効することをお勧めします。</p> <p>注 :</p> <ul style="list-style-type: none"> • クイック検索が利用できるのは、モニタ、テンプレート、リモート・サーバ、およびカウンタ・ツリー(モニタ・プロパティ内) のツリー・ツールバーのみです。 • フィルタをツリーに適用すると、検索は現在表示されているレコードに制限されます。

[新規タグ]/[タグの編集]ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、新しい検索/フィルタ・タグを追加できます。

アクセス方法	SiteScope オブジェクト(グループ、モニタ、テンプレート、またはプリファレンス・プロファイル)を選択し、[プロパティ]タブまたはプリファレンス・プロファイル・ページの[タグの検索/フィルタ]パネルを開きます。[タグの追加]ボタンをクリックします。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> • [プリファレンス]コンテキスト([プリファレンス] > [タグの検索/フィルタ])で既存のタグを編集できます。このトピックの詳細については、761ページ「タグの検索/フィルタの概要」を参照してください。 • SiteScope 管理者ユーザ、または適切なタグ権限を付与されたユーザのみがタグを表示、追加、編集できます。ユーザ権限の詳細については、792ページ「権限」を参照してください。 • SiteScope オブジェクトで参照されている場合、検索/フィルタ・タグまたはタグの値は削除できません。削除するには、すべての SiteScope オブジェクトからタグまたはタグの値を削除する必要があります。 • タグは、<tag> 属性を使用して警告テンプレートでも使用できます。詳細については、1232ページ「SiteScope 警告テンプレートとイベントのプロパティのディレクトリ」を参照してください。
関連タスク	107ページ「検索/フィルタ・タグを使用したオブジェクトの検索方法」
関連情報	106ページ「SiteScope オブジェクトの検索」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。


UI 要素	詳細
	新規 ：タグの値を追加します。新しい行がタグの値リストの末尾に追加されます。
	削除 ：選択した値をタグから削除します。
	タグ値を高くする ：タグ値のリスト内で、選択したタグ値を上に移動します。この方法を使用すると、アルファベット順ではなく、タグ値順に並べ替えることができます。
	タグ値を低くする ：タグ値のリスト内で、選択したタグ値を下に移動します。この方法を使用すると、アルファベット順ではなく、タグ値順に並べ替えることができます。
タグ名	検索/フィルタ・タグの名前。 最大文字数 :255 文字
タグの詳細	検索/フィルタ・タグの詳細。
値	タグに含まれる値。

UI 要素	詳細
値の名前	タグに含まれる値の名前。各タグには、少なくとも1つの値を含める必要があります。モニタ・ツリー内のすべてのオブジェクトのタグ設定を定義または編集するときに、各値はタグ名の子オブジェクトとして表示されます。
値の詳細	各値の詳細。この詳細は、タグを編集するときに表示されます。

SiteScope オブジェクトのフィルタ処理

SiteScope フィルタは、モニタ・ツリーをフィルタし、定義した基準を満たす SiteScope オブジェクトのみを表示できます。

アクセス方法

1. モニタ・ツリーのコンテキスト・ツールバー(左側表示枠の上)で、[フィルタ]  ボタンの横の矢印をクリックします。
2. [新規フィルタ]を選択するか、または既存のフィルタを選択して[編集]をクリックします。

注: フィルタ・オプションは、[モニタとグループの管理]ダイアログ・ボックスでも利用できます。詳細については、[76ページ「\[モニタとグループの管理\]ダイアログ・ボックス」](#)を参照してください。

詳細な内容

グローバル・フィルタの概要

モニタのデプロイメントを管理するときに、追加されたすべてのオブジェクトを表示する広範囲なツリーの管理が困難な場合があります。SiteScope では、表示するツリー内のオブジェクトを、フィルタ条件に基づいて選択できます。さまざまな設定タスクに適用できる、異なる条件を使用した複数のフィルタを定義できます。

たとえば、CPU 使用率とディスク領域を監視する SiteScope モニタのみを表示するフィルタを作成できます。このフィルタの結果として、エンタープライズ・ノードのすぐ下に、CPU およびディスク領域モニタのすべての種類を示すツリーが表示されます。


左側のツリー表示枠の表示で SiteScope オブジェクトをフィルタするために使用するカスタム検索タグまたはカスタム・フィルタ・タグも作成できます。タグとその値を定義し、それらを企業内のさまざまな要素に割り当てます。次に、このタグを使用して検索または表示をフィルタします。検索タグまたはフィルタ・タグの割り当ての詳細については、[106ページ「SiteScope オブジェクトの検索」](#)を参照してください。

注: 特定の共通するプロパティに基づいてフィルタを作成するには、グローバル検索と置換を使用します。詳細については、[119ページ「グローバル検索と置換」](#)を参照してください。

タスク

SiteScope オブジェクトをフィルタする方法

フィルタを使用して、SiteScope の特定のオブジェクト・タイプおよびプロパティ値を検索します。事前定義フィルタの選択、新規フィルタの作成、または既存のフィルタの値の編集を行うことができます。

定義済みのフィルタがある場合は、モニタ・ツリーの上のドロップダウン・フィルタ・リストに表示されます。リストからフィルタを選択すると、フィルタ選択で定義したオブジェクトのみがツリーに表示されます。フィルタが適用されたら、フィルタ・アイコンは  として表示されます。

ユーザ・インターフェースの詳細については、[114ページ「\[新規フィルタ\]/\[フィルタの編集\]ダイアログ・ボックス」](#)を参照してください。

注：ビュー・フィルタの一部として検索/フィルタ・タグを使用するには、まずタグを作成して、コンテキスト・ツリー内の1つ以上の要素またはプリファレンス・プロファイルにタグを割り当てる必要があります。タグは、コンテナ、モニタ、グループ、警告など、ツリー内の任意の項目に割り当てることができます。検索タグまたはフィルタ・タグの作成の詳細については、[106ページ「SiteScope オブジェクトの検索」](#)を参照してください。



UI の説明


[新規フィルタ][フィルタの編集]ダイアログ・ボックス

[フィルタ] ボタンは、モニタ・ツリーのコンテキスト・ツールバーにあります。

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。



UI 要素	説明
一般設定 (このパネルは、[モニタとグループの管理]ダイアログ・ボックスからフィルタにアクセスした場合は表示されません)	
フィルタ名	フィルタ名。この名前は、[フィルタ] 矢印をクリックしたときに選択できるフィルタのリストに表示されます。
フィルタの詳細	フィルタの詳細。この詳細は、フィルタを編集するときに表示されます。 注：このフィールドは任意指定です。
パブリック・フィルタ	フィルタの権限を表します。フィルタが公開用の場合、すべてのユーザがフィルタを表示、使用、編集できますが、公開フィルタの所有者のみがこのフィルタを非公開フィルタに変更できます。 公開用以外のフィルタは、現在のユーザのみが表示、使用できます。
フィルタ・オプション	
正規表現	モニタ・ツリーのフィルタに標準の正規表現を使用できます。 選択すると、フィルタ・リストからモニタ名、モニタ・タイプ、タグの値は選択できません。チェック・ボックスをクリアすると、フィルタでは POSIX 正規表現形式が使用されます。 標準設定値：選択されている

UI 要素	説明
モニタ名	<p>ツリーに表示されるオブジェクトをモニタ名でフィルタするには、モニタ名を入力します。</p> <ul style="list-style-type: none"> モニタ名は、モニタの設定時に[一般設定]パネルの[名前]ボックスに入力した文字列です。 フィルタを拡張するには、正規表現を入力できます。ワイルドカード("*")と OR 表現を使用して、ツリーに表示される SiteScope オブジェクトをモニタ名でフィルタします。 <p>モニタ・ツリーには、グループ内で、入力した文字列に一致したモニタとそれらのモニタを含むグループのみが表示されます。</p> <p>例: 表現 /URL Monitor.* \.gov/ は、ドメイン .gov を含むアドレスを使用する文字列 URL Monitor を含むモニタ名すべてに一致します。</p> <p>注: このフィールドでは大文字と小文字が区別されます。</p>
モニタ・タイプ	<p>ツリーに表示されるオブジェクトをモニタ・タイプでフィルタするには、モニタ・タイプを入力するか、[ブラウズ]  ボタンをクリックして[モニタ]リストからフィルタするモニタ・タイプを選択します。</p> <p>たとえば、プロパティに関係なく、すべての CPU モニタを含むフィルタを定義できます。このビューでは、モニタ・ツリーには SiteScope で定義されているすべての CPU モニタが表示されます。</p> <p>[モニタタイプのフィルタ]のユーザ・インタフェースの詳細については、116ページ「[モニタタイプのフィルタ]ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p> <p>注:</p> <ul style="list-style-type: none"> 複数のモニタを入力する場合は、カンマ(",")で区切ります。 モニタ・タイプを入力するときには、正規表現を入力できます。 <p>例: SAP* または CPU*</p>
ターゲット・サーバ	<p>ツリーに表示されるオブジェクトをターゲット・サーバでフィルタするには、サーバ名を入力するか、[ブラウズ]  ボタンをクリックしてターゲット・リストからフィルタするリモート・サーバを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ターゲット名は、モニタの設定時に[モニタ設定]パネルの[サーバ]ボックスに入力した文字列です。 フィルタを拡張するには、正規表現を入力できます。 <p>ツリーには、グループ内で、入力した文字列に一致したターゲット・サーバのモニタとそれらのモニタを含むグループのみが表示されます。</p> <p>[ターゲット・サーバのフィルタ]のユーザ・インタフェースの詳細については、117ページ「[ターゲット・サーバのフィルタ]ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p> <p>注: 複数のターゲットを入力する場合は、カンマ(",")で区切ります。</p>

UI 要素	説明
タグ	<p>特定のタグの値を使用する SiteScope オブジェクトをすべて含むフィルタを定義できます。たとえば、Windows、Linux、AIX、Solaris という値のプラットフォーム・タグがある場合、AIX というタグの値が割り当てられたすべてのオブジェクトをフィルタできます。</p> <p>タグの値を入力するか、[ブラウズ]  ボタンをクリックしてタグ・リストからフィルタするタグの値を選択します。[フィルタ タグ] のユーザ・インタフェースの詳細については、117ページ「[フィルタ タグ] ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p> <p>注：</p> <ul style="list-style-type: none"> 複数のタグ値を入力する場合は、カンマ(",")で区切ります。 タグ値のフィルタには、ワイルドカード文字("*"), and 表現、または or 表現を使用できます。
モニタの有効化/無効化	<p>有効または無効の SiteScope モニタのみを含むフィルタを定義できます。</p> <p>標準設定値：なし</p>
関連する警告の有効化/無効化	<p>フィルタする関連警告の状態(有効/無効)。</p> <p>標準設定値：なし</p>
HP BSM ログ記録	<p>BSM へのレポート・データの設定に基づいてモニタを含めるフィルタを定義できます。</p> <p>ログ記録オプションの詳細については、380ページ「HP 統合設定」を参照してください。</p>

[モニタ タイプのフィルタ] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスで、SiteScope オブジェクトをフィルタするモニタ・タイプを選択できます。



アクセス方法	<p>コンテキスト・ツールバーで、[フィルタ]  ボタンの横の矢印をクリックして[新規フィルタ]を選択するか、既存のフィルタを選択して[編集]をクリックします。[新規フィルタ]/[フィルタの編集]ダイアログ・ボックスで、[モニタ タイプ]の横の[ブラウズ]  ボタンをクリックします。</p>
関連情報	113ページ「 SiteScope オブジェクトのフィルタ処理 」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
利用可能なモニタ・タイプ	利用可能なモニタ・タイプが表示されます。 フィルタに含めるモニタ・タイプを選択し、[選択されたモニタタイプへ移動] ボタンをクリックします。選択したモニタ・タイプが[選択されたモニタタイプ] リストに移動されます。
選択されたモニタ・タイプ	このフィルタに現在選択されているモニタ・タイプが表示されます。 このリストからモニタ・タイプを削除するには、モニタ・タイプを選択し、[使用可能なモニタタイプへ移動] ボタンをクリックします。測定値が[使用可能なモニタタイプ] リストに移動されます。

[ターゲット サーバのフィルタ] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、SiteScope で設定されている選択したサーバ・ターゲットによって SiteScope オブジェクトをフィルタできます。



アクセス方法	コンテキスト・ツールバーで、[フィルタ]  ボタンの横の矢印をクリックして[新規フィルタ]を選択するか、既存のフィルタを選択して[編集]をクリックします。[新規フィルタ]/[フィルタの編集]ダイアログ・ボックスで、[ターゲット サーバ]の横の[ブラウズ]  ボタンをクリックします。
関連情報	113ページ「SiteScope オブジェクトのフィルタ処理」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
利用可能なターゲット・サーバ	SiteScope で利用可能なリモート・サーバが表示されます。 フィルタに含めるリモート・サーバを選択し、[選択されたターゲット サーバへ移動] ボタンをクリックします。選択したリモート・サーバが[選択されたターゲット サーバ] リストに移動されます。
選択されたターゲット・サーバ	このフィルタに現在選択されているリモート・サーバが表示されます。 このリストからリモート・サーバを削除するには、リモート・サーバを選択し、[使用可能なターゲット サーバへ移動] ボタンをクリックします。測定値が[使用可能なターゲット サーバ] リストに移動されます。

[フィルタ タグ] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスで、SiteScope オブジェクトをフィルタするタグの値を選択できます。

アクセス方法	コンテキスト・ツールバーで、[フィルタ]  ボタンの横の矢印をクリックして [新規フィルタ] を選択するか、既存のフィルタを選択して [編集] をクリックします。[新規フィルタ]/[フィルタの編集] ダイアログ・ボックスで、[タグ] の横の [ブラウズ]  ボタンをクリックします。
関連情報	113ページ「SiteScope オブジェクトのフィルタ処理」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します(ラベルのない要素は山括弧内に表示されます)。

UI 要素	説明
<タグ名と値>	タグが作成されている場合は、タグの名前と値が表示されます。フィルタに含めるタグの横にあるチェック・ボックスを選択して、[保存] をクリックします。 概念の詳細については、 106ページ「SiteScope オブジェクトの検索」 を参照してください。
ツリー・フィルタ	タグのツリーフィルタ条件を定義する演算子を選択します。 <ul style="list-style-type: none">• and : すべてのタグが選択されているすべてのオブジェクトを表示します。• or : 少なくとも 1 つのタグが選択されているすべてのオブジェクトを表示します。 注 : 選択できるのは、演算子の 1 つのタイプのみです (演算子を混合させて使用することはありません)。

第5章

グローバル検索と置換

本章の内容

概念

- 120ページ「グローバル検索と置換の概要」

タスク

- 122ページ「グローバル検索と置換の実行方法」

参照情報

- 127ページ「[グローバル検索と置換]ウィザード」

グローバル検索と置換の概要

[グローバル検索と置換]ウィザードでは、モニタ、警告、警告アクション、グループ、プリファレンス、レポートのプロパティを変更できます。オブジェクト・タイプに基づいてオブジェクトを選択し、SAM 管理で、SiteScope または複数の SiteScope 全体の選択オブジェクトのプロパティをグローバルに置換できます。

たとえば、BSM をアップグレードする場合、[グローバル検索と置換]ウィザードを使用して BSM にデータをレポートするすべての SiteScope をアップグレードしたバージョンに設定します。

影響を受けるオブジェクトをフィルタ

[影響を受けるオブジェクトをフィルタ]オプションでは、検索操作の選択オブジェクトをさらに絞り込みます。特定のプロパティを選択して、オブジェクトに属する値を選択または入力できます。これにより、置換する値ではなく選択オブジェクトを制限できます。

置換操作の実行中に、[影響を受けるオブジェクトをフィルタ]ページで選択したプロパティに一致するオブジェクトのみで、置換する値のみが置換されます。たとえば、頻度を 5 分に設定したすべてのモニタを選択してそのすべてのモニタのモニタ依存関係の設定を置換するか、特定のサーバを監視するモニタのみを選択して、フィルタで入力したサーバの値に一致するモニタ・インスタンスのみのしきい値設定を置換します。

置換または検索と置換

置換メソッドでは、フィールドの値を検索してその値を新しい値に置換します。たとえば、[モニタの実行設定]パネルの[頻度]チェック・ボックスを選択して、頻度の値を 10 分から 15 分に更新することで、選択したモニタに対してモニタの実行頻度の標準設定を変更します。

検索と置換メソッドでは、特定の設定とプロパティ値を検索して、入力した設定または値を含むオブジェクトのみを置換します。文字列、値、または正規表現パターンを検索して、その文字列のみを置換できます。置換はフィルタ条件に一致する場合にのみ実行されます。たとえば、現在使用されていないサーバ名が名前値に含まれるすべてのモニタを検索し、その古いサーバを示す文字列を、更新されたサーバを示す新しい文字列で置換します。

しきい値設定

モニタのしきい値の設定を置換する場合、標準設定では次のすべてを共有する設定のみが置換されます。

- 同じ条件(「エラー条件」、「警告条件」、または「良好条件」)
- 同じスケジュールの設定
- 同じ演算子タイプ(<=, >=, ==, !=, 含む, !含む)を使用

注: <(より小さい)と<=(より小さいか等しい)は、>(より大きい)と>=(より大きい等しい)と同じ演算子タイプとみなされます。

使用された演算子と設定されたスケジュールに関係なく、条件(「エラー条件」、「警告条件」、または「良好条件」)が同じすべての既存のしきい値設定を上書きするオプションもあります。このオプションは[カテゴリの上書き]と呼ばれ、ウィザードの[タイプの選択]で[モニタ]を選択した場合に、[しきい値の設定]パネルのウィザードの[変更の入力]ページに表示されます。

たとえば、すべての CPU モニタの「**エラー条件**」のしきい値を 85% より大きい設定に変更するとします。ウィザードで、[タイプの選択] ページの[**モニタ**]、[サブタイプの選択] ページの[**CPU**]を選択し、[変更の入力] ページの[**しきい値の設定**]パネルを展開します。

「**新規エラー条件**」の状態に 85% より大きい条件を選択して[**カテゴリの上書き**]オプションを選択すると、すべての CPU モニタの既存の「**エラー条件**」の設定がすべて上書きされ、ウィザードの完了時に 85% より大きい値に変更されます。

このオプションをクリアしたままにすると、ウィザードで選択した 85% より大きい「**エラー条件**」の設定は、>(より大きい)と>=(より大きいか等しい)演算子を使用してすべての CPU モニタに同じスケジュールを設定した「**エラー条件**」の設定のみと置換されます。

しきい値の設定の詳細については、[332ページ「状態のしきい値の設定」](#)を参照してください。

グローバル検索と置換の実行方法

このタスクでは、[グローバル検索と置換]ウィザードを使用してオブジェクトのグローバル検索と置換を実行する方法について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- 122ページ「グローバル検索と置換ウィザードの実行の開始」
- 122ページ「SiteScope の選択 (SAM のみで)」
- 122ページ「オブジェクト・タイプの選択」
- 123ページ「オブジェクトの検索と置換」
- 125ページ「影響を受けるオブジェクトのチェック」
- 126ページ「置換したオブジェクトの確認」

1. グローバル検索と置換ウィザードの実行の開始

グローバル置換を実行するモニタ・ツリーの SiteScope ルート、グループ、モニタのいずれかを右クリックします。プリファレンス・オブジェクトを置換するには、SiteScope ルートを右クリックします。警告オブジェクトを置換するには、SiteScope ルート、または関連グループかモニタ・オブジェクトを右クリックします。コンテキスト・メニューから[グローバル検索と置換]を選択します。

ユーザ・インタフェースの詳細については、127ページ「[グローバル検索と置換]ウィザード」を参照してください。

2. SiteScope の選択 (SAM のみで)

注: この手順は SAM から[グローバル検索と置換]ウィザードにアクセスする場合にのみ適用できます。

[SiteScope の選択]ページで、検索と置換を実行する1つ以上の SiteScope を選択します。

3. オブジェクト・タイプの選択

[タイプの選択]ページと[サブタイプの選択]ページで、置換を実行するオブジェクトと、必要に応じてサブタイプを選択します。

ユーザ・インタフェースの詳細については、128ページ「[タイプの選択] ページ」と128ページ「[サブタイプの選択] ページ」を参照してください。

例:

すべての CPU モニタのしきい値の境界を変更します。

オブジェクト・タイプとして[Monitor]を選択します。

The first screenshot shows the 'Type Selection' (タイプの選択) step. The left sidebar has 'SiteScope の選択' expanded, with 'タイプの選択' selected. The main area has the title 'タイプの選択' and the instruction '置換を実行するオブジェクト タイプを選択します。' (Select the object type to replace). Three radio buttons are available: 'モニタ' (selected), 'グループ' (Group), and 'プリファレンス' (Preferences).

The second screenshot shows the 'Subtype Selection' (サブタイプの選択) step. The left sidebar has 'タイプの選択' selected. The main area has the title 'サブタイプの選択' and the instruction '置換を実行するタイプを選択します。' (Select the type to replace). A single checkbox 'CPU' is shown and is checked.

特定のモニタ・タイプとして[CPU]を選択します。

4. オブジェクトの検索と置換

[置換モード] ページで、置換のタイプを選択します。[置換]を選択してオブジェクトをグローバルに置換するか、[検索と置換]を選択してオブジェクトの特定のインスタンスを置換します。必要に応じて、[詳細フィルタ]ダイアログ・ボックスを開き、オブジェクトのプロパティを使用してフィルタできます。このダイアログ・ボックスで、置換操作を実行するオブジェクトを選択します。[変更の入力] ページで、置換するプロパティまたは値を選択します。

ユーザ・インタフェースの詳細については、129ページ「[置換モード] ページ」と130ページ「[変更の入力] ページ」を参照してください。

例 - 特定のサーバのモニタ実行の頻度の低減:

会社の特定のサーバで、モニタを実行する頻度を低減するとします。

[変更の入力] ページの[モニタ設定] パネルで選択内容をフィルタして、指定したサーバを監視するモニタのみが含まれるようにします。

[変更の入力] ページで、指定したサーバを監視する 1 日 1 回の新しい頻度を入力します。

例 - 指定した電子メール・アドレスに警告メッセージを送信する警告アクションの設定：

指定した電子メール・アドレスに警告メッセージを送信する、警告アクションを設定します。ただし、警告の受信に設定した電子メール・アドレスの 1 つを変更して、新しい電子メール・アドレスに警告メッセージを送信するとします。変更した電子メール・アドレスのみを更新します。

オブジェクト・タイプとして[警告アクション]を選択したら、[置換モード] ページの[検索と置換]を選択します。

[変更の入力] ページで、[次を検索:] フィールドに古い電子メール・アドレス、[次で置換:] フィールドに新しい電子メール・アドレスを入力します。

5. 影響を受けるオブジェクトのチェック

[影響を受けるオブジェクト] ページで影響を受けるオブジェクトを表示し、必要に応じて置換操作対象のオブジェクトをクリアまたは選択します。必要に応じて、[影響を受けるオブジェクトをフィルタ] ダイアログ・ボックスを開いてオブジェクトのプロパティでフィルタできます。このダイアログ・ボックスで、置換操作を実行するオブジェクトを選択します。

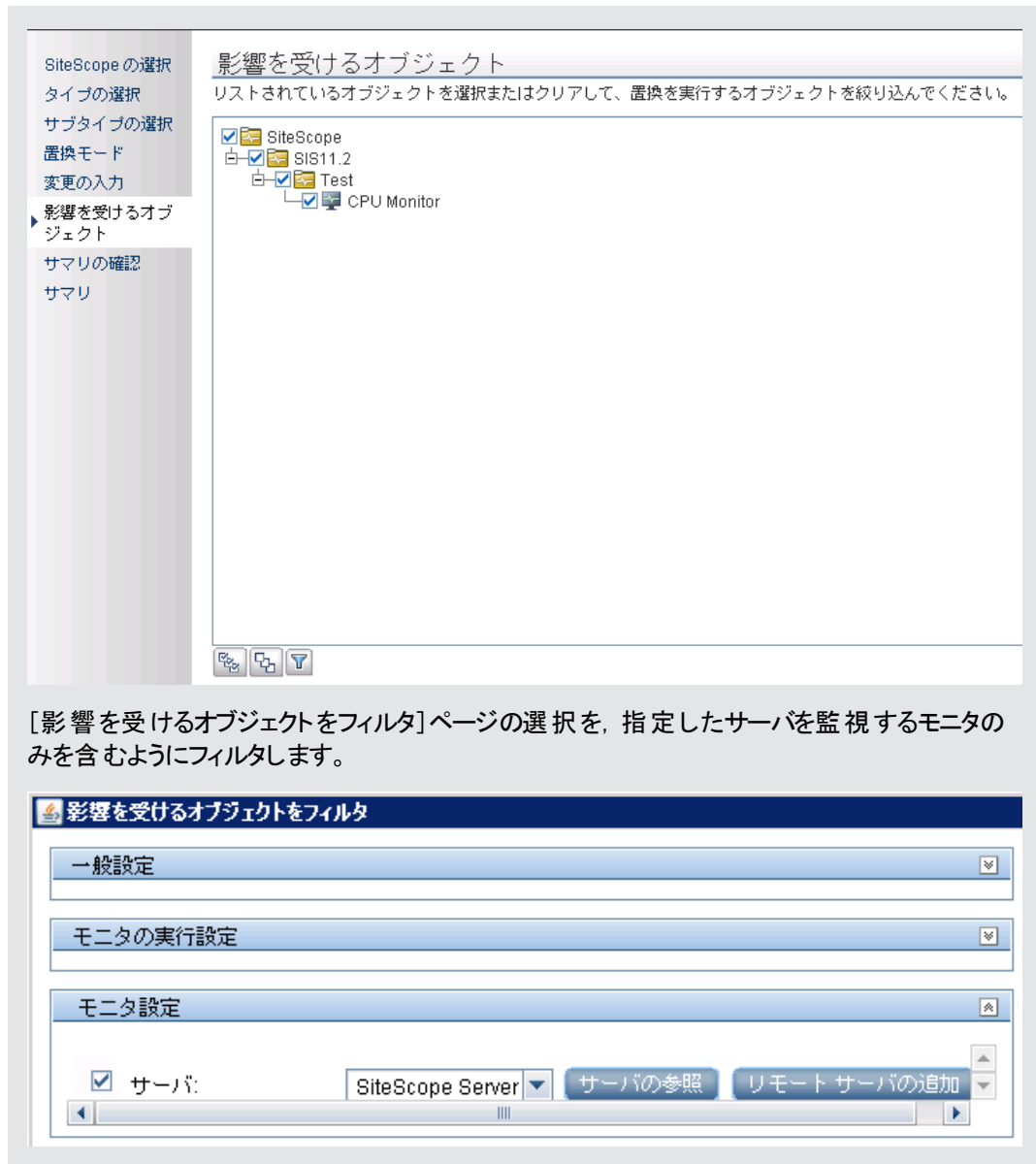
ユーザ・インタフェースの詳細については、133 ページ「[影響を受けるオブジェクト] ページ」を参照してください。

例 - 特定のサーバのモニタ実行の頻度の低減:

会社の特定のサーバで、モニタを実行する頻度を低減するとします。

[置換モード] ページ, [変更の入力] ページの[置換]を選択した場合、指定したサーバを監視する新しい頻度として 1 日 1 回を入力します。

影響を受けるオブジェクトが[影響を受けるオブジェクト] ページに表示されます。



[影響を受けるオブジェクトをフィルタ] ページの選択を、指定したサーバを監視するモニタのみを含むようにフィルタします。

6. 置換したオブジェクトの確認

[サマリの確認] ページで、置換操作の結果を確認し、[完了] をクリックしてウィザードを完了します。[サマリ] ページで変更のサマリを表示して、正常に実行された変更と発生したエラーを参照できます。

ユーザ・インタフェースの詳細については、135 ページ「[サマリの確認] ページ」と136 ページ「[サマリ] ページ」を参照してください。

[グローバル検索と置換]ウィザード

このウィザードでは、グループ、モニタ、プリファレンス、警告、警告アクション、レポートのプロパティを変更できます。これらの変更は、SAM 管理で作業中に SiteScope または複数の SiteScope 全体で実行できます。

アクセス方法	<ul style="list-style-type: none">SiteScope で、グローバル置換を実行するモニタ・ツリーの SiteScope ルート、グループ、モニタのいずれかを右クリックします。プリファレンス・オブジェクトを置換するには、SiteScope ルートを右クリックします。警告オブジェクトを置換するには、SiteScope ルート、または関連グループかモニタ・オブジェクトを右クリックします。コンテキスト・メニューから[グローバル検索と置換]を選択します。BSM で、[管理]>[システム可用性管理]を選択します。右側の表示枠の[SiteScope サマリ]テーブル下で、[グローバル検索と置換]ボタンをクリックします。
関連タスク	122ページ「 グローバル検索と置換の実行方法 」
ウィザード・マップ	このウィザードには、次のページが含まれています。 (127ページ「[SiteScope の選択]ページ」)> 128ページ「[タイプの選択]ページ」> 128ページ「[サブタイプの選択]ページ」> 129ページ「[置換モード]ページ」> 130ページ「[変更の入力]ページ」> 133ページ「[影響を受けるオブジェクト]ページ」> (134ページ「[影響を受けるオブジェクトをフィルタ]ダイアログ・ボックス」)> 135ページ「[サマリの確認]ページ」> 136ページ「[サマリ]ページ」

[SiteScope の選択]ページ

注: このページは、SAM 管理で作業しているときのみ表示されます。

このウィザード・ページでは、置換を実行する SiteScope を選択できます。

重要な情報	<ul style="list-style-type: none">このウィザードに関する一般情報は、127ページ「グローバル検索と置換]ウィザード」で入手できます。バージョン 9.0 以降で、接続状態の設定を SAM から変更できる SiteScope のみが表示されます。少なくとも 1 つの SiteScope を選択する必要があります。
関連タスク	122ページ「 グローバル検索と置換の実行方法 」

ウィザード・マップ	<p>127ページ「[グローバル検索と置換]ウィザード」には、次のページが含まれています。</p> <p>(127ページ「[SiteScope の選択]ページ」) > 128ページ「[タイプの選択]ページ」 > 128ページ「[サブタイプの選択]ページ」 > 129ページ「[置換モード]ページ」 > 130ページ「[変更の入力]ページ」 > 133ページ「[影響を受けるオブジェクト]ページ」 > (134ページ「[影響を受けるオブジェクトをフィルタ]ダイアログ・ボックス」) > 135ページ「[サマリの確認]ページ」 > 136ページ「[サマリ]ページ」</p>
-----------	--

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します(ラベルのない要素は山括弧内に表示されます)。

UI 要素	説明
<[SiteScope マシン]>	検索と置換を実行する1つ以上の SiteScope を選択します。

[タイプの選択] ページ

このウィザード・ページでは、置換を実行するオブジェクト・タイプを選択できます。

重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> このウィザードに関する一般情報は、127ページ「[グローバル検索と置換]ウィザード」で入手できます。 選択したノードで利用可能なオブジェクトのタイプのみが表示されます。
関連タスク	122ページ「グローバル検索と置換の実行方法」
ウィザード・マップ	<p>127ページ「[グローバル検索と置換]ウィザード」には、次のページが含まれています。</p> <p>(127ページ「[SiteScope の選択]ページ」) > 128ページ「[タイプの選択]ページ」 > 128ページ「[サブタイプの選択]ページ」 > 129ページ「[置換モード]ページ」 > 130ページ「[変更の入力]ページ」 > 133ページ「[影響を受けるオブジェクト]ページ」 > (134ページ「[影響を受けるオブジェクトをフィルタ]ダイアログ・ボックス」) > 135ページ「[サマリの確認]ページ」 > 136ページ「[サマリ]ページ」</p>

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
警告 警告アクション グループ モニタ プリファレンス レポート	<p>各置換操作に対して1つのオブジェクト・タイプのみ選択できます。SiteScope に存在するオブジェクトのみが表示されます。</p> <p>SAM 管理で[グローバル検索と置換]を実行するときに、前のページで選択した少なくとも1つの SiteScope に、グループ、モニタ、警告、警告アクション、プリファレンスが存在する場合にのみ表示されます。</p>

[サブタイプの選択] ページ

このウィザード・ページでは、置換を実行するオブジェクト・タイプのプロパティを選択できます。

重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> このウィザードに関する一般情報は、127ページ「[グローバル検索と置換] ウィザード」で入手できます。 このページは、ウィザードの128ページ「[タイプの選択] ページ」でオブジェクト・タイプとして[警告アクション]、[モニタ]、または[プリファレンス]を選択した場合にのみ表示されます。 [グループ]、[警告]、または[レポート]のオブジェクト・タイプを選択した場合は、このページは表示されません。
関連タスク	122ページ「グローバル検索と置換の実行方法」
ウィザード・マップ	<p>127ページ「[グローバル検索と置換] ウィザード」には、次のページが含まれています。</p> <p>(127ページ「[SiteScope の選択] ページ」) > 128ページ「[タイプの選択] ページ」 > 128ページ「[サブタイプの選択] ページ」 > 129ページ「[置換モード] ページ」 > 130ページ「[変更の入力] ページ」 > 133ページ「[影響を受けるオブジェクト] ページ」 > (134ページ「[影響を受けるオブジェクトをフィルタ] ダイアログ・ボックス」) > 135ページ「[サマリの確認] ページ」 > 136ページ「[サマリ] ページ」</p>

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
<オブジェクト・タイプ・プロパティ>	オブジェクト・タイプのプロパティを表示します。たとえば、オブジェクト・タイプとして[モニタ]を選択した場合は、選択した SiteScope のモニタ・タイプがすべて表示されます。

[置換モード] ページ

このウィザード・ページでは、置換のタイプ(グローバル置換またはフィルタ条件に基づいた置換)を選択できます。

重要な情報	このウィザードに関する一般情報は、127ページ「[グローバル検索と置換] ウィザード」で入手できます。
関連タスク	122ページ「グローバル検索と置換の実行方法」
ウィザード・マップ	<p>127ページ「[グローバル検索と置換] ウィザード」には、次のページが含まれています。</p> <p>(127ページ「[SiteScope の選択] ページ」) > 128ページ「[タイプの選択] ページ」 > 128ページ「[サブタイプの選択] ページ」 > 129ページ「[置換モード] ページ」 > 130ページ「[変更の入力] ページ」 > 133ページ「[影響を受けるオブジェクト] ページ」 > (134ページ「[影響を受けるオブジェクトをフィルタ] ダイアログ・ボックス」) > 135ページ「[サマリの確認] ページ」 > 136ページ「[サマリ] ページ」</p>

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
置換	すべての一致するオブジェクトを新しい文字列または値とグローバルに置換します。
検索と置換	<p>文字列または正規表現に一致するプロパティの対象オブジェクトを検索し、一致するパターンのみを置換値と置換する場合に選択します。</p> <p>この置換メソッドには特定の設定とプロパティ値の検索が含まれ、入力した設定または値を含むオブジェクトのみを置換します。値の一部のみを選択して、その文字列のみを置換できます。</p> <p>注:</p> <ul style="list-style-type: none">このオプションを選択した場合、値に文字列を含めることができる設定のみが[変更の入力]ページの設定領域で利用可能で、検索と置換アクションに選択できます。この設定は、置換する対象の選択と値の指定に使用します。置換する値ではなく選択オブジェクトを制限する方法の[詳細フィルタ]オプションとは異なります。 <p>例: 現在使用されていないサーバ名が名前の値に含まれるすべてのモニタを検索し、その古いサーバを示す文字列を、更新されたサーバを示す新しい文字列で置換します。</p>

[変更の入力]ページ

このウィザード・ページでは、グローバル置換の置換対象を選択できます。ウィザードには、前のページで選択したオブジェクト・タイプの変更可能な設定とプロパティのみが表示されます。フィルタ条件は、[タイプ]ページ、[サブタイプ]ページ、[詳細フィルタ]ページの選択内容から作成されます。

重要な情報	<ul style="list-style-type: none">このウィザードに関する一般情報は、127ページ「[グローバル検索と置換]ウィザード」で入手できます。表示されるサブタイプのプロパティは、SiteScope でモニタ、警告、プリファレンスなどを編集するときに表示されるプロパティとは異なる可能性があります。 <p>例: [電子メールのプリファレンス]は[グローバル検索と置換]ユーティリティではドロップダウン・リストではなくテキスト・ボックスで、[依存対象]プロパティは[グローバル検索と置換]ユーティリティに表示されません。</p> <ul style="list-style-type: none">Server プロパティは、モニタが次のグループから選択された場合にのみ使用できます。CPU、ディスク・スペース、メモリ、Microsoft Windows パフォーマンス・カウンタ、Web サーバ、サービス・モニタ。その他のモニタの場合、[サブタイプの選択]ページで特定のモニタのサブタイプを選択することによってのみサーバ属性を変更できます。たとえば、Web サーバ・モニタで CPU モニタを選択している場合は、サーバ・プロパティを使用できます。このグループ以外のモニタも選択している場合、サーバ・プロパティは使用できません。SAM 管理内で SiteScope をお使いの方へ: 置換操作対象に選択した SiteScope のバージョンがすべて同じでない場合、SiteScope のサブタイプ間でプロパティが一致しない場合があります。
-------	--

関連タスク	122ページ「グローバル検索と置換の実行方法」
ウィザード・マップ	<p>127ページ「[グローバル検索と置換]ウィザード」には、次のページが含まれています。</p> <p>(127ページ「[SiteScope の選択]ページ」) > 128ページ「[タイプの選択]ページ」 > 128ページ「[サブタイプの選択]ページ」 > 129ページ「[置換モード]ページ」 > 130ページ「[変更の入力]ページ」 > 133ページ「[影響を受けるオブジェクト]ページ」 > (134ページ「[影響を受けるオブジェクトをフィルタ]ダイアログ・ボックス」) > 135ページ「[サマリの確認]ページ」 > 136ページ「[サマリ]ページ」</p>

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します(ラベルのない要素は山括弧内に表示されます)。

UI 要素	説明
次を検索/次で置換	<p>[置換モード]ページで[検索と置換]オプションを選択した場合、テキスト・ボックス[次を検索]と[次で置換]がこのページの上部に追加されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [次を検索]ボックスに、置換する設定またはプロパティの検索文字列、値、または正規表現パターンを入力します。 • [次で置換]ボックスに、すべての一致するパターンで変更する文字列または値を入力します。 <p>注：[モニタの実行設定]で[頻度]を選択した場合、[次を検索]と[次で置換]テキスト・ボックスに入力する値は秒単位で入力する必要があります。たとえば、頻度が10分のモニタを検索して頻度を20分に変更するとします。[次を検索]テキスト・ボックスに「600」と入力し、[次で置換]テキスト・ボックスに「1200」と入力します。</p> <p>フィルタ条件に合うオブジェクトが見つからない場合は、エラー・メッセージが表示されます。フィルタ条件を再度選択します。</p>
<設定領域>	<p>この領域には、選択したオブジェクトの設定が含まれています。これらの設定の詳細については、選択したオブジェクトの設定ページを参照してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [置換モード]ページで[検索と置換]を選択した場合、設定領域で設定のみ選択します。[次を検索]/[次で置換]ボックスに置換する古い値と新しい値を入力します。 • [置換モード]ページで[置換]を選択した場合、設定領域で設定と新しい値を選択します。 <p>一部の領域の詳細については、次を参照してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 131ページ「[しきい値の設定]領域」 • 132ページ「フィルタ設定領域」 • 132ページ「サーバ設定領域」

[しきい値の設定]領域

[しきい値の設定]領域については次のとおりです。

- [タイプの選択] ページで **[モニタ]** を選択して, [サブタイプの選択] ページで 1 つのモニタを選択する場合にのみ表示される。
- [サブタイプの選択] ページで複数のモニタを選択し, いずれかのモニタにしきい値の定義が含まれない場合, [変更の入力] ページに表示されない。

[タイプの選択] ページで **[モニタ]** を選択した場合にのみ, **[カテゴリの上書き]** オプションが **[しきい値の設定]** 領域に表示されます。

- このオプションを選択すると, 選択したモニタ・インスタンスで同じしきい値条件 (**[エラー条件]**, **[警告条件]**, または **[良好条件]**) のしきい値を, ここで置換操作として入力した設定に上書きできます。
- このオプションがクリアされている場合, ここで入力した設定は, モニタ・インスタンスの演算子タイプ (< <=, > >=, !=, ==, 含む, doesNotContain) と設定したスケジュールが同じ設定のみと置換されます。条件が同じで演算子タイプまたはスケジュールが異なるその他の設定はそのままとなり, 変更されません。このオプションの詳細と例については, [120ページ「グローバル検索と置換の概要」](#) を参照してください。

フィルタ設定領域

[タイプの選択] ページで **[警告]** を選択した場合, [フィルタ設定] の **[モニタタイプの一致]** フィールドは表示されず, ウィザードで値を置換できません。

サーバ設定領域

[タイプの選択] ページで **[モニタ]** を選択し, [サブタイプの選択] ページで 1 つのモニタを選択する場合に, [サーバ設定] 領域が **[変更の入力]** ページに表示されます。

[サブタイプの選択] ページで複数のモニタを選択し, それらのモニタが同じファミリに属していない場合 (次の表に記載), [サーバ設定] 領域は表示されません。

モニタのファミリ	モニタ
SAP モニタ	<ul style="list-style-type: none"> • SAP CCMS • SAP CCMS 警告 • SAP Java Web アプリケーション・サーバ • SAP パフォーマンス • SAP Work Processes
SNMP モニタ	<ul style="list-style-type: none"> • Cisco • F5 Big-IP • ネットワーク帯域幅 • MIB による SNMP


モニタのファミリ	モニタ
URL モニタ	<ul style="list-style-type: none">• URL• URL リスト• URL コンテンツ• URL シーケンス
Media Player モニタ	<ul style="list-style-type: none">• Microsoft Windows Media Player• Real Media Player
Windows Counters モニタ	<ul style="list-style-type: none">• ASP• Citrix• ColdFusion• Microsoft Hyper-V• Microsoft IIS サーバ• Microsoft SQL Server• Microsoft Windows Media• Real Monitor
サーバ・モニタ	<ul style="list-style-type: none">• CPU• ディスク領域• メモリ• Microsoft Windows パフォーマンス・カウンタ• サービス• UNIX リソース• Web サーバ

[影響を受けるオブジェクト] ページ

このウィザード・ページでは、変更を選択したオブジェクトを表示できます。ページには、ツリー形式で選択オブジェクトが表示されます。[影響を受けるオブジェクト] ツリーのオブジェクトは、置換操作作用にクリアまたは選択できます。


重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> このウィザードに関する一般情報は、127ページ「[グローバル検索と置換]ウィザード」で入手できます。 表示されるオブジェクトは、ユーザにオブジェクトの変更権限があるかどうかによって異なります。 <ul style="list-style-type: none"> SAM 管理では、権限はBSMの[権限管理]([管理]>[プラットフォーム]>[ユーザと権限])で設定します。 SiteScope スタンドアロンでは、権限は[プリファレンス]>[ユーザ管理プリファレンス]で設定します。 [置換モード]ページで[検索と置換]を選択した場合、置換はフィルタ条件に一致する場合にのみ実行されます。[置換]を選択した場合、置換はすべての選択オブジェクトで実行されます。
関連タスク	122ページ「グローバル検索と置換の実行方法」
ウィザード・マップ	<p>127ページ「[グローバル検索と置換]ウィザード」には、次のページが含まれています。</p> <p>(127ページ「[SiteScopeの選択]ページ」)>128ページ「[タイプの選択]ページ」>128ページ「[サブタイプの選択]ページ」>129ページ「[置換モード]ページ」>130ページ「[変更の入力]ページ」>133ページ「[影響を受けるオブジェクト]ページ」>(134ページ「[影響を受けるオブジェクトをフィルタ]ダイアログ・ボックス」)>135ページ「[サマリの確認]ページ」>136ページ「[サマリ]ページ」</p>

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します(ラベルのない要素は山括弧内に表示されます)。

UI 要素	説明
	フィルタ : 必要に応じて、クリックしてダイアログ・ボックスを開き、選択をさらに絞り込みます。ユーザ・インタフェースの詳細については、134ページ「[影響を受けるオブジェクトをフィルタ]ダイアログ・ボックス」を参照してください。
<[影響を受けるオブジェクト]ツリー>	<p>[影響を受けるオブジェクト]ツリーには、ウィザードの前のページで選択したフィルタ条件に一致するすべてのオブジェクトが含まれます。</p> <p>置換操作が必要かどうかに応じて、オブジェクトを選択またはクリアします。</p> <p>注: SAM 管理で[グローバル検索と置換]を使用している場合、選択した各 SiteScope のツリーが表示されます。</p>

[影響を受けるオブジェクトをフィルタ]ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、オブジェクト・タイプのみでなく、特定の設定に基づいてオブジェクトを選択できます。たとえば、危険域の定義済みカテゴリがあるすべての警告を選択して、その警告の任意の設定を置換できます。また、特定のモニタまたはグループに設定した依存関係があるすべてのグループを選択して、そのグループの任意の設定を置換することもできます。

アクセス方法	133ページ「[影響を受けるオブジェクト] ページ」の[フィルタ]  ボタンをクリックします。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> このウィザードに関する一般情報は、127ページ「[グローバル検索と置換] ウィザード」で入手できます。 このオプションは置換の選択の絞り込みのみに使用し、置換の対象は指定しません。
関連タスク	122ページ「グローバル検索と置換の実行方法」
ウィザード・マップ	<p>127ページ「[グローバル検索と置換] ウィザード」には、次のページが含まれています。</p> <p>(127ページ「[SiteScope の選択] ページ」) > 128ページ「[タイプの選択] ページ」 > 128ページ「[サブタイプの選択] ページ」 > 129ページ「[置換モード] ページ」 > 130ページ「[変更の入力] ページ」 > 133ページ「[影響を受けるオブジェクト] ページ」 > (134ページ「[影響を受けるオブジェクトをフィルタ] ダイアログ・ボックス」) > 135ページ「[サマリの確認] ページ」 > 136ページ「[サマリ] ページ」</p>

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します(ラベルのない要素は山括弧内に表示されます)。

UI 要素	説明
<設定領域>	選択したオブジェクトに関する設定領域が表示されます。これらの設定の詳細については、選択したオブジェクトの設定ページを参照してください。プロパティを選択し、選択オブジェクトをフィルタする値を入力します。


[サマリの確認] ページ

このウィザード・ページでは、置換操作を実行するオブジェクトをプレビューできます。SAM 管理で複数の SiteScope で作業している場合、各 SiteScope のテーブルが表示され、そのテーブルの上に SiteScope の名前が表示されます。

重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> このウィザードに関する一般情報は、127ページ「[グローバル検索と置換] ウィザード」で入手できます。 グローバル置換で影響を受けるオブジェクト数が、テーブルの上に表示されます。 各テーブル・列は、列タイトルを右クリックすると昇順または降順に並べ替えられます。上矢印または下矢印は、並べ替え順序を示します。 このページで[適用]をクリックすると、置換操作は元に戻せません。
関連タスク	122ページ「グローバル検索と置換の実行方法」

ウィザード・マップ	<p>127ページ「[グローバル検索と置換]ウィザード」には、次のページが含まれています。</p> <p>(127ページ「[SiteScope の選択]ページ」) > 128ページ「[タイプの選択]ページ」 > 128ページ「[サブタイプの選択]ページ」 > 129ページ「[置換モード]ページ」 > 130ページ「[変更の入力]ページ」 > 133ページ「[影響を受けるオブジェクト]ページ」 > (134ページ「[影響を受けるオブジェクトをフィルタ]ダイアログ・ボックス」) > 135ページ「[サマリの確認]ページ」 > 136ページ「[サマリ]ページ」</p>
-----------	--

ユーザ・インターフェース要素について次に説明します(ラベルのない要素は山括弧内に表示されます)。





UI 要素	説明
	<p>列タイトルの上矢印と下矢印をクリックして、列の並べ替え順序を変更します。</p> <p>標準設定値: [完全名]列は、昇順のアルファベット順です。</p>
完全名	値が置換されるサーバ名、グループ、モニタ名、モニタのプロパティのツリーを表示します。
<プロパティ>	置換操作の結果変更された[変更の入力]ページで選択したボックス名。
以前の値	<p>置換操作の結果として変更される現在の値。</p> <p>注: 置換される値がクリアされていたチェック・ボックスで、現在は値が選択されている場合、チェック・ボックスの以前の値(クリアされていた値)は表示されない可能性があります。</p>
新規値	[変更の入力]ページで入力した新しい値。
リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証	<p>変更が適用されるリモート・サーバと比較して、モニタ設定プロパティが正しいかどうかを検証します。</p> <p>標準設定値: 選択されている</p> <p>注: このオプションを選択すると、リモート接続のために変更を行うのに時間がかかります。</p>

[サマリ] ページ

[サマリ]ページでは、正常に適用された変更とエラーが発生した変更がレポートされます。ページには、テーブル形式で変更が表示されます。SAM 管理で複数の SiteScope で作業している場合、各 SiteScope のテーブルが表示され、そのテーブルの上に SiteScope 名が表示されます。

重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> このウィザードに関する一般情報は、127ページ「[グローバル検索と置換]ウィザード」で入手できます。 置換操作で実行した変更は元に戻せません。 グローバル置換で影響を受けるオブジェクト数が、テーブルの上に表示されます。 各テーブル・列は、列タイトルを右クリックすると昇順または降順に並べ替えられます。上矢印または下矢印は、並べ替え順序を示します。
関連タスク	122ページ「グローバル検索と置換の実行方法」
ウィザード・マップ	<p>127ページ「[グローバル検索と置換]ウィザード」には、次のページが含まれています。</p> <p>(127ページ「[SiteScope の選択] ページ」) > 128ページ「[タイプの選択] ページ」 > 128ページ「[サブタイプの選択] ページ」 > 129ページ「[置換モード] ページ」 > 130ページ「[変更の入力] ページ」 > 133ページ「[影響を受けるオブジェクト] ページ」 > (134ページ「[影響を受けるオブジェクトをフィルタ] ダイアログ・ボックス」) > 135ページ「[サマリの確認] ページ」 > 136ページ「[サマリ] ページ」</p>

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します(ラベルのない要素は山括弧内に表示されます)。

UI 要素	説明
	列タイトルの上矢印と下矢印をクリックして、列の並べ替え順序を変更します。 標準設定値: [完全名] 列は、昇順のアルファベット順です。
	結果のレポートを PDF ファイルで開きます。 注: このオプションは SAM 管理から [グローバル検索と置換] を使用する場合にのみ使用できます。
	結果のレポートを CSV 形式ファイルで開きます。 注: このオプションは SAM 管理から [グローバル検索と置換] を使用する場合にのみ使用できます。
	印刷: テーブルを印刷するときにクリックします。サマリの各テーブルにこのアイコンが表示されます。
完全名	値が置換されるサーバ名、グループ、モニタ名、モニタのプロパティのツリーを表示します。
<プロパティ>	置換操作の結果変更された [変更の入力] ページで選択したボックス名。
以前の値	グローバル置換操作で置換された値。
新規値	グローバル置換操作の結果となる新しい値。
適用	ウィザードを閉じます。

第6章

SiteScope ツール

本章の内容

概念

- 139ページ「SiteScope ツールの概要」

タスク

- 140ページ「モニタの設定時またはトラブルシューティング時の SiteScope ツールの使用方法」
- 141ページ「ログ・ファイル・モニタの設定時またはトラブルシューティング時のログ分析ツールの使用方法 - 使用ケースのシナリオ」

参照情報

- 143ページ「SiteScope ツールのユーザ・インタフェース」

SiteScope ツールの概要

SiteScope には、監視環境のテストに便利な多数の診断ツールがあります。これらのツールでは、モニタの設定前に問題を特定してモニタの設定を容易にできます。また、モニタの設定後に問題のトラブルシューティングや診断を行うこともできます。


これらのツールを使用して、監視対象となるシステムのさまざまな要求やクエリを作成し、アクションの詳細な結果を表示します。要求には、ネットワーク接続のテストや、外部のデータベースまたはサービスにアクセスするためのログイン認証の検証などがあります。

特定のモニタ・タイプを設定する場合に使用して、容易にモニタ設定ができるようにするツールもあります。データをツールのフィールドに入力し、SiteScope でデータをテストします。データのテストが完了したら、テスト済みデータをモニタ設定フォームに直接適用できます。たとえば、DNS モニタを設定する前に DNS ツールを使用してドメイン名を IP アドレスに変換できます。名前の変換後、SiteScope でそのデータを新規モニタに適用できます。

利用可能な SiteScope ツールのリストについては、99ページ「[ツール]メニュー」を参照してください。

ユーザ権限

SiteScope ツールを使用するには、次の権限が必要です。

- **ツールを使用** : 左側の表示枠にある[ツール]コンテキストのツールを表示および使用するには、SiteScope の管理者、または「**ツールを使用**」権限が付与されたユーザである必要があります。
- **モニタ・ツールを使用** : モニタの設定時または編集時にツールを使用するには(該当のモニタに対応するツールが利用可能な場合)、SiteScope の管理者、または「**モニタ・ツールを使用**」権限が付与されたユーザである必要があります。
 - 新規モニタを設定する場合は新規モニタのダイアログ・ボックスで、既存のモニタを設定する場合はモニタの[プロパティ]タブで、[ツールを使用]ボタンをクリックします。
 - 既存のモニタのテスト・ツールを実行する場合、SiteScope ダッシュボード・ツールバーの[ツール] ボタンをクリックします。これにより、ツールが開き、モニタの既存のデータを入力に使用して実行されます。テスト結果は[結果]表示枠に表示されます。

モニタの設定時またはトラブルシューティング時の SiteScope ツールの使用方法

このタスクでは、SiteScope ツールを使用して、モニタの設定 やトラブルシューティングをサポートする手順について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- 140ページ「前提条件」
- 140ページ「モニタの追加と設定」
- 140ページ「テストの設定と実行」
- 140ページ「モニタのフィールドへのテスト済みデータの適用」
- 140ページ「ツールを使用したモニタ・プロパティの編集またはテスト(任意指定)」

1. 前提条件

- 左側の表示枠にある[ツール]コンテキストのツールを表示および使用するには、SiteScope 管理者ユーザ、または「**ツールを使用**」権限が付与されたユーザである必要があります。
- 特定のモニタの設定時に利用可能なツールを使用するには、SiteScope 管理者ユーザ、または「**モニタ・ツールを使用**」権限が付与されたユーザである必要があります。

2. モニタの追加と設定

[**新規作成**] > [**モニタ**]を選択して、[新規モニタ]ダイアログ・ボックスから新しいモニタを追加します。モニタの設定をサポートするツールが使用できる場合は、新規モニタのダイアログ・ボックスの下部にある[**ツールを使用**]ボタンをクリックします。

3. テストの設定と実行


必要な情報をツールのダイアログ・ボックスに入力し、ツールを実行します。サーバ側の検証エラーが結果の表示枠に表示されます。

4. モニタのフィールドへのテスト済みデータの適用

設定データのテストが正常に完了したら、[**Apply to New Monitor**]ボタン(既存のモニタを編集している場合は[**モニタに適用**]ボタン)をクリックして、SiteScope でデータをモニタ設定に適用します。

5. ツールを使用したモニタ・プロパティの編集またはテスト(任意指定)

SiteScope ツール(利用可能な場合)を使用して、既存のモニタの設定プロパティを編集またはテストすることもできます。

- モニタの設定プロパティを編集するには、モニタの[**プロパティ**]タブの[**ツールを使用**]ボタンをクリックし、前の2手順を実行します。
- ツールを開き、モニタの既存のデータを入力に使用して実行するには、ダッシュボード・ツールバーの[**ツール**]  ボタン SiteScope をクリックします。テスト結果は[**結果**]表示枠に表示されます。結果をファイルに保存するには、[**ファイルに保存**]ボタンをクリックします。

ログ・ファイル・モニタの設定時またはトラブルシューティング時のログ分析ツールの使用方法 - 使用ケースのシナリオ

このタスクは、ログ・ファイル・モニタの設定時のログ分析ツールの使用に関する手順を説明します。

管理者は、モニタ対象のログに記述されている最も一般的な問題や状況のログ・ファイル・モニタを作成します。状況を選択して対応するログ・ファイル・モニタを作成した後、選択した状況に対応する行がログに追加されるとすぐにモニタが実行されます。

このタスクには次の手順が含まれています。

- [141ページ「前提条件」](#)
- [141ページ「分析するログのコピー」](#)
- [141ページ「そのログでログ分析ツールを実行」](#)
- [142ページ「結果」](#)

1. 前提条件

- 左側の表示枠にある[ツール]コンテキストのツールを表示および使用するには、管理者は SiteScope 管理者ユーザ、または「**ツールを使用**」権限が付与されたユーザである必要があります。
- 特定のモニタの設定時に利用可能なツールを使用するには、管理者は SiteScope 管理者ユーザ、または「**モニタ・ツールを使用**」権限が付与されたユーザである必要があります。

2. 分析するログのコピー

管理者はローカルの SiteScope マシンに分析するログをコピーします。

3. そのログでログ分析ツールを実行

- a. 管理者は[ツール]>[共通ユーティリティツール]>[ログ分析ツール]を選択します。
- b. [ログ分析ツール]ダイアログ・ボックスで、管理者は次を入力します。
 - **ファイルの場所** : ローカルの SiteScope サーバにコピーされたログの場所。同時に複数ファイル进行分析するには、そのファイルを指定したフォルダにコピーし、分析対象のログ・ファイルのファイル名と一致する正規表現を作成します。
 - **メッセージの位置** : パターンのために分析するメッセージの左側にあるブロックの数(空白で区切られている)。

たとえば、次のログ構造で、関心があるログ・エントリの部分は7番目の空白(日付形式内の空白は日付形式の一部であるため含まれません)の後に開始するメッセージです。

```
2010-11-02 11:49:02,738 [SiteScope Main Thread]
(SiteScopeHeartbeatManager.java:53) INFO - The Heartbeat
Scheduler was started.2010-11-02 11:49:02,786 [SiteScope Main
Thread] (ServiceController.java:82) INFO - Registering
service:Host DNS Resolution Service
```

- **パターン内の日付の位置** : 日付が配置されているテキストのブロックの順序。上記の例で、日付はテキストの最初のブロックに含まれています。

- **日付形式** : 上記の例で、日付形式は標準設定に従います。標準設定には空白が含まれます。
- 管理者は[**ツールの実行**]をクリックします。

[ログ分析ツール]ダイアログ・ボックスの[結果]ボックスには、ログで検出された正規表現パターンとパターンのインスタンスの数が表示されます。

結果	
* 新規のログ ファイル モニタを作成します	
メッセージパターン	発生数
Starting SiteScope....*	12
preferences initialize.*	6
Starting SiteScope... 123.*	4
preferences initialize.* sdf	2
The Heartbeat Scheduler was started.	1
Registering service: Host DNS Resolution Service	1
Registering service: Monitor History Event Sink Service	1
Registering service: Alert Action Execution Counter Registry Service	1
Registering service: Alert Open Status Registry Service	1
	1
Starting SiteScope... 789	1
Initializing configuration layer.	1
Configuration layer initialize successfully.	1
Initializing preferences.	1

- c. 管理者は関連するパターンを選択して、[**新規ログファイル モニタの作成**]ボタンをクリックします。開いた[グループの選択]ダイアログ・ボックスで、管理者は既存のグループを選択するか、または[**新規グループ**]ボタンをクリックして、新しいグループを作成できます。

[**内容の照合**]ボックスに表示された正規表示が選択された状態で[**新規ログファイル モニタ**]ダイアログ・ボックスが開きます。

- d. そのダイアログ・ボックスで、管理者は分析する「本物の」ログへのパスを含み、ログ・ファイル・モニタを実行するために必要な残りの情報を入力します。
- e. 管理者は[**保存**]をクリックして新規ログ・ファイル・モニタを保存します。

4. 結果

ログ・ファイル・モニタは選択された正規表現を含む監視対象ログ・ファイルに追加された特定の入力を監視します。モニタ設定によって、管理者またはユーザは、その他の方法ではさらに深刻な事態が発生するまで放置されていたかもしれない状況を把握することができます。

モニタ・ツリーの選択されたグループに管理者が作成した新規ログ・ファイル・モニタ・ツールがリストされます。

ユーザインタフェースの詳細については、[157ページ「ログ分析ツール」](#)を参照してください。

ログ・ファイル・モニタの詳細については、『HP SiteScope Monitor Reference』の「[Log File Monitor](#)」を参照してください。

SiteScope ツールのユーザ・インタフェース

本項の内容


- 143ページ「データベース接続ツール」
- 146ページ「データベース情報ツール」
- 147ページ「DNS ツール」
- 148ページ「イベント・ログ・ツール」
- 150ページ「FTP ツール」
- 152ページ「LDAP 認証状態ツール」
- 154ページ「リンク・チェック・ツール」
- 157ページ「ログ分析ツール」
- 159ページ「メールの送受信ツール」
- 162ページ「Microsoft Windows Media Player ツール」
- 163ページ「ネットワーク状態ツール」
- 164ページ「ニュース・サーバ・ツール」
- 165ページ「パフォーマンス・カウンタ・ツール」
- 167ページ「Ping ツール」
- 168ページ「プロセス・ツール」
- 169ページ「Real Media Player ツール」
- 170ページ「正規表現ツール」
- 172ページ「サービス・ツール」
- 173ページ「SiteScope ログ・グラフィック・ツール」
- 175ページ「SNMP ブラウザ・ツール」
- 177ページ「SNMP ツール」
- 181ページ「SNMP トラップ・ツール」
- 182ページ「トレース・ルート・ツール」
- 183ページ「URL ツール」
- 186ページ「Web サービス・ツール」
- 191ページ「XSL 変換ツール」

データベース接続ツール

このツールでは、SiteScope と外部の ODBC または JDBC 互換データベース間の接続をテストおよび検証できます。この診断ツールでは、次の点がチェックされます。

- 指定したデータベース・ドライバが検出およびロードできる
- データベースに接続できる
- 任意指定のSQL クエリを実行して結果を表示できる
- データベースの接続とリソースを閉じることができる

このツールは、データベース・モニタ、データベース警告、データベース・ログ記録の設定に必要な接続パラメータ値を検証する場合に便利です。

アクセス方法	<ul style="list-style-type: none"> • [ツール]コンテキスト>[データベース ツール]>[データベース接続ツール]を選択します(「ツールを使用」権限が必要です)。 • データベース・カウンタ・モニタ、データベース・クエリ・モニタ、DB2 8.x および 9.x モニタ、テクノロジー・データベース統合 モニタを設定または表示する場合も使用できます(SiteScope の管理者、または「モニタ・ツールを使用」権限が付与されたユーザの場合)。 ■ 新規モニタを設定する場合は新規モニタのダイアログ・ボックスで、既存のモニタを設定する場合はモニタの[プロパティ]タブで、[ツールを使用]ボタンをクリックします。 ■ 既存のモニタのテスト・ツールを実行するには、SiteScope ダッシュボード・ツールバーの[ツール]  ボタンをクリックします。これにより、ツールが開き、モニタの既存のデータを入力に使用して実行されます。テスト結果は[結果]表示枠に表示されます。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> • テスト中に例外またはエラーが発生した場合、トラブルシューティングに役立つ推奨アクションとともにその情報が出力されます。 • データベース接続ツールを使用して、データベース・クエリ・モニタまたはテクノロジー・データベース統合モニタにプロパティを適用する場合、資格情報データを手動で入力する必要があります(資格情報プロファイルを選択すると資格情報データは失われます)。
関連タスク	140ページ「モニタの設定時またはトラブルシューティング時の SiteScope ツールの使用方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> • 139ページ「SiteScope ツールの概要」 • 99ページ「[ツール]メニュー」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
データベース接続 URL	<p>モニタの設定時に使用するデータベース接続 URL。Oracle 軽量ドライバを使用する場合、データベース接続 URL の形式は <code>jdbc:oracle:thin:@<サーバ名または IP アドレス>:<ポート>:<database sid></code> のようになります。</p> <p>例 : ポート 1521 を使用しているマシンの ORCL データベースに接続するには、「<code>jdbc:oracle:thin:@206.168.191.19:1521:ORCL</code>」と入力します。前の例のようにコロン記号(:)を含める必要があります。一般的なデータベース接続 URL のほかの例については、関連するデータベース・モニタの「Setup Requirements and User Permissions」を参照してください。</p> <p>注 : Windows 認証を使用してデータベースにアクセスする場合、接続 URL として「<code>jdbc:mercury:sqlserver://<サーバ名または IP アドレス>:1433;DatabaseName=<データベース名>;AuthenticationMethod=type2</code>」を、データベース・ドライバとして「<code>com.mercury.jdbc.sqlserver.SQLServerDriver</code>」を入力します。現在ログオンしている Windows ユーザの資格情報 (SiteScope サービスを実行中のアカウント) を使用してデータベースへの接続が確立されるように、[ユーザ名] および [パスワード] ボックスは空のままにします。</p>
データベース・ドライバ	<p>SiteScope で使用する JDBC または ODBC ドライバ。 .jar ファイル、または .class ファイルが含まれるライブラリは、 < SiteScope のルート・ディレクトリ > \WEB-INF\lib ディレクトリにインストールする必要があります。 <code>jdbc:odbc:orders</code> 以外のデータベースを使用するには、ドライバ・ファイルを適切なディレクトリにインストールして SiteScope で使用できるようにする必要があります。</p> <p>標準設定値 : <code>sun.jdbc.odbc.JdbcOdbcDriver</code></p> <p>例 : 一般的なデータベース・ドライバ文字列の例については、関連するデータベース・モニタの「Setup Requirements and User Permissions」セクションを参照してください。</p>
資格情報	<p>指定したデータベースでアクセス用の名前およびパスワードが必要な場合に資格情報を許可するためのオプション。</p> <ul style="list-style-type: none"> • ユーザ名およびパスワードを使用 : 手動でユーザの資格情報を入力する場合に、このオプションを選択します。 [ユーザ名] ボックスにユーザ名を、 [パスワード] ボックスにパスワードを入力してデータベースにアクセスします。 • 事前定義された資格情報を選択 : データベース用の定義済みユーザ名およびパスワードを SiteScope で自動的に設定する場合に、このオプションを選択します (標準設定のオプション)。 [資格情報プロファイル] ドロップダウン・リストから使用する資格情報プロファイルを選択するか、 [資格情報の追加] をクリックして新規資格情報プロファイルを作成します。このタスクの実行方法の詳細については、 623 ページ「資格情報のプリファレンスの設定方法」を参照してください。
クエリ	<p>データベースで実行する SQL クエリ (任意指定)。 SQL クエリ文字列を入力しない場合、ドライバがロードされてデータベースへの接続がテストされますが、クエリは実行されません。</p>

UI 要素	説明
結果セットの最大カラム数	SQL クエリを入力した場合にクエリ結果セットに表示される最大列数。 標準設定値 : 10
結果セットの最大行数	SQL クエリを入力した場合にクエリ結果セットに表示される最大行数。 標準設定値 : 10
ツールの実行	接続テストを実行します。接続結果は[結果]表示枠に表示されます。
ファイルに保存	結果をファイルに保存します。

例

次に、成功したデータベース接続から SQL クエリで返されるデータの例を示します(1 行のみ)。

サーバ名	グループ ID	フレーム・インデックス	フレーム ID	設定名前	設定行	行チャンク	チャンク値
10.0.0.157	master.config	1	_config	_database Max サマリ	1	1	200

データベース情報ツール

このツールでは、データベース・サーバ・メタデータ(製品およびドライバのバージョン、SQL 互換性レベル情報、サポートされている SQL 機能など)を表示できます。

アクセス方法	[ツール]コンテキスト > [データベース ツール] > [データベース情報ツール]を選択します (「ツールを使用」権限が必要です)。
重要な情報	データベース・ドライバやユーザ名によって、表示される情報が大幅に変わります。
関連情報	<ul style="list-style-type: none">139ページ「SiteScope ツールの概要」99ページ「[ツール]メニュー」


ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
データベース接続 URL	<p>モニタの設定時に使用するデータベース接続 URL。Oracle 軽量ドライバを使用する場合、データベース接続 URL の形式は <code>jdbc:oracle:thin:@<サーバ名 または IP アドレス>:<ポート>:<database sid></code> のようになります。</p> <p>例 : ポート 1521 を使用しているマシンの ORCL データベースに接続するには、<code>「jdbc:oracle:thin:@206.168.191.19:1521:ORCL」</code> と入力します。前の例のようにコロン(:)とアットマーク(@)記号を含める必要があります。一般的なデータベース接続 URL のほかの例については、関連するデータベース・モニタの「Setup Requirements and User Permissions」を参照してください。</p>
データベース・ドライバ	<p>SiteScope で使用する JDBC または ODBC ドライバ。 .jar ファイル、または .class ファイルが含まれるライブラリは、< SiteScope のルート・ディレクトリ> \WEB-INF\lib ディレクトリにインストールする必要があります。 <code>jdbc:odbc:orders</code> 以外のデータベースを使用するには、ドライバ・ファイルを適切なディレクトリにインストールして SiteScope で使用できるようにする必要があります。</p> <p>標準設定値 : <code>sun.jdbc.odbc.JdbcOdbcDriver</code></p> <p>例 : 一般的なデータベース・ドライバ文字列の例については、関連するデータベース・モニタの「Setup Requirements and User Permissions」セクションを参照してください。</p>
資格情報	<p>指定したデータベースでアクセス用の名前およびパスワードが必要な場合に資格情報を許可するためのオプション。</p> <ul style="list-style-type: none"> • ユーザ名およびパスワードを使用 : 手動でユーザの資格情報を入力する場合に、このオプションを選択します。[ユーザ名]ボックスにユーザ名を、[パスワード]ボックスにパスワードを入力してデータベースにアクセスします。 • 事前定義された資格情報を選択 : データベース用の定義済みユーザ名およびパスワードを SiteScope で自動的に設定する場合に、このオプションを選択します(標準設定のオプション)。[資格情報プロファイル]ドロップダウン・リストから使用する資格情報プロファイルを選択するか、[資格情報の追加]をクリックして新規資格情報プロファイルを作成します。このタスクの実行方法の詳細については、623ページ「資格情報のプリファレンスの設定方法」を参照してください。
ツールの実行	<p>ツールを実行し、データベース情報を表示します。テスト結果は[結果]表示枠に表示されます。</p>
ファイルに保存	<p>結果をファイルに保存します。</p>

DNS ツール

このツールでは、ドメイン・ネーム・サーバにある名前を参照してドメイン名に対応する IP アドレスを表示できます。また、ドメインのネーム・サーバの情報も表示されます。

このユーティリティを使用して、DNS サーバからサーバの正しいアドレスが返されることを確認できます。また、このユーティリティでは、外部ドメインのアドレスを参照できることを確認できます。


アクセス方法	<ul style="list-style-type: none">• [ツール]コンテキスト > [ネットワーク ツール] > [DNS ツール]を選択します(「ツールを使用」権限が必要です)。• DNS モニタを設定または表示する場合も使用できます(SiteScope の管理者、または「モニタ・ツールを使用」権限が付与されたユーザーの場合)。<ul style="list-style-type: none">■ 新規モニタを設定する場合は新規モニタのダイアログ・ボックスで、既存のモニタを設定する場合はモニタの[プロパティ]タブで、[ツールを使用]ボタンをクリックします。■ 既存のモニタのテスト・ツールを実行するには、SiteScope ダッシュボード・ツールバーの[ツール] ボタンをクリックします。これにより、ツールが開き、モニタの既存のデータを入力に使用して実行されます。テスト結果は[結果]表示枠に表示されます。
関連タスク	140ページ「モニタの設定時またはトラブルシューティング時の SiteScope ツールの使用方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none">• 139ページ「SiteScope ツールの概要」• 99ページ「[ツール]メニュー」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
DNS サーバ	DNS サーバの IP アドレスまたはホスト名。空のままにすると、ローカル DNS サーバが使用されます。
解決するホスト名	IP アドレスに変更するドメイン名。
ツールの実行	テストを実行します。ツールによって要求が[DNS サーバ]ボックスに入力した DNS サーバに送信され、[解決するホスト名]ボックスに入力したホスト名に対応する IP アドレスが表示されます。テスト結果は[結果]表示枠に表示されます。
ファイルに保存	結果をファイルに保存します。

イベント・ログ・ツール

このツールでは、Windows イベント・ログの一部をローカルまたはリモート・サーバで表示できます。

アクセス方法	<ul style="list-style-type: none"> • [ツール]コンテキスト > [オペレーティング システム ツール] > [イベント ログ ツール]を選択します(「ツールを使用」権限が必要です)。 • Microsoft Windows イベント・ログ・モニタを設定または表示する場合も使用できます(SiteScope の管理者, または「モニタ・ツールを使用」の権限が付与されたユーザの場合)。 ■ 新規モニタを設定する場合は新規モニタのダイアログ・ボックスで, 既存のモニタを設定する場合はモニタの[プロパティ]タブで, [ツールを使用]ボタンをクリックします。 ■ 既存のモニタのテスト・ツールを実行するには, SiteScope ダッシュボード・ツールバーの[ツール]ボタン  をクリックします。これにより, ツールが開き, モニタの既存のデータを入力に使用して実行されます。テスト結果は[結果]表示枠に表示されます。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> • データベース・ドライバやユーザ名によって, 表示される情報が大幅に変わります。 • このツールは, UNIX プラットフォームにインストールされた SiteScope ではサポートされていません。
関連タスク	140ページ「モニタの設定時またはトラブルシューティング時の SiteScope ツールの使用方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> • 139ページ「SiteScope ツールの概要」 • 99ページ「[ツール]メニュー」


ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
サーバ	<p>イベント・ログを監視するサーバ。サーバのリスト(SiteScope で設定したリモート・サーバのみが表示されます)からサーバを選択します。または, [サーバの参照]ボタンをクリックしてローカル・ドメインからサーバを選択するか, [リモート サーバの追加]をクリックして新しいサーバを追加します。</p> <p>標準設定値 : SiteScope サーバ(SiteScope がインストールされているサーバ)</p>

UI 要素	説明
サーバの参照	<p>監視対象のサーバを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • サーバの参照 : ローカル・ドメインに表示されるサーバのドロップダウン・リストからサーバを選択します。 • サーバ名の入力 : 監視対象サーバがネットワークで認識されていない、または [リモート サーバ] で設定されていないために、監視対象サーバが [サーバ] リストに表示されない場合、監視対象サーバの IP アドレスまたは名前を入力します。[サーバ名の入力] ボックスで入力したマシン名の先頭に、2 つの円記号 ("\\") が自動的に追加されます。 <p>注 : ドメインの権限が付与されているか、Windows リモート・サーバへのアクセスが認証されている必要があります。リモート Windows サーバの設定方法の詳細については、525ページ「リモート Microsoft Windows サーバを監視するための SiteScope の設定方法」を参照してください。</p>
リモート・サーバの追加	<p>リモート・サーバを追加および設定します。ユーザ・インタフェースの詳細については、535ページ「[新規 Microsoft Windows リモート サーバ]/[Microsoft Windows リモート サーバの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p>
ログ名	<p>表示するログ・ファイルのタイプを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • アプリケーション • ディレクトリ・サービス • DNS • ファイル・レプリケーション・サービス • セキュリティ • システム <p>標準設定値 : システム</p>
表示イベント数	<p>該当のイベント・ログの表示エントリ数。ログの最新のエントリが最初に表示されます。</p> <p>標準設定値 : 10</p>
ツールの実行	<p>テストを実行し、ログ・エントリのリストを更新します。ログ・エントリは [結果] 表示枠に表示されます。</p>
ファイルに保存	<p>結果をファイルに保存します。</p>

FTP ツール

このツールでは、FTP サーバにアクセスして SiteScope(FTP クライアントとして機能)とFTP サーバのやり取りを表示できます。たとえば、FTP サーバが正常に機能していないことを示す警告を SiteScope から受信した場合、まずこのツールを使用して問題を特定します。

アクセス方法	<ul style="list-style-type: none"> • [ツール]コンテキスト > [Web ツール] > [FTP ツール]を選択します ('ツールを使用'権限が必要です)。 • FTP モニタを設定または表示する場合も使用できます(SiteScope の管理者, または「モニタ・ツールを使用」権限が付与されたユーザの場合)。 ■ 新規モニタを設定する場合は新規モニタのダイアログ・ボックスで, 既存のモニタを設定する場合はモニタの[プロパティ]タブで, [ツールを使用]ボタンをクリックします。 ■ 既存モニタに対するテスト・ツールを実行するには, [ツール]  ボタンをクリックします。このボタンは, SiteScope ダッシュボード・ツールバーにあります。これにより, ツールが開き, モニタの既存のデータを入力に使用して実行されます。テスト結果は[結果]表示枠に表示されます。
関連タスク	140ページ「モニタの設定時またはトラブルシューティング時の SiteScope ツールの使用方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> • 139ページ「SiteScope ツールの概要」 • 99ページ「[ツール]メニュー」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
基本 FTP 設定	
FTP サーバ	<p>テストする FTP サーバの IP アドレスまたは名前。</p> <p>例 : 206.168.191.22 または ftp.thiscompany.com</p>
ファイル	<p>取得するファイル名。</p> <p>例 : \pub\docs\mydoc.txt</p>
ユーザ名	FTP サーバにログオンするために使用する名前。
パスワード	FTP サーバにログオンするために使用するパスワード。
パッシュ・モード	SiteScope では, パッシュ FTP 接続を使用します。通常これは, ファイアウォール経由で FTP サーバにアクセスする場合に必要です。
HTTP プロキシ設定	
HTTP プロキシ	FTP テストにプロキシ・サーバを使用する場合のプロキシ名または IP アドレス。
プロキシのユーザ名	プロキシ・サーバにログインするために使用する名前。
プロキシ・パスワード	プロキシ・サーバにログインするために使用するパスワード。

UI 要素	説明
ツールの実行	テストを実行します。テスト結果が[結果]表示枠に表示されていることを確認します。
ファイルに保存	結果をファイルに保存します。


例

次に、FTP ツールのサンプル出力を示します。このサンプルでは、FTP サーバで問題なくログオンが許可され、サーバが実行されて要求が受け入れられています。要求されたファイル file.txt をサーバで特定できなかったために障害が発生しています。欠落しているファイルを置換するか、ファイルの場所を確認すればこの問題は簡単に解決します。

```
Received:220 public Microsoft FTP Service (Version 2.0).
Sent:USER anonymous
Received:331 Anonymous access allowed, send identity (e-mail name)
as password.
Sent:PASS anonymous
Received:230 Anonymous user logged in.
Sent:PASV
Received:227 Entering Passive Mode (206,168,191,1,5,183).Connecting
to server 206.168.191.1 port 1463 Sent:RETR file.txt
Received:550 file.txt:The system cannot find the file specified.
Sent:QUIT
Received: 221
```

LDAP 認証状態ツール

このツールでは、Lightweight Directory Access Protocol(LDAP)サーバで単純な認証を実行してユーザを認証できるかどうかを確認できます。

アクセス方法	<ul style="list-style-type: none">• [ツール]コンテキスト > [データベース ツール] > [LDAP 認証状態ツール]を選択します(「ツールを使用」権限が必要です)。• LDAP モニタや Active Directory レプリケーション・モニタを設定または表示する場合も使用できます(SiteScope の管理者、または「モニタ・ツールを使用」権限が付与されたユーザの場合)。<ul style="list-style-type: none">■ 新規モニタを設定する場合は新規モニタのダイアログ・ボックスで、既存のモニタを設定する場合はモニタの[プロパティ]タブで、[ツールを使用]ボタンをクリックします。■ 既存のモニタのテスト・ツールを実行するには、SiteScope ダッシュボード・ツールバーの[ツール]  ボタンをクリックします。これにより、ツールが開き、モニタの既存のデータを入力に使用して実行されます。テスト結果は[結果]表示枠に表示されます。
--------	---

関連タスク	140ページ「モニタの設定時またはトラブルシューティング時の SiteScope ツールの使用方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> 139ページ「SiteScope ツールの概要」 99ページ「[ツール]メニュー」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
セキュリティ・プリンシパル	<p>サービスの呼び出し側を認証するプリンシパルの ID を指定するための、環境プロパティの名前を保持する定数。プリンシパルの形式は、認証スキームによって異なります。このプロパティを指定しない場合は、サービス・プロバイダによって動作が決定されます。次の形式を使用します。uid=testuser,ou=TEST,o=mydomain.com。</p> <p>注 : SiteScope では、等号(“=”), セミコロン(“;”), 引用符(“”)の1つ以上の文字がユーザ名に使用されているユーザはサポートされません。</p>
セキュリティ資格情報	<p>サービスの呼び出し側を認証するプリンシパルの資格情報を指定するための、環境プロパティの名前を保持する定数。プロパティの値は、認証スキームによって異なります。たとえば、ハッシュ化されたパスワード、クリア・テキスト・パスワード、鍵、証明書などになります。このプロパティを指定しない場合は、サービス・プロバイダによって動作が決定されます。</p>
LDAP サービス・プロバイダ	<p>使用するサービス・プロバイダの設定情報を指定するための、環境プロパティの名前を保持する定数。プロパティの値には URL 文字列が含まれます。このプロパティは、アプレット・パラメータ、システム・プロパティ、リソース・ファイルで指定できます。これらのソースで指定しない場合は、サービス・プロバイダによって標準設定が決定されます。</p> <p>例 : ldap://<somehost>:389</p>
オブジェクト・クエリ	<p>標準設定のユーザ dn オブジェクト以外の LDAP オブジェクトを参照するためのオブジェクト・クエリ。LDAP フィルタを使用する場合、このテキスト・ボックスに有効なオブジェクト・クエリを入力する必要があります。検索フィルタの詳細については、後述の説明を参照してください。</p> <p>例 : 上記で入力した dn オブジェクトに関連付けられている電子メール・アドレスをチェックするためのメール・オブジェクトを入力します。</p>
LDAP フィルタ	<p>フィルタ条件を使用して LDAP を検索します。LDAP フィルタの構文は、論理演算子が引数の前にくる前置表記法の論理式になります。</p> <p>例 : 項目 sn=Freddie は、sn 属性の属性値が Freddie になる必要があることを意味しています。</p> <p>複数の項目をフィルタ文字列に含めるには、(sn=Freddie)のように各項目を括弧で囲み、&(結合演算子)などの論理演算子で結合して論理式を作成します。</p> <p>例 : フィルタの構文(& (sn=Freddie) (mail=*))では、Freddie の sn 属性と任意の mail 属性がある LDAP エントリが要求されます。</p>

UI 要素	説明
ツールの実行	テストを実行します。LDAP 認証テストの結果は[結果]表示枠に表示されます。
ファイルに保存	結果をファイルに保存します。

リンク・チェック・ツール

このツールを使用すると、Web ページの内部リンクおよび外部リンクをすべて検証して、リンクが使用できるかどうかを確認できます。また、Web ページの可用性、サイズ、コンテンツ・タイプ、ページを取得するのに要する平均時間などの URL 固有のパラメータをチェックします。

ツールを実行するたびに、[結果]表示枠に結果が表示されます。結果を Excel または PDF ファイルにエクスポートできます。

アクセス方法	<ul style="list-style-type: none">• [ツール]コンテキスト > [Web ツール] > [リンク チェック ツール]を選択します([ツールを使用]権限が必要です)。• リンク・チェック・モニタを設定または表示する場合も使用できます(SiteScope の管理者、または「モニタ・ツールを使用」権限が付与されたユーザの場合)。<ul style="list-style-type: none">■ 新規モニタを設定する場合は新規モニタのダイアログ・ボックスで、既存のモニタを設定する場合はモニタの[プロパティ]タブで、[ツールを使用]ボタンをクリックします。■ 既存のモニタのテスト・ツールを実行するには、SiteScope ダッシュボード・ツールバーの[ツール]ボタンをクリックします。これにより、ツールが開き、モニタの既存のデータを入力に使用して実行されます。テスト結果は[結果]表示枠に表示されます。
重要な情報	データ・タイプに応じて、テーブル内のデータを昇順または降順に並べ替えることができます。または、時間、サイズ、タイプ、内部データ、外部データ、カウントでフィルタできます。
関連タスク	140ページ「モニタの設定時またはトラブルシューティング時の SiteScope ツールの使用方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none">• 139ページ「SiteScope ツールの概要」• 99ページ「[ツール]メニュー」

[リンク チェック ツール] パネル

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。







UI 要素	説明
メイン設定	

UI 要素	説明
URL	<p>リンク・チェックの起点となる URL。リンク・ツールは、この URL のページを取得して、そのページにあるすべてのリンクの URL を読み取ります。サイトにあるすべてのリンクのチェックが完了するまで処理を続行します。ほかのサーバへのリンクもチェックされますが、継続してそのサーバにあるすべてのリンクをチェックすることはありません。</p> <p>例 : <code>http://demo.thiscompany.com</code></p>
一時停止 (ミリ秒)	<p>各リンク・チェック間の遅延時間(ミリ秒)。値を大きくするとリンク・チェックに要する合計時間が長くなりますが、サーバにかかる負荷は小さくなります。</p> <p>標準設定値 : 15 ミリ秒</p>
タイムアウト (秒単位)	<p>ページのダウンロードを開始してからタイムアウトするまでツールが待機する時間(秒単位)。この期間を経過すると、URL モニタはエラーを記録し、エラー・ステータスであることをレポートします。</p> <p>標準設定値 : 5 秒</p>
最大リンク 数	<p>このツールがチェックするリンクの最大数。リンクの最大数に達すると、モニタは停止し、チェックしたリンクの結果をレポートします。サイトが大規模で、サイトにあるすべてのリンクをチェックする場合は、この値を大きくします。</p> <p>標準設定値 : 100</p>
モニタ実行 の結果データ を使用	<p>選択すると、最後にモニタが実行されたときのリンク・チェックの結果データが表示されます。</p> <p>注 : ダッシュボードからツールが実行された場合にのみ、このチェック・ボックスを選択できます([ツール]パネルから実行された場合は、選択できません)。</p> <p>標準設定値 : 選択されている</p>
認証設定	
認証ユーザ 名	URL にアクセスするためのユーザ名(必要な場合)。
認証パス ワード	URL にアクセスするためのパスワード(必要な場合)。
プロキシ設定	
HTTP プロ キシ	プロキシ・サーバを使用して URL にアクセスする場合の HTTP プロキシ・サーバのドメイン名とポート。
プロキシ・ サーバの ユーザ名	このプロキシ・サーバで URL へのアクセスに名前が必要な場合に使用するプロキシ・サーバ・ユーザ名。技術的な注記 : これらのオプションが機能するには、プロキシ・サーバでプロキシ認証がサポートされている必要があります。

UI 要素	説明
プロキシ・サーバのパスワード	このプロキシ・サーバで URL へのアクセスに必要な場合に使用するプロキシ・サーバ・パスワード。 注 : これらのオプションが機能するには、プロキシ・サーバでプロキシ認証がサポートされている必要があります。
ツールの実行	テストを実行し、結果を[結果]表示枠に表示します。URL 内の各リンクは、情報とともに別の行に表示されます。詳細については、 156ページ「[結果]パネル」 を参照してください。

[結果]パネル

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
	Excel または PDF にエクスポート : リンク・チェックの結果を Excel または PDF ファイルにエクスポートして保存できます。
	 <p>フィルタの編集 : テーブルに表示されているデータをフィルタできます。</p> <p>演算子 : 下矢印をクリックして演算子を選択します(= 等しい, != 等しくない, < より小さい, <= 以下, > より大きい, >= 以上, ln - 入力した値を含む)。</p> <p>現在のフィルタを適用 : 緑色のチェックをクリックして、フィルタを適用します。</p> <p>現在のフィルタをクリア : ごみ箱をクリックして、フィルタをクリアします。</p>
	表示列を変更 : テーブルに表示する列を選択できます。 [状態]および[時間]列は常に表示されます。
状態	URL 内のリンクの状態。 <ul style="list-style-type: none"> ●  OK ●  エラー 状態がエラーの場合、エラーに関する説明が表示されます。 たとえば、bad request, unauthorized, unable to connect, timed out reading です。
サイズ(KB)	リンクから利用できる Web ページのサイズ。
時間	URL 内のリンクの応答時間。
予測時間 (秒)	予測時間(秒)。
内容のタイプ	URL 内のリンクのコンテンツ・タイプ。

UI 要素	説明
URL	リンクの URL。ハイパーリンクをクリックして、リンク・ページを開きます。
ソース・ページ	リンクのソース・ページ。ハイパーリンクをクリックして、ソース・ページを開きます。
外部	リンクが外部 (yes) であるか、内部 (no) であるかを示します。
カウント	URL ページに到達するリンクの数。

ログ分析ツール

このツールによって、ファイル内で繰り返しパターンを示すためにログ・ファイルをスキャンできます。ツールがパターンをリストアップしたら、ツールでログ内のそのパターンを監視するための SiteScope ログ・ファイル・モニタを作成できます。

アクセス方法	[ツール] コンテキスト > [共通ユーティリティ ツール] > [ログ分析ツール] を選択します(「ツールを使用」権限が必要です)。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none">分析するログの構造に一貫性がない場合は、このツールを使用できません。ログ分析ツールで検出されたパターンのログ・ファイル・モニタを作成した後で、新しいモニタがモニタ・ツリーにリストされます。分析するテキストが配置されているログ・ファイル内の場所をログ分析ツールログ・ファイルに通知するには、正規表現または分析するテキストの前にあるテキストのブロック数を指定できます。 制限事項 : 分析するログ・ファイルのサイズは、10 MB を超えないようにしてください。
関連タスク	<ul style="list-style-type: none">140ページ「モニタの設定時またはトラブルシューティング時の SiteScope ツールの使用方法」141ページ「ログ・ファイル・モニタの設定時またはトラブルシューティング時のログ分析ツールの使用方法 - 使用ケースのシナリオ」
関連情報	<ul style="list-style-type: none">139ページ「SiteScope ツールの概要」99ページ「[ツール] メニュー」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
ログ分析ツール領域	
SiteScope サーバ上のフォルダの場所	分析対象のログ・ファイルが配置されている SiteScope サーバ上のフォルダのパスを入力します。

UI 要素	説明
ファイル名	<p>分析対象のログ・ファイル名を入力します。同時に複数ファイル进行分析するには、そのファイルを指定したフォルダにコピーし、分析対象のログ・ファイルのファイル名と一致する正規表現を作成します。</p> <p>例 : error123.log と error345.log を同時に分析するには /error/ と入力します。</p>
正規表現を使用します	<p>正規表現または分析するテキストの前にあるテキストのブロック数を指定できます。</p> <p>正規表現を使用してログ・ファイルで分析するテキストを検索するには、このオプションを選択します。</p>
正規表現	<p>分析するテキストを検索するためにツールが使用する正規表現を入力します。正規表現は、スラッシュ(/)の間に入力する必要があります。</p> <p>このフィールドは[正規表現を使用します]オプションを選択した場合にのみ有効になります。</p> <p>例 : 正規表現の例については、157ページ「ログ分析ツール」を参照してください。</p>
メッセージ開始前のブロック数	<p>ログ・ファイルには多数の情報が含まれます。ログ分析ツールは、メッセージのパターンを探します(たとえば、INFO または ERROR 後のメッセージ)。</p> <p>このフィールドは[正規表現を使用します]オプションを選択した場合は無効です。</p> <p>分析対象のメッセージが開始する場所をツールに示すには、分析するメッセージの先頭の前の、ログの各行に現れる空白によって区切られるテキスト(文字列)のブロック数を指定する必要があります。日付形式に空白が含まれる場合には日付の空白を無視します(以下の[日付形式]を参照してください)。</p> <p>注 : 一貫した構造を持たないログはこのツールで分析できません。</p>
日付があるブロックの順番	<p>左からカウントした、日付が配置されるテキストのブロックの順序を入力します。最初のブロックの数は1です。</p> <p>このフィールドは[正規表現を使用します]オプションを選択すると無効になります。</p>
日付形式	<p>ログで使用される日付形式を選択します。</p> <p>標準設定形式 : yyyy-mm-dd HH:mm:ss,SSS</p>
ツール・タイムアウト(秒単位)	<p>タイムアウトの前にログ分析ツールを待機する時間(秒単位)。</p> <p>標準設定値 : 30 秒</p>
ツールの実行	<p>テストを実行します。すべての繰り返しメッセージ・パターンのリストは[結果]ボックスに表示されます。</p>
結果領域	
新規ログ・ファイル・モニタの作成	<p>パターンを選択しボタンをクリックして[グループの選択]ダイアログ・ボックスを開きます。このダイアログ・ボックスで既存のグループを選択するか、または[新規グループ]ボタンをクリックして新しいグループを作成できます。[内容の照合]ボックスに表示された正規表示が選択された状態で[新規ログ ファイル モニタ]ダイアログ・ボックスが開きます。</p>

UI 要素	説明
メッセージ・パターン	ログで検出されたパターンのリストが表示されます。 リストはパターンの発生数の順に並べられます。
発生数	各パターンのインスタンス数が表示されます。 リストはパターンの発生数の順に並べられます。

正規表現の例

次の構造を持つログで、正規表現

```
\d*-\d*-\d*\s\d*.*,\d*\s\[w.*\]\s\[w.*\]\s[w.*\s]-ls
```

を使用します。ここで、**d** は数字、**w** はワード、**s** はスペース、***** は任意の文字を示します。

```
2010-11-02 11:49:02,738 [SiteScope Main Thread]
(SiteScopeHeartbeatManager.java:53) INFO - The Heartbeat Scheduler
was started.2010-11-02 11:49:02,786 [SiteScope Main Thread]
(ServiceController.java:82) INFO - Registering service:Host DNS
Resolution Service 2010-11-02 11:49:02,951 [SiteScope Main Thread]
(ServiceController.java:82) INFO - Registering service:Monitor
History Event Sink Service 2010-11-02 11:49:03,035 [SiteScope Main
Thread] (ServiceController.java:82) INFO - Registering service:Alert
Action Execution Counter Registry Service 2010-11-02 11:49:03,035
[SiteScope Main Thread] (ServiceController.java:82) ERROR - Connection
Error while trying to connect 2010-11-02 11:49:03,037 [SiteScope Main
Thread] (ServiceController.java:82) INFO - Registering service:Alert
Open Status Registry Service 2010-11-02 11:49:03,277 [SiteScope Main
Thread] (SiteScopeSupport.java:655) INFO
```

次の構造を持つログで、正規表現


```
\d*\s[w*]\s[w*]\s*\d*\s-\ls
```

を使用します。ここで、**d** は数字、**w** はワード、**s** はスペース、***** は任意の文字を示します。

```
123 Error starts *****12***** - The Heartbeat Scheduler was started.123
Error starts *****23***** - Registering service:Host DNS Resolution
Service 123 Error starts *****34***** - Registering service:Monitor
History Event Sink Service 123 Error starts *****45***** - Registering
service:Alert Action Execution Counter Registry Service 123 Error
starts *****45***** - Registering service:Alert Action Execution
Counter Registry Service
```

メールの送受信ツール

このツールでは、ネットワークを使用してメール・サーバをチェックし、メール・サーバで要求が受け入れられているかどうかや、メッセージの送受信ができるかどうかを確認できます。SMTP を使用して標準的なメール・メッセージを送信し、次に POP ユーザ・アカウントを使用してそのメッセージを取得します。SiteScope によって送信される各メッセージには、不正なメッセージを取得していないかや、誤った肯定読み取りを返していないかをチェックするための一意の鍵が含まれています。

アクセス方法	<ul style="list-style-type: none"> • [ツール]コンテキスト > [メール ツール] > [メールの送受信ツール]を選択します(「ツールを使用」権限が必要です)。 • メール・モニタを設定または表示する場合も使用できます(SiteScope の管理者、または「モニタ・ツールを使用」権限が付与されたユーザの場合)。 ■ 新規モニタを設定する場合は新規モニタのダイアログ・ボックスで、既存のモニタを設定する場合はモニタの[プロパティ]タブで、[ツールを使用]ボタンをクリックします。 ■ 既存のモニタのテスト・ツールを実行するには、SiteScope ダッシュボード・ツールバーの[ツール]  ボタンをクリックします。これにより、ツールが開き、モニタの既存のデータを入力に使用して実行されます。テスト結果は[結果]表示枠に表示されます。
関連タスク	140ページ「モニタの設定時またはトラブルシューティング時の SiteScope ツールの使用方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> • 139ページ「SiteScope ツールの概要」 • 99ページ「[ツール]メニュー」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。


UI 要素 説明	
基本メール設定	
アクション	<p>実行するアクションを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 送信と受信：テスト・メッセージを SMTP サーバに送信して POP3 または IMAP4 サーバから受信し、メール・サーバが起動および動作していることを確認できます(標準設定のオプション)。 • 受信のみ：以前に送信したメッセージの受信用メール・サーバ(POP3 または IMAP4)をチェックします。このチェックは、以前に送信したメッセージの内容を照合して行われます。 • 送信のみ：受信用メール・サーバでメッセージが受信されたかどうかをチェックします。
送信元電子メールサーバ (SMTP)	<p>テスト・メール・メッセージを送信する SMTP メール・サーバのホスト名。</p> <p>例 : mail.thiscompany.com</p>
送信先アドレス	<p>テスト・メッセージを送信するメール・アドレス。</p>

UI 要素	説明
受信プロトコル	<p>受信用メール・サーバで使用されるプロトコル。送信したメッセージのPOP3 メール・サーバをチェックするには、POP3 オプションを使用します。送信したメッセージのIMAP メール・サーバをチェックするには、IMAP4 オプションを使用します。</p> <p>標準設定値: POP3</p>
電子メール受信サーバ	<p>テスト・メッセージを受信するPOP メール・サーバのホスト名。これは、テスト・メッセージを送信したメール・サーバと同じにすることができます。</p> <p>例: mail.thiscompany.com</p>
電子メール受信サーバのユーザ名	<p>POP ユーザ・アカウント名。このアカウントにテスト電子メール・メッセージが送信され、アカウントにログインしてメッセージが受信されたことが確認されます。このアカウントのほかのメールは検出されません。このアカウントには、個人用メール・アカウントまたは別の既存のアカウントを使用できます。</p> <p>注: サーバからのメッセージを自動的に受信して削除する電子メール・リーダーを使用する場合、メールの送受信ツールでメール・メッセージが表示されずにエラーがレポートされる可能性があります。</p>
電子メールサーバ・パスワード	<p>必要な場合に使用するテスト・メール・アカウントのパスワード。</p>
内容が一致するのみ受信	<p>受信メッセージの内容を照合するためのテキスト文字列。受信メッセージにこのテキストが含まれていない場合、メールの送受信でエラーがレポートされます。これは、受信専用オプション(Subject:MySubject など)が対象となります。検索では大文字と小文字は区別されます。</p> <p>HTML タグはテキスト・ドキュメントの一部であるため、検索するテキストにHTML タグが含まれている場合はHTML タグも対象となります("< B> Hello< /B> World"など)。これは、XML ページにも当てはまります。</p> <p>文字列をスラッシュで囲んで正規表現による照合を実行できます。最後のスラッシュの後に i を付けると、照合で大文字と小文字が区別されません。たとえば、"/href=Doc\d+\.html/"や"/href=doc\d+\.html/i"のようになります。</p> <p>特定のテキスト部分を保存して状態の一部として表示する場合、正規表現に括弧を使用します(/Temperature: (\d+)/ など)。これにより、ページに表示されるときに該当の温度が返されます。</p>
詳細メール設定	
タイムアウト(秒単位)	<p>メール・メッセージの受信を待機する秒数。この秒数を超えるとタイムアウトになります。</p> <p>標準設定値: 300 秒</p>

UI 要素	説明
POP チェック の遅延 (秒)	SiteScope によってテスト・メッセージが送信された直後に、メール・アカウントにログインしてメッセージが受信されたことが確認されます。メッセージが受信されていない場合、SiteScope では再チェック前に自動的に 10 秒間待機します。待機時間は、このボックスに別の秒数を指定して調整できます。 標準設定値 : 10 秒
NTLM 認証	電子メール・サーバで NTLM 認証が使用される場合の NTLM のバージョン(バージョン 1 または 2)。 標準設定値 : なし
詳細表示	送受信テストの詳細が表示されます。
ツールの 実行	テストを実行します。メール・サーバのテスト結果が[結果]表示枠に表示されていることをチェックします。
ファイル に保存	結果をファイルに保存します。

Microsoft Windows Media Player ツール

このツールでは、Microsoft Windows Media Player のストリーミングをテストできます。

アクセス方法	<ul style="list-style-type: none"> • [ツール]コンテキスト > [アプリケーション ツール] > [Microsoft Windows Media Player ツール]を選択します('ツールを使用'権限が必要です)。 • Microsoft Windows Media Player モニタを設定または表示する場合も使用できます(SiteScope の管理者、または「モニタ・ツールを使用」権限が付与されたユーザの場合)。 ■ 新規モニタを設定する場合は新規モニタのダイアログ・ボックスで、既存のモニタを設定する場合はモニタの[プロパティ]タブで、[ツールを使用]ボタンをクリックします。 ■ 既存のモニタのテスト・ツールを実行するには、SiteScope ダッシュボード・ツールバーの[ツール]  ボタンをクリックします。これにより、ツールが開き、モニタの既存のデータを入力に使用して実行されます。テスト結果は[結果]表示枠に表示されます。
関連タスク	140ページ「モニタの設定時またはトラブルシューティング時の SiteScope ツールの使用方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> • 139ページ「SiteScope ツールの概要」 • 99ページ「[ツール]メニュー」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
URL	テストするメディア・ファイルまたはストリーミング・ソースの URL。メディア・ファイルの URL である必要があります。 例 : mms://< サーバ名 > /sample.asf(ユニキャスト・ストリームの場合)または http://< サーバ名 > /stationid.nsc(Windows Media Server マルチキャスト・ステーション・プログラムを使用したマルチキャスト・ストリームの場合) 注 : このモニタでは .asx または .mov 形式はサポートされていません。
継続時間 (ミリ秒)	ツールで使用するメディア・ファイルまたはソースの再生を継続する時間。この継続時間の値は、ファイルに含まれているメディアの継続時間に一致している必要はありません。 テストするファイルまたはソースのメディア・コンテンツが、テストに選択した継続時間の値よりも短い場合、モニタではメディア・コンテンツがすべて再生され、その結果がレポートされます。この結果にはメディア・コンテンツの再生に要した時間が含まれます。
ツールの実行	テストを実行します。メール・サーバのテスト結果が[結果]表示枠に表示されていることをチェックします。
ファイルに保存	結果をファイルに保存します。

ネットワーク状態ツール

このツールでは、現在のネットワーク・インタフェースの統計情報がレポートされ、アクティブなネットワーク接続が表示されます。この情報は、ネットワーク・インタフェースの状況を判断するのに役立つ場合があります。また、ネットワーク接続が開いたまま残されていたり、接続が閉じられることなく次々と開かれていくといった暴走状態などの問題を追跡できます。


アクセス方法	[ツール]コンテキスト > [ネットワーク ツール] > [ネットワーク状態ツール]を選択します(「ツールを使用」権限が必要です)。
重要な情報	このツールは、UNIX プラットフォームにインストールされた SiteScope ではサポートされていません。
関連タスク	140ページ「モニタの設定時またはトラブルシューティング時の SiteScope ツールの使用方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none">139ページ「SiteScope ツールの概要」99ページ「[ツール]メニュー」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
ツールの実行	ネットワーク状態ツールを実行し、ネットワーク情報をレポートします。データは[結果]表示枠に表示されます。
ファイルに保存	結果をファイルに保存します。

ニュース・サーバ・ツール

このツールを使用して、ニュース・サーバにアクセスし、SiteScope(ニュース・クライアントとして機能)とニュース・サーバの間の NNTP 相互通信を表示できます。


アクセス方法	<ul style="list-style-type: none">• [ツール]コンテキスト > [アプリケーション ツール] > [ニュース サーバツール] を選択します(「ツールを使用」権限が必要です)。• ニュース・モニタを設定または表示する場合も使用できます(SiteScope の管理者、または「モニタ・ツールを使用」権限が付与されたユーザの場合)。<ul style="list-style-type: none">■ 新規モニタを設定する場合は新規モニタのダイアログ・ボックスで、既存のモニタを設定する場合はモニタの[プロパティ]タブで、[ツールを使用]ボタンをクリックします。■ 既存のモニタのテスト・ツールを実行するには、SiteScope ダッシュボード・ツールバーの[ツール]  ボタンをクリックします。これにより、ツールが開き、モニタの既存のデータを入力に使用して実行されます。テスト結果は[結果]表示枠に表示されます。
関連タスク	140ページ「モニタの設定時またはトラブルシューティング時の SiteScope ツールの使用方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none">• 139ページ「SiteScope ツールの概要」• 99ページ「[ツール]メニュー」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
ニュース・サーバ	ニュース・サーバの名前。形式は次のとおりです。 news.sitescope.com または news.sitescope.com:7777
ニュース・グループ	ニュース・グループ名(任意指定)。複数のニュース・グループ名はカンマ(“,”)で区切ります。
ユーザ名	上記で指定したニュース・サーバへのアクセスに名前およびパスワードが必要な場合に使用するユーザ名。
パスワード	上記で指定したニュース・サーバへのアクセスに名前およびパスワードが必要な場合に使用するパスワード。
ツールの実行	テストを実行します。テスト結果は[結果]表示枠に表示されます。
ファイルに保存	結果をファイルに保存します。

パフォーマンス・カウンタ・ツール

このツールを使用して、Windows ネットワーク内の特定のマシンのパフォーマンス・カウンタをチェックできます。このツールは、SiteScope の一部として供給される **perfex.exe** 実行ファイルへのインタフェースを提供します。

アクセス方法	<ul style="list-style-type: none">• [ツール]コンテキスト > [オペレーティング システム ツール] > [パフォーマンス カウンタ ツール]を選択します(「ツールを使用」権限が必要です)。• CPU モニタ, ダイナミック・ディスク領域 モニタ, メモリ・モニタ, Microsoft Windows パフォーマンス・カウンタ・モニタを設定または表示するときにも使用できます(SiteScope の管理者, または「モニタ・ツールを使用」権限が付与されたユーザの場合)。<ul style="list-style-type: none">■ 新規モニタを設定する場合は新規モニタのダイアログ・ボックスで, 既存のモニタを設定する場合はモニタの[プロパティ]タブで, [ツールを使用]ボタンをクリックします。■ 既存のモニタのテスト・ツールを実行するには, SiteScope ダッシュボード・ツールバーの[ツール]ボタン  をクリックします。これにより, ツールが開き, モニタの既存のデータを入力に使用して実行されます。テスト結果は[結果]表示枠に表示されます。
重要な情報	このツールは、UNIX プラットフォームにインストールされた SiteScope ではサポートされていません。
関連タスク	140ページ「モニタの設定時またはトラブルシューティング時の SiteScope ツールの使用方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none">• 139ページ「SiteScope ツールの概要」• 99ページ「[ツール]メニュー」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。


UI 要素	詳細
パフォーマンス・カウンタ・ツール	

UI 要素	詳細
サーバ	<p>監視する Windows パフォーマンス・カウンタのオブジェクトが実行されているサーバ。サーバのリスト (SiteScope で設定したリモート・サーバのみが表示されます) からサーバを選択します。または, [サーバの参照] ボタンをクリックしてローカル・ドメインからサーバを選択するか, [Microsoft Windows リモート サーバを追加] をクリックして新しいサーバを追加します。</p> <p>標準設定値 : SiteScope サーバ (SiteScope がインストールされているサーバ)</p> <p>管理ユーザ・アカウント / パスワード</p> <p>クエリ対象のマシンの管理ユーザ名とパスワードを入力してください。この入力が必要になるのは, 接続しようとしているドメインまたはワークグループのパフォーマンス・カウンタにアクセスする管理権限を持たないアカウントで SiteScope 実行中の場合だけです。</p> <p>パスワードを入力する必要があることをテストで示された場合は, パフォーマンス・カウンタ・レジストリへのアクセス権限がリモート・マシンに必要です。</p> <p>ヒント : [カウンタ オブジェクト] のドロップダウン・リストに「(利用可能なカウンタ オブジェクトなし このユーザ名とパスワードを使用)」というメッセージが表示されており, ユーザ名とパスワードを入力してない場合は, 次のどれかを実行して, 設定対象としているリモート・マシンのレジストリへのアクセスを可能にします。</p> <p>ローカルの管理権限を持つリモート・マシンに対する SiteScope Windows リモート接続をセットアップします。</p> <p>自分のリモート・マシンへのアクセス権を持つユーザとして SiteScope サービスを実行します。</p>
サーバの参照	<p>[HP SiteScope サーバの検索] ダイアログ・ボックスが開き, 監視対象のサーバを選択できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● サーバの参照 : ローカル・ドメインに表示されるサーバのドロップダウン・リストからサーバを選択します。 ● サーバ名の入力 : 監視対象サーバがネットワークで認識されていない, または [リモート サーバ] で設定されていないために, 監視対象サーバが [サーバ] リストに表示されない場合, 監視対象サーバの IP アドレスまたは名前を入力します。[サーバ名の入力] ボックスで入力したマシン名の先頭に, 2 つの円記号 ("\\") が自動的に追加されます。 <p>注 : ドメインの権限が付与されているか, Windows リモート・サーバへのアクセスが認証されている必要があります。リモート Windows サーバの設定方法の詳細については, 525ページ「リモート Microsoft Windows サーバを監視するための SiteScope の設定方法」を参照してください。</p>

UI 要素	詳細
リモート・サーバの追加	<p>[リモート サーバの追加]ダイアログ・ボックスが開き、追加するリモートのタイプ (Windows または UNIX)を選択して設定の詳細を入力できます。</p> <p>Microsoft Windows リモート・サーバのユーザ・インタフェースの詳細については、535 ページ「[新規 Microsoft Windows リモート サーバ]/[Microsoft Windows リモート サーバの編集]ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p> <p>UNIX リモート・サーバのユーザ・インタフェースの詳細については、541ページ「[新規 UNIX リモート サーバ]/[UNIX リモート サーバの編集]ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p>
カウンタ	個々のパフォーマンス・カウンタおよび選択したカウンタ・オブジェクトの対応する値を表示する、カウンタ・オブジェクトを選択します。
ツールの実行	ツールを実行し、個々の Windows パフォーマンス・カウンタおよび選択したカウンタ・オブジェクトの対応する値を表示します。この情報は[結果]表示枠に表示されます。
ファイルに保存	結果をファイルに保存します。
結果	
カウンタ名	パフォーマンス・カウンタ名。
カウンタ値	パフォーマンス・カウンタ・オブジェクトの値。
カウンタの詳細	パフォーマンス・カウンタの詳細。
PERF タイプ	カウンタ・タイプの詳細。

Ping ツール

このツールでは、往復時間とパスが表示されます。このツールによってパケットが別の場所送信され、送信者に返されます。ネットワークに問題がある場合、pingを使用して別の場所に到達できるかどうかわかります。Ping ツールでは、現在のサーバから別の場所にpingを行います。

アクセス方法	<ul style="list-style-type: none">• [ツール]コンテキスト > [ネットワーク ツール] > [Ping ツール]を選択します(「ツールを使用」権限が必要です)。• Ping モニタやポート・モニタを設定または表示する場合も使用できます (SiteScope の管理者、または「モニタ・ツールを使用」権限が付与されたユーザの場合)。<ul style="list-style-type: none">■ 新規モニタを設定する場合は新規モニタのダイアログ・ボックスで、既存のモニタを設定する場合はモニタの[プロパティ]タブで、[ツールを使用]ボタンをクリックします。■ 既存のモニタのテスト・ツールを実行するには、SiteScope ダッシュボード・ツールバーの[ツール]  ボタンをクリックします。これにより、ツールが開き、モニタの既存のデータを入力に使用して実行されます。テスト結果は[結果]表示枠に表示されます。
関連タスク	140ページ「モニタの設定時またはトラブルシューティング時の SiteScope ツールの使用方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none">• 139ページ「SiteScope ツールの概要」• 99ページ「[ツール]メニュー」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
解決するホスト名	ping するホストのドメイン名または IP アドレス。 例 : demo.thiscompany.com または 206.168.112.53
ツールの実行	ドメイン名または IP アドレスに Ping します。テスト結果は[結果]表示枠に表示されます。
ファイルに保存	結果をファイルに保存します。

プロセス・ツール

このツールでは、SiteScope がインストールされているサーバで実行中のプロセスが表示されます。これは、重要なプロセスが利用可能であることを確認する場合に便利です。


アクセス方法	[ツール]コンテキスト > [オペレーティング システム ツール] > [プロセス ツール]を選択します(「ツールを使用」権限が必要です)。
関連タスク	140ページ「モニタの設定時またはトラブルシューティング時の SiteScope ツールの使用方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none">• 139ページ「SiteScope ツールの概要」• 99ページ「[ツール]メニュー」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
サーバ	<p>監視対象プロセスが実行されているサーバ。サーバのリスト (SiteScope で設定したリモート・サーバのみが表示されます) からサーバを選択します。または、[サーバの参照] ボタンをクリックしてローカル・ドメインからサーバを選択するか、[リモート サーバの追加] をクリックして新しいサーバを追加します。</p> <p>標準設定値 : SiteScope サーバ (SiteScope がインストールされているサーバ)</p>
サーバの参照	<p>[HP SiteScope サーバの検索] ダイアログ・ボックスが開き、監視対象のサーバを選択できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> サーバの参照 : ローカル・ドメインに表示されるサーバのドロップダウン・リストからサーバを選択します。 サーバ名の入力 : 監視対象サーバがネットワークで認識されていない、または [リモート サーバ] で設定されていないために、監視対象サーバが [サーバ] リストに表示されない場合、監視対象サーバの IP アドレスまたは名前を入力します。[サーバ名の入力] ボックスで入力したマシン名の先頭に、2 つの円記号 ("\\") が自動的に追加されます。 <p>注 : ドメインの権限が付与されているか、Windows リモート・サーバへのアクセスが認証されている必要があります。リモート Windows サーバの設定方法の詳細については、525 ページ「リモート Microsoft Windows サーバを監視するための SiteScope の設定方法」を参照してください。</p>
リモート・サーバの追加	<p>[リモート サーバの追加] ダイアログ・ボックスが開き、追加するリモートのタイプ (Windows または UNIX) を選択して設定の詳細を入力できます。</p> <p>Microsoft Windows リモート・サーバのユーザ・インタフェースの詳細については、535 ページ「[新規 Microsoft Windows リモート サーバ]/[Microsoft Windows リモート サーバの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p> <p>UNIX リモート・サーバのユーザ・インタフェースの詳細については、541 ページ「[新規 UNIX リモート サーバ]/[UNIX リモート サーバの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p>
ツールの実行	テストを実行します。テスト結果は [結果] 表示枠に表示されます。
ファイルに保存	結果をファイルに保存します。

Real Media Player ツール

このツールでは、Real Media Player のストリーミングをテストできます。

アクセス方法	<ul style="list-style-type: none"> • [ツール]コンテキスト > [アプリケーション ツール] > [Real Media Player ツール]を選択します(「ツールを使用」権限が必要です)。 • Real Media Player モニタを設定または表示する場合も使用できます (SiteScope の管理者、または「モニタ・ツールを使用」権限が付与されたユーザの場合)。 ■ 新規モニタを設定する場合は新規モニタのダイアログ・ボックスで、既存のモニタを設定する場合はモニタの[プロパティ]タブで、[ツールを使用]ボタンをクリックします。 ■ 既存のモニタのテスト・ツールを実行するには、SiteScope ダッシュボード・ツールバーの[ツール]  ボタンをクリックします。これにより、ツールが開き、モニタの既存のデータを入力に使用して実行されます。テスト結果は[結果]表示枠に表示されます。
関連タスク	140ページ「モニタの設定時またはトラブルシューティング時の SiteScope ツールの使用方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> • 139ページ「SiteScope ツールの概要」 • 99ページ「[ツール]メニュー」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
URL	<p>テストするメディア・ファイルまたはストリーミング・ソースの URL。メディア・ファイルの URL である必要があります。</p> <p>注：</p> <ul style="list-style-type: none"> • このツールでは、(音声ではなく)ビデオ・ストリームのみをテストできます。 • このツールでは、.smi 形式などのメタデータ・ファイルはサポートされていません。
継続時間 (ミリ秒)	<p>ツールで使用するメディア・ファイルまたはソースの再生を継続する時間。この継続時間の値は、ファイルに含まれているメディアの継続時間に一致している必要はありません。</p> <p>テストするファイルまたはソースのメディア・コンテンツが、テストに選択した継続時間の値よりも短い場合、モニタではメディア・コンテンツがすべて再生され、その結果がレポートされます。この結果にはメディア・コンテンツの再生に要した時間が含まれます。</p>
ツールの実行	テストを実行します。テスト結果は[結果]表示枠に表示されます。
ファイルに保存	結果をファイルに保存します。

正規表現ツール

このツールを使用すると、正規表現の照合を実行できます。

アクセス方法	[ツール]コンテキスト > [共通ユーティリティツール] > [正規表現ツール]を選択します (「ツールを使用」権限が必要です)。
関連タスク	140ページ「モニタの設定時またはトラブルシューティング時の SiteScope ツールの使用方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none">139ページ「SiteScope ツールの概要」99ページ「[ツール]メニュー」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
テキスト	正規表現の照合を実行する文字列または値を含むテキストの一部をコピーして、このボックスに貼り付けます。 正規表現を効率よく作成するために、照合する対象データまたはパターンに先行する内容をすべて含める必要があります。たとえば、Web ページの内容を照合するための正規表現を作成する場合、183ページ「URL ツール」を使用して HTTP ヘッダを含む HTTP の内容全体を取得する必要があります。
正規表現	入力したテキストの一部を照合するには、正規表現をスラッシュ(/)で囲んで入力します。 注：復帰改行および行送りが含まれる複数行の内容の場合、表現の最後に s 検索修飾子を追加して内容を 1 行のテキストとして扱うことを検討してください。 例：/value:\W[\d]{2,6}/s
ツールの実行	テストを実行します。照合テストの結果は[結果]表示枠に表示されます。正規表現に問題がある場合、エラー・メッセージが表示されます。
ファイルに保存	結果をファイルに保存します。

解析された括弧および一致文字列テーブル


本項で説明するテーブルには、正規表現内の括弧のペアによって保持された値または逆参照として要求される一致が表示されます。表現に括弧が含まれていない場合、このテーブルは空です。解析された括弧テーブルには次の列があります。

UI 要素	詳細
左から数えた括弧の数	左から数えた、正規表現内の括弧で区切られたパターンが表示されます。
一致テキスト	左側の列に表示された、括弧でマークされたパターンに一致したテキストが表示されます。

UI 要素	詳細
スラッシュの間と完全一致	テーブルの下にあるテキスト領域。[検索対象となるテキスト]ボックスに入力された内容全体がそのまま表示されます。このなかで正規表現内のパターンに一致した内容が、通常は青いフォントで強調表示されます。これは、.* パターンのようなワイルドカード表現を使用して、一致する内容が多すぎる場合などに起こり得る問題を表示するのに便利です。また、内容に重複したパターンがあるという問題を明らかにすることもできます。この場合、内容の必要な部分に一致させるために別の固有パターンを表現に追加する必要があります。

サービス・ツール

このツールでは、SiteScope がインストールされているサーバ上で実行中のサービスが表示されます。これは、重要なサービスが利用可能であることを確認する場合に便利です。リモート UNIX マシンが定義されている場合、ドロップダウン・メニューに表示されます。

アクセス方法	<ul style="list-style-type: none">• [ツール]コンテキスト > [オペレーティングシステム ツール] > [サービス ツール]を選択します([ツールを使用]権限が必要です)。• サービス・モニタを設定または表示する場合も使用できます(SiteScope の管理者、または「モニタ・ツールを使用」権限が付与されたユーザの場合)。<ul style="list-style-type: none">■ 新規モニタを設定する場合は新規モニタのダイアログ・ボックスで、既存のモニタを設定する場合はモニタの[プロパティ]タブで、[ツールを使用]ボタンをクリックします。■ 既存のモニタのテスト・ツールを実行するには、SiteScope ダッシュボード・ツールバーの[ツール]  ボタンをクリックします。これにより、ツールが開き、モニタの既存のデータを入力に使用して実行されます。テスト結果は[結果]表示枠に表示されます。
重要な情報	このツールは、UNIX プラットフォームにインストールされた SiteScope ではサポートされていません。
関連タスク	140ページ「モニタの設定時またはトラブルシューティング時の SiteScope ツールの使用方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none">• 139ページ「SiteScope ツールの概要」• 99ページ「[ツール]メニュー」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
サーバ	<p>監視対象サービスが実行されているサーバ。サーバのリスト (SiteScope で設定したリモート・サーバのみが表示されます) からサーバを選択します。または、[サーバの参照] ボタンをクリックしてローカル・ドメインからサーバを選択するか、[リモートサーバの追加] をクリックして新しいサーバを追加します。</p> <p>標準設定値 : SiteScope サーバ (SiteScope がインストールされているサーバ)</p>
サーバの参照	<p>[HP SiteScope サーバの検索] ダイアログ・ボックスが開き、監視対象のサーバを選択できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • サーバの参照 : ローカル・ドメインに表示されるサーバのドロップダウン・リストからサーバを選択します。 • サーバ名の入力 : 監視対象サーバがネットワークで認識されていない、または [リモートサーバ] で設定されていないために、監視対象サーバが [サーバ] リストに表示されない場合、監視対象サーバの IP アドレスまたは名前を入力します。[サーバ名の入力] ボックスで入力したマシン名の先頭に、2 つの円記号 ("\\") が自動的に追加されます。 <p>注 : ドメインの権限が付与されているか、Windows リモート・サーバへのアクセスが認証されている必要があります。リモート Windows サーバの設定方法の詳細については、525 ページ「リモート Microsoft Windows サーバを監視するための SiteScope の設定方法」を参照してください。</p>
リモート・サーバの追加	<p>[リモートサーバの追加] ダイアログ・ボックスが開き、追加するリモートのタイプ (Windows または UNIX) を選択して設定の詳細を入力できます。</p> <p>Microsoft Windows リモート・サーバのユーザ・インタフェースの詳細については、535 ページ「[新規 Microsoft Windows リモートサーバ]/[Microsoft Windows リモートサーバの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p> <p>UNIX リモート・サーバのユーザ・インタフェースの詳細については、541 ページ「[新規 UNIX リモートサーバ]/[UNIX リモートサーバの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p>
ツールの実行	テストを実行します。テスト結果は [結果] 表示枠に表示されます。
ファイルに保存	結果をファイルに保存します。

SiteScope ログ・グラバ・ツール

このツールを使用すると、SiteScope のログ・ファイルと設定ファイルを収集できます。さらに、次のデータを収集できます。

- SiteScope のスレッド・ダンプ
- システム・コマンド ("netstat", "dir" など) の結果
- JVM に関する情報
- Windows イベント・ログ・エントリ

標準設定の設定ファイル(default.loggrabber.conf.xml)を使用するか、独自の設定ファイルを作成して、たとえば SiteScope 設定のスケジュール・バックアップを作成できます。


注: < SiteScope のルート・ディレクトリ> \tools\LogGrabberSiteScope フォルダにある LogGrabber.bat スクリプト (UNIX の場合は LogGrabber.sh)を手動で実行することにより、SiteScope ログ・グラバ・ツールを使用できます。このモードでは、設定ファイル LogGrabber.bat full.loggrabber.conf.xml を1つのパラメータとして使用する必要があります。

このツールは、スクリプト警告 (たとえば、CPU の使用率が90%を超えているか、またはログに重大なエラーが見つかったときに、トラブルシューティング用のデータを収集する)、またはスクリプト・モニタ(スケジュールを使用して定期データを収集する)のいずれかから使用できます。設定ファイルの名前は、スクリプトで1つのパラメータとして送信する必要があります。

アクセス方法	[ツール]コンテキスト>[共通ユーティリティツール]>[SiteScopeロググラバツール]を選択します(「ツールを使用」権限が必要です)。
重要な情報	SiteScope 設定には、エンコードされたパスワードなど大切なデータが含まれていることがあるので、[SiteScope ロググラバのダウンロード実行結果]権限([プリファレンス]>[ユーザ管理プリファレンス]>[権限]>[その他]で)は、信頼されていないユーザには付与しないことを確認してください。ユーザ権限の詳細については、792ページ「権限」を参照してください。
関連タスク	<ul style="list-style-type: none">140ページ「モニタの設定時またはトラブルシューティング時の SiteScope ツールの使用方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none">139ページ「SiteScope ツールの概要」99ページ「[ツール]メニュー」


ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
SiteScope ログ・グラバ・ツール領域	
設定ファイル	使用する設定ファイルを選択します。 標準設定値 : default.loggrabber.conf.xml
フォルダ	実行時の変更をチェックするフォルダおよびファイルを選択します。
ツールの実行	ツールを実行します。結果は[結果]ボックスに表示されます。
結果	
ファイルのダウンロード	最後の実行結果を含むファイルをダウンロードできます。 注 : 実行結果ファイルをダウンロードするには、「ログ・グラバのダウンロード実行結果」権限が必要です。
ファイル	結果ファイルをすべて表示します(.zip 形式)。クリックしてファイルを開き、選択したファイルの結果をダウンロードします。
サイズ	結果ファイルのサイズ。

UI 要素	説明
最終更新日	結果ファイルが最後に更新された日時。
	Excel または PDF にエクスポート : 収集したログ・ファイルの結果を Excel または PDF ファイルにエクスポートして保存できます。

SNMP ブラウザ・ツール

このツールは、SNMP エージェントの MIB の詳細を提供します。SNMP エージェントの接続プロパティの検証や、SNMP エージェントのカウンタの詳細情報の取得に使用できます。

アクセス方法	<ul style="list-style-type: none"> • [ツール]コンテキスト > [SNMP ツール] > [SNMP ブラウザ ツール] を選択します(「ツールを使用」権限が必要です)。 • Cisco Works モニタ, F5 Big-IP モニタ, MIB による SNMP モニタを設定または表示する場合も使用できます(SiteScope の管理者, または「モニタ・ツールを使用」権限が付与されたユーザの場合)。 ■ 新規モニタを設定する場合は新規モニタのダイアログ・ボックスで, 既存のモニタを設定する場合はモニタの[プロパティ]タブで, [ツールを使用]ボタンをクリックします。 ■ 既存モニタに対するテスト・ツールを実行するには, [ツール]  ボタンをクリックします。このボタンは, SiteScope ダッシュボード・ツールバーにあります。これにより, ツールが開き, モニタの既存のデータを入力に使用して実行されます。テスト結果は[結果]表示枠に表示されます。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> • このツールは, 特定のエージェント上にあるすべての OID を横断し, < SiteScope のルート・ディレクトリ > \templates.mib ディレクトリの MIB 情報を使用してテーブルの OID, カウンタ名, タイプ, 値を表示します。 • MIB モニタによる SNMP の作成時に templates.mib ディレクトリに MIB ファイルを追加した後 MIB ファイルのドロップダウン・ボックス内のリストに MIB が表示されていない場合は, 『HP SiteScope Monitor Reference』の「SNMP by MIB Monitor」のトラブルシューティング MIB 編集手順を参照してください。
関連タスク	140ページ「 モニタの設定時またはトラブルシューティング時の SiteScope ツールの使用方法 」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> • 139ページ「SiteScope ツールの概要」 • 99ページ「[ツール]メニュー」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。


UI 要素	説明
SNMP 設定	

UI 要素	説明
サーバ	SNMP エージェントが実行されている、監視対象のデバイスのホスト名または IP アドレス。
ポート	SNMP エージェントが監視するポート。 標準設定値 : 161
MIB ファイル	表示する MIB。[すべての MIB]を選択した場合、MIB 横断時に取得されたすべてのデータが表示されます。特定の MIB を選択した場合、その MIB 内の OID のみが表示されます。この MIB のリストを更新または拡張するには、新しい MIB ファイルを <SiteScope のルート・ディレクトリ> \templates.mib ディレクトリに置きます。 標準設定値 : すべての MIB
開始 OID	このモニタのカウンタを選択する場合に、このオプションを使用します。モニタが SNMP エージェントのツリーの取得を試みるときは、ここで入力した OID 値から開始します。標準設定値は 1 で、一般的に使用され、ほとんどのアプリケーションに適用できます。1 から開始する OID を処理しないアプリケーションから値の取得を試みる場合のみ、このボックスを編集する必要があります。標準設定値の 1 ではどのカウンタも取得できなかった場合、異なる値の入力が必要になることがあります。
SNMP 接続設定	
タイムアウト (秒単位)	すべての SNMP 要求 (再試行を含む) が完了するまで SiteScope が待機する合計時間 (秒単位)。 標準設定値 : 5 秒
再試行の回数	SiteScope が SNMP GET 要求を失敗とみなすまで各 SNMP GET 要求を再試行する回数。 標準設定値 : 1
コミュニティ	バージョン 1 または 2 接続で SNMP エージェントに接続するときに使用するコミュニティ文字列。 標準設定値 : public
SNMP のバージョン	ツールがエージェントへの接続時に使用する SNMP のバージョン。SiteScope では SNMP のバージョン 1, 2, 3 がサポートされています。V3 を選択すると、次の各フィールドにバージョン 3 設定を入力できます。 標準設定値 : V1
認証アルゴリズム	バージョン 3 接続に使用する認証アルゴリズム。 標準設定値 : MD5 注 : このフィールドは、[SNMP V3]を選択した場合にのみ使用できます。

UI 要素	説明
ユーザ名	バージョン 3 接続のユーザ名。 注 : このフィールドは, [SNMP V3]を選択した場合にのみ使用できます。
パスワード	バージョン 3 接続の認証に使用するパスワード。 注 : このフィールドは, [SNMP V3]を選択した場合にのみ使用できます。
プライバシー・アルゴリズム	SNMP バージョン 3 の認証に使用されるプライバシー・アルゴリズム(DES, 128 ビット AES, 192 ビット AES, 256 ビット AES)。プライバシーが必要な場合は空白のままにします。 標準設定値 :DES 注 : このフィールドは, [SNMP V3]を選択した場合にのみ使用できます。
プライバシー・パスワード	バージョン 3 接続の DES プライバシー暗号化で使用するパスワード。プライバシーが必要な場合は空白のままにします。 注 : このフィールドは, [SNMP V3]を選択した場合にのみ使用できます。
コンテキスト名	この接続に使用するコンテキスト名。これは SNMP V3 にのみ適用されます。 注 : このフィールドは, [SNMP V3]を選択した場合にのみ使用できます。
コンテキスト・エンジン ID	この接続に使用するコンテキスト・エンジン ID を表す 16 進文字列。これは SNMP V3 にのみ適用されます。 注 : このフィールドは, [SNMP V3]を選択した場合にのみ使用できます。
ツールの実行	テストを実行します。テスト結果は[結果]表示枠に表示されます。
ファイルに保存	結果をファイルに保存します。

SNMP ツール

このツールでは, SNMP 管理情報ベース(MIB)に問い合わせで OID のセットを取得できます。

アクセス方法	<ul style="list-style-type: none"> • [ツール]コンテキスト > [SNMP ツール] > [SNMP ツール]を選択します(「ツールを使用」権限が必要です)。 • SNMP モニタを設定または表示する場合も使用できます(SiteScope の管理者, または「モニタ・ツールを使用」権限が付与されたユーザの場合)。 ■ 新規モニタを設定する場合は新規モニタのダイアログ・ボックスで, 既存のモニタを設定する場合はモニタの[プロパティ]タブで, [ツールを使用]ボタンをクリックします。 ■ 既存のモニタのテスト・ツールを実行するには, SiteScope ダッシュボード・ツールバーの[ツール]  ボタンをクリックします。これにより, ツールが開き, モニタの既存のデータを入力に使用して実行されます。テスト結果は[結果]表示枠に表示されます。
関連タスク	140ページ「モニタの設定時またはトラブルシューティング時の SiteScope ツールの使用方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> • 139ページ「SiteScope ツールの概要」 • 99ページ「[ツール]メニュー」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
ホスト名	問い合わせる SNMP MIB をホストするサーバの IP アドレス。
ポート	SNMP エージェントからのデータを要求するときに使用するポート。 標準設定値 : 161


UI 要素	説明
オブジェクト ID	<p>オブジェクト ID 設定を選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> 一般的に使用される値 : ドロップダウン・リストから、オブジェクト ID ニーモニックを選択します。(標準設定値として設定される system.sysDescr を持つ標準設定オプション。) <p>SNMP オブジェクトのインデックスを入力します。OID の値は、スカラ値またはインデックス(配列もしくはテーブル)値のいずれかです。</p> <ul style="list-style-type: none"> スカラ OID の場合、インデックス値を 0 に設定する必要があります。 インデックス値またはテーブル値の場合、必要な値を含む要素にインデックス(正の整数)を指定する必要があります。[一般的に使用される値]のインデックス値が <code>ifSpecific.ifInOctets</code> に設定されます。 <p>標準設定値 : 0</p> <ul style="list-style-type: none"> その他の値 : 取得する SNMP 値のオブジェクト識別子(OID)を入力します。OID により、どの値をデバイスから取得するかが指定されます。 <p>例 : 1.3.6.1.2.1.4.3</p> <p>ヒント : デバイスとの基本的な接続性のトラブルシューティングを行うには、または、SNMP エージェントがアクティブであることを確認するには、その他のオブジェクトを見つけることができない場合はドロップダウン・リストから system.sysDescr オブジェクトを選択します。</p> <p>注 : SiteScope では SNMP のバージョン 1.0, 2.0, 3.0 がサポートされています。</p> <p>エラー・メッセージ「エラー - noSuchName」を受け取った場合は、SiteScope は、デバイスに接触できましたが、与えられた OID は、デバイスにとって既知ではありません。値を取得するデバイスに有効な OID を指定する必要があります。</p> <p>監視するデバイスの MIB ファイルがある場合は、*.mib (または *.my) ファイルを、< SiteScope のルート・ディレクトリ > \templates.mib サブディレクトリにコピーし、MIB ヘルプ・ユーティリティを使用して MIB を編集し、デバイスの各 OID を参照します。MIB ヘルプ・ツールを使用するには、[ツール] > [MIB ブラウザ]を選択して、接続の詳細を入力します。新しい MIB ファイルを SiteScope にコピーした後、SiteScope を再起動する必要があります。参照先の MIB ファイルをドロップダウン・リストで選択します。参照ボタンをクリックし、選択した MIB ファイルから OID を表示します。指定サーバ上の選択した MIB を表すツリーが表示されます。このツリーを参照して、監視する OID を探せます。</p> <p>デバイスを監視するために SiteScope の MIB ヘルプで MIB ファイルを参照する必要はありません。MIB ヘルプは、デバイス上にある OID を探すためのだけのツールとして提供されていますが、利用できる唯一のツールというわけではありません。Web 上でその他の代替ツールを探せます(MG-SOFT, iReasoning など)。</p>

UI 要素	説明
取得するレコード数	取得する OID レコード数。 標準設定値 : 1
SNMP 接続設定	
タイムアウト(秒単位)	SiteScope での SNMP 要求に対する待機時間 (秒単位)。 標準設定値 :5 秒
再試行の回数	SiteScope においてモニタが失敗したとみなされるまでに許される SNMP 要求試行の回数。 標準設定値 : 1
コミュニティ	SNMP デバイスのコミュニティ文字列。 コミュニティ文字列は、SNMP デバイスのセキュリティのレベルを指定します。コミュニティ文字列としては、ほとんどのデバイスで public が使用されます。ただし、監視対象にするデバイスには、アクセスするためには、別のコミュニティ文字列が必要な場合があります。 特定のコミュニティ経由で SNMP エージェントを監視する場合は、必ず SNMP エージェントに該当コミュニティを熟知させておく必要があります。たとえば、Windows 2003 のサーバを public コミュニティ経由で監視する場合は、SNMP エージェント内で、このコミュニティが必ず設定されている必要があります。設定されていないと、モニタがエージェントに接続できません。 標準設定値 : public 注 : このフィールドは、バージョン 1 または 2 の接続だけに有効です。
SNMP のバージョン	監視する SNMP ホストで使用する SNMP のバージョン。SiteScope では SNMP のバージョン 1, 2, 3 がサポートされています。 標準設定値 : V1
認証アルゴリズム	SNMP V3 に使用される認証アルゴリズム。[MD5], [SHA], または[なし]を選択できます。 注 : このフィールドは、[SNMP V3]を選択した場合にのみ使用できます。
ユーザ名	SNMP バージョン 3 を使用している場合に認証に使用するユーザ名。 注 : このフィールドは、[SNMP V3]を選択した場合にのみ使用できます。
パスワード	SNMP バージョン 3 を使用している場合に認証に使用するパスワード。 注 : このフィールドは、[SNMP V3]を選択した場合にのみ使用できます。

UI 要素	説明
プライバシー・アルゴリズム	SNMP バージョン 3 の認証に使用されるプライバシー・アルゴリズム (DES, 128 ビット AES, 192 ビット AES, 256 ビット AES)。 標準設定値 :DES 注 : このフィールドは, [SNMP V3] を選択した場合にのみ使用できます。
プライバシー・パスワード	SNMP V3 の認証に使用するプライバシー・パスワード。プライバシーが必要ない場合は空白のままにします。 注 : このフィールドは, [SNMP V3] を選択した場合にのみ使用できます。
コンテキスト名	SNMP V3 のコンテキスト名。 注 : このフィールドは, [SNMP V3] を選択した場合にのみ使用できます。
コンテキスト・エンジン ID	SNMP V3 のコンテキスト・エンジン ID。 注 : このフィールドは, [SNMP V3] を選択した場合にのみ使用できます。
ツールの実行	テストを実行します。テスト結果は[結果]表示枠に表示されます。
結果	
ファイルに保存	結果をファイルに保存します。

SNMP トラップ・ツール

このツールでは, SiteScope の SNMP リスナで受信される SNMP トラップを表示できます。このツールは, すでに 1 つ以上の SNMP トラップ・モニタを作成している場合にのみ有効になります。SNMP トラップ・モニタを作成することで, SiteScope の SNMP トラップ・ログが有効になります。

アクセス方法	<ul style="list-style-type: none"> • [ツール]コンテキスト > [SNMP ツール] > [SNMP トラップ ツール] を選択します(「ツールを使用」権限が必要です)。 • SNMP トラップ・モニタまたはテクノロジー SNMP トラップ統合 モニタを設定または表示する場合も使用できます(SiteScope の管理者, または「モニタ・ツールを使用」権限が付与されたユーザの場合)。 ■ 新規モニタを設定する場合は新規モニタのダイアログ・ボックスで, 既存のモニタを設定する場合はモニタの[プロパティ]タブで, [ツールを使用] ボタンをクリックします。 ■ 既存のモニタのテスト・ツールを実行するには, SiteScope ダッシュボード・ツールバーの[ツール]  ボタンをクリックします。これにより, ツールが開き, モニタの既存のデータを入力に使用して実行されます。テスト結果は[結果]表示枠に表示されます。
重要な情報	SNMP トラップ・ログがアクティブでない場合, 「SNMP トラップの受信がアクティブではありません」というメッセージがツール・ページの上 部に表示されます。

関連タスク	140ページ「モニタの設定時またはトラブルシューティング時の SiteScope ツールの使用方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none">139ページ「SiteScope ツールの概要」99ページ「[ツール]メニュー」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
内容の照合	SNMPトラップ・ログ内のエントリの照合に使用するオプションのテキスト文字列または正規表現。内容の照合は、OID、コミュニティ、エージェントなどのログの列のデータに対して実行できます。 SiteScope の SNMPトラップ・ログの SNMPトラップは、[SNMPトラップログ]テーブルに表示されます。検索条件と一致するトラップ数が、ページの下部にある[SNMPトラップログ]テーブルのタイトルに表示されます。
表示するトラップ数	表示する SNMPトラップ数。トラップ数は、平均トラップ長に基づいて計算されます。トラップ・テキストが平均よりも長いまたは短い場合、表示されるトラップ数は選択した値と異なる場合があります。SiteScope が受信した最新の SNMPトラップが最初に表示されます。 標準設定値 : 10
ツールの実行	テストを実行します。テスト結果は[結果]表示枠に表示されます。
ファイルに保存	結果をファイルに保存します。

トレース・ルート・ツール

このツールは、2つの場所を結ぶネットワーク経路を調べるためのツールで、経路上の各ホップに到達するまでの時間を示します。ネットワークに問題があれば、多くの場合にトレースルートを使用することで問題が生じている箇所を絞り込むことができます。このツールは、サーバから別の場所までのトレースルートを実行します。

このユーティリティを使用して、ホストの接続性を確認し、ホストがインターネットに接続する方法を決定できます。サーバから指定したホストへの経路を決定することもできます。これにより、インターネットのほかの場所にあるホストへの接続を試みる場合に、パケット損失が発生している可能性のある箇所を確認できます。

アクセス方法	[ツール]コンテキスト > [ネットワークツール] > [トレースルートツール]を選択します(「ツールを使用」権限が必要です)。
重要な情報	このツールでは、Windows プラットフォームでのみトレースルートを実行できます。UNIX の場合、SiteScope プロセスを停止し、トレースルート・ユーティリティのパス(/usr/sbin/traceroute など)を[インフラストラクチャプリファレンス]の[トレースルート コマンド]ボックスに追加してから SiteScope を再起動する必要があります。


関連タスク	140ページ「モニタの設定時またはトラブルシューティング時の SiteScope ツールの使用方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none">139ページ「SiteScope ツールの概要」99ページ「[ツール]メニュー」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
解決するホスト名	解決するほかの場所のドメイン名または IP アドレス。 例 : demo.thiscompany.com または 206.168.112.53
ツールの実行	テストを実行します。テスト結果は[結果]表示枠に表示されます。
ファイルに保存	結果をファイルに保存します。

URL ツール

このツールを使用すると、Web サーバから項目を取得できます。URL には接続するサーバと返す項目を指定します。SiteScope には要求した URL の内容が表示されるため、このツールは URL 内容のチェック機能としても使用できます。このユーティリティを使用して、特定の URL が Web サーバからアクセスできることを確認できます。また、ページが返されるまでにかかる時間の確認にも使用できます。

アクセス方法	<ul style="list-style-type: none">[ツール]コンテキスト > [Web ツール] > [URL ツール]を選択します('ツールを使用'権限が必要です)。URL モニタ、URL 内容モニタ、Oracle 9i アプリケーション・サーバ・モニタを設定または表示する場合も使用できます(SiteScope の管理者、または「モニタ・ツールを使用」権限が付与されたユーザの場合)。<ul style="list-style-type: none">新規モニタを設定する場合は新規モニタのダイアログ・ボックスで、既存のモニタを設定する場合はモニタの[プロパティ]タブで、[ツールを使用]ボタンをクリックします。既存のモニタのテスト・ツールを実行するには、SiteScope ダッシュボード・ツールバーの[ツール]  ボタンをクリックします。これにより、ツールが開き、モニタの既存のデータを入力に使用して実行されます。テスト結果は[結果]表示枠に表示されます。
関連タスク	140ページ「モニタの設定時またはトラブルシューティング時の SiteScope ツールの使用方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none">139ページ「SiteScope ツールの概要」99ページ「[ツール]メニュー」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
メイン設定	
URL	テストする URL。 例 : http://demo.company.com
内容の照合	返されたページまたはフレーム・セット内でチェックするテキスト文字列。ページにこのテキストが含まれていない場合、内容の照合は失敗します。検索では大文字と小文字は区別されます。HTML タグはテキスト・ドキュメントの一部であるため、検索するテキストに HTML タグが含まれている場合はその HTML タグを含める必要があります("< B> Hello< /B> World" など)。
エラーの内容の照合	返されたページまたはフレーム・セット内でチェックするテキスト文字列。ページにこのテキストが含まれている場合、テストはエラー状況を示します。検索では大文字と小文字は区別されます。
HTTP 設定	
URL 内容のエンコード	内容の書き込みに使用するエンコーディング。エンコーディングは次のいずれからでも検出できます。 <ul style="list-style-type: none">• HTTP headers : Content-Type : text/html; charset=UTF-8• HTML メタ・タグ : <meta http-equiv="Content-Type" content="text/html; charset=US-ASCII">• XML : <?xml version="1.0" encoding="ISO-8859-1"?> ドロップダウン・リストからエンコーディング・タイプを選択します。 例 : UTF-8, UTF-16, US-ASCII, ISO-8859-1 標準設定値 : サーバ応答からのエンコーディング
画像を取得	SiteScope には、要求した URL にリンクするグラフィック、ロゴなどの画像が表示されます。
フレームを取得	SiteScope には、要求した URL にリンクするフレームの HTML コードが表示されます。
認証設定	

UI 要素	詳細
資格情報	<p>指定した URL でアクセス用の名前とパスワードが必要な場合に資格情報を許可するためのオプション。</p> <ul style="list-style-type: none"> • ユーザ名およびパスワードを使用 : 手動でユーザの資格情報を入力する場合に、このオプションを選択します。[ユーザ名]ボックスにユーザ名を、[パスワード]ボックスにパスワードを入力して URL にアクセスします。 • 事前定義された資格情報を選択 : URL 用の定義済みユーザ名およびパスワードを SiteScope で自動的に設定する場合に、このオプションを選択します(標準設定のオプション)。[資格情報プロファイル]ドロップダウン・リストから使用する資格情報プロファイルを選択するか、[資格情報の追加]をクリックして新規資格情報プロファイルを作成します。このタスクの実行方法の詳細については、623 ページ「資格情報のプリファレンスの設定方法」を参照してください。
プリエンティブ認証	<p>SiteScope がターゲット URL を要求する場合、認証資格情報を送信するためのオプション。</p> <ul style="list-style-type: none"> • グローバル・プリファレンスを使用 : [一般プリファレンス]ページの[プリエンティブ認証]で指定されている設定を SiteScope が使用するよう選択します。 • 最初の要求を認証 : 認証先 URL に対して、SiteScope によって作成される最初の要求でユーザ名とパスワードが送信されるよう選択します。 <p>注 : URL でユーザ名とパスワードが必要とされない場合には、このオプションのために URL でエラーが発生する可能性があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 要求された場合に認証 : サーバでユーザ名とパスワードの要求があった場合に、2 番目の要求でユーザ名とパスワードが送信されるよう選択します。 <p>注 : URL でユーザ名とパスワードが必要とされない場合には、このオプションが使用される場合があります。</p> <p>すべてのオプションで、このモニタ・インスタンスのために入力された[ユーザ名]と[パスワード]が使用されます。ユーザ名とパスワードが個々のモニタに指定されない場合には、[一般プリファレンス]ページの[メイン]セクションで指定されている[標準設定の認証ユーザ名]と[標準設定の認証パスワード]が使用されます(指定されている場合)。</p> <p>注 : プリエンティブ認証はユーザ名とパスワードを送信するかどうかや、どのユーザ名とパスワードを送信するのを制御しません。</p>


UI 要素	詳細
クライアント側証明書	<p>ターゲット URL にアクセスするためにクライアント側証明書を使用する必要がある場合の証明書ファイル。普通、これは .pfx(.p12)タイプ証明書で、通常はパスワードを要求します。[クライアント側証明書パスワード] ボックスに証明書のパスワードを入力します。</p> <p>注：クライアント側証明書ファイルは、<SiteScopeのルート・ディレクトリ>\templates.certificatesディレクトリにコピーする必要があります。</p>
クライアント側証明書パスワード	クライアント側証明書を使用しており、その証明書がパスワードを要求する場合のパスワード。
認証 NTLM ドメイン	URL へのアクセスが求められる場合の Windows NT LAN Manager(NTLM) のドメイン。
HTTPS に対して信頼されていない証明書を許容	セキュア HTTP(HTTPS)を使用してターゲット URL にアクセスしており、SiteScope が必要とされるサーバ証明書を持っていない場合には、このオプションを選択するか、または関連する証明書をインポートできます。サーバ証明書のインポートの詳細については、『HP SiteScope Monitor Reference』の「URL Monitor」の SSL 接続を参照してください。
HTTPS に対して無効な証明書を許容	セキュア HTTP(HTTPS)を使用してターゲット URL にアクセスしており、SiteScope に無効なサーバ証明書がある場合にはこのオプションを選択します。現在の日付が証明書チェーンで指定されている日付範囲内ではない場合、この状態が発生する可能性があります。
NTLM V2	アクセス先の URL が NTLM バージョン 2 を使用する認証を必要とする場合に選択します。
プロキシ設定	
HTTP プロキシ	URL へのアクセスに使用する HTTP プロキシ・サーバのアドレスまたはドメイン名とポート。
プロキシ・サーバのユーザ名	プロキシ・サーバにログオンするために使用する名前。
プロキシ・サーバのパスワード	プロキシ・サーバにログオンするために使用するパスワード。
プロキシ NTLM V2	プロキシでユーザ・ログオンの認証に NTLM(Windows NT LAN Manager) バージョン 2 を使用します。
ツールの実行	テストを実行します。テスト結果は[結果]表示枠に表示されます。結果には、URL 取得の統計情報と URL 内容のテキスト表現が含まれます。
ファイルに保存	結果をファイルに保存します。

Web サービス・ツール

このツールを使用すると、SOAP(Simple Object Access Protocol)に対応する Web サービスの可用性や安定性のチェック、または実際の SOAP 応答の表示を行うことができます。失敗した Web サービス

要求の診断や、特定の Web サービス・モニタで使用する照合文字列の選択にも便利です。Web サービス・テストは、SOAP 要求をサーバに送信し、HTTP 応答コードをチェックしてサービスが応答していることを確認します。実際の SOAP 応答が表示されますが、返されたメッセージについてそれ以上の検証は行われません。

SOAP は、あるオペレーティング・システム下で実行されているプログラムが同じまたは別のオペレーティング・システム下で実行されている別のプログラムと通信する手段です(Linux ベースのプログラムと通信する Windows 2000 プログラムなど)。SOAP は分散環境のサービスとの情報交換に HTTP (Hypertext Transfer Protocol)と XML(Extensible Markup Language)を使用します。

アクセス方法	<ul style="list-style-type: none">• [ツール]コンテキスト > [Web ツール] > [Web サービス ツール]を選択します ('ツールを使用'権限が必要です)。• Web サービス・モニタを設定または表示する場合も使用できます(SiteScope の管理者、または「モニタ・ツールを使用」権限が付与されたユーザの場合)。<ul style="list-style-type: none">■ 新規モニタを設定する場合は新規モニタのダイアログ・ボックスで、既存のモニタを設定する場合はモニタの[プロパティ]タブで、[ツールを使用]ボタンをクリックします。■ 既存のモニタのテスト・ツールを実行するには、SiteScope ダッシュボード・ツールバーの[ツール]  ボタンをクリックします。これにより、ツールが開き、モニタの既存のデータを入力に使用して実行されます。テスト結果は[結果]表示枠に表示されます。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none">• 現在サポートされている仕様の機能は、WSDL 1.2, SOAP 1.1, XML Schema 2001 に基づく Simple Type および Complex Type, HTTP プロトコルのみを使用した SOAP バインディングです。SOAP with Attachments はサポートされていません。• SOAP および WSDL テクノロジは進化しています。そのため、WSDL ドキュメントによっては正確に解析されない場合があります。また、SOAP 要求によっては、やり取りできない Web サービス・プロバイダがある場合もあります。
関連タスク	140ページ「モニタの設定時またはトラブルシューティング時の SiteScope ツールの使用方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none">• 139ページ「SiteScope ツールの概要」• 99ページ「[ツール]メニュー」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
WSDL 設定	

UI 要素	詳細
WSDL の場所	次のいずれかの WSDL の場所を選択します。 <ul style="list-style-type: none">• ファイル : 使用する WSDL ファイルを選択します。このリストには、<SiteScope のルート・ディレクトリ>\templates.wsdl/*.wsdl を検索して見つかったファイルが反映されます。WSDL ファイルには拡張子 .wsdl が必要です。• URL : テストする Web サービスの URL を入力します。
データの取得	メソッド引数に指定した WSDL ファイルを取得して分析します。結果のページには、使用できる測定値が表示されます。
サービス名	呼び出すサービスの名前。初期セットアップ時、この名前が WSDL ファイルから抽出されます。
ポート名	呼び出すポートの名前。初期セットアップ時、この名前が WSDL ファイルから抽出されます。
メソッド名	呼び出すメソッドの名前。初期セットアップ時、この名前が WSDL ファイルから抽出されます。
メソッド名前空間	SOAP 要求内のメソッドの XML 名前空間。初期セットアップ時、この値が WSDL ファイルから抽出されます。
スキーマ名前空間	SOAP 要求内のスキーマの XML 名前空間。初期セットアップ時、この値が WSDL ファイルから抽出されます。
SOAP アクション	Web サービスへの SOAP 要求のヘッダに含まれる SOAP アクションの URL。初期セットアップ時、この名前が WSDL ファイルから抽出されます。

UI 要素	詳細
引数の名前	<p>前述の指定したメソッドへの引数とそのタイプ。 単形式 <code>parm-name (parm-type) = value</code> で純型パラメータを指定します。<param-name> および <param-type> は、WSDL ファイルのサービス・メソッド仕様と完全に一致させる必要があります。<value> は <param-type> と一致させる必要があります。一致させないと、要求は失敗します。空白が埋め込まれた文字列は、二重引用符 (") で囲みます。各パラメータは、各 value の最後に復帰改行を追加して別個の行に置く必要があります。</p> <p>例 : <code>stockSymbol (string) = MERQ</code> <code>numShares (int) = 10</code></p> <p>Complex Type パラメータは、1 つの長い文字列として表現する必要があります (改行は読みやすくする目的にのみ使用します)。</p> <pre>stocksymbol [COMPLEX] = <stocksymbol xmlns:xsd="http://www.w3.org/2001/XMLSchema" xmlns:soapenc="http://schemas.xmlsoap.org/soap/encoding/" xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance" xmlns:fw100="urn:ws-stock" xsi:type="fw100:getQuote"> <ticker xsi:type="xsd:string">MERQ </ticker> </stocksymbol></pre> <p>注 : SiteScope は入力パラメータ・リストに対する検証を行わないため、Complex Type 値が有効で適切な形式の XML 文字列であることを確認してください。複合型パラメータの内部にはキャリッジ・リターンを入れないでください。最終位置にだけ入れてください。</p> <p>Web サービス・メソッドがパラメータを取り込まない場合、テキスト・ボックスは空のままにします。</p>
ユーザ定義 SOAP XML の使用	[ユーザ SOAP XML] ボックスの XML を使用します。これにより、手動で定義した XML を使用できます。
ユーザ SOAP XML	WSDL ファイルから抽出された、選択した Web サービスの SOAP XML が表示されます。標準設定の XML を変更し、[ユーザ定義 SOAP XML の使用] チェック・ボックスを選択すると、このボックスに手動で定義した XML を使用できます。
メイン設定	
要求のスキーマ	要求のスキーマ。現在 SiteScope でサポートされているのは SOAP のみです。
タイムアウト(秒単位)	Web サービス要求が完了するまで SiteScope が待機する合計時間(秒単位)。 標準設定値 : 30 秒


UI 要素	詳細
.NET SOAP の使用	Web サービスが Microsoft .NET に基づいている場合に選択します。
内容の照合	<p>返されたページまたはフレーム・セット内でチェックするテキスト。ページにこのテキストが含まれていない場合、ツールから内容の一致はないというメッセージが表示されます。</p> <p>HTML タグはテキスト・ドキュメントの一部であるため、検索するテキストに HTML タグが含まれている場合は HTML タグも対象となります。これは、XML ページにも当てはまります。</p> <p>例： "< B> Hello< /B> World"</p> <p>文字列をスラッシュで囲んで正規表現による照合を実行することもできます。最後のスラッシュの後に i を付けると、検索では大文字と小文字が区別されません。</p> <p>例： /href=Doc\d+\.html/ または /href=doc\d+\.html/i</p> <p>特定のテキスト部分を保存して状態の一部として表示する場合、Perl 正規表現に括弧を使用します。</p> <p>例： /Temperature:(\d+)</p> <p>注： 検索では大文字と小文字は区別されます。</p>
HTTP 設定	
Web サービス・サーバ URL	チェックする Web サービス・サーバの URL が表示されます。
HTTP ユーザ・エージェント	SOAP 要求の HTTP ユーザ・エージェント。
HTTP コンテンツ・タイプ	HTTP 要求のコンテンツ・タイプ。
プロキシ設定	
HTTP プロキシ	URL へのアクセスに使用できるプロキシ・サーバ(任意指定)。HTTP プロキシ・サーバのドメイン名およびポートを入力します。
プロキシ・サーバのユーザ名	<p>このプロキシ・サーバで URL へのアクセスに名前およびパスワードが必要な場合に使用するユーザ名。</p> <p>注：これらのオプションが機能するには、プロキシ・サーバでプロキシ認証がサポートされている必要があります。</p>
プロキシ・サーバのパスワード	<p>このプロキシ・サーバで URL へのアクセスに名前とパスワードが必要な場合に使用するパスワード。</p> <p>注：これらのオプションが機能するには、プロキシ・サーバでプロキシ認証がサポートされている必要があります。</p>

UI 要素	詳細
ログイン設定	
NTLM ドメイン	Web サービスで、資格情報の一部として(後述のユーザ名およびパスワードとともに)NTLM/チャレンジ・レスポンス認証が必要な場合の NTLM ドメイン。
認証ユーザ名	<p>Web サービスへのアクセスにユーザ名およびパスワードが必要な場合に使用するユーザ名(基本、ダイジェスト、NTLM 認証)。ユーザ名を入力します。</p> <p>または、このエントリを空白のままにし、[一般プリファレンス]ページの[標準設定の認証ユーザ名]ボックスにユーザ名を入力できます。共通の認証資格情報を定義する場合は、この代替の方法を使用します。</p>
認証パスワード	<p>Web サービスへのアクセスにユーザ名およびパスワードが必要な場合に使用するパスワード(基本、ダイジェスト、NTLM 認証)。パスワードを入力します。</p> <p>または、このエントリを空白のままにし、[一般プリファレンス]ページの[標準設定の認証パスワード]ボックスにパスワードを入力できます。共通の認証資格情報を定義する場合は、この代替の方法を使用します。</p>
ツールの実行	<p>テストを実行します。テスト結果は[結果]表示枠に表示されます。</p> <p>テストから返されるステータス値は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> • OK • 不明なホスト名 • サーバに到達できません • サーバに接続できません • 読み込みのタイムアウト • 内容の照合エラー • ドキュメントが移動しました • 許可されていません • 禁止されています • 見つかりません • プロキシ認証が必要 • サーバエラー • 実装されていません • サーバが使用中です
ファイルに保存	結果をファイルに保存します。

XSL 変換ツール

このツールを使用すると、XML ファイルまたは出力の変換に利用可能なユーザ定義の XSL ファイルをテストできます。これには、Web アプリケーションから取得した、パフォーマンス・メトリクス・データが

含まれるファイルなどがあります。XSL 変換の使用は、参照可能な XML モニタで XML データを使用できるように許可可能な形式に処理するために必要になる場合があります。

アクセス方法	<ul style="list-style-type: none"> • [ツール]コンテキスト > [共通ユーティリティツール] > [XSL 変換ツール] を選択します(「ツールを使用」権限が必要です)。 • XML 測定値モニタを設定または表示する場合も使用できます (SiteScope の管理者、または「モニタ・ツールを使用」権限が付与されたユーザの場合)。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 新規モニタを設定する場合は新規モニタのダイアログ・ボックスで、既存のモニタを設定する場合はモニタの[プロパティ]タブで、[ツールを使用]ボタンをクリックします。 ■ 既存のモニタのテスト・ツールを実行するには、SiteScope ダッシュボード・ツールバーの[ツール]ボタン  をクリックします。これにより、ツールが開き、モニタの既存のデータを入力に使用して実行されます。テスト結果は[結果]表示枠に表示されます。
関連タスク	140ページ「モニタの設定時またはトラブルシューティング時の SiteScope ツールの使用方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> • 139ページ「SiteScope ツールの概要」 • 99ページ「[ツール]メニュー」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
メイン設定	
XML URL	変換の入力である XML ファイルの URL。
XSL ファイル	テストする XSL ファイルへのパス。これは、SiteScope のルート・フォルダへの相対パスです。 例： <SiteScope のルート・ディレクトリ>\templates.applications\XmlApp1.xsl
認証設定	
認証ユーザ名	対象 XML ファイルへのアクセスに認証が必要な場合、内容へのアクセスに必要なユーザ名。
認証パスワード	対象 XML ファイルへのアクセスに認証が必要な場合、内容へのアクセスに必要なパスワード。
プロキシ・サーバ	対象 XML 内容へのアクセスにプロキシ・サーバを使用する場合、プロキシ・サーバ・アドレス。
プロキシ・サーバのユーザ名/プロキシ・サーバのパスワード	対象 XML 内容へのアクセスにプロキシを使用する場合、プロキシの使用に必要なユーザ名およびパスワード。

UI 要素	詳細
ツールの実行	テストを実行します。テスト結果は[結果]表示枠に表示されます。
ファイルに保存	結果をファイルに保存します。

第7章

HP Live Network およびコンテンツ共有

本章の内容

概念

- 195ページ「HP Live Network およびコンテンツ共有の概要」

タスク

- 196ページ「コンテンツ共有のための HP Live Network の使用方法」

HP Live Network およびコンテンツ共有の概要

SiteScope モニタの開発後、そのモニタをテンプレートにコピーして、ほかの SiteScope ユーザと共有できるテンプレート・ファイルにエクスポートできます。テンプレートへのモニタのコピー方法の詳細については、[847ページ「既存の設定のコピーによるテンプレートの作成方法」](#)を参照してください。テンプレートのエクスポートの詳細については、[869ページ「テンプレートのエクスポートとインポートの方法」](#)を参照してください。

また、カスタム・モニタを共有したら、モニタが外部の jar またはクラスに依存している場合はそれらを追加して、コンテンツ・パッケージを作成する必要があります。カスタム・モニタのコンテンツ・パッケージの作成の詳細については、[324ページ「コンテンツ・パッケージの作成」](#)を参照してください。

テンプレートまたはコンテンツ・パッケージを個々の SiteScope ユーザに送信するか [HP Live Network](#) の SiteScope コミュニティにテンプレートをパブリッシュすることによって、テンプレートまたはコンテンツ・パッケージを配布できます。HP Live Network はオンライン・コミュニティで、HP カスタマが情報を共有し、アドオン・コンテンツ、エクステンション、HP Software ポートフォリオにわたる関連アクティビティについて知るための中心的な場所を提供します。

他の SiteScope ユーザと知識を共有することによって、対象とする SiteScope モニタの範囲が拡大します。さらに、SiteScope のリリース・サイクル以外の新規コンテンツの開発について情報を得ることができます。

HP Live Network の使用の詳細については、[196ページ「コンテンツ共有のための HP Live Network の使用方法」](#)を参照してください。

コンテンツ共有のための HP Live Network の使用方法

本項の内容

- 196ページ「HP Live Network コミュニティへのアクセス方法」
- 196ページ「HP Live Network コミュニティへのコンテンツのパブリッシュ方法」
- 197ページ「HP Live Network からのコンテンツのダウンロード方法」

HP Live Network コミュニティへのアクセス方法

1. 前提条件:

- HP カスタマが指定した製品の現在の保守契約でこのサイトへのフル・アクセスが可能。
- フル・アクセスには、HP Passport アカウントが必要です。また、製品の契約 ID (SAID) を次に入力済みである必要があります。

<http://support.openview.hp.com/entitlement/contracts>

2. HP Live Network へのアクセス:

- **SiteScope ユーザ・コミュニティ**のページ: SiteScope コミュニティ・フォーラムのディスカッションを読んだり、参加したり、製品のお知らせを取得したり、SiteScope コミュニティで共有しているコンテンツやその他のファイルにアクセスできます。

このページにアクセスするには、Web ブラウザで <https://hpln.hp.com/group/sitescope> と入力します。

- **[Community Content for SiteScope]** ページ: このエリアは、SiteScope コンテンツの開発および交換のために使用されます。自分が開発したコンテンツを共有したり、他のユーザが提供するコンテンツをダウンロードして評価したり、フォーラムにフィードバックを投稿したりできます。

[Community Content for SiteScope] ページに直接アクセスするには、Web ブラウザで <https://hpln.hp.com/group/community-content-sitescope> と入力します。

HP Live Network コミュニティへのコンテンツのパブリッシュ方法

1. HP Live Network 上の [Community Content for SiteScope] ページに移動します(このサイトにアクセスする前提条件については、196ページ「HP Live Network コミュニティへのアクセス方法」を参照してください)。

- SiteScope ユーザ・コミュニティ ページの **[CONTENT]** リンクをクリックし、**[Community Content for SiteScope]** リンクをクリックします。
- または、次からこのページに直接アクセスすることもできます。
<https://hpln.hp.com/group/community-content-sitescope>

2. [Community Content for SiteScope] ページで、**[CONTENT]** リンクをクリックして、コンテンツ・ファイルをアップロードする適切なフォルダを選択(または新しいフォルダを作成)して、**+ [Add content file]** をクリックします。

[Create File] ボックスで、次の動作を実行します。

- a. ファイルの名前を入力して、ファイルの状態(ドラフト、アルファ、ベータ、安定、リリース済みなど)を選択します。

- b. ファイルの説明を入力します。
 - c. ファイルのタイプ・オプションを選択します。
 - **[Regular file]**: **[ブラウズ]**をクリックし、アップロードするコンテンツを含むファイル(zip 形式のコンテンツ・パッケージ)を選択して、**[開く]**をクリックします。
 - **[リンク]**: ファイル・パスへのリンクを入力します。
- [保存]**をクリックして、サイトにコンテンツ・ファイルをアップロードします。
3. 新しいコンテンツについてほかのユーザーに通知するには、**[ANNOUNCEMENTS]**リンクをクリックして、アップロードされたコンテンツの詳細を追加します。製品に関するお知らせ購読しているすべてのユーザーに新しいコンテンツが自動的に通知されます。

HP Live Network からのコンテンツのダウンロード方法

次の手順で、HP Live Network コミュニティからコンテンツをダウンロードすることができます。

1. HP Live Network (<https://hpln.hp.com/group/community-content-sitescope>) の**[Community Content for SiteScope]** ページにアクセスします(このサイトにアクセスする前提条件については、196ページ「HP Live Network コミュニティへのアクセス方法」を参照してください)。
2. **[CONTENT]**リンクをクリックして、ファイルをダウンロードするフォルダを展開し、関連するファイル・リンクをクリックします。

注:

- また、SiteScope コミュニティ・コンテンツに関するディスカッションおよびお知らせについては、**[Announcements]** ページおよび**[Forums]** ページで確認することもできます。
 - 製品のお知らせ、フォーラムのトピックの投稿、およびコンテンツ・ファイルの投稿の通知を受信するには、該当する**[Subscribe to]**リンクをクリックして、送信間隔と送信方法を選択し、**[購読する]**をクリックします。
3. ドキュメントの関連セクションの説明に従って、コンテンツ・ファイルのインポート手順を続行します。
 4. ダウンロード後は、コンテンツ・ファイルを使用して**[Content]** ページのダウンロードや**[Forums]** ページの投稿コメントを評価することができます。

第8章

正規表現の使用

本章の内容

概念

- 199ページ「正規表現の概要」
- 200ページ「正規表現の定義」
- 201ページ「文字列リテラルの照合」

参照情報

- 202ページ「メタ文字を使用したパターンの照合」
- 205ページ「検索モード修飾子」
- 206ページ「内容の照合値の保持」
- 207ページ「SiteScopeの日付変数」
- 211ページ「ログ・ファイル監視の例」
- 215ページ「正規表現の使用時に発生する問題」

正規表現の概要

SiteScope では、テキスト・コンテンツの照合に正規表現を利用します。いくつかの SiteScope モニタでは、モニタの要求またはアクションによって返されるテキストの内容を照合できます。この章では、SiteScope モニタで正規表現を使用してテキスト・コンテンツを照合する方法について説明します。

正規表現は、Awk や Perl などのスクリプト言語および Emacs, Visual C++, Java などのプログラミング環境で使用するために開発されたテキスト解析ツールに付けられた名前です。正規表現自体はプログラミング言語ではありません。ただし、文字や記号の特殊な組み合わせを数多く使用するため、一部のプログラミング言語よりも理解しづらくなっている場合があります。このような特殊文字 (メタ文字と呼ばれます) のさまざまな組み合わせによって、正規表現は、より大きなテキストに含まれている特定のテキストを解析および抽出するための非常に強力な柔軟性のあるツールとなります。

モニタの[内容の照合]テキスト・ボックスに正規表現を使用すると、実行時にモニタに返されるテキストが SiteScope によって解析され、正規表現で定義したパターンに一致する内容が検索されます。このドキュメントでは、SiteScope モニタの内容を照合するために正規表現で使われる構文とメタ文字の概要について説明します。

正規表現の定義

SiteScope の内容を照合するための要素は、スラッシュ(/)文字です。SiteScope モニタの[内容の照合]テキスト・ボックスのエントリは、正規表現として認識されるようにスラッシュで囲む必要があります。たとえば、/website/ という表現をモニタの[内容の照合]ボックスに入力すると、SiteScope によって、モニタで受信したテキスト・コンテンツからwebsite というリテラル・テキスト文字列が検索されます。一致するテキスト文字列がない場合、モニタによってエラー・ステータスがレポートされます。一致するテキスト文字列がある場合、ほかのモニタ・ステータスのしきい値に対応する条件もすべて満たしていれば、モニタによって正常ステータスが返されます。スラッシュでエントリを区切らずにテキストまたはほかの文字を[内容の照合]ボックスに入力すると、SiteScope では、エントリは無視されるか、内容の照合エラーとしてレポートされます。

また、SiteScope の正規表現では、正規表現を囲むスラッシュ内に括弧 () を追加できます。これは非常に便利な機能です。括弧は「後方参照」を作成するために使用されます。後方参照として、SiteScope では括弧間で一致したテキストが保持され、モニタの詳細のページの[ステータス]フィールドにそのテキストが表示されます。これは、内容の照合のトラブルシューティングに役立ちます。この方法を使用して、一致した値のあるモニタから別のモニタに、または URL シーケンス・モニタのあるステップから同じランザクションの次のステップに渡すこともできます。また、括弧は次に示すように選択肢の範囲を定義するためにも使用されます。

通常、SiteScope で正規表現を作成して内容を照合する場合、反復的な手法が適しています。次に、正規表現を作成して内容を照合する場合の一般的な手順とガイドラインを示します。

- モニタするデータの1つのサンプルに一致するリテラル文字を使用して正規表現を作成します。例:
/value:1022.5/
- 繰り返しリテラル文字を文字クラスおよびメタ文字に置き換えて、リテラルをパターンへと標準化していきます。たとえば、前述の例のリテラルは、4つの数値、小数点、もう1つの数値に一致する
/value:\s\d\d\d\d\.\d/ になります。
- 照合するデータのパターンが変わる可能性がある場合を考えます。予測されるまたは可能性のある対象データの変動に合わせてパターンを調整します。前の例の /value:\s\d\d\d\d\.\d/ という表現は /value:\s[\d]{1, 8}\. [\d]{1, 2}/ のようになります。このパターンでは、小数点前の数値の数と小数点後の数値の数の変動に対応できます。このパターンでは、小数点が存在することを想定しています。ここで使用されている文字クラスの詳細については、次項を参照してください。
- 照合するリテラル文字列またはパターンがコンテンツ内に複数回出現する可能性がある場合を考えます。照合するコンテンツより前に出現する一意のコンテンツを指定してから正規表現のパターンを追加します。これにより、監視するコンテンツが照合される前に一意のコンテンツが式で照合されます。この例のパターンでは、最初のいくつかのエントリが /value:numbers/ のようになるパターンに一致します。静的コンテンツに一致するリテラルをパターンに追加すると、特定のデータの範囲が定まり、確実に対象データに対して照合を実行できるようになります。たとえば、照合するデータが Open Queries というテキストの後にある場合、/Open Queries[\s\W]{1, 5} value:\s[\d]{1, 8}\. [\d]{1, 2}/ のように、介在するコンテンツのパターンとともにこのリテラルをパターンに追加できます。

文字列リテラルの照合

正確な文字列またはリテラル文字列の検索と照合は、正規表現でのパターン照合の最も単純な形式です。リテラルの照合では、正規表現はワード・プロセッシング・アプリケーションの検索/置換と同様に動作します。前述の例では、Web site というテキストと照合しました。正規表現 `/Buy Now/` は、文字 `Buy Now` が空白も含めてこの順序で含まれるテキストがモニタに返された場合に成功します。

標準設定では、正規表現は大文字と小文字を区別したリテラルです。つまり、英数字以外の文字を含めて、大文字と小文字、および順序で内容が表現と一致する必要があります。たとえば、修飾子のない `/Website/` の正規表現は、内容に完全に一致する文字列 `Website` が含まれる場合のみに成功し、ページに含まれる内容が `website`, `WEBSITE`, または `Web site` の場合は失敗します(最後の例では、2つの単語の間に正規表現にはない空白があるため失敗します)。

この場合は、正規表現で使用される特別な「予約済み」メタ文字である特定の英数字以外の文字をリテラルに照合できます。一部のメタ文字は、正規表現で照合する重要なリテラルと競合する場合があります。たとえば、ピリオドやドット記号(`.`)、アスタリスク(`*`)、ドル記号(`$`)、バックスラッシュ(`\`)は正規表現内で特別な意味を持ちます。これらの文字のいずれかが検索する特定のテキスト・パターンの主要部分である場合、正規表現プロセスでこれらの文字を特別なメタ文字としてではなくリテラル文字として扱うように「エスケープ」する必要があります。文字をメタ文字ではなくリテラルとして強制的に解釈させるには、その文字の前にバックスラッシュを追加します。

例 - リテラル文字列の照合

たとえば、Web ページで文字列 `4.99` を検索する場合に、`/4.99/` という正規表現を作成したとします。この場合、文字列 `4.99` が一致しますが、ピリオド文字は特別な意味を持つため、`4599` や `4Q99` のような文字列も一致します。正規表現でピリオドをリテラルとして解釈させるには、次のようにピリオドをスラッシュでエスケープします。`/4\.99/`。文字の前にバックスラッシュのエスケープ文字を追加することで、正規表現プロセスでバックスラッシュに続く文字をリテラルとして強制的に解釈させることができます。通常、句読点やその他の英数字以外の文字を照合する場合は、常にこの構文を使用します。

代替の使用

代替を使用して、複数の文字列のいずれかが内容に含まれる either/or 照合を構成できます。代替文字は垂直パイプ記号(`|`)です。

垂直パイプは、正規表現で代替文字を区切るために使用されます。たとえば、正規表現 `/(e-mail|e-mail|contact us)/` は、垂直パイプで区切られた3つの文字列のいずれかが内容に含まれる場合に成功します。ここでは、代替の区切りに括弧が使用されています。この例では、一致する必要のある代替の外側にはパターンがありません。これに対して、`/(e-mail|e-mail|contact) us/` のように正規表現を記述することもできます。この場合、括弧に囲まれた3つの代替のいずれかの直後に空白スペースと単語 `us` が続く場合にのみ、照合は成功します。これは前の例よりも制限がありますが、括弧によって代替が内部の3つの単語に限定されていることもわかります。代替の1つ以上が見つかった場合でも次の単語が「`us`」でない場合は、照合は失敗します。

メタ文字を使用したパターンの照合

照合が必要なテキストが正確にわからない場合や、テキスト・パターンがセッションや日によって変わることはよくあります。正規表現には、パターンの定義や文字のカテゴリ全体の照合に使用する特殊なメタ文字が多くあります。正規表現は、単なるリテラルの英数字文字の照合だけでなく、非英数字文字の照合にも使用できます。このため、正規表現では検索する内容に非英数字文字が存在することを考慮することが重要です。つまり、正規表現を作成するときには、ピリオド、カンマ、ハイフン、引用符などの文字や、空白さえも考慮する必要があります。

本項の内容

- [202ページ「正規表現で使用するメタ文字」](#)
- [203ページ「文字クラスの定義」](#)
- [203ページ「数量詞の使用」](#)

正規表現で使用するメタ文字

メタ文字	詳細
\s	汎用的な空白 (つまり Space キー) を照合する。このメタ文字は、数量詞と組み合わせて、照合対象の単語間に発生する可変の空白数の位置を照合する場合に特に便利です。
\S	空白以外の文字を照合する。\\s は大文字です。一方、小文字の \\s は空白の照合に使用します。
.	ピリオド (ドット文字)。通常、これはすべての文字を照合します。SiteScope では、ドットは独自形式の文字クラスとみなされるため、文字クラスの角括弧内に含めないでください。
\\n	行送り文字を照合する。
\\r	復帰改行文字を照合する。
\\w	空白以外の文字を照合する。文字クラス [A-Za-z0-9_] で照合するものと同じです。\\w メタ文字は、アンダースコア文字を照合しますが、ほかの句読点 (ハイフン、カンマ、ピリオドなど) は照合しません。
\\W	\\w (小文字) で照合する文字以外の文字を照合する。句読点と非英数字文字 (~!@#\$%^&*()+={[}] ; & と行送り文字、復帰改行、空白を含む) を照合する場合に特に便利です。\\w で照合される単語構成要素とみなされるアンダースコア文字は照合しません。
\\d	数字のみを照合する。これは、[0-9] 文字クラスに相当します。
\\D	非数字文字 (\\d で照合しない文字) とほかの文字を照合する。\\W と似ていますが、英文字も照合します。SiteScope では、通常これは数字に遭遇するまでのすべて (複数行を含む) を照合します。
\\b	照合に際し、\\b で指示した位置に単語の境界 (通常は空白) が必要であることを示す。

メタ文字	詳細
\B	指示した位置に単語の境界があってはならないことを示す。

文字クラスの定義

文字クラスは、重要で非常に便利な正規表現構成です。文字クラスには、正規表現内の特定の位置で検出される可能性がある特定の文字セットを定義します。文字クラスを使用するのは、1つの位置で照合する文字の範囲を定義する場合、または数量詞を追加して複数の文字や複数行を広く照合する場合などです。

文字クラスは、文字とメタ文字の任意の組み合わせを角括弧[]で囲んで形成します。文字クラスでは、照合対象となる「いずれか、またはすべて」の文字のグループを作成します。文字クラス外のリテラルやメタ文字とは異なり、文字クラス内の文字やメタ文字の物理的な並びは検索や照合の順序に影響しません。たとえば、クラス[ABC0123abc]は[0123abcABC]と同じ内容を照合します。

ハイフンを使用して文字または数字の範囲を示すことで、文字クラスをさらに効率化できます。たとえば、クラス[0-9]には0から9までのすべての数字が含まれます。クラス[a-z]にはaからzまでのすべての小文字が含まれます。ハイフンを使用して、より限定的なクラスを作成することもできます。たとえば、[e-tE-T]はEからTまでの大文字または小文字を照合し、[0-5]は0から5までの数字のみを照合します。

キャレット文字(^)を文字クラス内で否定として使用すると、特定の文字を内容の照合から除外できます。

文字クラスの例

例	詳細
[a-zA-Z]	文字 a から文字 z までの任意の英文字(大文字と小文字の両方)を照合する。複数の文字を照合するには、後述のように文字クラスの後に数量詞を付加します。
[0-9]	0 から 9 までの任意の数字を照合する。複数の数字を照合するには、後述のように文字クラスの後に数量詞を付加します。
[\w\s]	英数字文字または空白、あるいはその両方を照合する。
[\w^ []]	アンダースコアを除く、任意の英数字文字を照合する。

数量詞の使用

正規表現に、文字をカウントするオプションとして使用できるメタ文字のもう1つのセットです。これにより、内容の照合機能を大幅に強化して柔軟性を高めることができます。数量詞は、前述のメタ文字と文字クラスの後に付加して、先行する照合文字またはメタ文字を照合する位置を指定します。たとえば、正規表現/(contact|about)\s+us/では、メタ文字\sが空白を照合します。プラス記号の数量詞を\sの後に付けると、単語contact(またはabout)とusの間に少なくとも1文字以上の空白が必要であることを示します。

次の表では、正規表現で使用する数量詞について説明します。数量詞は、その直前にある1文字に適用されます。文字クラスと併用する場合、数量詞は文字クラスの閉じ角括弧の外側に置きます。例:[a-z]+や[0-9]*のように指定します。

数量 詞	詳細
?	疑問符は、先行する文字または文字クラスが1回だけ出現する可能性があることを示す。ただしこれは任意指定であり、指示した位置に出現しなくてもかまわない。
*	アスタリスクでは、任意の数の先行する文字または文字クラスが指定した位置に出現する必要がある。これには、0以上の一致が含まれます。 注 :この数量詞を、ドット(.)メタ文字または \W メタ文字を含む文字クラスと組み合わせると、想定より多くの内容が取得されて正規表現エンジンがSiteScope サーバの利用可能な CPU 時間を使い切ってしまう可能性があるため、注意してください。
+	プラス記号は、先行する文字また文字クラスが少なくとも1回出現する必要があることを示す。
{min, max}	波括弧は、数量詞の範囲指定に使用する。範囲列举子の数字はカンマで区切ります。この構成では、先行する文字または文字クラスの出現回数が min 列举子で指定した回数以上、 max 列举子で指定した値以下である必要があります。少なくとも min 列举子で指定した回数出現すれば、照合は成功します。ただし、照合は max 列举子で指定した回数か、それ以上一致が検出されなくなるまで続行されます。

SiteScope での内容の照合は、HTTP 応答全体に対して実行されます。これには、通常はブラウザでは表示できない HTTP ヘッダも含まれます。HTTP ヘッダには通常、数字のシーケンスと組になった単語を含む、複数行のテキストが含まれます。これにより、数字や文字の小さいセットなどの単純な内容に対する照合以外では、照合が失敗することがあります。失敗を避けるには、照合対象のテキストの近くにある固有の文字シーケンスを特定し、可能ならばそれをリテラルとして正規表現に含めます。

検索モード修飾子

SiteScope で使用する正規表現では、表現を区切るスラッシュの外側に任意指定の修飾子が含まれていることがあります。閉じるスラッシュの後にある修飾子は、照合の実行方法に影響します。たとえば、`i` 検索修飾子が追加された `/website/i` という正規表現では、照合内容での検索は大文字と小文字が区別されません。この場合、`website`、`Website`、`WEBSite` や、`WEBSITE` でさえも一致します。

`i` 修飾子を除き、一部のメタ文字と文字クラスによって検索モード修飾子を上書きできます。特にドット(`.`)と `\w` メタ文字は、`m` および `s` 修飾子を上書きし、これらの修飾子があっても複数行にわたって内容を照合します。

複数の修飾子を追加するには、正規表現の閉じるスラッシュの後に修飾子を連結して追加します。例: `/matchpattern/ic` は `i` および `c` 修飾子を結合します。

正規表現照合モード修飾子

モード修飾子	詳細
<code>/i</code>	大文字と小文字の区別を無視する。これにより、大文字と小文字に関係なく検索が行われます。これは、Web ページのテキスト内容内で一致を検索する場合に特に便利なオプションです。
<code>/c</code>	一致したパターンが、検索する内容に出現してはならないことを示す。これは「補集合的」照合であり、パターンが検出されるとエラーが返され、パターンが検出されないと成功します。
<code>/m</code>	途中にある復帰改行や行送りを無視せずに複数行を照合する。この修飾子を使用した場合でも、行送りや復帰改行は、 <code>[\w\W]*</code> や <code>[\s\S\n\r]*</code> などの文字クラスを使用して考慮する必要があります。この修飾子を使用すると、 <code>*</code> は復帰改行や行送りを照合しません。
<code>/s</code>	途中にある復帰改行および行送り文字を無視して内容を1行とみなす。この修飾子を使用した場合、 <code>[\w\W]*</code> 文字クラスと <code>*</code> パターンのどちらも行送りと復帰改行をまたいで照合を行います。

内容の照合値の保持

URL モニタや URL シーケンス・モニタなど、一部のモニタには、ログに記録され、エラー・ステータスしきい値の設定に使用できる内容の照合値があります。正規表現構文で使用する括弧 /(照合パターン)/ には、内容の照合値に保持されるテキストを判断するというもう1つの目的があります。この機能を使用して、URL モニタまたは URL シーケンス・モニタのエラーしきい値を判断するために、内容の照合値をしきい値として直接使用します。

たとえば、内容の照合表現が次のような場合を例に挙げます。

```
/Copyright (\d*)/
```

URL リクエストによってモニタに返される内容に次の文字列が含まれているとします。

```
... Copyright 2007 by HP
```

一致した結果、保持される内容の照合値は、次のようになります。

```
2007
```

次に、モニタ設定ページ下部の error-if オプションの下で、error-if 条件をステータスの標準設定 != 200 から内容の照合に変更し、関係演算子を != に指定し、値を 2008 に指定できます。これにより、文字列 Copyright の年が 2008 以外の場合は、モニタからエラーがレポートされるようにこのモニタのエラーしきい値が設定されます。このメカニズムは、Web ページの内容が不正に変更されていないかどうかを監視するために利用できます。

Web ページにあるほかの URL へのリンクの確認は、URL シーケンス・モニタの作成において重要な部分です。Web ページのリンクの URL テキストを照合するには、次の正規表現を使用できます。

```
/a href="?([:\/\w\s\d\.]*)"?/i
```

この表現は、href="protocol://path/URLname.htm" を多数の URL と照合します。疑問符修飾子を使用することによって、HREF= 属性を囲む引用符の指定は任意になります。i 修飾子により、照合パターンの大文字と小文字は区別されません。

内容の照合から保持または記憶された値は、URL シーケンス・モニタの後続ステップで参照され、入力値として使用できます。シーケンス・ステップ間での値の保持または受け渡しに使用する構文については、「[URL Sequence Monitor](#)」の[Match content]を参照してください。

SiteScopeの日付変数

SiteScope では、特別に定義された変数を使用して、現在の日付または時刻を照合する表現を作成します。これらの変数を内容の照合フィールドで使用すると、日付が記述された内容を検出できます。一般の日付変数は、日付形式の部分を照合するのに便利です。言語または国に固有の日付変数を使用すると、ISO コードに基づき、月と曜日の名称に使用される言語を自動的に特定の国に拡張できます。

本項の内容

- [207ページ「一般の日付変数」](#)
- [208ページ「言語または国に固有の日付変数」](#)
- [209ページ「モニタ URL またはファイル・パスの特殊置換」](#)

一般の日付変数

次の表は、一般変数を示します。

変数	値の範囲
\$hour\$	0 - 23
\$minute\$	0 - 59
\$month\$	1 - 12
\$day\$	1 - 31
\$year\$	1000 - 9999
\$shortYear\$	00 - 99
\$weekdayName\$	Sun ~ Sat
\$fullWeekdayName\$	Sunday - Saturday
\$0hour\$	00 - 23
\$0minute\$	00 - 59
\$0day\$	01 ~ 31(2桁の日付形式)
\$0month\$	01 ~ 12(2桁の月形式)
\$monthName\$	Jan ~ Dec(英語の3文字の月形式)
\$fullMonthName\$	January - December
\$ticks\$	1970年1月1日の午前0時から経過したミリ秒数。

たとえば、内容の照合検索表現を次のように定義します。

```
/Updated on $0month$\/$0day$\/$shortYear$/
```

リクエストによって返された内容に次の文字列が含まれているとします。

Updated on 06/01/98

この表現は、モニタが1998年6月1日に実行されると一致します。返された内容に現在のシステム日付と一致する文字列が含まれていない場合、または日付形式が指定した形式と異なる場合、照合は失敗します。

時間を現在時刻より前または後にする場合は、表現に `$offsetMinutes=mmmm$` を追加できます。これにより、置換を行う前に現在時刻が `mmmm` 分間ずらされます(時間を遡るには負の数値を指定できます)。

たとえば、現在の日付が2007年6月1日だとすると、検索表現は次のようになります。

```
/$offsetMinutes=1440$Updated on $0month$\/$0day$\/$shortYear$/
```

この場合、一致する内容文字列が次のようになります。

Updated on 06/02/07

注: 日付がシステム日付の1日後になっています。

言語または国に固有の日付変数

次の表は、国際標準の曜日および月の名称の照合で使用する SiteScope の特殊変数を示します。LL と CC という文字は、ISO 639 言語コード文字(2文字)と ISO 3166 国コード文字(2文字)のプレースホルダです(詳細については、表の下の説明を参照)。

変数	値の範囲
<code>\$weekdayName_LL_CC\$</code>	指定した言語(LL)および国(CC)の曜日の省略名称(表の下の説明を参照)
<code>\$fullWeekdayName_LL_CC\$</code>	指定した言語(LL)および国(CC)の曜日の正式名称
<code>\$monthName_LL_CC\$</code>	指定した言語(LL)および国(CC)の月の省略名称
<code>\$fullMonthName_LL_CC\$</code>	指定した言語(LL)および国(CC)の月の正式名称

CC: 大文字 2 文字で表記する ISO-3166 国コード。たとえば、ドイツは DE、フランスは FR、中国は CN、日本は JP、ブラジルは BR のように表します。このコードの一覧表は、次のようなインターネット・サイトなど、多数のインターネット・サイトから入手できます。

http://www.iso.org/iso/country_codes/iso_3166_code_lists/country_names_and_code_elements.htm(英語サイト)

LL: 小文字 2 文字で表記する ISO-639 言語コード。たとえば、ドイツ語は de、フランス語は fr、中国語は zh、日本語は ja、ポルトガル語は pt のように表します。このコードの一覧表は、次のようなインターネット・サイトなど、多数のインターネット・サイトから入手できます。

<http://www.ics.uci.edu/pub/ietf/http/related/iso639.txt>(英語サイト)または
<http://www.dsv.su.se/~jpalme/ietf/language-codes.html>(英語サイト)

たとえば、内容の照合表現を次のように定義します。

```
/$fullWeekdayName_fr_FR$/i
```

リクエストによって返された内容に次の文字列が含まれているとします。

```
mercredi
```

この表現は、モニタが土曜日に実行されると一致します。

国に固有の言語のバリエーションを考慮する必要がない場合は、国コードを含めずに前述の任意の変数を使用できます。例：

```
/$fullWeekdayName_fr$/
```

上の表現は、`/$fullWeekdayName_fr_FR$/` と同じ内容を照合するために使用できます。

モニタ URL またはファイル・パスの特殊置換

SiteScope の日付変数は、正規表現の一部として内容を照合するのに便利です。日付変数は、特定のモニタに URL またはファイル・パスを動的に作成するために、特殊置換としても使用できます。これは、システムの日付情報に基づいて URL またはファイル・パスが自動的に更新される、日付が記述されたファイルとディレクトリを監視するのに役立ちます。SiteScope は、日付が記述されたログ・ファイルを作成するアプリケーションの一例です。ログ・ファイル名には部分的に、`File2001_05_01.log` のように何らかの形式で年月日が含まれます。

この例に基づき、新しいファイルが毎日作成されます。通常、当日のファイルの作成、サイズ、または内容をモニタするには、モニタのファイル・パスまたは URL を毎日手動で変更する必要があります。SiteScope の日付変数と特殊置換を使用すると、SiteScope は当日のログ・ファイルのファイル・パスを自動的に更新できます。ファイルの命名に使用されるパターンを把握することによって、システム日付のプロパティの一部をファイル・パスまたは URL に代入する正規表現に似た特殊置換文字列を作成できます。

次の例はファイル・モニタにある当日のログ・ファイルの絶対ファイル・パスであるとして。

```
D:/Production/Webapps/Logs/File2001_05_01.log
```

翌日のログ・ファイルは、次のようになります。

```
D:/Production/Webapps/Logs/File2001_05_02.log
```

次の構文を使用して、モニタで使用するファイル・パスを自動的に更新する特殊置換表現を作成できます。

```
s/D:\Production\Webapps\Logs\File$year$_$0month$_$0day$.log/
```

置換の表現は、小文字の `s` で開始し、スラッシュ `/.../` で囲む必要があります。ファイル・パスの一部として含まれるスラッシュは、上に示すようにバックスラッシュ `\` 文字を追加してエスケープする必要があります。SiteScope 日付変数は、アンダースコア文字で区切ります。SiteScope では、モニタを実行するたびにシステム時刻のプロパティをチェックし、ファイルにアクセスする前に該当する値がファイル・パスまたは URL に代入されます。

特殊置換をサポートする SiteScope モニタ・タイプは、次のとおりです。

- e ビジネス・チェーン
- ファイル・モニタ
- ログ・モニタ
- URL モニタ
- URL シーケンス・モニタ
- Web サーバ・モニタ

特殊置換の構文は正規表現で使用する置換構文に似ていますが、同じではありません。内容の照合の正規表現では SiteScope の日付変数をすべて使用できるのに対し、特殊置換は内容の照合表現の一部として使用できません。

ログ・ファイル監視の例

SiteScope のログ・ファイル・モニタとファイル・モニタ では、ほかのアプリケーションで作成されたファイルのエントリがチェックされます。これらのファイルは、サードパーティ製のアプリケーションで作成したデータ・ファイルであったり、自分の環境用に特別に設計されたカスタム・システムで作成したログであったりします。ログまたはファイルが既知の予測可能な形式で記述されている場合、新しいエントリを定期的にチェックし、内容の特定の文字列と照合するように SiteScope を設定できます。ログ・ファイルのエントリの例とエントリのチェックに使用できる単純な正規表現パターンを次に示します。これらの例をそのまま使用するか、特定のケースに合わせて変更できます。

注: SiteScope では、正規表現をすべて 1 行で入力する必要があります。次に示す例には、このページ内に収めるために複数行にわたって記述されているものもあります。

本項の内容

- [211ページ「ログ・ファイルのパスの検索」](#)
- [212ページ「カンマで区切られた値の照合」](#)
- [212ページ「空白で区切られた値の照合」](#)
- [213ページ「テキストまたは数値の行の数値の照合と保持」](#)
- [213ページ「整数と浮動小数点数\(正または負\)の照合」](#)
- [214ページ「日付と時刻を含むログ・エントリの照合」](#)

ログ・ファイルのパスの検索

UNIX と Windows オペレーティング・システムとでは、ファイル名の大文字と小文字(「N」と「n」)の取り扱いに互換性がありません。Windows オペレーティング・システムでは大文字と小文字が区別されず、ファイルの検索時には大文字と小文字が無視されます。UNIX オペレーティング・システムでは大文字と小文字が区別され、名前の文字の大小の違いは常に重要です。UNIX オペレーティング・システム上のパス名の検索で正規表現を使用する場合にログ・ファイル・エラーを避けるには、パス表現の大文字と小文字を変更するマークを使用します。

マーカ	詳細
\$L	\$L マーカと \$E マーカの間の文字を小文字に変更できる。
\$U	\$U マーカと \$E マーカの間の文字を大文字に変更できる。
\$E	大文字と小文字の変更に使用する終了マーカ。

例 :

次のパス表現を定義するとします。

```
s/\tmp\/logs\/arcv.log.$weekdayName$/
```

Linux マシン上の /tmp/logs/arcv.log.tue ログ・ファイルの場合、SiteScope が tmp/logs/arcv.log.Tue を検出しようとし、Linux では大文字と小文字が区別されるため、ログ・ファイル・エラーが表示されます。

この問題を解決するには、パス表現を次のように定義します。

```
s/\tmp\logs\arcv.log.$L$weekdayName$$E/
```

モニタ\$Lから\$Eの間にある文字を小文字 /tmp/logs/arcv.log.tue に変換します。

反対に、SiteScope でマーカー間の文字を大文字に変更できるようにするには、\$Uと\$Eを使用します。たとえば、次のパス表現を定義するとします。

```
s/\tmp\logs\arcv.log.$L$weekdayName$$E/
```

モニタは、パスを /tmp/logs/arcv.log.TUE に変換します。

パス表現では、\$Lと\$Uを複数回使用できます。また同じ表現で両方を使用できます。

例：

```
s/\tmp\logs-$L$weekdayName$$E\arcv.log.$U$weekdayName$$E/
```

上記はパスを /tmp/logs-tue/arcv.log.TUE に変換します。

```
s/\tmp.$L$monthName$$E\logs-$L$weekdayName$$E\arcv.log.$U$weekdayName$$E/
```

上記はパスを /tmp.mar/logs-tue/arcv.log.TUE に変換します。

カンマで区切られた値の照合

カンマで区切られた数値と文字列のログ・ファイル・エントリの例を次に示します。

```
new,open,changed,12,alerts
new,open,changed,13,alerts
new,open,changed,13,alerts
new,open,changed,14,alerts
```

カンマで区切られた数値と文字列のログ・ファイル・エントリに一致する正規表現を次に示します。

```
/([\w\d]+,[\w\d]+,[\w\d]+,[\w\d]+,[\w\d]+)[\n\r]?/
```

注: このファイル・エントリにアンダースコアやコロンなどの句読点が含まれる場合、[\w\d] クラス・パターンにその文字を明示的に追加してください。たとえば、コロンを含めるには、[\w\d] パターンのそれぞれを [\w\d:] に変更します。

空白で区切られた値の照合

空白で区切られた文字列と数値のログ・ファイル・エントリの例を次に示します。

```
requests 12 succeeded 12 failed
requests 12 succeeded 12 failed
requests 11 succeeded 11 failed
requests 12 succeeded 12 failed
requests 10 succeeded 10 failed
```


空白で区切られた文字列と数値のログ・ファイル・エントリに一致する正規表現の例を次に示します。

```
/([\\w\\d]+\\s+[\\w\\d]+\\s+[\\w\\d]+\\s+[\\w\\d]+\\s+[\\w\\d]+\\s+[\\w\\d]+)[\\n\\r]?/
```

注: + 文字を使用すると、照合パターンで 1 行に指定した数のシーケンス含めることができます。この例では、ログ・ファイル内で 5 つの単語または数値が含まれる行に一致します。このシーケンスにアンダースコアやコロンなどの句読点が含まれる場合、[\\w\\d] クラス・パターンにその文字を明示的に追加してください。たとえば、コロンを含めるには、[\\w\\d] パターンのそれぞれを [\\w\\d:] に変更します。

テキストまたは数値の行の数値の照合と保持

カンマで区切られた数字と文字が混在する文字列のログ・ファイル・エントリの例を次に示します。

```
request handle number 12.56, series 17.5, sequence reported 97.45,  
15.95 and 19.51 request handle number 15.96, series 27.5, sequence  
reported 107.45, 25.95 and 19.52 request handle number 11.06,  
series 36.5, system codes 9.45, 35.95 and 19.53 log reference  
number 12.30, series 17.5, channel reset values 100.45, 45.95 and  
19.54
```

カンマで区切られた数字と文字が混在する文字列のログ・ファイル・エントリに一致し 10 進数のデータを保持する正規表現の例を次に示します。

```
/[,\\w\\s]+(\\d+\\.\\d+)[,\\w\\s]+(\\d+\\.\\d+)[,\\w\\s]+(\\d+\\.\\d+)[,\\w\\s]+  
(\\d+\\.\\d+)[,\\w\\s]+(\\d+\\.\\d+)[\\n\\r]?/.
```

注: このファイル・エントリにアンダースコアやコロンなどの句読点が含まれる場合、[,\\w\\s] クラス・パターンにその文字を明示的に追加してください。たとえば、テキスト・シーケンスに現れるコロンを含めるには、[,\\w\\s] パターンのそれぞれを[:,\\w\\s] に変更します。

整数と浮動小数点数(正または負)の照合

一連の正または負の整数と浮動小数点数によるログ・ファイル・エントリの例を次に示します。

```
12.1987 -71 -199.1 145 -1.00716 13.2987 -72 -199.2 245 -1.00726  
14.3987 -73 -199.3 345 -1.00736 15.4987 -74 -199.4 445 -1.00746
```

5 つの正または負の整数と浮動小数点数によるログ・ファイル・エントリに一致する正規表現の例を次に示します。各エントリの数値は 1 つまたは複数の空白で区切られている必要があります。

```
/(-?\\d+\\.??\\d{0,})[\\s]+(-?\\d+\\.??\\d{0,})[\\s]+(-?\\d+\\.??\\d{0,})[\\s]+
```

```
(-?\d+\.?\d{0,})[\s]+(-?\d+\.?\d{0,})[\n\r]?/
```

日付と時刻を含むログ・エントリの照合

多くのログ・ファイルには一定の形式の日付と時刻が各エントリに含まれます。カンマで区切られた文字列に加えて日付と時刻の情報を含むログ・ファイル・エントリの例を次に示します。

```
20/04/2003 14:29:22,ERROR,request failed  
20/04/2003 14:31:09,INFO,system check complete  
20/04/2003 14:35:46,INFO,new record created
```

カンマで区切られた文字列の前に日付と時刻の情報を含むログ・ファイル・エントリに一致する正規表現の例を次に示します。次の例では、SiteScope が稼動しているサーバのシステム・クロックによって示された同じ年月日に作成されたエントリのみに一致するために SiteScope の日付変数を使用しています。

```
/$0day$\/$0month$\/$year$\s+\d+:\d+:\d+,[\w\d]+,[\w\d]+/
```

次の例では、SiteScope が稼動しているサーバのシステム・クロックによって示された同じ年月日および同じ時間内に作成された、より限定されたエントリのみに一致するために SiteScope の日付変数を使用しています。

```
/$0day$\/$0month$\/$year$\s+$0hour$:\d+:\d+,[\w\d]+,[\w\d]+) /
```

正規表現の使用時に発生する問題

本項では、正規表現の使用時に発生する問題について説明します。

本項の内容

- 215ページ「* 構成子を使用すると、内容の任意のページに膨大な一致結果が表示される」
- 215ページ「テキストの照合は、JavaScript などのクライアント側スクリプトを含む URL の(スクリプトからのブラウザの出力ではなく)スクリプトのコード行に対して行われる」
- 215ページ「要求した最小一致が満たされるとすぐに正規表現の照合が成功する」
- 215ページ「英数字以外の内容を考慮するのを忘れる」
- 216ページ「過剰なメタ文字の使用は問題となる可能性がある」
- 216ページ「正規表現構文の例」

* 構成子を使用すると、内容の任意のページに膨大な一致結果が表示される

* 構成子を使用することで、SiteScope で使用される正規表現照合エンジンが SiteScope サーバで利用可能なすべての CPU サイクルを占有してしまうことがわかっています。この問題が発生すると、SiteScope は機能しなくなります。そのため、原因となっている正規表現を使用するモニタが実行されるたびに再起動する必要が生じ、この表現が修正されるまでこの状況が続きます。

注: 正規表現の照合は、SiteScope モニタの要求に応じて返されるテキストの内容全体に対して実行されます。これには、ブラウザ・ウィンドウには通常表示されない(たとえば[表示]>[ソース]オプションでは表示されない)HTTP ヘッダが含まれます。つまり、ブラウザ・ビューに表示されないほかの情報を考慮する必要があることを意味します。これには、インターネット検索エンジンおよびクライアント側スクリプトで使用される META タグのテキストが含まれます。

テキストの照合は、JavaScript などのクライアント側スクリプトを含む URL の(スクリプトからのブラウザの出力ではなく)スクリプトのコード行に対して行われる

つまり、スクリプトによって計算された値で Web ページ上のテキストが動的に書き込まれるか置換されると、この内容を正規表現で照合できない可能性があります。スクリプトによってテキストの変更のみが実行されると、スクリプト・コードに表示される、対応するテキスト文字列と照合できる可能性があります。さらに問題なのは、ブラウザで特定の条件が満たされるかどうかを確認しようとすると、ユーザのアクションに関係なく、一致するテキスト文字列がスクリプトの内容に表示されるということです。

要求した最小一致が満たされるとすぐに正規表現の照合が成功する

1つの一致があると、それ以降の照合は行われません。そのため、正規表現は繰り返されるテキスト・パターンの出現数を数えるのには適していません。たとえば、項目のカatalog・リストが含まれる Web ページを確認するとします。各項目の横には Buy Now! というリンクがあり、少なくとも5つの項目が表示されることを確認する場合、/Buy Now!/ という正規表現では、最初の Buy Now! にしか一致しません。同様に、正規表現でメイン・ブラウザ画面の catalog という単語を検索する場合、HTML ヘッダ・セクションの META タグとしてその単語が表示されていたり、照合しようとした項目の前に、サイト・ナビゲーション・メニューにあるハイパーリンクとして内容に表示されていたりすると、照合が成功してしまいます。

英数字以外の内容を考慮するのを忘れる

正規表現は、存在する文字および存在する可能性のある文字すべてを考慮して記述する必要がある

あります。これには、空白文字、行送り、および復帰改行が含まれます。通常、1つの単語をリテラル照合する場合にはこれは問題になりません。不明な数の空白文字やその他の英数字以外の文字で区切られ、かつ複数行にわたる可能性のある複数の単語との照合を作成する必要があるときは、難しい場合があります。`[\s\n\r]+` 文字クラスは、表現内で使用される単語と単語の間に使用すると便利な場合があります。一見単純そうな照合の失敗につながる可能性がある、パターンやピリオド、カンマ、ハイフンなどの特殊文字が、照合しようとしている内容の形式に含まれていないかを必ず確認してください。

過剰なメタ文字の使用は問題となる可能性がある

場合によっては、`.` または `\w` メタ文字に過度な量の数量詞を組み合わせると、リテラル文字列と照合しようとした内容が正規表現のほかの部分で取得され、照合が失敗する可能性があります。たとえば、ハイパーリンク・アンカー参照の URL 内容を照合する場合は、`/a href="([\W\w\s]*)"/` を使用できます。ただし、モニタでこの正規表現のチェックを行うと、最初に一致したパターン `/a href="...` が取得され、続いてそのページ上の最後の引用符までの複数行のテキストが一致します。ほかの一意の終了区切り文字を使用しないと、`[\W\w\s]*` クラスと数量詞の組み合わせは過剰になります。期待される文字のクラスを絞り込むには、`/a href="?([:\/\w\s\d\.]*)"?/` という構文がより適切です。

正規表現構文の例

正規表現で使用する構文の例を次に示します。

表現の例	詳細
<code>/CUSTID\s?=\s?([A-Z0-9]{20,48})/</code>	この例では、20 文字以上の数字と大文字(スペースと非英数字は使用しない)で構成される ID 文字列を照合します。 <code>\s?</code> 構成子により、等号記号のどちら側でも空白文字を使用できます。文字クラスを括弧で囲むと、SiteScope では、内容の照合値としてこの値(最大 48 文字)が保持され、一致した値がモニタの詳細状態列に表示されます。
<code>/a href="?([:\/\w\s\d\.]*)"?/i</code>	この例では、HTML ハイパーリンク内の URL 文字列を照合します。 <code>"?</code> 構成子により、URL 文字列のいずれの端の引用符も任意となります。括弧を使用すると、SiteScope では、この値が内容の照合値として保持され、値はモニタの状態に表示されます。 <code>i</code> 修飾子は、検索時に大文字と小文字を同等に扱うことを示します。
<code>/"[^"]*"'/</code>	この例では、引用符で囲まれたテキスト・シーケンスを照合します。否定のキャレット(^)を使用して、引用符以外のすべての文字の文字クラスを定義します。

プログラミング言語やスクリプト言語と同様に、ほとんどの場合、特定の照合を達成するための正規表現の構成には、複数の方法があります。正規表現の正しい作成方法は1つだけではありません。必要な結果が得られるまで、必要に応じて正規表現のテストと変更を行ってください。

第2部分

統合

第9章

BSM を使った作業

本章の内容

概念

- 219ページ「SiteScope と BSM の通信方法について」
- 221ページ「接続の設定」
- 222ページ「SiteScope データと BSM の構成アイテムとの統合」
- 227ページ「検出されたトポロジの BSM へのレポート」
- 229ページ「CI のダウンタイム」

タスク

- 231ページ「SiteScope および BSM 間の統合の設定方法」
- 235ページ「SiteScope を SSL が必要な BSM サーバに接続する方法」
- 236ページ「クライアント証明書が必要な BSM サーバに SiteScope を接続する方法」
- 237ページ「トポロジ・レポートの設定方法」
- 240ページ「カスタム・モニタ用のトポロジ・レポートの設定方法」
- 243ページ「カスタム・モニタ用のカスタム・トポロジの設定方法」

参照情報

- 249ページ「初期設定でトポロジ・データをレポートしないモニタ」
- 250ページ「測定値ごとに CI をレポートするモニタ」

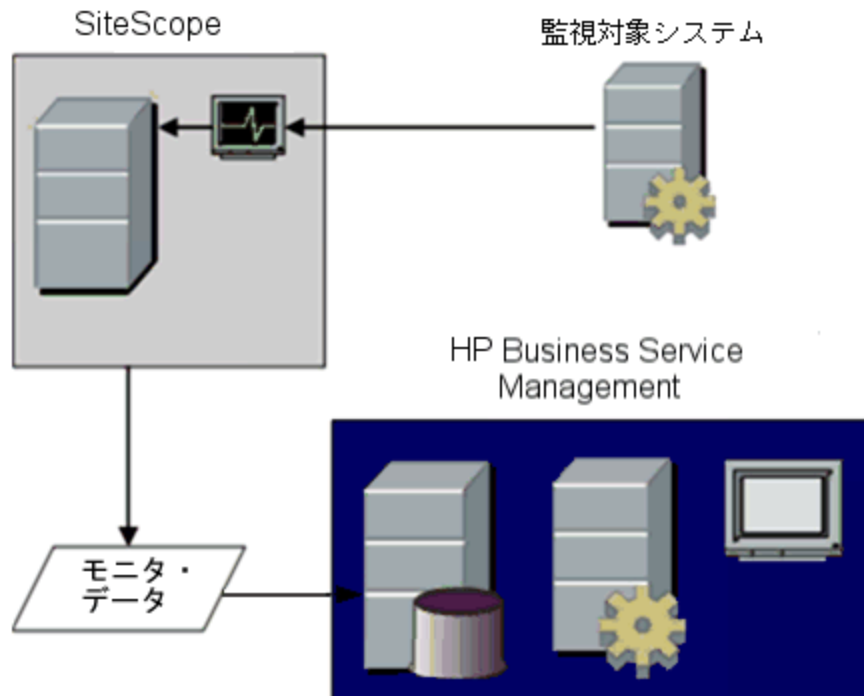
251ページ「トラブルシューティングと制限事項」

SiteScope と BSM の通信方法について

SiteScope は、Business Service Management (BSM) のデータ・コレクタとして使用できます。BSM では、エンドユーザ、ビジネス・プロセス、システムのデータを使用します。

BSM に対するデータ・コレクタとして設定する場合、SiteScope モニタによって収集されるメトリックおよびトポロジ・データを BSM に渡して分析およびレポートに使用できます。監視データは、すべてのモニタの監視データ、または選択したモニタの監視データのみを送信できます。

次に、SiteScope を BSM のデータ・コレクタとして使用した図を示します。



注: BSM 統合を HP Operations Agent を使用する統合と混同しないでください。HP Operations Agent は BSM の PMi(操作管理の[パフォーマンス パースペクティブ]タブにデータが表示される)または Performance Manager(HPOM のレポート・コンポーネント)でメトリック・データの表示に必要です。HP Operations Agent を使用したメトリックの収集の詳細については、[265 ページ「HP Operations Agent を使用した測定値の報告」](#)を参照してください。

BSM にはシステム可用性管理 (SAM) ページが含まれるため、1 つ以上の SiteScope サーバの SiteScope モニタ設定を中央コンソールで管理できます。BSM 統合をアクティブにすると、SAM 管理または SiteScope スタンドアロン・ユーザ・インタフェースを通じて SiteScope を管理するかどうかに関係なく、SiteScope データが BSM にフローします。

このリリースでサポートされている BSM バージョンについては、SiteScope リリース・ノート (SiteScope で、[\[ヘルプ\]](#) > [\[What's New?\]](#) を選択) の「HP SiteScope サポート・マトリックス」のセクションを参照してください。

ヒント: BSM および HPOM へのメトリック・データのレポートのベスト・プラクティスおよびトラブル

シューティングについては、『[Integration with BSM and HPOM Best Practices Overview](#)』を参照してください。

接続の設定

SiteScope および BSM 間の接続を有効にするには、SiteScope を BSM のデータ・コレクタとして設定する必要があります。これには、SiteScope を BSM の[SAM 管理] ページに追加する作業も含まれます。このタスクの詳細については、[231 ページ「SiteScope および BSM 間の統合の設定方法」](#)を参照してください。

統合プリファレンスの設定の詳細については、[711 ページ「\[統合プリファレンス\] ページ」](#)を参照してください。

BSM へのデータの報告に関するトラブルシューティングの詳細については、[251 ページ「トラブルシューティングと制限事項」](#)を参照してください。

SiteScope と BSM 間通信のための SSL の使用

Secure Sockets Layer (SSL) を使用して、SiteScope から BSM サーバにデータを転送できます。ルート認証局で署名された証明書を BSM サーバにインストールしている場合、SiteScope サーバで必要な追加設定はありません。

BSM サーバに自己署名証明書があり、その証明書を使用して SiteScope との通信のセキュリティを保護する場合、[232 ページ「クライアント証明書または SSL が必要な BSM サーバに接続するための SiteScope の設定 \(企業のセキュリティのために推奨\)」](#)に説明されている手順を実行する必要があります。

SiteScope のデータ送信先となるゲートウェイ・サーバの変更

SiteScope のデータの報告先となるゲートウェイ・サーバを変更できます。通常、これは、コンポーネントが複数のサーバにインストールされている BSM デプロイメントでの作業にのみ適用されます (BSM ゲートウェイ・サーバがデータ処理サーバとは異なるマシン上にインストールされている分散デプロイメントの場合)。

この変更方法の詳細については、[232 ページ「SiteScope のデータの送信先となるゲートウェイ・サーバの変更 - オプション」](#)を参照してください。

SiteScope データと BSM の構成アイテムとの統合

データを BSM にレポートする SiteScope にモニタ・インスタンスを追加すると、そのモニタによって、RTSM(Run-time Service Model)に、対応する構成アイテム(CI)が作成されます。構成アイテムの詳細については、BSM ヘルプで『RTSM Administration Guide』の「Configuration Items (CI)」を参照してください。

RTSM を設定する SiteScope モニタには、実際のモニタおよびモニタの作成先となるグループがあります。

- RTSM では、実際のモニタ・インスタンスはモニタ CI として表されます。モニタ CI は対応する SiteScope モニタ・インスタンスからデータを受信し、SiteScope モニタ測定値に割り当てられている状況インジケータ(HI)やイベント・タイプ・インジケータ(ETI)とともにそのデータを使用して、主要なパフォーマンス・インジケータの状態を計算します。これらのインジケータには、CI の状況の詳細ビューが表示されます。インジケータの詳細については、BSM ヘルプにある『サービス状況』の「状況インジケータ、KPI、KPI のドメイン」を参照してください。
- RTSM では、SiteScope グループはグループ CI として表され、実行しているモニタで作成されたモニタ CI から KPI ステータスを受信します。

モニタ・タイプおよびトポロジ・レポート

モニタのタイプおよび選択したモニタのオプションに応じて、さまざまなレベルのトポロジ・データが SiteScope から RTSM に報告されます。次の場合、SiteScope によってトポロジが転送されて CI が作成または更新されます。

- モニタのデータ取得の結果として初めて CI が SiteScope で作成されたとき(その CI が RTSM に存在しているかどうかは関係ありません)。
- CI のプロパティに変更があったとき。

これにより、モニタからの CI の更新によって RTSM が過負荷になることを防止できます。

固有のモニタを使って作業する場合、トポロジを選択しないと、統合に必要なデータを使用してトポロジが事前設定されます。

モニタのタイプは次のとおりです。

- **テクノロジー統合 モニタ**: これらのモニタでは、選択および編集するモニタのトポロジ設定スクリプトに基づいてデータがレポートされます。報告されるデータは、BSM と密接に統合されています。カスタム・トポロジを作成するか、定義済みスクリプトを使用して、関連するデータを転送できます。これらのモニタの詳細や、トポロジ設定の操作方法の詳細については、[424ページ「テクノロジー統合モニタのトポロジ設定」](#)を参照してください。
- **サポート対象環境のモニタ**: これらのサポート対象環境では、SiteScope は、モニタの作成時またはその設定の変更時にディスカバリ・プローブのように機能します。トポロジ・レポートが有効化されると、SiteScope によってアプリケーションのトポロジが自動的に検出され、関連する CI およびモニタ CI で RTSM が設定されます。サポート対象環境の詳細およびリストについては、[227ページ「検出されたトポロジの BSM へのレポート」](#)を参照してください。

サポート対象環境のモニタのカスタム・トポロジを作成できます(ただし、[250ページ「測定値ごとに CI をレポートするモニタ」](#)の説明にあるように CI タイプがメトリックごとに存在するモニタは除きま

す)。トポロジの作成の詳細については、[237ページ「トポロジ・レポートの設定方法」](#)を参照してください。

- **標準設定でトポロジ データがレポートされないモニタ**: SiteScope にはホストまたはサーバを報告しないモニタがあるため、監視する CI タイプを事前に知ることができません。BSM へのレポート時にこれらのモニタのトポロジ・データを含めるには、CI タイプを選択して CI タイプのキー属性を定義し、モニタ・タイプに関連するメトリックスを特定のインジケータにマップする必要があります。これにより、SiteScope によって RTSM にモニタの CI が作成され、モニタの CI データが BSM に転送されます。標準設定のトポロジが定義されていないモニタのリストについては、[249ページ「初期設定でトポロジ・データをレポートしないモニタ」](#)を参照してください。これらのモニタのトポロジを作成する方法の詳細については、[237ページ「トポロジ・レポートの設定方法」](#)を参照してください。

本項の内容

- [223ページ「モニタおよび CI 間の関係の作成」](#)
- [223ページ「RTSM 内の CI のエイジング」](#)
- [224ページ「システム可用性管理のインジケータ割り当て管理」](#)
- [225ページ「SiteScope 測定値のインジケータへの割り当て」](#)
- [225ページ「状況インジケータが作成されるタイミング」](#)
- [226ページ「ディスカバリ・スクリプトとパッケージ・マネージャ」](#)
- [226ページ「トポロジ・スクリプト・プロパティ・ファイル」](#)
- [226ページ「トポロジ・レポートの制限」](#)

モニタおよび CI 間の関係の作成

SiteScope モニタ CI および RTSM の既存の CI 間の関係を作成することもできます。この関係を使用すれば、SiteScope から転送されるトポロジで CI が作成されていない場合でも、モニタは関連付けられている CI に HI ステータスを渡すことができます。

これらの関係は SiteScope または SAM 管理内で作成できます。詳細については、[233ページ「RTSM での SiteScope モニタと既存の CI 間の関係の作成 - オプション」](#)のタスクの手順を参照してください。

RTSM 内の CI のエイジング

RTSM では、長期間活動のない CI はデータベースから削除されます。SiteScope データから作成された CI も、このエイジング・ポリシーの影響を受けます。エイジング・ポリシーが、SiteScope が BSM に送信した CI 上で動作しないように、SiteScope が BSM に送信するデータを同期します。同期されると、これらの CI のデータが更新され、CI の活動が作成されます。

トポロジの同期間隔の設定の詳細については、BSM ヘルプにある『システム可用性管理の使用』の「トポロジ設定」を参照してください。エイジング・メカニズムの詳細については、BSM ヘルプで『モデリング・ガイド』の「CI の作業」を参照してください。

注:

- 測定値のフィールドのマッピングを使用する EMS 統合モニタによって作成された総合的なモニタおよびグループは、同期に関係なくエイジング・プロセスの影響を受けません。
- エイジングが有効な場合、EMS 統合モニタの CI が RTSM から削除されないようにするために、SiteScope のハード同期時に EMS トポロジが再送信されます。また、プロパティ_

reportEmsCIsAsPartOfAntiAging=true を < SiteScope のルート・ディレクトリ>\groups\master.config ファイルに追加することで、エイジング対策プロセスの一環としてトポロジの再送信を有効化できます。

- RTSM から CI を削除する場合、([統合プリファレンス]で)SiteScope の再同期またはハード同期を実行するか、SiteScope が再起動して RTSM の CI が元に戻るまで待機する必要があります。これは、SiteScope によって未変更の CI が2回送信されることを回避する SiteScope の CI キャッシュに起因します。詳細については、[718ページ「\[BSM 統合プリファレンス\]ダイアログ・ボックス」](#)を参照してください。

システム可用性管理のインジケータ割り当て管理

注: 本項は、SiteScope を BSM 9.00 以降に接続するユーザのみを対象としています。

インジケータにマップされる SiteScope の測定値が、SAM管理のインジケータ割り当てリポジトリで保存および管理されます。リポジトリには、次の利点があります。

- BSM では、測定値のマッピングを中央管理できます。これにより、大量の SiteScope およびモニタを管理しやすくなります。インジケータ割り当てリポジトリは、[システム可用性管理]の[メトリクスとインジケータ]タブから編集できます。
- モニタ・タイプごとに異なる SiteScope モニタからインジケータに測定値をマッピングできます。特定のモニタ・タイプのインジケータ割り当てを作成、編集、削除できます。
- 新しいインジケータ割り当てが追加される場合、またはインジケータ割り当てリポジトリで既存の割り当てが変更される場合、BSM に接続されるすべての SiteScope にこれらの変更が適用されます。これにより、SiteScope で作成された新しいモニタ・インスタンスのインジケータが、中央管理されている最新の割り当てに対応するようになります。現在のバージョンの SiteScope に含まれている標準設定の割り当てに戻すには、モニタ・プロパティの[HP 統合設定]>[インジケータ設定]セクションの[標準設定にセット]ボタンをクリックします。

注: ローカルの SiteScope サーバでのインジケータ割り当てを変更する(モニタ測定値のマッピングが変更された)場合:

- SiteScope によって更新されたマッピングがダウンロードされた場合は、これらの割り当ては中央管理されている割り当てによって上書きされません。
 - 割り当てがインジケータ割り当てリポジトリから削除された場合、ローカル割り当ては自動的に削除されません。また、SiteScope により BSM に古いインジケータの値を送信し続けます。この場合、モニタ測定値に対してほかのインジケータ割り当てを選択する必要があります。
 - インジケータがインジケータ・リポジトリから削除された場合、そのマッピングを使用するモニタ・メトリックに対して別のインジケータ割り当てを選択する必要があります。
- 以前の SiteScope の測定値をインジケータにマッピングすることで、以前のバージョンの SiteScope との互換性が確保されます。
 - SiteScope でハード同期が実行されると、すべてのインジケータのマッピングが BSM からダウンロードされます。

中央管理されているインジケータの割り当てをSAM管理で編集する方法の詳細については、BSM ヘルプの『システム可用性管理の使用』を参照してください。

SiteScope 測定値のインジケータへの割り当て

注: 本項は、SiteScope を BSM 9.00 以降に接続するユーザのみを対象としています。

モニタ・インスタンスの設定時に、測定値をインジケータにマッピングすることもできます。SiteScope モニタの測定値は、次のようなモニタ・タイプに基づいてインジケータにマッピングされます。

- サポート対象環境のモニタおよび定義済みトポロジがあるモニタの場合、標準設定で測定値にインジケータが割り当てられています。これらのモニタの詳細については、[222ページ「モニタ・タイプおよびトポロジ・レポート」](#)を参照してください。標準設定のインジケータ割り当てについては、BSM ヘルプにある『システム可用性管理の使用』の「インジケータ・マッピングの整合」を参照してください。
- 定義済みトポロジがない SiteScope モニタの場合、さまざまな CI タイプにリンクする可能性があります。1つのマッピングを設定できないため、標準設定のインジケータのマッピングはありません。これらのモニタでは、モニタにリンクする CI タイプの適切なインジケータに測定値をマッピングできます。定義済みトポロジがないモニタのリストについては、[249ページ「初期設定でトポロジ・データをレポートしないモニタ」](#)を参照してください。

SiteScope で標準設定の測定値のマッピングを変更できます。インジケータのマッピングがローカルの SiteScope で変更されている場合、SiteScope によって BSM から最新のマッピングがダウンロードされても、これらのマッピングは中央管理されているリポジトリのマッピングで上書きされません。これにより、次のことが可能になります。

- モニタ・インスタンスのインジケータまたはモニタの一部の測定値の上書き。
- テンプレートの標準設定でないインジケータを設定する。カスタム・トポロジの CI タイプおよび測定値のマッピングは、テンプレートの変数では設定できません(これらは、テンプレートで事前に定義しておく必要があります)。
- 警告用のインジケータの設定: トリガされた警告の CI タイプは、グループの警告や[250ページ「測定値ごとに CI をレポートするモニタ」](#)の警告の設定時に毎回わかっているわけではないので、警告のインジケータおよびインジケータ状態を手動で入力できます。詳細については、[1246ページ「HP Operations Manager 統合設定」](#)を参照してください。

インジケータへの SiteScope 測定値のマッピングの詳細については、[238ページ「インジケータのモニタへのマッピング」](#)を参照してください。

ユーザ・インタフェースの詳細については、[385ページ「インジケータ設定」](#)を参照してください。

状況 インジケータが作成されるタイミング

- SiteScope のイベントは、SiteScope のモニタ測定値の状態の変更とトリガされた警告に基づきます。最初のイベントが CI に到着後イベントが作成されます。詳細については、[259ページ「イベントの送信」](#)を参照してください。
- メトリックスは、モニタのトポロジが RTSM にレポートされる時点で作成されます。詳細については、[227ページ「検出されたトポロジの BSM へのレポート」](#)を参照してください。

ディスカバリ・スクリプトとパッケージ・マネージャ

注: 本項は、Business Availability Center / BSM 8.00 以降を統合するユーザを対象としています。トポロジ・データを前のバージョンの BSM と統合する場合、SiteScope では、SiteScope サーバに保存されている従来のスクリプトが使用されます。

SiteScope がディスカバリ・プローブとして機能できるようにするスクリプトは、BSM サーバの SiteScope パッケージに保存されています。アプリケーションのトポロジを検出するように SiteScope が設定されている場合、SiteScope によって BSM サーバから適切なスクリプトがダウンロードされます。アプリケーションの監視時にこのスクリプトを使用してディスカバリが実行されます。

SiteScope パッケージには、スクリプトのほかにビューやエンリッチメントなど、SiteScope に関連する RTSM リソースが含まれています。BSM のこのパッケージには、[管理] > [RTSM 管理] > [管理] > [パッケージ マネージャ] からアクセスできます。パッケージはファクトリ・パッケージです。つまり、パッケージの用意済みの設定で SiteScope でのディスカバリを実行できます。パッケージを使った作業の詳細については、BSM ヘルプで『モデリング・ガイド』の「パッケージ・マネージャの概要」を参照してください。

注: 上級ユーザは、パッケージ内のトポロジ・スクリプトを変更できます。SiteScope パッケージでは、SiteScope とデータ・フロー管理で共有している可能性のあるほかのパッケージのスクリプトが使用されます。パッケージのスクリプトへの変更は、データ・フロー管理にも影響する可能性があります。

BSM へのトポロジのレポート方法に影響するトポロジ・スクリプトを変更すると、それらのトポロジを使用するすべてのアプリケーション(BSM のアプリケーションや操作管理など)に影響を与える可能性があります。

トポロジ・スクリプト・プロパティ・ファイル

証明書のあるセキュアな BSM インストールで作業する場合は、< SiteScope のルート ディレクトリ > \discovery\discovery_agent.properties ファイルに次の行を挿入しなければならない場合があります。appilog.agent.Probe.BasicAuth.Realm=authRealm.

ここで、authRealm は基本認証領域の変数です。所定の URL がどの領域に属しているかを調べるには、Web ブラウザで URL を開いてポップアップ・ボックスの最初の行を確認します。

注: discovery_agent.properties を変更した場合、SiteScope を再起動して変更を有効にする必要があります。

トポロジ・レポートの制限

BSM に報告できる SiteScope のグループおよびモニタの詳細の文字数は 600 文字に制限されます。グループまたはモニタの詳細の文字数が 600 文字よりも多い場合、SiteScope によって最初の 600 文字まで詳細が切り捨てられます。

検出されたトポロジの BSM へのレポート

SiteScope は、ディスカバリ・プローブとして機能でき、選択した環境の監視対象エンティティの階層を検出できます。これらの階層は、SiteScope から BSM にレポートされるトポロジで表されます。トポロジ内の CI は、SiteScope によって監視されるホスト、サーバ、アプリケーションに対応しており、BSM の RTSM に作成されます。モニタおよび測定値の CI も作成され、SiteScope によってそのステータスが BSM にレポートされます。CI 間の関係は、SiteScope によってレポートされるトポロジで定義されます。

この機能を有効にするには、モニタ・インスタンスの作成時または設定時に[HP 統合設定]パネルの[モニタおよび関連 CI のトポロジをレポート]オプションを選択します。このオプションがクリアされている場合、RTSM で作成された CI は自動的に削除されることはありません。CI に活動がない場合、最終的にエージングによってデータベースから削除されます。または、手動で削除する必要があります。

[トポロジ設定]のユーザ・インタフェースの詳細については、BSM ヘルプにある『システム可用性管理の使用』の「トポロジ設定」を参照してください。

トポロジ・レポートに関連する問題のトラブルシューティングについては、で『Integration with BSM and HPOM Best Practices』の「Business Service Management Topology Issues」を参照してください。

サポート対象環境

SiteScope および BSM 間の直接接続は、選択した環境の特定のバージョンの BSM でのみ使用できます。SiteScope は次のモニタの特定のトポロジをレポートします。

環境 / モニタ・タイプ	モニタ
ノード・トポロジをレポートするモニタ	<p>ノード、コンピュータ、その他の一部の子 CI タイプの派生物など、事前定義した CI タイプを使って BSM にトポロジ・データを転送できる(テクノロジー統合モニタおよび次の表に示すサポート対象環境以外)ホストまたはサーバのステータスをレポートするすべてのモニタが含まれます。トポロジ・レポートが有効化されている場合は、SiteScope によってモニタ CI とともにトポロジが BSM に転送されます。このオプションの詳細については、380ページ「HP 統合設定」を参照してください。</p> <p>注：監視する CI タイプを事前に知ることができないため、ホストやサーバのステータスを監視しないモニタは含まれません。ホスト・データのないモニタのリストについては、249ページ「初期設定でトポロジ・データをレポートしないモニタ」を参照してください。</p>
データベース環境	<p>(Business Availability Center バージョン 8.00 以降を統合する場合に利用可能)</p> <ul style="list-style-type: none">Database Counter Monitor(『SiteScope Monitor Reference』を参照)DB2 8.x and 9.x Monitor(『SiteScope Monitor Reference』を参照)Microsoft SQL Server Monitor(『SiteScope Monitor Reference』を参照)Oracle Database Monitor(『SiteScope Monitor Reference』を参照)

環境 / モニタ・タイプ	モニタ
ERP / CRM アプリケーション 環境	<ul style="list-style-type: none"> 「SAP CCMS Monitor」(『SiteScope Monitor Reference』を参照) 「SAP Work Processes Monitor」(『SiteScope Monitor Reference』を参照) 「Siebel Application Server Monitor」(『SiteScope Monitor Reference』を参照) 「Siebel Web Server Monitor」(『SiteScope Monitor Reference』を参照)
サーバ環境	(BSM 9.0 以降を統合する場合に利用可能) 「Dynamic Disk Space Monitor」(『SiteScope Monitor Reference』を参照)
SOA 環境	「Web Service Monitor」(『SiteScope Monitor Reference』を参照)
仮想化環境	(Business Availability Center / BSM 8.02 以降を統合する場合に利用可能) <ul style="list-style-type: none"> 「Solaris Zones Monitor」(『SiteScope Monitor Reference』を参照) 「VMware Performance Monitor」(『SiteScope Monitor Reference』を参照) 「VMware Host Monitors」(『SiteScope Monitor Reference』を参照)
Web サーバ環境	<ul style="list-style-type: none"> 「Microsoft IIS Server Monitor」(『SiteScope Monitor Reference』を参照) 「JMX Monitor」を使用する WebLogic アプリケーション・サーバ・モニタ (『SiteScope Monitor Reference』を参照) 「WebSphere Application Server Monitor」(『SiteScope Monitor Reference』を参照)

CI のダウンタイム

注: 本項は、SiteScope を BSM 9.00 以降に接続するユーザのみを対象としています。

ダウンタイムは、BSM から[プラットフォーム管理]の[ダウンタイムの管理]ページを使用して、定義および管理します。ダウンタイム設定の詳細については、BSM ヘルプにある『プラットフォーム管理ガイド』の「ダウンタイムの管理 - 概要」を参照してください。

SiteScope は、SiteScope のモニタ、測定値、またはグループ CI が、BSM によってダウンタイムであることが検出された CI に直接リンクしている場合、ダウンタイムによる影響を受けます。

現在ダウンタイム状態にある CI の影響を受けるモニタは、すぐにはダウンタイム状態にはなりません。モニタがダウンタイム状態になるまでの時間は次の2つのパラメータに影響されます。

- SiteScope から BSM にダウンタイムの要求が送られる間隔(ダウンタイム取得頻度の標準設定の値は 15 分)。これは、SiteScope の[プリファレンス]>[インフラストラクチャプリファレンス]>[一般設定]>[BSM ダウンタイム取得頻度(分)]で変更できます。
- SiteScope のダウンタイム要求を保持する BSM のキャッシュの更新間隔(標準設定の値は 5 分)。これは、BSM の[管理]>[プラットフォーム]>[セットアップと保守]>[インフラストラクチャ設定]で変更できます。
 - [アプリケーション]を選択します。
 - [エンド ユーザ / システム可用性管理]を選択します。
 - [ダウンタイム]テーブルで、[SiteScope ダウンタイム キャッシュ更新間隔(分)]を見つけます。この値を必要なキャッシュ更新間隔に変更します。

ダウンタイム時に SiteScope で実行されるアクションは、BSM でのダウンタイムの設定によって異なります。ダウンタイムは次の情報に対して実行できます。

- **警告**: ダウンタイムに関連付けられている CI に対して警告は送信されません。
- **レポート**: レポートが更新されず、CI のダウンタイムが表示されます。
- **KPI**: 問題の CI に関連付けられている KPI は更新されず、CI がダウンタイムであることがサービス状況に表示されます。
- **監視**: ダウンタイムに関連付けられているすべての CI に対して SiteScope 監視が停止します。

ダウンタイムになっているモニタは、SiteScope ダッシュボードの[サマリ]列に "disabled by <Downtime Name> from BSM" と表示されます。モニタに関連付けられていて、現在実行中のダウンタイムの詳細は、[モニタの有効化 / 無効化]パネルの[Monitor Downtime]テーブルに表示されます。詳細については、[391ページ「モニタの有効化/無効化」](#)を参照してください。

モニタが現在ダウンタイムになっている CI の影響を受けていて、モニタに関連付けられている警告にダウンタイムが適用されている場合、ダウンタイムの詳細は[関連する警告の有効化 / 無効化]パネルの[Associated Alerts Downtime]テーブルに表示されます。詳細については、[392ページ「関連する警告の有効化/無効化」](#)を参照してください。

注意事項および制限事項

- SiteScope から BSM にダウンタイムの要求が行われると、設定されているダウンタイム期間(最長で 24 時間)にわたってダウンタイム状態になります。レコードは、<SiteScope のルート・ディレクト

リ> \logs\audit.log に書き込まれます。このファイルには、新しいダウンタイム、既存のダウンタイムへの変更、削除されたダウンタイムが含まれます。

- SiteScopeがBSM 9.00以降に接続されると、ダウンタイム・メカニズムは初期設定で有効化されます。標準設定を変更するには、SiteScopeの[プリファレンス]>[インフラストラクチャプリファレンス]>[一般設定]の[ダウンタイムメカニズムの有効化]チェック・ボックスをクリアします。
- SPA, Siebel, SOAトポロジではダウンタイムはサポートされていません(Application Management for Siebel/SAP ライセンスがインストールされているかどうかは無関係)。
- 測定値ごとのCIをレポートするモニタでは、測定値に接続されているCIがダウンタイムにある場合、測定値がダウンタイムに属するモニタに送信されます。これは、『HP SiteScope Monitor Reference』の「[VMware Performance Monitor](#)」および「[Solaris Zones Monitor](#)」に適用されます。
- ダウンタイム情報は、システム可用性管理のレポートには含まれません。
- SiteScopeがBSM 9.10に接続されると、SiteScopeプロファイル上のダウンタイムが、SiteScopeプロファイル・モニタおよび測定値によって監視されているホストまたはソフトウェア要素上のダウンタイムにアップグレードされます。
- CI ダウンタイムに関連する追加のトラブルシューティングについては、で『Integration with BSM and HPOM Best Practices』の「[Business Service Management CI Downtime Issues](#)」を参照してください。

SiteScope および BSM 間の統合の設定方法

このタスクでは、SiteScope および BSM 間の統合を設定する方法について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- 231ページ「前提条件」
- 231ページ「SiteScope のダウンロードおよびインストール」
- 231ページ「インストールした SiteScope の BSM への接続」
- 232ページ「クライアント証明書または SSL が必要な BSM サーバに接続するための SiteScope の設定 (企業のセキュリティのために推奨)」
- 232ページ「SiteScope のデータの送信先となるゲートウェイ・サーバの変更 - オプション」
- 233ページ「SiteScope の監視構造の作成」
- 233ページ「RTSM での SiteScope モニタと既存の CI 間の関係の作成 - オプション」
- 233ページ「SiteScope メトリックのインジケータへのマップ - オプション」
- 234ページ「BSM の権限の割り当て」
- 234ページ「接続設定の変更 - オプション」

1. 前提条件

- SiteScope を BSM と統合するには、SiteScope 管理者ユーザである必要があります。ユーザ権限の詳細については、773ページ「ユーザ管理プリファレンスの概要」を参照してください。
- データを収集する特定の IT インフラストラクチャ・リソースの緻密な計画を立てる準備をします。指定したインフラストラクチャ・コンポーネントの影響を受けるビジネス・プロセスの情報を含めます。たとえば、SiteScope モニタの実行先となるアプリケーション・サーバ上で実行されている Business Process Monitor が監視しているビジネス プロセスなどです。

注: SiteScope を BSM 9.x と接続する際には、HPOprInf、HPOprMss、HPOprOra、HPOprJEE コンテンツ・パックが必要です(コンテンツ・パックは標準設定でインストールされているため、通常は特別な操作は必要ありません)。コンテンツ・パックがない場合は、BSM ヘルプにあるプラットフォーム管理ガイドのHow to Create and Manage Content Packsにある説明に従って、インポートする必要があります。

2. SiteScope のダウンロードおよびインストール

BSM で、[管理]>[プラットフォーム]>[セットアップと保守]に移動し、[ダウンロード]をクリックします。SiteScope インストール・ファイル(Windows または Solaris 用)をダウンロードしてローカル・ドライブまたはネットワーク・ドライブに保存します。

SiteScope データ・コレクタを実行するマシンに SiteScope をインストールします。複数のプラットフォームで複数の SiteScope を実行できます。詳細については、『HP SiteScope デプロイメント・ガイド』を参照してください。

3. インストールした SiteScope の BSM への接続

BSM で、[管理]>[システム可用性管理]に移動し、SiteScope を SAM 管理に追加します。

ユーザ・インタフェースの詳細については、BSM ヘルプにある『システム可用性管理の使用の「[新規 SiteScope] ページ」を参照してください。

- ログ記録オプションを変更するには、モニタのプロパティ・ページの[HP 統合設定]パネルで、特定のモニタを編集して関連するオプションを選択します。詳細については、380ページ「HP 統合設定」を参照してください。[グローバル検索と置換]ウィザードを使用して、統合を確立する前に作成したモニタのログ記録オプションを更新できます。このウィザードの詳細については、「Global Search and Replace Wizard」を参照してください。
- BSM に登録する前に SiteScope で作成されたモニタは、ログ記録オプションが[BSM への測定値レポートを無効化する]に設定されます。BSM にレポートするデータ・コレクタとして SiteScope を設定した後に SiteScope で作成された新しいモニタの場合、標準設定では監視データのログは BSM に記録されます。

注:

- BSM からアクセスできない SiteScope を使って作業する場合 (HP Software-as-a-Service など)、接続するには SAM 管理で空のプロファイルの作成し、SiteScope で BSM 用の統合プリファレンスを作成する必要があります。タスクの詳細については、704ページ「アクセス不可プロファイルの SiteScope-BSM 統合プリファレンスの設定方法」を参照してください。
- 高負荷下で作業している場合は、初めて BSM に接続する前に全モニタを一時停止してください。

4. クライアント証明書または SSL が必要な BSM サーバに接続するための SiteScope の設定 (企業のセキュリティのために推奨)

BSM サーバで証明書を使用し、その証明書を使用して SiteScope との通信のセキュリティを保護する場合、次の適切な手順を実行する必要があります。

- SSL が必要な BSM サーバについては、235ページ「SiteScope を SSL が必要な BSM サーバに接続する方法」を参照してください。
- クライアント証明書を必要とする BSM サーバの詳細については、236ページ「クライアント証明書が必要な BSM サーバに SiteScope を接続する方法」を参照してください。

5. SiteScope のデータの送信先となるゲートウェイ・サーバの変更 - オプション

SiteScope のデータの報告先となるゲートウェイ・サーバを変更できます。一般に、これは、複数のサーバにコンポーネントがインストールされている BSM デプロイメントで作業している場合にのみ当てはまります。

- SiteScope の[BSM 統合プリファレンス]で、[Business Service Management マシン名/IP アドレス]ボックスに必要なゲートウェイ・サーバ名または IP アドレスを入力します。ユーザ・インタフェースの詳細については、718ページ「[BSM 統合プリファレンス]ダイアログ・ボックス」を参照してください。
- [SAM]で、[分散設定]でゲートウェイ・サーバ名の SiteScope 設定を更新します。ユーザ・インタフェースの詳細については、BSM ヘルプにある『システム可用性管理の使用の「[新規 SiteScope] ページ」を参照してください。

注: この機能は、特定の BSM インストールにすでに登録されている SiteScope のゲート

ウェイ・サーバを変更する場合にのみ使用できます。新しい SiteScope を追加する場合や、異なる BSM システムに SiteScope を接続する場合には、この機能は使用できません。

6. SiteScope の監視構造の作成

- a. デプロイするモニタを整理するためのグループおよびサブグループを作成し、これらのグループにモニタを作成します。モニタの設定時に、必要に応じて BSM のデータのログ記録とトポロジ設定が設定されていることを確認します。

監視構造の作成の詳細については、60ページ「SiteScope の監視の設定方法」を参照してください。

- b. メトリックをレポートし、BSM にイベントを送信するよう SiteScope を設定します。
 - BSM 測定値統合の設定の詳細については、380ページ「HP 統合設定」を参照してください。

注: HP Operations Agent を使用するメトリック統合の設定の詳細については 283 ページ「SiteScope を使用して HP Operations Agent に測定値をレポートする方法」を参照してください。HP Operations Agent は BSM の PMi(操作管理の[パフォーマンス・スペクティブ]タブにデータが表示される)または Performance Manager(HPOM のレポート・コンポーネント)でメトリック・データの表示が必要です。

- BSM にイベントを送信するために SiteScope を有効化するタスクの詳細については、268 ページ「SiteScope を使用して HPOM または BSM にイベントを送信する方法」を参照してください。

7. RTSM での SiteScope モニタと既存の CI 間の関係の作成 - オプション

この関係を作成して、(SiteScope から転送されるトポロジで CI が作成されていない場合でも)モニタは関連付けられている CI に HI ステータスを渡すことができます。

- SiteScope でモニタ・インスタンスを編集する場合は、[HP 統合設定]で[CI タイプ]オプションを手動で選択して、SiteScope モニタ CI と既存の CI 間の関係をカスタマイズできます。サポート対象環境のモニタと、定義済みトポロジがあるモニタの CI タイプは標準設定で定義されています。タスクの詳細については、237ページ「CI タイプの選択」を参照してください。
- システム可用性管理で、RTSM の既存の CI プロパティ・データを使用する**モニタ・デプロイメント・ウィザード**を使用して、SiteScope のモニタ、グループ、リモート・サーバをデプロイします。RTSM に監視対象の CI と作成したモニタ間の monitored by 関係を作成します。概念の詳細については、BSM ヘルプで『システム可用性管理の使用』の「モニタ・デプロイメント・ウィザードの概要」を参照してください。

定義が完了したら、SiteScope とそのグループ、およびモニタが CI として RTSM に追加され、関連する監視ビューに自動的に関連付けられます。これらは、このビューから別のビューに追加できます。SAM 管理でモニタを編集する場合は、[HP 統合設定]を使用して、既存の CI にモニタを関連付けることができます。たとえば、CPU が監視されているマシンを表す既存の論理 CI に CPU モニタを関連付けることができます。

SiteScope のデータは、サービス状況およびサービス・レベル管理で使用できます。

8. SiteScope メトリックのインジケータへのマップ - オプション

SiteScope で、標準設定のインジケータのメトリックのマッピングがないモニタのマッピングを追加、または既存のマッピングを修正できます(サポート対象環境のモニタおよび初期設定でメトリックにマップされたインジケータがあるモニタ)。

タスクの詳細については、238ページ「インジケータのモニタへのマッピング」を参照してください。

9. BSM の権限の割り当て

BSM で、[管理]>[プラットフォーム]>[ユーザおよび権限]に移動し、[ユーザ管理]をクリックします。

定義されているユーザごとに、SAM レポートおよびカスタム・レポートの SiteScope グループとそのサブグループを表示できる権限を割り当てます。詳細については、BSM ヘルプにある『プラットフォーム管理ガイド』の「システム可用性管理」を参照してください。

権限の適用方法の詳細については、BSM ヘルプにある『システム可用性管理の使用の「SiteScope へのアクセスと権限モデルの作成」を参照してください。

10. 接続設定の変更 - オプション

接続を作成したら、変更する設定に応じて SiteScope または BSM のいずれかで設定を変更できます。

- BSM で、[管理]>[システム可用性管理]を選択します。SiteScope のリストで、関連する SiteScope を右クリックして、コンテキスト・メニューから[SiteScope の編集]を選択します。ユーザ・インタフェースの詳細については、BSM ヘルプにある『システム可用性管理の使用の「新規 SiteScope」ページ」を参照してください。
- SiteScope で、[プリファレンス]コンテキストを開き、[統合プリファレンス]を選択します。BSM の統合プリファレンスを編集します。ユーザ・インタフェースの詳細については、718ページ「[BSM 統合プリファレンス]ダイアログ・ボックス」を参照してください。

ヒント:

- BSM への接続をセキュリティで保護するには(BSM ユーザ名とパスワードは認証に使用されないため)、SiteScope に基本認証を設定するか、双方向の SSL を使用することをお勧めします。BSM を基本認証を使用するように設定すると、SiteScope の[認証ユーザ名]フィールドと[認証パスワード]フィールドに入力したものと同一ユーザ名とパスワードが、BSM へのデータとポロジのレポートにも使用されます。BSM が基本認証を使用するように設定されていない場合、送信された資格情報は無視されます。
- SiteScope サーバから BSM に送信される前にデータを圧縮するには、< SiteScope のルート・ディレクトリ> \groups\master.config ファイルで `topazCompressDataInGzip=true` を設定します。有効化すると、SiteScope モニタ(ss_monitor_t)および SiteScope メトリック(ss_t)サンプルが、GZIP 圧縮されてから BSM(ここで展開される)に送信されます。データ圧縮は、SiteScope が BAC / BSM 8.05 以降にレポートされる場合にのみ利用できます。

SiteScope を SSL が必要な BSM サーバに接続する方法

このタスクでは、BSM サーバで SSL が必要な場合に SiteScope および BSM 間のセキュリティ保護された通信を有効にする手順について説明します。

1. SSL を使用できるように SiteScope を準備します。詳細については、『HP SiteScope デプロイメント・ガイド』の「SSL を使用するための SiteScope の設定」を参照してください。
2. SiteScope ユーザ・インタフェースで証明書管理を使って SiteScope に CA または BSM サーバ証明書をインポートします。タスクの詳細については、[704ページ「アクセス不可プロファイルの SiteScope-BSM 統合プリファレンスの設定方法」](#)を参照してください。

注: 証明書内のマシン名は、システム可用性管理 管理の[新規 SiteScope]ページで使用されている名前と完全に同じ名前(大文字と小文字を区別)を持つ完全修飾ドメイン名である必要があります。

3. BSM で、[管理] > [システム可用性管理]を選択し、[新規 SiteScope]ボタンをクリックして、SiteScope インスタンスを追加します。[新規 SiteScope]ページで、次の設定が構成されているかどうか確認します。
 - 分散設定: [ゲートウェイ サーバ名/IP アドレス]に適切なサーバ名とポート(初期設定 443)が設定されているかどうか確認します。
 - プロファイル設定: [Web サーバで SSL を使用する]チェック・ボックスを選択します。

クライアント証明書が必要な BSM サーバに SiteScope を接続する方法

このタスクでは、BSM サーバでクライアント証明書が必要な場合に SiteScope および BSM 間のセキュリティ保護された通信を有効にする手順について説明します。

1. JKS 形式でクライアント証明書を取得して、<SiteScope ルート・ディレクトリ>\templates.certificates フォルダにコピーします。

クライアント証明書が必要な BSM サーバに接続するための SiteScope の設定の詳細については、『HP SiteScope デプロイメント・ガイド』の「SiteScope クライアント証明書を要求する BSM サーバに接続するための SiteScope の設定」を参照してください。

注: プライベート・キー・パスワードが少なくとも 6 文字であること、またプライベート・キーとキーストア・パスワードが同一であることを確認します。

2. <SiteScope のルート・ディレクトリ>\groups にある master.config ファイルを、テキスト・エディタを使用して編集します。指定のデータを使用して次のエントリを追加します。

```
_urlClientCert=<keystoreName>  
_urlClientCertPassword=<keystorePassword>
```

例:

```
_urlClientCert=.ks  
_urlClientCertPassword=changeit
```

3. 変更点をファイルに保存します。
4. SiteScope サーバを再起動します。

トポロジ・レポートの設定方法

注: インジケータ・マッピングの編集または測定値へのマッピングの追加は、CI とインジケータに精通している上級ユーザのみが行うようにしてください。

このタスクでは、モニタのトポロジ設定を設定する方法について説明します。また、CI タイプの選択または変更の方法、インジケータへの測定値のマッピング方法についても説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- [237ページ「前提条件」](#)
- [237ページ「CI タイプの選択」](#)
- [238ページ「インジケータのモニタへのマッピング」](#)
- [238ページ「イベントおよび測定値がBSMに報告される場合の影響を与えるBSMサービス状況のプリファレンスの選択\(任意指定\)」](#)
- [239ページ「結果」](#)

1. 前提条件

- BSM でクライアント証明書が必要な場合は、SiteScope のトポロジのディスカバリ・エージェントを設定して、トポロジをBSM サーバに報告する必要があります。詳細については、HP SiteScope デプロイメント・ガイドの「BSM サーバがクライアント証明書を必要とするとき SiteScope でトポロジ・ディスカバリ・エージェントの設定方法」を参照してください。
- モニタ CI データとともにホスト・トポロジを SiteScope から BSM に転送するには、モニタ・プロパティの[HP 統合設定]パネルの[モニタおよび関連 CI のトポロジをレポート]オプションを選択する必要があります。サポート対象環境のモニタと標準設定で CI タイプが定義されているモニタの場合、このオプションは標準設定で選択されています。ユーザ・インタフェースの詳細については、[380ページ「BSM 統合 データとトポロジ設定」](#)を参照してください。

2. CI タイプの選択

標準設定でトポロジを報告するモニタの場合(モニタに関連付けられている CI タイプは[CI タイプ]リストの丸括弧内に表示されます)、標準設定の選択を使用することも、CI タイプを変更してキー属性を入力し、標準設定の選択を上書きすることもできます。

標準設定でトポロジを報告しないモニタの場合、[BSM 統合 データとトポロジ設定]セクションでモニタの[CI タイプ]を選択し、CI タイプのキー属性の値を入力します。標準設定ではトポロジが報告されていないモニタのリストについては、[249ページ「初期設定でトポロジ・データをレポートしないモニタ」](#)を参照してください。

注: CI タイプが測定値ごとのモニタ(モニタのリストについては、[250ページ「測定値ごとにCIをレポートするモニタ」](#)を参照)では、CI タイプを変更することはできません。また、CI キー属性は表示されません。

ヒント: モニタのトポロジ設定を変更してから10分以内にBSMを再起動した場合、SiteScope の再同期を実行することをお勧めします。これを行うには、[プリファレンス]

> [統合プリファレンス] > [BSM 統合] > [BSM プリファレンス利用可能操作] を選択し、
[再同期化] をクリックします。

ユーザ・インタフェースの詳細については、380ページ「BSM 統合 データとトポロジ設定」を参照してください。

3. インジケータのモニタへのマッピング

CI タイプが選択されている場合、[インジケータ設定] セクションのテーブルは、選択した CI タイプのインジケータ設定が表示されるようにフィルタされます。サポート対象環境のモニタおよび定義済みトポロジがあるモニタの場合、標準設定で測定値にインジケータがマッピングされています。新しい測定値のマッピングを追加することも、既存のマッピングの設定を編集することもできます。

標準設定のインジケータの測定値のマッピングがないモニタの場合、モニタにリンクする CI タイプの適切なインジケータに測定値をマッピングできます。標準設定のインジケータ割り当てのリストについては、BSM ヘルプにある『システム可用性管理の使用』の「インジケータ・マッピングの整合」を参照してください。

概念の詳細については、225ページ「SiteScope 測定値のインジケータへの割り当て」を参照してください。

ユーザ・インタフェースの詳細については、385ページ「インジケータ設定」を参照してください。

4. イベントおよび測定値が BSM に報告される場合の影響を与える BSM サービス状況のプリファレンスの選択(任意指定)

SiteScope のイベントと測定値は BSM のサービス状況に影響を与えるため、両方のデータ・タイプがレポートされる場合は、影響を与えるサービス状況のプリファレンスを選択します。[HP 統合設定] の [BSM サービス状況プリファレンス] セクションのプリファレンスを選択します。ユーザ・インタフェースの詳細については、389ページ「BSM サービス状況プリファレンス」を参照してください。

このプリファレンスは次の場合のみに関連します。

- BSM と Operations Manager 統合の両方がアクティブな場合。
- Operations Manager イベント統合が、HPOM サーバではなく BSM サーバに接続されている場合。
- モニタの [HP 統合設定] で次の設定を行います。
 - [BSM 統合データとトポロジ設定] セクションでは、[モニタの状態およびメトリックのレポートを有効にする] または [モニタの状態としきい値のあるメトリックのレポートを有効にする] を設定します。
 - [HP Operations Manager 統合設定] セクションでは、[イベント送信] を設定します。

注:

- プリファレンスではまた、[統合プリファレンス] > [HP Operations Manager 統合] > [HP Operations Manager 統合メイン設定] で、新しく作成された各モニタをグローバルに設定できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、730ページ「HP Operations Manager 統合メイン設定」を参照してください。

- 使用するプリファレンスの選択の詳細については、「[Integrating SiteScope with Business Service Management Applications](#)」を参照してください。

5. 結果

トポロジの設定が済んだら、[保存]をクリックします。SiteScope によって RTSM にモニタの CI が作成され、モニタの CI データが BSM に転送されます。

カスタム・モニタ用のトポロジ・レポートの設定方法

このタスクでは、トポロジ設定の設定方法、CIタイプの選択または変更の方法、カスタム・モニタ・タイプのインジケータへの測定値のマッピング方法について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- 240ページ「前提条件」
- 240ページ「CIタイプの選択」
- 241ページ「インジケータのモニタへのマッピング」
- 241ページ「イベントおよび測定値がBSMに報告される場合の影響を与えるBSMサービス状況のプリファレンスの選択(任意指定)」
- 242ページ「結果」

1. 前提条件

BSMでクライアント証明書が必要な場合は、SiteScopeのトポロジのディスカバリ・エージェントを設定して、トポロジをBSMサーバに報告する必要があります。詳細については、HP SiteScope デプロイメント・ガイドの「BSMサーバがクライアント証明書を必要とするとき SiteScope でトポロジ・ディスカバリ・エージェントの設定方法」を参照してください。

2. CIタイプの選択

[HP 統合設定]の[BSM 統合データとトポロジ設定]セクションで、トポロジ・レポートを設定して SiteScope が CI を BSM にレポートする方法を定義します。

次のタイプのCIトポロジ・データを報告できます。

- ユーザ定義 CI タイプ・トポロジ。[CI タイプ]リストで CI タイプを選択し、選択した CI タイプのキー属性値を定義します。キー属性値の詳細については、385ページ「<CI タイプのキー属性>」を参照してください。
- カスタム・トポロジ・スクリプト [Custom topology setting] オプションを選択して、CI を BSM にレポートする方法を定義するトポロジ・スクリプトを作成します。自分で Jython トポロジ・スクリプトを作成する必要があるため、Jython 言語を十分理解している場合にのみこのオプションを選択してください。タスクの詳細については、243ページ「カスタム・モニタ用のカスタム・トポロジの設定方法」を参照してください。
- モニタのトポロジを報告しない場合は、モニタ CI のみを報告することを選択できます。[CI タイプ]リストで、[なし (標準設定)]を選択します。これは標準設定です。

注: カスタム・モニタのトポロジを報告しない場合でも、カスタム CI ヒントを持つ CI にそのメトリックをマップして、メトリックをユーザ・インターフェースでインジケータにマップする場合は、次を実行する必要があります。

- i. [カスタムトポロジ設定]オプションを選択します。
- ii. [データ処理スクリプト]ボックスで、次の(空)スクリプトを入力します。

```
from java.lang import *
from java.util import *
from appilog.common.system.types.vectors import ObjectStateHolderVector
from appilog.common.system.types import ObjectStateHolder
```

```
def DiscoveryMain(Framework):  
    OSHVResult = ObjectStateHolderVector()  
    return OSHVResult
```

ユーザ・インタフェースの詳細については、380ページ「BSM 統合 データとトポロジ設定」を参照してください。

3. インジケータのモニタへのマッピング

インジケータの選択した CI タイプ用のメトリックへのマップ

- CI タイプが選択されている場合、[インジケータ設定]セクションのテーブルは、選択した CI タイプのインジケータ設定が表示されるようにフィルタされます。新しい測定値のマッピングを追加することも、既存のマッピングの設定を編集することもできます。
- [カスタムトポロジ設定]が選択されている場合、HI 割り当てで使用した HI を使用するインジケータ・マッピングを設定します(243ページ「カスタム・モニタ用のカスタム・トポロジの設定方法」の243ページ「HI 割り当ての定義」を参照)。

通常のモニタの場合とは異なり、カスタム・モニタのカスタム・トポロジ・スクリプトを作成するときに[インジケータ設定]で CI タイプを編集できます。インジケータ設定を追加する場合は、[CI タイプ]リストから CI タイプを選択します。これにより、その CI タイプに適したインジケータが SiteScope に表示されます。

注: 同じメトリックに一致する異なる CI タイプで複数のインジケータ・マッピングを定義しないでください。

- CI タイプで[なし (標準設定)]を選択した場合、インジケータ・マッピングは使用できません。

概念の詳細については、225ページ「SiteScope 測定値のインジケータへの割り当て」を参照してください。

ユーザ・インタフェースの詳細については、385ページ「インジケータ設定」を参照してください。

4. イベントおよび測定値が BSM に報告される場合の影響を与える BSM サービス状況のプリファレンスの選択(任意指定)

SiteScope のイベントと測定値は BSM のサービス状況に影響を与えるため、両方のデータ・タイプがレポートされる場合は、影響を与えるサービス状況のプリファレンスを選択します。[HP 統合設定]の[BSM サービス状況プリファレンス]セクションのプリファレンスを選択します。ユーザ・インタフェースの詳細については、389ページ「BSM サービス状況プリファレンス」を参照してください。

このプリファレンスは次の場合のみに関連します。

- BSM と Operations Manager 統合の両方がアクティブな場合。
- Operations Manager イベント統合が、HPOM サーバではなく BSM サーバに接続されている場合。
- モニタの[HP 統合設定]で次の設定を行います。
 - [BSM 統合データとトポロジ設定]セクションでは、[モニタの状態およびメトリックのレポートを有効にする]または[モニタの状態としきい値のあるメトリックのレポートを有効にする]を設定

します。

- [HP Operations Manager 統合設定] セクションでは, [イベント送信] を設定します。

注:

- プリファレンスではまた, [統合プリファレンス] > [HP Operations Manager 統合] > [HP Operations Manager 統合メイン設定] で, 新しく作成された各 モニタをグローバルに設定 できます。ユーザ・インターフェースの詳細については, [730ページ「HP Operations Manager 統合メイン設定」](#) を参照してください。
- 使用するプリファレンスの選択の詳細については, 「[Integrating SiteScope with Business Service Management Applications](#)」を参照してください。

5. 結果

トポロジ設定を設定したら, [保存] をクリックします。SiteScope は定義に従ってトポロジを作成します。そしてモニタ・データを BSM へ転送します。

カスタム・モニタ用のカスタム・トポロジの設定方法

このタスクでは、カスタム・トポロジ・スクリプトでカスタム・モニタを作成する手順を説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- 243ページ「CI Resolver TQL の変更」
- 243ページ「HI 割り当ての定義」
- 245ページ「カスタム・モニタの定義」
- 246ページ「データ処理スクリプトの作成」
- 247ページ「カスタム・トポロジ・スクリプトの作成」
- 248ページ「結果の表示」

1. CI Resolver TQL の変更

- a. BSM で、[管理]>[プラットフォーム]>[インフラストラクチャ設定]を選択します。
 - [アプリケーション]を選択します。
 - [エンド ユーザ/システム可用性管理]を選択します。
 - [エンド ユーザ/システム可用性管理 - SiteScope CI Resolver 設定]で、[TQL クエリ]パラメータの値が[SiteScope によって監視される CI]であるか確認します。もしそうであるなら、[OMiAutoView]に変更します。
- b. BSM を再起動して変更を適用します。

注: この TQL では、CI 数が多いモデルはサポートされていません(このモデルでは、パフォーマンスに問題が発生する場合があります)。

2. HI 割り当ての定義

HI 割り当てを定義して、HI を CI に割り当てる必要があります。この割り当てでは、HI がキャプチャするデータ・サンプル、およびそのデータ・サンプルに従って HI の状態を計算するのに使用するビジネス・ルールも定義されます。

サービス状況の HI 割り当ての詳細については、BSM 文書ライブラリにある『サービス状況の使用』の「[状況インジケータの割り当て]ページ」を参照してください。SLM の HI 割り当ての詳細については、BSM 文書ライブラリにある『サービス・レベル管理の使用』の「[状況インジケータの割り当て]ページ」を参照してください。

HI 割り当てを定義するには、次の手順を実行します。

- a. BSM で、[管理]>[サービス状況]/[サービスレベル管理]>[割り当て]>[状況インジケータの割り当て]を選択します。
- b. 左側の表示枠にある CI タイプ階層から、トポロジ・スクリプトでレポートを行う CI タイプを選択します。その CI タイプに割り当てたインジケータが、インジケータ表示枠に表示されます。インジケータを選択すると、その詳細が右側の表示枠に表示されます。
- c. 新規 HI 割り当てを作成します。割り当ての作成方法の詳細については、BSM 文書ライブラリにある『サービス状況の使用』の「KPI または HI の割り当ての定義方法」、または『サービ

ス・レベル管理の使用』の「KPI または HI の割り当ての定義方法」を参照してください。

- [条件] エリアの[Monitored By] プロパティで、このモニタで報告された CI とほかのモニタで報告された同じタイプの CI とを識別できる値を入力します。割り当ての条件は、トポロジ・スクリプトでレポートする CI に対応している必要があります(247ページ「カスタム・トポロジ・スクリプトの作成」の手順を参照)。

ヒント: CI が[Monitored By] プロパティで値「SiteScope」を持つことをお勧めします。そして、この CI とほかのモニタが報告した同じタイプの CI との識別ができるように、一意の値を持つことをお勧めします。この場合、CI で **Note** プロパティを使用することをお勧めします。

- モニタのトポロジ・スクリプトを作成する際は、レポートする CI でこの値を持つ `monitored_by` 属性を入力します。トポロジ・スクリプトの詳細については、247ページ「カスタム・トポロジ・スクリプトの作成」の手順を参照してください。
- HI 計算に使用するビジネス・ルールを選択します。[SiteScope Worst Status Rule] を使用することをお勧めします。また、[SiteScope Consecutive Worst Status Rule] または [SiteScope Best Status Rule] も使用できます。
- セレクタで、次のように入力します。
 - `eti_id = (Binary) <<状況インジケータ・タイプ ID>>`
 - `ci_id = (Binary) <<CI ID>>`
 - `sampleType = (String) ss_t`

カスタム・モニタはメトリック・サンプル(ss_t)を送信します。メトリック・サンプルは、割り当てで使用される HI と同じ eti_id, そして CI と同じ CI ID を含みます。

例 - CI タイプ・コンピュータのインジケータ割り当て(サービス状況)

ID: 9f41a4c8-d37c-43f2-aaa3-9d1da3caeb88

例 - インジケータ設定 およびセレクタ設定(サービス状況)

状況インジケータ設定を定義します

状況インジケータ

* 状況インジケータ: CPU ロード

* ビジネス ルール: SiteScope 最低ステータス ルール

* 優先度: 0

ビジネス ルールパラメータ

generateEvents: 偽

Tooltip show all measurements: false (String)

データのタイムアウトなし: 900 秒

* [CI タイプのプロパティ] リストからプロパティをドラッグするか、フィールドの編集集中に Ctrl + i を押して、選択したプロパティに値を設定できます。

セレクト

フィールド名	オペレータ	タイプ	値
AND			
eti_id	=	Binary	<<Health Indicator Typ...
ci_id	=	Binary	<<CI ID>>
sampleType	=	String	ss_f

式のサマリ:

AND [eti_id = <<Health Indicator Type ID>>]

AND [ci_id = <<CI ID>>]

AND [sampleType = ss_f]

* [CI タイプのプロパティ] リストからプロパティをドラッグするか、フィールドの値の編集集中に Ctrl + i を押して、選択したプロパティに値を設定できます。

CI タイプのプロパティ

一般プロパティ

バイナリ

Calculated ID

ブール

Allow CI Update

Change Is New

Enable Aging

Is Candidate For Deletion

Node Is Complete

Node Is Desktop

Node Is Route

Node Is Virtual

Operation Is New

Store KPI History For Over Ti...

Test Is New

Track Configuration Changes

整数

Actual Deletion Period

Deletion Candidate Period

MemorySize

SwapMemorySize

文字列

BiosAssetTag

BiosSerialNumber

BiosUuid

CalculatedLocation

CI Type

City

CodePage

Container

Country or Province

Created By

DefaultGatewayIpAddress

Description

Digest

DiscoveredContact

DiscoveredDescription

DiscoveredLocation

3. カスタム・モニタの定義

SiteScope でカスタム・モニタを作成し、[メイン設定]、[詳細設定]、[タイムアウト設定]セクションでモニタ設定に必要なデータを追加します。次のカスタム・モニタを選択できます。

- 『HP SiteScope Monitor Reference』の「Custom Monitor」
- 『HP SiteScope Monitor Reference』の「Custom Database Monitor」
- 『HP SiteScope Monitor Reference』の「Custom Log File Monitor」
- 『HP SiteScope Monitor Reference』の「Custom WMI Monitor」

例 - カスタム・ログ・ファイル・モニタの設定

照合値のラベル : disk1, val1, disk2, val2, disk3, val3, disk4, val4, disk5, val5

4. データ処理スクリプトの作成

[カスタム モニタ設 定] パネルの[データ処 理 スクリプト] セクションで、収 集したデータ処 理 するた
めのスクリプトを入 力します。

このスクリプトでは、**setCIHint** メソッドを使用して、複数のメトリックに対して CI 解決のヒントを指定する必要があります。ヒントで使用する形式の詳細については、[422ページ「CI 解決のヒントの形式」](#)を参照してください。

注: サンプル・データ処理スクリプトはこのPDFに添付されたテキスト・ファイルで利用可能です。添付ファイルを表示するには、[表示]>[ナビゲーション パネル]>[添付ファイル]を選択して、**Custom Monitor Data Processing Script.txt**を選択します。

テンプレート・モードで、サンプル・データ処理スクリプトのあるカスタム・モニタを含むテンプレートで作業する場合、変数 SERVER_NAME も定義する必要があります。テンプレートをデプロイするとき、サーバ名の値を入力する必要があります。

5. カスタム・トポロジ・スクリプトの作成

[HP 統合設定] パネルで、トポロジ・スクリプトを作成して CI を BSM にレポートする方法を定義します。

- a. [BSM 統合データとトポロジ設定] セクションで、[カスタムトポロジ スクリプト] オプションを選択して、HI 割り当てで定義された CI を報告するカスタム・トポロジ・スクリプトを作成します。

CI の `monitored_by` 属性については SiteScope を入力する必要があります。この値は、[243ページ「HI 割り当ての定義」](#)の手順の HI 割り当てで使用した値と同じです。

注: サンプル・カスタム・トポロジ・スクリプトはこの PDF に添付されたテキスト・ファイルで利用可能です。添付ファイルを表示するには、[表示]>[ナビゲーション パネル]>[添付ファイル]を選択して、**Custom_Monitor_Topology_Script.txt**を選択します。

例で、<IP Address>、<name>、および <Server DNS name> を適切な値に置き換えます。

ヒント: モニタのトポロジ設定を変更してから 10 分以内に BSM を再起動した場合、SiteScope の再同期を実行することをお勧めします。これを行うには、[プリファレンス]>[統合プリファレンス]>[BSM 統合]>[BSM プリファレンス利用可能操作]を選択し、[再同期化]をクリックします。

- b. [インジケータ設定] セクションで、[243ページ「HI 割り当ての定義」](#)の手順の HI 割り当てで使用した HI を使用する HI マッピングを設定します。

注: 同じメトリックに一致する別の CI タイプを持つ複数のインジケータ・マッピングを定義しないでください。SiteScope でのインジケータ・マッピングの詳細については、[238ページ「インジケータのモニタへのマッピング」](#)を参照してください。または、BSM の[管理]>[システム可用性管理]>[メトリクスとインジケータ]でマッピングを定義して、[変更の適用]をクリックします。マッピングは SiteScope にダウンロードされ、ユーザ・インターフェースに表示されます。BSM のマッピングの定義の詳細については、BSM ヘルプで『システム可用性管理の使用』の「インジケータ割り当ての作成方法と管理方法」を参照してください。

例 - コンピュータ CI タイプのインジケータ・マッピング:

インジケータ 設定		
測定値パターン	CI タイプ	インジケータ
[a-z].*/	Computer	ホスト ディスク使用率
*	ConfigurationItem	レガシー システム
123	Computer	CPU 負荷

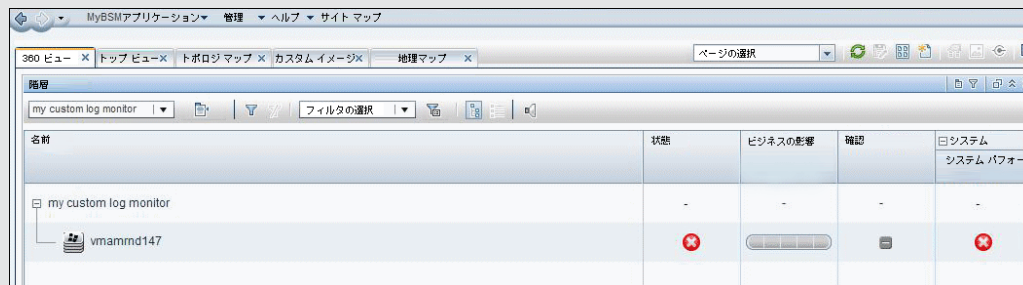
*注: インジケータ設定はユーザによって変更されました

6. 結果の表示

BSM で HI 割り当てを設定し、SiteScope でトポロジ・スクリプトを含むモニタ設定をした後、モニタを実行できます。モニタの実行が完了した後、BSM のサービス状況で結果を表示できます。

このモニタの報告された CI を表示するビューを作成することをお勧めします。モニタを保存してモニタが実行した後、作成したビューの BSM のサービス状況で結果を表示できます。

例 - このモニタに報告された CI 用に作成されたビュー(サービス状況):



The screenshot shows the SiteScope web interface. At the top, there's a navigation bar with 'MyBSMアプリケーション' and '管理' (Management) selected. Below it, a breadcrumb trail shows '360 ビュー' (360 Views) > 'トップビュー' (Top View) > 'トポロジマップ' (Topology Map) > 'カスタムイメージ' (Custom Image) > '地理マップ' (Geography Map). The main content area displays a table with columns: '名前' (Name), '状態' (Status), 'ビジネスの影響' (Business Impact), '確認' (Confirmation), and 'システム' (System). The table lists two items: 'my custom log monitor' and 'vmammd147'. The 'vmammd147' row shows a red star icon in the '状態' column and a red star icon in the 'システム' column.

名前	状態	ビジネスの影響	確認	システム
my custom log monitor				システム パフォーマンス
vmammd147	★			★

例 - 監視対象マシンのインジケータ・ステータスの結果(サービス状況):



The screenshot shows the SiteScope web interface displaying 'CPU Utilization on SiteScope 447 (SiteScope Monitor)'. The page title is 'CPU Utilization on SiteScope 447 (SiteScope Monitor)'. Below the title, there's a section 'KPI に関する状況インジケータ' (Status Indicators Related to KPI). A table shows the KPI 'システム パフォーマンス' (System Performance) with two indicators: 'CPU 負荷' (CPU Load) and 'ホスト ディスク使用率' (Host Disk Usage Rate). The 'CPU 負荷' indicator shows a yellow warning icon and a status of 'ビジー' (Busy) with a value of 0.0. The 'ホスト ディスク使用率' indicator shows a red star icon and a status of '危険域' (Danger Zone) with a value of N/A. A detailed view for 'ホスト ディスク使用率' is shown below the table, displaying 'ステータス' (Status) as '危険域' (Danger Zone), '計算ルール' (Calculation Rule) as '最悪の子ルール' (Worst Child Rule), '保留ステータス開始日' (Retention Status Start Date) as '2012/6/15 13:10', and '測定値' (Measurement Value) as 'c - 70.0'.

KPI	状況インジケータ	状態	値
システム パフォーマンス	CPU 負荷	⚠ ビジー	0.0
	ホスト ディスク使用率	★ 危険域	N/A

詳細 - ホスト ディスク使用率

ステータス	危険域
計算ルール	最悪の子ルール
保留ステータス開始日	2012/6/15 13:10
測定値	c - 70.0

初期設定でトポロジ・データをレポートしないモニタ

次に、ホストまたはサーバのステータスを監視しないモニタのリストを示します。

注: これらのモニタで CI 情報を BSM にレポートするには、CI タイプを選択して必要な CI のキー属性を入力し、モニタにリンクしている CI タイプに関連するインジケータを選択する必要があります。タスクの詳細については、[237ページ「トポロジ・レポートの設定方法」](#)を参照してください。

- Composite Monitor
- Directory Monitor
- e-Business Transaction Monitor
- File Monitor
- Formula Composite Monitor
- HP NonStop Event Log Monitor
- JMX Monitor (WebLogic を監視しない場合)
- Link Check Monitor
- Log File Monitor
- Microsoft Windows Dial-up Monitor
- Microsoft Windows Media Player Monitor
- Multi Log File Monitor
- Network Bandwidth Monitor
- Real Media Player Monitor
- Script Monitor
- SNMP Trap Monitor
- URL Monitor
- URL Content Monitor
- URL List Monitor
- URL Sequence Monitor
- XML Metrics Monitor

測定値ごとに CI をレポートするモニタ

次のモニタは、測定値ごとの CI をレポートします。

これらのモニタには複数の CI があります。したがって、これらのモニタの CI は変更できず、これらのモニタ・タイプのインジケータ・マッピングは BSM からのみ変更できます([SAM 管理]>[メトリックおよびインジケータ]タブで)。

- SAP CCMS モニタ
- SAP ワーク・プロセス・モニタ
- Siebel アプリケーション・サーバ・モニタ
- Siebel Web サーバ・モニタ
- Solaris ゾーン・モニタ
- VMware ホスト CPU モニタ
- VMware ホスト・メモリ・モニタ
- VMware ホスト・ネットワーク・モニタ
- VMware ホスト状態モニタ
- VMware ホスト・ストレージ・モニタ
- VMware パフォーマンス・モニタ

注: モニタのカスタム・トポロジ・ノードを定義し、そのホスト名を指定することができます。この BSM に接続している SiteScope にリモート・サーバがある場合、リモート・サーバの環境に応じて、この CI の CI タイプは自動的に **Unix** または **Windows** に変わります。

トラブルシューティングと制限事項

本項では、BSM 統合に関するトラブルシューティングおよび制限事項について説明します。

- 251ページ「Internet Explorer 7 を使用した SAM 管理からの SiteScope へのアクセス」
- 251ページ「BSM へのデータのレポート」
- 251ページ「SiteScope と BSM 間統合の追加トラブルシューティング」

Internet Explorer 7 を使用した SAM 管理からの SiteScope へのアクセス

Internet Explorer 7 を使用して SAM 管理から SiteScope にアクセスすると、「408 Request Timeout」エラーが表示されます。

回避策: BSM から SiteScope にログオンするには、ブラウザで SiteScope サーバのクッキーを受け入れるよう設定します。

1. Internet Explorer で、[ツール] > [インターネット オプション] > [プライバシー] タブと選択し、[詳細設定] ボタンをクリックします。
2. [自動クッキー処理を上書きする] を選択し、[ファースト パーティの Cookie] と [サード パーティの Cookie] が [受け入れる] に設定され、[常にセッション Cookie を許可する] が選択されていることを確認します。

BSM へのデータのレポート

- SiteScope は数値メトリックのみを BSM に報告します。文字列値を含むメトリックは報告しません。
- 監視のデプロイメントやネットワーク通信の複雑さによっては、SiteScope が一時的に BSM サーバと通信できなくなることがあります。SiteScope の状況の監視には、BSM サーバへの接続およびデータ転送を監視する複数のモニタが含まれています。

SiteScope が BSM サーバに接続できない場合、SiteScope は引き続き監視データ・ファイルをローカルに記録して保存します。データ・ファイル数が指定したしきい値を超えると、SiteScope は構文 < SiteScope のルート・ディレクトリ > \cache\persistent\topaz\data< インデックス> .oldSiteScope を使用してデータ・ファイルをキャッシュ・フォルダに保存します。保持する data.old フォルダの数を設定するには、< SiteScope のルート・ディレクトリ > \groups\master.config ファイルの _topazMaxOldDirs プロパティを変更します。

注: 標準設定では、データ・ファイル数のしきい値が 1,000 ファイルに設定されています。この設定を変更するには、master.config ファイルの _topazMaxPersistenceDirSize プロパティを変更します。

SiteScope とエージェント・サーバ間の接続が復旧したら、これらのフォルダから < SiteScope のルート・ディレクトリ > \cache\persistent\topaz\data フォルダに手動でファイルをコピーする必要があります。

大量のアップロード・データによるシステムの過負荷を避けるため、これらのファイルはデータ・フォルダが空の場合にのみコピーすることをお勧めします。data.old フォルダの数が指定したしきい値(標準設定は 10 フォルダ)を超えると、最も古いフォルダが削除されます。

SiteScope と BSM 間統合の追加トラブルシューティング

SiteScope と BSM 間メトリック統合、CI トポロジ・レポート、CI ダウンタイムに関する問題の追加トラ

ブルシューティングについては、で『Integration with BSM and HPOM Best Practices』の
「[Troubleshooting SiteScope Integration Issues](#)」を参照してください。

第10章

HP Operations Agent を使用した Operations Manager と BSM での作業

本章の内容

概念

- 254ページ「SiteScope と HPOM および BSM の通信方法について」
- 259ページ「イベントの送信」
- 265ページ「HP Operations Agent を使用した測定値の報告」

タスク

- 268ページ「SiteScope を使用して HPOM または BSM にイベントを送信する方法」
- 283ページ「SiteScope を使用して HP Operations Agent に測定値をレポートする方法」

参照情報

- 285ページ「SiteScope-Operations エージェントの測定値の整合」
- 289ページ「SiteScope-Operations Manager 測定値統合のサイズ設定の推奨事項」

SiteScope と HPOM および BSM の通信方法について

注: 本項は、SiteScope を Operations Manager (HPOM) 製品または BSM に接続するユーザのみを対象としており、SiteScope から HPOM または BSM 9.00 以降に報告する場合にのみ該当します。

スタンドアロン・アプリケーションとしての SiteScope は、IT インフラストラクチャのパフォーマンスと可用性を監視するエージェントレス・ソリューションです。また、SiteScope は Operations Manager (HPOM)、HP Performance Manager (HPOM のレポート・コンポーネント)、および BSM の操作管理と連動して、エージェントレスとエージェント・ベースのインフラストラクチャ管理の強力な組み合わせも可能にします。

SiteScope は、SiteScope サーバにインストールされている HP Operations Agent を使用してこれらのアプリケーションと通信します。HP Operations Agent を使用して、SiteScope でイベント・データや測定値データを統合できます。

- **イベント:** HP Operations Agent は、操作管理、サービス状況、およびサービス・レベル管理で使用するために、イベント・データを HPOM 管理サーバ、または BSM に送信します。SiteScope のイベントは、SiteScope のモニタ測定値の状態の変更とトリガされた警告に基づきます。イベント・レポートの有効化の詳細については、[259 ページ「イベントの送信」](#)を参照してください。
- **測定値:** HP Operations Agent は、SiteScope で収集された測定値データのデータ・ストレージとしても機能します。これによって、SiteScope では測定値データを Performance Manager (HPOM のレポート・コンポーネント) および BSM の PMi (操作管理の「パフォーマンス パースペクティブ」タブにデータが表示される) から直接利用可能となります。測定値のレポートの有効化の詳細については、[265 ページ「HP Operations Agent を使用した測定値の報告」](#)を参照してください。

SiteScope と HPOM の機能が結合することで、効果的で詳細な監視ソリューションが提供されます。HPOM の使用の詳細については、HPOM のドキュメントを参照してください。

注:

- HP Operations Agent を使用する測定値統合 (操作管理の「パフォーマンス パースペクティブ」タブで測定値データが使用される) は、CI の状態を計算するときに (たとえば、サービス状況、サービス・レベル管理、およびシステム可用性管理で)、さまざまな BSM アプリケーションによって使用される SiteScope モニタ測定値の BSM 統合と混同しないでください。BSM 測定値統合の設定の詳細については、[218 ページ「BSM を使った作業」](#)を参照してください。
- HP Operations Agent を使用した測定値統合は、HPOM と操作管理のために Windows および UNIX プラットフォームで実行されている SiteScope によってサポートされます。
- 本リリースでサポートされる HP Operations Agent バージョンについては、リリース・ノートの HP SiteScope サポート早見表を参照してください (SiteScope で **[ヘルプ]** > **[What's New?]** を選択)。

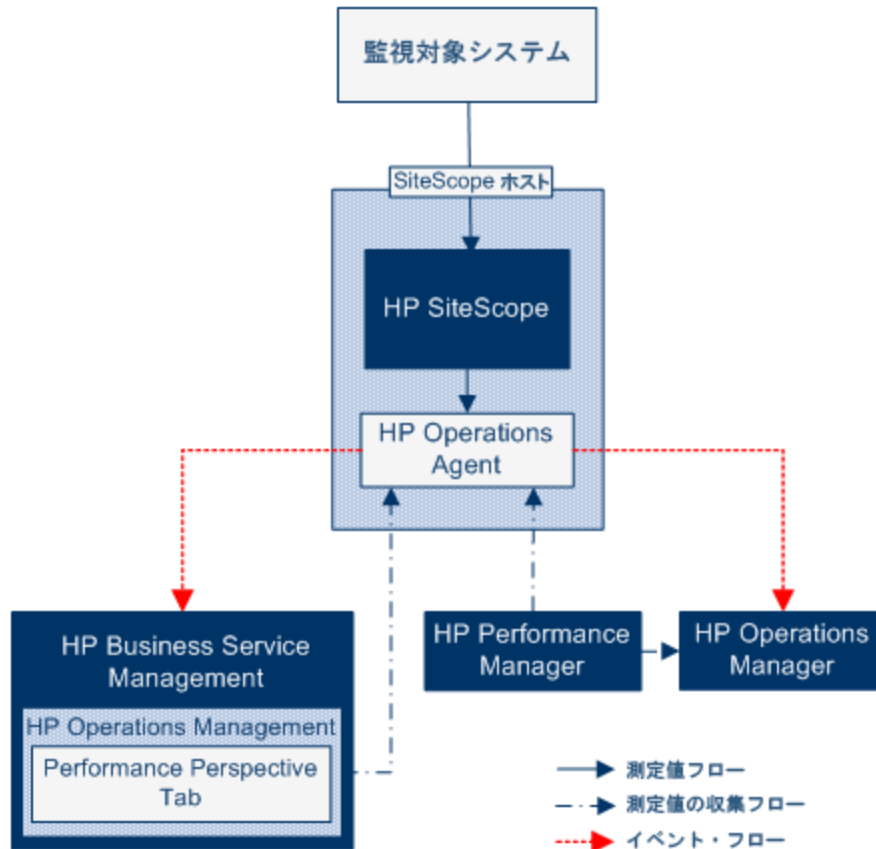
ヒント: HP Operations Agent を使用した BSM および HPOM 製品へのデータのレポートのベスト・プラクティスおよびトラブルシューティングについては、[『Integration with BSM and HPOM Best Practices』](#)を参照してください。

本項の内容

- 255 ページ「イベントとメトリックのフロー図」
- 255 ページ「HP Operations Agent のトポロジ」
- 256 ページ「HPOM からのテンプレートの中央管理」
- 257 ページ「SiteScope Failover と Operations Manager の統合」

イベントとメトリックのフロー図

次の図は、SiteScope と HPOM および BSM アプリケーションとの間での測定値データおよびイベントのフローを示しています。



HP Operations Agent のトポロジ

HP Operations Agent の CI は、SiteScope が HPOM に接続され、HPOM が BSM に接続される時点で作成されます。

SiteScope が直接 BSM に接続されると、SiteScope は通常のトポロジ・フローを使用してエージェント CI を作成します。SiteScope がメインのトポロジ(プロファイル CI)を送信するときに、アクティブなイベントまたは Operations Manager との測定値統合がある場合、SiteScope はエージェントのトポロジも送信します。

注:

- エージェント CI が削除されるのは、イベント統合と測定値統合の両方が削除される場合だけです。

- エージェント CI は、SiteScope が BSM から切断されても削除されません。これは、接続が HPOM と BSM のどちらを介して確立されていたかが SiteScope では不明なためです(ただし、エージェント CI はエイジング・プロセスのために最終的には削除されます)。

HPOM からのテンプレートの中央管理

この統合により、HPOM 内から複数の SiteScope インスタンスからのテンプレートを一元的に管理およびデプロイできます(これは、SiteScope が操作管理と統合されるときは、関係ありません)。

利点

統合には、次の利点があります。

- 複数の SiteScope インスタンスにまたがるテンプレートの中央管理。これにより、テンプレートの非同期化や、テンプレートの手動同期を気にする必要がなくなります。
- テンプレートのバージョン・コントロール(ロールバック機能を含む)。
- グループ・ポリシーの割り当てに基づくテンプレートの自動的で確実なデプロイメント(要求ステート・ハンドリング)。
- テンプレート・デプロイメントのスケジュールされた公開。
- ファイアウォール設定の削減と既存の HP Operations Agent を活用した HPOM 管理サーバ接続。
- 単一管理コンソールからの SiteScope と HP Operations Agent の統合管理。

注: HPOM for Windows では、この統合は現在サポートされていません。

利用可能なアクション

HPOM を使用して SiteScope テンプレートを管理するときは、次のアクションを実行できます。

- すべてのテンプレートを SiteScope からエクスポートし、ポリシーとして HPOM にインポートできます。このポリシーは、後で割り当ておよびデプロイできます。SiteScope と HPOM が同じマシンにインストールされている場合は、SiteScope の[テンプレート]ショートカット・メニューにある[OM へのエクスポート]オプションを使用して SiteScope テンプレートを HPOM にエクスポートします。
- SiteScope 上でテンプレートを作成または変更してから、このテンプレートを HPOM に移動します (SiteScope と HPOM が同じシステムにインストールされている場合のみ)。つまり、新規テンプレートを作成することも、既存のテンプレートを変更して選択したテキストまたは変数を含めることもできます。
- SiteScope テンプレートをデプロイするか、HPOM からテンプレート・コンテナをインポートします。
- SiteScope テンプレートを削除します。

注: HPOM から SiteScope にテンプレートをデプロイする場合は、すべての必須 SiteScope 変数に OM ポリシーで値が設定されている必要があります。設定されていない場合、デプロイメントは失敗します。

HPOM を使用する SiteScope テンプレートの管理の詳細については、SiteScope ヘルプのホーム・ページまたは[HP ソフトウェア・サポート製品マニュアル・サイト \(Operations Manager for UNIX](#)にある)から利用可能な「Deploying SiteScope Configuration with HPOM」を参照してください。

システム要件

HPOM とのテンプレートの統合は、システムが次の要件を満たしている場合に利用可能です。

- SiteScope がインストールされ HPOM のサポートされるバージョンに接続されている。このリリースでサポートされている HPOM バージョンについては、SiteScope リリース・ノート (SiteScope で [\[ヘルプ\] > \[What's New?\]](#) を選択) で、「HP Operations Manager (HPOM) 統合 サポート・マトリックス」のテーブルを参照してください。
- SiteScope をインストールする前に、SiteScope 管理者用に定義されたユーザ名とパスワードを含む、事前定義された SiteScope 設定を作成する必要があります。詳細については、SiteScope ヘルプのホーム・ページまたは[HP ソフトウェア・サポート製品マニュアル・サイト \(Operations Manager for UNIX](#)にある)から利用可能な「Deploying SiteScope Configuration with HPOM」を参照してください。
- HP Operations Agent が、SiteScope 設定ツールを使用して SiteScope サーバにインストールされている (HP Operations Agent が SiteScope のインストール時に事前にインストールされている場合も必要)。設定ツールを使用した HP Operations Agent のインストールの詳細については、『SiteScope デプロイメント・ガイド』の「SiteScope 設定ツールの使用」を参照してください。
- Operations Manager 統合が SiteScope で設定されており、HP Operations Manager 統合のメイン設定で [\[HP Operations Manager へのテンプレートのエクスポートを有効にする\]](#) チェック・ボックスが選択されている。ユーザ・インタフェースの詳細については、[729 ページ「HP Operations Manager 統合 ダイアログ・ボックス」](#) を参照してください。

SiteScope Failover と Operations Manager の統合

SiteScope Failover (自動ミラーリング) ソリューションは SiteScope 11.11 で SiteScope Failover Manager (共有ドライブ・アーキテクチャ) ソリューションの代替として再開され、自動フェールオーバー機能を備えています。SiteScope Failover は Operations Manager イベントおよびメトリック統合のサポートを提供します。高可用性オプションを使用して SiteScope 用の HP Operations Manager 統合を設定する場合は、SiteScope Failover ソリューションをお勧めします。

イベント統合

SiteScope Failover による OM イベント統合のサポートを有効化するには、プライマリ SiteScope と SiteScope フェールオーバーの両方について、[268 ページ「SiteScope を使用して HPOM または BSM にイベントを送信する方法」](#)の手順を行います。

イベント・フローおよびホスト・ディスカバリ・フローは、追加の手順を実行しなくても動作します。モニタ・ディスカバリの統合の場合は、プライマリ SiteScope でのみ、[275 ページ「SiteScope モニタ・ディスカバリ・ポリシーを有効にする方法」](#)にある手順を行います。

注意事項および制限事項

- SiteScope サービス・ツリーは 1 つのみになるため (このツリーがイベントの影響を受ける)、プライマリ SiteScope またはフェールオーバー SiteScope から報告されたデータの影響を受けるかどうかを知ることができません。
- プライマリが停止すると、SiteScope サーバ (この場合は、SiteScope サーバがフェールオーバー) を監視しているモニタから起動されたイベントは、サービス・ツリーに影響しません。
- プライマリが停止しているときに追加されたグループおよびモニタは、サービス・ツリーに表示されませ

ん。

- SiteScope にドリルダウン・ツールは、プライマリ SiteScope が実行されている場合にのみ機能します。
- プライマリと SiteScope Failover に異なるエージェント設定が存在する(たとえば、エージェントが異なるパスにインストールされる)場合、フェールオーバー・サーバ上のエージェント・コマンドはイベント統合プリファレンスのユーザ・インタフェースから実行されないため、事前に手動でエージェントのパスを入力する必要があります。

測定値統合

SiteScope Failover は、OM 測定値統合に対応しています。SiteScope Failover は、その HP Operations Agent(プライマリのエージェントではない)に測定値を報告します。

イベントの送信

注: 本項は、SiteScope を Operations Manager (HPOM) 製品または BSM に接続するユーザーのみを対象としており、SiteScope から HPOM または BSM 9.00 以降に報告する場合にのみ該当します。

SiteScope からイベントを直接 HPOM 管理サーバおよび BSM に送信できます (操作管理、サービス状況、およびサービス・レベル管理で使用するために)。SiteScope のイベントは、SiteScope のモニタ測定値の状態の変更とトリガされた警告に基づきます。

SiteScope を使用してイベントを送信するには、HP Operations Agent が SiteScope サーバにインストールされている必要があります。エージェントは、SiteScope のインストール中に SiteScope のインストール・メディアから、または SiteScope のインストール後に設定ツールを使用してインストールできます。また、HPOM 管理サーバから手動でインストールすることもできますが、エージェントが SiteScope に同梱されているエージェントと同じか新しいバージョンでないかぎり、この方法は推奨されません。

エージェントがインストールされたら、SiteScope の [統合 プリファレンス] で設定する必要があります。この設定には、エージェントのインストール・パスおよび HPOM 管理サーバまたは BSM ゲートウェイ・サーバのホスト名または IP アドレスの入力、HPOM または BSM へのエージェントの接続が含まれます。設定が済むとエージェントは、HPOM または BSM に接続要求を送信し、HPOM または BSM によって証明書要求が承認される必要があります (HPOM 管理サーバは、このクライアントを自動的に受け入れるように設定できます)。

HPOM サーバまたは BSM サーバで証明書要求が承認されると、SiteScope サーバへのエージェントのインストール時に、事前に設定されたログ・ファイル・ポリシーがインストールおよび署名されます。この処理が完了すると、設定済みの Operations Manager ポリシーが SiteScope によってローカルで自動的に署名されるようになります。このポリシーは SiteScope に付属していて、SiteScope の統合 プリファレンスの [Operations Manager 統合] ダイアログ・ボックスからデプロイされます。

イベントがトリガされると、SiteScope によって **HPSiteScopeOperationsManagerIntegration.log** ファイルにイベント・データが書き込まれます。このファイルは < **SiteScope のルート・ディレクトリ** > \logs ディレクトリにあります。各イベントはログの個別の行に書き込まれます。ログ・ファイル・ポリシーでは、エージェントがこのファイルを読み取り、HPOM または BSM に送信されるイベント・メッセージを作成するように指定されています。

イベント属性の形式は、イベント・マッピング・テンプレートを使用して決定されます。このテンプレートでは、イベントのトリガ時に HPOM 管理サーバまたは BSM ゲートウェイ・サーバに送信されたイベントの属性値に SiteScope ランタイム・データをマッピングします。イベント・マッピングの詳細については、にある SiteScope の使用の [608 ページ「共通 イベント・マッピングの概要」](#) を参照してください。

データがイベントに変換されたら、エージェントによって HPOM 管理サーバか BSM ゲートウェイ・サーバにイベントが送信されます。イベントは次に表示されます。

- HPOM のイベント・コンソール。
- BSM の操作管理 イベント・ブラウザ (イベント管理 ファウンデーション・ライセンスを保有している場合) および CI に影響するイベントのサービス状況。BSM のインストールに操作管理が含まれていない場合は、CI のステータスに影響するイベントをサービス状況のステータス・インジケータを使用して確認できます。

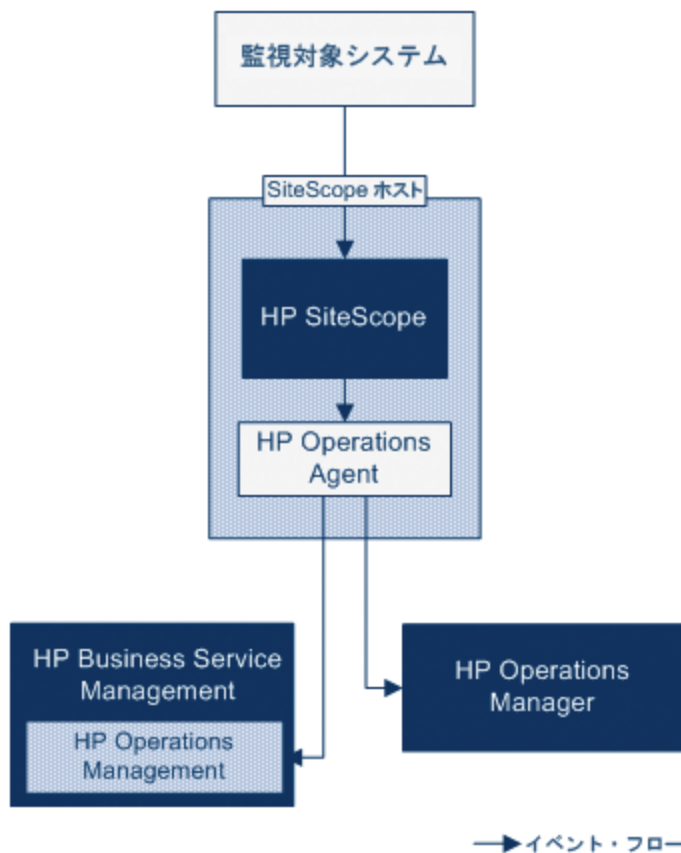
イベントを送信するように SiteScope を設定する方法の詳細については、[268 ページ「SiteScope を使用して HPOM または BSM にイベントを送信する方法」](#) を参照してください。

本項の内容

- 260 ページ「イベントの統合図」
- 260 ページ「SiteScope-HPOM のサポート早見表 - イベント統合」
- 261 ページ「イベントの生成」
- 261 ページ「ディスカバリ・スクリプトと HPOM イベントを表示するためのドリル・ダウン・ユーザ」
- 263 ページ「注意事項および制限事項」

イベントの統合図

次の図は、イベントのデータ・フローを示します。



注: HP Operations Agent のイベントの報告先には、HPOM 管理サーバまたは BSM ゲートウェイ・サーバの両方ではなく、どちらかしか設定できません。

SiteScope-HPOM のサポート早見表 - イベント統合

この SiteScope リリースでサポートされている HPOM バージョン、および同じサーバで SiteScope としてインストールされた場合、共存できる HPOM バージョンについては、リリース・ノート (SiteScope で [ヘルプ] > [What's New?]) を選択) の HP SiteScope サポート・マトリックス・セクションで、「HP Operations Manager (HPOM) 統合 サポート・マトリックス」を参照してください。

イベントの生成

モニタの測定値の状態の変更が続いて、または SiteScope 警告がトリガされるときに、イベントを生成して HPOM 管理サーバまたは BSM の操作管理に送信するように設定できます。

- **状態の変更** :すべての測定値またはカウンタの状態の変更はイベントとなります(たとえば、CPU 使用率のカウンタの状態が「正常」から「エラー」に変更された場合)。モニタのプロパティで、測定値の状態の変更でイベントがトリガされるかどうかを選択できます。標準設定では、モニタ・インスタンスの測定値の状態が変更されると、常に SiteScope からイベントが送信されます。

イベントがトリガされたときに使用する、イベントとイベントの属性値を送信する標準設定を変更できます。イベントの属性値は、モニタのプロパティを使用したイベント設定マッピングに従って入力されます。イベント・マッピングの詳細については、にある SiteScope の使用の [608 ページ「共通イベント・マッピングの概要」](#) を参照してください。

モニタのプロパティを送信するだけでなく、SiteScope ではモニタ・インスタンスの状況インジケータまたはイベント・タイプ・インジケータ(インジケータ)も送信します。イベントはインジケータに従って分類されます。BSM イベント・マネージャでは、インジケータを使用して、管理対象の IT 環境における発生タイプ(CPU 負荷など)に従ってイベントを分類します。続いて、CI 状態情報を提供するインジケータが、CI の計算に使用されます。

注: 状態の変更は、モニタのしきい値の設定で設定された測定値にのみ適用されます。

- **警告** :すべての警告がイベントとなります。警告はモニタごとにトリガされるため、警告によってトリガされるイベントでは、モニタのプロパティを使用できませんが、特定のメトリックスに関連付けられているインジケータは使用できません。このため、イベント警告を設定する際には、警告によってイベントがトリガされるときにレポートされるインジケータを手動で選択できます。この結果インジケータは汎用的に使用されることが多いため、BSM 内の状況インジケータに影響を与えないインジケータを選択する必要があります。

[Operations Manager 統合設定] パネルの警告定義で、警告時に HPOM または BSM にイベントを送信するかどうかを選択できます。

注:

- 警告とモニタの両方にイベント送信を設定すると、SiteScope 警告がトリガされる際に 2 つのイベントが生成される可能性があります。警告にイベント送信を設定する場合は、モニタにはイベント送信を設定しないようにします。これとは逆に、測定値の状態が変わるたびに警告(モニタ・インスタンスの状況インジケータまたはイベント・タイプ・インジケータを含む)を出す場合、警告イベントの併用はお勧めしません。
- HPOM に送信される警告には、SiteScope によってしきい値情報も追加されます。SiteScope と BSM の以前のバージョンでは、モニタ用に作成されたしきい値を警告に含めることはできませんでした。
- 操作管理で、警告イベントは通知目的のみに使用することをお勧めします。

ディスカバリ・スクリプトと HPOM イベントを表示するためのドリル・ダウン・ユーザ

SiteScope が HPOM と統合されると、**ノード・ディスカバリ**および**モニタ・ディスカバリ**・ポリシーが HPOM 管理サーバのノードとモニタに対してアクティブになります。

どちらのディスカバリ・ポリシーも、SiteScope の**統合ビューア・ユーザ**に依存します。これは、HPOM イベントからのドリルダウン用として SiteScope に用意されているユーザです。このユーザには、表示権

限と、グループとモニタをリフレッシュする権限が与えられています。ユーザとユーザ権限の詳細については、にある SiteScope の使用の [772 ページ「ユーザ管理プリファレンス」](#) を参照してください。

注:

- 統合ビューア・ユーザがユーザ管理プリファレンスから削除されると、SiteScope が再起動された時にユーザ・タイプが自動的に作成されます。
- 統合ビューア・ユーザ・プロパティを変更した場合は、SiteScope を再起動してユーザ・プロパティ・ファイルを更新する必要があります。または、< **SiteScope のルート・ディレクトリ** > \conf\sitescope_connection.properties ファイル内のユーザ・プロパティを手動で更新することもできます。
統合ビューア・ユーザ・プロパティを手動で変更する場合は、SiteScope 暗号化ツールを使用してユーザのログイン名とパスワードを暗号化する必要があります。暗号化ツールの詳細については、にある SiteScope の使用の [917 ページ「テキストの暗号化方法」](#) を参照してください。

HPOM 管理サーバへのディスカバリ・ポリシーのデプロイの詳細については、HPOM のドキュメントを参照してください。

ノード・ディスカバリ・ポリシー

SiteScope が HPOM に接続されると、SiteScope によって監視される各ノードに対応するノードが HPOM に自動的に作成および登録されます。この機能のおかげで、SiteScope は監視対象のすべてのノードを HPOM に報告できます。イベントを報告するモニタのホストのみが、このディスカバリ・ポリシーによって、HPOM に送信されます。

ヒント: HPOM に接続していない場合 (操作管理に接続している場合)、次のコマンドを実行することによってノード・ディスカバリを無効にするように推奨します。ovpolicy -disable -polname SiteScope_Hosts_Discovery

注: SiteScope では、無効に設定されているモニタ、またはイベントを送信するように設定されていないモニタについて、ノードまたはサービスは HPOM に報告されません。

モニタ・ディスカバリ・ポリシー

これは、< **SiteScope のルート・ディレクトリ** > \tools\OMIntegration\ の次のディレクトリにあるファイルを使用して、HPOM で手動でアクティブ化しなければならないオプションのポリシーです。

SiteScopeMonitorDiscoveryPolicy ディレクトリ。ポリシーがアクティブ化された後で、HPOM に接続されると SiteScope は SiteScope-OM モニタ検出スクリプトを実行します。

このポリシーによって HPOM Service Navigator は HPOM サービス・マップに SiteScope モニタ・ツリーを表示できます。新しいモニタ、グループ、または両方を追加する、または SiteScope モニタ・ツリーを変更を行うと、HPOM でサービス・ツリーが更新され、これらの変更が反映されます。さらに、イベントが HPOM に達すると、SiteScope サービス・ツリーに影響し、影響を受けたすべての関連ノードに色を付けます。

モニタ・ディスカバリ・ポリシーを有効にする方法の詳細については、[275 ページ「SiteScope モニタ・ディスカバリ・ポリシーを有効にする方法」](#) を参照してください。

ツールが HPOM から SiteScope にドリルダウンできるようにする方法の詳細については、[279ページ「HPOM for Windows で SiteScope にドリルダウン・ツールを有効にする方法」](#)と[280ページ「HPOM for UNIX/Linux/Solaris で SiteScope にドリルダウン・ツールを有効にする方法」](#)を参照してください。

注意事項および制限事項

- 以前の SiteScope-OM イベント統合 (SiteScope 11.00 よりも前のもの) のアップグレードは、サポートされていません。
- SiteScope 10.x バージョンは HPOM イベント統合をサポートしていますが、11.00 よりも前のバージョンの SiteScope で生成されたイベントは、BSM 9.0x のサービス状況とサービス・レベル管理に影響しません。
- SiteScope が HPOM と同じマシンにインストールされている場合は、SiteScope をアンインストールするときに、HP Operations Agent をアンインストールするオプションをクリアする必要があります。
- HP Operations Agent を使用して HPOM にイベントを送信できるのは、BSM 9.00 以降に接続しているときに限定されます。以前のバージョンの SiteScope では、HPOM 管理サーバへの HP SiteScope Adaptor のインストールという以前の HPOM の統合ソリューションがサポートされますが、SiteScope 11.10 ではサポートされないためインストールしないでください。したがって HP Operations Agent を使用して新しい実装にアップグレードしてください。
- ノード・ディスカバリのアクティブ化またはモニタ・ディスカバリ・ポリシーのデプロイに問題がある場合には、SiteScope ノード・システム・プロパティが正しく検出されていることを確認し、必要に応じて修正します。[ノード プロパティ] ダイアログ・ボックスで、[システム] タブを選択して、設定が SiteScope ノード・システム設定と一致することを確認します。
- HP Operations Manager for Windows 9 を使用する場合に SiteScope ノード・プロパティを上書きしないでノード検出機能をサポートするには、パッチ OMW_00097/98 以降 (32 ビットおよび 64 ビット) が必要です。
- 現在、HPOM と SiteScope を併用しており、HPOM を BSM にアップグレードする計画がある場合、このアップグレードを行うには SiteScope を直接 BSM に接続する必要があります。これにより、SiteScope でトポロジを BSM に報告できるようになります。SiteScope を BSM に接続する方法の詳細については、[218ページ「BSM を使った作業」](#)を参照してください。
- SiteScope から、モニタの測定値がどのしきい値にも一致しないイベントが送信されると、インジケータの重大度 [正常域] が HPOM 管理サーバまたは BSM ゲートウェイ・サーバに送信されます。
- SiteScope を BSM に接続すると、新しいホスト上でモニタが作成された後、関連する CI の値を含めずにそのイベントが操作管理に送信されます (イベントはトポロジが BSM に報告される前にトリガされる)。次のイベントが送信されるまで待機しないように設定するには、モニタの [HP 統合設定] > [HP Operations Manager 統合設定] で [最初のイベントを手動で送信] チェック・ボックスを選択します。この処理は、[グローバル検索と置換] を使用してグローバルに実行できます。
- 次の状況で SiteScope による監視が停止する場合、イベントは閉じられず (HPOM と BSM に関係)、インジケータのステータスはクリアされません (BSM に関係)。
 - 関連付けられている SiteScope モニタが省略されたか、(永続的またはスケジューラにより) 無効または一時停止にされている。
 - 関連付けられている SiteScope モニタが削除された。
 - SiteScope からの BSM への報告が停止される (SiteScope が切断される場合など)。

- サービス状況, サービス・レベル管理, または両方から無効化されているモニタのインジケータを除外するには, BSM 9.0x 以降でダウンタイムの管理を使用することをお勧めします。詳細については, 「ダウンタイムの管理 - 概要」を参照してください。BSM ヘルプにあるプラットフォーム管理ガイドの「ダウンタイムの管理 - 概要」を参照してください。
- HP Operations Agent のインストール, イベント統合設定, イベントの送信, およびノード・ディスカバリとモニタ・ディスカバリに関連する追加のトラブルシューティングについては, で『Integration with BSM and HPOM Best Practices』の「[Troubleshooting SiteScope Integration Issues](#)」を参照してください。

HP Operations Agent を使用した測定値の報告

注: 本項は、SiteScope を BSM 9.00 以降で操作管理に接続するユーザ、または HP Performance Manager 9.0 以降に接続するユーザのみを対象としており、HP Operations Agent を使用している場合にのみ該当します。

SiteScope は HP Operations Agent を使用して、測定値データを HP Performance Manager (HPOM) のレポート・コンポーネント) および BSM の PMi (操作管理の「パフォーマンス パースペクティブ」タブで使用) できるようにします。SiteScope メトリックスをレポート製品が収集できるようにするには、HP Operations Agent が SiteScope サーバにインストールされている必要があります。SiteScope によってメトリックス・データが収集されて、SiteScope ホストのエージェントのデータ・ストアに記録されます。

Performance Manager のユーザがグラフを描くか設計する場合、SiteScope の監視対象の Performance Manager で選択したノードに対応するエージェント・データ・ストアから、メトリックス・データが Performance Manager によって収集され、グラフが描かれます。エージェントレス・グラフ作成は、Performance Manager 9.0 でサポートされます。Performance Manager の詳細については、Performance Manager のマニュアルを参照してください。

SiteScope から収集されたメトリックス・データは、BSM の操作管理のグラフ作成コンポーネント、PMi でも使用されます。

SiteScope-HPOM 測定値統合内に保存できるモニタ、メトリック、モニタ・タイプの最大数を計画する際にはサイズ設定は重要です。サイズ設定の推奨事項については、[289 ページ「SiteScope-Operations Manager 測定値統合のサイズ設定の推奨事項」](#)を参照してください。

メトリック名の整合、つまり SiteScope のメトリック名を HPOM または BSM で使用されている名前と対応付けるプロセスは、通常使用されるモニタの一部に実行されています。詳細については、[285 ページ「SiteScope-Operations エージェントの測定値の整合」](#)を参照してください。パフォーマンス・マネージャは、測定値を(整合の有無にかかわらず)グラフに表示することができ、発生する可能性のあるすべてのメトリックの測定値整合がパフォーマンス・マネージャにデータを表示するために必須というわけではありません。

メトリックス統合の設定の詳細については、[283 ページ「SiteScope を使用して HP Operations Agent に測定値をレポートする方法」](#)を参照してください。

注:

- HP Operations Agent を使用する測定値統合を、各 CI (たとえば、サービス状況、サービス・レベル管理、システム可用性管理) を算出するときに BSM のさまざまなアプリケーションによって使用される SiteScope モニタ・メトリックの統合と混同しないでください。BSM 測定値統合の設定の詳細については、[218 ページ「BSM を使った作業」](#)を参照してください。
- Performance Manager との測定値統合は、HP Operations Agent と HPOM サーバまたは BSM サーバとの接続状態に関係なく有効化されます。これは、測定値がエージェントによって収集されるためです。

ヒント: HP Operations Agent を使用した BSM および HPOM 製品への測定値データのレポートのベスト・プラクティスおよびトラブルシューティングの詳細については、『Integration with BSM and

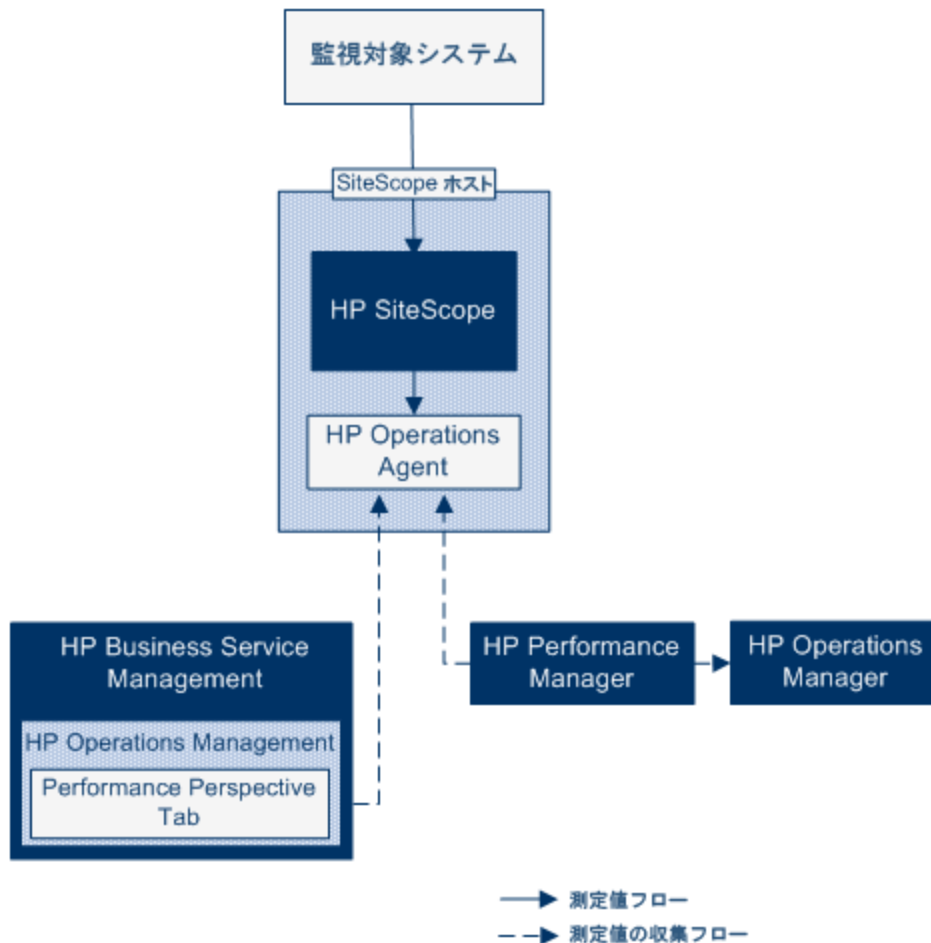
HPOM Best Practices』を参照してください。

本項の内容

- 266ページ「測定値データのフロー図」
- 266ページ「トラブルシューティングおよび制限事項」

測定値データのフロー図

次の図は、測定値のデータ・フローを示します。



トラブルシューティングおよび制限事項

- エージェントのデータ・ストアでは、SiteScope メトリックス名に英数字とアンダースコア文字(_)しかサポートされません。それ以外のすべての文字は、サポートされる文字に変換されます(メトリックスの表示名(ヘッダ)では SiteScope のスタイルが維持されます)。
- Web スクリプト・モニタ・データは、操作管理または HPOM にレポートできません。
- HP Performance Manager から BSM の操作管理(パフォーマンス・パースペクティブ)にアップグレードし、SiteScope を BSM に接続した後で、履歴レポート・データはアップグレードできません。CI ベースのレポート作成機能がないためです(従来の HP Performance Manager の方法で、表示は

できます)。

- エージェント・データ・ストアにポストフィックス(25% または 400MB など)がある数値をレポートできるようにするには、コマンドで区切られたポストフィックスのリストを <SiteScope ルート・ディレクトリ>\groups\master.config ファイルの `_omMetricIntergationAllowedNumberPostfixs` プロパティに追加します。たとえば、%, MB, KB, および GB を含むには、`=%,mb,kb,gb` を追加します。すべてのポストフィックスが小文字でなければならないことに注意してください。
- 操作管理の「マネージャのマネージャ」設定(複数の HPOM サーバが操作管理に接続され、複数の SiteScope が HPOM サーバを介して間接的に操作管理に接続されます)では、SiteScope から送信されたデータは、操作管理のパフォーマンス・パースペクティブによってサポートされません。これは、SiteScope からトポロジが操作管理に送信されないためです。操作管理のデプロイメント構成の詳細については、BSM ヘルプにある『Using Operations Management』の「Connected Servers」を参照してください。
- エージェント・データ・ストアの過負荷を防止するために、[289ページ「SiteScope-Operations Manager 測定値統合のサイズ設定の推奨事項」](#)に記載されているサイズ設定の推奨事項に従ってください。
- HP Operations Agent 設定、状況モニタ・エラー、Performance Manager の設定に関するトラブルシューティングの問題については、で『Integration with BSM and HPOM Best Practices』の「Troubleshooting SiteScope Integration Issues」を参照してください。

SiteScope を使用して HPOM または BSM にイベントを送信する方法

注: 本項は、SiteScope を Operations Manager (HPOM) 製品 または BSM に接続するユーザーのみを対象としており、SiteScope から HPOM または BSM 9.00 以降に報告する場合にのみ該当します。

このタスクでは、SiteScope を使用して HPOM 管理サーバまたは BSM ゲートウェイ・サーバにイベントを送信する方法について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- 268 ページ「前提条件」
- 268 ページ「HP Operations Agent の SiteScope サーバへのインストール」
- 269 ページ「分散環境の BSM のみ: データ処理サーバに渡される接続要求の設定」
- 270 ページ「SiteScope サーバでのエージェント接続設定の設定」
- 270 ページ「エージェントの接続要求を HPOM 管理サーバまたは BSM ゲートウェイ / Web 処理サーバで受け入れる」
- 271 ページ「SiteScope サーバへのログ・ポリシーのインストール」
- 271 ページ「接続状態のチェックおよび SiteScope サーバからのテスト・メッセージの送信 - オプション」
- 271 ページ「モニタ・ディスカバリを使用して HPOM との統合を拡張 - オプション」
- 272 ページ「SiteScope を使用して HPOM または BSM にイベントを送信する」
- 272 ページ「標準設定のイベント重大度マッピングの使用を有効にする - オプション」
- 272 ページ「モニタ・インスタンスと警告のイベントの送信を有効化 / 無効化」
- 273 ページ「モニタと警告のイベント・マッピングの設定 - オプション」
- 273 ページ「結果」

1. 前提条件

SiteScope の管理者、または「**統合プリファレンスの編集**」権限と「**共通イベント・マッピングの追加、編集、削除**」権限を付与されたユーザーのみが、統合プリファレンスと共通イベント・マッピングを作成または変更できます。詳細については、[772 ページ「ユーザ管理プリファレンス」](#)を参照してください。

2. HP Operations Agent の SiteScope サーバへのインストール

HP Operations Agent は、SiteScope のインストール時に SiteScope インストール・メディアからか、SiteScope のインストール後に設定ツールを使用してインストールできます。このエージェントによって、SiteScope からイベント・データを HPOM 管理サーバまたは BSM ゲートウェイ・サーバに送信できます。

サポートされる HPOM 環境および HP Operations Agent のバージョンについては、リリース・ノート of HP SiteScope サポート早見表を参照してください。

SiteScope インストール時および SiteScope 設定 ツールを使用したエージェントのインストールの詳細については、『HP SiteScope デプロイメント・ガイド』を参照してください。

3. 分散環境の BSM のみ: データ処理 サーバに渡される接続要求の設定

BSM によって別のゲートウェイ・サーバとデータ処理サーバが使用されている場合、次の手順を実行して、ゲートウェイ・サーバで受信された要求がデータ処理サーバにわたされるようにします。

- a. BSM で、[管理]>[プラットフォーム]>[インフラストラクチャ設定]を選択します。
 - [アプリケーション]を選択します。
 - [オペレーション管理]を選択します。
 - [証明書サーバの設定]で、[証明書サーバホスト]を見つけます。証明書サーバ・ホストとして稼働するアクティブな BSM データ処理サーバのホスト名または IP アドレスと値が一致することを確認します。一致しない場合には、適宜変更します。

注: BSM データ処理サーバが故障して自動フェールオーバーが設定されている場合には、証明書サーバ・ホストの設定をバックアップのデータ処理サーバ名に変更し、新しい証明書要求を処理する必要があります。ただし、データ処理サーバのフェールオーバー・タイムフレームの間に新しい証明書要求が予測されない場合には、以前に設定したイベント統合に影響しないように、設定を変更せずにおくことができます。

- b. ゲートウェイ・サーバを設定します。
 - `cd <HPBSM ルート・ディレクトリ> \bin` と入力して、アクティブ・ディレクトリを `\bin` ディレクトリに変更します。
 - **setup-secure-communication.bat** を実行してデータ処理サーバの DNS 名を入力します。
- c. データ処理サーバを設定します。
 - `cd <HPBSM ルート・ディレクトリ> \bin` と入力して、アクティブ・ディレクトリを `\bin` ディレクトリに変更します。
 - **setup-secure-communication.bat** を実行して、`g` と入力し要求を付与します(この要求を付与しその他の要求は付与しないことを確認します)。
- d. BSM フェールオーバー環境をロード・バランサと使用している場合には、各データ処理サーバの証明書サーバが同期していることを確認します。
 - すべてのゲートウェイ・サーバでステップ b と c を繰り返します。どのデータ処理サーバに証明書要求を送信するかは重要ではありません。データ処理サーバは既に信頼関係があるからです。その結果、すべてのゲートウェイ・サーバは両方のデータ処理サーバを信頼しており、どちらのサーバがアクティブなのかにかかわらず、常にこれらのサーバと通信できます。
 - 稼働中のデータ処理サーバに新しい証明書をインストールする場合、フェールオーバーとして使用される二次データ処理サーバに証明書をインストールすることも必要となります。新しい証明書をインストールするには、次のコマンドを実行します。

```
ovcert -importtrusted -file <newCertificateFilePath>
```

```
ovcert -importtrusted -file <newCertificateFilePath> -ovrg  
server
```

- ポート 383 に到着するすべての HTTPS トラフィックをゲートウェイ・サーバに転送するようにロード・バランサを設定します。これによって証明書要求とイベント転送を稼働できます。

4. SiteScope サーバでのエージェント接続設定の設定

SiteScope 統合プリファレンスで、HPOM 管理サーバまたは BSM サーバへの HP Operations Agent の接続を設定します。

- a. [プリファレンス] > [統合プリファレンス] > [HP Operations Manager 統合]を選択して、新しい統合を作成するか既存の統合を選択します。ユーザ・インタフェースの詳細については、[711ページ「\[統合プリファレンス\]ページ」](#)を参照してください。
- b. [HP Operations Manager 統合]ダイアログ・ボックスで[HP Operations Manager 統合のメイン設定]パネルを展開し、エージェントのインストール・パスとHPOM 管理サーバまたは BSM サーバの名前か IP アドレスを入力します。ユーザ・インタフェースの詳細については、[729ページ「HP Operations Manager 統合ダイアログ・ボックス」](#)を参照してください。
- c. [接続]をクリックして、エージェントを HPOM 管理サーバまたは BSM サーバに接続します。エージェントから HPOM 管理サーバまたは BSM サーバに接続要求が送信されます。
- d. [分析]ボタンをクリックすると、プロセスの各段階が正常に完了したかを検証できます。分析結果に表示される情報を、問題分析とトラブルシューティングに使用します。たとえば、`bbcutil` 接続プロトコルを検証することで、エージェントとサーバ間の接続を確認できます。

注: エージェントが HPOM サーバまたは BSM サーバに接続されており、異なるサーバに接続する場合には、エージェントをアンインストールしてから再インストールするか、エージェントを別のサーバにリダイレクトする必要があります。タスクの詳細については、[273ページ「HP Operations Agent を異なる HPOM または BSM サーバに再接続する方法」](#)を参照してください。

5. エージェントの接続要求を HPOM 管理サーバまたは BSM ゲートウェイ / Web 処理サーバで受け入れる

■ HPOM の場合 :

HPOM ユーザ・インタフェースで、SiteScope ノードを設定し、証明書要求をこのノードにマップして、証明書要求を受け入れる必要があります。詳細については、HPOM ドキュメントの「環境の管理」の「管理対象ノードの設定」と「証明書の設定」を参照するか、HPOM 管理者に問い合わせてください。

■ BSM の場合 :

ゲートウェイ・サーバで BSM を実行している場合のみ、BSM ゲート・サーバで次の手順を実行します。BSM が分散環境で実行されている場合は、データ処理サーバで次の手順を実行します。

- i. (任意)OV 証明書サーバ・プロセスが実行されているかどうかを確認するには、コマンド・ライン `run ovc -status` を実行します。実行中でない場合、コマンド `ovc -start` を実行するか、BSM の管理者にお問い合わせください。

- ii. `cd <HPBSM のルート・ディレクトリ> \bin` と入力して、アクティブ・ディレクトリを `\bin` ディレクトリに変更します。
- iii. **setup-secure-communication.bat** を実行して、`g` と入力し要求を付与します(この要求を付与しその他の要求は付与しないことを確認します)。
- iv. 承認しようとする要求 ID がエージェントのコア ID に関連付けられていることを確認します。エージェントのコア ID を取得するには、SiteScope で [HP Operations Manager 統合] の [分析] ボタンをクリックするか、SiteScope サーバ上でエージェントの `ovcoreid` コマンドを実行します。

6. SiteScope サーバへのログ・ポリシーのインストール

[HP Operations Manager 統合] ダイアログ・ボックスの [HP Operations Manager 統合のメイン設定] パネルで [ポリシーのインストール] をクリックします。事前に設定されたログ・ファイル・ポリシーがエージェント上にインストールされ、署名されます。

ユーザ・インタフェースの詳細については、711 ページ「[統合プリファレンス] ページ」を参照してください。

7. 接続状態のチェックおよび SiteScope サーバからのテスト・メッセージの送信 - オプション

接続に問題がある場合は、問題の分析を実行してエージェントと証明書要求の状態をチェックできます。[Operations Manager 統合] ダイアログ・ボックスで、[HP Operations Manager 統合のメイン設定] パネルを展開して [分析] をクリックします。

エージェントが HPOM 管理サーバまたは BSM サーバに接続していることをチェックするには、[HP Operations Manager 統合詳細設定] パネルを展開して、[テスト メッセージ] テキスト・ボックスにメッセージを入力し、[テスト メッセージ送信] をクリックします。

テストが成功すると、HPOM コンソールまたは BSM の操作管理 イベント・ブラウザにテキスト・メッセージが表示されます。このメッセージは、基本的な `opcmsg` ポリシー・コマンドによって生成されます。

ユーザ・インタフェースの詳細については、711 ページ「[統合プリファレンス] ページ」を参照してください。

8. モニタ・ディスカバリを使用して HPOM との統合を拡張 - オプション

HPOM Service Navigator が HPOM サービス・マップに SiteScope グループおよびモニタを表示できるようにするには、< SiteScope のルート・ディレクトリ > \tools\OMIntegration\SiteScopeMonitorDiscoveryPolicy ディレクトリのファイルを使用して、HPOM でモニタ・ディスカバリ・ポリシーを手動で有効にする必要があります。

ポリシーを有効にする方法の詳細については、275 ページ「SiteScope モニタ・ディスカバリ・ポリシーを有効にする方法」を参照してください。

注: Operations Manager イベント統合の従来の SiteScope Failover サポートを有効にするには、257 ページ「SiteScope Failover と Operations Manager の統合」でモニタ・ディスカバリ・ポリシーの設定の手順に従ってください。

ヒント: また、SiteScope にドリルダウン・ツールを使用して、モニタ・ディスカバリ・ポリシーによって検出され HPOM サービス・ナビゲータに追加されたモニタまたはグループ・サービスから

SiteScope ユーザ・インタフェースを開くことも可能です。

- HPOM for Windows でツールを有効にする方法の詳細については、[279ページ「HPOM for Windows で SiteScope にドリルダウン・ツールを有効にする方法」](#)を参照してください。
- HPOM for UNIX/Linux/Solaris でツールを有効にする方法の詳細については、[280ページ「HPOM for UNIX/Linux/Solaris で SiteScope にドリルダウン・ツールを有効にする方法」](#)を参照してください。

9. SiteScope を使用して HPOM または BSM にイベントを送信する

- [Operations Manager 統合] ダイアログ・ボックスで、[HP Operations Manager 統合のメイン設定] パネルを展開して[イベント送信の有効化]を選択し、SiteScope から HPOM または BSM サーバにイベントを送信できるようにします。ユーザ・インタフェースの詳細については、[730ページ「HP Operations Manager 統合 メイン設定」](#)を参照してください。
- エージェントが HPOM / BSM にイベントを送信できることをチェックするには、[HP Operations Manager 統合詳細設定] パネルを展開し、[テスト イベント送信]をクリックします。SiteScope によってログにテスト・イベントが書き込まれ、エージェントによってこのログが HPOM / BSM に送信されます。ユーザ・インタフェースの詳細については、[729ページ「HP Operations Manager 統合 ダイアログ・ボックス」](#)を参照してください。

10. 標準設定のイベント重大度マッピングの使用を有効にする - オプション

[HP Operations Manager 統合詳細設定] パネルの[重大度のマッピングの標準設定] セクションで、HPOM / BSM の重大度レベルを SiteScope のモニタしきい値の状態に関連付ける重大度のマッピングの標準設定を使用できるようにします。SiteScope が BSM に接続されていない時、またはインジケータの状態および重大度の値が欠落している場合 (たとえば、定義済みのトポロジを持たないモニタを使用している時)、これらのマッピングは SiteScope 警告によって起動されるイベントで送信されます。重大度のマッピングの標準設定のカスタマイズも可能です。

ユーザ・インタフェースの詳細については、[729ページ「HP Operations Manager 統合 ダイアログ・ボックス」](#)を参照してください。

注: 共通イベント・マッピングで[重大度]属性を変更することによりモニタ・レベルで重大度マッピングをオーバーライドできます。詳細については、[273ページ「モニタと警告のイベント・マッピングの設定 - オプション」](#)を参照してください。

11. モニタ・インスタンスと警告のイベントの送信を有効化 / 無効化

標準設定では、新たに作成された各モニタ・インスタンスは、各測定値状態変更のイベントを送信するように設定されます。また、新しい警告はそれぞれ、トリガ時にイベントを送信するように設定されます。SiteScope の以前のバージョンからアップグレードされたモニタと警告は、イベントを送信するように設定されていません。

- 任意のモニタ・インスタンスのイベントの送信を無効にするには、選択したモニタ・インスタンスのモニタ・プロパティで[HP 統合設定]>[HP Operations Manager 統合設定]を展開して、[イベント送信]チェック・ボックスをクリアします。ユーザ・インタフェースの詳細については、[711ページ「\[統合プリファレンス\]ページ」](#)を参照してください。
- 警告のイベントの送信を無効にするには、[新規警告]または[警告の編集]ダイアログ・ボックスで[HP Operations Manager 統合設定] パネルを展開して、[イベント送信]チェック・

ボックスをクリアします。ユーザ・インタフェースの詳細については、[711ページ「\[統合プリファレンス\] ページ」](#)を参照してください。

注: [イベント送信] 設定は、[HP Operations Manager 統合プリファレンス] の [HP Operations Manager Integration 統合のメイン設定] パネルで [イベント送信の有効化] が選択されている場合にのみアクティブになります。

12. モニタと警告のイベント・マッピングの設定 - オプション

モニタ・インスタンスと警告は、イベントがトリガされたときに使用する共通イベント・マッピングに割り当てられます。これは SiteScope ランタイム・データと送信されるイベントの属性値との間のマッピングです。

モニタまたは警告に関連付けられた標準設定のイベント・マッピングを使用するか、異なるイベント・マッピングを選択するか(存在する場合)、[プリファレンス] > [共通イベント マッピング] で新規イベント・マッピングを作成できます。あるいは、警告の場合、その警告をトリガしたモニタに関連付けられたイベント・マッピング・テンプレートを使用できます。

次の場合にイベント・マッピング・テンプレートを選択します。

- モニタの [プロパティ] タブ > [イベント マッピング設定] からモニタ・インスタンスを設定する場合。
- [警告] タブ > [新規警告]/[警告の編集] > [HP Operations Manager 統合設定] > [イベント マッピング] から警告を設定する場合。

[共通イベント マッピング] ユーザ・インタフェースの詳細については、[612ページ「\[新規イベント マッピング\] / \[イベント マッピングの編集\] ダイアログ・ボックス」](#)を参照してください。

13. 結果

モニタ・メトリックスの状態の変更または警告が SiteScope でトリガされると、[共通イベント マッピング] でそのモニタ・インスタンスまたは警告用に指定されている形式で、統合のログ・ファイルにイベントが書き込まれます。

エージェントによって、ログ・ファイルの監視とイベントの作成が実行され、HPOM または BSM に送信されます。イベントは、HPOM のイベント・コンソール、または操作管理 イベント・ブラウザの BSM に表示されます(イベント管理ファウンデーションのライセンスがある場合)。BSM のインストールに操作管理が含まれていない場合は、CI の状態に影響するイベントをサービス状況の状況インジケータを使って確認できます。

HP Operations Agent を異なる HPOM または BSM サーバに再接続する方法

次のいずれかによって、HP Operations Agent を異なる HPOM 管理サーバまたは BSM サーバに再接続できます。

- HP Operations Agent をインストールおよび再インストールする。
- HP Operations Agent を異なるサーバにリダイレクトする。

注: このタスクは高度なタスクのうちの 1 つです。詳細については、[268ページ「SiteScope を使用して HPOM または BSM にイベントを送信する方法」](#)を参照してください。

HP Operations Agent をインストールおよび再インストールには、次の手順を実行します。

1. SiteScope で、[プリファレンス] > [統合プリファレンス]を選択し、Operations Manager 統合を削除します。
2. SiteScope 設定ツール([スタート] > [プログラム] > [HP] > [設定ツール])を開き、[HP Operations Agent]オプションを選択し、HP Operations Agent をアンインストールします。
3. SiteScope 設定ツールを開き、[HP Operations Agent]オプションを選択して、HP Operations Agent をインストールします。
4. SiteScope で、接続する新しい HPOM/BSM サーバとの HP Operations Manager 統合を設定します。ユーザ・インタフェースの詳細については、[711ページ「\[統合プリファレンス\]ページ」](#)を参照してください。

注: HPOM サーバに再接続した後で、イベントが HPOM に送信されるまで時間がかかる場合があります。HPOM サーバ、HP Operations Agent、または両方の再起動によって修正されます。

HP Operations Agent を異なるサーバにリダイレクトするには、次の手順を実行します。

注: 通常ホスト名および IP アドレスの変更を含む HP Operations Agent でマシンをクローン作成する場合、以下のステップ 1 から始め、そうでない場合は、ステップ 4 から始めます。

1. HP Operations Agent がインストールされている SiteScope サーバで、新しいコア ID を作成するために次のコマンドを実行します。

```
ovcoreid -create -force
```

2. 証明書を削除するには、次の手順を行います。

```
ovcert -list
```

出力のすべての ID で、次のコマンドを実行します。

```
ovcert -remove 'id'
```

3. 次のコマンドを実行することによって xpl 設定変数 OPC_NODENAME を適合させます。

```
ovconfchg -ns eaagt -set OPC_NODENAME 'hostname'
```

4. 次のコマンドを実行することによって新しいサーバ・ホスト名とコア ID を設定します。

```
ovconfchg -ns sec.cm.client -set CERTIFICATE_SERVER<新しい OM サーバ>
```

```
ovconfchg -ns sec.core.auth -set MANAGER<新しい OM サーバ>
```

```
ovconfchg -ns sec.core.auth -set MANAGER_ID<新しい OM サーバ  
ovcoreid>
```

```
ovconfchg -ns eaagt.lic.mgrs -set general_licmgr<新しい OM サーバのホ  
スト名>
```

```
ovconfchg -ns sec.cm.certificates -set CERT_INSTALLED FALSE
```

5. 次のコマンドを実行することによって HP Operations Agent を再起動します。

```
ovc -kill  
ovc -start
```

6. 次のコマンドを実行することによって新しい証明書要求を作成します。

```
ovcert -certreq
```

7. HPOMまたはBSM ゲートウェイ・サーバで証明書要求を付与します(分散 BSM の場合には、データ処理サーバで証明書要求を付与します)。
8. SiteScope で、[Operations Manager 統合]ダイアログ・ボックスを開き、[統合のメイン設定]パネルで次を実行します。
 - [HP Operations Manager / BSM サーバ]ボックスで HPOM/BSM サーバの名前または IP アドレスを変更します。詳細については、[772ページ「ユーザ管理プリファレンス」](#)を参照してください。
 - [ポリシーのインストール]ボタンをクリックしてログ・ポリシーをインストールします。

注: HPOM サーバに再接続した後で、イベントが HPOM に送信されるまで時間がかかる場合があります。HPOM サーバ、HP Operations Agent、または両方の再起動によって修正されます。

SiteScope モニタ・ディスカバリ・ポリシーを有効にする方法

このタスクでは、HPOM サービス・ナビゲータが HPOM サービス・マップに SiteScope グループおよびモニタを表示できるようにすることによって、HPOM との SiteScope 統合を拡張する方法を説明します。

注:

- このタスクは高度なタスクのうちの 1 つです。詳細については、[268ページ「SiteScope を使用して HPOM または BSM にイベントを送信する方法」](#)を参照してください。
- HPOM 9.0 for Windows 64 ビット・コンソールは、パッチ OMW_00132 以降でサービス・ツリー・ビューをサポートします。

このタスクには次の手順が含まれています。

- [276ページ「ポリシー・ファイルの instrumentation フォルダへのコピー」](#)
- [276ページ「ポリシーの HPOM サーバへのアップロード \(HPOM for Windows サーバの場合\)」](#)
- [276ページ「ポリシーの HPOM サーバへのアップロード \(HPOM for Linux, UNIX, Solaris 9.x サーバの場合\)」](#)
- [277ページ「スケジュール間隔の設定」](#)
- [277ページ「ポリシーのデプロイ」](#)
- [278ページ「モニタ・ディスカバリ・ポリシーの手動による実行 - オプション」](#)
- [278ページ「HPOM から SiteScope ユーザインタフェースへのドリルダウン - オプション」](#)
- [278ページ「トラブルシューティング」](#)

1. ポリシー・ファイルの instrumentation フォルダへのコピー

SiteScope サーバで:

- Windows の場合 :**discoverSiteScope.bat** ファイルを <SiteScope ルート・ディレクトリ>\integrations\om\bin フォルダから %OvDataDir%\bin\instrumentation フォルダにコピーします。
- Linux, UNIX, Solaris の場合 :すべてのファイルを /opt/HP/SiteScope/integrations/om/bin/* から /var/opt/OV/bin/instrumentation フォルダにコピーします。

注: すべての関連するポリシー・ファイルは、<SiteScope ルート・ディレクトリ>\tools\OMIntegration\SiteScopeMonitorDiscoveryPolicy\SiS_Discovery_policy_3.0 フォルダにあります。

2. ポリシーの HPOM サーバへのアップロード (HPOM for Windows サーバの場合)

前提条件:

- HPOM for Windows 8.16(または同等のパッチ済み 8.10 サーバ)または 9.10, および十分なユーザ権限(通常は管理者)。
- すべてのアップロードは、通常環境パス内にある HPOM for Windows コマンド・ライン・ツール, **ovpmutil** を使用して実行されます。

ポリシーを HPOM サーバにアップロードするには、次の手順を実行します。

- a. コマンド・プロンプトを開き、SiteScope Discovery 3.0 サーバ・コンポーネントが配置されているフォルダにナビゲートします。たとえば、C:\temp\SiS_Discovery_3.0:

```
cd C:\temp\SiS_Discovery_3.0\ForServer
```

- b. **ovpmutil** を使用してサービス・モデルをアップロードします。

```
ovpmutil cfg svt upl .\DiscoverSiteScope.mof
```

サービス・モデルは HPOM サービス・タイプ設定エディタに表示されます([アプリケーション サービス]>[SiteScope]の下にある)。

- c. **ovpmutil** と次の指定されたインデックス・ファイルを使用して SiteScope モニタ・ディスカバリをアップロードします。

```
ovpmutil cfg pol upl .\PolicyConfig_77BFF2F6-38BD-45B3-BEA9-E237C55F7877.xml
```

これでポリシーは、[ポリシー管理]>[ポリシー グループ]の下にある HPOM サーバ・ポリシー・リポジトリで利用可能となりました。

3. ポリシーの HPOM サーバへのアップロード (HPOM for Linux, UNIX, Solaris 9.x サーバの場合)

- a. HPOM サービス・モデルを HPOM 管理サーバにアップロードします。コマンド・シェルを開き、次を入力します。

```
/opt/OV/bin/OpC/utlils/mof_cfgupld.sh /opt/HP/SiteScope/tools/\  
SiS_Discovery_policy_3.0/ForServer/DiscoverSiteScope.mof
```



```
OMIntegration/SiteScopeMonitorDiscoveryPolicy/\
```

(.mof ファイルは <SiteScope>/tools/OMIntegration/
SiteScopeMonitorDiscoveryPolicy/SiS_Discovery_policy_3.0/ForServer フォルダに配
置されています。)

- b. コマンド・シェルに次を入力してポリシーをアップロードします。

```
/opt/OV/bin/OpC/utils/opcpolicy -upload dir=/opt/HP/SiteScope/\
tools/OMIntegration/SiteScopeMonitorDiscoveryPolicy/\
SiS_Discovery_policy_3.0/ForServer
```

- c. コマンド・シェルに次を入力してポリシーをノードに割り当て、SiteScope ノードにデプロイします。

```
# /opt/OV/bin/OpC/utils/opcnode -assign_pol node_name=<NODENAME>
net_type=NETWORK_IP pol_name= "SiteScope Discovery" pol_
type=svcdisc
```

4. スケジュール間隔の設定

HPOM for Windows コンソールで、HPOM エージェントで SiteScope モニタ・ディスカバリ・ポリシーを実行するためのスケジュール間隔を設定できます。

- [**ポリシー管理**] > [**ポリシーグループ**] > [**SiteScope ディスカバリ**] を選択します。右ペインで、[**SiteScope ディスカバリ**] を右クリックして [**すべてのタスク**] > [**編集**] を選択します。
- サービス自動ディスカバリ・ポリシー・エディタで、[**スケジュール**] タブを選択し、HPOM for Windows コンソールで HPOM エージェントで SiteScope モニタ・ディスカバリ・ポリシーを実行するための間隔を指定します。

5. ポリシーのデプロイ

前提条件：

- 統合される SiteScope サーバは HPOM 管理対象ノードとして設定されます。
- HP Operations Agent が実行中で接続されています(詳細については、[268 ページ「SiteScope を使用して HPOM または BSM にイベントを送信する方法」](#)を参照してください)。
- 証明書が付与されています(詳細については、HPOM ドキュメントの「環境の管理」の「管理対象ノードの設定」を参照してください)。
- SiteScope モニタ・ディスカバリ・ポリシーが **SiteScope Discovery** ポリシー・グループにアップロードされています(詳細については、[ステップ 276 ページ「ポリシーの HPOM サーバへのアップロード \(HPOM for Windows サーバの場合\)」](#) または [ステップ 276 ページ「ポリシーの HPOM サーバへのアップロード \(HPOM for Linux, UNIX, Solaris 9.x サーバの場合\)」](#)を参照してください)。

HPOM for Linux, UNIX, Solaris 9.x サーバのポリシーをデプロイするには、次の手順を実行します。

コマンド・シェルを開き、次を入力します。# `opcragt -dist <NODENAME>`

HPOM for Windows サーバのポリシーをデプロイするには、次の手順を実行します。

- a. [SiteScope ディスカバリ] ポリシーを右クリックして、[すべてのタスク]>[デプロイ]を選択します。
- b. [デプロイ・ポリシー] ダイアログ・ボックスで、利用可能な管理対象ノードから SiteScope Server OM ノードを選択し、[OK] をクリックします。デプロイメント ステータスが OM コンソールの [Deployment jobs] に表示されます。
- c. ノードのポリシー詳細リストを表示するには、**Nodes** の下の SiteScope Server OM ノードを右クリックして、[表示]>[ポリシー詳細リスト]を選択します。
- d. ポリシー詳細リストが右ペインに表示され、ノードにデプロイされたすべてのポリシーを示します。

6. モニタ・ディスカバリ・ポリシーの手動による実行 - オプション

テストまたはデバッグのために、ディスカバリを手動で実行すると役に立ちます。これは、ポリシーが実行されている SiteScope サーバ HPOM エージェント・ノードで **ovagtrep** コマンド・ライン・ツールを使用して実行できます。

これを実行するには、次のコマンドを実行します。

- a. ポリシーの実行を強制するには、次のコマンドを実行します。

```
ovagtrep -run "SiteScope Discovery"
```

- b. サーバへの送信を強制するには、次のコマンドを実行します。

```
ovagtrep -publish
```

- c. トラブルシューティングには、**%OvDataDir%\log** フォルダの **System.txt** ファイルを使用します。

7. HPOM から SiteScope ユーザインタフェースへのドリルダウン - オプション

また、SiteScope にドリルダウン・ツールを使用して、モニタ・ディスカバリ・ポリシーによって検出され HPOM サービス・ナビゲータに追加されたモニタまたはグループ・サービスから SiteScope ユーザ・インタフェースを開くことも可能です。

HPOM for Windows でツールを有効にする方法の詳細については、[279ページ「HPOM for Windows で SiteScope にドリルダウン・ツールを有効にする方法」](#)を参照してください。

HPOM for UNIX/Linux/Solaris でツールを有効にする方法の詳細については、[280ページ「HPOM for UNIX/Linux/Solaris で SiteScope にドリルダウン・ツールを有効にする方法」](#)を参照してください。

8. トラブルシューティング

トラブルシューティングでは、次のファイルをチェックできます。

- **<SiteScope Server>%OvDataDir%\log** フォルダにある **System.txt** ファイル(Linux 用:**<SiteScope Server>/var/opt/OV/log**)。
- **<SiteScope Server>%OvDataDir%\datafiles** フォルダにある **agtrep.xml** ファイル(Linux 用:**<SiteScope Server>/var/opt/OV/datafile**)エージェントが確認している検出済みインスタンスを表示するため。
- HPOM サーバが何を受信するかを表示するための **<HPOM Server>%OvShareDir%\server\log\OvSvcDiscServer.log**。

HPOM for Windows で SiteScope にドリルダウン・ツールを有効にする方法

このタスクでは、HPOM for Windows 管理サーバで SiteScope にドリルダウン・ツールを有効にする方法を説明します。このツールによって、モニタ・ディスカバリ・ポリシーによって検出され、HPOM Service Navigator に追加されたモニタまたはグループ・サービスから SiteScope ユーザ・インタフェースを開けます。

注: このタスクは高度なタスクのうちの 1 つです。詳細については、268 ページ「SiteScope を使用して HPOM または BSM にイベントを送信する方法」を参照してください。

このタスクには次の手順が含まれています。

- 279 ページ「前提条件」
- 279 ページ「HPOM for Windows サーバへの SiteScope にドリルダウン・ツールのインストール」
- 279 ページ「ツールと SiteScope サービスの関連付け」
- 280 ページ「ツールの起動 (SiteScope サービスから)」
- 280 ページ「ツールの起動 (ツール・リポジトリから)」

1. 前提条件

モニタ・ディスカバリ・ポリシーを HPOM の SiteScope サーバ・ノードで有効化およびデプロイする必要があります。

タスクの詳細については、275 ページ「SiteScope モニタ・ディスカバリ・ポリシーを有効にする方法」を参照してください。

2. HPOM for Windows サーバへの SiteScope にドリルダウン・ツールのインストール

- HPOM for Windows サーバ・マシンに管理者としてログオンします。
- drillDownToSiteScope.vbs** ファイルを < SiteScope ルート > \tools\OMIntegration\DrillDownTool\ForOMW フォルダから \\< HPOM サーバ > \SPI-Share\SiteScope にコピーします。
- SiteScope にドリルダウン・ツールを HPOM サーバにアップロードします。
 - tls_drillDownToSIS.mof** ファイルを < SiteScope ルート > \tools\OMIntegration\DrillDownTool\ForOMW フォルダから HPOM サーバ・マシン上の任意のフォルダ(< tls パス >) にコピーします。
 - コマンド・ラインを開き、次のコマンドを実行します。

```
>> ovpmutil cfg tls upl <tls path>\tls_drillDownToSIS.mof
```
- SiteScope にドリルダウン・ツールは、HPOM サーバの[ツール] > [SiteScope ツール]の下で使用できます。

3. ツールと SiteScope サービスの関連付け

- HPOM for Windows コンソールで、サービス・タイプ設定エディタを開き、[アプリケーション

サービス] > [SiteScope] を選択して, [プロパティ] をクリックします。

- b. [SiteScope プロパティ] ダイアログ・ボックスで, [ツール] タブをクリックして, [SiteScope ツール] を選択し, 次に [OK] をクリックします。

4. ツールの起動 (SiteScope サービスから)

- a. HPOM for Windows コンソールで, 表示する SiteScope サービス (SiteScope モニタ, グループ, またはサーバ・サービス) を右クリックし, [すべてのタスク] > [ツールの起動] を選択します。
- b. [SiteScope にドリルダウン] ツールを選択し, [起動] をクリックします。
- c. SiteScope ユーザ・インターフェイスが開いて, 選択されたモニタ, グループ, または標準設定のダッシュボード・ビュー (SiteScope サーバ・サービスが選択された場合) が表示されます。

5. ツールの起動 (ツール・リポトリから)

- a. HPOM for Windows コンソールで, [ツール] > [SiteScope ツール] を展開します。右側の表示枠で, [SiteScope にドリルダウン] ツールを右クリックして [すべてのタスク] > [ツールの起動] を選択します。
- b. [パラメータの編集] ダイアログ・ボックスで, 表示するモニタ, グループ, または SiteScope サーバ・サービスを選択し, [起動] をクリックします。
- c. SiteScope ユーザ・インターフェイスが開いて, 選択されたモニタ, グループ, 標準設定のダッシュボード・ビューが表示されます (SiteScope サーバ・サービスが選択された場合)。

HPOM for UNIX/Linux/Solaris で SiteScope にドリルダウン・ツールを有効にする方法

このタスクでは, HPOM for UNIX/Linux/Solaris 管理サーバで SiteScope にドリルダウン・ツールを有効にする方法を説明します。このツールによって, イベントから, またはモニタ・ディスカバリ・ポリシーによって検出され, HPOM サービス・ナビゲータに追加されたモニタまたはグループ・サービスから SiteScope ユーザ・インターフェイスを開けます。

注: このタスクは高度なタスクのうちの 1 つです。詳細については, 268 ページ「SiteScope を使用して HPOM または BSM にイベントを送信する方法」を参照してください。

このタスクには次の手順が含まれています。

- 280 ページ「前提条件」
- 281 ページ「HPOM for UNIX/Linux/Solaris サーバへの SiteScope にドリルダウン・ツールのインストール」
- 281 ページ「ツールの起動 (SiteScope サービスから)」
- 281 ページ「ツールの起動 (イベントから)」

1. 前提条件

モニタ・ディスカバリ・ポリシーを HPOM の SiteScope サーバ・ノードで有効化およびデプロイする必要があります。

タスクの詳細については、275 ページ「SiteScope モニタ・ディスカバリ・ポリシーを有効にする方法」を参照してください。

2. HPOM for UNIX/Linux/Solaris サーバへの SiteScope にドリルダウン・ツールのインストール

- a. HPOM for UNIX/Linux/Solaris サーバ・マシンに管理者としてログインします。

- b. コマンド・シェルを開いて、次を入力して新しいディレクトリを作成します。

```
# mkdir -p /opt/OV/newconfig/SiteScope
```

- c. 次を入力して SiteScope ディレクトリに変更します。

```
cd /opt/OV/newconfig/SiteScope
```

- d. DrillDownToSIS.tar ファイルを < SiteScope ルート> \tools\OMIntegration\DrillDownTool\ForOMX フォルダから HPOM サーバ・マシン上の /opt/OV/newconfig/SiteScope にコピーします。

- e. 次を入力して .tar ファイルを現在のディレクトリに抽出します。

```
# cd /opt/OV/newconfig/SiteScope
```

```
# tar -xvf DrillDownToSIS.tar
```

- f. 次を入力して、SiteScope にドリルダウン・ツールを HPOM サーバにアップロードします。

```
# cd /opt/OV/bin/OpC/
```

```
# opccfgupld -replace -subentity /opt/OV/newconfig/SiteScope/  
DrillDownToSIS
```

- g. SiteScope にドリルダウン・ツールは、HPOM 管理者ユーザ・インタフェースの[参照]>[すべてのツールグループ]の下で使用できます。

- h. [SiteScope にドリルダウン]ツールを opc_adm ユーザに割り当てます。

○ [アクション]>[ユーザ/プロファイルに割り当て...]をクリックします。

○ [すべてのユーザ]>[opc_adm]を選択して[OK]をクリックします。

- i. [ファイル]>[設定の再ロード]を選択して HPOM ユーザ・インタフェースを更新します。

- j. SiteScope にドリルダウン・ツールは、HPOM サーバの[ツール]>[SiteScope にドリルダウンツール]の下で使用できます。

3. ツールの起動(SiteScope サービスから)

- a. HPOM 管理者ユーザ・インタフェースで、SiteScope サービス(サーバ、グループ、またはモニタ)を右クリックして、[スタート]>[ツール]>[SiteScope にドリルダウン ツール]>[SiteScope にドリルダウン サービス]を選択し、選択されたサービス・タイプに応じてツールを選択します。

- b. SiteScope ユーザ・インタフェースが開いて、選択されたモニタ、グループ、または標準設定の SiteScope ダッシュボード ビューが表示されます。

4. ツールの起動(イベントから)

- a. HPOM 管理者ユーザ・インタフェースで、イベントを右クリックして、[スタート]>[SiteScope にドリルダウン ツール]>[SiteScope にドリルダウン イベント]を選択します。

- b. SiteScope ユーザ・インタフェースが開いて、選択した、イベントを送信するモニタが表示され

ます。

SiteScope を使用して HP Operations Agent に測定値をレポートする方法

注: BSM の 9.00 以降の において 操作管理 を備えた SiteScope を接続するユーザ、または、HP Performance Manager 9.0 に接続するユーザに対してのみ、あるいは、HP Operations エージェントの使用している場合にのみ該当します。

このタスクでは、SiteScope を使用して HPOM および BSM レポート製品に測定値データをレポートする方法について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- 283 ページ「前提条件」
- 283 ページ「SiteScope を使用して HP Operations Agent に測定値をレポートする方法」
- 283 ページ「SiteScope からの測定値送信の有効化」
- 284 ページ「モニタ・インスタンスからの測定値送信の有効化」
- 284 ページ「結果」

1. 前提条件

- SiteScope の管理者または「**統合プリファレンスの編集**」権限を付与されたユーザのみが、このタスクを実行する権限があります。詳細については、772 ページ「ユーザ管理プリファレンス」を参照してください。
- Performance Manager 管理者は、SiteScope インスタンスがデータをログ記録する SiteScope ノードに接続するように Performance Manager を設定する必要があります。詳細については、Performance Manager のマニュアルを参照してください。

2. HP Operations Agent の SiteScope サーバへのインストール

SiteScope のインストール中またはインストール後に、SiteScope インストール・メディアから HP Operations Agent をインストールできます。このエージェントによって、SiteScope は、SiteScope で収集された測定値データのデータ・ストレージとして機能します。

サポートされる HP Operations Agent のバージョン(および要件)については、リリース・ノートの HP SiteScope サポート早見表を参照してください。

HP Operations Agent のインストールの詳細については、『HP SiteScope デプロイメント・ガイド』の SiteScope のインストールに関するセクションを参照してください。

3. SiteScope からの測定値送信の有効化

[**プリファレンス**] > [**統合プリファレンス**] で、既存の Operations Manager 統合を選択するか、[**HP Operations Manager 統合**] をクリックして新しい統合を作成します。[HP Operations Manager 統合] ダイアログ・ボックスで、[**HP Operations Manager 測定値統合**] パネルを展開し、[**HP Operations Manager 測定値統合の有効化**] を選択します。

注: HP Operations Manager との測定値統合は、HP Operations Agent と HPOM サーバまたは BSM サーバとの接続状態に関係なく、有効化されます。これは、測定値がエージェン

トによって収集されるためです。

ユーザ・インタフェースの詳細については、[711 ページ「\[統合プリファレンス\] ページ」](#)を参照してください。

4. モニタ・インスタンスからの測定値送信の有効化

測定値データをエージェント・データ・ストレージにレポートする各 モニタ・インスタンスごとに、モニタ・プロパティの **[HP 統合設定]** を展開し、**[HP Operations Manager 統合設定]** セクションの **[HP Operations Agent へのメトリックのレポート]** を選択します。

ユーザ・インタフェースの詳細については、[711 ページ「\[統合プリファレンス\] ページ」](#)を参照してください。

ヒント: 各 モニタ・インスタンスのモニタ・プロパティで **[HP Operations Agent へのメトリックのレポート]** を選択することなく、すべてのメモリ、CPU、ディスク領域、Windows リソースについて測定値のレポートを有効にできます。これを実行するには、**[統合プリファレンス] > [HP Operations Manager 統合] > [HP Operations Manager 測定値統合]** パネルで **[特定モニタのメトリックス レポートの有効化]** ボタンをクリックします。

5. 結果

各 モニタの測定値は、SiteScope ホスト・ノードのエージェントによって、時間とホストのインスタンス識別を含めたインスタンスとしてログに記録されます。メトリックス・データは HPOM および BSM によってエージェントのデータ・ストレージから収集され、レポート製品で使用できます。

測定値エラー・データは **oa_metric_integration.log** ファイルに書き込まれます。このファイルは **< SiteScope のルート・ディレクトリ > \logs** ディレクトリにあります。ログ・ファイルの使用の詳細については、[1191 ページ「\[ログ ファイル\] ページ」](#)を参照してください。

SiteScope-Operations エージェントの測定値の整合

測定値名の整合は、SiteScope の測定値名を、Operations Manager の Performance Agent(PA)で 使用される名前と対応付けるプロセスです。パフォーマンス・マネージャは、測定値を(整合の有無にかかわらず)グラフに表示することができ、発生する可能性のあるすべてのメトリックの測定値整合がパフォーマンス・マネージャにデータを表示するために必須というわけではありません。

測定値名の整合は、次に示すよく使用される測定値で実行されています。

注: Performance Agent のメトリックスの詳細については、Performance Agent 5.0 ドキュメントの『HP Performance Agent Metric Help Viewer』

([http://support.openview.hp.com/selfsolve/document/KM864772/binary/PA5_MetricHelpView.html?searchIdentifier=-](http://support.openview.hp.com/selfsolve/document/KM864772/binary/PA5_MetricHelpView.html?searchIdentifier=-65c7a852:127e60d1b54:6921&resultType=document)

[65c7a852:127e60d1b54:6921&resultType=document](http://support.openview.hp.com/selfsolve/document/KM864772/binary/PA5_MetricHelpView.html?searchIdentifier=-65c7a852:127e60d1b54:6921&resultType=document))を参照してください。HP Software Self-solve Knowledge Baseを利用するには、HP パスポート ID を使ってログオンする必要があります。

PA 測定値名	
(表示名)	SiteScope 測定値名
BYCPU_CPU_TOTAL_UTIL (CPU 使用率合計)	Windows : <ul style="list-style-type: none"> CPU モニタ: \utilization(cpu #1, cpu #2 など) Microsoft Windows リソース・モニタ \Processor\{インスタンス}%\Processor Time Linux : UNIX リソース・モニタ \Processor\{インスタンス}\System HP-UX : N/A Solaris : N/A AIX : UNIX リソース・モニタ \Processor\{インスタンス}\sys
BYNETIF_IN_BYTE_RATE (受信 KB 速度)	Windows : Microsoft Windows リソース・モニタ \Network Interface\{インスタンス}\Bytes Received\sec Linux : N/A HP-UX : N/A Solaris : N/A AIX : N/A

PA 測定値名	
(表示名)	SiteScope 測定値名
BYNETIF_OUT_BYTE_RATE (送信 KB 速度)	Windows :Microsoft Windows リソース・モニタ \Network Interface\{インスタンス}\Bytes Sent\sec Linux :N/A HP-UX : N/A Solaris : N/A AIX :N/A
BYDSK_PHYS_READ_BYTE_RATE (物理的な読み取りKB速度)	Windows :Microsoft Windows リソース・モニタ \Physical Disk\{インスタンス}\% Disk Read Bytes\sec Linux :N/A HP-UX :N/A Solaris : N/A AIX :N/A
BYDSK_PHYS_WRITE_BYTE_RATE (物理的な書き込みKB速度)	Windows :Microsoft Windows リソース・モニタ \Physical Disk\{インスタンス}\% Disk Write Bytes\sec Linux :N/A HP-UX :N/A Solaris : N/A AIX :N/A
BYDSK_REQUEST_QUEUE (要求キュー)	Windows :Microsoft Windows リソース・モニタ \Physical Disk\{インスタンス}\AvgDisk Queue Length Linux :N/A HP-UX :N/A Solaris : N/A AIX :N/A

PA 測定値名 (表示名)	SiteScope 測定値名
BYDSK_UTIL (ディスク %)	Windows :Microsoft Windows リソース・モニタ \Physical Disk\{インスタンス}\% Disk Time Linux :N/A HP-UX :UNIX リソース・モニタ \Block device activity\<デバイス>\%busy Solaris :UNIX リソース・モニタ \Block device activity\<デバイス>\%busy AIX :UNIX リソース・モニタ \Block device activity\<デバイス>\%busy
FS_SPACE_UTIL (容量 %)	Windows :ディスク容量 モニタ: \percent full Linux :ディスク容量 モニタ: \percent full HP-UX :ディスク容量 モニタ: \percent full Solaris :ディスク容量 モニタ: \percent full AIX :ディスク容量 モニタ: \percent full
GBL_CPU_TOTAL_UTIL (CPU %)	Windows : <ul style="list-style-type: none"> • CPU モニタ: \utilization (avgas) • Microsoft Windows リソース・モニタ \Processor_Total\% Processor Time Linux :UNIX リソース・モニタ \Processor\Total\System HP-UX :N/A Solaris : N/A AIX :UNIX リソース・モニタ \Processor\Total\%sys
GBL_MEM_PAGEOUT_RATE (ページ書き出し速度)	Windows :Microsoft Windows リソース・モニタ \Memory\Pages Output/sec Linux :N/A HP-UX :N/A Solaris : UNIX リソース・モニタ \Page-out memory and memory freeing activities\ppgout/s AIX :N/A

PA 測定値名	
(表示名)	SiteScope 測定値名
GBL_MEM_UTIL (メモリ %)	Windows :メモリ・モニタ \percent used Linux :N/A HP-UX :N/A Solaris : N/A AIX :N/A
GBL_SWAP_SPACE_UTIL (スワップ %)	Windows : Microsoft Windows リソース・モニタ \Memory\% Committed Bytes In Use Linux :N/A HP-UX :N/A Solaris : N/A AIX :N/A

SiteScope-Operations Manager 測定値統合のサイズ設定の推奨事項

標準設定の SiteScope 設定によって数千のモニタを実行することが可能ですが、SiteScope-HPOM 測定値統合内に保存できるモニタ、メトリックス、およびモニタ・タイプの最大数を計画する際にサイズ設定が重要です。

サイズ設定は次を超えないようにしてください。

- 最大挿入率 / 分, 1000 メトリックス。
- 合計保存容量, 1 GB。
- 合計保存期間, 5 週間。

定義

以下の検証計算で使用される用語の定義は次の通りです。

- **モニタ**: HPOM Performance Manager にメトリックスをレポートするモニタ数。
- **測定値**: HPOM Performance Manager にレポートする上記のモニタのメトリックスの平均数。
- **頻度**: 上記のモニタがデータを統合に提供する平均頻度。

検証

特定の SiteScope モニタおよびメトリックスを選択して SiteScope-HPOM 測定値統合内に保管する時は、挿入率と保存率が推奨を超えていないことを検証する必要があります。検証には以下の数式を使用できます。

- **サポートされる挿入率の検証**:

$$(\text{モニタ} * \text{メトリックス}) / \text{頻度} \leq 1000 \text{ メトリックス / 分}$$

- **サポートされる保存期間の検証**:

$$(1000 \text{ MB}) / ((\text{モニタ} * \text{メトリックス} / \text{頻度}) * 0.07 \text{ MB}) = 1 \text{ 日の設定された保持期間}$$

(5 週間の最大保持期間より小さい必要があります)

0.07 MB は 1 日あたりの各メトリックス / 分の保管サイズです。

例:

HPOM 測定値統合を使用してデータをレポートするモニタ数が 2500 であり、すべてのモニタに 4 メトリックスあり、これらのモニタの頻度は 10 分ごとで、平均メトリックス保管サイズ / 日が 0.07 MB の場合、14 日間の履歴データを保管できます。

検証の計算:

- **挿入率の検証**:

$$(2500 \text{ モニタ} * 4 \text{ メトリックス}) / 10 \text{ 分} = 1000 \leq 1000 \text{ メトリックス / 分}$$

- **保存期間の検証:**

$1000 \text{ MB} / (((2500 * 4 \text{ メトリックス}) / 10 \text{ 分}) * 0.07 \text{ MB}) = 14.28 \text{ 日 } (<= 5 \text{ 週間})$

第11章

Network Node Manager i(NNMI)との連携

本章の内容

概念

- 292ページ「NNMi への SiteScope イベントの送信」
- 294ページ「NNMi へのメトリックのレポート」

タスク

- 295ページ「NNMi にイベント・データを送信するための SiteScope の設定方法」
- 297ページ「メトリック・データを NNMi にレポートするための SiteScope の設定方法」

参照情報

- 300ページ「NNMi に送信される SiteScope オブジェクトの SNMP トラップ形式」
- 303ページ「NNMi にレポートされるモニタ・メトリック」

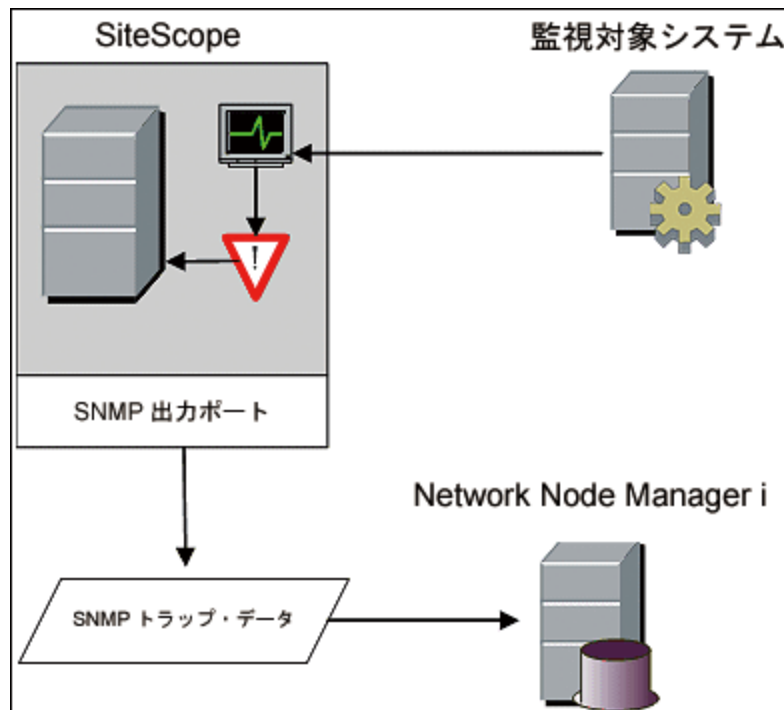
306ページ「トラブルシューティングおよび制限事項」

NNMi への SiteScope イベントの送信

SiteScope は、ネットワークの監視に使用されるイベント・コンソール、Network Node Manager i (NNMi) のデータ・コレクタとして使用できます。SiteScope は NNMi が監視しているシステムのアプリケーション側を監視し、SNMP トラップ警告を使ってイベント・データをすべての種類の SiteScope モニタから NNMi に転送します。SiteScope のイベントは、SiteScope のモニタ測定値の状態の変更とトリガされた警告に基づきます。

SiteScope が SNMP トラップを NNMi に送信し、NNMi インシデントに変換されます。変換されたインシデントから、NNMi コンソール・ユーザは (NNMi サーバに送信された SNMP トラップ形式の URL を使用して) そのモニタのコンテキストで SiteScope を起動できます。NNMi サーバにメッセージを送信する SiteScope オブジェクトの特定に使用される SNMP トラップ形式の一覧については、[300 ページ「NNMi に送信される SiteScope オブジェクトの SNMP トラップ形式」](#) を参照してください。

次に、SiteScope を NNMi のイベント・データ・コレクタとして使用した図を示します。



SiteScope を有効化し NNMi にイベント・データを送信するには、SiteScope が NNMi のデータ・コレクタとして設定されている必要があります。これには、SNMP トラップの報告先のサーバの SNMP プリファレンスを設定し、SNMP トラップ警告を作成して、NNMi に報告するモニタに割り当てる作業も含まれます。

イベントを送信するための SiteScope の設定の詳細については、[295 ページ「NNMi にイベント・データを送信するための SiteScope の設定方法」](#) を参照してください。

対応バージョン

- SiteScope バージョン 11.10 以降
- NNMi バージョン 9.10 以降

対応ハードウェア・プラットフォームおよびオペレーティング・システムの最新情報については、すべての製品のサポート・マトリックスを参照してください。

NNMi へのメトリックのレポート

SiteScope は NNMI にメトリック・データもレポートできます。SiteScope を有効化しメトリックをレポートするには、一般データの統合が SiteScope サーバ上で設定されている必要があります。SiteScope–NNMi メトリックの統合では、SiteScope モニタによって収集されたシステム・メトリック・データを使って、NNM iSPI Performance for Metrics の Network Performance Server(NPS)を設定します。

サポートされているバージョン

- SiteScope バージョン 11.10 以降
- NNMI バージョン 9.10 以降
- NNM iSPI Performance for Metrics バージョン 9.10 以降

対応ハードウェア・プラットフォームおよびオペレーティング・システムの最新情報については、すべての製品のサポート・マトリックスを参照してください。

サポートされている SiteScope モニタ

SiteScope がすべてのモニタ・タイプをレポートする一方で、NNMi では次の SiteScope モニタ・タイプからのデータのみを認識し、NPS で使用するように転送します。

- CPU 使用率モニタ
- ディスク容量モニタ
- メモリ・モニタ
- Microsoft Windows リソース・モニタ(プロセス監視オブジェクト)
- Unix リソース・モニタ(プロセス監視オブジェクト)

監視されているノードは NNMI で管理される必要があります。統合では、NNMi トポロジに存在しないノードまたは管理されていないノードのデータは破棄されます。

NNM と通信するために SiteScope を設定する方法の詳細については、[297 ページ「メトリック・データを NNMI にレポートするための SiteScope の設定方法」](#)を参照してください。

SiteScope と通信するための NNMI の設定方法の詳細については、NNMI 製品メディアに含まれる『NNMI デプロイメント リファレンス』を参照してください。

NNMi にイベント・データを送信するための SiteScope の設定方法

このタスクでは、NNMi にイベント・データを送信するために SiteScope を設定する方法について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- 295 ページ「NNMi サーバに SNMP トラップを報告するための SNMP プリファレンスの作成」
- 295 ページ「NNMi にイベントを送信するための SiteScope 警告の設定」
- 296 ページ「結果」

1. NNMi サーバに SNMP トラップを報告するための SNMP プリファレンスの作成

SiteScope で、[プリファレンス]>[SNMP プリファレンス]を選択し、次の設定を使用して、SNMP トラップの報告先のサーバのプリファレンスを作成します。

- **SNMP トラップ ID** : [企業固有 SNMP トラップ ID]を選択し、[1]と入力します。
- **SNMP オブジェクト ID** : [事前設定 SNMP オブジェクト ID]を選択し、リストから[HP SiteScope イベント]を選択します。

必要に応じて、その他の SNMP トラップのフィールドを設定します。

ユーザ・インタフェースの詳細については、711 ページ「[統合プリファレンス]ページ」を参照してください。

2. NNMi にイベントを送信するための SiteScope 警告の設定

各モニタ状態に対して、SiteScope 警告を作成し、SNMP トラップ警告アクションを設定します。

- a. SiteScope モニタ・ツリーで、[SiteScope] ルートを右クリックして、[新規作成]>[警告]と選択します。
- b. [警告ターゲット] パネルで、グループ、モニタ、またはその両方を選択し、この警告をトリガします。ユーザ・インタフェースの詳細については、711 ページ「[統合プリファレンス]ページ」を参照してください。
- c. [警告アクション] パネルで、[新規警告アクション]をクリックして[SNMP トラップ]アクション・タイプを選択します。ユーザ・インタフェースの詳細については、711 ページ「[統合プリファレンス]ページ」を参照してください。
- d. [警告アクション] で次の手順を実行します。[SNMP トラップ] ダイアログ・ボックスで、各モニタ状態に対して SNMP トラップ警告アクションを設定します。
 - [アクションタイプの設定] パネルで、[テンプレート] リストから[SiteScopeEvent.xml]を選択します。このテンプレートには、SNMP トラップがトリガされたときに SNMP によって NNMi に送信されるメッセージの形式と内容が含まれます。このテンプレートをコピーしてカスタマイズできます。このテンプレートは、< SiteScope のルート・ディレクトリ> \templates.snmp にあります。ユーザ・インタフェースの詳細については、711 ページ「[統合プリファレンス]ページ」を参照してください。
 - [状態トリガ] パネルで SNMP トラップの状態を選択します。ユーザ・インタフェースの詳細

については、711ページ「[統合プリファレンス]ページ」を参照してください。

- [状態トリガ]パネルで、各モニタ状態に対して手順 2c を繰り返します(エラー, 警告, 正常, 利用不可)。

例：

この例は、各トリガの状態(エラー, 警告, 正常, 利用不可)のSNMPトラップ警告アクションのNNMi警告を示しています。

一般設定

名前:

警告の説明:

警告ターゲット

警告アクション

警告アクション *

	名前	カテゴリ	いつ	スケジュール	ターゲット
	NNMi integrati...	エラー	1回のみ: 1回	毎日、全日	NNMi - vmamrnd1 ...
	NNMi integrati...	正常	1回のみ: 1回	毎日、全日	NNMi - vmamrnd1 ...
	NNMi integrati...	警告	1回のみ: 1回	毎日、全日	NNMi - vmamrnd1 ...
	NNMi integrati...	使用不能	1回のみ: 1回	毎日、全日	NNMi - vmamrnd1 ...

3. 結果

警告がSiteScopeでモニタの状態の変更の結果としてトリガされる場合、この警告はSNMPトラップをNNMiサーバにレポートします。NNMiがSNMPトラップを読み取り、属性を変換し、NNMiインシデント・コンソールにSiteScopeイベント・データを表示します。

NNMiインシデント・コンソールの詳細については、NNMi製品メディアに含まれる『NNMiデプロイメントリファレンス』を参照してください。

メトリック・データを NNMi にレポートするための SiteScope の設定方法

このタスクでは、メトリック・データが NNMi にレポートされるように SiteScope を設定する方法を説明します。


このタスクには次の手順が含まれています。

- 297 ページ「NNMi サーバでの統合の有効化」
- 297 ページ「SSL を使用して NNMi と通信するための SiteScope の設定」
- 297 ページ「NNMi サーバを特定するための検索/フィルタ・タグの作成」
- 297 ページ「SiteScope と NNMi サーバ間の接続の設定」
- 298 ページ「NNMi サーバの SiteScope レポートに関与するモニタの設定」
- 299 ページ「結果」


1. NNMi サーバでの統合の有効化

NNMi コンソールでの NNMi メトリック統合の設定方法の詳細については、NNMi 製品メディアに含まれる『NNMi デプロイメント リファレンス』の「HP NNMi—HP SiteScope システム メトリックス統合」を参照してください。

2. SSL を使用して NNMi と通信するための SiteScope の設定

- a. SiteScope で、[プリファレンス] > [証明書管理] と選択し、[証明書のインポート]  ボタンをクリックします。ユーザ・インタフェースの詳細については、604 ページ「[証明書のインポート] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
- b. [ソースの選択] で、NNMi 管理サーバを特定するための情報を SiteScope に入力します。
 - [ホスト] を選択し、NNMi 管理サーバの完全修飾ドメイン名を入力します。
 - 必要に応じて、NNMi 管理サーバの HTTPS ポートと一致するようにポート番号を変更します。
- c. [読み込み] をクリックします。[読み込み済み証明書] に NNMi 証明書情報が表示されます。証明書の別名をメモします。
- d. NNMi の証明書を選択してから、[インポート] をクリックします。インポートした証明書が[証明書管理]のキーストア・リストに一覧表示されます。

3. NNMi サーバを特定するための検索/フィルタ・タグの作成

- a. SiteScope で、[プリファレンス] > [タグの検索/フィルタ] と選択し、[新規タグ]  ボタンをクリックします。ユーザ・インタフェースの詳細については、111 ページ「[新規タグ]/[タグの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
- b. タグ名 (たとえば、NNMi_upload) と少なくとも 1 つの値を入力します。

4. SiteScope と NNMi サーバ間の接続の設定

- a. SiteScope で、[プリファレンス] > [統合プリファレンス] と選択し、[新規統合]  ボタンをク

リックした後、[データ統合]をクリックします。ユーザ・インタフェースの詳細については、[721 ページ](#)「[データ統合プリファレンス]ダイアログ・ボックス」を参照してください。

- b. [一般設定]で、名前(たとえば、NNMi_receiver)と詳細(オプション)を入力します。
- c. [データ統合プリファレンスの設定]には、次の設定が含まれます。
 - [受信者 URL]フィールドで、NNMi コンソールで統合を有効化した後に返される URL を貼り付けます(たとえば、例:

```
https://NNMi_server.example.com:443/sitescope-  
adapter/sitescopereceiver
```

- [GZIP 圧縮]チェック・ボックスを選択します。
 - [追加のデータを含める]と[リダイレクトでエラー]チェック・ボックスをクリアします(これらは標準設定です)。
 - [要求された場合の認証]チェック・ボックスを選択します(これは標準設定です)。
 - [統合を無効にする]チェック・ボックスをクリアします(これは標準設定です)。
 - その他の設定については、標準設定で問題ありません。
- d. [Web サーバのセキュリティ設定]で、NNMi ユーザのユーザ名とパスワードを入力します。これは、NNMi コンソール内の統合設定で指定されたものです。詳細については、NNMi 管理者に連絡してください。
 - e. [レポート タグ]で、[297 ページ](#)「NNMi サーバを特定するための検索/フィルタ・タグの作成」手順で作成した検索 / フィルタ・タグ(たとえば、NNMi_upload)を選択します。

5. NNMi サーバの SiteScope レポートに関与するモニタの設定

- a. 新しいモニタを作成するか(必要に応じて)サポートされたタイプの既存のモニタを指定します。
 - CPU 使用率モニタ
 - ディスク容量モニタ
 - メモリ・モニタ
 - Microsoft Windows リソース・モニタ(プロセス監視オブジェクト)
 - Unix リソース・モニタ(プロセス監視オブジェクト)

モニタ設定を構成します。モニタ設定の詳細については、『HP SiteScope Monitor Reference』で個々のモニタのヘルプを参照してください。

利用可能なカウンタのリストについては、[303 ページ](#)「NNMi にレポートされるモニタ・メトリック」を参照してください。

- b. 手順 [297 ページ](#)「NNMi サーバを特定するための検索/フィルタ・タグの作成」で作成した検索 / フィルタ・タグ(たとえば、NNMi_upload)を、データを NNMi に渡すべきモニタに追加します。

統合では、NNMi トポロジで管理されたノードのデータのみを処理できます。そのため、NNMi トポロジのノード上のモニタにのみタグを適用してください。

ヒント: NNMI にデータを渡すモニタを 1 つのモニタ・グループで編成することをお勧めします。

6. 結果

NNM iSPI Performance for Metrics の Network Performance Server (NPS) は、SiteScope モニタによって収集されたシステム・メトリック・データを使って設定されます。

詳細については、NNMI 製品メディアに含まれる『NNMI デプロイメント リファレンス』を参照してください。

NNMi に送信される SiteScope オブジェクトの SNMP トラップ形式

NNMi サーバにメッセージを送信する SiteScope オブジェクトの特定に使用される SNMP トラップ形式の一覧は次のとおりです。これにより、NNMi コンソール・ユーザがこのモニタのコンテキストで SiteScope を起動できます。

SNMP トラップ形式は、SiteScopeEvent.xml ファイルで保存されます。このファイルは <のルート・ディレクトリ> \templates.snmp フォルダにあります。

フィールド名	オブジェクト ID(OID)	詳細	値
エンタープライズ OID	.1.3.6.1.4.1.11.15.1	SiteScope ルートのオブジェクト ID	.1.3.6.1.4.1.11.15.1
トラップ OID	.1.3.6.1.4.1.11.15.1.0	SNMP トラップのオブジェクト ID	(OID) V1 の場合 : [1.3.6.1.4.1.11.15.1.4.0.1] V2 の場合 : [1.3.6.1.4.1.11.15.1.4.1]
SiteScope ホスト	.1.3.6.1.4.1.11.15.1.1.2	SiteScope サーバの IP アドレスまたはホスト名	(IpAddress) [16.55.244.182] または (OctetString) [sissserver.mydomain]
プロバイダ (コレクタ)	.1.3.6.1.4.1.11.15.1.1.3	SiteScope アプリケーション名	(OctetString) SiteScope
モニタ名	.1.3.6.1.4.1.11.15.1.2.1-.1	SiteScope モニタ名	(OctetString) [Memory monitor on myhost.mydomain]
モニタ・タイプ	.1.3.6.1.4.1.11.15.1.2.1-.2	SiteScope モニタ・タイプ	(OctetString) [Memory Monitor]
モニタ ID	.1.3.6.1.4.1.11.15.1.2.1-.3	モニタ固有 ID	(OctetString) [067e6162-3b6f-4ae2-a171-2470b63dff00]

フィールド名	オブジェクト ID(OID)	詳細	値
セキュアなモニタ・ドリル・ダウン URL	.1.3.6.1.4.1.11.15.1.2.1-.4	サイレント・ログイン情報なしで、警告されたモニタのコンテキストで SiteScope を起動する URL。これにより、統合インスタンス・レベルごとに統合できます。 ユーザ資格情報のドリル・ダウン URL を取得するには、 monitorDrilldownUrl Secured から monitorDrilldownUrl に参照値を変更します。	(OctetString) [http://sisserver:8080/SiteScope/servlet/Main?activeid=__SiteScopeRoot__&activerighttop=dashboard&view=new&dashboard_view=Details&dashboard_model=true&dashb
モニタ・ターゲット・ホスト	.1.3.6.1.4.1.11.15.1.2.1-.5	モニタ・ターゲット・ホスト	(IpAddress) [16.55.244.182] または (OctetString) [myhost.mydomain]
モニタ・ターゲット IP	.1.3.6.1.4.1.11.15.1.2.1-.6	モニタ・ターゲット IP アドレス	(IpAddress) [16.55.244.182]
モニタ完全名	.1.3.6.1.4.1.11.15.1.2.1-.7	ルートのフル・パスを含む SiteScope モニタ名。	(OctetString) [Memory monitor on myhost.mydomain]
タイトル	.1.3.6.1.4.1.11.15.1.3.1-.1	SiteScope イベント・タイトル	(OctetString) [Alert 'Memory Alert' was triggered on monitor 'Memory monitor on myhost.mydomain' due to a status change]
イベント・ソース	.1.3.6.1.4.1.11.15.1.3.1-.2	イベント(警告またはメトリック)のソース	(OctetString)
重大度	.1.3.6.1.4.1.11.15.1.3.1-.3	SiteScope のイベントの重大度	(整数)[0,1,2,3] つまり[利用不可, 正常, 警告, エラー]
イベント時刻	.1.3.6.1.4.1.11.15.1.3.1-.4	元のイベント時刻(ミリ秒)	(TimeTicks) 1287316779
値	.1.3.6.1.4.1.11.15.1.3.1-.5	(非警告フロー)	(OctetString) [running] または [25] または [n/a] - 警告用
イベントの詳細	.1.3.6.1.4.1.11.15.1.3.1-.6	発生したイベントの詳細	(OctetString)

フィールド名	オブジェクト ID(OID)	詳細	値
イベント・キー	.1.3.6.1.4.1.11.15.1.3.1-.7	イベントのキー	(OctetString) [sisserver:067e6162-3b6f-4ae2-a171-2470b63dff00:Memory]
イベント終了 キー・パ ターン	.1.3.6.1.4.1.11.15.1.3.1-.8	削除するイベントを 特定するためのキー	[sisserver:067e6162-3b6f-4ae2-a171-2470b63dff00]

NNMi にレポートされるモニタ・メトリック

SiteScope サーバにレポートされる NNMi モニタ・メトリックの一覧は次のとおりです。

モニタ	利用可能なメトリック
CPU 使用率	<p>CPU 使用率</p> <p>注 : SiteScope では、HP-UX および AIX オペレーティング・システムで収集された CPU 使用率データを、特定の CPU ごとではなく、システムの個別の平均値として配信します。これは、統合では、NNMi に平均値を送信しないので、CPU 使用率データは HP-UX および AIX オペレーティング・システムで利用できないためです。</p>
ディスク領域	<ul style="list-style-type: none"> • ディスクの空き領域 (MB) • 使用中のディスク (%)
メモリ	<ul style="list-style-type: none"> • メモリ・ページ/秒 • 仮想メモリ使用 (%) • 仮想メモリ空き領域 (MB) • スワップ・メモリ使用 (%) • スワップ・メモリ空き領域 (MB) • 物理メモリ使用 (%) • 物理メモリ空き領域 (MB) <p>注 : SiteScope では、すべてのオペレーティング・システムについて、これらのメトリックがすべて収集されるわけではありません。</p>

モニタ	利用可能なメトリック
Microsoft Windows リソース	<ul style="list-style-type: none"> • Windows プロセス – 特権モード時間(%) • Windows プロセス – プロセッサ時間(%) • Windows プロセス – ユーザ時間(%) • Windows プロセス – 作成プロセス ID • Windows プロセス – 経過時間 • Windows プロセス – ハンドル数 • Windows プロセス – ID プロセス • Windows プロセス – IO データ(バイト/秒) • Windows プロセス – IO データ操作/秒 • Windows プロセス – IO その他のデータ(バイト/秒) • Windows プロセス – IO 読み取り(バイト/秒) • Windows プロセス – IO 読み取り操作回数/秒 • Windows プロセス – IO 書き込み(バイト/秒) • Windows プロセス – IO 書き込み操作回数/秒 • Windows プロセス – ページ・フォルト • Windows プロセス – ページ・ファイル(バイト) • Windows プロセス – ページ・ファイルのピーク(バイト) • Windows プロセス – プール非ページ(バイト) • Windows プロセス – プール・ページ(バイト) • Windows プロセス – 優先度ベース • Windows プロセス – プライベート・バイト • Windows プロセス – スレッド数 • Windows プロセス – 仮想バイト • Windows プロセス – 仮想バイトのピーク • Windows プロセス – ワーキング・セット • Windows プロセス – プライベート・ワーキング・セット • Windows プロセス – プライベート・ワーキング・ピーク

モニタ	利用可能なメトリック
UNIX リソース	<ul style="list-style-type: none">• Unix プロセス – CPU(%)• Unix プロセス – メモリ・サイズ• Unix プロセス – 実行数• Unix プロセス – PID <p>注 : HPUX オペレーティング・システム上の UNIX リソース・モニタでは, SiteScope は CPU(%), 実行数, プロセス ID のみを収集します。HPUX ノードでは, メモリ・サイズとユーザ・データは表示されません。</p>

トラブルシューティングおよび制限事項

本項では、SiteScope を NNMI と統合 する際のトラブルシューティングおよび制限事項を説明します。

SiteScope-NNMI イベント統合:

NNMI インシデント・ビューに SiteScope モニタ警告 インシデントが含まれていない場合、NNMI に SNMP トラップが送信されるように、少なくとも 1 つのモニタ警告が設定されていることを SiteScope で確認します。詳細については、295 ページ「NNMI にイベントを送信するための SiteScope 警告の設定」を参照してください。

NNMI 側からの統合のトラブルシューティングについては、『NNMI デプロイメント リファレンス』の「NNMI—SiteScope イベント統合のトラブルシューティング」のセクションを参照してください。

SiteScope - NNMI メトリック統合 データ・フロー

データ統合の問題に関連するメッセージを SiteScope エラー・ログ・ファイル(`data_integration.log`)で確認します。詳細については、1148 ページ「ログ・ファイルの使用」を参照してください。

NNMI 側からの統合のトラブルシューティングについては、『NNMI デプロイメント リファレンス』の「NNMI—SiteScope システム・メトリックのトラブルシューティング」のセクションを参照してください。

第12章

負荷テストのための SiteScope

本章の内容

概念

- [308ページ「SiteScope for Load Testing の使用」](#)

SiteScope for Load Testing の使用

SiteScope によって収集されたパフォーマンス測定値は、HP LoadRunner、HP Performance Center などの負荷テスト解析製品やソリューションで利用できます。負荷テスト・シナリオを実行するときは、場合によってはアプリケーションを実行するシステムから利用できるソフトウェアおよびハードウェアのさまざまなパフォーマンス測定値と、テスト中のアプリケーションの動作を、相互に関連付ける必要があります。

LoadRunner または Performance Center を使用する場合は、製品で利用可能なネイティブ・ソリューションを介するか、SiteScope を介して、パフォーマンス・データ収集オプションを選択できます。SiteScope では、さまざまな場合について、多くの監視オプションが用意されており、システムおよびアプリケーションのパフォーマンスのカバレッジが拡大されます。

SiteScope for Load Testing は、負荷テスト・シナリオ用に最適化されており、LoadRunner と Performance Center のユーザを対象としている、SiteScope のインストール・オプションです。このインストール・タイプでは、製品環境の監視は意図されていません。したがって、通常の SiteScope インストールで利用可能な一部のオプションは、SiteScope for Load Testing では使用できません。

通常の SiteScope と SiteScope for Load Testing には、主として次の違いがあります。

説明	SiteScope for Load Testing	SiteScope
SiteScope モニタの最小実行頻度	1 秒	15 秒
標準設定の実行頻度(新規モニタ作成時に利用可能)	5 秒	10 分
SiteScope レポート	利用不可	利用可能
BSM との統合	サポートされていません	サポート

注: SiteScope と LoadRunner または Performance Center の統合は、SiteScope ではなく、それぞれの負荷テスト製品で設定する必要があります。詳細については、『HP LoadRunner Controller ユーザーズ・ガイド』の「監視環境の設定方法 - ワークフロー」、「モニタ・ユーザ・インタフェースの設定」、「SiteScope リソース監視」、および『HP Performance Center Administrator Guide』の「Adding Hosts」を参照してください。

対応バージョン

サポートされている LoadRunner および Performance Center のバージョンのリストについては、SiteScope リリース・ノート(SiteScope で[ヘルプ] > [What's New?]を選択)で、「HP SiteScope for Load Testing サポート・マトリックス」を参照してください。

第3部分

モニタ

第13章

SiteScope グループを使った作業

本章の内容

概念

- 311ページ「SiteScope グループの概要」

タスク

- 313ページ「グループの管理方法」

参照情報

- 315ページ「[新規 SiteScope グループ]ダイアログ・ボックス」

SiteScope グループの概要

グループは複数のモニタの集まりです。グループには URL モニタなどのいずれかのタイプのモニタや、特定のトランザクションに関連する Web サーバ、URL、ネットワーク・パラメータなどの Web 環境の特定の部分を追跡する複数の異なるモニタが含まれる場合があります。グループ・コンテナは、モニタのデプロイメントおよび関連する警告を自分の環境や組織で管理可能かつ効果的にするために作成します。また、同じような警告を生成する必要があるモニタのグループを作成すると便利です。

作成する各 SiteScope モニタのインスタンスは、最上位レベルのグループまたはほかのグループ・コンテナ内にネストされたサブグループのいずれかである SiteScope グループに属する必要があります。

たとえば、システムで実行されている多数のプロセスを監視する場合、それらのプロセスのすべてを「プロセス」という名前の 1 つのグループに含めることができます。リモート・モニタを使用して複数のマシンのプロセスを監視する場合は、監視する各リモート・マシンの名前を付けた複数のサブグループで「プロセス」と呼ばれるプライマリ・グループを作成できます。

新規モニタを追加するときには、既存のグループに追加するか、モニタのグループを先に作成しておく必要があります。グループは個別に SiteScope に追加できます。またはテンプレートを使用して、複数のモニタと一緒にグループをデプロイできます。テンプレートの詳細については、[826 ページ「SiteScope テンプレートの概要」](#)を参照してください。

複数のグループ・オブジェクトに対して一括操作を実行するには、モニタとグループの管理機能を使用します。この機能では、複数の SiteScope オブジェクトに対してグループ内のモニタの移動、コピー、削除、実行、モニタの有効化/無効化、関連付けられた警告アクションの有効化/無効化を実行できます。詳細については、[76 ページ「\[モニタとグループの管理\] ダイアログ・ボックス」](#)を参照してください。

注: グループを使った作業では、SiteScope API を使用することもできます。詳細については、[43 ページ「SiteScope 設定 API の使用」](#)を参照してください。

本項の内容

- [311 ページ「既存のグループのコピーまたは移動」](#)
- [312 ページ「グループの警告とレポートの作成」](#)

既存のグループのコピーまたは移動

グループの作成に加え、既存のグループを SiteScope ツリー内の新しい場所へコピーまたは移動できます。グループをコピーまたは移動すると、グループの設定とグループ内のすべてのモニタが複製されます。通常、グループをコピーまたは移動した後に、グループおよびグループ内の各モニタの設定プロパティを編集し、モニタに一意のシステムまたはアプリケーションを指定する必要があります。指定しない場合、グループ内のモニタでは元のグループの監視アクションが複製されます。

ヒント: 冗長な監視につながるグループのコピーを実行する代わりに、テンプレートを使用して共通するグループおよびモニタ設定パターンをより効率的に複製します。テンプレートを使った作業の詳細については、[825 ページ「SiteScope テンプレート」](#)を参照してください。

注:

- SiteScope 内のグループ識別の問題を回避するには、オブジェクト名を親グループ内で一意にする必要があります。グループをまったく同じ名前のグループが含まれている別のグループにコピーまたは移動すると、SiteScope によって、コピーまたは移動したグループの名前の最後に自動的にサフィックス(数字)が追加されます。
- モニタ・グループをそのサブグループに移動またはコピーすることはできません。

グループの警告とレポートの作成

グループを作成したら、そのグループに警告とレポートを作成できます。標準設定で、グループの警告とレポートはグループ内のすべてのモニタに関連付けられます。

警告は、グループ・コンテナに警告定義を追加して作成します。つまり、グループのいずれかのモニタで、警告に定義された状態カテゴリ(エラー、警告など)がレポートされると、グループ警告が起動されます。**[警告ターゲット]** 選択ツリーを使用して、グループ内の 1 つ以上のモニタを除外するようにグループ警告を設定できます。このトピックの詳細については、[1204 ページ「SiteScope 警告の概要」](#)を参照してください。

グループ・レポートは、グループ・コンテナにレポート定義を追加して作成します。**[レポート対象のモニタおよびグループ]** 選択ツリーを使用して、グループ内の 1 つ以上のモニタを除外するようにグループ・レポートを設定できます。このトピックの詳細については、[1274 ページ「SiteScope レポートの概要」](#)を参照してください。

グループを削除すると、SiteScope によって適用されるモニタ・アクションが削除され、グループに関連付けられている警告アクションが無効化されます。

グループの管理方法


このタスクでは、グループの管理に関連する手順について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- 313ページ「SiteScope グループとサブグループの作成」
- 313ページ「グループの詳細に URL リンクを追加 - オプション」
- 314ページ「モニタ・インスタンスの作成」
- 314ページ「グループの依存関係の設定 - オプション」
- 314ページ「グループ警告の設定 - オプション」
- 314ページ「グループ・レポートの設定 - オプション」
- 314ページ「結果」

1. SiteScope グループとサブグループの作成

実装するモニタ階層に従ってグループを作成します。たとえば、場所、サーバ・タイプ、ネットワーク・リソースなどのグループを作成できます。

- **新しいグループを作成する。**グループを作成する SiteScope またはグループ・コンテナを右クリックして、[新規作成]>[グループ]を選択します。ユーザ・インターフェースの詳細については、315ページ「[新規 SiteScope グループ]ダイアログ・ボックス」を参照してください。
- **既存のグループをコピーまたは移動してグループを作成する。**
 - コピーするグループを右クリックし、[コピー]をクリックします。グループ・コンテナのコピー先のモニタ・ツリー内で右クリックして、[貼り付け]をクリックします。
 - 移動するグループを右クリックし、[切り取り]をクリックします。グループ・コンテナの移動先のモニタ・ツリー内で右クリックして、[貼り付け]をクリックします。
 - 複数のモニタとグループをターゲット・グループに移動またはコピーするには、モニタ・ツリー・ツールバーの[モニタとグループの管理]  ボタンをクリックします。コピーまたは移動するオブジェクトを選択して[コピー]/[切り取り]をクリックします。宛先グループを選択して[貼り付け]をクリックします。ユーザ・インターフェースの詳細については、76ページ「[モニタとグループの管理]ダイアログ・ボックス」を参照してください。

2. グループの詳細に URL リンクを追加 - オプション

グループの詳細情報を追加し、ハイパーリンクの HTML タグを含めると、SiteScope ダッシュボードから URL にアクセスできるようになります。

- a. ハイパーリンクを追加するには、選択したグループの[プロパティ]タブを開きます。
- b. [一般設定]パネルを展開し、[グループの詳細]フィールドに URL を入力します。例:My Link。
- c. [ダッシュボード]タブをクリックします。選択したグループの[詳細]フィールドに URL が表示されます。URL を開くには、グループの[詳細]フィールドをクリックしてからリンクをクリックします。

ヒント: ダッシュボードでセルのすべての内容が表示されるように行の高さを自動的に調

整するには、[ダッシュボードの設定]で[折り返しテキスト]オプションを選択します。詳細については、1097ページ「[ダッシュボードの設定]ダイアログ・ボックス」を参照してください。

3. モニタ・インスタンスの作成

グループに追加するモニタ・インスタンスを選択します。

タスクの詳細については、341ページ「モニタのデプロイ方法」を参照してください。

4. グループの依存関係の設定 - オプション

グループの依存関係を設定し、このグループ内のモニタの実行を、別のモニタの状態に依存させることができます。

概念の詳細については、329ページ「グループの依存関係の監視」を参照してください。

例：

[依存対象]ボックスで選択したモニタで、[依存条件]ボックスで選択した条件がレポートされるかぎり、設定するグループ内のモニタは通常どおりに実行されます。この例では、設定するグループは、「Service」モニタで「正常」という状態がレポートされる場合にのみ有効になります。

The screenshot shows a dialog box titled '依存関係' (Dependency). It contains two fields: '依存:' (Dependency) and '依存条件:' (Dependency Condition). The '依存:' field has a text input with the value 'Service: HTTP on SiteScope Server' and a small icon to its right. The '依存条件:' field has a dropdown menu with the value '正常' (Normal) and a small icon to its right.

5. グループ警告の設定 - オプション

イベントが発生したか、インフラストラクチャの要素やシステムのステータスが変化したときに通知を送信する警告を作成します。

グループの警告を作成するには、グループを右クリックして、[新規作成]>[警告]を選択します。各警告スキームに1つ以上の警告アクションを作成できます。[新規警告]ダイアログ・ボックスで[新規警告アクション]をクリックすると、[警告アクション]ウィザードが起動します。

タスクの詳細については、1226ページ「警告の設定方法」を参照してください。

6. グループ・レポートの設定 - オプション

時間の経過に伴う監視対象のサーバおよびアプリケーションのパフォーマンスに関する情報を表示するレポートを作成します。

グループのレポートを作成するには、グループを右クリックして、[レポート]をクリックします。レポート・タイプを選択し、レポート設定を指定します。

タスクの詳細については、1278ページ「レポートの作成方法」を参照してください。

7. 結果

モニタ、警告、レポートを含むモニタ・グループが、モニタ・ツリーに追加されます。

[新規 SiteScope グループ] ダイアログ・ボックス

[新規 SiteScope グループ] ダイアログ・ボックスでは、SiteScope の新規グループ、または既存のモニタ・グループのサブグループを定義できます。

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで、SiteScope コンテナまたは既存のモニタ・グループを右クリックして、[新規作成] > [グループ] を選択します。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> Only a SiteScope administrator user, or a user granted the appropriate permissions can edit, refresh, or disable groups. ユーザ権限の詳細については、792 ページ「権限」 を参照してください。 コンテナ・レベルで依存する警告またはレポートがある場合、モニタは削除できません。依存関係があるモニタ・グループを削除するには、各依存関係の[警告ターゲット]と[レポートのターゲット]からモニタ・グループを削除してから、モニタ・グループを削除する必要があります。子レベルの依存関係があるグループ・モニタは削除できます。 グループを使った作業では、SiteScope API を使用することもできます。詳細については、43 ページ「SiteScope 設定 API の使用」 を参照してください。
関連タスク	313 ページ「グループの管理方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> 311 ページ「SiteScope グループの概要」 78 ページ「モニタ・ツリー」


[新規 SiteScope グループ] ダイアログ・ボックスに含まれている要素は次のとおりです。

一般設定

UI 要素	説明
グループ名	<p>グループの内容、またはグループに追加されたモニタの目的を説明する名前。<host_name>, <business_unitresource_name>, <resource_type> など。</p> <p>注：</p> <ul style="list-style-type: none"> グループ名には、sitescope を使用することも、'; & < > / \ + = のいずれかを含めることもできません。 グループ名では大文字と小文字が区別されます。つまり、それぞれの名前の大文字と小文字の構成が異なる場合は、同じ名前のグループを複数使用できます。

UI 要素	説明
グループの詳細	<p>グループの詳細。テキスト・スタイルの一般的な HTML タグ(
, <HR>, など)とハイパーリンクを含めることができます。詳細は、SiteScope ダッシュボードでグループのプロパティを表示または編集するときのみ表示されます。ハイパーリンクの追加の詳細については、313 ページ「グループの詳細に URL リンクを追加 - オプション」を参照してください。</p> <p>注：このフィールドでは、JavaScript、iframes、frames やその他の高度な機能はサポートされていません。このボックスに入力した HTML コードは、有効性とセキュリティがチェックされ、コード(複数行にわたるために切り捨てられたコードなど)を修正する修正アクションが実行されます。悪意のある HTML コードや JavaScript が検出されると、フィールド全体が拒否されます。禁止されている HTML 内容は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> • タグ: script, object, param, frame, iframe。 • on で始まる属性を含むタグは拒否される。例: onhover。 • 値に javascript が指定された属性。
ソース・テンプレート	<p>グループがテンプレートから作成された場合、ソース・テンプレートのパスを表示する。古いバージョンの SiteScope で作成されたテンプレートをデプロイして使用している場合、ソース・テンプレートのパスを入力して、ルート・グループをソース・テンプレートに手動で関連付けることができます。</p>
クリア	<p>ルート・グループに関連付けられているソース・テンプレートを削除する。</p>

依存関係

UI 要素	説明
依存対象	<p>このモニタ・グループの実行の依存の対象とするモニタ。</p> <p>[依存対象]  ボタンをクリックして[依存の対象モニタの選択]ダイアログ・ボックスを開き、依存関係を作成するモニタを選択します。ユーザ・インタフェースの詳細については、396 ページ「[依存対象モニタの選択]ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p> <p>概念の詳細については、329 ページ「グループの依存関係の監視」を参照してください。</p> <p>標準設定：モニタ・グループに依存関係は設定されません。</p>
依存条件	<p>現在のモニタ・グループが通常どおりに実行されるために、依存の対象モニタが満たす必要のある依存条件。選択した条件が満たされない場合、[依存対象]ボックスで選択したモニタは自動的に無効になります。条件は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 正常 • エラー • 利用可能

タグの検索/フィルタ

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します(ラベルのない要素は山括弧内に表示されます)。

UI 要素	説明
<タグ名と値>	<p>SiteScope オブジェクト(グループ、モニタ、リモート・サーバ、テンプレート、プリファレンス・プロファイル)を検索およびフィルタするために、キーワード・タグが使用される。SiteScope にタグが作成されていない場合、このセクションは空白で表示されます。タグが作成されている場合はここに表示され、必要に応じてタグを選択できます。</p> <p>概念の詳細については、106ページ「SiteScope オブジェクトの検索」を参照してください。</p>
タグの追加	<p>[新規タグ]ダイアログ・ボックスを開き、新しいキーワード・タグを追加できる。ユーザ・インタフェースの詳細については、111ページ「[新規タグ]/[タグの編集]ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p>

第14章

SiteScope モニタを使った作業

本章の内容

概念

- 319ページ「SiteScope モニタの概要」
- 320ページ「SiteScope モニタのカテゴリ」
- 322ページ「カスタム・モニタの使用」
- 328ページ「リモート・サーバの監視」
- 329ページ「グループの依存関係の監視」
- 332ページ「状態のしきい値の設定」
- 335ページ「ベースラインを使った状態しきい値の設定」

タスク

- 341ページ「モニタのデプロイ方法」
- 344ページ「ベースラインを使用したモニタしきい値の設定方法」

参照情報

- 350ページ「モニタ・カテゴリ・リスト」
- 355ページ「Windows 環境にインストールされた SiteScopes のみでサポートされているモニタ」
- 356ページ「Windows Management Instrumentation(WMI)をサポートしているモニタ」
- 359ページ「SiteScope の監視に使用されるポート」
- 364ページ「廃止された SiteScope モニタのリスト」
- 365ページ「SiteScope モニタのユーザ・インタフェース」

SiteScope モニタの概要

SiteScope モニタは、エンタープライズ・ビジネス・システムで使用する多種多様なシステムおよびアプリケーションへの接続や照会を自動的に行うツールです。さまざまなモニタ・タイプがあり、システムごとに固有のアクションを実行する汎用的な機能が装備されています。1 つのモニタ・タイプのインスタンスを 1 つ以上作成し、SiteScope に IT インフラストラクチャの特定の要素をどのように監視するかを指示できます。

たとえば、100 個のモニタ・インスタンスを作成し、SiteScope CPU モニタ・タイプをリモート・サーバに接続して CPU 使用率を測定するように指示できます。各モニタ・インスタンスには、監視対象のリモート・サーバと監視頻度を定義する異なる設定が含まれます。続いて、100 台のサーバの CPU 使用率を一定間隔で自動的に監視するように SiteScope を設定します。

作成したモニタ・インスタンスは、SiteScope モニタ・グループ・コンテナ内に追加する必要があります。グループ・コンテナを使用して、作成したモニタ・インスタンスを整理できます。

ヒント:

- 特定の SiteScope モニタのモニタ設定の詳細については、『Monitor Reference』ガイドのモニタ・タイプに関する説明を参照してください。
- SiteScope モニタに設定可能な counter またはメトリックのリストと、サポート対象のアプリケーションおよびオペレーティング・システムのバージョンについては、< SiteScope > \sisdocs\pdfs\SiteScope_Monitors_Metrics.pdf の『HP SiteScope Monitors and Metrics』ドキュメントを参照してください。
- モニタの操作時に SiteScope API を使用することもできます。詳細については、[43 ページ「SiteScope 設定 API の使用」](#)を参照してください。

SiteScope モニタのカテゴリ

SiteScope モニタのカテゴリは、そのカテゴリの可用性と、その機能を反映したカテゴリを示すクラスに従ってグループ化されます。SiteScope エージェントに新規モニタを追加するように選択すると、製品のインタフェースにそのエージェントについて利用可能なモニタ・タイプのリストがアルファベット順に、カテゴリで分類されて表示されます。モニタのカテゴリの可用性は、モニタのクラスによって決まります。本項では、モニタのクラスとカテゴリのリスト形式について説明します。

本項の内容

- [320ページ「標準モニタ」](#)
- [320ページ「カスタマイズ可能モニタ」](#)
- [321ページ「統合モニタ」](#)
- [321ページ「ソリューション・テンプレート・モニタ」](#)

各モニタのカテゴリに含まれるモニタのリストを確認するには、[350ページ「モニタ・カテゴリ・リスト」](#)を参照してください。

標準モニタ

標準モニタ・カテゴリは、SiteScope の一般ライセンスで利用可能なモニタのカテゴリです。これらのモニタのカテゴリには、汎用的なモニタのカテゴリが数多く含まれています。

- **アプリケーション・モニタ**: このカテゴリのモニタは、サードパーティ・アプリケーションを監視します。SiteScope では、これらのモニタを使用して監視対象アプリケーションにアクセスし、データを取得できます。
- **データベース・モニタ**: このカテゴリのモニタは、さまざまなタイプのデータベース・アプリケーションを監視します。特定のデータベース・アプリケーションのデータにアクセスするモニタと、どのデータベース・アプリケーションの監視でも設定可能な汎用モニタがあります。
- **汎用モニタ**: このカテゴリのモニタは、異なるタイプの環境を監視します。これらのモニタは、設定に応じてネットワーク、アプリケーション、データベースを監視できます。
- **メディア・モニタ**: このカテゴリのモニタは、メディア・ファイルとストリーム・データを再生するアプリケーションを監視します。
- **ネットワーク・モニタ**: このカテゴリのモニタは、ネットワークの状況と可用性を監視します。
- **サーバ・モニタ**: このカテゴリのモニタは、サーバの状況と可用性を監視します。
- **仮想化とクラウド・モニタ**: このカテゴリのモニタは仮想化された環境とクラウド・インフラストラクチャを監視します。
- **Web トランザクション・モニタ**: このカテゴリのモニタは、Web ベースのアプリケーションを監視します。

各モニタ・タイプの使用と設定の詳細については、『Monitor Reference』ガイドのモニタ・タイプに関する説明を参照してください。

カスタマイズ可能モニタ

カスタム・モニタは、インフラストラクチャ・システムおよびアプリケーションの可用性とパフォーマンスの追跡するための標準の SiteScope モニタの機能を拡大します。カスタム・モニタを使用すると、所定の SiteScope モニタでサポートされない環境の独自のソリューションを展開できます。

データを収集する独自のモニタを作成して、収集したデータを処理してメトリックを作成するスクリプトを定義できます。カスタム・モニタが実行されるたびに、メトリックを更新してスクリプトで定義されたメトリックのステータスを返します。

カスタム・モニタを HP Live Network にパブリッシュして、ほかの SiteScope ユーザーと共有できます。カスタム・モニタの使用に関する詳細は、[322ページ「カスタム・モニタの使用」](#)を参照してください。

統合モニタ

HP 製品をほかの一般的に使用されているエンタープライズ・マネジメント・システムやアプリケーションと統合するには、このモニタ・タイプ・グループ(省略可能)を使用します。

これらのモニタ・タイプには、追加のライセンスが必要です。また、ほかの HP 製品の一部としてのみ使用できます。統合モニタ機能の詳細については、[418ページ「SiteScope 統合モニタを使った作業」](#)を参照してください。

各モニタ・タイプの使用と設定の詳細については、『Monitor Reference』ガイドのモニタ・タイプに関する説明を参照してください。

ソリューション・テンプレート・モニタ

ソリューション・テンプレート・モニタは、特定のアプリケーションや環境向けに新しい監視機能を有効にする特殊なクラスのモニタです。これらのモニタ・タイプは、ソリューション・テンプレートの一部としてほかの標準モニタ・タイプと一緒に自動的にデプロイされ、設定のベスト・プラクティスを取り込んだ監視ソリューションを提供します。これらのモニタ・タイプは、任意指定のライセンスによって管理されます。また、追加するには該当するソリューション・テンプレートをデプロイする必要があります。デプロイ後、ほかのモニタ・タイプと同じ手順を使用して編集または削除できます。詳細については、[927ページ「SiteScope ソリューション・テンプレート」](#)を参照してください。

次のようなモニタ・タイプでソリューション・テンプレートが使用されます。

- Active Directory(グローバル・カタログあり/なし)
- HP サービス・マネージャ
- Microsoft Exchange
- Microsoft IIS サーバ
- Microsoft Lync サーバ
- Microsoft SQL Server
- Microsoft Windows リソース
- Oracle データベース
- SAP アプリケーション・サーバ
- Siebel アプリケーション/ゲートウェイ/Web サーバ(UNIX および Windows 用)
- UNIX リソース
- VMware Host CPU/Memory/Network/State/Storage
- WebLogic アプリケーション・サーバ
- WebSphere アプリケーション・サーバ

カスタム・モニタの使用

カスタム・モニタは、インフラストラクチャ・システムおよびアプリケーションの可用性とパフォーマンスの追跡するための標準の SiteScope モニタの機能を拡大します。カスタム・モニタを使用すると、所定の SiteScope モニタでサポートされない環境の独自のソリューションを展開できます。

カスタム・モニタは次の操作を可能にします。

- **既存のモニタで利用できない追加メトリックを提供するモニタの作成**

データを収集する独自のモニタを作成して、収集したデータを処理してメトリックを作成するスクリプトを定義できます。カスタム・モニタが実行されるたびに、メトリックを更新してスクリプトで定義されたメトリックのステータスを返します。

- **収集したデータの処理**

返されたデータは抽出され、スクリプトで処理できます。たとえば、データベースから収集されたデータに基づくメトリックを定義でき、それに数値演算を実行できます。独自にまたはサードパーティが開発した Java コードを使用して、データを処理できます。

すべてのカスタム・モニタのサンプル・スクリプトは、サンプル・コンテンツ・パッケージから利用できます。**CustomMonitorSamplePackage.zip** は < SiteScope のインストール・ディレクトリ > \examples\monitors\custom フォルダにあります。これらのスクリプトを使用するには、カスタム・モニタ・コンテンツ・パッケージをインポートして、カスタム・モニタ・テンプレートをデプロイする必要があります。タスクの詳細については、個別のカスタム・モニタの「カスタマイズ可能なモニタのインポートおよび使用方法」タスクを参照してください。

スクリプトで利用できるメソッドおよびクラスの詳細については、『[HP SiteScope Custom Monitor API Reference](#)』を参照してください(< SiteScope のインストールディレクトリ > \examples\monitors\custom\doc\javadoc.zip から利用可能)。

- **結果の表示方法のカスタマイズ**

結果の表示方法を決めることができます。たとえば、結果のデータをメガバイト単位で表示するか、キロバイト単位で表示するか。

モニタを作成した後、次の操作が可能です。

- **新規メトリックのしきい値の定義**

モニタの初回実行の後、スクリプトで定義したメトリックのしきい値を定義できます。これらのカスタム・メトリックは初回実行までは存在しなかったからです。これにより、標準のモニタよりもより詳細なデータ処理操作が可能になります。メトリックはスクリプトの実行間で変化する場合がありますことに注意してください。たとえば、メトリック名で変数が使用される場所など。モニタの実行後存在しないメトリックを使用するしきい値は、自動的に削除されます。

- **モニタをほかの SiteScope ユーザと共有する**

モニタを作成したら、そのモニタをテンプレートにエクスポートし、モニタが外部の jar またはクラスに依存している場合はそれらを追加して、コンテンツ・パッケージを作成します。作成したコンテンツ・パッケージは特定のユーザに送ったり、[HP Live Network](https://hpln.hp.com/group/sitescope) (https://hpln.hp.com/group/sitescope) (英語サイト) コミュニティにパブリッシュして、他の SiteScope ユーザと共有することができます。

他の SiteScope ユーザと知識を共有することによって、対象とする SiteScope モニタの範囲が拡大します。さらに、SiteScope のリリース・サイクル以外の新規モニタの開発について情報を得ることができます。

本項の内容

- [323ページ「カスタム・モニタのリスト」](#)
- [323ページ「トポロジ報告」](#)
- [324ページ「データ処理スクリプト」](#)
- [324ページ「カスタム・モニタ・テンプレートのエクスポート」](#)
- [324ページ「コンテンツ・パッケージの作成」](#)
- [326ページ「カスタム・モニタのほかの SiteScope ユーザとの共有」](#)
- [326ページ「ヒント / トラブルシューティング」](#)

カスタム・モニタのリスト

モニタ名	説明
Custom Monitor	カスタム Java または Javascript コードを使用してデータを収集するスクリプトを作成することによって、独自のモニタを作成できます。そして、データを処理してメトリックを作成できます。
Custom Database Monitor	データを収集するクエリを作成することによって、独自のデータベース・モニタを作成できます。そして、収集したデータを処理するスクリプトを作成して、メトリックを作成できます。
Custom Log File Monitor	テキスト語句または正規表現のフォームで一致をスキャンする独自のログ・ファイル・モニタを作成できます。そして、収集したデータを処理するスクリプトを作成して、メトリックを作成できます。
Custom WMI Monitor	データを収集する WMI Query Language(WQL)クエリを作成することによって、独自の WMI モニタを作成できます。そして、収集したデータを処理するスクリプトを作成して、メトリックを作成できます。

カスタム・モニタの詳細については、SiteScope モニタ・リファレンスの個別のモニタを参照してください。

トポロジ報告

SiteScope が、モニタおよび関連する CI トポロジ・データを BSM の RTSM に報告するには、[HP 統合設定] パネルで[**モニタおよび関連 CI のトポロジをレポート**]チェック・ボックスを選択し、[BSM 統合データとトポロジ設定]セクションでトポロジ報告の設定を行います。これによって、SiteScope が CI を BSM に報告する方法が定義されます。

次のタイプの CI トポロジ・データを報告できます。

- ユーザ定義 CI タイプ・トポロジ。CI タイプを選択し、選択した CI タイプのキー属性値を定義します。キー属性値の詳細については、[385ページ「<CI タイプのキー属性>」](#)を参照してください。
- カスタム・トポロジ・スクリプト CI を BSM に報告する方法を定義するトポロジ・スクリプトを作成します。自分で Jython トポロジ・スクリプトを作成する必要があるため、Jython 言語を十分理解している場合にのみこのオプションを選択してください。タスクの詳細については、[243ページ「カスタム・モニタ用のカスタム・トポロジの設定方法」](#)を参照してください。
- モニタのトポロジを報告しない場合は、モニタ CI のみを報告することを選択できます。

トポロジ報告設定の設定の詳細については、[240ページ「カスタム・モニタ用のトポロジ・レポートの設定方法」](#)を参照してください。

インジケータ設定

[インジケータ設定] セクションのテーブルに、選択した CI タイプのインジケータ設定が表示されます。インジケータは、モニタのトポロジが BSM の RTSM に報告されるときに、構成アイテム(CI)の状況の詳細ビューを提供します。新しい測定値のマッピングを追加することも、既存のマッピングの設定を編集することもできます。タスクの詳細については、[237 ページ「トポロジ・レポートの設定方法」](#)を参照してください。

データ処理スクリプト

作成したスクリプトで、独自にまたはサードパーティが開発した Java コードを使用できます。モニタ・ストレージに Java オブジェクトを保存できます。

スクリプトで利用できるメソッドおよびクラスの詳細については、『[HP SiteScope Custom Monitor API Reference](#)』を参照してください(< **SiteScope のインストールディレクトリ** > \examples\monitors\custom\doc\javadoc.zip から利用可能)。

アクセス方法、モニタ・ストレージおよびメトリック名を含むモニタ設定プロパティの詳細については、個別のカスタム・モニタのスクリプトに表示されるモニタ設定パラメータへのアクセスに関するタスクを参照してください。

注: テンプレート・モードで作業するとき、データ処理スクリプトでテンプレート変数を使用できません。

サンプル・スクリプト

各カスタム・モニタの[データ処理スクリプト]ボックスで SiteScope はサンプル・データ処理スクリプトを提供します。それを使用するには、スクリプトをアンコメントする必要があります。

また、すべてのカスタム・モニタのサンプル・スクリプトも、サンプル・コンテンツ・パッケージから利用できます。**CustomMonitorSamplePackage.zip** は < **SiteScope のインストール・ディレクトリ** > \examples\monitors\custom フォルダにあります。これらのスクリプトを使用するには、カスタム・モニタ・コンテンツ・パッケージをインポートして、カスタム・モニタ・テンプレートをデプロイする必要があります。詳細については、個別のカスタム・モニタのモニタの作成に関するタスクを参照してください。

スクリプト・ログ・ファイル

SiteScope はスクリプト・デバッグのために使用できるカスタム・モニタ・ログを備えています。ログ・ファイル(custom_monitor.log)は < **SiteScope のルート・ディレクトリ** > \logs\custom_monitors\ にあります。このログは、スクリプトの実行からの情報、警告、エラー、デバッグ・メッセージに使用できます。

カスタム・モニタ・テンプレートのエクスポート

カスタム・モニタを作成したら、モニタをテンプレートにコピーし、必要に応じて変数の追加などの変更を行うことができます。詳細については、[847 ページ「既存の設定のコピーによるテンプレートの作成方法」](#)を参照してください。

モニタを適用してほかのユーザが使用できるようにするには、テンプレートをエクスポートする必要があります。詳細については、[869 ページ「テンプレートのエクスポートとインポートの方法」](#)を参照してください。カスタム・モニタをエクスポートする場合、モニタ・テンプレート、およびスクリプトとほかのリソースで利用した別の jar は、1 つのコンテンツ・パッケージ(zip ファイル)にまとめられます。

コンテンツ・パッケージの作成

カスタム・モニタを作成したら、モニタの作成に必要なすべてのファイルをコンテンツ・パッケージに保存できます。作成したコンテンツ・パッケージは特定のユーザに送ったり、[HP Live Network](#)

(<https://hpln.hp.com/group/sitescope>) (英語サイト) コミュニティにパブリッシュして、他のユーザが自分で使うためにモニタをインポートできるようにします。

テンプレートをインポートする際には、コンテンツ・パッケージ・インポートを使用した、カスタム・モニタのコンテンツ共有がサポートされています。コンテンツ・パッケージには、1 つ以上のテンプレートとその依存関係ファイルを含めることができます。依存関係は jars や設定ファイルのような追加ファイルです。

パッケージの構造

- コンテンツ・パッケージは zip 形式のみです。
- コンテンツ・パッケージには、SiteScope に事前定義されている複数のフォルダから、任意のタイプのファイルを含めることができます。コンテンツ・パッケージにほかのフォルダが含まれている場合は、エラーが表示され、インポート操作が失敗します。事前定義フォルダのコンテンツは、次のように SiteScope フォルダに配布されます。

事前定義フォルダ	説明
templates	(必須) カスタム・モニタを含む SiteScope からエクスポートされたテンプレート・ファイルの保存に使用されます。フォルダは少なくとも 1 つのテンプレートを含む必要があります。各テンプレートは、さまざまなタイプのモニタ(カスタム、標準)を含むことができます。
lib	(任意指定) カスタム・モニタ・スクリプトで使用される外部 jar ファイルの保存に使用されます。jar ファイルからの Java クラスはデータ処理スクリプトからアクセスできます。このモニタは外部 jar なしで使用できることに注意してください。
classes	(任意指定) コンパイルされた Java クラスの保存に使用されます。パッケージ・フォルダ構造全体でコピーする必要があることに注意してください。クラス・ファイルが <code>\lib</code> フォルダにコピーされた jar にパッケージされた場合、このフォルダは必要ありません。クラス・ファイルはデータ処理スクリプトからアクセスできます。
conf	(任意指定) 設定ファイル、ドキュメント、XML ファイルの保存に使用されます。データ処理スクリプトは、このフォルダの読み取り専用アクセスを持ちます。また、このフォルダは次のファイルも含みます。 <ul style="list-style-type: none"> ■ Manifest.mf。コンテンツ・パッケージの追跡に使用されます。名前、説明、パッケージ・バージョン、コンテンツ・パッケージに必要なサポートされる SiteScope の最小バージョンを入力します。<code>\conf</code> フォルダの < SiteScope のルート・ディレクトリ > \examples\monitors\custom\CustomMonitorSamplePackage.zip にサンプル・マニフェスト・テンプレートがあります。 ■ README.txt。コンテンツ・パッケージの説明に使用されます。パッケージの目的の簡単な説明をこのファイルに加えます。<code>\conf</code> フォルダの < SiteScope のルート・ディレクトリ > \examples\monitors\custom\CustomMonitorSamplePackage.zip にサンプル Readme ファイルがあります。

コンテンツ・パッケージが SiteScope にインポートされると、**< SiteScope のルート・ディレクトリ > \imported** フォルダに解凍され、次の名前の新規フォルダが作成されます。`<Package/Zip Name>_<GUID>`。

新規フォルダには、以下が含まれています。

- パッケージの元のファイル(zip ファイル)。
- 圧縮解除されたパッケージ。
- ロールバック、アンインストール、アップグレードの場合に使用する記述子ファイル。このファイルには、以下が含まれています。
 - デプロイされた SiteScope テンプレートの ID。
 - SiteScope 内でのファイルの場所。

記述子ファイルのタイプは .properties で、コンテンツ・パッケージと同じ名前です。

注:

- インポートされたファイルを編集しないでください。
- 既存の SiteScope ファイルは、コンテンツ・パッケージのファイルで上書きすることはできません。[内容のインポート]ダイアログ・ボックスで[既存のテンプレートのオーバーライド]チェック・ボックスが選択されている場合、**templates** フォルダにあるテンプレートは上書きできます。詳細については、[873ページ「\[内容のインポート\]ダイアログ・ボックス」](#)を参照してください。

カスタム・モニタのほかの SiteScope ユーザとの共有

個々の SiteScope ユーザに送信することによって、コンテンツ・パッケージ zip ファイルを配布できます。あるいは、ほかのユーザとのテンプレートおよびコンテンツ・パッケージの共有に、HP Live Network コミュニティを使用できます。

HP Live Network コミュニティへのコンテンツ・パッケージのパブリッシュの詳細については、[196ページ「HP Live Network コミュニティへのコンテンツのパブリッシュ方法」](#)を参照してください。

コンテンツ・パッケージの SiteScope マシンへのダウンロードの詳細については、[197ページ「HP Live Network からのコンテンツのダウンロード方法」](#)を参照してください。

ヒント / トラブルシューティング

一般的なヒント / 制限事項

- ユーザ定義の Java パッケージやインポートされた Java パッケージに、既存の SiteScope Java パッケージまたは標準 Java パッケージと同じ名前が付いていると、SiteScope はユーザ定義の Java パッケージまたはインポートされた Java パッケージを無視します。
- カスタム・モニタ測定値を数値ではなく文字列で設定した場合、[管理レポート]の[測定値サマリ]テーブル内の最大値および平均値は「n/a」と表示されます。測定値タイプを変更した場合も同様です(たとえば、測定値を数値で設定した後、文字列の値に変更したか、または、その逆の場合)。
- テンプレートを使用してカスタム・モニタをデプロイした場合、[デプロイメント値]ダイアログ・ボックスの[リモート サーバでモニタ プロパティを検証]チェック・ボックスをクリアしても何も変わりません。テンプレート内のモニタ設定プロパティは、テンプレートのデプロイ先のリモート・サーバに対してチェックする必要があります。
- カスタム・モニタを含むテンプレートに変更を適用する場合は、[プリファレンス]>[インフラストラクチャプリファレンス]>[カスタム モニタ設定]の[パブリッシュが変更されている間、カスタム モニタを無効にします]オプション(デフォルトで選択された状態)を使用することをお勧めします。モニタは、変更がなされた後、変更が適用され有効な状態に保存されるまで、一時的に無効になります。

- ベースラインを使って状態のしきい値を設定することは、ユーザ定義の測定値ではサポートされていません。

カスタム・モニタのトラブルシューティング

- モニタのエラー(スクリプトのエラーを含む)は、他のすべてのモニタと同じように SiteScope ログに書き込まれます。**error.log** ファイルと **RunMonitor.log** ファイルを確認します。
- スクリプトのエラーメッセージは、< SiteScope のルート・ディレクトリ> \logs\custom_monitors 内の **custom_monitor.log** ファイルに表示されます。このログは、スクリプトの実行からの情報、警告、エラー、デバッグ・メッセージに使用できます。

ログ・レベルを **DEBUG** モードに変更するには、< SiteScope のルート・ディレクトリ> \conf\core\Tools\log4j\PlainJava\log4j.properties で、次のパラグラフの **loglevel** を **DEBUG** に変更します。

```
# Custom monitors category
log4j.category.CustomMonitor=${loglevel},custom.monitor.appender
log4j.additivity.CustomMonitor=false を
```

リモート・サーバの監視

一部の SiteScope モニタでは、インターネット・プロトコルを使用して Web システムおよびアプリケーションをテストします。それ以外の SiteScope モニタでは、ネットワーク・ファイル・システム・サービスおよびコマンドを使用してリモート・サーバの情報を監視します。

リモート Windows サーバの監視には、次の条件があります。

- Windows XP/2000/2003/2008 用の SiteScope が必要です。一般に、UNIX 用の SiteScope ではリモート Windows サーバを監視できません。
- SiteScope サービスは、監視対象のリモート・サーバ上にある Windows パフォーマンス・レジストリへのアクセス権限を持つユーザ・アカウントまたは管理アカウントで実行する必要があります。SiteScope アカウント・ユーザの変更方法の詳細については、[528ページ「SiteScope サービスのユーザ・アカウントの変更方法」](#)を参照してください。

ネットワーク・ファイル・システム・サービスを使用してリモート・サーバ上の特定のサーバ・レベル・パラメータを監視するには、リモート・サーバ・プロファイルを作成する必要があります。サーバ・プロファイルのテーブルは、リモート・サーバ・ビューの[Microsoft Windows リモート サーバ]/[UNIX リモート サーバ]ページに表示されます。リモート・サーバ・プロファイルには、SiteScope がリモート接続するために必要なアドレスと接続情報が含まれています。リモート・サーバ・プロファイルを作成したら、リモート接続プロファイルを使用するようにモニタを設定します。リモート・プロファイルの作成とWindows または UNIX サーバのリモート監視の詳細については、[524ページ「リモート・サーバの概要」](#)を参照してください。

リモート・サーバ上で実行されているサービスおよびアプリケーションを監視するための要件は、環境のアプリケーションやネットワーク・ポリシーに応じて変わります。SiteScope モニタによるリモート・システムへの接続方法の詳細については、[525ページ「リモート Microsoft Windows サーバを監視するための SiteScope の設定方法」](#)および[531ページ「リモート UNIX サーバを監視するための SiteScope の設定方法」](#)を参照してください。

リモート・サーバの監視に関するその他の情報については、[HP Software Self-solve Knowledge Base](http://h20230.www2.hp.com/selfsolve/knowledgebase) (<http://h20230.www2.hp.com/selfsolve/documents>) も参照してください。技術情報を利用するには、HP パスポート ID を使ってログオンする必要があります。

グループの依存関係の監視

1つのシステムの異なる側面を監視している複数のモニタから重複して警告が通知されるのを防ぐには、1つのモニタを選択してシステムの基本的な可用性をチェックし、次にそのシステムのより詳細なテストを実行するほかのモニタを作成します。これにより依存関係が作成され、選択したモニタの状態に応じてモニタ・グループを実行できます。

テンプレートで依存関係を作成するとき、[依存関係]パネルで、依存関係モニタへの完全パスまたは相対パスを入力できます。テンプレートの変更をパブリッシュするときに、SiteScope が依存関係を無視するようにすることもできます。

依存関係の設定の詳細については、373ページ「[依存条件]」および373ページ「依存対象」を参照してください。

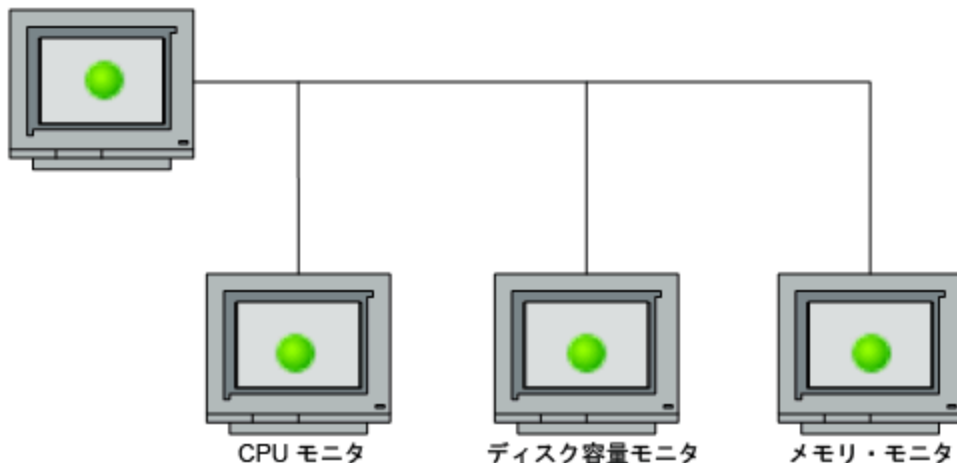
本項の内容

- 329ページ「依存対象」
- 330ページ「依存条件」
- 330ページ「テンプレート・モニタおよびグループを設定するときの依存関係」

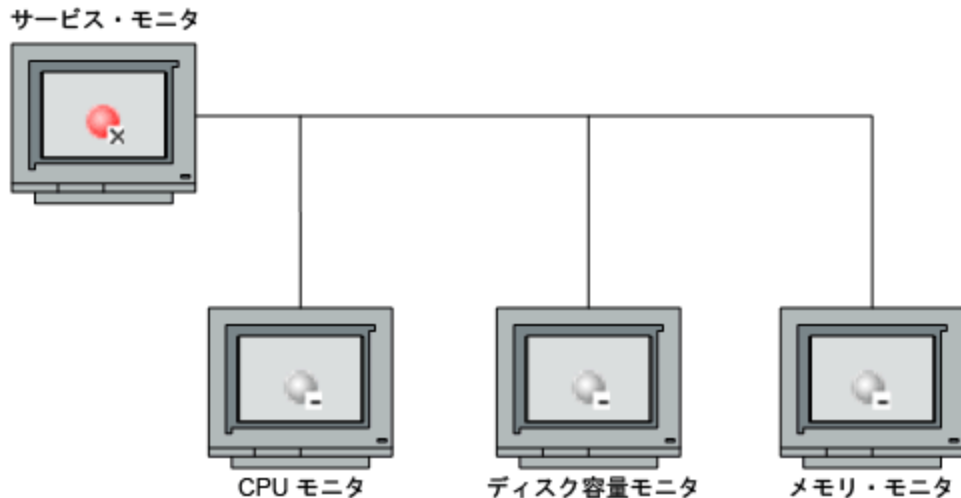
依存対象

別のモニタの状態に応じてモニタを実行するには、このオプションを使用します。このオプションを使用して、1つのシステムの異なる側面を監視している複数のモニタから重複して警告が通知されるのを防ぐことができます。単純なシステム・モニタを1つ作成してシステムの基本的な可用性(システムのハートビート)をチェックし、次にそのシステムのより詳細なテストを実行するほかのモニタを作成します。次の図は、3つのシステム・モニタがサービス・モニタ・インスタンスに依存している依存関係の例を示しています。

サービス・モニタ



詳細テスト・モニタをハートビート・モニタの状態に依存させるには、ハートビート・モニタを選択します。依存する側のモニタは、依存条件が満たされている場合に実行されます。ハートビート・モニタが対象システムが利用不可になったことを検出すると、依存関係によって自動的にほかのモニタが無効になります。この結果、ほかのモニタで生成されていた警告が無効になるという影響があります。次の図は、依存先のモニタがエラー条件をレポートしたためにモニタが無効になった例を示しています。



標準設定では、モニタ・インスタンスに依存関係は設定されません。別のモニタの状態に応じてモニタを実行するには、依存の対象となるモニタが含まれる SiteScope ツリーでノードを展開し、必要なモニタの横にあるチェック・ボックスを選択します。モニタの依存関係を削除するには、必要なチェック・ボックスをクリアします。

依存条件

別のモニタの状態に応じてモニタを実行するように選択した場合 ([依存対象] 設定を使用)、このオプションを使用して、現在のモニタを正常に実行するために必要な [依存対象] モニタの状態カテゴリまたは条件を選択します。

次の状態カテゴリがあります。

- 正常
- エラー
- 利用可能
- 利用不可

設定対象のモニタは、[依存対象] ボックスで選択したモニタがこのボックスで選択した条件をレポートしている場合、正常に実行されます。[利用不可] を選択して、[依存対象] のモニタがこの状態をレポートすると、現在のモニタは無効になりません。

たとえば、「正常」を選択すると、このモニタは [依存対象] ボックスで選択したモニタが「正常」状態をレポートしている場合に有効になります。[依存対象] ボックスで選択したモニタがこの設定で選択した条件以外のカテゴリまたは条件をレポートすると、現在のモニタは自動的に無効になります。329 ページ「依存対象」の例を参照してください。

テンプレート・モニタおよびグループを設定するときの依存関係

テンプレートを使ってモニタやグループをデプロイする場合、モニタおよびグループの依存関係もパブリッシュされます。これによってユーザが手動で操作しなくても、テンプレートがグループやモニタをツリーの正しい位置に自動的に書き込んだり、依存関係をいくつでも自動的に作成したりできるようになります。

テンプレート・モニタの依存関係に変更が必要な場合、テンプレートを一度更新するだけで、各モニタを個別に更新しなくても、デプロイされたすべてのグループに変更がパブリッシュされます。詳細については、890 ページ「テンプレート・デプロイメントの更新」を参照してください。

または、ソース・テンプレートで選択されたモニタやグループに対する依存関係設定によってデプロイされたテンプレート・オブジェクトの依存関係設定が上書きされたくない場合は、[依存関係]パネルの[変更をパブリッシュするときに、依存関係を無視する]チェック・ボックスを選択します。デプロイされたオブジェクトにテンプレート変更がパブリッシュされた場合、選択されたテンプレート・モニタおよびグループに対する依存関係は無視され、デプロイされたオブジェクトの既存の依存関係が保持されます。

テンプレートを設定する場合、現在のテンプレートの一部ではない既存のモニタに対してモニタおよびグループ依存関係を作成できます。これによって、テンプレート内でツリー構造を再作成する手間を省くことができます。これは、モニタまたはグループ・テンプレートの[依存対象]ボックスで、モニタ・ツリーに完全パスまたは相対パスを入力することによって行います。

たとえば、次のように入力します。

- 完全パス:
 <グループ名>\<グループ名>\<モニタ名>
- 相対パス:
 ...\<グループ名>\<モニタ名>

状態のしきい値の設定

レポートされた各 モニタ・インスタンスの状態を判別するロジック条件を設定するには、[しきい値の設定] セクションを使用します。状態は、対象システムに対するモニタ・アクションから返された結果または測定値と、そのモニタに設定したしきい値との比較に基づいています。

モニタ・インスタンスごとに状態のしきい値基準を設定して、**エラー**状態、**警告**状態、**正常**状態を判別できます。各状態のしきい値は、測定値パラメータ、ロジック比較演算、測定値で構成され、必要に応じて指定できます。パラメータと値はモニタ・タイプに応じて異なります。たとえば、CPU モニタの測定値パラメータは CPU utilization (%) です。現在のモニタ読み取りがモニタの以前の実行から大幅にそれる場合に、データ・ボラティリティを示すには、ベースラインを使用して状態のしきい値を設定します。詳細については、[335 ページ「ベースラインを使った状態しきい値の設定」](#)を参照してください。

状態の条件ごとに状態のしきい値基準を 1 つ以上設定できます。ほとんどのモニタ・タイプには、3 つの状態の条件のそれぞれについて標準設定が 1 つ含まれています。モニタの標準設定のしきい値は、最初にモニタを設定するときに表示されます。

さらに、ダイナミック・モニタ(ディスク領域や VMware ホスト)では、実際の現在のカウンタに変換されるすべての正規表現パターンのしきい値を表示できます。パターンにより、モニタは関連するダイナミック環境コンポーネントでカウンタを用いて自動的にモニタ自体を設定できます。詳細については、『HP SiteScope Monitor Reference』の「[Dynamic Monitoring Mechanism](#)」を参照してください。

モニタ状態のしきい値設定の詳細については、[374 ページ「しきい値の設定」](#)を参照してください。

本項の内容

- [332 ページ「スケジュール」](#)
- [332 ページ「可用性」](#)
- [332 ページ「ベースラインしきい値」](#)
- [333 ページ「しきい値の状態の影響」](#)
- [333 ページ「複数のしきい値」](#)
- [333 ページ「インジケータに割り当てられた SiteScope 測定値」](#)

スケジュール

しきい値に対するモニタの実行結果をチェックするタイミングを定義する場合、モニタ・インスタンスの状態を判別するスケジュールを選択できます。これは、モニタ実行の結果としきい値のチェックを特定の日または時間のみに制限する場合に便利です。たとえば、業務時間中に収集した結果のみに基づいたモニタの状態を必要とする場合などがあります。しきい値のスケジュール期間外の時間、モニタには[標準設定の状態]ボックスに事前定義された状態が割り当てられます。標準設定では、モニタ実行の結果は[毎日、全日]スケジュールに基づいて、しきい値に対しチェックされます。

可用性

モニタが利用可能でない場合、[利用不可な場合]ドロップダウン・リストのユーザ定義に基づいて状態が割り当てられます。モニタの状態は、**正常**、**警告**、**エラー**だけでなく、**利用不可**になることもあります。警告は、可用性または状態、あるいはその両方に従って起動されます。

ベースラインしきい値

モニタ・インスタンスごとのしきい値の設定に手動でロジック条件を設定するかわりに、SiteScope で

ベースラインを使用して 1 つ以上のモニタ・インスタンスのしきい値を計算することができます。このトピックの詳細については、[335 ページ「ベースラインを使った状態しきい値の設定」](#)を参照してください。

しきい値の状態の影響

状態が変化すると、イベントが通知され、モニタまたはモニタが属するグループに関連付けられた警告が起動されます。たとえば、システムが利用不可になったことをモニタが検出した場合、状態は**正常**から**エラー**に変化し、これがエラー警告への起因となります。

状態の変化はまた、モニタ間の依存関係の状態にも影響します。たとえば、**エラー**状態になる変化をモニタが検出すると、それが起因となり、そのシステムに依存するほかの 1 つ以上のモニタが無効になる場合があります。依存関係の設定の詳細については、[329 ページ「グループの依存関係の監視」](#)を参照してください。

しきい値の設定はまた、SiteScope ダッシュボードのモニタの状態にも影響します。ダッシュボードの[現在の状態]タブで SiteScope データを表示中に、モニタ・ツリーを掘り下げてモニタ、測定値の状態、可用性を表示できます。SiteScope ダッシュボードには、色付けされた状態と状態アイコンが表示されます。ダッシュボードのユーザ・インタフェースでの測定値の状態と可用性の詳細については、[1090 ページ「状態および可用性のレベル」](#)を参照してください。

複数のしきい値

3 つの設定のいずれかに複数のしきい値条件が定義されている場合、個別のしきい値基準の結果は論理 **OR** 関係として組み合わせられます。1 つの状態設定について、条件の 1 つ以上が満たされる場合 (**「エラー条件」**設定に対して 2 つの条件がある場合など)、モニタの状態は対応する状態の条件に設定されます。複数の状態の条件設定について状態の条件が満たされる場合、モニタの状態は最も高い値を持つ状態の条件に設定されます。

たとえば、ある条件が**「エラー条件」**として選択され、別の条件が**「警告条件」**として選択された場合、状態は**「エラー」**としてレポートされます。これは**「エラー」**の値が最も高く、**「警告」**の値が次に高く、**「正常」**の値が最も低いからです。

インジケータに割り当てられた SiteScope 測定値

SiteScope が BSM に対してデータをレポートする際に、構成アイテム(CI)の状況の詳細ビューがインジケータによって表示されます。インジケータの詳細については、BSM ヘルプにある『サービス状況』の「状況インジケータ、KPI、KPI のドメイン」を参照してください。

モニタ測定値のしきい値を設定すると、定義済みトポロジと標準設定のマッピングが存在するモニタは、その測定値状態に標準設定で割り当てられるインジケータ状態と重要度値を持つようになります。

- 各インジケータは、複数の状態を持つことができます。たとえば、CPU 負荷を測定する場合、インジケータ状態は**「ボトルネック」**や**「ビジー」**になる可能性があります。一方、メモリ負荷を測定する場合は、インジケータ状態が**「ページング」**や**「メモリ不足」**になる可能性があります。
- インジケータ重大度は、インジケータ状態に対応した重大度です。使用できるインジケータ重大度レベルは、致命的、重大、軽微、警告、正常域、および不明です。

インジケータ状態は、その測定値に関連付けられているインジケータの状態に存在する利用可能な重大度のうちの最も近い重大度に従って測定値状態に割り当てられます。選択された重大度は、SiteScope しきい値に示されます。

例：

- メモリ・モニタの使用済みパーセントを測定する場合、「エラー」しきい値内の重大度「重大」に測定値がマップされます。これは、インジケータ「メモリ負荷」には、重大度「致命的」を使用できないためです。
- Ping モニタの往復時間を測定する場合、「警告」しきい値内の最も近い重大度レベルは「重大」です。これは、このインジケータ状態には重大度レベル「軽微」が存在しないためです。

しきい値「正常」は、常に重大度レベル「正常域」にマップされます。

インジケータ状態と重大度の関連付けは、ローカル SiteScope サーバでは変更できません。

モニタの[HP 統合設定]パネルで異なるインジケータ・マッピングを選択した場合、そのインジケータ状態と重大度値は[しきい値の設定]で更新されます。

注: [インジケータ状態および重大度]ボックスが空の場合、自動的に割り当てられる[常に(標準設定)]の場合を除き、測定値は[サービス状況]で色付けされません。

標準設定のインジケータ割り当て(マッピング)は、SAM 管理のインジケータ割り当て設定に保存されます。詳細については、BSM ヘルプの『システム可用性管理の使用』の[「インジケータ割り当ての設定」](#)を参照してください。

インジケータ割り当て設定での割り当てに変更があると、SiteScope はその変更を検出し、更新された割り当てをダウンロードします。ローカル SiteScope サーバ上のインジケータ割り当てが変更された場合、これらの割り当てがインジケータ割り当て設定によって上書きされることはありません。ユーザー・インタフェースで選択した状態が標準設定値と同じ場合のインジケータ状態についても同様です。

注:

- 重複するしきい値が設定された場合(たとえば、エラー条件 `cpu utilization > 80%` およびエラー条件 `cpu utilization > 90%`)、最も近いしきい値にマップされたインジケータ状態と重大度値が送信されます。この例では、実際の測定値が 95% の場合、エラー条件 `cpu utilization > 90%` にマップされたインジケータ値が送信されます。これは、しきい値が数値の場合にのみ該当します。
- インジケータ状態と重大度は、SiteScope レポートには表示されません。

ベースラインを使った状態しきい値の設定

ベースライン・データは、ある期間のモニタ・パフォーマンス・メトリックスから収集され、許容可能な、または期待するしきい値範囲を設定するための比較に使用されます。

モニタのパフォーマンスが一定の値の範囲を超えた場合(または、空きディスク容量の場合のように範囲に達しない場合)、モニタはエラーまたは警告を通知することがあります。許容可能なモニタのしきい値範囲は、現在のパフォーマンスがベースラインからどの程度離れているかによって決まります。ベースラインによって、アプリケーションの通常のパフォーマンスを把握でき、またパフォーマンスの問題が単独のインシデントなのか、重大なパフォーマンス低下傾向の兆候なのかを判別できます。

ベースラインの計算

SiteScope でベースラインの計算を開始できるようにするには、ベースライン・データの収集に使用するグループまたはモニタ、あるいはその両方を選択します。ベースラインしきい値データの収集に使用するスケジュールを選択することもできます。これにより、SiteScope がベースラインの計算のデータを収集する期間を特定の曜日や時間に限定できます。たとえば、ピーク業務時間中に収集した結果のみに基づいたモニタの状態を必要とする場合などがあります。

順守レベルを選択してベースラインの計算の値がしきい値に影響する範囲を決定し、すべてのモニタ測定値のしきい値の限度を設定することもできます。詳細については、[336ページ「ベースライン順守レベルの設定」](#)および [336ページ「良好な限度とエラー限度について」](#)を参照してください。

ベースライン・エンジンはデータ収集期間中にモニタから集めた測定値を使って各スケジュールに対するベースラインを計算します。SiteScope はパーセンタイル・アルゴリズムを使ってベースライン計算を行います。その際、パーセンタイル値はベースラインの値を決定するのに使われます。ベースラインしきい値の計算方法の詳細については、[337ページ「ベースラインしきい値について」](#)を参照してください。

ベースラインのアクティブ化

ベースラインを計算したら、[ベースラインのアクティブ化]ダイアログ・ボックスで計算したモニタのサマリを確認し、ベースライン・データを分析できます。このダイアログ・ボックスには、ベースライン計算の対象となったすべてのモニタ・インスタンス、ベースライン計算日、ベースラインしきい値が適用された場合にモニタに生成されるエラー状態および警告状態の数の減少幅が表示されます。SiteScope でモニタに対するベースラインを計算できない場合、計算が失敗した理由が表示されます。

各モニタ測定値の現在のしきい値、ベースラインしきい値、過去 24 時間におけるすべてのベースライン関連のモニタ測定値の履歴データのグラフも表示されます。グラフには注釈ツールが含まれており、表示中のグラフのスナップショットに注釈を追加して、重要な領域を強調表示できます。注釈付きのグラフは、保存、印刷、電子メールによる送信が可能です。ユーザ・インタフェースの詳細については、[1310ページ「注釈ツール」](#)を参照してください。

ベースライン・データを確認したら、ベースラインしきい値設定をアクティブ化できます。これにより、ベースライン値が選択したモニタのしきい値に適用されます。「データが十分ではありません。」が理由で失敗したモニタのベースラインを、収集した限定的な測定値のサンプルを使用してアクティブ化することもできます。

ベースラインをアクティブ化した後にしきい値設定を元に戻すことはできないため、ベースラインしきい値をアクティブ化する前に、現在のモニタ設定の保存が必要かどうか検討してください。

ベースラインをアクティブ化すると、各モニタの[しきい値の設定]パネルにベースラインしきい値が表示されます。ベースライン値は、測定値に対して収集された履歴サンプルと当日の測定結果に従って毎日再計算されます。また、それに応じてベースラインしきい値が再計算、更新されます。

選択したコンテキストで、各モニタのベースラインの状態とベースラインの状態の説明を表示するベースライン・サマリ・レポートをいつでも作成できます。

このタスクの詳細については、[344 ページ「ベースラインを使用したモニタしきい値の設定方法」](#)を参照してください。

本項の内容

- [336 ページ「ベースライン順守レベルの設定」](#)
- [336 ページ「良好な限度とエラー限度について」](#)
- [337 ページ「ベースラインしきい値について」](#)
- [339 ページ「注意事項および制限事項」](#)

ベースライン順守レベルの設定

しきい値の決定に使用するベースライン順守レベルを選択できます。これは、ベースライン計算の値がすべてのモニタ測定値のしきい値に与える影響の範囲を示します。**[高]**、**[中]**、**[低]**のいずれかを選択できます。順守レベルが高いほど、しきい値の範囲がモニタ測定値のベースライン値に近くなります。反対に、順守レベルが低いほど、しきい値の範囲がモニタ測定値のベースライン値から離れます。

順守レベルの選択に加え、モニタ測定値ごとに別個の順守パーセンタイルを設定して、個別のモニタ測定値の順守レベルを微調整することもできます。順守レベルは、測定値がいつエラーまたは警告になるかを決定する測定値である順守パーセンタイルに基づきます。参照可能なモニタ測定値の場合、設定できる順守パーセンタイルは 1 セットのみで、これがすべての参照可能なモニタに使用されます。

順守レベルを手動で微調整するには、しきい値の作成方法を理解する必要があります。このトピックの詳細については、[337 ページ「ベースラインしきい値について」](#)を参照してください。

良好な限度とエラー限度について

良好な限度とエラー限度を設定すると、ベースラインしきい値の使用時に不必要なエラーや警告の発生を防止するのに役立ちます。モニタ測定値ごとの良好な限度と参照可能なモニタ・カウンタを手動で設定できます。SiteScope では、モニタ測定値ごとにエラー限度が自動的に設定されます。

注: 良好な限度を設定するには、ベースラインしきい値の作成方法を理解することが重要です。このトピックの詳細については、[337 ページ「ベースラインしきい値について」](#)を参照してください。

良好な限度

これは、既存のベースライン・パーセンタイルに従うとエラーをレポートする必要がある場合でも、エラー状態とみなされない測定値です。たとえば、CPU 使用率が常に 3% 未満である低負荷のシステムがあるとします。これらの測定値に基づいて、SiteScope は 5% のエラーしきい値を持つベースラインしきい値を計算する可能性があります。これは CPU 負荷エラーの正確な指標ではないため、誤ったエラーの生成を避けるために良好な限度として 70% の CPU 使用率を定義することができます。CPU 使用率がこの限度を下回っているかぎり、(ベースライン・エラーしきい値を上回っていても)モニタはエラー状態になりません。

良好な限度は、[順守レベルの微調整/限度の設定]ダイアログ・ボックスの[良好な限度]で設定できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、[402ページ「\[順守レベルの微調整/限度の設定\]ダイアログ・ボックス」](#)を参照してください。

エラー限度

これは、既存のベースライン・パーセンタイルに従うとエラーをレポートする必要がない場合でも、エラー状態とみなされる測定値です。測定値がある期間にわたって徐々に増加した場合(少しずつ発生するメモリ・リークなど)に発生することがあります。ベースラインしきい値は、測定値の平均が増加するのにあわせて毎日再計算されて更新されるため、測定値が新しいしきい値を上回る(下回る)ことはありません。

この問題を解決するために、SiteScope ではモニタ測定値ごとにエラー限度が自動的に設定されます。このために、モニタ測定値が指定した値を超えるとベースラインに関係なくエラーを誘発する制限が設定されます。たとえば、SiteScope が CPU 使用率 80% のエラー限度を設定すると、計算したベースライン・エラーしきい値を超えていなくても、CPU 使用率 80% を超える値はエラー状態になります。

エラー限度の計算方法の詳細については、[338ページ「SiteScope によるエラー限度の計算方法」](#)を参照してください。

ベースラインしきい値について

各順守レベルのベースライン計算で使用されるパーセンタイル値の微調整や、エラー限度および良好な限度の設定(詳細については、[336ページ「良好な限度とエラー限度について」](#)を参照してください)には、次のことを理解する必要があります。

- しきい値のタイプ
- しきい値の測定値への適用方法
- ベースラインしきい値および限度の計算での測定値の使用方法

ベースラインしきい値は、ベースラインが計算される前のモニタの測定値ごとに、モニタ設定に対して動的に追加または更新されます。ベースラインしきい値は、ベースライン・データの収集用に選択したスケジュールごとに追加されます。

一般に、しきい値にはベースラインしきい値と静的しきい値の2タイプがあります。ベースラインしきい値には、測定値がいつエラーまたは警告状態になるかを決定するのに使用するパーセンタイル値が設定され、静的しきい値には実際の固定値が設定されます。ベースラインしきい値の測定値には、測定方向に応じて \geq または \leq の条件があります。

ベースラインしきい値は、次の2つの条件が満たされた場合に測定値に対して変更、追加、削除されます。

- 測定値をベースラインの計算で利用できる。ベースラインの計算で使用するには、測定値は数値で、方向を持っている必要があります。ベースラインの計算に使用できない測定値の例として、URL 404 エラー・コードがあります(数値ですが方向がありません)。
- ベースラインの計算に先だって、測定値にスケジュールおよび状態カテゴリ(正常、警告、エラー)に定義された静的しきい値がある。

これらの条件を順守していない測定値は(測定値に定義されているしきい値という点では)影響を受けず、ベースラインはこれらの測定値に対して計算されません。

SiteScope でのしきい値の計算方法

SiteScope では、ベースラインの計算時に、各スケジュールのベースラインしきい値の測定値ごとにパーセンタイル値を作成します。SiteScope は、極端な測定値を調整するために、標準設定で最も極端なサンプルの 2% を破棄し(「ノイズ」測定値とみなされます)、残りの測定値に対してパーセンタイルを計算します。たとえば、サーバ上のほとんどのモニタ実行結果が CPU 使用率 20% 以下と 1 回だけのピーク値 50% を示している場合、このピーク値はベースラインの決定には使用されません。測定値サンプルから破棄するパーセンテージは、[ベースライン設定]で変更できます。

ベースライン・エンジンは、しきい値の計算にスライディング・ウィンドウ法を使用します。つまり、データ・サンプルが新しいほど、古いサンプルよりもベースライン計算に与える影響が大きく、一定期間が経過すると(標準設定では 30 日間)、履歴データは使用されなくなります。計算に含める日数は[ベースライン設定]で設定できます。

ベースライン設定の詳細については、669 ページ「[インフラストラクチャプリファレンス] ページ」を参照してください。

SiteScope によるエラー限度の計算方法

SiteScope では、各測定値のエラー限度の作成にパーセンタイル値を使用します。これは、既存のベースライン・パーセンタイルに従うとエラーをレポートする必要がない場合でも、エラー状態とみなされる測定値です。詳細については、337 ページ「エラー限度」を参照してください。

SiteScope では、次のいずれかの方法でエラー限度を計算します。

- 測定値に特定のスケジュールの静的エラーしきい値がある場合、ベースラインしきい値のパーセンタイル値が実際の値に対して計算され、この値が次のように静的しきい値の値と比較されます。
- 静的エラーしきい値がベースラインしきい値より極端な場合、静的エラーしきい値がその測定値のエラーしきい値の上限として使用されます。

例：

静的エラーしきい値が 100% の CPU 使用率で、計算されたベースラインしきい値が 67% の CPU 使用率の場合、静的エラーしきい値 (100% の CPU 使用率) がエラー限度として使用されます。

- ベースラインしきい値が静的エラーしきい値より極端な場合、オフセット値が使用されます。オフセットは、SiteScope によってベースラインしきい値に加算(または測定値の方向によってはベースラインしきい値から減算)されるパーセンテージの値で、結果値がその測定値のエラー限度として使用されます。オフセット値は、[インフラストラクチャプリファレンス]の[ベースライン設定]パネルで決定できます。

例：

スケジュールの静的エラーしきい値が 60% の CPU 使用率で、計算されたベースラインしきい値が 65% の CPU 使用率の場合、エラー限度は次のように計算されます。

65% の CPU 使用率 * 130% (標準設定のオフセット値 0.3 を使用) = 84.5% の CPU 使用率

- ベースラインを計算する前に特定のスケジュールの測定値にエラーしきい値がなく(測定値にエラーしきい値ではなく警告しきい値または良好しきい値がある)、[ベースライン設定]で[エラーのしきい値が定義されていない場合は、エラーの上限の作成を自動化する]オプションが選択されている場合、ベースラインしきい値のパーセンタイル値が実際の値に対して計算され、オフセット値がベ

スラインしきい値に加算またはベースラインしきい値から減算(測定値の方向による)されます。結果値は、測定値のエラー限度として使用されます。

注: 次の場合にはエラー限度は作成されません。

- ベースラインを計算する前に特定のスケジュールの測定値にエラーしきい値がない(たとえば、測定値にエラーしきい値ではなく警告しきい値または良好しきい値がある)、さらに
- [エラーのしきい値が定義されていない場合は、エラーの上限の作成を自動化する]オプションが選択されていない場合。

オフセット値の定義とエラー限度の作成の自動化の詳細については、669ページ「[インフラストラクチャプリファレンス]ページ」を参照してください。

注意事項および制限事項

- ベースライン機能を使用してモニタのしきい値を設定できるのは、SiteScope の管理者または「**モニタを追加、編集、または削除します**」の権限が「**モニタの編集または削除のみ**」の権限を持つユーザのみです。また、設定できる対象はユーザに許可されているグループ・リストに含まれるモニタのみです。編集権限があるかどうかに関係なく、すべてのユーザがベースラインの状態レポートを表示できます。
- ベースライン計算プロセス中は、しきい値または測定値の追加や削除、モニタのコピーや移動を行うことはできません(モニタのベースラインがアクティブ化されるまで)。
- 参照可能なモニタのベースラインをアクティブにした後でそれらのモニタに対してしきい値測定値の追加、編集、または削除を行った場合は、ベースライン・モニタとしてそのモニタの計算とアクティブ化を再度行う必要があります。
- アクティブ化されたベースラインと一緒にグループやモニタをコピーまたは移動する場合、ベースラインしきい値がほかのグループやモニタ・オブジェクトと一緒にコピーまたは移動されることはありません。
- ベースラインの削除プロセスが完了する前に SiteScope が再起動された場合、再起動後にプロセスは続行されないため、ベースラインの削除プロセスを再度実行する必要があります。
- ベースラインの計算またはアクティブ化プロセスが完了する前に SiteScope が再起動された場合、再起動後に自動的にプロセスが続行されます。ほかのベースラインの状態(計算済み、アクティブでない、アクティベーションが失敗しました、計算に失敗、アクティブ化されたベースライン)を持つモニタは、再起動による影響を受けません。
- ベースラインを計算する前に、モニタを有効にして、SiteScope がベースラインを計算するのに十分なデータを蓄積できるだけの期間、モニタを実行できるようにします。この期間は、[プリファレンス] > [インフラストラクチャプリファレンス] > [ベースライン設定] の [ベースライン設定に必要な最小日数] 設定と [ベースライン設定に必要な最小サンプル数] 設定によって異なります。詳細については、690ページ「**ベースライン設定**」を参照してください。モニタに十分なデータがなくてもベースラインを計算してアクティブ化できますが、計算が不正確になる可能性があります。
- 参照可能なモニタにカウンタのセットを定義し、これらのカウンタを使用してモニタを一定期間実行した後、カウンタを変更して(既存のカウンタの削除や新規カウンタの追加など)ベースラインを計算しようとする、計算結果が不正確になる可能性があります。この原因として、すでに存在しない可能性があるカウンタ用の古いデータが新しいデータと矛盾することが考えられます。モニタの作成時点から変更されていないカウンタでも、計算が不正確になる可能性があります。この問題を避

けるため、ベースラインの計算に必要な最小日数の間はモニタの参照可能なカウンタを変更しないでください。

- しきい値をベースラインを使用して作成したか手動で作成したかに関係なく、しきい値関連のプロパティは[グローバル検索と置換]を使用して変更できます。ただし、[グローバル検索と置換]を使用してモニタのベースラインしきい値をアクティブ化することはできません。
- ベースラインの計算中とベースラインのアクティブ化後は、特定のベースラインしきい値の変更のみがサポートされます。[グローバル検索と置換]を使用してしきい値関連のプロパティを変更する場合にも、同じ制限が適用されます。許可されているしきい値の変更の詳細については、[379ページ「しきい値の設定の変更」](#)を参照してください。
- メモリ消費量は、ベースラインを使用して設定されたモニタのしきい値ごとに増加します。メモリ消費量を削減するには、[ベースライン設定]で[累積されたベースラインデータをディスクに保存する間隔]設定を設定できます。詳細については、[690ページ「ベースライン設定」](#)を参照してください。

モニタのデプロイ方法

このタスクでは、モニタのデプロイに関する手順を説明します。

- [341ページ「前提条件」](#)
- [341ページ「モニタ・インスタンスの作成」](#)
- [343ページ「モニタの警告の設定 - オプション」](#)
- [343ページ「モニタ・レポートの設定 - オプション」](#)
- [343ページ「結果」](#)

1. 前提条件

モニタを設定する前に、モニタ用に取得する必要があるセットアップ要件とユーザ権限があるかどうかを確認します。詳細については、『HP SiteScope Monitor Reference』で個別のモニタのヘルプを参照してください。

注:

- モニタは、モニタ・ツリー内のグループで作成する必要があります。タスクの詳細については、[313ページ「SiteScope グループとサブグループの作成」](#)を参照してください。
- SiteScope でリモート・サーバのデータを監視するには、リモート・サーバを設定する必要があります。Windows リモート・サーバを設定する方法の詳細については、[525ページ「リモート Microsoft Windows サーバを監視するための SiteScope の設定方法」](#)を参照してください。UNIX リモート・サーバを設定する方法の詳細については、[531ページ「リモート UNIX サーバを監視するための SiteScope の設定方法」](#)を参照してください。

2. モニタ・インスタンスの作成

- a. 新しいモニタ・インスタンスを作成するには、モニタ・インスタンスの追加先のグループを右クリックし、**[新規作成]** > **[モニタ]**を選択します。ユーザ・インタフェースの詳細については、[365ページ「新規モニタ・ダイアログ・ボックス」](#)を参照してください。

注: 既存のモニタ・インスタンスをモニタ・ビュー内のグループにコピーまたは移動して、新しいモニタ・インスタンスを作成することもできます。詳細については、[70ページ「SiteScope オブジェクトのコピーと移動」](#)を参照してください。

- b. **[新規モニタ]**ダイアログ・ボックスから追加するモニタを選択し、そのモニタの設定を行います。モニタ設定の詳細については、『HP SiteScope Monitor Reference』で個別のモニタのヘルプを参照してください。
- c. モニタに影響するほかのプロパティを設定できます。例：
 - **[モニタの実行設定]**タブでは、モニタ・インスタンスに定義されたアクションの実行を SiteScope が試みる頻度を設定できます。特定の日または一定のスケジュールでモニタを実行する場合は、範囲スケジュールを設定することもできます。ユーザ・インタフェースの詳細については、[370ページ「モニタの実行設定」](#)を参照してください。
 - **[依存関係]**タブでは、モニタの依存関係を設定することにより、このモニタの実行をほかのモニタの状態に依存させることができます。ユーザ・インタフェースの詳細については、[372](#)

ページ「依存関係」を参照してください。

例：

設定されているモニタは、[依存対象]ボックスで選択したモニタが[依存条件]ボックスで選択した条件をレポートしている間は通常どおり実行されます。この例では、「Service」のモニタが「正常」の状態をレポートした場合にのみ、設定されているモニタが有効になります。

依存関係

依存: Service: HTTP on SiteScope Server

依存条件: 正常

- [しきい値の設定]タブでは、レポートされた各モニタ・インスタンスの状態を判別するロジック条件を手動で設定できます。ユーザ・インターフェースの詳細については、374ページ「しきい値の設定」を参照してください。

あるいは、ベースラインを使用して1つ以上のモニタのしきい値を設定することもできます。タスクの詳細については、344ページ「ベースラインを使用したモニタしきい値の設定方法」を参照してください。

例：

次に、ディスク領域モニタのしきい値の標準設定を示します。

標準しきい値の追加 標準しきい値の削除

エラー条件

条件	演算子	値	スケジュール
virtual memory used %	>	98	毎日、全日
virtual memory used %	==	'n/a'	毎日、全日

警告条件

条件	演算子	値	スケジュール
virtual memory used %	>	95	毎日、全日

良好条件

条件	演算子	値	スケジュール
always(default)			

使用中パーセントが95より小さいディスク領域は正常な状態です。使用中パーセントが95よりも大きく98よりも小さいディスク領域は警告状態です。使用中パーセントが98より大きい「n/a」のディスク領域はエラー状態です。

- ほかの共通モニタ・プロパティの詳細については、[367ページ「共通モニタ設定」](#)を参照してください。



3. モニタの警告の設定 - オプション

イベントが発生したか、インフラストラクチャの要素やシステムのステータスが変化したときに通知を送信する警告を作成します。

モニタの警告を作成するには、モニタを右クリックして[新規作成]>[警告]を選択します。各警告スキームに1つ以上の警告アクションを作成できます。[新規警告]ダイアログ・ボックスで[新規警告アクション]をクリックすると、[警告アクション]ウィザードが起動します。

タスクの詳細については、[1226ページ「警告の設定方法」](#)を参照してください。

注:

- 特定のグループおよびモニタに関連付けられている警告を無効化するには、モニタの[プロパティ]タブにある[関連する警告の有効化/無効化]パネルの SiteScope ツリーを使用するか、またはダッシュボードの[関連する警告の有効化/無効化]  アイコンをクリックしてから該当する無効化オプションを選択します。この操作で無効化できるのは、特定のモニタから発生するトリガのみです。警告が複数のモニタに割り当てられている場合、ほかのモニタの警告は影響を受けず、引き続き動作します。[プロパティ]タブから関連する警告が無効化された場合でも、[警告]タブの警告は有効な状態のままです。
- SiteScope ツリーをフィルタして、有効化または無効化された警告に関連付けられているすべてのグループおよびモニタを表示するには、ツリー・ツールバーの[フィルタ]  ボタンをクリックし、[フィルタオプション]セクションの[関連する警告の有効化/無効化]リストから[有効]または[無効]を選択します。このフィルタの結果は、モニタ・ツリーに表示されます。

4. モニタ・レポートの設定 - オプション

時間の経過に伴う監視対象のサーバおよびアプリケーションのパフォーマンスに関する情報を表示するレポートを作成します。

モニタのレポートを作成するには、モニタを右クリックして[レポート]をクリックします。レポート・タイプを選択し、レポート設定を指定します。

タスクの詳細については、[1278ページ「レポートの作成方法」](#)を参照してください。

5. 結果

[プロパティ]タブで指定した設定内容で、モニタ・ツリーのモニタ・グループにモニタが追加されます。

ベースラインを使用したモニタしきい値の設定方法

このタスクでは、ベースラインを使用したモニタしきい値の設定に関する手順を説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- [344ページ「前提条件」](#)
- [344ページ「ベースライン設定プリファレンスの設定\(任意指定\)」](#)
- [344ページ「ベースラインの計算」](#)
- [346ページ「ベースライン設定の確認」](#)
- [347ページ「ベースライン・モニタ測定値グラフの表示」](#)
- [347ページ「ベースライン設定のアクティブ化」](#)
- [347ページ「\[ベースラインの状態レポート\]でベースラインのプロパティを表示」](#)
- [348ページ「ベースラインしきい値の表示と変更」](#)

1. 前提条件

モニタのベースラインを計算する前に、モニタが有効になっていて、SiteScope でベースラインを計算するために必要なデータを蓄積するのに十分な長さの期間実行されていることを確認します。この期間は、[ベースライン設定]で設定したベースラインの計算に必要な日数とサンプルの最小数ごとに異なります。ユーザ・インタフェースの詳細については、[690ページ「ベースライン設定」](#)を参照してください。

注: モニタに十分なデータがなくてもベースラインを計算してアクティブ化できますが、計算が不正確になる可能性があります。

2. ベースライン設定プリファレンスの設定(任意指定)

[インフラストラクチャプリファレンス]のグローバルSiteScope ベースライン設定の値を表示、定義できます。これには、計算とアクティブ化の優先設定、ベースライン計算に含める履歴データの日数、エラー限度の計算に使用するオフセットが含まれます。

ユーザ・インタフェースの詳細については、[690ページ「ベースライン設定」](#)を参照してください。

3. ベースラインの計算

ベースラインを計算するモニタ測定値のしきい値を定義します。

- ベースライン設定するモニタ・インスタンスを選択します。ユーザ・インタフェースの詳細については、[401ページ「ベースライン計算対象のモニタの選択」](#)を参照してください。
- ベースライン・データの収集に使用する1つ以上のスケジュール範囲を選択するか、標準設定のスケジュール(毎日、全日)を受け入れます。ユーザ・インタフェースの詳細については、[401ページ「スケジュール」](#)を参照してください。
- ベースライン計算の値が、すべてのモニタ測定値のしきい値にどの程度影響するかを判断するためのグローバル・ベースライン順守レベルを選択します。ユーザ・インタフェースの詳細については、[401ページ「順守レベル」](#)を参照してください。
- また、[順守レベルの微調整 / 限度の設定]ボタンをクリックして次を実行できます。

- モニタ測定値のベースライン順守レベルを個々に微調整する。
- 各モニタ測定値の良好な限度を定義する。この限度内の測定値は、既存のベースライン・パーセンタイルに応じてエラーをレポートする必要がある場合でも、エラー状態にはなりません。

ユーザ・インタフェースの詳細については、[402ページ「\[順守レベルの微調整 / 限度の設定\]ダイアログ・ボックス」](#)を参照してください。

- e. **[計算]**をクリックしてベースラインしきい値の計算を実行します。

例：[ベースラインの計算]ダイアログ・ボックス(ユーザ権限に応じてユーザの表示が許可されているモニタのみが表示されます)



例：[順守レベルの微調整 / 限度の設定]ダイアログ・ボックス

遵守レベルの微調整/限度の設定

静的カウンタ付きモニタ

リセット

モニタ名:測定値名	警告のパーセンタイル			エラーのパーセンタイル			良好な限度
	低	中	高	低	中	高	
CPU: utilizationPercentage	110	93	90	120	98	95	

ブラウズ可能なモニタ

リセット

モニタ名:測定値名	警告のパーセンタイル			エラーのパーセンタイル			良好な限度
	低	中	高	低	中	高	
ブラウズ可能なすべてのモニタの測定値	110	93	90	120	98	95	

保存 キャンセル ヘルプ

4. ベースライン設定の確認

[ベースラインのアクティブ化]ダイアログ・ボックスで、計算されたモニタとベースライン・データのサマリを確認します。ユーザ権限に応じてユーザの表示が許可されているモニタのみが表示されます。

ユーザ・インターフェースの詳細については、403ページ「[ベースラインのアクティブ化]ダイアログ・ボックス」を参照してください。

例: [ベースラインのアクティブ化]ダイアログ・ボックス(ユーザ権限に応じてユーザの表示が許可されているモニタのみが表示されます)

ベースラインのアクティブ化

正常に計算されたモニタ

グラフの表示

モニタ名	計算日	エラー ステータスの減少	[注意域] ステータスの減少
SiteScopeTestCPU Test	2012/6/21	-113	-76

失敗したモニタ

モニタ名	失敗の原因	アクティブ化可能
SiteScopeTestCPU	ベースライン設定する測定値が...	はい
SiteScopeTestServer Monitor	ベースライン設定する測定値が...	いいえ

設定のバックアップ アクティブ キャンセル ヘルプ

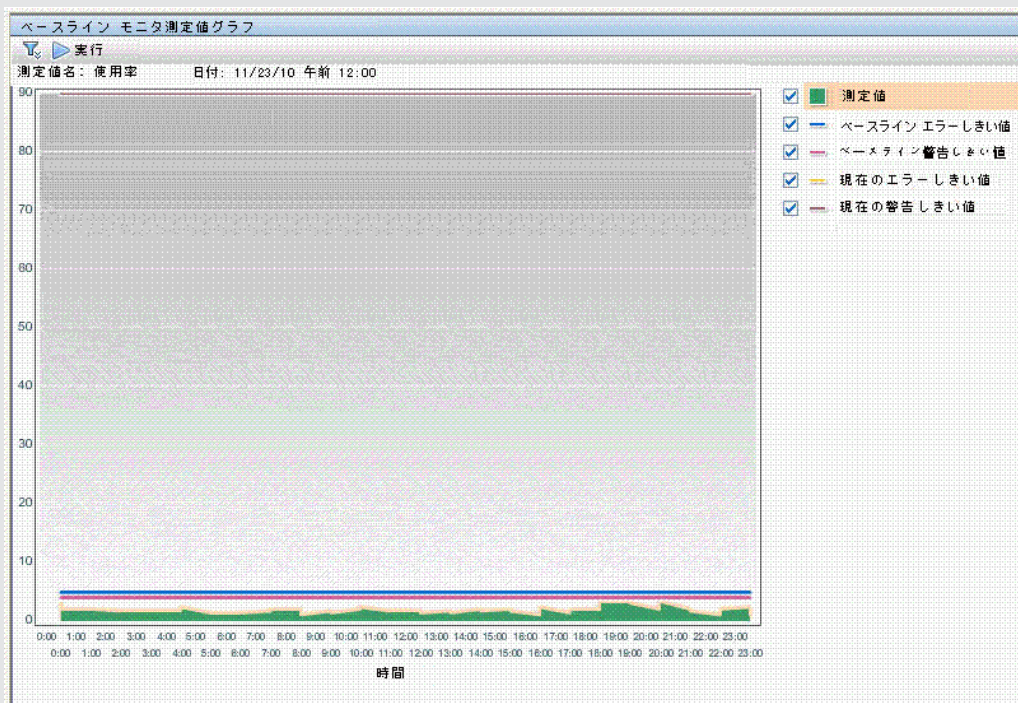
5. ベースライン・モニタ測定値グラフの表示

各モニタのベースライン処理済み測定値のグラフを表示して、選択した日付のベースライン・データを分析できます。表示しているグラフのスナップショット作成に注釈ツールを使用して、重要な領域を強調表示することもできます。

ユーザ・インターフェースの詳細については、406ページ「[ベースライン モニタ測定値 グラフ] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

注: グラフに表示されるデータは測定値データの集計であるため、時間帯はデータが収集された時間を正確に反映していない可能性があります。

例: ベースライン・モニタ測定値グラフ



6. ベースライン設定のアクティブ化

ベースラインを使用してしきい値を設定するモニタを選択し、**[アクティブ]**をクリックします。計算に成功したベースラインのすべてのモニタと、「データが十分ではありません」という理由で失敗したモニタ(**[アクティブ化可能]**列で**[はい]**と表示)を選択できます。モニタしきい値はベースライン計算に応じて設定され、しきい値の設定を超えた場合に状態を変更するように設定されます。

ユーザ・インターフェースの詳細については、403ページ「[ベースラインのアクティブ化] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

注: 現在のモニタしきい値の設定に戻す場合は、ベースライン設定をアクティブ化する前に現在のモニタ設定を保存するオプションを選択します。

7. [ベースラインの状態レポート]でベースラインのプロパティを表示

選択したコンテキストの各モニタに関する情報を示す、一時的なレポートを作成できます。この情報には各モニタのベースラインの状態とベースラインの状態の詳細が含まれます。ユーザ・インタフェースの詳細については、[409ページ「ベースラインの状態レポート」](#)を参照してください。

モニタの[ベースライン設定]で、モニタのベースラインの状態を追跡することもできます。ユーザ・インタフェースの詳細については、[395ページ「ベースライン設定」](#)を参照してください。

例：ベースラインの状態レポート

ベースラインの状態レポート			
サマリ 2 個のモニタの合計です。 1 個のモニタにアクティブ化されたベースラインがあります。 1 個のモニタはベースラインが設定されていません。			
詳細			
モニタ名	モニタ タイプ	ベースラインの状態	ベースラインの状態の詳細
SiteScopeTestCPU Test	CPU	ベースライン設定する...	
SiteScopeTestSallyTest	CPU	アクティブ化されたベ...	

8. ベースラインしきい値の表示と変更

[しきい値の設定]でベースラインしきい値を表示し、しきい値が生成されたパーセンタイル値を変更することでしきい値を手動で微調整できます。

ユーザ・インタフェースの詳細については、[374ページ「しきい値の設定」](#)を参照してください。

例：モニタのベースラインしきい値設定

しきい値の設定

利用不可な場合:

標準設定の状態:

内部エラーの場合:

エラー条件


条件	演算子	値	スケジュール
percent used	==	'n/a'	毎日、全日
percent used	==	100	毎日、全日

警告条件

条件	演算子	値	スケジュール
percent used	>=	1	 毎日、全日

良好条件

条件	演算子	値	スケジュール
always(default)	<	1	

この例では、[エラー条件]の[使用済みパーセント(%)]のしきい値が ≥ 42.81 で、[警告条件]の[使用済みパーセント(%)]のしきい値が ≥ 40.77 です(これらの値は両方とも編集できません)。しきい値を変更するには、しきい値が生成されたパーセンタイル値を変更する必要があります。パーセンタイル値を変更した後の新しいしきい値を確認できるように、[パーセンタイルテーブル]  ボタンをクリックして、各パーセンタイル範囲にマップされているしきい値を表示するパーセンタイル・テーブルを開きます。

注：[エラー条件]の[使用済みパーセント(%)] > 90 のしきい値がエラー限度です。既存のベースライン・パーセンタイルに従うとエラーをレポートしない場合でも、この測定値の値はエラーの状態とみなされます。たとえば、ベースラインしきい値が「エラー条件」の[使用済みパーセント(%)] ≥ 96 に更新された場合、計算されたベースライン・エラーしきい値の96を超えなくても、90よりも大きいすべての測定値がエラー状態になります。このトピックの詳細については、[337ページ「エラー限度」](#)を参照してください。

モニタ・カテゴリ・リスト

このセクションには、各 モニタ・カテゴリの SiteScope モニタを表示します。各 モニタ・タイプの使用と設定の詳細については、『Monitor Reference』ガイドのモニタ・タイプに関する説明を参照してください。

- [350ページ「アプリケーション・モニタ」](#)
- [351ページ「カスタマイズ可能モニタ」](#)
- [351ページ「データベース・モニタ」](#)
- [351ページ「汎用モニタ」](#)
- [352ページ「統合モニタ」](#)
- [352ページ「メディア・モニタ」](#)
- [352ページ「ネットワーク・モニタ」](#)
- [353ページ「サーバ・モニタ」](#)
- [353ページ「仮想化とクラウド・モニタ」](#)
- [354ページ「Webトランザクション・モニタ」](#)

アプリケーション・モニタ

- [Active Directory Replication Monitor](#)
- [Apache Server Monitor](#)
- [BroadVision Application Server Monitor](#)
- [Check Point Monitor](#)
- [Cisco Works Monitor](#)
- [Citrix Monitor](#)
- [ColdFusion Server Monitor](#)
- [COM+ Server Monitor](#)
- [F5 Big-IP Monitor](#)
- [HAProxy Monitor](#)
- [Microsoft ASP Server Monitor](#)
- [Microsoft Exchange 2007/2010 Monitor](#)
- [Microsoft Exchange 2003 Mailbox Monitor](#)
- [Microsoft Exchange 5.5 Message Traffic Monitor](#)
- [Microsoft Exchange 2000/2003/2007 Message Traffic Monitor](#)
- [Microsoft Exchange 2003 Public Folder Monitor](#)
- [Microsoft IIS Server Monitor](#)
- [News Monitor](#)

- Oracle 9i Application Server Monitor
- Oracle 10g Application Server Monitor
- Radius Monitor
- SAP CCMS Monitor
- SAP CCMS Alerts Monitor
- SAP Java Web Application Server Monitor
- SAP Performance Monitor
- SAP Work Processes Monitor
- Siebel Application Server Monitor
- Siebel Log File Monitor
- Siebel Web Server Monitor
- SunONE Web Server Monitor
- Tuxedo Monitor
- UDDI Monitor
- WebLogic Application Server Monitor
- WebSphere Application Server Monitor
- WebSphere MQ Status Monitor
- WebSphere Performance Servlet Monitor

カスタマイズ可能 モニタ

- Custom Monitor
- Custom Database Monitor
- Custom Log File Monitor
- Custom WMI Monitor

データベース・モニタ

- DB2 8.x and 9.x Monitor
- Database Counter Monitor
- Database Query Monitor
- LDAP Monitor
- Microsoft SQL Server Monitor
- Oracle Database Monitor
- Sybase Monitor

汎用 モニタ

- Composite Monitor

- Directory Monitor
- File Monitor
- JMX Monitor
- Log File Monitor
- Script Monitor
- Sybase Monitor
- Web Service Monitor
- XML Metrics Monitor

統合 モニタ

- HP OM Event Monitor
- HP Service Manager Monitor
- NetScout Event Monitor
- Technology Database Integration Monitor
- Technology Log File Integration Monitor
- Technology SNMP Trap Integration Monitor
- Technology Web Service Integration Monitor

メディア・モニタ

- Microsoft Lync Server 2010 Monitors(Microsoft 音声ビデオ会議 サーバ, Microsoft アーカイブ・サーバ, Microsoft Director サーバ, Microsoft エッジ・サーバ, Microsoft フロント・エンド・サーバ, Microsoft 仲介サーバ, Microsoft 監視および CDR サーバ, Microsoft Registrar サーバ)
- Microsoft Windows Media Player Monitor
- Microsoft Windows Media Server Monitor
- Real Media Player Monitor
- Real Media Server Monitor

ネットワーク・モニタ

- DHCP Monitor
- DNS Monitor
- FTP Monitor
- Formula Composite Monitor
- Mail Monitor
- MAPI Monitor
- Microsoft Windows Dial-up Monitor
- Network Bandwidth Monitor

- Ping Monitor
- Port Monitor
- SNMP Monitor
- SNMP Trap Monitor
- SNMP by MIB Monitor

サーバ・モニタ

- Browsable Windows Performance Monitor
- CPU Monitor
- Disk Space Monitor (Deprecated)
- Dynamic Disk Space Monitor
- HP iLO (Integrated Lights-Out) Monitor
- HP NonStop Event Log Monitor
- HP NonStop Resources Monitor
- IPMI Monitor
- Memory Monitor
- Memcached Statistics Monitor
- Microsoft Windows Event Log Monitor
- Microsoft Windows Performance Counter Monitor
- Microsoft Windows Resources Monitor
- Microsoft Windows Services State Monitor
- Service Monitor
- UNIX Resources Monitor
- Web Server Monitor

仮想化とクラウド・モニタ

- Amazon Web Services Monitor
- Generic Hypervisor Monitor
- KVM Monitor
- Microsoft Hyper-V Monitor
- Solaris Zones Monitor
- VMware Host Monitors (VMware ホスト CPU, VMware ホスト・メモリ, VMware ホスト・ネットワーク, VMware ホスト状態, および VMware ホスト・ストレージ)
- VMware Performance Monitor

Web トランザクション・モニタ

- e-Business Transaction Monitor
- Link Check Monitor
- URL Monitor
- URL Content Monitor
- URL List Monitor
- URL Sequence Monitor
- Web Script Monitor

Windows 環境にインストールされた SiteScopes のみでサポートされているモニタ

Windows バージョンで実行している SiteScope のみでサポートされているモニタを次に示します。関連性がある場合は、モニタは任意のプラットフォーム/オペレーティング・システムで実行中のリモート・サーバを監視できます。

- MAPI Monitor
- Microsoft Exchange 2003 Mailbox Monitor
- Microsoft Exchange 2003 Public Folder Monitor
- Microsoft Exchange 2003 Public Folder Monitor
- Microsoft Exchange 2007/2010 Monitor
- Microsoft Exchange 5.5 Message Traffic Monitor
- Microsoft Windows Dial-up Monitor
- Microsoft Windows Media Player Monitor
- Real Media Player Monitor
- Sybase Monitor
- Tuxedo Monitor
- Web Script Monitor

Windows Management Instrumentation(WMI)をサポートしているモニタ

データ収集に Windows Management Instrumentation(WMI)メソッドをサポートしているモニタを次に示します。WMI は、Windows サーバで実行しているリモート・サーバから管理データを収集する、NetBIOS よりも安全な通信方法です。

- Citrix Monitor
- ColdFusion Server Monitor
- CPU Monitor
- Disk Space Monitor (Deprecated)
- Dynamic Disk Space Monitor
- Memory Monitor
- Microsoft Lync Server 2010 Monitors(Microsoft 音声ビデオ会議サーバ、Microsoft アーカイブ・サーバ、Microsoft Director サーバ、Microsoft エッジ・サーバ、Microsoft フロント・エンド・サーバ、Microsoft 仲介サーバ、Microsoft 監視および CDR サーバ、Microsoft Registrar サーバ)
- Microsoft ASP Server Monitor
- Microsoft Hyper-V Monitor
- Microsoft IIS Server Monitor
- Microsoft SQL Server Monitor
- Microsoft Windows Event Log Monitor
- Microsoft Windows Media Server Monitor
- Microsoft Windows Resources Monitor (Deprecated)
- Microsoft Windows Services State Monitor
- Real Media Server Monitor
- Service Monitor

リモート・マシンでの WMI の設定方法の詳細については、[529ページ「リモート監視用の WMI サービスの設定方法」](#)を参照してください。

EC2 上にインストールされていない SiteScope から Amazon EC2 インスタンスのモニタリングをサポートするサーバ・モニタ

プライベート・カスタマ・ネットワークにデプロイされた SiteScope を使用して Amazon EC2 のインスタンスのモニタリングをサポートされているプロファイル。

プロトコル	Windows	UNIX	Amazon セキュリティ・グループ内の必須構成	OS 内の必須構成
NetBIOS	サポート	サポートされていません	443, 445 tcp ポートを有効にします。	Windows Firewall 内の着信要求を有効にします。
WMI	サポートされていません	サポートされていません	なし	なし
SSH	サポート	サポート	22 tcp ポートを有効にします。	標準 sshd を設定します。
Telnet	サポートされていません	サポート	telnet ポートを有効にします。	

次に、EC2 の外から Amazon EC2 のインスタンスのモニタリングをサポートする SiteScope サーバ・モニタを示します。

- Citrix Monitor
- ColdFusion Server Monitor
- CPU Monitor
- Directory Monitor
- Disk Space Monitor (Deprecated)
- Dynamic Disk Space Monitor
- File Monitor
- Log File Monitor
- Memory Monitor
- Microsoft ASP Server Monitor
- Microsoft Hyper-V Monitor
- Microsoft IIS Server Monitor
- Microsoft SQL Server Monitor
- Microsoft Windows Event Log Monitor

- [Microsoft Windows Media Server Monitor](#)
- [Microsoft Windows Performance Counter Monitor](#)
- [Microsoft Windows Services State Monitor](#)
- [Real Media Server Monitor](#)
- [Script Monitor](#)
- [Service Monitor](#)
- [Siebel Log File Monitor](#)
- [Syslog Monitor](#)
- [Web Server Monitor](#)

SiteScope の監視に使用されるポート

次の表に、SiteScope 監視に通常使用されるネットワーク・ポートを示します。多くの場合、環境のセキュリティ要件に応じて代替ポートを設定できます。

注: perfex(Windows アプリケーションに接続するSiteScopeの内部アプリケーション)をサポートするすべてのモニタは、ポート 135と、その他のポートを使用することができます。

モニタ・タイプ	使用されるポート
Apache Server Monitor	Apache サーバ管理 ページで指定されたポート。サーバ設定ファイルで変更可能。
BroadVision Application Server Monitor	監視対象の BroadVision サーバごとに、ORB (Object Request Broker)ポート番号を使用。
Check Point Monitor	SNMP モニタ。標準設定では、ポート 161。変更可能。
Cisco Works Monitor	Cisco Works のリソースは、通常、サーバの設定によってポート 161 または 162(SNMP)よりアクセス可能。
Citrix Monitor	ポート 137, 138, 139(NetBIOS)。
ColdFusion Server Monitor	ポート 137, 138, 139(NetBIOS)。
CPU Monitor	ローカル CPU の場合、ポートは不要。 各リモート・サーバ上の CPU の場合 (Windows ベースのシステム): ポート 137, 138, 139 (NetBIOS)。 各リモート・サーバ上の CPU の場合 (Solaris/Linux ベースのシステム): ポート 22 (SSH), 23(telnet), または 513(rlogin)。
Database Query Monitor	変更可能。ODBC または JDBC ドライバおよび DB 設定によって異なる。
DB2 8.x and 9.x Monitor	標準設定では、ポート 50000。変更可能。
DHCP Monitor	標準設定では、ポート 68。

モニタ・タイプ	使用されるポート
Directory Monitor	ローカル・ディレクトリの場合、ポートは不要。 各リモート・サーバ上のディレクトリの場合 (Windows ベースのシステム): ポート 137, 138, 139(NetBIOS)。 各リモート・サーバ上のディレクトリの場合 (Solaris/Linux ベースのシステム): ポート 22 (SSH), 23(telnet), または 513(rlogin)。
Disk Space Monitor (Deprecated) Dynamic Disk Space Monitor	ローカル・ディスク領域の場合、ポートは不要。 各リモート・サーバ上のディスク領域の場合 (Windows ベースのシステム): ポート 137, 138, 139(NetBIOS)。 各リモート・サーバ上のディスク領域の場合 (Solaris/Linux ベースのシステム): ポート 22 (SSH), 23(telnet), または 513(rlogin)。 diskperf -y は、有効でなければならないこと、およびモニタリングされるクライアントは、リブートを必要とすることに注意してください。
DNS Monitor	標準設定では、ポート 53。
F5 Big-IP Monitor	SNMP を使用。変更可能。
File Monitor	ローカル・ディスク。ポートは不要。 各リモート・サーバ上のファイルの場合 (Windows ベースのシステム): ポート 137, 138, 139(NetBIOS)。 各リモート・サーバ上のファイルの場合 (Solaris/Linux ベースのシステム): ポート 22 (SSH), 23(telnet), または 513(rlogin)。
FTP Monitor	標準設定では、ポート 21。変更可能。
Generic Hypervisor Monitor	ポート 22(SSH), 23(telnet), または 513 (rlogin)。
HAProxy Monitor	標準設定では、ポート 80。変更可能。
KVM Monitor	ポート 22(SSH), 23(telnet), または 513 (rlogin)。
LDAP Monitor	標準設定では、ポート 389。変更可能。
Link Check Monitor	標準設定では、ポート 80。変更可能。

モニタ・タイプ	使用されるポート
Log File Monitor	Windows ベースのシステムではポート 137, 138, 139(NetBIOS)。 Solaris/Linux ベースのシステムではポート 22 (SSH), 23(telnet), または 513(rlogin)。
Mail Monitor	POP3 ではポート 110, SMTP ではポート 25, IMAP ではポート 143。
MAPI Monitor	MAPI では、動的に割り当てられた 1024 より後のポートで NSPI(Name Service Provider Interface)を使用して、クライアント・ディレクトリ検索を実行します。
Memory Monitor	Windows ベースのシステムではポート 137, 138, 139(NetBIOS), Solaris/Linux ベースのシステムではポート 22(SSH), 23(telnet), または 513(rlogin)。
Memcached Statistics Monitor	標準設定では、ポート 11211。変更可能。
Microsoft Lync Server 2010 Monitors(Microsoft 音声ビデオ会議 サーバ、Microsoft アーカイブ・サーバ、Microsoft Director サーバ、Microsoft エッジ・サーバ、Microsoft フロント・エンド・サーバ、Microsoft 仲介サーバ、Microsoft 監視および CDR サーバ、Microsoft Registrar サーバ)	ポート 137, 138, 139(NetBIOS)を介しての Windows パフォーマンス・カウンタ。
Microsoft Hyper-V Monitor	ポート 137, 138, 139(NetBIOS)を介しての Windows パフォーマンス・カウンタ。
Microsoft IIS Server Monitor	ポート 137, 138, 139(NetBIOS)を介しての Windows パフォーマンス・カウンタ。
Microsoft SQL Server Monitor	ポート 137, 138, 139(NetBIOS)。
Microsoft Windows Event Log Monitor	ポート 137, 138, 139(NetBIOS)。
Microsoft Windows Media Player Monitor	監視するメディア・コンテンツと同じポートを使用。
Microsoft Windows Media Server Monitor	ポート 137, 138, 139(NetBIOS)。
Microsoft Windows Performance Counter Monitor	ポート 137, 138, 139(NetBIOS)。
Microsoft Windows Resources Monitor	ポート 137, 138, 139(NetBIOS)。
Network Bandwidth Monitor	ポートは不要で、ローカル・マシンのみを監視。
News Monitor	標準設定では、ポート 144。変更可能。

モニタ・タイプ	使用されるポート
Oracle Database Monitor	変更可能。対象となる DB によって異なる。標準設定では、ポート 1521。
Oracle 9i Application Server Monitor Oracle 10g Application Server Monitor	変更可能。Webcaching 管理ページで指定されたポート。
Ping Monitor	標準設定では、ポート 7。
Port Monitor	任意のポートを監視。
Radius Monitor	現在、パスワード認証プロトコル(PAP)認証をサポートするが、チャレンジ・ハンドシェイク認証プロトコル(CHAP)および Microsoft チャレンジ・ハンドシェイク認証プロトコル(MS-CHAP)はサポートしない。Radius サーバは、PAP リクエストを受け付けるように設定する必要がある。 標準設定では、ポート 1645。Radius 仕様の最近の変更では、このポートは 1812 に変更。モニタは変更可能。
Real Media Player Monitor	SiteScope ボックスで Real Media クライアントを使用します。メディア・コンテンツのストリーミング元のポートを使用します(URL に基づいて)。
Real Media Server Monitor	ポート 137, 138, 139(NetBIOS)。
SAP CCMS Monitor	SAP クライアント・ソフトウェア(SAP Front End)を使用して、特定の SAP トランザクションを実行。そのため、SAP と同じポートを使用。
Script Monitor	Windows ベースのシステムではポート 137, 138, 139(NetBIOS)。 Solaris/Linux ベースのシステムではポート 22 (SSH), 23(telnet), または 513(rlogin)。
Service Monitor	Windows ベースのシステムではポート 137, 138, 139(NetBIOS)。 Solaris/Linux ベースのシステムではポート 22 (SSH), 23(telnet), または 513(rlogin)。
SNMP Monitor	標準設定では、ポート 161。変更可能。
SNMP Trap Monitor	トラップの受信には、ポート 162 を使用。変更可能。
SunONE Web Server Monitor	対象 SunONE サーバの stats-xml ファイルの URL。ポートは変更可能。

モニタ・タイプ	使用されるポート
Sybase Monitor	Adaptive Server Enterprise Monitor Server に接続するには、SiteScope が稼動しているマシン上に Sybase Central クライアントが必要。ポート番号は、Sybase クライアントと同じ。
Syslog Monitor	Solaris/Linux ベースのシステムではポート 22 (SSH), 23(telnet), または 513(rlogin)。
Tuxedo Monitor	Tuxedo ワークステーション・リスナの標準設定では、ポート 65535。変更可能。
URL Monitor	通常はポート 80。変更可能。
Web Server Monitor	Windows ベースのシステムではポート 137, 138, 139(NetBIOS)。 Solaris/Linux ベースのシステムではポート 22 (SSH), 23(telnet), または 513(rlogin)。
Web Service Monitor	変更可能。
WebLogic Application Server Monitor	Oracle WebLogic アプリケーション・サーバ・モニタでは、Java JMX インタフェースを使用。ポートは変更可能。
WebSphere Application Server Monitor	IBM WebSphere 管理者のコンソールと同じポートを使用。
WebSphere Performance Servlet Monitor	WebSphere パフォーマンス・サーブレット。ポートは変更可能。

廃止された SiteScope モニタのリスト

SiteScope の最近のバージョンでは、多数のモニタが廃止されてサポートされなくなりました。次の表に、廃止されたモニタと、代わりに使用できるそれぞれのモニタ(存在する場合)を示します。

廃止されたモニタ	推奨される代替モニタ
Active Directory パフォーマンス	なし
Asset	なし
Astra Load Test	Web Script Monitor
DB2	DB2 8.x and 9.x Monitor
ディスク領域	Dynamic Disk Space Monitor
Dynamo	なし
iPlanet アプリケーション・サーバ	SunONE Web Server Monitor
IPlanet サーバ	SunONE Web Server Monitor
IPlanet Web サーバ	SunONE Web Server Monitor
ネットワーク	Network Bandwidth Monitor
Quick Test Pro	Web Script Monitor
RTSP	Real Media Player Monitor
SAP	SAP Performance Monitor
SAP Portal	SAP CCMS Monitor
SilverStream サーバ	なし
WebLogic 5.x アプリケーション・サーバ	なし

廃止されたテクノロジー統合モニタのリストについては、[440ページ「廃止された統合モニタのリスト」](#)を参照してください。

SiteScope モニタのユーザ・インタフェース

本項の内容

- 365ページ「新規モニタ・ダイアログ・ボックス」
- 367ページ「共通モニタ設定」
- 396ページ「[依存対象モニタの選択]ダイアログ・ボックス」
- 397ページ「[テンプレートの選択]ダイアログ・ボックス」
- 398ページ「[テンプレート ツリーにコピー]ダイアログ・ボックス」
- 399ページ「パーセンタイル範囲マッピング・テーブル」
- 400ページ「[ベースラインの計算]ダイアログ・ボックス」
- 402ページ「[順守レベルの微調整 / 限度の設定]ダイアログ・ボックス」
- 403ページ「[ベースラインのアクティブ化]ダイアログ・ボックス」
- 406ページ「[設定のバックアップ]ダイアログ・ボックス」
- 406ページ「[ベースライン モニタ測定値 グラフ]ダイアログ・ボックス」
- 409ページ「[ベースラインの削除]ダイアログ・ボックス」
- 409ページ「ベースラインの状態レポート」

新規モニタ・ダイアログ・ボックス

[新規モニタ]ダイアログ・ボックスでは、モニタ・グループで新規モニタを定義できます。

アクセス方法	[モニタ]コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで、グループを右クリックして[新規作成]>[モニタ]を選択します。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none">• モニタは SiteScope グループでのみ作成できます。• SiteScope 管理者ユーザ、または適切な権限を付与されたユーザのみがモニタを作成、編集、更新、無効化、確認できます。ユーザ権限の詳細については、792ページ「権限」を参照してください。• モニタにコンテナ・レベルで依存する警告またはレポートがある場合、そのモニタは削除できません。依存関係があるモニタを削除するには、各依存関係の[警告ターゲット]と[レポートのターゲット]からモニタを削除してから、モニタを削除する必要があります。子レベルの依存関係があるモニタは削除できます。• [モニタの詳細]フィールドでは、
、<HR>、などの、テキスト・スタイルの最も一般的なタグとハイパーリンクを含む HTML タグ(HTML バージョン 3.2)をサポートしています。JavaScript/iframes/frames またはその他の高度な機能はサポートしていません。• モニタの操作時に SiteScope API を使用することもできます。詳細については、43ページ「SiteScope 設定 API の使用」を参照してください。
関連タスク	341ページ「モニタのデプロイ方法」
関連情報	78ページ「モニタ・ツリー」

メイン設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
クイック検索	<p>[クイック検索] ボックスにモニタ名を入力します。検索に役立つ次の設定を選択できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> すべて: すべての列で一致を検索します。 モニタ: [モニタ] 列のみで一致を検索します。 カテゴリ: [カテゴリ] 列のみで一致を検索します。 大文字小文字を区別する: 大文字小文字を区別して一致を検索します。 大文字小文字を区別しない: 大文字小文字を区別しないで一致文字列を検索します。 ワイルドカードの使用: 検索にワイルドカード文字を使用できます。たとえば、文字列を表すアスタリスクのワイルドカード(*), または 1 文字のみを表す疑問符のワイルドカード(?)を使用します。 先頭から照合: 検索テキストに一致するモニタ・カテゴリを先頭から検索します。 完全に一致: 検索テキストに完全に一致するモニタ・カテゴリを検索します。 部分的に一致: 名前の一部に検索テキストを含むモニタ・カテゴリを検索します。
最近使用されたモニタ	<p>最近選択された 5 つのモニタを表示します。選択したモニタ・タイプの新規モニタを作成するには、リンクをクリックします。</p> <p>注: モニタを新たに選択すると、表示されるモニター一覧が変更される可能性があります。</p>
モニタ	<p>SiteScope モニタのリストが表示されます。モニタ・リンクをクリックしてリストからモニタを選択します。灰色で表示されたリンクからはモニタを使用できません。</p> <p>列ヘッダをクリックして、リスト上のモニタを並べ替えることができます。矢印で並べ替え順序が示されます(昇順または降順)。</p> <p>[モニタ] の見出しの右側の矢印をクリックしリンクからモニタ選択してモニタを選択することもできます。あるいは、[(カスタム ...)] を選択し、さまざまな条件を使用してモニタ・フィルタをカスタマイズできます。</p>

UI 要素	詳細
カテゴリ	<p>モニタ・カテゴリのリストが表示されます。</p> <p>列ヘッダをクリックして、リスト上のカテゴリを並べ替えることができます。矢印で並べ替え順序が示されます(昇順または降順)。</p> <p>カテゴリ別に選択するには、[カテゴリ]の見出しの右側にある矢印をクリックして、次に詳細を示すリストからモニタ・カテゴリを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none">• (すべて) - これは標準設定です。• (カスタム ...) - さまざまな条件を使用してカテゴリ・フィルタをカスタマイズできます。• アプリケーション• カスタマイズ可能• データベース• 汎用• 統合• Media• ネットワーク• サーバ• 仮想化とクラウド• Webトランザクション <p>各カテゴリのモニタについては、350ページ「モニタ・カテゴリ・リスト」を参照してください。</p>
可用性	<p>モニタの可用性状態(利用可能 / 不可)を表示します。</p> <p>列ヘッダをクリックして、可用性状態を並べ替えることができます。矢印で並べ替え順序が示されます(昇順または降順)。あるいは、[可用性]の見出しの右側の矢印をクリックし状況を選択して示すことができます。</p>

共通モニタ設定

共通モニタ設定を使用して、新規モニタを設定できます。

アクセス方法	<p>[モニタ]コンテキストを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none">• 新規モニタの場合 : モニタ・ツリーで、グループを右クリックして[新規作成]>[モニタ]を選択し、[新規モニタ]ダイアログ・ボックスからモニタを選択します。• 既存のモニタの場合 : モニタ・ツリーで、そのモニタを含むグループ・フォルダを展開して、モニタを選択します。右側の表示枠で、[プロパティ]タブをクリックします。
--------	--

関連タスク	341ページ「モニタのデプロイ方法」
関連情報	78ページ「モニタ・ツリー」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します(ラベルのない要素は山括弧内に表示されます)。

UI 要素	詳細
<設定表示枠>	<p>モニタの[プロパティ]タブにある次の設定表示枠は、すべてのモニタで共通です。特定の SiteScope モニタの設定の詳細については、そのモニタ・タイプのユーザ・インタフェース・ページを参照してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 369ページ「一般設定」 • 370ページ「モニタの実行設定」 • 372ページ「依存関係」 • 374ページ「しきい値の設定」 • 380ページ「HP 統合設定」(SiteScope が BSM と統合されている場合、または Operations Manager(HPOM)と統合されている場合で、イベント統合または測定値統合が有効になっている場合に表示されます) • 390ページ「イベント マッピング設定」(SiteScope が HPOM と統合されており、イベント統合が有効になっている場合、または[統合プリファレンス]で一般イベント統合が設定されている場合に表示されます) • 391ページ「モニタの有効化/無効化」 • 392ページ「関連する警告の有効化/無効化」 • 394ページ「タグの検索/フィルタ」 • 395ページ「ベースライン設定」 <p>注：[モニタを CI にリンクする]設定パネルは SiteScope 11.00 で削除され、その機能は [HP 統合設定]表示枠のカスタム・トポロジのレポート機能に置き換わりました。</p>
検証 & 保存	<p>設定を保存する前に、モニタ対象のローカルとリモート・サーバのモニタ設定が正しいかを検証します。SiteScope がリモート・サーバへの接続に失敗した場合、または設定に無効なプロパティがある場合、検証は失敗してエラー・メッセージが表示されます。</p> <p>ヒント：[保存]の代わりに[検証 & 保存]を使用すると、パフォーマンスはあまり速くなりません。SiteScope は設定を検証するためにリモート・サーバへの接続を確立する必要があるためです。テンプレート変更適用やグローバル検索と置換などのバルク操作では、[保存]オプションのみの使用を推奨します。</p>

UI 要素	詳細
保存	<p>設定のローカル検証を実行して、設定を保存します(リモート・サーバのモニタ設定が正しいかどうかは検証しません)。</p> <p>ヒント:[検証 & 保存]の代わりに[保存]を使用すると、パフォーマンスが速くなります。SiteScope は設定を検証するためにリモート・サーバへの接続を確立する必要がないためです。テンプレート変更適用やグローバル検索と置換などのバルク操作では、[保存]オプションのみの使用を推奨します。</p> <p>注: カスタマイズ可能なモニタ・タイプを保存する場合、[保存]は[検証 & 保存]と同じ影響をもたらします。SiteScope は、設定を保存する前に、モニタ設定が正しいかどうかをローカルと監視するリモート・サーバの両方で検証します。</p>

一般設定

[一般設定]パネルでは、モニタ・インスタンスの名前と詳細を作成できます。

アクセス方法	[モニタ]コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで、そのモニタを含むグループ・フォルダを展開して、モニタを選択します。右側の表示枠で、[プロパティ]タブをクリックして[一般設定]を選択します。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> モニタの詳細フィールドに入力した HTML コードは、有効性とセキュリティがチェックされ、コード(複数行にわたるために切り捨てられたコードなど)を修正する修正アクションが実行されます悪意のある HTML コードや JavaScript が検出されると、フィールド全体が拒否されます。 ダッシュボードでセルのすべての内容が表示されるように行の高さを自動的に調整するには、[ダッシュボードの設定]で[折り返しテキスト]オプションを選択します。詳細については、1097ページ「[ダッシュボードの設定]ダイアログ・ボックス」を参照してください。 すべての表示枠で共通のボタンについては、367ページ「共通モニタ設定」を参照してください。
関連タスク	341ページ「モニタのデプロイ方法」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
名前	<p>監視の対象となる要素またはシステムを示す名前。ビュー・フィルタの作成とカテゴリの割り当てをより効果的にするため、すべてのモニタに有益な命名規則を使用します。</p> <p>例: <hostname:resource_type> または <business_unit resource_name monitored_element></p> <p>標準設定値: 監視の対象となるホスト、システム、URL に基づいた標準設定の名前、またはモニタ・タイプに対して定義された標準設定の名前が SiteScope によって作成されます。</p>
モニタの詳細	<p>モニタを説明する追加情報。テキスト・スタイルの一般的な HTML タグ (
, <HR>, など) を含めることができます。詳細は、SiteScope ダッシュボードでモニタのプロパティを表示または編集するときのみ表示されます。</p> <p>また、HTML タグを含めることにより、SiteScope ダッシュボードから URL へのアクセスも行えます。ハイパーリンクを追加するには、URL を入力します (Windows のリモート環境では UNC パスがサポートされます)。例: My Link。この URL は、SiteScope ダッシュボードで選択したモニタの[詳細]フィールドに表示されます。</p> <p>注: このフィールドでは、JavaScript、iframes、frames やその他の高度な機能はサポートされていません。このボックスに入力した HTML コードは、有効性とセキュリティがチェックされ、コード (複数行にわたるために切り捨てられたコードなど) を修正する修正アクションが実行されます。悪意のある HTML コードや JavaScript が検出されると、フィールド全体が拒否されます。禁止されている HTML 内容は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> • タグ: script, object, param, frame, iframe。 • on で始まる属性を含むタグは拒否される。例: onhover。 • 値に javascript が指定された属性。
レポートの詳細	<p>モニタの動作をわかりやすくするための、このモニタの任意の詳細です。この詳細は、管理レポートの各棒グラフに表示されます。</p> <p>例: ネットワーク・トラフィックまたはメイン・サーバ応答時間。</p> <p>注: このボックスに入力した HTML コードは、有効性とセキュリティがチェックされ、コード (複数行にわたるために切り捨てられたコードなど) を修正する修正アクションが実行されます。悪意のある HTML コードや JavaScript が検出されると、フィールド全体が拒否されます。禁止されている HTML 内容は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> • タグ: script, object, param, frame, iframe。 • on で始まる属性を含むタグは拒否される。例: onhover。 • 値に javascript が指定された属性。

モニタの実行設定

[モニタの実行設定] パネルでは、モニタの実行を設定できます。

アクセス方法	[モニタ]コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで、そのモニタを含むグループ・フォルダを展開して、モニタを選択します。右側の表示枠で、[プロパティ]タブをクリックして[モニタの実行設定]を選択します。
重要な情報	すべての表示枠で共通のボタンについては、 367ページ「共通モニタ設定」 を参照してください。
関連タスク	341ページ「モニタのデプロイ方法」
関連情報	753ページ「スケジュール・プリファレンスの概要」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
頻度	<p>SiteScope によってモニタ・インスタンスに定義されたアクションの実行が試みられる頻度。各モニタの実行でモニタの状態が更新されます。ドロップダウン・リストを使用して、秒、分、時間、日のいずれかの増分を指定します。</p> <p>標準設定値 :10 分</p> <p>最小値 :15 秒</p> <p>注：テンプレートでこの設定を指定する場合、変数の値は秒単位でのみ設定できます。</p>
エラー時頻度	<p>エラー条件をレポートしたモニタの監視間隔。</p> <p>例：通常は 10 分間隔でモニタを実行し、エラーが検出された場合は 2 分間隔で実行するように指定できます。モニタの状態がエラーでなくなると、モニタは [頻度] 設定で指定した実行間隔に戻ります。</p> <p>注：</p> <ul style="list-style-type: none"> モニタの実行頻度を高くすると、モニタで生成される警告数に影響を与えます。 テンプレートでこの設定を指定する場合、変数の値は秒単位でのみ設定できます。


UI 要素	説明
エラーの検証	<p>エラーが検出された場合、モニタを自動的に再実行します。最初のエラーが誤った警告でなかったことを確認するために通常の実行がエラーを返した直後にモニタを実行します。エラーが再度返された場合には、モニタ実行の結果としてレポートされ、次の実行はモニタ・スケジュールに従って発生します。</p> <p>モニタがエラー状態のときにモニタ・スケジュールを変更するには、[エラー時頻度]の設定を確認します。これは特に大規模な SiteScope 環境の場合には、[エラーの検証]よりも優先され推奨される設定です。</p> <p>エラーの検証によるモニタの実行で返された状態が、エラーを検出した元のスケジュールの実行の状態を上書きします。検証の実行によるデータが最初のエラー状態と異なる場合、重要なパフォーマンス・データが失われる可能性があります。</p> <p>ヒント：このオプションは小規模な監視環境のみで使用することをお勧めします。複数のモニタが同時にエラーを検証するようにスケジュールされている場合、監視が大幅に遅くなる可能性があります。</p>
モニタのスケジュール	<p>特定の日または固定スケジュールでのみモニタを実行する場合の範囲スケジュール。[スケジュールプリファレンス]で作成された範囲スケジュールがドロップダウン・リストに表示されます。モニタのスケジュールの作成の詳細については、753ページ「スケジュール・プリファレンスの概要」を参照してください。</p> <p>標準設定値：毎日、全日</p> <p>注：[しきい値の設定]でしきい値のスケジュールを選択した場合、少なくとも1つのしきい値のスケジュールがモニタの実行スケジュールと重なる必要があります（モニタの実行スケジュールの少なくとも1分がしきい値のスケジュールのいずれかに含まれている必要があります）。</p>
更新時に実行結果を表示	<p>モニタの設定が変更されるたびに、モニタが実行されます。モニタの実行結果がポップアップ・ダイアログ・ボックスに表示されます。</p> <p>注：更新された実行結果は、モニタの適切な[ダッシュボード]ビューに常に表示されます。</p>

依存関係

[依存関係]パネルでは、モニタの実行を別のモニタの状態に依存させる依存関係を作成できます。

アクセス方法	[モニタ]コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで、そのモニタを含むグループ・フォルダを展開して、モニタを選択します。右側の表示枠で、 [プロパティ] タブをクリックして [依存関係] を選択します。
重要な情報	すべての表示枠で共通のボタンについては、 367ページ「共通モニタ設定」 を参照してください。
関連タスク	341ページ「モニタのデプロイ方法」
関連情報	329ページ「グループの依存関係の監視」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
依存対象	<p>[依存対象]  をクリックして[依存の対象モニタの選択]ダイアログ・ボックスを開き、モニタの実行を依存させるモニタを選択します。[依存の対象モニタの選択]ダイアログ・ボックスの詳細については、396ページ「[依存対象モニタの選択]ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p> <p>1つのシステムの異なる側面を監視している複数のモニタからの過剰な警告を避ける場合に、このオプションを使用します。</p> <p>例 :システムの基本的な可用性をチェックするシステム・モニタを作成して、システムのより詳細なテストを実行するほかのモニタを作成します。基本的な可用性をチェックするモニタの状態に依存するように、詳細テスト・モニタを設定します。</p> <p>システム・モニタによって対象システムが利用不可になったことが検出されると、依存関係によってほかのモニタが自動的に無効になります。また、依存するモニタによって生成される警告も無効になります。</p> <p>標準設定値 :モニタ・インスタンスに設定された依存関係はありません。</p> <p>テンプレート・モードで作業する場合の注意事項を次に示します。 [変更をパブリッシュするときに、依存関係を無視します]を選択したときは、このフィールドはクリアされ、使用できません。</p>
[依存条件]	<p>[依存対象]設定を使用してモニタを別のモニタの状態に依存させた場合、このオプションを使用して、現在のモニタが通常どおりに実行されるように[依存対象]のモニタの状態の条件を選択します。</p> <p>次の状態カテゴリがあります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 正常 • エラー • 利用可能 • 利用不可 <p>設定対象のモニタは、[依存対象]ボックスで選択したモニタがこのボックスで選択した条件をレポートしている場合、正常に実行されます。</p> <p>例 : [正常]を選択して、[依存対象]ボックスで選択したモニタが「正常」の状態をレポートする場合にのみこのモニタが有効になるようにします。[依存対象]ボックスで選択したモニタが「正常」以外のカテゴリまたは条件をレポートした場合、現在のモニタは自動的に無効になります。モニタがエラーを検出した場合に依存するモニタを有効にすることもできます。</p> <p>標準設定値 : 正常</p>

UI 要素	説明
依存関係をパブリッシュするとき、依存関係を無視します (テンプレート・モードのみで利用可能です)	<p>デプロイしたオブジェクトにテンプレート変更がパブリッシュされた場合、選択したテンプレート・グループに対する依存関係は無視され、デプロイしたオブジェクトの既存の依存関係が保持されます。詳細については、329ページ「グループの依存関係の監視」を参照してください。</p> <p>標準設定値：選択されていない</p> <p>注：選択すると、[依存対象]フィールドがクリアされ使用できません。</p>

しきい値の設定



各モニタ・インスタンスのレポートされる状態を決定する条件を設定するために使用します。状態の結果は、特定の期間中に対象システムのモニタ・アクションによって返された結果または測定値に基づきます。

各モニタ・インスタンスの状態のしきい値条件は、「エラー条件」、「警告条件」、「良好条件」の状態の条件に設定できます。許容可能または予測されるしきい値の範囲を構築するための比較を提供するためにベースラインを使用してモニタしきい値を設定することもできます。詳細については、[335ページ「ベースラインを使った状態しきい値の設定」](#)を参照してください。


アクセス方法	[モニタ]コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで、そのモニタを含むグループ・フォルダを展開して、モニタを選択します。右側の表示枠で、[プロパティ]タブをクリックして[しきい値の設定]を選択します。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> モニタ・インスタンスごとの各状態の条件に、複数の状態のしきい値条件を適用できます。1つのモニタ・インスタンスに、「エラー」状態を決定する1つ以上の条件、「警告」状態を決定する1つ以上の条件、「正常」状態を示す1つ以上の条件を設定できます。ほとんどのモニタ・タイプには、3つの状態の条件のそれぞれについて標準設定が1つ含まれています。 ベースラインしきい値を設定する場合、ベースラインの計算中とベースラインがアクティブになった後に、特定のしきい値条件のみ変更できます。許可されているしきい値の変更の詳細については、374ページ「しきい値の設定」を参照してください。 [グローバル検索と置換]で作業している場合、しきい値の設定の置換を選択すると、[カテゴリの上書き]オプションが表示されます。このオプションを選択すると、選択したモニタ・インスタンスのすべてのしきい値の設定が、置換操作に入力した設定で上書きされます。このオプションがクリアされている場合にしきい値の設定の置換を選択すると、入力した設定がモニタ・インスタンスの既存のしきい値の設定に追加されます。 すべての表示枠で共通のボタンについては、367ページ「共通モニタ設定」を参照してください。

関連タスク	<ul style="list-style-type: none"> • 341ページ「モニタのデプロイ方法」 • 344ページ「ベースラインを使用したモニタしきい値の設定方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> • 332ページ「状態のしきい値の設定」 • 335ページ「ベースラインを使った状態しきい値の設定」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
	<p>新規:「エラー」、「警告」、「正常」状態を決定する追加しきい値を作成します。各しきい値に対して測定値と演算子を選択し、測定値の値を入力します。</p> <p>標準設定では、モニタを最初に設定するときに「エラー」状態の2つのしきい値と、「警告」と「正常」状態の1つのしきい値が表示されます。</p>
	<p>削除:選択したしきい値を削除します。</p>
使用不能な場合	<p>モニタが使用不能な場合、次のオプションから状態を割り当てます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • モニタの状態をしきい値に応じて設定:しきい値に応じてモニタの新しい状態を取得します。 • モニタの状態を「正常」に設定:モニタが使用不能な場合、しきい値を確認せずにモニタの状態が「正常」に設定されます • モニタの状態を「警告」に設定:モニタが使用不能な場合、しきい値を確認せずにモニタの状態が「警告」に設定されます • モニタの状態を「エラー」に設定:モニタが使用不能な場合、しきい値を確認せずにモニタの状態が「エラー」に設定されます <p>注:モニタ・インスタンスには「利用不可」の状態および「正常」、「警告」、または「エラー」の状態を設定できます。可用性、状態、または可用性と状態の両方(警告の設定により異なる)に応じて警告が起動されます。詳細については、1204ページ「SiteScope 警告の概要」を参照してください。</p>
標準設定の状態	<p>モニタ・インスタンスのしきい値条件を満たさない場合のモニタの状態(「正常」、「警告」、または「エラー」)。</p> <p>標準設定値: 正常</p>

UI 要素	説明
内部エラーの場合	<p>設定または内部エラーが発生した場合、次のオプションからモニタの状態を割り当てます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● モニタの状態をしきい値に応じて設定：設定または内部エラーが発生した場合、モニタの状態が現在のしきい値に応じて設定されます(標準設定)。エラーがいつ発生したか(およびしきい値が古いデータ、更新されたデータ、またはその両方に基づいているかどうか)を確認する方法はないため、しきい値に依存すると信頼性が低くなります。たとえば、モニタが実行されなかった場合でも現在の状態を維持し、しきい値が不適切に定義された場合に状態が変更され、リモートが実際には接続されていない場合に使用不能として誤った警報を誘発する可能性があります。 ● モニタの状態を「エラー」に設定：設定または内部エラーが発生した場合、しきい値を確認せずにモニタの状態が「エラー」に設定されます。 ● モニタの状態を「警告」に設定：設定または内部エラーが発生した場合、しきい値を確認せずにモニタの状態が「警告」に設定されます。 ● モニタの状態を「正常」に設定：設定または内部エラーが発生した場合、しきい値を確認せずにモニタの状態が「正常」に設定されます。 ● モニタを利用不可として扱う：設定または内部エラーが発生した場合、しきい値を確認せずにモニタの状態が「利用不可」として扱われます。
Add Default Thresholds	しきい値の標準設定を適切な状態カテゴリのモニタ・インスタンスに追加します。標準設定のしきい値は、[(default)]ラベルで示されます。標準設定のしきい値は、[条件]フィールドから条件を選択(標準設定の条件を選択できます)した後でのみ編集できます。標準設定のしきい値の条件が変更されると、[(default)]ラベルは削除されます。
Remove Default Thresholds	モニタ・インスタンスからしきい値の標準設定([(default)]ラベルで示される)を削除します。追加した後に変更した標準設定は削除されません。
しきい値プレビュー	<p>[しきい値プレビュー]ダイアログ・ボックスが開き、静的カウンタおよび実際の現在のカウンタに変換される正規表現パターンのしきい値のプレビューを表示します。パターンによって、モニタは関連するダイナミック環境コンポーネントでカウンタとしきい値を用いて自動的にモニタ自体を設定できます(現在 VMware ホスト・モニタで使用できます)。</p> <p>テーブルには、パターンから変換される現在のカウンタごとに[インジケータ状態および重大度]の値も表示されます(この値は、[しきい値の設定]のパターンに対しては利用できません)。</p> <p>ダイナミック・モニタの詳細については、『HP SiteScope Monitor Reference』の「Dynamic Monitoring Mechanism」を参照してください。</p> <p>例：パターン <code>./*/VirtualMachine/./cpu/usage.average\[\\]/</code> は、現在監視対象となっている VM ごとに平均の CPU 使用しきい値の条件を表示します。</p>
エラー条件	「エラー」状態をレポートするモニタ・インスタンスの条件。

UI 要素	説明
条件	<p>モニタ・インスタンスの状態を決定する測定値パラメータ。測定値のリストは、設定しているモニタのタイプに基づいて動的に更新されます。</p> <p>標準設定値：多くのモニタ・タイプに存在し、モニタ・タイプごとに異なる標準設定の測定値。多くの標準設定の測定値の場合、対応する編集不可の演算子と値の標準設定ボックスがあります。</p>
オペレータ	<p>モニタ・インスタンスの状態を決定する測定値の演算子。次の演算子を利用できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • >=：より大きいか等しい • >：より大きい • ==：等しい • !=：等しくない • <=：より小さいか等しい • <：より小さい • contains：入力した値を含む • !contains：入力した値を含まない <p>注：現在のモニタ読み取りが以前の実行から大幅にそれる場合に、データ・ボラティリティを示すには、ベースラインを使用して状態のしきい値を設定します。詳細については、335ページ「ベースラインを使った状態しきい値の設定」を参照してください。</p>
値	<p>測定値パラメータに適用可能な値。</p> <p>注：</p> <ul style="list-style-type: none"> • モニタにアクティブなベースラインがある場合、その測定値は編集不可で[パーセンタイルテーブル 399ページ「パーセンタイル範囲マッピング・テーブル」を参照してください。 • ベースラインしきい値条件の測定値、演算子、スケジュールは変更できません。

UI 要素	説明
スケジュール	<p>しきい値に対するモニタの実行結果を確認する時期を定義する場合の、モニタ・インスタンスの状態を決定する範囲スケジュール。たとえば、特定の日またはピーク時間のみでしきい値に対するモニタの実行結果を確認する場合に役立ちます。[スケジュールプリファレンス]で作成された範囲スケジュールがドロップダウン・リストに表示されます。モニタのスケジュールの作成の詳細については、753ページ「スケジュール・プリファレンスの概要」を参照してください。</p> <p>標準設定値： 毎日, 全日</p> <p>注：しきい値のスケジュールを選択した場合、少なくとも1つのしきい値のスケジュールが[モニタの実行設定]の[モニタのスケジュール]と重なる必要があります(モニタの実行スケジュールの少なくとも1分がしきい値のスケジュールのいずれかに含まれている必要があります)。</p>

UI 要素	説明
Indicator State and Severity	<p>インジケータの状態(「ボトルネック」など)と、そのインジケータ状態に対応する重大度(「致命的」など)。</p> <p>各インジケータは、複数の状態を持つことができます。たとえば、CPU 負荷を測定する場合、インジケータ状態は「ボトルネック」や「ビジー」になる可能性があります。一方、メモリ負荷を測定する場合は、インジケータ状態が「ページング」や「メモリ不足」になる可能性があります。</p> <p>インジケータ状態と重大度レベルは、その測定値に関連付けられているインジケータの状態に存在する利用可能な重大度のうちの最も近い重大度に従って測定値状態にマップされます。インジケータ状態と重大度値は、[HP 統合設定]パネルで異なるインジケータ・マッピングが選択された場合に更新されます。</p> <p>インジケータ・マッピングの詳細については、332ページ「状態のしきい値の設定」を参照してください。</p> <p>注：</p> <ul style="list-style-type: none"> • [Indicator State and Severity]カラムを表示するためには、SiteScope を BSM 9.00 以降に接続する必要があります。 • インジケータ状態と重大度値は、SiteScope レポートには表示されません。 • [インジケータ状態および重大度]ボックスが空の場合、自動的に割り当てられる[常に(標準設定)]の場合を除き、測定値は[サービス状況]で色付けされません。 • ダイナミック・モニタの現在のカウンタごとに[Indicator State and Severity]値を表示するには(これらは正規表現パターンから変換された実際のカウンタ)、[しきい値プレビュー]ボタンをクリックします。インジケータ状態および重大度値は[しきい値プレビュー]ダイアログ・ボックスの実際のカウンタごとに表示されます。 • インジケータ状態と重大度の関連付けは、ローカル SiteScope サーバでは変更できません。 • 特定の測定値としきい値に関連付けられた、同一の重大度のインジケータ状態が複数存在する場合、(BSM のサービス状況 CI インジケータ・リポジトリで設定されている)標準の状態が採用されます。標準の状態が未定義の場合は、任意の状態が選ばれます。たとえば、[Host Disk Utilization]インジケータが、空き領域 (MB) 測定値にマッピングされ、そのインジケータに [Higher than normal]と[Lower than normal]という(どちらも標準で定義されたものではない)重大度が「致命的」の状態が2つある場合、これらの状態のどちらか1つがこのしきい値に割り当てられたインジケータ状態として使用できるようになります。
警告条件	「警告」状態をレポートするモニタ・インスタンスの条件。各しきい値に対して測定値と演算子を選択し、測定値の値を入力します。
良好条件	「正常」状態をレポートするモニタ・インスタンスの条件。各しきい値に対して測定値と演算子を選択し、測定値の値を入力します。

しきい値の設定の変更

モニタ・インスタンスのベースラインの状態に応じて、しきい値条件を変更できます。

モニタのベースラインの状態	しきい値条件の変更	しきい値条件の追加/削除
ベースライン未処理	任意のしきい値の条件を変更できます。	可能
計算プロセス/アクティブ化プロセス中	静的しきい値の測定値のみ変更できます。 たとえば、エラー条件 <code>CPU >= 70</code> 毎日、全日の場合、70 の値のみを別の値に変更できます。	不可
ベースライン処理済み	<ul style="list-style-type: none"> 静的しきい値の条件を変更できます。 ベースラインしきい値のみのパーセンタイル値を変更できます。 	静的しきい値のみ可能

HP 統合設定

[HP 統合設定] パネルでは、SiteScope と統合されたアプリケーションにモニタが転送するデータを制御できます。

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで、そのモニタを含むグループ・フォルダを展開して、モニタを選択します。右側の表示枠で、[プロパティ] タブをクリックして [HP 統合設定] を選択します。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> [HP 統合設定] パネルが表示されるのは、SiteScope が BSM と統合されている場合か、SiteScope が Operations Manager (HPOM) と統合されてイベントまたは測定値の統合が有効に設定されている場合だけです。EMS 統合モニタには表示されません。 カスタム・トポロジを使用できるのは、SiteScope がバージョン 9.00 以降の BSM に接続されている場合だけです。 インジケータ設定が行えるのは、SiteScope がバージョン 9.00 以降の BSM または HPOM に接続されている場合だけです。 HP Operations Manager の統合設定が行えるのは、HPOM 統合が設定され、SiteScope が HPOM に接続されている場合だけです。HPOM 統合の設定の詳細については、729 ページ「HP Operations Manager 統合ダイアログ・ボックス」を参照してください。 すべての表示枠で共通のボタンについては、367 ページ「共通モニタ設定」を参照してください。
関連タスク	<ul style="list-style-type: none"> 341 ページ「モニタのデプロイ方法」 231 ページ「SiteScope および BSM 間の統合の設定方法」
関連情報	696 ページ「統合プリファレンス」

BSM 統合データとトポロジ設定

このセクションでは、モニタ・インスタンスの BSM ログ記録オプションとトポロジ・レポート設定を選択できます。

重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> BSM ログ記録オプションを使用できるのは、BSM 統合が有効に設定されている場合だけです。 BSM 9.10 にアップグレード後に、ステータスの変更をレポートするように設定されたモニタはこれ以上に BSM のサービス状況に影響しません(システム・モニタ・ビューを除く)。これが発生するのは、測定値-インジケータ・マッピングと関連しないモニタごとにステータス変更イベントのサンプルが送信されるためです。サービス状況でステータス変更イベントのサンプルを使用している場合には、次を実行してください。 <ul style="list-style-type: none"> これらのイベントの SLM がない場合 メトリック・レポートに切り替えます。 サービス状況と SLM の両方がステータス変更イベントのサンプルに使用されている場合には、ステータス変更イベントのサンプルに加えて SiteScope 11.x へのアップグレードとイベント・レポートへの切り替えを推奨します。 BSM でイベント管理が導入されたため、[状態の変更をレポート]オプションが削除されました。このオプションは、< SiteScope のルート・ディレクトリ>\groups\master.config ファイルでプロパティ <code>allowToSendOnlyMonitorStatusToBSM9</code> を <code>=true</code> に変更することで後方互換性を有効にできます。 BSM ログ記録の選択は、このモニタの BSM へのレポートに関連するデータの量と、BSM データベースでこのデータに使用できる領域に基づいて行う必要があります。 トポロジ・レポートに関連する問題のトラブルシューティングについては、SiteScope ヘルプで『Integration with BSM and HPOM Best Practices』の「BSM Topology Issues」を参照してください。
関連タスク	<ul style="list-style-type: none"> 341ページ「モニタのデプロイ方法」 231ページ「SiteScope および BSM 間の統合の設定方法」 237ページ「トポロジ・レポートの設定方法」
関連情報	696ページ「統合プリファレンス」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します(ラベルのない要素は山括弧内に表示されます)。

UI 要素 説明
BSM ログ記録オプション

UI 要素	説明
BS-M へのメトリックのレポートを無効にする	このモニタの状態情報または測定値がBSMに転送されることを防ぐか、BSM へのモニタのレポートを一時的に無効にします。
モニタの状態およびメトリックのレポートを有効にする	モニタを実行するたびにすべての監視データをBSMに送信します。このオプションは最大のデータ転送読み込みを可能にします。 標準設定値：選択されている
モニタの状態のレポートを有効にする (メトリックなし)	モニタを実行するたびに、モニタ・カテゴリ(「エラー」、「警告」、「正常」)、状態の文字列、およびその他の基本的なデータのみを送信します。特定のパフォーマンス・カウンタでの情報は含まれません。 注 :このオプションがサポートされるのは、サービス状況ではなく、レガシ SLM との後方互換性に対してのみです。

UI 要素	説明
モニタの状態としきい値のあるメトリックのレポートを有効にする	<p>モニタ・カテゴリ(「エラー」、「警告」、「正常」)、状態の文字列、およびしきい値(「エラー条件」、「警告条件」、「良好条件」など)が設定された測定値カウンタのみのパフォーマンス・カウンタ・データを送信します。データはモニタを実行するたびに送信されます。</p>
トポロジ設定	
モニタおよび関連 CI のトポロジをレポート	<p>SiteScope はモニタおよび関連 CI のトポロジ・データを BSM の RTSM(Run-time Service Model) にレポートします。SiteScope から転送されるデータは、モニタ・タイプによって異なります。このオプションを使用すると、SiteScope で次のことが行えます。</p> <ul style="list-style-type: none"> サポートされる環境のグループからアプリケーションを監視するモニタのトポロジを検出し、特定の CI データを転送します。サポートされる環境の詳細およびリストについては、227 ページ「検出されたトポロジの BSM へのレポート」を参照してください。 ホストを監視するモニタのコンピュータ・CI データをレポートします(SiteScope は各監視対象ホストの Computer CI タイプを送信します)。このオプションが選択されている場合、モニタでは BSM の RTSM に CI としてホストを含めるトポロジが作成されます。 ユーザ定義の CI タイプとキー属性値に基づいて CI データをレポートします。 <p>オプションがクリアされると、モニタおよび関連 CI のトポロジ・データは BSM にレポートされず、およびインジケータ設定 セクションは使用できない状態になります。</p> <p>SiteScope から RTSM にデータをレポートする方法の詳細については、222 ページ「SiteScope データと BSM の構成アイテムとの統合」を参照してください。</p> <p>注： SiteScope が BSM に接続された状態で(イベント管理ファウンデーション・ライセンスを保有しており)、イベント送信が有効になっていると、ホストは操作管理経由で BSM にレポートされます。</p> <p>標準設定値：</p> <ul style="list-style-type: none"> サポートされる環境のモニタ、および標準設定で CI タイプが定義されるモニタの場合に選択されています。 標準設定でトポロジが定義されていないモニタの場合は選択されていません。これらのモニタのリストについては、249 ページ「初期設定でトポロジ・データをレポートしないモニタ」を参照してください。

UI	要素	説明
CI タイプ		<p>BSM の RTSM にデータをレポートするために使用される、モニタのトポロジ。このモニタ・インスタンスと BSM の RTSM 内の既存の論理構成アイテム・タイプ (CIT) をリンクできます。このリンク (関係) により、モニタでは KPI 状態をリンク先の CI に渡せます。</p>
		<p>CI タイプは次のことを示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> Default (<CI type>) : モニタの標準設定の CI タイプ (ほとんどのモニタでは、標準設定の CI タイプは Computer)。標準設定の CI タイプが Computer でないモニタのリストについては、227 ページ「サポート対象環境」を参照してください。 <p>CI タイプには、BusinessApplication, BusinessService, DB2, InfrastructureService, JBoss AS, Node, Oracle, Oracle iAS, SQL Server, Sybase, Unix, WebLogic AS, WebSphere AS, Windows があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> Default (Multiple) : モニタに複数の CI があります (これは CI タイプが測定値ごとに存在する場合)。これらのモニタの CI タイプは固定されていて変更できません。これらのモニタのリストについては、250 ページ「測定値ごとに CI をレポートするモニタ」を参照してください。 None : モニタ・インスタンスが CI タイプにリンクしていません。これらのモニタのリストについては、249 ページ「初期設定でトポロジ・データをレポートしないモニタ」を参照してください。RTSM ビューから CI タイプを選択し、このモニタ・インスタンスにリンクできます。ビューの選択およびビューを使った作業の詳細については、BSM ヘルプにある『モデリング・ガイド』の「CI セレクタを使った作業」を参照してください。 <p>注 :</p> <ul style="list-style-type: none"> この設定がアクティブになるのは、[モニタおよび関連 CI のトポロジをレポート]が選択されている場合だけです。 CI タイプを選択すると、インジケータ設定テーブルがフィルタされ、選択した CI タイプにのみ存在するマッピングが表示されます。


UI 要素	説明
<CI タイプ の キー 属 性>	<p>モニタ・インスタンスに選択した CI タイプに従って、CI タイプのキー属性が表示されます。選択した CI タイプのキー属性値を入力します。</p> <ul style="list-style-type: none"> サーバ: 選択した CI のコンテナ CI。この属性は、DB2, JBoss AS, Oracle, Oracle iAS, SQL Server, Sybase, WebLogic AS, WebSphere AS, および Windows CI タイプに必要です。 名前: <ul style="list-style-type: none"> CI の名前 (BusinessApplication, BusinessService, Computer, DB2, InfrastructureService, J-Boss AS, Oracle, Oracle iAS, SQL Server, Sybase, WebLogic AS, および WebSphere AS CI タイプ用)。 組織タイプ: 組織内のレベルを識別するために使用される識別子。この属性は、BusinessApplication, BusinessService, および InfrastructureService CI タイプに必要です。 組織名: 組織の名前。この属性は、BusinessApplication, BusinessService, および InfrastructureService CI タイプに必要です。 <p>注:</p> <ul style="list-style-type: none"> この設定がアクティブになるのは、[モニタおよび関連 CI のトポロジをレポート]が選択されている場合だけです。 CI キー属性は、CI タイプが測定値ごとのモニタの場合は表示されません。これらのモニタのリストについては、250ページ「測定値ごとに CI をレポートするモニタ」を参照してください。





インジケータ設定

このセクションには、SiteScope モニタ・タイプの測定値と、その測定値の割り当て先である状況インジケータ (HI) およびイベント・タイプ・インジケータ (ETI) が表示されます。インジケータは、モニタのトポロジが BSM の RTSM に報告されるときに、構成アイテム (CI) の状況の詳細ビューを提供します。インジケータ設定テーブルはフィルタされ、選択した CI タイプのみに存在するモニタ・インスタンスのマッピングが表示されます。

重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> インジケータ設定が使用できるのは Operations Manager イベント統合または BSM 統合が有効で、かつ次の条件が満たされている場合になります。 <ul style="list-style-type: none"> [モニタおよび関連 CI のトポロジをレポート] 設定が [BSM 統合データとトポロジ設定] セクションで選択されている。 モニタに標準設定の測定値とインジケータのマッピングがある。標準設定のインジケータ・マッピングを持たないモニタのリストについては、249ページ「初期設定でトポロジ・データをレポートしないモニタ」を参照してください。 (CI タイプが Default (Multiple) として表示される) 測定値ごとの CI タイプをレポートするモニタのインジケータ・マッピングは、[インジケータ設定] パネルで追加したり削除することができません。これらのモニタ・タイプに対するマッピングは、BSM ([SAM 管理] > [メトリックとインジケータ] タブ) でのみ追加したり削除できます。これらのモニタのリストについては、250ページ「測定値ごとに CI をレポートするモニタ」を参照してください。 SiteScope 内のインジケータ割り当てテーブルには、BSM 内のインジケータ割り当てリポジトリには存在しない割り当てが含まれることがあります。これは BSM 内で不正に定義されたマッピングは、SiteScope にダウンロードされる際に検証されないためです(一方 BSM では検証されるため、表示されます)。 CI およびインジケータに関する十分な知識がある上級ユーザ以外は、インジケータのマッピングの編集や、測定値へのマッピングの追加は行わないでください。 インジケータ・マッピング・テーブルのいずれかの設定を修正すると、これを示す注がテーブルの下に表示されます。
関連タスク	<ul style="list-style-type: none"> 341ページ「モニタのデプロイ方法」 237ページ「トポロジ・レポートの設定方法」
関連情報	222ページ「SiteScope データと BSM の構成アイテムとの統合」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

	<p>新規: モニタ・タイプに基づいて、モニタ・インスタンスに測定値とインジケータのマッピングを追加できます。</p> <p>注: このボタンは複数の CI タイプを持つモニタに対して使用できません(250ページ「測定値ごとに CI をレポートするモニタ」を参照)。これらのモニタに対するインジケータ・マッピングは、BSM ([SAM 管理] > [メトリックとインジケータ] タブ) でのみ追加できます。</p>
---	--

	<p>削除: 選択されている測定値とインジケータのマッピングを削除します。</p> <p>注: このボタンは複数の CI タイプを持つモニタに対して使用できません(250 ページ「測定値ごとに CI をレポートするモニタ」 を参照)。これらのモニタに対するインジケータ・マッピングは、BSM([SAM 管理] > [メトリックとインジケータ] タブ)でのみ削除できます。</p>
	<p>標準設定にセット: モニタ・タイプの測定値とインジケータ・マッピングを、現在のバージョンの SiteScope に含まれている標準設定のマッピングにリセットします。インジケータ・マッピングは、BSM のシステム可用性管理 (SAM) の中央リポトリに格納されます。SiteScope では、SAM でマッピングが変更されていないかを 5 分ごとにチェックし、変更されている場合は最新のマッピングをダウンロードします。</p> <p>ローカル SiteScope サーバ上でインジケータ・マッピングが変更された場合、これらのマッピングは、トポロジが次回 BSM にレポートされるときに、中央管理されているマッピングによって上書きされません。</p> <p>中央管理されているマッピングの変更の詳細については、BSM ヘルプにある『システム可用性管理の使用』の「インジケータ割り当ての概要」を参照してください。</p>
	<p>下へ移動: 選択したインジケータ・マッピングをリスト内で下方向へ移動することにより、インジケータ・マッピングのソート順を変更できます。マッピングの順序をローカルに変更する場合は、SAM 管理内のインジケータ・リポトリからマッピング変更がダウンロードされる際にローカルのマッピング順序が上書きされることはありません。</p>
	<p>上へ移動: 選択したインジケータ・マッピングをリスト内で上方向へ移動することにより、インジケータ・マッピングの並べ替え順序を変更できます。マッピングの順序をローカルに変更する場合は、SAM 管理内のインジケータ・リポトリからマッピング変更がダウンロードされる際にローカルのマッピング順序が上書きされることはありません。</p>
<p>測定値パターン</p>	<p>測定値名を表示またはモニタ・インスタンスのインジケータにマッピングされた測定値名に基づいて正規表現パターンを表示します。既存のマッピングを変更、または新規作成できます。同じ正規表現に複数の CI タイプが存在する場合は、別々の行にそれらが表示されます。正規表現の使用の詳細については、198 ページ「正規表現の使用」 を参照してください。</p> <p>注: 利用可能な測定値のリストは、設定しているモニタのタイプに基づいて動的に更新されます。多くのモニタ・タイプに存在し、それぞれのモニタ・タイプで異なる標準設定の測定値。</p>
<p>CI タイプ</p>	<p>モニタ・インスタンスに選択した CI タイプを表示します(インジケータ設定テーブルがフィルタされ、選択した CI タイプにのみ存在するマッピングが表示される)。</p> <p>注: このフィールドは編集できません。</p>
<p>インジケータ</p>	<p>測定値のインジケータ・マッピングを表示します。ドロップダウン・リスト内で、状況インジケータは区分線の上に表示され、イベント・タイプ・インジケータは区分線の下に表示されます。</p>

HP Operations Manager 統合設定

このセクションでは、HP Operations Agent にイベントを送信し、測定値をレポートするように SiteScope を設定できます。イベントを HPOM および BSM の操作管理に送信したり、測定値を Performance Manager(HPOM のレポート・コンポーネント) および BSM の PMi (データは操作管理の[パフォーマンス パースペクティブ]タブに表示)にレポートするには、エージェントが必要です。モニタ・インスタンスのイベントの送信に使用するイベント・プリファレンス・マッピングも選択できます。

重要な情報	これらの設定が行えるのは、HP Operations Agent がインストールされて HPOM サーバに接続されており、かつイベント/測定値統合が[Operations Manager 統合]ダイアログ・ボックスで有効に設定されている場合だけです。
関連タスク	<ul style="list-style-type: none">• 341ページ「モニタのデプロイ方法」• 268ページ「SiteScope を使用して HPOM または BSM にイベントを送信する方法」• 283ページ「SiteScope を使用して HP Operations Agent に測定値をレポートする方法」• 609ページ「HPOM または BSM 用の共通イベント・マッピングの設定方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none">• 696ページ「統合プリファレンス」• 607ページ「共通イベント・マッピング」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

HP Operations Agent へのメトリックのレポート	<p>HPOM および 操作管理 (BSM の) がデータの収集元として使用できる HP Operations Agent に対して、SiteScope からモニタ・インスタンスの測定値をレポートできます。</p> <p>注：モニタ測定値がエージェントに送信されるのは、[Operations Manager 統合]ダイアログ・ボックスで測定値統合が有効に設定されている場合だけです。ユーザ・インタフェースの詳細については、729ページ「HP Operations Manager 統合ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p> <p>標準設定値：測定値統合が有効になっている場合、選択済み(有効でない場合、この設定は行えません)。</p>
----------------------------------	--

イベント送信	<p>モニタ・インスタンスのカウンタ/測定値の状態(正常, 警告, エラー, 利用不可)に変更があった場合に HPOM または 操作管理 (BSM の) へのイベント送信を有効にします。状態の変更は、モニタのしきい値の設定で指定されているカウンタまたは測定値にのみ適用されます。</p> <p>注: この設定が行えるのは、HP Operations Agent がインストールされて HPOM または BSM サーバに接続されており、かつイベント統合が[Operations Manager 統合]ダイアログ・ボックスで有効に設定されている場合だけです。ユーザ・インタフェースの詳細については、729ページ「HP Operations Manager 統合ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p> <p>標準設定値: イベント統合が有効になっている場合、選択済み(有効でない場合、この設定は行えません)。</p>
最初のイベントを手動で送信	<p>BSM に接続されている SiteScope で新しいモニタを作成すると、BSM にトポロジがレポートされる前に最初のイベントがトリガされる可能性があります。この際、このイベントは サービス状況 パースペクティブから消失します(操作管理には引き続き表示されている)。このオプションは、次のイベントが送信されるのを待機するのを避ける場合に選択してください。モニタの測定値がその状態変更条件を満たしていても、イベントは次のモニタ実行時に再送信されます。</p> <p>標準設定値: 選択されていない</p> <p>注:</p> <ul style="list-style-type: none"> このオプションは、モニタの実行後、自動的に無効になります。 この設定は、[グローバル検索と置換]を使用してグローバルに行えます。

BSM サービス状況プリファレンス

このセクションによって、SiteScope イベントとメトリックスの両方が BSM にレポートされるときに BSM のサービス状況に影響を与えるプリファレンスを設定できます。

重要な情報	<p>この設定を使用できるのは次の場合に限ります。</p> <ul style="list-style-type: none"> BSM および Operations Manager 統合の両方がアクティブで、同じ BSM サーバに接続されている(HPOM サーバの代わりに BSM サーバが使用されます)。 モニタの[HP 統合設定]で次の設定を行います。 <ul style="list-style-type: none"> BSM 統合データとトポロジ設定で: [モニタの状態およびメトリックのレポートを有効にする]または[モニタの状態としきい値のあるメトリックのレポートを有効にする]、および HP Operations Manager 統合設定で: [イベント送信]を設定します。 <p>注:</p> <ul style="list-style-type: none"> [イベント送信]だけが選択されている場合、[次の要因に影響される BSM サービス状況]プリファレンスは[イベント]に設定されます。 [モニタおよび関連 CI のトポロジをレポート]だけが選択されている場合、[次の要因に影響される BSM サービス状況]プリファレンスは[メトリックス]に設定されます。 両方が選択されている場合、[メトリックス]が標準設定のプリファレンスとなります。
-------	---

関連タスク	<ul style="list-style-type: none"> 341ページ「モニタのデプロイ方法」 237ページ「トポロジ・レポートの設定方法」 268ページ「SiteScope を使用して HPOM または BSM にイベントを送信する方法」
--------------	---

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

次の要因に影響される BSM サービス状況	<p>SiteScope イベントおよびメトリックスの両方がサービス状況 にレポートされるときに BSM のサービス状況 に影響を与えるプリファレンス(イベントまたはメトリックス)を選択します(SiteScope イベントおよびメトリックス両方のインジケータが CI に影響を与えるため)。</p> <ul style="list-style-type: none"> 測定値：選択されると、各 SiteScope 測定値は BSM で CI に影響します (SiteScope によってレポートされるステータス変更イベントは サービス状況 で CI に全く影響しません)。 イベント：選択されると、ステータス変更イベントは BSM のサービス状況 の CI に影響します(監視対象の CI の SAM レポートはこれまで通りメトリックスに基づいています)。 <p>使用するプリファレンスの選択の詳細については、SiteScope ヘルプ『Integration with BSM and HPOM Best Practices』の「Integrating SiteScope with BSM」を参照してください。</p> <p>標準設定値 :メトリックス</p> <p>注 : Operations Manager 統合 の設定時に作成されたすべての新しいモニタにグローバル標準設定プリファレンス(イベントまたはメトリックス)も設定できます。詳細は、729 ページ「HP Operations Manager 統合 ダイアログ・ボックス」の BSM サービス状況 のメトリックよりイベントを優先します (グローバル・プリファレンス)を参照してください。</p>
------------------------------	---

イベント マッピング設定

[イベント マッピング設定] パネルは、モニタ・インスタンスのイベント送信時に使用される属性値に対して、SiteScope のランタイム・データをマッピングするためのテンプレートを選択する場合に使用されます。

アクセス方法	<p>[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで、そのモニタを含むグループ・フォルダを展開して、モニタを選択します。右側の表示枠で、[プロパティ] タブをクリックして [イベント マッピング設定] を選択します。</p>
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> [イベント マッピング設定] パネルを利用できるのは、HP Operations Agent がインストールされて HPOM または BSM サーバに接続されており、かつイベント統合が[HP Operations Manager 統合] ダイアログ・ボックスで有効に設定されている場合や[統合プリファレンス]で一般イベント統合が設定されている場合になります。ユーザ・インタフェースの詳細については、729 ページ「HP Operations Manager 統合 ダイアログ・ボックス」を参照してください。 すべての表示枠で共通のボタンについては、367 ページ「共通モニタ設定」を参照してください。

関連タスク	<ul style="list-style-type: none"> 341ページ「モニタのデプロイ方法」 705ページ「SiteScope 一般 イベント統合の設定方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> 702ページ「汎用イベント統合の概要」 658ページ「HTTP プリファレンス」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します(ラベルのない要素は山括弧内に表示されます)。

UI 要素	説明
イベント マッピング	<p>必要なイベント・マッピング・テンプレートを選択するか、標準設定のマッピングを使用します。[新規]または[編集]をクリックして[共通 イベント マッピング]ダイアログ・ボックスを開き、新しいイベント・プリファレンスを設定するか、既存のイベント・プリファレンスを変更します。ユーザ・インタフェースの詳細については、612ページ「[新規 イベント マッピング] / [イベント マッピングの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p> <p>注：ここでイベント・マッピングを編集すると、このテンプレートを使用しているすべてのモニタのイベント・パターンが変更されます。特定のモニタによって別の属性をレポートするためには、新しいイベント・マッピングを作成することをお勧めします。</p>

モニタの有効化/無効化

[モニタの有効化/無効化]パネルでは、選択したモニタの状態(有効/無効)を設定できます。

アクセス方法	[モニタ]コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで、そのモニタを含むグループ・フォルダを展開して、モニタを選択します。右側の表示枠で [プロパティ] タブをクリックして [モニタの有効化/無効化] を選択します。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> モニタの詳細フィールドに入力した HTML コードは、有効性とセキュリティがチェックされ、コード(複数行にわたるために切り捨てられたコードなど)を修正する修正アクションが実行されます悪意のある HTML コードや JavaScript が検出されると、フィールド全体が拒否されます。 モニタのダウンタイム・テーブルは、SiteScope が BSM に接続されていて、選択したモニタが現在ダウンタイム中の CI の影響を受ける場合にのみ表示されます。詳細については、229ページ「CI のダウンタイム」を参照してください。 カスタム・モニタを含んでいるテンプレートに対して変更を適用すると、モニタは変更が適用される前に一時的に無効になり、変更の適用の完了後に、有効な状態に復帰します。 すべての表示枠で共通のボタンについては、367ページ「共通 モニタ設定」を参照してください。
関連タスク	341ページ「モニタのデプロイ方法」
関連情報	1101ページ「[グループ内のモニタの有効化 / 無効化] ダイアログ・ボックス」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します(ラベルのない要素は山括弧内に表示されます)。

UI 要素	説明
モニタを有効化	モニタがすでに無効になっている場合、モニタを有効にします。 標準設定値：選択されている
モニタを無効化	モニタを無効にします。モニタが無効化されている場合、SiteScope では、引き続きモニタの[頻度]設定に基づいてモニタの実行をスケジュールしますが、モニタ・アクションは実行されません。モニタの実行がスケジュールされていても、SiteScope によってモニタのデータ・ログ・エントリが記録されますが、この場合は測定値データの代わりにモニタの状態が無効であるという報告が記録されます。
次の時間設定でモニタを無効化： ＜期間＞	モニタを無効にしておく期間。[秒]、[分]、[時間]、または[日]を選択して、適用する無効化期間を定義します。
1 回限りのスケジュールに基づいてモニタを無効化： ＜時間＞ ～ ＜時間＞	モニタを将来のある期間だけ一時的に無効にします。1 日より長い期間に設定できます。 hh:mm:ss mm/dd/yyyy の形式で無効化期間の開始時間と終了時間を入力または選択します。
無効化の説明	モニタ・グループ表示にモニタの状態の一部として表示される省略可能な説明テキスト。無効化状態のテキストには、どの無効化オプションがモニタに適用されているかを示す文字列も含まれます。たとえば、「手動で無効化されています」は、[モニタを無効化]オプションを使用してモニタが無効にされたことを示します。
モニタのダウンタイム・テーブル (このテーブルは、SiteScope が BSM に接続されていて、選択したモニタが現在ダウンタイム中の CI の影響を受ける場合にのみ表示されます。詳細については、 229 ページ「CI のダウンタイム」 を参照)。	
ダウンタイム名	[BSM Downtime] ウィザードで設定されたダウンタイムの名前。
ダウンタイムの詳細	[BSM Downtime] ウィザードで入力されたダウンタイムの詳細。
現在オカレンスの終了日	現在発生しているダウンタイムが終了する予定日時。

関連する警告の有効化/無効化

[関連する警告の有効化/無効化] パネルでは、関連付けられている警告の状態(有効/無効)を設定できます。

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで、そのモニタを含むグループ・フォルダを展開して、モニタを選択します。右側の表示枠で[プロパティ] タブをクリックして[関連する警告の有効化/無効化]を選択します。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> モニタの詳細フィールドに入力した HTML コードは、有効性とセキュリティがチェックされ、コード(複数行にわたるために切り捨てられたコードなど)を修正する修正アクションが実行されます。悪意のある HTML コードや JavaScript が検出されると、フィールド全体が拒否されます。 関連付けられた警告のダウンタイム・テーブルは、SiteScope が BSM に接続されていて、モニタが現在ダウンタイム中の CI の影響を受け、かつモニタの関連付けられた警告にダウンタイムが適用される場合にのみ表示されます。詳細については、229 ページ「CI のダウンタイム」を参照してください。 すべての表示枠で共通のボタンについては、367 ページ「共通モニタ設定」を参照してください。
関連タスク	<ul style="list-style-type: none"> 341 ページ「モニタのデプロイ方法」 1226 ページ「警告の設定方法」
関連情報	1204 ページ「SiteScope 警告の概要」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します(ラベルのない要素は山括弧内に表示されます)。

UI 要素	説明
関連付けられたすべての警告を有効化	<p>このモニタに関連付けられた警告がすでに無効になっている場合は、その警告を有効にします。</p> <p>標準設定値: 選択されている</p>
警告を無期限に無効化	<p>このラジオ・ボタンをクリアして警告定義を更新するまで、警告の条件に一致しても SiteScope で警告アクションが実行されないようになります。</p> <p>注: このオプションを使用すると、一時的な条件に対応するために警告が無効になっている場合、予想される警告機能が失われる場合があります。後でこの状態を確認し、必要に応じて警告定義を手動で有効にしてください。</p> <p>標準設定値: 選択されていない</p>
次に関連付けられたすべての警告を無効化 : <期間>	<p>関連付けられた警告を無効にしておく期間。[秒], [分], [時間], または[日]を選択して、適用する無効化期間を定義します。</p> <p>標準設定値: 選択されていない</p>

UI 要素	説明
1 回限りのスケジュールに基づいて関連付けられたすべての警告を無効化: 開始<時刻> ~ 終了<時刻>	<p>関連付けられた警告を将来のある期間だけ一時的に無効にします。1 日より長い期間に設定できます。</p> <p>hh:mm:ss mm/dd/yyyy の形式で無効化期間の開始時間と終了時間を入力します。</p> <p>標準設定値: 選択されていない</p>
無効化の説明	省略可能な説明テキスト。
<p>関連付けられた警告のダウンタイム・テーブル</p> <p>(このテーブルは、SiteScope が BSM に接続されていて、モニタが現在ダウンタイム中の CI の影響を受け、かつモニタに関連付けられた警告にダウンタイムが適用される場合にのみ表示されます。詳細については、229 ページ「CI のダウンタイム」を参照)。</p>	
ダウンタイム名	[BSM Downtime] ウィザードで設定されたダウンタイムの名前。
ダウンタイムの詳細	[BSM Downtime] ウィザードで入力されたダウンタイムの詳細。
現在オカレンスの終了日	現在発生しているダウンタイムが終了する予定日時。

タグの検索/フィルタ

[タグの検索/フィルタ] パネルでは、新しい検索/フィルタ・タグを追加し、コンテキスト・ツリー内のオブジェクトとプリファレンス・プロファイルにタグを割り当てることができます。SiteScope オブジェクト (グループ、モニタ、リモート・サーバ、テンプレート、プリファレンス・プロファイル) を検索およびフィルタするために、キーワード・タグが使用される。SiteScope にタグが作成されていない場合、このセクションは空白で表示されます。タグが作成されている場合はここに表示され、必要に応じてタグを選択できます。

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで、そのモニタを含むグループ・フォルダを展開して、モニタを選択します。右側の表示枠で[プロパティ] タブをクリックして[タグの検索/フィルタ]を選択します。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> [プリファレンス] コンテキスト ([プリファレンス] > [タグの検索/フィルタ]) で既存のタグを編集できます。このトピックの詳細については、761 ページ「タグの検索/フィルタの概要」を参照してください。 すべての表示枠で共通のボタンについては、367 ページ「共通モニタ設定」を参照してください。
関連タスク	<ul style="list-style-type: none"> 341 ページ「モニタのデプロイ方法」 107 ページ「検索/フィルタ・タグを使用したオブジェクトの検索方法」
関連情報	106 ページ「SiteScope オブジェクトの検索」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します(ラベルのない要素は山括弧内に表示されます)。

UI 要素	説明
<タグ名と値>	タグが作成されている場合は、タグの名前と値が表示されます。オブジェクトに割り当てるタグまたはタグの値を選択します。SiteScope にタグが作成されていない場合、このセクションは空白で表示されます。
タグの追加	[新規タグ]ダイアログ・ボックスを開き、新しいキーワード・タグを追加できる。ユーザ・インタフェースの詳細については、 111ページ「[新規タグ]/[タグの編集]ダイアログ・ボックス」 を参照してください。

ベースライン設定

[ベースライン設定] パネルには、選択したモニタのベースラインの状態が表示されます。


アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで、そのモニタを含むグループ・フォルダを展開して、モニタを選択します。右側の表示枠で[プロパティ] タブをクリックして[ベースライン設定]を選択します。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> ベースライン設定は、しきい値設定を更新するためのダイナミック・モニタリング・メカニズムを使用するモニタには使用できません。 すべての表示枠で共通のボタンについては、367ページ「共通モニタ設定」を参照してください。
関連タスク	<ul style="list-style-type: none"> 341ページ「モニタのデプロイ方法」 344ページ「ベースラインを使用したモニタしきい値の設定方法」
関連情報	335ページ「ベースラインを使った状態しきい値の設定」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。







UI 要素	説明
ベースラインの状態	<p>モニタのベースライン状態。次の状態があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • ベースライン設定するモニタが選択されていません：ベースライン設定するモニタが選択されていません。 • ベースラインの計算中：SiteScope でベースラインを計算中です。 • 計算に失敗：SiteScope でベースラインを計算できませんでした。 • 計算済み, アクティブでない：モニタのベースラインが計算されましたが、まだアクティブ化されていません。 • ベースラインの有効化：SiteScope でベースラインをアクティブ化しています。 • アクティベーションが失敗しました：SiteScope でベースラインをアクティブ化できませんでした。 • アクティブ化されたベースライン：モニタのベースラインがアクティブ化されました。 <p>ベースラインの状態が「ベースライン設定するモニタが選択されていません」以外の場合は、[ベースライン モード]チェック・ボックスが選択されています。</p> <p>ベースラインしきい値の使用の詳細については、335ページ「ベースラインを使った状態しきい値の設定」を参照してください。</p>
ベースラインの削除	<p>ベースラインしきい値を削除します。ベースラインしきい値が削除され、静的しきい値を使用してしきい値が作成されます。ベースラインを計算した後に（計算が失敗した場合でも）ベースラインを計算するには、ベースラインを削除する必要があります。</p> <p>このトピックの詳細については、335ページ「ベースラインを使った状態しきい値の設定」を参照してください。</p>

[依存対象モニタの選択] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、別のモニタの状態に基づいてこのモニタまたはモニタ・グループを実行するように設定できます。

アクセス方法	<p>[モニタ]コンテキストを選択します。モニタ・ツリーでモニタを選択し、[プロパティ]タブをクリックします。[依存関係]タブを展開し、[依存対象]  をクリックします。依存関係を作成するモニタを選択します。</p>
関連タスク	<p>341ページ「モニタのデプロイ方法」</p>
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> • 329ページ「グループの依存関係の監視」 • 78ページ「モニタ・ツリー」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。


UI 要素	説明
 SiteScope	個々の SiteScope サーバを表します。
	SiteScope モニタ・グループまたはサブグループ(有効化されたモニタを含む, モニタを含まない, または有効化されたモニタがない)を表します。 モニタ・グループまたはサブグループにグループ警告が設定されている場合, グループ・アイコンの横に警告  記号が表示されます。
	SiteScope モニタ(有効/無効)を表します。 モニタに警告が設定されている場合, モニタ・アイコンの横に警告  記号が表示されます。
	SiteScope モニタの適切な機能をチェックするためにデプロイされる利用可能な状況モニタの集合を表します。 親: SiteScope。



[テンプレートの選択]ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは, モニタ・グループにデプロイするテンプレートを選択できます。

アクセス方法	[モニタ]コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで, テンプレートのデプロイ先のグループを右クリックして, [テンプレートのデプロイ]または[CSV を使用してテンプレートをデプロイ]を選択します。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> 子オブジェクト(サブグループ, モニタ, 変数, リモート・サーバ)がまったく含まれていないテンプレートは, テンプレート・ツリーに表示されません。 ソリューション・テンプレートは[テンプレートの選択]ダイアログ・ボックスには表示されず, [テンプレート]コンテキストからのみデプロイできます。詳細については, 932ページ「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」を参照してください。
関連タスク	840ページ「テンプレートを使用した SiteScope 監視ソリューションの設定方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> 890ページ「テンプレート・デプロイメントの更新」 927ページ「SiteScope ソリューション・テンプレート」 78ページ「モニタ・ツリー」 88ページ「テンプレート・ツリー」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
 SiteScope	SiteScope ルート・グループを表します。



UI 要素	説明
	テンプレート・コンテナを表します。テンプレート・コンテナは、デプロイメントの設定テンプレートの整理に使用されます。展開するとテンプレートが表示されます。
	SiteScope オブジェクトのデプロイ用のテンプレート設定を表します。デプロイするテンプレートを選択します。CTRL または SHIFT キーを使用すると複数のテンプレートを選択できます。




[テンプレート ツリーにコピー] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、テンプレートまたはテンプレート・グループに SiteScope オブジェクト(グループ、モニタ、リモート・サーバ)とその内容(モニタ、警告、レポート)をコピーできます。

アクセス方法	モニタ・ツリーまたはリモート・サーバ・ツリーで、テンプレートにコピーするオブジェクトを右クリックして、[テンプレートにコピー]を選択します。[テンプレート ツリーにコピー] ダイアログ・ボックスで、テンプレート・オブジェクトのコピー先を選択します。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> テンプレートにまだグループが含まれていない場合、グループとその内容をテンプレートにコピーできます。 サーバ・モニタをテンプレートにコピーすると、SiteScope によってサーバ名が \$\$SERVER_LIST\$\$ 変数で置換されます。 <p>ヒント: モニタをテンプレートにコピーした後にテンプレートにリモート・サーバを作成し、\$\$SERVER_LIST\$\$ 変数をこのリモート・サーバで置換することをお勧めします。</p> <ul style="list-style-type: none"> Web スクリプト・モニタはテンプレート・モードではサポートされていません。
関連タスク	840ページ「テンプレートを使用した SiteScope 監視ソリューションの設定方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> 78ページ「モニタ・ツリー」 88ページ「テンプレート・ツリー」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
 SiteScope	個々の SiteScope サーバを表します。
	<p>テンプレート・コンテナを表します。テンプレート・コンテナは、デプロイメントの設定テンプレートの整理に使用されます。</p> <p>テンプレート・コンテナにはテンプレートのみを格納できます。</p>

UI 要素	説明
	SiteScope オブジェクトのデプロイ用のテンプレート設定を表します。 テンプレート・グループ(テンプレートにまだグループが含まれていない場合)またはリモート・サーバをテンプレート・グループにコピーできます。
	SiteScope モニタ・グループまたはサブグループ(有効化されたモニタを含む、モニタを含まない、または有効化されたモニタがない)を表します。 テンプレート・グループまたはモニタをテンプレート・グループにコピーできます。 モニタ・グループまたはサブグループにグループ警告が設定されている場合、グループ・アイコンの横に警告  記号が表示されます。

パーセンタイル範囲マッピング・テーブル

このテーブルには、各パーセンタイル範囲にマップされている実際の値が表示されます。SiteScope ではパーセンタイル値を使用してベースラインのエラーしきい値と警告しきい値を定義します。このテーブルを使用して、パーセンタイル値に対応する実際の値を表示し、パーセンタイル値を手動で変更します。

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで、ベースラインがアクティブ化されているモニタを選択します(モニタにアクティブ化されたベースラインがあるかどうかは、グループまたはモニタを右クリックして[ベースライン設定] > [状態レポート]を選択すると確認できます)。モニタの[しきい値の設定]を展開し、[パーセンタイルテーブル] ボタンをクリックします。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> このテーブルは、ベースラインがアクティブ化されているモニタのみで使用できます。 現在のパーセンタイルは 100% より大きい値に設定できます。これにより、収集したサンプル測定値に基づいて、しきい値レベルを設定されたレベルより高くできます。たとえば、収集した CPU 使用率の測定値の範囲が 10% ~ 60% で、CPU 使用率が 80% を超えるエラーのみを取得するには、エラーしきい値レベルを望ましいレベルまで上げるパーセンタイルにパーセンタイル値を設定します。この場合は、パーセンタイルを 134%(CPU 使用率 $60\% * 134\% = \text{CPU 使用率 } 80.4\%$) に設定します。
関連タスク	344 ページ「ベースラインを使用したモニタしきい値の設定方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> 335 ページ「ベースラインを使った状態しきい値の設定」 374 ページ「しきい値の設定」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
パーセンタイル範囲	<p>ベースライン・エラーおよび警告しきい値の定義に使用する実際の値に 관련된パーセンタイル範囲。SiteScope のプリファレンス([プリファレンス] > [インフラストラクチャ プリファレンス] > [ベースライン設定])で、テーブルに表示されるパーセンタイル範囲の数値を設定できます。</p> <p>注: 左の値は含まれず、右の値は含まれます。つまり、33 ~ 100 というパーセンタイル範囲の場合、33 より大きくて(33 は含まない)100 までのすべての値が範囲に含まれます。33 は前の範囲に含まれ、100.01 は次の範囲に含まれます。</p>
実際の値	パーセンタイル範囲にマップされる実際の値。
現在のパーセンタイル	ベースラインしきい値の定義に使用する実際の値に 관련된パーセンタイル値。

[ベースラインの計算] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、ベースラインの計算に含めるグループまたはモニタ、あるいはその両方の選択、ベースライン・データ収集の時間範囲スケジュールの選択、モニタ測定サンプル値がしきい値にどの程度影響するかを判断するための順守レベルの選択と微調整、ベースラインしきい値の計算を実行できます。

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで SiteScope コンテナ、グループ、またはモニタを右クリックして、[ベースライン設定] > [計算] を選択します。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> ベースライン機能を使用してモニタのしきい値を設定できるのは、SiteScope の管理者または「モニタを追加、編集、または削除します」の権限か「モニタの編集または削除のみ」の権限を持つユーザのみです。また、設定できる対象はユーザに許可されているグループ・リストに含まれるモニタのみです。ユーザに権限がないグループ内のモニタは、ダイアログ・ボックスに表示されません。ユーザ権限の詳細については、773 ページ「ユーザ管理プリファレンスの概要」を参照してください。 ベースラインしきい値の計算に必要な時間は、SiteScope サーバの処理速度とベースライン設定で選択したモニタ数に左右されます。計算プロセスを完了する前に SiteScope を再起動する必要がある場合、再起動後に自動的にプロセスが続行されます。 SiteScope でベースラインを計算するために必要なデータを蓄積するのに十分と思われる期間、モニタが実行されるようにします。この期間は、[インフラストラクチャプリファレンス] の [ベースライン設定に必要な最小日数] および [ベースライン設定に必要な最小サンプル数] 設定に応じて変わります。詳細については、669 ページ「[インフラストラクチャプリファレンス] ページ」を参照してください。ベースラインは、モニタに十分なデータがなくても計算およびアクティブ化できますが、計算は正確でない可能性が高くなります。
関連タスク	344 ページ「ベースラインを使用したモニタしきい値の設定方法」
関連情報	335 ページ「ベースラインを使った状態しきい値の設定」

ベースライン計算対象のモニタの選択

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します(ラベルのない要素は山括弧内に表示されます)。

UI 要素	説明
<利用可能なグループまたはモニタ、あるいはその両方のリスト>	<p>ベースラインしきい値の計算に含めるグループまたはモニタ、あるいはその両方。リストには、現在選択されているコンテナ、およびユーザの許可されているグループ・リストに含まれるすべての子コンテナが表示されます。</p> <p>標準設定値：現在のコンテナおよび選択されているすべての子要素。</p> <p>注：次の場合、モニタ・インスタンスは選択できません。</p> <ul style="list-style-type: none"> ベースラインがすでにアクティブ化されている。この場合、選択チェック・ボックスは表示されません。 SiteScope に同じ名前別の別のモニタがある(ファイル・パス、グループ名、モニタ名が同一)。この場合、モニタ名の横に「名前の重複」と表示されます。

スケジュール

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
スケジュール範囲名	<p>ベースラインしきい値データの収集に使用するスケジュール範囲。これによって、ベースラインの計算に使用する監視データの収集期間を特定の日または時間に制限できます。作成されるベースラインしきい値は、同じスケジュール範囲期間のみ有効になります。表示される範囲スケジュールは、[スケジュールプリファレンス]で作成されます。範囲スケジュールの作成の詳細については、753ページ「スケジュール・プリファレンスの概要」を参照してください。</p> <p>注：CTRL または SHIFT キーを使用すると複数の範囲を選択できます。</p> <p>標準設定値：スケジュール範囲が選択されていない場合、ベースラインしきい値データは全日、毎日収集されます。</p>

順守レベル

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

説明	<p>ベースライン計算で使用するモニタ測定サンプル値がしきい値にどの程度影響するかを判断する順守レベルを選択できます。順守レベルは、測定値がエラーまたは警告であるかを判断するためにすべてのモニタ測定値に適用されるパーセンタイル値に基づいています。また、個々のモニタ測定値の順守レベルを微調整したり、良好な限度を設定することもできます。</p> <p>アクセスするには、次の手順を実行します。 モニタ・ツリーで SiteScope コンテナ、グループ、またはモニタを右クリックして、[ベースライン設定] > [計算]を選択します。[順守レベル]パネルを展開します。</p>
-----------	--

関連タスク	344ページ「ベースラインを使用したモニタしきい値の設定方法」
関連情報	336ページ「ベースライン順守レベルの設定」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

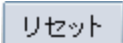

UI 要素	説明
低	しきい値の更新に使用される値は、ベースラインによって計算される値からより遠くなります。極端な測定値によるベースラインへの影響に対する許容度が高い場合はこのオプションを選択します。
中	しきい値の更新に使用される値は、ベースラインによって計算される値から中間範囲にあります(標準設定)。
高	しきい値の更新に使用される値は、ベースラインによって計算される値により近くなります。極端な測定値によるベースラインへの影響に対する許容度が低い場合はこのオプションを選択します。
順守レベルの微調整 / 限度の設定	[順守レベルの微調整/限度の設定]ダイアログ・ボックスが開きます。このダイアログ・ボックスでベースラインの順守レベルを微調整し、選択したコンテキスト内の任意のモニタ・タイプの任意の測定値に良好な限度を定義できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、402ページ「[順守レベルの微調整 / 限度の設定]ダイアログ・ボックス」を参照してください。

[順守レベルの微調整 / 限度の設定]ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスには、選択されたコンテキストにおいて各モニタ測定値の順守レベルおよび良好な限度(設定されている場合)で、ベースライン計算で使用されるパーセンタイル値が表示されます。任意のモニタ・タイプの任意の測定値のベースライン順守レベルを微調整し、良好な限度を設定できます。

アクセス方法	[モニタ]コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで SiteScope コンテナ、グループ、またはモニタを右クリックして、[ベースライン設定]>[計算]を選択します。[順守レベル]パネルを展開して、[順守レベルの微調整 / 限度の設定]ボタンをクリックします。
重要な情報	順守レベルのパーセンタイル値は 100% より大きく設定できます。これにより、収集したサンプル測定値に基づいて、しきい値レベルを設定されたレベルより高くできます。たとえば、収集した CPU 使用率の測定値の範囲が 10% ~ 60% で、CPU 使用率が 80% を超えるエラーのみを取得するには、[エラーのパーセンタイル]の「低」の値を、エラーしきい値レベルを望ましいレベルまで上げるパーセンタイルに設定します。この場合は、パーセンタイルを 134%(CPU 使用率 60% * 134% = CPU 使用率 80.4%)に設定します。
関連タスク	344ページ「ベースラインを使用したモニタしきい値の設定方法」
関連情報	335ページ「ベースラインを使った状態しきい値の設定」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
	リセット : モニタ測定値の標準設定のエラーおよび警告しきい値の順守レベル値を元に戻し、良好な限度を削除します。
	すべて選択 : 表示されているすべてのモニタ測定値を選択します。
	選択を解除 : 選択をクリアします。
モニタ名: 測定値名	選択されているコンテキストの各モニタのベースライン計算で使用される測定値を表示します。また、ブラウズ可能なモニタすべての測定値を代表する 1 つの測定値が(リストの最後に)表示されます。
警告のパーセンタイル	警告ベースラインしきい値の計算に使用される順守レベル「低」、「中」、「高」のパーセンタイル値を表示します。このトピックの詳細については、 336 ページ「ベースライン順守レベルの設定」 を参照してください。 標準設定値 : 「低」110, 「中」93, 「高」90
エラーのパーセンタイル	エラーベースラインしきい値の計算に使用される順守レベル「低」、「中」、「高」のパーセンタイル値を表示します。このトピックの詳細については、 336 ページ「ベースライン順守レベルの設定」 を参照してください。 標準設定値 : 「低」120, 「中」98, 「高」95
良好な限度	各モニタ測定値タイプの良好な限度の実際の値を表示します。これは、既存のベースライン・パーセンタイルに従うとエラーをレポートする必要がある場合でも、エラー状態とみなされない測定値です。このトピックの詳細については、 336 ページ「良好な限度とエラー限度について」 を参照してください。 標準設定値 : 値なし
ブラウズ可能なすべてのモニタの測定値	参照可能なすべてのモニタの測定値の警告およびエラーベースラインしきい値の計算に使用される順守レベル「低」、「中」、「高」のパーセンタイル値を表示します。 警告の標準設定値 : 「低」110, 「中」93, 「高」90 エラーの標準設定値 : 「低」120, 「中」98, 「高」95




[ベースラインのアクティブ化] ダイアログ・ボックス



このダイアログ・ボックスには、計算されたモニタのベースライン・データのサマリが表示され、現在のモニタ設定の保存、ベースライン測定値グラフの表示、失敗した操作の表示、ベースラインしきい値設定のアクティブ化を行えます。SiteScope でベースラインを計算できないモニタについては、失敗の原因が表示されます。

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで SiteScope ノード、グループ、またはモニタを右クリックして、[ベースライン設定] > [レビューと有効化] を選択します。
---------------	--

重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> ベースライン機能を使用してモニタのしきい値を設定できるのは、SiteScope の管理者または「モニタを追加、編集、または削除します」の権限が「モニタの編集または削除」の権限を持つユーザのみです。また、設定できる対象はユーザに許可されているグループ・リストに含まれるモニタのみです。ユーザに権限がないグループ内のモニタは、ダイアログ・ボックスに表示されません。ユーザ権限の詳細については、773 ページ「ユーザ管理ブリファレンスの概要」を参照してください。 現在のモニタ設定に戻すには、バックアップ設定を作成してからベースライン設定をアクティブ化する必要があります。 ベースラインしきい値のアクティブ化に必要な時間は、SiteScope サーバの処理速度とベースライン設定で選択したモニタ数に左右されます。アクティブ化プロセスを完了する前に SiteScope を再起動する必要がある場合、SiteScope の再起動後に自動的にプロセスが実行されます。
関連タスク	344 ページ「ベースラインを使用したモニタしきい値の設定方法」
関連情報	335 ページ「ベースラインを使った状態しきい値の設定」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
正常に計算されたモニタ	
 グラフの表示	ビュー・グラフ : モニタのすべての測定値のベースライン・データがグラフで表示されます。詳細については、 406 ページ「[ベースライン モニタ測定値 グラフ] ダイアログ・ボックス 」を参照してください。
	すべて選択 : 表示されているモニタがすべて選択されます。
	選択を解除 : 選択をクリアします。
モニタ名	ベースライン設定に選択された SiteScope モニタの名前。
計算日	ベースラインが計算された日付。
エラー ステータスの減少	<p>ベースラインしきい値が適用された場合のモニタのエラー・ステータス数の減少。負の数は、提案されたベースラインしきい値が適用された場合、モニタのエラー・ステータス数の増加を示します。</p> <p>例 : CPU 使用率のしきい値の状態をエラー条件 $\geq 65\%$ に手動で設定し、CPU モニタに 5 つのエラー状態(そのうち 3 つのエラーは $65\% \sim 70\%$ のデータ・サンプル、2 つのエラーは 70% を超えるもの)があるとして、SiteScope でベースラインを使用してしきい値を計算し、しきい値がエラー条件 $\geq 70\%$ に設定されている場合、[エラー ステータスの減少]は 3 になります。</p> <p>注 : [エラー ステータスの減少]の値は、計算日に収集されたデータに基づいています。</p> <p>ヒント : 計算日から 3 日以上経過している場合、ベースラインを再計算することをお勧めします。</p>

UI 要素	説明
警告のステータスの減少	<p>ベースラインしきい値が適用された場合のモニタの警告ステータス数の減少。負の数は、提案されたベースラインしきい値が適用された場合のモニタの警告ステータス数の増加を示します。</p> <p>例: CPU 使用率のしきい値の状態を警告条件 $\geq 55\%$ に手動で設定し、CPU モニタに 3 つの警告の状態(そのうち 2 つの警告は $55\% \sim 60\%$ のデータ・サンプル、1 つの警告は 60% を超えるもの)があるとします。SiteScope でベースラインを使用してしきい値を計算し、しきい値が警告条件 $\geq 60\%$ に設定されている場合、[警告のステータスの減少]は 2 になります。</p> <p>注: [警告のステータスの減少]の値は、計算日に収集されたデータに基づいています。</p> <p>ヒント: 計算日から 3 日以上経過している場合、ベースラインを再計算することをお勧めします。</p>
失敗したモニタ	
	すべて選択: 表示されているすべての失敗したモニタを選択します。
	選択を解除: 選択をクリアします。
モニタ名	SiteScope でベースラインを計算できなかったモニタの名前。
失敗の原因	<p>SiteScope でモニタのベースライン値を計算できなかった原因。次のような原因があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • データが十分ではありません: モニタの実行期間が、有意なベースラインしきい値を得られるデータの収集期間としては十分ではありませんでした。この期間は、[インフラストラクチャプリファレンス]の[ベースライン設定に必要な最小日数]および[ベースライン設定に必要な最小サンプル数]設定に応じて変わります。ベースライン設定の詳細については、690 ページ「ベースライン設定」を参照してください。 • ベースライン設定する測定値がありません: モニタに、ベースライン計算に使用できる測定値がありません。ベースラインをアクティブ化するモニタを選択できません。 • リクエストされたスケジュールのサンプルがありません: 指定された範囲スケジュールで収集されたデータ・サンプルがありません。ベースラインをアクティブ化するモニタを選択できません。 • 不明: ベースライン計算の失敗の原因が不明です。ベースラインをアクティブ化するモニタを選択できません。

UI 要素	説明
アクティブ化可能	<p>モニタのベースライン計算が失敗した場合でも、ベースラインをアクティブ化できることを示します。</p> <p>「データが十分ではありません。」という理由以外でベースライン計算が失敗した場合、「いいえ」が表示されます。</p> <p>「データが十分ではありません。」という理由でベースライン計算が失敗した場合、「はい」が表示されます。SiteScope ではベースラインを計算するために収集された限定的な測定値サンプルが使用されます。</p>

[設定のバックアップ] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、ベースラインしきい値をアクティブ化する前に現在のモニタのしきい値設定を保存できます。設定を元に戻すには、設定ツールを使用します。設定ツールの詳細については、『HP SiteScope デプロイメント・ガイド』を参照してください。

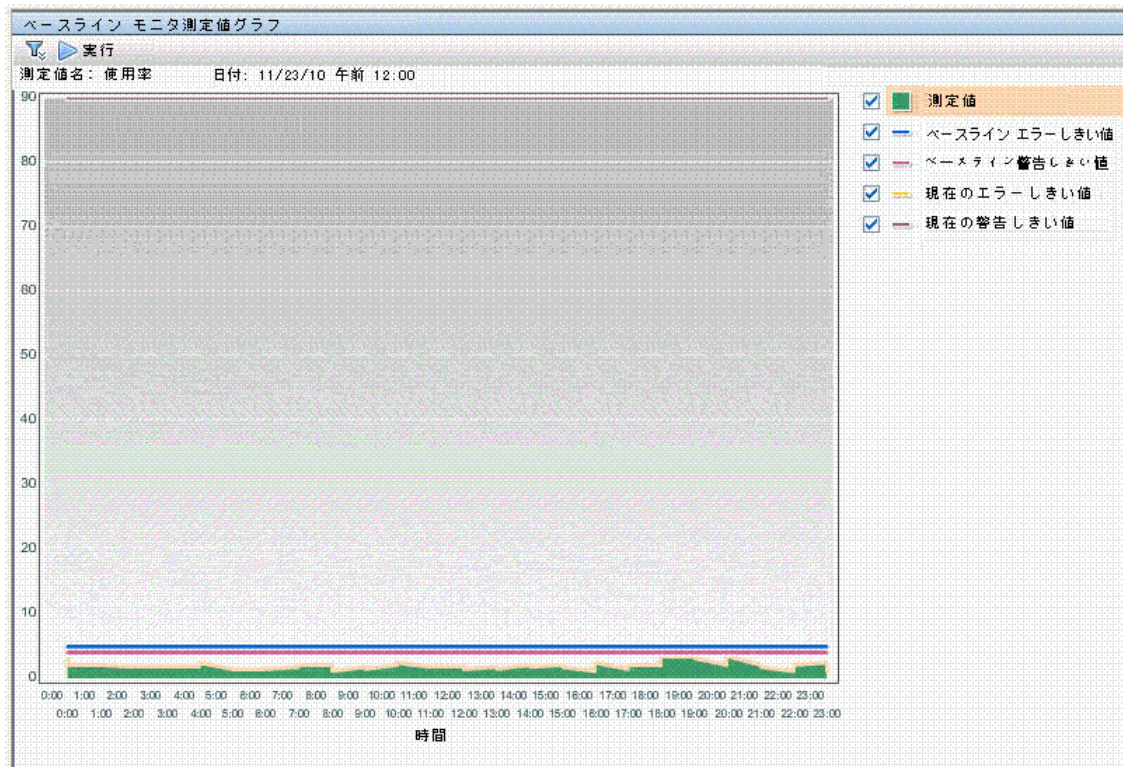
アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで SiteScope ノード、グループ、またはモニタを右クリックして、[ベースライン設定] > [レビューと有効化] を選択します。[設定のバックアップ] ボタンをクリックします。
重要な情報	ベースラインをアクティブ化するとしきい値設定の変更は元に戻せないため、バックアップ設定を作成してからベースライン設定をアクティブ化してください。
関連タスク	344 ページ「ベースラインを使用したモニタしきい値の設定方法」
関連情報	335 ページ「ベースラインを使った状態しきい値の設定」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
ターゲットディレクトリを入力してください	<p>バックアップ設定ファイルの保存先ディレクトリ、または標準設定の SiteScope インストール・ディレクトリを使用します。</p> <p>標準設定値: C:\SiteScope</p>
バックアップ・ファイル名を入力してください	<p>設定バックアップ・ファイルの名前。標準設定で、ファイルには、次の形式で名前が付けられます。SiteScope_<MM_DD_YYYY>_<HH_MM_SS>。SiteScope では、バックアップ・ファイルは指定した場所に zip 形式で保存されます。</p> <p>例: SiteScope__11_05_2008_08_24_06</p>

[ベースライン モニタ測定値 グラフ] ダイアログ・ボックス


このダイアログ・ボックスには、モニタのすべての測定値のグラフが測定値ごとに表示されます。グラフを表示する標準設定の日付は、エラー減少が最大の日です。各グラフには、現在の警告およびエラーしきい値、ベースライン警告およびエラーしきい値、ベースライン関連のモニタ測定値すべての 24 時間分 (00:00 ~ 23:59) の履歴データが表示されます。





アクセス方法	[モニタ]コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで SiteScope ノード、グループ、またはモニタ・コンテナを右クリックして、[ベースライン設定] > [レビューと有効化]を選択します。[正常に計算されたモニタ]パネルで、ベースライン・データが計算されたモニタを選択して、[ビュー グラフ] ボタンをクリックします。
重要な情報	モニタ測定値グラフに表示されるデータは測定値データの集計で、その期間にはデータが収集された時間が正確に反映されていない場合があります。
関連タスク	344ページ「ベースラインを使用したモニタしきい値の設定方法」
関連情報	335ページ「ベースラインを使った状態しきい値の設定」

グラフ設定

ユーザ・インターフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
	注釈ツール: 表示しているグラフのスナップショットを作成します。また、スナップショットに図形や線を描画したりテキストを追加したりして、グラフの重要な領域を強調表示します。ユーザ・インターフェースの詳細については、 1310ページ「注釈ツール」 を参照してください。

UI 要素	説明
	<p>レポート・フィルタの折りたたみ: クリックしてレポート・フィルタの折りたたみ / 展開を行います。</p> <p>ヒント: 折りたたみ可能なレポート・フィルタが閉じると、アイコンのツールチップにフィルタで行った選択に関する詳細が表示されます。</p>
	<p>実行: レポート設定を指定した後で、[実行]をクリックして、日付リンクに表示される日付のレポートを実行します。</p>
Historic date < 日付リンク >	<p>カレンダーを開いてモニタ測定値グラフを作成する日付を選択できます。カレンダーには次のボタンがあります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 戻る: 前に選択したレポート日に戻ります。 • 現在: カレンダーで今日の日付を選択します。 • OK: 選択した日付の日付リンクを更新してカレンダーを閉じます。 • キャンセル: 変更せずにカレンダーを閉じます。

グラフの内容

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します(ラベルのない要素は山括弧内に表示されます)。

UI 要素	説明
<凡例>	グラフで使用されている色分けを説明します。
測定値名	グラフの上に表示される測定値の名前。
日付	グラフが生成された日付と時刻。
<データポイント>	<p>選択されているモニタ測定値を「時間」軸上に2時間区分で表示します。</p> <p>ヒント: 測定値。</p>
<測定値タイプ> <y 軸>	モニタの測定値タイプを表示します。
時間 <x 軸>	レポートを生成するときに指定した日付の時間区分単位(0 ~ 24 時間)。
ベースライン エラーしきい値	エラーの状態を判断するベースラインしきい値線を表示します。この線を越える測定値は、モニタのエラー・ベースライン・ステータスのしきい値を超えます。これは、赤の実線でグラフに表示されます。
ベースライン警告しきい値	警告の状態を判断するベースラインしきい値線を表示します。この線を越える測定値は、モニタの警告ベースライン・ステータスのしきい値を超えます。これは、オレンジ色の実線でグラフに表示されます。
現在のエラーしきい値	エラーの状態を判断するしきい値線を表示します。この線を越える測定値は、モニタのエラー・ステータスのしきい値を超えます。これは、黒の点線でグラフに表示されます。

UI 要素	説明
現在の警告しきい値	警告の状態を判断するしきい値線を表示します。この線を越える測定値は、モニタの警告ステータスしきい値を超えます。これは、青の点線でグラフに表示されます。

[ベースラインの削除]ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、ベースラインを削除するグループまたはモニタ、あるいはその両方を選択できます。モニタのしきい値ベースラインを再計算するには、まずモニタの既存のベースライン計算を削除する必要があります。

アクセス方法	[モニタ]コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで SiteScope ノード、グループ、またはモニタを右クリックして、[ベースライン設定]>>[削除]を選択します。
重要な情報	SiteScope の管理者または「モニタを追加、編集、または削除します」または「モニタの編集のみ」権限を付与されたユーザのみがベースラインを削除でき、さらに、削除できるのはユーザの許可されているグループ・リストにあるモニタのベースラインのみです。ユーザに権限がないグループ内のモニタは、ダイアログ・ボックスに表示されません。ユーザ権限の詳細については、773 ページ「ユーザ管理 プリファレンスの概要」を参照してください。
関連タスク	344 ページ「ベースラインを使用したモニタしきい値の設定方法」
関連情報	335 ページ「ベースラインを使った状態しきい値の設定」


ユーザ・インタフェース要素について次に説明します(ラベルのない要素は山括弧内に表示されます)。

UI 要素	詳細
<グループまたはモニタ、あるいはその両方のリスト>	ベースラインしきい値計算を削除するグループまたはモニタ、あるいはその両方。リストには、現在選択されているコンテナ、およびユーザの許可されているグループ・リストに含まれるすべての子コンテナのすべてのグループまたはモニタ、あるいはその両方が表示されます。 標準設定値：現在のコンテナおよび選択されているすべての子要素。

ベースラインの状態レポート

このレポートには、選択されたコンテキストのすべてのモニタのベースラインの状態に関する情報が表示されます。

ベースラインの状態レポート			
サマリー			
2 個のモニタの合計です。			
1 個のモニタにアクティブ化されたベースラインがあります。			
1 個のモニタはベースラインが設定されていません。			
詳細			
モニタ名	モニタタイプ	ベースラインの状態	ベースラインの状態の詳細
SiteScopeTestCPU Test	CPU	ベースライン設定する...	
SiteScopeTestSallytest	CPU	アクティブ化されたベ...	

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで SiteScope ノード、グループ、またはモニタを右クリックして、[ベースライン設定] > [状態レポート] を選択します。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> これは一時的なレポートです。後で使用するために SiteScope 設定データに保存されるものではありません。 列ヘッダをクリックして、モニタ・タイプを昇順または降順で並べ替えることができます。並べ替え順序の方向を示す矢印が表示されます。 下向き矢印  をクリックして、フィルタ基準とするモニタ・タイプまたはベースラインの状態を選択すると、モニタ・タイプおよびベースラインの状態の表示をフィルタできます。フィルタをクリアするには、[(すべて)] を選択します。
関連タスク	344 ページ「ベースラインを使用したモニタしきい値の設定方法」
関連情報	335 ページ「ベースラインを使った状態しきい値の設定」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
モニタ名	<p>コンテキストによって異なる SiteScope モニタの名前とパス。</p> <p>注：レポートには、ユーザにアクセス権限があるグループまたはサブグループのモニタのみが表示されます。</p>
モニタ・タイプ	SiteScope モニタのタイプ。
ベースラインの状態	<p>モニタのベースライン状態。次の状態があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ベースライン設定するモニタが選択されていません：ベースライン設定するモニタが選択されていません。 ベースラインの計算中：SiteScope でベースラインを計算中です。 計算に失敗：SiteScope でベースラインを計算できませんでした。 計算済み、アクティブでない：モニタのベースラインが計算されましたが、まだアクティブ化されていません。 ベースラインの有効化：SiteScope でベースラインをアクティブ化しています。 アクティベーションが失敗しました：SiteScope でベースラインをアクティブ化できませんでした。 アクティブ化されたベースライン：モニタのベースラインがアクティブ化されました。

UI 要素	説明
ベースラインの 状態の詳細	<p>次の状態のモニタの追加の詳細情報を表示します。</p> <ul style="list-style-type: none">• ベースラインの計算中 : モニタのベースラインの計算ステージを表示します。• 計算に失敗 : ベースラインの計算が失敗した原因を表示します(「データが十分ではありません」, 「ベースライン設定する測定値がありません」)。SiteScope でベースライン期間のデータを蓄積するのに十分な期間モニタが実行された後, 自動ベースライン計算では十分なデータがないために失敗したモニタが標準設定で選択されます。詳細については, 403 ページ「[ベースラインのアクティブ化] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
更新	計算プロセス中にクリックすると, 状態レポートのデータが更新されます。

第15章

XMLドキュメントの監視

本章の内容

概念

- [413ページ「XMLドキュメントの監視の概要」](#)

参照情報

- [414ページ「XMLドキュメントの内容の照合」](#)
- [416ページ「モニタ設定でのXML内容照合値の使用」](#)

XML ドキュメントの監視の概要

SiteScope の内容の照合は、ネットワーク化された情報システムと内容の監視において重要な機能です。内容の照合機能を持つ SiteScope モニタでは、基本的な内容の照合は Perl 正規表現を使用して実行できます。SiteScope には、XML ドキュメントを横断してドキュメント内容を照合する機能も含まれています。たとえば、URL モニタと Web サービス・モニタを使用して XML 内容照合文字列を組み込み、XML 要素名、XML 要素の属性、要素の内容を照合することができます。この機能を使用して、XML ベースの Web ページ、SOAP または XML-RPC ドキュメント、さらに WAP 対応デバイスにサービスを提供する WML ページまでチェックできます。

XML ドキュメントの内容の照合

XML 内容照合文字列の構文には、XML ドキュメントの階層構造が反映されます。「xml」で始まる内容照合文字列は、XML ドキュメント内の要素名として認識されます。要素名は、ルート要素との関係の順にピリオドで区切られて追加されます。たとえば、weather.xml というドキュメントでは、ルート要素は <weather> です。この要素には、<area>、<skies>、<wind>、<forecast> などの名前を持つ子要素があります。これらの XML 要素の内容またはその属性にアクセスするには、xml.weather.area のような構文を使用します。

特定の内容または値が存在することをチェックするには、テストする内容を持つ要素名の後に等号記号を追加し、続いて内容の値を追加します。ドキュメント内に 1 つの要素名の複数インスタンスが存在する場合、その要素の特定のインスタンスをチェックするには、ドキュメント内の要素の順序を示す数値を角括弧で囲んで追加します(例については、次の表を参照してください)。また、複数の要素または値をテストするには、個々の検索文字列をカンマで区切ります。次の表では、XML ドキュメント内の内容の照合に使用する構文の例を示します。

内容の照合の例	詳細
xml.weather.temperature	ドキュメント内のいずれかの <weather> ノードに <temperature> 要素が 1 つ以上含まれる場合、成功します。<temperature> 要素の内容がモニタから返されます。<weather> ノード内で <temperature> 要素が検出されない場合、エラーが返されます。
xml.weather.temperature=20	ドキュメント内のいずれかの <weather> ノードに、値が 20 と等しい <temperature> 要素が 1 つ以上含まれる場合、成功します。一致が検出された場合、モニタから <temperature> 要素の内容は返されません。<weather> ノード内で <temperature> 要素が検出されない場合、または値 20 が含まれる <temperature> 要素がない場合、エラーが返されます。
xml.weather.forecast. [confidence]	ドキュメント内のいずれかの <weather> ノードに、confidence という名前の属性を持つ <forecast> 要素が含まれる場合、成功します。一致が検出された場合、モニタから confidence 属性の値が返されます。<weather> ノード内で <forecast> 要素が検出されない場合、または confidence 属性が検出されない場合、エラーが返されます。
xml.weather.forecast[3]. [confidence]=50	ドキュメント内のいずれかの <weather> ノードに 3 つ以上の <forecast> 要素があり、3 番目の <forecast> 要素に値が 50 の confidence 属性がある場合、成功します。<weather> ノード内にある <forecast> 要素が 3 個未満の場合、または confidence 属性の値が 50 以外の場合、エラーが返されます。

内容の照合の例	詳細
xml.weather.temperature=20, xml.weather.skies=rain	ドキュメント内のいずれかの <weather> ノードに、内容が 20 と等しい <temperature> 要素が 1 つ以上 あり、 かつ 、いずれかの <weather> ノードに内容が rain と等しい <skies> 要素が 1 つ以上 含まれる場合、成功します。いずれかの照合が失敗した場合、エラーが返されます。
xml.wml.card.p.table.tr.td.anchor=Home Page	WML ドキュメントの指定されたパスにある <anchor> 要素の内容をチェックします。テーブル・セルが含まれるいずれかの <card> ノードに内容が "Home Page" と等しい <anchor> 要素が 1 つ以上 ある場合、成功します。

モニタ設定での XML 内容照合値の使用

URL モニタのようなモニタには、SiteScope モニタのデータ・ログに記録される内容照合値があり、モニタのエラー状態や警告状態のしきい値設定にも使用できます。XML 名の値はモニタの内容照合値として保存されます。

たとえば、内容照合表現が `xml.weather.temperature` で、ドキュメントがファイル `weather.xml` の内容だった場合、内容照合値は 46 になります。

次に、モニタの[詳細オプション]セクションでエラー状態、警告状態、正常状態のしきい値を設定すると、特定のしきい値を内容の照合から返された値と比較できます。

たとえば、気温の値を監視していて、気温が 72 度を下回ったら警告を受け取る場合、モニタの状態のしきい値を次のように設定できます。

エラー条件	内容の照合 <= 72
警告条件	内容の照合 == <= 72
良好条件	内容の照合 >= > 72

このように設定すると、モニタは温度要素の内容をチェックして、エラーおよび警告しきい値と比較します。前述の例では、温度の値が 46 度で 72 度を下回っているため、モニタの状態は**エラー**になります。

第4部分

統合モニタ

第16章

SiteScope 統合 モニタを使った作業

本章の内容

概念

- 419ページ「統合 モニタの概要」
- 422ページ「フィールド・マッピングの構造について」
- 424ページ「テクノロジー統合 モニタのトポロジ設定」

タスク

- 430ページ「統合 モニタのデプロイ方法」

参照情報

- 432ページ「イベント・ハンドラの構造と構文」
- 440ページ「廃止された統合 モニタのリスト」

441ページ「トラブルシューティングおよび制限事項」

統合 モニタの概要

統合 モニタは、SiteScope データ・コレクタによって実行され、サードパーティ製のドメイン・マネージャまたはアプリケーション(通常、Enterprise Management Systems(EMS))のデータをキャプチャして BSM に転送するために使用されます。

データを収集して BSM にデータを転送する場合、次の 2 つのレベルの設定があります。

- **必須** : 監視対象システムを適切にマッピングして必要なデータ・サンプルを収集するようにモニタを設定する必要があります。イベント、測定値、チケットの形式は関係ありません。[フィールドのマッピング]設定でデータ・タイプを選択し、対応するスクリプトをテキスト・エディタで編集して、監視対象システムのフィールドのマッピングを行います。
- **任意** : データをトポロジにマッピングして、BSM の適切な CI 階層に転送することもできます。これにより、モニタから BSM 内の必要な CI に状態を正確にレポートでき、製品の別のアプリケーションで使用できるようになります。トポロジ設定は、作成するトポロジのタイプに応じてロードされるトポロジ・スクリプトを使用して行います。

注: SiteScope テクノロジ統合 モニタによって検出されたトポロジのみを、データのレポートなしで、SiteScope によって報告できます。詳細については、[516 ページ「データなしでトポロジをレポートする方法」](#)を参照してください。

本項の内容

- [419 ページ「統合 モニタのカテゴリ」](#)
- [420 ページ「フィールド・マッピングのデータ・タイプ」](#)

統合 モニタのカテゴリ

統合 モニタは、2 つのカテゴリに分類できます。アプリケーション固有のモニタと汎用統合 モニタです。

アプリケーション固有のモニタ

これらの統合 モニタは、特定の EMS アプリケーションで使用するよう設計されています。これらのモニタは、必須フィールドのマッピングおよびトポロジ設定を使用して事前に定義されています。

該当するモニタを次に示します。

- [HP OM Event Monitor](#)(詳細については、SiteScope ヘルプの『Monitor Reference』ガイドを参照してください)。
- [HP Service Manager Monitor](#) 詳細については、SiteScope ヘルプの『Monitor Reference』ガイドを参照してください。
- [NetScout Event Monitor](#)(詳細については、SiteScope ヘルプの『Monitor Reference』ガイドを参照してください)。

特定の環境のニーズに合わせて、フィールドのマッピングおよびトポロジ設定の両方のスクリプトを詳細に設定できます。

注:

- SiteScope が BSM バージョン 9.00 以降に接続されている場合 (SiteScope 11.20 にアップグレードされた以前のバージョンの SiteScope でモニタが作成されている場合は除きます), HP OM イベント・モニタは使用できません。イベント管理ファウンデーション・ライセンスを所有して、BSM ヘルプの Business Service Management デプロイメント・ガイドの手順に従って統合を設定している場合は、OM イベントを HPOM サーバから BSM 9.00 に転送できます。
- NetScout イベント・モニタでは、トポロジ設定は使用できません。

汎用統合モニタ

注: 汎用統合モニタは BSM 9.1x 以前のバージョンでのみサポートされます。

データベース、ログ・ファイル、SNMP トラップ、Web サービス・インタフェースからデータを抽出できる大部分の EMS アプリケーションで使用するよう設計されたテクノロジー統合モニタ。

これらのモニタのフィールドのマッピングおよびトポロジ設定は、適切なスクリプトをロードし、モニタの作成時に別のテキスト・エディタで編集して設定する必要があります。

該当するモニタを次に示します。

- [Technology Database Integration Monitor](#)(詳細については、SiteScope ヘルプの『Monitor Reference』ガイドを参照してください)。
- [Technology Log File Integration Monitor](#)(詳細については、SiteScope ヘルプの『Monitor Reference』ガイドを参照してください)。
- [Technology SNMP Trap Integration Monitor](#)(詳細については、SiteScope ヘルプの『Monitor Reference』ガイドを参照してください)。
- [Technology Web Service Integration Monitor](#)(詳細については、SiteScope ヘルプの『Monitor Reference』ガイドを参照してください)。

フィールド・マッピングのデータ・タイプ

統合モニタでは、フィールドのマッピング・スクリプトを使用して、収集するデータを BSM で認識できる形式に適切にマッピングします。汎用統合モニタの場合、必要に応じてマッピングを設定およびカスタマイズします。フィールドのマッピングのタイプを選択する場合、付属のスクリプト・エディタを使用するか、スクリプトを任意のテキスト・エディタにコピーして変更を行い、フィールドのマッピングのテキスト・ボックスに再度コピーできます。

ヒント: アプリケーション固有のモニタのマッピングは、モニタの設定時に編集できません。これらのモニタにあらかじめ設定されている用意済みの統合マッピングを使用することをお勧めします。

汎用統合モニタを設定する場合、次のサンプル・スクリプトのタイプを選択します。

- **測定値**: 時間ベースのデータを収集する場合に使用します。測定値データ・タイプを使用する統合モニタによって収集されたデータは、一般的な SiteScope データとして BSM に統合され、SiteScope データを表示できるすべてのコンテキスト(サービス状況、サービス・レベル管理、SAM、ユーザ・レポートなど)で表示できます。詳細については、[465 ページ「測定値データを収集する統合モニタの設定」](#)を参照してください。
- **イベント**

- **共通 イベント** : サードパーティ製のドメイン・マネージャまたはアプリケーションから収集されたイベントを BSM 9.x に統合するために使用されます。レガシー EMS イベントとは異なり、共通 イベント統合では、Operations Manager イベント・サブシステムおよびサービス状況コンソールのイベントを管理できます。さらに、共通 イベント・チャンネルは、データを報告することなく BSM にトポロジを報告するオプションを提供します。詳細については、[446 ページ「共通 イベントのデータを収集する統合 モニタの設定方法」](#)を参照してください。
- **レガシー イベント** : BAC 8.x 以前の特定のイベントに関するデータを収集するために使用されます(後方互換用)。イベント・データ・タイプを使用する統合 モニタによって収集されたデータは、UDX フレームワークを使用して BSM に統合され、UDX データを表示できるコンテキスト(イベント・ログ、サービス状況、トレンド・レポート)で表示できます。BSM API を使用してデータにアクセスすることもできます。詳細については、[450 ページ「レガシー イベントのデータを収集する統合 モニタの設定方法」](#)を参照してください。

注: EMS アプリケーションによって送信されるイベントは、イベントのサンプルです。それらのイベントは、BSM の操作管理 イベントと同じではありません。

- **チケット** : チケット・システムからインシデントおよびイベントを収集する場合に使用します。チケット・データ・タイプを使用する統合 モニタによって収集されたデータは、BSM に統合され、サービス状況およびサービス・レベル管理で表示できます。詳細については、[506 ページ「チケット 発行 データを収集する統合 モニタの設定方法」](#)を参照してください。

データベース、ログ・ファイル、SNMP トラップ、Web サービスのテクノロジー統合 モニタは、これらのデータ・タイプを使用するように設定できます。特定の環境のニーズに合ったカスタム設定を作成するためのベースとして、SiteScope に同梱されているフィールドのマッピング・スクリプトを使用します。統合 モニタを設定する場合、データ・タイプを選択して必要なスクリプトをロードし、BSM に転送するデータが収集されるようにこのスクリプトを編集します。

フィールド・マッピング・スクリプトのカスタマイズの詳細については、次の資料を参照してください。

- [444 ページ「イベント・サンプルの統合 モニタ・フィールドのマッピング」](#)
- [466 ページ「測定値 サンプルの統合 モニタ・フィールドのマッピング」](#)
- [505 ページ「チケット 発行 サンプルの統合 モニタ・フィールドのマッピング」](#)

フィールド・マッピングの構造について

フィールド・マッピングには、データが統合 モニタに到着したときの処理方法の指示が含まれています。フィールド・マッピングを構成する指示は、イベント・ハンドラにグループ化されます。イベント・ハンドラは、特定のデータに関連する指示が含まれる独立したセクションです。各イベント・ハンドラには、**一致条件**があります。SiteScope は、この条件に基づいて到着 イベントに特定のイベント・ハンドラを使用するかどうかを決定できます。

イベントまたは測定値データが統合 モニタに到着すると、フィールドのマッピングの各イベント・ハンドラの一**一致条件**が、表示されている順序で繰り返しテストされます。一致するハンドラが検出された場合、モニタはそのハンドラの指示を使用してイベントを処理し、ハンドラに定義されたアクション(BSM への転送や破棄など)を実行します。最初に一致すると、それ以降のセクションはチェックされません。一致がない場合、イベントは破棄されます。

イベント・ハンドラ以外にも、フィールドのマッピングには統合 モニタ・エンジン全体に影響を与える特別なエントリが含まれています。これらの値は `[$DEFAULT_PARAMETERS$]` セクションにグループ化されます。このセクションでは、すべてのハンドラで共通するタグの標準設定値が定義されます。フィールドのマッピングのこのセクションで任意のタグを設定できます。これは、一致するイベント・ハンドラで上書きされないかぎり、レポートされる値の作成に使用されます。受信イベントごとに、一致するイベント・ハンドラの前にこのイベント・ハンドラが必ず実行されます。

イベント・ハンドラの構造の詳細については、[432 ページ「イベント・ハンドラの構造と構文」](#)を参照してください。

CI 解決のヒントの形式

CI 解決のヒントには次の形式を使用できます。

形式	説明	例
ノードおよび子孫 CI タイプのコンテキストに存在しないスタンドアロン CI	たとえば、ビジネス・アプリケーション、ビジネス・サービス、または Siebel Enterprise。CI 解決のヒントは CI 名である必要があります。	myBusinessService というビジネス・サービス CI の場合、CI 解決のヒントは次のようになります。 <code>MeasurementCIHint(1) ="myBusinessService".</code> 注 :CI 名は、RTSM 内で一意である必要があります。
ノード・トポロジおよび子孫 CI タイプ	CI 解決のヒントは完全修飾ドメイン名または @@ 区切り文字の後に続くノードの IP アドレスである必要があります。	IP アドレス 12.34.56.78 のノードを報告する場合、CI 解決のヒントは次のようになります。 <code>"@@12.34.56.78"</code> または <code>"@@<MachineName>"</code> 。

形式	説明	例
ノードおよび子孫 CI タイプのコンテキストに存在する CI	実行中のソフトウェア, ノード要素, ネットワーク・エンティティから継承する CI タイプに属する CI など。ノードまたは子孫 CI および @@ で区切られているノードまたは子孫 CI に接続されている CI の両方のヒントで次のように指定する必要があります。	ノードまたは子孫 CI に接続されている Oracle データベース CI の場合, CI 解決のヒントの形式は次のようになります。 "<oraclesid>:<product name>@@<fqdnhostname>" 。

テクノロジー統合モニタのトポロジ設定

BSM にトポロジをレポートするには、統合モニタ対応の追加設定不要のトポロジ・スクリプトを選択できます。これは、統合モニタの作成時に[トポロジ設定]パネルで行います。

Jython 言語は、トポロジ・スクリプトの開発用です。Jython の使用方法の詳細については、次の Web サイトを参照してください。

- <http://www.jython.org>
- <http://www.python.org>

本項の内容

- [Selecting a Topology](#)
- [425ページ「レガシー・トポロジ・スクリプト」](#)
- [426ページ「トポロジ・スクリプトの編集」](#)
- [Additional Documentation](#)

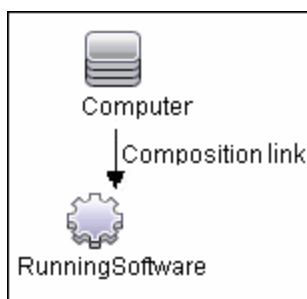
トポロジの選択

汎用統合モニタで作業するときは、次のトポロジ設定(選択するフィールド・マッピング・タイプに応じて使用できるトポロジ・スクリプト)から選択できます。

- **コンピュータ**: コンピュータ CI でトポロジを作成します。[共通イベント]データ・タイプの専用です。



- **コンピュータ - 実行中のソフトウェア**: コンピュータ CI とそれに接続する実行中のソフトウェア CI を持つトポロジを、Composition 関係によって作成します。[共通イベント]データ・タイプの専用です。サードパーティ・システムからイベント・データを取得するコンピュータ - 実行中のソフトウェア統合に対応して作成されるトポロジを、次の図に示します。



- **カスタム**: 事前定義のトポロジ・スクリプトではなく個々の CI に転送するデータを取得する場合は、トポロジを独自に作成します。すべてのフィールド・マッピング・タイプに使用できます。[カスタム]は、Jython 言語を熟知している場合にだけ選択します。これは、トポロジ・スクリプトがロードされず、自分で Jython 言語でトポロジ・スクリプトを作成する必要があるためです。事前定義のスクリプトから始めることをお勧めします。

ヒント: トポロジ設定を選択したときは、データをレポートしないで、SiteScope テクノロジ統合 モニタによって検出されたトポロジだけをレポートさせることができます。タスクの詳細については、[516 ページ「データなしでトポロジをレポートする方法」](#)を参照してください。

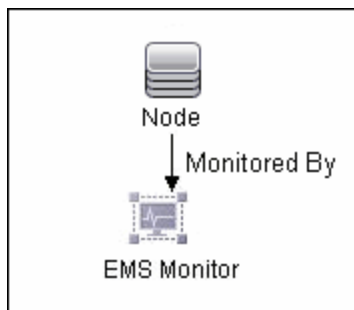
レガシー・トポロジ・スクリプト

次のレガシー・トポロジ・スクリプトがあります。

- [425 ページ「ノード・トポロジ」](#)
- [425 ページ「ノード - 実行中のソフトウェア・トポロジ」](#)
- [426 ページ「チケット」](#)

ノード・トポロジ

自分に接続する EMS モニタ CI を持つノード CI を、Monitored By 関係によって作成します。EMS モニタ CI は、ステータスをノード CI に伝搬します。

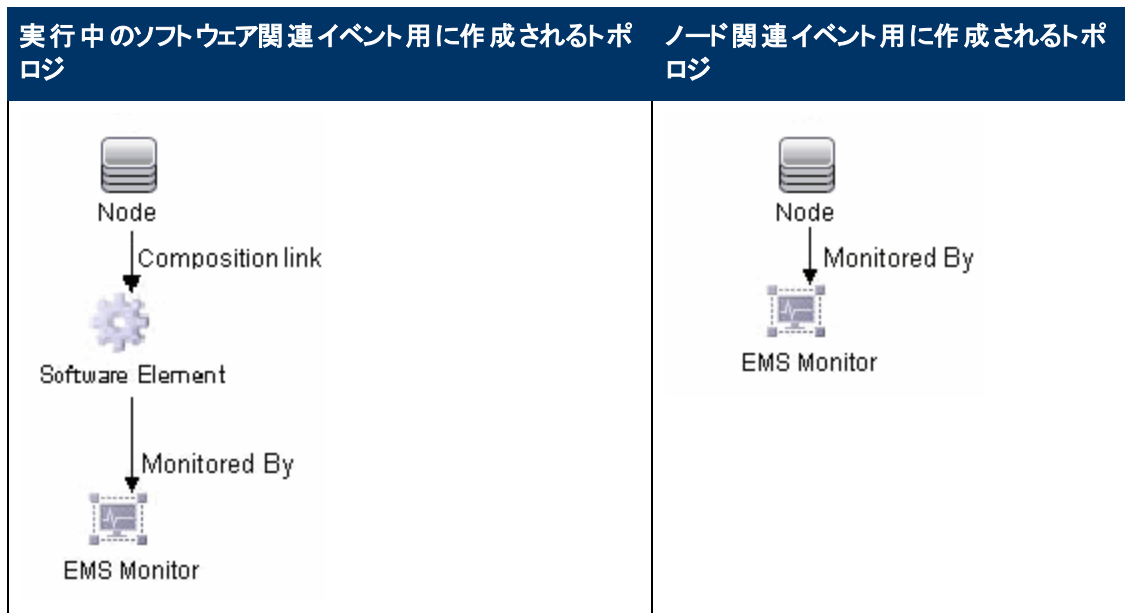


ノード - 実行中のソフトウェア・トポロジ

ノード CI を持つトポロジと、それに接続する実行中のソフトウェア CI を、Composition 関係によって、および、ノード CI と実行中のソフトウェア CI のどちらかに接続可能な EMS モニタ CI を、Monitored By 関係によって作成します。

この統合タイプでは、サードパーティ・システムから取得できるデータには、実行中のソフトウェアに関連するイベントと、ノードに関連するイベントの 2 タイプがあります。

次の表に、それぞれのイベント・タイプ用に作成されたトポロジを示します。



どのイベントが実行中のソフトウェアに関連付けられ、どれがノードに関連付けられるかを、次のようにトポロジ・スクリプトを編集して設定できます。

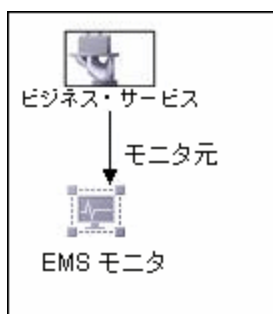
トポロジ・スクリプトの次の文字列を検索します。

if (subject != "system"):

変数 **subject** は、イベント中の「subject」フィールドを表します。値 **system** は、ノードに関連するとみなされ、実行中ソフトウェア CI に転送されないデータを表す値の一例です。

チケット

自分に接続する EMS モニタを持つ Business Service CI を、Monitored By 関係によって作成します。EMS モニタ CI から Business Service CI に状態が伝搬されます。[チケット] データ・タイプの専用です。



レガシーの統合タイプの詳細については、BSM ヘルプの『Solutions and Integrations Guide』の「[Understanding Node, Tickets, or Node - Running Software Integration Types](#)」を参照してください。

トポロジ・スクリプトの編集

トポロジを設定するには、統合モニタの作成時に[トポロジ設定]パネルに表示されるトポロジ・スクリプトを編集できます。添付のスクリプト・エディタを使用できますし、あるいは、その他のスクリプト・エディタを使用できます。

必要な情報であらかじめ設定されている事前定義トポロジの 1 つを選択できます。次に、独自のトポロジを作成する場合に使用するスクリプトの編集ガイドラインを示します。

スクリプト 編集に関する一般的なガイドライン

- Jython 言語は、スペースやタブの影響を受けます。Jython 言語の詳細については、<http://wiki.python.org/moin/HowToEditPythonCode> を参照してください。
- `import` セクションはそのままにしておき、追加のみ行ってください。
- スクリプトの本文は必須で、次のように構成されています。

```
def DiscoveryMain(Framework)
```

この本文の機能には、Object State Holder Vector(OSHV) の結果を作成する役割があります。これには、CI データや、受信 サンプルを CI にマッピングする方法が保持されています。

- サンプルの到着時に組み込みの?ログ機能?を使用してトポロジ・スクリプトをデバッグします。これを行うには、ログ・ファイルにレポートする情報のレベルとタイプを変更します。次のように、< SiteScope のルート・ディレクトリ> \conf\core\Tools\log4j\PlainJava\bac_integration.properties ファイルのログ・ファイル設定を変更します。
 - a. **bac_integration.properties** ファイルをテキスト・エディタで開き、ファイルにある次の行を特定します。

```
# Jython prints
log4j.category.PATTERNS_DEBUG=${loglevel}, discovery.appender
```

次のように、**log4j.category.PATTERNS_DEBUG** から **\${loglevel}** に **DEBUG** 変更します。

```
log4j.category.PATTERNS_DEBUG=DEBUG, discovery.appender
```

- b. ファイルを保存します。変更が有効になるまで数秒かかる場合があります。

結果のログは、< SiteScope のルート・ディレクトリ> \log\bac_integration.log ファイルに保存されます。

統合モニタに個別に関連するガイドライン

- フィールド・マッピングを使用するとき、フィールド・マッピング・フィールドをトポロジ・スクリプトの入力として使用できます。たとえば、共通イベント・マッピングを使用するときは、次の方法で [Category] フィールドの値にアクセスできます。

```
category = Framework.getDestinationAttribute("Category")。
```

さらに、group0、group1 など、テクノロジー・ログ・ファイル統合モニタからの「モニタ変数」の値、またはテクノロジー・データベース統合モニタ内のデータベース列の名前、またはその他の統合モニタ内のその他の変数にアクセスできます。たとえば、次の方法で、変数 group1 の値にアクセスできます。

```
group1 = Framework.getDestinationAttribute("group1")
```

- スクリプト内の EMS モニタ CI にレポートする場合、各 CI に複数の EMS モニタ CI をリーフ・ノードとして持たせないでください。
- レガシー・イベント・スクリプトの場合、次のをスクリプトの最終行に表示させる必要があります。

```
Framework.setUserObject("result_object",monitoredCiType)  
return OSHVResult
```

変数 monitoredCiType は、イベントを受信する EMS モニタ CI によって監視される CI のタイプです。

取得する 1 つのイベントに対して複数の EMS モニタ CI をスクリプトで作成した場合、どの CI がイベントに属し、状態を渡すのかを決定する必要があります。これを行うには、適切な値を monitoredCiType に割り当てます。たとえば、実行中のソフトウェア CI 用の EMS モニタ CI と、ノード CI 用の EMS モニタ CI をスクリプトで作成した場合、イベントからノード CI に状態が渡されるには、変数 monitoredCiType の値を "node" にしておきます。

追加マニュアル

トポロジ・スクリプトの一般的な内容については、BSM ヘルプの『RTSM Developer Reference Guide』の「Create Jython Code」や「Developing Jython Adapters」を参照してください。

トポロジ・スクリプトで利用できる Java クラスについては、BSM ヘルプの『RTSM Developer Reference Guide』の「HP Data Flow Management API Reference」を参照してください。

注意事項および制限事項

- SiteScope 10.x の EMC トポロジのスクリプトは、SiteScope が BSM 9.00 に接続されている場合でも SiteScope では以前のコンテンツ言語の形式で表示されます。たとえば、ホスト CI タイプはノードではなくスクリプト内に表示されます。
- SiteScope が 9.00 より前のバージョンの BSM に接続されている場合、[コンピュータ]、[コンピュータ - 実行中のソフトウェア]、[ノード]、および[ノード - 実行中のソフトウェア]の代わりに、[ホスト]、[ホスト - ソフトウェア要素]トポロジ・スクリプト・テンプレートがモニタのトポロジ・スクリプト・リストに表示されます。

統合モニタのデプロイ方法

注: 次の場所で作業しているときに統合モニタをデプロイできます。

- BSM をレポートするスタンドアロン SiteScope。
- SAM 管理で直接。

統合を設定するための手順は、キャプチャするサンプル・データのタイプ(測定値、イベント、またはチケット)、およびデータをトポロジにマップするかどうか(BSM 内の適切な CI 階層にデータを転送することが目的)によって異なります。

次の手順は、キャプチャするサンプル・データのタイプに応じて、統合を設定するためのさまざまなオプションを説明します。

- [430ページ「測定値 サンプルの収集」](#)
- [430ページ「イベント・サンプルの収集」](#)
- [430ページ「チケット・サンプルの収集」](#)

測定値 サンプルの収集

測定値データを BSM に転送するために[測定値]フィールド・マッピング・データ・タイプを選択し、次のトポロジ・スクリプトから選択します。

- **コンピュータ - モニタ:** SiteScope ではこのデータをノード CI の子孫であるコンピュータ CI にレポートします。タスクの詳細については、[467ページ「コンピュータ・モニタ・トポロジを使ってメトリック・データを収集するための統合モニタの設定方法」](#)を参照してください。
- **カスタム:** 独自のトポロジを作成できます。タスクの詳細については、[474ページ「カスタム・トポロジを使用して測定値データを収集する統合モニタの設定方法」](#)を参照してください。
- **トポロジなし:** トポロジを送信しない場合に選択します(ただし、データはまだ送信される)。タスクの詳細については、[489ページ「ノートポロジでメトリック・データを収集するための統合モニタの設定方法」](#)を参照してください。

イベント・サンプルの収集

サードパーティのドメイン・マネージャまたはアプリケーションから収集されたイベントを BSM に統合するために[共通イベント]または[レガシー イベント]フィールド・マッピング・データ・タイプを選択します。レガシー EMS イベントとは異なり、共通イベント統合では、Operations Manager イベント・サブシステムおよびサービス状況コンソールのイベントを管理できます。さらに、共通イベント・チャンネルでは、データをレポートしないで BSM にトポロジをレポートすることもできます。

- 共通イベント統合を使用するタスクの詳細については、[446ページ「共通イベントのデータを収集する統合モニタの設定方法」](#)を参照してください。
- レガシー・イベント統合を使用するタスクの詳細については、[450ページ「レガシー・イベントのデータを収集する統合モニタの設定方法」](#)を参照してください。

チケット・サンプルの収集

チケット発行データを BSM に転送するために、[チケット]フィールド・マッピング・データ・タイプを選択します。

サードパーティのチケット発行システムからインシデントおよびイベントを収集するタスクの詳細については、[506 ページ「チケット発行データを収集する統合モニタの設定方法」](#)を参照してください。

イベント・ハンドラの構造と構文

次に、イベント・ハンドラの構造を示します。

[name] 一致条件
アクション・ディレクティブ
タグ

一致条件、**アクション・ディレクティブ**、および追加ディレクティブの名前は、ドル記号 (\$) で開始します。タグの名前はドル記号で開始されません。

フィールドのマッピングではコメントを使用できます。コメントは、#、!, または ; のいずれかの文字で開始します。これらの文字から行末までがコメントになります。

注: フィールドのマッピングを使った作業では、スクリプトで定義した必須フィールドおよび任意フィールドのみを使用します。詳細については、次項の表を参照してください。

本項の内容

- [432ページ「一致条件」](#)
- [433ページ「利用可能なデータ処理演算」](#)
- [437ページ「条件式」](#)
- [438ページ「アクション・ディレクティブ」](#)
- [438ページ「タグ」](#)
- [438ページ「統合モニタのフィールドのマッピングの例」](#)

一致条件

一致条件は有効なブール式である必要があります。式には、次の表で定義されている演算子と関数の呼び出しが含まれています。式では、ドル記号 (\$) 表記を使用して、処理されるデータのコンテンツにアクセスできます。たとえば、受信データが SNMP トラップの場合、そのエンタープライズ OID に \$oid としてアクセスできます。モニタ固有の名前については、関連するモニタ・タイプのドキュメントを参照してください。

- [Technology Database Integration Monitor](#)(詳細については、『Monitor Reference』ガイドを参照してください)
- [Technology Log File Integration Monitor](#)(詳細については、『Monitor Reference』ガイドを参照してください)
- [Technology SNMP Trap Integration Monitor](#)(詳細については、『Monitor Reference』ガイドを参照してください)
- [Technology Web Service Integration Monitor](#)(詳細については、『Monitor Reference』ガイドを参照してください)

注: 一致条件の式は、4,000 文字に制限されています。

一致条件の形式は次のようになります。

\$MATCH=Boolean expression

このブール式は、433ページ「利用可能なデータ処理演算」に示す式の1つを組み合わせたものです。式の値(**true** または **false**)によって、イベント・ハンドラがイベントの処理に使用されるかどうかが決まります。

利用可能なデータ処理演算

フィールド・マッピングで使用する言語は、簡易バージョンの Java プログラミング言語であり、次の演算のみ可能です。

式と関数	説明
true, false	定数のブール値。 例: \$MATCH=true
+	文字列の連結。 例: "trap type is " + \$trap
<, <=, >, >=, ==, !=	式が数値として正しいかどうかチェックします。INT または DOUBLE フィールドで使用できます。 例: \$MATCH = \$numberOfLines == 100
&&,	前述のブール式を結合するために使用されます。 例: \$MATCH = \$status.equals("ERROR") (\$numberOfLines == 100)
boolean equals (String anotherString)	この文字列を別の文字列と比較します。 詳細については、 http://download.oracle.com/javase/6/docs/api/java/lang/String.html#equals(java.lang.Object) を参照してください。 例: \$MATCH= "ERROR".equals(\$status) または \$MATCH= \$status.equals("ERROR")
boolean equalsIgnoreCase (String anotherString)	大文字と小文字を区別せずに、2つの文字列を比較します。 詳細については、 http://download.oracle.com/javase/6/docs/api/java/lang/String.html#equalsIgnoreCase(java.lang.String) を参照してください。 例: \$MATCH = "ERROR".equalsIgnoreCase(\$status) または \$MATCH = \$status.equalsIgnoreCase("ERROR")

式と関数	説明
boolean contains (String str)	<p>この文字列に、指定された文字の値のシーケンスが含まれている場合にのみ true を返します。</p> <p>詳細については、http://download.oracle.com/javase/6/docs/api/java/lang/String.html#contains(java.lang.CharSequence)を参照してください。</p> <p>例 : MonitorName=\$group0.contains("monitor")?\$group0:\$group0 + "monitor"</p>
String substring (int beginIndex, int endIndex)	<p>この文字列の部分文字列である新しい文字列を返します。詳細については、http://download.oracle.com/javase/6/docs/api/java/lang/String.html#substring(int)を参照してください。</p> <p>例 : Title=\$group0.substring(2,9)</p>
String substring (int beginIndex)	<p>この文字列の部分文字列である新しい文字列を返します。部分文字列は、指定されたインデックスの文字からこの文字列の終わりまでです。</p> <p>詳細については、http://download.oracle.com/javase/6/docs/api/java/lang/String.html#substring(int)を参照してください。</p> <p>例 : Title=\$group0.substring(2)</p>
boolean matches (String regex)	<p>文字列が、指定されたregular expressionに一致するかどうか識別されます。</p> <p>詳細については、http://download.oracle.com/javase/6/docs/api/java/lang/String.html#matches(java.lang.String)を参照してください。</p> <p>例 : Severity=\$group0.matches("(.*Critical.*)")?"Critical":"Normal"</p>
boolean startsWith (String prefix)	<p>この文字列が、指定されたプレフィックスで開始しているかテストします。</p> <p>詳細については、http://download.oracle.com/javase/6/docs/api/java/lang/String.html#startsWith(java.lang.String)を参照してください。</p> <p>例 : MonitorName=\$group1.startsWith("Operations")?\$group1:"Operations"+\$group1</p>
boolean startsWith (String prefix, int toffset)	<p>指定したインデックスで開始しているこの文字列の部分文字列が、指定したプレフィックスで開始しているかテストします。</p> <p>詳細については、http://download.oracle.com/javase/6/docs/api/java/lang/String.html#startsWith(java.lang.String,%20int)を参照してください。</p> <p>例 : MonitorName=\$group1.startsWith("Operations",2)?\$group1:"Operations" + \$group1</p>

式と関数	説明
boolean endsWith (String suffix)	<p>この文字列が、指定されたサフィックスで終了しているかテストします。</p> <p>詳細については、http://download.oracle.com/javase/6/docs/api/java/lang/String.html#endsWith(java.lang.String)を参照してください。</p> <p>例 : MonitorName=\$group1.endsWith("Operations")?\$group1:\$group1 + "Operations"</p>
int indexOf (String str)	<p>指定した部分文字列の最初エントリの、この文字列に含まれるインデックスを返します。</p> <p>詳細については、http://download.oracle.com/javase/6/docs/api/java/lang/String.html#indexOf(int)を参照してください。</p> <p>例 : Severity=\$group0.lastIndexOf("Critical")>-1?"Critical" : "Normal"</p>
int indexOf (String str, int fromIndex)	<p>指定した部分文字列の最初エントリの、この文字列に含まれるインデックスを指定した部分から返します。</p> <p>詳細については、http://download.oracle.com/javase/6/docs/api/java/lang/String.html#indexOf(java.lang.String,%20int)を参照してください。</p> <p>例 : Severity=\$group0.indexOf("Critical",3)>-1?"Critical" : "Normal"</p>
int lastIndexOf (String str)	<p>指定した部分文字列の最も右にあるエントリの、この文字列に含まれるインデックスを返します。</p> <p>詳細については、http://download.oracle.com/javase/6/docs/api/java/lang/String.html#lastIndexOf(java.lang.String)を参照してください。</p> <p>例 : Severity=\$group0.lastIndexOf("Critical")>-1?"Critical" : "Normal"</p>
int lastIndexOf (String str, int fromIndex)	<p>指定した部分文字列の最初エントリの、この文字列に含まれるインデックスを返します。指定したインデックスから後方に検索が行われます。</p> <p>詳細については、http://download.oracle.com/javase/6/docs/api/java/lang/String.html#lastIndexOf(java.lang.String,%20int)を参照してください。</p> <p>例 : Severity=\$group0.lastIndexOf("Critical",2)>-1?"Critical" : "Normal"</p>
String toLowerCase()	<p>標準設定のロケールのルールを使用して、この文字列のすべての文字を小文字に変換します。</p> <p>詳細については、http://download.oracle.com/javase/6/docs/api/java/lang/String.html#toLowerCase()を参照してください。</p> <p>例 : Title=\$group0.toLowerCase()</p>

式と関数	説明
String toUpperCase()	<p>標準設定のロケールのルールを使用して、この文字列のすべての文字を大文字に変換します。</p> <p>詳細については、http://download.oracle.com/javase/6/docs/api/java/lang/String.html#toUpperCase()を参照してください。</p> <p>例 : Title=\$group0.toUpperCase()</p>
int length()	<p>この文字列の長さを返します。</p> <p>詳細については、http://download.oracle.com/javase/6/docs/api/java/lang/String.html#length()を参照してください。</p> <p>例 : Description=\$group1.length() < 10 ? \$group0 + \$group1 : \$group1</p>
boolean isEmpty()	<p>空の文字列 (length() == 0) がテストされます。</p> <p>詳細については、http://download.oracle.com/javase/6/docs/api/java/lang/String.html#isEmpty()を参照してください。</p> <p>例 : Description=\$group1.isEmpty() ? \$group0 : \$group1</p>
String trim()	<p>先頭と末尾の空白を取り除いた文字列のコピーを返します。</p> <p>詳細については、http://download.oracle.com/javase/6/docs/api/java/lang/String.html#trim()を参照してください。</p> <p>例 : Category=\$group3.trim()</p>
String getToken (String str, String delimiterRegular Expression,int zeroBasedTokenIndex)	<p>指定された区切り文字 (正規表現形式) に従って入力文字列を分割し、指定されたゼロベースのインデックスに従って結果の文字列のいずれかを返します。</p> <p>例 : getToken(\$var, "/", 1) will produce "y" if \$var equals "x/y/z"</p>
boolean exists(String property)	<p>処理されるイベントのプロパティが存在しているかどうか、およびその値が空ではないかどうかチェックされます。</p> <p>例 : \$MATCH=exist(\$status)</p>
boolean isInt (String number) boolean isDouble (String number)	<p>入力文字列がそれぞれ整数または倍精度浮動小数点数に変換できるかどうかチェックされます。</p> <p>例 : \$MATCH=isDouble(\$size)</p>

式と関数	説明
int parseInt (String number)	文字列を数値に変換する場合に使用します。入力文字列は、有効な整数または浮動小数点数である必要があります。
double parseDouble (String number)	<p>注： 数値に変換できない文字列に対してこの関数を呼び出すと、エラーが発生して受信データが削除されます。</p> <p>INT または DOUBLE フィールドで使用することもできます。</p> <p>例： \$MATCH=parseInt(\$size) > 10</p>
int time()	<p>1970 年 1 月 1 日以降の現在の時刻が秒単位で返されます。DOUBLE フィールドで使用できます。</p> <p>例： \$MATCH=\$timeStampField > (time()-600)</p> <p>値 \$timeStampField が 10 分前よりも新しい(秒単位, 1970 年 1 月 1 日以降) 場合は true になります。</p>
long str_to_seconds (String dateTime, String format)	<p>2 番目の文字列の形式を使用して、最初の文字列に保持されたタイムスタンプ(秒単位, 1970 年 1 月 1 日以降)が計算されます。DOUBLE フィールドで使用することもできます。</p> <p>\$time で指定した yyyy-MM-dd HH:mm:ss.SSS 形式の日付が現在の時刻よりも新しい場合は true になります。</p> <p>詳細については、http://download.oracle.com/javase/6/docs/api/java/text/SimpleDateFormat.htmlを参照してください。</p> <p>例： \$MATCH=str_to_seconds (\$time,"yyyy-MM-dd HH:mm:ss.SSS") > time()</p> <p>注： 時間を表すために次の記号が使用されます。</p> <p>年 - 'y', 月 - 'M', 日 - 'd', 時間 - 'H', 分 - 'm', 秒 - 's'</p>
String resolveHostIP (String hostName)	<p>DNS 解決を実行し、サーバからその IP アドレスを求めます。DNS 解決が失敗した場合、この関数では unknown host という値が返されます。</p> <p>例： target_ip=resolveHostIP(\$host)</p>
String resolveHostName (String hostIP)	<p>DNS 解決を実行し、IP アドレスから完全修飾ドメイン名を求めます。DNS 解決が失敗した場合、この関数は元の入力ホスト名を返します。</p> <p>例： target_name=resolveHostName(\$host)</p>

条件式

サポートされる 1 つの条件式は ? 演算子です。この演算子を使用して、3 つの式を 1 つにまとめることができます例：

```
<Conditional part> ? <if true part> :<if false part>
```

アクション・ディレクティブ

アクション・ディレクティブの形式は次のようになります。

```
$ACTION= SEND または DISCARD
```

TOPAZ_BUS_POST は、SEND に相当し、後方互換のためにのみ使用されます。

アクション・ディレクティブの値によって、イベントが処理されて BSM に転送されるか、破棄されるかが決まります。この値は、ハンドラの一一致条件が肯定値 (**true**) として評価された場合にのみ有効になります。次の表に、さまざまなアクションの効果を示します。

アクション	説明	対象
SEND(event)	イベントを BSM のバスおよびデータベースに送信します。	BSM
SEND(ss_t)	測定値を SiteScope データとして RTSM に送信します。	BSM
DISCARD	BSM にデータを送信しません。	除外するイベント

注: 測定値マッピング SEND(ss_t) を使用すると、データは SiteScope データとして BSM データベースに送信され、データベースに保存されます。測定値マッピングの詳細については、[501 ページ「測定値サンプルのフィールドのマッピングの設定」](#)を参照してください。

タグ

ディレクティブに加えて、イベント・ハンドラにはタグが含まれます。各タグは、BSM に転送される場合のフィールドを表します。タグの値は、イベントが統合モニタに到着したときに評価できます。

一般的なタグの形式は次のとおりです。

```
name[:type]=value
```

<name> は、スペースやドル記号 (\$) のない任意の文字列です。<type> で、BSM に報告されるときフィールドのタイプを指定します。タイプは、**INT**、**DOUBLE** または **STRING** のいずれかになります。標準設定のタイプは **STRING** です。利用可能なデータ処理演算については、[433 ページ「利用可能なデータ処理演算」](#)を参照してください。

タグを定義して、BSM に転送するイベントをカスタマイズできます。したがって、これらのイベントを生成する外部アプリケーションからさらに多くの値を取得できます。たとえば、モニタで、警告のテキスト説明が含まれるデータベースのテーブル列 (AlertText) からデータを取得する場合、イベント・ハンドラのセクションに次の行を追加してこのデータを BSM に送信できます。

```
[event handler]
$MATCH=true
$ACTION=SEND(event)
text=$AlertText
```

注: タグを追加する場合、必ず **\$MATCH** と **\$ACTION** の後に追加します。

統合モニタのフィールドのマッピングの例

例 1: 汎用イベント・ハンドラ

```
[post them all]
$MATCH=true
$ACTION=SEND(event)
severity:INT=SEVERITY_INFORMATIONAL
szAlarmText:STRING="post them all handler received an event"
```

ハンドラの **\$MATCH** ディレクティブは **true** に設定されます。これにより、すべてのイベントがこのハンドラに一致し、BSM のバスに送信されます。

例 2: 重大度ごとに異なるイベント・ハンドラ

```
[Error Handler]
$MATCH= $status.equals("ERROR")
$ACTION=SEND(event)
severity:INT=SEVERITY_CRITICAL
[Info Handler]
$MATCH= $status.equals("INFO") $ACTION=SEND(event)
severity:INT=SEVERITY_INFORMATIONAL
[post them all]
$MATCH=true
$ACTION=SEND(event)
severity:INT=SEVERITY_INFORMATIONAL
```

この例では、**Error Handler** イベント・ハンドラに対して受信イベントが照合されます。ハンドラの条件が true の場合 (状態フィールドの値が **ERROR** の場合)、severity というフィールドがあり、その値が **SEVERITY_CRITICAL** であるイベントは BSM に送信されます。イベントは、1 つのハンドラにのみ一致します。最初の一致で処理が停止されるため、セクションでイベントが一致すると、次のハンドラによって処理されることはありません。

最初のハンドラでイベントが一致しない場合、2 番目のハンドラが処理対象になり、そのハンドラの照合 (**INFO** 状態が検索されます) を使用して 2 番目のハンドラのアクションを実行する必要があるかどうか判断されます。イベントが 2 番目のハンドラに一致しない場合、最後に 3 番目の汎用ハンドラが評価されます。

廃止された統合 モニタのリスト

次の表に、廃止された統合 モニタと、それぞれの代替となるテクノロジー統合 モニタを示します。

廃止されたモニタ	推奨 モニタ
Avalon イベント	Technology SNMP Trap Integration Monitor
BMC Patrol イベント	Technology SNMP Trap Integration Monitorまたは Technology Log File Integration Monitor
BMC Patrol	Technology Log File Integration Monitor
CA Unicenter イベント (1)	Technology SNMP Trap Integration Monitor
Compaq Insight Manager イベント (2)	Technology Database Integration Monitor
HP Systems Insight Manager イベント	Technology Database Integration Monitor
NetCool イベント	Technology SNMP Trap Integration Monitor
NetIQ (3)	Technology Database Integration Monitor
Remedy チケット 発行	Technology Database Integration Monitor
Tivoli TEC イベント	Technology Database Integration Monitor
Tivoli DM	Technology Database Integration Monitor
WhatsUp イベント (4)	Technology Log File Integration Monitor

次に、テクノロジー・モニタを設定して、廃止されたモニタを置換する方法の例を示します。

(1)CA Unicenter エージェントを設定して、テクノロジー置換 モニタが設定されている SiteScope ホスト・マシンに SNMP トラップを送信します。

(2)Compaq Insight Manager バージョン 7.0 の場合は、次のテーブルから読み取るように SiteScope 置換 モニタを設定します。Notices, NoticeType, Devices, StringResource, およびStringTableLarge。

(3)NetIQ バージョン 5.0 および 5.1 の場合、テーブルData (未処理データが含まれています)およびDataHeader (NetIQ で監視するオブジェクトのメタデータが含まれています)に対してクエリを実行するように SiteScope 置換 モニタを設定します。

(4)WhatsUp バージョン 8.0 の場合、ログ・ファイルEV-＜日付＞.tab から読み取るように SiteScope 置換 モニタを設定します。

注: モニタ設定ファイル **main.config** は、SiteScope 8.x から使用されなくなりました。**main.config** でサポートされていたすべての機能は、現在 **event.config** でサポートされており、[フィールドのマッピング]設定で使用できます。

トラブルシューティングおよび制限事項

本項では、SiteScope 統合 モニタを使って作業する場合のトラブルシューティングと制限事項について説明します。

- [441ページ「統合 モニタのログ」](#)
- [442ページ「その他のログおよびトラブルシューティングの問題」](#)
- [442ページ「トラブルシューティングの追加情報」](#)

統合 モニタのログ

統合 モニタのアクティビティ・ログの次の場所に保存されます。<SiteScope のルート・ディレクトリ>\logs\

RunMonitor.log と <SiteScope のルート・ディレクトリ>\logs\bac_integration\bac_integration.log

ログ・ファイルにレポートする情報のレベルとタイプを変更するには、<SiteScope のルート・ディレクトリ>\conf\core\

Tools\log4j\PlainJava\log4j.properties ファイルのログ・ファイル設定を変更します。ログ記録メカニズムを次のように設定できます。

- ログに記録された情報を、標準設定の詳細度よりも低いまたは高い状態でレポートする。
- 統合 モニタから BSM に送信されるすべてのサンプルをログに記録する。
- 外部 EMS システムから受信したすべてのイベントをログに記録する。

ログの設定を変更するには、次の手順を実行します。

1. **log4j.properties** ファイルをテキスト・エディタで開きます。
2. 統合 モニタから BSM に送信されるサンプルをログに記録するように指定するには、次の手順を実行します。
 - a. ファイルの次の行を特定します。

```
log4j.category.EmsSamplePrinter=${loglevel}, integration.appender
log4j.additivity.EmsSamplePrinter=false
```
 - b. **log4j.category.EmsSamplePrinter** の引数を **\${loglevel}** から **DEBUG** に次のように変更します。

```
log4j.category.EmsSamplePrinter=DEBUG, integration.appender
```
 - c. ファイルを保存します。変更が有効になるまで数秒かかる場合があります。

この結果は bac_integration.log ファイルに記録されます。
3. 外部 EMS システムから受信したすべてのイベントをログに記録するように指定するには、次の手順を実行します。
 - a. ファイルの次の行を特定します。

```
log4j.category.EmsEventPrinter=${loglevel}, monitors.appender
log4j.additivity.EmsEventPrinter=false
```
 - b. 次のように、**log4j.category.EmsEventPrinter** の引数を **\${loglevel}** から **DEBUG** に変更します。

```
log4j.category.EmsEventPrinter=DEBUG, monitors.appender
```

- c. ファイルを保存します。変更が有効になるまで数秒かかる場合があります。結果のログは、**RunMonitor.log** ファイルに保存されます。

その他のログおよびトラブルシューティングの問題

- <SiteScope のルート・ディレクトリ>\logs\error.log および <SiteScope のルート・ディレクトリ>\logs\bac_integration\bac_integration.log でエラーを探します。
- サンプルが作成され、SiteScope から送信されているが、BSM サービス状況、イベント・ログ、または SiteScope レポートにない場合、<BSM のルート・ディレクトリ>\log\mercury_wde\ ディレクトリの中の **wde.logl** ファイルや **loader.logl** ファイルで文字列 **ERROR** または **WARN** を検索して、フィールドや値の欠落が原因でサンプルが削除されていないか確認します。
- <BSM のルート・ディレクトリ>\conf\core\Tools\log4j\EJB\ble.properties ファイルでサービス状況のログ・レベルを上げて、サービス状況でサンプルが受信中であることを確認します。次のパラメータを特定し、ログ・レベルの状態を **DEBUG** に変更します。

```
log4j.category.Trinity.BLE_SAMPLES=DEBUG, trinity.samples.appender
```

結果のログは、<BSM ルート・ディレクトリ>\log\EJBContainer\TrinitySamples.log に保存されます。

ヒント: 問題の原因を特定したら、システムが過負荷にならないようにログ・レベルを標準設定にすることをお勧めします。

トラブルシューティングの追加情報

トラブルシューティングの追加情報は、[HP Software Self-solve Knowledge Base](http://support.openview.hp.com/selfsolve/knowledgebase)

(<http://support.openview.hp.com/selfsolve/documents>)(技術情報にログオンするには HP Passport ID が必要)およびマニュアルの次の各項にあります。

- テクノロジ・データベース統合 モニタのトラブルシューティングについては、『Monitor Reference』ガイドの「[Technology Database Integration Monitor](#)」を参照してください。
- テクノロジ・ログ・ファイル・モニタのトラブルシューティングについては、『Monitor Reference』ガイドの「[Technology Log File Integration Monitor](#)」を参照してください。
- テクノロジ SNMP ラップ・モニタのトラブルシューティングについては、『Monitor Reference』ガイドの「[Technology SNMP Trap Integration Monitor](#)」を参照してください。
- Web サービス統合 モニタのトラブルシューティングについては、『Monitor Reference』ガイドの「[Technology Web Service Integration Monitor](#)」を参照してください。

第17章

イベント・データを収集する統合モニタの設定

本章の内容

概念

- [444ページ「イベント・サンプルの統合モニタ・フィールドのマッピング」](#)

タスク

- [446ページ「共通イベントのデータを収集する統合モニタの設定方法」](#)
- [450ページ「レガシー・イベントのデータを収集する統合モニタの設定方法」](#)

参照情報

- [454ページ「共通イベント・サンプルのフィールドのマッピングの設定」](#)
- [459ページ「レガシー・イベント・サンプルのフィールドのマッピングの設定」](#)

[464ページ「トラブルシューティングおよび制限事項」](#)

イベント・サンプルの統合モニタ・フィールドのマッピング

統合モニタとそのフィールドのマッピング・スクリプトを設定して、Enterprise Management Systems や自動サポート・システムなどの管理アプリケーションのイベント・データをキャプチャできます。

統合モニタは、モニタの設定のユーザ・インタフェースでカスタマイズするフィールドのマッピングによって異なります。マッピングによって、受信データの処理やBSMに転送される出力サンプルが定義されます。

特定のEMSアプリケーション(HP OM, HP Service Center, NetScout など)で使用するよう設計された統合モニタは、フィールドのマッピング・スクリプトを編集しなくても設定できます。このマッピングはHPによって事前に定義されているため、特別なカスタマイズが必要な場合以外は変更する必要はありません。これらのフィールドのマッピング・スクリプトの編集の詳細については、デプロイするモニタのユーザ・インタフェースの各ページにあるフィールドのマッピング要素の説明を参照してください。

テクノロジー統合モニタ(テクノロジー SNMPトラップ・モニタ, テクノロジー・ログ・ファイル・モニタ, およびテクノロジー・データベース・モニタ)の場合、データ・タイプを選択する必要があります。必要なスクリプトのテンプレートはフィールドのマッピングのテキスト・ボックスに直接ロードされます。組織のニーズに合わせてフィールドのマッピング・スクリプトを編集する必要があります。テクノロジー Web サービス統合モニタのフィールドのマッピングもカスタマイズする必要があります。

[**共通イベント**]または[**レガシー イベント**]フィールド・マッピング・データ・タイプを選択すると、サードパーティのドメイン・マネージャまたはアプリケーションから収集されたイベントをBSM 9.xに統合できます。レガシーEMS イベントとは異なり、共通イベント統合では、Operations Manager イベント・サブシステムおよびサービス状況コンソールのイベントを管理できます。さらに、共通イベント・チャンネルでは、データをレポートしないでBSMにトポロジをレポートすることもできます。

イベント・データをBSMに転送するために[**共通イベント**]データ・タイプを選択したときに、トポロジ設定を使用してBSMに統合する場合は、次の事前定義されたトポロジ・スクリプトから選択できます。

- **コンピュータ**: コンピュータCIを持つトポロジを作成する場合に選択します。
- **コンピュータ - 実行中のソフトウェア**: コンピュータCIおよび、Composition 関係によってこのCIに接続された実行中のソフトウェアCIを持つトポロジを作成する場合に選択します。
- **カスタム**: 取得したデータをコンピュータCIまたは実行中のソフトウェアCIではなく特定のCIに送信する場合は、独自のトポロジ・スクリプトの作成を選択します。自分でJythonトポロジ・スクリプトを作成する必要があるため、Jython 言語を十分理解している場合にのみこのオプションを選択してください。

イベント・データをBSMに転送するために[**レガシーイベント**]データ・タイプを選択したときに、トポロジ設定を使用してBSMに統合する場合は、次のトポロジ・スクリプトから選択できます。

- **ノード**: Monitored By 関係によって接続されたEMS モニタCIを持つノードCIを作成します。
- **ノード - 実行中のソフトウェア**: Composition 関係で接続されたノードCIおよび実行中のソフトウェアCIを持つトポロジと、Monitored By 関係でノードCIまたは実行中のソフトウェアCIに接続できるEMS モニタCIを作成します。
- **カスタム**: 取得したデータをコンピュータCIまたは実行中のソフトウェアCIではなく特定のCIに送信する場合は、独自のトポロジ・スクリプトの作成を選択します。トポロジ・スクリプトを自作する必要があるため、Jython 言語を十分理解している必要があります。

注:

- EMS アプリケーションによって送信されるイベントは、イベントのサンプルです。それらのイベントは、BSM の操作管理 イベントと同じではありません。
- SiteScope の 11.10 以前のバージョンを BSM 9.00 に接続している場合、モニタのトポロジ・スクリプトでは**ホスト・アプリケーション**のトポロジ・スクリプトは使用できません。**ホスト・アプリケーション**をレポートする既存の統合 (BSM 8.x に接続されている SiteScope で作成)のみ、引き続き BSM 9.00 にレポートします。このスクリプト・タイプを使用して新しい統合を作成することはできません。
- SiteScope は、BSM で定義された統合により作成されたモニタ CI のインジケータ定義を使用します (コンピュータ CI タイプに適用)。別の ETI がモニタのフィールド・マッピングで指定された場合、それにより標準設定のインジケータ定義が上書きされます。

トポロジ設定の選択の詳細については、[424ページ「テクノロジー統合モニタのトポロジ設定」](#)を参照してください。

注: フィールドのマッピングを使った作業では、スクリプトで定義した必須フィールドおよび任意フィールドのみを使用します。詳細については、各データ・タイプの表を参照してください。

共通イベントのデータを収集する統合モニタの設定方法

このタスクは共通イベント統合の設定に関連する手順を説明します。共通イベント統合は、特定のイベントのデータを収集したり、データを BSM の操作管理 イベント・サブ・システム、サービス状況 コンソール、サービス・レベル管理 で利用可能にするために使用されます。

このタスクには次の手順が含まれています。

- [446 ページ「統合方法の計画」](#)
- [446 ページ「BSM 統合の設定」](#)
- [446 ページ「HP Operations Manager のイベント統合の設定」](#)
- [447 ページ「SiteScope サーバの選択」](#)
- [447 ページ「統合モニタのグループの作成」](#)
- [447 ページ「統合モニタの追加」](#)
- [447 ページ「モニタのフィールド マッピングの編集」](#)
- [448 ページ「データのトポロジ・スクリプトへのマッピング - オプション\(トポロジを BSM に報告する場合は必須\)」](#)
- [449 ページ「フィールド・マッピング・スクリプトのテスト - オプション」](#)
- [449 ページ「結果」](#)

1. 統合方法の計画

統合モニタのタイプを確認します。EMS システムから BSM で表示する情報のタイプを検討します。いずれかの特定の統合モニタが組織のニーズを満たすかどうか、または汎用統合モニタ(テクノロジー・ログ・ファイル、データベース、SNMP トラップ、Web サービス)が必要かどうかを判断します。

概念の詳細については、[419 ページ「統合モニタの概要」](#)を参照してください。

2. BSM 統合の設定

SiteScope と BSM を統合します。詳細については、[231 ページ「SiteScope および BSM 間の統合の設定方法」](#)を参照してください。

3. HP Operations Manager のイベント統合の設定

イベント統合の設定手順を実行します。詳細については、[268 ページ「SiteScope を使用して HPOM または BSM にイベントを送信する方法」](#)を参照してください。

注:

- HP Operations Manager 統合メイン設定パネルで[イベント送信の有効化]を選択する必要はありません(手順 9, [272 ページ「SiteScope を使用して HPOM または BSM にイベントを送信する」](#))。この手順は標準 SiteScope モニタへのイベント送信にのみ適用されるからです。統合モニタ用のイベントは、[共通イベント]サンプル・マッピング・スクリプトを使用するように統合モニタが設定されていれば、自動的に送信されます。
- 手順 11, [272 ページ「モニタ・インスタンスと警告のイベントの送信を有効化 / 無効化」](#)

は、統合モニタのイベントを送信する場合、関係ありません。

- [HP Operations Manager 測定値統合] パネルで [HP Operations Manager 測定値統合の有効化] チェック・ボックスを選択する必要はありません。

4. SiteScope サーバの選択

統合モニタをデプロイする SiteScope サーバを選択します。

- SiteScope スタンドアロンでは、SiteScope インスタンスを選択して開きます。
- SAM システム可用性管理で、統合モニタをデプロイする SiteScope サーバを選択します。ユーザ・インタフェースの詳細については、BSM ヘルプにある『システム可用性管理の使用』の「システム可用性管理の管理」ページを参照してください。

5. 統合モニタのグループの作成

ユーザ・インタフェースの詳細については、315 ページ「[新規 SiteScope グループ] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

ヒント: 統合モニタ専用のグループを作成することをお勧めします。これにより、BSM に報告されるデータを統合からのデータとして簡単に識別できるようになります。

6. 統合モニタの追加

モニタを設定して、統合モニタの構成に必要なデータを追加する必要があります。次のアプリケーション固有の統合を選択できます。

- HP OM Event Monitor (詳細については、『Monitor Reference』ガイドを参照してください)
- HP Service Manager Monitor (詳細については、『Monitor Reference』ガイドを参照してください)
- NetScout Event Monitor (詳細については、『Monitor Reference』ガイドを参照してください)

次の汎用統合モニタを選択できます。

- Technology Database Integration Monitor (詳細については、『Monitor Reference』ガイドを参照してください)
- Technology Log File Integration Monitor (詳細については、『Monitor Reference』ガイドを参照してください)
- Technology SNMP Trap Integration Monitor (詳細については、『Monitor Reference』ガイドを参照してください)
- Technology Web Service Integration Monitor (詳細については、『Monitor Reference』ガイドを参照してください)

7. モニタのフィールド マッピングの編集

マッピングによって、受信データの処理や BSM に転送される出力サンプルが定義されます。

- a. [フィールドのマッピング] パネルで、[共通イベント] フィールド・マッピング・スクリプトを選択し、[ファイルのロード] をクリックします。テンプレート・スクリプトが [フィールドのマッピング] ボックスに表示されます。

- b. 対応するフィールド・マッピング・グループに、データの抽出元にするログ・ファイルに表示されるスクリプト値をマッピングすることにより、スクリプトを編集して、BSM に転送する監視対象アプリケーションから SiteScope でデータを取得できるようにします。ファイルの構造およびシNTAX の詳細については、[432 ページ「イベント・ハンドラの構造と構文」](#)を参照してください。

必須スクリプト値については、[454 ページ「共通イベント・スクリプトの必須値」](#)を参照してください。

任意指定のスクリプト値については、[455 ページ「共通イベント・スクリプトの任意値」](#)を参照してください。

注: [フィールドのマッピング] 設定は、[トポロジ設定] パネルの[データなしのレポート トポロジ] チェック・ボックスが選択されている場合は、使用できません。データなしのトポロジ・レポートの詳細については、[516 ページ「データなしでトポロジをレポートする方法」](#)を参照してください。

8. データのトポロジ・スクリプトへのマッピング - オプション(トポロジを BSM に報告する場合は必須)

[トポロジ設定] パネルで、BSM の適切な CI 階層にデータを転送するためのトポロジ・スクリプトを選択します。

- **コンピュータ:** コンピュータ CI を持つトポロジを作成する場合に選択します。

注: コンピュータ CI に関する情報は、[HostHint] フィールドから取得されます。

- **コンピュータ - 実行中のソフトウェア:** コンピュータ CI および、Composition 関係によってこの CI に接続された実行中のソフトウェア CI を持つトポロジを作成する場合に選択します。

注: ノード CI に関する情報は[HostHint] フィールドから取得され、実行中のソフトウェア CI の名前は[Category] フィールドから取得されます。

- **カスタム:** 独自のトポロジ・スクリプトを作成する場合に選択します

トポロジ設定を編集します。トポロジ・スクリプトは、BSM の RTSM 内の必要な CI にデータを転送するために必要な値で設定されます概念の詳細については、[424 ページ「テクノロジー統合モニタのトポロジ設定」](#)を参照してください。

注:

- フィールド・マッピングを使用するとき、フィールド・マッピング・フィールドをトポロジ・スクリプトの入力として使用できます。たとえば、共通イベント・マッピングを使用するときは、次の方法で[Category] フィールドの値にアクセスできます。

```
category = Framework.getDestinationAttribute("Category").
```

- さらに、group0, group1 など、テクノロジー・ログ・ファイル統合モニタからの「モニタ変数」の値、またはテクノロジー・データベース統合モニタ内のデータベース列の名前、またはその他の統合モニタ内のその他の変数にアクセスできます。たとえば、次の方法で、

変数 `group1` の値にアクセスできます。

```
group1 = Framework.getDestinationAttribute("group1")
```

9. フィールド・マッピング・スクリプトのテスト - オプション

[トポロジ設定] パネルで, [スクリプトのテスト] をクリックして, モニタの実行前にスクリプトをテストします。次の内容がテストされます。

- フィールドのマッピングおよびトポロジ・スクリプトの構文を確認します。
- マッピング結果を表示します。
- トポロジ・スクリプトが設定されている場合は, トポロジ結果を表示します。

このテストでは, BSM にイベントもトポロジも転送しません。

10. 結果

サードパーティのシステムで収集されて統合モニタで処理されると, 共通イベントが生成されて <SiteScope のルート・ディレクトリ>\logs ディレクトリの **HPSiteScopeOperationsManagerIntegration.log** ファイルにそのイベント・データが書き込まれます。各イベントはログの個別の行に書き込まれます。ログ・ファイル・ポリシーにより, このファイルを読み取り, BSM に送信されるイベント・メッセージを作成するようにエージェントに指示が出されます。

イベントは, オペレーション管理のイベント・ブラウザで参照できます(イベント管理ファウンデーション・ライセンスを保有している場合)。BSM のインストールにオペレーション管理が含まれていない場合は, サービス状況の状況インジケータを使用して CI の状態に影響するイベントを確認できます。

レガシー・イベントのデータを収集する統合モニタの設定方法

このタスクでは、特定のイベントのデータを収集するために使用されるレガシー・イベントの統合を設定する手順および BSM のサービス状況レポート、イベント・ログ・レポート、トレンド・レポートで、このデータを使用できるようにする手順について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- [450ページ「統合方法の計画」](#)
- [450ページ「BSM 統合の設定」](#)
- [450ページ「SiteScope サーバの選択」](#)
- [451ページ「統合モニタのグループの作成」](#)
- [451ページ「統合モニタの追加」](#)
- [451ページ「モニタのフィールド マッピングの編集」](#)
- [452ページ「トポロジ・スクリプトへのデータのマッピング - オプション\(トポロジを BSM に報告する場合は必須\)」](#)
- [452ページ「フィールド・マッピング・スクリプトのテスト - オプション」](#)
- [453ページ「BSM での EMS 統合アプリケーションの設定」](#)
- [453ページ「結果」](#)

1. 統合方法の計画

統合モニタのタイプを確認します。EMS システムから BSM で表示する情報のタイプを検討します。いずれかの特定の統合モニタが組織のニーズを満たすかどうか、または汎用統合モニタ(テクノロジー・ログ・ファイル、データベース、SNMP トラップ、Web サービス)が必要かどうかを判断します。

概念の詳細については、[419ページ「統合モニタの概要」](#)を参照してください。

2. BSM 統合の設定

SiteScope と BSM を統合します。詳細については、[231ページ「SiteScope および BSM 間の統合の設定方法」](#)を参照してください。

注: [レガシー イベント] サンプル・マッピング・スクリプトを使用するように統合モニタが設定されている場合は、HP Operations Manager のイベント統合を設定する必要はありません。

3. SiteScope サーバの選択

統合モニタをデプロイする SiteScope サーバを選択します。

- SiteScope スタンドアロンでは、SiteScope インスタンスを選択して開きます。
- SAM システム可用性管理で、統合モニタをデプロイする SiteScope サーバを選択します。ユーザ・インタフェースの詳細については、BSM ヘルプにある『システム可用性管理の使用』の「システム可用性管理の管理」ページを参照してください。

- [EMS 統合管理]で, [新規統合]または[統合の編集]ボタンをクリックします。[統合の編集]ダイアログ・ボックスで, システム可用性管理 パネルのリンクをクリックして, SiteScope サーバを選択できる[SAM 管理]ウィンドウを開きます。ユーザ・インタフェースの詳細については, BSM ヘルプにある『Solutions and Integrations Guide』の「Edit Integration Dialog Box」を参照してください。

4. 統合モニタのグループの作成

ユーザ・インタフェースの詳細については, 315ページ「[新規 SiteScope グループ]ダイアログ・ボックス」を参照してください。

ヒント: 統合モニタ専用のグループを作成することをお勧めします。これにより, BSM に報告されるデータを統合からのデータとして簡単に識別できるようになります。

5. 統合モニタの追加

モニタを設定して, 統合モニタの構成に必要なデータを追加する必要があります。次のアプリケーション固有の統合を選択できます。

- [HP OM Event Monitor](#)(詳細については, 『Monitor Reference』ガイドを参照してください)
- [HP Service Manager Monitor](#)(詳細については, 『Monitor Reference』ガイドを参照してください)
- [NetScout Event Monitor](#)(詳細については, 『Monitor Reference』ガイドを参照してください)

次の汎用統合モニタを選択できます。

- [Technology Database Integration Monitor](#) (詳細については, 『Monitor Reference』ガイドを参照してください)
- [Technology Log File Integration Monitor](#)(詳細については, 『Monitor Reference』ガイドを参照してください)
- [Technology SNMP Trap Integration Monitor](#)(詳細については, 『Monitor Reference』ガイドを参照してください)
- [Technology Web Service Integration Monitor](#) (詳細については, 『Monitor Reference』ガイドを参照してください)

6. モニタのフィールド マッピングの編集

マッピングによって, 受信データの処理やBSMに転送される出力サンプルが定義されます。

- a. [フィールドのマッピング]パネルで, [レガシー イベント]フィールド・マッピング・スクリプトを選択し, [ファイルのロード]をクリックします。
- b. 対応するフィールド・マッピング・グループに, データの抽出元にするログ・ファイルに表示されるスクリプト値をマッピングすることにより, スクリプトを編集して, BSM に転送する監視対象アプリケーションから SiteScope でデータを取得できるようにします。ファイルの構造およびシンタックスの詳細については, 432ページ「イベント・ハンドラの構造と構文」を参照してください。

必須スクリプト値については, 459ページ「レガシー・イベント・スクリプトの必須値」を参照してください。

スクリプトの任意指定値については、460ページ「レガシー・イベント・スクリプトの任意値」を参照してください。

注: [フィールドのマッピング]設定は、[トポロジ設定]パネルの[データなしのレポートトポロジ]チェック・ボックスが選択されている場合は、使用できません。データなしのトポロジ・レポートの詳細については、516ページ「データなしでトポロジをレポートする方法」を参照してください。

7. トポロジ・スクリプトへのデータのマッピング - オプション(トポロジをBSMに報告する場合は必須)

[トポロジ設定]パネルで、BSMの適切なCI階層にデータを転送するためのトポロジ・スクリプトを選択します。

- **ノード**: Monitored By 関係によって接続されたEMSモニタCIを持つノードCIを作成する場合には選択します。
- **ノード - 実行中のソフトウェア**: Composition 関係で接続されたノードCIおよび実行中のソフトウェアCIを持つトポロジ、および Monitored By 関係でノードCIまたは実行中のソフトウェアCIに接続できるEMSモニタCIを作成する場合には選択します。

注: コンピュータCIに関する情報は[HostHint]フィールドから取得され、実行中のソフトウェアCIの名前は[カテゴリ]フィールドから取得されます。

- **カスタム**: 独自のトポロジ・スクリプトを作成する場合には選択します

トポロジ設定を編集します。トポロジ・スクリプトは、BSMのRTSM内の必要なCIにデータを転送するために必要な値で設定されます概念の詳細については、424ページ「テクノロジー統合モニタのトポロジ設定」を参照してください。

注:

- フィールド・マッピングを使用するとき、フィールド・マッピング・フィールドをトポロジ・スクリプトの入力として使用できます。たとえば、レガシー・イベント・マッピングを使用するときは、次の方法で[Subject]フィールドの値にアクセスできます。

```
subject = Framework.getDestinationAttribute("Subject")
```

- さらに、group0、group1 など、テクノロジー・ログ・ファイル統合モニタからの「モニタ変数」の値、またはテクノロジー・データベース統合モニタ内のデータベース列の名前、またはその他の統合モニタ内のその他の変数にアクセスできます。たとえば、次の方法で、変数 group1 の値にアクセスできます。

```
group1 = Framework.getDestinationAttribute("group1")
```

8. フィールド・マッピング・スクリプトのテスト - オプション

[トポロジ設定]パネルで、[スクリプトのテスト]をクリックして、モニタの実行前にスクリプトをテストします。次の内容がテストされます。

- フィールドのマッピングおよびトポロジ・スクリプトの構文を確認します。
- マッピング結果を表示します。

- トポロジ・スクリプトが設定されている場合は、トポロジ結果を表示します。

このテストでは、BSM にイベントもトポロジも転送しません。

9. **BSM での EMS 統合アプリケーションの設定**

モニタの設定に加え、BSM の EMS 統合アプリケーションの設定が必要になります。詳細については、BSM ヘルプにある『Solutions and Integrations Guide』の「[How to Integrate Data from Third-Party Sources \(EMS Data\) into HP Business Service Management](#)」の「Create an EMS integration (for Event or Ticket Samples)」で残りの手順を参照してください。

注: 測定値統合を設定する場合、BSM の[SAM 管理]にアクセスし、新しい統合を設定する必要はありません。モニタを作成して、[レポート トポロジ]オプションを選択するだけです。

10. **結果**

サードパーティのシステムで収集されて統合モニタで処理されると、イベントが生成されて **<SiteScope のルート・ディレクトリ> \logs** ディレクトリの **HPSiteScopeOperationsManagerIntegration.log** ファイルにそのイベント・データが書き込まれます。各イベントはログの個別の行に書き込まれます。ログ・ファイル・ポリシーにより、このファイルを読み取り、BSM に送信されるイベント・メッセージを作成するようにエージェントに指示が出されます。

イベントは、サービス状況、システム可用性管理 イベント・ログ、およびトレンド・レポートで参照できます。

共通イベント・サンプルのフィールドのマッピングの設定

イベントのデータ・タイプは、外部システムによって収集されたイベントを抽出し、BSM にインポートするために使用されます。統合モニタのフィールドのマッピングを設定するときに[共通イベント]データ・タイプを選択してイベント・スクリプトをロードします。次に、[フィールドのマッピング]テキスト・ボックスの内容をコピーしてテキスト・エディタに貼り付け、設定を変更します。変更が完了したら、その内容を[フィールドのマッピング]テキスト・ボックスにコピーします。

イベント・ハンドラの構造と構文の詳細については、432ページ「イベント・ハンドラの構造と構文」を参照してください。

CI 解決のヒントの形式については、422ページ「CI 解決のヒントの形式」を参照してください。

本項の内容

- 454ページ「共通イベント・スクリプトの必須値」
- 454ページ「データなしのトポロジを報告する場合の必須値」
- 455ページ「共通イベント・スクリプトの任意値」
- 457ページ「共通イベント・スクリプトの例」

共通イベント・スクリプトの必須値

次の表に、共通イベント・スクリプトの必須値を示します。対応するフィールド・マッピング・グループに、データの抽出元にするログ・ファイルに表示される値をマップします。

フィールド名	説明
タイトル	イベントのサマリ。
重大度	イベントの重大度。利用可能な値は、[正常域]、[注意域]、[警戒域]、[重要警戒域]、および[危険域]です。
SourceHint	監視アプリケーションと、対応するプローブ/エージェント(イベントに作成に関与)の情報。

データなしのトポロジを報告する場合の必須値

次の値は、SiteScope テクノロジ統合モニタによって検出されたトポロジだけを、データのレポートなしで報告する場合に必須です。

トポロジ・スクリプト	フィールド名	説明
<ul style="list-style-type: none"> コンピュータ コンピュータ - 実行中のソフトウェア 	target_name	<p>イベントを生成したホストまたはマシンの名前。手動で追加するか、次の方法で取得できます。</p> <pre>Framework.getDestinationAttribute("<someAttribute>")</pre> <p>例：</p> <p>テクノロジー・ログ・ファイル統合モニタ： <pre>Framework.getDestinationAttribute("group0")</pre></p> <p>テクノロジー・データベース統合モニタ： <pre>Framework.getDestinationAttribute("NAME")</pre></p> <p>テクノロジー Web サービス統合モニタ： <pre>Framework.getDestinationAttribute("value1")</pre></p>
<ul style="list-style-type: none"> コンピュータ コンピュータ - 実行中のソフトウェア 	target_ip	<p>ホストまたはマシンの IP。手動で追加するか、次の方法で計算できます。</p> <pre>HostIPCachingManager.getIPByHostName(target_name)</pre> <p>ここで、target_name は有効なホストまたはマシンを表します。次のコードを使用することもできます。</p> <pre>HostIPCachingManager.getIPByHostName("<someAttribute>")</pre>
コンピュータ - 実行中のソフトウェア	name	<p>実行中のソフトウェアの名前。手動で追加するか、次の方法で取得できます。</p> <pre>Framework.getDestinationAttribute("<someAttribute>")</pre>

共通イベント・スクリプトの任意値

次の表に、共通イベント・スクリプトの任意値を示します。対応するフィールド・マッピング・グループに、データの抽出元にするログ・ファイルに表示される値をマップします。

フィールド名	説明
CiHint	イベントに関連する CI の情報。CI 解決のヒントで使用する形式の詳細については、 422 ページ「フィールド・マッピングの構造について」 を参照してください。
EtiHint	<p>次の形式のイベント・タイプ・インジケータのヒント。 [ETI 名]:[ETI 値]:[測定値]</p> <p>例：CPULoad:Critical:50</p> <p>BSM インジケータの詳細については、BSM 文書ライブラリにある『サービス状況の使用』の「状況インジケータ、KPI、KPI のドメイン」を参照してください。</p>

フィールド名	説明
ComponentCi	<p>CI のサブコンポーネントを識別するために使用される情報。この CI サブコンポーネントは、選択した CI について BSM のサービス状況で集計された状態の計算に使用されます。</p> <p>複数のコンポーネントからのイベントで HI にデータが設定される場合、このフィールドにコンポーネント名を指定すると、HI 状態を適切に計算できます。</p> <p>例 : 2 個の CPU(cpu #1 と cpu #2)を含むコンピュータ CI がある場合、両方の CPU からのイベントが同じ CPU ロード HI に送信されます。標準設定では、これらのイベントが互いに上書きして正しくない HI 状態が作成されます。この状態は、ComponentCi に値 "cpu #1" および "cpu #2" を設定して、この 2 イベント間の集計された状態を HI 状態とすることにより回避できます。</p>
HostHint	<p>イベントに関連する CI をホストしているノード・タイプの CI の情報。このフィールドは、ノード CI を含むトポロジを報告する場合必須です。</p>
説明	<p>イベントを説明する追加情報。</p>
カテゴリ	<p>イベントが属している論理グループの名前。イベント・カテゴリは、HPOM のメッセージ・グループと似ています。</p> <p>例 (ログ・ファイルより): データベース, セキュリティ, ネットワーク</p>
サブカテゴリ	<p>イベントが属している論理サブグループ(カテゴリ)の名前。</p> <p>例 (ログ・ファイルより): Oracle(データベース), アカウント(セキュリティ), ルータ(ネットワーク)</p>
キー	<p>発生したイベントのタイプを表す一意の文字列。管理対象の環境で両方のイベントが同じ状況を表している場合、2 つのイベントのキーが同じになることがあります。同じキーを持つイベントは、重複であると扱われます。</p> <p>例 (ログ・ファイルより): foohost:barhost:CPULoad:Critical</p>
CloseKey	<p>Key 属性が CloseKey パターン式と一致するすべてのイベントを閉じるためのイベントを送信できるようにします。必要に応じて、ワイルドカード(*)を使用できます。</p> <p>例 (ログ・ファイルより): barhost:CPULoad<*></p>

フィールド名	説明
LogOnly	<p>このフィールドを使用すると、履歴イベント・ブラウザに直接向かうイベントを、閉じたイベントとして送信できるようになります。このようなイベントは完全に処理されますが(CI 解決、HI の更新など)、[Life Cycle State]が最初から[closed]に設定されます。CI 解決の詳細については、BSM文書ライブラリにある『オペレーション管理の使用』の「CI 解決」を参照してください。</p> <p>この属性に「True」が設定される典型的なイベントの例としては、状況インジケータが「正常域」状態または「良好」状態にリセットされるイベントや、前の問題が解消されたことを示すイベント(問題が別のイベントに報告された)が挙げられます。</p> <p>利用可能な値は、</p> <ul style="list-style-type: none"> • True: すべてのイベントのログを到着時に自動的に記録します。 • False: イベントは自動的にログに記録されません。 • True for normal severity: 重大度が[正常域]のイベントのみを自動的にログに記録します。 <p>標準設定値: False</p>
属性	
#cma1= #cma2= #cma3= #cma4= #cma5=	<p>これらの属性は、イベント内の任意のカスタム属性を送信するために使用されます。</p> <p>注: サポートされるのは、事前定義されたカスタム・マッピング属性だけです。カスタム属性名(cma1 ~ cma5)は変更できず、新しいカスタム属性名を追加することもできません。</p>

共通イベント・スクリプトの例

次の例では、ログ・ファイル内に表示される、対応するフィールド・マッピング・グループ(\$group<#>)にスクリプト値がマップされている、共通イベント・スクリプトのセクションを示します。

```
[ $DEFAULT_PARAMETERS$ ] #####
# NOTE:the following fields are mandatory #
##### # Brief summary of the
event Title=$group0 # Severity of the event.利用可能な値は, "Normal",
"Warning", "Minor", "Major", and "Critical" Severity=$group2 #
Information about the monitoring application and the corresponding
probe/agent that is responsible for creating the event # If the
field is left empty then it will be auto filled with SiteScope@@
[SiteScope Node FQDN] SourceHint=$group8
##### NOTE:the following
fields are optional   # # An unfilled field must remarked with '#'
# ##### # Information about
a CI that is related to the event.For more information, see
"Preferences" > "Common Event Mappings" > "New/Edit Event Mapping"
```

```
Dialog Box" in the SiteScope documentation CiHint=$group6 # Event  
Type Indicator hint in the format:[ETI Name]:[ETI Value]:[Metric  
Value].例 : CPUload:Critical:50 EtiHint=$group5 # Information used  
to identify a subcomponent of a CI.This CI subcomponent is used to  
calculate an aggregated status within BSM Service Health for  
selected CIs #ComponentCi=
```

レガシー・イベント・サンプルのフィールドのマッピングの設定

イベントのデータ・タイプは、外部システムによって収集されたイベントを抽出し、BSM にインポートするために使用されます。統合モニタのフィールド・マッピングを設定するときに[レガシーイベント]データ・タイプを選択してイベント・スクリプトをロードします。次に、[フィールドのマッピング]テキスト・ボックスの内容をコピーしてテキスト・エディタに貼り付け、設定を変更します。変更が完了したら、その内容を[フィールドのマッピング]テキスト・ボックスにコピーします。

イベント・ハンドラの構造と構文の詳細については、[432ページ「イベント・ハンドラの構造と構文」](#)を参照してください。

CI 解決のヒントの形式については、[422ページ「フィールド・マッピングの構造について」](#)を参照してください。

本項の内容

- [459ページ「レガシー・イベント・スクリプトの必須値」](#)
- [460ページ「レガシー・イベント・スクリプトの任意値」](#)
- [462ページ「条件式の例 1」](#)
- [462ページ「条件式の例 2」](#)
- [462ページ「イベント・スクリプトの例」](#)

レガシー・イベント・スクリプトの必須値

次の表に、レガシー・イベント・スクリプトの必須値を示します。

フィールド名	タイプ	説明	例
time_stamp	DOUBLE	1970 年 1 月 1 日以降の秒単位のタイムスタンプ。	<pre>time_stamp:DOUBLE=str_to_seconds(\$time,"yyyy-MM-dd HH:mm:ss.SSS").</pre> <pre>time_stamp:DOUBLE=int time()</pre> <p>int time() の詳細については、433ページ「利用可能なデータ処理演算」を参照してください。</p>
severity	INT	事前に設定された次のいずれかの重大度になります(該当の整数に基づきます)。 0:SEVERITY_UNKNOWN 1:SEVERITY_INFORMATIONAL 2:SEVERITY_WARNING 3:SEVERITY_MINOR 4:SEVERITY_MAJOR 5:SEVERITY_CRITICAL	<pre>severity:INT=SEVERITY_MINOR</pre>

フィールド名	タイプ	説明	例
target_name	STRING	イベントを生成したデバイスまたはホスト・マシンの名前。	target_name=\$hostName target_name=String resolveHostName(String hostIP) String resolveHostName (String hostIP) の詳細については、 433ページ「利用可能なデータ処理演算」 を参照してください。
状態	STRING	イベントの状態(外部 EMS の名称)。	status="OPEN" status="ASSIGNED" status="CLOSED"
subject	STRING	イベントの対象(CPU, SAP アプリケーション, ハード・ディスクなど)。イベント・ソースを表す中/高レベルの階層です。	subject="DISK"
instance	STRING	イベントを生成した対象のインスタンス(D:\ など)。イベント・ソースを表す最下位レベルの階層です。	instance="E:\\"
description	STRING	イベントのテキスト説明。	description="free space on drive e is below 10%"
data_source	STRING	イベントを生成したシステム。	data_source="HP OVO"

レガシー・イベント・スクリプトの任意値

次の表に、レガシー・イベント・スクリプトの任意値を示します。

フィールド名	タイプ	説明	例
target_ip	STRING	イベントを生成したデバイスまたはホスト・マシンの IP。	target_ip=\$IPString
object	STRING	イベント・ソースを表す階層の任意レベル。	object="OS"
event_id	STRING	該当のイベントの一意的識別子。	event_id=\$id
logical_group	STRING	該当のイベントの論理グループ。	logical_group="error messages"

フィールド名	タイプ	説明	例
monitor_group	STRING	該当のイベントをレポートしたモニタ・グループ。	monitor_group="log monitors on \\hostname"
orig_severity_name	STRING	重大度(外部 EMS での名称)。	orig_severity_name="Cleared"
acknowledged_by	STRING	該当のイベントを確認したユーザの名前。	acknowledged_by=\$username
owner	STRING	該当のイベントを所有するユーザの名前。	owner="admin"
value	DOUBLE	イベントの数値を転送するために使用されます。	value=\$thresholdViolated
attr1	STRING	予備データ・スロット。	attr1=\$history
attr2	STRING	予備データ・スロット。	attr2=\$moreHistory
attr3	STRING	予備データ・スロット。	attr3="Design"
attr4	STRING	予備データ・スロット。	attr4=\$MonitorOutput
attr5	STRING	長い文字列用の予備データ・スロット。	attr5=\$Longhistory

イベント・サンプルのホスト DNS 解決

BSM 統合では、ノード CI の作成に使用するフィールドに FQDN(完全修飾ドメイン名)と有効な IP アドレスの両方が必要です。

FQDN, IP アドレス, またはその両方がわからない場合、フィールドのマッピングで次の関数を使用して名前を解決し、統合のソースからアクセスできます。

```
target_name=resolveHostName($SomeHost)
```

```
target_ip=resolveHostIP($SomeHost)
```

注: 変数 \$SomeHost は、統合のソースの変数で置換される必要があります。

次の場合これらの関数は必要ありません。

- 統合でアクセスするソースから FQDN, IP アドレス, またはその両方を取得できる。この場合、**target_name=** の値(FQDN)と **target_ip=** の値を、関数を使用せずに入力する必要があります。
- SiteScope サーバで、統合でアクセスするソースからサーバの FQDN, IP アドレス, またはその両方を解決できない。この場合、関数で有効な値を生成できない可能性があります。

条件式の例 1

```
severity:INT=$var6.equals("red") ?SEVERITY_CRITICAL
: SEVERITY_INFORMATIONAL
```

この例では、6 番目の変数バインドの値が文字列 `red` と比較されます。変数バインドが文字列 `red` に等しい場合は `severity` タグの値が `SEVERITY_CRITICAL` に設定され、等しくない場合は `SEVERITY_INFORMATIONAL` に設定されます。

条件式の例 2

```
severity:INT=$var6.equals("red") ?SEVERITY_CRITICAL :
$var6.equals("green") ?SEVERITY_INFORMATIONAL :$var6.equals
("yellow")
? SEVERITY_MINOR :SEVERITY_WARNING
```

この例では、条件演算子を連結して連鎖的に決定が行われます。6 番目の変数バインドに文字列 `red` が保持されている場合、`severity` タグの値は `SEVERITY_CRITICAL` になります。6 番目の変数バインドに文字列 `green` が保持されている場合、`severity` タグの値は `SEVERITY_INFORMATIONAL` になります。変数バインドに文字列 `yellow` が保持されている場合、タグの値は `SEVERITY_MINOR` になります。前述の条件に 1 つも該当しない場合、タグの値は `SEVERITY_WARNING` になります。

イベント・スクリプトの例

次の例では、状態が `"OPEN"` のイベントと、ユーザによってクリアされたイベントの 2 つのタイプのイベントが送信されます。データは、`$` 表記を使用して受信イベント・フィールドから取得されます。ほかのすべてのイベントは、最後のハンドラによって破棄されます。

```
[$DEFAULT_PARAMETERS$]
#####
# NOTE:the following parameters are mandatory #
#####
time_stamp:DOUBLE=str_to_seconds($time,"yyyy-MM-dd HH:mm:ss.SSS")
severity:INT= SEVERITY_UNKNOWN
target_name=$Device
status=$Status
subject="EMS X Events"
instance=$target
description=$description
data_source="EMS X"

#send an open event with the value in value fields and with the
event id
[OPEN events]
$MATCH="OPEN".equals($Status)
$ACTION=SEND(event)
value:DOUBLE=parseDouble($threshold)
event_id=$uid
```

```
#send clear events with the event id and acknowledging username
[clear events]
$MATCH="CLEAR".equals($Status)
$ACTION=SEND(event)
event_id=$uid
acknowledged_by=$ClearedBy

[event sink]
$MATCH=true
$ACTION=DISCARD
```

トラブルシューティングおよび制限事項

本項では、統合モニタのフィールド・マッピングに関するトラブルシューティングおよび制限事項について説明します。

- イベント・サンプルの場合、レポートされる EMS モニタの monitor_id は、次のように作成されます。
 - イベント サンプルおよび[コンピュータ]トポロジの場合の monitor_id :
< target_name>
 - イベント サンプルおよび[コンピュータ - 実行中のソフトウェア]トポロジ(件名が **system** でない)の場合の monitor_id :
<件名(実行中のソフトウェアの名前)>
 - イベント サンプルおよび[コンピュータ - 実行中のソフトウェア]トポロジ(件名が **system**)の場合の monitor_id :
< target_name>
- XML 特殊文字 (" , ' < > &)を使用すると、BSM でこれらのサンプルに関して問題が発生するため、monitor_id の作成に使用されるフィールドではこれらの文字を使用しないでください。

第18章

測定値データを収集する統合モニタの設定

本章の内容

概念

- [466ページ「測定値サンプルの統合モニタ・フィールドのマッピング」](#)

タスク

- [467ページ「コンピュータ - モニタ・トポロジを使ってメトリック・データを収集するための統合モニタの設定方法」](#)
- [474ページ「カスタム・トポロジを使用して測定値データを収集する統合モニタの設定方法」](#)
- [489ページ「ノード・トポロジでメトリック・データを収集するための統合モニタの設定方法」](#)

参照情報

- [501ページ「測定値サンプルのフィールドのマッピングの設定」](#)

測定値サンプルの統合モニタ・フィールドのマッピング

統合モニタとそのフィールドのマッピング・スクリプトを設定して、Enterprise Management Systems や自動サポート・システムなどの管理アプリケーションの測定値データをキャプチャできます。

統合モニタは、モニタの設定のユーザ・インタフェースでカスタマイズするフィールドのマッピングによって異なります。マッピングによって、受信データの処理やBSMに転送される出力サンプルが定義されます。

特定のEMSアプリケーション(HP OM, HP Service Center, NetScout など)で使用するよう設計された統合モニタは、フィールドのマッピング・スクリプトを編集しなくても設定できます。このマッピングは HP によって事前に定義されているため、特別なカスタマイズが必要な場合以外は変更する必要はありません。これらのフィールドのマッピング・スクリプトの編集の詳細については、デプロイするモニタのユーザ・インタフェースの各ページにあるフィールドのマッピング要素の説明を参照してください。

テクノロジー統合モニタ(テクノロジー SNMP トラップ・モニタ、テクノロジー・ログ・ファイル・モニタ、およびテクノロジー・データベース・モニタ)の場合、データ・タイプを選択する必要があります。必要なスクリプトのテンプレートはフィールドのマッピングのテキスト・ボックスに直接ロードされます。組織のニーズに合わせてフィールドのマッピング・スクリプトを編集する必要があります。テクノロジー Web サービス統合モニタのフィールドのマッピングもカスタマイズする必要があります。

測定値データをBSMに転送するために[**Metrics**]データ・タイプを選択したときに、トポロジ設定を使用してBSMに統合する場合は、次の事前定義されたトポロジ・スクリプトから選択できます。

- **コンピュータ - モニタ** : SiteScope トポロジ(モニタ)を送信する場合に選択します。これは標準設定です。SiteScope ではこのデータをノード CI の子孫であるコンピュータ CI にレポートします。
- **トポロジなし** : トポロジを送信しない場合に選択します(ただし、データはまだ送信される)。
- **カスタム** : 独自のトポロジを作成できます。自分で Jython トポロジ・スクリプトを作成するため、Jython 言語を十分理解している場合にのみこのオプションを選択してください。

トポロジ設定の選択の詳細については、[424 ページ「テクノロジー統合モニタのトポロジ設定」](#)を参照してください。

注: SiteScope は、BSM で定義された統合により作成されたモニタ CI のインジケータ定義を使用します(コンピュータ CI タイプに適用)。別の ETI がモニタのフィールド・マッピングで指定された場合、それにより標準設定のインジケータ定義が上書きされます。

コンピュータ - モニタ・トポロジを使ってメトリック・データを収集するための統合モニタの設定方法

このタスクでは、コンピュータ - モニタ・トポロジ・スクリプトを使って EMS メトリクス・フローを設計および実装する手順について説明します。トポロジはモニタされた By リンクによって SiteScope モニタ CI に接続されたコンピュータ CI を記述します。

注: このタスクの例については、471ページ「例 - コンピュータ - モニタ・トポロジを使用した測定値フローの作成」を参照してください。

このタスクには次の手順が含まれています。

- 467ページ「BSM 統合の設定」
- 467ページ「SiteScope の選択」
- 467ページ「統合モニタのグループの作成」
- 468ページ「統合モニタの追加」
- 468ページ「トポロジ・フローの計画」
- 468ページ「モニタのフィールド マッピングの編集」
- 469ページ「メトリックのインジケータへのマップ」
- 470ページ「トポロジ・スクリプトの選択」
- 470ページ「SAM レポートを使用する場合のグループ権限の割り当て」
- 470ページ「フィールド・マッピング・スクリプトのテスト - オプション」
- 470ページ「統合結果の表示」

1. BSM 統合の設定

SiteScope と BSM を統合します。詳細については、231ページ「SiteScope および BSM 間の統合の設定方法」を参照してください。

2. SiteScope の選択

統合モニタをデプロイする SiteScope サーバを選択します。

- SiteScope スタンドアロンでは、SiteScope インスタンスを選択して開きます。
- SAM システム可用性管理で、統合モニタをデプロイする SiteScope サーバを選択します。ユーザ・インタフェースの詳細についてはBSM ヘルプの『システム可用性管理の使用』にある「システム可用性管理の管理」ページを参照してください。

3. 統合モニタのグループの作成

ユーザ・インタフェースの詳細については、315ページ「[新規 SiteScope グループ] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

ヒント: 統合モニタ専用のグループを作成することをお勧めします。これにより、BSM に報告

されるデータを統合からのデータとして簡単に識別できるようになります。

4. 統合モニタの追加

モニタを設定して、統合モニタの構成に必要なデータを追加する必要があります。次のアプリケーション固有の統合を選択できます。

- [HP OM Event Monitor](#)(詳細については、『Monitor Reference』ガイドを参照してください)
- [HP Service Manager Monitor](#)(詳細については、『Monitor Reference』ガイドを参照してください)
- [NetScout Event Monitor](#)(詳細については、『Monitor Reference』ガイドを参照してください)

次の汎用統合モニタを選択できます。

- [Technology Database Integration Monitor](#) (詳細については、『Monitor Reference』ガイドを参照してください)
- [Technology Log File Integration Monitor](#)(詳細については、『Monitor Reference』ガイドを参照してください)
- [Technology SNMP Trap Integration Monitor](#)(詳細については、『Monitor Reference』ガイドを参照してください)
- [Technology Web Service Integration Monitor](#) (詳細については、『Monitor Reference』ガイドを参照してください)

5. トポロジ・フローの計画

開始する前に、次のことを計画します。

- 使用するモニタとメトリックのタイプ。
- トポロジでレポートするコンピュータ CI 上に作成する HI。
- 標準設定の HI の大半については、すでに HI および KPI の割り当てがあるため、新しいものを作成する必要はありません。
- HI にマップするメトリック。

6. モニタのフィールド マッピングの編集

マッピングによって、受信データの処理やBSMに転送される出力サンプルが定義されます。

- a. [フィールドのマッピング] パネルで、[Metrics] フィールド・マッピング・スクリプトを選択し、[ファイルのロード] をクリックします。
- b. スクリプト値を対応するフィールド・マッピング・グループにマップします。そこでデータを抽出するエンティティ(データベース、ログ・ファイル、SNMPトラップ、Web サービス)に表示されます。
 - 必須スクリプト値については、501ページ「メトリック・スクリプトの必須値」を参照してください。
 - 任意指定のスクリプト値については、502ページ「メトリック・スクリプトの任意値」を参照してください。

注: 統合フィールド・マッピングは、統合によって作成された各モニタ CI が、単一の監視対象の CI (Computer など) に確実に接続されるような方法で設定する必要があります。複数のコンピュータ CI に接続されたモニタ CI を作成することは避けてください。そのためには、[MonitorName] の一部として [TargetName] フィールドの値を使用することをお勧めします。次に例を示します。

推奨:

```
MonitorName="Disk usage on " + $group0
TargetName=$group0
```

回避:

```
MonitorName="Disk usage on my computer"
TargetName=$group0
```

- c. インジケータ・マッピング・フィールドは SiteScope または SAM 管理の [フィールドのマッピング] パネルで設定できます。詳細については、次のステップを参照してください。

注: [フィールドのマッピング] 設定は、[トポロジ設定] パネルの [データなしのレポート トポロジ] チェック・ボックスが選択されている場合は、使用できません。データなしのトポロジ・レポートの詳細については、516 ページ「データなしでトポロジをレポートする方法」を参照してください。

7. メトリックのインジケータへのマップ

メトリックから HI へのマッピングを定義します。インジケータ・マッピングの定義方法は2つあります。

- [システム可用性管理 (SAM) 管理] で。このオプションはモニタ・タイプに対して一般的なマッピングを作成するとき、または、マッピングの測定値に対して正規表現を使用する場合に使います。詳細については、BSM 文書ライブラリの『システム可用性管理の使用』の「インジケータ割り当ての作成方法と管理方法」および「[Create New Monitor] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
- テクノロジ統合モニタの [フィールドのマッピング] で。このオプションはよりシンプルな場合に使用します。たとえば、正規表現なしでメトリックと HI 間のマッピングを定義する場合などです。詳細は、前のステップ(468 ページ「モニタのフィールド マッピングの編集」)を参照してください。

メトリックからインジケータへのマップ:

- a. [SAM 管理] を使ってインジケータ・マッピングを定義する場合、**MonitorType** 値に対して [SAM 管理] のインジケータ・マッピングで使ったモニタ名を [フィールドのマッピング] パネルに入力します。
- b. **MeasurementETI(x)** 値に対して [SAM 管理] でメトリックとインジケータ間のマッピングをすでに定義してある場合、このフィールドは [フィールドのマッピング] パネルで設定できません(コメント・アウトしたままにします)。あるいは、コメントせずに、コンピュータ CI で定義された要件に適合する既存のインジケータのうち、いずれか1つのラベル(表示名)を入力します。たとえば、CPU 使用率を監視する測定値に対しては、「CPU Load」とします。
- c. SiteScope は CI ヒントを自動的に設定するため、**MeasurementCIHint(x)** の値は設定できません(コメント・アウトしたままにします)。

8. トポロジ・スクリプトの選択

統合モニタの[トポロジ設定]セクションでは、トポロジ・スクリプト・リストから[コンピュータ - モニタ]を選択します。トポロジ・スクリプトを入力する必要はありません。

9. SAM レポートを使用する場合のグループ権限の割り当て

メトリック・フィールド・マッピングで汎用統合モニタを設定した場合、定義された各ユーザにシステム可用性管理レポートとカスタム・レポートで SiteScope グループおよびそのサブグループを表示する権限を割り当てる必要があります。詳細については、BSM ヘルプでプラットフォーム管理ガイドの権限についてのセクションを参照してください。

10. フィールド・マッピング・スクリプトのテスト - オプション

[トポロジ設定]パネルで、[スクリプトのテスト]をクリックして、モニタの実行前にスクリプトをテストします。次の内容がテストされます。

- フィールドのマッピングおよびトポロジ・スクリプトの構文を確認します。
- マッピング結果を表示します。
- トポロジ・スクリプトが設定されている場合は、トポロジ結果を表示します。

11. 統合結果の表示

SiteScope でメトリック割り当てを定義して、モニタを設定すると(フィールド・マッピングおよびトポロジ・スクリプトを含む)、以下のアプリケーションで結果を表示できるようになります。

「サービス状況」で:

- a. BSMで、[アプリケーション]>[サービス状況]>[トップビュー]を選択します。
- b. ドロップ・ダウン・リストで次のように選択します。
 - [システム ハードウェア モニタリング]でコンピュータ CI の状態を表示する。
 - [システム モニタ]表示でモニタとその状態を表示する。

「SAM レポート」で:

SAM レポートで統合のデータを表示することもできます。さまざまなレポートで、グラフに表示するデータのフィルタを指定します。

フィールド・マッピングで定義した以下の値を含めるためにフィルタを設定します(468ページ「モニタのフィールド マッピングの編集」を参照):

- **ターゲット**: 統合モニタ・フィールド・マッピングの[TargetName]フィールドに定義した値を選択します。
- **モニタ・タイプ**: 統合モニタ・フィールド・マッピングの[MonitorType]で定義した値を選択します。
- **モニタ・タイトル/モニタ名**: 統合モニタ・フィールド・マッピングの[MonitorName]で定義した値を選択します。
- **測定値**: 統合モニタ・フィールド・マッピングの[MeasurementName(x)]で定義した値を選択します。

例 - コンピュータ - モニタ・トポロジを使用した測定値フローの作成

この例では、コンピュータ - モニタ・トポロジ・スクリプトを使用して、さまざまなディスクを監視するサードパーティのシステムから測定値サンプルをキャプチャして BSM に転送する、統合モニタを作成する方法を説明します。

注: この例に関連するタスクについては、467 ページ「コンピュータ - モニタ・トポロジを使ってメトリックデータを収集するための統合モニタの設定方法」を参照してください。

この例には次の手順が含まれています。

- 471 ページ「設計ステージ」
- 471 ページ「SAM 管理で測定値をインジケータにマップする」
- 473 ページ「フィールド・マッピングの定義」
- 473 ページ「トポロジ・スクリプトの選択」
- 473 ページ「統合結果の表示」

1. 設計ステージ

ログ・ファイルに書き込むサードパーティ・アプリケーションがあるとします。このアプリケーションでは、さまざまなコンピュータのディスク利用率をログに書き込みます。

このアプリケーションはログ・ファイルに書き込むため、SiteScope での統合用にテクノロジー・ログ・ファイル統合モニタを作成します。[測定値] フィールド・マッピングおよび[コンピュータ - モニタ] トポロジ・スクリプトを使用し、「Host Disk Utilization」インジケータを選択します。既存の割り当てが存在しているため、この HI および KPI 用の割り当てを作成する必要はありません。

ログ・ファイル内のエントリ:

- labamrnd42,disk,d,65,warning
- labamrnd42,disk,d,70,warning
- labamrnd42,disk,d,70,warning

2. SAM 管理で測定値をインジケータにマップする

[BSM] > [管理] > [System Availability Management] > [Metrics and Indicators] で新規モニタ・タイプを作成します。

新規モニタの追加

* モニタ名:

モニタ表示名:

モニタ カテゴリ:



[My Disk Usage]はモニタ・タイプ, [Custom]はカテゴリです。

次に, モニタの新規インジケータ・マッピングを定義します。

新規割り当て

My Disk Usage Monitor

メトリックパターン:

☐ 標準設定割り当て

CIタイプツリー

- ConfigurationItem
 - BusinessElement
 - Collection
 - Dynamic Node Factory
 - InfrastructureElement
 - Application Resource
 - ApplicationSystem
 - CommunicationEndpoint
 - DatacenterResource
 - NetworkEntity
 - Node
 - ClusterResourceGroup
 - Computer
 - Net Device
 - NodeElement
 - RunningSoftware
 - UDDI Registry
 - Location
 - Monitor
 - Party

CIタイプ - Computer

インジケータ

- VMCreation
- VMMigration
- VMRemoval
- VMRename
- WebServer サービス
- イベント ストーム (Node)
- イベント ログ記録サービス
- インタフェース エラー率
- インタフェース使用率
- インタフェース破棄率
- カーネル処理使用状況
- スレッド
- スワップ使用レベル
- セキュリティで保護されたログイン
- ネットワーク ファイル共有使用レ...
- ノード ステータス (Node)
- バッチジョブ
- バッチジョブ サービス
- パフォーマンス解析 (Configuration)
- ファイアウォール サービス
- ファイルサーバサービス
- ホスト ディスク使用率
- メモリ割り当て使用レベル

詳細 - ホスト ディスク使用率

一般

名前: HostDiskUtilization

タイプ: 状況インジケータと関連するイ...

説明: ディスクの使用率レベル

アプリケーション: サービス状況と SLM の両方

単位:

状態

表示名	ステータス	アイコン
正常域 (標準設...	正常域	✓
正常域より低	注意域	⚠
正常域より非...	注意域	⚠
正常域より高	注意域	⚠
注意域	注意域	⚠
正常域より非...	警戒域	⚠
危険域	危険域	✗

テーブルを保存すると, 次のように表示されます。

HP Business Service Management - システム可用性管理

MyBSM アプリケーション 管理 ヘルプ サイトマップ

サマリ **メトリクスとインジケータ**

インジケータ割り当て設定

My Disk Usage

メトリックパターン	CIタイプ名	インジケータ
/.*disk.*utilization.*	Computer	ホスト ディスク使用率

3. フィールド・マッピングの定義

注: 使用するフィールド・マッピング・スクリプトはこの PDF に添付されたテキスト・ファイルで利用可能です。添付ファイルを表示するには、[表示]>[ナビゲーション パネル]>[添付ファイル]を選択して、**Metrics_Computer_Monitor_Topology_Field_Mapping.txt** を選択します。

フィールド・マッピング・スクリプトで、**[MonitorType]** 値が **[My Disk Usage]** と表示されます (SAM 管理のインジケータ・マッピングで定義されたように)。

測定値は、インジケータ・マッピングで定義した正規表現と一致しています。MeasurementName(1)="disk " + \$group2 + " utilization".

マッピングは、SAM 管理ですでに定義したため、**MeasurementETI(1)** はコメントアウトされています。

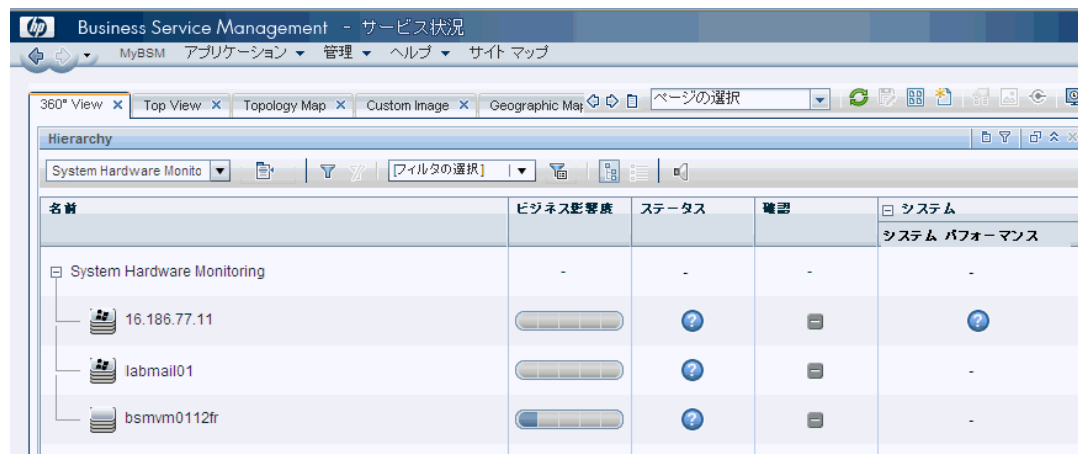
SiteScope がヒントを自動的に設定するため、**MeasurementCIHint(1)** はコメントアウトされています。

4. トポロジ・スクリプトの選択

統合モニタの[トポロジ設定]セクションで、トポロジ・スクリプト・リストから**[コンピュータ - モニタ]** スクリプトを選択します。

5. 統合結果の表示

BSM で**[アプリケーション]>[サービス 状況]**を選択し、**[System Hardware Monitoring]**ビューで監視中のターゲット・コンピュータ(labamrnd42)を表示します。



監視対象マシンのインジケータ・ステータスの結果は、次のようになります。

cpu1 (SiteScope Monitor) ▾			
KPI に関する状況インジケータ			
KPI	状況インジケータ	状態	値
⚠ システム パフォーマンス	ホスト ディスク使用率 ▾	⚠ 致命的	N/A

カスタム・トポロジを使用して測定値データを収集する統合モニタの設定方法

このタスクでは、カスタム・トポロジ・フローを使用した測定値サンプル用統合の作成に関連する手順について説明します。

注: このタスクの例については、480ページ「例 - カスタム・トポロジを使用した測定値フローの作成」を参照してください。

このタスクには次の手順が含まれています。

- 474ページ「CI Resolver TQL の変更」
- 475ページ「インジケータの選択」
- 475ページ「HI 割り当ての定義」
- 476ページ「CI タイプごとの KPI 割り当ての定義 (任意)」
- 477ページ「BSM 統合の設定」
- 477ページ「SiteScope の選択」
- 477ページ「統合モニタのグループの作成」
- 477ページ「統合モニタの追加」
- 478ページ「モニタのフィールド マッピングの編集」
- 478ページ「トポロジ・フローの設計」
- 478ページ「カスタム・トポロジ・スクリプトの作成」
- 479ページ「SAM レポートを使用する場合のグループ権限の割り当て」
- 479ページ「フィールド・マッピング・スクリプトのテスト - オプション」
- 479ページ「統合結果の表示」

1. CI Resolver TQL の変更

- a. BSM で、[管理] > [プラットフォーム] > [インフラストラクチャ設定] を選択します。
 - [アプリケーション] を選択します。
 - [エンド ユーザ / システム可用性管理] を選択します。
 - [エンド ユーザ / システム可用性管理 - SiteScope CI Resolver 設定] で、[TQL クエリ] パラメータの値が [SiteScope によって監視される CI] であるか確認します。もしそうであるなら、[OMiAutoView] に変更します。
- b. BSM を再起動して変更を適用します。

注: この TQL では、CI 数が多いモデルはサポートされていません(このモデルでは、パフォーマンスに問題が発生する場合があります)。

2. インジケータの選択

CI の状態を表示するには、CI 状況に関するきめの細かい指標を規定する HI が必要です。通常は、BSM のサービス状況でこの HI を表示します。この HI は、サービス・レベル管理 (SLM) でも使用されます。サービス状況および SLM での HI の詳細については、BSM 文書ライブラリにあるサービス状況の使用の「[状況インジケータと KPI - 概要](#)」を参照してください。

注: 整合性を高めるために、あらかじめ設定されている HI を使用することをお勧めします。独自の HI は、ニーズを満たす既存の HI が見つからない場合のみ作成してください。

既存の HI を選択するか、新規 HI を作成するには、次の手順を実行します。

- BSM で、[管理] > [サービス状況/サービスレベル管理] > [リポトリ] > [インジケータ] を選択します。
- 左側の表示枠にある CI タイプ階層から、トポロジ・スクリプトでレポートを行う CI タイプを選択します。その CI タイプに割り当てたインジケータが、インジケータ表示枠に表示されます。インジケータを選択すると、その詳細が右側の表示枠に表示されます。トポロジ・スクリプトの詳細については、[478 ページ「カスタム・トポロジ・スクリプトの作成」](#)を参照してください。
- 要件を満たす既存の HI がすでにあるかどうかを確認します。ない場合は、新規 HI を作成します。HI の作成方法の詳細については、BSM 文書ライブラリにある『サービス状況の使用』の「インジケータ・リポトリでの、ETI または HI テンプレートの作成または編集方法」を参照してください。
- 新規 HI を作成する場合は、変更を SiteScope に適用する必要があります。BSM で、[管理] > [System Availability Management] > [メトリクスとインジケータ] を選択し、[変更の適用] をクリックします。変更は、5 分以内に SiteScope に伝搬されます。

3. HI 割り当ての定義

HI の選択後に、HI 割り当てを定義して、HI を CI に割り当てる必要があります。この割り当てでは、HI がキャプチャするデータ・サンプル、およびそのデータ・サンプルに従って HI の状態を計算するのに使用するビジネス・ルールも定義されます。

サービス状況の HI 割り当ての詳細については、BSM 文書ライブラリにある『サービス状況の使用』の「[状況インジケータの割り当て](#)」ページを参照してください。SLM の HI 割り当ての詳細については、BSM 文書ライブラリにある『サービス・レベル管理の使用』の「[状況インジケータの割り当て](#)」ページを参照してください。

HI 割り当てを定義するには、次の手順を実行します。

- BSM で、[管理] > [サービス状況] / [サービスレベル管理] > [割り当て] > [状況インジケータの割り当て] を選択します。
- 左側の表示枠にある CI タイプ階層から、トポロジ・スクリプトでレポートを行う CI タイプを選択します。その CI タイプに割り当てたインジケータが、インジケータ表示枠に表示されます。インジケータを選択すると、その詳細が右側の表示枠に表示されます。トポロジ・スクリプトの詳細については、[478 ページ「カスタム・トポロジ・スクリプトの作成」](#)を参照してください。
- 新規 HI 割り当てを作成します。割り当ての作成方法の詳細については、BSM 文書ライブラリにある『サービス状況の使用』の「KPI または HI の割り当ての定義方法」、または『サービス・レベル管理の使用』の「KPI または HI の割り当ての定義方法」を参照してください。

- [条件]エリアの[Monitored By]プロパティで統合の一意の値を入力します。これにより、この統合によってレポートされる CI と、この統合によってレポートされない、同じタイプのほかの CI を区別できます。
- モニタのトポロジ・スクリプトを作成する際は、レポートする CI でこの値を持つ `monitored_by` 属性を入力します。トポロジ・スクリプトの詳細については、[478 ページ「カスタム・トポロジ・スクリプトの作成」](#)を参照してください。
- 前の手順([475 ページ「インジケータの選択」](#))で選択した HI を選択します。
- HI 計算に使用するビジネス・ルールを選択します。[SiteScope Worst Status Rule]を使用することをお勧めします。[SiteScope Consecutive Worst Status Log]または [SiteScope Best Status Rule]も使用できます。
- セレクタで、次のように入力します。
 - `eti_id = (Binary) <<状況インジケータ・タイプ ID>>`
 - `ci_id = (Binary) <<CI ID>>`
 - `sampleType = (String) ss_t`

統合モニタでは、測定値サンプル(ss_t)が送信されます。このサンプルには、お使いの ETI と同じ `eti_id`、および CI の ID と同じ CI ID が含まれています。

[478 ページ「モニタのフィールド マッピングの編集」](#)での選択したモニタのフィールド・マッピング・エントリに従って、サンプルの `eti_id` が SiteScope によって送信されます。

`ci_id` は、BSM 内の CI リゾルバによって検索されます。このため CI を検索するために、[478 ページ「モニタのフィールド マッピングの編集」](#)での選択したモニタのフィールド・マッピング・エントリに従って、サンプルで SiteScope によって送信される CI ヒントを使用します。

測定値サンプルのフィールド・マッピングの詳細については、[501 ページ「測定値サンプルのフィールドのマッピングの設定」](#)を参照してください。

4. CI タイプごとの KPI 割り当ての定義(任意)

適切な KPI 割り当てがあるかどうかを確認し、ない場合は作成します。この割り当てによって、CI に付加する KPI および対象の HI が決まります。

標準設定の HI のいずれかを使用する場合は、その HI に対応する標準設定の KPI 割り当てがすでに存在しているため、KPI 割り当てを作成する必要はありません。

- サービス状況での KPI 割り当ての詳細については、BSM 文書ライブラリにある『サービス状況の使用』の「[KPI の割り当て]ページ」を参照してください。
- サービス・レベル管理(SLM)での KPI 割り当ての詳細については、BSM 文書ライブラリにある『サービス・レベル管理の使用』の「[KPI の割り当て]ページ」を参照してください。

KPI 割り当てを作成するには、次の手順を実行します。

- a. BSMで、[管理]>[サービス状況]>[リポジトリ]>[インジケータ]を選択します。
- b. 左側の表示枠にある CI タイプ階層から、トポロジ・スクリプトでレポートを行う CI タイプを選択します。その CI タイプに割り当てたインジケータが、インジケータ表示枠に表示されます。インジケータを選択すると、その詳細が右側の表示枠に表示されます。詳細については、[478 ページ「カスタム・トポロジ・スクリプトの作成」](#)を参照してください。

- c. 新規 KPI 割り当てを作成します。詳細については、『サービス状況の使用』の「KPI または HI の割り当ての定義方法」または BSM 文書ライブラリの『サービス・レベル管理の使用』の「KPI または HI の割り当ての定義方法」を参照してください。
- d. KPI 割り当てで、関連 HI は [475 ページ「インジケータの選択」](#) で選択したものである必要があります。

注: サービス・レベル管理 (SLM) で統合結果の表示も行う場合は、サービス・レベル・アグリーメント (SLA) を定義する必要があります。SLA の詳細については、BSM 文書ライブラリの『サービス・レベル管理の使用』の「[アグリーメント マネージャ] ページ」を参照してください。

5. BSM 統合の設定

SiteScope と BSM を統合します。詳細については、[231 ページ「SiteScope および BSM 間の統合の設定方法」](#) を参照してください。

6. SiteScope の選択

統合モニタをデプロイする SiteScope サーバを選択します。

- SiteScope スタンドアロンでは、SiteScope インスタンスを選択して開きます。
- SAM システム可用性管理で、統合モニタをデプロイする SiteScope サーバを選択します。ユーザ・インタフェースの詳細については BSM ヘルプの『システム可用性管理の使用』にある「システム可用性管理の管理」ページを参照してください。

7. 統合モニタのグループの作成

ユーザ・インタフェースの詳細については、[315 ページ「\[新規 SiteScope グループ\] ダイアログ・ボックス」](#) を参照してください。

ヒント: 統合モニタ専用のグループを作成することをお勧めします。これにより、BSM に報告されるデータを統合からのデータとして簡単に識別できるようになります。

8. 統合モニタの追加

モニタを設定して、統合モニタの構成に必要なデータを追加する必要があります。次のアプリケーション固有の統合を選択できます。

- [HP OM Event Monitor](#) (詳細については、『Monitor Reference』ガイドを参照してください)
- [HP Service Manager Monitor](#) (詳細については、『Monitor Reference』ガイドを参照してください)
- [NetScout Event Monitor](#) (詳細については、『Monitor Reference』ガイドを参照してください)

次の汎用統合モニタを選択できます。

- [Technology Database Integration Monitor](#) (詳細については、『Monitor Reference』ガイドを参照してください)
- [Technology Log File Integration Monitor](#) (詳細については、『Monitor Reference』ガイドを参照してください)
- [Technology SNMP Trap Integration Monitor](#) (詳細については、『Monitor Reference』ガイドを参照してください)

参照してください)

- [Technology Web Service Integration Monitor](#) (詳細については、『Monitor Reference』ガイドを参照してください)

9. モニタのフィールド マッピングの編集

マッピングによって、受信データの処理やBSMに転送される出力サンプルが定義されます。

- [フィールドのマッピング] パネルで、[**Metrics**] フィールド・マッピング・スクリプトを選択し、[**フィールドのロード**] をクリックします。
- ss_t サンプル・ファイルに入れて送信する詳細を入力します。
 - [**MeasurementETI**] 値には、前に [475 ページ「インジケータの選択」](#) で選択した HI のラベルを入力します。
 - [**MeasurementCIHint**] に CI のヒントを入力します。このヒントは、BSM 内の CI リゾルバが、このサンプルを添付する CI を認識するために役立ちます。

測定スクリプトの値の詳細については、[501 ページ「測定値サンプルのフィールドのマッピングの設定」](#) を参照してください。

注: [フィールドのマッピング] 設定は、[トポロジ設定] パネルの[データなしのレポートトポロジ] チェック・ボックスが選択されている場合は、使用できません。データなしのトポロジ・レポートの詳細については、[516 ページ「データなしでトポロジをレポートする方法」](#) を参照してください。

10. トポロジ・フローの設計

カスタム・トポロジ・フローの設計戦略を策定するときは、次の点を考慮する必要があります。

■ トポロジに対する CI

BSM にレポートするエンティティを検討します。これらのエンティティについては、BSM のサービス状況でデータをレポートしたり状況ステータスを表示したりすることが必要な場合もあります。

たとえば、データベースに書き込む TPA というサードパーティ・アプリケーションがあるとします。このデータベースのエントリには、さまざまなコンピュータの CPU とネットワークの利用率に関するパフォーマンス・データが含まれます。この場合、通常は、コンピュータ CI を BSM にレポートするトポロジを作成します。

■ これらの CI のレポート対象データ

これらの CI に関連するデータの内容およびこのデータを CI に添付する方法を検討します。レポートするデータには、いずれの状況インジケータ(HI)が関連するでしょうか。該当するインジケータがない場合は、新規 HI の作成を検討します。いずれの KPI または HI の割り当てによって、必要な HI および KPI が作成されるでしょうか。該当する割り当てが存在しない場合は、独自の割り当てを作成することを検討します。

11. カスタム・トポロジ・スクリプトの作成

最後の作業として、トポロジ・スクリプトを作成する必要があります。このスクリプトは、CI を BSM にレポートする方法を定義します。トポロジスクリプトの詳細については、[424 ページ「テクノロジー統合モニタのトポロジ設定」](#) を参照してください。

CI の `monitored_by` 属性には、この統合の識別子を入力します。これは [475 ページ「HI 割り当ての定義」](#) の HI 割り当てで使用したのと同じ値です。

注:

- フィールド・マッピングを使用するとき、フィールド・マッピング・フィールドをトポロジ・スクリプトの入力として使用できます。たとえば、共通イベント・マッピングを使用するときは、次の方法で `[Category]` フィールドの値にアクセスできます。

```
category = Framework.getDestinationAttribute("Category")
```

- さらに、`group0`、`group1` など、テクノロジー・ログ・ファイル統合モニタからの「モニタ変数」の値、またはテクノロジー・データベース統合モニタ内のデータベース列の名前、またはその他の統合モニタ内のその他の変数にアクセスできます。たとえば、次の方法で、変数 `group1` の値にアクセスできます。

```
group1 = Framework.getDestinationAttribute("group1")
```

ヒント: トポロジの問題をトラブルシューティングするには、『Integration with BSM and HPOM Best Practices』の「[BSM Topology Issues](#)」を参照してください。

12. SAM レポートを使用する場合のグループ権限の割り当て

測定値フィールド・マッピングを含む汎用統合モニタを設定する場合は、定義されているユーザごとに、SiteScope グループおよびそのサブグループを SAM レポートおよびカスタム・レポート内で表示する権限を割り当てる必要があります。詳細については、BSM ヘルプでプラットフォーム管理ガイドの権限についてのセクションを参照してください。

13. フィールド・マッピング・スクリプトのテスト - オプション

モニタの実行前に、[トポロジ設定] パネルで[スクリプトのテスト]をクリックして、スクリプトをテストします。次の内容がテストされます。

- フィールドのマッピングおよびトポロジ・スクリプトの構文を確認します。
- マッピング結果を表示します。
- トポロジ・スクリプトが設定されている場合は、トポロジ結果を表示します。

14. 統合結果の表示

BSM に HI および KPI の割り当てを設定し、SiteScope にモニタを設定すれば(フィールド・マッピングおよびトポロジスクリプトを含む)、結果を表示できます。

- BSM のサービス状況またはサービス・レベル管理アプリケーションでの統合結果を表示するビューを RTSM に作成します。ビューは [478 ページ「カスタム・トポロジ・スクリプトの作成」](#) で定義したトポロジを示します。

ビューの作成についての詳細は、BSM 文書ライブラリでモデリング・ガイドの「Modeling Studio Page」を参照してください。

SLM の統合も定義した場合は、統合結果を SLM レポートに表示できます。SLM およびレポートの詳細については、BSM 文書ライブラリの『サービス・レベル管理の使用』の「[サービス・レベル管理のアプリケーションの操作](#)」を参照してください。

- 統合データは、システム可用性管理レポートにも表示できます。さまざまなレポートで、グラフ

に表示するデータのフィルタを指定します。

478 ページ「モニタのフィールド マッピングの編集」のフィールド・マッピングで定義した次の値を含めるようにフィルタを設定します。

- **ターゲット**: 統合モニタ・フィールド・マッピングの [TargetName] フィールドに定義した値を選択します。
- **モニタ・タイプ**: 統合モニタ・フィールド・マッピングの [MonitorType] で定義した値を選択します。
- **モニタ・タイトル/モニタ名**: 統合モニタ・フィールド・マッピングの [MonitorName] フィールドに定義した値を選択します。
- **測定値**: 統合モニタ・フィールド・マッピングの [MeasurementName (x)] で定義した値を選択します。

例 - カスタム・トポロジを使用した測定値フローの作成

この例では、カスタム・トポロジ・スクリプトを使用して、さまざまな Oracle データベースを監視するサードパーティのシステムから測定値サンプルをキャプチャして BSM に転送する、統合モニタを作成する方法を説明します。このスクリプトでは、独自のトポロジを作成できます。

注: この例に関連するタスクについては、474 ページ「カスタム・トポロジを使用して測定値データを収集する統合モニタの設定方法」を参照してください。

この例には次の手順が含まれています。

- 480 ページ「設計ステージ」
- 481 ページ「インジケータの選択」
- 482 ページ「HI 割り当ての定義」
- 484 ページ「KPI 割り当ての定義」
- 487 ページ「フィールド・マッピングの設定」
- 487 ページ「カスタム・トポロジ・スクリプトの作成」
- 487 ページ「統合結果の表示」

1. 設計ステージ

My Oracle Monitoring というアプリケーションがあるとします。このアプリケーションは、さまざまなコンピュータで稼動している Oracle データベースからの測定値をログ・ファイルに書き込みます。

このアプリケーションはログ・ファイルに書き込むため、統合用にテクノロジー・ログ・ファイル統合モニタを作成します。レポートするトポロジは Oracle CI を含んでおり、これらの CI 上に HI を作成します。関心のある 1 つのインジケータと 1 つの測定値に注目します。

ログ・ファイル内のエントリ:

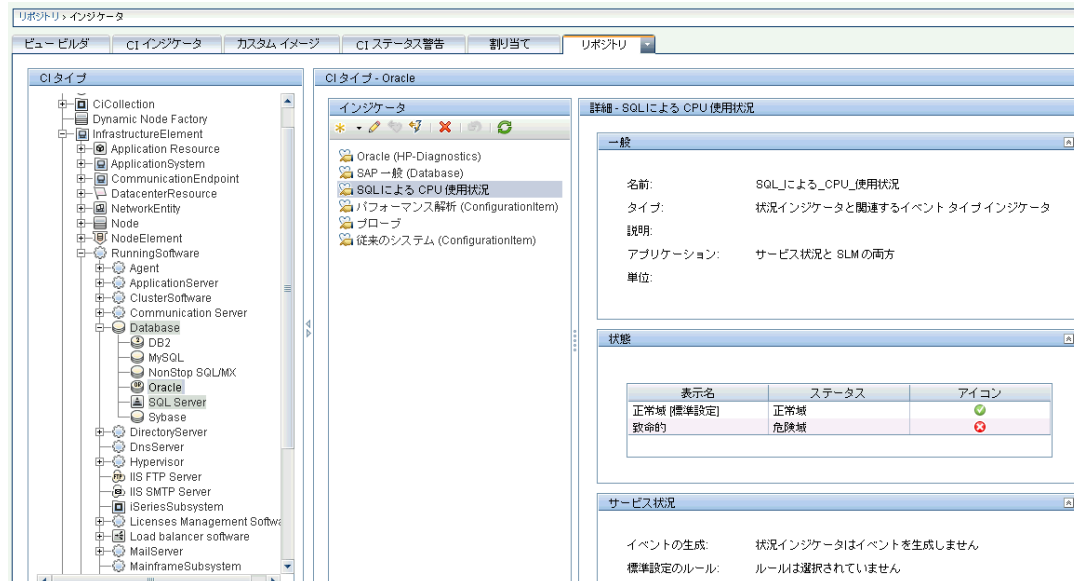
- amrnd153,27,1,good
- amrnd153,82,1,warning
- amrnd153,80,1,warning

SiteScope のテクノロジー・ログ・ファイル統合モニタ:

テクノロジー ログ ファイル統合モニタ設定	
サーバ:	SiteScope Server <input type="button" value="サーバの参照"/> <input type="button" value="リモートサーバの追加"/>
*ログファイルパス名:	c:\ems\OracleLog.txt
内容一致:	/(.)/(.*)/(.*)/ <input type="button" value="ツールを開く"/>
ログファイルのエンコード:	<input type="checkbox"/> ファイルが見つからない場合、エラーにしない windows-1252
警告の実行:	ログエントリが一致するたび
EMS の時間差:	<input type="checkbox"/> データなしのレポートトボロジ 0 日数
モニタの実行設定	
フィールドのマッピング	
トボロジ設定	
依存関係	
しきい値の設定	
利用不可な場合:	モニタの状態をしきい値に応じて設定
標準設定の状態:	良好
内部エラーの場合:	根据 阈值设置 监控器 状态
<input type="button" value="標準しきい値の追加"/> <input type="button" value="標準しきい値の削除"/>	
エラー条件	

2. インジケータの選択

BSM で、[管理]>[サービス状況]>[リポジトリ]>[インジケータ]を選択します。「My Oracle Monitoring」アプリケーションの場合は、「SQL (データベース)による CPU 使用状況」インジケータを使用します。このインジケータは、SQL および Oracle の使用状況をレポートします。



このインジケータは、Oracle CI タイプ(レポートされる CI)上に定義されており、ログから読み取られる測定値を対象としています。この測定値は、Oracle で使用する CPU の量を示します。

3. HI 割り当ての定義

BSM で、[管理]>[サービス状況]>[割り当て]>[状況インジケータの割り当て]を選択し、インジケータの割り当てを作成します。

Define a Health Indicator Assignment. When a condition is filled, Health Indicators are assigned to any CI that meets the condition.

Assignment Settings

ID: d1489bdb-c4e9-40fd-a643-01b40c240569

Name: My Oracle HI assignment

Description:

Condition

Monitored by: My Oracle Monitoring integration

Property Name	Operator	Value
---------------	----------	-------

Health Indicator Configurations

Health Indicator	Business Rule
CPU Usage by SQL	SiteScope Worst Status Rule

Save Cancel Help

[**Monitored by**]プロパティで、手動で「My Oracle Monitoring integration」を入力します。この値は、この統合によってレポートされる Oracle CI を、レポートされるほかの Oracle CI と区別するために役立ちます。これにより、この統合によってレポートされる Oracle CI のみに「SQL による CPU 使用状況」インジケータが割り当てられます。

この割り当てのインジケータを編集すると、次の画面が表示されます。

割り当て: SQL による CPU 使用状況 の状況インジケータの編集

状況インジケータ設定を定義します

状況インジケータ

* 状況インジケータ: SQLによる CPU 使用状況

* ビジネス ルール: SiteScope 最低ステータス ルール

* 優先度: 0

ビジネス ルールパラメータ

generateEvents: 偽

Tooltip show all measurements: false (String)

データのタイムアウトなし: 900 秒

* [CI タイプのプロパティ] リストからプロパティをドラッグするか、フィールドの編集中に Ctrl + i を押して、選択したプロパティに値を設定できます。

セレクト

フィールド名	オペレータ	タイプ	値
AND			
eti_id	=	Binary	<<Health Indicator Type ID>>
ci_id	=	Binary	<<CI ID>>
smampleType	=	String	ss_t

式のサマリ:

```

[eti_id = <<Health Indicator Type ID>>]
AND
[ci_id = <<CI ID>>]
AND
[smampleType = ss_t]

```

* [CI タイプのプロパティ] リストからプロパティをドラッグするか、フィールドの値の編集中に Ctrl + i を押して、選択したプロパティに値を設定できます。

CI タイプのプロパティ

一般プロパティ

バイナリ

Calculated ID

ブール

Allow CI Update

Change Is New

Enable Aging

Is Candidate For Deletion

Operation Is New

Store KPI History For Over TI...

Test Is New

Track Configuration Changes

整数

Actual Deletion Period

BusinessCriticality

Collection Interval

Deletion Candidate Period

文字列

BPI Monitor Type

BPI Server Name

CI Type

City

Container

Country or Province

Created By

Custom Data Units

Data Units

Description

Digest

Display Label

Documents

External ID

Global Id

Name

Note

Origin

Owner Tenant

State

System

保存 キャンセル ヘルプ

「SQL による CPU 使用状況」インジケータは、SiteScope のワースト・ステータス・ルールを使用して計算されます。このセレクトは、現在の CI および ETI と同じ ci_id および eti_id を持つ ss_t タイプ(測定値データ・タイプ)のサンプルが、この Oracle CI 上で、このインジケータによってキャプチャされることを定義します。ほかのサンプルはキャプチャされない必要があります。

4. KPI 割り当ての定義

標準設定のインジケータを使用したため、Oracle CI 上に既存のサービス状況 KPI 割り当てが存在しており、KPI 割り当てを作成する必要はありません。

BSM で[管理]>[サービス状況]>[割り当て]>[KPI 割り当て]を選択し、CI タイプ・ツリーで[Oracle]を選択して[Oracle KPI Assignment]を選択します。

CI タイプ: Oracle の KPI 割り当ての編集

KPI の割り当てを定義します。条件が指定されている場合は、KPI やショートカットメニューは条件を満たす任意の CI に割り当てられます。

割り当ての設定

ID: d48ea3ba-533f-44e7-8908-179179588472

* 名前: Oracle KPIs Assignment

説明: KPI Assignments for Oracle Health Indicators

条件

モニタ元:

プロパティ名	演算子	値
--------	-----	---

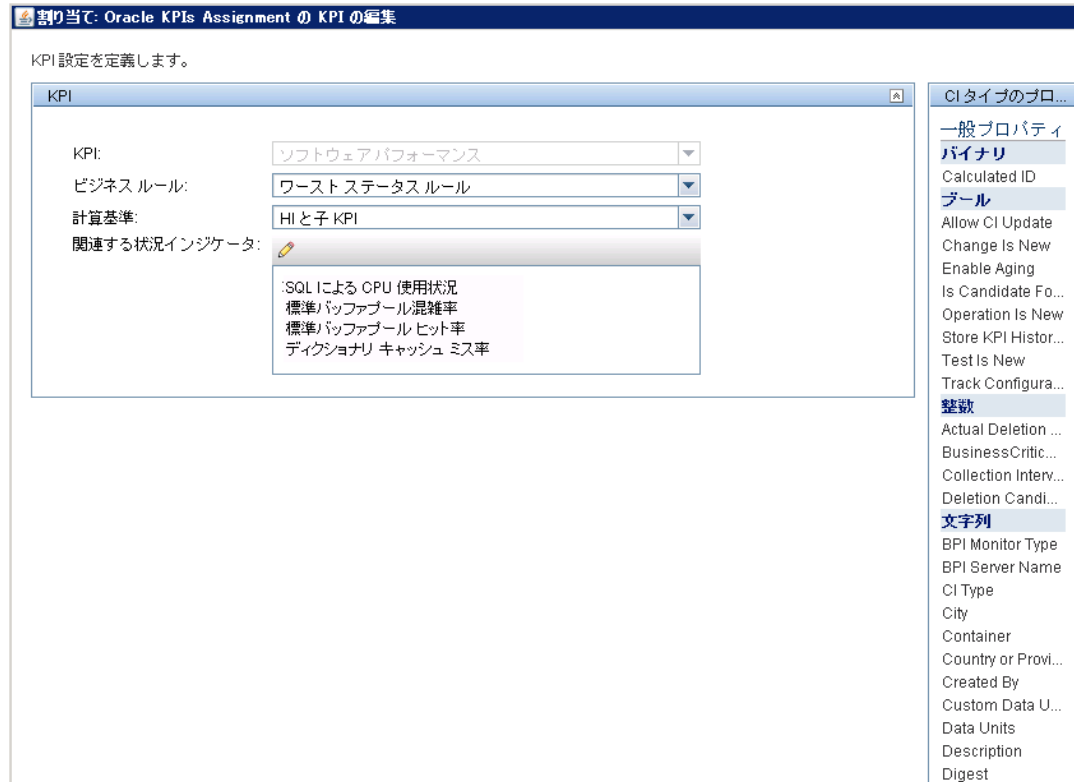
KPI 設定

KPI	計算基準	関連する状況インジケータ	ビジネス ルール
ソフトウェアパフォーマンス	HI と子 KPI	データベース オブジェクト ステータス	ワースト ステータス ルール
ソフトウェアの可用性	HI と子 KPI	SQL による CPU 使用状況 標準	ワースト ステータス ルール

ショートカットメニュー

保存 キャンセル ヘルプ

[ソフトウェア パフォーマンス] KPI を選択します。



この KPI と関連付けられているインジケータの 1 つは、使用した「SQL による CPU 使用状況」インジケータです。

5. フィールド・マッピングの設定

注: 使用するフィールド・マッピング・スクリプトはこの PDF に添付されたテキスト・ファイルで利用可能です。添付ファイルを表示するには、[表示]>[ナビゲーション パネル]>[添付ファイル]を選択して、**Metrics_Custom_Topology_Field_Mapping.txt**を選択します。

フィールド・マッピング・スクリプトで、新しいモニタ・タイプが定義されたことを確認できます。My Oracle が定義されたことを確認できます。

モニタ名は My Oracle mon on \$group0 であり、ここで \$group 0 は、Oracle データベースを稼働しているターゲット・コンピュータでもあります。

測定名は oracle cpu usage であり、その値はログ・ファイルから取得されます。送信される値の品質はログ・ファイルに書き込まれた内容に依存します。

測定値のマッピング先の ETI は、「SQL による CPU 使用状況」です。

CI ヒントは、<<Oracle sid>>@@<<コンピュータ名>> の形式をしています。CI ヒントは、BSM 内の CI リゾルバが、このデータ・サンプルを添付する CI を検索するために役立ちます。

6. カスタム・トポロジ・スクリプトの作成

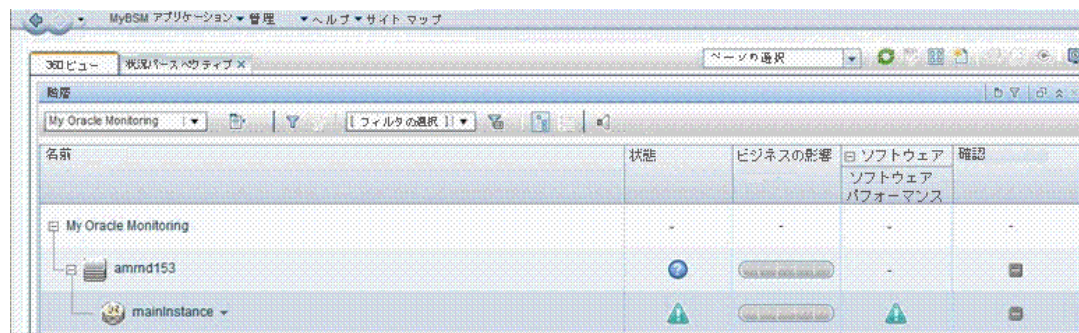
注: 使用するカスタム・トポロジ・スクリプトはこの PDF に添付されたテキスト・ファイルで利用可能です。添付ファイルを表示するには、[表示]>[ナビゲーション パネル]>[添付ファイル]を選択して、**Metrics_Custom_Topology_Script.txt**を選択します。

カスタム・スクリプトで、次を確認できます。

- system_lib.createNode(Framework) によって、データベースを実行しているノードが作成されます。
- modeling.createDatabaseOSH によって、Oracle CI が作成されます。
- mainInstance は、使用した Oracle の SID です。
- My Oracle Monitoring integration は、インジケータ割り当てで指定した条件である monitored_by 属性です(482ページ「HI 割り当ての定義」を参照)。

7. 統合結果の表示

BSMで、[アプリケーション]>[サービス状況]を選択し、この統合用のビューを手動で作成します。たとえば、ここでは、「My Oracle Monitoring」というビューを作成しました(「System Software Monitoring」ビューにも表示)。



監視対象マシンのインジケータ・ステータスの結果は、次のようになります。



The screenshot shows a web browser window titled "状況インジケータ - Windows Internet Explorer". The main content area displays "mainInstance (Oracle)" and a section titled "KPI に関する状況インジケータ". Below this is a table with the following data:

KPI	状況インジケータ	状態	値
ソフトウェア パフォーマンス	SQL による CPU 使用状況	高	80.0

状態および値は、フィールド・マッピングで割り当てた状態および値と同じです。

ノー・トポロジでメトリック・データを収集するための統合モニタの設定方法

このタスクでは、**ノー・トポロジ**・スクリプトを使って、EMS メトリック・フローを設計および実装する手順について説明します。

統合モニタを使って BSM にすでに存在するトポロジのためのメトリック・サンプルを送信するには、このフローを使います。このフローでは、トポロジを送信せずにデータが送信されます。SiteScope

注: このタスクの例については、494ページ「例 - トポロジを使用しない測定値フローの作成」を参照してください。

このタスクには次の手順が含まれています。

- 489ページ「CI Resolver TQL の変更」
- 489ページ「インジケータの選択」
- 490ページ「HI 割り当ての定義」
- 491ページ「各 CI タイプに対する KPI 割り当ての定義」
- 491ページ「BSM 統合の設定」
- 492ページ「SiteScope の選択」
- 492ページ「統合モニタのグループの作成」
- 492ページ「統合モニタの追加」
- 492ページ「モニタのフィールド マッピングの編集」
- 493ページ「ノー・トポロジ・フローの計画」
- 493ページ「SAM レポートを使用する場合のグループ権限の割り当て」
- 493ページ「統合結果の表示」

1. CI Resolver TQL の変更

- a. BSM で、[管理] > [プラットフォーム] > [インフラストラクチャ設定]を選択します。
 - [アプリケーション]を選択します。
 - [エンド ユーザ / システム可用性管理]を選択します。
 - [エンド ユーザ / システム可用性管理 - SiteScope CI Resolver 設定]で、[TQL クエリ]パラメータの値が[SiteScope によって監視される CI]であるか確認します。もしそうであるなら、[OMiAutoView]に変更します。
- b. BSM を再起動して変更を適用します。

注: この TQL では、CI 数が多いモデルはサポートされていません(このモデルでは、パフォーマンスに問題が発生する場合があります)。

2. インジケータの選択

CI の状態を表示するには、CI 状況に関するきめの細かい指標を規定する HI が必要です。通常は、BSM のサービス状況でこの HI を表示します。この HI は、サービス・レベル管理 (SLM) でも使用されます。サービス状況 および SLM の HI についての詳細は、BSM 文書ライブラリのサービス状況の使用の「[状況インジケータと KPI - 概要](#)」を参照してください。

注: 整合性を高めるために、あらかじめ設定されている HI を使用することをお勧めします。独自の HI は、ニーズを満たす既存の HI が見つからない場合のみ作成してください。

既存の HI を選択するか、新規 HI を作成するには、次の手順を実行します。

- a. BSM で、[管理]>[サービス状況/サービスレベル管理]>[リポジトリ]>[インジケータ]を選択します。
- b. CI タイプを選択します。
- c. 要件を満たす既存の HI がすでにあるかどうかを確認します。ない場合は、新規 HI を作成します。HI の作成方法の詳細については、BSM 文書ライブラリの BSM 文書ライブラリのサービス状況の使用にある「インジケータ・リポジトリでの、ETI または HI テンプレートの作成または編集方法」を参照してください。
- d. 新規 HI を作成する場合は、変更を SiteScope に適用する必要があります。BSM で、[管理]>[System Availability Management]>[メトリクスとインジケータ]を選択し、[変更の適用]をクリックします。変更は、5 分以内に SiteScope に伝搬されます。

3. HI 割り当ての定義

HI の選択後に、HI 割り当てを定義して、HI を CI に割り当てる必要があります。この割り当てでは、HI がキャプチャするデータ・サンプル、およびそのデータ・サンプルに従って HI の状態を計算するのに使用するビジネス・ルールも定義されます。

サービス状況の HI 割り当ての詳細については、BSM 文書ライブラリにある『サービス状況の使用』の「[状況インジケータの割り当て](#)」ページを参照してください。SLM の HI 割り当ての詳細については、BSM 文書ライブラリにある『サービス・レベル管理の使用』の「[状況インジケータの割り当て](#)」ページを参照してください。

HI 割り当てを定義するには、次の手順を実行します。

- a. BSM で、[管理]>[サービス状況]/[サービスレベル管理]>[割り当て]>[状況インジケータの割り当て]を選択します。
- b. CI タイプを選択します。
- c. 新規 HI 割り当てを作成します。割り当ての作成方法の詳細については、BSM 文書ライブラリにある『サービス状況の使用』の「[KPI または HI の割り当ての定義方法](#)」、または『サービス・レベル管理の使用』の「[KPI または HI の割り当ての定義方法](#)」を参照してください。
 - [条件] エリアの [Monitored By] プロパティで統合の一意の値を入力します。これにより、この統合によってレポートされる CI と、この統合によってレポートされない、同じタイプのほかの CI を区別できます。
 - [489 ページ「インジケータの選択」](#) で選択した HI を選択します。
 - HI 計算に使用するビジネス・ルールを選択します。「SiteScope ワースト状態ルール」を使用することをお勧めします。「SiteScope 連続ワースト状態ログ」または「SiteScope ベスト状態ルール」も使用できます。

- セレクタで、次のように入力します。
- eti_id = (バイナリ)<<状況インジケータ・タイプ ID>>
- ci_id = (バイナリ)<<CI ID>>
- sampleType = (String) ss_t

統合モニタでは、測定値サンプル(ss_t)が送信されます。このサンプルには、お使いの ETI と同じ eti_id、および CI の ID と同じ CI ID が含まれています。

492ページ「モニタのフィールド マッピングの編集」でのモニタのフィールド・マッピング・エントリに従って、サンプルの eti_id が SiteScope によって送信されます。

ci_id は、BSM 内の CI リゾルバによって検索されます。このため CI を検索するために、492ページ「モニタのフィールド マッピングの編集」でのモニタのフィールド・マッピング・エントリに従って、サンプルで SiteScope によって送信される CI ヒントを使用します。

測定値サンプルのフィールド・マッピングの詳細については、501ページ「測定値サンプルのフィールドのマッピングの設定」を参照してください。

4. 各 CI タイプに対する KPI 割り当ての定義

適切な KPI 割り当てがあるかどうかを確認し、ない場合は作成します。この割り当てはどの KPI を CI のどの HI に割り当てるかを決定します。

標準設定の HI のいずれかを使用する場合は、その HI に対応する標準設定の KPI 割り当てがすでに存在しているため、KPI 割り当てを作成する必要はありません。

- サービス状況での KPI 割り当ての詳細については、BSM 文書ライブラリにある『サービス状況の使用』の「[KPI の割り当て] ページ」を参照してください。
- SLM での KPI 割り当てについての詳細は、BSM 文書ライブラリの『サービス・レベル管理の使用』にある「[KPI の割り当て] ページ」を参照してください。

KPI 割り当てを作成するには、次の手順を実行します。

- a. BSMで、[管理]>[サービス状況]>[リポジトリ]>[インジケータ]を選択します。
- b. CI のタイプを選択します。
- c. 新規 KPI 割り当てを作成します。詳細については、『サービス状況の使用』の「KPI または HI の割り当ての定義方法」または BSM 文書ライブラリの『サービス・レベル管理の使用』の「KPI または HI の割り当ての定義方法」を参照してください。
- d. KPI 割り当てで、関連 HI は 489ページ「インジケータの選択」で選択したものである必要があります。

注: サービス・レベル管理 (SLM) で統合結果の表示も行う場合は、サービス・レベル・アグリーメント (SLA) を定義する必要があります。SLA の詳細については、BSM 文書ライブラリの『サービス・レベル管理の使用』の「[アグリーメント マネージャ] ページ」を参照してください。

5. BSM 統合の設定

SiteScope と BSM を統合します。詳細については、231ページ「SiteScope および BSM 間の統合の設定方法」を参照してください。

6. SiteScope の選択

統合モニタをデプロイする SiteScope サーバを選択します。

- SiteScope スタンドアロンでは、SiteScope インスタンスを選択して開きます。
- SAM システム可用性管理で、統合モニタをデプロイする SiteScope サーバを選択します。ユーザ・インタフェースの詳細については BSM ヘルプの『システム可用性管理の使用』にある「システム可用性管理の管理」ページを参照してください。

7. 統合モニタのグループの作成

ユーザ・インタフェースの詳細については、315 ページ「[新規 SiteScope グループ] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

ヒント: 統合モニタ専用のグループを作成することをお勧めします。これにより、BSM に報告されるデータを統合からのデータとして簡単に識別できるようになります。

8. 統合モニタの追加

モニタを設定して、統合モニタの構成に必要なデータを追加する必要があります。次のアプリケーション固有の統合を選択できます。

- HP OM Event Monitor(詳細については、『Monitor Reference』ガイドを参照してください)
- HP Service Manager Monitor(詳細については、『Monitor Reference』ガイドを参照してください)
- NetScout Event Monitor(詳細については、『Monitor Reference』ガイドを参照してください)

次の汎用統合モニタを選択できます。

- Technology Database Integration Monitor (詳細については、『Monitor Reference』ガイドを参照してください)
- Technology Log File Integration Monitor(詳細については、『Monitor Reference』ガイドを参照してください)
- Technology SNMP Trap Integration Monitor(詳細については、『Monitor Reference』ガイドを参照してください)
- Technology Web Service Integration Monitor (詳細については、『Monitor Reference』ガイドを参照してください)

9. モニタのフィールド マッピングの編集

マッピングによって、受信データの処理や BSM に転送される出力サンプルが定義されます。

- a. [フィールドのマッピング] パネルで、[Metrics] フィールド・マッピング・スクリプトを選択し、[ファイルのロード] をクリックします。
- b. ss_t サンプル・ファイルに入れて送信する詳細を入力します。
 - [MeasurementETI] 値には、前に 489 ページ「インジケータの選択」で選択した HI のラベルを入力します。
 - [MeasurementCIHint] に CI のヒントを入力します。このヒントは、BSM 内の CI リゾルバが、このサンプルを添付する CI を認識するために役立ちます。

測定スクリプトの値の詳細については、501ページ「測定値サンプルのフィールドのマッピングの設定」を参照してください。

注: [フィールドのマッピング] 設定は、[トポロジ設定] パネルの[データなしのレポート トポロジ] チェックボックスが選択されている場合は、使用できません。データなしのトポロジ・レポートの詳細については、516ページ「データなしでトポロジをレポートする方法」を参照してください。

10. ノー・トポロジ・フローの計画

ノー・トポロジ・フローの設計戦略を計画するときは、以下の点を考慮する必要があります。

■ トポロジに対する CI

ノー・トポロジのオプションを使用するため、EMS モニタを使ってデータをレポートする RTSM にすでに CI を持っているかもしれません。

■ これらの CI のレポート対象データ

これらの CI に関連するデータの内容およびこのデータを CI に添付する方法を検討します。レポートするデータには、いずれの状況インジケータ(HI)が関連するでしょうか。該当するインジケータがない場合は、新規 HI の作成を検討します。いずれの KPI または HI の割り当てによって、必要な HI および KPI が作成されるでしょうか。該当する割り当てが存在しない場合は、独自の割り当てを作成することを検討します。

たとえば、CPU 使用率およびネットワーク使用率についてのデータを持っている場合、コンピュータ CI タイプに定義された「CPU Load」および「Interface Utilization」HI を使用し、システム・パフォーマンス KPI を使用することができます。ご自分のニーズに合った HI と KPI 割り当てがあるかどうかを確認し、それらを作成することを検討します。

11. SAM レポートを使用する場合のグループ権限の割り当て

測定値フィールド・マッピングを含む汎用統合モニタを設定する場合は、定義されているユーザーごとに、SiteScope グループおよびそのサブグループを SAM レポートおよびカスタム・レポート内で表示する権限を割り当てる必要があります。詳細については、BSM ヘルプでプラットフォーム管理ガイドの権限についてのセクションを参照してください。

12. 統合結果の表示

BSM で HI および KPI 割り当てを設定し、SiteScope でモニタを設定したら(フィールド・マッピングを含む)、結果を表示できます。

- BSM のサービス状況またはサービス・レベル管理アプリケーションでの統合結果を表示するビューを RTSM に作成します。表示は自分が表示したい CI を記述している必要があります。

ビューの作成についての詳細は、BSM 文書ライブラリでモデリング・ガイドの「Modeling Studio Page」を参照してください。

SLM に対しても統合を定義した場合は、SLM レポートで統合結果を表示できます。SLM およびレポートの詳細については、BSM 文書ライブラリの『サービス・レベル管理の使用』の「サービス・レベル管理のアプリケーションの操作」を参照してください。

- 統合データは、システム可用性管理レポートにも表示できます。さまざまなレポートで、グラフに表示するデータのフィルタを指定します。

手順 9 のフィールド・マッピングで定義した次の値を含めるようにフィルタを設定します。

- **ターゲット**: 統合モニタ・フィールド・マッピングの[TargetName]フィールドに定義した値を選択します。
- **モニタタイプ**: 統合モニタ・フィールド・マッピングの[MonitorType]で定義した値を選択します。
- **モニタタイトル/モニタ名**: 統合モニタ・フィールド・マッピングの[MonitorName]で定義した値を選択します。
- **測定値**: 統合モニタ・フィールド・マッピングの[MeasurementName(x)]で定義した値を選択します。

例 - トポロジを使用しない測定値フローの作成

この例では、トポロジなしのフローを使用して、さまざまな Oracle データベースを監視するサードパーティのシステムから測定値サンプルをキャプチャして BSM に転送する、統合モニタを作成する方法を説明します。このフローは、トポロジが BSM にすでに存在しており、CI をレポートする必要がない場合に、測定値サンプルを送信するために使用されます。

注: この例に関連するタスクについては、[489ページ「ノー・トポロジでメトリックデータを収集するための統合モニタの設定方法」](#)を参照してください。

この例には次の手順が含まれています。

- [494ページ「設計ステージ」](#)
- [495ページ「インジケータの選択」](#)
- [496ページ「HI 割り当ての定義」](#)
- [497ページ「KPI 割り当ての定義」](#)
- [500ページ「フィールド・マッピングの定義」](#)
- [500ページ「統合結果の表示」](#)

1. 設計ステージ

My Oracle Monitoring というアプリケーションがあるとします。このアプリケーションは、さまざまなコンピュータで稼動している Oracle データベースからのさまざまな測定値をログ・ファイルに書き込みます。

このアプリケーションはログ・ファイルに書き込むため、統合用にテクノロジー・ログ・ファイル統合モニタを作成する必要があります。測定値は、すでに RTSM に存在している Oracle CI に割り当てられます。したがって、CI をレポートする必要はありません。データは、CI 上の HI に割り当てられます。関心のある 1 つのインジケータと 1 つの測定値に注目します。

ログ・ファイル内のエントリ:

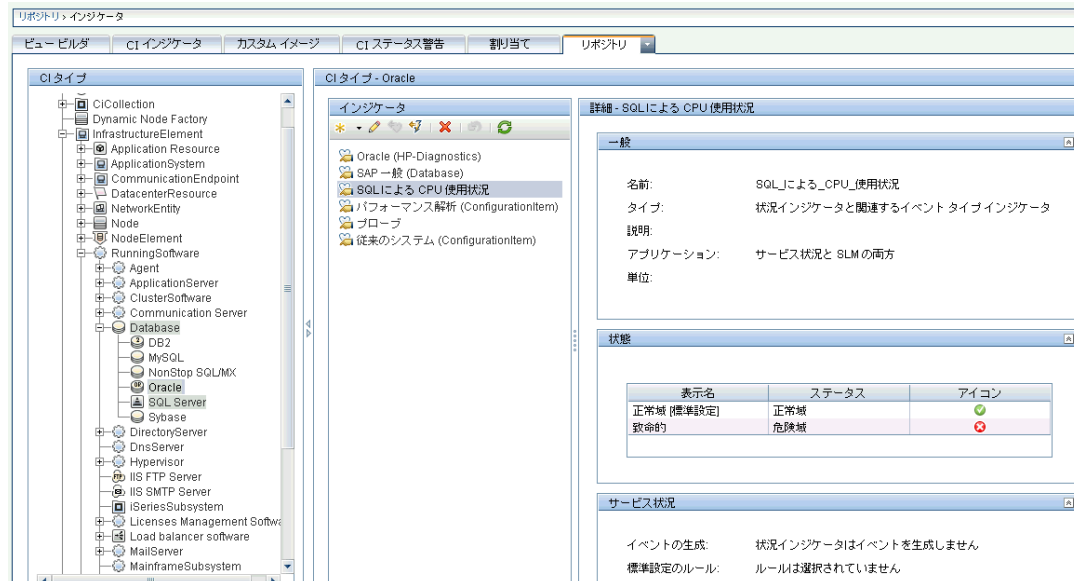
- amrnd153,27,1,good
- amrnd153,82,1,warning
- amrnd153,80,1,warning

SiteScope のテクノロジー・ログ・ファイル統合モニタ:

テクノロジー ログ ファイル 統合 モニタ 設定	
サーバ:	SiteScope Server サーバの参照 リモートサーバの追加
*ログファイルパス名:	c:\ems\OracleLog.txt
内容一致:	/(.)/(.*)/(.*)/(.*)/ ツールを開く
ログファイルのエントリコード:	windows-1252
警告の実行:	ログエントリが一致するたび
	<input type="checkbox"/> データなしのレポートトポロジ
EMS の時間差:	0 日数
<div>モニタの実行設定</div> <div>フィールドのマッピング</div> <div>トポロジ設定</div> <div>依存関係</div> <div>しきい値の設定</div>	
利用不可な場合:	モニタの状態をしきい値に応じて設定
標準設定の状態:	良好
内部エラーの場合:	根据 阈值设置 监控器 状态
標準しきい値の追加 標準しきい値の削除	
エラー条件	

2. インジケータの選択

BSM で、[管理]>[サービス状況]>[リポジトリ]>[インジケータ]を選択します。「My Oracle Monitoring」アプリケーションの場合は、「SQL (データベース)による CPU 使用状況」インジケータを使用します。このインジケータは、SQL および Oracle の使用状況をレポートします。



このインジケータは、Oracle CI タイプ上に定義されており、ログから読み取られる測定値を対象としています。この測定値は、Oracle で使用する CPU の量を示します。

3. HI 割り当ての定義

BSM で、[管理] > [サービス状況] > [割り当て] > [状況インジケータの割り当て]を選択し、インジケータの割り当てを作成します。

割り当て条件は、インジケータを定義する Oracle CI と一致する(この統合に属さないほかの Oracle CI とは一致しない)必要があります。インジケータ割り当てで、「SQL による CPU 使用状況」インジケータを選択します。

この割り当てのインジケータを編集すると、次の画面が表示されます。

割り当て: SQL による CPU 使用状況 の状況インジケータの編集

状況インジケータ設定を定義します

状況インジケータ

* 状況インジケータ: SQL による CPU 使用状況

* ビジネス ルール: SiteScope 最低ステータス ルール

* 優先度: 0

ビジネス ルールパラメータ

generateEvents: 偽

Tooltip show all measurements: false (String)

データのタイムアウトなし: 900 秒

* [CI タイプのプロパティ] リストからプロパティをドラッグするか、フィールドの編集中に Ctrl + i を押して、選択したプロパティに値を設定できます。

セレクト

フィールド名	オペレータ	タイプ	値
AND			
eti_id	=	Binary	<<Health Indicator Type ID>>
ci_id	=	Binary	<<CI ID>>
sampleType	=	String	ss_t

式のサマリ:

```

[eti_id = <<Health Indicator Type ID>>]
AND
[ci_id = <<CI ID>>]
AND
[sampleType = ss_t]

```

* [CI タイプのプロパティ] リストからプロパティをドラッグするか、フィールドの値の編集中に Ctrl + i を押して、選択したプロパティに値を設定できます。

CI タイプのプロパティ

一般プロパティ

バイナリ

Calculated ID

ブール

Allow CI Update

Change Is New

Enable Aging

Is Candidate For Deletion

Operation Is New

Store KPI History For Over Ti...

Test Is New

Track Configuration Changes

整数

Actual Deletion Period

BusinessCriticality

Collection Interval

Deletion Candidate Period

文字列

BPI Monitor Type

BPI Server Name

CI Type

City

Container

Country or Province

Created By

Custom Data Units

Data Units

Description

Digest

Display Label

Documents

External ID

Global Id

Name

Note

Origin

Owner Tenant

State

System

保存 キャンセル ヘルプ

「SQL による CPU 使用状況」インジケータは、SiteScope のワースト・ステータス・ルールを使用して計算されます。このセレクトは、現在の CI および ETI と同じ ci_id および eti_id を持つ ss_t タイプ(測定値データ・タイプ)のサンプルが、この Oracle CI 上で、このインジケータによってキャプチャされることを定義します。ほかのサンプルはキャプチャされない必要があります。

4. KPI 割り当ての定義

標準設定のインジケータを使用したため、Oracle CI 上に既存のサービス状況 KPI 割り当てが存在しており、KPI 割り当てを作成する必要はありません。

BSM で[管理]>[サービス状況]>[割り当て]>[KPI 割り当て]を選択し、CI タイプ・ツリーで[Oracle]を選択して[Oracle KPI Assignment]を選択します。

[Monitored by]プロパティで、手動で「My Oracle Monitoring integration」を入力します。この値は、この統合によってレポートされる Oracle CI を、レポートされるほかの Oracle CI と区別するために役立ちます。これにより、この統合によってレポートされる Oracle CI のみに「SQL による CPU 使用状況」インジケータが割り当てられます。

CI タイプ: Oracle の KPI 割り当ての編集

KPI の割り当てを定義します。条件が指定されている場合は、KPI やショートカットメニューは条件を満たす任意の CII に割り当てられます。

割り当ての設定

ID: d48ea3ba-533f-44e7-8908-179179588472

* 名前: Oracle KPIs Assignment

説明: KPI Assignments for Oracle Health Indicators

条件

モニタ元:

プロパティ名	演算子	値
--------	-----	---

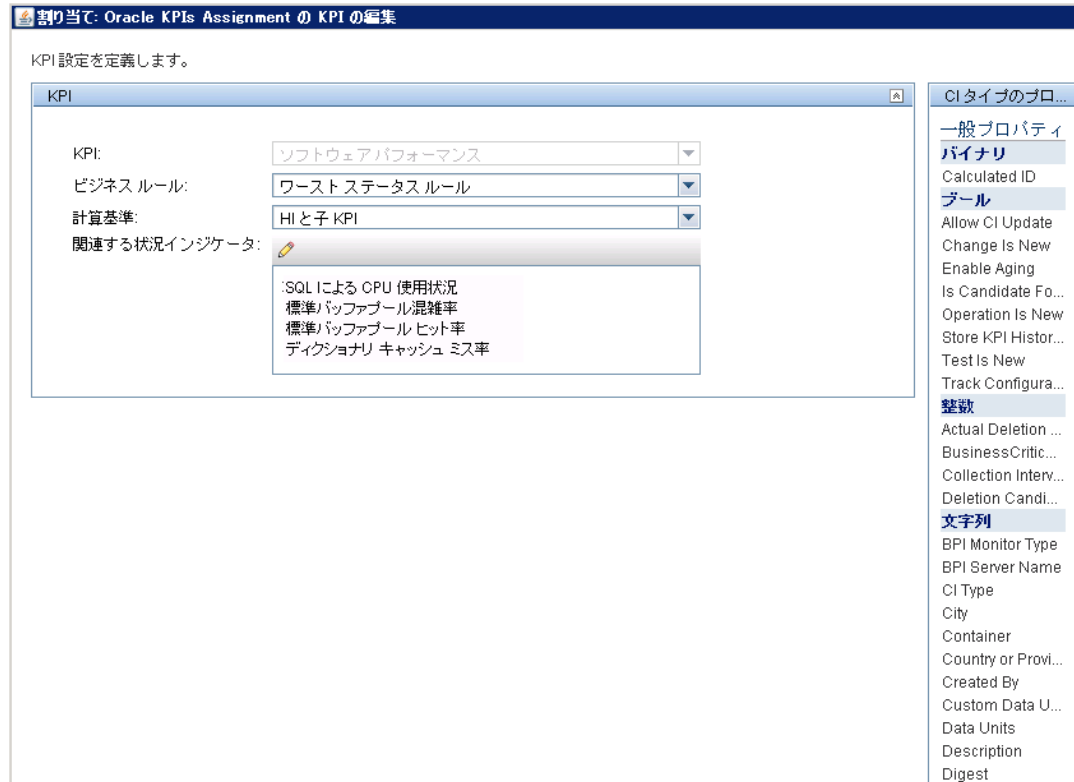
KPI 設定

KPI	計算基準	関連する状況インジケータ	ビジネス ルール
ソフトウェアパフォーマンス	HI と子 KPI	データベース オブジェクト ステータス	ワースト ステータス ルール
ソフトウェアの可用性	HI と子 KPI	SQL による CPU 使用状況 標準	ワースト ステータス ルール

ショートカットメニュー

保存 キャンセル ヘルプ

[ソフトウェア パフォーマンス] KPI を選択します。



この KPI と関連付けられているインジケータの 1 つは、使用した「SQL による CPU 使用状況」インジケータです。

5. フィールド・マッピングの定義

注: 使用するフィールド・マッピング・スクリプトはこの PDF に添付されたテキスト・ファイルで利用可能です。添付ファイルを表示するには、[表示]>[ナビゲーション パネル]>[添付ファイル]を選択して、**Metrics_No_Topology_Field_Mapping.txt**を選択します。

フィールド・マッピング・スクリプトで、新しいモニタ・タイプが定義されたことを確認できます。My Oracle が定義されたことを確認できます。

モニタ名は My Oracle mon on\$group0 であり、ここで \$group 0 は、Oracle データベースを稼動しているターゲット・コンピュータでもあります。

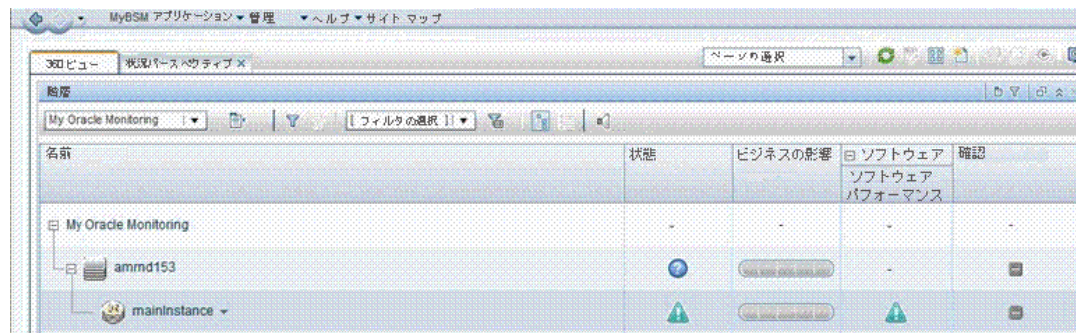
測定名は oracle cpu usage であり、その値はログ・ファイルから取得されます。送信される値の品質はログ・ファイルに書き込まれた内容に依存します。

測定値のマッピング先の ETI は、「SQL による CPU 使用状況」です。

CI ヒントは、<<Oracle sid>>@@<<コンピュータ名>> の形式をしています。CI ヒントは、BSM 内の CI リゾルバが、このデータ・サンプルを添付する CI を検索するために役立ちます。

6. 統合結果の表示

BSMで、[アプリケーション]>[サービス状況]を選択し、この統合用のビューを手動で作成します。たとえば、ここでは、「My Oracle Monitoring」というビューを作成しました(「System Software Monitoring」ビューにも表示)。



監視対象マシンのインジケータ・ステータスの結果は、次のようになります。



状態および値は、フィールド・マッピングで割り当てた状態および値と同じです。

測定値サンプルのフィールドのマッピングの設定

測定値のデータ・タイプは、外部システムによって収集されたメトリックを抽出し、BSM にインポートするために使用されます。統合モニタのフィールド・マッピングを設定するときに[メトリック]データ・タイプを選択してメトリック・スクリプトをロードします。次に、[フィールドのマッピング]テキスト・ボックスの内容をコピーしてテキスト・エディタに貼り付け、設定を変更します。変更が完了したら、その内容を[フィールドのマッピング]テキスト・ボックスにコピーします。

イベント・ハンドラの構造と構文の詳細については、[432ページ「イベント・ハンドラの構造と構文」](#)を参照してください。

CI 解決のヒントの形式については、[422ページ「CI 解決のヒントの形式」](#)を参照してください。

本項の内容

- [501ページ「メトリック・スクリプトの必須値」](#)
- [502ページ「メトリック・スクリプトの任意値」](#)
- [503ページ「メトリック・スクリプトの例」](#)

メトリック・スクリプトの必須値

次の表に、メトリック・スクリプトの必須値を示します。

フィールド名	タイプ	説明	例
TimeStamp	DOUBLE	1970 年 1 月 1 日以降の秒単位のタイムスタンプ。	TimeStamp:DOUBLE=time()
Quality	INT	品質 (SiteScope での名称): 利用可能な値は、QUALITY_ERROR, QUALITY_WARNING, QUALITY_GOOD です。	Quality:INT= QUALITY_ERROR
MonitorName	STRING	論理モニタ名。	MonitorName="NT cpu Monitor"
MonitorState	STRING	モニタの状態 (N/A, Good, Error など)。	MonitorState="Received " + \$count + " events"
MonitorType	STRING	モニタ・タイプ。	MonitorType="System Monitor"
TargetName	STRING	該当のモニタの対象 (ホスト・マシンの名前など)。	TargetName=\$Device

フィールド名	タイプ	説明	例
MeasurementName (N)	STRING	N 番目のメトリックの名前。	MeasurementName(1) = "CPU Temperature"
Value(N)	DOUBLE	N 番目のメトリックの値。	Value(1) : DOUBLE = \$CPUTemperature

メトリック・スクリプトの任意値

次の表に、メトリック・スクリプトの任意値を示します。

フィールド名	タイプ	説明	例
MeasurementETI	STRING	ETI の表示名。 注 :BSM 9.00 を使用する場合、統合フィールド・マッピングに関連するインジケータ名を追加するか(追加しない場合、代わりにシステム KPI が使用される)、SAM システム可用性管理でインジケータを設定します。詳細については、BSM ヘルプにある『システム可用性管理の使用』の「インジケータ割り当ての設定」を参照してください。	MeasurementETI(1) = "インジケータの表示名"

フィールド名	タイプ	説明	例
Measurement CI Hint	STRING	<p>監視対象のCIを特定し、測定値をそれらのCIに関連付ける場合に使用するCI解決のヒント: SiteScopeでは、モニタの内部IDに基づく形式で用意済みのCI解決のヒントを送信します。</p> <p>EMS測定値フィールド・マッピングでは、次の場合、カスタムCI解決のヒントを送信する必要があることがあります。</p> <ul style="list-style-type: none"> カスタム・トポロジ・スクリプトを使用したモニタCIのないカスタム・トポロジの送信する場合。 サードパーティの測定値を転送し、既存のトポロジにそれらを接続することのみが必要な場合。この場合、フィールド・マッピングを作成し、CI解決のヒントを提供し、統合モニタの[トポロジ設定]で[トポロジなし]を選択します。 <p>CI解決のヒントは、422ページ「フィールド・マッピングの構造について」で説明されているようにBSMで認識可能な形式で指定する必要があります。</p>	<pre>MeasurementCIHint(1) = "@@SCDAM038.testlab"</pre>

メトリック・スクリプトの例

注: メトリック・スクリプトの例はこのPDFに添付されたテキスト・ファイルで利用可能です。添付ファイルを表示するには、[表示]>[ナビゲーション パネル]>[添付ファイル]を選択して、**Metrics_Script_Example.txt**を選択します。

このスクリプトで複数のメトリックを指定する場合は、各メトリックについて個別のサンプルが送られます。

注: 各ファイルについて複数のメトリックを指定する場合は、メトリックに連続した番号を付ける必要があります。

失敗した場合は **RunMonitor.log** にエラーが表示されますが、エラーはモニタの状態に影響しません。

第19章

チケット発行データを収集する統合モニタの設定

本章の内容

概念

- 505ページ「チケット発行サンプルの統合モニタ・フィールドのマッピング」

タスク

- 506ページ「チケット発行データを収集する統合モニタの設定方法」

参照情報

- 510ページ「チケット・サンプルのフィールドのマッピングの設定」

513ページ「トラブルシューティングおよび制限事項」

チケット発行サンプルの統合モニタ・フィールドのマッピング

統合モニタとそのフィールドのマッピング・スクリプトを設定して、Enterprise Management Systems や自動サポート・システムなどの管理アプリケーションのイベントおよび測定値データをキャプチャできます。

統合モニタは、モニタの設定のユーザ・インタフェースでカスタマイズするフィールドのマッピングによって異なります。マッピングによって、受信データの処理やBSMに転送される出力サンプルが定義されます。

特定のEMSアプリケーション(HP OM, HP Service Center, NetScout など)で使用するよう設計された統合モニタは、フィールドのマッピング・スクリプトを編集しなくても設定できます。このマッピングは HP によって事前に定義されているため、特別なカスタマイズが必要な場合以外は変更する必要はありません。これらのフィールドのマッピング・スクリプトの編集の詳細については、デプロイするモニタのユーザ・インタフェースの各ページにあるフィールドのマッピング要素の説明を参照してください。

テクノロジー統合モニタ(テクノロジー SNMP トラップ・モニタ, テクノロジー・ログ・ファイル・モニタ, およびテクノロジー・データベース・モニタ)の場合、データ・タイプを選択する必要があります。必要なスクリプトのテンプレートはフィールドのマッピングのテキスト・ボックスに直接ロードされます。組織のニーズに合わせてフィールドのマッピング・スクリプトを編集する必要があります。テクノロジー Web サービス統合モニタのフィールドのマッピングもカスタマイズする必要があります。

[**チケット**]を選択し、トポロジ設定を使用してBSMに統合する場合、次のトポロジ・スクリプトを選択できます。[**チケット**]または[**カスタム**](自分で Jython トポロジ・スクリプトを作成する必要がある)ので、Jython 言語を十分理解している場合にかぎります)。

トポロジ設定の選択の詳細については、[424ページ「テクノロジー統合モニタのトポロジ設定」](#)を参照してください。

注: フィールドのマッピングを使った作業では、スクリプトで定義した必須フィールドおよび任意フィールドのみを使用します。詳細については、各データ・タイプの表を参照してください。

チケット発行データを収集する統合モニタの設定方法

このタスクでは、サードパーティのチケット発行システムからインシデントおよびイベントを収集し、データ・サンプルを BSM にインポートするように SiteScope を設定する手順について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- 506ページ「統合方法の計画」
- 506ページ「BSM 統合の設定」
- 506ページ「SiteScope サーバの選択」
- 506ページ「統合モニタのグループの作成」
- 507ページ「統合モニタの追加」
- 507ページ「モニタのフィールド マッピングの編集」
- 507ページ「トポロジ・スクリプトへのデータのマップ - オプション(トポロジを BSM に報告する場合は必須)」
- 508ページ「フィールド・マッピング・スクリプトのテスト - オプション」
- 508ページ「BSM での EMS 統合アプリケーションの設定」
- 508ページ「結果」

1. 統合方法の計画

統合モニタのタイプを確認します。EMS システムから BSM で表示する情報のタイプを検討します。いずれかの特定の統合モニタが組織のニーズを満たすかどうか、または汎用統合モニタ(テクノロジー・ログ・ファイル、データベース、SNMPトラップ、Web サービス)が必要かどうかを判断します。

概念の詳細については、419ページ「統合モニタの概要」を参照してください。

2. BSM 統合の設定

SiteScope と BSM を統合します。詳細については、231ページ「SiteScope および BSM 間の統合の設定方法」を参照してください。

3. SiteScope サーバの選択

統合モニタをデプロイする SiteScope サーバを選択します。

- SiteScope スタンドアロンでは、SiteScope インスタンスを選択して開きます。
- SAM システム可用性管理で、統合モニタをデプロイする SiteScope サーバを選択します。ユーザ・インタフェースの詳細については BSM ヘルプの『システム可用性管理の使用』にある「システム可用性管理の管理」ページを参照してください。
- [EMS 統合管理]で、[新規統合]または[統合の編集]ボタンをクリックします。[統合の編集]ダイアログ・ボックスで、システム可用性管理 パネルのリンクをクリックして、SiteScope サーバを選択できる[SAM 管理]ウィンドウを開きます。ユーザ・インタフェースの詳細については BSM ヘルプの Solutions and Integrations Guideにある「Edit Integration Dialog Box」を参照してください。

4. 統合モニタのグループの作成

ユーザ・インタフェースの詳細については、315ページ「[新規 SiteScope グループ]ダイアログ・ボックス」を参照してください。

ヒント: 統合モニタ専用のグループを作成することをお勧めします。これにより、BSM に報告されるデータを統合からのデータとして簡単に識別できるようになります。

5. 統合モニタの追加

モニタを設定して、統合モニタの構成に必要なデータを追加する必要があります。次のアプリケーション固有の統合を選択できます。

- **HP OM Event Monitor**(詳細については、『Monitor Reference』ガイドを参照してください)
- **HP Service Manager Monitor**(詳細については、『Monitor Reference』ガイドを参照してください)

- **NetScout Event Monitor**(詳細については、『Monitor Reference』ガイドを参照してください)

次の汎用統合モニタを選択できます。

- **Technology Database Integration Monitor** (詳細については、『Monitor Reference』ガイドを参照してください)
- **Technology Log File Integration Monitor**(詳細については、『Monitor Reference』ガイドを参照してください)
- **Technology SNMP Trap Integration Monitor**(詳細については、『Monitor Reference』ガイドを参照してください)
- **Technology Web Service Integration Monitor** (詳細については、『Monitor Reference』ガイドを参照してください)

6. モニタのフィールド マッピングの編集

マッピングによって、受信データの処理やBSMに転送される出力サンプルが定義されます。

- [フィールドのマッピング]パネルで、[チケット]フィールド・マッピング・スクリプトを選択し、[ファイルのロード]をクリックします。
- 対応するフィールド・マッピング・グループに、データの抽出元にするログ・ファイルに表示されるスクリプト値をマッピングすることにより、スクリプトを編集して、BSMに転送する監視対象アプリケーションから SiteScope でデータを取得できるようにします。

必須スクリプト値については、510ページ「チケット・スクリプトの必須値」を参照してください。

任意指定のスクリプト値については、511ページ「チケット・スクリプトの任意値」を参照してください。

注: [フィールドのマッピング]設定は、[トポロジ設定]パネルの[データなしのレポートトポロジ]チェック・ボックスが選択されている場合は、使用できません。データなしのトポロジ・レポートの詳細については、516ページ「データなしでトポロジをレポートする方法」を参照してください。

7. トポロジ・スクリプトへのデータのマップ - オプション(トポロジをBSMに報告する場合は必須)

[トポロジ設定]パネルで、BSM の適切な CI 階層にデータを転送するためのトポロジ・スクリプトを選択します。

- **チケット**: Monitored By 関係によって接続された EMS モニタ CI を持つ Business Service CI を作成する場合に選択します。EMS モニタ CI から Business Service CI に状態が伝搬されます。

注: トポロジ・スクリプトには、EMS モニタ CI (統合によって作成されるトポロジの最下位リーフ) が含まれている必要があります。

- **カスタム**: 独自のトポロジ・スクリプトを作成する場合に選択します

トポロジ設定を編集します。トポロジ・スクリプトは、BSM の RTSM 内の必要な CI にデータを転送するために必要な値で設定されます

注:

- フィールド・マッピングを使用するとき、フィールド・マッピング・フィールドをトポロジ・スクリプトの入力として使用できます。たとえば、レガシー・イベント・マッピングを使用するとき、次の方法で [Subject] フィールドの値にアクセスできます。

```
subject = Framework.getDestinationAttribute("Subject")
```

- さらに、group0、group1 など、テクノロジー・ログ・ファイル統合モニタからの「モニタ変数」の値、またはテクノロジー・データベース統合モニタ内のデータベース列の名前、またはその他の統合モニタ内のその他の変数にアクセスできます。たとえば、次の方法で、変数 group1 の値にアクセスできます。

```
group1 = Framework.getDestinationAttribute("group1")
```

8. フィールド・マッピング・スクリプトのテスト - オプション

モニタの実行前に、[トポロジ設定]パネルで[スクリプトのテスト]をクリックして、スクリプトをテストします。次の内容がテストされます。

- フィールドのマッピングおよびトポロジ・スクリプトの構文を確認します。
- マッピング結果を表示します。
- トポロジ・スクリプトが設定されている場合は、トポロジ結果を表示します。

9. BSM での EMS 統合アプリケーションの設定

モニタの設定に加え、BSM の EMS 統合アプリケーションの設定が必要になります。詳細については、BSM ヘルプにある『Solutions and Integrations Guide』の「[How to Integrate Data from Third-Party Sources \(EMS Data\) into HP Business Service Management](#)」の「Create an EMS integration (for Event or Ticket Samples)」で残りの手順を参照してください。

注: 測定値統合を設定する場合、BSM の [SAM 管理] にアクセスし、新しい統合を設定する必要はありません。モニタを作成して、[レポート トポロジ] オプションを選択するだけです。

10. 結果

サードパーティのシステムで収集されて統合モニタで処理されると、イベントが生成されて

＜SiteScope のルート・ディレクトリ＞\logs ディレクトリの

HPSiteScopeOperationsManagerIntegration.log ファイルにそのイベント・データが書き込まれます。各イベントはログの個別の行に書き込まれます。ログ・ファイル・ポリシーにより、このファイルを読み取り、BSM に送信されるイベント・メッセージを作成するようにエージェントに指示が出されます。

イベントは、サービス状況、システム可用性管理 イベント・ログ、およびトレンド・レポートで参照できます。

チケット・サンプルのフィールドのマッピングの設定

チケットのデータ・タイプは、外部システムによって収集されたイベントを抽出し、BSM にインポートするために使用されます。統合モニタのフィールド・マッピングを設定するときに[チケット]データ・タイプを選択してチケット・スクリプトをロードします。次に、[フィールドのマッピング]テキスト・ボックスの内容をコピーしてテキスト・エディタに貼り付け、設定を変更します。変更が完了したら、その内容を[フィールドのマッピング]テキスト・ボックスにコピーします。

イベント・ハンドラの構造と構文の詳細については、[432ページ「イベント・ハンドラの構造と構文」](#)を参照してください。

本項の内容

- [510ページ「チケット・スクリプトの必須値」](#)
- [511ページ「チケット・スクリプトの任意値」](#)
- [512ページ「条件式の例」](#)
- [512ページ「チケット・スクリプトの例」](#)

チケット・スクリプトの必須値

次の表に、チケット・スクリプトの必須値を示します。

フィールド名	タイプ	説明	例
time_stamp	DOUBLE	1970 年 1 月 1 日以降の秒単位のタイムスタンプ。	time_stamp:DOUBLE=str_to_seconds(\$time,"yyyy-MM-dd HH:mm:ss.SSS").
severity	INT	事前に設定された次のいずれかの重大度になります(該当の整数に基づきます)。 SEVERITY_UNKNOWN SEVERITY_INFORMATIONAL SEVERITY_WARNING SEVERITY_MINOR SEVERITY_MAJOR SEVERITY_CRITICAL	4".equals(\$severity) ? "Low" : ("3".equals(\$severity) ? "Average" : ("2".equals(\$severity) ? "High" : ("1".equals(\$severity) ? "Critical" : "Unknown")))

フィールド名	タイプ	説明	例
target_name	STRING	チケットを生成したエンティティ(通常はサービス)の名前。	target_name="mail service"(ここに静的文字列を入力しないでください。チケットから動的に取得する必要があります)
data_source	STRING	チケットを生成したシステム。	data_source="ticketing" (この文字列は, HP ServiceCenter 統合ではなく汎用テクノロジー統合モニタ用に編集する必要があります)
ticket_id	STRING	チケットの ID。	ticket_id=112233
ticket_state	STRING	チケット・システムで定義したインシデント・ライフサイクルの状態。	"Open" / "Closed"
ticket_type	STRING	チケット・システムで定義したインシデントのタイプ。	"Incident"
orig_severity_name	STRING	重大度(外部 EMS での名称)。	orig_severity_name = "Cleared"

チケット・スクリプトの任意値

スクリプトには, チケット・スクリプトで使用する任意値を説明するためのコメントが含まれています。次の表に, チケット・スクリプトの任意値を示します。

フィールド名	タイプ	説明	例
subject	STRING	イベント・ソースを表す中/高レベルの階層。	CPU, SAP application, hard disk
instance	STRING	イベントを生成した対象のインスタンス。イベント・ソースを表す最下位レベルの階層です。	D:\
object	STRING	チケット・ソースを表す階層の任意レベル。	object="OS"
logical_group	STRING	該当のチケットの論理グループ。	logical_group="error messages"
monitor_group	STRING	該当のチケットをレポートしたモニタ・グループ。	monitor_group="log monitors on \\hostname"

フィールド名	タイプ	説明	例
elapsed_time	STRING	チケットの経過時間。	
orig_severity_name	STRING	チケット・システムで定義した重大度の名前。	
attr1	STRING	予備データ・スロット。	attr1=\$history
attr2	STRING	予備データ・スロット。	attr2=\$moreHistory
attr3	STRING	ビジネス・サービスを所有する組織の名前(ビジネス・サービス統合トポロジ・フローで使用する場合)。	Attr3="XYZ Inc"
attr4	STRING	ビジネス・サービスを所有する組織のタイプ(ビジネス・サービス統合トポロジ・フローで使用する場合)。	Attr4="department"
attr5	STRING	長い文字列用の予備データ・スロット。2000 文字までの値に使用します。	attr5=\$Longhistory

条件式の例

この例はチケット・サンプルの重大度を設定します。チケット・システムで使用されているステータス項と BSM で使用されているステータス項で照合を行います。

```
4".equals($severity) ?"Low" : ("3".equals($severity) ?"Average" :
("2".equals($severity) ?"High" : ("1".equals($severity) ?"Critical"
:"Unknown")))
```

チケット・スクリプトの例

```
[$DEFAULT_PARAMETERS$]
time_stamp:DOUBLE=$time_stamp
ticket_id=$ticket_id
ticket_state=$ticketStatus
severity:INT=$severity
target_name=$target_name
data_source="ticketing"
ticket_type="Incident"
orig_severity_name="4".equals($severity) ?"Low" : ("3".equals
($severity) ?"Average" : ("2".equals($severity) ?"High" : ("1".equals
($severity) ?"Critical" : "Unknown")))
```

トラブルシューティングおよび制限事項

本項では、統合モニタのフィールド・マッピングに関するトラブルシューティングおよび制限事項について説明します。

- チケット・サンプルおよびチケット・トポロジの場合、レポートされる EMS モニタの `monitor_id` は次のとおりです。

`<data_source>_<target_name>`

- XML 特殊文字 (" , ' < > &) を使用すると、BSM でこれらのサンプルに関して問題が発生するため、`monitor_id` の作成に使用されるフィールドではこれらの文字を使用しないでください。

第20章

データなしのトポロジ報告

本章の内容

概念

- 515ページ「データなしのトポロジ報告の概要」

タスク

- 516ページ「データなしでトポロジをレポートする方法」

データなしのトポロジ報告の概要

SiteScope テクノロジ統合 モニタによって検出されたトポロジのみを、データのレポートなしで、SiteScope によって報告できます。

タスクの詳細については、[516 ページ「データなしでトポロジをレポートする方法」](#)を参照してください。

データなしでトポロジをレポートする方法

このタスクでは、データを送信することなく SiteScope テクノロジ統合 モニタにより検出されたトポロジのレポートを有効化する方法について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- 516 ページ「テクノロジ統合 モニタの設定」
- 516 ページ「スクリプトのテスト - オプション」

1. テクノロジ統合 モニタの設定

- a. テクノロジ統合 モニタを設定する場合、[トポロジ設定] パネルで[データなしでトポロジをレポート]チェック・ボックスを選択します。

注: このオプションが選択されている場合、[フィールド・マッピング]領域は利用できません。

- b. 次のオプションからトポロジ・スクリプトを選択します。
 - **コンピュータ**: コンピュータ CI を持つトポロジを作成する場合に選択します。
 - **コンピュータ - 実行中のソフトウェア**: コンピュータ CI のあるトポロジを親 CI として作成するよう選択し、それに基づいて[ソフトウェア CI を実行]を選択します。
 - **カスタム**: 取得したデータをコンピュータ CI または実行中のソフトウェア CI ではなく特定の CI に送信する場合は、独自のトポロジ・スクリプトの作成を選択します。
- c. モニタによって検出されたデータを、トポロジ設定の関連する属性にマッピングします。BSM のみにトポロジをレポートするには、トポロジ・スクリプトを必要な値で特別に設定します。

必須スクリプト値については、454 ページ「共通イベント・サンプルのフィールドのマッピングの設定」を参照してください。

注:

- **コンピュータ** および **コンピュータ - 実行中のソフトウェア** は、データ・タイプ・フローなしのレポート・トポロジで利用可能な、最初からすぐに利用可能なトポロジ・スクリプトです。
- **コンピュータ** および **コンピュータ - 実行中のソフトウェア**・スクリプトは、SiteScope が BSM バージョン 9.x 以降に接続されている場合にのみ利用できます。

注: テクノロジ・ログ・ファイル統合 モニタ、またはテクノロジ・データベース統合 モニタのデータベース名のカラム、または他の統合 モニタの他の変数から group0、group1 のような「モニタ変数」の値にアクセスできます。たとえば、次の方法で、変数 group1 の値にアクセスできます。

```
group1 = Framework.getDestinationAttribute("group1")
```

2. スクリプトのテスト - オプション

[トポロジ設定] パネルで、[スクリプトのテスト]をクリックして、モニタの実行前にスクリプトをテスト

します。トポロジ結果が表示されます。

このテストでは、BSM にトポロジを転送しません。

第21章

HP Network Node Manager との統合

本章の内容

概念

- 519ページ「Network Node Manager 統合の概要」
- 520ページ「Network Node Manager データをエクスポートするスクリプトの作成」

タスク

- 521ページ「Network Node Manager でのイベントの設定方法」

Network Node Manager 統合の概要

BSM は、HP Network Node Manager(NNM)からイベントを受け取ることができます。Network Node Manager(NNM)からのイベント・データを転送するには、BSM に転送するイベントごとにスクリプトを実行するように NNM を設定します。次のいずれかのアクションを実行するスクリプトを記述し、NNM と関連付けることができます。

- NNM データをログ・ファイルに書き込む
- SNMPトラップと NNM データを一緒に SiteScope サーバに送信する

スクリプトでデータをログに書き込む場合は、テクノロジー・ログ・ファイル統合 モニタを使用してデータを読み取り、BSM に転送します。SNMPトラップを SiteScope サーバに送信するスクリプトを使用する場合は、SNMPトラップを受信して BSM に転送するように設定したテクノロジー SNMPトラップ統合 モニタを使用します。

Network Node Manager データをエクスポートするスクリプトの作成

使用するスクリプトは、NNM からのデータをコマンド・ライン引数として受け取り、データを BSM に転送できるように処理する必要があります。次の各項では、NNM データのエクスポートに利用可能なスクリプト例について説明します。

ログ・ファイルへの書き込みを行うサンプル・スクリプト

次の Perl スクリプトは、コマンド・ラインからデータを受け取り、ログ・ファイル統合 モニタで解析可能なカンマ区切りベクトル値としてログ・ファイルに書き込みます。

```
#!/usr/bin/perl
open LOG, ">>log1.log" or die;
print LOG (join ',', @ARGV) . "\n";
close LOG;
```

SNMP トラップ・データを送信するサンプル・スクリプト

次の Perl スクリプトは、コマンド・ラインからデータを受け取り、テクノロジー SNMP トラップ統合 モニタでキャッチ可能な SNMP トラップ内のメッセージとして送信します(Network Node Manager で生成された SNMP データを使用)。第 1 パラメータとしてトラップの送信先となるホスト名を、第 2 パラメータとして警告の文字列記述を受け取ります。

```
#!/usr/bin/perl
$host = $ARGV[0];
$message = $ARGV[1];
system("snmptrap $host \"\" 6 0 5 system.sysDescr.0 \" \" .\"octetstringascii $message\");
```

Network Node Manager でのイベントの設定方法

要求されたイベント用のスクリプトを NNM で実行するように NNM 7.x を設定するには、次の手順を実行します。

注: それ以降のバージョンの NNM と NNMi については、NNMi のドキュメントを参照してください。

1. [オプション]メニューから、[イベント設定]を選択します。
2. [イベント設定]ダイアログから要求されたエンタープライズおよびイベントを選択します。
3. [編集]>[イベント]>[イベントの変更]ダイアログ・ボックス>[アクション]タブを選択します。
4. [自動アクションのコマンド]テキスト・ボックスにスクリプトのコマンド・ラインを入力します。NNM 変数を使用してコマンド・ラインにデータを渡すこともできます。
5. [OK]をクリックして[イベントの変更]ダイアログを閉じます。
6. [イベント設定]ダイアログの[ファイル]メニューから[保存]を選択します。

第5部分

リモート・サーバ

第22章

リモート・サーバを使った作業

本章の内容

概念

- 524ページ「リモート・サーバの概要」

タスク

- 525ページ「リモート Microsoft Windows サーバを監視するための SiteScope の設定方法」
- 531ページ「リモート UNIX サーバを監視するための SiteScope の設定方法」

参照情報

- 533ページ「リモート・サーバのユーザ・インタフェース」

550ページ「トラブルシューティングと制限事項」

リモート・サーバの概要

SiteScope では、監視するサーバへの接続を確立する必要があります。また、Microsoft Windows リモート・マシンの Windows パフォーマンス・レジストリにアクセスしたり、リモート・ユーザとして UNIX リモート・マシンでコマンド・ライン・ツールを実行するには、アカウント権限を持つユーザとして認証されている必要があります。

資格情報やプロトコルなどの接続プロパティを設定するには、[Microsoft Windows リモート サーバ]/[UNIX リモート サーバ] オプションを使用します。これにより SiteScope は、リモート環境で実行されているシステムやサービスを監視できるようになります。続いて、そのサーバのリソースとパフォーマンス・カウンタを監視するモニタを作成できます。複数のモニタで同じ接続プロファイルを使用できます。同じホスト・マシンに対して複数のリモート・サーバを作成することもできます。

注: NetBIOS 方式を使用して複数の Windows リモート・サーバを同じホスト・マシンに対して設定すると、接続は失敗します。これは、Windows では、複数のユーザ名を使用した同じユーザによるサーバまたは共有リソースへの複数接続が許可されていないためです(システム・エラー 1219)。

SiteScope によるリモート・サーバのデータ監視の有効化の詳細については、[525 ページ「リモート Microsoft Windows サーバを監視するための SiteScope の設定方法」](#)および [531 ページ「リモート UNIX サーバを監視するための SiteScope の設定方法」](#)を参照してください。

ユーザ・インタフェースでこれらの設定を行う方法の詳細については、[535 ページ「\[新規 Microsoft Windows リモート サーバ\]/\[Microsoft Windows リモート サーバの編集\] ダイアログ・ボックス」](#)および [541 ページ「\[新規 UNIX リモート サーバ\]/\[UNIX リモート サーバの編集\] ダイアログ・ボックス」](#)を参照してください。

リモート・サーバの SiteScope 監視に関するトラブルシューティングと制限事項の詳細については、[550 ページ「トラブルシューティングと制限事項」](#)を参照してください。

注: SiteScope UNIX オペレーティング・システム・アダプタを使用して、SiteScope を拡張し、標準設定ではサポートされていない UNIX のバージョンに接続してリモートで監視できます。詳細については、[590 ページ「UNIX オペレーティング・システム・アダプタ」](#)を参照してください。

リモート Microsoft Windows サーバを監視するための SiteScope の設定方法

このタスクでは、リモート Windows サーバのデータを監視するように SiteScope を設定する手順について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- 525ページ「前提条件 (Windows Server 2008 リモート・サーバ用)」
- 525ページ「SiteScope でリモート Windows サーバのデータを監視できるようにする」
- 526ページ「リモート監視用のユーザ権限を設定する」
- 526ページ「Windows リモート・サーバの設定を行ってテストする」
- 527ページ「結果」

1. 前提条件 (Windows Server 2008 リモート・サーバ用)

SiteScope では、ユーザ・アカウント制御 (UAC) が有効、無効のどちらの場合も、Microsoft Windows Server 2008 のリモート・サーバの監視をサポートします。UAC が有効な場合、UAC のリモート制限を次のように無効にする必要があります。

- a. [スタート] > [ファイル名を指定して実行] をクリックし、「regedit」と入力して ENTER キーを押します。
- b. 次のレジストリ・サブキーを見つけてクリックします。**HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Microsoft\Windows\CurrentVersion\Policies\System**
- c. LocalAccountTokenFilterPolicy レジストリ・エントリが存在しない場合、次の手順を実行します。
 - [編集] メニューで、[新規] > [DWORD 値] を選択します。
 - 「LocalAccountTokenFilterPolicy」と入力し、ENTER キーを押します。
- d. LocalAccountTokenFilterPolicy を右クリックし、[修正] をクリックします。
- e. [値のデータ] ボックスで、「1」と入力し、[OK] をクリックします。
- f. レジストリ・エディタを終了します。

2. SiteScope でリモート Windows サーバのデータを監視できるようにする

SiteScope でリモート Windows サーバのデータを監視するには、次のいずれかの手順を行う必要があります。

- サーバごとに個別のリモート Windows サーバ接続プロファイルを定義します。タスクの詳細については、527ページ「リモート Windows サーバ接続プロファイルの定義方法」を参照してください。
- リモート・サーバへのアクセスを SiteScope に許可するドメイン・アクセス権を設定します。モニタ設定の詳細については、527ページ「SiteScope 監視のドメイン権限の設定方法」を参照してください。

注: SiteScope サービスがドメイン・ユーザとして実行するように設定すると、SiteScope はすべての Windows 関連の認証にこのアカウントを使用します。このアカウントがこのドメイン全体で必要な権限を持っていることを確認する必要があります。

3. リモート監視用のユーザ権限を設定する

SiteScope マシンのオペレーティング・システムに従って、リモート・マシンにアクセスするためのユーザ権限を設定します。モニタ設定の詳細については、528ページ「リモート監視用のユーザ権限の設定方法」を参照してください。

4. Windows リモート・サーバの設定を行ってテストする

- a. リモート・サーバ・ツリーでリモート Windows サーバを設定します。ユーザ・インタフェースの詳細については、535ページ「[新規 Microsoft Windows リモート サーバ]/[Microsoft Windows リモート サーバの編集]ダイアログ・ボックス」を参照してください。


注:

- リモート Windows サーバに SiteScope での SSH 監視を設定する場合、569ページ「リモート Windows サーバでの SSH 監視の設定方法」を参照してください。
- リモート・サーバから管理データを収集する接続方法として、[メイン設定]の[接続方式]フィールドで WMI を選択した場合、WMI サービスがリモート・マシンに設定されている必要があります。タスクの詳細については、529ページ「リモート監視用の WMI サービスの設定方法」を参照してください。
- ローカルホスト・マシン(SiteScope が実行されているマシン)にある監視用の WMI 接続方法のタイプを設定する場合、[資格情報]セクションで[ユーザ名]および[パスワード]は空白のままにする必要があります。
- NetBIOS 接続方式を使用するときリモート監視対象サーバの名前としてリテラルの IPv6 アドレスを指定する場合、IPv6 アドレスを次のようにカスタマイズする必要があります。

1. すべてのコロン(:)文字をダッシュ(-)文字に置き換える。
2. 「.ipv6-literal.net」というテキストを IP アドレスの最後に付加する。

たとえば、IPv6 アドレス: 2004:DB8:2a:1005:230:48ff:fe73:982d
は次のようになります。2004-DB8-2a-1005-230-48ff-fe73-982d.ipv6-literal.net

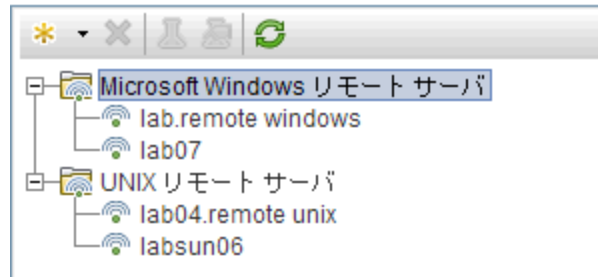
また、WMI 接続方法(サポートされている場合)に切り替えると、IPv6 アドレスを変更する必要がなくなります。

- b. SiteScope 用の Microsoft Windows リモート・サーバの定義を行ったら、該当するサーバの [テスト]  ボタンをクリックして接続をテストします。

注: リモート・カウンタを表示するときに[コンピュータに接続できません]というエラー・メッセージが表示された場合は、Microsoft Knowledge Base (<http://support.microsoft.com/search/>)を参照してください。

5. 結果

リモート・サーバ・ツリーにある Windows リモート・サーバのリストにサーバが追加されます。続いて、そのサーバのリソースとパフォーマンス・カウンタを監視するモニタを作成できます。複数のモニタで同じ接続プロファイルを使用できます。



注: リモート・サーバの SiteScope 監視に関するトラブルシューティングと制限事項の詳細については、550 ページ「トラブルシューティングと制限事項」を参照してください。

リモート Windows サーバ接続プロファイルの定義方法

リモート Windows サーバ・データの監視には、リモート・サーバへの認証されたアクセス権が必要です。Windows サーバ接続プロファイルは、SiteScope がリモート・サーバにログオンし、そのリモート・マシンで Windows パフォーマンス・レジストリにアクセスするために必要なアドレスとログイン資格情報を提供します。

注: このタスクは高度なタスクのうちの 1 つです。詳細については、525 ページ「リモート Microsoft Windows サーバを監視するための SiteScope の設定方法」を参照してください。

Windows サーバ接続プロファイルを使用してリモート・サーバにログオンするには、次のいずれかを行います。

- 管理者権限を持つユーザとしてリモート・サーバにログオンします。
- リモート・サーバに、そのサーバの SiteScope 接続プロファイルで使用している接続方法とログイン権限に対応するユーザ・アカウントを作成または変更します。

SiteScope 監視のドメイン権限の設定方法

SiteScope Windows 用では自動的にサーバのリストが生成され、ローカル・ドメインに表示されます。サーバにはモニタ・タイプを指定する必要があり、これらのサーバは、モニタ・タイプのサーバ・リストに表示されます。SiteScopeWindows で実行しているでは、サーバごとに個別の接続プロファイルを作成しなくても、このリストを使用してリモート Windows サーバを監視できる場合があります。

注: このタスクは高度なタスクのうちの 1 つです。詳細については、525 ページ「リモート Microsoft Windows サーバを監視するための SiteScope の設定方法」を参照してください。

ドメイン権限を設定するには、次のいずれかの方法を使用します。

- **SiteScope サービスを Domain Admin グループのユーザとして実行されるように設定します。**

インストール時の標準設定では、SiteScope はローカル・システム・アカウントとして実行されるように設定されています。SiteScope サービスを、ドメイン管理権限を持つユーザとしてログオンするように設定できます。これにより、SiteScope にドメイン内のサーバ・データを監視するためのアクセス権限が付与されます。SiteScope アカウント・ユーザの変更方法の詳細については、[528ページ「SiteScope サービスのユーザ・アカウントの変更方法」](#)を参照してください。

- **SiteScope が実行されているサーバを、Active Directory の Domain Admin グループに追加します (Windows 2000 以降の場合)。**

このオプションでは、SiteScope サービスは、ローカル・システム・アカウントとしてログオンするように設定されますが、SiteScope が実行されているマシンはドメイン管理権限を持つグループに追加されます。

- **非管理者アクセスを許可するように、ドメイン内のすべてのマシンのレジストリ・アクセス権を編集します。**

このオプションを使用するには、監視する各リモート・マシンでレジストリを変更する必要があります。したがって、ドメインのサーバ・リストにドメインのすべてのマシンが含まれていても、接続プロファイルなしで監視できるのは、レジストリが変更されたリモート・マシンのみです。

SiteScope サービスのユーザ・アカウントの変更方法

このタスクでは、SiteScope サービスのユーザ・アカウントを変更する手順について説明します。

注: このタスクは高度なタスクのうちの 1 つです。詳細については、[527ページ「SiteScope 監視のドメイン権限の設定方法」](#)を参照してください。

SiteScope サービスのユーザ・アカウントを変更するには、次の手順を実行します。

1. **[管理ツール]**で**[サービス]**を開き、サービスのリストから**[SiteScope]**を選択します。**[SiteScope のプロパティ]**ダイアログ・ボックスが開きます。
2. **[ログオン]**タブをクリックし、**[ログオン]**領域で、リモート・サーバにアクセス可能なアカウントを入力します。
3. **[OK]**をクリックして設定を保存し、**[SiteScope のプロパティ]**ダイアログ・ボックスを閉じます。
4. SiteScope を右クリックします。**[停止]**をクリックして、SiteScope のサービスを停止します。
5. **[開始]**をクリックします。これで、SiteScope サービスで新しいアカウントが使用されます。

リモート監視用のユーザ権限の設定方法

SiteScope がリモートの Windows マシンでパフォーマンス測定値を収集するには、リモート・マシンにアクセスする権限が SiteScope に必要です。このタスクでは、SiteScope マシンでユーザ権限を設定する方法を説明します。

注:

- このタスクは高度なタスクのうちの 1 つです。詳細については、[525ページ「リモート Microsoft Windows サーバを監視するための SiteScope の設定方法」](#)を参照してください。

- Microsoft のベスト・プラクティスでは、ユーザではなくグループに権限を与えることを推奨しています。
- レジストリを変更する前にレジストリをバックアップしてください。

Windows XP, 2003, または 2008 マシンでユーザ権限を設定するには、次の手順を実行します。

1. SiteScope マシンで、[スタート] > [ファイル名を指定して実行] を選択します。[名前] テキスト・ボックスに「Regedt32.exe」と入力します。[レジストリエディタ] ダイアログ・ボックスが開きます。
2. [HKEY_LOCAL_MACHINE] ウィンドウで、[SOFTWARE] > [Microsoft] > [Windows NT] > [CurrentVersion] > [Perflib] を選択します。
3. レジストリ・エディタのツールバーで[編集]をクリックし、[アクセス許可]を選択します。[Perflib のアクセス許可] ダイアログ・ボックスが開きます。
4. [名前] 表示枠で、SiteScope がリモート・マシンへのアクセスに使用するユーザを選択します。[アクセス許可] 表示枠で、[読み取り]の[許可]チェック・ボックスを選択します。[OK]をクリックして設定を保存し、[Perflib のアクセス許可] ダイアログ・ボックスを閉じます。
5. [HKEY_LOCAL_MACHINE] ウィンドウで、[SYSTEM] > [CurrentControlSet] > [Control] > [SecurePipeServers] > [winreg] を選択します。レジストリ・エディタのツールバーで[セキュリティ]をクリックし、[アクセス許可]を選択します。[winreg のアクセス許可] ダイアログ・ボックスが開きます。
6. [名前] 表示枠で、SiteScope がリモート・マシンへのアクセスに使用するユーザを選択します。[アクセス許可] 表示枠で、[読み取り]の[許可]チェック・ボックスを選択します。[OK]をクリックして設定を保存し、[winreg のアクセス許可] ダイアログ・ボックスを閉じます。
7. レジストリ・エディタのツールバーで、[レジストリ]をクリックし、[終了]を選択して設定を保存し、終了します。
8. SiteScope マシンを再起動します。

注: 非管理者ユーザがリモート・マシンのパフォーマンス監視を行うことができるようにする手順の詳細については、Microsoft サポート技術情報 (<http://support.microsoft.com/kb/q164018/>) を参照してください。

リモート監視用の WMI サービスの設定方法

このタスクでは、WMI(Windows Management Instrumentation)を使用してリモート Windows サーバのデータを監視するように SiteScope を設定する手順について説明します。WMI を使用すると、パフォーマンス・ライブラリのオブジェクトのシステム・カウンタ・データにアクセスできます。これは、Perfmon ユーティリティに表示されるパフォーマンス・データと同じデータです。

注: このタスクは高度なタスクのうちの 1 つです。詳細については、525 ページ「リモート Microsoft Windows サーバを監視するための SiteScope の設定方法」を参照してください。

このタスクには次の手順が含まれています。

- 530 ページ「前提条件」
- 530 ページ「リモート・サーバに WMI サービスを設定する」
- 530 ページ「SiteScope への WMI プリファレンス設定の設定 (任意指定)」
- 530 ページ「モニタの設定」

1. 前提条件

SiteScope が Windows マシンにインストールされている必要があります。

2. リモート・サーバに WMI サービスを設定する

SiteScope で WMI を使用してリモート・マシンのパフォーマンス測定値を収集する場合、次の要件があります。

- リモート・マシンで WMI サービスが実行されている必要があります。詳細については、『Windows Management Instrumentation』マニュアル([http://msdn.microsoft.com/en-us/library/aa826517\(VS.85\).aspx](http://msdn.microsoft.com/en-us/library/aa826517(VS.85).aspx)) (英語 サイト) を参照してください。
- WMI リモート・サーバにログオンするユーザには、WMI 名前空間 `root\CIMV2` からリモートで統計情報を読み取る権限が必要です。詳細については、<http://support.microsoft.com/kb/295292> を参照してください。

WMI サービスの問題に関するトラブルシューティングの詳細については、550 ページ「トラブルシューティングと制限事項」を参照してください。

3. SiteScope への WMI プリファレンス設定の設定 (任意指定)

[プリファレンス] > [一般プリファレンス] > [WMI プリファレンス] では、ローカル・ホスト・マシンの Windows サーバ・リソースを監視するための接続タイプと WMI タイムアウト値を設定できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、644 ページ「WMI プリファレンス」を参照してください。

4. モニタの設定

WMI をサポートするモニタを追加し、モニタ設定を行います。WMI プロトコルをサポートするモニタのリストについては、356 ページ「Windows Management Instrumentation (WMI) をサポートしているモニタ」を参照してください。

注: ローカルホスト・マシン (SiteScope が実行されているマシン) にある Windows サーバのリソースを監視するための WMI 接続方法のタイプを設定する場合、[資格情報] セクションで [ユーザ名] および [パスワード] は空白のままにする必要があります。

リモート UNIX サーバを監視するための SiteScope の設定方法

このタスクでは、リモート UNIX サーバのデータを監視するように SiteScope を設定する手順について説明します。



このタスクには次の手順が含まれています。

- 531ページ「SiteScope でリモート UNIX サーバのデータを監視できるようにする」
- 531ページ「UNIX リモート・サーバの設定を行ってテストする」
- 531ページ「結果」

1. SiteScope でリモート UNIX サーバのデータを監視できるようにする

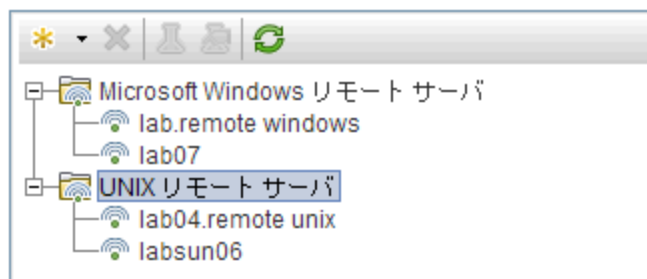
SiteScope でリモート UNIX サーバのデータを監視するには、サーバごとに個別のリモート UNIX サーバ接続プロファイルを定義します。タスクの詳細については、532ページ「リモート UNIX サーバ接続プロファイルの定義方法」を参照してください。

2. UNIX リモート・サーバの設定を行ってテストする

- a. リモート・サーバ・ツリーでリモート UNIX サーバを設定します。ユーザ・インターフェースの詳細については、541ページ「[新規 UNIX リモート サーバ]/[UNIX リモート サーバの編集]ダイアログ・ボックス」を参照してください。
- b. 該当するサーバの設定をテストします。
 - サーバへの接続をテストするには、[テスト]  ボタンをクリックします。
 - リモート・ホストで実行されているコマンドをテストし、定義したユーザの権限をチェックするには、[詳細テスト]  ボタンをクリックします。

3. 結果

リモート・サーバ・ツリーにある UNIX リモート・サーバのリストにサーバが追加されます。続いて、そのサーバのリソースとパフォーマンス・カウンタを監視するモニタを作成できます。複数のモニタで同じ接続プロファイルを使用できます。



注: リモート・サーバの SiteScope 監視に関するトラブルシューティングと制限事項の詳細については、550ページ「トラブルシューティングと制限事項」を参照してください。

リモート UNIX サーバ接続プロファイルの定義方法

リモート UNIX サーバデータの監視には、リモート・サーバへの認証されたアクセス権が必要です。UNIX サーバ接続プロファイルは、SiteScope がリモート・サーバにログインするために必要なアドレスとログイン資格情報を提供します。

注: このタスクは高度なタスクのうちの 1 つです。詳細については、[531 ページ「リモート UNIX サーバを監視するための SiteScope の設定方法」](#)を参照してください。

UNIX サーバ接続プロファイルを使用してリモート・サーバにログインするには、次のいずれかを行います。

- 管理者権限を持つユーザとしてリモート・サーバにログインします。
- リモート・サーバに、そのサーバの SiteScope 接続プロファイルで使用している接続方法とログイン権限に対応するユーザ・アカウントを作成または変更します。

リモート・サーバのユーザ・インタフェース

本項の内容








- 533ページ「リモート・サーバのプロパティ・ページ」
- 535ページ「[新規 Microsoft Windows リモート サーバ]/[Microsoft Windows リモート サーバの編集]ダイアログ・ボックス」
- 541ページ「[新規 UNIX リモート サーバ]/[UNIX リモート サーバの編集]ダイアログ・ボックス」

リモート・サーバのプロパティ・ページ

このページには、ネットワーク環境に設定されたリモート・サーバに関する情報が表示されます。このページを使用して、リモート・サーバのプロファイルを追加、編集、削除できます。

アクセス方法	[リモート サーバ]コンテキストを選択する。リモート・サーバ・ツリーで、[Microsoft Windows リモート サーバ]または[UNIX リモート サーバ]コンテナをクリックします。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none">• SiteScope の管理者または「リモート・サーバを追加、編集、または削除します。」権限が付与されたユーザのみが、[リモート サーバ]ページを表示、編集できます。ユーザ権限の詳細については、773ページ「ユーザ管理プリファレンスの概要」を参照してください。• サーバがモニタから参照されている場合は、リモート・サーバのリストからそのサーバを削除できません。そのリモート・サーバを参照する各モニタの[モニタ設定]パネルにある[サーバ]ボックスで別のサーバを選択すると、リモート・サーバ・リストからそのリモート・サーバを削除できます。• 同じホスト・マシンに複数のリモート・サーバを作成できます。
関連タスク	<ul style="list-style-type: none">• 525ページ「リモート Microsoft Windows サーバを監視するための SiteScope の設定方法」• 531ページ「リモート UNIX サーバを監視するための SiteScope の設定方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none">• 524ページ「リモート・サーバの概要」• 87ページ「リモート・サーバ・ツリー」• 550ページ「トラブルシューティングと制限事項」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
	新規 Microsoft Windows リモート・サーバ / 新規 Unix リモート・サーバ : リモート・サーバを設定してツリーに追加できる[新規 Microsoft Windows リモート サーバ]/[新規 Unix リモート サーバ]ダイアログ・ボックスを開きます。詳細については、535ページ「[新規 Microsoft Windows リモート サーバ]/[Microsoft Windows リモート サーバの編集]ダイアログ・ボックス」または541ページ「[新規 UNIX リモート サーバ]/[UNIX リモート サーバの編集]ダイアログ・ボックス」を参照してください。
	リモート・サーバの編集 : 選択したリモート・サーバのプロパティを編集できます。
	リモート・サーバの削除 : 選択したサーバをツリーから削除します。
	テスト : 1 つ以上のサーバとの接続をテストします。 <ul style="list-style-type: none"> 単一のリモート・サーバとの接続をテストする場合、テスト結果はポップアップ・ウィンドウに表示されます。 複数のリモート・サーバとの接続をテストする場合は、SiteScope を引き続き使用できるように、テストはバックグラウンドで実行されます。テスト結果は、[サーバ統計]>[ログファイル]>[その他のログ]の <code>remotes_multi_test.log</code> に表示されます。
	詳細テスト : UNIX リモート・サーバの実行コマンドの結果を表示するテストを実行します。このテストにより、定義済みユーザの権限を確認できます。
	すべて選択 : すべてのリストされたリモート・サーバを選択します。
	選択を解除 : 選択をクリアします。
<リモート・サーバ・リスト>	SiteScope で設定されたリモート・サーバのリストを表示します。リモート・サーバをダブルクリックすると、選択したリモート・サーバ・タイプの[リモート サーバの編集]ページが開きます。詳細については、535ページ「[新規 Microsoft Windows リモート サーバ]/[Microsoft Windows リモート サーバの編集]ダイアログ・ボックス」または541ページ「[新規 UNIX リモート サーバ]/[UNIX リモート サーバの編集]ダイアログ・ボックス」を参照してください。
名前	SiteScope で認識されるリモート・サーバの名前。
サーバ	監視対象のリモート・サーバの IP アドレスまたは名前。同じホスト名のリモート・サーバを 2 つ作成できます。
状態	リモート・サーバの接続状態。SiteScope がリモート・サーバに接続できない場合、接続失敗の理由が表示されます。
最新のテスト	リモート・サーバ接続が最後にテストされた日時。
オペレーティング・システム	リモート・サーバで実行されているオペレーティング・システム。

UI 要素	詳細
メソッド	サーバ・リソース(NetBIOS, WMI, SSH for Windows, Rlogin, Telnet, SSH for UNIX)を監視する接続タイプ。
詳細	リモート・サーバの作成時または編集時に割り当てられたリモート・サーバの詳細。
関連モニタ	各リモート・サーバで使用されるモニタ数。各リモート・サーバで使用されるモニタ数によってテーブルを並べ替えて、未使用のリモート・サーバを削除できます(関連モニタが 0 のリモート・サーバがその後削除可能になります)。

[新規 Microsoft Windows リモート サーバ]/[Microsoft Windows リモート サーバの編集]ダイアログ・ボックス

SiteScope では、各サーバにエージェント・ソフトウェアをインストールしなくても、リモート Windows サーバで実行しているシステムとサービスの多数の統計をモニタできます。これには、CPU、ディスク領域、メモリ、Windows 固有のパフォーマンス・カウンタ・データなどのサーバ・リソースの監視が含まれます。モニタの構成時に表示するサーバを選択すると、SiteScope によって、リスト内のサーバ・アドレスごとに新しいリモート接続プロファイルが作成されます。

アクセス方法	<p>[リモート サーバ]コンテキストを選択する。</p> <ul style="list-style-type: none"> Microsoft Windows リモート・サーバを追加するには、[Microsoft Windows リモート サーバ]コンテナを右クリックして、[新規 Microsoft Windows リモート サーバ]を選択します。 既存の Microsoft Windows リモート・サーバを編集するには、[Microsoft Windows リモート サーバ]コンテナを展開して、編集するリモート・サーバを選択します。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> SiteScope の管理者または「リモート・サーバを追加、編集、または削除します。」権限が付与されたユーザのみが、[リモート サーバ]ページを表示、編集できます。ユーザ権限の詳細については、773ページ「ユーザ管理プリファレンスの概要」を参照してください。 サーバがモニタから参照されている場合は、リモート・サーバのリストからそのサーバを削除できません。そのリモート・サーバを参照する各モニタの[モニタ設定]パネルにある[サーバ]ボックスで別のサーバを選択すると、リモート・サーバ・リストからそのリモート・サーバを削除できます。 リモート・サーバのパスワードは、空白(スペース)と以下の特殊文字をサポートしています。\" & > < ^ テンプレート・モードで Microsoft Windows リモート・サーバを設定する場合、メソッド値は、下記の通り、大文字と小文字を一致させて入力しなければなりません。さもないと検証は適切に動作しません。NetBIOS, WMI, または ssh
関連タスク	525ページ「リモート Microsoft Windows サーバを監視するための SiteScope の設定方法」

関連情報	<ul style="list-style-type: none"> 524 ページ「リモート・サーバの概要」 87 ページ「リモート・サーバ・ツリー」 533 ページ「リモート・サーバのプロパティ・ページ」 550 ページ「トラブルシューティングと制限事項」
------	--

含まれている要素は次のとおりです。

UI 要素	詳細
保存	<p>リモート・サーバの設定が正しいかどうかを確認せずに、設定を保存します。</p> <p>ヒント: [保存 & テスト] の代わりに [保存] を使用すると、パフォーマンスが速くなります。SiteScope は設定を検証するためにリモート・サーバへの接続を確立する必要がないためです。</p>
保存 & テスト	<p>設定を保存して、リモート・サーバの設定が正しいかどうかを検証します。SiteScope がリモート・サーバへの接続に失敗した場合、または設定に無効なプロパティがある場合、エラー・メッセージが表示されます。</p> <p>ヒント: [保存] の代わりに [保存 & テスト] を使用すると、パフォーマンスが遅くなります。SiteScope は設定を検証するためにリモート・サーバへの接続を確立する必要があります。</p>


一般設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
名前	<p>SiteScope で認識されるリモート・マシンの名前。この名前は、接続プロファイルを使用できるモニタの[サーバ]リストに表示されます。</p> <p>テンプレート・モードで作業する場合の注意事項を次に示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> このリモート・サーバを必要とする各テンプレート・モニタに対して、テンプレート・モニタの[サーバ]ボックスにこの同じ値を入力する必要があります。 名前が一意でない場合はデプロイメントが失敗します。
詳細	<p>リモート Window サーバの詳細。このテキストは、リモートのプロパティを編集する場合にのみ表示されます。</p>

メイン設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
サーバ	<p>監視対象サーバの実 IP アドレスまたは UNC 名。ネットワーク・アドレス変換 (NAT) は、リモート・ホスト定義を必要とする SiteScope モニタではサポートされていません。IP アドレスまたはホストを使ってモニタを設定する場合、SiteScope は、外部 IP (実際の IP) または内部 IP (NAT) のどちらが使用されているかを判別できません。NAT 環境でサーバを監視するには、ファイアウォール内に SiteScope を配置することをお勧めします。URL モニタ、またはその他の同様のモニタなど、ホスト固有の情報を収集しないモニタでは、バーチャル IP を使用できます。</p> <p>SiteScope サーバでホスト・ファイル、DNS、または WINS/DNS 統合を使用してこの一般名を IP アドレスに変換できる場合は、IP ホスト名も使用できます。</p> <p>同じホスト・マシンに複数のリモート・サーバを作成できます。たとえば、NetBIOS プロトコルを使用する 1 つのリモート・サーバと、WMI を使用する同じホスト・マシンの別のリモート・サーバを作成し、[一般設定] で一意の名前を指定できます。</p> <p>同時に複数のサーバを設定するときに同じログイン資格情報を使用するには、サーバ名またはアドレスをカンマ(,)、セミコロン(;), または空白で区切って入力します。例: \\server1, \\server2, \\。</p> <p>注: プロファイルを追加した後、接続をテストするには、Windows リモート・サーバのリストで [テスト]  ボタンをクリックします。</p> <p>テンプレート・モードで作業する場合の注意事項を次に示します。 リモート・サーバ名を表すテンプレート変数名、たとえば、%%host%%。これにより、テンプレートのデプロイ時に変数に必要な情報の入力を求められたときに各サーバを入力できます。変数にサーバ名を入力するたびに、そのサーバのモニタ・インスタンスが作成され、リモート・サーバ・ツリーにサーバが追加されます。ホスト名がその時点でサーバ名と一致しない場合、モニタは失敗します。</p> <p>モニタ・テンプレートをデプロイするリモート・サーバが [リモート サーバ] にすでに存在する場合、モニタ・テンプレート内でそのサーバを参照できます。そのためには、SiteScope にアクセス可能なサーバを識別するシステム変数 \$\$SERVER_LIST\$\$ を参照します。詳細については、833 ページ「変数の構文」 を参照してください。</p>

UI 要素	詳細
資格情報	<p>リモート Windows サーバのユーザ名とパスワードを指定するオプションを次に示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ユーザ名およびパスワードを使用 : 手動でユーザの資格情報を入力する場合に、このオプションを選択します。 <ul style="list-style-type: none"> ユーザ名 : リモート・サーバのユーザ名を入力するか、ユーザ・ログイン名を表すテンプレート変数(%%user%% など)を使用します。 注 : サーバが SiteScope マシンと同じドメイン内にある場合、ユーザ・ログイン名の前にドメイン名を追加します。例 : <ドメイン> \<ユーザ名> ドメイン内またはドメイン外のマシンにローカル・マシンのログイン・アカウントを使用する場合、ユーザ・ログイン名の前にそのマシン名を追加します。例 : <マシン名> \<ユーザ名> パスワード : リモート・サーバのパスワードまたは SSH 鍵ファイルのパスフレーズを入力するか、パスワードを表すテンプレート変数(%%password%% など)を使用します。公開鍵/秘密鍵ベースの認証の SSH 認証を使用する場合、ID ファイルのパスフレーズをここに入力します。 事前定義された資格情報を選択 : サーバの事前に定義されたユーザ名とパスワードを SiteScope で自動的に指定する場合は、このオプションを選択します(標準設定)。[資格情報プロファイル] ドロップダウン・リストから使用する資格情報プロファイルを選択するか、[資格情報の追加] をクリックして新規資格情報プロファイルを作成します。このタスクの実行方法の詳細については、623 ページ「資格情報のプリファレンスの設定方法」を参照してください。
トレース	<p>従属サーバへのメッセージと従属サーバからのメッセージを追跡して、SiteScope の RunMonitor.log ファイルに記録します。</p> <p>標準設定値 : 選択されていない</p>

UI 要素	詳細
メソッド	<p>Windows サーバ・リソースを監視する接続タイプを次に示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> NetBIOS : Microsoft Windows ネットワークの標準設定のサーバ間通信プロトコル。 <p>注 : NetBIOS 接続が使用され、[トレース]オプションが選択されている場合は、Windows プラットフォーム上の SiteScope を、リモート・サーバからパフォーマンス・カウンタ・データにアクセスするために必要な管理セキュリティ権限を持つアカウントで実行する必要があります。監視する複数のサーバが異なるドメインに存在する場合、異なるポリシーで管理されている場合、または SiteScope の実行に使用しているアカウントとは異なる固有のログインを必要とする場合は、リモート・サーバ・ビューの[Microsoft Windows リモート サーバ]オプションでこれらのサーバへの接続を定義する必要があります。</p> SSH : セキュア・シェル。Microsoft Windows ネットワークにインストールできる、よりセキュアな通信プロトコル。通常、エージェントレスな Windows SSH を使用していない場合、この接続方法では接続先の各サーバに SSH ライブラリをインストールする必要があります。Windows SSH(エージェントレスまたは SiteScope リモート Windows SSH ファイルを使用)をサポートするモニタのリストについては、579ページ「(エージェントレスまたは SiteScope リモート Windows SSH ファイルを使用した)Windows SSH をサポートするモニタ」を参照してください。SSH の要件の詳細については、562ページ「セキュア・シェル(SSH)を使用した SiteScope 監視」を参照してください。 WMI : Windows Management Instrumentation。NetBIOS よりセキュアな通信プロトコルで、パフォーマンス・データの収集に perfmon を使用する Windows サーバ・モニタをサポートします。WMI をサポートするモニタのリストについては、356ページ「Windows Management Instrumentation(WMI)をサポートしているモニタ」を参照してください。WMI サービスをリモート監視用に設定する方法の詳細については、529ページ「リモート監視用の WMI サービスの設定方法」を参照してください。 <p>注 :</p> <ul style="list-style-type: none"> WMI 接続方法で設定されたリモート・サーバは、WMI をサポートしないモニタの設定時には、利用可能なリモート・サーバのリストに表示されません。 ローカルホスト・マシン(SiteScope が実行されているマシン)にある Windows サーバのリソースを監視するための WMI 接続方法のタイプを設定する場合、[資格情報]セクションで[ユーザ名]および[パスワード]は空白のままにする必要があります。
リモート・サーバのエンコーディング	<p>リモート・サーバのオペレーティング・システムのバージョンで、SiteScope が稼動するサーバと異なる文字エンコードが使用される場合、リモート・サーバのエンコード。このエンコードによって、エンコードされた内容を SiteScope で適切に表示できます。</p> <p>標準設定値 : Cp1252 エンコーディング</p>

詳細設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
SSH ポート番号	リモート SSH サーバで監視するポート。 標準設定値: 22
最大接続数	SiteScope でこのリモートに許可されている開いた接続数。この接続を使用するように設定されたモニタが多数ある場合、開いた接続数を、潜在的なボトルネックを避けるのに十分な数に設定します。 標準設定値: 3 注: この設定はリモート・サーバの実行テストには適用されません。テストでは常に新しい接続を作成します。
SSH 認証方式	SSH 接続に使用する認証方法を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> パスワード: パスワードを使用して認証します(標準設定)。 鍵ファイル: 公開鍵/秘密鍵認証を使用して認証します。このオプションを選択すると、SiteScope では認証にファイル < SiteScope のルート・ディレクトリ > \groups\identity の秘密鍵を使用します。対応する公開鍵がリモート・ホストの authorized_keys ファイルに含まれている必要があります。 SSH の要件の詳細については、562 ページ「セキュア・シェル(SSH)を使用した SiteScope 監視」を参照してください。
接続キャッシュの無効化	このリモートの接続キャッシュを無効にします。標準設定では、SiteScope キャッシュで接続が開かれます。 標準設定値: 選択されていない
SSH 接続の鍵ファイル	この接続の秘密鍵を含むファイルのパスと名前。標準設定の鍵ファイルは、< SiteScope のルート・ディレクトリ > \groups\identity です。この設定は、認証方法が鍵ファイルの場合にのみ適用されます。
SSH バージョン 2 のみを使用	SiteScope で強制的に SSH プロトコルのバージョン 2 のみを使用します。 標準設定値: 選択されていない
SSH Keep Alive メカニズム	SSH バージョン 2 のセッションに Keep Alive メカニズムを使用します。このオプションは、統合 Java クライアントを使用する場合にのみ適用されます。 標準設定値: 選択されていない
SiteScope リモート Windows SSH ファイルを使用する SSH	プリインストールされた SiteScope Windows SSH ファイルを使用します。SiteScope SSH ファイルを使用して Windows SSH をサポートするモニタのリストについては、579 ページ「(エージェントレスまたは SiteScope リモート Windows SSH ファイルを使用した)Windows SSH をサポートするモニタ」を参照してください。 標準設定値: 選択されている

タグの検索 / フィルタ

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します(ラベルのない要素は山括弧内に表示されます)。

UI 要素	詳細
<タグ名と値>	<p>SiteScope オブジェクト(グループ、モニタ、リモート・サーバ、テンプレート、プリファレンス・プロファイル)を検索およびフィルタするために、キーワード・タグが使用される。SiteScope にタグが作成されていない場合、このセクションは空白で表示されます。タグが作成されている場合はここに表示され、必要に応じてタグを選択できます。</p> <p>概念の詳細については、106 ページ「SiteScope オブジェクトの検索」を参照してください。</p>
タグの追加	<p>[新規タグ]ダイアログ・ボックスを開き、新しいキーワード・タグを追加できる。ユーザ・インタフェースの詳細については、111 ページ「[新規タグ]/[タグの編集]ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p>

[新規 UNIX リモート サーバ]/[UNIX リモート サーバの編集]ダイアログ・ボックス

SiteScope では、各リモート UNIX サーバにエージェント・ソフトウェアをインストールしなくても、各サーバで実行されているシステムとサービスを監視して特定の統計情報(CPU、ディスク領域、メモリ、プロセスなど)を取得できます。UNIX モニタの構成時に表示するサーバを選択すると、SiteScope によって、リスト内のサーバ・アドレスごとに新しいリモート接続プロファイルが作成されます。

アクセス方法	<p>[リモート サーバ]コンテキストを選択する。</p> <ul style="list-style-type: none"> UNIX リモート・サーバを追加するには、[UNIX リモート サーバ]コンテナを右クリックして、[新規 UNIX リモート サーバ]を選択します。 既存の UNIX リモート・サーバを編集するには、[UNIX リモート サーバ]コンテナを展開して、編集するリモート・サーバを選択します。
--------	---

重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> SiteScope の管理 者または「リモート・サーバを追加、編集、または削除します。」権限 が付 与されたユーザのみが、[リモート サーバ] ページを表示、編集 できます。ユーザ権 限の詳細については、773 ページ「ユーザ管理 プリファレンスの概要」を参照して ください。 リモート・サーバがほかのモニタから参照 されている場合、リモート・サーバのリストから そのサーバを削除 できません。そのリモート・サーバを参照 する各 モニタの[モニタ設定] パネルにある[サーバ] ボックスで別のサーバを選択 すると、リモート・サーバリスト からそのリモート・サーバを削除 できます。 HTTP は、リモート・サーバへの接続 方法としてサポートされなくなりました。 リモート・サーバのパスワードは、空白 (スペース) と以下 の特殊文字をサポートして います。 \ " & > < ^ テンプレート・モードでリモート・サーバを設定 する場合、メソッド と オペレーティング・システム 値は、下 記の通り、大文字と小文字を一致させて入力しなければなり ません。さもないと検証 は適切に動作 しません。 <ul style="list-style-type: none"> メソッド : telnet, http, rlogin, または ssh オペレーティング・システム : AIX, CentOSLinux, FreeBSD, HP, HP-UX, HP64, Linux, MacOSX, OPENSERVER, RHESLinux, SCO, SGI, Sun, -SunOS, Tru64, Tru64_4.x, UbuntuLinux。
関連タスク	531 ページ「 リモート UNIX サーバを監視するための SiteScope の設定方法 」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> 524 ページ「リモート・サーバの概要」 87 ページ「リモート・サーバ・ツリー」 533 ページ「リモート・サーバのプロパティ・ページ」 550 ページ「トラブルシューティングと制限事項」

含まれている要素は次のとおりです。

UI 要素	詳細
保存	リモート・サーバの設定 が正しいかどうかを確認 せずに、設定を保存 します。 ヒント : [保存 & テスト] の代わりに [保存] を使用 すると、パフォーマンスが速く なります。SiteScope は設定を検証 するためにリモート・サーバへの接続を確 立する必要がないためです。
保存 & テスト	設定を保存して、リモート・サーバの設定 が正しいかどうかを検証 します。SiteScope がリモート・サーバへの接続に失敗 した場合、または設定に無効なプロパティがある場合、エラー・メッセージが表示 されます。 ヒント : [保存] の代わりに [保存 & テスト] を使用 すると、パフォーマンスが遅く なります。SiteScope は設定を検証 するためにリモート・サーバへの接続を確 立する必要があるためです。

一般設定



ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
名前	SiteScope で認識されるリモート・マシンの名前。この名前は、接続プロファイルを使用できるモニタの[サーバ]リストに表示されます。
詳細	リモート UNIX サーバの説明。このテキストは、リモートのプロパティを編集する場合にのみ表示されます。

メイン設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
メイン設定	

UI 要素	詳細
サーバ	<p>監視対象サーバの実 IP アドレスまたはホスト名。ネットワーク・アドレス変換 (NAT) は、リモート・ホスト定義を必要とする SiteScope モニタではサポートされていません。IP アドレスまたはホストを使ってモニタを設定する場合、SiteScope は、外部 IP (実際の IP) または内部 IP (NAT) のどちらが使用されているかを判別できません。NAT 環境でサーバを監視するには、ファイアウォール内に SiteScope を配置することをお勧めします。URL モニタ、またはその他の同様のモニタなど、ホスト固有の情報を収集しないモニタでは、バーチャル IP を使用できます。</p> <p>同時に複数のサーバを設定するときに同じログイン資格情報を使用するには、サーバ名またはアドレスをカンマ(,)、セミコロン(;), または空白で区切って入力します。</p> <p>例: ほかのサーバへの接続に NetBIOS を使用している場合、 「serveraddress1, serveraddress2, serveraddress3」のようにサーバ・アドレスをカンマで区切った文字列を入力します。</p> <p>フォームへのほかの必要な入力が完了すると、SiteScope によって、リスト内のサーバ・アドレスごとに新しいリモート接続プロファイルが作成されます。</p> <p>注: 注: ホストを追加した後に接続をテストするには、UNIX サーバのリストが表示されているテーブルで[テスト]  ボタンをクリックします。この場合、テストされるのはサーバへの接続のみです。リモート・ホストでのコマンドの実行結果を表示するテストを実行するには、[詳細テスト]  ボタンをクリックします。このテストにより、定義済みユーザの権限を確認できます。</p> <p>テンプレート・モードで作業する場合の注意事項を次に示します。 リモート・サーバ名を表すテンプレート変数名、たとえば、%%host%% を入力します。変数にサーバ名を入力するたびに、そのサーバのモニタ・インスタンスが作成され、リモート・サーバ・ツリーにサーバが追加されます。</p> <p>モニタ・テンプレートをデプロイするリモート・サーバが[リモート サーバ]にすでに存在する場合、モニタ・テンプレート内でそのサーバを参照できます。そのためには、SiteScope にアクセス可能なサーバを識別するシステム変数 \$\$SERVER_LIST\$\$ を参照します。詳細については、833 ページ「変数の構文」を参照してください。</p>

UI 要素	詳細
資格情報	<p>リモート UNIX サーバのユーザ名とパスワードを指定するオプションを次に示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • ユーザ名およびパスワードを使用 : 手動でユーザの資格情報を入力する場合に、このオプションを選択します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ ユーザ名 : リモート・サーバのユーザ名を入力するか、ユーザ・ログイン名を表すテンプレート変数(%%user%% など)を使用します。 ■ パスワード : リモート・サーバのパスワードまたは SSH 鍵ファイルのパスフレーズを入力するか、パスワードを表すテンプレート変数(%%password%% など)を使用します。公開鍵/秘密鍵ベースの認証の SSH 認証を使用する場合、ID ファイルのパスフレーズをここに入力します。 • 事前定義された資格情報を選択 : サーバの事前に定義されたユーザ名とパスワードを SiteScope で自動的に指定する場合は、このオプションを選択します(標準設定)。[資格情報プロファイル] ドロップダウン・リストから使用する資格情報プロファイルを選択するか、[資格情報の追加] をクリックして新規資格情報プロファイルを作成します。このタスクの実行方法の詳細については、623 ページ「資格情報のプリファレンスの設定方法」を参照してください。
トレース	<p>リモート・サーバとの間でやり取りされるメッセージを追跡して、RunMonitor.log ファイルに記録します。</p> <p>標準設定値 : 選択されていない</p>
オペレーティング・システム	<p>リモート・サーバで実行されているオペレーティング・システム。これは、リモート・サーバから正しい情報を取得するために必要な情報です。リストからオペレーティング・システムを選択します。</p> <p>UNIX リモート・サーバを設定する場合、次のオペレーティング・システムがサポートされます。AIX, CentOS, FreeBSD, HP-UX, HP/UX, HP/UX 64 ビット, Linux, MacOSX, NonStopOS, OPENSERVEN, Red Hat Enterprise Linux, SCO, SGI Irix, Solaris Zones, Sun Solaris, SunOS, Tru64 5.x, Tru64 4.x 以前(Digital), Ubuntu。リストに含まれていないバージョンの UNIX を実行しているサーバについては、590 ページ「UNIX オペレーティング・システム・アダプタ」を参照してください。</p>

UI 要素	詳細
メソッド	<p>UNIX サーバ・リソースを監視するための接続タイプを次に示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • Rlogin : Rlogin プロトコルを使用して、リモート・サーバにログインします。rlogin にパスワードを要求するように、またはパスワードなしでアクセスできるように(rsh と同様)、リモート・サーバを設定できます。SiteScope ではどちらもサポートされています。 • SSH : セキュリティが強化された通信プロトコルであるセキュア・シェルを使用してリモート・サーバにログインします。UNIX のバージョンによっては、ソフトウェアとセットアップが追加で必要になることがあります。 <p>Solaris の場合、SSH アクセス方法を使用するには、SiteScope マシンに SSH クライアントがインストールされ、監視するサーバに SSH サーバがインストールされている必要があります。SiteScope が実行されるマシンの SSH クライアントへのパスは、<code>/usr/local/bin/ssh</code> または <code>/usr/bin/ssh</code> である必要があります。SSH の要件の詳細については、562 ページ「セキュア・シェル(SSH)を使用した SiteScope 監視」を参照してください。</p> <p>SSH を使用するには、デジタル証明書が接続先の各サーバにインストールされている必要があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • Telnet : Telnet を使用してリモート・サーバにログインします。Telnet は、リモート UNIX サーバへの接続に広く使用される方法です。Telnet でパスワードを要求するように、またはパスワードなしでアクセスできるように(rsh と同様)、リモート・サーバを設定できます。SiteScope ではどちらも処理されます。
プロンプト	リモート・システムがコマンドを処理できるときのプロンプト出力です。
ログイン・プロンプト	システムがログインの入力を待っているときのプロンプト出力。
パスワード・プロンプト	システムがパスワードの入力を待っているときのプロンプト出力。
二次プロンプト	<p>リモート・サーバへ Telnet 接続されたために、リモート・サーバが接続に関する詳細情報を要求する場合の二次プロンプト。複数のプロンプト文字列はカンマ(,)で区切ります。</p> <p>例 : リモート・サーバによっては、Telnet 接続でリモート・サーバから接続でエミュレートするターミナル・タイプの入力を要求される場合があります。この場合、二次プロンプトとして「Terminal type?」と入力します。二次プロンプトへの応答は、後述の[二次応答]ボックスに入力します。</p>
二次応答を隠す	<p>二次応答をアスタリスクの背面に隠します。その後、このチェック・ボックスをクリアすると、隠されたデータは削除されます。</p> <p>標準設定値 : 選択されていない</p>
二次応答	該当リモート・サーバとの接続を確立するために必要な二次プロンプトへの応答。複数の応答はカンマ(,)で区切ります。

UI 要素	詳細
シェル環境の初期化	<p>セッションの初めに実行するシェル・コマンド。複数のコマンドはセミコロン(;)で区切ります。このオプションでは、Telnet または SSH セッションを初期化した直後に、リモート・マシンで実行するシェル・コマンドを指定します。これらのコマンドは、SiteScope リモートごとのシェルのカスタマイズに使用できます。例として次のような場合があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> リモート・シェルには、SiteScope スクリプトを実行するための正確なパスが設定されていない場合があります。コマンド <code>export PATH=\$PATH:/usr/local/bin</code> を指定すると、リモート・マシンの現在のシェルの PATH にディレクトリ <code>/usr/local/bin</code> が追加されます。 リモート・シェルでは、疑似ターミナルが正しく初期化されない場合があります。以下のコマンドを入力すると、ターミナル幅が 1024 文字に増えます。<code>stty cols 1024;\${SHELL}</code> <p>注：シェル呼び出し後のコマンドは実行されません。</p> <ul style="list-style-type: none"> リモート Telnet サーバがコマンド・ラインを正確にエコー・バックしない場合があります。これにより、コマンド・ラインのエコーに依存するモニタが正常に動作しなくなる可能性があります。以下のコマンドを入力すると、リモート・ターミナルが強制的にエコーされます。<code>stty echo</code> 特定の UNIX シェルは、SiteScope と併用すると動作が不規則になることが判明しています。これには、bash, ksh, csh が含まれます。以下のコマンドを入力すると、SiteScope 接続のシェルが sh に変更されます。<code>/bin/sh</code>
リモート・サーバのエンコーディング	<p>リモート・サーバで実行されているオペレーティング・システムのバージョンが、SiteScope が稼働するサーバとは異なる文字エンコーディングを使用する場合、リモート・サーバのエンコーディングを設定します。このエンコードによって、エンコードされた内容を SiteScope で適切に表示できます。</p> <p>標準設定値： Cp1252 エンコーディング</p>
HP NonStop シェル設定	
シェル選択プロンプト	<p>(NonStopOS のみ)システムがシェルの選択を待っているときのプロンプト出力。</p> <p>標準設定値： ></p>
シェル名	<p>(NonStopOS のみ)実行するシェル名。</p> <p>標準設定値： OSS</p>

詳細設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
SSH ポート 番号	リモート SSH サーバで監視するポート。 標準設定値 : 22
最大 接続 数	SiteScope でこのリモートに許可されている開いた接続数。この接続を使用するように設定されたモニタが多数ある場合、開いた接続数を、潜在的なボトルネックを避けるのに十分な数に設定します。 標準設定値 : 3 注 : この設定はリモート・サーバの実行テストには適用されません。テストでは常に新しい接続を作成します。
SSH 認証 方式	SSH 接続に使用される認証方法を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> • パスワード : パスワードを使用して認証します(標準設定)。 • 鍵ファイル : 公開鍵/秘密鍵認証を使用して認証します。このオプションを選択すると、SiteScope では認証にファイル < SiteScope のルート・ディレクトリ > \groups\identity の秘密鍵を使用します。対応する公開鍵がリモート・ホストの authorized_keys ファイルに含まれている必要があります。SSH の要件の詳細については、562 ページ「セキュア・シェル(SSH)を使用した SiteScope 監視」を参照してください。
接続 キャッ シュ の無 効化	このリモートの接続 キャッシュを無効にします。標準設定では、SiteScope キャッシュで接続が開かれます。 標準設定値 : 選択されていない
SSH 接続 の鍵 ファイル	この接続の秘密鍵を含むファイルのパスと名前。標準設定の鍵ファイルは、< SiteScope のルート・ディレクトリ > \groups\identity です。この設定は、認証方法が鍵ファイルの場合にのみ適用されます。
SSH バージョン 2 の みを使用	SiteScope で強制的に SSH プロトコルのバージョン 2 のみを使用します。 標準設定値 : 選択されていない
SSH Keep Alive メカニ ズム	SSH バージョン 2 のセッションに Keep Alive メカニズムを使用します。このオプションは、統合 Java クライアントを使用する場合にのみ適用されます。 標準設定値 : 選択されていない

タグの検索/フィルタ

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します(ラベルのない要素は山括弧内に表示されます)。

UI 要素	説明
<タグ名と値>	SiteScope オブジェクト(グループ、モニタ、リモート・サーバ、テンプレート、プリファレンス・プロファイル)を検索およびフィルタするために、キーワード・タグが使用される。にタグが作成されていない場合、このセクションは空白で表示されます。タグが作成されている場合はここに表示され、必要に応じてタグを選択できます。SiteScope 概念の詳細については、 106ページ「SiteScope オブジェクトの検索」 を参照してください。
タグの追加	[新規タグ]ダイアログ・ボックスを開き、新しいキーワード・タグを追加できる。ユーザ・インタフェースの詳細については、 111ページ「[新規タグ]/[タグの編集]ダイアログ・ボックス」 を参照してください。

トラブルシューティングと制限事項

本項では、リモート・サーバを使った作業でのトラブルシューティングと制限事項について説明します。

- 550ページ「リモート Windows サーバの SiteScope 監視」
- 551ページ「Windows サーバ監視で推奨されるネットワーク設定」
- 551ページ「Windows リモート・サーバのテスト時のエラー・コードについて」
- 551ページ「リモート Windows サーバでの Microsoft Windows イベント・ログ・アクセス」
- 552ページ「SiteScope は Perfex を使用したリモート Windows 接続の不正な資格情報を使用します。」
- 552ページ「SiteScope がリモート・レジストリにアクセスしようとしたときに返されたデータの表示」
- 554ページ「WMI のトラブルシューティングと制限事項」
- 555ページ「リモート UNIX サーバが英語ロケールに設定されていない」
- 555ページ「NETBIOS を介して接続するリモート・ホストのシステム・リソース表示時に使用するシステム・エンコーディング」

リモート Windows サーバの SiteScope 監視

リモート Windows サーバの SiteScope 監視のセットアップとトラブルシューティングに関して、次の追加情報があります。

- PERFMON を使用してリモート・マシンに接続する場合。PERFMON を使用して接続できない場合、リモート・サーバ上の SiteScope アカウントに付与されているユーザ・アクセス権に関して問題がある可能性があります。SiteScope でサーバ統計を監視できるようにするには、特定の管理権限が必要です。
- セキュリティ上の理由から、SiteScope に管理者アカウントの全権限の使用が許可されない場合があります。SiteScope に制限付きの監視アクセス権を付与するには、Windows の特定のレジストリ・キーを編集します。リモート・マシンからレジストリへのアクセスの制限の詳細については、Microsoft Knowledge Base(<http://support.microsoft.com/kb/q153183/>)を参照してください。
- スタンドアロン・サーバ、または SiteScope サーバで表示可能になっているドメイン以外のサーバを監視する必要がある場合、[ログイン]ボックスにマシン名、スラッシュ(/)、ログイン名の順番で入力してください。例: loneserver\sitescope。
- NetBIOS 接続方式で Microsoft Windows Vista または Microsoft Windows 2008 リモート・サーバに接続できない場合は、代わりに WMI 接続を使用できます。

注:

- Windows オペレーティング・システムでのパフォーマンス・データのセキュリティ確保の詳細については、Microsoft Knowledge Base(<http://support.microsoft.com/kb/q146906/>)を参照してください。
- パフォーマンス・モニタ・カウンタに関する問題のトラブルシューティングの詳細については、Microsoft Knowledge Base(<http://support.microsoft.com/kb/152513/>)を参照してください。

Windows サーバ監視で推奨されるネットワーク設定

Windows ベースのサーバを監視する際、「システムエラー: 53 - ネットワークパスが見つかりません。」のようなネットワーク関連エラーを避けるために、WINS が有効ではないネットワークでは NetBIOS over TCP/IP を無効にすることをお勧めします。

1. [ネットワーク接続]を開きます。
2. 設定するネットワーク接続を右クリックし、[プロパティ]をクリックします。
3. [一般]タブで、[インターネット プロトコル (TCP/IP)]をクリックし、[プロパティ]をクリックします。
4. [詳細設定]をクリックし、[WINS]タブをクリックして、[NetBios over TCP/IP を無効にする]オプションを選択します。

Windows リモート・サーバのテスト時のエラー・コードについて

問題:

リモート・サーバのテスト結果で、わかりやすいエラー・コードが状態文字列に含まれていない。

解決方法:

Windows ネットワーク・メッセージを説明し、問題解決情報を提供するには、`net helpmsg` コマンドを使用します。

次のコマンド・ラインを実行します。

```
net helpmsg <エラー・コード番号>
```

たとえば、「`net helpmsg 53`」と入力すると「ネットワークパスが見つかりません。」と表示されます。

リモート Windows サーバでの Microsoft Windows イベント・ログ・アクセス

問題:

リモート Windows イベント・ログの表示時、またはリモート Windows マシンの監視に関する通知の受信時に、次のメッセージが表示される。

イベント ID (XXXX) (ソース XXXX 内) に関する説明が見つかりませんでした。次の文字列が含まれています。

処理が正常に完了しました。

原因:

必要なレジストリ・キー(および参照ファイル)がリモート・コンピュータに存在しない場合、SiteScope はデータに形式を設定できず、データを汎用的な形式で表示します。

解決方法:

必要なレジストリ・エントリと DLL ファイルを、イベント・ビューア・アプリケーションを実行するリモート・コンピュータにコピーする必要があります。

リモート・レジストリ・エントリと DLL ファイルをローカル SiteScope マシンで取得するには、次の手順を実行します。

1. SiteScope でイベントを正しく取得できないリモート・マシンのエントリを、イベント・ビューアで見つけます。ソース、イベント ID、記述の情報を書き留めます。例:

ソース :MSExchangeSA, イベント ID :5008, 説明 :メッセージ追跡ログ・ファイル
C:\exchsrvr\tracking.log\20020723.log を削除しました。

2. レジストリ設定 **HKEY_LOCAL_MACHINE\System\CurrentControlSet\Services\EventLog\Application** を開き、ソースをクリックします(例: MExchangeSA など)。
3. **EventMessageFile** をクリックして、その DLL が存在するデータを書き留めます (C:\EXCHSRVR\bin\madmsg.dll など)。
4. リモートで DLL を見つけて、SiteScope マシンにコピーします。次のいずれかの方法でコピーできます。
 - BackOffice リソース・キット 第 2 版の **Initlog.exe** ユーティリティを使用して、必要なレジストリ・エントリを Exchange Server コンピュータからリモート・コンピュータにコピーします。Exchange Server コンピュータの管理者権限を持つアカウントで Windows にログオンしている場合、このユーティリティを使用して必要な DLL ファイルをコピーすることもできます(Microsoft の記事 Q184719 を参照してください)。
 - FTP、電子メールなどを使用してファイルをローカル・ドライブにコピーします。
5. SiteScope は、ステップ 3 の **EventMessageFile** フィールドのデータを使用して、ローカル・マシンのどこに DLL があるかを判別します。このステップと同じフォルダ構造を作成して、ファイルをそのディレクトリに置く必要があります。

または、ディレクトリ構造を c:\Windows\System32 のように変更し(SiteScope は標準設定ではリモート・マシン上の ADMIN\$ を参照します)、DLL をそのフォルダに置きます。ただし、この構造と DLL は両方のマシンに存在する必要があります。これを行う場合、ステップ 3 でレジストリを更新して、DLL が存在するディレクトリを反映する必要があります。

SiteScope は Perfex を使用したリモート Windows 接続の不正な資格情報を使用します。

問題:

SiteScope は特定のリモートに指定された資格情報を無視して、SiteScope サービスを開始するために使用される資格情報を使用して、perfex ベースのモニタ(CPU、メモリ、および Windows モニタなど)に対してモニタリング・コマンドおよびアクションを実行しようとします。

解決方法:

perfex ベースのモニタがリモート・サーバで正しく動作するには、**_perfexOptions=optionalSetupConnection** プロパティを <SiteScope ルート・ディレクトリ>\groups フォルダの **master.config** ファイルに追加する必要があります。

SiteScope がリモート・レジストリにアクセスしようとしたときに返されたデータの表示

SiteScope がリモート・レジストリにアクセスしようとしたときに返されたデータを表示するには、次の手順に従います。

1. SiteScope サーバでコマンド・ウィンドウを開きます。
2. ディレクトリを <SiteScope のルート・ディレクトリ>\tools に変更します。
3. コマンド・ラインから次のように入力します。

```
perfex \\MACHINE -u username -p password -d -elast "Application"
```

このコマンドでは、Application ログ内のエントリ数を返します。例:

```
DEBUG: perfex debugging on

-----
MODE: elast
LOGNAME: Application
START RECORD: 0
MACHINE: ¥¥g11nvm46
OLDEST RECORD=1
NUMBER OF RECORDS=1847
Next Record: 1848
```

4. 探しているイベントを見つけるには、最後の 10 個か 12 個程度のイベントだけを表示する必要があります。この例では、コマンドは次のようになります。

```
perfex \\MACHINE -u username -p password -d -elog "Application"
2355 | more
```

5. 必要なエントリが見つかるまで各エントリを確認します。次回ステップ 3 のコマンドを使用するときには検索しやすく、レコード ID を書き留めておきます。
6. この出力には、SiteScope が受信するデータが表示されています。今回の例では、通常は次のようなデータが返されます。

```
Type:情報
Time:02:00:24 08/01/102
Source:MSEExchangeMTA
ID:298
Category:1
Record:2342
Machine:EX-SRV
FILE=C:\EXCHSRVR\res\mtamsg.dll
REMOTE FILE=
String 835050d is:MTA
Next String 835054d is:OPERATOR
Next String 83505dd is:34
Next String 835060d is:0
Next String 835062d is:
File:C:\EXCHSRVR\res\mtamsg.dll
Remote Path:
calling FormatMessage()
Formatted Message 142 bytes long
Raw message is:The most current routing information has been
loaded by the MTA, and a text copy was saved in the
fileGWART0.MTA.[MTA OPERATOR 34 0] (12) Message:The most current
routing information has been loaded by the MTA, and a text copy
was saved in the file GWART0.MTA.[MTA OPERATOR 34 0] (12)
```

ファイル・パスはリモート・ファイルが検出された場所です。DLL を WINDOWS\SYSTEM にコピーした場合、ファイルとリモート・ファイル・パスは次のようになります。

```
Type:情報
Time:03:15:00 08/01/102
Source:MSExchangeIS Public
ID:1221
Category:6
Record:2350
Machine:EX-SRV
FILE=C:\WINNT\SYSTEM32\mdbmsg.dll
REMOTE FILE=\\ex-srv\ADMIN$\SYSTEM32\mdbmsg.dll
String 835054d is:0
Next String 835056d is:
File:C:\WINNT\SYSTEM32\mdbmsg.dll
Remote Path:\\ex-srv\ADMIN$\SYSTEM32\mdbmsg.dll
LOADING LIB REMOTE:\\ex-srv\ADMIN$\SYSTEM32\mdbmsg.dllcalling
FormatMessage()Formatted Message 89 bytes long
Raw message is:The database has 0 megabytes of free spaceafter
online defragmentation has terminated.Message:The database has 0
megabytes of free space afteronline defragmentation has
terminated.
```

WMI のトラブルシューティングと制限事項

WMI の制限事項

- WMI 使用時に 4000 を超えるモニタを使用することはお勧めしません。
- カウンタまたはオブジェクトがリソース間で共有されていると、SiteScope はカウンタのデータを受信できず、クエリは失敗します。同じクエリでほかのカウンタが参照されている場合、それらのカウンタのデータも受信できません。詳細とトラブルシューティング情報については、<http://support.microsoft.com/kb/836802> を参照してください。

WMI がカウンタを取得できない

場合によっては、perfmon ではカウンタが値 0 を示しているのに WMI では同じカウンタが n/a を示すことがあります。perfmon ユーティリティを使用して選択できないカウンタは、このように動作します。perfex がこれらのカウンタの値を取得できるのは、perfmon をバイパスしてレジストリ経由でカウンタにアクセスしているためです。

WMI データが同期されない

WMI データは、Perfmon ユーティリティと同期されている必要があります。WMI データが同期されていない場合、次の操作を行う必要があります。

1. WMI サービスが対象マシンで開始していることを確認します。詳細については、[http://msdn.microsoft.com/en-us/library/aa826517\(VS.85\).aspx](http://msdn.microsoft.com/en-us/library/aa826517(VS.85).aspx) を参照してください。
2. 名前空間 **root\CIMV2** が、SiteScope WMI リモート・サーバで指定したユーザにリモート・アクセスできるように設定されていることを確認します。詳細については、<http://support.microsoft.com/kb/295292> を参照してください。
3. 対象マシンで、コマンド **perfmon** を実行し、必要な perfmon オブジェクトが表示されることを確認します。詳細については、[http://msdn.microsoft.com/en-us/library/aa645516\(VS.71\).aspx](http://msdn.microsoft.com/en-us/library/aa645516(VS.71).aspx) を参照してください。

これらのライブラリを再構築する方法の詳細については、<http://support.microsoft.com/?kbid=300956> を参照してください。

4. 対象マシンで、コマンド **perfmon /wmi** を実行し、必要な perfmon オブジェクトが表示されることを確認します。詳細については、[http://msdn.microsoft.com/en-us/library/aa645516\(VS.71\).aspx](http://msdn.microsoft.com/en-us/library/aa645516(VS.71).aspx) を参照してください。

必要な perfmon オブジェクトが表示されない場合、コマンド **perfmon wmiadap /f** を実行します。詳細については、[http://msdn.microsoft.com/en-us/library/aa394528\(VS.85\).aspx](http://msdn.microsoft.com/en-us/library/aa394528(VS.85).aspx) を参照してください。

リモート UNIX サーバが英語ロケールに設定されていない

問題:

標準設定で英語ロケールまたは英語言語に設定されていない UNIX リモート・サーバを使用すると、ファイル・モニタとディレクトリ・モニタで問題が発生する可能性があります。

解決方法:

「`"LANG=C; export LANG"`」を、問題が発生している UNIX リモート・サーバの[シェル環境の初期化]プロパティに追加します。

NETBIOS を介して接続するリモート・ホストのシステム・リソース表示時に使用するシステム・エンコーディング

この制限は、受信したデータの表示にリモート・ホストのエンコーディングを使用するすべてのサーバ・モニタに影響します。

SiteScope は、NETBIOS を介して接続するリモート・ホストのシステム・リソース情報を表示する際に、標準設定のシステム・エンコーディングを使用します。[リモート サーバのエンコード]フィールド(リモート・サーバの[536ページ「メイン設定」](#)で指定可能)は使用されません。たとえば、システム・エンコーディングが ASCII でリモートのエンコーディングが Unicode の場合、ASCII 文字は正しく表示され、Unicode 記号はサポートされません。

第23章

SiteScope での IP バージョン 6 のサポート

本章の内容

概念

- 557ページ「IP バージョン 6 のサポート」

タスク

- 559ページ「SiteScope での IP バージョン 6 アドレスの優先の有効化方法」

参照情報

- 560ページ「IP バージョン 6 アドレスがサポートされているモニタ」

IP バージョン 6 のサポート

インターネット・プロトコル・バージョン 6 (IPv6) は、インターネットのネットワーク・レイヤの、インターネット・プロトコルの新しいバージョンです。IPv6 は、アドレスの枯渇、セキュリティ、自動構成、拡張性など、現在の IP バージョン (IPv4) が持つ問題の多くを解決するために設計されています。

IPv6 のサポートのレベルは、SiteScope がインストールされているオペレーティング・システムによって異なります。Windows Server 2008 では、IPv6 の全機能がサポートされ、標準設定でインストールおよび有効化されます。その結果、SiteScope が Windows Server 2008 以降にインストールされると、ほとんどの SiteScope モニタで IPv6 がサポートされます。Windows Server 2003 での IPv6 のサポートは限られており、多くのコア・サービスおよびネットワーク・コンポーネントではサポートされていません。また、SiteScope が IPv6 の完全サポートを提供する UNIX オペレーティング・システムにインストールされると、IPv6 が完全にサポートされます。

SiteScope では、標準設定で IPv4 アドレスを使用してリモート・サーバに接続します。ホスト名が IPv6 に解決されるように環境を設定するには、SiteScope の [インフラストラクチャプリファレンス] で [IP バージョン 6 アドレスを優先] オプションを選択できます。このオプションが選択されている場合、IPv6 が IPv4 より優先されるには、次の条件を満たす必要があります。

- リモート・サーバにホスト名が指定されている。IP アドレスが指定されている場合、使用される IP バージョンは IP アドレスによって判断されるため、IPv6 の優先設定はホストには何の効果もありません。
- ホスト名が IPv4 アドレスと IPv6 アドレスの両方に解決される。ホスト名が IPv4 アドレスのみに解決される場合は、IPv4 アドレスが使用されます。

注:

- ホスト名が指定されていて、ホスト名が IPv4 アドレスと IPv6 アドレスの両方に解決されるが、モニタで IPv6 がサポートされていない場合、モニタは機能しません。この問題の解決方法の詳細については、[558 ページ「IPv4 と IPv6 の混合環境での作業」](#) を参照してください。IPv6 をサポートするモニタのリストについては、[560 ページ「IP バージョン 6 アドレスがサポートされているモニタ」](#) を参照してください。
- NetBIOS 接続方式を使用するときにリモート監視対象サーバの名前としてリテラルの IPv6 アドレスを指定する場合、IPv6 アドレスを次のようにカスタマイズする必要があります。

1. すべてのコロン (':') 文字をダッシュ ('-') 文字に置き換える。
2. 「.ipv6-literal.net」というテキストを IP アドレスの最後に付加する。

たとえば、IPv6 アドレス: 2004:DB8:2a:1005:230:48ff:fe73:982d
は次のようになります。2004-DB8-2a-1005-230-48ff-fe73-982d.ipv6-literal.net

また、WMI 接続方法 (サポートされている場合) に切り替えると、IPv6 アドレスを変更する必要がなくなります。

本項の内容

- 558ページ「IPv4 と IPv6 の混合環境での作業」
- 558ページ「サポートされているプロトコル」

IPv4 と IPv6 の混合環境での作業

IPv4 と IPv6 の両方が使用される混合環境で作業する場合、DNS サーバから IPv4 アドレスと IPv6 アドレスの両方がホスト名に返されることがあります。解決される各ホスト名に使用する IP アドレスを SiteScope で指定するには、次の手順を実行します。

- **[IP バージョン 6 アドレスを優先]** オプションを選択し、次のいずれかを実行します (IPv4 プロトコルを使用するホストの場合)。
 - 指定したリモート・サーバのホスト名の代わりに IP アドレスを入力します。
 - リモート・サーバで使用する IP アドレスにホスト名が解決されるように DNS サーバを設定します。これを行うには、指定したホストの DNS サーバから IPv6 アドレスを削除します。
- IPv6 アドレスを優先しないように BSM Connector を設定し (これが標準設定)、次のいずれかを実行します (IPv6 プロトコルを使用するホストの場合)。
 - 指定したリモート・サーバのホスト名の代わりに IP アドレスを入力します。
 - 指定したリモート・サーバで使用する IP アドレスにホスト名が解決されるように DNS サーバを設定します。これを行うには、指定したホストの DNS サーバから IPv4 アドレスを削除します。

SiteScope での IPv6 アドレス指定の有効化の詳細については、559ページ「SiteScope での IP バージョン 6 アドレスの優先の有効化方法」を参照してください。

サポートされているプロトコル

Windows および UNIX プラットフォームにインストールされた SiteScope で IPv6 を使用するときサポートされるプロトコルは、次のとおりです。

ターゲット	Windows プラットフォームにインストールされた SiteScope	UNIX プラットフォームにインストールされた SiteScope
Windows	NetBios WMI	SSH
UNIX	サポートされていません	SSH

注:

- SiteScope Windows プラットフォームにインストールされたでは、Windows マシンのみを監視できます。
- NetBIOS と WMI は SiteScope が Windows プラットフォームにのみインストールされている場合にサポートされます。
- SSH は SiteScope が UNIX マシンにインストールされている場合のみサポートされます。UNIX 上で SSH を使用して実行される SiteScope でサポートされる、Windows ベースのモニタのリストについては、579ページ「(エージェントレスまたは SiteScope リモート Windows SSH ファイルを使用した) Windows SSH をサポートするモニタ」を参照してください。

SiteScope での IP バージョン 6 アドレスの優先の有効化方法

このタスクでは、リモート・サーバに接続するときに IPv4 アドレスより IPv6 アドレスが優先されるように SiteScope を設定する方法について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- [559ページ「SiteScope での IPv6 アドレスの優先の有効化」](#)
- [559ページ「リモート監視対象サーバの名前として IPv6 アドレスをカスタマイズ\(特定のモニタのみ\)」](#)

1. SiteScope での IPv6 アドレスの優先の有効化

[プリファレンス]>[インフラストラクチャプリファレンス]>[サーバ設定]で、[IP バージョン 6 アドレスを優先]を選択します。

ユーザ・インタフェースの詳細については、[676ページ「サーバ設定」](#)を参照してください。

注:

- この設定の変更を有効にするには、SiteScope を再起動する必要があります。
- ホスト名が指定されていて、ホスト名が IPv4 アドレスと IPv6 アドレスの両方に解決されるが、モニタで IPv6 がサポートされていない場合、モニタは機能しません。この問題の解決方法の詳細については、[558ページ「IPv4 と IPv6 の混合環境での作業」](#)を参照してください。

2. リモート監視対象サーバの名前として IPv6 アドレスをカスタマイズ(特定のモニタのみ)

IPv6 アドレス指定を使用する場合、一部のモニタには追加のカスタマイズ要件(制限)があります。

追加の IPv6 アドレス・カスタマイズが必要なモニタについては、[560ページ「IP バージョン 6 アドレスがサポートされているモニタ」](#)を参照してください。

IP バージョン 6 アドレスがサポートされているモニタ

次に、IPv6 がサポートされているモニタを示します。チェック・マークは、そのモニタが SiteScope で IPv6 アドレスを別にカスタマイズする必要があることを示します。

IPv6 アドレスをサポートするモニタ	別の設定が必要
Cisco Works Monitor	
Citrix Monitor	✓
ColdFusion Server Monitor	✓
CPU Monitor	✓
Custom Database Monitor	
Database Counter Monitor	
Database Query Monitor	
DB2 8.x and 9.x Monitor	
Disk Space Monitor (Deprecated)	
Dynamic Disk Space Monitor	
F5 Big-IP Monitor	
HAProxy Monitor	✓
Log File Monitor	✓
Memcached Statistics Monitor	
Memory Monitor	✓
Microsoft ASP Server Monitor	✓
Microsoft Hyper-V Monitor	
Microsoft IIS Server Monitor	✓
Microsoft Lync Server 2010 Monitors (Microsoft 音声ビデオ会議 サーバ、Microsoft アーカイブ・サーバ、Microsoft Director サーバ、Microsoft エッジ・サーバ、Microsoft フロント・エンド・サーバ、Microsoft 仲介 サーバ、Microsoft 監視および CDR サーバ、Microsoft Registrar サーバ)	✓

IPv6 アドレスをサポートするモニタ	別の設定が必要
Microsoft SQL Server Monitor	✓
Microsoft Windows Event Log Monitor	✓
Microsoft Windows Media Server Monitor	✓
Microsoft Windows Resources Monitor (Deprecated)	✓
Microsoft Windows Services State Monitor	✓
Network Bandwidth Monitor	
Oracle Database Monitor	
Ping Monitor	
Port Monitor	
Real Media Server Monitor	✓
Service Monitor	✓
SNMP Monitor	
SNMP by MIB Monitor	
SNMP Trap Monitor	
Technology SNMP Trap Integration Monitor	
UNIX Resources Monitor	
URL Monitor	✓
URL Content Monitor	✓
URL List Monitor	✓
URL Sequence Monitor	✓
Web Service Monitor	✓

第24章

セキュア・シェル(SSH)を使用した SiteScope 監視

本章の内容

概念

- 563ページ「SiteScope および SSH の概要」
- 566ページ「SSH を使用したリモート Windows サーバの監視」

タスク

- 568ページ「リモート UNIX サーバでの SSH 監視の設定方法」
- 569ページ「リモート Windows サーバでの SSH 監視の設定方法」

参照情報

- 578ページ「UNIX リモート・サーバの SSH 設定要件」
- 579ページ「(エージェントレスまたは SiteScope リモート Windows SSH ファイルを使用した) Windows SSH をサポートするモニタ」

581ページ「トラブルシューティングおよび制限事項」

SiteScope および SSH の概要

SiteScope では多数のセキュリティ機能をサポートしています。その 1 つに、セキュア・シェル(SSH)接続を使用したリモート・サーバ監視のサポートがあります。SSH を使用してサーバに接続し、自動的にコマンドを送信できます。これにより、サーバでそのコマンドを実行してからサーバを切断できます。これは自動化された処理とスクリプトの作成に役立ちます。

セキュア・ソケット・シェルとも呼ばれるセキュア・シェル(SSH)は、UNIX ベースのコマンド・インタフェースで、リモート・コンピュータに安全にアクセスするためのプロトコルです。SSH は、Web やその他のサービスをリモート制御するためにネットワーク管理者によって広く使用されています。SSH コマンドは暗号化されており、いくつかの点でセキュアです。クライアント/サーバ接続の両端ではデジタル証明書を使用して認証され、パスワードは暗号化によって保護されています。セキュア・シェル・クライアント・マシンによって、リモート・マシンの SSH デモンまたはサーバが要求されます。

SSH を使用した SiteScope での監視には、次の基本要件があります。

1. SSH を使用した SiteScope で監視するサーバに、SSH デモン(またはサーバ)がインストールされてアクティブになっている。
2. Java SSH クライアントを統合した SiteScope。SiteScope には、Java と SiteScope アプリケーション・コード専用の言語で記述された SSH クライアントが含まれています。

注: MindTerm は、SSH 接続に使用できる唯一の接続クライアントです。

本項の内容

- [563ページ「SSH 接続オプション」](#)
- [565ページ「ガイドライン」](#)

SSH 接続オプション

次の表に、現在 SiteScope でサポートされている SSH 接続オプションの概要を示します。SSH 接続の設定と管理の詳細については、[563ページ「SiteScope および SSH の概要」](#)を参照してください。

Windows プラットフォームにインストールされた SiteScope の場合:

ターゲット	SiteScope クライアント・オプション	関連する 接続先 サーバ	コメント
Windows	Java SSH クライアントを統合した SiteScope	SSH サー バ(Cygwin OpenSSH)	<ul style="list-style-type: none"> エージェントレス SSH。RemoteNTSSH パッケージは、エージェントレス SSH をサポートするモニタには不要です。エージェントレス SSH をサポートするモニタのリストについては、579ページ「(エージェントレスまたは SiteScope リモート Windows SSH ファイルを使用した)Windows SSH をサポートするモニタ」を参照してください。 SiteScope リモート Windows SSH ファイルを使用する SSH。リモート・サーバのホーム・ユーザ・ディレクトリに RemoteNTSSH パッケージがインストールされている必要があります。詳細については、576ページ「SiteScope リモート Windows SSH ファイルのインストール」を参照してください。
UNIX/ Linux	Java SSH クライアントを統合した SiteScope	SSH ホス ト・デーモン (独自開 発または OpenSSH の sshd)	

UNIX または Linux プラットフォームにインストールされた SiteScope の場合 :

ターゲット	SiteScope クライアン ト・オプション	関連する 接続先 サーバ	コメント
Windows	<ul style="list-style-type: none"> Java SSH クライ アントを統合した SiteScope SSH クライアント (/usr/local/bin/ssh または usr/bin/ssh) 	SSH サー バ(Cygwin OpenSSH)	<ul style="list-style-type: none"> エージェントレス SSH。RemoteNTSSH パッ ケージは、 エージェントレス SSH をサポートす るモニタには不要です。 エージェントレス SSH をサポートするモニタのリストについては、 579 ページ「(エージェントレスまたは SiteScope リ モート Windows SSH ファイルを使用した) Windows SSH をサポートするモニタ」を参照 してください。 SiteScope リモート Windows SSH ファイルを 使用する SSH。リモート・サーバのホーム・ ユーザ・ディレクトリに RemoteNTSSH パッ ケージがインストールされている必要がありま す。詳細については、 576ページ「SiteScope リモート Windows SSH ファイルのインストー ル」を参照してください。

ターゲット	SiteScope クライアント・オプション	関連する 接続先 サーバ	コメント
UNIX/ Linux	<ul style="list-style-type: none"> Java SSH クライアントを統合した SiteScope SSH クライアント (/usr/local/bin/ssh または usr/bin/ssh) 	SSH ホスト・デーモン (独自開発または OpenSSH の sshd)	

ガイドライン

- SSH プロトコルには、バージョン 1 とバージョン 2 の 2 つの異なるバージョンがあります。バージョン 1 とバージョン 2 は異なるプロトコルで、互換性はありません。そのため、SSH クライアントと SSH ホストで同じプロトコル・バージョンを使用するように設定して通信できるようにする必要があります。多くの場合、SSH バージョン 1 (SSH1) が標準設定です。SSH バージョン 1 にはいくつかのセキュリティの脆弱性が発見されています。また、SSH1 プロトコルの開発は終了しており、SSH2 が現在の標準とみなされています。

ヒント: すべての SSH 接続に SSH バージョン 2 (SSH2) を使用することをお勧めします。

- インストールした SSH ユーティリティとライブラリのリリース・バージョン番号は、使用する SSH プロトコルのバージョンとは異なります。たとえば、OpenSSH リリース 3.5 は SSH1 と SSH2 プロトコルの両方をサポートしています。リリース・バージョン 3.5 のライブラリでは SSH バージョン 3.5 のプロトコルを使用するということではありません。OpenSSH ソフトウェアは SSH1 か SSH2 のいずれかを使用するように設定する必要があります。
- SSH 接続を使用して SiteScope リモート監視を設定した後に、その設定を変更するか、環境内のリモート・サーバにデプロイした SSH デーモンまたはサーバ・ソフトウェアにアップグレードした場合、SiteScope が稼動しているマシンと監視されているリモート・サーバ間の SSH 接続を再設定することが必要になる可能性があります。

SSH を使用したリモート Windows サーバの監視

SiteScope が Windows 間の接続と Windows ネットワークでの監視に使用する標準設定のリモート接続方法は、NetBIOS です。これにより接続が容易になる一方で、いくつかの不利な点もあります。その 1 つは、NetBIOS はネットワーク・セキュリティにおいて比較的脆弱な点です。もう 1 つは、リモート実行スクリプトをサポートしていない点です。リモート・サーバでの実行コマンドは、リモート・サーバの UNC 構文を使用して記述された、リモート・マシンへのコマンドでローカルに実行されるスクリプトを必要とします。その場合でも、NetBIOS ではリモート・サーバから一部のパラメータを返しません。

注: SiteScope では Windows Management Instrumentation(WMI)プロトコルもサポートしています。このプロトコルは、Windows サーバで稼動しているリモート・サーバからデータを収集する場合に NetBIOS よりもセキュアな通信プロトコルです。リモート・マシンで WMI サービスを設定する方法の詳細については、[529 ページ「リモート監視用の WMI サービスの設定方法」](#)を参照してください。

SiteScope では、SSH を使用したリモート Windows サーバの監視をサポートしています。このテクノロジーは、リモート・サーバに SSH サーバとしてインストールされた Cygwin(<http://www.cygwin.com/>(英語サイト))で入手可能からの OpenSSH バイナリでテストされています。また、F-Secure から利用可能なサーバでもテストされています。SourceForge(<http://sshhwindows.sourceforge.net/>(英語サイト))で入手可能で利用可能な OpenSSH for Windows(以前の Network Simplicity の「OpenSSH on Windows」)も使用できます。

2 つのパッケージの比較概要を次に示します。

OpenSSH パッケージ	利点	不利な点
Cygwin OpenSSH	1. Windows マシンで Windows または UNIX 形式のスクリプトにアクセス可能。 2. UNIX 形式のシステム・ツールとユーティリティにアクセス可能。 3. SiteScope から Windows リモートまたは UNIX リモート、あるいはその両方としてリモート・サーバにアクセス可能。	複雑なセットアップ手順。
OpenSSH for Windows	単純なセットアップ手順。	Windows コマンド、スクリプト、ユーティリティにのみアクセス可能。

注:

- OpenSSH for Windows と Cygwin SSH の実装は互換性がありません。この 2 つは同じマシンにインストールしないでください。
- 複数のバージョンの Cygwin ユーティリティまたは複数の SSH サーバが 1 台のマシンにインストールされている場合、SSH 接続の動作を妨げる競合が発生する可能性があります。このような競合の 1 つに、「エントリ・ポイントが見つかりません」のようなエラー・メッセージがあります。このエラーの可能性を確認するには、マシンで **cygwin1.dll** の複数のコピーを検索しま

す。この問題を解決するには、ユーティリティのすべてのバージョンを削除して、1 つのバージョンのみ再インストールすることが必要な場合があります。

リモート Windows サーバを SSH 監視用に設定する方法の詳細については、[569 ページ「リモート Windows サーバでの SSH 監視の設定方法」](#)を参照してください。

リモート UNIX サーバでの SSH 監視の設定方法

Solaris または Linux の SiteScope では、SSH を使用したリモート監視をサポートしています。このタスクでは、リモート UNIX サーバでの SiteScope を使用した SSH 監視の設定に関する手順を説明します。

注: UNIX 環境で監視するリモート・サーバの SSH ホストの設定は非常に複雑で、このドキュメントではそのすべては説明されていません。OpenSSH デモンのインストールに関する推奨リソースとして、<http://www.sunfreeware.com/openssh.html>(英語サイト)(Solaris の場合)と http://docs.redhat.com/docs/en-US/Red_Hat_Network_Satellite/5.4/html/Reference_Guide/sect-Reference_Guide-Monitoring-RHN_Monitoring_Daemon_rhnmd.html#sect-Reference_Guide-RHN_Monitoring_Daemon_rhnmd-Configuring_SSH(英語サイト)(Redhat Linux の場合)があります。

このタスクには次の手順が含まれています。

- 568ページ「前提条件」
- 568ページ「リモート・サーバに接続する SSH クライアントの設定」
- 568ページ「SSH 接続方法を使用するための UNIX リモートの設定」

1. 前提条件

UNIX 環境で SiteScope を使用して SSH 監視をリモート UNIX サーバで設定する場合の要件の詳細は、578ページ「UNIX リモート・サーバの SSH 設定要件」を参照してください。

2. リモート・サーバに接続する SSH クライアントの設定

リモート・サーバで SSH サーバまたはデーモンを設定したら、リモート・サーバへの接続に SiteScope で使用する統合 Java SSH クライアントを設定する必要があります。

タスクの詳細については、586ページ「統合された Java SSH クライアントの設定方法」を参照してください。

3. SSH 接続方法を使用するための UNIX リモートの設定

SSH 接続を確認したら、SSH を接続方法として使用するために、SiteScope で UNIX リモート設定を作成または設定します。

ユーザ・インタフェースの詳細については、541ページ「[新規 UNIX リモート サーバ]/[UNIX リモート サーバの編集]ダイアログ・ボックス」を参照してください。

リモート Windows サーバでの SSH 監視の設定方法

このタスクでは、リモート Windows サーバでの SiteScope を使用した SSH 監視の設定に関する手順を説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- 569ページ「SSH サーバのインストールと設定」
- 569ページ「プリインストール SiteScope SSH ファイルを使用した Windows SSH 監視の有効化(任意指定)」
- 569ページ「リモート・サーバに接続する SSH クライアントの設定」
- 570ページ「SSH 接続方法を使用するための Windows リモートの設定」

1. SSH サーバのインストールと設定

SiteScope を接続する各リモート・サーバで SSH サーバをインストールして設定します。SSH 機能を可能にする、一般に入手可能な 2 つのソフトウェア・パッケージがあります。

- <http://www.cygwin.com/>(英語 サイト)から入手可能な Cygwin 環境。タスクの詳細については、570ページ「Windows での Cygwin OpenSSH のインストール」を参照してください。
- OpenSSH for Windows で入手可能な Windows 用の OpenSSH。タスクの詳細については、575ページ「OpenSSH for Windows のインストール」を参照してください。

注: これらのセットアップは、SSH デモンまたはサーバを実行する各サーバで実行する必要があります。

2. プリインストール SiteScope SSH ファイルを使用した Windows SSH 監視の有効化(任意指定)

使用しているモニタに応じて、リモート・サーバの監視にプリインストールされた SiteScope SSH ファイルまたはエージェントレス Windows SSH を使用できます(サポートされているモニタのリストについては、579ページ「(エージェントレスまたは SiteScope リモート Windows SSH ファイルを使用した)Windows SSH をサポートするモニタ」を参照してください)。

- **プリインストール SiteScope リモート Windows SSH ファイルの使用:** プリインストール SSH ファイルを使用したリモート・サーバの SSH 監視を有効にするには、各リモート・サーバに SiteScope リモート Windows SSH ファイルをインストールして、一般的に使用されるサーバ監視機能を有効にする必要があります。タスクの詳細については、576ページ「SiteScope リモート Windows SSH ファイルのインストール」を参照してください。
- **エージェントレス SSH:** エージェントレス Windows SSH を使用する場合は、リモート Windows サーバに SiteScope リモート Windows SSH ファイルをインストールする必要はありません。

ヒント: モニタがプリインストール SiteScope SSH ファイルとエージェントレス Windows SSH をサポートしている場合、エージェントレス Windows SSH の使用をお勧めします。

3. リモート・サーバに接続する SSH クライアントの設定

リモート・サーバで SSH サーバまたはデーモンを設定したら、リモート・サーバへの接続に SiteScope で使用する統合 Java SSH クライアントを設定する必要があります。タスクの詳細に

については、586ページ「統合された Java SSH クライアントの設定方法」を参照してください。

4. SSH 接続方法を使用するための Windows リモートの設定

SiteScope とリモート・サーバ間の SSH 接続を確認したら、次のように SiteScope で Windows リモート・サーバを設定します。

- [メイン設定]で、接続方法として[SSH]を選択します。その後、SSH 接続を使用するようにモニタを設定できます。
- プリインストール SiteScope SSH ファイルを使用したリモート・サーバの SSH 監視を有効にするには、[詳細設定]パネルで[プリインストールされた SiteScope リモート Windows SSH ファイルを使用する SSH]が選択されていることを確認します(これが標準設定です)。
- エージェントレス Windows SSH を使用して監視するには、[詳細設定]パネルで[プリインストールされた SiteScope リモート Windows SSH ファイルを使用する SSH]チェックボックスをクリアします。

ユーザ・インタフェースの詳細については、535ページ「[新規 Microsoft Windows リモート サーバ] / [Microsoft Windows リモート サーバの編集]ダイアログ・ボックス」を参照してください。

Windows での Cygwin OpenSSH のインストール

このタスクでは、Windows サーバでの Cygwin OpenSSH サーバのインストールと設定に関する手順を説明します。

注:

- このタスクは高度なタスクのうちの1つです。詳細については、569ページ「リモート Windows サーバでの SSH 監視の設定方法」を参照してください。
- 次の手順は、マシンにほかの Cygwin または SSH ユーティリティがインストールされておらず、マシンでインターネット・アクセスが可能なことを前提としています。
- SSH デーモンのインストールと実行に使用されるユーザ・ログイン・アカウントには、必要なプログラムのインストール、いくつかのファイル・オプションの設定、Windows サービスの制御に対する適切な権限が必要です。SiteScope で従属サーバの接続に使用するアカウントである必要はありませんが、SiteScope でサーバする前にそのアカウントを Cygwin インストールで設定する必要があります。

Windows サーバで Cygwin OpenSSH サーバをインストールして設定するには、次の手順を行います。

1. 次の定義を使用して新しいシステム環境変数を作成します。CYGWIN = ntsec tty。
2. 文字列 ;C:\cygwin\bin を PATH 変数に追加します。変数への変更を保存します。
3. Cygwin セットアップ・プログラムを一時フォルダにダウンロードします。例: C:\temp。セットアップ・プログラムは、Cygwin で利用可能な異なるパッケージとコンポーネントの選択、ダウンロード、インストールに使用します。
4. ダウンロードしたセットアップ・プログラムを実行して、ダウンロード元の選択を促すメッセージが表示されたら[Install from Internet]オプションを選択します。[次へ]をクリックして次に進みます。
5. 選択を促すメッセージが表示されたら、Cygwin パッケージをインストールするルート・インストール・

ディレクトリを選択します。このディレクトリに SSH デーモンと関連ファイルがインストールされます。

例: C:\cygwin。[次へ]をクリックして次に進みます。

6. 選択を促すメッセージが表示されたら、Cygwin インストール・ファイルを保存する一時ディレクトリを選択します。例: C:\temp。[次へ]をクリックして次に進みます。
7. 選択を促すメッセージが表示されたら、[Internet Connection] オプションを選択します。通常は [Direct Connection] を使用できます。[次へ]をクリックして次に進みます。
8. 選択を促すメッセージが表示されたら、選択リストを使用してファイルを取得するための適切なミラー・サイトを選択します。[次へ]をクリックして次に進みます。
9. セットアップ・プログラムによってそのミラー・サイトにあるパッケージが確認され、パッケージ・カテゴリの階層ツリーが表示されます。ダウンロードするパッケージを表示して選択するには、カテゴリ名の左側にあるプラス記号(+)をクリックしてパッケージ・ツリーを展開します。ダウンロードとインストールに選択したパッケージのバージョン番号が [New] 列に表示されます。特定のバージョン番号が表示されない場合、そのパッケージはダウンロードもインストールもされていません。パッケージをダウンロード用に選択するには、パッケージ名の左側にある [スキップ] をクリックします。

注: 標準設定でダウンロードに選択されている可能性のある開発ツール(Devel)とデータベース・ツール(Database)の多くは SSH デーモンの実行には不要で、ダウンロード時間とインストール領域を削減するために選択解除できます。

ダウンロードとインストールに次の各パッケージを選択します。

- [Admin] 分岐から [cygrunsrv]
- [Doc] 分岐から [cygwin-doc]
- [Shells] 分岐から [pdksh]
- [Net] 分岐から [openssh] と [openssl]
- [Editors] 分岐から選択した任意の UNIX 形式のテキスト・エディタ(例: [vim] または [emacs])

選択を促すメッセージに従い、クリックしてファイルをダウンロードします。

10. 指定したインストール・オプションに応じて、Cygwin セットアップで、選択したパッケージがダウンロードされてインストールされます。Cygwin ターミナル・ウィンドウへのショートカットをデスクトップまたは [Program Start] メニューに追加するかどうかの選択を促すメッセージが表示される場合があります。クリックして次に進み、インストールを完了します。
11. Cygwin セットアップが完了したら、デスクトップ・ショートカットまたは [Program Start] メニューの [Cygwin] をクリックして Cygwin ターミナル・ウィンドウを開きます。

注: Windows システムのユーザ・プロファイルによっては、ターミナル・ウィンドウで開かれる標準設定のディレクトリがルート Cygwin インストール・ツリー内でない場合があります。pwd コマンドを使用して現在のディレクトリを表示します。通常は、コマンド文字列 cd / を入力すると、標準設定では Windows の C:\cygwin ディレクトリの Cygwin ルートにディレクトリが変更されます。

標準設定の Cygwin グループ・ファイルを、マシンとネットワークで使用しているグループ名で更新します。標準設定の Cygwin グループ・ファイルを、サーバとドメインで定義したグループで更新するには、mkgroup ユーティリティを使用します。コマンドの使用例を次に示します。

```
mkgroup -l >> ../etc/group mkgroup -d >> ../etc/group
```

注:

- Cygwin にドメインとローカル・グループ・アカウントの両方を認識させるには、mkgroup ユーティリティをローカル・ユーザ(-l オプション)に対して 1 回、ドメイン・ユーザ(-d オプション)に対して 1 回の計 2 回実行します。ファイルへのエントリを追加する場合、>, だけではなく >> の構文を使用してください。
- ローカルとドメインの両方のオプションを使用する場合、/etc/group ファイルを手動で編集(ダウンロードした UNIX 形式のテキスト・エディタを使用して重複するグループ・エントリを削除する必要があります。必要に応じて、監視に不要なグループ・エントリや、このマシンへのアクセスを禁止するグループ・エントリも削除します。

標準設定の Cygwin ユーザ(passwd)ファイルを、ローカル・マシンで定義したユーザと、このマシンの Cygwin にアクセスを許可する個々のドメイン・ユーザで更新します。標準設定の Cygwin ユーザ・ファイルの更新には、mkpasswd ユーティリティを使用します。

コマンドの使用例を次に示します。

```
mkpasswd -l >> ../etc/passwd mkpasswd -d -u username >>  
../etc/passwd (domain users)
```

注:

- 標準設定では、Cygwin は SYSTEM と呼ばれるローカル・ユーザとして OpenSSH デーモンを実行するように設定されています。Cygwin にドメインとローカル・マシン・ユーザ・アカウントの両方を認識させるには、すべてのローカル・ユーザの追加に -l オプション、個々のドメイン・ユーザの追加に -d と -u オプションを使用して mkpasswd を実行します。ファイルへのエントリを追加する場合、>, だけではなく >> の構文を使用してください。
- ローカルとドメインの両方のオプションを使用する場合、/etc/passwd ファイルを手動で編集(ダウンロードした UNIX 形式のテキスト・エディタを使用して重複するユーザ・エントリを削除する必要があります。必要に応じて、個々のユーザの標準設定の /home パスとシェルも変更します。SiteScope で使用するユーザ・アカウントの /home/sitescopeaccount/ ディレクトリに RemoteNTSSH パッケージをインストールする場合に、この変更が必要な可能性があります。

12. `cd /bin` と入力して、アクティブ・ディレクトリを /bin ディレクトリに変更します。
13. 次のコマンド・ライン(末尾の空白とピリオドを含む)を入力して、Windows コマンド (CMD) シェルを示す /bin ディレクトリへのシンボリック・リンクを作成します。

```
ln -s /cygdrive/c/winnt/system32/cmd.exe .
```
14. いくつかの Cygwin ファイルとディレクトリの権限と所有権を変更することをお勧めします。また、SSH デーモンのログ・ファイルを作成することもお勧めします。Cygwin ターミナル・コマンド・ラインに次のコマンド・ラインを入力し、各コマンド・ラインの入力後に Enter キーを押します。


```
cd /  
chmod -R og-w .  
chmod og+w /tmp  
touch /var/log/sshd.log
```

注:

- 空白を含めた正確な構文が必要です。
- ファイルとディレクトリの権限が矛盾していたり不正に割り当てられていたりしていると、SSH デーモンが開始できない、または SiteScope をリモート・サーバに接続してコマンドまたはスクリプトを実行できない可能性があります。

15. 次のコマンドを入力して、SSH デーモンを Windows サービスとして実行するように設定します。

```
ssh-host-config -y
```

CYGWIN= プロンプトが表示されたら、この操作の最初に設定した環境変数に一致させるため `ntsec tty` と入力します。通常、これにより、サーバの再起動が必要な場合に SSH デーモンまたはサービスを自動的に再起動するように設定されます。

16. 次のコマンドを使用して、SSH デーモンの暗号鍵とファイルを設定します。

```
ssh-user-config -y.
```

入力を促すメッセージが表示されたら、いくつかのキーストア・ファイルに必要なパスフレーズを入力します。プログラムから、確認のためにパスフレーズを再入力するように求められます。

17. SSH デーモンで使用するために、いくつかのファイルとフォルダの所有権を変更する必要があります。これらのファイルの権限がグループまたは「世界」レベルのユーザによって変更または実行可能な場合、プログラムは正常に実行できません。これらのファイルへのアクセスを制限するために、次のコマンド文字列を入力します。

```
chown SYSTEM:Users /var/log/sshd.log /var/empty /etc/ssh_h*  
chmod 755 /var/empty
```

18. [プログラム] > [管理ツール] > [サービス] パネルを使用し、CYGWIN sshd サービスの開始と停止を実行して、インストールされていることを確認します。

注: Cygwin には、SSH デーモンを開始するサーバ・ユーティリティが含まれています。ただし、Windows の [サービス] パネルを使用した場合はサーバを起動できる場合でも、この方法ではサーバの起動に失敗する多数の状況があります。

19. SiteScope で監視し、ために使用するユーザ・アカウント用の標準設定のシェルまたはコマンド環境を設定します。選択したシェルは、SSH 接続を使用してリモート実行できるスクリプトまたはコマンドのタイプに影響を与えます。UNIX 形式のテキスト・エディタを使用して、`/etc/passwd` ファイルを編集します。使用する SiteScope ログイン・アカウントのエントリを検索し、次に示すように、`/bin/bash` のシェルを、使用するシェルに変更します。通常、これがそのアカウント・エントリ行の最後のエントリです。

- SiteScope で Windows コマンド・シェルを使用してリモート・サーバとやり取りする場合、標準設定のシェル・エントリを `/bin/cmd` に変更します。Windows 形式のバッチ・ファイルとスクリプトを使用する予定の場合はこのオプションを使用します。この前の操作手順で説明したように、`/bin` ディレクトリの Windows `cmd.exe` カーネルへのシンボリック・リンクを含める必要もあります。

す。

- SiteScope で Cygwin UNIX シェルを使用してリモート Windows サーバとやり取りする場合、標準設定のシェル・エントリを **/bin/pdksh** に変更します。SiteScope SSH クライアントでは Cygwin の標準設定の **bash** シェルを正確に解析できない可能性があります。また、リモート UNIX サーバ接続を、Cygwin SSH デーモンに接続するこの(Windows)サーバに設定する必要があります。

変更点をファイルに保存します。

20. `/etc/profile` ファイル内の `PATH` と標準設定のプロンプト・コマンドを編集して、Cygwin で特定のファイルを検索して SiteScope でリモート・シェルからの出力を解析できるようにします。UNIX 形式のテキスト・エディタを使用して、`/etc/profile` ファイルを編集します。ファイルの上部にある `PATH` 定義エントリを検索します。例：

```
PATH=/usr/local/bin:/usr/bin:/bin:$PATH
```

このエントリを次のように変更します。

```
PATH=./usr/local/bin:/usr/bin:/bin:$PATH
```

21. 標準設定のプロンプト・コマンドを変更するには、`/etc/profile` ファイルを編集して、次のようなセクションを検索します。

```
;;
sh | -sh | */sh | \
sh.exe | -sh.exe | */sh.exe )
#Set a simple prompt
PS1='$ '
;;
```

このエントリのすぐ下に、次を追加します。

```
;;
pdksh | -pdksh | */pdksh | \
pdksh.exe | -pdksh.exe | */pdksh.exe )
#Set a simple prompt
PS1='> '
;;
```

22. 変更点をファイルに保存します。
23. アクティブ・ディレクトリを、SiteScope の監視用に作成した、ユーザのホーム・ディレクトリに変更します。

これらの変更を加えて SSH デーモンを起動すると、SSH クライアントを使用してサーバに接続できます。

注: `mkpasswd -l /etc/passwd` コマンドを実行するとき(新規ユーザの追加時など)は常に `/etc/passwd` ファイルを再編集して、そのユーザの標準設定のシェルが SiteScope で使用するアカウントに必要な値に設定されるようにします。

OpenSSH for Windows のインストール

このタスクでは、Windows サーバでの OpenSSH サーバのインストールと設定に関する手順を説明します。

OpenSSH for Windows パッケージは、Cygwin SSH パッケージの代替パッケージで、インストールがより簡単です。その他の多くの製品と同じく、Cygwin 製品と Open SSH for Windows は変更される可能性があります。その影響として、一部のバージョンの Cygwin SSH サーバではによる SiteScope の監視に必要なデータが返されない場合があります。OpenSSH for Windows パッケージでこの問題を解決できる場合は、Cygwin パッケージの代わりにこのパッケージを使用する必要があります。

注: このタスクは高度なタスクのうちの 1 つです。詳細については、[569 ページ「リモート Windows サーバでの SSH 監視の設定方法」](#)を参照してください。

Windows サーバで OpenSSH for Windows サーバをインストールして設定するには、次の手順で行います。

1. OpenSSH for Windows パッケージをダウンロードしてインストールします。
2. コマンド・プロンプトを開いてインストール・ディレクトリ(標準設定のインストール・パスは `C:\Program Files\OpenSSH`)を変更します。
3. アクティブ・ディレクトリを `OpenSSH\bin` ディレクトリに変更します。
4. 標準設定のグループ・ファイルを、マシンとネットワークで使用しているグループ名で更新する必要があります。標準設定の OpenSSH グループ・ファイルを、サーバとドメインで定義したグループで更新するには、`mkgroup` ユーティリティを使用します。コマンドの使用例を次に示します。

```
mkgroup -l >> ..\etc\group mkgroup -d >> ..\etc\group
```

注:

- OpenSSH にドメインとローカル・グループ・アカウントの両方を認識させるには、`mkgroup` ユーティリティをローカル・ユーザ(`-l` オプション)に対して 1 回、ドメイン・ユーザ(`-d` オプション)に対して 1 回の計 2 回実行します。ファイルへのエントリを追加する場合、`>`、だけでなく `>>` の構文を使用してください。
- ローカルとドメインの両方のオプションを使用する場合、`/etc/group` ファイルを手動で編集(ダウンロードした UNIX 形式のテキスト・エディタを使用して重複するグループ・エントリを削除する必要があります。必要に応じて、不要なグループ・エントリや、このマシンへのアクセスを禁止するグループ・エントリも削除します。

5. 標準設定の OpenSSH ユーザ(`passwd`)ファイルを、ローカル・マシンで定義したユーザと、このマシンの SSH サーバにアクセスを許可するドメイン・ユーザで更新する必要があります。標準設定のユーザ・ファイルの更新には、`mkpasswd` ユーティリティを使用します。コマンドの使用例を次に示します。

```
mkpasswd -l >> ..\etc\passwd  
mkpasswd -d -u username >> ..\etc\passwd
```

注:

- OpenSSH にドメインとローカル・マシン・ユーザ・アカウントの両方を認識させるには、すべてのローカル・ユーザの追加に `-l` オプション、個々のドメイン・ユーザの追加に `-d` と `-u` オプションを使用して `mkpasswd` ユーティリティを実行します。ファイルへのエントリを追加する場合、`>`、だけでなく `>>` の構文を使用してください。
- ローカルとドメインの両方のオプションを使用する場合、`/etc/passwd` ファイルを手動で編集(ダウンロードした UNIX 形式のテキスト・エディタを使用して重複するユーザ・エントリを削除する必要があります。必要に応じて、個々のユーザの標準設定の `/home` パスとシェルを変更します(次の指示を参照)。

6. [プログラム]>[管理ツール]>[サービス]パネルを使用し、**OpenSSH Server** サービスを開始して、インストールされていることを確認します。

SiteScope リモート Windows SSH ファイルのインストール

このタスクでは、操作中の SSH パッケージに応じて、各リモート Windows サーバに SiteScope リモート Windows ファイルをインストールする手順を説明します。

注:

- このタスクは高度なタスクのうちの 1 つです。詳細については、569 ページ「リモート Windows サーバでの SSH 監視の設定方法」を参照してください。
- SiteScope リモート Windows ファイルは、エージェントレス SSH をサポートするリモート Windows サーバ・モニタにインストールする必要はありません。エージェントレス SSH をサポートするモニタのリストについては、579 ページ「(エージェントレスまたは SiteScope リモート Windows SSH ファイルを使用した)Windows SSH をサポートするモニタ」を参照してください。

Cygwin インストールで SiteScope SSH ファイルをインストールする場合:

1. SSH を使用して SiteScope で監視する各マシンの **<インストール・ドライブ> :\\cygwin\\home** ディレクトリ内に **\\sitescope_login_account_name** ディレクトリが存在することを確認します。**sitescope_login_account_name** を、SSH サーバを使用しているマシンへの接続に使用するユーザ・アカウント名に置き換えます。
2. Windows で SSH を使用する利点の 1 つは、SSH デーモンを実行しているリモート・サーバで SiteScope からスクリプトを実行できる点です。リモート・スクリプトの実行にスクリプト・モニタを使用できるようにするには、**/home/sitescope_login_account_name** ディレクトリに **scripts** サブディレクトリを作成します。SiteScope スクリプト・モニタで実行するために作成したスクリプトは、このディレクトリ内に置く必要があります。
3. SiteScope がインストールされているマシンで、**<SiteScope のルート・ディレクトリ> \\tools** ディレクトリにある **RemoteNTSSH.zip** ファイルを検索します。

注: **RemoteNTSSH.zip** の .exe および .dll ファイルのすべてで実行可能権限が必要です。コマンド `chmod +x *` を使用して、関連するファイルへの実行可能権限を取得します。

4. このファイルを、SSH サーバまたはデーモン・ソフトウェアをインストールした各リモート Windows サーバの **<インストール・ドライブ> :\\cygwin\\home\\sitescope_login_account_name** ディレク

トリにコピーします。

5. **RemoteNTSSH.zip** ファイルをリモート・サーバで展開します。zip ファイルの内容を <インストール・ドライブ>:\cygwin\home\sitescope_login_account_name ディレクトリに移動します。この操作で <インストール・ドライブ>:\cygwin\home\sitescope_login_account_name\scripts サブフォルダが作成されます。このサブフォルダには、SiteScope スクリプト・モニタで実行できるスクリプトを保持します。

注: **RemoteNTSSH.zip** ファイルが SiteScope 11.10 より前のバージョンからのものの場合、監視対象のすべてのリモート・サーバで <SiteScope 11.10 のルート>\tools ディレクトリから zip ファイルを再インストールする必要があります。

6. リモート・サーバで CYGWIN sshd サービスを開始します。

OpenSSH for Windows インストールで SiteScope SSH ファイルをインストールする場合:

1. SiteScope がインストールされているマシンで、<SiteScope のルート・ディレクトリ>\tools ディレクトリにある **RemoteNTSSH.zip** ファイルを検索します。
2. このファイルを、インストール済みの SSH サーバを使用してマシンにログインした後に自動的にユーザを移動する、ユーザ・ホーム・ディレクトリにコピーします。このディレクトリは、SSH サーバまたはデーモン・ソフトウェアをインストールした各リモート Windows サーバのディレクトリです。
3. リモート・サーバの **RemoteNTSSH.zip** ファイルをユーザ・ホーム・ディレクトリに展開します。この操作で <ユーザ・ホーム・ディレクトリ>\scripts サブフォルダが作成されます。このサブフォルダには、SiteScope スクリプト・モニタで実行できるスクリプトを保持します。

注: **RemoteNTSSH.zip** ファイルが SiteScope 11.10 より前のバージョンからのものの場合、監視対象のすべてのリモート・サーバで <SiteScope のルート・ディレクトリ>\tools ディレクトリから zip ファイルを再インストールする必要があります。

4. リモート・サーバで OpenSSH Server サービスを開始します。

UNIX リモート・サーバの SSH 設定要件

UNIX 環境で SiteScope を使用して SSH 監視を行う場合、リモート UNIX サーバには次の設定要件があります。

- SiteScope によるモニタの対象とする各リモート・サーバに、セキュア・シェル・デーモンまたはサーバ (sshd) をインストールする必要があります。
- リモート・サーバ上の SSH デーモンが実行されており、該当する通信ポートが開いている必要があります。たとえば、SSH の標準設定ではポート番号 22 です。
- SiteScope が実行されているサーバに SSH クライアントがインストールされている必要があります。SiteScope の統合された Java SSH クライアントは、この要件を満たします。

SiteScope が稼働中のマシンから、モニタの対象とするリモート・マシンとの間の SSH クライアント - サーバ間接続を検証します。SiteScope で SSH を使用してリモート・サーバをセットアップする前に、SiteScope アプリケーションの外部で SSH 接続をチェックします。たとえば、SiteScope を Solaris or Linux で実行している場合、次のコマンド・ラインを使用して、サーバ<remotehost> に SSH2 を使用した SSH 接続を要求します。

```
ssh -2 <リモートホスト>
```

通常は、使用されている SSH プロトコルのバージョンを示すテキスト情報が返されます。また、現在のユーザの認証が試行されます。異なるユーザとしてログインを要求するには、`-l username` スイッチを使用します。

SSH 接続を確認したら、SSH を接続方法として使用するために、SiteScope で UNIX リモート設定を作成または設定します。

(エージェントレスまたは SiteScope リモート Windows SSH ファイルを使用した)Windows SSH をサポートする モニタ

次に、エージェントレス Windows SSH、または SiteScope のリモート Windows SSH ファイルを使用した Windows SSH がサポートされているモニタの一覧を示します。SiteScope の SSH ファイルを使用した Windows SSH がサポートされたすべてのモニタでは、UNIX プラットフォーム上で実行している SiteScope に対応しています。

モニタ	SiteScopes リモート Windows SSH ファイルを使用した Windows SSH のサポート	エージェントレス Windows SSH のサポート
Citrix Monitor	✓	✓
ColdFusion Server Monitor	✓	✓
CPU Monitor	✓	✓
Directory Monitor	✓	
Disk Space Monitor	✓	✓
Dynamic Disk Space Monitor	✓	✓
Log File Monitor	✓	✓
Memory Monitor	✓	✓
Microsoft Lync Server 2010 Monitors(Microsoft 音声ビデオ会議 サーバ、Microsoft アーカイブ・サーバ、Microsoft Director サーバ、Microsoft エッジ・サーバ、Microsoft フロント・エンド・サーバ、Microsoft 仲介サーバ、Microsoft 監視および CDR サーバ、Microsoft Registrar サーバ)	✓	✓
Microsoft ASP Server Monitor	✓	✓
Microsoft Hyper-V Monitor	✓	✓
Microsoft IIS Server Monitor	✓	✓
Microsoft SQL Server Monitor	✓	✓
Microsoft Windows Event Log Monitor	✓	
Microsoft Windows Media Server Monitor	✓	✓
Microsoft Windows Performance Counter Monitor	✓	
Microsoft Windows Resources Monitor	✓	✓

モニタ	SiteScopes リモート Windows SSH ファイルを使用した Windows SSH のサポート	エージェントレス Windows SSH のサポート
Microsoft Windows Services State Monitor	✓	
Real Media Server Monitor	✓	✓
Script Monitor	✓	
Service Monitor	✓	

トラブルシューティングおよび制限事項

本項では、SSH を使用して監視する場合のトラブルシューティングと制限事項について説明します。

- 581ページ「Windows SSH ベースのモニタでのスキップ(Red Hat Linux 5)」
- 581ページ「エージェントレス Windows SSH が機能しない」
- 581ページ「エージェントレス SSH がカウンタを取得できない」
- 581ページ「SiteScope リモート SSH ファイルを使用した Windows SSH が機能しない」
- 581ページ「Error:"resize:unknown character exiting"」

Windows SSH ベースのモニタでのスキップ(Red Hat Linux 5)

Red Hat Linux 5 プラットフォームで実行されている Windows SSH ベースのモニタでスキップが発生した場合、`opt/SiteScope/java/lib/security/java.security` ファイルで次の変更を行う必要があります。

「`securerandom.source=file:/dev/urandom`」から

「`securerandom.source=file:///dev/urandom`」

エージェントレス Windows SSH が機能しない

SiteScope リモート Windows SSH ファイルを使用して Windows SSH が機能せず、エージェントレス Windows SSH がない場合は、次を実行します。

- `perfmon` が正常に機能していることを確認します。対象マシンで、コマンド `perfmon` を実行し、必要な `perfmon` オブジェクトが表示されることを確認します。これらのライブラリを再構築する方法の詳細については、<http://support.microsoft.com/?kbid=300956> を参照してください。
- コマンド・ラインで次のコマンドを入力し、リモート・マシンで `typeperf` コマンドが機能していることを確認します。

```
typeperf "\Processor(_Total)\% Processor Time"
```

詳細については、<http://technet.microsoft.com/en-us/library/cc753182.aspx> を参照してください。

エージェントレス SSH がカウンタを取得できない

場合によっては、`perfmon` ではカウンタが値 0 を示しているのに SSH では同じカウンタが n/a を示すことがあります。`perfmon` ユーティリティを使用して選択できないカウンタは、このように動作します。SiteScope リモート Windows SSH ファイルを使用した SSH がこれらのカウンタの値を取得できるのは、`perfmon` をバイパスしてレジストリを通じてカウンタにアクセスしているためです。

SiteScope リモート SSH ファイルを使用した Windows SSH が機能しない

SiteScope SSH ファイルを使用した Windows SSH の監視の前提条件を満たしていることを確認します。詳細については、576ページ「SiteScope リモート Windows SSH ファイルのインストール」を参照してください。

Error:"resize:unknown character exiting"

SiteScope で SSH を使用して接続を作成できない場合、`error.log` または `runMonitor.log` に "resize: unknown character exiting" に類似するサーバ・エラー・メッセージが含まれている場合、これは、無効な `bash` 関連のコマンドが原因である可能性があります。SiteScope では、基本的な `bash` 環境のみがサポートされています。通常、`bash` コマンドはユーザの標準設定ディレクトリの下

.bashrc ファイルにあります。

第25章

SSH クライアントを使った作業

本章の内容

概念

- 584ページ「統合された Java SSH クライアントの概要」

タスク

- 586ページ「統合された Java SSH クライアントの設定方法」

統合された Java SSH クライアントの概要

リモート UNIX または Windows サーバとの接続にセキュア・シェル(SSH)を使用する必要がある場合、接続を確立し、データを転送するには、SiteScope から SSH クライアントにアクセスできる必要があります。この項では、SiteScope による監視で SSH を使用する場合のクライアント設定および問題をいくつか紹介します。

SiteScope では、Java で記述された SSH クライアントが SiteScope アプリケーションに統合されています。SSH を使用してサーバに接続するときに SiteScope で使用される必要なシステム・リソースが、このクライアントにより大幅に削減されます。Java クライアントでは、SSH バージョン 1(SSH1)とバージョン 2(SSH2)の両方のプロトコル、およびパスワード・ベースと鍵ベースの両方の認証がサポートされています。クライアントの SiteScope 設定は、UNIX、Linux、Windows の SiteScope で同じになります。

統合された Java SSH クライアントの設定の詳細については、[586ページ「統合された Java SSH クライアントの設定方法」](#)を参照してください。

本項の内容

- [584ページ「統合された SSH クライアントを使った作業」](#)
- [584ページ「鍵ベース認証の設定」](#)
- [585ページ「SSH バージョン 2 プロトコルの使用」](#)

統合された SSH クライアントを使った作業

SSH1 と SSH2 はいずれもセキュア・シェル・プロトコルですが、2 つの異なるプロトコルとみなされ、相互に互換性はありません。SSH1 にセキュリティの脆弱性が検出されたため、SSH2 が現行標準とみなされています。ほとんどの SSH ソフトウェアでは、両方のプロトコルがサポートされています。ただし、SSH 接続の要求には SSH1 ではなく、SSH2 を必ず使用してください。SSH クライアントと SSH ホスト間の通信に同じプロトコル・バージョンを使用するように、SSH クライアントと SSH ホストを設定する必要があります。多くの場合、SSH クライアントと SSH ホストの間で最低の共通基準とみなされる SSH1 が、接続に使用される標準設定のバージョンになります。

SSH2 接続を強制的に使用するには、次の 2 通りの方法があります。

- **SSH2 接続要求のみを受け入れるように、すべての SSH デーモンまたはサーバを設定する。**これは最も安全な方法ですが、各サーバのインストールおよびアクティブ化時に設定されていない場合は最も時間がかかります。
- **SSH2 のみを要求するように、SiteScope サーバの SSH クライアントを設定する。**変更が必要なのは、SiteScope サーバのクライアントのみです。統合された Java SSH クライアントの場合、これはリモート・サーバ設定ページの[詳細オプション]セクションの設定で制御されます。

鍵ベース認証の設定

SSH セキュリティのもう一つの要素は、認証です。SiteScope に統合された SSH クライアントは、2 つの認証オプションのいずれかを使用するように設定できます。

- **パスワード認証：**パスワード認証は、SiteScope で SSH 接続に使用される標準設定の方法です。
- **鍵ベース認証：**鍵ベース認証では、パスフレーズと公開鍵および秘密鍵認証の使用によってセキュリティが強化されます。

SSH リモート・サーバで鍵ベース認証を使用するには、まず公開鍵と秘密鍵のペアを作成する必要があります。公開鍵はリモート・サーバに置かれ、秘密鍵は SiteScope マシンに保管されます。Cygwin OpenSSH と OpenSSH for Windows のいずれにも、ssh-keygen と呼ばれる鍵生成ツールが含まれています。ssh-keygen ツールでは、プロトコルバージョン 1 とバージョン 2 の両方の鍵を作成できます。

内部 Java ライブラリ・クライアントを使用して UNIX または Windows リモート・サーバを設定する場合は、MindTerm と呼ばれる鍵生成ツールを使用して、RSA(バージョン 1 とバージョン 2)と DSA(バージョン 2)の公開鍵 / 秘密鍵ペアを作成します。

SSH バージョン 2 プロトコルの使用

SiteScope Java クライアントでは、接続しようとしているサーバで SSH1 接続が許可される場合、標準設定で SSH1 プロトコルが使用されます。この折衝に失敗すると、SiteScope では、バージョン 2 プロトコルを使用して接続を試行します。SiteScope Java クライアントは、SSH2 接続のみを使用するように設定できます。SiteScope マシンで変更を行うほうが、多数のリモート SSH サーバを再設定するより簡単な場合があります。

統合された Java SSH クライアントの設定方法

このタスクでは、統合された Java SSH クライアントの設定の手順について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- 586ページ「SSH 接続の認証オプションを選択する」
- 586ページ「SSH2 接続のみを使用するように SiteScope Java クライアントを設定」

1. SSH 接続の認証オプションを選択する

SiteScope の SSH クライアントを統合する認証オプションの選択: パスワード認証 (SiteScope で標準設定の方法) または鍵ベース認証。

SSH 接続の鍵ベース認証を設定する方法の詳細については、586ページ「鍵ベース認証の設定」を参照してください。

2. SSH2 接続のみを使用するように SiteScope Java クライアントを設定

Microsoft Windows/UNIX リモート・サーバでリモート・サーバ・プロファイルを設定するときに、[詳細設定] で **[SSH バージョン 2 のみを使用]** チェック・ボックスを選択します。

鍵ベース認証の設定

このタスクでは、SSH リモート・サーバに鍵ベース認証を設定する手順について説明します。SiteScope SSH 鍵をリモート・サーバにコピーするか、またはリモート・サーバからリモート・サーバ鍵を取得して SiteScope にコピーします。

ヒント: 各マシンでファイルを生成して、そのファイルを SiteScope マシンにコピーするのはなく、SiteScope サーバで 1 つの鍵ファイルを保持して、そのファイルをリモート・サーバにコピーすることをお勧めします。

注: このタスクは高度なタスクのうちの 1 つです。詳細については、586ページ「統合された Java SSH クライアントの設定方法」を参照してください。

SiteScope サーバでの鍵の作成

SiteScope サーバで公開鍵または秘密鍵のペアを作成するには、次の手順を実行します。

1. SiteScope サーバでコマンド・ウィンドウを開き、MindTerm を起動する次のコマンドを実行します。

```
<SiteScope のルート・ディレクトリ> \java\bin\java -jar c:\<SiteScope のルート・ディレクトリ> \WEB-INF\lib\mindterm.jar
```

2. MindTerm で、[File] > [Create Keypair] > [DSA (または RSA)] を選択します。また、OpenSSH .pub 形式も選択します。
3. 鍵ペアは、<ユーザのホーム・ディレクトリ> \mindterm ディレクトリに書き込まれます。
4. 秘密鍵 (末尾が *.pub でないファイル) を、<SiteScope のルート・ディレクトリ> \groups ディレクトリにコピーします。

5. **identity.pub** ファイルをリモート・マシンの<ユーザのホーム・ディレクトリ>/**.ssh** ディレクトリにコピーし、ファイル名を **authorized_keys**(SSH2 の場合は **authorized_keys2**)に変更します。異なる鍵ファイルを使って多数のユーザがサーバに接続することを許可する場合は、**identity.pub** の内容を既存の **authorized_keys/authorized_keys2** ファイルに追加することもできます。
6. リモート・マシンの<ユーザのホーム・ディレクトリ>/**.ssh** ディレクトリでコマンド `chmod 744 authorized_keys` を実行し、User に **authorized_keys** ファイルの読み取り、書き込み、実行の権限があり、Group と Other に読み取り権限があることを確認します。
7. 鍵ファイル認証と内部 Java ライブラリを使用して、リモート・サーバの SiteScope でリモート接続を作成します。

公開鍵をリモート・マシンの<ユーザのホーム・ディレクトリ>/**.ssh/authorized_keys** ファイルに配置します。

秘密鍵を<SiteScope のルート・ディレクトリ>/**groups** ディレクトリに置き、名前を変更した **identity** で指定します。これにより、ファイル・パスをリモート・サーバの[詳細設定]で指定しなくても、SiteScope が自動的に秘密鍵を取得できます。または、秘密鍵をその他の SiteScope ディレクトリや、SiteScope の外側に配置することもできます。

MindTerm から生成される鍵は、**Openssh** 形式になります。

注: サーバの鍵と MindTerm の鍵が同じレベルであることを確認する必要があります。たとえば、サーバの鍵が 768 ビットで MindTerm の鍵が 1024 ビットだと、認証手順は失敗します。

サーバで使用されているレベルを調べるには、次の手順を実行します。

1. リモート・サーバの **sshd** サービスを停止します。Red Hat Linux サーバの場合は、次のコマンドを実行します。

```
/etc/rc.d/init.d/sshd stop
```

2. リモート・サーバでデバッグ・モードで **sshd** サービスを起動します。Red Hat Linux サーバの場合は、次のコマンドを実行します。

```
/usr/sbin/sshd -d
```

Generating 768 bit RSA keyに似た出力が表示されます。

注: SiteScope で[SSH 接続の鍵ファイル]ボックスを使用する場合、入力した情報の末尾にスペースがあると、「不明なエラー (-1)」による失敗の原因になります。問題を修正するには、末尾のスペースを削除します。

openSSH 鍵を SEC SSH 形式に変換するには、次の手順を実行します。

1. MindTerm で RSA 鍵 (openSSH 鍵ペア) を作成します。
2. リモート・サーバで次のコマンドを実行して、openSSH 鍵を SEC SSH 形式に変換します。

```
ssh-keygen -e -f <公開鍵>
```

3. openSSH 形式の秘密鍵を SiteScope サーバに置いたままにします。

注: 鍵ベース認証を使用する場合、提供する鍵ファイルはバージョン 2 の秘密鍵にする必要があります。

UNIX リモート・サーバでの鍵の作成と SiteScope サーバへのコピー

リモート・マシンの鍵を取得し、SiteScope に配置して接続を設定するには、次の手順を実行します。

1. ルート権限を持つユーザとして UNIX リモート・サーバにログインします。
2. 秘密 / 公開 RSA 鍵のペアをプロトコル・バージョン 1 で生成するには、次のコマンドを実行します。

```
$> ssh-keygen -t rsa
```

バージョン 2 の鍵ペアを生成する場合は、次のコマンドを実行します。

```
$> ssh-keygen -t dsa
```

出力は次のようになります。

```
Enter file in which to save the key (~/.ssh/id_rsa):Enter  
passphrase* (empty for no passphrase):Enter same passphrase again:
```

ここで、パスフレーズは秘密鍵ファイルをデコードするために使用されるパスワードで、空白のままにすることができます。

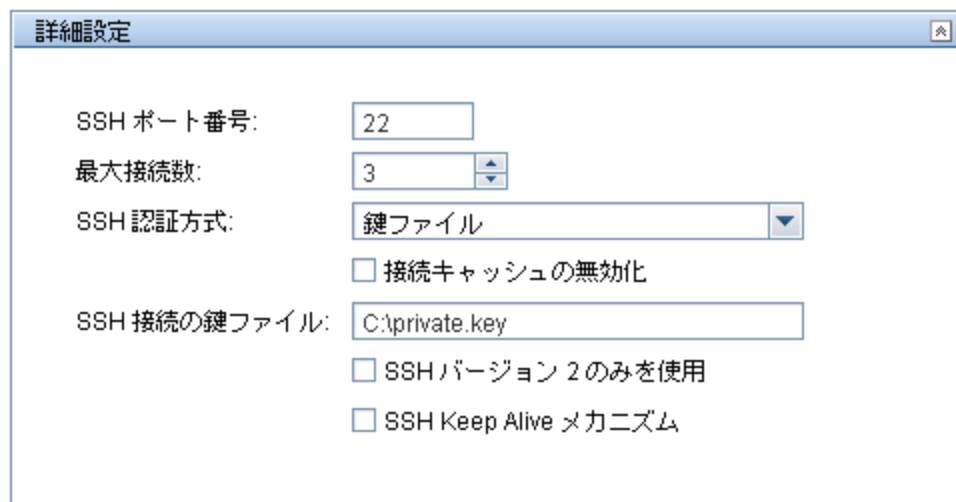
識別情報は ~/.ssh/id_rsa に保存され、公開鍵は ~/.ssh/id_rsa.pub (プロトコル・バージョン 1)、または ~/.ssh/id_dsa および ~/.ssh/id_dsa.pub (プロトコル・バージョン 2) に保存されます。

3. 対応する公開鍵がリモート・ホストの許可されたファイルに含まれている必要があります。生成された公開鍵の内容をこのファイルに追加します (authorized_keys ファイルの標準設定の場所は ~/.ssh ディレクトリです)。

これを行うには次のコマンドを実行します。

```
$> chmod 700 .ssh $> cd .ssh $> touch authorized_keys (バージョン 2 の場合: touch authorized_keys2) $> chmod 600 authorized_keys (バージョン 2 の場合: chmod 600 authorized_keys2) $> cat id_rsa.pub >> authorized_keys (バージョン 2 の場合: cat id_dsa.pub >> authorized_keys2) $> rm id_rsa.pub (バージョン 2 の場合: rm id_dsa.pub)
```

4. 識別用のファイルと秘密鍵を SiteScope マシンにコピーします。
5. SiteScope で、次の情報を [メイン設定] で指定して新しい UNIX リモート・サーバを作成します。
 - ユーザ名: これは、リモート・サーバに接続するユーザの名前にする必要があります。
 - パスワード: パスワードは、生成された秘密鍵のパスフレーズです。
 - 接続方式: SSH を指定します。
6. [詳細設定] を次のように設定します。



The screenshot shows a Windows-style dialog box titled '詳細設定' (Detailed Settings). It contains the following fields and options:

- SSH ポート番号: 22
- 最大接続数: 3
- SSH 認証方式: 鍵ファイル (dropdown menu)
- ☐ 接続キャッシュの無効化
- SSH 接続の鍵ファイル: C:\private.key
- ☐ SSH バージョン 2 のみを使用
- ☐ SSH Keep Alive メカニズム

7. リモート・サーバの接続をテストします。

第26章

UNIX オペレーティング・システム・アダプタ

本章の内容

概念

- 591ページ「UNIX オペレーティング・システム・アダプタの概要」

タスク

- 592ページ「アダプタの追加方法」

参照情報

- 593ページ「SiteScope で提供される UNIX アダプタ」
- 594ページ「アダプタ・ファイルの形式」
- 595ページ「アダプタ・コマンド・リスト」

UNIX オペレーティング・システム・アダプタの概要

SiteScope UNIX オペレーティング・システム・アダプタを使用して、SiteScope を拡張し、標準設定でサポートされている UNIX のプラットフォームおよびそれ以外のプラットフォームに接続してリモートで監視できます。そのためには、監視する UNIX の特定のプラットフォームがサポートされるようにアダプタ・ファイルを設定します。

SiteScope では、UNIX オペレーティング・システムの各種プラットフォームを稼働するサーバからさまざまなシステム・リソース情報を取得するために必要なコマンドを、アダプタ・ファイルを使用して記述します。これらのアダプタ・ファイルはプレーン・テキストで記述され、**<SiteScope のルート・ディレクトリ>/templates.os** ディレクトリに保存されます。SiteScope に含まれている標準設定の UNIX アダプタのリストについては、[593 ページ「SiteScope で提供される UNIX アダプタ」](#)を参照してください。

使用している環境の特定のシステム要件に合わせて既存のアダプタ・ファイルを変更できます。また、独自のアダプタ・ファイルを作成し、SiteScope で他の UNIX バージョンを監視できます。

BSM コネクタ UNIX オペレーティング・システム・アダプタを使用して、BSM コネクタを拡張し、標準設定でサポートされている UNIX のプラットフォームおよびそれ以外の UNIX のプラットフォームを稼働させるリモート・サーバにあるログ・ファイルにアクセスできます。そのためには、アクセスする UNIX の特定のプラットフォームがサポートされるようにアダプタ・ファイルを設定します。

BSM コネクタでは、UNIX オペレーティング・システムの各種プラットフォームを稼働させるサーバにあるログ・ファイルにアクセスや読み取りを実行するのに必要なコマンドを、アダプタ・ファイルを使用して記述します。これらのアダプタ・ファイルはプレーン・テキストで記述され、**<BSM コネクタ のルート・ディレクトリ>/templates.os** ディレクトリに保存されます。BSM コネクタに含まれている標準設定の UNIX アダプタのリストについては、[593 ページ「SiteScope で提供される UNIX アダプタ」](#)を参照してください。

ご使用の環境の特定のシステム要件に合わせて既存のアダプタ・ファイルを変更できます。あるいは、アダプタ・ファイルを独自に作成できます。

アダプタの追加方法

このタスクでは、UNIX の特定のバージョンにアダプタを追加する手順について説明します。

1. サポートを追加する UNIX プラットフォームが、SiteScope の標準設定でサポートされている UNIX プラットフォームのいずれかに類似する場合、その UNIX プラットフォームのアダプタ・ファイルのコピーを作成し、使用するアダプタの出発点として使用します。
2. SiteScope で接続する UNIX プラットフォームのコマンド・ライン要件に適合するように、アダプタ・ファイルを変更します。
3. アダプタ・ファイルを<SiteScope のルート・ディレクトリ>/templates.os ディレクトリに保存します。ファイル名には、.config 拡張子を使用する必要があります。
4. SiteScope サービスを再起動します。
5. 新しいアダプタ・ファイルを追加したインストール SiteScope を開きます。
6. 左側の表示枠で[リモート サーバ]をクリックして、リモート・サーバ・ビューを表示します。
7. リモート・サーバ・ツリーで、[UNIX リモート サーバ]を右クリックして、[新規 UNIX リモート サーバ]を選択します。[新規 UNIX リモート サーバ]ダイアログ・ボックスが開きます。
8. [オペレーティング システム]ボックスで、作成した UNIX アダプタの名前を選択します。
9. [OK]をクリックすると、SiteScope で新しいアダプタ・ファイルを使用して、リモート・サーバから該当するデータの取得が試行されます。
10. 1 つ以上のサーバ接続プロファイルがアダプタを使用するように設定した後にアダプタ・ファイルを変更する場合、アダプタをテストするには、[UNIX リモート サーバ]の[詳細テスト]オプションを使用できます。リモート・サーバを追加したら、[詳細テスト]には、リモートで SiteScope が実行されるコマンドの出力と、SiteScope による出力の解析が表示されます。

特定のテンプレートを変更するのに必要な作業量は、新しい UNIX プラットフォームが、サポートされている UNIX プラットフォームとどの程度異なるかによります。

SiteScope で提供される UNIX アダプタ

SiteScope で提供される標準設定の UNIX アダプタは、次のとおりです。

ファイル名	詳細
AIX.config	IBM AIX のアダプタ・ファイル
Digital.config	Digital Tru64 UNIX(Pre 4.x)のアダプタ・ファイル
FreeBSD.config	FreeBSD 3.x のアダプタ・ファイル
HP.config /HP-UX.config	Hewlett-Packard HP/UX のアダプタ・ファイル
HP64.config	Hewlett-Packard HP/UX 64 ビットのアダプタ・ファイル
ILO.config	Hewlett-Packard Integrated Lights-Out のアダプタ・ファイル
Linux.config	Linux(Red Hat など)のアダプタ・ファイル
MacOSX.config	Apple Macintosh OS X のアダプタ・ファイル
NonStopOS.config	Hewlett-Packard NonStop オペレーティング・システムのアダプタ・ファイル
OPENSERVER.config	SCO OpenServer のアダプタ・ファイル
RedHatEnterpriseLinux.config	Red Hat ES Linux のアダプタ・ファイル
SCO.config	SCO UNIXWare のアダプタ・ファイル
SGI.config	Silicon Graphics Irix のアダプタ・ファイル
Sun.config / SunOS.config	Sun Microsystems Solaris のアダプタ・ファイル
Tru64.config	Compaq Tru64 UNIX 5.x のアダプタ・ファイル

アダプタ・ファイルの形式

<SiteScope のルート・ディレクトリ>/templates.os ディレクトリに、SiteScope のリモート監視でサポートされている各 UNIX プラットフォームのアダプタ・ファイルがあります。これらのファイルには、SiteScope の標準設定ファイル形式が使用されます。

最初の設定グループ(最初の # 記号行の前の設定)にプラットフォームが記述されます。

```
id=yourPlatform name=ご使用のプラットフォーム名
```

id は、OS を示す SiteScope 内部の ID です。この ID は一意である必要があります。スペースを含まない英数字を使用できます。

ヒント: アダプタ・ファイルの名前を ID 名として使用することをお勧めします。たとえばアダプタ・ファイルの名前が `linux.config` の場合、ID は `linux` になります。

name は、リモート・サーバを追加または編集するときにオペレーティング・システムのドロップダウン・リストに表示する名前です。

テンプレート・ファイルの残りの部分には、# 文字の行で区切ってコマンドを 1 つずつ表す設定のグループが含まれています。たとえば、次の設定はディスク・スペース・コマンドを表します。

```
id=disks command=/usr/bin/df -k mount=6 name=1
```

各パラメータの内容は次のとおりです。

id=disks は、SiteScope でコマンドを検索するときに使用される ID です。これは、SiteScope コマンド・セットの 1 つであることが必要です(595 ページ「アダプタ・コマンド・リスト」を参照)。このエントリでは大文字と小文字が区別されます。

例:

command=/usr/bin/df -k は、ディスクについての情報を取得するために `usr/bin/df -k` コマンドが実行されることを意味します。

mount=6 と name=1 は、マウント名が列 6 にあり、マウントまたはファイル・システムの名前が列 1 にあることを意味します。データ名はコマンドごとに異なり、後述のようにドキュメント化されています。

これを次のコマンド出力に適用します。

```
Filesystem kbytes used avail capacity Mounted on /proc 0 0 0 0%/proc
/dev/dsk/c0t3d0s0 73049 42404 23341 65% /
```

disks コマンドにより、(/dev)で始まらない行では、ファイル・システムの名前として列 1 (/dev/dsk/c0t3d0s0)、マウント名として列 6("/")の読み取りが自動的にスキップされます。

アダプタ・コマンド・リスト

SiteScope が正常に動作するには、次の各コマンドの設定が必要です。各コマンド記述には、ID、コマンド、データの読み取り元を指定する 1 つ以上のフィールド、および(ヘッダ行など)特定の行を排除するためにコマンド出力のフィルタに使用する修飾子セット(任意指定)が必要です。

後述の変数 `column` は、データが表示される列の数を意味します。列はスペースで区切られたデータ・セットです。

さらに、コマンド記述に任意で適用できる特定のフィールドがあります。詳細については、[597 ページ「任意のアダプタ・コマンドの詳細」](#)を参照してください。

本項の内容

- [595 ページ「ディスク一覧表示」](#)
- [595 ページ「ディスク情報」](#)
- [596 ページ「メモリ」](#)
- [596 ページ「ページ障害」](#)
- [596 ページ「CPU 使用率」](#)
- [597 ページ「プロセス・リスト」](#)
- [597 ページ「プロセス・リストと詳細」](#)
- [597 ページ「ログ・ファイル・プロセス」](#)
- [597 ページ「任意のアダプタ・コマンドの詳細」](#)

ディスク一覧表示

ID	詳細	使用場所	フィールド
disks	システムにあるファイル・システムのリストを返します。 <code>/usr/bin/df -k</code> コマンドは、このデータを取得する標準的な方法です。返された行で <code>/dev</code> で始まらないものは自動的にスキップされます。	ディスク容量モニタ	name : ファイル・システムの名前の列。 mount : マウントの名前の列。

ディスク情報

ID	説明	使用場所	フィールド
disk	引数としてディスクを使用し、ディスクの合計、空き、使用済みパーセントを返します。	ディスク容量モニタ	total : ファイル・システムの合計容量(キロバイト)の列。 free : ファイル・システムの空き容量(キロバイト)の列。

メモリ

ID	説明	使用場所	フィールド
メモリ	スワップ領域の使用済み量と利用可能な量。	メモリ・モニタ	<p>swapUnit : バイト数を計算するために使用済み, 空き, または合計スワップ領域に適用される乗数。</p> <p>used : 使用済みのスワップ領域の量。</p> <p>free : 空いているスワップ領域の量。</p> <p>total : 合計スワップ領域の量。</p> <p>注: 読み込む必要があるのは, used, free, total フィールドのうちの 2 つのみです。残りは計算されます。</p>

ページ障害

ID	説明	使用場所	フィールド
pageFault	1 秒あたりのページ障害の数。複数のページ障害行に一致した場合は, 合計されます。	メモリ・モニタ	<p>pageFaults : ページ障害の数の列。</p> <p>inPageFaults : ページ読み込み障害の数の列。</p> <p>outPageFaults : ページ書き出し障害の数の列。</p> <p>units : ページング・データの pages (標準設定), pages/sec, または k/sec units。</p> <p>pageSize : 単位が k/sec の場合, pageSize を使用してページ数が計算されます。それ以外では無視されます。</p> <p>注: データが 1 列の場合は pageFaults, ページ障害データが 2 列の場合は inPageFaults と outPageFaults を使用します。inPageFaults と outPageFaults は, 合計ページ障害数を出すために合計されます。</p>

CPU 使用率

ID	説明	使用場所	フィールド
cpu	CPU の待ち % とアイドル % を返します。	CPU モニタ	<p>idle : CPU のアイドル %。</p> <p>wait : CPU の待ち % (任意指定)。</p>

プロセス・リスト

ID	説明	使用場所	フィールド
process	プロセス名が長いプロセスのリスト。通常これは /usr/bin/ps -ef です。	サービス・モニタ	name : プロセスの名前の列。

プロセス・リストと詳細

ID	説明	使用場所	フィールド
processDetail	プロセスのサイズを表示するプロセスのリスト。通常これは /usr/bin/ps -el です。	サービス・モニタ ([Check Memory] オプションは有効)	name : プロセスの名前の列。 size : プロセスのサイズの列。 pageSize : システム上のページ・サイズ(任意指定)。標準設定は 8192 です。

ログ・ファイル・プロセス

ID	説明	使用場所	フィールド
fileExists	ログ・ファイルが存在するかチェックします。	ログ・ファイル・モニタ(Windows または Linux)	一致 : ログ・エントリ内で一致するテキスト。
filesize	ファイルの変更があったか確認するためにファイル・サイズを返します。	ログ・ファイル・モニタ(Windows または Linux)	size : コマンド出力内のサイズ・カラムの値。
テール	ローカル・ファイル処理のためのファイル・コンテンツを読み取ります(サーバ側処理にはサポートされません)。	ログ・ファイル・モニタ(Windows または Linux)	
一致	perl または awk でサーバ側処理を実行します。	ログ・ファイル・モニタ(Linux 上)	

任意のアダプタ・コマンドの詳細

次のフィールドは、コマンド記述に任意で適用できます。

プロセス・リストと詳細

ID	説明
startLine	コマンドがデータ検索を開始する行番号。
endLine	コマンドがデータ検索を終了する行番号。

ID	説明
skipLine	一致したら行をスキップするパターン。
matchLine	一致したらその行のデータを検索するパターン。
startMatch	一致したらデータを検索するコマンドを起動するパターン。
endMatch	一致したらデータを検索するコマンドを終了するパターン。
reverseLines	true の場合、コマンド・ラインは逆転され後ろから前に読み取られます。これは、コマンドの最後にデータがあり、読み取りを開始するときに操作しづらい場合に便利です。

フィールド名に `fieldnameColumnName=COLUMN` という形式がある場合、アダプタはヘッダ(最初の行)から `COLUMN` を検索し、データを含む列を記録し、それらの設定を使用して `fieldname` フィールドを読み取ります。これは、列幅が異なり、データにスペースが使用されている場合に便利です。

次のコマンド出力から `my data` 情報を読み取る場合の例を示します。

```
MEM NAME DESC12K my data some of my data
```

コマンド記述の名前フィールドを次のように指定します。

```
nameColumnName=NAME
```

アダプタは、ヘッダ行を読み取り、`NAME` を検出し、前の列が終了した場所(この場合は `MEM`)と指定した列が終了する場所(`NAME`)を記録し、それを使用して、(この場合では)文字の列 6 ~ 22 を読み取ります。

`ColumnName` の実際の読み取りの例を参照するには、サポートされている UNIX プラットフォームの `process` および `processDetail` コマンドを参照してください。このメソッドを使用して、プロセス名とプロセスのサイズが取得されます。

第6部分

プリファレンス

第27章

証明書管理

本章の内容

概念

- 601ページ「証明書管理の概要」

タスク

- 602ページ「証明書管理を使用したサーバ証明書のインポート方法」

参照情報

- 603ページ「[証明書管理]のユーザ・インタフェース」

証明書管理の概要

リモート・サーバの監視時に、対象サーバが自己署名証明書を使用している場合、その証明書を信頼されたキーストアに追加する必要があります。セキュアな接続を使用して URL、WebSphere アプリケーション・サーバ、VMware ベースのサーバを監視している場合、[証明書管理] ページで自己署名証明書を管理できます。

証明書管理を使用すると次のような利点があります。

- 標準の JVM ツール(keytool)を使用して証明書を管理する必要がありません。これにより、SiteScope マシンに対するデスクトップとシェル・セッションの要件が不要になります。
- 視覚的なキーストア管理(証明書の追加と削除)が可能になり、証明書変更操作をするたびに SiteScope を再起動しなくても動的にキーストアを再読み込みできます。

注:

- [証明書管理] ページで証明書キーストアの表示、追加、変更を行うことができるのは、SiteScope 管理者ユーザ、または「**証明書リストの表示/編集**」権限を持つユーザのみです。
- モニタは使用するキーストアと関連付けられています。URL モニタ、WebSphere アプリケーション・サーバ・モニタ、VMware パフォーマンス・モニタの場合、< **SiteScope のルート・ディレクトリ** > `\javalib`
`\security\cacerts` のキーストアを使用します。ほかのキーストアは無視されます。
- その場合でも、必要であれば keytool による方法を使用して証明書をインポートできます。証明書の手動インポートの詳細については、各モニタ・タイプのドキュメントを参照してください。
- 自己生成した認証局(CA)証明書を使用してすべてのサーバ証明書に署名する場合、CA 証明書を 1 回だけインポートする必要があります。

証明書管理を使用した証明書のインポートの詳細については、[602 ページ「証明書管理を使用したサーバ証明書のインポート方法」](#)を参照してください。

ユーザ・インタフェースの詳細については、[603 ページ「\[証明書管理\] ページ」](#)を参照してください。

証明書管理を使用したサーバ証明書のインポート方法

このタスクでは、証明書管理を使用して自己署名証明書をインポートする手順について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。


- 602ページ「前提条件」
- 602ページ「サーバ証明書のインポート」
- 602ページ「モニタのプロパティの設定」

1. 前提条件

- 証明書管理を使用すると、URL Monitor, URL Content Monitor, URL List Monitor, URL Sequence Monitor, VMware Performance Monitor, および「WebSphere Application Server Monitor」の各モニタにセキュアな接続を設定する際に必要なサーバ証明書をインポートできます。
- [証明書管理] ページで証明書キーストアの表示、追加、変更を行うことができるのは、SiteScope 管理者ユーザ、または「証明書リストの表示/編集」権限を持つユーザのみです。ユーザ権限の詳細については、792ページ「権限」を参照してください。

2. サーバ証明書のインポート

監視している Web サーバのプレフィックスが `https://` の場合、その接続はセキュアで暗号化されており、サーバ証明書のインポートが必要です。

- a. [プリファレンス] > [証明書管理] を選択し、[証明書のインポート]  ボタンをクリックします。[ファイル] または [ホスト] を選択し、ソース・サーバの詳細を入力します。ユーザ・インタフェースの詳細については、604ページ「[証明書のインポート] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
- b. [読み込み済み証明書] テーブルから、インポートするサーバ証明書を選択して、[インポート] をクリックします。インポートした証明書が[証明書管理] ページに一覧表示されます。ユーザ・インタフェースの詳細については、603ページ「[証明書管理] ページ」を参照してください。

3. モニタのプロパティの設定

必要なサーバ証明書をインポートしたら、セキュアな接続を使用するモニタを作成できます。

[証明書管理]のユーザ・インタフェース

本項の内容





- 603ページ「[証明書管理]ページ」
- 604ページ「[証明書のインポート]ダイアログ・ボックス」
- 605ページ「[証明書の詳細]ダイアログ・ボックス」


[証明書管理]ページ

このページを使用して、SiteScope URL Monitor, URL Content Monitor, URL List Monitor, URL Sequence Monitor, VMware Performance Monitor, または「WebSphere Application Server Monitor」の各モニタで使用する証明書を管理します。[証明書管理]ページでは、キーストアの内容を追加、削除、更新できます。

アクセス方法	[プリファレンス]コンテキスト > [証明書管理]を選択します。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none">• [証明書管理]ページで証明書キーストアの表示、追加、変更を行うことができるのは、SiteScope の管理者、または「証明書リストの表示/編集」の権限を持つユーザのみです。• 列の並べ替え順序を変更するには、列・タイトルの矢印をクリックします。列が昇順または降順に並べ替えられていることを示す、小さい上向きまたは下向き矢印が表示されます。
関連タスク	602ページ「証明書管理を使用したサーバ証明書のインポート方法」
関連情報	601ページ「証明書管理の概要」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します(ラベルのない要素は山括弧内に表示されます)。

UI 要素	説明
	証明書のインポート : [証明書のインポート]ダイアログ・ボックスが開きます。証明書が[証明書管理]のキーストア・リストに追加されます。ユーザ・インタフェースの詳細については、604ページ「[証明書のインポート]ダイアログ・ボックス」を参照してください。
	証明書の削除 : 選択した証明書が[証明書管理]のキーストア・リストから削除されます。
	証明書リストの再読み込み : リモート・サーバの < SiteScope のルート・ディレクトリ > <code>jvarkit\security\cacerts</code> ファイルからキーストア証明書を再読み込みします。これにより、SiteScope を再起動しなくても、キーストアの変更を手動で再読み込みできます。
	すべて選択 : 表示されているすべての証明書を選択します。

UI 要素	説明
	選択範囲を解除: 選択をクリアします。
<証明書>	インポートしたサーバ証明書のリストが表示されます。証明書をダブルクリックすると、[証明書の詳細]ダイアログ・ボックスが開き、証明書のプロパティと値が表示されます。ユーザ・インターフェースの詳細については、605ページ「[証明書の詳細]ダイアログ・ボックス」を参照してください。
別名	証明書の別名。 注: インポート後の証明書の別名は変更できません(証明書のインポート操作時にのみ変更できます)。
発行者	証明書の発行者名。
次まで有効	証明書の有効期限の日時。
バージョン	証明書のバージョン番号。



[証明書のインポート]ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスを使用して、SiteScope URL モニタ、WebSphere アプリケーション・モニタ、VMware パフォーマンス・モニタで使用する証明書を[証明書管理]のキーストア・リストに追加します。[証明書管理]ページでは、キーストアの内容を追加、削除、更新できます。

アクセス方法	[プリファレンス]コンテキスト > [証明書管理]を選択します。[証明書のインポート]ボタンをクリックします。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> [証明書管理]ページで証明書キーストアの表示、追加、変更を行うことができるのは、SiteScope の管理者、または「証明書リストの表示/編集」の権限を持つユーザのみです。 列の並べ替え順序を変更するには、列・タイトルの矢印をクリックします。列が昇順または降順に並べ替えられていることを示す、小さい上向きまたは下向き矢印が表示されます。
関連タスク	602ページ「証明書管理を使用したサーバ証明書のインポート方法」
関連情報	601ページ「証明書管理の概要」

ユーザ・インターフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
ソースの選択	
ホスト	このオプションを選択して、ホスト・サーバから証明書を追加します。監視対象サーバの実 IP アドレスまたはホスト名を入力します。

UI 要素	説明
ポート	ホスト・マシンのポート番号 ([ホスト] オプションが選択されている場合にのみ利用可能)。 標準設定のポート値 : 443
ロード	[ホスト] フィールドで指定したマシンの証明書を読み込みます。証明書は [読み込み済み証明書] テーブルに表示されます。
ファイル	このオプションを選択して、ファイルから証明書を追加します。
選択	証明書のインポート元のファイルに移動して、[開く] をクリックします。必要な証明書を [証明書管理] のリストに追加します。
読み込み済み証明書	
	すべて選択 : 表示されているすべての証明書を選択します。
	選択範囲を解除 : 選択をクリアします。
別名	証明書の別名。証明書の別名を変更するには、証明書のインポート操作時に [別名] 列に新しい別名を入力します。 注 : 証明書をインポートした後に別名を変更することはできません。
発行者	証明書の発行者名。
次まで有効	証明書の有効期限の日時。
バージョン	証明書のバージョン番号。
インポート	[読み込み済み証明書] テーブルからインポートするサーバ証明書を選択して、[インポート] をクリックします。インポートした証明書が [証明書管理] ページに表示されます。

[証明書の詳細] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスには、選択したサーバ証明書のプロパティと値が表示されます。

アクセス方法	[プリファレンス] コンテキスト > [証明書管理] を選択します。[証明書管理] ページで証明書をダブルクリックします。
重要な情報	[証明書管理] ページで証明書キーストアの表示、追加、変更を行うことができるのは、SiteScope の管理者、または「証明書リストの表示/編集」の権限を持つユーザのみです。
関連情報	601 ページ「証明書管理の概要」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
別名	証明書の別名。
証明書のプロパティ	
フィンガープリント	証明書のフィンガープリント。
タイプ	証明書のタイプ。
バージョン	証明書のバージョン番号。
発行者プリンシパル	証明書の発行者名。
シリアル番号	証明書のシリアル番号。
署名アルゴリズム名	証明書の署名アルゴリズムの名前。
次から有効	証明書の有効期間の開始日時。
次まで有効	証明書の有効期限の日時。

第28章

共通イベント・マッピング

本章の内容

概念

- 608ページ「共通イベント・マッピングの概要」

タスク

- 609ページ「HPOM または BSM 用の共通イベント・マッピングの設定方法」

参照情報

- 611ページ「共通イベント・マッピングのユーザ・インタフェース」

共通イベント・マッピングの概要

イベントが Operations Manager(HPOM)または BSM 内の操作管理に直接送信されるように SiteScope を設定できます。これを行うには、[共通イベント マッピング]を使用して、SiteScope ランタイム・データと、HPOM または BSM ゲートウェイ・サーバに送信されるイベント属性値間のイベント・マッピング・インスタンスを作成します。共通イベント・マッピングは、その他の管理コンソールにイベントを送信するために汎用イベント統合を設定する際にも使用されます。

イベントのトリガ条件に一致すると、イベント・テンプレートを使用して、SiteScope ランタイム・データがイベント属性にマッピングされます。これらの属性にはイベント・サブシステムに渡される値があり、この値を使用して対応するイベントが作成されます(たとえば、テンプレートによってランタイム・データが HPOM または BSM のイベントに変換されます)。その後、イベントが HPOM、BSM、または指定した管理コンソールに送信されます。

このためには、モニタや警告に関連付けられている標準設定のイベント・マッピングを使用するか、別のイベント・マッピング(存在する場合)を選択します。または、[共通イベント マッピング]で新しいイベント・マッピングを作成することもできます。あるいは、警告の場合、その警告をトリガしたモニタに関連付けられたイベント・マッピング・テンプレートを使用できます。HPOM または BSM のイベントに対するイベント・マッピング作成の詳細については、[609ページ「HPOM または BSM 用の共通イベント・マッピングの設定方法」](#)を参照してください。

SiteScope は、HP CDA イベント・マッピング・テンプレート、CDA(Continuous Delivery Automation)用に特別に設定されるアウトオブボックス・テンプレートを含みます。CDA はポリシーベースのプラットフォームで、混合クラウド環境でのインフラストラクチャ・プロビジョニングを提供します。CDA は SiteScope と統合して SiteScope モニタをデプロイし、そのモニタからイベントを受け取ります。CDA ユーザ・インターフェースでは、受け取ったイベントを基にして状態を監視できます。CDA の詳細については、CDA のドキュメントを参照してください。

イベントが Operations Manager サーバに直接報告されるように SiteScope を設定する詳細については、[268ページ「SiteScope を使用して HPOM または BSM にイベントを送信する方法」](#)を参照してください。

汎用イベント統合を使用したイベント・マッピングの作成と、管理コンソールへのイベントの報告の詳細については、[705ページ「SiteScope 一般イベント統合の設定方法」](#)を参照してください。

イベント・マッピングのユーザ・インターフェースの詳細については、[611ページ「\[共通イベント マッピング\] ページ」](#)を参照してください。

イベント・マッピングの属性プロパティの詳細については、[1232ページ「SiteScope 警告テンプレートとイベントのプロパティのディレクトリ」](#)を参照してください。

ヒント: SiteScope のバージョン 11.00 以前および BSM のバージョン 9.00 以前からアップグレードする場合は、すべての既存のイベント統合を無効にし、新しい統合を設定することをお勧めします。アップグレード後に統合が機能しても、イベントは BSM イベント・ブラウザでのみ使用されます。

HPOM または BSM 用の共通イベント・マッピングの設定方法

このタスクでは、[共通イベント マッピング]を使用してモニタと警告のイベント・マッピングを設定する方法について説明します。これは、SiteScope ランタイム・データと送信されるイベントの属性値との間のマッピングです。

このタスクには次の手順が含まれています。

- 609ページ「前提条件」
- 609ページ「警告またはモニタ・インスタンスの設定」
- 609ページ「警告またはモニタ・インスタンスのイベント・マッピングの設定」
- 610ページ「結果」

1. 前提条件

- イベント・マッピングを作成または変更するには、SiteScope の管理者、または「**共通イベント・マッピングを追加、編集、または削除します**」の権限を付与されたユーザである必要があります。ユーザ権限の詳細については、773ページ「ユーザ管理プリファレンスの概要」を参照してください。
- 警告またはモニタ・インスタンスの設定時にイベント・マッピングを選択するには、HP Operations Agent をインストールして HPOM または BSM サーバに接続し、[HP Operations Manager 統合]ダイアログ・ボックス([**プリファレンス**] > [**統合プリファレンス**] > [**HP Operations Manager 統合**])でイベント統合を有効にする必要があります。タスクの詳細については、268ページ「SiteScope を使用して HPOM または BSM にイベントを送信する方法」を参照してください。

2. 警告またはモニタ・インスタンスの設定

トリガ時にイベント・システムの関連するイベントを作成する、警告またはモニタ・インスタンスを設定します。

SiteScope 警告の作成タスクの詳細については、1226ページ「警告の設定方法」を参照してください。

モニタ・インスタンスの作成タスクの詳細については、341ページ「モニタのデプロイ方法」を参照してください。

3. 警告またはモニタ・インスタンスのイベント・マッピングの設定

イベント・マッピングを設定して、警告またはモニタ・インスタンスに対応するイベント属性にマッピングします。警告またはモニタのタイプごとに複数のマッピングを作成できます。

- [警告]タブ>[新規警告]/[警告の編集]>[HP Operations Manager 統合設定]>[イベント マッピング]から警告を設定します。
- モニタの[プロパティ]タブ>[イベント マッピング設定]からモニタ・インスタンスを設定します。

各警告またはモニタ・インスタンスで、既存のイベント・マッピングを選択することも、[共通イベント マッピング]で新しいイベント・マッピングを作成することもできます。ユーザ・インタフェースの詳細については、612ページ「[新規イベント マッピング]/[イベント マッピングの編集]ダイアログ・ボックス」を参照してください。

注: イベント・マッピング設定は、SiteScope が HPOM と統合されており、イベント統合が有効である([HP Operations Manager 統合]ダイアログ・ボックスの[HP Operations Manager 統合メイン設定]パネルで**イベント送信の有効化**が選択されている)場合、または[統合プリファレンス]で**汎用イベント統合**が設定されている場合にのみ使用できます。

4. 結果

トリガされる警告またはモニタの測定値状態の変更に対応するイベントは、HPOM Console で表示できるほか、イベント管理ファウンデーション・ライセンスを保有していれば BSM の操作管理でも表示できます。BSM のインストールに操作管理が含まれていない場合は、CI の状態に影響するイベントをサービス状況の状況インジケータを使って確認できます。

共通イベント・マッピングのユーザ・インタフェース

本項の内容



- 611ページ「[共通イベント マッピング] ページ」
- 612ページ「[新規イベント マッピング] / [イベント マッピングの編集] ダイアログ・ボックス」




[共通イベント マッピング] ページ

このページは、イベントのマッピングと設定を定義するために使用されます。このページでは、SiteScope ランタイム・データと送信するイベントの属性値間のマッピングを設定できます。共通イベント・マッピングは、Operations Manager イベント統合と汎用イベント統合を設定するのに使用されます。

アクセス方法	[プリファレンス] コンテキスト > [共通イベント マッピング] を選択します。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none">• SiteScope の管理者、または「共通イベント・マッピングを追加、編集、または削除します」の権限を付与されたユーザのみが、共通イベント・マッピングを作成または変更できます。ユーザ権限の詳細については、773ページ「ユーザ管理プリファレンスの概要」を参照してください。• 共通イベント・マッピングがモニタまたは警告アクションで参照されている場合、その共通イベント・マッピングは削除できません。マッピングを削除するには、モニタまたは警告で参照されているイベント・マッピングを変更する必要があります。
関連タスク	<ul style="list-style-type: none">• 268ページ「SiteScope を使用して HPOM または BSM にイベントを送信する方法」• 609ページ「HPOM または BSM 用の共通イベント・マッピングの設定方法」• 705ページ「SiteScope 一般イベント統合の設定方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none">• 608ページ「共通イベント・マッピングの概要」• 612ページ「[新規イベント マッピング] / [イベント マッピングの編集] ダイアログ・ボックス」



ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
	新規イベント・マッピング : 新規イベント・マッピングが作成されます。ユーザ・インタフェースの詳細については、612ページ「[新規イベント マッピング] / [イベント マッピングの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
	イベント・マッピングの編集 : イベント・マッピングの編集ができるようになります。ユーザ・インタフェースの詳細については、612ページ「[新規イベント マッピング] / [イベント マッピングの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

UI 要素	説明
	イベント・マッピングの削除 : 選択したイベント・マッピングが[共通 イベント マッピング]のリストから削除されます。
	すべて選択 : 表示されているイベントがすべて選択されます。
	選択範囲を解除 : 選択をクリアします。
標準設定	<p>[標準設定]の横にある矢印をクリックし、次のオプションを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> 標準設定 モニタ・イベント・マッピングの編集 : [イベント マッピングの編集]ダイアログ・ボックスが開きます。このダイアログ・ボックスでは、標準設定のモニタのイベント・マッピング設定を変更できます。 標準設定 警告 イベント・マッピングの編集 : [イベント マッピングの編集]ダイアログ・ボックスが開きます。このダイアログ・ボックスでは、標準設定の警告のイベント・マッピング設定を変更できます。 <p>ユーザ・インタフェースの詳細については、612ページ「[新規 イベント マッピング] / [イベント マッピングの編集]ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p>
タイトル	<p>新規イベントを作成する場合に設定プロファイルに割り当てるタイトルの文字列。</p> <p>HP CDA イベント・マッピング・テンプレートは、標準設定で共通イベント・マッピングに含まれています。このテンプレートは CDA(Continuous Delivery Automation)によって使用されます。詳細については、608ページ「共通 イベント・マッピングの概要」を参照してください。</p>
詳細	イベントの作成時または編集時に割り当てられたマッピングの詳細。

[新規 イベント マッピング] / [イベント マッピングの編集]ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、新しい共通イベント・マッピングの作成や既存のマッピングの編集ができます。これらは、SiteScope ランタイム・データとイベントを送信するために使用される属性値間のマッピングになります。共通イベント・マッピングは、Operations Manager イベント統合と汎用イベント統合を設定するのに使用されます。

アクセス方法	<ol style="list-style-type: none"> 1. [プリファレンス]コンテキスト > [共通イベント マッピング]を選択します。 2. [共通イベント マッピング]ページで、次の手順を実行します。 <ol style="list-style-type: none"> a. [新規イベント マッピング]  ボタンをクリックするか、 b. 既存のイベントを選択して、[イベント マッピングの編集]  ボタンをクリックします。 <p>次の場合にもこのダイアログ・ボックスにアクセスします。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [警告]タブ > [新規警告] / [警告の編集] > [HP Operations Manager 統合設定] > [イベント マッピング]から警告を設定する場合。 • モニタの[プロパティ]タブ > [イベント マッピング設定]からモニタ・インスタンスを設定する場合。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> • SiteScope の管理者、または「共通イベント・マッピングを追加、編集、または削除します」の権限を付与されたユーザのみが、共通イベント・マッピングを作成または変更できます。ユーザ権限の詳細については、773ページ「ユーザ管理プリファレンスの概要」を参照してください。 • 共通イベント・マッピングがモニタまたは警告アクションで参照されている場合、その共通イベント・マッピングは削除できません。マッピングを削除するには、モニタまたは警告で参照されているイベント・マッピングを変更する必要があります。 • 長い説明を入力した場合や、共通イベント・マッピングのフィールドを変更した結果、フィールド名が長くなりすぎた場合には、SiteScope でイベントを送信できないことがあります。
関連タスク	<ul style="list-style-type: none"> • 268ページ「SiteScope を使用して HPOM または BSM にイベントを送信する方法」 • 609ページ「HPOM または BSM 用の共通イベント・マッピングの設定方法」 • 705ページ「SiteScope 一般イベント統合の設定方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> • 608ページ「共通イベント・マッピングの概要」 • 611ページ「[共通イベント マッピング]ページ」

メイン設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
名前	共通イベントの識別に使用する名前。
詳細	共通イベントの詳細。

[共通イベント モデル設定] - [一般]タブ

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
一般	
タイトル	<p>イベントで表示される項目を説明するわかりやすいテキスト。タイトルには、到達したしきい値(またはほかのトリガ条件)や現在の値の情報が含まれている必要があります。</p> <p>標準設定値：</p> <ul style="list-style-type: none"> 状態が変更された測定値の場合：Metric '<<metric>>' changed status from '<<oldStatus>>' to '<<newStatus>>' 警告の場合：Alert '<<alertName>>' was fired on monitor '<<fullMonitorName>>' status change <p>ヒント：通常、テキストはイベント・ブラウザに 1 行で表示されるため、最も関連する情報を最初に配置することをお勧めします。</p>
詳細	<p>イベントを説明する追加情報。</p> <p>標準設定値：</p> <ul style="list-style-type: none"> 状態が変更された測定値の場合：Metric '<<metric>>' crossed '<<thresholdCrossed>>' with value '<<metricValue>>' 警告の場合：Monitor '<<fullMonitorName>>' changed status from '<<oldStatus>>' to '<<newStatus>>'
重大度	<p>イベントに関連する項目の重大度。重大度レベルは、「不明」、「正常域」、「警告」、「軽微」、「重大」、または「致命的」です。</p> <p>標準設定値：<<severity>>。<<severity>> 属性は、選択されたモニタ測定値の[しきい値の設定]の[インジケータ状態および重大度]フィールドに指定される重大度に置き換わります。</p>
カテゴリ	<p>モニタ・タイプごとにイベントを編成およびグループ化するために使用される値。</p> <p>標準設定値：<<monitorType>></p> <p>例：データベース、アプリケーション、J2EE</p>
サブカテゴリ	<p>同じのカテゴリを持つイベントを編成およびグループ化するために使用される値。</p> <p>標準設定値：</p> <ul style="list-style-type: none"> 状態が変更された測定値の場合：<<metric>> 警告の場合：<<fullMonitorName>> <p>例：Oracle</p>

UI 要素	説明
ログのみ	<p>[True]を選択すると、履歴 イベント・ブラウザに直接 向かうイベントを、閉じたイベントとして送信できるようになります。このようなイベントは完全に処理されますが、[Life Cycle State]が[close from the beginning]に設定されます。</p> <p>典型的な例として、インジケータが通常または正常な状態にリセットされるイベントや、前の問題が解消されたことを示すイベント(問題が別のイベントにレポートされた)が挙げられます。</p> <p>[True for normal severity]を選択すると、SiteScope から HPOM に転送されるすべてのメッセージが、その重大度が正常域の場合、([アクティブ]メッセージ・ブラウザではなく)[確認済み]メッセージ・ブラウザに送信されます。これにより、[アクティブ]メッセージ・ブラウザが正常域の重大度メッセージで不必要に乱雑にならなくなります。</p> <p>標準設定値 : False</p>
イベント・タイプ・インジケータ	<p>イベントとインジケータ間のリンク。これにより、イベントが送信されるとインジケータの情報が更新されるようになります。</p> <p>標準設定値 :</p> <ul style="list-style-type: none"> 状態が変更された測定値の場合 : <<etiType>>:<<etiValue>>:<<metricValue>> 警告の場合 : <<etiType>>:<<etiValue>> <p>測定値の状態の変更の例 : CPU Load:High:90</p> <p>注 : インジケータを更新する場合、このフィールドは必須です。この属性のテンプレート値の変更はお勧めできません。</p>
関連	
キー	<p>発生したイベントのタイプを表す一意の文字列。管理対象の環境で両方のイベントが同じ状況を表している場合、2つのイベントのキーが同じになることがあります。重複イベントの数([Number of Duplicates]の数)が増加すると重複イベントは破棄されます。</p> <p>標準設定値 :</p> <ul style="list-style-type: none"> 状態が変更された測定値の場合 : <<siteScopeHost>>:<<monitorUUID>>:<<metric>>:<<etiValue>>:<<severity>> 警告の場合 : <<siteScopeHost>>:<<fullgroupid>>:<<monitorName>>:<<alertName>>:<<etiValue>> <p>測定値の状態の変更の例 :</p> <p>labmachine1:OMEventIntegration:CPU Utilization on SiteScope Server.utilization:Good</p>

UI 要素	説明
Submit close key condition	<p>クローズ・キー・パターンがイベント・サブシステムで評価できるようになります。選択する場合、次の[Close key pattern]ボックスにパターンを入力します。</p> <p>標準設定値：選択されている</p>
Close key pattern	<p>(このボックスは、[Submit close key condition]を選択した場合にのみ使用できます。)送信するイベントによって、この式に一致するキー属性を持つすべてのイベントが自動的に閉じるようになります。このフィールドの値は[キー]フィールドと同じにすることをお勧めします。</p> <p>注：SiteScope のイベント統合ポリシーでは、クローズ・キー・パターンの最後に必ず "<*>" が追加されます。"<" および ">" 記号はログ・ファイル・ポリシーでは解析できないため、このボックスでは使用できません。</p> <p>標準設定値： <<siteScopeHost>>:<<fullgroupid>>:<<monitorName>>:<<metric>></p> <p>例：labmachine1:OMEventIntegration:CPU Utilization on SiteScope Server.utilization<*></p>
詳細パラメータ	
CI hint	<p>イベントに関連する CI の情報。この属性は、イベント処理で正しい関連 CI(関連 CI の RTSM ID)を検出できるようにヒントを提供するために使用されます。</p> <p>標準設定値：<<ciHint>>。このフィールドの値は、SiteScope が BSM と HPOM のどちらに接続されているかによって異なります。このフィールドは編集できません。</p>
ホスト・ヒント	<p>イベントをトリガされたモニタによって監視されているターゲット・ホスト。値は、HPOM 内のレガシー・ノード属性に変換されます。HPOM 内にこのノードが存在しない場合、イベントは消失します。</p> <p>標準設定値：<<targetHost>></p> <p>例：</p> <ul style="list-style-type: none"> IPv4 : 15.15.12.13, DNS : host1.hp.com
ソース・ヒントを生成中	<p>監視アプリケーションと、対応するプローブ/エージェント(イベントに作成に関与)の情報。</p> <p>標準設定値：SiteScope@@<<siteScopeHost>></p> <p>例：SiteScope@@host1.hp.com</p>
属性	



UI 要素	説明
<属性のリスト>	<p>利用可能な属性変数のリストが表示されます。属性を追加するには、選択したテキスト・ボックスに[属性]リストの属性をドラッグするか、選択した属性をコピーするセルを選択し、Ctrl キーを押しながら I キーをクリックします。</p> <p>利用可能な属性変数の詳細については、1232 ページ「警告テンプレートとイベントのプロパティ」を参照してください。</p>

[共通イベント モデル設定] - [カスタム属性] タブ

このタブを使用して、カスタム属性を追加します。カスタム属性を使用して、ほかの共通イベント属性にないイベントの追加情報を提供できます。

重要な情報	<p>定義する属性名が一意であることと、出荷時の属性のリストに存在していないことを確認してください。</p> <p>カスタム属性は、キーと値で構成されます(両方とも文字列です)。値には任意の文字列を使用できます。この値は、ほかの値のように共通イベント・マッピングで使用されます。</p>
-------	---

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
	<p>イベントの新しいカスタム属性を作成できるようになります。各イベントのカスタム属性の数に制限はありません。</p> <ul style="list-style-type: none">● 新規のキー：テーブルに新しい行が追加され、属性の名前と値を追加できるようになります。● 既知のキー：既知のキーを選択できるサブメニューがオプションとして開きます。関連するキーを選択できます。[Name/Value] テーブルで新しい行が開き、選択したキーの名前が[Name]列に表示されます。対応する[Value]列にキーの値を入力できます。
	<p>カスタム属性の削除：選択したカスタム属性がテーブルから削除されます。</p>
Name and Value	<p>各イベントのカスタム属性の数に制限はありません。カスタム属性を使用して、ほかの共通イベント属性にない、またはほかの属性に含まれていないイベントの追加情報を表示できます。各カスタム属性は、[名前]と[値]のペアです。[名前]フィールドに属性の名前を入力し、[値]フィールドに属性の値を入力します。</p> <p>この機能は、複数のカスタマが製品の 1 つのインスタンスを使用している環境を管理する場合に使用できます。1 つのカスタム属性オブジェクトで複数のカスタマを処理できます。</p> <p>例：名前 = "cma1" ; 値 = "XYZ Company"</p>
属性	

UI 要素	説明
<属性のリスト>	<p>利用可能な属性変数のリストが表示されます。属性を追加するには、選択したボックスに[属性]リストの属性をドラッグするか、選択した属性をコピーするセルを選択し、Ctrl キーを押しながら I キーをクリックします。</p> <p>利用可能な属性変数の詳細については、1232 ページ「警告テンプレートとイベントのプロパティ」を参照してください。</p> <p>次の属性は、HP CDA イベント・マッピング・テンプレートの[カスタム属性]タブに含まれています。このテンプレートは、標準設定では共通イベント・マッピングに含まれています(CDA の詳細については、608 ページ「共通イベント・マッピングの概要」を参照)。</p> <ul style="list-style-type: none">• <<TemplateDeployPath>> : モニタがデプロイされたテンプレート・グループの完全パスを表示します。• <<monitorServiceId>> : (下を参)• <<monitorDrilldownURL>> : モニタ URL へのイベントでハイパーリンクを作成します。• <<newStatus>> : 測定値の現在の状態。
サービス ID	<p>モニタのサービス ID の値を入力して、SiteScope イベントから HPOM に送信されるサービス名をカスタマイズできます。これは、SiteScope モニタが HPOM サービス名と関連する場合に便利です。</p> <p>標準設定値 : <<monitorServiceId>></p>

第29章

資格情報のプリファレンス

本章の内容

概念

- [620ページ「資格情報のプリファレンスの概要」](#)

タスク

- [623ページ「資格情報のプリファレンスの設定方法」](#)

参照情報

- [625ページ「\[資格情報のプリファレンス\]のユーザ・インタフェース」](#)

資格情報のプリファレンスの概要

[資格情報のプリファレンス]では、SiteScope リソースの資格情報を中央管理できます。SiteScope モニタ、テンプレート、およびリモート・ホストのユーザ名とパスワードを資格情報プロファイルとして一度入力すると、これらのリソースの設定時に SiteScope によって自動的にその情報が設定されます。

[資格情報のプリファレンス]では、次の作業ができます。

- 資格情報の作成および管理。1つの中心的な場所から資格情報を追加、変更、および削除できます。
- 資格情報の更新。リソースの資格情報の期限が切れている場合や更新が必要な場合、資格情報プロファイルを更新すれば、SiteScope のリソースのすべての利用形態に変更が適用されます。これにより、SiteScope のリソースのすべての利用形態を検索して手動で更新する必要がなくなります。
- ユーザ資格情報の保護。[資格情報のプリファレンス]で保存したすべてのパスワードは暗号化されます。管理者、または「**資格情報のプリファレンスの追加、編集、または削除**」権限を付与されたユーザのみが、資格情報を変更できます。
- 資格情報プロパティによる検索と置換。[グローバル検索と置換]を使用して資格情報をほかの資格情報に置換します。
- 資格情報設定がある SiteScope へのモニタのコピー。複数の SiteScope が BSM に接続されている場合、モニタをほかの SiteScope にコピーすることもできます([SAM Administration]を介してのみ使用できます)。モニタをコピーする SiteScope に資格情報プロファイルが存在しない場合、その SiteScope に資格情報プロファイルが作成されます。

タスクの詳細については、[623ページ「資格情報のプリファレンスの設定方法」](#)を参照してください。ユーザ・インタフェースの詳細については、[625ページ「\[資格情報のプリファレンス\]ページ」](#)を参照してください。

本項の内容

- [620ページ「サポートされているモニタ」](#)
- [621ページ「資格情報プロファイルの監視」](#)
- [621ページ「注意事項」](#)

サポートされているモニタ

[資格情報のプリファレンス]を使用して、次のモニタの資格情報を保存できます。

モニタのカテゴリ	モニタ
アプリケーション	<ul style="list-style-type: none">「COM+ Server Monitor」「SAP CCMS Monitor」「SAP CCMS Alerts Monitor」「SAP Java Web Application Server Monitor」「SAP Performance Monitor」「SAP Work Processes Monitor」「Siebel Application Server Monitor」「WebSphere Application Server Monitor」
データベース	<ul style="list-style-type: none">「Database Counter Monitor」「DB2 8.x and 9.x Monitor」「Oracle Database Monitor」
サーバ	<ul style="list-style-type: none">「HP NonStop Event Log Monitor」「IPMI Monitor」
Web トランザクション	<ul style="list-style-type: none">「URL Monitor」「URL Content Monitor」「URL List Monitor」
仮想化とクラウド	<ul style="list-style-type: none">「VMware Performance Monitor」

資格情報プロファイルの監視

ユーザ資格情報が期限切れまたは変更された場合、これらの資格情報を使用しているモニタが機能しなくなり、状態が[エラー]になります。この状況を回避するには、認証をチェックする資格情報プロファイルごとにモニタを作成し、そのモニタ・タイプのすべてのモニタがテスト・モニタに依存するようにします。

たとえば、IPMI モニタ `IPMI_test_credentials` を作成し、サーバのログインとパスワードを手動で設定します。IPMI モニタの設定時に、[依存関係] パネルの[依存対象] ボックスに「`IPMI_test_credentials`」と入力し、[依存条件] として[利用可能]を選択します。`IPMI_test_credentials` モニタが何らかの理由により使用できなくなった場合、IPMI モニタは自動的に無効になります。

注意事項

- モニタをほかの古いバージョンの SiteScope にコピーする場合、資格情報設定は SiteScope にコピーされません。
- 資格情報プロファイルがモニタまたはリモート・ホストで参照されている場合、その資格情報プロファイルは削除できません。資格情報プロファイルを削除するには、各依存関係から資格情報プロファイルを削除する必要があります。
- テンプレート・リモート・ホストまたはテンプレート・モニタで使用している資格情報が削除されている

場合、欠落している資格情報を[資格情報のプリファレンス]に追加するか、リソースの資格情報をテンプレート・オブジェクトに手動で入力してからテンプレートをデプロイする必要があります。

資格情報のプリファレンスの設定方法

このタスクでは、ユーザ認証が必要な SiteScope オブジェクトの資格情報の設定および管理の手順について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- 623ページ「前提条件」
- 623ページ「資格情報プロファイルの作成」
- 623ページ「資格情報プロファイルを使用する SiteScope リソースの設定」
- 623ページ「資格情報プロファイルの更新」
- 624ページ「結果」

1. 前提条件

資格情報を作成または変更するには、SiteScope の管理者、または「資格情報プリファレンスを追加、編集、または削除します」の権限を付与されたユーザである必要があります。

ユーザ権限の詳細については、792ページ「権限」を参照してください。

2. 資格情報プロファイルの作成

ユーザ認証が必要な SiteScope リソースごとに、[資格情報のプリファレンス]で資格情報プロファイルを設定します。ユーザ・インタフェースの詳細については、625ページ「[資格情報のプリファレンス] ページ」を参照してください。

サポートされているモニタのリストについては、620ページ「サポートされているモニタ」を参照してください。

3. 資格情報プロファイルを使用する SiteScope リソースの設定

資格情報プロファイルがある SiteScope リソースを設定する場合、リソースの設定領域にある [資格情報] ボックスでプロファイルを選択します。

- モニタ設定時のユーザ・インタフェースの詳細については、そのモニタのモニタ設定を参照してください。
- リモート・サーバの設定時のユーザ・インタフェースの詳細については、次の[メイン設定]を展開してください。
 - 535ページ「[新規 Microsoft Windows リモート サーバ]/[Microsoft Windows リモート サーバの編集]ダイアログ・ボックス」
 - 541ページ「[新規 UNIX リモート サーバ]/[UNIX リモート サーバの編集]ダイアログ・ボックス」

4. 資格情報プロファイルの更新

リソースの資格情報に変更された場合、資格情報プロファイルを更新するだけでよく、リソースのすべての利用形態を検索して SiteScope の各リソースを個別に更新する必要はありません。プロファイルを変更するには、[資格情報のプリファレンス]でプロファイルを選択して[資格情報プロファイルの編集]をクリックし、必要な変更を行います。

ユーザ・インターフェースの詳細については、[625 ページ「\[資格情報のプリファレンス\] ページ」](#)を参照してください。

5. 結果

SiteScope では、[資格情報のプリファレンス]で入力した資格情報を使用してリソースのログインとパスワードが認証されます。

[資格情報のプリファレンス]のユーザ・インタフェース

本項の内容





- 625ページ「[資格情報のプリファレンス]ページ」
- 626ページ「[新規資格情報プロファイル]/[資格情報プロファイルの編集]ダイアログ・ボックス」


[資格情報のプリファレンス]ページ

このページでは、SiteScope リソースの資格情報を中央管理できます。このページでは、SiteScope モニタ、テンプレート、リモート・ホストの設定に使用する資格情報を追加、更新、および削除できます。

アクセス方法	[プリファレンス]コンテキスト > [資格情報のプリファレンス]を選択します。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none">• SiteScope の管理者、または「資格情報のプリファレンスの追加、編集、または削除」権限が付与されたユーザのみが、資格情報のプリファレンスを作成または変更できます。ユーザ権限の詳細については、773 ページ「ユーザ管理プリファレンスの概要」を参照してください。• 資格情報プロファイルがモニタで参照されている場合、その資格情報プロファイルは削除できません。プロファイルを削除するには、各依存関係からプロファイルを削除する必要があります。
関連タスク	623ページ「資格情報のプリファレンスの設定方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none">• 620ページ「資格情報のプリファレンスの概要」• 626ページ「[新規資格情報プロファイル]/[資格情報プロファイルの編集]ダイアログ・ボックス」



ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
	新規資格情報プロファイル : 新規資格情報プロファイルが作成されます。ユーザ・インタフェースの詳細については、626ページ「[新規資格情報プロファイル]/[資格情報プロファイルの編集]ダイアログ・ボックス」を参照してください。
	資格情報プロファイルの編集 : 資格情報プロファイルを編集できるようになります。ユーザ・インタフェースの詳細については、626ページ「[新規資格情報プロファイル]/[資格情報プロファイルの編集]ダイアログ・ボックス」を参照してください。
	資格情報プロファイルの削除 : 選択した資格情報プロファイルが[資格情報プリファレンス]から削除されます。
	すべて選択 : 表示されている資格情報プロファイルがすべて選択されます。

UI 要素	説明
	選択範囲を解除: 選択をクリアします。
名前	新規資格情報プロフィールを作成する場合に設定プロフィールに割り当てる名前の文字列。
ログイン	該当の資格情報プロフィールを使用するリソースにアクセスするためのユーザ名。
詳細	資格情報プロフィールの作成時または編集時に割り当てられた設定プロフィールの詳細。

[新規資格情報プロフィール]/[資格情報プロフィールの編集]ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、新規資格情報プロフィールの作成や既存のプロフィールの編集ができます。資格情報プロフィールを使用して、SiteScope リソースの認証資格情報を保存および管理します。

アクセス方法	<p>[プリファレンス]コンテキスト > [資格情報のプリファレンス]を選択します。[資格情報のプリファレンス]ページで次を実行します。</p> <ul style="list-style-type: none">• [新規資格情報プロフィール]  ボタンをクリックするか、• 既存の資格情報プロフィールを選択して[資格情報プロフィールの編集]  ボタンをクリックします。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none">• SiteScope の管理者、または「資格情報プリファレンスを追加、編集、または削除します」権限を付与されたユーザのみが、資格情報のプリファレンスを作成または変更できます。• このページは、ユーザ権限に応じてビュー・モードまたは編集モードで開きます。 <p>ユーザ権限の詳細については、773ページ「ユーザ管理プリファレンスの概要」を参照してください。</p>
関連タスク	623ページ「資格情報のプリファレンスの設定方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none">• 620ページ「資格情報のプリファレンスの概要」• 625ページ「[資格情報のプリファレンス]ページ」

メイン設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
名前	資格情報プロフィールのわかりやすい名前。 最大文字数 :50 文字
ドメイン	資格情報のドメイン。接続時に、次の形式でドメインがログインに追加されます。 <ドメイン>\<ログイン>
ログイン	該当の資格情報プロフィールを使用するリソースにアクセスするためのユーザー名。
パスワード	該当の資格情報プロフィールを使用するリソースにアクセスするためのパスワード。 すべての SiteScope パスワードは、3DES(TDES(Triple Data Encryption Algorithm)とも呼ばれます)を使用して暗号化されます。詳細については、『HP SiteScope デプロイメント・ガイド』の「SiteScope プラットフォームのセキュリティ強化」を参照してください。
パスワードの確認	[パスワード]ボックスで入力したパスワードの確認。これは、新規資格情報を作成するときや、既存の資格情報のパスワードを変更するときに使用されます。

詳細設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
詳細	<p>設定プロフィールの詳細。プロパティを編集または表示する場合にのみ表示されます。HTML タグ(
, <HR>, および タグなど)を使用して、表示形式および表示スタイルを制御できます。</p> <p>注 :このボックスに入力した HTML コードは、有効性とセキュリティがチェックされ、コード(複数行にわたるために切り捨てられたコードなど)を修正する修正アクションが実行されます。悪意のある HTML コードや JavaScript が検出されると、フィールド全体が拒否されます。禁止されている HTML 内容は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none">• タグ: script, object, param, frame, iframe。• on で始まる属性を含むタグは拒否される。例: onhover。• 値に javascript が指定された属性。

タグの検索/フィルタ

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します(ラベルのない要素は山括弧内に表示されます)。

UI 要素	詳細
<タグ名と値>	<p>SiteScope オブジェクト(グループ, モニタ, リモート・サーバ, テンプレート, プリファレンス・プロファイル)を検索およびフィルタするために, キーワード・タグが使用される。SiteScope にタグが作成されていない場合, このセクションは空白で表示されます。タグが作成されている場合はここに表示され, 必要に応じてタグを選択できます。</p> <p>概念の詳細については, 106ページ「SiteScope オブジェクトの検索」を参照してください。</p>
タグの追加	<p>[新規タグ]ダイアログ・ボックスを開き, 新しいキーワード・タグを追加できる。ユーザ・インターフェースの詳細については, 111ページ「[新規タグ]/[タグの編集]ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p>

第30章

電子メール・プリファレンス

本章の内容

概念

- 630ページ「電子メール・プリファレンスの概要」

参照情報

- 631ページ「電子メール・プリファレンスのユーザ・インタフェース」

電子メール・プリファレンスの概要

SiteScope が外部電子メール・サーバと通信するために必要な設定を行うには、[電子メールプリファレンス]を使用します。電子メール・プリファレンスは、SiteScope が警告を電子メール・メッセージとして送信するために使用する標準設定です。

[電子メールプリファレンス]ページには、電子メール警告メッセージを受信者に送信するために定義したカスタムの電子メール受信者プロファイルが表示されます。電子メール受信者プロファイルを 1 つ以上の電子メール警告に関連付けるには、該当する警告定義を編集します。

これらのプリファレンスの設定の詳細については、[631 ページ「\[電子メールプリファレンス\]ページ」](#)を参照してください。

電子メール・プリファレンスのユーザ・インタフェース

本項の内容





- 631ページ「[電子メールプリファレンス]ページ」
- 632ページ「[新規電子メール受信者]/[電子メール受信者の編集]ダイアログ・ボックス」
- 634ページ「[電子メールプリファレンスの標準設定]ダイアログ・ボックス」



[電子メールプリファレンス]ページ

電子メールは、SiteScope によって問題が検出されたときに(SiteScope インタフェースに表示される視覚的なアイコンと状態メッセージに加えて)イベント警告を送信するための標準設定のメディアです。[電子メールプリファレンス]は、SiteScope が電子メール警告やその他の SiteScope メッセージを送信する際に使用する SMTP メール・サーバ、受信者アドレスなどの設定を指示するために使用します。

アクセス方法	[プリファレンス]コンテキスト > [電子メール プリファレンス]を選択します。
重要な情報	SiteScope の管理者、または「 電子メール、ページ、HTTP、SNMP のプリファレンスの追加、編集、または削除 」の権限を付与されたユーザのみが、電子メール・プリファレンスを作成または変更できます。ユーザ権限の詳細については、773ページ「 ユーザ管理プリファレンスの概要 」を参照してください。
関連情報	<ul style="list-style-type: none">• 630ページ「電子メール・プリファレンスの概要」• 632ページ「[新規電子メール受信者]/[電子メール受信者の編集]ダイアログ・ボックス」• 634ページ「[電子メールプリファレンスの標準設定]ダイアログ・ボックス」



ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
	新規電子メール受信者 ：新規の電子メール受信者プロファイルを作成します。ユーザ・インタフェースの詳細については、632ページ「[新規電子メール受信者]/[電子メール受信者の編集]ダイアログ・ボックス」を参照してください。
	電子メール受信者の編集 ：電子メール受信者プロファイルを編集できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、632ページ「[新規電子メール受信者]/[電子メール受信者の編集]ダイアログ・ボックス」を参照してください。
	電子メール受信者の削除 ：選択した電子メール受信者プロファイルを[電子メールプリファレンス]から削除します。
	電子メール受信者のテスト ：電子メール・アドレスにメッセージを送信できるかどうかをテストします。[電子メール]ダイアログ・ボックスにメッセージを入力し、[テスト]をクリックします。

UI 要素	説明
	すべて選択 : 表示されている電子メール受信者プロフィールをすべて選択します。
	選択範囲を解除 : 選択をクリアします。
標準設定	<p>[標準設定]の横にある矢印をクリックし、次のオプションを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 編集 : [電子メールプリファレンスの標準設定]ダイアログ・ボックスが開き、[新規電子メール受信者]ダイアログ・ボックスに表示された標準設定を変更できます。この設定の詳細については、634ページ「[電子メールプリファレンスの標準設定]ダイアログ・ボックス」を参照してください。 ● テスト : 選択したアドレスに電子メールを送信できるかどうかをテストします。選択可能な受信者のリストからテストする電子メール受信者を選択するか、[電子メールアドレス]ボックスに電子メール・アドレスを入力します。
名前	新規電子メール受信者を作成する場合に設定プロフィールに割り当てる名前の文字列。
詳細	プロフィールの作成時または編集時に割り当てられた設定プロフィールの詳細。
電子メール	警告の送信先の電子メール・アドレス。
有効	電子メール警告の状態。状態が「いいえ」の場合、これらの電子メール・アドレスへの電子メール警告の送信は停止されます。

[新規電子メール受信者]/[電子メール受信者の編集]ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、新規電子メール受信者プロフィールの作成や既存のプロフィールの編集ができます。SiteScope では、電子メール受信者プロフィールを使用して電子メール警告を送信します。

アクセス方法	<p>[プリファレンス]コンテキスト > [電子メール プリファレンス]を選択します。 [電子メール プリファレンス]ページで、次のいずれかの操作を行います。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● [新規電子メール受信者]  ボタンをクリックするか、 ● 既存の電子メール受信者プロフィールを選択して[電子メール受信者の編集]  ボタンをクリックします。
重要な情報	<p>SiteScope の管理者、または「電子メール、ページャ、HTTP、SNMP のプリファレンスの追加、編集、または削除」の権限を付与されたユーザのみが、電子メール・プリファレンスを作成または変更できます。ユーザ権限の詳細については、773ページ「ユーザ管理プリファレンスの概要」を参照してください。</p>

関連情報	<ul style="list-style-type: none">630ページ「電子メール・プリファレンスの概要」631ページ「[電子メールプリファレンス] ページ」634ページ「[電子メールプリファレンスの標準設定] ダイアログ・ボックス」
------	--

メイン設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
名前	表示されているプロファイルの識別に使用する電子メール受信者プロファイル定義の名前。
詳細	<p>設定プロファイルの詳細。プロパティを編集または表示する場合にのみ表示されます。HTML タグ(
, <HR>, および タグなど)を使用して、表示形式および表示スタイルを制御できます。</p> <p>注 :ここに入力した HTML コードは、有効性とセキュリティがチェックされ、コード(長くなったため切り捨てられたコードなど)を修正する修正アクションが実行されます。悪意のある HTML コードや JavaScript が検出されると、フィールド全体が拒否されます。禁止されている HTML 内容は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none">タグ: script, object, param, frame, iframe。on で始まる属性を含むタグは拒否される。例: onhover。値に javascript が指定された属性。
電子メールの送信先	<p>警告の送信先の電子メール・アドレス。</p> <p>例: <code>test@mycompany.com</code></p> <p>複数の電子メール・アドレスは、カンマで区切って入力できます。</p> <p>例: <code>test@mycompany.com, sysadmin@thiscompany.com</code></p>
無効	設定された電子メール・アドレスへの電子メール警告の送信が停止されます。この電子メール設定が含まれる警告すべてを編集せずに、特定の電子メールを一時的に無効にする場合、このオプションを使用します。

詳細設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
テンプレート	電子メール警告設定を定義するテンプレート。設定を定義した後は、1つの警告がユーザとページャに送信されます。ページャには ShortMail テンプレートを使用します。
スケジュール	<p>電子メールをいつ有効にするかを指定します。ドロップダウン・メニューに設定されたスケジュールから、より厳密なスケジュールを選択することもできます。</p> <p>標準設定値: 毎日, 全日</p>

タグの検索/フィルタ

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します(ラベルのない要素は山括弧内に表示されます)。

UI 要素	詳細
<タグ名と値>	SiteScope オブジェクト(グループ、モニタ、リモート・サーバ、テンプレート、プリファレンス・プロファイル)を検索およびフィルタするために、キーワード・タグが使用される。SiteScope にタグが作成されていない場合、このセクションは空白で表示されます。タグが作成されている場合はここに表示され、必要に応じてタグを選択できます。 概念の詳細については、106ページ「SiteScope オブジェクトの検索」を参照してください。
タグの追加	[新規タグ]ダイアログ・ボックスを開き、新しいキーワード・タグを追加できる。ユーザ・インタフェースの詳細については、111ページ「[新規タグ]/[タグの編集]ダイアログ・ボックス」を参照してください。

[電子メールプリファレンスの標準設定]ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、電子メール受信者の標準設定値を設定できます。

アクセス方法	[プリファレンス]コンテキスト>[電子メールプリファレンス]を選択します。 [電子メールプリファレンス]ページで[標準設定]>[編集]をクリックします。
重要な情報	SiteScope の管理者、または「電子メール、ページャ、HTTP、SNMP のプリファレンスの追加、編集、または削除」の権限を付与されたユーザのみが、電子メール・プリファレンスを作成または変更できます。ユーザ権限の詳細については、773ページ「ユーザ管理プリファレンスの概要」を参照してください。
関連情報	<ul style="list-style-type: none">630ページ「電子メール・プリファレンスの概要」631ページ「[電子メールプリファレンス]ページ」632ページ「[新規電子メール受信者]/[電子メール受信者の編集]ダイアログ・ボックス」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
電子メール・サーバのドメイン名	SiteScope が電子メール・メッセージの送信時に使用する SMTP メール・サーバのドメイン名。 例: mail.thiscompany.com メール・サーバのドメイン名がわからない場合は、システム管理者に問い合わせてください。

UI 要素	説明
管理者の電子メール・アドレス	SiteScope が状態メッセージを送信する宛先の電子メール・アドレス。 例: sysadmin@thiscompany.com
毎日の状態	SiteScope は、要約した状態メッセージを管理者の電子メール・アドレスに毎日送信します。この電子メールは、毎日午前 7:07 に生成するようにスケジュール設定されます。送信する電子メールの件名には、「SiteScope の毎日の状態」が含まれます。電子メールの内容には、アクティブなモニタとグループの数、該当する SiteScope メイン・ページへの URL リンク、および SiteScope インストールのバージョン番号が含まれます。
SiteScope 開始 / 再開	SiteScope では、SiteScope の再起動ごとに短いメッセージを送信します。再起動は、モニタ実行の問題を示唆している場合があります。詳細については、 1114 ページ「SiteScope サーバの状況」 を参照してください。 注: SiteScope は 1 日に 1 回自動的に再起動しなくなりました。
送信元電子メール・アドレス	SiteScope で生成されるメールの送信元アドレスとして使用する電子メール・アドレス。電子メール・アドレスを指定すると、SiteScope から送信された電子メールの参照や並べ替えが容易になる場合があります。何も入力しないと、[送信元電子メール・アドレス]は、メールの実際の送信元アドレスと同じになります。 例: sitescope@mycompany.com 注: 使用するメール・サーバが NTLM 認証を必要な場合(後述)、ここで入力する電子メール・アドレスは有効な電子メール・アドレスである必要があります。
バックアップ電子メール・サーバ・ドメイン名	SiteScope がプライマリ・メール・サーバに到達できない場合に使用する SMTP メール・サーバのドメイン名。バックアップ・メール・サーバのドメイン名がわからない場合は、システム管理者に問い合わせてください。 例: gateway.mycompany.com。
ログイン	SMTP サーバで要求されるユーザ名。このユーザ名は、プライマリとバックアップの両方のメール・サーバに使用します。 注: この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。
パスワード	SMTP サーバで要求されるパスワード。このパスワードは、プライマリとバックアップの両方のメール・サーバに使用します。 注: この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。

UI 要素	説明
NTLM 認証	<p>ドロップダウン・リストから、次の NTLM 認証オプションを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none">• なし: メール・サーバで NTLM 認証が不要な場合に選択します。• NTLMv1: メール・サーバで NTLM バージョン 1 を使用した認証が必要な場合に選択します。• NTLMv2: メール・サーバで NTLM バージョン 2 を使用した認証が必要な場合に選択します。 <p>注: この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p>標準設定値: なし</p>
タイムアウト(秒単位)	<p>SMTP サーバからの応答を待機する時間(秒単位)。タイムアウト期間内にプライマリ・メール・サーバからの応答を受信しなかった場合、SiteScope はバックアップ・メール・サーバの使用に切り替わります。</p> <p>標準設定値: 60 秒</p>

第31章

一般プリファレンス

本章の内容

概念

- [638ページ「一般プリファレンスの概要」](#)

参照情報

- [639ページ「\[一般プリファレンス\]ページ」](#)

一般プリファレンスの概要

本項では、次の SiteScope 一般プリファレンスの主要概念について説明します。

- 638 ページ「標準設定の認証資格情報の使用」
- 638 ページ「モニタ・プロセスの一時停止」
- 638 ページ「Web スクリプト・モニタのファイル・ディレクトリ」

注: 多言語化の問題に関連する一般プリファレンスの詳細については、805 ページ「多言語化 (I18N) 環境での SiteScope の使用」を参照してください。

これらのプリファレンスの設定の詳細については、639 ページ「[一般プリファレンス] ページ」を参照してください。

標準設定の認証資格情報の使用

このセクションを使用して、特定のアプリケーションおよびシステムにログインするために SiteScope で使用する標準設定の認証資格情報を入力します。このユーザ名およびパスワードは、次の条件を満たす場合に使用されます。

- ほかの認証資格情報が個々のモニタの設定時に入力されていない。
- 認証先アプリケーションまたはシステムで認証資格情報が必要である。URL モニタ、URL シーケンス・モニタ、Web サービス・モニタでこの機能を使用できます。

モニタ・プロセスの一時停止

大規模で複雑な監視環境の場合、大量のモニタが実行されて SiteScope の負荷が高くなり、応答が遅くなる可能性があります。これは、一部のモニタで過度に監視が行われるように設定されていることや、システムが過負荷になっていることなどが原因になります。監視アクションによって SiteScope のパフォーマンスが下がっている場合、監視アクションを一時停止して設定を変更することをお勧めします。モニタを一時停止して、大規模な設定操作（一括の検索置換など）の完了に要する時間を削減できます。[全モニタを一時停止] オプションには、次の機能があります。

Web スクリプト・モニタのファイル・ディレクトリ

Web スクリプト・モニタでは、VuGen スクリプトを実行してパフォーマンスと Web アプリケーションのデータ内容を監視します。モニタで使用する VuGen スクリプトは、これらのスクリプト用の標準設定ディレクトリ(< SiteScope のルート・ディレクトリ > \templates.webscripts) に保存することも、一般プリファレンスで別のディレクトリを定義することもできます。

注: Web スクリプト・モニタは、SiteScope に直接アクセスしているユーザのみが使用できます。BSM の SAM 管理を使用して SiteScope にアクセスしているユーザは使用できません。

[一般プリファレンス] ページ

このページでは、SiteScope のライセンス情報のほかに、一般的な表示機能、任意指定の機能、アクセス・オプションを入力および表示できます。

アクセス方法	[プリファレンス] コンテキスト > [一般プリファレンス] を選択します。
重要な情報	SiteScope の管理者、または「一般プリファレンスの編集」権限を付与されたユーザのみが、一般プリファレンスを作成または変更できます。ユーザ権限の詳細については、773 ページ「ユーザ管理プリファレンスの概要」を参照してください。
関連タスク	808 ページ「SiteScope の英語以外のロケールの設定方法」
関連情報	638 ページ「一般プリファレンスの概要」

メイン・パネル

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
VuGen スクリプトパスのルート	Web スクリプト・モニタで使用する VuGen スクリプトの zip ファイルを保存するディレクトリ。ここで入力したディレクトリのファイルが Web スクリプト・モニタの設定時に利用可能なスクリプトのリストに表示されます。ここで値を入力しない場合、標準設定のディレクトリ < SiteScope のルート・ディレクトリ > \templates.webscripts ファイルがモニタの設定時に表示されます。 モニタを使った作業の詳細については、「Web Script Monitor」を参照してください。
標準設定の認証ユーザ名	リモート・システムの認証に使用する標準設定のユーザ名。< ユーザ名 > と < ドメイン > \< ユーザ名 > のどちらも有効な形式です。モニタの設定時に別のユーザ名を明示的に入力しないかぎり、SiteScope ではこのユーザ名が使用されます。
標準設定の認証パスワード	リモート・システムの認証に使用する標準設定のパスワード。モニタの設定時に別のパスワードを明示的に入力しないかぎり、SiteScope では URL、URL シーケンス、Web サービスのモニタ・タイプにこのパスワードが使用されます。
プリエンプティブ認証	SiteScope で認証先 URL が要求されたときに、標準設定のユーザの資格情報を認証するために使用されるオプションが表示されます。 <ul style="list-style-type: none">最初の要求を認証：認証先サーバに対して、SiteScope によって作成される最初の要求でユーザ名とパスワードが送信されます。要求された場合に認証：サーバでユーザ名とパスワードの要求があった場合に、2 番目の要求でユーザ名とパスワードが送信されます。 標準設定値：最初の要求を認証

UI 要素	説明
SiteScope 再起動スケジュール	<p>SiteScope の再起動のスケジュールを選択できます([オフ], [開始後 24 時間ごと], または[時間指定スケジュールプリファレンス]でスケジュールを定義できます)。スケジュールの定義の詳細については, 755ページ「時間指定スケジュール・ページ」を参照してください。</p> <p>標準設定値: オフ</p>
ファイルごとのバックアップ数	<p>保持する SiteScope 設定ファイルのバックアップ数が表示されます。この機能は, 重要なモニタ, 警告, 一般的な SiteScope 設定情報の保持に役立ちます。この数は, 保持するファイルごとのバックアップ数を表します。SiteScope では, filename.bak.1, filename.bak.2, filename.bak.# の命名規則が使用されます。ここで 1 は最新のバックアップ・ファイルになります。</p> <p>例: 一般的な SiteScope 設定情報が含まれるファイルを <SiteScope のルート・ディレクトリ>\groups にバックアップできます。</p> <p>標準設定値: 1</p>
ロケール固有の日付と時間	<p>特定のロケール, 国, 文化に該当する形式で日付と時間が表示されます。別のロケール設定を使用するには, 目的のロケールのコードが含まれるように SiteScope 設定ファイルを変更し, [一般プリファレンス]設定でこのオプションを選択します。このタスクの実行方法の詳細については, 808ページ「SiteScope の英語以外のロケールの設定方法」を参照してください。</p> <p>標準設定値: 選択済み(標準設定は米国形式です)</p>
国際化対応版	<p>国際化対応文字セットが有効になります。このオプションを選択すると, すべての文字エンコーディングが SiteScope によってサポートされます。このオプションを使用して, 複数のソースおよびオペレーティング・システムの文字エンコーディング(外国語の Web ページなど)を SiteScope で同時に処理できます。</p> <p>選択しない場合, SiteScope がインストールされているオペレーティング・システムの標準設定の文字セットのみがサポートされます。すべての URL モニタ・タイプ, ログ・ファイル・モニタ, ファイル・モニタはこのかぎりではありません。これらのモニタ・タイプでは, [国際化対応版]オプション設定に関係なく複数の文字エンコーディングがサポートされます。このタスクを実行する方法の詳細については, 808ページ「SiteScope の英語以外のロケールの設定方法」を参照してください。</p> <p>標準設定値: 選択されていない</p>

UI 要素	説明
全 モニタを 一時停止	<p>すべてのモニタの実行が一時停止されます。監視 インフラストラクチャ全体の設定を変更する場合に使用します。監視を再アクティブ化するには、このオプションをクリアします。</p> <p>注: このオプションでは、該当の SiteScope インストールで現在定義されているすべてのモニタが無効になります。モニタの一時停止を設定してからこのオプションをクリアしてモニタを再有効化する場合、モニタの一時停止アクションの前に無効化されていた個々のモニタは元の無効化された状態が維持されます。</p> <p>このオプションを使用すると、レポートに影響する可能性があります。監視が一時停止されている間に実行されたモニタでは、レポートでその期間が空白で表示される場合があります。</p> <p>警告: SiteScope でモニタが一時停止になっていることは、現在インタフェースには表示されません。[全 モニタを一時停止] オプションが有効になっている場合、「SiteScope は[一時停止] モードです; モニタは現在一切起動していません。」というメッセージが表示されます。</p> <p>標準設定値: 選択されていない</p>

ライセンス

SiteScope を使用するには、有効なライセンスが必要です。このパネルでは、SiteScope へのライセンス・ファイルのインポートのほか、ライセンスのタイプ、状態、ポイント消費などの表示が行えます。

アクセス 方法	[プリファレンス] コンテキスト > [一般プリファレンス] > [ライセンス] を選択します。
重要な 情報	<ul style="list-style-type: none">有効なライセンス・ファイルがない場合、HP Licensing Portal (https://webware.hp.com/WelcomingPortal) (英語 サイト) を使用して、ライセンスの更新またはアップグレードの要求を送信できます。[OS インスタンスライセンス使用状況] の表には、1 つ以上の OS ベース・ライセンス・モニタが定義されているホストだけが表示されます。
関連 情報	『HP SiteScope デプロイメント・ガイド』の「SiteScope ライセンス」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
<ライセンス・サマリ>	<p>ライセンスの種類と状態のサマリ(ライセンスされたポイントの数と使用されているポイントの数, OS ライセンス・インスタンスの合計数, 使用されている OS インスタンス, OS インスタンスによって保存されているライセンス・ポイントの数など)が表示されます。一時ライセンスまたは評価ライセンスの場合, ライセンスの残余日数も含まれます。</p> <p>注: これには, 期限が切れているライセンスや評価ライセンス(一般ライセンスがインポートされている場合)の情報は含まれていません。</p>
ライセンス・ファイル	<p>SiteScope ライセンス・ファイルのパスを入力するか, [選択] ボタンをクリックしてライセンス・ファイルを選択します。60 日間のトライアル期間以降も SiteScope を使用する場合はライセンスを購入する必要があります。</p>
インポート	<p>選択したライセンス・ファイルからライセンスがインポートされます。</p>
ライセンスの削除	<p>選択したライセンスが削除されます。</p> <p>注: ライセンスを削除すると, 選択されているライセンス・タイプのほかのライセンスも削除される可能性があります。</p>
[インストールされているライセンス] テーブル	
期限切れライセンスを表示	<p>期限切れライセンスをテーブル内に含める場合に選択します。</p>
タイプ	<p>インポートされるライセンスのタイプ。ライセンスは次のいずれかになります。</p> <ul style="list-style-type: none"> 一般: ライセンスの一部として含まれているモニタ・ポイントの数に基づいて, SiteScope の標準的な機能を有効にします。一般ライセンスは, 一時ライセンス(時間ベース)または永続ライセンスのどちらかです。 評価: SiteScope の標準機能が有効になり, 無料のトライアル期間(60 日間で 500 モニタ・ポイント)中に追加モニタを使用できます。評価ライセンスは更新できません。 拡張: 任意指定の監視機能およびソリューション・テンプレートが有効になります。 OS インスタンス: 使用されているモニタの数に対するポイントではなく, 監視されている OS / ホスト・インスタンスの数に応じて計算される, 代替ライセンス・モデル・オプションです。 フェールオーバー: プライマリ SiteScope サーバが停止した場合に SiteScope Failover Manager の機能を有効にします。 <p>ライセンスのタイプの詳細については、『HP SiteScope デプロイメント・ガイド』の「Understanding SiteScope License Types」を参照してください。</p>
詳細	<p>ライセンスのタイプとライセンスの有効期間(永続または日数)。</p>

UI 要素	説明
失効	<p>ライセンスが永久ライセンスであるか、あるいは有効期限に達している場合を除き、失効日と残余日数が表示されます。</p> <p>注：評価ライセンスが通常のポイント・ライセンスによってオーバーライドされる場合、そのライセンスは「期限切れ」と表示されます。</p>
数量	<p>購入したライセンスのモニタ・ポイントの数。一般ライセンス・キーによって管理されているモニタ・ポイントの総数が、拡張ライセンスによって増えることはありません。任意指定のモニタ・タイプを作成するために使用されるモニタ・ポイントは、一般ライセンスに含まれるモニタ・ポイントの総数から差し引かれます。評価の固定値は 500 ポイントです。</p> <p>注：</p> <ul style="list-style-type: none"> OS インスタンス・ライセンスの場合、この列には監視される OS / ホスト・インスタンスの数が表示されます。 拡張ライセンスの場合、この列には常に「1」が表示されます。各モニタまたはソリューション・テンプレートには、「一般」ライセンス・ポイントから取得される、それ自体のポイント消費があります。
<p>[OS インスタンス ライセンス使用状況] テーブル</p> <p>SiteScope は、利用可能な OS インスタンス・ライセンスを、最もビジーなホスト(そのサーバ上で OS インスタンス対応モニタによってのみ消費されるポイントの最多数を占めるホスト)に適用します。OS 対応モニタ・インスタンスによって消費されるポイントは適用されず、OS インスタンス・ライセンスの対象ではないほかのモニタでも使用できます。</p>	
Show top 20 hosts only	<p>テーブル内に最もビジーなホスト・サーバ 20 台だけを表示します。</p> <p>標準設定値：選択されている</p>
ホスト/OS	OS インスタンス対応モニタが実行されているホスト・マシンの名前または IP アドレス。
適用されている OS インスタンス ライセンス	<p>CPU, ディレクトリ, ディスク・スペース, ダイナミック・ディスク・スペース, ファイル, HP NonStop イベント・ログ, HP NonStop リソース, メモリ, Microsoft Lync Servers (Archiving, A/V Conferencing, Director, Edge, Front End, Mediation, Monitoring および CDR Registrar), Microsoft Hyper-V, Microsoft Windows イベント・ログ, Microsoft Windows パフォーマンス・カウンタ, Microsoft Windows リソース, Microsoft Windows サービス・ステート, Ping, ポート, サービス, Solaris ゾーン, UNIX リソース, VMware パフォーマンス, VMware Host(CPU, メモリ, ネットワーク, 状態, ストレージ), VMware パフォーマンス</p> <p>注：このホスト上で作成されたほかのモニタ・タイプからのポイントは適用外ではありません。</p>

SSH プリファレンス

このパネルでは、リモート・コンピュータに安全にアクセスするためのプリファレンスを設定できます。

アクセス方法	[プリファレンス] コンテキスト > [一般プリファレンス] > [SSH プリファレンス] を選択します。
--------	--

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
SSH V2 接続タイムアウト (秒)	SiteScope で正常な応答を待機する合計秒数。この時間を超えると、接続が自動的に閉じます。 標準設定値 : 30 秒
SSH V2 ハンドシェイクタイムアウト (秒)	ハンドシェイク・タイムアウト (秒単位)。 標準設定値 : 30 秒
SSH V2 キー交換タイムアウト (秒)	SiteScope で SSH 鍵交換を待機する合計秒数。 標準設定値 : 30 秒
SSH V2 認証段階タイムアウト (秒)	SiteScope で SSH 認証を待機する合計秒数。 標準設定値 : 30 秒

WMI プリファレンス

このパネルでは、Windows Management Instrumentation(WMI)を使用してリモート・コンピュータにアクセスするためのプリファレンスを設定できます。WMI では、NetBIOS よりも安全な通信を使用して Windows サーバ上で動作するリモート・サーバからデータを収集できます。

アクセス方法	[プリファレンス]コンテキスト > [一般プリファレンス] > [WMI プリファレンス]を選択します。
関連タスク	529ページ「リモート監視用の WMI サービスの設定方法」
重要な情報	356ページ「Windows Management Instrumentation(WMI)をサポートしているモニタ」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
SiteScope NT ローカルホスト・メソッド	ローカルホスト・マシンにある Windows サーバのリソースを監視するための接続方法のタイプ(NetBIOS または WMI)。 標準設定値 : NetBIOS
WMI クエリ・タイムアウト (秒単位)	各モニタの実行の WMI クエリタイムアウト (秒単位)。このボックスが空のときは、タイムアウトが 120 秒になります。 標準設定値 : 120 秒

ダッシュボード・モニタ履歴表示オプション

このパネルでは、[モニタ履歴の設定]を設定して、すべてのモニタおよびモニタ・グループのモニタ履歴を表示できます。

アクセス方法	[プリファレンス]コンテキスト > [一般プリファレンス] > [ダッシュボード モニタ履歴表示オプション]を選択します。
重要な情報	[ダッシュボード レイアウト]では、選択した条件に一致するモニタのみが表示されるように、フィルタを使用してさらにモニタを絞り込むことができます。プリファレンスは、[ダッシュボード フィルタ]設定で保存されます。詳細については、 1077ページ「ダッシュボード・フィルタの概要」 を参照してください。

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
モニタ履歴ビューを有効にする	ダッシュボードのモニタ履歴が有効になります。このオプションが有効になっている状態で無効にすると、履歴ビューに表示されていたすべてのビュー・データが削除されます。 標準設定値：選択されていない
期間中に収集されたデータを表示	過去の実行を表示するタイム・フレーム。古い実行は削除されます。この設定は、ダッシュボードのフィルタリングより優先されます。 標準設定値：過去 1 時間
モニタの実行の状態	必要な実行の状態が表示されます。ほかの状態の実行は削除されます。この設定は、ダッシュボードのフィルタリングより優先されます。 標準設定値：任意
表示する実行の最大数	メモリの保持するデータの行数。 標準設定値：100000 最小値：1000

JDBC グローバル・オプション

このパネルでは、SiteScope のデータベース・ログ機能、データベース接続ツールやデータベース情報ツール、データベース警告、データベース・モニタ(Oracle データベース、データベース・カウンタ、データベース・クエリ、DB2 8.x および 9.x、テクノロジー・データベース統合)にグローバルな JDBC オプションを適用できます。

アクセス方法	[プリファレンス]コンテキスト > [一般プリファレンス] > [JDBC グローバル オプション]を選択します。
--------	---

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
接続タイムアウト	新しい SQL 接続の作成を待機する時間(秒/分/時/日)。すべての SQL ドライバにこの機能があるわけではありません。SQL ドライバでこの機能がサポートされていない場合、このパラメータは無視されます。 標準設定値：5 分

UI 要素	説明
ドライバ・トレース・ログ・ファイル	<p>データベース・ドライバのトラブルシューティングに使用するドライバ・トレース・ログ・ファイルが作成されます。ログ・ファイルを作成するには、ドライバ・トレース・ファイルの完全パスまたは UNC 名を入力します(e:\mydir\myfile.log など)。</p> <p>注：記録先ログ・ファイルには、ログイン情報、テーブル名、クエリなどが含まれます。</p> <p>ヒント：このオプションはトラブルシューティングのみに使用することをお勧めします(標準設定では空です)。</p>

LW SSO 設定

このパネルでは、SiteScope の Lightweight シングル・サインオン(LW-SSO)認証の文字列を変更できます。

アクセス方法	[プリファレンス]コンテキスト > [一般プリファレンス] > [LW SSO 設定]を選択します。
--------	--

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
通信セキュリティ・パスフレーズ	<p>HP の Lightweight シングル・サインオン(LW-SSO)で統合されるすべての信頼されたアプリケーションで使用される共有文字列が含まれている必要があります。</p> <p>ヒント：パスフレーズ・パラメータは少なくとも 12 文字を使用することをお勧めします。サロゲート・ブロック、FFFE、および FFFF を除く任意の Unicode 文字を使用できます。</p> <p>注：SiteScope の標準設定のパスフレーズ文字列は安全ではありません。安全な文字列を使用するには、SiteScope の標準設定のパスフレーズ値を変更して、LW-SSO を使用して統合されるすべての HP ソフトウェア・アプリケーションのパスフレーズ値を変更します。</p> <p>LW-SSO の詳細については、813 ページ「SiteScope へのログインのための認証方法の設定」を参照してください。</p>

第32章

高可用性プリファレンス

本章の内容

概念

- 648ページ「高可用性プリファレンスの概要」

参照情報

- 649ページ「高可用性プリファレンスのユーザ・インタフェース」

高可用性プリファレンスの概要

高可用性プリファレンスは、SiteScope Failover 動作を設定するために使用されます。SiteScope Failover は、システムに障害が発生した場合、または一時的にサービスが停止している場合、SiteScope システム(プライマリと呼ばれる)の機能を自動的に担うように設計された SiteScope の個別のインストールです。

SiteScope Failover では、次の機能を提供します。

- プライマリ SiteScope サーバから SiteScope Failover サーバへの監視設定の定期的な自動ミラー化。
- プライマリ SiteScope サーバの可用性の自動監視。
- プライマリ SiteScope の可用性に基づくミラー化されたモニタの自動有効化または無効化。

これらのプリファレンスの設定の詳細については、[649ページ「高可用性プリファレンスのユーザ・インタフェース」](#)を参照してください。

SiteScope Failover のインストールおよび管理の詳細については、[< SiteScope のルート・インストール > \sisdocs\pdfs\SiteScopeFailover.pdf](#) の『HP SiteScope Failover Guide』を参照してください。

高 可 用 性 プリファレンスのユーザ・インタフェース

本 項 の 内 容


- 649 ページ「[高 可 用 性 プリファレンス] ページ」
- 651 ページ「[新 規 フェイルオーバー プロファイル]/[フェイルオーバー プロファイルの編集] ダイアログ・ボックス」
- 655 ページ「[標準設定のフェイルオーバー サーバ設定] ダイアログ・ボックス」






[高 可 用 性 プリファレンス] ページ

[高 可 用 性 プリファレンス] ページでは SiteScope Failover プロファイルを管理 できます。このページでは、プライマリ SiteScope ユーザ・インタフェースからアクセスするか、SiteScope Failover ユーザ・インタフェースからアクセスするかに応じて、異なるコマンドが提供されます。

ア ク セ ス 方 法	[プリファレンス] コンテキスト > [高 可 用 性 プリファレンス] を選択します。
重 要 な 情 報	<ul style="list-style-type: none">• SiteScope Failover 設定はプロファイルに保存されます。SiteScope Failover ユーザ・インタフェースでは、プロファイルを作成し、変更 することができます。プライマリ SiteScope ユーザ・インタフェースでは、プロファイルのテストまたは削除のみを実行 できます。• SiteScope Failover のインストールの詳細については、< SiteScope のルート・インストール > \sisdocs\pdfs\SiteScopeFailover.pdf の『HP SiteScope Failover Guide』を参照 してください。
関 連 情 報	648 ページ「高 可 用 性 プリファレンスの概要」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。



UI 要素	説明
	<p>新規フェイルオーバー・プロファイル：[新規フェイルオーバー プロファイル] ダイアログ・ボックスが開きます。ユーザ・インタフェースの詳細については、651 ページ「[新規フェイルオーバー プロファイル]/[フェイルオーバー プロファイルの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p> <p>注：これは SiteScope Failover サーバのみで利用 可能です。</p>

UI 要素	説明
	<p>プロファイルの編集 : [フェイルオーバー プロファイルの編集] ダイアログ・ボックスが開きます。ユーザ・インターフェースの詳細については、651 ページ「[新規 フェイルオーバー プロファイル]/[フェイルオーバー プロファイルの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p> <p>注 : これは SiteScope Failover サーバのみで利用可能です。</p>
	<p>プロファイルの削除 : 選択したプロファイルが[高可用性プリファレンス]から削除されます。これは、プライマリ SiteScope または SiteScope Failover のいずれかから実行できます。削除するときにリモート SiteScope(プライマリ SiteScope 上の場合 は SiteScope Failover など)にアクセスできない場合は、ローカル SiteScope からのみ削除されます。この場合、リモート SiteScope ユーザ・インターフェースからプロファイルを手動で削除する必要があります。</p> <p>ヒント : プロファイルを削除するのではなく、無効化することができます。[フェイルオーバー プロファイルの編集] ダイアログ・ボックスの[メイン設定] > [プロファイル]を参照してください。</p>
	<p>すべて選択 : 表示されているすべてのプロファイルを選択します。</p>
	<p>選択範囲を解除 : 選択をクリアします。</p>
標準設定	<p>プライマリ SiteScope サーバで、[標準設定]の横にある矢印をクリックして、次を選択します。</p> <ul style="list-style-type: none">  テスト : プロファイルをテストし、リモート SiteScope Failover へのアクセスを確認します。 <p>SiteScope Failover サーバで、[標準設定]の横にある矢印をクリックして、次のオプションを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> テスト : [高可用性のテスト]ダイアログを表示します。このダイアログでは、[電子メールの送信先]フィールドに電子メール・アドレスを入力し、[テスト通知の送信]をクリックすることで、通知受信者の電子メール・アドレスを先にテストできます。受信者は、メールで通知を受信したことを確認することで、その後の通知が正しく配信されることを確認できます。次に、[テスト]ボタンをクリックすると、プロファイルをテストして、プライマリ SiteScope へのアクセスを確認できます。 編集 : Failover サーバから電子メール通知を送信するために使用する標準設定を変更します。この設定の詳細については、655 ページ「[標準設定のフェイルオーバー サーバ設定]ダイアログ・ボックス」を参照してください。
プロファイル・タイプ	<p>プライマリ SiteScope または SiteScope Failover サーバのどちらの[高可用性プリファレンス]ページにアクセスしているかを示します。</p>
リモート・ホスト	<p>プライマリ SiteScope サーバでは、リモート・ホストは SiteScope Failover ホストです。SiteScope Failover ホストでは、リモート・ホストはプライマリ SiteScope ホストです。</p>

UI 要素	説明
有効	プロファイルが有効かどうかを示します([はい]/[いいえ])。プロファイルを無効化または有効化するには、SiteScope Failover ユーザ・インタフェースからプロファイルにアクセスしてください。

[新規フェイルオーバー プロファイル]/[フェイルオーバー プロファイルの編集] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、新規高可用性プロファイルの作成や既存のプロファイルの編集ができます。

アクセス方法	<p>[プリファレンス] コンテキスト > [高可用性プリファレンス] を選択します。[高可用性プリファレンス] ページで、次の操作を実行します。</p> <ul style="list-style-type: none">• [新規プロファイル]  ボタンをクリックするか、• 既存のプロファイルを選択して、[プロファイルの編集]  ボタンをクリックします。 <p>注：このダイアログ・ボックスは SiteScope Failover サーバのみで利用可能です。</p>
重要な情報	<ul style="list-style-type: none">• SiteScope Failover のインストールおよび設定の詳細については、< SiteScope のルート・インストール > \sisdocs\pdfs\SiteScopeFailover.pdf の『HP SiteScope Failover Guide』を参照してください。• SiteScope の管理者、または「電子メール、ページャ、HTTP、SNMP のプリファレンスの追加、編集、または削除」の権限を付与されたユーザのみが、高可用性メール・プリファレンスを作成または変更できます。このトピックの詳細については、773 ページ「ユーザ管理プリファレンスの概要」を参照してください。• SiteScope Failover では、LW-SSO 認証方法が必要です。814 ページ「認証方法の概要」を参照してください。
関連情報	<ul style="list-style-type: none">• 648 ページ「高可用性プリファレンスの概要」• 649 ページ「[高可用性プリファレンス] ページ」• 655 ページ「[標準設定のフェイルオーバー サーバ設定] ダイアログ・ボックス」

メイン設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
Host	<p>SiteScope Failover サーバのプライマリ・サーバとなるサーバの名前または IP アドレスを入力します。</p> <p>SiteScope Failover では、プライマリ SiteScope の可用性を確認し、監視設定をプライマリ SiteScope からミラー化します。</p>


UI 要素	説明
ポート	上記で指定したプライマリ SiteScope Server ホストのユーザ・インタフェースのポートを入力します。 標準設定値 : 8080
セキュア接続	SiteScope Failover サーバで SSL を有効化します。SSL の使用には次の要件があります。 <ul style="list-style-type: none">プライマリ SiteScope および SiteScope Failover の両方で SSL が有効になっているか、または両方で無効になっている必要があります。つまり、一方で SSL を使用し、もう一方で標準プロトコルを使用することはできません。上記の[ポート]フィールドには SSL 固有のポートを指定する必要があります。プロファイルを作成する前に、SiteScope Failover ホストに証明書がインポート済みである必要があります。 詳細については、『HP SiteScope Failover Guide』の「Add Certificates to SSL-Enabled SiteScope Failover」を参照してください。 標準設定値 : 選択されていない
プロファイルを無効にしました	プロファイルを無効にします。このプロファイルでは、SiteScope Failover のこのインスタンスを使用して、プライマリのすべての監視およびミラー化を停止します。 標準設定値 : 選択されていない

実行設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
プライマリが利用可能な頻度 (秒)	プライマリ SiteScope サーバの可用性を確認する頻度を選択します。15 ~ 10000 の範囲の整数を指定します。 標準設定値 : 60 秒
ミラー頻度 (分)	プライマリ SiteScope サーバから SiteScope Failover サーバに設定データをコピーする頻度を選択します。15 ~ 10000 の範囲の整数を指定します。この設定により、プライマリ SiteScope サーバの監視設定への同じ更新および変更を使用して SiteScope Failover サーバを同期された状態に維持します。 標準設定値 : 240 分 (4 時間)

UI 要素	説明
一時停止 (分)	<p>プライマリ SiteScope サーバが予定されたシャットダウンを開始する場合、SiteScope Failover サーバをアクティブ・モードに自動的に切り替えるときの遅延を選択します。0 ~ 20 の範囲の整数を入力します。予定されたシャットダウンは次のいずれかの場合に実行されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> スケジュールされた再起動が発生した ユーザ・インタフェースを使用して要求された再起動が発生した <p>標準設定値 : 3 分</p>
スケジュール	<p>プライマリ SiteScope の可用性のミラー化および確認のスケジュールを選択します。ここでスケジュールを選択するには、[プリファレンス] > [スケジュール プリファレンス] > [フェイルオーバー スケジュール プリファレンス] でスケジュールが指定されている必要があります。</p> <p>時間指定スケジュールを選択した場合、スケジュールによって決定されたミラー化が実行されます。上記の[ミラー頻度 (分)]設定は無視されます。たとえば、時間指定スケジュールで毎日午前 6:00 時にミラー化が実行されるように指定されている場合、[ミラー頻度 (分)]設定とは関係なく、ミラー化は午前 6:00 時に実行されます。</p> <p>時間指定スケジュールでは、プライマリ SiteScope の可用性のミラー化の頻度には影響しません。頻度は[プライマリが利用可能な頻度 (秒)]設定で決まります。</p> <p>範囲スケジュールを選択した場合、上記の[プライマリが利用可能な頻度 (秒)]および[ミラー頻度 (分)]設定で指定された頻度と併用されます。たとえば、プロファイルに次の値が設定されていると想定します。</p> <p>スケジュール: 午後 1 時 ~ 5 時の間に有効になる範囲スケジュール プライマリが利用可能な頻度 (秒): 3600 秒 ミラー頻度 (分): 240 分</p> <p>結果として実行される可用性のミラー化および確認:</p> <p>午後 1 時に可用性を確認 午後 1 時にミラー化 午後 2 時に可用性を確認 午後 3 時に可用性を確認 午後 4 時に可用性の確認 午後 5 時に可用性の確認 午後 5 時にミラー化</p>
最終ミラー化時間	最新のミラー化操作の日時。
次のミラー化時間	指定されたプロファイルの[プライマリが利用可能な頻度 (秒)]値および[スケジュール]値に基づく次回にスケジュールされているミラー化操作の日時。

UI 要素	説明
	<p>クリックすると、プライマリ SiteScope のミラー化が開始されます。</p> <p>SiteScope Failover インスタンスはミラー化操作が完了すると再起動されます。再起動したら、Web ブラウザを更新するか、またはブラウザを SiteScope フェールオーバーのアドレスにリダイレクトします。</p> <p>ミラー化すると、プライマリ SiteScope のすべてのグループのコピーが SiteScope Failover インスタンスのモニタのコンテキストに表示されます。SiteScope Failover がアクティブ化されるまでこの状態は無効化されます。</p>

通知設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
電子メール (プライマリ復帰時)	一定期間利用不可になった後、プライマリ SiteScope サーバが利用可能になったときに通知を受信する 1 つ以上の電子メール・アドレスを入力します。複数のエントリはカンマ(,) で区切ります。
電子メール (プライマリ使用不可時)	<p>SiteScope Failover がアクティブになったときに通知を受信する 1 つ以上の電子メール・アドレスを入力します。</p> <p>注: プライマリ SiteScope で予定されているシャットダウンが実行され、[一時停止] フィールドの値で指定されている時間内に復旧した場合は、SiteScope Failover はアクティブになりません。</p>

詳細設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
ミラーの設定	<p>ミラー方法を説明する事前定義の設定。</p> <p>標準設定値: 標準設定</p>
バックアップの数	<p>プライマリ SiteScope 設定でのバックアップの数。</p> <p>標準設定値: 2</p>
BSM 統合の無効化	<p>SiteScope Failover で BSM へのレポートが必要ない場合は、選択します。</p> <p>注: この設定の変更を有効にするには、SiteScope Failover を再起動する必要があります。</p> <p>標準設定値: 選択されていない</p>

UI 要素	説明
.dyn ファイルをマージ・バックする	<p>選択した場合、SiteScope Failover がアクティブになり、プライマリ SiteScope に戻った場合、.dyn ファイルを送信します。</p> <p>SiteScope では、.dyn というサフィックスの内部ファイルを使用して、連続モニタ実行回数およびモニタ状態に基づくデータを保存します。一部のモニタタイプでは、アクティブな SiteScope Failover がモニタ実行を引き継ぐ場合、.dyn ファイルがにデータが含まれていることが重要です。プライマリ SiteScope が復旧した場合にプライマリ SiteScope にマージ・バックされるアクティブな SiteScope Failover のデータを含める .dyn ファイル選択できます。これにより、プライマリ、フェイルオーバーのすべてのモニタ実行がデータに反映されます。</p> <p>この設定は、Microsoft Windows Event Log モニタに適用されます。ログ・ファイル・モニタおよびその他のモニタ・タイプ。</p> <p>標準設定値：選択されていない</p>
日常のログ・ファイルをマージ・バックする	<p>選択した場合、SiteScope Failover が復旧し、プライマリ SiteScope に戻った場合、日次ログ・ファイルを送信します。これらのファイルはレポートに使用されます。</p> <p>標準設定値：選択されていない</p>

[標準設定のフェイルオーバー サーバ設定] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、通知の標準設定値を設定できます。

アクセス方法	<p>[プリファレンス]コンテキスト > [高可用性プリファレンス]を選択します。[高可用性プリファレンス] ページで[標準設定] > [編集]をクリックします。</p> <p>注：このダイアログ・ボックスは SiteScope Failover サーバのみで利用可能です。</p>
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> 651ページ「[新規フェイルオーバー プロファイル]/[フェイルオーバー プロファイルの編集] ダイアログ・ボックス」 648ページ「高可用性プリファレンスの概要」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
電子メール・サーバのドメイン名	<p>SiteScope が電子メール・メッセージの送信時に使用する SMTP メール・サーバのドメイン名。</p> <p>例 : mail.thiscompany.com</p> <p>メール・サーバのドメイン名がわからない場合は、システム管理者に問い合わせてください。</p>
送信元電子メール・アドレス	<p>SiteScope で生成されるメールの送信元アドレスとして使用する電子メール・アドレス。電子メール・アドレスを指定すると、SiteScope から送信された電子メールの参照や並べ替えが容易になる場合があります。何も入力しないと、[送信元電子メール アドレス] は、メールの実際の送信元アドレスと同じになります。</p> <p>例 : sitescope@mycompany.com</p> <p>注 : 使用するメール・サーバが NTLM 認証を必要な場合 (後述)、ここで入力する電子メール・アドレスは有効な電子メール・アドレスである必要があります。</p>
ログイン	<p>SMTP サーバで要求されるユーザ名。このユーザ名は、プライマリとバックアップの両方のメール・サーバに使用します。</p> <p>注 : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p>
パスワード	<p>SMTP サーバで要求されるパスワード。このパスワードは、プライマリとバックアップの両方のメール・サーバに使用します。</p> <p>注 : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p>
NTLM 認証	<p>ドロップダウン・リストから、次の NTLM 認証オプションを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none">● なし : メール・サーバで NTLM 認証が不要な場合を選択します。● NTLMv1 : メール・サーバで NTLM バージョン 1 を使用した認証が必要な場合を選択します。● NTLMv2 : メール・サーバで NTLM バージョン 2 を使用した認証が必要な場合を選択します。 <p>注 : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p>標準設定値 : なし</p>
タイムアウト (秒単位)	<p>SMTP サーバからの応答を待機する時間 (秒単位)。タイムアウト期間内にプライマリ・メール・サーバからの応答を受信しなかった場合、SiteScope はバックアップ・メール・サーバの使用に切り替わります。</p> <p>標準設定値 : 60 秒</p>

UI 要素	説明
通知の件名	<p>プライマリ SiteScope が利用不可である場合に送信される電子メール通知の件名フィールド・テンプレートを選択します。</p> <p>標準設定値 : 標準設定テンプレート</p> <p>注 : このテンプレートはカスタマイズまたはローカライズできます。このテンプレートは < SiteScope Failover のインストール・ディレクトリ > \templates.ha\mail.subject にあります。</p>
通知テンプレート	<p>プライマリ SiteScope が利用不可である場合に送信される電子メール通知のテンプレートを選択します。</p> <p>標準設定値 : 標準設定テンプレート</p> <p>注 : このテンプレートはカスタマイズまたはローカライズできます。このテンプレートは < SiteScope Failover のインストール・ディレクトリ > \templates.ha\mail にあります。</p>

第 33 章

HTTP プリファレンス

本章の内容

概念

- [659ページ「HTTP プリファレンスの概要」](#)

参照情報

- [660ページ「HTTP ユーザ・インタフェース」](#)

HTTP プリファレンスの概要

[HTTP プリファレンス]を使用して、SiteScope が HTTP コネクタと通信するのに必要な設定を行います。この設定は、データとイベントのレポートだけではなく、HTTP プリファレンスを使用するモニタでも使用されます。SiteScope では、SiteScope HTTP 受信者を使用して HTTP ベースのネットワーク管理システムと統合し、サードパーティのアプリケーションと管理コンソールに一般イベント・データを送信します。

[HTTP プリファレンス]ページには、データをホストに送信するための定義済みカスタム HTTP 受信者またはテンプレートが表示されます。接続タイプを設定するときに、HTTP 受信者を[一般イベント統合]のコネクタに関連付けることができます。詳細については、[702ページ「汎用イベント統合の概要」](#)を参照してください。

これらのプリファレンスの設定の詳細については、[660ページ「\[HTTP プリファレンス\]ページ」](#)を参照してください。

HTTP ユーザ・インタフェース

本項の内容




- 660 ページ「[HTTP プリファレンス] ページ」
- 661 ページ「[新規 HTTP 受信者]/[HTTP 受信者の編集] ダイアログ・ボックス」




[HTTP プリファレンス] ページ

このページでは、管理コンソールにデータを送信するときに、一般イベント統合によって使用される設定を定義できます。SiteScope では、SiteScope HTTP 受信者を使用して、HTTP ベースのネットワーク管理システムと統合します。

アクセス方法	[プリファレンス] コンテキスト > [HTTP プリファレンス] を選択します。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none">• SiteScope の管理者、または「電子メール、ページャ、HTTP、SNMP のプリファレンスの追加、編集、または削除」の権限が付与されたユーザのみが、[HTTP プリファレンス] を作成または変更できます。ユーザ権限の詳細については、773 ページ「ユーザ管理 プリファレンスの概要」を参照してください。• HTTP 受信者が一般イベント統合から参照されている場合、その受信者は削除できません。HTTP 受信者を削除するには、一般イベント統合の HTTP 受信者を変更する必要があります。
関連タスク	705 ページ「SiteScope 一般イベント統合の設定方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none">• 659 ページ「HTTP プリファレンスの概要」• 661 ページ「[新規 HTTP 受信者]/[HTTP 受信者の編集] ダイアログ・ボックス」• 734 ページ「[一般イベント統合 プリファレンス] ダイアログ・ボックス」



ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
	新規 HTTP 受信者 ：新規 HTTP 受信者が作成されます。ユーザ・インタフェースの詳細については、661 ページ「[新規 HTTP 受信者]/[HTTP 受信者の編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
	HTTP 受信者の編集 ：HTTP 受信者の編集ができるようになります。ユーザ・インタフェースの詳細については、661 ページ「[新規 HTTP 受信者]/[HTTP 受信者の編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
	HTTP 受信者の削除 ：選択した HTTP 受信者が [HTTP プリファレンス] から削除されます。

UI 要素	説明
	HTTP 受信者をテストします : HTTP 受信者にメッセージを送信できるかどうかをテストします。[HTTP 受信者をテストします]ダイアログ・ボックスにメッセージを入力し、[テスト]をクリックします。
	すべて選択 : 表示されているすべての HTTP 受信者を選択します。
	選択範囲を解除 : 選択をクリアします。
名前	新規 HTTP 受信者の作成時に割り当てられる名前の文字列。
詳細	HTTP 受信者の作成時または編集時に割り当てられた詳細。
URL	データまたはイベント報告、および HTTP プリファレンスを使用するモニタで使用するエンドポイント URL。

[新規 HTTP 受信者]/[HTTP 受信者の編集]ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、新規 HTTP 受信者の作成や既存受信者の編集ができます。

アクセス方法	<p>[プリファレンス]コンテキスト > [HTTP プリファレンス]を選択します。[HTTP プリファレンス]ページで次を実行します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [新しい HTTP 受信者]  ボタンをクリックするか、 • 既存の HTTP 受信者プロファイルを選択して [HTTP 受信者の編集]  ボタンをクリックします。
重要な情報	SiteScope の管理者、または「電子メール、ページャ、HTTP、SNMP のプリファレンスの追加、編集、または削除」の権限が付与されたユーザのみが、[HTTP プリファレンス]を作成または変更できます。このトピックの詳細については、773ページ「ユーザ管理 プリファレンスの概要」を参照してください。
関連タスク	705ページ「SiteScope 一般イベント統合の設定方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> • 659ページ「HTTP プリファレンスの概要」 • 660ページ「[HTTP プリファレンス]ページ」 • 702ページ「汎用イベント統合の概要」

一般設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
名前	新規 HTTP 受信者の作成時に割り当てられる名前文字列。

UI 要素	詳細
詳細	<p>HTTP 受信者の詳細。プロパティを編集または表示する場合にのみ表示されます。HTML タグ(
, <HR>, および タグなど)を使用して、表示形式および表示スタイルを制御できます。</p> <p>注 :このボックスに入力した HTML コードは、有効性とセキュリティがチェックされ、コード(複数行にわたるために切り捨てられたコードなど)を修正する修正アクションが実行されます。悪意のある HTML コードや JavaScript が検出されると、フィールド全体が拒否されます。禁止されている HTML 内容は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none">• タグ: script, object, param, frame, iframe。• on で始まる属性を含むタグは拒否される。例: onhover。• 値に javascript が指定された属性。

HTTP プリファレンス設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
URL	<p>すべての HTTP メッセージを受信するアプリケーションのエンドポイント URL。</p> <p>セキュリティ保護された接続(SSL)の場合、「https」と入力します。</p> <p>構文 :http または https://<受信側のサーバの完全修飾ドメイン名>:<データを受信するポート番号>/<パス></p>
要求ヘッダ	<p>HTTP クライアントによってサーバに送信されるヘッダ要求行。ヘッダは改行で分けられていなければなりません。HTTP1.1 要求ヘッダの標準のリストは http://www.w3.org/Protocols/rfc2616/rfc2616-sec14.html#sec14 にあります。</p> <p>注 :このフィールドは、オプションですが、要求ヘッダがないと予期しない動作となる Web ページもあります(無限リダイレクトを実行する、間違ったコンテンツを供給するなど)。</p>
URL 内容のエンコード	<p>SiteScope がサーバ応答から正しいエンコーディングを取得します。ここに表示された標準設定値は編集してはいけません。</p> <p>標準設定値 :サーバ応答からのエンコーディング</p>
POST データエンコード	<p>POST データをエンコードするかどうかを指定します。次のオプションから選択します。</p> <ul style="list-style-type: none">• コンテンツタイプを使用する :コンテンツ・タイプ・ヘッダによって POST データをエンコードします。ヘッダが <code>urlencoded</code> に一致する場合エンコードし、それ以外はエンコードしません。• URL のエンコードを実行する :常に POST データをエンコードします。• URL のエンコードを実行しない :POST データをエンコードしません。

UI 要素	詳細
HTTP バージョン	スタイル要求 ヘッダに使用する SiteScope の HTTP バージョン (1.1 または 1.0)。 標準設定値: 1.1
WinInet を使用する	WinInet がこのモニタの代替 HTTP クライアントとして使用されます。 次の場合に Apache の代わりに WinInet を使用する場合は、このオプションを選択します。 <ul style="list-style-type: none">監視中のサーバをアクセスするために必要な特定のテクノロジーを、Apache HTTP クライアントがサポートしていない場合。たとえば、ケルベロス認証が Apache ライブラリによってサポートされておらず、WinInet によってサポートされている場合。また、WinInet は、信頼されるクライアント側を証明しますが、Apache はしません。このモニタの実行を試み、Apache サーバがエラーを返した場合。WinInet を使用することで、これらのエラーが解決される場合があります。 標準設定値: 選択されていない
リダイレクトでエラー	URL がリダイレクトされると、エラーが発生します (および、エラーが通知されます)。 標準設定値: 選択されていない
要求タイムアウト (秒)	HTTP 要求 (再試行を含む) の完了までの待機時間 (ミリ秒単位)。タイムアウト値 0 は、無制限のタイムアウトとして解釈されます。 標準設定値: 120
接続タイムアウト (秒)	接続が確立するまでの待機時間 (秒単位)。値 0 は、タイムアウトを使用しないことを示します。 標準設定値: 120
再試行の回数	SiteScope が要求を失敗とみなすまで各 HTTP 要求を再試行する回数。 標準設定値: 3
要求された場合の認証	選択した場合、Web サーバ・ユーザ名とパスワードを使用して認証 (要求時) が行われます。 標準設定値: 選択されている

Web サーバのセキュリティ設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
資格情報	<p>指定した URL でアクセス用の名前とパスワードが必要な場合に資格情報を許可する際に使用するオプション。</p> <ul style="list-style-type: none"> • ユーザ名およびパスワードを使用 : 手動でユーザの資格情報を入力する場合に、このオプションを選択します。[ユーザ名]ボックスにユーザ名を、[パスワード]ボックスにパスワードを入力して URL にアクセスします。 • 事前定義された資格情報を選択 : URL 用の定義済みユーザ名およびパスワードを SiteScope で自動的に設定する場合に、このオプションを選択します (標準設定のオプション)。[資格情報プロファイル]ドロップダウン・リストから使用する資格情報プロファイルを選択するか、[資格情報の追加]をクリックして新規資格情報プロファイルを作成します。このタスクの実行方法の詳細については、623ページ「資格情報のプリファレンスの設定方法」を参照してください。
プリエンティブ認証	<p>SiteScope がターゲット URL を要求する場合、認証資格情報を送信するためのオプション。</p> <ul style="list-style-type: none"> • グローバル・プリファレンスを使用 : [一般プリファレンス]ページの[プリエンティブ認証]で指定されている設定を SiteScope が使用するよう選択します。 • 最初の要求を認証 : 認証先 URL に対して、SiteScope によって作成される最初の要求でユーザ名とパスワードが送信されるよう選択します。 <p>注 : URL でユーザ名とパスワードが必要とされない場合には、このオプションのために URL でエラーが発生する可能性があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 要求された場合に認証 : サーバでユーザ名とパスワードの要求があった場合に、2 番目の要求でユーザ名とパスワードが送信されるよう選択します。 <p>注 : URL でユーザ名とパスワードが必要とされない場合には、このオプションが使用される場合があります。</p> <p>すべてのオプションで、このモニタ・インスタンスのために入力された[ユーザ名]と[パスワード]が使用されます。ユーザ名とパスワードが個々のモニタに指定されない場合には、[一般プリファレンス]ページの[メイン]セクションで指定されている[標準設定の認証ユーザ名]と[標準設定の認証パスワード]が使用されます(指定されている場合)。</p> <p>注 : プリエンティブ認証はユーザ名とパスワードを送信するかどうかや、どのユーザ名とパスワードを送信するのかを制御しません。</p>
クライアント側証明書	<p>ターゲット URL にアクセスするためにクライアント側証明書を使用する必要がある場合の証明書ファイル。普通、これは .pfx(.p12)タイプ証明書で、通常はパスワードを要求します。[クライアント側証明書パスワード]ボックスに証明書のパスワードを入力します。</p> <p>注 : クライアント側証明書ファイルは、<SiteScopeのルート・ディレクトリ>\templates.certificatesディレクトリにコピーする必要があります。</p> <p>標準設定値 : なし</p>

UI 要素	詳細
クライアント側証明書パスワード	<p>クライアント側証明書を使用しており、その証明書がパスワードを要求する場合のパスワード。</p> <p>標準設定値: 空</p>
認証 NTLM ドメイン	<p>URL へのアクセスが求められる場合の Windows NT LAN Manager(NTLM)のドメイン。</p> <p>標準設定値: 空</p>
HTTPS に対して信頼されていない証明書を許容	<p>セキュア HTTP(HTTPS)を使用してターゲット URL にアクセスしており、SiteScope が必要とされるサーバ証明書を持っていない場合には、このオプションを選択するか、または関連する証明書をインポートできます。サーバ証明書のインポートの詳細については、『HP SiteScope Monitor Reference』の「URL Monitor」の SSL 接続を参照してください。</p> <p>標準設定値: 選択されていない</p>
HTTPS に対して無効な証明書を許容	<p>セキュア HTTP(HTTPS)を使用してターゲット URL にアクセスしており、SiteScope に無効なサーバ証明書がある場合にはこのオプションを選択します。現在の日付が証明書チェーンで指定されている日付範囲内ではない場合、この状態が発生する可能性があります。</p> <p>標準設定値: 選択されていない</p>
NTLM V2	<p>アクセス先の URL が NTLM バージョン 2 を使用する認証を必要とする場合に選択します。</p> <p>標準設定値: 選択されていない</p>

プロキシ・サーバ設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
アドレス	<p>プロキシ・サーバのアドレス(該当する場合)。</p>
ユーザ名	<p>このプロキシ・サーバで URL へのアクセスにユーザ名が必要な場合に使用するプロキシ・サーバ・ユーザ名。</p> <p>注: これらのオプションが機能するには、プロキシ・サーバでプロキシ認証がサポートされている必要があります。</p>
パスワード	<p>このプロキシ・サーバで URL へのアクセスにユーザ名が必要な場合に使用するプロキシ・サーバ・パスワード。</p> <p>注: これらのオプションが機能するには、プロキシ・サーバでプロキシ認証がサポートされている必要があります。</p>

タグの検索/フィルタ

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します(ラベルのない要素は山括弧内に表示されます)。

UI 要素	詳細
<タグ名と値>	SiteScope オブジェクト(グループ, モニタ, リモート・サーバ, テンプレート, プリファレンス・プロファイル)を検索およびフィルタするために, キーワード・タグが使用される。SiteScope にタグが作成されていない場合, このセクションは空白で表示されます。タグが作成されている場合はここに表示され, 必要に応じてタグを選択できます。 概念の詳細については, 106ページ「SiteScope オブジェクトの検索」 を参照してください。
タグの追加	[新規タグ]ダイアログ・ボックスを開き, 新しいキーワード・タグを追加できる。ユーザ・インタフェースの詳細については, 111ページ「[新規タグ]/[タグの編集]ダイアログ・ボックス」 を参照してください。

第34章

インフラストラクチャ・プリファレンス

本章の内容

概念

- 668ページ「インフラストラクチャ・プリファレンスの概要」

参照情報

- 669ページ「[インフラストラクチャ・プリファレンス] ページ」

インフラストラクチャ・プリファレンスの概要

インフラストラクチャ・プリファレンスでは、< SiteScope ルート ディレクトリ > \groups\master.config ファイルにアクセスすることなく SiteScope のグローバル設定を表示および定義できます。インフラストラクチャ・プリファレンスは、[一般設定]、[サーバ設定]、[モニタ設定]、[モニタ設定をスキップ]、[動的監視設定]、[警告設定]、[テンプレート設定]、[永続性設定]、[レポート設定]、[ベースライン設定]、[カスタム設定]のカテゴリで並べ替えられグループ化されます。

インフラストラクチャ・プリファレンスで設定値を編集したら、すべての入力データの形式が正しいかどうか SiteScope によって検証され、SiteScope の再起動が必要な場合は警告が表示されます。[インフラストラクチャ・プリファレンス] ページから SiteScope を再起動できます。

インフラストラクチャ・プリファレンスの値の設定の詳細については、[669 ページ「インフラストラクチャ・プリファレンス」ページ](#)を参照してください。

[インフラストラクチャ プリファレンス] ページ

このページでは、SiteScope の実行方法を決定する設定の値を定義できます。

アクセス方法	[プリファレンス] コンテキスト > [インフラストラクチャ プリファレンス] を選択します。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none">SiteScope の管理者、または「インフラストラクチャ・プリファレンスの編集」権限を付与されたユーザのみが、SiteScope 設定の作成や変更、およびインフラストラクチャ・プリファレンスからの SiteScope の再起動を実行できます。ユーザ権限の詳細については、773 ページ「ユーザ管理 プリファレンスの概要」を参照してください。多くのカスタム設定には、使いやすいテキスト・ラベルはなく、< SiteScope のルート・ディレクトリ > \groups\master.config ファイルの対応するプロパティ名のみが表示されます。
関連情報	668 ページ「インフラストラクチャ・プリファレンスの概要 」

本項の内容

- [669 ページ「一般設定](#)」
- [676 ページ「サーバ設定](#)」
- [678 ページ「モニタ設定](#)」
- [685 ページ「モニタ設定をスキップ](#)」
- [686 ページ「動的監視設定](#)」
- [687 ページ「カスタム モニタ設定](#)」
- [687 ページ「警告設定](#)」
- [688 ページ「テンプレート設定](#)」
- [688 ページ「永続性設定](#)」
- [689 ページ「レポート設定](#)」
- [690 ページ「ベースライン設定](#)」
- [693 ページ「カスタム設定](#)」

一般設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
信頼されていない SSL 証明書を許可	<p>SSL の使用時に SiteScope で信頼されていない証明書を許可できるようになります。このオプションを使用しない場合、キーストア・ファイルで指定した証明書、または登録済みの CA 証明書に繋がる信頼チェーンがある証明書のみが許可されます。</p> <p>標準設定値: 選択されていない</p> <p>プロパティ名: <code>_sslAcceptAllUntrustedCerts</code></p>
BSM ダウンタイム取得頻度 (分)	<p>BSM にダウンタイムの要求を行う間の SiteScope の待機時間 (分単位)。</p> <p>標準設定値: 15 分</p>
Microsoft Windows リソース・モニタ用のデフォルト収集メソッド	<p>[モニタ設定] の [収集の方法] フィールドで グローバル設定を使用する オプションが選択されている場合に、Microsoft Windows リソース・モニタに使用されるデフォルト収集メソッド (pdh またはレジストリ)。詳細については、「Microsoft Windows Resources Monitor Settings」を参照してください。</p> <p>標準設定値: pdh</p>
ホスト解決要求間の遅延 (ミリ秒)	<p>DNS サーバへの連続した呼び出し間の遅延 (ミリ秒)。</p> <p>標準設定値: 0 ミリ秒</p>
cmd.exe での引用符文字を無効化	<p>特定の作業で cmd.exe を実行するときに、引用符付きのパラメータを使用しません。</p> <p>標準設定値: 選択されていない</p> <p>プロパティ名: <code>_disableDoubleQuotesInTemplates</code></p>
DNS 名前タグ	<p>DNS “名前”タグとして DNS 関連の機能によって参照されるカンマ区切りのリストの値。</p> <p>標準設定値: Name:,Nombre:,Navn:,Nome:,Nom :,Nom\u00FF:</p> <p>プロパティ名: <code>_dnsNameTags</code></p>
DNS サーバタグ	<p>DNS “サーバ”タグとして DNS 関連の機能によって参照されるカンマ区切りのリストの値。</p> <p>標準設定値: Server:,Servidor:,Serveur:,Serveur\u00FF:</p> <p>プロパティ名: <code>_dnsServerTags</code></p>
標準のしきい値を確認しない	<p>ユーザが選択したしきい値に対してモニタ結果がチェックされます。標準設定の SiteScope モニタしきい値に対するチェックは行われません。</p> <p>標準設定値: 選択されている</p> <p>プロパティ名: <code>_noCheckDefaultThresholds</code></p>

UI 要素	説明
電子メールの文字セット	<p>SiteScope の電子メール・プリファレンスおよび電子メール警告で生成される電子メールの文字セット。</p> <p>標準設定値: 値が入力されないと, UTF-8 が使用されます。</p> <p>プロパティ名: <code>_mailCharSet</code></p>
電子メールの件名の文字セット	<p>SiteScope の電子メール・プリファレンスおよび電子メール警告で生成される電子メールの件名の文字セット。</p> <p>標準設定値: 値が入力されないと, UTF-8 が使用されます。</p> <p>プロパティ名: <code>_mailSubjectCharSet</code></p>
ダウンタイムメカニズムの有効化	<p>SiteScope を BSM に接続する際に, CI ダウンタイム・メカニズムを有効にします。BSM によって停止中と検知される CI に SiteScope モニタ、測定値、グループ、またはプロファイル CI が直接リンクしている場合、SiteScope はダウンタイムによって影響を受けます。</p> <p>標準設定値: 選択されている</p> <p>プロパティ名: <code>_downtimeEnable</code></p>
BSM への資格情報のレポートを有効化	<p>選択すると, ホストの資格情報が SiteScope から BSM に送信されます。</p> <p>標準設定値: 選択されていない</p> <p>プロパティ名: <code>_sendCredentials</code></p>
vCenter からの VM 設定の取得頻度(時間)	<p>VM 設定データを vCenter から取得して, キャッシュに保存する頻度。これにより, vCenter 内の IP またはホスト名の変更などの VM の変更が可能になります。</p> <p>標準設定値: 4 時間</p> <p>プロパティ名: <code>_vmwareRetrieveConfFrequencyHours</code></p>
LDAP バイナリ属性	<p>SiteScope では, 設定要求および応答の際, 既知のすべてのバイナリ LDAP 属性の名前を使用します(これは LDAP クエリの出力の形式に影響を与えます)。</p> <p>標準設定値: audio, auditingPolicy, authorityRevocationList, cACertificate, certificateRevocationList, crossCertificatePair, dSASignature, extensionData, javaSerializedData, jpegPhoto, msExchIMACL, msExchMailboxGuid, msExchMailboxSecurityDescriptor, mSMQDigests, mSMQSignCertificates, objectGUID, objectSid, personalSignature, photo, replicationSignature, thumbnailLogo, thumbnailPhoto, userCertificate, userParameters, userPassword, x500UniqueIdentifier</p> <p>プロパティ名: <code>_ldapBinaryAttributes</code></p>

UI 要素	説明
有効化されているモニタのみログに記録	<p>SiteScope では、無効になっているモニタの実行は、日次ログ・ファイルに記録されません。</p> <p>標準設定値 : 選択されていない</p> <p>プロパティ名 : <code>_onlyLogEnabledMonitors</code></p>
プールごとの最大アイドルスレッド数	<p>スレッド・プールあたりのアイドル・スレッドの最大数。</p> <p>標準設定値 : 100</p> <p>注 : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p>プロパティ名 : <code>_threadPoolMaxIdle</code></p>
プール内のスレッドの最長アイドル時間(ミリ秒)	<p>SiteScope によってアイドル・スレッド・プールが消去されるまでの待機時間(ミリ秒単位)。</p> <p>標準設定値 : 600000 ミリ秒(10 分)</p> <p>プロパティ名 : <code>_threadPoolMaxIdleTime</code></p>
perfex プロセスの最大アイドル時間(分)	<p>SiteScope によってアイドル perfex プロセスが消去されるまでの待機時間(ミリ秒単位)。クリーニング・プロセスにより、SiteScope マシンのメモリ・フットプリントが改善されます。</p> <p>標準設定値 : 60 分</p> <p>プロパティ名 : <code>_perfexProcessMaxIdleTime</code></p>
プールあたりの最大プロセス数	<p>プロセス・プールあたりの最大プロセス数。</p> <p>標準設定値 : 200</p> <p>注 : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p>プロパティ名 : <code>_processPoolMaxPerPool</code></p>
データ統合サンプルのキューの最大サイズ	<p>データ統合 サンプルのキューの上限。この制限に達すると、古いサンプルが破棄されます。</p> <p>標準設定値 : 1000</p> <p>プロパティ名 : <code>_dataSamplesQueueMaxSize</code></p>
更新間でのモニタの遅延(ミリ秒)	<p>起動してからすでに実行されているモニタが再度実行されるまでの待機時間(ミリ秒単位)。</p> <p>標準設定値 : 1000 ミリ秒</p> <p>プロパティ名 : <code>_monitorDelayBetweenRefresh</code></p>

UI 要素	説明
NT SSH タイムアウト (秒)	リモート Windows サーバへの SSH 接続を待機するタイムアウト時間 (秒単位)。 標準設定値 : 60 秒 プロパティ名 : _NTSSHTimeout
ポートを開こうとする回数	予約ポートを開こうとする最大回数。rlogin および rsh リモート・アクセス・メソッドの 811 ~ 1024 の範囲を使用します。 標準設定値 : 25 注 : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。 プロパティ名 : _localPortRetryCount
キューが最大サイズに達したときに破棄するサンプル数	キューの最大サイズに達した場合に破棄するサンプルの数です。 標準設定値 : 500 プロパティ名 : _dataSamplesQueueDiscardSamples
数値形式	文字列表現に変換するときの数値の形式。 標準設定値 : ### プロパティ名 : _noScientificNotation ヒント : 数値形式の詳細については、 HP Software Self-solve Knowledge Base (http://h20230.www2.hp.com/selfsolve/document KM305059) (英語サイト) を参照してください。技術情報を利用するには、HP パスポート ID を使ってログオンする必要があります。
perfex タイムアウト (秒)	perfex によって接続が作成されるまで、またはモニタが実行されるまで待機するタイムアウト時間 (秒単位)。 標準設定値 : 120 秒 プロパティ名 : _perfexTimeout

UI 要素	説明
PowerShell 実行コマンド	<p>64 ビット・バージョンの Windows 2003, Windows 2008, または Windows XP 上で Microsoft Exchange 2007 / 2010 モニタの使用を有効にするには、次の処理を行います(32 ビット・アプリケーションは 64 ビット・バージョンの Windows Server 2003, 2008, または Windows XP を使用しているコンピュータ上で system32 フォルダにアクセスできないため)。</p> <ul style="list-style-type: none"> • http://support.microsoft.com/?scid=kb;en-us;942589 から入手できる Microsoft Hotfix を適用する。 • PowerShell 実行コマンドを入力する。例 : C:\Windows\Sysnative\WindowsPowerShell\v1.0\powershell.exe <p>注 :Windows 2003 と Windows XP では、標準設定では Symlink Sysnative を使用できません。</p>
マルチスレッドでサーバのタイムアウトを待機するプロセス	<p>選択すると、接続を閉じるためにサーバ・タイムアウトを待機しているか、またはプロセスをプールに戻すために回答を待機しているプロセスごとに、別のスレッドが開かれます。多数のサーバがダウンしている場合にこの設定を行うと、スレッド・カウントと使用されるメモリが増えます。この設定をクリアすると(推奨)、SiteScope はこれらのプロセスの管理にスレッドを 1 つだけ使用します。</p> <p>標準設定値 : 選択されていない</p>
プロセスプール強制終了タイムアウト(ミリ秒)	<p>SiteScope によって応答のないプロセスが強制終了されるまでの待機時間(ミリ秒単位)。これにより、すべてのタイムアウトでプロセスが強制終了されることを回避できます。</p> <p>標準設定値 : 60000 ミリ秒(最大でも 180000 ミリ秒にすることをお勧めします)</p> <p>注 :この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p>プロパティ名 : _processPoolKillTimeout</p>
クイック検索自動フィルタ遅延(ミリ秒)	<p>自動フィルタが実行されるまでの時間。-1 に設定されている場合、検索を実行するには、Enter キーを押す必要があります。クイック検索の詳細については、「Quick Search」を参照してください。</p> <p>標準設定値 : 200 ミリ秒</p> <p>注 :この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p>
回帰的・依存対象'	<p>モニタの[依存対象]ボックスで回帰を可能にします。これは、依存関係のため親グループが無効化されたとき、サブグループが無効化されることを意味します。標準設定では、依存関係が無効化されることによって、直接のグループのみが影響を受けます。</p> <p>標準設定値 : 選択されていない</p> <p>注 :この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p>プロパティ名 : _dependsOnRecursive</p>

UI 要素	説明
OA メトリックス クラスに VMware パフォーマンス モニタのメトリックスを報告する	<p>VMware パフォーマンス・モニタでは、メトリック・クラスに従って、ESX ホスト・サーバ、VM、またはリソース・プール・ターゲットの各メトリックスを特定のテーブルに報告します。すべての VMware パフォーマンス・モニタ・メトリックスを 1 つのテーブルに報告するには、このチェック・ボックスをクリアします。</p> <p>標準設定値：選択されている</p> <p>プロパティ名：_omReportNewVmwareMetricClasses</p>
リモートサーバの表示名を BSM に送信	<p>リモート・サーバのホスト名の代わりにリモート・サーバの表示名が BSM に送信されます。この設定は、DNS 解決が無効な場合に使用することをお勧めします。</p> <p>標準設定値：選択されていない</p> <p>プロパティ名：_sendRemoteServerDisplayNameToBAC</p>
SiteScope のスリープ遅延(ミリ秒)	<p>メイン・スレッドでのスリープ間隔の時間(ミリ秒単位)。</p> <p>標準設定値：180 ミリ秒</p> <p>注：この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p>プロパティ名：_monitorProcessCheckDelay</p>
SiteScope ツリー更新レート(秒)	<p>SiteScope ツリーの更新間の待機時間(秒単位)。最小値は 30 秒です。</p> <p>標準設定値：60 秒</p> <p>プロパティ名：_sisTreeRefreshRateSecs</p>
エラー発生時のスリープ間隔(ミリ秒)	<p>[エラーの検証] オプションを使用してモニタを再実行するまでに待機する時間(ミリ秒単位)。</p> <p>標準設定値：5000 ミリ秒</p> <p>プロパティ名：_verifySleepDuration</p>
SSH プロンプト タイムアウト(ミリ秒)	<p>最初のコマンドを実行する前に SiteScope が SSH 接続プロンプトの完了を待機する時間(ミリ秒単位)。</p> <p>標準設定値：3000 ミリ秒</p> <p>プロパティ名：_waitSshPromptTimeout</p>
タイムアウト プロキシクエリドライバリスト	<p>タイムアウトの問題を持つデータベース・ドライバのカンマ区切りのリスト。ここにリストされたドライバによって処理されたデータベース・クエリは、モニタの[クエリ タイムアウト] フィールドに指定されているタイムアウトを超えています。これらのドライバは、モニタに基づくタイムアウトを使用して個別にクエリされます。</p> <p>標準設定値：org.postgresql.Driver</p> <p>プロパティ名：_timeoutProxiedDrivers</p>

UI 要素	説明
プールから アイドル SSH 接続 をクリーン する期間 (分)	SSH 接続プールからアイドル SSH 接続をクリーンする時間(分単位)。 標準設定値 : 10 分 プロパティ名 : <code>_SSHConnectionIdleCleanTimeMinutes</code>
タイムゾーン オフセット	グリニッジ標準時(GMT)のタイム・ゾーン・オフセット(時間単位)を手動で設定します。 正と負、整数と非整数の両方の値を入力できます。 標準設定値 : -999(オフセットなし) 例 : 米国東部(EST)の場合、タイム・ゾーン・オフセットは GMT -5 になり、値 5 を入力する必要があります。中央ヨーロッパの場合、タイム・ゾーン・オフセットは GMT +2 になり、値 -2 を入力します。 注 : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。 プロパティ名 : <code>_timeZoneOffset</code>
トレース ルート コマ ンド	(Unix の場合)プラットフォームの標準設定を上書きするトレースルート・コマンドへのパス。 標準設定値 : 値なし プロパティ名 : <code>_tracerouteCommand</code>
SSH 接続 プロンプト を待機する	SiteScope は、最初のコマンドの実行を開始する前に、SSH 接続プロンプトの終了を待機します。この設定は、SSH リモート・サーバの起動プロンプトが長い場合に選択してください。 標準設定値 : 選択されていない プロパティ名 : <code>_readUntilPromptFound</code>

サーバ設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
ホスト名の上書き	BSM の SiteScope ホスト名が上書きされます。 標準設定値 : 値なし プロパティ名 : <code>_sisHostNameOverride</code>
プロセスの強制終了	SiteScope プロセスが停止すると子プロセスが強制終了されます。 標準設定値 : 選択されている プロパティ名 : <code>_killProcesses</code>

UI 要素	説明
モニタ プロセスの最大数	<p>プロセス・プール内のモニタ・プロセスの最大数。</p> <p>標準設定値 : 100</p> <p>注 : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p>プロパティ名 : <code>_maxMonitorProcesses</code></p>
実行中モニタの最大数	<p>キュー内の実行中モニタ・プロセスの最大数。</p> <p>標準設定値 : 400</p> <p>注 : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p>プロパティ名 : <code>_maxMonitorsRunning</code></p>
最小限のモニタ実行間隔(秒)	<p>最小限のモニタ頻度。この頻度に満たない頻度を指定してモニタを作成しようとすると、検証エラーが表示されます。</p> <p>注 : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p>標準設定値 : 15</p> <p>プロパティ名 : <code>_monitorMinInterval</code></p>
IP バージョン 6 アドレスを優先	<p>ホストが IPv6 と IPv4 の両方に解決された場合、IPv6 が使用されます。SiteScope の IPv6 のサポートの詳細については、556 ページ「SiteScope での IP バージョン 6 のサポート」を参照してください。</p> <p>注 : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p>標準設定値 : 選択されていない</p> <p>プロパティ名 : <code>_preferIPv6Address</code></p>
SiteScope ハートビート再開タイムアウト(分)	<p>ハートビート・イベントが検出されなくなってから SiteScope が再起動するまでの最大時間(分単位)。</p> <p>注 : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p>標準設定値 : 5 分</p> <p>プロパティ名 : <code>_heartbeatRestartTimeout</code></p>
SiteScope 再起動タイムアウト(分)	<p>SiteScope が再起動するための最大時間。</p> <p>標準設定値 : 15 分</p> <p>プロパティ名 : <code>_restartTimeout</code></p>
SiteScope シャットダウンタイムアウト(秒)	<p>SiteScope でシャットダウンを待機するタイムアウト時間(秒単位)。</p> <p>標準設定値 : 60 秒</p> <p>プロパティ名 : <code>_shutdownTimeout</code></p>

UI 要素	説明
起動スクリプト	<p>SiteScope の起動で使用するプラットフォームや手順に関係なく、SiteScope を起動するときは必ずこのスクリプトが実行されます。(空 = なし)</p> <p>標準設定値 : 値なし</p> <p>プロパティ名 : <code>_startupScript</code></p>

モニタ設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
追加エラートークン	<p>サーバ出力の解析時に失敗の兆候として処理されるキーワードの追加のリスト。</p> <p>標準設定値 : 失敗しました。* エラーコード :</p> <p>プロパティ名 : <code>_scriptMonitorErrorMsgs2</code></p>
追加イベント・ログ名	<p>Microsoft Windows イベント・ログ・モニタで別のログ名を入力して、標準ログ以外のイベント・ログを監視できます。</p> <p>標準設定値 : 値なし</p> <p>プロパティ名 : <code>_additionalEventLogNames</code></p>
追加イベント・タイプ	<p>Microsoft Windows イベント・ログ・モニタで別のイベント・タイプ・カテゴリを入力して、標準アプリケーション、システム、セキュリティ・ログ以外のイベント・タイプを監視できます。</p> <p>標準設定値 : 値なし</p> <p>プロパティ名 : <code>_additionalEventTypes</code></p>
URL 専用モニタのすべての要求ヘッダを許可する	<p>URL 専用モニタのすべての要求ヘッダを許可します。</p> <p>標準設定値 : 選択されていない</p> <p>プロパティ名 : <code>_urlOtherHeader=</code></p> <p>URL 専用モニタのすべての要求ヘッダを許可する</p> <p>選択すると、URL 専用モニタのすべての要求ヘッダ・タイプが許可されるようになります。許可される要求ヘッダ・タイプは、Custom-Content、Custom-Header、Content-Type、Host、User-Agent、Set-Cookie、Method、Protocol、Action、および sslgetOptions です。この設定をクリアした場合は、カスタム・ヘッダのみが許可されます。</p> <p>標準設定値 : 選択されていない</p> <p>プロパティ名 : <code>_allowAllRequestHeaders</code></p>

UI 要素	説明
参照可能な EXE タイムアウト(ミリ秒)	<p>カウンタ情報の取得やモニタの実行を待機する最大時間(ミリ秒単位)。この設定は、SAP、Sybase、DB2 8.x および 9.x のモニタなど、実行可能な参照可能モニタにのみ適用されます。</p> <p>標準設定値: 45000</p> <p>プロパティ名: <code>_browsableExeTimeout</code></p>
ブラウズ可能なモニタ - エラー時にすべてのカウンタの状態を BSM に送信	<p>参照可能なモニタの状態がエラーになっている場合、エラー発生カウンタ数とその現在の値のリストのみが SiteScope から BSM に送信されます。エラーになっていない場合(モニタの状態が正常な場合)、すべてのカウンタ名と値が SiteScope から BSM に送信されます。</p> <p>選択すると、エラー時でもすべてのカウンタ(エラーのカウンタと正常な状態のカウンタ)とその値が SiteScope から BSM に送信されます。</p> <p>標準設定値: 選択されていない</p> <p>プロパティ名: <code>_isSendStatusOfAllBrowsableCountersToBAC</code></p>
100% で発生する CPU エラー	<p>対象マシンの CPU 使用率が 100% に達すると、CPU モニタは標準設定エラー状態に切り替わります。</p> <p>標準設定値: 選択されている</p> <p>プロパティ名: <code>_cpuEnableErrorAt100</code></p>
CPU 最大単位数	<p>CPU モニタによってサポートされる最大 CPU 単位数。</p> <p>標準設定値: 16</p> <p>プロパティ名: <code>_cpuMaxProcessors</code></p>
DB 最大カラム数	<p>DB モニタによって処理される最大列数。</p> <p>標準設定値: 10</p> <p>プロパティ名: <code>_databaseMaxColumns</code></p>
DB 最大行数	<p>DB モニタによって処理される最大行数。</p> <p>標準設定値: 1</p> <p>プロパティ名: <code>_databaseMaxRows</code></p>
DB 値の最大長	<p>DB モニタによって処理されるデータの最大の長さ(文字数)。</p> <p>標準設定値: 200</p> <p>プロパティ名: <code>_databaseMaxSummary</code></p>

UI 要素	説明
新しいモニタの標準設定頻度(秒)	<p>モニタ・インスタンスの実行用にすべての新規モニタに設定される標準設定の頻度(モニタ・インスタンスの頻度値を別々に手動で設定していない場合が対象)。</p> <p>標準設定値: SiteScope では 600 秒(10 分)。SiteScope for Load Testing では 5 秒。</p> <p>プロパティ名: <code>_defaultMonitorRunFrequency</code></p>
標準精度	<p>モニタによって処理される浮動小数点値の標準精度。</p> <p>標準設定値: 0(無効)</p> <p>プロパティ名: <code>_defaultPrecision</code></p>
警告もしくはモニタの有効化/無効化時の必須表示	<p>警告またはモニタを有効化 / 無効化するとき、詳細の追加を必須フィールドとして設定できます。</p> <p>標準設定値: 選択されていない</p> <p>プロパティ名: <code>_enableDisableDescriptionMandatory</code></p>
ダイアルアップオプション	<p>Microsoft Windows ダイアルアップ・モニタから dialup.exe を実行するときのオプション。暗黙的にモデムでダイアルするには、<code>-silent</code> に設定します。ダイアルアップのデバッグを有効にするには、<code>-debug</code> に設定します。</p> <p>標準設定値: 0</p> <p>プロパティ名: <code>_dialupOptions</code></p>
最終行の読み取りを空にする	<p>スクリプト・モニタの出力に空行の最終行が含まれます。</p> <p>標準設定値: 選択されていない</p> <p>プロパティ名: <code>_enable_script_monitor_non_empty_last_line_reading</code></p>
JDBC ログ記録の有効化	<p>リンク・チェック・モニタの JDBC 検索結果ログ記録が有効になります。</p> <p>標準設定値: 選択されていない</p> <p>プロパティ名: <code>_linkMonitorJdbcEnabled</code></p>
スクリプトモニタエラートークン	<p>サーバ出力の解析時に失敗の兆候として処理されるキーワードのリスト。</p> <p>標準設定値: 見つかりません, 拒否されました, そのようなファイルまたはディレクトリは実行できません</p> <p>プロパティ名: <code>_scriptMonitorErrorMsgs</code></p>
保存するイベントログメッセージ	<p>警告の診断テキストと同時に保存する Microsoft Windows イベント・ログの詳細の数。</p> <p>標準設定値: 10</p> <p>プロパティ名: <code>_eventLogMessagesToSave</code></p>

UI 要素	説明
排他的モニタのタイムアウト (秒)	<p>実行前にほかのモニタの完了を排他的モニタで待機する最大時間(秒単位)。この影響を受けるモニタは、Microsoft Windows ダイアルアップ・モニタだけです。</p> <p>標準設定値 : 120 秒</p> <p>プロパティ名 : <code>_exclusiveMonitorTimeout</code></p>
FTP コンテンツ一致最大量	<p>FTP データ内容の照合に使用する最大バッファ・サイズ。</p> <p>標準設定値 : 50000</p> <p>プロパティ名 : <code>_ftpContentMatchMax</code></p>
FTP ダウンロード制限	<p>各ファイルから照合のためにダウンロードする最大バイト数。</p> <p>標準設定値 : -1(制限なし)</p> <p>プロパティ名 : <code>_ftpDownloadLimit</code></p>
FTP 最大スレッド数	<p>同時 FTP ワーク・スレッド最大数。</p> <p>標準設定値 : 1</p> <p>プロパティ名 : <code>_ftpMaxThreads</code></p>
HTTP 内容一致表示制限	<p>URL モニタの内容一致を表示するための最大バイト数。</p> <p>標準設定値 : 150</p> <p>プロパティ名 : <code>_urlContentMatchDisplayMax</code></p>
HTTP 内容一致制限	<p>URL モニタの内容一致を確認するための最大バイト数。</p> <p>標準設定値 : 50000</p> <p>プロパティ名 : <code>_urlContentMatchMax</code></p>
初期モニタ遅延 (秒)	<p>SiteScope の再起動後にモニタの更新がランダムにスケジュールされる時間(秒単位)。</p> <p>次の実行がすぐに行われるようにモニタの頻度を変更すると(たとえば、モニタが5分以内に実行されない場合、頻度を5分より小さい値に変更します)、SiteScope によって次の実行が指定した期間でランダムにスケジュールされます。</p> <p>標準設定値 : 600 秒</p> <p>プロパティ名 : <code>_initialMonitorDelay</code></p>
メール添付ファイルのコンテンツとして Base64 をサポート	<p>メール・モニタに対してメール添付ファイルのデータ内容送信エンコードとして Base64 がサポートされます。</p> <p>標準設定値 : 選択されていない</p> <p>注 : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p>プロパティ名 : <code>_mailAttachmentBase64Support</code></p>

UI 要素	説明
選択されるブラウズ可能カウンタの最大数	<p>参照可能ツリーから選択される参照可能カウンタの最大数。この値よりもカウンタ数が増えるようにモニタを作成または編集する場合、この値のカウンタ数までしか保存されません。</p> <p>注: 参照可能なモニタがテンプレートに表示される場合、選択したパターンと一致するカウンタ数は < SiteScope のルート・ディレクトリ > \groups\master.config ファイルの _maxCountersForRegexMatch パラメータによって制限されます。デプロイメント中に、パターンと一致するカウンタ数がこの値を超える場合、この値以下のカウンタ数のみが保存されます。そのため、この設定と同じ値と _maxCountersForRegexMatch パラメータを使用することをお勧めします。これらの両パラメータの標準設定値は 1000 です。</p> <p>標準設定値: 1000</p> <p>プロパティ名: <code>_browsableContentMaxCounters</code></p>
アプリケーション・モニタの最大カウンタ	<p>アプリケーション・モニタに選択できるカウンタの最大数。</p> <p>標準設定値: 100</p> <p>プロパティ名: <code>_ApplicationMonitorMaxCounters=100</code></p>
MIB モニタによる SNMP に対する最大カウンタ	<p>[MIB による SNMP] モニタでサポートされるカウンタの最大数。</p> <p>標準設定値: 32</p> <p>プロパティ名: <code>_maxSNMPbyMIBCounters</code></p>
最大 Windows パフォーマンスカウンタモニタカウンタ数	<p>Microsoft Windows パフォーマンス・カウンタ・モニタのインスタンスごとのカウンタの最大数。</p> <p>標準設定値: 8</p> <p>プロパティ名: <code>_NTCounterMonitorMaxCounters</code></p>
Microsoft Windows Media Server モニタサービス名	<p>Microsoft Windows Media Server モニタを使用して監視するサービス名。</p> <p>標準設定値: Windows Media サービス(Windows Media Station Service や Windows Media Unicast Service など)</p> <p>プロパティ名: <code>_counterObjectsWindowsMediaMonitor</code></p>
MQ サーバ CCSID	<p>SiteScope の標準設定の WebSphere MQ サーバ CCSID</p> <p>標準設定値: 値なし</p> <p>プロパティ名: <code>_mqServerCCSID=</code></p>

UI 要素	説明
MS Media Player 9 アカウント ブロック	<p>Media Player アカウントが 17999 エラーで停止する場合、このオプションを選択して、アカウント・ディレクトリ・パスを[MS Media Player 9 アカウント ディレクトリ]ボックスに追加します。</p> <p>標準設定値: 選択されていない</p> <p>プロパティ名: _MediaPlayer9AccountBlocked</p>
MS Media Player 9 アカウント ディレクトリ	<p>Media Player モニタで 17999 エラーが発生した場合、Media Player アカウント・ディレクトリを入力します。</p> <p>標準設定値: 値なし</p> <p>例: C:\Documents and Settings\<ユーザ>\Local Settings\Application Data\Microsoft\Windows Media\9.0</p> <p>プロパティ名: _MediaPlayer9AccountBlockedDir</p>
ネットワーク帯域幅モニタ整合性確認	<p>ネットワーク帯域幅モニタに対して整合性確認が実行されます。</p> <p>標準設定値: 選択されている</p> <p>プロパティ名: _performNetworkBandwidthSanityCheck</p>
Perfex オプション	<p>高負荷ネットワーク環境に多数のカウンタを含む Microsoft Windows リソース・モニタを作成しているときに、タイムアウトするまでの待機時間(秒単位)。</p> <p>標準設定値: -wrmUiTimeout 300</p> <p>プロパティ名: _perfexOptions</p>
Real Media Server モニタ サービス名	<p>Real Media Server モニタを使用して監視するサービス名。</p> <p>標準設定値: RMServer</p> <p>プロパティ名: _counterObjectsRealMonitor</p>
スクリプトの実行に perfex ツールを使用	<p>スクリプトの実行に perfex ツールを使用します。</p> <p>標準設定値: 選択されている</p> <p>プロパティ名: _scriptRunThroughPerfex</p>
スクリプトモニタ出力制限	<p>スクリプト・モニタの起動後にスクリプトの出力から保存する行数。</p> <p>標準設定値: 25</p> <p>プロパティ名: _scriptMonitorLinesToSave</p>

UI 要素	説明
スクリプト モニタ置 換文字 列	<p>リモート・スクリプトのパラメータ・タグであるスペース区切りの文字列のリストが保存されます。スクリプト・モニタの実行時に、スクリプト・コマンドのパラメータ・タグがモニタのプリファレンスの実際のパラメータ値に置換されます。</p> <p>標準設定値: \$ %</p> <p>プロパティ名: <code>_scriptMonitorReplacementChars</code></p> <p>例: スクリプト・コマンドが <code>test \$ %</code>, 置換文字が <code>\$ %</code>, パラメータが <code>Param1 Param2</code> である場合, コマンド <code>test Param1 Param2</code> がモニタで実行されます。</p>
同時実行 DNS モニタ	<p>同時に実行できる DNS モニタの最大数。これは, <code>roundTripTime</code> カウンタを使用する場合にのみ関係します。NSLookup 操作で, オペレーティング・システムをロードし, 値を変更できます。</p> <p>標準設定値: 0(0 は, 同時に実行できる DNS モニタの数に制限がないことを意味します)</p> <p>注: この設定を変更する場合は, SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p>プロパティ名: <code>_maxDnsMonitorsRunning</code></p>
SNMP モ ニタの最 大数	<p>指定の時間に実行できる SNMP モニタの最大数。</p> <p>標準設定値: 10</p> <p>注: この設定を変更する場合は, SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p>プロパティ名: <code>_snmpMonitorMaximum</code></p>
SNMP セッション 終了タイ ムアウト(ミ リ秒)	<p>SNMP セッションを閉じる前に SiteScope が待機する最大時間(ミリ秒単位)。</p> <p>標準設定値: 30000</p> <p>プロパティ名: <code>_maxSNMPCloseSessionTimeMillis</code></p>
SNMP ト ラップ エ ンコーデ ィング	<p>SNMP トラップ モニタの SNMP トラップ エンコーディング(トラップの送受信に使用)。空 = ISO8859-1。</p> <p>標準設定値: ISO8859-1</p> <p>プロパティ名: <code>_snmpTrapEncoding</code></p>
SNMP ト ラップ モ ニタ ログ 制限	<p>SNMP トラップ・モニタに対して SNMP トラップ・ログに記録される最大行数。このボックスは, SNMP トラップ・モニタ・ページの[警告の実行]が[すべての SNMP トラップの確認後に一度のみ]に設定されている場合にのみ入力します。</p> <p>注: 制限を高く設定すると, SiteScope.log または RunMonitor.log のサイズが増加する可能性があります。</p> <p>標準設定値: 1000</p> <p>プロパティ名: <code>_SNMPTrapMonitorDetailsMax</code></p>

UI 要素	説明
DNS Java ライブラリを使用	<p>標準の perfix 設定を使用せずに、Java DNS 機能をアクティブにします。DNS 応答時間は perfix 応答よりも速い場合があります。</p> <p>標準設定値: 選択されていない</p> <p>プロパティ名: <code>_useDNSJava</code></p>
MIB による SNMP に対する要求シーケンスを使用する	<p>[MIB による SNMP] モニタに対して新しい要求モードを有効にします。このオプションを使用すると、SiteScope はリモート・サーバに対して、モニタからの OID カウンタごとに個別の要求を実行します。</p> <p>標準設定値: 選択されていない</p> <p>プロパティ名: <code>_sequenceSNMP</code></p>
Web スクリプト・モニタのキュー・サイズ	<p>Web スクリプト・モニタのキューのサイズ。</p> <p>標準設定値: 20(最大値: 40)</p> <p>プロパティ名: <code>_maxWebScriptMonitorsRunning</code></p>
キュー内に待機中の Web スクリプトモニタのタイムアウト(秒)	<p>タイムアウトするまでの Web スクリプト・モニタのキュー内の待機時間(秒単位)。</p> <p>標準設定値: 120 秒</p> <p>プロパティ名: <code>_webScriptMonitorsWaitingInQueueTimeout</code></p>
Web Service モニタの最大読み取り長(バイト)	<p>Web サーバ・モニタのログ・ファイルから読み取る最大データ量(バイト単位)。</p> <p>標準設定値: 50000 バイト</p> <p>プロパティ名: <code>_maxAmountToRead</code></p>
Web サービスモニタのタイムアウト(秒)	<p>Web Server モニタが実行される最大時間(秒単位)。</p> <p>標準設定値: 30 秒</p> <p>プロパティ名: <code>webServiceTimeout=30</code></p>
Web サービスモニタは共通コンテンツマッチを使用する	<p>Web サービス・モニタの内容照合動作は、SiteScope 10.12 で変更されました。この設定により、SiteScope 10.12 以前に定義された Web サービス・モニタは正しい値を照合するようになりました。これは、Web サービス・モニタが、内容照合が使用されるほかのモニタと同じように動作することを意味します。古い内容照合動作に戻すには、この設定をクリアしてください。</p> <p>標準設定値: 選択されている</p>

モニタ設定をスキップ

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
スキップ モニタの無効化 期間 (秒)	<p>モニタの最大スキップ数 ([モニタの最大スキップ数] で定義されます) を超えてからモニタが無効化される期間 (秒単位)。</p> <p>標準設定値 : 360 秒</p> <p>プロパティ名 : _monitorDisablePeriodOnSkip</p>
モニタの最大スキップ数	<p>モニタが無効化されるまでのモニタの最大連続スキップ数。</p> <p>標準設定値 : 10</p> <p>注 : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p>プロパティ名 : _maxMonitorSkips</p>
スキップ後 モニタが無効になった場合に管理者に電子メールを送信	<p>モニタの最大連続スキップ数を超えてモニタが無効化された場合、SiteScope から管理者に電子メールが送信されます。</p> <p>標準設定値 : 選択されていない</p> <p>プロパティ名 : _emailSkipNotification</p>
スキップされるモニタをシャットダウン	<p>モニタが最大数を超えてスキップした場合、SiteScope がエラーを出力してシャットダウンします。</p> <p>標準設定値 : 選択されていない</p> <p>プロパティ名 : _shutdownOnSkips</p>

動的監視設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
ダイナミック・モニタリング・コア・スレッド・プール・サイズ	<p>新しいダイナミック・モニタ用に作成するプールのスレッド数でチェック・タスクが変更されます。</p> <p>標準設定値 : 5</p> <p>注 : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p>プロパティ名 : _dynamicMonitoringCoreThreadPoolSize</p>
ダイナミック・モニタリング最大キュー・サイズ	<p>新しいダイナミック・モニタの最大数により、キューに追加できるチェック・タスクが変更されます。コア・スレッドがビジーの場合、最大キュー・サイズに達するまで、新しいタスクがキューに追加されます。</p> <p>標準設定値 : 5000</p> <p>注 : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p>プロパティ名 : _dynamicMonitoringMaxQueueSize</p>

UI 要素	説明
ダイナミック・モニタリングの最大スレッド・プール・サイズ	<p>新しいダイナミック・モニタ用に作成するプールのスレッドの最大数でチェック・タスクが変更されます。これらの余分のスレッドは、すべてのコア・スレッドがビジーで、最大キュー・サイズに達した場合にのみ作成されます。</p> <p>標準設定値 : 30</p> <p>注 : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p>プロパティ名 : <code>_dynamicMonitoringMaxThreadPoolSize</code></p>

カスタム モニタ設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
ネットワークアクセスを許可	<p>カスタム・モニタが、データ処理スクリプトまたはスクリプトから呼び出される Java コードからほかのサーバにネットワーク接続を開く必要がある場合、この設定を有効にします。ネットワーク・アクセスをブロックするには、この選択をクリアしてください。</p> <p>標準設定値 : 選択されていない</p> <p>注 : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p>プロパティ名 : <code>_customMonitorAllowNetworkAccess</code></p>
変更を適用する間カスタム・モニタを無効にする	<p>変更の適用を実行する間、デプロイされたカスタム・モニタを無効にします。モニタは、変更がなされた後、変更が適用され有効な状態に保存されるまで、一時的に無効になります。</p> <p>標準設定値 : 選択されている</p> <p>プロパティ名 : <code>_disableForPublish</code></p>
カウンタの最大数	<p>単一のカスタム・モニタに作成できるカウンタの最大数。</p> <p>標準設定値 : 1000</p> <p>注 : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p>プロパティ名 : <code>_customMonitorMaxNumOfCounters</code></p>
クエリの最大数	<p>クエリ・ベースのカスタム・モニタに追加できるクエリの最大数</p> <p>標準設定値 : 10</p> <p>注 : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p>プロパティ名 : <code>_customMonitorMaxNumOfQueries</code></p>

警告設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
警告試行時の遅延(秒)	Post 警告の送信を試行する間の待機時間(秒単位)。 標準設定値 : 120 秒 プロパティ名 : _postAttemptDelay
警告スレッドの最大数	プール内の警告スレッドの最大数。 標準設定値 : 100 プロパティ名 : _threadPoolAlertMaxThreads
Post アクションの最大実行数	Post 警告の送信を試行する最大数。 標準設定値 : 4 プロパティ名 : _postAttempts
最大スクリプト警告プロセス数	同時に実行できるスクリプト警告プロセスの最大数。 標準設定値 : 25 プロパティ名 : _maxScriptAlertProcesses
サウンド警告の最大の長さ(ミリ秒)	サウンド警告音の最長時間(ミリ秒単位)。 標準設定値 : 0 プロパティ名 : _AudioSleepTime
ページの遅延(秒)	ページ信号間の遅延(ページ警告を使用の場合)。 標準設定値 : 5 プロパティ名 : _delayBetweenPages

テンプレート設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
テンプレート エンティティの直下にテンプレートの作成を許可する	テンプレート内にグループを作成せずに、テンプレートの直下にモニタを追加できるようになります。 注 : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。 標準設定値 : 選択されていない プロパティ名 : _allowTemplateMonitorDirectlyUnderTemplate

永続性設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
永続差異ファイルあたりの最大変更数	<p>各永続差異ファイルに保持される、永続的変更の最大数。</p> <p>標準設定値 : 51</p> <p>注 : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p>プロパティ名 : <code>_PersistencyMaxChangesInDeltaFile</code></p>
永続履歴項目の最大数	<p>永続的に保持される履歴項目の最大数。</p> <p>標準設定値 : 1000</p> <p>プロパティ名 : <code>_PersistencyMaxHistoryItems</code></p>
最大永続履歴サイズ	<p>永続的履歴の最大サイズ(バイト単位)。</p> <p>標準設定値 : 20000</p> <p>注 : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p>プロパティ名 : <code>_PersistencyMaxHistorySize</code></p>
永続差異ファイルの最大数	<p>永続的に保持される差異ファイルの最大数。この数に達すると、すべての永続オブジェクトを使用して新しいスナップショット(.ssf)ファイルが作成されます。古い .ssf ファイルは、履歴フォルダに移動されます。</p> <p>標準設定値 : 100</p> <p>プロパティ名 : <code>_PersistencyMaxDeltaFiles</code></p>
最大一時ディレクトリサイズ	<p>一時ディレクトリの最大サイズ(キロバイト単位)。</p> <p>標準設定値 : 10000</p> <p>注 : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p>プロパティ名 : <code>_tempDirMaxSize</code></p>

レポート設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
レポートの標準設定時間(時間)	<p>クイック・レポートまたは警告レポートの監視データを含める標準設定期間。</p> <p>標準設定値 : 1 時間</p> <p>プロパティ名 : <code>_quickReportDefaultTimePeriod</code></p>
レポートに alert.log.old を含める	<p>alert.log.old ファイルが警告レポートに含まれます。</p> <p>標準設定値 : 選択されている</p> <p>プロパティ名 : <code>_includeAlertLogOld</code></p>

UI 要素	説明
モニタ履歴レポートの最大エラー数	モニタ履歴レポートに表示される最大エラー数。 標準設定値 : 100 プロパティ名 : _maxReportErrors
履歴レポートの最大サンプル数	履歴レポートの最大サンプル数(読み取り数または行数)。 標準設定値 : 100 プロパティ名 : _reportMaxBuckets
モニタ履歴レポートの最大警告数	モニタ履歴レポートに表示される最大警告数。 標準設定値 : 100 プロパティ名 : _maxReportWarnings
レポートで詳細なサンプリングアルゴリズムを使用	レポートのサンプル間の時間が、レポートされたすべてのモニタ頻度の最小値として定義されます。 標準設定値 : 選択されていない プロパティ名 : _useReportAdvancedSamplingAlgorithm

ベースライン設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
アクティベーションスレッドの優先順位	アクティベーション・スレッドに割り当てられた優先順位。指定する場合、優先順位は 1 ~ 10 にする必要があります。指定しない場合、優先順位は 1 に設定されます。SiteScope のオンライン機能を妨げないように、優先順位はできるだけ低くしてください。 標準設定値 : 1(低い優先順位) 注 : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。 プロパティ名 : _baseliningActivationThreadPriority
エラーのしきい値が定義されていない場合は、エラーの上限の作成を自動化する	モニタのエラーのしきい値が定義されていない場合、エラーの上限のオフセット値を使用して、ベースラインしきい値が自動的に作成されます。 標準設定値 : 選択されている 注 : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。 プロパティ名 : _baseliningAutomateUpperBoundCreation

UI 要素	説明
計算スレッドの優先順位	<p>計算スレッドに割り当てられた優先順位。指定する場合、優先順位は 1 ～ 10 にする必要があります。指定しない場合、優先順位は 1 に設定されます。通常、優先順位が高いほど、ベースライン計算の完了が早くなります。SiteScope のオンライン機能を妨げないように、優先順位はできるだけ低くしてください。</p> <p>標準設定値 : 1(低い優先順位)</p> <p>注 : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p>プロパティ名 : _baseliningCalculationThreadPriority</p>
失敗した解析ハンドラスレッドの優先順位	<p>失敗した解析スレッド・ハンドラに割り当てられた優先順位。指定する場合、優先順位は 1 ～ 10 にする必要があります。指定しない場合、優先順位は 1 に設定されます。通常、優先順位が高いほど、ベースライン計算の完了が早くなります。SiteScope のオンライン機能を妨げないように、優先順位はできるだけ低くしてください。</p> <p>標準設定値 : 1(低い優先順位)</p> <p>注 : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p>プロパティ名 : _baseliningFailedParsingHandlerThreadPriority</p>
今日の日を計算に含める	<p>現在の日のデータをベースライン計算に含めるかどうかを指定します。</p> <p>標準設定値 : 選択されている</p> <p>注 : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p>プロパティ名 : _baseliningCalculationIncludesToday</p>
ベースライン・データをディスクに保存する間隔 (分)	<p>メモリに累積されるベースライン・データのディスクへの保存を SiteScope が行う間隔 (分単位)。間隔が短いほどメモリの消費量が少なくなりますが、失敗による脆弱性が増加し、パフォーマンスも低下します。</p> <p>標準設定値 : 30 分</p> <p>注 : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p>プロパティ名 : _baseliningSaveAccumulatedDataIntervalMinutes</p>
計算に含める最大日数	<p>ベースライン計算に含める履歴データの日数。数値が高いほどベースライン結果の精度は高くなりますが、計算時間が長くなり、使用するディスク領域も増加します。この値よりも古いデータは計算に含まれません。計算モデルの詳細については、337 ページ「ベースラインしきい値について」を参照してください。</p> <p>標準設定値 : 30 日</p> <p>注 : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p>プロパティ名 : _baseliningDaysToIncludeInCalculation</p>

UI 要素	説明
パーセンタイル範囲の最大数	<p>パーセンタイル範囲マッピング・テーブルに表示されるパーセンタイル範囲の数が制限されます。</p> <p>標準設定値: 8</p> <p>注: この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p>プロパティ名: <code>_baseliningMaxNumberOfPercentilesRanges</code></p>
ベースライン設定に必要な最小日数	<p>SiteScope でベースラインを計算するためにモニタで実行する必要がある最小日数。</p> <p>標準設定値: 14 日</p> <p>最小値: 1(1 より小さい値を入力した場合、標準設定値が使用されます)。</p> <p>注: この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p>プロパティ名: <code>_baseliningMinimumNumberOfDays</code></p>
ベースライン設定に必要な最小サンプル数	<p>SiteScope でベースラインを計算するために必要な最小サンプル数。</p> <p>標準設定値: 2016(2 週間周期で実行中で 10 分ごとに実行されるモニタに対して生成されるサンプルの数)</p> <p>最小値: 1(1 より小さい値を入力した場合、標準設定値が使用されます)。</p> <p>注: この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p>プロパティ名: <code>_baseliningMinimumNumberOfSamples</code></p>
エラーの上限の計算に使用するオフセット	<p>エラー限度の計算に使用するオフセット値。次の場合、ベースラインのしきい値はこの値に乘じられます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [エラーのしきい値が定義されていない場合は、エラーの上限の作成を自動化する]オプションが選択されている(下記参照)。 • 最も上限に近い現在のエラーしきい値が、計算されたベースラインのしきい値よりも低い。 <p>標準設定値: 0.3</p> <p>注: この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p>プロパティ名: <code>_baseliningUpperBoundOffset</code></p>
解析のチャンクサイズ	<p>ログ・ファイル・パーサによって同時に処理されるモニタの数。数値が高いほどベースライン計算は早くなりますが、使用されるファイル・ハンドラの数が増加します。</p> <p>標準設定値: 100</p> <p>注: この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p>プロパティ名: <code>_baseliningParsingChunkSize</code></p>

UI 要素	説明
解析スレッドの優先順位	<p>解析スレッドに割り当てられた優先順位。指定する場合、優先順位は 1 ～ 10 にする必要があります。指定しない場合、優先順位は 1 に設定されます。通常、優先順位が高いほど、ベースライン計算の完了が早くなります。SiteScope のオンライン機能を妨げないように、優先順位はできるだけ低くしてください。</p> <p>標準設定値 : 1 (低い優先順位)</p> <p>注 : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p>プロパティ名 : <code>_baseliningParsingThreadPriority</code></p>
破棄したサンプルのパーセンタイル	<p>ベースライン計算に含まれない最も上限に近いサンプルのパーセンタイル(“ノイズ”とみなされる測定値のサンプル)。</p> <p>標準設定値 : 2.0</p> <p>注 : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p>プロパティ名 : <code>_baseliningNoiseMarginPercentile</code></p>

カスタム設定

注: 多くのカスタム設定には、使いやすいテキスト・ラベルはなく、< SiteScope のルート・ディレクトリ > \groups\master.config ファイルの対応するプロパティ名のみが表示されます。これらの設定はドキュメントに含まれていません。

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
自動デプロイメント チェックの頻度(秒)	<p><code>persistence\autodeployment</code> ディレクトリの自動テンプレート・デプロイメント xml ファイルがデプロイされる間隔(秒単位)。この機能の詳細については、904 ページ「自動テンプレート・デプロイメント」を参照してください。</p> <p>標準設定値 : 120</p> <p>プロパティ名 : <code>_autoDeploymentCheckFrequency</code></p>

UI 要素	説明
genericEventIntegrationGDSaveZipped	<p>.zip ファイルとしてデータをキャッシュに保存するかどうかを示します。SiteScope では、統合の ID から名前を付けたフォルダを作成し、このフォルダ内に、サンプル・キャッシュ・ファイルごとに 1 つのファイルを次の形式で作成します</p> <ul style="list-style-type: none"> (<numberOfEvents>EC<time-stamp>.<CacheSuffix> <numberOfEvents>EC_<time-stamp>.<CacheSuffix>.zipped(圧縮されたファイルの場合) <p>標準設定値 : true</p> <p>プロパティ名 : _genericEventIntegrationGDSaveZipped</p>
_genericEventIntegrationGDIntervalMinutes	<p>キャッシュ・ファイルの再送信間の間隔。</p> <p>標準設定値 : 5 分</p> <p>プロパティ名 : _genericEventIntegrationGDIntervalMinutes</p>
_genericEventIntegrationGDFileCountToDelete	<p>キャッシュ・フォルダが最大サイズに到達した場合、SiteScope では、この値に従って、キャッシュから X 個のファイルを削除します。この値が -1 の場合、SiteScope では、キャッシュ・フォルダ内のファイルの半数を削除します(古いファイルから先に削除)。</p> <p>標準設定値 : -1</p> <p>プロパティ名 : _genericEventIntegrationGDFileCountToDelete</p>
_genericEventIntegrationGDCacheMaxSize-MB	<p>キャッシュの最大サイズ(MB 単位)を示します。キャッシュがこの値に到達した場合、SiteScope では、キャッシュからファイルを削除します(動作は、 _genericEventIntegrationGDFileCountToDelete パラメータに依存)。</p> <p>標準設定値 : 10 MB(この値は整数の必要あり)</p> <p>プロパティ名 : _genericEventIntegrationGDCacheMaxSizeMB</p>

UI 要素	説明
トポロジ解決頻度(分)	<p>監視対象サーバのトポロジをチェックする間の待機時間(分単位)。モニタの実行中にこの時間を超えると、モニタによって BSM の RTSM にトポロジが再作成されます。</p> <p>標準設定値 : 120 分</p> <p>プロパティ名 : <code>_topologyResolvingFrequencyInMinutes</code></p>

第35章

統合プリファレンス

本章の内容

概念

- 697ページ「統合プリファレンスの概要」

タスク

- 704ページ「アクセス不可プロファイルの SiteScope-BSM 統合プリファレンスの設定方法」
- 705ページ「SiteScope 一般イベント統合の設定方法」

参照情報

- 708ページ「一般データおよび Diagnostics 統合の XML タグの参照情報」
- 711ページ「[統合プリファレンス]のユーザ・インタフェース」

統合プリファレンスの概要

[統合プリファレンス] インタフェースを使用すると、統合インスタンスを作成して、SiteScope が監視データを次のアプリケーションに報告できるようになります。

- **Amazon CloudWatch**

- 統合の詳細については、[698ページ「Amazon CloudWatch 統合プリファレンス」](#)を参照してください。
- ユーザ・インタフェースの詳細については、[713ページ「\[Amazon CloudWatch 統合プリファレンス\] ダイアログ・ボックス」](#)を参照してください。

- **HP Business Service Management**

- 統合の詳細については、[218ページ「BSMを使った作業」](#)を参照してください。
- 統合プリファレンスの詳細については、[698ページ「HP Business Service Management 統合プリファレンス」](#)を参照してください。
- ユーザ・インタフェースの詳細については、[718ページ「\[BSM 統合プリファレンス\] ダイアログ・ボックス」](#)を参照してください。

- **Diagnostics**

- 統合の詳細については、[700ページ「Diagnostics 統合の概要」](#)を参照してください。
- ユーザ・インタフェースの詳細については、[725ページ「\[Diagnostics 統合プリファレンス\] ダイアログ・ボックス」](#)を参照してください。

- **HP Operations Manager**

- 統合の詳細については、[254ページ「SiteScope と HPOM および BSM の通信方法について」](#)を参照してください。
- Operations Manager 統合プリファレンスの詳細については、[700ページ「HP Operations Manager 統合の概要」](#)を参照してください。
- ユーザ・インタフェースの詳細については、[729ページ「HP Operations Manager 統合 ダイアログ・ボックス」](#)を参照してください。

- **汎用データ統合(測定値)**

- 統合の詳細については、[701ページ「汎用データ統合の概要」](#)を参照してください。
- ユーザ・インタフェースの詳細については、[721ページ「\[データ統合プリファレンス\] ダイアログ・ボックス」](#)を参照してください。

- **汎用イベント統合**

- 統合の詳細については、[702ページ「汎用イベント統合の概要」](#)を参照してください。
- ユーザ・インタフェースの詳細については、[734ページ「\[一般イベント統合プリファレンス\] ダイアログ・ボックス」](#)を参照してください。

Amazon CloudWatch 統合 プリファレンス

Amazon CloudWatch は、Amazon Web Services(AWS)クラウド・リソースを監視する Web サービスで、Amazon EC2 から開始します。Amazon CloudWatch では、CPU 使用率、ディスクの読み取りおよび書き込み回数、ネットワーク・トラフィックといった測定値を含む、リソース使用率、稼働パフォーマンス、全体的なデマンド・パターンの「見える化」が実現されています。

この統合を行うと、AWS がホストするアプリケーションの監視用に SiteScope を使用しているユーザーは、SiteScope 測定値を Amazon CloudWatch サービスに報告できます。Amazon Web Services モニタを実行した後、SiteScope はデータを Amazon CloudWatch に報告します。このデータは、AWS の AutoScaling、レポート機能、警告に使用できます。モニタの設定の詳細については、「[Amazon Web Services Monitor](#)」を参照してください。

SiteScope が Amazon CloudWatch にデータをレポートできるようにするには、Amazon CloudWatch 統合を設定する必要があります。CloudWatch の統合設定の詳細については、[713 ページ](#)「[\[Amazon CloudWatch 統合 プリファレンス\] ダイアログ・ボックス](#)」を参照してください。

HP Business Service Management 統合 プリファレンス

SiteScope 監視データのログを BSM に記録できるようにするには、SiteScope を BSM のデータ・コレクタとして設定する必要があります。これには、SiteScope を BSM の[システム可用性管理(SAM)管理]ページに追加する作業も含まれます。SiteScope が追加され、接続が確立されたら、[統合プリファレンス]ページに、[SAM 管理]の[新規 SiteScope]ページに入力した関連設定を含む[BSM 統合プリファレンス]が表示されます。

統合プリファレンスは次の用途に使用します。

- 利用可能な統合設定を変更する。
- BSM への全データのログ記録を無効にする。これには、トポロジ・レポートが含まれます。
- 空の SiteScope プロファイルに対して統合を作成する。[SAM 管理]に SiteScope を追加したときに SiteScope から BSM にアクセスできなかった場合は(HP Software-as-a-Service で作業している場合など)、**アクセス不可プロファイル**を持つ SiteScope を SAM 管理に追加します。その後、[統合プリファレンス]で接続と統合を設定します。このタスクの詳細については、[704 ページ](#)「[アクセス不可プロファイルの SiteScope-BSM 統合プリファレンスの設定方法](#)」を参照してください。

接続先の BSM サーバが、SiteScope のデータ報告先の BSM サーバと異なるマシンにある場合、SiteScope の[統合プリファレンス]の[メイン設定]、または[SAM 管理]の[新規 SiteScope]ページの[分散設定]で、両方のサーバについて接続情報を指定する必要があります。

これらのプリファレンスの設定の詳細については、[718 ページ](#)「[\[BSM 統合プリファレンス\] ダイアログ・ボックス](#)」を参照してください。

本項の内容

- [699 ページ](#)「[SiteScope と BSM 間通信のための SSL の使用](#)」
- [699 ページ](#)「[SiteScope のデータ送信先となるゲートウェイ・サーバの変更](#)」
- [699 ページ](#)「[BSM に送信された SiteScope データの圧縮](#)」
- [699 ページ](#)「[トラブルシューティングおよび制限事項](#)」

SiteScope と BSM 間通信のための SSL の使用

Secure Sockets Layer(SSL)を使用して、SiteScope から BSM サーバにデータを転送できます。ルート認証局で署名された証明書を BSM サーバにインストールしている場合、SiteScope サーバで必要な追加設定はありません。BSM サーバに自己署名証明書があり、その証明書を使用して SiteScope との通信のセキュリティを保護する場合、適切な以下の手順を実行する必要があります。

- SSL を必要とする BSM サーバの詳細については、235 ページ「SiteScope を SSL が必要な BSM サーバに接続する方法」を参照してください。
- クライアント証明書を必要とする BSM サーバの詳細については、236 ページ「クライアント証明書が必要な BSM サーバに SiteScope を接続する方法」を参照してください。

注:

- これらの設定は、BSM マシンにインストールされている証明書がルート認証局(CA)によって署名されていない場合にのみ指定する必要があります。たとえば、Verisign のように認証局が署名した証明書を使用している場合、これらの設定を変更する必要はありません。
- ほかの SiteScope モニタで使用しているキーストア・ファイルに自己署名証明書をインポートできますが、必須ではありません。BSM サーバの証明書のキーストアは、個別に作成できます。

SiteScope のデータ送信先となるゲートウェイ・サーバの変更

SiteScope のデータの報告先となるゲートウェイ・サーバを変更できます。一般に、これは、複数のサーバにコンポーネントがインストールされている BSM デプロイメントで作業している場合にのみ当てはまります。この変更を行うには、[統合プリファレンス] ページの[Business Service Management マシン名 / IP アドレス]ボックスに必要なゲートウェイ・サーバの名前または IP アドレスを入力します。また、SiteScope 設定を[SAM 管理]の[ゲートウェイサーバ]の名前で更新する必要があります。

注: この機能は、特定の BSM インストールにすでに登録されている SiteScope のゲートウェイ・サーバを変更する場合にのみ使用できます。新しい SiteScope を追加する場合や、異なる BSM システムに SiteScope を接続する場合には、この機能は使用できません。

BSM に送信された SiteScope データの圧縮

標準設定で、データが SiteScope サーバから BSM に送信される時には圧縮されずに送信されます。SiteScope モニタ(ss_monitor_t)および SiteScope メトリック(ss_t)サンプルのデータ圧縮を有効にするには、< SiteScope のルート・ディレクトリ>\groups\master.config ファイルでプロパティ **compressDataInGzipFormat** を **true** に設定します。この設定を有効にすると、BSM(ここで解凍される)に送信される前に SiteScope データは gzip に圧縮されます。データ圧縮を使用できるのは、SiteScope が BAC 8.05 以降、または BSM 9.01 以降に報告される時のみであることに注意してください。

トラブルシューティングおよび制限事項

BSM へのデータの報告に関するトラブルシューティングの詳細については、251 ページ「トラブルシューティングと制限事項」を参照してください。

Diagnostics 統合の概要

SiteScope は Diagnostics にデータを転送して、Diagnostics が監視するアプリケーション・サーバに関する包括的な情報を表示できるようにします。このデータから、アプリケーション・サーバのデプロイ先であるインフラストラクチャ・コンポーネントに関する洞察を得ることができます。

たとえば、MIB による SNMP モニタからのデータを統合すると、アプリケーション・サーバが実行されているインフラストラクチャに関する問題の判別に役立ちます。SiteScope はグループ、モニタ、測定値に関するデータを転送します。Diagnostics は、SiteScope から送信されたデータを読み込み、レポートやグラフで表示できます。

ユーザ・インタフェースの詳細については、725 ページ「[Diagnostics 統合 プリファレンス] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

Diagnostics の測定単位

SiteScope では、SiteScope モニタと Diagnostics のメトリックスおよびメトリックに使用する測定単位のマッピングを制御するファイル < **SiteScope のルート・ディレクトリ** > /conf/ integration/data_integration_uom.xml を生成します。Diagnostics は、認識できる測定単位にデータが関連付けられている場合にのみ、SiteScope からデータを受け入れます。SiteScope の単位は、監視対象のソースから取得され、場合によっては該当する Diagnostics の測定単位にマップする必要があります。SiteScope モニタで使用する測定単位は、監視対象のデータのタイプに応じて異なります。たとえば、CPU モニタに使用する測定単位はパーセンテージで、ディスク領域モニタに使用する測定単位はバイト数です。したがって、SiteScope から送られる監視データに使用する測定単位が Diagnostics で認識されるように、必要に応じて XML ファイルを変更することをお勧めします。

Diagnostics にデータを報告する新しいモニタを SiteScope に追加する場合、[Diagnostics 統合 プリファレンス] を編集して、[UOM XML の生成] ボタンをクリックすることをお勧めします。SiteScope は、現在デプロイされているモニタと対応する測定値のリストを生成します。このリストは、< **SiteScope のルート・ディレクトリ** > /conf/ integration/data_integration_uom.xml ファイルと結合されており、XML ファイル内の手動で変更されていない値のみが更新されています。XML ファイル内に手動で変更された値がある場合、その値は更新されず、保持されます。この測定単位に関する情報の結合は、[UOM XML の生成] ボタンをクリックするか、SiteScope を再起動するたびに行われます。

SiteScope が Diagnostics に転送する統合ファイルに含まれる XML タグ、要素、属性の詳細なリファレンスについては、708 ページ「一般データおよび Diagnostics 統合の XML タグの参照情報」を参照してください。

HP Operations Manager 統合の概要

SiteScope のサーバとモニタの可視性 BSM の Operations Manager (HPOM) と操作管理に提供するには、HP Operations Agent をインストールし、SiteScope サーバに設定する必要があります。HP Operations Agent は、イベントを HPOM 管理サーバと操作管理に送信します。HP Operations Agent は、SiteScope で収集された測定値データのデータ・ストレージとしても機能します。HP Operations Agent を HPOM/BSM サーバに接続し、HP Operations Manager とのイベント統合または測定値統合を有効にする必要があります。

注: 以前の統合ソリューションでは、基本的な警告スクリプト・メカニズムの使用時には、HP SiteScope アダプタを HPOM サーバにインストールする必要がありましたが、この統合により不要

になります。

- **イベント統合** : SiteScope イベントがトリガされるのは、SiteScope モニタ・メトリック状態 (正常 / 警告 / エラー) に変化があったとき、または、SiteScope 警告がトリガされたときです。HP Operations Agent が監視しているログ・ファイルにイベントが書き込まれると、SiteScope はイベントを送信します。HP Operations Agent はデータを読み取ってイベントに変換し、HPOM/BSM サーバに転送します。イベント送信の詳細については、[259 ページ「イベントの送信」](#)を参照してください。
- **メトリック統合** : SiteScope メトリック・データは、HPOM が Performance Manager グラフで使用するために、また BSM で PMi が使用するために (操作管理内の Performance Perspective で使用)、HP Operations Agent データ・ストレージから収集します。測定値のレポートの詳細については、[265 ページ「HP Operations Agent を使用した測定値の報告」](#)を参照してください。

HP Operations Manager の統合設定を設定する方法の詳細については、[729 ページ「HP Operations Manager 統合ダイアログ・ボックス」](#)を参照してください。

汎用データ統合の概要

これは、別のアプリケーションへのデータ (メトリック) の転送に使用できる汎用の統合です。アプリケーションは SiteScope が転送する XML ファイルを受信する必要があります。これらのファイルには、SiteScope のグループ、モニタ、測定値の状態に関する情報が含まれています。

ユーザ・インタフェースの詳細については、[721 ページ「\[データ統合プリファレンス\] ダイアログ・ボックス」](#)を参照してください。

本項の内容

- [701 ページ「HTTP 要求を使用した配信」](#)
- [701 ページ「時刻同期」](#)

HTTP 要求を使用した配信

受信側のアプリケーションは、SiteScope からのデータを受信できるようになっている必要があります。つまり、アプリケーションは SiteScope サーバからの HTTP 要求を受信し、受信した XML ファイルを復号化する必要があります。

HTTP 要求には次のヘッダが含まれています。

```
Content-Type : text/xml
```

XML ファイルの内容を zip 圧縮するように選択した場合、HTTP 要求には次のヘッダが含まれます。

```
Content-Type : text/xml
Content-Encoding : gzip
```

データを zip 圧縮するかどうかは、SiteScope に統合を作成するときに [データ統合プリファレンス] ダイアログ・ボックスで選択します。データを zip 圧縮するように選択した場合、SiteScope が送信したファイルをアプリケーションで展開する必要があります。

時刻同期

SiteScope が時刻同期 XML ファイルを個別に転送できるようにして、SiteScope サーバの時刻をアプリケーションのサーバと同期できます。このファイルは、SiteScope での統合作成時に [データ統合プリファレンス] ダイアログ・ボックスの [時刻同期の間隔] フィールドで選択した間隔で、データ XML と同

じように送信されます。このフィールドに値を入力すると、SiteScope はサーバの日付スタンプを、指定した間隔でデータを受信するアプリケーションに転送します。このオプションについての詳細は、[721 ページ「\[データ統合プリファレンス\]ダイアログ・ボックス」の\[時刻同期の間隔 \(分\)\]フィールド](#)を参照してください。この XML ファイルの内容の詳細については、[708 ページ「一般データおよび Diagnostics 統合の XML タグの参照情報」](#)を参照してください。

汎用イベント統合の概要

これは、サードパーティ製のアプリケーションまたは管理コンソールへのイベントの転送に使用できる汎用の統合です。送信されたイベントには、イベントをトリガした状態の変更など、モニタとその測定値に関する情報が含まれています。

SiteScope では、HTTP ベースのネットワーク管理システムとの統合および管理コンソールへの汎用イベントの送信に SiteScope HTTP 受信者を使用します。

このタスクの詳細については、[705 ページ「SiteScope 一般イベント統合の設定方法」](#)を参照してください。

ユーザ・インタフェースの詳細については、[734 ページ「\[一般イベント統合プリファレンス\]ダイアログ・ボックス」](#)を参照してください。

本項の内容

- [702 ページ「汎用イベントの形式」](#)
- [702 ページ「汎用イベント統合の概要」](#)
- [702 ページ「HTTP 要求を使用した配信」](#)
- [703 ページ「保証付きイベント配信のサポート」](#)

汎用イベントの形式

サードパーティ製のアプリケーションまたは管理コンソールに転送されるイベント属性の形式は、イベント・マッピング・テンプレートを使用して決定されます。このテンプレートでは、イベントのトリガ時に送信されるイベント属性値に SiteScope ランタイム・データをマッピングします。汎用イベント統合では、カスタム属性との共通イベント・マッピングを使用します。イベント・マッピングの詳細については、[608 ページ「共通イベント・マッピングの概要」](#)を参照してください。

複数のターゲット宛先

汎用イベント統合を使用すると、複数のイベント統合を設定できます。これは、HPOM 管理サーバへの統合または BSM の操作管理への統合のいずれか 1 つのみをサポートする Operations Manager 統合とは異なります。

HTTP 要求を使用した配信

受信側のアプリケーションは、SiteScope からのイベントを受信できるようになっている必要があります。つまり、アプリケーションは SiteScope サーバからの HTTP 要求を受信し、受信した XML を HTTP 応答を通じて復号化できる必要があります。HTTP コネクタと通信するために SiteScope で必要とする設定は、[\[新しい HTTP 受信者\]](#)または[\[HTTP 受信者の編集\]](#)ダイアログ・ボックスで設定します。

HTTP 要求(イベントを送信する)には次のヘッダが含まれています。

```
Content-Type : text/xml
```

XML ファイルの内容を zip 圧縮するように選択した場合、HTTP 要求には次のヘッダが含まれます。

```
Content-Type : text/xml  
Content-Encoding :gzip
```

イベントを zip 圧縮するかどうかは、SiteScope に統合を作成するときに[一般 イベント統合 プリファレンス]ダイアログ・ボックスで選択します。イベントを zip 圧縮するように選択した場合、SiteScope が送信したファイルをアプリケーションで展開できる必要があります。

保証付きイベント配信のサポート

汎用イベント統合では、保証付きイベント配信をサポートしています。つまり、SiteScope でイベントを送信できない場合 (ネットワークに問題がある、受信者に接続できないなど)、SiteScope では、イベントの再送信を試行するか、後で送信するためにイベントを保存します。これにより、イベントを最初に宛先に配信できない場合の情報の損失が防止されます。

[プリファレンス] > [インフラストラクチャ プリファレンス] > [カスタム設定] または < SiteScope のルート・ディレクトリ > \groups\master.config ファイルで保証付きイベント配信設定を変更できます。

- **_genericEventIntegrationGDSaveZipped**。 .zip ファイルとしてデータをキャッシュに保存するかどうかを示します。
- **_genericEventIntegrationGDIntervalMinutes**。 キャッシュ・ファイルの再送信間の間隔。
- **_genericEventIntegrationGDFileCountToDelete**。 キャッシュ・ホルダが最大サイズに達すると、SiteScope は指定された数のファイルをキャッシュから削除します。
- **_genericEventIntegrationGDCacheMaxSizeMB**。 SiteScope がキャッシュからファイルを削除するまでのキャッシュの最大サイズ (メガバイト単位)。

これらの設定の詳細については、[693 ページ「カスタム設定」](#)の次のプロパティを参照してください。

アクセス不可プロファイルの SiteScope-BSM 統合プリファレンスの設定方法

このタスクでは、SiteScope から BSM にアクセスできない場合 (HP Software-as-a-Service での作業時などに)、SiteScope を BSM のデータ・コレクタとして設定する手順について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- 704 ページ「BSM への SiteScope プロファイルの追加」
- 704 ページ「BSM サーバへの接続パラメータの指定」
- 704 ページ「SiteScope と BSM 間通信のための SSL の設定」

1. BSM への SiteScope プロファイルの追加

BSM で、SAM[管理]の[新規]SiteScope ページで[アクセス不能なプロファイル]を選択して SiteScope の空のプロファイルを作成します。

ユーザ・インタフェースの詳細については、BSM ヘルプの『システム可用性管理の使用』の[新規 SiteScope]/[SiteScope の編集]ページを参照してください。

2. BSM サーバへの接続パラメータの指定

SiteScope で、新しい BSM の統合プリファレンスを[統合プリファレンス]に追加します。BSM 統合の値を入力します。統合を追加する場合、[利用可能なプロファイルの取得]ボタンをクリックし、BSM で作成した空のプロファイルを選択します。

ユーザ・インタフェースの詳細については、718 ページ「[BSM 統合プリファレンス]ダイアログ・ボックス」を参照してください。

3. SiteScope と BSM 間通信のための SSL の設定

BSM サーバに自己署名証明書があり、その証明書を使用して SiteScope との通信のセキュリティを保護する場合、適切な以下の手順を実行する必要があります。

- SSL が必要な BSM サーバについては、235 ページ「SiteScope を SSL が必要な BSM サーバに接続する方法」を参照してください。
- クライアント証明書を必要とする BSM サーバの詳細については、236 ページ「クライアント証明書が必要な BSM サーバに SiteScope を接続する方法」を参照してください。

SiteScope 一般イベント統合の設定方法

このタスクでは、サードパーティ・アプリケーションまたは管理コンソールにイベントが転送できるように、SiteScope を設定する手順について説明します。これらのファイルには、SiteScope のグループ、モニタ、測定値の状態に関する情報が含まれています。

このタスクには次の手順が含まれています。

- 705 ページ「前提条件」
- 705 ページ「HTTP のプリファレンスの設定」
- 705 ページ「一般イベント統合を設定します。」
- 706 ページ「モニタ・インスタンスの設定およびイベント・マッピングの選択」
- 706 ページ「モニタのレポート・タグの選択」
- 706 ページ「保証付きイベント配信設定の設定(任意指定)」
- 707 ページ「結果とトラブルシューティング」

1. 前提条件

SiteScope の管理者になっているか次のユーザ権限を持つ必要があります。

- 共通イベント・マッピングを追加、編集、削除：イベント・マッピングの作成または変更が必要です。
- 電子メール、ページャ、HTTP および SNMP のプリファレンスを追加、編集、削除：HTTP プリファレンスの変更が必要です。

ユーザ権限の詳細については、773 ページ「ユーザ管理プリファレンスの概要」を参照してください。

2. HTTP のプリファレンスの設定

[プリファレンス] > [統合プリファレンス] > [HTTP プリファレンス]を選択します。そして、SiteScope でイベントまたはデータを管理コンソールに送信するときに使用する HTTP 設定を設定します。この場合、イベントまたはデータをエンドポイント URL に送信するために SiteScope で使用される HTTP 受信者を作成する必要があります。

ユーザ・インタフェースの詳細については、661 ページ「[新規 HTTP 受信者]/[HTTP 受信者の編集]ダイアログ・ボックス」を参照してください。

3. 一般イベント統合を設定します。

[プリファレンス] > [統合プリファレンス]を選択し、[新規統合]をクリックした後[一般イベント統合]を選択します。

- a. [一般設定]パネルで統合の名前と詳細を入力します。
- b. [一般イベント統合プリファレンス]パネルで、イベント受信用のコネクタ・インタフェースを選択します。
- c. [レポート タグ]パネルで、レポート・タグを選択します(これは後述の手順 5 で使用)。SiteScope はこれを使用して、メトリック状態の変更によってイベントがトリガされたとき、どのタグがこの設定された統合を報告するかを決めます。このタグのあるすべてのモニタは、こ

の統合経路でイベントを報告します。

統合ごとに少なくとも 1 つのタグを選択する必要があります。

ユーザ・インタフェースの詳細については、734 ページ「[一般 イベント統合 プリファレンス] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

4. モニタ・インスタンスの設定およびイベント・マッピングの選択

モニタ・インスタンスを設定します。モニタ・プロパティの[イベント マッピング設定]パネルで、イベント・マッピング・テンプレートを選択するか、新規 イベント・マッピングを作成します。このテンプレートには、SiteScope 実行時データとイベント送信に使用される属性値の間のマッピングが含まれます。イベントは、メトリック・ステータスの変更 イベントがトリガされたとき管理コンソールに送信されます。ユーザ・インタフェースの詳細については、612 ページ「[新規 イベント マッピング] / [イベント マッピングの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

CDA(Continuous Delivery Automation)との統合時に HP CDA イベント・マッピング・テンプレートを使用できます。CDA とは、ハイブリッド・クラウド環境でインフラストラクチャ・プロビジョニングを可能にするポリシー・ベースのプラットフォームのことです。CDA は SiteScope と統合して SiteScope モニタをデプロイし、そのモニタからイベントを受け取ります。CDA ユーザ・インタフェースでは、受け取ったイベントを基にして状態を監視できます。

注: イベント・マッピング・リストを使用できるのは、SiteScope が HPOM 統合され、イベント統合が有効にされている場合か、または、[一般 イベント統合]が[プリファレンス]で設定された場合だけです。「共通 イベント・マッピングを追加、編集、または削除します」権限がある場合、このリストを編集できます。

5. モニタのレポート・タグの選択

モニタ・プロパティの[タグの検索/フィルタ]パネルで、メトリック・ステータスの変更 イベントをトリガする各 モニタ・インスタンス用のレポート・タグ(手順 3c で選択されている)を 1 つ以上選択します。SiteScope では、選択したタグを使用して、メトリクス状態変更 イベントがトリガされたときに受信側アプリケーションに転送するデータを決定します。

ユーザ・インタフェースの詳細については、394 ページ「タグの検索/フィルタ」を参照してください。

6. 保証付きイベント配信設定の設定(任意指定)

SiteScope がイベントを送信できない場合(たとえば、ネットワークの問題があったり、受信者がダウンしている場合など)、SiteScope はイベントの送信を再試行するか、今後の送信のためにイベントを保存します。

[プリファレンス] > [インフラストラクチャ プリファレンス] > [カスタム設定]で、次の設定を使用して、保証付きイベント配信設定の値を決めることができます。

- **_genericEventIntegrationGDSaveZipped**。zip ファイルとしてデータをキャッシュに保存するかどうかを示します。
- **_genericEventIntegrationGDIntervalMinutes**。キャッシュ・ファイルの再送信間の間隔。
- **_genericEventIntegrationGDFileCountToDelete**。キャッシュ・ホルダが最大サイズに達すると、SiteScope は指定された数のファイルをキャッシュから削除します。
- **_genericEventIntegrationGDCacheMaxSizeMB**。SiteScope がキャッシュからファイルを削除するまでのキャッシュの最大サイズ(メガバイト単位)。

これらの設定の詳細については、693 ページ「カスタム設定」を参照してください。

7. 結果とトラブルシューティング

モニタの測定値状態に変更があると、イベント・マッピング・テンプレートの形式に基づいてイベントが作成されます。イベントはコネクタ・インスタンスに送信されます(これは、すべての HTTP メッセージを受信するアプリケーションのエンドポイント URL です)。

送信が成功したイベントの詳細は、**generic_event_integration.log** ファイルに表示されます(このファイルは[サーバ統計情報] > [ログファイル]から利用可能)。

イベント・エラー・データは **error.log** ファイルに書き込まれます。このファイルは<SiteScope ルート・ディレクトリ>\logs ディレクトリにあります。

エラーが発生した場合は、SiteScope で <SiteScope ルート・ディレクトリ>\conf\core\Tools\log4j\PlainJava\log4j.properties.debug ファイルをデバッグ・モードで開きます。そして、一般イベント統合文字列を <SiteScope ルート・ディレクトリ>\conf\core\Tools\log4j\PlainJava\log4j.properties ファイルにコピーします。

一般データおよび Diagnostics 統合の XML タグの参照情報

SiteScope で一般データまたは Diagnostics の統合のデータを転送するときには、XML ファイルが使用されます。この XML ファイルの要素と属性について次に説明します。統合の作成の詳細については、701ページ「汎用データ統合の概要」と700ページ「Diagnostics 統合の概要」を参照してください。

ユーザ・インタフェースの詳細については、721ページ「[データ統合プリファレンス]ダイアログ・ボックス」と725ページ「[Diagnostics 統合プリファレンス]ダイアログ・ボックス」を参照してください。

本項の内容

- 708ページ「データの XML 要素および属性表」
- 710ページ「時刻同期 XML」

データの XML 要素および属性表

親要素	要素の説明	属性	詳細
performance モニタ	XML の親要素。この要素内のすべての group 要素を含む。	collectorHost collector	SiteScope ホスト データを収集するアプリケーション(常に SiteScope)
グループ	SiteScope グループを表す。group および monitor 要素の親要素。	name	ユーザによって定義されたグループ名
		desc(任意指定)	グループの詳細(入力されている場合)
		previousName(任意指定)	グループの以前の名前(ある場合)

モニタ	SiteScope モニタを表す。counter 要素の親要素。	type	モニタ・タイプ([新規モニタ]ダイアログ・ボックスに示される)
		name	ユーザによって定義されたモニタ名
		target	監視対象のリモート・サーバ
		targetIP	監視されるリモート・サーバの IP アドレス
		time	測定時刻
		quality	モニタのしきい値によって判断される状態 利用可能な値： <ul style="list-style-type: none"> 0: データなし(しきい値が定義されていない) 1: 情報(正常) 2: 警告 3: 危険域
		previousName(任意指定)	モニタの以前の名前(ある場合)
		desc(任意指定)	モニタの詳細(入力されている場合)
		sourceTemplateName	モニタがテンプレートまたはソリューション・テンプレートから作成された場合のソース・テンプレート名
		statusDesc(任意指定)	統合の作成時に[追加のデータを含める]が選択されている場合のみ含まれるモニタの状態の文字列を表す。このオプションについての詳細は、 722ページ「データ統合プリファレンスの設定」 の[追加のデータを含める]フィールドを参照してください。

counter	モニタによって 収集された 測定値を表 す。	name	カウンタ名
		value	カウンタ値
		quality	カウンタのしきい値によって判断されるカウンタの状態 利用可能な値： <ul style="list-style-type: none"> 0: データなし(しきい値が定義されていない) 1: 情報(正常) 2: 警告 3: 危険域
		desc(任意指定)	モニタの詳細(入力されている場合)
		status(任意指定)	この属性の値が0と表示される場合、カウンタは使用できない。カウンタが利用可能な場合、この属性は SiteScope から送信されず、XML には含まれない。 利用可能な値： 0: カウンタは使用できない
		units(任意指定)	カウンタの測定値の単位(関連する場合)

時刻同期 XML

データ統合を作成するときに[時刻同期の間隔]フィールドに値を入力すると、SiteScope サーバの時刻と受信側アプリケーションの時刻を同期化するために、SiteScope によってこの XML が送信されます。

親要素	要素の説明	属性	属性の説明
performanceMonitors	XML の親要素。	collectorHost	SiteScope ホスト
		collector	データを収集するアプリケーション(常に SiteScope)
timeStamp	SiteScope サーバの時刻を提供します。	timestamp	タイムスタンプ。1970 年 1 月 1 日から経過した秒数として計算されます。

[統合プリファレンス]のユーザ・インタフェース

本項の内容


- 711ページ「[統合プリファレンス]ページ」
- 712ページ「[統合プリファレンスタイプ]ダイアログ・ボックス」
- 713ページ「[Amazon CloudWatch 統合プリファレンス]ダイアログ・ボックス」
- 718ページ「[BSM 統合プリファレンス]ダイアログ・ボックス」
- 721ページ「[データ統合プリファレンス]ダイアログ・ボックス」
- 725ページ「[Diagnostics 統合プリファレンス]ダイアログ・ボックス」
- 729ページ「HP Operations Manager 統合ダイアログ・ボックス」
- 734ページ「[一般イベント統合プリファレンス]ダイアログ・ボックス」





[統合プリファレンス]ページ

このページでは、SiteScope を BSM, HPOM, Diagnostics などのアプリケーションに統合する場合に設定を行うことができます。

アクセス方法	[プリファレンス]コンテキスト > [統合プリファレンス]を選択します。
重要な情報	SiteScope の管理者、または「統合プリファレンスの編集」権限を付与されたユーザのみが、統合プリファレンスを作成または変更できます。ユーザ権限の詳細については、773ページ「ユーザ管理プリファレンスの概要」を参照してください。
関連タスク	<ul style="list-style-type: none">• 231ページ「SiteScope および BSM 間の統合の設定方法」• 704ページ「アクセス不可プロファイルの SiteScope-BSM 統合プリファレンスの設定方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none">• 697ページ「統合プリファレンスの概要」• 251ページ「トラブルシューティングと制限事項」


ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
	新規統合 : SiteScope の新規統合を作成します。ユーザ・インタフェースの詳細については、712ページ「[統合プリファレンスタイプ]ダイアログ・ボックス」を参照してください。

UI 要素	説明
	<p>統合の編集 : SiteScope の既存の統合を編集できます。選択した統合タイプに応じた統合の編集ダイアログ・ボックスが開きます。</p> <ul style="list-style-type: none"> Amazon CloudWatch 統合 : ユーザ・インタフェースの詳細については、713ページ「[Amazon CloudWatch 統合プリファレンス]ダイアログ・ボックス」を参照してください。 BSM 統合 : ユーザ・インタフェースの詳細については、718ページ「[BSM 統合プリファレンス]ダイアログ・ボックス」を参照してください。 データ統合 : ユーザ・インタフェースの詳細については、721ページ「[データ統合プリファレンス]ダイアログ・ボックス」を参照してください。 Diagnostics 統合 : ユーザ・インタフェースの詳細については、725ページ「[Diagnostics 統合プリファレンス]ダイアログ・ボックス」を参照してください。 HP Operations Manager 統合 : ユーザ・インタフェースの詳細については、729ページ「[HP Operations Manager 統合ダイアログ・ボックス」を参照してください。 一般イベント統合 : ユーザ・インタフェースの詳細については、734ページ「[一般イベント統合プリファレンス]ダイアログ・ボックス」を参照してください。
	統合の削除 : [統合プリファレンス]から選択した統合を削除します。
	すべて選択 : 表示されたすべての統合を選択します。
	選択範囲を解除 : 選択をクリアします。
SiteScope のデタッチ	<p>(ショートカット・メニューからのみ利用可能) SiteScope を LoadRunner 統合からデタッチします。この操作で、現在の LoadRunner 統合を SiteScope 側から削除できます。SiteScope がアタッチされている場合は、モニタを LoadRunner ユーザ・インタフェースから定義できます。</p> <p>注 : これは、SiteScope が LoadRunner と統合されている場合にのみ使用できます。</p>
統合名	新規統合プリファレンスの作成時に統合に割り当てられる名前の文字列。
統合の詳細	統合プリファレンスの作成時または編集時に割り当てられた統合の詳細。

[統合プリファレンス タイプ]ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、設定する統合プリファレンスのタイプを選択できます。

アクセス方法	<p>[プリファレンス]コンテキスト > [統合プリファレンス]を選択し、[新規統合]</p> <p> ボタンをクリックします。</p>
---------------	--



重要な情報	SiteScope の管理 者、または「 統合 プリファレンスの編集 」権 限を付 与 され たユーザのみが、統合 プリファレンスを作 成 または変 更 できます。ユーザ権 限の詳 細 につい ては、 773 ページ「ユーザ管理 プリファレンスの概要 」を参 照 してくだ さい。
関連タスク	704 ページ「アクセス不 可 プロファイルの SiteScope-BSM 統合 プリファレンス の設 定 方法 」
関連情報	697 ページ「統合 プリファレンスの概要 」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
統合 プリファレンス・タイプ	<p>次の統合 プリファレンス・タイプを選択 します。</p> <ul style="list-style-type: none">● Amazon CloudWatch 統合 : AWS によつてホストされているアプリケーションの監視に SiteScope を使用しているカスタマが、任意の SiteScope 測定 値を Amazon CloudWatch サービスに報告 できるように します。ユーザ・インタフェースの詳 細 につい ては、713 ページ「[Amazon CloudWatch 統合 プリファレンス] ダイアログ・ボックス」を参 照 してくだ さい。● BSM 統合 : SiteScope を BSM のデータ・コレクタとして設 定 するために使用 します。ユーザ・インタフェースの詳 細 につい ては、718 ページ「[BSM 統合 プリファレンス] ダイアログ・ボックス」を参 照 してくだ さい。● データ統合 : 一 般 データの統合 を作 成 するために使用 します。ユーザ・インタフェースの詳 細 につい ては、721 ページ「[データ統合 プリファレンス] ダイアログ・ボックス」を参 照 してくだ さい。● Diagnostics 統合 : Diagnostics 統合 を作 成 するために使用 します。ユーザ・インタフェースの詳 細 につい ては、725 ページ「[Diagnostics 統合 プリファレンス] ダイアログ・ボックス」を参 照 してくだ さい。● 一 般 イベント統合 : 一 般 イベント統合 を作 成 するために使用 します。ユーザ・インタフェースの詳 細 につい ては、734 ページ「[一 般 イベント統合 プリファレンス] ダイアログ・ボックス」を参 照 してくだ さい。● HP Operations Manager 統合 : イベントとレポート・メトリックを HPOM サーバおよび BSM サーバに送信 する ように SiteScope を設 定 する場 合 に使用 します。ユーザ・インタフェースの詳 細 につい ては、729 ページ「HP Operations Manager 統合 ダイアログ・ボックス」を参 照 してくだ さい。
統合 プリファレンスの詳 細	統合 プリファレンス・タイプの詳 細。

[Amazon CloudWatch 統合 プリファレンス] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、新しい Amazon CloudWatch の統合 の作 成 や既 存 のデータ統合 の編 集 ができます。これにより、AWS がホストするアプリケーションの監視 用 に SiteScope を使用 している カスタマは、SiteScope メトリックを Amazon CloudWatch サービスに報告 できます。

<p>アクセス方法</p>	<p>[プリファレンス]コンテキスト > [統合 プリファレンス]を選択します。[統合 プリファレンス] ページで次を実行します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [新規統合]  ボタンをクリックして[Amazon CloudWatch 統合]を選択するか • または、既存の Amazon CloudWatch 統合を選択して[統合の編集]  をクリックします。
<p>重要な情報</p>	<ul style="list-style-type: none"> • SiteScope の管理者、または「統合 プリファレンスの編集」権限を付与されたユーザのみが、統合 プリファレンスを作成または変更できます。ユーザ権限の詳細については、773 ページ「ユーザ管理 プリファレンスの概要」を参照してください。 • SiteScope は Amazon CloudWatch のみに数値カウンタを報告できます。最少 1 文字で最大 255 文字である必要があります。 • Amazon CloudWatch は大きすぎるまたは小さすぎる指数の値を切り捨てます。126(1×10^{126})より大きい 10 進指数の値、-130(1×10^{-130})より小さい値は切り捨てられます。 • Amazon CloudWatch 統合は、一度の要求で 20 メトリックを超えて Amazon CloudWatch サービスに送信することはできません。 • Amazon CloudWatch にメトリックが表示されるまで最大 15 分を割り当てる必要があります。 • 標準設定のレポート・タグ(モニタ・デプロイメント・ウィザード・グループから)が使用される場合、または選択したレポート・タグに値の詳細がない場合、SiteScope はメトリックを Amazon CloudWatch サービスに送信できません。 • Amazon CloudWatch サービスに報告された SiteScope メトリックを削除することは現在のところできません。結果として、更新されずに 2 週間たつとメトリックは自動的に Amazon から削除されます。 • 標準設定では、SiteScope は AWS がホストするアプリケーションからデータを 2 分間隔で取得します。 <code>_amazonCloudWebServiceMonitorPeriod</code> プロパティ(および分単位の値)を < SiteScope のルート・ディレクトリ > \groups\master.config ファイルに追加することによって、Amazon からデータを受信する期間をカスタマイズできます。たとえば、<code>_amazonCloudWebServiceMonitorPeriod=10</code> は SiteScope が最後の 10 分間のメトリックの平均値を取得することを意味します。

関連情報	<ul style="list-style-type: none">713ページ「[Amazon CloudWatch 統合 プリファレンス] ダイアログ・ボックス」697ページ「統合 プリファレンスの概要」711ページ「[統合 プリファレンス] ページ」712ページ「[統合 プリファレンス タイプ] ダイアログ・ボックス」『HP SiteScope Monitor Reference』の「Amazon Web Services Monitor」
------	---

一般設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
名前	SiteScope インタフェースでこの統合の識別に使用する名前。 注： このフィールドは必須です。
詳細	統合の詳細。これには、SiteScope からのデータを受信するアプリケーションに関する情報が含まれる場合があります。この詳細は、SiteScope の[統合 プリファレンス] ページにのみ表示されます。

Amazon CloudWatch 統合 プリファレンス設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
名前空間	対象とするサービスに対応する名前空間。このフィールドは必須です。 注： <ul style="list-style-type: none">「AWS/」で始まる名前空間を指定することはできません。「AWS/」で始まる名前空間は、Amazon CloudWatch にメトリックを送信する他の Amazon Web サービス製品用に予約されています。名前空間は最大 250 文字に制限されています。 標準設定値： HP/SiteScope
エンコーディング	受信側のアプリケーションが使用するエンコーディング。 標準設定値： UFT-8
レポート間隔 (秒)	SiteScope がデータの送信を終了してから SiteScope 次にデータの送信を開始するまでの時間間隔(秒単位)。このフィールドは必須です。 標準設定値： 60 秒

UI 要素	詳細
時刻同期の間隔(分)	<p>SiteScope サーバと SiteScope データを受信するサーバの時刻を同期化するために、SiteScope ではサーバに登録されている時刻を定期的に報告できます。受信側サーバは、SiteScope から送信されたデータ・サンプルの時刻を自分のサーバの時刻と同期化し、SiteScope データとアプリケーション自体の SiteScope データの時刻が一致するようにします。</p> <p>SiteScope が、SiteScope サーバの時刻を SiteScope のデータを受信するサーバに報告する間隔を分単位で選択します。</p> <p>標準設定値 :10 分</p>
要求タイムアウト(秒)	<p>サーバとの接続が確立されるまでのタイムアウト(秒単位)。値 0 は、タイムアウトを使用しないことを示します。</p> <p>注 : このフィールドは必須です。</p> <p>標準設定値 : 120 秒</p>
接続タイムアウト(秒)	<p>データを待機するソケットのタイムアウト(秒単位)。タイムアウト値 0 は、タイムアウトを使用しないことを示します。このフィールドは必須です。</p> <p>標準設定値 :120 秒</p>
再試行の回数	<p>SiteScope が接続の確立を試みる回数。</p> <p>標準設定値 : 3</p>
統合を無効にする	<p>SiteScope は、データをサーバに転送しません。統合プリファレンス設定はそのまま残ります。統合を一時的に無効にする場合に使用します。</p> <p>標準設定値 : 選択されていない</p>

Amazon CW セキュリティ設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
AWS アクセスキー ID	要求送信者を一意に特定するための英数字トークン。この ID は、AWS 秘密アクセスキーに対応します。
AWS 秘密キー	AWS アカウントに登録する際に AWS が割り当てるキー。要求認証用。

UI 要素	詳細
地域	測定値の取得または保存に使用する Amazon EC2。地域取得ボタンをクリックして、測定値の取得または保存に使用する Amazon EC2 を選択します。 Amazon EC2 は、現在次の各地域で使用できます。US 東部(北バージニア州)、US 西部(オレゴン州)、US 西部(北カリフォルニア州)、EU(アイルランド)、アジア太平洋(シンガポール)、アジア太平洋(東京)、南米(サンパウロ)、および AWS GovCloud。

プロキシ・サーバ設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
NTLM V2 Proxy	プロキシで NTLM バージョン 2 を使用した認証が必要な場合に選択します。 標準設定値: 選択されていない
アドレス	プロキシ・サーバ・アドレス(必要な場合)。
ユーザ名	プロキシ・サーバのユーザ名。
パスワード	指定したサーバのパスワード。

レポート タグ



ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
<タグ名と値>	SiteScope では、ここで選択したタグを使用して受信側のアプリケーションに転送するデータを決定します。統合ごとに少なくとも 1 つのタグを選択する必要があります。受信側のアプリケーションにデータを転送するグループ、サブグループ、モニタについても同じタグを選択する必要があります。 オブジェクトに対して統合タグを選択すると、そのタグがオブジェクトの子に伝搬されます。この統合タグでグループにタグ付けすると、そのすべてのサブグループとモニタが状態を受信側のアプリケーションに報告します。 例: Integration_ACW というタグを作成して、ここで選択します。受信側のアプリケーションに状態を報告する各グループ、モニタ、または両方に、オブジェクトの[タグの検索/フィルタ]設定でこのタグを選択します。 注: 統合プリファレンスごとに複数のタグを選択できます。報告するオブジェクトに対して複数の統合タグを選択できます。

UI 要素	詳細
タグの追加	<p>[新規タグ] ダイアログ・ボックスを開き、新しいキーワード・タグを追加できる。ユーザ・インターフェースの詳細については、111 ページ「[新規タグ]/[タグの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p> <p>ヒント: 統合タグの作成時には単語 <code>Integration_<integration identifier></code> を使用します。これは、このタグは、SiteScope 用に作成されるその他のすべての検索 / フィルタ・タグとともに表示されるためです。これにより、グループまたはモニタのどちらの統合を有効にするかを選択するためのタグを識別することができます。</p>

[BSM 統合 プリファレンス] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、BSM 統合 設定を変更し、SAM 管理 で作成されていて SiteScope にアクセス不可 プロファイル用に新しい BSM 統合 を作成 できます。

アクセス方法	<p>[プリファレンス] コンテキスト > [> 統合 プリファレンス] を選択します。[統合 プリファレンス] ページで次を実行します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [新規統合]  ボタンをクリックして [BSM 統合] を選択するか • または、既存の BSM 統合 を選択して [統合を編集します]  ボタンをクリックします。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> • SiteScope の 管理者、または「統合 プリファレンスの編集」権限を付与されたユーザのみが、統合 プリファレンスを作成または変更 できます。ユーザ権限の詳細については、773 ページ「ユーザ管理 プリファレンスの概要」を参照してください。 • BSM への接続をセキュリティで保護するには (BSM ユーザ名とパスワードは認証に使用されないため)、SiteScope に基本認証を設定するか、双方向の SSL を使用することをお勧めします。BSM を基本認証を使用するように設定すると、SiteScope の標準設定の認証ユーザ名フィールドと標準設定の認証パスワードフィールド ([プリファレンス] > [一般 プリファレンス] > [メイン パネル]) に入力したものと同一ユーザ名とパスワードが、BSM へのデータとポロジの両方を報告するのにも使用されます。BSM が基本認証を使用するように設定されていない場合、送信された資格情報は無視されます。 • SiteScope サーバから BSM に送信される前にデータを圧縮できるようにするには、<SiteScope ルート ディレクトリ>\groups\master.config ファイルで <code>_topazCompressDataInGzip=true</code> を設定します。有効化すると、SiteScope モニタ (ss_monitor_t) および SiteScope メトリック (ss_t) サンプルが、GZIP 圧縮されてから BSM (ここで展開される) に送信されます。データ圧縮を使用できるのは SiteScope が BAC 8.05 以降にレポートする時に限定されます。 • 標準設定で、データが SiteScope サーバから BSM に送信される時には圧縮されずに送信されます。データ圧縮の有効化の詳細については、699 ページ「BSM に送信された SiteScope データの圧縮」を参照してください。

関連タスク	<ul style="list-style-type: none"> 231ページ「SiteScope および BSM 間の統合の設定方法」 235ページ「SiteScope を SSL が必要な BSM サーバに接続する方法」 236ページ「クライアント証明書が必要な BSM サーバに SiteScope を接続する方法」 237ページ「トポロジ・レポートの設定方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> 697ページ「統合プリファレンスの概要」 711ページ「[統合プリファレンス] ページ」 712ページ「[統合プリファレンス タイプ] ダイアログ・ボックス」

BSM 統合のメイン設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
Business Service Management マシン名 / IP アドレス	この SiteScope を接続する BSM サーバのマシン名 または IP アドレス。 注 : このフィールドは必須です。
SiteScope エージェント・マシンの場所	BSM に接続している SiteScope サーバの場所。この特定の SiteScope サーバの場所を容易に識別できる任意の値を指定できます。 注 : このフィールドは必須です。
Business Service Management へのログ記録をすべて無効にする	SiteScope の BSM へのデータ送信を停止します。すべてのトポロジ報告も無効になります。 ログ記録を再度有効にするには、チェック・ボックスをクリアします。 標準設定値 : 選択されていない
<プロファイル>	SiteScope によって収集されたデータを BSM を使用して格納する SiteScope プロファイル。 注 : プロファイルは BSM の SAM Administration で事前に設定されている必要があります。
利用可能なプロファイルの取得	利用可能なプロファイルのリストが表示されます。このボタンは、SAM Administration で作成された空のプロファイル(アクセス不可プロファイル)に SiteScope を登録する場合のみ使用します。
Business Service Management ユーザ名	BSM 管理者レベルのユーザのユーザ名。
Business Service Management ユーザ・パスワード	指定したユーザのパスワード。

Web サーバのセキュリティ設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
認証 ユーザ名	BSM サーバが基本認証を使用するように設定されている場合、サーバにアクセスするユーザ名。
認証 パスワード	BSM サーバが基本認証を使用するように設定されている場合、サーバにアクセスするパスワード。
SSL を使用 (HTTPS プロトコル)	HTTPS プロトコルが使用されるように BSM サーバを設定する場合に選択します。 標準設定値 : 選択されていない

プロキシ・サーバ設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
アドレス	プロキシ・サーバ・アドレス(必要な場合)。
ユーザ名	プロキシ・サーバのユーザ名。
パスワード	指定したサーバのパスワード。

トポロジ報告設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
トポロジの再同期化の時間間隔(日)	SiteScope で BSM のトポロジ・データと同期化する日数。 SiteScope が BSM に報告するトポロジ情報は、この時間間隔に達した後の SiteScope の再起動時に同期化されます。 標準設定値 : 7 日 最小値 : 1 日 注 : SiteScope で作成されて RTSM に格納されているすべてのトポロジは、エージング・プロセスの対象です。エージングを避けるには、 222 ページ「SiteScope データと BSM の構成アイテムとの統合」 を参照してください。
標準トポロジ・プローブ・ドメイン	SiteScope トポロジ・プローブの標準設定のドメイン。 標準設定値 : DefaultDomain 注 : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。

UI 要素	詳細
トポロジ受信者ポート	BSM で使用するトポロジ受信者ポート。 標準設定値 : 80 注 :この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。
トポロジ受信者 SSL ポート	BSM で使用するトポロジ受信者 SSL ポート。 標準設定値 : 443 注 :この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。
トポロジ・アンチエージング・オフセット(分)	アンチエージング・プロセスを実行する、分単位の午前 0 時からのオフセット。アンチエージングの詳細については、 222 ページ「SiteScope データと BSM の構成アイテムとの統合」 を参照してください。 標準設定値 : 0 注 :この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。 例 : 午前 1:30 にアンチエージングを実行するには、90 のオフセットを入力します。



BSM プリファレンス利用可能操作

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
リセット	SiteScope サーバからすべての BSM 関連の設定を削除します。すべての SiteScope 設定が BSM から削除されます。また、対応するプロファイルから SiteScope エージェントを解除するメッセージが、適切な BSM サーバに送信されます。 注 :現在の設定のリセットを選択した場合、SiteScope の BSM への再接続に異なるプロファイルを作成または使用する必要があります。BSM では、以前使用された接続プロファイルは選択できません。
再同期化	SiteScope からすべての設定データを強制的に BSM に再送信します。このデータは、すべてのグループとモニタ定義で構成されます。再同期化では、SiteScope からすべてのトポロジ・データも強制的に BSM に再送信します。 注 :BSM 9.10 以降にアップグレードする場合は、 [トポロジの再同期化の時間間隔] 値に基づいてトポロジ・データが BSM に送信されるのを待機せず、SiteScope を手動で再同期することをお勧めします。
厳密な再同期化	SiteScope からすべての設定データとトポロジ・データを強制的に BSM に再送信します。また、設定データの場合、BSM からこの SiteScope プロファイルの既存のモニタおよびグループ・データを削除します。

[データ統合 プリファレンス] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、新しい一般データの統合の作成や既存のデータ統合の編集ができます。直接統合されていないアプリケーションへの SiteScope データの転送に使用できます。

アクセス方法	<p>[プリファレンス] コンテキスト > [統合 プリファレンス] を選択します。[統合 プリファレンス] ページで次を実行します。</p> <ul style="list-style-type: none">• [新規統合]  ボタンをクリックして [データ統合] を選択するか• または、既存のデータ統合を選択して [統合の編集]  ボタンをクリックします。
重要な情報	<p>SiteScope の管理者、または「統合 プリファレンスの編集」権限を付与されたユーザのみが、統合 プリファレンスを作成または変更できます。ユーザ権限の詳細については、773 ページ「ユーザ管理 プリファレンスの概要」を参照してください。</p>
関連情報	<ul style="list-style-type: none">• 697 ページ「統合 プリファレンスの概要」• 701 ページ「汎用データ統合の概要」• 711 ページ「[統合 プリファレンス] ページ」• 712 ページ「[統合 プリファレンス タイプ] ダイアログ・ボックス」• 708 ページ「一般データおよび Diagnostics 統合の XML タグの参照情報」

一般設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
名前	<p>SiteScope インタフェースでこの統合の識別に使用する名前。</p> <p>注：このフィールドは必須です。</p>
詳細	<p>統合の詳細。これには、SiteScope からのデータを受信するアプリケーションに関する情報が含まれる場合があります。この詳細は、SiteScope の[統合 プリファレンス] ページにのみ表示されます。</p>

データ統合プリファレンスの設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
受信者 URL	<p>SiteScope データを受信するアプリケーション・サーバの URL。これは、サーバ、ポート、パスを含む完全な URL である必要があります。</p> <p>セキュリティ保護された接続 (SSL) の場合、「https」と入力します。</p> <p>構文 : http または https://<受信サーバの完全修飾名>:<ポート番号 受信データ>/<path></p>
エンコーディング	<p>受信側のアプリケーションが使用するエンコーディング。</p> <p>標準設定値：UTF-8</p>

UI 要素	詳細
レポート間隔(秒)	<p>データの送信を終了してからSiteScope次にデータの送信を開始するSiteScopeまでの時間間隔(秒単位)。</p> <p>標準設定値 : 60 秒</p>
時刻同期の間隔(分)	<p>SiteScope サーバと SiteScope データを受信するサーバの時刻を同期化するために、SiteScope ではサーバに登録されている時刻を定期的に報告できます。受信側のサーバは、SiteScope から送信されたデータ・サンプルの時刻を自分のサーバの時刻と同期化し、SiteScope データとアプリケーション自身のデータの時刻が一致するようにします。</p> <p>SiteScope が、SiteScope サーバの時刻を SiteScope のデータを受信するサーバに報告する間隔を分単位で選択します。</p> <p>標準設定値 : 10 分</p>
GZIP 圧縮	<p>受信側のサーバに送信するサンプル・データを圧縮します。データが圧縮されていると、データ送信にかかる時間が短縮されるためパフォーマンスが向上します。送信するデータの量と受信側のアプリケーションが圧縮データを処理できるかどうかに応じて、このフィールドを選択またはクリアします。</p> <p>標準設定値 : 選択されていない</p>
追加のデータを含める	<p>クリアすると、SiteScope によって次の SiteScope オブジェクトの状態が報告されます。</p> <ul style="list-style-type: none">• グループ• モニタ• カウンタ <p>選択した場合、これらのオブジェクトの状態が、各オブジェクトの説明を含む状態文字列と一緒に報告されます。</p> <p>標準設定値 : 選択されていない</p> <p>ヒント :追加データを含めるとパフォーマンスが低下し、状態文字列は標準設定で送信される状態データを繰り返すため、含めないことをお勧めします。</p>
リダイレクトでエラー	<p>接続先 URL がリダイレクトされると、SiteScope からエラーが返されます。</p> <p>標準設定値 : 選択されていない</p>
要求タイムアウト(秒)	<p>サーバとの接続が確立されるまでのタイムアウト(秒単位)。値 0 は、タイムアウトを使用しないことを示します。</p> <p>標準設定値 : 120 秒</p>
接続タイムアウト(秒)	<p>データを待機するソケットのタイムアウト(秒単位)。タイムアウト値 0 は、タイムアウトを使用しないことを示します。</p> <p>標準設定値 : 120 秒</p>

UI 要素	詳細
再試行の回数	SiteScope が接続の確立を試みる回数。 標準設定値 : 3
要求された場合の認証	SiteScope は、要求された場合、ユーザ名およびパスワードの資格情報を送信します。クリアすると、SiteScope は資格情報を転送しません。 標準設定値 : 選択されている
統合を無効にする	SiteScope は、データをサーバに転送しません。統合プリファレンス設定はそのまま残ります。統合を一時的に無効にする場合に使用します。 標準設定値 : 選択されていない

Web サーバのセキュリティ設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
認証ユーザ名	サーバが基本認証を使用するように設定されている場合の、サーバにアクセスするユーザ名。
認証パスワード	サーバが基本認証を使用するように設定されている場合の、サーバにアクセスするパスワード。

プロキシ・サーバ設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
アドレス	プロキシ・サーバ・アドレス(必要な場合)。
ユーザ名	プロキシ・サーバのユーザ名。
パスワード	指定したサーバのパスワード。



レポート タグ

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します(ラベルのない要素は山括弧内に表示されます)。

UI 要素	詳細
<タグ名と値>	<p>SiteScope では、ここで選択したタグを使用して受信側のアプリケーションに転送するデータを決定します。統合ごとに少なくとも 1 つのタグを選択する必要があります。受信側のアプリケーションにデータを転送するグループ、サブグループ、モニタについても同じタグを選択する必要があります。</p> <p>オブジェクトに対して統合タグを選択すると、そのタグがオブジェクトの子に伝搬されます。この統合タグでグループにタグ付けすると、そのすべてのサブグループとモニタが状態を受信側のアプリケーションに報告します。</p> <p>例：Integration_metrics というタグを作成して、ここで選択します。受信側のアプリケーションに状態を報告する各グループ、モニタ、または両方に、オブジェクトの[タグの検索/フィルタ]設定でこのタグを選択します。</p> <p>注：統合プリファレンスごとに複数のタグを選択できます。報告するオブジェクトに対して複数の統合タグを選択できます。</p>
タグの追加	<p>[新規タグ]ダイアログ・ボックスを開き、新しいキーワード・タグを追加できる。ユーザ・インターフェースの詳細については、111 ページ「[新規タグ]/[タグの編集]ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p> <p>ヒント：統合タグの作成時には単語 Integration_<integration identifier>を使用します。これは、このタグは、SiteScope 用に作成されるその他のすべての検索 / フィルタ・タグとともに表示されるためです。これにより、グループまたはモニタのどちらの統合を有効にするかを選択するためのタグを識別することができます。</p>

[Diagnostics 統合 プリファレンス] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、新しい Diagnostics との統合の作成や既存の Diagnostics 統合の編集ができます。

アクセス方法	<p>[プリファレンス]コンテキスト > [統合 プリファレンス]を選択します。[統合 プリファレンス] ページで次を実行します。</p> <ul style="list-style-type: none">• [新規統合]  ボタンをクリックして [Diagnostics 統合] を選択するか• 既存の Diagnostics 統合を選択して [統合の編集]  ボタンをクリックします。
重要な情報	<p>SiteScope の管理者、または「統合 プリファレンスの編集」権限を付与されたユーザのみが、統合 プリファレンスを作成または変更できます。ユーザ権限の詳細については、773 ページ「ユーザ管理 プリファレンスの概要」を参照してください。</p>
関連情報	<ul style="list-style-type: none">• 700 ページ「Diagnostics 統合の概要」• 711 ページ「[統合 プリファレンス] ページ」• 712 ページ「[統合 プリファレンス タイプ] ダイアログ・ボックス」

一般設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
名前	SiteScope インタフェースでこの統合の識別に使用する名前。 注: このフィールドは必須です。
詳細	統合の詳細。SiteScope からデータを受信する Diagnostics サーバの情報が含まれる場合があります。この詳細は、SiteScope の[統合プリファレンス]ページにのみ表示されます。

Diagnostics 統合プリファレンス設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
受信者 URL	SiteScope データを受信する Diagnostics サーバの URL。サーバ、Diagnostics でデータを受信するポート、パスを含む完全な URL を指定する必要があります。パスには常に /metricdata/siteScopeData を含める必要があります。 セキュリティ保護された接続(SSL)の場合、「https」と入力します。 構文: http または https://<受信サーバの完全修飾名>:<ポート番号受信データ>/metricdata/siteScopeData 例: http://DiagnosticsServer1.hp.net:2006/metricdata/siteScopeData
エンコーディング	Diagnostics アプリケーションで使用するエンコーディング。 標準設定値: UTF-8
レポート間隔 (秒)	SiteScope が Diagnostics サーバへデータの送信を終了してから、SiteScope が次にデータを送信するまでの時間間隔(秒単位)。この時間間隔はデータが送信されない時間間隔のため、サーバ間の通信遅延を防ぐことができます。 標準設定値: 60 秒
時刻同期の間隔 (分)	SiteScope サーバの時刻と Diagnostics サーバの時刻を同期化するために、SiteScope ではサーバに登録されている時刻を定期的に報告します。その後、Diagnostics は、SiteScope から送信されたデータ・サンプルの時刻を自分のサーバの時刻と同期化し、SiteScope データと Diagnostics データの時刻が一致するようにします。 SiteScope から Diagnostics に SiteScope サーバの時刻を報告する頻度を、分単位で選択します。 標準設定値: 10 分

UI 要素	詳細
GZIP 圧縮	<p>Diagnostics サーバに送信するサンプルデータを圧縮します。データが圧縮されていると、データ送信にかかる時間が短縮されるためパフォーマンスが向上します。Diagnostics アプリケーションで圧縮データを処理できます。送信するデータ量に応じて、このフィールドを選択またはクリアします。</p> <p>標準設定値: 選択されている</p>
追加のデータを含める	<p>クリアすると、SiteScope によって次の SiteScope オブジェクトの状態が報告されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • グループ • モニタ • カウンタ <p>選択した場合、これらのオブジェクトの状態が、各オブジェクトの説明を含む状態文字列と一緒に報告されます。</p> <p>標準設定値: 選択されていない</p> <p>ヒント: 追加データを含めるとパフォーマンスが低下し、状態文字列は標準設定で送信される状態データを繰り返すため、含めないことをお勧めします。</p>
リダイレクトでエラー	<p>接続先 URL がリダイレクトされると、SiteScope からエラーが返されます。</p> <p>標準設定値: 選択されていない</p>
要求タイムアウト (秒)	<p>データを待機するソケットのタイムアウト(秒単位)。タイムアウト値 0 は、無制限のタイムアウトとして解釈されます。</p> <p>標準設定値: 120 秒</p>
接続タイムアウト (秒)	<p>接続が確立されるまでのタイムアウト(秒単位)。値 0 は、タイムアウトを使用しないことを示します。</p> <p>標準設定値: 120 秒</p>
再試行の回数	<p>SiteScope が接続の確立を試みる回数。</p> <p>標準設定値: 3</p>
要求された場合の認証	<p>SiteScope は、要求された場合、ユーザ名およびパスワードの資格情報を送信します。クリアすると、SiteScope は資格情報を転送しません。</p> <p>標準設定値: 選択されている</p>
統合を無効にする	<p>SiteScope は、データを Diagnostics サーバに転送しません。統合プリファレンス設定はそのまま残ります。統合を一時的に無効にする場合に使用します。</p> <p>標準設定値: 選択されていない</p>

UI 要素	詳細
UOM XML の生成	<SiteScope root directory>/conf/ integration/data_integration_uom.xml ファイルと結合する測定単位 XML ファイルを生成します。このファイルにより、Diagnostics で SiteScope データを読み取り、適切な測定単位をデータに適用できます。Diagnostics にデータを報告するモニタ・インスタンスを追加する場合、このボタンをクリックすることをお勧めします。 data_integration_uom.xml ファイルの値を手動で変更した場合、その値は変更されたまま残り、この結合ファイルでは更新されません。また、SiteScope の再起動時にも常にこの結合ファイルが生成され、XML ファイルが更新されます。詳細については、 700 ページ 「Diagnostics 統合の概要」を参照してください。

Web サーバのセキュリティ設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
認証ユーザ名	サーバが基本認証を使用するように設定されている場合の、サーバにアクセスするユーザ名。
認証パスワード	サーバが基本認証を使用するように設定されている場合の、サーバにアクセスするパスワード。

プロキシ・サーバ設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
アドレス	プロキシ・サーバ・アドレス(必要な場合)。
ユーザ名	プロキシ・サーバのユーザ名。
パスワード	指定したサーバのパスワード。



レポート タグ

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します(ラベルのない要素は山括弧内に表示されます)。

UI 要素	詳細
<タグ名と値>	<p>SiteScope では、ここで選択したタグを使用して Diagnostics に転送するデータを決定します。統合ごとに複数のタグを選択できます。Diagnostics にデータを転送するグループ、サブグループ、モニタに対して、タグを選択する必要があります。</p> <p>オブジェクトに対して統合タグを選択すると、そのタグがオブジェクトの子に伝搬されます。この統合タグでグループにタグ付けすると、そのすべてのサブグループとモニタが状態を Diagnostics に報告します。</p> <p>例 : <code>Diagnostics_Integration1</code> というタグを作成して、ここで選択します。Diagnostics に状態を報告する各グループ、モニタまたは両方に、[タグの検索/フィルタ] 設定でこのタグを選択します。</p>
タグの追加	<p>[新規タグ] ダイアログ・ボックスを開き、新しいキーワード・タグを追加できる。ユーザ・インターフェースの詳細については、111 ページ「[新規タグ]/[タグの編集] ダイアログ・ボックス」 を参照してください。</p> <p>ヒント : 統合タグの作成時には、単語 <code>Integration</code> を使用します。統合タグは、SiteScope に対して作成されたほかのすべての検索 / フィルタ・タグと一緒に表示されるため、グループやモニタで統合を有効にする際に選択するタグを識別しやすくなります。</p>

HP Operations Manager 統合 ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、SiteScope で共通イベントと測定値データを HPOM 製品と BSM 製品に送信できる HP Operations Agent 接続を設定し、イベント統合と測定値統合を設定できます。

アクセス方法	<p>[プリファレンス] コンテキスト > [統合プリファレンス] を選択します。[統合プリファレンス] ページで次を実行します。</p> <ul style="list-style-type: none">• [新規統合]  ボタンをクリックして [HP Operations Manager 統合] を選択するか、• または、既存の HPOM 統合を選択して [統合の編集]  ボタンをクリックします。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none">• SiteScope の管理者、または「統合プリファレンスの編集」権限を付与されたユーザのみが、統合プリファレンスを作成または変更できます。ユーザ権限の詳細については、773 ページ「ユーザ管理プリファレンスの概要」 を参照してください。• Operations Manager とのメトリックス統合は、HP Operations Agent と HPOM サーバまたは BSM サーバとの接続状態に関係なく、有効化されます。これは、メトリックスがエージェントによって収集されるためです。

関連タスク	<ul style="list-style-type: none">268 ページ「SiteScope を使用して HPOM または BSM にイベントを送信する方法」283 ページ「SiteScope を使用して HP Operations Agent に測定値をレポートする方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none">700 ページ「HP Operations Manager 統合の概要」259 ページ「イベントの送信」265 ページ「HP Operations Agent を使用した測定値の報告」711 ページ「[統合プリファレンス] ページ」712 ページ「[統合プリファレンスタイプ] ダイアログ・ボックス」

HP Operations Manager 統合メイン設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
接続設定	
HP Operations Agent インストール・パス	<p>SiteScope マシンの HP Operations Agent インストールへのパス。</p> <ul style="list-style-type: none">Windows プラットフォームでは、インストール・パスは、レジストリ内の HP Operations Agent InstallDir キーから自動的に解決され、このフィールドに表示されます。標準設定パスは、C:\Program Files\HP\HP BTO Software\ です。キーが見つからない場合、このフィールドは空のままとなります。エージェントのインストール・パスを手動で入力する必要があります。UNIX プラットフォームの場合標準設定の /opt/OV パスに HP Operations Agent がインストールされているかどうか SiteScope によって確認されます。このパスに存在しない場合、このフィールドは空のままとなります。エージェントのインストール・パスを手動で入力する必要があります。 <p>手動で別のパスを入力した場合、SiteScope によって見つかった標準設定のインストール・パスを復元するには、[パスの解決] ボタンをクリックします。</p>

UI 要素	説明
HP Operations Manager/BSM サーバ	<p>接続する HPOM / BSM サーバの名前または IP アドレスを入力します。エージェントと HPOM / BSM ホスト・マシンを接続するには、[接続] ボタンをクリックします。</p> <p>BSM 分散環境に接続している場合、BSM ゲートウェイ・サーバ名または IP アドレスを入力します。BSM ゲートウェイ・サーバがロード・バランサの背後にある場合には、データ・コレクタ用に設定されるロード・バランサの名前または IP アドレスを入力します。タスクの詳細については、268 ページ「SiteScope を使用して HPOM または BSM にイベントを送信する方法」のステップ 268 ページ「SiteScope を使用して HPOM または BSM にイベントを送信する方法」を参照してください。</p> <p>接続に問題がある場合は、問題の分析を実行してエージェントおよび証明書要求の状態をチェックするために[分析] ボタンをクリックします。</p> <p>接続要求が送信された後、HPOM / BSM サーバは証明書要求を承諾する必要があります(このクライアントを自動的に受け入れるように HPOM / BSM サーバが設定されていない場合)。</p> <p>HPOM / BSM サーバで証明書要求が承諾された後、[ポリシーのインストール] をクリックし、設定済みのログ・ファイル・ポリシー・ファイルを HP Operations Agent 上にインストールし、承認します。</p> <p>注 :HPOM/BSM サーバ上で証明書要求が承諾された後は、SiteScope から接続の遮断または別の HPOM/BSM サーバへの接続の変更を行うことはできません。サポートが必要な場合は、HPOM / BSM の管理者にお問い合わせください。</p>
構成設定	
イベント送信の有効化	<p>SiteScope から HPOM/BSM サーバへのイベントの送信を有効にします。</p> <p>標準設定値 : 選択されていない</p>
BSM に直接接続する	<p>BSM 内の操作管理にエージェントを接続する時には、SiteScope サーバにインストールして有効化した場合はノード・ディスカバリ・ポリシーを自動的に非アクティブ化するように選択します。</p> <p>このオプションが選択されると:</p> <ul style="list-style-type: none"> • [ノード ディスカバリ ポリシーを有効にする] オプションは使用できないため、ノード・ディスカバリ・ポリシーは SiteScope サーバにインストールして有効化した場合には無効になります。 • [BSM サービス状況のメトリックよりイベントを優先します(グローバル プリファレンス)] オプションが自動的に選択されます。 <p>このオプションがクリアされると:</p> <ul style="list-style-type: none"> • [ノード ディスカバリ ポリシーを有効にする] オプションが自動的に選択されます。 • [BSM サービス状況のメトリックよりイベントを優先します(グローバル プリファレンス)] オプションが自動的にクリアされます。 <p>標準設定値 : 選択されていない</p>

UI 要素	説明
BSM サービス状況のメトリックよりイベントを優先します(グローバルプリファレンス)	<p>SiteScope イベントおよびメトリックスの両方がサービス状況 にレポートされる時に BSM のサービス状況 に影響を与えるグローバルプリファレンスの標準設定 (SiteScope イベントおよびメトリックスの両方が CI に影響を与えるため)。これは BSM および Operations Manager 統合 の両方がアクティブで、同じ BSM サーバに接続されている時に限り関係します(HPOM サーバの代わりに BSM サーバが使用されます)。</p> <p>選択される場合には、[イベント] オプションは、([HP 統合設定] > [BSM サービス状況プリファレンス] で)作成された新しいモニタごとに標準設定のプリファレンスとして設定されます。選択されない場合には、[メトリックス] がデータを BSM にレポートするための標準設定のプリファレンスです。</p> <p>使用するプリファレンスの選択の詳細については、「Integrating SiteScope with Business Service Management Applications」を参照してください。</p> <p>標準設定値：選択されていない(標準設定でメトリックス・データがサービス状況 に影響する)</p> <p>注：</p> <ul style="list-style-type: none"> このオプションは[BSM に直接接続する]が選択されると自動的に選択されます。 この設定は、[HP 統合設定] > [BSM サービス状況プリファレンス] で個々のモニタ・インスタンスに設定されたプリファレンスをオーバーライドしません。
ノード・ディスカバリ・ポリシーを有効にする	<p>SiteScope は SiteScope サーバでノード・ディスカバリ・ポリシー(インストールされている場合)を有効にします。このオプションは[BSM に直接接続する]がクリアされると自動的に選択されます。ノード・ディスカバリの詳細については、261 ページ「ディスカバリ・スクリプトと HPOM イベントを表示するためのドリル・ダウン・ユーザ」を参照してください。</p> <p>標準設定値：選択されている</p>
HP Operations Manager へのテンプレートのエクスポートを有効にする	<p>SiteScope からすべてのテンプレートをエクスポートすること、それらをポリシーとして HPOM にインポートすることができます(SiteScope と HPOM が同じシステムにインストールされている場合のみ)。これらは、あとで割り当て、HPOM からデプロイすることができます。HPOM とのテンプレート統合の詳細については、256 ページ「HPOM からのテンプレートの中央管理」を参照してください。</p> <p>標準設定値：選択されている</p>

HP Operations Manager 統合詳細設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
イベント統合設定	

UI 要素	説明
テスト・メッセージ	<p>HP Operations Agent が HPOM / BSM サーバに接続されていて、メッセージを送信できることをチェックします。HPOM / BSM サーバに送信するテスト・メッセージを入力し、[テスト メッセージ送信] ボタンをクリックします。</p> <p>注 :このテストを実行するためには、opcmsg ログ・ポリシーのデプロイ、承認、およびインストールを手動で行うか、あるいはイベント統合をアクティブ化した後で行う必要があります。</p>
テスト・イベント送信	テスト・イベントを HPOM / BSM サーバに送信します。
重大度のマッピングの標準設定 <p>重大度のマッピングは、HPOM/BSM 内の重大度を、SiteScope 内のモニタしきい値状態に関連付けます。SiteScope が BSM に接続されていない場合、または、インジケータ状態と重大度の値がない場合に SiteScope によってトリガされるイベントで送信されます。重大度のマッピングの標準設定を使用するかまたはマッピングをカスタマイズすることができます。</p>	
エラー	<p>SiteScope および HPOM/BSM サーバの各 モニタ・インスタンスのエラー状態のしきい値間のマッピング。</p> <p>標準設定値 : 危険域</p>
注意域	<p>SiteScope および HPOM/BSM サーバの各 モニタ・インスタンスの警告状態のしきい値間のマッピング。</p> <p>標準設定値 : 警戒域</p>
正常	<p>SiteScope および HPOM/BSM サーバの各 モニタ・インスタンスの正常状態のしきい値間のマッピング。</p> <p>標準設定値 : 正常域</p>
利用不可	<p>SiteScope および HPOM/BSM サーバの各 モニタ・インスタンスの利用不可状態のしきい値間のマッピング。</p> <p>標準設定値 : 不明</p>

UI 要素	説明
標準重大度を使用します	<p>選択されると、標準設定のマッピングは次の場合に送信されます。</p> <ul style="list-style-type: none">トリガされた警告によって作成されたイベント。SiteScope が BSM に接続されていない時。インジケータの状態と重大度の値が欠落している場合。たとえば、定義済みのトポロジを持たないモニタの使用時。 <p>注：</p> <ul style="list-style-type: none">SiteScope が BSM に接続される時 (またグローバルな重大度マッピングの標準設定が送信できない)、このオプションは使用できません。標準設定で、警告状態は軽微 (警告ではない) にマップされます。 <p>標準設定値：選択されていない</p>



HP Operations Manager 測定値統合

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
HP Operations Manager 測定値統合の有効化	<p>HPOM および BSM レポート製品がデータの収集元として使用できる HP Operations Agent に対して、SiteScope から測定値をレポートできます。</p> <p>注：モニタ・プロパティ([HP 統合設定] > [HP Operations Manager 統合設定]) で[HP Operations Agent へのメトリックのレポート]を選択して、HP Operations Agent にデータを送信する各モニタ・インスタンスを有効にする必要があります。詳細については、380 ページ「HP 統合設定」を参照してください。</p> <p>標準設定値：選択されていない</p>
新規モニタのメトリック・レポートの有効化	<p>新規作成されたすべてのモニタのメトリックを HP Operations Agent に報告するように SiteScope を有効化します。</p> <p>標準設定値：選択されていない</p>
特定モニタのメトリック・レポートの有効化	<p>すべての既存のメモリ、CPU、ディスク領域、Windows リソース・モニタに対して、各モニタ・インスタンスのモニタ・プロパティで[HP Operations Agent へのメトリックのレポート]を選択することなく、自動的に測定値のレポートを有効にします。</p>

[一般イベント統合プリファレンス]ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、一般イベント統合の作成や既存の一般イベント統合の編集ができます。直接統合されていないアプリケーションへの SiteScope イベントの転送に使用できます。

アクセス方法	<p>[プリファレンス]コンテキスト > [統合プリファレンス]を選択します。[統合プリファレンス]ページで次を実行します。</p> <ul style="list-style-type: none">• [新規統合]  ボタンをクリックして[一般イベント統合]を選択するか• または、既存の一般イベント統合を選択して[統合の編集]  ボタンをクリックします。
重要な情報	SiteScope の管理者、または「統合プリファレンスの編集」権限を付与されたユーザのみが、統合プリファレンスを作成または変更できます。ユーザ権限の詳細については、773ページ「ユーザ管理プリファレンスの概要」を参照してください。
関連タスク	705ページ「SiteScope 一般イベント統合の設定方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none">• 697ページ「統合プリファレンスの概要」• 702ページ「汎用イベント統合の概要」• 711ページ「[統合プリファレンス]ページ」• 712ページ「[統合プリファレンスタイプ]ダイアログ・ボックス」

一般設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
名前	SiteScope インタフェースでこの統合の識別に使用する名前。 注：このフィールドは必須です。
詳細	統合の詳細。これには、SiteScope からのデータを受信するアプリケーションに関する情報が含まれる場合があります。この詳細は、SiteScope の[統合プリファレンス]ページにのみ表示されます。

一般イベント統合プリファレンス設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
コネクタ	イベントの受信に使用されるターゲット・インスタンス。[プリファレンス] > [HTTP プリファレンス]で設定されているコネクタのリストから選択します。詳細については、660ページ「[HTTP プリファレンス]ページ」を参照してください。
統合を無効にする	統合を無効にし、イベントは受信者に送信されません。この統合の設定は保持され、統合が有効にされると再度使用することができます。 標準設定値：選択されていない

UI 要素	詳細
GZIP 圧縮	受信側 サーバに送信する前にイベントを圧縮します。データ送信時間が短縮するため、データを圧縮するとパフォーマンスが向上します。このオプションの使用方法は、送信対象となるデータの量と、受信側アプリケーションが圧縮データを処理できるかどうかによって依存します。 標準設定値：選択されている

レポート タグ

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します(ラベルのない要素は山括弧内に表示されます)。

UI 要素	詳細
<タグ名と値>	<p>タグは、イベントをトリガするモニタ・インスタンスを、特定のイベント統合に関連付けることに使用されます。このタグのあるすべてのモニタは、この統合経由でイベントを報告します。</p> <p>SiteScope では、ここで選択したタグを使用して受信側アプリケーションに転送するイベントを決定します。統合ごとに少なくとも 1 つのタグを選択する必要があります。</p> <p>例：Integration_events というタグを作成して、ここで選択します。受信側アプリケーションに報告するメトリクス状態変更イベントをトリガする際の各モニタ・インスタンスに対して[タグの検索/フィルタ]設定で、このタグを選択します。</p> <p>[タグの検索/フィルタ]では、メトリクス状態変更イベントをトリガする際の各モニタ・インスタンスに 1 つまたは複数の報告タグを選択します。SiteScope では、選択したタグを使用して、メトリクス状態変更イベントがトリガされたときに受信側アプリケーションに転送するデータを決定します。</p> <p>注：統合プリファレンスごとに複数のタグを選択できます。報告するオブジェクトに対して複数の統合タグを選択できます。</p>
タグの追加	<p>[新規タグ]ダイアログ・ボックスを開き、新しいキーワード・タグを追加できる。ユーザ・インタフェースの詳細については、111 ページ「[新規タグ]/[タグの編集]ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p> <p>ヒント：統合タグの作成時には単語 Integration_<integration identifier>を使用します。これは、このタグは、SiteScope 用に作成されるその他のすべての検索/フィルタ・タグとともに表示されるためです。これにより、グループまたはモニタのどちらの統合を有効にするかを選択するためのタグを識別することができます。</p>

第 36 章

ログ・プリファレンス

本章の内容

概念

- 738ページ「ログ・プリファレンスの概要」

タスク

- 739ページ「データベースにログ記録されるデータのフィールド名の生成方法」

参照情報

- 741ページ「SiteScope ログ・データベース・テーブルの構造」
- 742ページ「[ログプリファレンス] ページ」

744ページ「トラブルシューティングおよび制限事項」

ログ・プリファレンスの概要

ログ・プリファレンスを使用すると、SiteScope サーバに蓄積して保持する監視データの量を選択できます。また、監視データを外部データベースにエクスポートするように SiteScope を設定できます。

標準設定では、SiteScope はモニタ結果、警告データ、エラー・データや、モニタから返されたその他の測定値をログ・ファイルに保存します。監視データの結果の場合、日付が記述されたログ・ファイルが 24 時間の監視期間ごとに作成されます。このデータはタブ区切りテキストとして保存されます。SiteScope はこのログ・ファイルを使用して、時間の経過に伴うシステムの可用性とパフォーマンスの管理レポートを作成します。

データ・ログを長期間保存していると問題が生じる場合があります。ただし、ログ・ファイルを保持する日数やデータ・ログ・ファイルの最大サイズを設定することで、SiteScope がローカル・ファイル・システムに保存するログ情報の量を制限できます。外部データベース・アプリケーションに監視データを送信することもできます。これにより SiteScope サーバで必要なデータ・ストレージ容量を削減でき、監視データをほかのレポート・ツールでも使用できるようになります。

注: SiteScope 管理レポートを作成するには、必要なレポート期間の監視ログ情報が SiteScope サーバのファイル・システムで使用できる必要があります。管理レポートの作成の詳細については、[1301ページ「管理レポート」](#)を参照してください。

これらのプリファレンスの設定の詳細については、[742ページ「\[ログプリファレンス\] ページ」](#)を参照してください。

データベースにログ記録されるデータのフィールド名の生成方法

モニタのフィールド名は SiteScope モニタ設定に応じて動的に変化するため、データベースに書き込んではいけません。

ヒント: 1152 ページ「SiteScope ログ・ファイルの列」の静的モニタ・フィールドのリストを確認します。

このタスクでは、フィールド名を手動で生成する手順について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- 739 ページ「Tomcat サーバが使用しているポートのチェック」
- 739 ページ「新規一般データ統合の作成」
- 739 ページ「モニタのレポート・タグの選択」
- 739 ページ「モニタの実行」
- 739 ページ「結果」

1. Tomcat サーバが使用しているポートのチェック

< SiteScope のルート・ディレクトリ > \Tomcat\conf\server.xml を開いて文字列 <Connector port= を検索し、このバージョンの Tomcat が使用しているポートを判別します。

2. 新規一般データ統合の作成

SiteScope で、[プリファレンス] > [統合プリファレンス] を選択し、[新規統合] ボタンをクリックして [データ統合] を選択します。721 ページ「[データ統合プリファレンス] ダイアログ・ボックス」の説明に従って、新規データ統合を作成します。

- a. [データ統合プリファレンスの設定] パネルで、[受信者 URL] ボックスに、Tomcat サーバの URL を入力して、前の手順から同じポート番号を使用します。(次の URL 形式を使用します。http://<Tomcat サーバ>:<データを受信するポート番号>/<受信者パス>。

ここで、<受信者パス> は、<Tomcat のルート・ディレクトリ> \webapps フォルダ下でサンプルを取得する場所です。

- b. [レポート タグ] パネルで、統合のタグ名と値を追加し、それをタグ・ツリーで選択します。

3. モニタのレポート・タグの選択

カウンタ名が必要な各関連モニタの[タグの検索/フィルタ] パネルで、前の手順で追加したのと同じレポート・タグを選択します。SiteScope では、選択したタグを使用して受信側のアプリケーションに転送するデータを決定します。

4. モニタの実行

カウンタ名が必要なモニタを実行します。

5. 結果

モニタが実行されると、SiteScope では、列名と値が XML 形式で Tomcat サーバに転送されま

す。この XML ファイルは、**< Tomcat のルート・ディレクトリ> \webapps** フォルダにあり、パスは手順 2a で指定したパスです。

例 :

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8" standalone="yes"?> <performanceMonitors
collectorHost="JBROWN" collector="SiteScope"> <group desc="" name="g"> <monitor
quality="1" time="1321445972863" targetIP="16.53.61.95" target="My_Lab_Machine"
type="Memory" previousName="Memory on My_Lab_Machine" name="Memory on My_Lab_
Machine"> <counter quality="0" value="0" name="percent used"/> <counter quality="0"
value="3953" name="MB free"/> <counter quality="0" value="0.0" name="pages/sec"/>
<counter quality="1" value="0" name="swap space used %"/> <counter quality="0"
value="3953" name="swap space MB free"/> <counter quality="0" value="16"
name="physical memory used %"/> <counter quality="0" value="3390" name="physical
memory MB free"/> </monitor> </group> </performanceMonitors>
```


SiteScope ログ・データベース・テーブルの構造

データベース・ログインが有効な場合、監視データは **SiteScopeLog** という 1 つのテーブルに格納されます。各データベース・レコードの先頭 9 フィールドは、すべてのモニタで同じです。次の 10 フィールドには、データを提供するモニタの種類に応じて異なる測定値が含まれます。テーブルのすべてのフィールドは、VARCHAR (255) データ型を使用します。ログ・データベース・レコードのフィールド説明とその標準設定のフィールド名を、次の表に示します。

フィールド名	データ例	詳細
datex	1999-01-20 11:54:54	第 1 フィールドには、モニタを実行した日付が含まれます。
サーバ名	demo.sitescope.com	第 2 フィールドには、SiteScope を実行しているサーバの名前が含まれます。
class	URLMonitor	第 3 フィールドには、モニタのタイプが含まれます。
sample	23	第 4 フィールドには、このモニタのサンプル数が含まれます。
category	正常	第 5 フィールドには、モニタのカテゴリ名が含まれます。
groupName	URL	第 6 フィールドには、モニタのグループ名が含まれます。
monitorName	ホーム・ページ	第 7 フィールドには、モニタの名前が含まれます。
状態	1.01 秒	第 8 フィールドには、モニタの状態が含まれます。
monitorID	10	第 9 フィールドには、モニタの ID が含まれます。
value1, value2, ... value10	(変数)	第 10 から第 19 フィールドには、[Log Columns] ページで記述したモニタ固有のデータが含まれます(1152 ページ「SiteScope ログ・ファイルの列」 を参照してください)。最初の変数フィールド(value1)が、ログ・ファイルの列 7 に表示される値に対応します。 注：フィールド名は、SiteScope モニタ設定に応じて動的に変わります。データベースに記録されるデータについてフィールド名のリストを生成するには、 739 ページ「データベースにログ記録されるデータのフィールド名の生成方法」 を参照してください。

データベース・ログ記録に使用する SQL ステートメントを変更するには、<SiteScope のルート・ディレクトリ>\groups\master.config ファイルのパラメータ `_logJdbcInsertSiteScopeLog=` を編集します。insert ステートメントを call ステートメントに置き換えると、ストアド・プロシージャを呼び出せます。たとえば、`call logit(?, ?, ?)` は、`logit` というストアド・プロシージャを呼び出して、最初の 3 つのパラメータを渡します。

[ログ プリファレンス] ページ

このページでは、SiteScope ログ・プリファレンスを設定できます。システム可用性を効果的に監視するには、必要な間隔の間、監視データを記録して保存する必要があります。SiteScope ログ・プリファレンスでは、監視データの蓄積と保存を制御します。

アクセス方法	[プリファレンス]コンテキスト > [ログ プリファレンス]を選択します。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none">SiteScope の管理者、または「ログ・プリファレンスの編集」権限を付与されたユーザのみが、ログ・プリファレンスを作成または変更できます。ユーザ権限の詳細については、773ページ「ユーザ管理 プリファレンスの概要」を参照してください。ログ・プリファレンスの変更は、SiteScope を再起動しないと反映されません。
関連情報	<ul style="list-style-type: none">738ページ「ログ・プリファレンスの概要」741ページ「SiteScope ログ・データベース・テーブルの構造」744ページ「トラブルシューティングおよび制限事項」

SiteScope ログ・ファイル・プリファレンス

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
日次ログ保存 日数	<p>監視データを保持する日数。SiteScope では、1 日に 1 回、指定した日数よりも古くなったログを削除します。</p> <p>標準設定値：40</p> <p>注：</p> <ul style="list-style-type: none">指定したログ数または最大ログ・サイズに関係なく、常に最新の 2 つのログ (当日分と前日分) が保持されます。長期間監視データ・ログを保持すると、設定したモニタの総数や 1 日あたりのモニタ実行頻度によっては、SiteScope サーバでデータ・ストレージ上の問題が発生することがあります。< SiteScope のルート・ディレクトリ > \logs ディレクトリにあるログ・ファイルのサイズを監視して、データ蓄積速度を見積り、必要に応じてこの設定やサーバリソースを調整する必要があります。
ログサイズの上 限 (MB)	<p>すべての監視ログの最大サイズ。SiteScope では、1 日に 1 回、すべての監視ログの合計サイズをチェックし、最大サイズを超えた古いログがあれば削除します。</p> <p>標準設定値：0(ログ・サイズをチェックしない)</p>

データベース ログ記録 プリファレンス

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
データベース接続 URL	<p>データベース接続への URL。データベース接続を作成する最も簡単な方法は、ODBC を使用してデータベースへの名前付き接続を作成する方法です。</p> <p>例: 最初に、ODBC コントロール・パネルを使用して SiteScopeLog という接続を作成します。次に、接続 URL として「jdbc:odbc:SiteScopeLog」と入力します。</p> <p>Windows 認証使用時の注意事項: Windows 認証を使用してデータベースにアクセスする場合は、次のように入力します。</p> <ul style="list-style-type: none"> データベース接続 URL: jdbc:mercury:sqlserver://<server name or IP address>:1433;DatabaseName=<database name>;AuthenticationMethod=type2 データベースドライバ: com.mercury.jdbc.sqlserver.SQLServerDriver データベース・ユーザ名 / データベース・パスワード: SiteScope サービスの実行元であるアカウントの Windows ユーザの資格情報を使用してデータベースへの接続が確立されるように、これらのボックスは空のままにします。
データベースドライバ	<p>SiteScope でデータベースへの接続に使用するデータベース・ドライバ。このドライバは JDBC ドライバである必要があります。SiteScope で別のドライバを使用するには、そのドライバも < SiteScope のルート・ディレクトリ > \WEB-INF\lib ディレクトリにインストールし、パスとファイル名をこのボックスに入力する必要があります。</p> <p>標準設定値: sun.jdbc.odbc.JdbcOdbcDriver</p>
データベース・ユーザ名	<p>データベースにログオンするためのユーザ名。Microsoft SQL Server を使用する場合は、ここを空白のままにし、ODBC 接続の設定時に Windows 認証を選択します。Windows 認証の場合、SiteScope は SiteScope サービスのログイン・アカウントを使用して接続するため、ユーザ名を指定できません。</p> <p>Windows 認証使用時の注意事項: SiteScope を実行するユーザには、接続するデータベースへのアクセス権が必要です。SiteScope をローカル・システム・アカウントで実行している場合、サーバの名前を使用して接続が試みられます。</p>
データベース・パスワード	<p>データベースにログオンするためのパスワード。Microsoft SQL Server を使用する場合は、ここを空白のままにし、ODBC 接続の作成時に Windows 認証を選択します。Windows 認証の場合、SiteScope は SiteScope サービスのログイン・アカウントを使用して接続するため、パスワードを指定できません。</p>
バックアップ・データベース接続 URL	<p>バックアップ・データベースへの URL。プライマリ・データベースが利用不可になった場合に、SiteScope データベース・ログ記録のフェールオーバーを可能にするには、このオプションを使用します。</p> <p>注:</p> <ul style="list-style-type: none"> 同じデータベース・テーブル定義、データベース・ドライバ、ユーザ名、パスワードが両方のデータベース接続に適用されます。 データベース・ログ記録プリファレンスへの変更を保存したら、変更を有効にするために SiteScope サービスを停止して再起動する必要があります。

トラブルシューティングおよび制限事項

データベース・ログ記録がアクティブになり、正しく動作すると、データベースに **SiteScopeLog** というテーブルが表示され、モニタを実行するたびにそのテーブルにレコードが追加されます。データは、フラット・ファイル形式の単独のテーブルとしてデータベースに送信されます。

SiteScopeLog テーブルが作成されていないか、空の場合、<SiteScope のルート・ディレクトリ>\logs\RunMonitor.log ファイルと <SiteScope のルート・ディレクトリ>\logs\Error.log ファイルに、“jdbc”または“odbc”で始まるログ・メッセージがあるかどうかチェックします。データベース・ログ記録が正しく動作している場合、**RunMonitor.log** に次のような一連のメッセージが表示されます。

```
jdbc log, reconnect seconds=600 jdbc log, loading,  
driver=sun.jdbc.odbc.JdbcOdbcDriver jdbc log, connecting,  
url=jdbc:odbc:SiteScopeLog, jdbc log, logged in jdbc log, checking log  
table jdbc log, created log table jdbc log, prepare insert, 19, INSERT  
INTO SiteScopeLog... jdbc log, connected
```

これらのエントリがログ・ファイルに表示されない場合、データベース・インタフェースまたはデータベース接続の設定に問題があります。入力した[データベース接続 URL]もチェックする必要があります。このパラメータでは大文字と小文字が区別されます。接続 URL のスペルと大文字/小文字をチェックし、テキスト・ボックスの先頭や末尾に空白文字がないことを確認します。

データベース・ログ記録に関するその他の情報については、[HP Software Self-solve Knowledge Base](http://support.openview.hp.com/selfsolve/knowledgebase) (<http://support.openview.hp.com/selfsolve/documents>)も参照してください。技術情報を利用するには、HP パスポート ID を使ってログオンする必要があります。

第37章

ページャ・プリファレンス

本章の内容

概念

- 746ページ「ページャ・プリファレンスの概要」

参照情報

- 747ページ「ページャ・プリファレンスのユーザ・インタフェース」

ページャ・プリファレンスの概要

ページャ・プリファレンスは、SiteScope での外部電子ページャ・サービスとの通信に必要な設定を行うために使用します。SiteScope から電子ページャに警告を送信するために使用する標準設定です。

[ページャ・プリファレンス] ページには、定義済みのカスタム・ページャ受信者プロファイルが表示されます。これらのプロファイルは、適切な警告定義を編集することで 1 つ以上のページャ警告に関連付けることができます。

ページャ受信者プロファイルは、[新規ページャ受信者] または [ページャ受信者の編集] ページで定義します。推奨ページャ接続オプションは **[モデム間接続]** です。この接続を使用する場合、メッセージが正常に送信されたことを SiteScope で確認し、通信に関する問題を記述したメッセージを受け取ることができます。別の接続オプションでは、通常はプッシュホン・ダイヤルを使用して自動音声応答システムにメッセージを送信します。プッシュホン・ダイヤル方式は数字のメッセージに制限され、ページャ・サービスが正常にメッセージを受け取ったことを SiteScope で確認できません。

これらのプリファレンスの設定の詳細については、[747 ページ「\[ページャ・プリファレンス\] ページ」](#) を参照してください。

ページャ・プリファレンスのユーザ・インタフェース

本項の内容




- 747 ページ「[ページャ・プリファレンス] ページ」
- 748 ページ「[新規 ページャ受信者]/[ページャ受信者の編集] ダイアログ・ボックス」




[ページャ・プリファレンス] ページ

このページは、個別またはグループにページャ警告を送信するために SiteScope が使用する、ページャ受信者プロフィールと設定の定義に使用します。現在定義されているすべてのページャ受信者プロフィールが表示されます。ページャ警告は、電子メールにすぐにアクセスできない可能性のあるシステム管理者に自動通知を送信する場合、または警告エスカレーションを送信するかオフィスにいない可能性のあるサポート担当者へ通知する場合に使用できます。

アクセス方法	[プリファレンス] コンテキスト > [ページャ・プリファレンス] を選択します。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none">SiteScope の管理者、または「電子メール、ページャ、HTTP、SNMP のプリファレンスを追加、編集、または削除します」権限が付与されたユーザのみが、[ページャ・プリファレンス] を作成または変更できます。ユーザ権限の詳細については、773 ページ「ユーザ管理プリファレンスの概要」を参照してください。ページャ受信者プロフィールが警告アクションから参照されている場合、そのプロフィールは削除できません。プロフィールを削除する前に、警告の受信者を変更する必要があります。
関連情報	<ul style="list-style-type: none">746 ページ「ページャ・プリファレンスの概要」748 ページ「[新規 ページャ受信者]/[ページャ受信者の編集] ダイアログ・ボックス」



ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
	新規 ページャ受信者 : 新しいページャ受信者プロフィールを作成します。ユーザ・インタフェースの詳細については、748 ページ「[新規 ページャ受信者]/[ページャ受信者の編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
	ページャ受信者の編集 : ページャ受信者プロフィールを編集できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、748 ページ「[新規 ページャ受信者]/[ページャ受信者の編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
	ページャ受信者の削除 : [ページャ・プリファレンス] から選択したページャ受信者プロフィールを削除します。

UI 要素	詳細
	ページャ受信者のテスト : ページャにメッセージを送信できるかどうかをテストします。 [ページャのテスト] ダイアログ・ボックスにメッセージを入力し, [テスト] をクリックします。ページャ・メッセージに追加するプレフィックスを入力できます。メッセージを数字ページャに送信する場合, 32 桁以内で入力します。
	すべて選択 : 表示されたすべてのページャ受信者プロフィールを選択します。
	選択範囲を解除 : 選択をクリアします。
標準設定	[標準設定] の横にある矢印をクリックし, 次のオプションを選択します。 <ul style="list-style-type: none"> 編集: [ページャプリファレンスの標準設定] ダイアログ・ボックスが開き, [新規ページャ受信者] ダイアログ・ボックスに表示された標準設定を変更できます。この設定の詳細については, 748 ページ「[新規ページャ受信者]/[ページャ受信者の編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。 テスト: [ページャのテスト] ダイアログ・ボックスが開き, 標準設定のページャにメッセージを送信できるかどうかをテストできます。[メッセージ] ボックスにメッセージを入力し, [テスト] をクリックします。ページャ・メッセージに追加するプレフィックスを入力できます。メッセージを数字ページャに送信する場合, 32 桁以内で入力します。
名前	新規ページャ受信者の作成時に設定プロフィールに割り当てられる名前の文字列。
詳細	プロフィールの作成時または編集時に割り当てられた設定プロフィールの詳細。

[新規ページャ受信者]/[ページャ受信者の編集] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは, 新規ページャ受信者プロフィールの作成や, 既存のプロファイルの編集ができます。SiteScope では, ページャ警告の送信にページャ受信者プロフィールを使用します。

アクセス方法	[プリファレンス] コンテキスト > [ページャ プリファレンス] を選択します。[ページャ プリファレンス] ページで次を実行します。 <ul style="list-style-type: none"> [新規ページャ受信者]  ボタンをクリックするか, または, 既存のページャ・プロフィールを選択して [ページャ受信者の編集]  ボタンをクリックします。
重要な情報	SiteScope の管理者, または「電子メール、ページャ、HTTP、SNMP のプリファレンスを追加、編集、または削除します」権限が付与されたユーザのみが, [ページャプリファレンス] を作成または変更できます。ユーザ権限の詳細については, 773 ページ 「ユーザ管理プリファレンスの概要」を参照してください。
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> 746 ページ「ページャ・プリファレンスの概要」 747 ページ「[ページャプリファレンス] ページ」

メイン設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
名前	新規 ページャ受信者の作成時に設定プロファイルに割り当てられる名前の文字列。
モデム・ポート	<p>モデムから SiteScope サーバに接続する通信ポート。Solaris または Linux の SiteScope の場合、モデムのパスとデバイス名を入力します。Microsoft Windows プラットフォームでは、SiteScope は RS-232C タイプのシリアル・ポートと USB モデム・ポートの両方に COM ポート番号を使用します。</p> <p>USB タイプのモデムを使用している場合、SiteScope で USB モデムを使用できるように USB ポートに関連付けられた COM ポートを選択します。USB モデム用の COM ポート番号を確認するには、[設定]>[ネットワークとダイヤルアップ接続]メニューを使用します。目的のモデムを右クリックして、[プロパティ]をクリックします。そのモデムに関連付けられた COM ポート番号がプロパティに表示されます。</p> <p>標準設定値: COM1</p>
接続速度(ビット/秒)	<p>ドロップダウン・リストからページャ・サービスへの接続に使用するモデムの速度。</p> <p>標準設定値: 1200 ビット/秒</p>
ページャ接続オプション	<p>ページャ・サービスにメッセージを送信するオプション</p> <ul style="list-style-type: none">• モデム間接続(推奨):英数字 ページャを所有し、英数字 ページャ・サービスを使用する場合に選択します。• ダイヤルしてメッセージを入力します:直通電話番号にダイヤルしてページを送信する場合に選択します。• ダイヤルし、コマンドを入力してからメッセージを入力します:直通電話番号を所有し、ページを送信する前にコマンドを入力する必要がある場合に選択します。• ユーザ定義モデム接続:ページャに上記のいずれの接続も使用できない場合に選択します。 <p>選択したオプションで必要な情報の詳細については、次の表を参照してください。</p>

ページャ接続オプション

選択したページャ接続オプションで、次の必要な情報を入力します。

UI 要素	詳細
モデム番号	ページャ・サービス・モデムに英数字ページを送信する場合に使用する電話番号。
モデムの PIN 番号	英数字ページャの PIN 番号の末尾 7 桁。英数字ページャ・サービスを使用する場合、英数字ページをページャ・サービス・モデムに送信するために使用する電話番号を入力する必要があります。この番号はページャ・サービスにより提供されます。ページャ・サービスでは、この番号を TAP/IXO 番号と呼ぶ場合があります。
電話番号	<p>通常の電話からダイアルする場合と同じ電話番号。外線にダイアルする番号などの、必要に応じて使用する番号も含まれます。番号を見やすくするためにハイフンを使用できます。電話番号の一部を区切るには、カンマを使用します。各カンマで、残りの番号にダイアルする前にモデル・スクリプトによって数秒間一時停止されます。</p> <p>例：オフィスからページャにダイアルするときに外線番号 9 をダイアルする必要がある場合、「9, 555-6789」と入力します。</p>
ページ送信コマンド	タッチ・トーン電話からダイアルする場合と同じページ・コマンド。
ユーザ定義モデム・コマンド	<p>ダイアル先の電話番号、必要に応じた追加の番号、\$message を含む全体のモデム・コマンド。SiteScope によって、各警告に指定したメッセージに \$message が置き換えられます。</p> <p>例：ページャの会社の番号が 123-4567、ページャの PIN が 333-3333、ページャ会社によって各コマンドの後に # キーの入力が指定されている場合、コマンドは次のようになります。</p> <p>ATDT 123-4567,,333-3333#,, \$message#</p> <p>注：UNIX で実行している SiteScope の場合、[Modem Path] ボックスにモデムのデバイス・パスを入力します。Solaris を使用してデバイスのリストを参照するには、ls /dev/term/* コマンドを使用します。</p>
無効	<p>このユーザのページャを含むすべての警告を編集せずに、特定のページャを一時的に無効にします。</p> <p>標準設定値：選択されていない</p>

詳細設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
スケジュール	<p>ページャの設定を有効にする日時を指定します。ドロップダウン・リストから、より制限されたスケジュールを選択できます。</p> <p>標準設定値：毎日、全日</p>

UI 要素	詳細
詳細	<p>設定プロファイルの詳細。プロパティを編集または表示する場合にのみ表示されます。HTML タグ(
, <HR>, および タグなど)を使用して、表示形式および表示スタイルを制御できます。</p> <p>注: このボックスに入力した HTML コードは、有効性とセキュリティがチェックされ、コード(複数行にわたるために切り捨てられたコードなど)を修正する修正アクションが実行されます。悪意のある HTML コードや JavaScript が検出されると、フィールド全体が拒否されます。禁止されている HTML 内容は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none">• タグ: script, object, param, frame, iframe。• on で始まる属性を含むタグは拒否される。例: onhover。• 値に javascript が指定された属性。

タグの検索/フィルタ

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します(ラベルのない要素は山括弧内に表示されます)。

UI 要素	詳細
<タグ名と値>	<p>SiteScope オブジェクト(グループ、モニタ、リモート・サーバ、テンプレート、プリファレンス・プロファイル)を検索およびフィルタするために、キーワード・タグが使用される。SiteScope にタグが作成されていない場合、このセクションは空白で表示されます。タグが作成されている場合はここに表示され、必要に応じてタグを選択できます。</p> <p>概念の詳細については、106ページ「SiteScope オブジェクトの検索」を参照してください。</p>
タグの追加	<p>[新規タグ]ダイアログ・ボックスを開き、新しいキーワード・タグを追加できる。ユーザ・インタフェースの詳細については、111ページ「[新規タグ]/[タグの編集]ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p>

第 38 章

スケジュール・プリファレンス

本章の内容

概念

- 753ページ「スケジュール・プリファレンスの概要」

参照情報

- 755ページ「スケジュール・プリファレンスのユーザ・インタフェース」

スケジュール・プリファレンスの概要

SiteScope モニタ、警告、レポートは、標準設定で 1 日 24 時間、週 7 日、1 年 365 日有効になっています。モニタが有効な間は、個別のモニタ設定で指定した更新頻度に従ってモニタが実行されます。たとえば、30 秒ごとにモニタを実行するように設定している場合、SiteScope によって終日 30 秒ごとにモニタの実行が試みられます。SiteScope がエラー状態を検出すると、時刻に関係なくモニタに関連付けられた警告がトリガされます。

場合によっては、単一イベントまたは特定の時刻に対応する特定の SiteScope アクションを有効にすると便利です。たとえば、サーバの負荷が一般的に軽い場合に、1 日 1 回のみリンク・チェック・モニタを実行するようなタイプのスケジュールをモニタに使用できます。このようなスケジュールを実行するには、時間指定スケジュールを使用します。

モニタの対象のサーバおよびシステムを担当する個人またはグループのスケジュールに基づいて、特定の SiteScope アクションを無効にすることもできます。定義した期間に従ってモニタを有効または無効にするように SiteScope に指示するには、範囲スケジュールを使用します。

本項の内容

- [753 ページ「時間指定スケジュール」](#)
- [753 ページ「範囲スケジュール」](#)

時間指定スケジュール

時間指定スケジュールでは、モニタを週単位で実行する特定の時間を設定できます。時間指定スケジュールは週の終わりにリセットされ、毎週繰り返されます。時間指定スケジュールは、スケジュールで指定した各時間に 1 回だけ実行するモニタをトリガします。

時間指定スケジュールは、モニタ・インスタンスに明示的に関連付けられるまで非アクティブです。時間指定スケジュールをモニタに関連付けるには、スケジュールを設定するモニタの[**モニタの実行設定**]表示枠の[**モニタのスケジュール**]フィールドを使用します。

注: モニタが警告に関連付けられる方法によって、時間指定スケジュールが間接的に警告に関連付けられます。時間指定スケジュールで無効にしたモニタに関連付けられている警告は、そのモニタが無効な間は実質的に利用不可になります。ただし、警告が同じスケジュールで制御されないほかのモニタに関連付けられている場合、そのモニタがエラー状態を報告すると警告はトリガされます。

時間指定スケジュールのプリファレンスの設定の詳細については、[755 ページ「時間指定スケジュール・ページ」](#)を参照してください。

範囲スケジュール

範囲スケジュールを使用して、SiteScope で特定のモニタを有効または無効にする時間範囲を指定できます。モニタに有効な時間範囲を指定(そのモニタの[**モニタの実行設定**]表示枠の[**モニタのスケジュール**]フィールドを使用)した場合、SiteScope ではその時間範囲内のモニタのみ実行します。たとえば、月曜日から金曜日の午前 8 時～午後 9 時の範囲を作成した場合、その範囲スケジュールが関連付けられたモニタは、その時間内にのみ実行されます。

範囲スケジュールは、複数の管理者が呼び出しに応じる場合、それぞれの勤務シフトの時間に実行するモニタに異なるページ警告を関連付けるために一般的に使用されます。スケジュールによって、個人の勤務スケジュールに合わない時間帯にページ警告を送信することを避けられます。

範囲スケジュールのプリファレンスは、モニタ・インスタンスに明示的に関連付けられるまでは非アクティブです。範囲スケジュールのプリファレンスをモニタに関連付けるには、モニタの設定ページの[モニタの実行設定]表示枠を使用します。

注: モニタが警告に関連付けられる方法によって、範囲スケジュールが間接的に警告に関連付けられます。範囲スケジュールで無効にしたモニタに関連付けられている警告は、そのモニタが無効な間は実質的に利用不可になります。ただし、警告が同じスケジュールで制御されないほかのモニタに関連付けられている場合、そのモニタがエラー状態を報告すると警告はトリガされます。

範囲スケジュールのプリファレンスの設定の詳細については、[756ページ「範囲スケジュールのユーザーページ」](#)を参照してください。


スケジュール・プリファレンスのユーザ・インタフェース

本項の内容

- 755 ページ「時間指定スケジュール・ページ」
- 756 ページ「範囲スケジュールのユーザ・ページ」

時間指定スケジュール・ページ

このページは、SiteScope モニタおよび警告の操作を特定の時間でのみ実行するようにカスタマイズするために使用します。

アクセス方法	[プリファレンス]コンテキスト > [スケジュール プリファレンス]を選択します。[スケジュール プリファレンス] ツールバーで[新規スケジュール]  ボタンをクリックし、[新規時間指定スケジュール]を選択します。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none">SiteScope の管理者、または「スケジュール・プリファレンスを追加、編集、または削除します」権限が付与されたユーザのみが、スケジュール・プリファレンスを作成または変更できます。ユーザ権限の詳細については、773 ページ「ユーザ管理プリファレンスの概要」を参照してください。時間指定スケジュール・プロファイルが警告アクション、レポート、モニタ、モニタしきい値から参照されている場合、そのプロファイルは削除できません。プロファイルを削除するには、各依存関係からプロファイルを削除する必要があります。
関連情報	753 ページ「スケジュール・プリファレンスの概要」

一般設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
名前	時間指定スケジュールの名前。この名前は、製品の表示での時間指定スケジュールの識別に使用されます。
詳細	<p>設定プロファイルの詳細。プロパティを編集または表示する場合にのみ表示されます。HTML タグ(
, <HR>, および タグなど)を使用して、表示形式および表示スタイルを制御できます。</p> <p>注：このボックスに入力した HTML コードは、有効性とセキュリティがチェックされ、コード(複数行にわたるために切り捨てられたコードなど)を修正する修正アクションが実行されます。悪意のある HTML コードや JavaScript が検出されると、フィールド全体が拒否されます。禁止されている HTML 内容は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none">タグ: <code>script</code>, <code>object</code>, <code>param</code>, <code>frame</code>, <code>iframe</code>。<code>on</code> で始まる属性を含むタグは拒否される。例: <code>onhover</code>。値に <code>javascript</code> が指定された属性。

時間指定スケジュールの設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
<曜日>	曜日の横にあるボックス内の、モニタを実行する時間。時間指定スケジュールの時間の値は、それぞれの標準日の 24 時間以内に制限されています。1 日に複数の時間を入力するには、時間をカンマ(,)で区切ります。 例：01,02:30,23:30 では、午前 1:00、午前 2:30、午後 11:30 にモニタを実行します。

関連エンティティ

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
名前	該当するスケジュールの下で実行されている各エンティティ(モニタ、警告アクション)の名前を一覧表示します。たとえば、モニタ・スケジュールを編集して、該当するスケジュールの下で実行されているモニタを表示する場合に有効です。
エンティティタイプ	モニタ、警告アクション、SiteScope の再起動などのエンティティ・タイプ。
パス	エンティティ・タイプのパス。


タグの検索/フィルタ

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します(ラベルのない要素は山括弧内に表示されます)。

UI 要素	説明
<タグ名と値>	SiteScope オブジェクト(グループ、モニタ、リモート・サーバ、テンプレート、プリファレンス・プロファイル)を検索およびフィルタするために、キーワード・タグが使用される。SiteScope にタグが作成されていない場合、このセクションは空白で表示されます。タグが作成されている場合はここに表示され、必要に応じてタグを選択できます。 概念の詳細については、106ページ「SiteScope オブジェクトの検索」を参照してください。
タグの追加	[新規タグ]ダイアログ・ボックスを開き、新しいキーワード・タグを追加できる。ユーザ・インタフェースの詳細については、111ページ「[新規タグ]/[タグの編集]ダイアログ・ボックス」を参照してください。

範囲スケジュールのユーザ・ページ

このページは、モニタおよび警告のSiteScope操作を特定の時間範囲内でのみ実行するようにカスタマイズするために使用します。

アクセス方法	[プリファレンス]コンテキスト > [スケジュール プリファレンス]を選択します。 [スケジュールプリファレンス]ツールバーで[新規スケジュール]  ボタンをクリックし、[新規時間範囲スケジュール]を選択します。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> SiteScope の管理者、または「スケジュール・プリファレンスを追加、編集、または削除します」権限が付与されたユーザのみが、スケジュール・プリファレンスを作成または変更できます。ユーザ権限の詳細については、773ページ「ユーザ管理プリファレンスの概要」を参照してください。 範囲スケジュール・プロファイルが警告アクション、レポート、モニタ、モニタしきい値から参照されている場合、そのプロファイルは削除できません。プロファイルを削除するには、各依存関係からプロファイルを削除する必要があります。 SiteScope Failover を使用する場合、追加のテーブル(フェイルオーバー・スケジュール・プリファレンス)が一般スケジュール・プリファレンス・テーブルの下に表示されます。追加のテーブルは、プライマリ SiteScope の可用性のミラー化および確認に使用されるスケジュールを含みます。
関連情報	753ページ「スケジュール・プリファレンスの概要」

一般設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
名前	範囲スケジュールの名前。
詳細	<p>設定プロファイルの詳細。プロパティを編集または表示する場合にのみ表示されます。HTML タグ(
, <HR>, および タグなど)を使用して、表示形式および表示スタイルを制御できます。</p> <p>注：このボックスに入力した HTML コードは、有効性とセキュリティがチェックされ、コード(複数行にわたるために切り捨てられたコードなど)を修正する修正アクションが実行されます。悪意のある HTML コードや JavaScript が検出されると、フィールド全体が拒否されます。禁止されている HTML 内容は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> タグ: script, object, param, frame, iframe。 on で始まる属性を含むタグは拒否される。例: onhover。 値に javascript が指定された属性。

範囲スケジュールの設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
<曜日>	<p>モニタを実行する日と時間。範囲スケジュールの時間の値は、それぞれの標準日の 24 時間以内に制限されています。[有効]を選択すると、指定した時間範囲内にのみモニタが実行され、[無効]を選択すると、適用可能な日の指定した時間範囲外のすべての時間でモニタを実行します。</p> <p>注：範囲スケジュールには 24 時間の形式のみ使用します。</p> <p>例：木曜日の午後 6:00 から翌朝の午前 8:00 までモニタを無効にするには、木曜日の[開始]に「18」、[終了]に「24」を入力し、金曜日の[開始]に「0」、[終了]に「8」を入力します。木曜日のスケジュールで[開始]に「18」、[終了]に「8」を入力した場合、スケジュールは無効になります。</p> <p>1 日に複数の時間を入力するには、時間をカンマ(,)で区切ります。たとえば、午前 2 時～午前 3 時と午前 7 時～午前 8 時に無効にするには、[開始]ボックスに「2:00, 7:00」、[終了]ボックスに「3:00, 8:00.」と入力します。</p> <p>標準設定値：有効(時間の値の指定なし)詳細については、次の表を参照してください。</p>

曜日

設定の有効化 (有効 / 無効)	表示期間 (開始 / 終了)	スケジュールの効果
有効	[開始]および[終了] 時間の値が指定済み	[開始]および[終了]の時間範囲内でのみモニタが 実行されます。
有効	(時間の値の指定なし)	適用可能な日のすべての時間でモニタが実行され ます。これが 24 時間稼働の標準設定です。
無効	[開始]および[終了] 時間の値が指定済み	適用可能な日の[開始]および[終了]の時間範 囲外のすべての時間でモニタが実行されます。
無効	(時間の値の指定なし)	適用可能な日のすべての時間でモニタが無効にな ります。

フェイルオーバー・スケジュール・プリファレンス

注：このテーブルは SiteScope Failover サーバのみで利用可能です。

このテーブルは、プライマリ SiteScope の可用性のミラー化および確認に使用されるスケジュールを含みます。

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
名前	フェイルオーバー・プロファイル・ダイアログ・ボックスの実行設定で選択されるフェイルオーバー・スケジュールの名前。詳細については、 651ページ「[新規フェイルオーバー プロファイル]/[フェイルオーバー プロファイルの編集]ダイアログ・ボックス」 を参照してください。
説明	<p>設定プロファイルの詳細。プロパティを編集または表示する場合にのみ表示されます。HTML タグ(
, <HR>, および タグなど)を使用して、表示形式および表示スタイルを制御できます。</p> <p>注 :このボックスに入力した HTML コードは、有効性とセキュリティがチェックされ、コード(複数行にわたるために切り捨てられたコードなど)を修正する修正アクションが実行されます。悪意のある HTML コードや JavaScript が検出されると、フィールド全体が拒否されます。禁止されている HTML 内容は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> タグ: script, object, param, frame, iframe。 on で始まる属性を含むタグは拒否される。例: onhover。 値に javascript が指定された属性。

タグの検索/フィルタ

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します(ラベルのない要素は山括弧内に表示されます)。

UI 要素	説明
<タグ名と値>	<p>SiteScope オブジェクト(グループ、モニタ、リモート・サーバ、テンプレート、プリファレンス・プロファイル)を検索およびフィルタするために、キーワード・タグが使用される。SiteScope にタグが作成されていない場合、このセクションは空白で表示されます。タグが作成されている場合はここに表示され、必要に応じてタグを選択できます。</p> <p>概念の詳細については、106ページ「SiteScope オブジェクトの検索」を参照してください。</p>
タグの追加	<p>[新規タグ]ダイアログ・ボックスを開き、新しいキーワード・タグを追加できる。ユーザ・インタフェースの詳細については、111ページ「[新規タグ]/[タグの編集]ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p>

第 39 章

タグの検索/フィルタ

本章の内容

概念

- 761ページ「タグの検索 / フィルタの概要」

参照情報

- 762ページ「[タグの検索/フィルタ] ページ」

タグの検索 / フィルタの概要

SiteScope で定義した検索 / フィルタ・タグを管理するには、タグの検索 / フィルタのプリファレンスを使用します。これらのタグは、コンテキスト・ツリーまたはプリファレンス・プロファイルの項目に割り当てることができ、フィルタのオブジェクトとして使用されます。

タグの検索 / フィルタのプリファレンス・ページには、検索 / フィルタ・タグのリストが表示されます。このページで、検索 / フィルタ・タグを追加、編集、削除できます。






これらのプリファレンスの設定の詳細については、[762 ページ「\[タグの検索 / フィルタ\] ページ」](#)を参照してください。

[タグの検索 / フィルタ] ページ

このページでは、SiteScope で定義した検索 / フィルタ・タグを管理できます。コンテキスト・ツリーとプリファレンス・プロファイルの 1 つ以上の項目にタグを割り当て、そのタグをフィルタのオブジェクトとして使用できます。

アクセス方法	[プリファレンス]コンテキスト > [タグの検索 / フィルタ]を選択します。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none">SiteScope オブジェクトで参照されている場合、検索 / フィルタ・タグまたはタグの値は削除できません。削除するには、すべての SiteScope オブジェクトからタグまたはタグの値を削除する必要があります。タグは、<tag> 属性を使用して警告テンプレートでも使用できます。詳細については、1232ページ「SiteScope 警告テンプレートとイベントのプロパティのディレクトリ」を参照してください。
関連タスク	107ページ「検索 / フィルタ・タグを使用したオブジェクトの検索方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none">106ページ「SiteScope オブジェクトの検索」761ページ「タグの検索 / フィルタの概要」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
	新規タグ : 新しい検索 / フィルタ・タグを作成します。ユーザ・インタフェースの詳細については、 111ページ「[新規タグ] / [タグの編集] ダイアログ・ボックス」 を参照してください。
	タグの編集 : 検索 / フィルタ・タグを編集できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、 111ページ「[新規タグ] / [タグの編集] ダイアログ・ボックス」 を参照してください。
	タグの削除 : タグの検索 / フィルタのプリファレンスから選択したタグを削除します。
	すべて選択 : 表示されたすべての検索 / フィルタ・タグを選択します。
	選択範囲を解除 : 選択をクリアします。
名前	新しい検索 / フィルタ・タグの作成時に設定プロファイルに割り当てられる名前の文字列。
詳細	検索 / フィルタ・タグの作成時または編集時に割り当てられた設定プロファイルの詳細。

第40章

SNMP プリファレンス

本章の内容

概念

- 764ページ「SNMP プリファレンスの概要」

参照情報

- 765ページ「SNMP のユーザ・インタフェース」

SNMP プリファレンスの概要

SNMP プリファレンスは、SiteScope での外部の SNMP ホストまたは管理コンソールとの通信に必要な設定を行うために使用します。これらは、SNMP トラップ警告で使用する標準設定の SNMP パラメータです。

[SNMP プリファレンス] ページには、トラップをホストに送信するための定義済みカスタム SNMP トラップ・プロファイルまたはテンプレートが表示されます。SNMP トラップ・プロファイルは、適切な警告定義を編集することで 1 つ以上の SNMP トラップ警告に関連付けることができます。

これらのプリファレンスの設定の詳細については、[765 ページ「\[SNMP プリファレンス\] ページ」](#)を参照してください。

SNMP のユーザ・インタフェース

本項の内容

- 765 ページ「[SNMP プリファレンス] ページ」
- 767 ページ「[SNMP トラップの送信]/[SNMP トラップの受信] ダイアログ・ボックス」





[SNMP プリファレンス] ページ



このページでは、管理コンソールにデータを送信するときに SiteScope SNMP トラップ警告によって使用される設定を定義できます。また、SNMP トラップ受信者プロファイルの定義、および複数のローカル・アドレスやポートの同時リスンが可能です。SiteScope では、SiteScope SNMP トラップ警告タイプを使用して、SNMP ベースのネットワーク管理システムと統合します。

アクセス方法	[プリファレンス] コンテキスト > [SNMP プリファレンス] を選択します。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none">SiteScope の管理者、または「電子メール、ページャ、HTTP、SNMP のプリファレンスの追加、編集、または削除」の権限を付与されたユーザのみが、SNMP プリファレンスを作成または変更できます。ユーザ権限の詳細については、773 ページ「ユーザ管理 プリファレンスの概要」を参照してください。SNMP トラップ・プロファイルが警告アクションから参照されている場合、そのプロファイルは削除できません。SNMP トラップ・プロファイルを削除する前に、警告の SNMP トラップを変更する必要があります。
関連情報	<ul style="list-style-type: none">764 ページ「SNMP プリファレンスの概要」767 ページ「[SNMP トラップの送信]/[SNMP トラップの受信] ダイアログ・ボックス」

SNMP トラップ プリファレンスを送信





ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。


UI 要素	詳細
	新規 SNMP トラップ : 新しい SNMP トラップ・プロファイルを作成します。ユーザ・インタフェースの詳細については、767 ページ「[SNMP トラップの送信]/[SNMP トラップの受信] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
	SNMP トラップの編集 : SNMP トラップ・プロファイルを編集できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、767 ページ「[SNMP トラップの送信]/[SNMP トラップの受信] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
	SNMP トラップの削除 : [SNMP プリファレンス] から選択した SNMP トラップ・プロファイルを削除します。
	SNMP トラップのテスト : SNMP トラップにメッセージを送信できるかどうかをテストします。[SNMP トラップのテスト] ダイアログ・ボックスにメッセージを入力し、[テスト] をクリックします。

UI 要素	詳細
	すべて選択 : 表示されたすべての送受信 SNMP トラップ・プロファイルを選択します。
	選択範囲を解除 : 選択をクリアします。
標準設定	<p>[標準設定]の横にある矢印をクリックし、次のオプションを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> 編集 : [SNMP トラップ プリファレンス 標準設定] ダイアログ・ボックスが開き、[新規 SNMP トラップ] ダイアログ・ボックスに表示された標準設定を変更できます。この設定の詳細については、767 ページ「[SNMP トラップの送信]/[SNMP トラップの受信] ダイアログ・ボックス」を参照してください。 テスト : [SNMP トラップのテスト] ダイアログ・ボックスが開き、標準設定の SNMP トラップにメッセージを送信できるかどうかをテストできます。[SNMP トラップのテスト] ダイアログ・ボックスにメッセージを入力し、[テスト]をクリックします。 <p>注 : SNMP トラップのテストではすべての varbind を含む完全なトラップは送信しません。設定されたトラップ OID とメッセージのみを含む SNMP トラップを送信します。</p>
名前	新規 SNMP トラップ・プロファイルの作成時に設定プロファイルに割り当てられる名前の文字列。
ホスト	すべての SNMP トラップ・メッセージを受信するマシンのドメイン名または IP アドレス。
ポート	トラップの送信先の SNMP ポート。
説明	プロファイルの作成時または編集時に割り当てられた設定プロファイルの詳細。

SNMP トラップ・プリファレンスの受信



ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
	新規 SNMP トラップ : 新しい SNMP トラップ・プロファイル受信者を作成します。ユーザ・インタフェースの詳細については、767 ページ「[SNMP トラップの送信]/[SNMP トラップの受信] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
	SNMP トラップの編集 : SNMP トラップ受信者プロファイルを編集できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、767 ページ「[SNMP トラップの送信]/[SNMP トラップの受信] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
	SNMP トラップの削除 : [SNMP プリファレンス] から選択した SNMP トラップ・プロファイルを削除します。
	すべて選択 : 表示されたすべての送受信 SNMP トラップ・プロファイルを選択します。

UI 要素	説明
	選択範囲を解除: 選択をクリアします。
名前	新規 SNMP トラップ受信者プロファイルの作成時に設定プロファイルに割り当てられる名前の文字列。
ホスト	すべての SNMP トラップ・メッセージを受信するマシンのドメイン名または IP アドレス。
ポート	トラップの送信先の SNMP ポート。
説明	プロファイルの作成時または編集時に割り当てられた設定プロファイルの詳細。

[SNMP トラップの送信]/[SNMP トラップの受信]ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、新規 SNMP トラップ・プロファイルの作成や既存プロファイルの編集ができます。また、SNMP トラップ受信者プロファイルの作成または既存プロファイルの編集、および、複数のローカル・アドレスやポートの同時リスンが可能です。SNMP トラップ受信者セッションに v3 プロパティがある場合でも、SNMP v1、v2 の各トラップのリスンと受信が可能です。

アクセス方法	<p>[プリファレンス]コンテキスト > [SNMP プリファレンス]を選択します。SNMP トラップのプリファレンス・ページで、次の操作を実行します。</p> <ul style="list-style-type: none">[SNMP トラップ プリファレンスを受信/送信]部の新規 SNMP トラップ  ボタンをクリックして、SNMP トラップの送受信用の新規プロファイルを作成するか、または、[SNMP トラップ プリファレンスを受信/送信]部の既存トラップを選択し、SNMP トラップの編集  ボタンをクリックします。
重要な情報	SiteScope の管理者、または「電子メール、ページャ、HTTP、SNMP のプリファレンスを追加、編集、または削除します」権限が付与されたユーザのみが、SNMP プリファレンス]を作成または変更できます。このトピックの詳細については、773ページ「ユーザ管理プリファレンスの概要」を参照してください。
関連情報	<ul style="list-style-type: none">764ページ「SNMP プリファレンスの概要」765ページ「[SNMP プリファレンス]ページ」

本項の内容

- 767ページ「SNMP トラップ・プリファレンスを送信」
- 770ページ「SNMP トラップ プリファレンスを受け取る」
- 771ページ「タグの検索 / フィルタ」

SNMP トラップ・プリファレンスを送信

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
名前	新規 SNMP 受信者の作成時に設定プロファイルに割り当てられる名前の文字列。
詳細	<p>設定プロファイルの詳細。プロパティを編集または表示する場合にのみ表示されます。HTML タグ(
, <HR>, および タグなど)を使用して、表示形式および表示スタイルを制御できます。</p> <p>注 :このボックスに入力した HTML コードは、有効性とセキュリティがチェックされ、コード(複数行にわたるために切り捨てられたコードなど)を修正する修正アクションが実行されます。悪意のある HTML コードや JavaScript が検出されると、フィールド全体が拒否されます。禁止されている HTML 内容は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> • タグ: script, object, param, frame, iframe。 • on で始まる属性を含むタグは拒否される。例: onhover。 • 値に javascript が指定された属性。
メイン設定	
送信先ホスト	<p>すべての SNMP トラップ・メッセージを受信するマシンのドメイン名または IP アドレス。このマシンでトラップ・メッセージを受信するには、SNMP コンソールが実行されている必要があります。</p> <p>例: <code>snmp.mydomain.com</code> または <code>206.168.191.20</code>。</p>
SNMP ポート	<p>トラップの送信先の SNMP ポート。</p> <p>標準設定値: 162</p>
送信 / 受信	
タイムアウト(秒単位)	<p>SMTP トラップ要求(再試行を含む)の完了までの待機時間(ミリ秒単位)。</p> <p>標準設定値: 5</p>
再試行の回数	<p>SiteScope が SNMP トラップの GET 要求を失敗とみなすまで各 SNMP GET 要求を再試行する回数。</p> <p>標準設定値: 1</p>
コミュニティ	<p>トラップの送信に使用される標準設定の SNMP コミュニティ名。コミュニティ文字列は、SNMP 管理コンソールで使用されるコミュニティ文字列と一致する必要があります。</p> <p>標準設定値: <code>public</code></p>
SNMP のバージョン	<p>使用する標準設定の SNMP プロトコル・バージョン番号。現在、SNMP V1 および V2c がサポートされています。</p> <p>標準設定値: V1</p>

UI 要素	詳細
認証アルゴリズム	SNMP V3 に使用される認証アルゴリズム。[MD5], [SHA], または[なし]を選択できます。 注 :このフィールドは, [SNMP V3]を選択した場合にのみ使用できます。
ユーザ名 :	SNMP バージョン 3 を使用している場合に認証に使用するユーザ名。 注 :このフィールドは, [SNMP V3]を選択した場合にのみ使用できます。
パスワード	SNMP バージョン 3 を使用している場合に認証に使用するパスワード。 注 :このフィールドは, [SNMP V3]を選択した場合にのみ使用できます。
プライバシー・アルゴリズム	SNMP バージョン 3 に使用されるプライバシー・アルゴリズム(DES, 128 ビット AES, 192 ビット AES, 256 ビット AES)。 標準設定値 : DES 注 :このフィールドは, [SNMP V3]を選択した場合にのみ使用できます。
プライバシー・パスワード	SNMP V3 の認証に使用するプライバシー・パスワード。プライバシーが不要ない場合は空白のままにします。 注 :このフィールドは, [SNMP V3]を選択した場合にのみ使用できます。
コンテキスト名	SNMP V3 のコンテキスト名。 注 :このフィールドは, [SNMP V3]を選択した場合にのみ使用できます。
コンテキスト・エンジン ID	SNMP V3 のコンテキスト・エンジン ID。 注 :このフィールドは, [SNMP V3]を選択した場合にのみ使用できます。
詳細設定	
SNMP トラップ ID	送信するトラップのタイプを選択します。共通する条件に複数の定義済み ID タイプがあります。 <ul style="list-style-type: none"> 一般 SNMP トラップ ID : ドロップダウン・リストから一般 SNMP タイプを選択します。 企業固有 SNMP トラップ ID : 企業固有の SNMP ID タイプを使用するには, ボックスに特定のトラップ・タイプの番号を入力します。 注 :SiteScope を NNMi と統合する場合は, [企業固有 SNMP トラップ ID]を選択し, 1 を入力する必要があります。SiteScope は各 SNMP バージョンで異なる通知 ID を送信します。 <ul style="list-style-type: none"> SNMP V1 : .1.3.6.1.4.1.11.15.1.4 SNMP V2 : .1.3.6.1.4.1.11.15.1.4.1

UI 要素	詳細
SNMP オブジェクト ID	コンソールに対し、メッセージを送信したオブジェクトを識別します。 <ul style="list-style-type: none">• 事前設定 SNMP オブジェクト ID : ドロップダウン・リストから、いずれかの定義済みオブジェクトを選択します。• その他の SNMP オブジェクト ID : 別のオブジェクト ID を使用するには、ボックスにほかのオブジェクト ID を入力します。 <p>注 : SiteScope を NNMi と統合する場合は、[事前設定 SNMP オブジェクト ID] を選択し、リストから [HP SiteScope イベント] を選択します。</p>
システム OID を SNMP トラップにプレフィックスとして追加します	標準設定のシステム OID (1.3.6.1.2.1) をすべての SNMP トラップ OID にプレフィックスとして追加します。プレフィックスを使用しない場合は、このチェック・ボックスをクリアします。 標準設定値 : 選択されている
SNMP ソース	SNMP トラップ・ソース (SiteScope サーバまたは監視対象サーバ)。 標準設定値 : 監視対象ホスト

タグの検索 / フィルタについては、771 ページ「タグの検索 / フィルタ」を参照してください。

SNMP トラップ プリファレンスを受け取る

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
名前	新規 SNMP 受信者の作成時に設定プロファイルに割り当てられる名前の文字列。
詳細	設定プロファイルの詳細。プロパティを編集または表示する場合にのみ表示されます。HTML タグ (, <HR>, および タグなど) を使用して、表示形式および表示スタイルを制御できます。 <p>注 : このボックスに入力した HTML コードは、有効性とセキュリティがチェックされ、コード (複数行にわたるために切り捨てられたコードなど) を修正する修正アクションが実行されます。悪意のある HTML コードや JavaScript が検出されると、フィールド全体が拒否されます。禁止されている HTML 内容は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none">• タグ : script, object, param, frame, iframe。• on で始まる属性を含むタグは拒否される。例 : onhover。• 値に javascript が指定された属性。

UI 要素	詳細
ホスト	次のようにホスト・オプションを選択します。 <ul style="list-style-type: none"> ホスト :ローカル SNMP アドレスの IP アドレスのホスト名を選択して、ドロップダウン・リストからバインドする。 その他 バインドするローカル SNMP アドレスの IP アドレスのホスト名を入力する。
ポート	トラップの収集には、UDP ポートを使用。 標準設定値 : 162
V3 トラップ設定	
ユーザ名	SNMP 認証用のユーザ名。
認証タイプ	使用する SNMP 認証のタイプ([MD5], [SHA], または[なし])。
認証パスワード	SNMP 認証用のパスワード。
プライバシー・タイプ	SNMP 認証用プライバシー・プロトコル(DES, 128 ビット AES, 192 ビット AES, 256 ビット AES)。
プライバシー・パスワード	SNMP 認証用のプライバシー・パスワード。
コンテキスト・エンジン ID	SNMP コンテキスト・エンジン ID。

タグの検索/フィルタについては、[771 ページ「タグの検索 / フィルタ」](#)を参照してください。

タグの検索 / フィルタ

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します(ラベルのない要素は山括弧内に表示されます)。

UI 要素	詳細
<タグ名と値>	SiteScope オブジェクト(グループ、モニタ、リモート・サーバ、テンプレート、プリファレンス・プロファイル)を検索およびフィルタするために、キーワード・タグが使用される。SiteScope にタグが作成されていない場合、このセクションは空白で表示されます。タグが作成されている場合はここに表示され、必要に応じてタグを選択できます。 概念の詳細については、 106 ページ「SiteScope オブジェクトの検索」 を参照してください。
タグの追加	[新規タグ]ダイアログ・ボックスを開き、新しいキーワード・タグを追加できる。ユーザ・インタフェースの詳細については、 111 ページ「[新規タグ]/[タグの編集]ダイアログ・ボックス」 を参照してください。

第41章

ユーザ管理プリファレンス

本章の内容

概念

- [773ページ「ユーザ管理プリファレンスの概要」](#)
- [776ページ「LDAP 認証と承認」](#)

タスク

- [777ページ「SiteScope ユーザ・プロファイルの作成方法」](#)
- [779ページ「SiteScope がLDAP 認証を使用するように設定する方法」](#)
- [781ページ「LDAP 認証の使用時にサイレント・ログインを設定する方法」](#)

参照情報

- [784ページ「パスワード要件パラメータ」](#)
- [785ページ「ユーザ管理のユーザ・インタフェース」](#)

ユーザ管理プリファレンスの概要

注: ユーザ管理プリファレンスは、SiteScope に直接アクセスしているユーザのみが使用でき、BSM の SAM 管理を使用して SiteScope にアクセスしているユーザは使用できません。SiteScope の権限と BSM との相互関係の詳細については、BSM ヘルプにある『システム可用性管理の使用』の「SiteScope へのアクセスと権限モデルの作成」を参照してください。

SiteScope ユーザ・アカウントは[ユーザ管理プリファレンス]ページで管理します。このページでは、SiteScope へのアクセスが許可されているユーザを管理できます。ユーザ管理プリファレンスの設定の詳細については、[785ページ「\[ユーザ管理プリファレンス\] ページ」](#)を参照してください。

クライアント・サーバ・ベースのアーキテクチャとして、複数のユーザが単一の SiteScope ユーザ・プロフィールに同時にアクセスできます。さまざまな対象者に異なる表示および編集権限を提供する複数の SiteScope ユーザ・アカウントを定義できます。たとえば、モニタの状態とレポートの表示を可能にし、モニタ設定または警告の追加や編集はできないようにするユーザ・プロフィールを作成できます。

ユーザ・プロフィールによって、SiteScope へのアクセスは正しいユーザ名とパスワードを入力したユーザに制限されます。必要に応じて、LDAP データベースにクエリが送信されユーザ認証が処理されることもあります。これによって、セントラル・リポジトリに全 SiteScope ユーザの認証情報(ユーザ名とパスワード)を保管して、LDAP サーバを使用してユーザの資格情報を検証することによって、外部の LDAP サーバからユーザを管理できます。詳細については、[776ページ「LDAP 認証と承認」](#)を参照してください。

ユーザ・プロフィールには、次の 2 つの主要コンポーネントがあります。

- ユーザ認証情報とアクセス権限
- アクション権限

該当するユーザ・プロフィール・コンテナで各ユーザ・プロフィールにこれらの設定を指定します。

SiteScope ユーザ・プロフィールの作成の詳細については、[777ページ「SiteScope ユーザ・プロフィールの作成方法」](#)を参照してください。

本項の内容

- [773ページ「ユーザ・タイプとユーザ・ロール・タイプ」](#)
- [774ページ「ユーザ権限」](#)
- [775ページ「ユーザ・アカウントに関する注意事項」](#)

ユーザ・タイプとユーザ・ロール・タイプ

SiteScope は、次のユーザ・タイプとユーザ・ロール・タイプを提供します。

ユーザ・タイプ:

- **管理者:** SiteScope には標準で 1 人の管理者が設定されます。管理者は、SiteScope ですべてを表示および変更できます。[ユーザ管理プリファレンス]ページでほかのユーザの作成やユーザ・プロフィールの変更が許可されているなど、その他にも管理者には特別なプロパティがあります。管理者アカウントは、無効にすることも削除することもできません。
- **パワー・ユーザ(スーパー・ユーザ):** これはユーザ管理権限が付与された正規ユーザです。パワー・ユーザは、管理者以外のユーザを作成、編集、削除できます。自分のアカウントも編集できます。

が、削除はできません。管理者とパワー・ユーザは、いずれもパワー・ユーザを作成できます。パワー・ユーザは複数存在する場合があります。このユーザ・タイプを有効化する方法の詳細については、[789ページ「新規ユーザプロファイル」](#) / [「ユーザプロファイルの編集」ダイアログ・ボックス](#)を参照してください。

- **正規ユーザ**: 正規ユーザは、自分自身を含め、どのユーザも作成、削除、編集できません。管理者またはパワー・ユーザが正規ユーザに定義したすべての権限があります。標準設定で、正規ユーザには([[ユーザ管理プリファレンス](#)])にある「[ユーザ・プリファレンスの追加、編集、削除](#)」以外のすべての権限が付与されます。そのため、ユーザが表示できるのは、自分のユーザ・プロパティおよび権限が付与されているルート・グループに制限されます。正規ユーザは、ほかのユーザの設定や権限を表示または編集できません。

標準設定では、SiteScope は HPOM イベントからのドリルダウンに使用する統合ビューア・ユーザを提供します。これは、表示権限と、グループとモニタをリフレッシュする権限が与えられた正規ユーザです。詳細については、[259ページ「イベントの送信」](#)を参照してください。

ユーザ・ロール・タイプ: 外部のLDAP サーバを使用する時に SiteScope ユーザのグループを管理するために使用されます。

- **スーパー・ユーザ・ロール**: これはユーザ管理権限([「ユーザ・プリファレンスの追加、編集、削除」](#))が付与された正規ユーザ・ロールです。このタイプのユーザは、管理者以外のユーザを作成、編集、削除できます。自分のユーザ・ロールも編集できますが、削除できません。管理者とパワー・ユーザは、いずれもスーパー・ユーザ・ロールを作成できます。スーパー・ユーザ・ロールは複数存在する場合があります。
- **正規ユーザ・ロール**: このタイプのユーザは、自分自身を含め、どのユーザも作成、削除、編集できません。管理者またはパワー・ユーザが正規ユーザに定義したすべての権限があります。標準設定で、正規ユーザには([[ユーザ管理プリファレンス](#)])にある「[ユーザ・プリファレンスの追加、編集、削除](#)」以外のすべての権限が付与されます。そのため、ユーザが表示できるのは、自分のユーザ・プロパティおよび権限が付与されているルート・グループに制限されます。正規ユーザ・ロールは、ほかのユーザの設定や権限を表示または編集できません。正規ユーザ・ロールは複数存在する場合があります。

ユーザ・ロール・タイプを有効化する方法の詳細については、[779ページ「SiteScope がLDAP 認証を使用するように設定する方法」](#)を参照してください。

LDAP 認証の詳細については、[776ページ「LDAP 認証と承認」](#)を参照してください。

ユーザ権限

SiteScope ユーザ・アカウントを設定するときに、SiteScope の管理者またはパワー・ユーザは、さまざまなユーザに必要な権限を設定できます。権限により、ユーザがアクセスできる SiteScope の領域が制限され、SiteScope オブジェクト(グループ、モニタ、警告、レポート、プリファレンス、リモート・サーバ、テンプレート、ダッシュボードなど)に対して実行できるアクションのタイプが制御されます。

注: 標準設定で、正規ユーザは自分のユーザ・プロパティおよび権限が付与されているルート・グループのみを表示できます。正規ユーザに「[ユーザ・プリファレンスの追加、編集、削除](#)」権限が付与されている場合(その結果、このユーザはパワー・ユーザになります)、ユーザは自分の設定と権限の編集、およびほかのユーザの設定と権限の作成および変更ができます。

SiteScope ではユーザ権限が拡張されました。各プリファレンス・タイプに特定の表示、編集、テスト権限があり、リモート・サーバには表示、編集、テスト権限があります。これによって、管理者またはパワー・ユーザは、選択したユーザのアクセスを特定のプリファレンス・タイプおよびリモート・サーバ・プロパ

ティに制限できます。ユーザに特定のプリファレンスの表示権限がない場合、そのプリファレンスのタブは使用できません。

特定の権限と権限の間に依存関係があることを理解しておくことは、アクション・タイプの権限を選択する場合に重要です。編集権限とテスト権限は、常に対応する表示権限に依存します。たとえば、「リモート・サーバを追加、編集、削除」権限または「リモート・サーバのテスト」権限を選択する場合、「リモート・サーバを表示」権限が自動的に選択されます。反対に、「リモート・サーバを表示」権限をクリアすると、「リモート・サーバを追加、編集、削除」権限と「リモート・サーバのテスト」権限が自動的にクリアされます。

ユーザ権限は、[新規ユーザ・プロファイル]/[ユーザ・プロファイルの編集]ダイアログ・ボックスの[権限]パネルで設定します。SiteScope ユーザ権限の詳細については、[789ページ「\[新規ユーザ・プロファイル\]/\[ユーザ・プロファイルの編集\]ダイアログ・ボックス」](#)を参照してください。

注意事項および制限事項

- SiteScope のユーザ・プリファレンス権限は、SiteScope で Business Availability Center バージョン 8.00 以前にレポートされる場合、SAM 管理ではサポートされません。
- SiteScope の 10.10 以前のバージョンからアップグレードすると、権限値は次のように判断されます。
 - すべてのプリファレンス・タイプに「<プリファレンス・タイプ>の表示」権限が標準設定で選択される(SiteScope の以前のバージョンでは対応するプリファレンス権限がなかったため)。
 - すべてのプリファレンス・タイプの「<プリファレンス・タイプ>の編集」権限は、SiteScope の以前のバージョンの「プリファレンスの編集」権限に従って判断される。
 - すべてのプリファレンス・タイプの「<プリファレンス・タイプ>のテスト」権限は、SiteScope の以前のバージョンの「プリファレンスのテスト」権限に従って判断される。

ユーザ・アカウントに関する注意事項

- 管理者アカウントは、SiteScope へのアクセス時に使用される標準設定のアカウントです。つまり、SiteScope が実行されているサーバ・アドレスとポート番号を要求するユーザは、標準設定で管理者アカウントにログインされます。このアカウントとその権限へのアクセスを制限するには、ユーザ名とログイン・パスワードを含めるように管理者アカウント・プロファイルを編集する必要があります。SiteScope により、SiteScope にアクセスする前にログイン・ダイアログ・ボックスが表示されるようになります。
- ユーザ・ログイン名とパスワードを必要としない名前付きユーザ・アカウントを作成できます。これを作成するには、標準形式の新しいユーザ・プロファイルを作成し([表示ユーザ名]を指定する)、[ログイン名]と[パスワード]ボックスは空白にします。この設定では、ユーザが SiteScope にアクセスしようすると、認証ダイアログが表示されます。[ログイン名]と[パスワード]ボックスを空白のままにして[ログイン]ボタンをクリックすると、この名前付きユーザとして認証されます。このユーザは、SiteScope UI の右側上に **guest(ゲスト)**として表示されます。
- SiteScope 設定の不正な変更を防ぐため、正規ユーザ・アカウントの権限を制限する必要があります。
- ユーザ・ログイン名とパスワードは必ず英語の文字でなければなりません。

LDAP 認証と承認

Lightweight Directory Access Protocol(LDAP)を使用して認証の設定を選択できます。これによって認証情報(ユーザ名とパスワード)を保管するために外部の LDAP サーバを使用できます。SiteScope は LDAP サーバを使用してユーザの資格情報を検証します。

情報を LDAP サーバに保管すると、多くの SiteScope にわたって多数のユーザを管理しやすくなります。LDAP 認証を使用すると、ユーザ・ロール・プロファイルを作成してユーザ権限の管理をより効率的に行えます。一度に各ユーザにアクセス権限を割り当てる代わりに、同じリソース上で同じ権限レベルが割り当てられているユーザを同じユーザ・ロール・プロファイルにグループ化できます。ユーザ・ロールの詳細については、[773ページ「ユーザ管理 プリファレンスの概要」](#)を参照してください。

ユーザ・ロールを作成して割り当て、SiteScope 外でユーザを管理することに加えて、SiteScope 管理者は SiteScope にログインする権限を持つすべての LDAP ユーザのリストを CSV ファイルに保存することも可能です。

LDAP 認証の有効化とユーザ・ロールの作成の詳細については、[779ページ「SiteScope が LDAP 認証を使用するように設定する方法」](#)を参照してください。

SiteScope へのログインに利用可能なその他の認証方法の詳細については、[814ページ「認証方法の概要」](#)を参照してください。

注:

- 監査ログにはユーザ名([表示名])のみが含まれ、ユーザ・ロールや LDAP グループ([ユーザ・ロール コンテキスト]または[LDAP コンテキスト])は含まれません。
- LDAP 認証を使用してユーザがログインするとき、ユーザが作成されるのは 1 SiteScope セッション限りです。セッションが終了すると、ユーザは削除されます(永続性で保存されません)。

サイレント認証

ブラウザに保存される証明書、またはクライアント証明書認証によりスマートカードから認証を設定することも可能です。これは、ユーザ・ログイン名およびパスワードを SiteScope のログイン・ページに入力することなく SiteScope を起動する自動プロセスです。

証明書を提供するか、またはスマート・カードを入れると、SiteScope は証明書 / スマート・カードから一意の属性を取得し、LDAP サーバを使用してユーザの資格情報を検証します。ユーザを見つけると、LDAP ユーザ資格情報を使用して自動的にログインします。

詳細については、[781ページ「LDAP 認証の使用時にサイレント・ログインを設定する方法」](#)を参照してください。

SiteScope ユーザ・プロファイルの作成方法

このタスクでは、SiteScope ユーザ・プロファイルの作成に関する手順を説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。


- [777ページ「前提条件」](#)
- [777ページ「SiteScope ユーザ・プロファイルの作成」](#)
- [777ページ「ユーザへの権限の割り当て - オプション」](#)
- [777ページ「SiteScope へのログオン」](#)
- [777ページ「ユーザのパスワードの変更 - オプション」](#)

1. 前提条件

SiteScope ユーザ管理設定および権限を作成または変更するには、SiteScope の管理者、または「**ユーザ プリファレンスを追加、編集、または削除します**」権限が付与されたユーザでなければなりません。標準設定では、正規ユーザは「**ユーザ プリファレンスを追加、編集、または削除します**」権限を有していません。

ユーザ権限の詳細については、[789ページ「\[新規ユーザプロファイル\]/\[ユーザプロファイルの編集\]ダイアログ・ボックス」](#)を参照してください。

2. SiteScope ユーザ・プロファイルの作成

- a. [ユーザ管理プリファレンス] ページで、[新規ユーザ]  ボタンの横の矢印をクリックし、[新規ユーザ]を選択します。
- b. [メイン設定] パネルで、ユーザ名、ログイン名、およびパスワードを入力して、このユーザ・プロファイルでアクセス可能なグループを選択します。

ユーザ・インタフェースの詳細については、[789ページ「\[新規ユーザプロファイル\]/\[ユーザプロファイルの編集\]ダイアログ・ボックス」](#)を参照してください。

3. ユーザへの権限の割り当て - オプション

[権限] パネルでこのユーザに付与された権限を選択するか、または標準設定の権限（「**ユーザ権限を追加、編集、または削除します**」を除きすべての権限が付与）を使用します。

[OK] をクリックします。新しいユーザ・プロファイルがユーザ管理プリファレンス・リストに追加されます。

4. SiteScope へのログオン

新しいユーザ・プロファイルを使用して SiteScope にログオンします。詳細については、[52ページ「SiteScope へのアクセス方法」](#)を参照してください。

注: SiteScope のログイン・パスワードは大文字と小文字が区別されます。

SiteScope はダッシュボード・ビューを開き、関連するユーザ権限はそのユーザに帰属します。

5. ユーザのパスワードの変更 - オプション

ユーザのパスワードを変更するには、SiteScope のログイン・ウィンドウで[パスワード変更]リンク

をクリックして、[パスワード変更]ダイアログ・ボックスにユーザのユーザ名、現在のパスワード、および新しいパスワードを入力します。

新しいパスワードがパスワード設定ルールに従っていない場合はエラー・メッセージが表示され、パスワードは変更されません。パスワード設定ルールについては、[784 ページ「パスワード要件パラメータ」](#)を参照してください。

SiteScope が LDAP 認証を使用するように設定する方法

このタスクは、SiteScope へのログオンでの LDAP 認証と承認の使用に関する手順を説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- [779ページ「前提条件」](#)
- [779ページ「SiteScope が LDAP 認証を使用できるようにする」](#)
- [780ページ「LDAP ユーザ・ロール・プロファイルの作成」](#)
- [780ページ「既存のユーザ権限をユーザ・ロールにコピー - オプション」](#)
- [780ページ「SiteScope からのログオフ」](#)
- [780ページ「SiteScope へのログオン」](#)
- [780ページ「結果」](#)

1. 前提条件

- LDAP を使用して SiteScope にアクセスする時、LDAP サーバでユーザに割り当てられたユーザ・ログインとセキュリティ・プリンシパルが必要です。詳細は、LDAP サーバ管理者に問い合わせてください。
- SiteScope LDAP ユーザ管理設定および権限を作成または変更するには、SiteScope の管理者、または「[ユーザ・プリファレンスの追加、編集、または削除](#)」権限が付与されたユーザでなければなりません。標準設定では、正規ユーザは「[ユーザ・プリファレンスを追加、編集、または削除します](#)」権限を有していません。ユーザ・インタフェースの詳細については、[789ページ「\[新規ユーザプロファイル\]/\[ユーザプロファイルの編集\]ダイアログ・ボックス」](#)を参照してください。

2. SiteScope が LDAP 認証を使用できるようにする


- a. SiteScope で、[\[プリファレンス\]](#) > [\[ユーザ管理プリファレンス\]](#)を選択して、[\[標準設定\]](#)の横にある矢印をクリックし、[\[編集\]](#)を選択します。[\[ユーザ管理設定\]ダイアログ・ボックス](#)が開き、LDAP ユーザ管理設定が表示されます。ユーザ・インタフェースの詳細については、[787ページ「\[ユーザ管理設定\]ダイアログ・ボックス」](#)を参照してください。
- b. [\[LDAP 認証の有効化\]](#)チェック・ボックスを選択して、LDAP 認証設定を設定します。

ヒント: これらの設定をするときには LDAP サーバ管理者に問い合わせることをお勧めします。

- c. LDAP 接続をテストするには、[\[標準設定\]](#)の横にある矢印をクリックして、[\[テスト\]](#)を選択します。テストのステータスが返されます(テストが成功すると、LDAP ユーザ数が表示されます)。

注: [\[ユーザ管理設定\]ダイアログ・ボックス](#)で[\[すべての LDAP ユーザの表示権限の有効化\]](#)を選択する場合、この LDAP のすべてのユーザはビューア・ロールを含まない表示権限を取得します。

3. LDAP ユーザ・ロール・プロファイルの作成

[ユーザ管理プリファレンス] ページで、**[新規ユーザ]**  ボタンの横の矢印をクリックして**[新規ユーザ・ロール]**を選択します。ユーザ・ロール名、LDAP セキュリティ・グループ(コンテキスト)を入力して、このユーザ・ロール・プロファイルによってアクセスできるグループを選択し、このユーザ・ロールに付与される権限を選択します。

ユーザ・インタフェースの詳細については、801ページ「**[新規ユーザ・ロール・プロファイル]/[ユーザ・ロール・プロファイルの編集]**ダイアログ・ボックス」を参照してください。

4. 既存のユーザ権限をユーザ・ロールにコピー - オプション

既存の SiteScope ユーザ権限を新しいユーザ・ロールにコピーできます。これにより、ユーザ・プロファイルを作成または編集する時にユーザ・ロールとして同じ権限を割り当てられます。

- [ユーザ管理プリファレンス] ページで、権限をユーザ・ロールにコピーするユーザを選択し、**[コピー]** > **[ユーザ・ロールへコピー]**を選択します。
- [新規ユーザ・ロール・プロファイル] ダイアログ・ボックスで、新しいユーザ・ロールの名前とコンテキストを入力して保存します。ユーザ・インタフェースの詳細については、801ページ「**[新規ユーザ・ロール・プロファイル]/[ユーザ・ロール・プロファイルの編集]**ダイアログ・ボックス」を参照してください。
- 選択されたユーザの権限はユーザ・ロールにコピーされます。これは**[一般ユーザ・ロール]**または**[スーパーユーザ・ロール]**タイプ(付与された権限によって異なる)として[ユーザ管理プリファレンス] ページに追加されます。ユーザ・インタフェースの詳細については、785ページ「**[ユーザ管理プリファレンス] ページ**」を参照してください。

5. SiteScope からのログオフ

[ログアウト] ボタンをクリックして SiteScope からログアウトします。

6. SiteScope へのログオン

LDAP を使用して SiteScope にアクセスする場合、ユーザは通常の方法で SiteScope にアクセスできます。詳細については、52ページ「**SiteScope へのアクセス方法**」を参照してください。

注: SiteScope ユーザはこれまで通り[SiteScope ログイン]ページに入力しなければならぬ SiteScope ログイン名とパスワードを定義しておく必要があります(LDAP ユーザは SiteScope にログオンするために固有の LDAP ユーザ名とパスワードを持っています)。

7. 結果

ユーザがログイン名とパスワードを[SiteScope ログイン]ページに入力した後で(またはサイレント・ログインを使用)、要求が SiteScope から LDAP に送信されます。

要求がユーザの確認を返してユーザ・グループがユーザ・ロール定義に一致する場合、関連するユーザ・ロール権限はユーザに帰属し、SiteScope はダッシュボード・ビューに開きます。

LDAP 認証の使用時にサイレント・ログインを設定する方法

このタスクは、クライアント証明書認証による SiteScope へのサイレント・ログインを設定する手順を説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- 781 ページ「クライアント証明書の取得」
- 781 ページ「サーバ証明書プロパティの設定」
- 782 ページ「SiteScope へのサーバ証明書のインポート」
- 782 ページ「LDAP ユーザ管理設定の設定」
- 782 ページ「結果」

1. クライアント証明書の取得

認証局が発行するデジタル証明書を取得します。自分の組織がこれに該当するデジタル証明書を持っていない場合は、認証局に証明書の発行を要求する必要があります。

2. サーバ証明書プロパティの設定

Tomcat サーバによって使用される設定ファイルに変更を行いサイレント・ログインを有効にします。

- a. < SiteScope のルート・ディレクトリ> \Tomcat\conf ディレクトリにある **server.xml** ファイルを開きます。
- b. 設定ファイルの次のようなセクションを探します。

```
<!-- Define a SSL HTTP/1.1 Connector on port 8443 --> <!--  
<Connector port="8443" maxThreads="150" minSpareThreads="25"  
maxSpareThreads="75" enableLookups="false"  
disableUploadTimeout="true" acceptCount="100" debug="0"  
scheme="https" secure="true" clientAuth="false"  
sslProtocol="TLS" /> -->
```

- c. このセクションを次のように変更し、必要なパラメータを入力します。

```
<!-- Define a SSL HTTP/1.1 Connector on port 8443 --> <Connector  
port="8443" maxThreads="150" minSpareThreads="25"  
maxSpareThreads="75" enableLookups="false"  
disableUploadTimeout="true" acceptCount="100" debug="0"  
scheme="https" secure="true" sslProtocol="TLS"  
keystoreFile="<Keystore_file_path>" keystorePass="<Keystore_  
password>" keystoreType="<Keystore_type>" keyAlias="<Keystore_  
alias>" truststoreFile="<truststore_file>"  
truststorePass="<truststore_password>"  
truststoreType="<truststore_type>" clientAuth="true" /> />
```

例：

```
<!-- Define a SSL HTTP/1.1 Connector on port 8443 --> <Connector
port="8443" maxThreads="150" minSpareThreads="25"
maxSpareThreads="75" enableLookups="false"
disableUploadTimeout="true" acceptCount="100" debug="0"
scheme="https" secure="true" sslProtocol="TLS"
keystoreFile="c:\myclientstore.p12" keystorePass="testing"
keystoreType="PKCS12" keyAlias="client"
truststoreFile="..\java\lib\security\cacerts"
truststorePass="changeit" truststoreType="JKS" clientAuth="true"
/> />
```

注: SiteScope と同じサーバにほかの HP 製品がインストールされている場合は、競合を回避するために、ポート 8443 を別のポートに変更しなければならない場合があります。

Tomcat ログ出力は、< SiteScope のルート・ディレクトリ> \logs\ tomcat.log ファイルに書き込まれます。ログ・ファイルの設定は、< SiteScope のルート・ディレクトリ> \Tomcat\common\classes\log4j.properties ファイルで実行できます。

- d. ポート 8443 で SSL アクセスを設定した後で、**Define a non-SSL HTTP/1.1 Connector on port 8080** とコメントすることによって SiteScope へのセキュアでないアクセスを制限します。

3. SiteScope へのサーバ証明書のインポート

証明書管理を使用して認証局の証明書をインポートします。[プリファレンス]>[証明書管理]を選択し、[証明書のインポート]ボタンをクリックします。[ファイル]または[ホスト]を選択し、ソース・サーバの詳細を入力します。

ユーザ・インタフェースの詳細については、603ページ「[証明書管理]ページ」を参照してください。

注: [証明書管理]ページで証明書キーストアの表示、追加、変更を行うことができるのは、SiteScope 管理者ユーザ、または「証明書リストの表示/編集」権限を持つユーザのみです。

4. LDAP ユーザ管理設定の設定

- a. [LDAP ユーザ管理設定]パネルで設定を設定します。ユーザ・インタフェースの詳細については、787ページ「[ユーザ管理設定]ダイアログ・ボックス」を参照してください。
- b. [LDAP ユーザ管理の詳細設定]パネルで、[LDAP アクティブ キー認証の同一属性]ボックスにLDAP ユーザの一意の属性を入力できます(または空白のままにしておくことができます。この場合、userPrincipalName 属性が使用されます)。

5. 結果

サイレント・ログインを使用して SiteScope にログオンしようとする、SiteScope から要求がLDAP に送信されます。要求がユーザの確認を返してユーザ・グループがユーザ・ロール定義に一致する場合、関連するユーザ・ロール権限はユーザに帰属し、SiteScope はダッシュボード・ビューに開きます。

SiteScope に表示されるユーザ名はユーザ証明書のユーザ個人名から取得されます。

注:

- ユーザが作成されるのは SiteScope の 1 セッションだけです。セッションが終了すると、ユーザは削除されます(永続性で保存されません)。
- SiteScope からログオフする時 ([ログアウト] ボタンをクリックして)、サイレント・ログイン・パラメータ(sis_silent_login_type_default)が URL に表示されます。このパラメータを削除してからでなければ、更新アクションを使用して SiteScope にログオンできません。

パスワード要件パラメータ

パスワード要件を設定するには、<SiteScope のルート・ディレクトリ> \groups\master.config で次のパラメータを設定します。

パラメータ	詳細
_adminMinimumLength = x	パスワードの長さは x 文字以上で指定する必要があります。
_adminRequireAlpha = (1,0)	<ul style="list-style-type: none">0: パスワードに英字を含める必要はありません。1: パスワードに英数字を含める必要があります。
_adminRequireNumber = (1,0)	<ul style="list-style-type: none">0: パスワードに数字を含める必要はありません。1: パスワードに数字を含める必要があります。
_adminRequirePunctuation = (1,0)	<ul style="list-style-type: none">0: パスワードに句読点を含める必要はありません。1: パスワードに句読点を含める必要があります。

ユーザ管理のユーザ・インタフェース

本項の内容







- 785ページ「[ユーザ管理プリファレンス] ページ」
- 787ページ「[ユーザ管理設定] ダイアログ・ボックス」
- 789ページ「[新規ユーザプロファイル]/[ユーザプロファイルの編集] ダイアログ・ボックス」
- 801ページ「[新規ユーザロールプロファイル]/[ユーザロールプロファイルの編集] ダイアログ・ボックス」
- 802ページ「[CSV ファイル] ダイアログ・ボックスの SiteScope LDAP ユーザの保存 :」
- 803ページ「[ユーザの許可されているグループを選択] ダイアログ・ボックス」

[ユーザ管理プリファレンス] ページ

SiteScope によって提供されるデータは、すべてのユーザに完全な管理権限を付与せずに複数のユーザが利用できるようにすることができます。このページでは、さまざまな対象者に異なる表示および編集権限を提供する複数のユーザ・アカウントを作成できます。

アクセス方法	[プリファレンス]コンテキスト > [ユーザ管理プリファレンス]を選択します。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none">• 現在のユーザまたはその他のユーザのユーザ設定および権限を作成または変更できるのは、SiteScope の管理者が「ユーザ・プリファレンスを追加、編集、または削除します」権限が付与されたユーザのみです。標準設定で、正規ユーザには「ユーザ・プリファレンスを追加、編集、または削除します」権限がありません。つまり、自分のユーザ・プロパティしか表示できません。• 管理者アカウントは標準設定のアカウントで、製品がインストールされると有効になります。ほかのアカウントを作成するには、ユーザ・ログイン名およびログイン・パスワードを含めるように最初に管理者アカウント・プロファイル編集する必要があります。
関連タスク	<ul style="list-style-type: none">• 777ページ「SiteScope ユーザ・プロファイルの作成方法」• 779ページ「SiteScope がLDAP 認証を使用するように設定する方法」• 781ページ「LDAP 認証の使用時にサイレント・ログインを設定する方法」
関連情報	773ページ「ユーザ管理プリファレンスの概要」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
	<p>新規作成 : ボタンの横にある矢印をクリックして選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> 新規ユーザ : 新しいユーザ・プロフィールを作成します。ユーザ・インタフェースの詳細については、789ページ「[新規ユーザプロフィール]/[ユーザプロフィールの編集]ダイアログ・ボックス」を参照してください。 新規ユーザ ロール : 新しいユーザ・ロール・プロフィールを作成します。ユーザ・インタフェースの詳細については、801ページ「[新規ユーザロールプロフィール]/[ユーザロールプロフィールの編集]ダイアログ・ボックス」を参照してください。
	<p>編集 : 選択したユーザまたはユーザ・ロール・プロフィールを編集できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、789ページ「[新規ユーザプロフィール]/[ユーザプロフィールの編集]ダイアログ・ボックス」と801ページ「[新規ユーザロールプロフィール]/[ユーザロールプロフィールの編集]ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p>
	<p>ユーザ/ユーザ ロールの削除 : 選択したユーザまたはユーザ・ロール・プロフィールを削除します。</p>
	<p>ユーザ・ロールへのコピー : 既存の SiteScope ユーザ権限を新しいユーザ・ロールにコピーできます。</p> <p>注 : SiteScope ユーザはこれまで同様 LDAP サーバでユーザ・ログインとセキュリティ・グループを割り当てられる必要があります(LDAP ユーザは SiteScope にログオンするために固有のLDAP ユーザ名とパスワードを持っています)。</p>
	<p>すべて選択 : すべてのリストされたユーザとユーザ・ロール・プロフィールを選択します。</p>
	<p>選択範囲を解除 : 選択をクリアします。</p>
標準設定	<p>[標準設定]の横にある矢印をクリックし、次のオプションを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> 編集 : 標準設定のLDAP 認証設定を変更できる[ユーザ管理設定]ダイアログ・ボックスを開きます。この設定の詳細については、785ページ「[ユーザ管理プリファレンス]ページ」を参照してください。 テスト : LDAP サーバへの接続とユーザの認証をテストします。 許可された LDAP ユーザを CSV として保存 : SiteScope へのログオン権限を持っているすべてのLDAP ユーザのリストをCSV ファイルに保存できます。詳細については、802ページ「[CSV ファイル]ダイアログ・ボックスの SiteScope LDAP ユーザの保存 :」を参照してください。 <p>注 : このオプションは SiteScope 管理者でのみ使用できます。</p>
表示名	<p>[表示ユーザ名]または[表示されたユーザ ロール名]ボックスに提供されたユーザまたはユーザ・ロール・プロフィールのタイトル。</p> <p>注 : ユーザ・プロフィールを設定する時、ユーザ名が提供されないと、[ログイン名]値が代わりに使用されます。</p>

UI 要素	説明
ログイン名 / ユーザ・ロール・コンテキスト	ユーザ・プロファイルのログイン名とユーザ・ロールの LDAP コンテキストを表示します。
ログインを無効にする	ログイン状態を表示します。チェック・ボックスがクリアされていると、このユーザ・プロファイルを使用した SiteScope へのアクセスは有効です。チェック・ボックスが選択されていると、このユーザ・プロファイルを使用した SiteScope へのアクセスは許可されません。
ユーザ・タイプ	ユーザのタイプ。さまざまなユーザ・タイプの詳細については、773ページ「ユーザ管理 プリファレンスの概要」を参照してください。

[ユーザ管理設定] ダイアログ・ボックス





このダイアログ・ボックスでは、標準設定の LDAP ユーザ管理設定を設定できます。

アクセス方法	[プリファレンス]コンテキスト > [ユーザ管理 プリファレンス]を選択します。 [ユーザ管理 プリファレンス]ツールバーで、[標準設定] > [編集]を選択します。
重要な情報	SiteScope の管理者または「ユーザ・プリファレンスを追加、編集、または削除します」権限が付与されたユーザのみが、LDAP ユーザ管理設定および権限を作成または変更できます。標準設定で、正規ユーザには「ユーザ・プリファレンスを追加、編集、または削除します」権限がありません。つまり、自分のユーザ・プロパティしか表示できません。
関連タスク	<ul style="list-style-type: none"> 779ページ「SiteScope が LDAP 認証を使用するように設定する方法」 781ページ「LDAP 認証の使用時にサイレント・ログインを設定する方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> 773ページ「ユーザ管理 プリファレンスの概要」 785ページ「[ユーザ管理 プリファレンス] ページ」

LDAP ユーザ管理設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
LDAP 認証の有効化	SiteScope ユーザを認証するために外部の LDAP サーバを使用できます。 標準設定値：選択されていない

UI 要素	詳細
LDAP サーバ URL	<p>SiteScope 固有のパスワードではなく、一元化された LDAP 認証を使用して SiteScope サービスにアクセスするための該当する LDAP サーバの URL。この SiteScope へのアクセスのパスワード認証は LDAP によって実行できます。</p> <p>例 : ldap://ldap.mydomain.com:389 または ldaps://ldap.mydomain.com:636(SSL 接続を使用する時)。</p>
LDAP 資格情報	<p>LDAP サーバ認証資格情報を提供するオプション。</p> <ul style="list-style-type: none"> ユーザ名およびパスワードを使用 : 手動でユーザの資格情報を入力する場合に、このオプションを選択します。[ユーザ名] ボックスと[パスワード] ボックスに、LDAP サーバにアクセスするために使用されるユーザ名とパスワードを入力します。これによって、SiteScope は LDAP で検索クエリを実行できます。ユーザは LDAP の管理者、または LDAP の検索権限を付与されているユーザでなければなりません。 例 : ユーザ名は [Domain]/[user_name] または [user_name]@[Domain] の形式にできます。 事前定義された資格情報を選択 : LDAP サーバ用の定義済みユーザ名およびパスワードを SiteScope で自動的に設定する場合に、このオプションを選択します(標準設定のオプション)。[資格情報プロファイル] ドロップダウン・リストから使用する資格情報プロファイルを選択するか、[資格情報の追加] をクリックして新規資格情報プロファイルを作成します。このタスクの実行方法の詳細については、623ページ「資格情報のプリファレンスの設定方法」を参照してください。
すべての LDAP ユーザの表示権限の有効化	<p>指定された LDAP コンテキストですべてのユーザに対して(特定の SiteScope ユーザ・ロールに割り当てられていないユーザに対しても)表示権限を有効にします。</p> <p>標準設定値 : 選択されていない</p>
LDAP コンテキスト	
	<p>新規 LDAP コンテキスト : LDAP コンテキスト・テーブルの一番下に新しい行を追加します。これにより新しい LDAP コンテキストを追加できます。</p>
	<p>LDAP コンテキストの削除 : 選択した LDAP コンテキストを削除します。</p>
	<p>上へ移動 : 選択した LDAP コンテキストを上へ移動することによって LDAP コンテキストの順序を変更できます。</p>
	<p>下へ移動 : 選択した LDAP コンテキストを下へ移動することによって LDAP コンテキストの順序を変更できます。</p>
コンテキスト	<p>LDAP 内を検索するためにコンテキストの LDAP ルート・ノードを表示します。</p> <p>例 : DC=ldap,DC=server</p> <p>DC はドメイン・コンポーネントのことです。</p>



LDAP ユーザ管理の詳細設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
LDAP ユーザ管理の詳細設定のすべての標準設定値はアクティブ・ディレクトリ・システムに関連します。異なるサーバ・タイプを使用している場合には、関連する設定値について LDAP サーバ管理者に問い合わせください。	
LDAP ユーザの objectClass	LDAP ユーザ・ロール名に使用されるクエリ値。 標準設定値: user
LDAP ユーザ識別属性名	ログイン識別属性を持つ LDAP ユーザに使用されるクエリ値。 標準設定値: sAMAccountName
LDAP グループの objectClass	LDAP グループに使用されるクエリ値(ロール・コンテキスト)。 標準設定値: Group
LDAP アクティベーション・キー識別属性	サイレント・ログイン認証用の LDAP 同一属性。このフィールドはアクティベーション・キー認証設定と使用した場合に限り使用されます。LDAP ユーザを識別するために一意の属性を入力する、または空白のままにしておくことができます。この場合 userPrincipalName 属性が使用されます。 アクティブ・キーを使用したサイレント・ログインの詳細については、 776 ページ「LDAP 認証と承認」 を参照してください。

[新規ユーザ プロファイル]/[ユーザ プロファイルの編集] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、新しいユーザ・プロファイルを作成または既存のプロファイルを編集できます。



アクセス方法	<p>[プリファレンス]コンテキスト > [ユーザ管理プリファレンス]を選択します。[ユーザ管理プリファレンス]ページで、次の操作を実行します。</p> <ul style="list-style-type: none">• [新規ユーザ]  ボタンの横にある矢印をクリックして、[新規ユーザ]を選択する、または• 既存のユーザ・プロファイルを選択して、[編集]  ボタンをクリックします。
重要な情報	<p>現在のユーザまたはその他のユーザのユーザ設定および権限を作成または変更できるのは、SiteScope の管理者が「ユーザ・プリファレンスを追加、編集、または削除します」権限が付与されたユーザのみです。標準設定で、正規ユーザには「ユーザ・プリファレンスを追加、編集、または削除します」権限がありません。つまり、自分のユーザ・プロパティしか表示できません。</p>

関連タスク	<ul style="list-style-type: none">777 ページ「SiteScope ユーザ・プロファイルの作成方法」779 ページ「SiteScope が LDAP 認証を使用するように設定する方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none">773 ページ「ユーザ管理 プリファレンスの概要」785 ページ「[ユーザ管理 プリファレンス] ページ」

メイン設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
表示ユーザ名	ユーザ・プロファイルのタイトル。タイトルはユーザのリストに表示されます。タイトルを入力しない場合は、 [ログイン名] の値が表示名として使用されます。
ログイン名	<p>このプロファイルを使用して SiteScope にアクセスするための SiteScope ログイン名。</p> <p>または、関連する LDAP セルに値を入力して、LDAP 認証を使用して SiteScope にログインできます。</p> <p>使用できる文字: 英数字。</p> <p>注: ユーザ・プロファイルの作成時に利用可能な文字以外の文字を入力してもエラーにはなりません。ただし、そのログイン名を使用して SiteScope にログオンすることはできません。</p>
パスワード	<p>このユーザが SiteScope にログインするためのパスワード。</p> <p>ユーザ認証に LDAP を使用する場合は、ここにパスワードを入力する必要はありません。ユーザ・アカウントにログオンする場合、ユーザは [SiteScope ログイン] ダイアログ・ボックスに LDAP パスワードを入力します。</p> <p>パスワード要件の詳細については、777 ページ「ユーザのパスワードの変更 - オプション」を参照してください。</p> <p>すべての SiteScope パスワードは、3DES(TDES(Triple Data Encryption Algorithm)とも呼ばれます)を使用して暗号化されます。TDES 鍵は SiteScope に保存されますが、変更はできません。詳細については、『HP SiteScope デプロイメント・ガイド』の「SiteScope プラットフォームのセキュリティ強化」を参照してください。</p> <p>注: SiteScope のログイン・パスワードは大文字と小文字が区別されます。</p>
パスワードの確認	[パスワード] ボックスで入力したパスワードの確認。このパスワードは、新しいユーザ・プロファイルを作成するとき、または既存のユーザ・プロファイルのパスワードを変更するときに使用されます。

UI 要素	詳細
LDAP サービス・プロバイダ	<p>SiteScope 固有のパスワードではなく、一元化された LDAP 認証を使用して SiteScope サービスにアクセスするための該当する LDAP サーバの URL。この SiteScope へのアクセスのパスワード認証は LDAP によって実行できます。</p> <p>各 LDAP サービス・プロバイダのホスト名/IP アドレスをセミコロン(";")で区切って入力することにより、複数の LDAP サービス・プロバイダを指定できます。SiteScope は、指定された LDAP サービス・プロバイダのリストを読み取り、そのリストから使用できるプロバイダを探します。</p> <p>例: ldap://ldap.mydomain.com:389。</p> <p>注:</p> <ul style="list-style-type: none"> この場合も、ユーザには定義された SiteScope ログイン名が必要です。 ユーザは、LDAP を使用して SiteScope にアクセスできますが、LDAP サーバでユーザに割り当てられたユーザ・ログインとセキュリティ・プリンシパルが必要です。
LDAP セキュリティ・プリンシパル	<p>LDAP 認証を使用して SiteScope サービスにアクセスするときの、このユーザのセキュリティ・プリンシパル。</p> <p>例: uid=testuser,ou=TEST,o=this-company.com</p> <p>注: LDAP サーバでは、ユーザを特殊文字で定義できます。ただし、SiteScope では、ユーザ名に等号記号(=)、セミコロン(;), 引用符(")を含むユーザはサポートされていません。等号記号(=)、セミコロン(;), 引用符(")。無効な文字を含むユーザ名では SiteScope にログオンできません。</p>
ユーザ・ロールを割り当てる	<p>ユーザにユーザ・ロールと同じ権限を割り当てるように選択します。リストには、SiteScope に定義されたすべてのユーザ・ロール名が表示されます。ユーザ・ロールを選択すると、[ログインを無効にする]、[許可されているグループ]、および[権限]設定を選択に使用できなくなります。</p>
ログインを無効にする	<p>このユーザ名とパスワードを使用した SiteScope へのアクセスを無効にします。このユーザ・プロファイルを使用したアクセスを有効にするには、チェック・ボックスをクリアします。</p>
許可されているグループ	<p>このユーザ・プロファイルでアクセスできるグループのリストを表示します。新規  ボタンをクリックして[ユーザの許可されているグループを選択]ダイアログ・ボックスを開き、グループを選択します。ユーザ・インタフェースの詳細については、803ページ「[ユーザの許可されているグループを選択]ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p> <p>グループへのユーザ・アクセスを削除するには、グループを選択し、[削除]  ボタンをクリックします。リスト内のすべてのグループを削除することはできません。</p> <p>標準設定値: すべてのグループにアクセスできるように SiteScope ノードが選択されます。</p> <p>注: このフィールドは管理者の設定では表示されません。</p>

権限

ユーザのアクション権限を決定できます。権限を付与するには、権限または権限グループの左側にあるチェック・ボックスを選択します。

重要な情報	<ul style="list-style-type: none">管理者にはすべての権限があり、またこれらの権限は変更できないため、管理者のアカウントに[権限]パネルは表示されません。現在のユーザまたはその他のユーザのユーザ設定および権限を作成または変更できるのは、SiteScope の管理者が「ユーザ・プリファレンスを追加、編集、または削除します」権限が付与されたユーザのみです。[権限]パネルのすべての権限が標準設定で選択されます。ただし、「ユーザ・プリファレンスを追加、編集、または削除します」権限は、SiteScope 管理者が付与する必要があります。権限グループの左側に表示される <input type="checkbox"/> アイコンは、そのルート・グループ内に含まれる権限で選択されていない権限があることを示します。
関連情報	<ul style="list-style-type: none">773ページ「ユーザ管理プリファレンスの概要」785ページ「[ユーザ管理プリファレンス] ページ」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
グループ	
グループを追加、編集、または削除します	<p>新しいグループの追加、既存のモニタ・グループの名前変更、コピー、削除ができます。詳細については、315ページ「[新規 SiteScope グループ] ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p> <p>標準設定値：選択されている</p>
グループのリフレッシュ	<p>スケジュールに関係なく、グループ内のすべてのモニタをリフレッシュまたは強制的に実行できます。詳細については、315ページ「[新規 SiteScope グループ] ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p> <p>標準設定値：選択されている</p>
グループの無効化	<p>グループを無効化できます。詳細については、1101ページ「[グループ内のモニタの有効化 / 無効化] ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p> <p>標準設定値：選択されている</p>
モニタ	

UI 要素	詳細
モニタを追加、編集、または削除します	<p>新しいモニタの追加, 既存のモニタ設定の編集, およびモニタの削除ができます。詳細については, 318ページ「SiteScope モニタを使った作業」を参照してください。</p> <p>標準設定値: 選択されている</p> <p>注: このオプションと[モニタの編集(新規モニタ作成不可)]オプションの両方が選択された場合は, このオプションが優先されます。</p>
モニタを編集または削除	<p>新しいモニタの作成が可能でなくても, 既存のモニタ設定の編集または削除ができます。このオプションを選択した場合, [モニタを追加、編集、または削除します]オプションをクリアする必要があります。クリアしないと, [モニタを追加、編集、または削除します]オプションが優先され新しいモニタを使用できません。</p> <p>標準設定値: 選択されている</p> <p>注: このオプションを選択すると, テンプレート・モードでの作業時に新しい警告を作成できない状態が解除されます。ただし, [テンプレートを追加、編集、または削除します]もクリアされている場合を除きます。</p>
モニタをリフレッシュします	<p>スケジュールに関係なく, 個々のモニタをリフレッシュまたは強制的に実行できます。詳細については, 318ページ「SiteScope モニタを使った作業」を参照してください。</p> <p>標準設定値: 選択されている</p>
モニタの確認	<p>確認機能を使用して, グループの詳細ページにモニタの状態についてコメントできます。詳細については, 1078ページ「モニタの状態の確認」を参照してください。</p> <p>標準設定値: 選択されている</p>
モニタの有効化	<p>グループ内のモニタを無効化できます。1101ページ「[グループ内のモニタの有効化 / 無効化]ダイアログ・ボックス」。</p> <p>標準設定値: 選択されている</p>
警告	
警告リストの表示	<p>警告リスト・ページに, 現在設定されている警告定義のリストを表示できます。これは, 警告を編集, テスト, 無期限に無効化するために必要なルート権限です。詳細については, 1241ページ「SiteScope 警告ページ」を参照してください。</p> <p>標準設定値: 選択されている</p>

UI 要素	詳細
警告を追加、編集、または削除します	<p>新しい警告の追加, 既存の警告の編集または削除ができます。このオプションは、「警告リストの表示」権限に依存します。警告の追加または編集の詳細については、1242ページ「[新規警告]/[警告の編集]ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p> <p>標準設定値：選択されている</p> <p>注：</p> <ul style="list-style-type: none"> 警告アクションは警告アクション・プリファレンスの権限によって制御されないため、この権限は「電子メール、ページャ、および SNMP のリストの表示」権限には依存しません。 このオプションと[警告の編集]オプションの両方が選択された場合は、このオプションが優先されます。
警告を編集または削除	<p>新しい警告を作成できない状態で既存の警告設定の編集または削除ができます。このオプションは、「警告リストの表示」権限に依存します。このオプションを選択した場合、[警告を追加、編集、または削除します]オプションをクリアする必要があります。選択しない場合、[警告を追加、編集、または削除します]が優先され、ユーザは新しい警告を作成できます。</p> <p>標準設定値：選択されている</p> <p>注：このオプションを選択すると、テンプレート・モードでの作業時に新しい警告を作成できない状態が解除されます。ただし、[テンプレートを追加、編集、または削除します]もクリアする場合を除きます。</p>
警告のテスト	<p>既存の警告定義をテストできます。このオプションは、「警告リストの表示」権限に依存します。詳細については、1241ページ「SiteScope 警告 ページ」を参照してください。</p> <p>標準設定値：選択されている</p>
警告を無期限に無効化	<p>1つ以上の警告を無期限に無効化または有効化できます。このオプションは、「警告リストの表示」権限に依存します。詳細については、1242ページ「[新規警告]/[警告の編集]ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p> <p>標準設定値：選択されている</p>
警告を一時的に無効化	<p>1つ以上の警告を一時的に無効化または有効化できます。詳細については、1242ページ「[新規警告]/[警告の編集]ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p> <p>標準設定値：選択されている</p>
レポート	
管理レポートの生成	<p>定期管理レポートを手動で作成できます。詳細については、1301ページ「管理レポート」を参照してください。</p> <p>標準設定値：選択されている</p>

UI 要素	詳細
管理レポートを追加、編集、または削除します	<p>新しいレポート定義の追加、既存のレポート定義の編集または削除ができます。詳細については、1301 ページ「管理レポート」を参照してください。</p> <p>標準設定値：選択されている</p>
クイック・レポートの生成	<p>一時的な SiteScope 管理レポートを作成できます。詳細については、1305 ページ「クイック・レポート」を参照してください。</p> <p>標準設定値：選択されている</p>
警告レポートの生成	<p>一時的なクイック警告レポートを作成できます。詳細については、1309 ページ「警告レポート」を参照してください。</p> <p>標準設定値：選択されている</p>
モニタ・サマリ・レポートの生成	<p>モニタの参照フォームおよびモニタ・サマリ・レポートを使用できます。詳細については、1307 ページ「モニタ・サマリ・レポート」を参照してください。</p> <p>標準設定値：選択されている</p>
サーバ中心のレポートを作成	<p>サーバ中心のレポートを作成できます。詳細については、1111 ページ「サーバ中心のレポート」を参照してください。</p> <p>標準設定値：選択されている</p>
リモート・サーバ	
リモート・サーバのリストを表示	<p>SiteScope で設定されているリモート・サーバのリストを表示できます。これは、リモート・サーバを編集またはテストするために必要なルート権限です。詳細については、533 ページ「リモート・サーバのプロパティ・ページ」を参照してください。</p> <p>このオプションが選択されていない場合、次のエンティティは表示されません。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [リモート サーバ] コンテキストのリモート・サーバ・ツリーおよびリモート・サーバ・ページ。 • [モニタ] コンテキストの[リモート サーバの追加]ボタン。 <p>標準設定値：選択されている</p>
リモート・サーバを追加、編集、または削除します	<p>リモート・サーバを SiteScope に追加したり、リモート・サーバ設定を編集したりできます。このオプションは、「リモート・サーバのリストを表示」権限に依存します。詳細については、533 ページ「リモート・サーバのプロパティ・ページ」を参照してください。</p> <p>標準設定値：選択されている</p>


UI 要素	詳細
リモート・サーバのテスト	<p>リモート・サーバの接続をテストできます。このオプションは、「リモート・サーバのリストを表示」権限に依存します。詳細については、533ページ「リモート・サーバのプロパティ・ページ」を参照してください。</p> <p>標準設定値：選択されている</p>
一般プリファレンス	
一般プリファレンスの表示	<p>一般プリファレンスを表示できます。これは、一般プリファレンスを編集するために必要なルート権限です。詳細については、639ページ「[一般プリファレンス] ページ」を参照してください。</p> <p>標準設定値：選択されている</p>
一般プリファレンスの編集	<p>一般プリファレンスを編集できます。このオプションは、「一般プリファレンスの表示」権限に依存します。詳細については、639ページ「[一般プリファレンス] ページ」を参照してください。</p> <p>標準設定値：選択されている</p>
インフラストラクチャ・プリファレンス	
インフラストラクチャ・プリファレンスの表示	<p>インフラストラクチャ・プリファレンスを表示できます。これは、インフラストラクチャ・プリファレンスを編集するために必要なルート権限です。詳細については、669ページ「[インフラストラクチャ・プリファレンス] ページ」を参照してください。</p> <p>標準設定値：選択されている</p>
インフラストラクチャ・プリファレンスの編集	<p>インフラストラクチャ・プリファレンスを編集できます。このオプションは、「インフラストラクチャ・プリファレンスの表示」権限に依存します。詳細については、669ページ「[インフラストラクチャ・プリファレンス] ページ」を参照してください。</p> <p>標準設定値：選択されている</p>
統合プリファレンス	
統合プリファレンスの表示	<p>統合プリファレンスを表示できます。これは、統合プリファレンスを編集するために必要なルート権限です。詳細については、711ページ「[統合プリファレンス] ページ」を参照してください。</p> <p>標準設定値：選択されている</p>
統合プリファレンスの編集	<p>統合プリファレンスを作成または編集できます。このオプションは、「統合プリファレンスの表示」権限に依存します。詳細については、711ページ「[統合プリファレンス] ページ」を参照してください。</p> <p>標準設定値：選択されている</p>
ログ・プリファレンス	

UI 要素	詳細
ログ・プリファレンスの表示	<p>ログ・プリファレンスを表示できます。これは、ログ・プリファレンスを編集するために必要なルート権限です。詳細については、742 ページ「[ログ プリファレンス] ページ」を参照してください。</p> <p>標準設定値：選択されている</p>
ログ・プリファレンスの編集	<p>ログ・プリファレンスを編集できます。このオプションは、「ログ・プリファレンスの表示」権限に依存します。詳細については、742 ページ「[ログ プリファレンス] ページ」を参照してください。</p> <p>標準設定値：選択されている</p>
電子メール、ページ、および SNMP のプリファレンス	
電子メール、ページ、HTTP および SNMP のリストを表示	<p>電子メール、ページ、HTTP および SNMP プロファイル・リストを表示できます。これは、電子メール、ページ、および SNMP のプリファレンスを編集またはテストするために必要なルート権限です。</p> <p>詳細については、631 ページ「[電子メール プリファレンス] ページ」、747 ページ「[ページ プリファレンス] ページ」、660 ページ「[HTTP プリファレンス] ページ」、および 765 ページ「[SNMP プリファレンス] ページ」を参照してください。</p> <p>標準設定値：選択されている</p>
電子メール、ページ、HTTP、SNMP のプリファレンスを追加、編集、または削除します	<p>電子メール、ページ、HTTP、および SNMP のプリファレンスを作成または編集できます。このオプションは、「電子メール、ページ、HTTP、SNMP リストを表示」権限に依存します。</p> <p>詳細については、631 ページ「[電子メール プリファレンス] ページ」、747 ページ「[ページ プリファレンス] ページ」、660 ページ「[HTTP プリファレンス] ページ」、および 765 ページ「[SNMP プリファレンス] ページ」を参照してください。</p> <p>標準設定値：選択されている</p>
電子メール、ページ、HTTP、SNMP のプリファレンスをテスト	<p>電子メール、ページ、HTTP、SNMP などの外部サービスとの通信のプリファレンス設定をテストできます。このオプションは、「電子メール、ページ、HTTP、SNMP リストを表示」権限に依存します。</p> <p>詳細については、631 ページ「[電子メール プリファレンス] ページ」、747 ページ「[ページ プリファレンス] ページ」、660 ページ「[HTTP プリファレンス] ページ」、および 765 ページ「[SNMP プリファレンス] ページ」を参照してください。</p> <p>標準設定値：選択されている</p>
共通イベント・マッピング	

UI 要素	詳細
共通イベント・マッピングの表示	<p>共通イベント・マッピングを表示できます。これは、共通イベント・マッピングを編集するために必要なルート権限です。詳細については、607ページ「共通イベント・マッピング」を参照してください。</p> <p>標準設定値：選択されている</p>
共通イベント・マッピングを追加、編集、または削除します	<p>共通イベント・マッピングを編集できます。このオプションは、「共通イベント・マッピングの表示」権限に依存します。詳細については、607ページ「共通イベント・マッピング」を参照してください。</p> <p>標準設定値：選択されている</p>
スケジュール・プリファレンス	
スケジュール・リストの表示	<p>スケジュール・プリファレンスを表示できます。これは、スケジュール・プリファレンスを編集するために必要なルート権限です。詳細については、755ページ「スケジュール・プリファレンスのユーザ・インタフェース」を参照してください。</p> <p>標準設定値：選択されている</p>
スケジュール・プリファレンスを追加、編集、または削除します	<p>スケジュール・プリファレンスを作成または編集できます。このオプションは、「スケジュール・リストの表示」権限に依存します。詳細については、755ページ「スケジュール・プリファレンスのユーザ・インタフェース」を参照してください。</p> <p>標準設定値：選択されている</p>
ユーザ管理プリファレンス	
ユーザ・プリファレンスを追加、編集、または削除します	<p>SiteScope管理者以外のユーザによるユーザ・プリファレンスの編集および削除が可能になります。パワー・ユーザは自分のアカウントを削除できません。この権限のないユーザには、[新規ユーザプロファイル]/[ユーザプロファイルの編集]ダイアログ・ボックスが読み取り専用として表示され、現在のユーザが権限を持つ設定およびルート・グループが表示されます。</p> <p>標準設定値：選択されていない</p>
資格情報のプリファレンス	
資格情報リストの表示	<p>資格情報のプリファレンスを表示できます。これは、資格情報のプリファレンスを編集するために必要なルート権限です。詳細については、625ページ「[資格情報のプリファレンス]ページ」を参照してください。</p> <p>このオプションが選択されていない場合、次のエンティティは表示されません。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [プリファレンス]コンテキストの[資格情報のプリファレンス]タブ。 • [リモート サーバ]および[モニタ]コンテキストの[資格情報の追加]ボタン。 <p>標準設定値：選択されている</p>



UI 要素	詳細
資格情報プリファレンスを追加、編集、または削除します	<p>資格情報のプリファレンスを作成、編集、または削除できます。このオプションは、「資格情報リストの表示」権限に依存します。詳細については、625 ページ「[資格情報のプリファレンス] ページ」を参照してください。</p> <p>標準設定値：選択されている</p>
証明書管理	
証明書リストの表示	<p>[証明書管理] ページを表示できます。これは、証明書管理を編集するために必要なルート権限です。詳細については、603 ページ「[証明書管理] のユーザ・インタフェース」を参照してください。</p> <p>標準設定値：選択されている</p>
証明書リストの編集	<p>証明書管理を使用して証明書を管理できます。このオプションは、「証明書リストの表示」権限に依存します。詳細については、603 ページ「[証明書管理] のユーザ・インタフェース」を参照してください。</p> <p>標準設定値：選択されている</p>
タグ	
タグの表示	<p>定義されたタグのリストを確認するための新規タグ/SiteScope タグの編集ダイアログ・ボックスを表示できます。これは、タグを編集するために必要なルート権限です。詳細については、762 ページ「[タグの検索/フィルタ] ページ」を参照してください。</p> <p>標準設定値：選択されている</p>
タグを追加、編集、または削除します	<p>検索/フィルタ・タグとタグ値を追加、編集、削除できます。このオプションは、「タグの表示」権限に依存します。詳細については、762 ページ「[タグの検索/フィルタ] ページ」を参照してください。</p> <p>標準設定値：選択されている</p>
テンプレート	
テンプレートの表示	<p>モニタ・ツリーにあるテンプレートを表示できます。これは、テンプレートを編集するために必要なルート権限です。詳細については、88 ページ「テンプレート・ツリー」を参照してください。</p> <p>標準設定値：選択されている</p>
テンプレートを追加、編集、または削除します	<p>テンプレートを追加、編集、削除できます。このオプションは、「テンプレートの表示」権限に依存します。詳細については、88 ページ「テンプレート・ツリー」を参照してください。</p> <p>標準設定値：選択されている</p>
ダッシュボード	

UI 要素	詳細
お気に入りの編集	<p>SiteScope ダッシュボード・ビューのお気に入りのビュー・リストに、項目を追加または削除できます。詳細については、1094 ページ「[ダッシュボードのお気に入りの保存] ダイアログ・ボックス」 および 1094 ページ「[ダッシュボードのお気に入りの削除] ダイアログ・ボックス」 を参照してください。</p> <p>標準設定値：選択されている</p>
レイアウトの編集	<p>ユーザは SiteScope ダッシュボードでフィールドを永久に無効にできます。たとえば、監視対象サーバの IP アドレスを特定のユーザに表示しない場合には、ダッシュボードで Target 列を永久に非表示にできます。この権限を持たないユーザは無効になっている列を見ることができません。</p> <p>標準設定値：選択されている</p>
モニタ履歴の表示	<p>モニタの最近の履歴レポートを表示できます。詳細については、1091 ページ「SiteScope ダッシュボード - [モニタ履歴] ビュー」 を参照してください。</p> <p>標準設定値：選択されている</p>
その他	
ツールを使用	<p>ツール・コンテナにある SiteScope ツールを使用して、モニタ設定に関する問題のトラブルシューティングおよび診断を行えます。詳細については、138 ページ「SiteScope ツール」 を参照してください。</p> <p>標準設定値：選択されている</p>
ログの表示	<p>警告によって送信された SiteScope モニタでレポートされた未処理のデータ、およびその他の SiteScope ログを表示できます。詳細については、1148 ページ「ログ・ファイルの使用」 を参照してください。</p> <p>標準設定値：選択されている</p>
サーバ統計の表示	<p>SiteScope サーバのパフォーマンス、安定性、状況の分析、およびボトルネックのデバッグに使用できる SiteScope の内部データを表示できます。詳細については、1145 ページ「サーバ統計の使用」 を参照してください。</p> <p>標準設定値：選択されている</p>

UI 要素	詳細
モニタ・ツールを使用	<p>特定のモニタ・タイプを設定または編集するときに SiteScope ツールを使用できます。モニタ・タイプに診断ツールが使用できる場合は、グループの詳細ページで、そのモニタのダッシュボード・ツールバーの[ツール] ボタンが有効になります。詳細については、138ページ「SiteScope ツール」を参照してください。</p> <p>注：</p> <ul style="list-style-type: none"> 診断ツールによって、機密のシステム情報が表示される場合があります。 このオプションは、「ツールを使用」権限に依存します。 <p>標準設定値：選択されている</p>
SiteScope ログ・グラバのダウンロード実行結果	<p>SiteScope ログ・グラバのダウンロード実行結果をダウンロードすることができます。SiteScope ログ・グラバ・ツールの詳細については、173ページ「SiteScope ログ・グラバ・ツール」を参照してください。</p> <p>注：SiteScope ログ・グラバの実行結果ファイルによって、エンコードされたパスワードなど、機密の設定情報が表示される場合があるため、この権限は、信頼されていないユーザには付与しません。</p>



[新規ユーザ ロール プロファイル]/[ユーザ ロール プロファイルの編集]ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、新しいユーザ・ロール・プロファイルを作成または既存のプロファイルを編集できます。

アクセス方法	<p>[プリファレンス]コンテキスト > [ユーザ管理プリファレンス]を選択します。[ユーザ管理プリファレンス]ページで、次の操作を実行します。</p> <ul style="list-style-type: none"> [新規ユーザ] ボタンの横にある矢印をクリックして、[新規ユーザ ロール]を選択する、または 既存のユーザ・ロール・プロファイルを選択して、[編集] ボタンをクリックします。
重要な情報	<p>現在のユーザまたはその他のユーザのユーザ設定および権限を作成または変更できるのは、SiteScope の管理者が「ユーザ・プリファレンスの編集」権限が付与されたユーザのみです。標準設定で、正規ユーザには「ユーザ・プリファレンスの編集」権限がありません。つまり、自分のユーザ・プロパティしか表示できません。</p>
関連タスク	<p>779ページ「SiteScope がLDAP 認証を使用するように設定する方法」</p>
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> 773ページ「ユーザ管理プリファレンスの概要」 785ページ「[ユーザ管理プリファレンス]ページ」

メイン設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
表示されたユーザ・ロール名	ユーザ・ロール・プロファイルのタイトル。タイトルはユーザのリストに表示されます。
ユーザ・ロール・コンテキスト	LDAP 認証を使用して SiteScope サービスにアクセスする時の、このユーザのセキュリティ・グループ。ユーザ・ロール・コンテキストは SiteScope が LDAP 内を検索するために使用するプロパティです。 例: uid=testuser,ou=TEST,o=this-company.com
ログインを無効にする	このユーザ名とパスワードを使用した SiteScope へのアクセスを無効にします。このユーザ・ロール・プロファイルを使用したアクセスを有効にするには、チェック・ボックスをクリアします。
許可されているグループ	このユーザ・ロール・プロファイルでアクセスできるグループのリストを表示します。新規  ボタンをクリックして[ユーザの許可されているグループを選択]ダイアログ・ボックスを開き、グループを選択します。ユーザ・インタフェースの詳細については、 803ページ「[ユーザの許可されているグループを選択]ダイアログ・ボックス」 を参照してください。 グループへのユーザ・アクセスを削除するには、グループを選択し、[削除]  ボタンをクリックします。リスト内のすべてのグループを削除することはできません。 標準設定値: すべてのグループにアクセスできるように SiteScope ノードが選択されます。 注: このフィールドは管理者の設定では表示されません。

権限

ユーザのロール権限を決定できます。権限を付与するには、権限または権限グループの左側にあるチェック・ボックスを選択します。

各権限のリストと説明については、[789ページ「\[新規ユーザプロファイル\]/\[ユーザプロファイルの編集\]ダイアログ・ボックス」](#)を参照してください。

[CSV ファイル]ダイアログ・ボックスの SiteScope LDAP ユーザの保存:

このダイアログ・ボックスによって、SiteScope 管理者は SiteScope にログオンする権限を持っているすべての LDAP ユーザのリストを CSV ファイルに保存できます。

アクセス方法	[プリファレンス]コンテキスト > [ユーザ管理プリファレンス]を選択します。[ユーザ管理プリファレンス]ツールバーで、[標準設定] > [許可された LDAP ユーザを CSV として保存]を選択します。
--------	---

重要な情報	SiteScope の管理者または「 ユーザ・プリファレンスを追加、編集、または削除します 」権限が付与されたユーザのみが、LDAP ユーザ管理設定および権限を作成または変更できます。標準設定で、正規ユーザには「 ユーザ・プリファレンスを追加、編集、または削除します 」権限がありません。つまり、自分のユーザ・プロパティしか表示できません。
関連タスク	779ページ「SiteScope がLDAP 認証を使用するように設定する方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none">773ページ「ユーザ管理プリファレンスの概要」785ページ「[ユーザ管理プリファレンス] ページ」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。







UI 要素	詳細
CSV ファイル	SiteScope にログオンできる LDAP ユーザを保存する CSV ファイル名。このファイルには、ユーザ・ロール名、LDAP グループ(ロール・コンテキスト)、およびユーザ同一属性(ログイン)の3列が含まれます。
選択	ボタンをクリックして、既存の CSV ファイルを選択する、または LDAP ユーザのリストを保存する新しいファイル名を入力します。

[ユーザの許可されているグループを選択] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、ユーザのアクセスを許可するグループ、サブグループまたは両方を選択できます。個々のグループまたはサブグループの横にあるボックスを選択して、そのグループへのアクセスを可能にします。標準設定では、すべてのグループへのアクセスが許可されています。ユーザ・アクセスをいくつかのグループに制限するには、SiteScope ノードのチェック・ボックスをクリアして、アクセスを可能にする SiteScope ノードの下のグループを個別に選択します。

アクセス方法	[プリファレンス] コンテキスト > [ユーザ管理プリファレンス] を選択します。[ユーザ管理プリファレンス] ページで、[新規ユーザ] をクリックします。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none">現在のユーザまたはその他のユーザのユーザ設定および権限を作成または変更できるのは、SiteScope の管理者か「ユーザ・プリファレンスを追加、編集、または削除します」権限が付与されたユーザのみです。標準設定で、正規ユーザには「ユーザ・プリファレンスを追加、編集、または削除します」権限がありません。つまり、自分のユーザ・プロパティしか表示できません。グループが選択されている場合は、グループの各サブグループも許可されているグループのリストに追加されます。
関連タスク	779ページ「SiteScope がLDAP 認証を使用するように設定する方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none">773ページ「ユーザ管理プリファレンスの概要」785ページ「[ユーザ管理プリファレンス] ページ」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
 SiteScope	<p>個々の SiteScope サーバを表します。</p> <p>標準設定値 : 現在のコンテナおよび選択されているすべての子要素。</p>
 	<p>SiteScope モニタ・グループまたはサブグループ(有効化されたモニタを含む, モニタを含まない, または有効化されたモニタがない)を表します。</p> <p>モニタ・グループまたはサブグループに警告が設定されている場合, グループ・アイコンの横に警告  記号が表示されます。</p> <p>モニタ・グループまたはサブグループに管理レポートが設定されている場合, グループ・アイコンの横にレポート  記号が表示されます。</p>
	<p>SiteScope モニタの適切な機能をチェックするためにデプロイされる利用可能な状況モニタの集合を表します。</p>

第42章

多言語化(I18N)環境での SiteScope の使用

本章の内容

概念

- 806ページ「多言語ユーザ(MLU)インタフェースのサポート」

タスク

- 808ページ「SiteScope の英語以外のロケールの設定方法」
- 809ページ「特定の言語での SiteScope ユーザ・インタフェースの表示方法」

参照情報

- 810ページ「多言語化がサポートされているモニタ」

812ページ「トラブルシューティングと制限事項」

多言語ユーザ(MLU)インタフェースのサポート

SiteScope ユーザ・インタフェースは、Web ブラウザで次の言語で表示できます。

言語	Web ブラウザの言語設定
ブラジル・ポルトガル語	ポルトガル語 (ブラジル)[pt-BR]
オランダ語	オランダ語 [nl]
英語	英語
フランス語	フランス語 [fr]
ドイツ語	ドイツ語 [de]
イタリア語	イタリア語 [it]
韓国語	韓国語 [ko]
日本語	日本語 [ja]
ロシア語	ロシア語 [ru]
簡体中国語	中国語 (中国)[zh-cn], 中国語 (シンガポール)[zh-sg]
スペイン語	スペイン語 [es]

SiteScope の表示方法を指定するには、ブラウザの言語設定オプションを使用します。言語設定の選択は、ユーザのローカル・マシンだけに影響があり、SiteScope マシンや同じ SiteScope へのほかのユーザ・アクセスには影響しません。ユーザ・インタフェースの表示言語の設定の詳細については、[809 ページ「特定の言語での SiteScope ユーザ・インタフェースの表示方法」](#)を参照してください。

注: 言語は SiteScope へのログイン時に決定されます。ログインした後でブラウザの言語設定を変更しても、ログアウトしてログインしなおさない限り有効にはなりません。

注意事項および制限事項

- 言語パックをインストールする必要はありません。表示されるすべての言語は SiteScope 多言語ユーザ・インタフェース(MLU)に統合されています。
- Web ブラウザの言語が変更されても、データは入力された言語で残されます。ローカル・マシンで Web ブラウザの言語を変更しても、モニタの定義および設定の言語は変更されません。
- サンプル・テンプレート、ソリューション・テンプレート、ビュー、および状況モニタなど、SiteScope インストールに含まれているエンティティの名前は英語のみです。
- インストール・ウィザードのユーザ・インタフェースではフランス語はサポートされていません。
- ユーザ・インタフェースに選択されている言語が日本語の場合、SiteScope ヘルプを日本語で表示できます。[\[このページのヘルプ\]](#)または[\[SiteScope ヘルプ\]](#)を選択すると、日本語で表示されます。この機能を有効化するには、ソフトウェア・パッチをインストールする必要があります。詳細につ

いては、[HP ソフトウェア・サポート](http://www.support.openview.hp.com) (<http://www.support.openview.hp.com>) にお問い合わせください。

- [ヘルプ] ドロップダウン・リストのほかのリンク([トラブルシューティング & ナレッジ ベース], [HP ソフトウェア サポート], [HP ソフトウェア Web サイト] など)も、選択したユーザ・インタフェース言語で表示されます。

SiteScope の英語以外のロケールの設定方法

このタスクでは、SiteScope を英語以外のロケールに設定する手順について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- 808 ページ「ロケールの版の設定変更」
- 808 ページ「新しいロケールの時間と日付の設定」
- 808 ページ「特定の言語での SiteScope ユーザ・インタフェースの表示」
- 808 ページ「結果」

1. ロケールの版の設定変更

モニタ・ツリーで、[プリファレンス] > [一般プリファレンス] > [メイン パネル] を選択します。[国際化対応版] を選択し、[保存] をクリックします。SiteScope を再起動します。これにより、SiteScope が複数の文字セットに対応するようになります。

ユーザ・インタフェースの詳細については、[メイン パネル] の 639 ページ「[一般プリファレンス] ページ」を参照してください。

2. 新しいロケールの時間と日付の設定

SiteScope の新しいロケールの時間と日付を設定できます。

- a. < SiteScope のルート・ディレクトリ > \groups\master.config をテキスト・エディタで開きます。
- b. `_localeCountry=` というエントリを見つけ、大文字 2 文字の ISO-3166 国コードを割り当てます。例: `_localeCountry=US`。国コードのリストは、http://www.chemie.fu-berlin.de/diverse/doc/ISO_3166.html で入手できます。
- c. `_localeLanguage=` というエントリを見つけ、小文字 2 文字の ISO-639 言語コードを割り当てます。例: `_localeLanguage=en`。言語コードのリストは、<http://www.ics.uci.edu/pub/ietf/http/related/iso639.txt> で入手できます。
- d. ファイルを保存し、SiteScope を再起動します。

3. 特定の言語での SiteScope ユーザ・インタフェースの表示

SiteScope ユーザ・インタフェースを表示する言語設定を選択します。

このタスクの実行方法の詳細については、809 ページ「特定の言語での SiteScope ユーザ・インタフェースの表示方法」を参照してください。

4. 結果

SiteScope が複数の外国語の文字セットに対応するように設定されます。時間と日付の設定はロケール固有の形式で表示され、ユーザ・インタフェースは外国語で表示されます。

特定の言語での SiteScope ユーザ・インタフェースの表示方法

このタスクでは、SiteScope ユーザ・インタフェースを表示する言語設定を選択する方法を説明します。

注: サポートされている言語のリストについては、[806 ページ「多言語ユーザ \(MLU\) インタフェースのサポート」](#)を参照してください。

1. ローカル・マシンに必要な言語のフォントがインストールされていない場合はインストールします。フォントがインストールされていない言語を Web ブラウザで選択すると、SiteScope ユーザ・インタフェースでは、ローカル・マシンの標準設定の言語が使用されます。

たとえば、ローカル・マシンの標準設定の言語が英語である場合に、日本語を使用するように Web ブラウザを設定するとします。日本語のフォントがローカル・マシンにインストールされていない場合、SiteScope ユーザ・インタフェースは英語で表示されます。
2. Internet Explorer を使用する場合、ローカル・マシンで Web ブラウザを次のように設定します。
 - a. SiteScope のユーザ・インタフェースを表示する言語を選択します。詳細については、<http://support.microsoft.com/kb/306872/ja-jp> を参照してください。
 - b. 手順 4 に進みます。
3. FireFox を使用する場合、ローカル・マシンで Web ブラウザを次のように設定します。
 - a. [ツール] > [オプション] > [詳細]を選択します。[言語を編集]をクリックします。[言語]ダイアログ・ボックスが開きます。
 - b. SiteScope を表示する言語を選択します。

使用する言語がダイアログ・ボックスにない場合は、[追加する言語を選択...]リストを展開して[追加]をクリックします。
 - c. [上へ移動]をクリックして、選択した言語を最初の行に移動します。
 - d. [OK]をクリックして設定を保存し、[言語]ダイアログ・ボックスを閉じます。
4. SiteScope ウィンドウ上部の[ログアウト]をクリックします。SiteScope が更新され、選択した言語でユーザ・インタフェースが表示されます。

多言語化がサポートされているモニタ

次のモニタは多言語化がサポートされています。認定されているモニタは、アスタリスク(*)で示しています。

Windows オペレーティング・システムでサポートされているモニタ

- *CPU モニタ
- データベース・カウンタ・モニタ
- *データベース・クエリ・モニタ
- *ディスク容量 モニタ
- *DNS モニタ
- *e ビジネス・トランザクション・モニタ
- *ファイル・モニタ
- *FTP モニタ
- リンク・チェック・トランザクション・モニタ
- *ログ・ファイル・モニタ
- *メモリ・モニタ
- Microsoft IIS サーバ・モニタ
- Microsoft SQL Server モニタ
- Microsoft Windows イベント・ログ・モニタ
- Microsoft Windows パフォーマンス・カウンタ・モニタ
- Microsoft Windows リソース・モニタ
- Oracle 9i アプリケーション・サーバ・モニタ
- *Oracle 10g アプリケーション・サーバ・モニタ
- *Oracle データベース・モニタ
- *Ping モニタ
- *ポート・モニタ
- *スクリプト・モニタ
- *サービス・モニタ
- SNMP モニタ
- SNMPトラップ・モニタ
- UDDI モニタ
- *URL モニタ
- URL 内容 モニタ

- URL リスト・モニタ
- URL シーケンス・モニタ
- *VMware パフォーマンス・モニタ
- Web スクリプト・モニタ

UNIX オペレーティング・システムでサポートされているモニタ

- CPU モニタ
- データベース・クエリ・モニタ
- ディスク容量 モニタ
- ログ・ファイル・モニタ
- ポート・モニタ
- スクリプト・モニタ
- サービス・モニタ
- UNIX リソース・モニタ
- URL モニタ
- URL 内容 モニタ
- URL シーケンス・モニタ

トラブルシューティングと制限事項

本項では、多言語環境で SiteScope を使用する作業に関連する次の問題のトラブルシューティングと制限事項について説明します。

- 812 ページ「I18N 環境の SiteScope を使用する場合の一般的な制限事項」
- 812 ページ「データベース環境に関する問題」
- 812 ページ「リモート UNIX サーバが英語のロケールに設定されていない場合のトラブルシューティング」

I18N 環境の SiteScope を使用する場合の一般的な制限事項

- ユーザ名、パスワード、および URL は必ず英語の文字になります。
- SiteScope がインストールされているマシン (SiteScope マシン) と監視対象マシンのロケールを同じにする必要があります。標準設定のロケールは英語です。
- SiteScope マシンでは、英語と英語以外のロケールを使用できます。たとえば、監視対象マシンでドイツ語のロケールがサポートされている場合、SiteScope マシンではドイツと英語がサポートされます。英語以外のロケールの設定の詳細については、808 ページ「SiteScope の英語以外のロケールの設定方法」を参照してください。
- Web スクリプト・モニタをデプロイする場合、スクリプト名とトランザクション名も英語の文字にする必要があります。
- Red Hat ES4 のスクリプト・モニタでは、英語以外の言語のパラメータはサポートされていません。
- SiteScope は、リモート UNIX マシンから取得された日付の解析に常に「en_US」ロケールを使用します (たとえば、ファイル・モニタの実行中など)。UNIX マシンの標準設定のロケールが en_US でない場合、このマシンの UNIX リモートの定義で [シェル環境の初期化] フィールドに「`LANG=C; export LANG`」が含まれている必要があります。
- SiteScope 管理レポートでは英語以外のラベルはサポートされていません。

データベース環境に関する問題

- Oracle データベースで新規の Oracle インスタンスを作成する場合は、インスタンスの文字セットを指定する必要があります。データ・ディクショナリ内のデータを含め、文字データはすべてインスタンスの文字セットを使って格納されます。
- データベース・クエリ・モニタが Oracle データベースに接続するには、Oracle のユーザ名とパスワードが英字のみを含んでいる必要があります。

リモート UNIX サーバが英語のロケールに設定されていない場合のトラブルシューティング

- 標準設定で英語ロケールまたは英語言語に設定されていない UNIX リモート・サーバを使用すると、ファイル・モニタとディレクトリ・モニタで問題が発生する可能性があります。**回避策**：問題のある UNIX リモート・サーバの [シェル環境の初期化] プロパティに「`LANG=C; export LANG`」を追加します。

第43章

SiteScope へのログインのための認証方法の設定

本章の内容

概念

- 814ページ「認証方法の概要」

タスク

- 815ページ「SiteScope にログオンするための認証方法の設定方法」

認証方法の概要

SiteScope の認証は認証方法の概念に基づいています。各方法は特定の認証サービスに照らし合わせて認証を処理します。常に SiteScope で設定できる認証サービスは 1 つだけです。

SiteScope にログオンするための標準設定の認証方法は SiteScope 内蔵認証サービスです。ログイン・ページで SiteScope のユーザ名とパスワードを入力すると、資格情報が SiteScope によって保管および検証されます。

SiteScope は、シングル・サインオン(SSO)をサポートしています。これは、一度ログオンしたユーザであれば、再びログオンせずに複数のソフトウェア・システムのリソースにアクセスできるようにするアクセス制御方法の 1 つです。設定されたソフトウェア・システムのグループに属するアプリケーションは、認証されていることを信用しているため、アプリケーションから別のアプリケーションに移動するときにさらに認証処理を行う必要がありません。

SiteScope は、次の SSO 認証方法をサポートします。

- **ライトウェイト・シングル・サインオン(LW-SSO):** これは SiteScope の標準設定のシングル・サインオン認証方法です。LW-SSO は、SiteScope に組み込まれており、認証処理を行う外部マシンは不要です。SiteScope のインストール後、LW-SSO を使用して統合されているすべての HP ソフトウェア・アプリケーションについて、標準設定のパスフレーズ文字列を直ちに変更する必要があります。SiteScope の SSO 標準設定値の変更の詳細については、[815 ページ「SiteScope にログオンするための認証方法の設定方法」](#)を参照してください。

LW-SSO の使用に関する制限事項、セキュリティの警告、一般的な参照情報については、[816 ページ「Lightweight シングル・サインオン認証\(LW-SSO\) - 一般的な参照」](#)を参照してください。

- **Lightweight Directory Access Protocol(LDAP):** Lightweight Directory Access Protocol (LDAP)を使用して認証を設定できます。これによって認証情報(ユーザ名とパスワード)を保管するために外部の LDAP サーバを使用できます。SiteScope は LDAP サーバを使用してユーザの資格情報を検証します。ユーザ管理プリファレンスを使用して LDAP 認証を有効または無効にします。詳細については、[776 ページ「LDAP 認証と承認」](#)を参照してください。

SiteScope にログオンするための認証方法の設定方法

次の手順は SiteScope にログオンするための認証方法を設定する方法を説明します。

SiteScope の Lightweight Single Sign-On 文字列の変更方法

SiteScope のインストール後、LW-SSO を使用して統合されているすべての HP ソフトウェア・アプリケーションについて、標準設定のパスフレーズ文字列を直ちに変更する必要があります。

- SiteScope 以外のアプリケーションでは、`lwssofmconf.xml` ファイルを見つけて、そのファイルの値を直接変更します。
- SiteScope では、< SiteScope のルート・ディレクトリ > \conf\lwssol\lwssofmconf.xml ファイルで (サービスの初回読み込みの前のみ) 直接変更できます。[プリファレンス] > [一般プリファレンス] > [LW SSO 設定] > [通信セキュリティパスフレーズ] で値を変更することもできます。

SiteScope が LDAP 認証を使用できるようにする方法 - オプション

概念の詳細については、[776 ページ「LDAP 認証と承認」](#)を参照してください。

タスクの詳細については、[779 ページ「SiteScope が LDAP 認証を使用するように設定する方法」](#)を参照してください。

第44章

Lightweight シングル・サインオン認証 (LW-SSO) - 一般的な参照

本章の内容

概念

- 817ページ「LW-SSO 認証の概要」

参照情報

- 818ページ「LW-SSO のシステム要件」
- 819ページ「LW-SSO のセキュリティに関する警告」

821ページ「トラブルシューティングおよび制限事項」

LW-SSO 認証の概要

LW-SSO は、一度ログオンしたユーザであれば、再びログオンせずに複数のソフトウェア・システムのリソースにアクセスできるようにするアクセス制御方法の 1 つです。設定されたソフトウェア・システムのグループに属するアプリケーションは、認証されていることを信用しているため、アプリケーションから別のアプリケーションに移動するときにさらに認証処理を行う必要がありません。

本項の情報は、LW-SSO バージョン 2.4 に適用されます。

本項の内容

- [817 ページ「LW-SSO トークンの期限」](#)
- [817 ページ「LW-SSO トークンの期限の推奨設定」](#)
- [817 ページ「GMT 時間」](#)
- [817 ページ「マルチドメイン機能」](#)
- [817 ページ「URL 機能のセキュリティ・トークンの取得」](#)

LW-SSO トークンの期限

LW-SSO トークンの期限の数値により、アプリケーションのセッションの有効性が判断されます。そのため、期限の数値は、アプリケーションのセッション期限の数値と同じか、またはそれよりも大きな値にする必要があります。

LW-SSO トークンの期限の推奨設定

LW-SSO を使用するアプリケーションごとに、トークンの期限を設定する必要があります。推奨値は 60 分です。高度なセキュリティを必要としないアプリケーションの場合、値を 300 分に設定できます。

GMT 時間

LW-SSO に統合されているアプリケーションでは、すべて同じ GMT 時間を使用し、最大誤差を 15 分に抑える必要があります。

マルチドメイン機能

マルチドメイン機能では、LW-SSO 統合に含まれるアプリケーションを、別の DNS ドメインのアプリケーションに統合する必要がある場合、それらすべてのアプリケーションで `trustedHosts` (または `protectedDomains`) を設定する必要があります。さらに、設定の `lwssso` 要素に正しいドメインを追加する必要があります。

URL 機能のセキュリティ・トークンの取得

ほかのアプリケーションの URL に対するセキュリティ・トークンとして送信された情報を取得するには、ホスト・アプリケーション設定の `lwssso` 要素で、正しいドメインを設定する必要があります。

LW-SSO のシステム要件

次の表に、LW-SSO の設定要件を示します。

アプリケーション	バージョン	コメント
Java	1.5 以上	
HTTP サーブレット API	2.1 以上	
Internet Explorer	6.0 以上	ブラウザで、HTTP セッション cookie と HTTP 302 リダイレクト機能を有効にする必要あり
FireFox	2.0 以上	ブラウザで、HTTP セッション cookie と HTTP 302 リダイレクト機能を有効にする必要あり
Jboss 認証	Jboss 4.0.3 Jboss 4.3.0	
Tomcat 認証	Standalone Tomcat 6.0.29	
Acegi 認証	Acegi 0.9.0 Acegi 1.0.4	
Spring Security 認証	Spring Security 2.0.4	
Web サービス・エンジン	Axis 1 - 1.4 Axis 2 - 1.2 JAX-WS-RS 2.1.1	

LW-SSO のセキュリティに関する警告

本項では、LW-SSO 設定に関するセキュリティの警告について説明します。

- **LW-SSO の `initString` 機密パラメータ**: LW-SSO では、対称暗号化方式を使用して LW-SSO トークンを検証、作成します。設定内にある `initString` パラメータは、秘密鍵の初期化に使用します。アプリケーションでトークンが作成され、同じ `initString` パラメータを使用するアプリケーションにより、トークンが検証されます。

注意:

- `initString` パラメータの設定を行わずに LW-SSO を使用することはできません。
 - `initString` パラメータは機密情報なので、公開、転送、永続性などの点で慎重に扱う必要があります。
 - `initString` パラメータは、LW-SSO を使用して相互に統合されたアプリケーション間でのみ共有する必要があります。
 - `initString` パラメータは 12 文字以上の長さにする必要があります。
- **必要な場合のみ LW-SSO を有効化**: 特に必要な場合を除き、LW-SSO を無効にする必要があります。
 - **認証セキュリティのレベル**: 最も弱いタイプの認証フレームワークを使用し、ほかの統合アプリケーションで信頼されている LW-SSO トークンを発行するアプリケーションにより、アプリケーション全体の認証セキュリティレベルが決まります。

強力で安全な認証フレームワークを使用するアプリケーションの場合のみ、LW-SSO トークンを発行することをお勧めします。

- **対称暗号化方式の意味**: LW-SSO では、対称暗号化方式を使用して LW-SSO トークンを発行、検証します。そのため、LW-SSO を使用するアプリケーションから、同じ `initString` パラメータを共有する、その他すべてのアプリケーションに信頼されたトークンを発行できます。`initString` を共有するアプリケーションが、信頼されていない場所に置かれているか、またはそのような場所からアクセスできる場合、リスクが発生する場合があります。
- **ユーザ・マッピング(同期)**: LW-SSO フレームワークでは、統合アプリケーション間のユーザ・マッピングが保証されていません。そのため、統合アプリケーションでユーザ・マッピングを監視する必要があります。すべての統合アプリケーションで、同じユーザ・レジストリ(LDAP/AD など)を共有することをお勧めします。

ユーザのマッピングに失敗すると、セキュリティ違反が発生し、さまざまなアプリケーションの複数ユーザに同じユーザ名が割り当てられるなど、アプリケーションの動作不良が発生する場合があります。

さらに、あるアプリケーション(AppA)にユーザがログオンしてから、コンテナ認証またはアプリケーション認証を使用する別のアプリケーション(AppB)にアクセスすると、ユーザのマッピングに失敗した場合に、ユーザが手動で AppB にログオンし、ユーザ名を入力する必要があります。ユーザが AppA へのログオンに使用していたのとは別のユーザ名を入力した場合、次のような動作が発生する場合があります。その後ユーザが AppA または AppB から第 3 のアプリケーション(AppC)にアクセスすると、AppA または AppB へのログオンに使用していたユーザ名で、AppC にアクセスしてしまいます。

- **ID マネージャ**: 認証目的で使用する場合、ID マネージャの保護されていないリソースは、すべて LW-SSO の `nonsecureURLs` 設定により構成する必要があります。

- **LW-SSO デモ・モード :**

- このデモ・モードは実証目的のみに使用します。
- デモ・モードはセキュリティが確保されていないネットワークでのみ使用してください。
- デモ・モードは実運用環境では使用しないでください。デモ・モードと実運用モードを組み合わせで使用しないでください。

トラブルシューティングおよび制限事項

本項では、LW-SSO 認証のトラブルシューティングと制限事項について説明します。

- [821 ページ「既知の問題」](#)
- [821 ページ「制限事項」](#)

既知の問題

本項では、LW-SSO 認証の既知の問題について説明します。

- **セキュリティ・コンテキスト** : LW-SSO のセキュリティ・コンテキストでは、1 つの属性名につき 1 つの属性値のみがサポートされています。

そのため、SAML2 トークンから、同じ属性名の値が複数送信されても、LW-SSO フレームワークで許可される値は 1 つのみです。

同様に、IdM トークンから同じ属性名の値が複数送信されるよう設定されていても、LW-SSO フレームワークで許可される値は 1 つのみです。

- **Internet Explorer 7 を使用したマルチドメインのログアウト機能** : 次の状況では、マルチドメインのログアウトに失敗する場合があります

ブラウザに Internet Explorer 7 を使用していて、アプリケーションのログアウト手順で、3 回連続 HTTP 302 リダイレクトの動作が呼び出される。

この場合、Internet Explorer 7 で HTTP 302 リダイレクトの応答が正しく処理されず、[**Internet Explorer ではこのページは表示できません**]というエラー・ページが表示される場合があります。

回避策として推奨されるのは、アプリケーションのログアウト手順で、できるだけリダイレクト・コマンドの数を少なくすることです。

制限事項

LW-SSO 認証を使って作業する場合は次の制限事項に注意してください。

- **アプリケーションへのクライアント・アクセス** :

ドメインが LW-SSO 設定で定義されている場合 :

- アプリケーション・クライアントは、ログイン URL で FQDN(完全修飾ドメイン名)を持つアプリケーション(例 : `http://myserver.companydomain.com/WebApp`)にアクセスする必要があります。
- LW-SSO では、IP アドレスによる URL(`http://192.168.12.13/WebApp` など)はサポートされていません。
- LW-SSO では、ドメインなしの URL(`http://myserver/WebApp` など)はサポートされていません。

ドメインが LW-SSO 設定で定義されていない場合 : ログイン URL に FQDN がない場合、クライアントはアプリケーションにアクセスできません。この場合、LW-SSO セッション cookie はドメイン情報なしで単一のマシン専用で作成されます。そのため、cookie はブラウザによってほかの cookie に委任されないで、同一の DNS ドメインにあるほかのコンピュータに渡されません。つまり、同一ドメインでは LW-SSO が機能しません。

- **LW-SSO フレームワークの統合** : アプリケーションで LW-SSO の機能を活用できるのは、あらかじめ LW-SSO フレームワーク内に統合されている場合のみです。
- **マルチドメインのサポート** :

- マルチドメイン機能は、HTTP リファラに基づいています。そのため LW-SSO では、アプリケーション間のリンクはサポートされていますが、2 つのアプリケーションが同じドメインにある場合を除き、ブラウザ・ウィンドウへの URL の入力はサポートされていません。

- 最初のクロスドメイン・リンクに **HTTP POST** を使用することはサポートされていません。

マルチドメイン機能では、最初のアプリケーションから 2 番目のアプリケーションへ **HTTP POST** を要求することはサポートされていません(**HTTP GET** 要求のみサポートされています)。たとえば、最初のアプリケーションから 2 番目のアプリケーションへの HTTP リンクがある場合、**HTTP GET** 要求はサポートされていますが、**HTTP FORM** 要求はサポートされていません。2 回目以降の要求は、すべて **HTTP POST** か **HTTP GET** のいずれかです。

- LW-SSO トークンのサイズ:

LW-SSO が、あるドメインのアプリケーションから別のドメインのアプリケーションに転送できる情報量は、15 グループ/ロール/属性までに制限されています(各項目は平均 15 文字長)。

- マルチドメイン・シナリオでの、保護されたページ(HTTPS)から保護されていないページ(HTTP)へのリンク:

保護されたページ(HTTPS)から保護されていないページ(HTTP)にリンクする場合、マルチドメインは機能しません。これはブラウザの制限事項の 1 つです。この場合、保護されたリソースから保護されていないリソースにリンクするときに、Referer ヘッダが送信されません。具体例については、次の URL を参照してください。 <http://support.microsoft.com/support/kb/articles/Q178/0/66.ASP>

- サードパーティ cookie の Internet Explorer での動作:

Microsoft Internet Explorer 6 には、P3P(Platform for Privacy Preferences)プロジェクトをサポートするモジュールが含まれています。そのため、サードパーティ・ドメインの cookie は、標準設定で [インターネット] セキュリティ・ゾーンでブロックされています。IE では、セッションの cookie もサードパーティ cookie とみなされるため、セッションの cookie もブロックされてしまい、LW-SSO が機能しません。

この問題を解決するには、起動したアプリケーション(または *.mydomain.com などの DNS ドメイン・サブセット)を、コンピュータの [ローカル イントラネット] または [信頼済みサイト] ゾーンに追加します(Microsoft Internet Explorer の場合、メニューから [ツール] > [インターネット オプション] > [セキュリティ] > [ローカル イントラネット] > [サイト] > [詳細設定] をクリックします)。こうすることで、cookie が許可されます。

注意: LW-SSO のセッション cookie は、ブロックされているサードパーティ・アプリケーションで使用する cookie の 1 つにすぎません。

- **SAML2 トークン:**

- SAML2 トークンを使用する場合、ログアウト機能がサポートされません。

そのため、SAML2 トークンを使用して 2 番目のアプリケーションにアクセスすると、ユーザが最初のアプリケーションからログアウトしても 2 番目のアプリケーションからログアウトされません。

- SAML2 トークンの期限切れは、アプリケーションのセッション管理に反映されません。

そのため、SAML2 トークンを使用して 2 番目のアプリケーションにアクセスする場合、各アプリケーションのセッション管理は個別に処理されます。

- **JAAS Realm:** Tomcat の JAAS Realm はサポートされていません。

- **Tomcat ディレクトリでのスペースの使用** : Tomcat ディレクトリでのスペースの使用はサポートされていません。

Tomcat のインストール・パス(フォルダ)にスペースが含まれている場合 ([Program Files] など), および LW-SSO 設定ファイルが Tomcat の **common\classes** フォルダに置かれている場合, LW-SSO を使用できません。

- **ロード・バランサの設定** : LW-SSO によりデプロイされたロード・バランサは, セッション維持を使用するよう設定する必要があります。
- **デモ・モード** : デモ・モードでは, LW-SSO は, アプリケーション間のリンクはサポートされていますが, ブラウザ・ウィンドウへの URL の入力はサポートされていません。これは, この場合, HTTP リファラ・ヘッダがないためです。

第7部分

ユーザ定義のテンプレート

第45章

SiteScope テンプレート

本章の内容

概念

- 826ページ「SiteScope テンプレートの概要」
- 828ページ「テンプレートについて」
- 831ページ「テンプレート例」
- 832ページ「テンプレートの計画」
- 833ページ「テンプレート変数を使った作業」
- 837ページ「モニタ・テンプレートのカウンタ選択」

タスク

- 840ページ「テンプレートを使用した SiteScope 監視ソリューションの設定方法」
- 847ページ「既存の設定のコピーによるテンプレートの作成方法」
- 848ページ「正規表現を使用するためのカウンタ選択文字列の変更方法」

参照情報

- 849ページ「予約済みテンプレート・グループ・タイプ」
- 850ページ「SiteScope テンプレートのユーザ・インタフェース」

SiteScope テンプレートの概要

テンプレートによって、サーバ、アプリケーション、データベース、ネットワーク環境など、企業内のさまざまな IT 要素の監視を標準化するエンタープライズ・ソリューションを提供します。インフラストラクチャ内にある、同じような特性を持つシステムをチェックする一連のモニタを迅速にデプロイするには、テンプレートを使用します。

SiteScope は次のタイプのテンプレートを提供します。

- ユーザ定義のテンプレート(本章で説明)。
- 定義済みのソリューション・テンプレート。詳細については、927ページ「[SiteScope ソリューション・テンプレート](#)」を参照してください。
- モニタ・デプロイメント・ウィザード・テンプレート。詳細については、BSM ヘルプの『システム可用性管理の使用』の「[モニタ・デプロイメント・ウィザードのテンプレートと変数](#)」を参照してください。

SiteScope テンプレート使用の利点

- 組織の要件に合わせて独自のテンプレートを作成およびカスタマイズできます。
- SiteScope テンプレートは、一連のモニタ・タイプや設定を1つの構造にまとめて標準化するために使用します。この構造を、監視対象環境の複数の要素を対象とするモニタのグループとして、繰り返しデプロイできます。
- テンプレートを使用することで、グループ、モニタ、警告、リモート・サーバ、設定のデプロイメントを1回の操作で実行できるため、企業全体へのモニタのデプロイメント時間が短縮されます。
- テンプレートによって、実際の監視対象デプロイメントがテンプレートに定義されている標準化されたデプロイメントにどの程度準拠しているかを表示できます。これにより、監視対象環境に発生した変化は監視側のインフラストラクチャで迅速に更新されます。また、監視側のインフラストラクチャでは、テンプレートの標準セットへの準拠が維持されます。
- 各テンプレートを個別にデプロイする代わりに複数のテンプレートを同時にデプロイできます。また、SiteScope ユーザ・インタフェースの外側で CSV ファイルを使用することで、同じテンプレートの一括デプロイメントを実行することもできます。テンプレートのデプロイのさまざまな方法については、876ページ「[SiteScope テンプレートのデプロイの概要](#)」を参照してください。CSV ファイルを使用したテンプレートのデプロイの詳細については、877ページ「[CSV ファイルを使用したテンプレートのデプロイ](#)」を参照してください。
- サイレント・テンプレート・デプロイメントを使用してデプロイメント要求を送信し、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。テンプレート・デプロイメント要求は、キューに入れられ、バックグラウンドで処理されます。キュー内のすべての要求が完了する前に SiteScope が再起動された場合、再起動後にデプロイメントの処理が自動的に続行されます。
- テンプレート変更適用ウィザードを使用すると、テンプレートを変更し、その変更をテンプレートによってデプロイされたすべての SiteScope オブジェクトに適用できます。しきい値の変更や、新しいモニタや警告が必要になるなど、テンプレート・オブジェクトに変更が必要な場合、テンプレートを1回更新すれば、各オブジェクトを個別に更新せずに変更をすべてのデプロイ済みグループに適用できます。詳細については、889ページ「[ユーザ定義テンプレート変更の適用](#)」を参照してください。

- ほかの SiteScope インストールで使 用 できるようにテンプレートをエクスポートおよびインポートできます。これにより、標準化されたモニタ設定を企業全体で複製できます。詳細については、[867 ページ「テンプレートのインポートまたはエクスポート」](#)を参照してください。
- [HP Live Network](#) にテンプレートをパブリッシュすることによって、ほかの SiteScope ユーザとテンプレートを共有できます。詳細については、[195 ページ「HP Live Network およびコンテンツ共有の概要」](#)を参照してください。

テンプレートについて

テンプレートは、事前定義したパターンと設定に従ってグループ、サーバ、モニタ、警告を再現するために使用するオブジェクトです。テンプレートを SiteScope 階層内の場所にコピーすることで、テンプレートに定義された項目のすべてを 1 回の操作でデプロイできます。また、テンプレート変数を使用して特定のモニタ、サーバ、警告の設定をテンプレートのデプロイ時に対話形式で行うこともできます。テンプレートを作成したら、必要に応じて何回でもモニタのデプロイに使用できます。

次の方法は、作成したテンプレートに設定を追加する場合に使用します。

- 既存のグループとモニタ階層を SiteScope からテンプレートにコピーし、それらの要素をテンプレートとして使用できるように編集します。詳細については、[847ページ「既存の設定のコピーによるテンプレートの作成方法」](#)を参照してください。
- 手動でテンプレート内にテンプレート・グループ、モニタ、サーバ、警告を作成します(社内に SiteScope の適切なモニタ要素がない場合、または新しいオブジェクトや設定を作成する場合)。詳細については、[840ページ「テンプレートを使用した SiteScope 監視ソリューションの設定方法」](#)を参照してください。

ヒント:

- SiteScope 監視がまだ設定されておらず、SiteScope モニタとグループを使った作業に慣れていない場合は、テンプレートを作成する前にサンプルのグループ、モニタ、警告を設定します。これにより、モニタの設定とモニタ、グループ、警告間の関係を理解することができます。その後、SiteScope から構造をコピーし、設定をテンプレートに変換できます。
- テンプレートの作業を開始しやすいように、SiteScope には Windows と UNIX の環境を監視するためのテンプレート例が付属されています。詳細については、[831ページ「テンプレート例」](#)を参照してください。

本項の内容

- [828ページ「テンプレートの要素と機能」](#)
- [829ページ「テンプレート・オブジェクト」](#)

テンプレートの要素と機能

テンプレートは、テンプレート・ビューでテンプレート・コンテナ内に作成します。作成した要素はテンプレート・ツリーに表示され、変更やデプロイメントの際にアクセスできます。詳細については、[828ページ「テンプレートについて」](#)を参照してください。

テンプレートを使用して、標準化した監視パターンをインフラストラクチャの複数の要素にデプロイできます。テンプレートには複数のオブジェクト・タイプを追加できるため、テンプレートを効果的にデプロイして使用するには計画が必要です。詳細については、[832ページ「テンプレートの計画」](#)を参照してください。

テンプレートを作成するには、グループ、リモート・サーバ定義、モニタ、警告、変数をテンプレートに追加して設定します。テンプレート変数は、テンプレートをデプロイするたびに動的または対話的に変更する設定値の置換マーカとして使用します。変数の作成と参照は、各テンプレートで独自に行います。詳細については、[833ページ「テンプレート変数を使った作業」](#)を参照してください。

一部の SiteScope モニタ・タイプでは、測定カウンタ・ブラウザ機能を使用して、監視で使用するメトリックスがあるかどうかアプリケーションとシステムを動的に照会します。これらのモニタのいずれかを手

動で作成する場合、複数ステップからなる手順を使用してカウンタを表示および選択します。テンプレートをデプロイするときのカウンタの選択には、別の方法を使用します。詳細については、[848ページ「正規表現を使用するためのカウンタ選択文字列の変更方法」](#)を参照してください。

テンプレートを作成、設定した後で、SiteScope 階層にデプロイします。テンプレートのデプロイの詳細については、[845ページ「テンプレートのデプロイ」](#)を参照してください。その後、ソース・テンプレートを変更する場合、テンプレート変更適用ウィザードを使用すると、テンプレートによってデプロイされたすべての SiteScope オブジェクトに変更を自動的に適用できます。テンプレートの更新の詳細については、[890ページ「テンプレート・デプロイメントの更新」](#)を参照してください。

ほかの SiteScope インストールでテンプレートを使用する場合、テンプレートをファイルに保存し、エクスポート・ファイルをほかの SiteScope サーバにコピーして、使用するテンプレートが含まれるテンプレート・コンテナ・オブジェクトをインポートします。テンプレートのエクスポートおよびインポートの詳細については、[867ページ「テンプレートのインポートまたはエクスポート」](#)を参照してください。



注:

- SiteScope テンプレートの内部プロパティの設定の詳細については、[HP Software Self-solve Knowledge Base\(h20230.www2.hp.com/selfsolve/documents\)](http://h20230.www2.hp.com/selfsolve/documents)を参照してください。技術情報を利用するには、HP パスポート ID を使ってログオンする必要があります。
- テンプレートの操作時に SiteScope API を使用することもできます。詳細については、[43ページ「SiteScope 設定 API の使用」](#)を参照してください。

テンプレート・オブジェクト

テンプレートは、テンプレート・ツリーのテンプレート・コンテナ内に作成され、保存されます。テンプレートを使用して設定できるテンプレート変数定義と SiteScope オブジェクトは、テンプレート内にオブジェクトとして表示されます。

次の表では、テンプレートで使用するオブジェクトについて説明します。

アイコン	オブジェクト・タイプ	詳細
	テンプレート・コンテナ	テンプレート・コンテナでは、テンプレート監視ソリューションを管理できます。テンプレートは、テンプレート・コンテナにのみ追加できます。このオブジェクトの設定の詳細については、 853ページ「[新規テンプレート コンテナ]ダイアログ・ボックス」 を参照してください。
	テンプレート	テンプレートには、テンプレート監視ソリューションを構成する SiteScope グループ、モニタ、リモート・サーバ、変数定義、警告が含まれています。このオブジェクトの設定の詳細については、 854ページ「[新規テンプレート]ダイアログ・ボックス」 を参照してください。

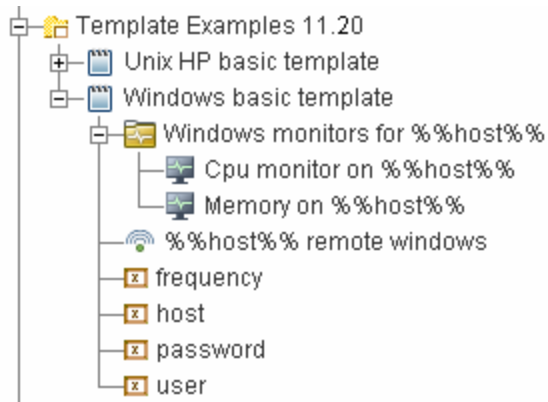
アイコン	オブジェクト・タイプ	詳細
	テンプレート変数	変数を使用して、テンプレートのデプロイ時にユーザ入力を促すメッセージを表示します。テンプレート変数は、ユーザ定義または事前定義されたシステム変数です。このオブジェクトの設定の詳細については、 856ページ「[新規変数]ダイアログ・ボックス」 を参照してください。
	テンプレート・リモート・サーバ	テンプレート・リモート・サーバを使用して、テンプレートのデプロイ時に作成される Windows または UNIX のリモート・サーバ・プリファレンスを定義します。このオブジェクトの設定の詳細については、 858ページ「[新規テンプレート リモート サーバ]ダイアログ・ボックス」 を参照してください。
	テンプレート・グループ	テンプレート・グループには、テンプレート・モニタと、関連付けられた警告が含まれます。テンプレート・グループを使用して、モニタおよび関連付けられた警告のインフラストラクチャへのデプロイメントを管理します。このオブジェクトの設定の詳細については、 859ページ「[新規テンプレート グループ]ダイアログ・ボックス」 を参照してください。
	テンプレート・モニタ	テンプレート・モニタを使用して、テンプレートのデプロイ時に作成されるモニタを定義します。このオブジェクトの設定の詳細については、 863ページ「[新規テンプレート モニタ]ダイアログ・ボックス」 を参照してください。
	テンプレート警告	テンプレート警告を使用して、テンプレートのデプロイ時に作成されるグループおよびモニタに関する警告を定義します。テンプレート・モニタまたはグループに警告が設定されている場合、そのモニタまたはグループ・アイコンの横に警告記号が表示されます。このオブジェクトの設定の詳細については、 865ページ「[新規警告]ダイアログ・ボックス」 を参照してください。

テンプレート例

SiteScope には、Windows と UNIX の環境で監視するためのテンプレート例が付属しています。これらのテンプレートは、テンプレート・ツリーの[**Template Examples**]フォルダから使用できます。テンプレート例を使用して、SiteScope テンプレートの使用方法を習熟できます。また、テンプレート例を使用して次のことを確認できます。

- テンプレート・グループ、モニタ、リモート・サーバの使用方法
- テンプレート・リモート・サーバとそれを使用するモニタ間の接続
- 変数値の使用法とシステム変数の使用法

次の例は、[**Windows basic template**]を示しています。テンプレートには、テンプレート・グループである[**Windows monitors for %%host%%**]、2つのテンプレート・モニタ(CPU、メモリ)、4つのユーザー定義変数(ホスト、ユーザ、パスワード、頻度)、テンプレート・リモート・サーバが含まれています。



テンプレートの計画

SiteScope を効果的に管理するには、テンプレートの計画が重要になります。テンプレート構造内でのグループとモニタの関係とプロパティ、また、それを監視環境全体にどのように適合させるかを考慮する必要があります。

テンプレートを計画する際の考慮事項を次に示します。

オブジェクト	考慮事項
可変プロパティ	テンプレートのデプロイメントに応じて変わるモニタ設定プロパティを決定します。たとえば、監視対象のサーバ・アドレスやリソースは一般的な可変プロパティです。グループとモニタに使用する命名規則も考慮する必要があります。テンプレートをデプロイするたびに可変プロパティの値を入力または選択するには、テンプレート変数を使用します。変数を使用して設定できないモニタ設定プロパティもあります。詳細については、 833 ページ「テンプレート変数を使った作業」 を参照してください。
サーバ	監視対象サーバにするサーバを決定します。これは、監視対象のオブジェクトが存在する場所です。テンプレート・サーバは、テンプレートのデプロイ時に自動的に複製されます。リモート・サーバ・ツリーの[Microsoft Windows リモートサーバ]または[UNIX リモートサーバ]コンテナで手動で定義することもできます。詳細については、 524 ページ「リモート・サーバの概要」 を参照してください。
モニタ・タイプ	テンプレートを使用して複製するモニタ・タイプを決定します。これは、複数のシステムを監視するモニタ・タイプである必要があります。たとえば、CPU、ディスク、メモリ、サービスの各モニタ・タイプは、一般的にインフラストラクチャのサーバごとにデプロイされます。テンプレートにサービス・モニタ・タイプの複数のインスタンスを含めて、各サーバで実行されているさまざまなサービスやプロセスを監視することもできます。
共通のプロパティ	テンプレートのデプロイメント間で同じ設定プロパティについては、値を決定する必要があります。たとえば、[頻度]設定は、モニタ・タイプごとに必要な設定です。標準設定は 10 分です。監視対象と全体的なモニタ負荷に応じて、この値を変更し、テンプレートを使用して作成したモニタの実行頻度を高くすることもできます。
グループ構造	モニタの整理に使用するグループ構造を決定します。テンプレート内の組織のグループとモニタには、環境内の監視を整理するための全体的な計画との互換性が必要です。使用するグループ構造は、レポーティング、警告、監視に影響する可能性があります。
警告	テンプレートの一部として警告をデプロイするかどうかを決定します。テンプレートとモニタにどの警告のタイプとアクションを関連付けるか検討します。テンプレートの一部としてデプロイする警告の[警告ターゲット]プロパティが、テンプレート内に定義されているすべてのモニタに設定されます(1241 ページ「SiteScope 警告 ページ」 を参照)。たとえば、テンプレート・グループに追加したテンプレート警告は、そのグループに属するすべてのモニタに関する警告を通知します。これが計画している警告に合わない場合、デプロイメント後に警告設定を編集するか、手動で警告を追加する必要があります。

テンプレート変数を使った作業

テンプレート変数を使用しなくてもテンプレートを作成できますが、変数の使用によってテンプレートの能力とユーティリティを十分に活用できるようになります。テンプレート変数は、モニタ設定の置換マークです。テンプレートのデプロイ時にいつでも変更できるモニタ設定を使用する場合に、テンプレート変数を作成します。1 つ以上のテンプレート・モニタのテキスト・ボックスで、変数を参照します。テンプレート内のモニタまたはグループ・オブジェクトで参照された各変数によって、テンプレートのデプロイ時に対応する入力ボックスの表示が促されます。変数名がテキスト入力ボックスのラベルとして使用されます。

テンプレート変数の一般的な使用例を次に示します。

- サーバまたはホスト・アドレス
- ディスク・ドライブ指定子
- ファイルのパス
- モニタ名の詳細

注: テンプレート・ツリーの[**Template Examples**]フォルダで、テンプレートに使用する変数の例を参照できます。詳細については、[831ページ「テンプレート例」](#)を参照してください。

テンプレート変数の使用についてのガイドライン

- サーバやモニタなどほかのテンプレート・オブジェクトを作成する前に、テンプレート変数の計画を立てて作成する必要があります。これにより、テンプレートにオブジェクトを追加するときに、テンプレートのモニタ、グループ、または警告に、変数への参照を入力できます。テンプレート・オブジェクトですでに参照されているテンプレート変数を削除する場合、無効なリンクをクリアするためにテンプレートから参照オブジェクトを削除する必要があります。テンプレート変数の参照の詳細については、[835ページ「テンプレート変数の参照」](#)を参照してください。
- 一部のモニタ設定は、テンプレート変数を使用して設定できません。リモート・サーバ選択メニューを除き、通常は選択ドロップダウンを使用して選択される設定項目は、テンプレート変数を使用して定義できません。通常はチェック・ボックスまたはラジオ選択を使用して選択される設定項目は、テンプレート変数を使用して設定できません。
- テンプレート変数は常に、その変数が存在するテンプレート・コンテナの子要素です。変数を参照して、テンプレート内のグループ、モニタ、または警告設定テンプレートの設定を定義するために使用できます。SiteScope のテンプレート変数のタイプとその固有の構文規則の詳細については、[833ページ「変数の構文」](#)を参照してください。

本項の内容

- [833ページ「変数の構文」](#)
- [835ページ「テンプレート変数の参照」](#)

変数の構文

SiteScope では、次のタイプのテンプレート変数を使用できます。

- **ユーザ定義変数** : テンプレートをデプロイする際のテキストベースの値の入力に使用します。ユーザ定義変数には、変数名の両側に「%%」記号を使用する必要があります。
- **システム変数** : SiteScope で認識されているリモート・サーバのリストとシステム時刻情報の両方にアクセスするために使用する、事前定義された変数のセット。システム変数には、変数名の両側に「\$\$」記号を使用する必要があります。

注: ユーザ定義および事前定義のシステム変数は、テンプレートを設定する時にすべてのテキスト・フィールドおよびテキスト・テーブル・セルで使用できます。利用可能な変数のリストを表示するには、フィールドに %% と \$\$ のいずれかを入力し、関連する変数を選択します。これでフィールドに変数が表示されます。

変数の各タイプには、次項に記載されているように固有の構文規則があります。

ユーザ定義変数の構文

ユーザ定義のテンプレート変数には、英数字とアンダースコアのみ使用できます。変数は、必要な数だけ作成できます。

有効なテンプレート変数構文の例を次に示します。

```
description_text
DiskDrive
TARGET_URL
matchExpression
```

表示される設定パラメータを説明する変数名を選択する必要があります。変数名は、テンプレートのデプロイ時に変数の値の入力ウィンドウにある変数入力ボックスのラベルとして使用されます。

システム変数の構文

SiteScope では、いくつかの事前定義されたテンプレート変数を認識します。これらの値はシステムで認識され、SiteScope のサーバ、NetBIOS などの検出されたサーバ、およびリモート UNIX などのユーザ定義のサーバ接続プロファイルのリストを含みます。事前定義されたシステム変数の構文と詳細を次に示します。

システム変数の構文	詳細
\$\$SERVER_LIST\$\$	プラットフォームで認識されるすべてのサーバのいずれかを選択するリストを返します。[サーバ]または[ホスト名]プロパティのみでリモート・サーバの選択を有効にする場合にこの変数を使用します。 注: この変数をテンプレートで使用するときは、ユーザとの対話が必要なため、SiteScope API によるテンプレートのデプロイはできません。
\$\$SERVER_NAME\$\$	\$\$SERVER_LIST\$\$ 変数の派生。現在のサーバの名前の前に \\(バックスラッシュ) を追加して返します。ほかのボックスのサーバを参照する場合に使用します。
\$\$SERVER_NAME_BARE\$\$	\$\$SERVER_LIST\$\$ 変数の派生。現在のサーバの名前の前に \\(バックスラッシュ) を追加せずに返します。サーバの名前のみを必要とするボックスでサーバを参照する場合 (たとえば、CPU モニタをデプロイする場合または詳細「サーバ Mail のディスク領域」のサーバの名前を参照する場合) に使用します。■前分節に合併■

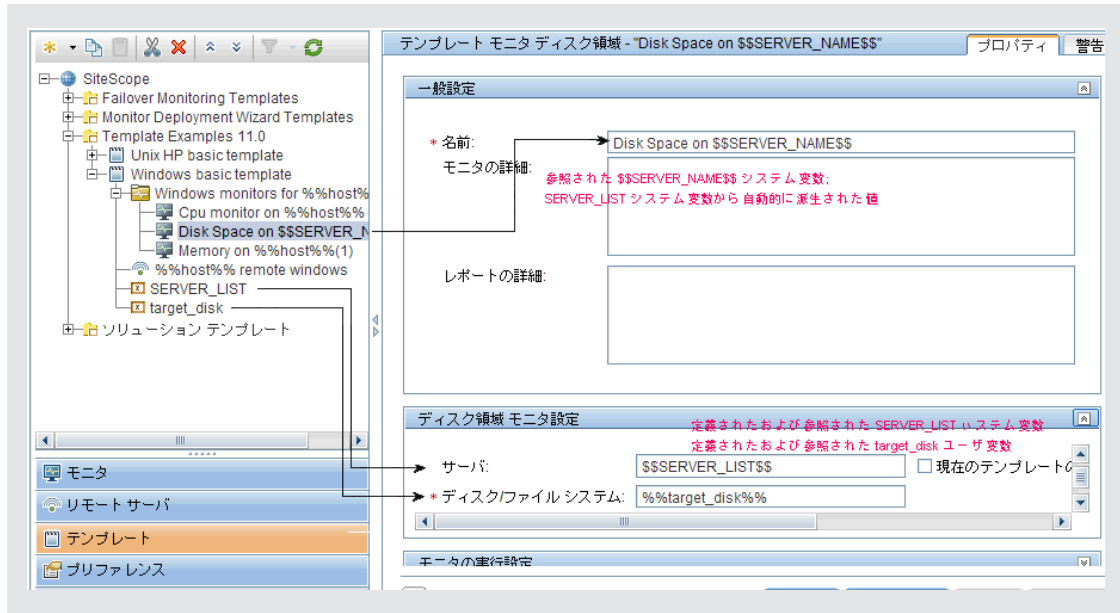
システム変数の構文	詳細
\$\$DATE\$\$	SiteScope を実行しているサーバのシステム日付を返します。モニタが作成された日付を名前または詳細に追加する場合に使用します。
\$\$TIME\$\$	SiteScope を実行しているサーバのシステム時刻を返します。モニタが作成された時刻を名前または詳細に追加する場合に使用します。値は、テンプレートがデプロイされた時刻を表します。

テンプレート変数の参照

テンプレート変数をテンプレートへ追加したら、モニタまたはグループ設定オブジェクトでそのテンプレート変数への参照を作成する必要があります。変数の参照に使用する構文は、変数のタイプにより異なります。

変数タイプ	構文	情報
ユーザ定義	%%variable_name%%	参照は大文字と小文字を区別し、構文に依存します。 注：ユーザ定義のテンプレート変数は、モニタまたはグループ設定テンプレートで参照する前に作成する必要があります。テンプレート変数としてテンプレートに追加されていないテキスト文字列に %% 記号を使用した場合、一致する変数名が後から追加されたとしても、テンプレート変数への参照は作成されません。
システム	\$\$VARIABLE_NAME\$\$	参照は大文字と小文字を区別し、構文に依存します。 \$\$SERVER_LIST\$\$ 変数は、テンプレートの変数として明示的に定義する必要があります。この変数の定義後、モニタまたはグループ設定オブジェクトで直接 \$\$VARIABLE_NAME\$\$ 構文を使用して \$\$SERVER_NAME\$\$ と \$\$SERVER_NAME_BARE\$\$ 変数を参照することによって、これらの変数を設定オブジェクトで使用できます。 \$\$TIME\$\$ と \$\$DATE\$\$ 変数を直接参照することもできます。 システム変数の詳細については、 833ページ「変数の構文」 を参照してください。

例：モニタ・テンプレートのユーザ定義変数、\$\$SERVER_LIST\$\$、派生システム変数を参照する方法



モニタ・テンプレートのカウンタ選択

SiteScope には、監視対象システム固有の測定値を監視するために設計された多数のアプリケーション・モニタ・タイプが含まれています。これらの参照可能なカウンタ・モニタ・タイプでは、[モニタ設定] パネルの[カウンタの取得]または[測定値の取得]ブラウザ機能を使用します。これらのモニタ・タイプを手動で設定する場合、モニタ・タイプの選択後に次の手順が必要です。

- 監視対象システムへの接続プロパティを指定し、SiteScope でリモート・システムから測定値カウンタを取得するように要求します。
- 監視対象のカウンタを選択し、設定に追加します。その後、モニタを SiteScope に追加できます。

テンプレートを使用したモニタのデプロイでは、カウンタ選択に独立した手順を使用しません。テンプレートを使用したこれらのモニタ・タイプのカウンタの選択を有効にするには、別のメカニズムを使用します。SiteScope では、テンプレート・デプロイメントのカウンタ選択手順を自動化するために、テキスト照合または正規表現照合を使用します。テンプレート・モニタの作成時に、カウンタ選択の手順を使用します。

テンプレートのカウンタ選択で最も簡単な方法は、モニタ・テンプレートで特定のカウンタを明示的に選択することです。この方法により、デプロイメント中に照合カウンタの選択に使用する明示的テキスト照合が作成されます。明示的に選択したカウンタを含む参照可能なカウンタ・モニタ・タイプを追加するために必要な手順の詳細については、[840ページ「テンプレートを使用した SiteScope 監視ソリューションの設定方法」](#)を参照してください。

監視対象システムの特定のカウンタがデプロイメントによって異なる場合、監視するカウンタのタイプまたはカテゴリを表すパターンの照合に、正規表現を使用できます。詳細については、次を参照してください。

本項の内容

- [837ページ「正規表現を使用するためのカウンタ選択文字列の変更」](#)
- [837ページ「正規表現を使用したカウンタ選択」](#)
- [839ページ「保存可能なカウンタの最大数」](#)

正規表現を使用するためのカウンタ選択文字列の変更

正規表現を使用するために、モニタの作成時にテンプレート・モニタのカウンタ選択文字列を変更するか、後からモニタを編集できます。正規表現カウンタ照合用にテンプレート・モニタを変更する方法の詳細については、[848ページ「正規表現を使用するためのカウンタ選択文字列の変更方法」](#)を参照してください。

正規表現を使用したカウンタ選択

多くのアプリケーションには、実行しているシステム、システム・オプションの設定、インストールされているコンポーネントによって異なる多数の測定値カウンタがあります。この場合、モニタ・テンプレートで明示的にカウンタを選択すると、アプリケーションまたはシステムの複数のインスタンスに渡って役に立たない可能性があります。一部のシステムには、パターンが似ていてもノードの名前またはオブジェクト・コンテキストが異なる測定値カウンタがあります。複数の測定値カウンタの選択を自動化するために、モニタ・テンプレートで正規表現を使用できます。

注: この正規表現カウンタ照合機能を使用するには、監視対象のシステムのカウンタの知識が必要です。テンプレートに追加するモニタ・タイプを手動で設定し、監視対象のシステムのタイプ

で利用可能なカウンタを慎重に確認する必要があります。リモート・システムで多数のカウンタを照合する「欲張りな」正規表現を作成すると、SiteScope のパフォーマンスが低下する可能性があります。

正規表現を使用するテンプレート・モニタを作成する手順は、前のセクションで説明されている手順と非常に似ています。明示的に監視するためのすべてのカウンタを選択する代わりに、選択するすべてのカウンタを代表する 1 つ以上のカウンタを選択します。モニタ・テンプレートでのカウンタ選択は、テキスト文字列で保存されます。モニタのデプロイ時に、選択したカウンタとの一致を検索するために SiteScope で使用するパターンを作成するには、この文字列を編集します。

注: 正規表現を使用して測定値カウンタを選択するか、しきい値を照合する場合、SiteScope では、相等性チェックを実行するのではなく、1 つの文字列が別の文字列の一部であるかどうかのみを確認します。このため、デプロイ後にモニタで誤ったカウンタおよびしきい値のセットが定義される可能性があります。たとえば、選択されているモニタのしきい値が x/y である場合、x/yy も正規表現に一致するので、このしきい値も定義されます。

例 - 正規表現の使用

- **例 1:** テンプレートで[MIB による SNMP]モニタ・タイプのカウンタを選択する場合に、正規表現を使用する方法の簡単な例を次に示します。

インフラストラクチャの複数の SNMP エージェントから、次の 3 つのカウンタを監視するとします。

```
iso/org/dod/internet/mgmt/mib-2/system/sysDescr
iso/org/dod/internet/mgmt/mib-2/system/sysUpTime
iso/org/dod/internet/mgmt/mib-2/system/sysName
```

テンプレート・モニタで 3 つのカウンタすべてを明示的に選択できます。あるいは、いずれか 1 つを選択して、カウンタ文字列を次のような正規表現に変更できます。

```
/iso\org\dod\internet\mgmt\mib-2\system\sys[DUN][a-zA-Z]*/
```

この例では、文字列の前後にスラッシュ(/)のペアを追加するようにカウンタ選択文字列が編集されています。この処理は、文字列が正規表現として解釈されるために必要となります。選択文字列には初期状態で複数のスラッシュ(/)が含まれているため、これらの文字のすぐ前にバックスラッシュ(\)を追加してエスケープする必要があります。[DUN][a-zA-Z]* 文字列には、正規表現構文で一般的に使用される 2 つの文字クラス宣言が含まれています。正規表現構文の詳細については、[198 ページ「正規表現の使用」](#)を参照してください。

- **例 2:** テンプレートで[Unix リソース]モニタ・タイプのカウンタを選択する場合に、正規表現を使用する方法の例を次に示します。

インフラストラクチャの複数の UNIX または Linux サーバで実行されているデーモン・プロセスを監視するとします。実行中のプロセスのリストに次の情報が含まれています。

```
Process\ -bash\NUMBER RUNNING Process\../java/bin/java\NUMBER
RUNNING Process\../ns-admin\NUMBER RUNNING Process\../ns-
```

```
proxy\NUMBER RUNNING Process\./ns-sockd\NUMBER RUNNING
Process\bin/sh\NUMBER RUNNING Process\etc/init\NUMBER RUNNING
Process\usr/apache/bin/httpd\NUMBER RUNNING
Process\usr/lib/nfs/statd\NUMBER RUNNING
Process\usr/lib/saf/sac\NUMBER RUNNING
Process\usr/lib/saf/ttymon\NUMBER RUNNING
Process\usr/lib/snmp/snmpdx\NUMBER RUNNING
Process\usr/lib/ssh/sshd\NUMBER RUNNING ...
```

文字「d」で終わるプロセスのみと照合する、正規表現カウンタ選択文字列を作成できます。このパターンを照合する正規表現の例を次に示します。

```
/Process[\W\w]{5,18}d[\W]{1,2}NUMBER RUNNING/
```

例 1 のように、カウンタ選択文字列には、文字列が正規表現であることを示すために文字列の前後にスラッシュ(/)が含まれています。この例の UNIX サーバのプロセス文字列には、バックスラッシュ(\)とスラッシュ(/)の組み合わせが含まれています。これらの文字は正規表現で特別な意味を持つため、エスケープする必要があります。プロセス文字列には、これらの文字やその他の記号の多くのバリエーションと組み合わせが含まれるため、エスケープが複雑になる場合があります。

この例で使用した正規表現では、文字クラス宣言を使用して表現を簡素化しています。[W] クラスは句読点の照合に使用されています。この照合では、文字を個別にエスケープする必要がなく、一部のプロセス文字列で使用する \, -, :, / の文字に一致します。正規表現構文の詳細については、198 ページ「正規表現の使用」を参照してください。

保存可能なカウンタの最大数

ブラウズ可能なモニタはモニタに指定されたカウンタ数によって制限されます。カウンタの最大数は、< SiteScope のルート・ディレクトリ > \groups\master.config ファイルの **_browsableContentMaxCounters** パラメータによって決定されます([プリファレンス] > [インフラストラクチャ プリファレンス] > [モニタ設定] > [選択されるブラウズ可能カウンタの最大数]でも設定できます)。この値よりもカウンタ数が多くなるようにモニタを作成または編集する場合、この値のカウンタ数までしか保存されません。

ブラウズ可能なモニタがテンプレートにデプロイされる時、選択されたパターンに一致するカウンタ数は **master.config** ファイルの **_maxCountersForRegexMatch** によって制限されます。デプロイの間、パターンに一致するカウンタ数がこの値を超えると、この値までのカウンタ数だけが保存されます。

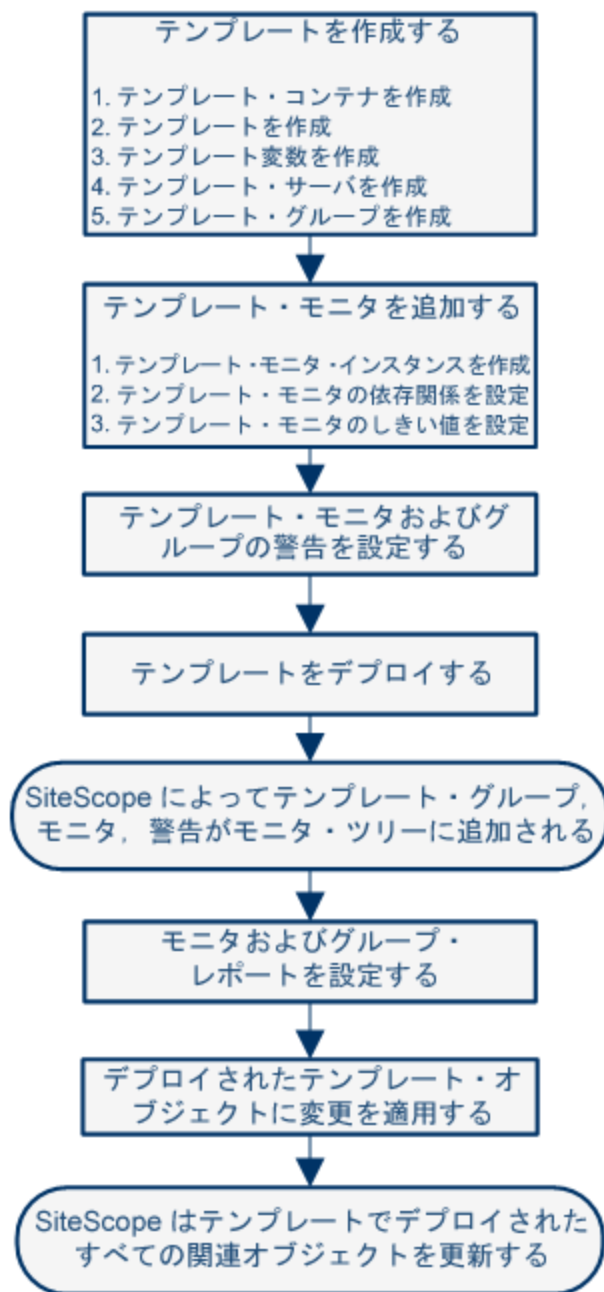
動的モニタを作成および更新する時に選択されたカウンタ・パターンに一致するカウンタ数を制限するために、**_maxCountersForRegexMatch** パラメータも使用されます。**master.config** ファイルの **_browsableContentMaxCounters** と **_maxCountersForRegexMatch** の両パラメータに同じ値を使用することを推奨します。これらの両パラメータの標準設定値は 1000 です。

以前のバージョンの SiteScope からアップグレードする時、これらの両パラメータの値は以前のバージョンの 2 つのパラメータ値よりも高い値、または 1000(いずれか高い方)に設定されます。

テンプレートを使用した SiteScope 監視ソリューションの設定方法

このタスクでは、ユーザ定義のテンプレートを使用した SiteScope 監視ソリューションの作成に関する手順を説明します。

次に、このタスクのフローチャートを示します。



事前定義されたソリューション・テンプレートの使用の詳細については、927ページ「SiteScope ソリューション・テンプレート」を参照してください。

ヒント:

- 表示されている順番でテンプレート・オブジェクトを作成することをお勧めします。不要なテンプレート・オブジェクトの手順はスキップできます。
- テンプレートの作業を開始しやすいように、SiteScope には Windows と UNIX の環境を監視するためのテンプレート例が付属されています。詳細については、[831ページ「テンプレート例」](#)を参照してください。

注: 標準モードでオブジェクトを設定するときにドロップダウン・リストが表示される一部のフィールドは、テンプレート・モードでのオブジェクト設定時にはテキスト・ボックスとして表示されます。

このタスクには次の手順が含まれています。

- [841ページ「前提条件」](#)
- [841ページ「テンプレート・コンテナの作成」](#)
- [842ページ「テンプレートの作成」](#)
- [842ページ「テンプレート変数の作成」](#)
- [842ページ「テンプレート・リモート・サーバの作成」](#)
- [843ページ「テンプレート・グループの作成」](#)
- [844ページ「テンプレート・モニタ・インスタンスの作成」](#)
- [845ページ「モニタとグループ警告の設定」](#)
- [845ページ「テンプレートのデプロイ」](#)
- [846ページ「結果」](#)
- [846ページ「モニタ・ビューでのモニタとグループ・レポートの設定 - オプション」](#)
- [846ページ「監視ソリューションへの変更の適用 - オプション」](#)
- [846ページ「ほかの SiteScope ユーザとのテンプレートの共有 - オプション」](#)

1. 前提条件

- SiteScope に監視を設定する前に、インストール後の管理タスクの実行が終了していることを確認します。タスクの詳細については、[57ページ「SiteScope の設定および管理方法」](#)を参照してください。
- テンプレートを追加、編集、削除できるようにするには、「**テンプレートの表示**」および「**テンプレートの追加、編集、または削除**」権限が付与されている必要があります。
- テンプレートをデプロイするには、その内容に関わらず、デプロイ先グループの権限を編集する必要があります。テンプレート・オブジェクト(モニタ、リモート、警告)の権限は編集する必要はありません。ユーザ権限の詳細については、[792ページ「権限」](#)を参照してください。

2. テンプレート・コンテナの作成

監視ソリューションを管理できる、テンプレート・コンテナを作成します。

ユーザ・インタフェースの詳細については、853ページ「[新規テンプレート コンテナ]ダイアログ・ボックス」を参照してください。

3. テンプレートの作成

テンプレートをテンプレート・コンテナに追加します。このテンプレートが監視ソリューションのコンテナとなり、監視ソリューションのグループ、モニタ、リモート・サーバ、変数、警告を作成できます。テンプレート・コンテナに複数のテンプレートを作成できます。

ユーザ・インタフェースの詳細については、854ページ「[新規テンプレート]ダイアログ・ボックス」を参照してください。

注: 既存のグループとモニタ階層を SiteScope からテンプレートにコピーし、テンプレートとして使用するためにその要素を編集することもできます。タスクの詳細については、847ページ「既存の設定のコピーによるテンプレートの作成方法」を参照してください。

4. テンプレート変数の作成

テンプレートには、テンプレートをデプロイするたびにオブジェクトに異なる名前を指定できる、テンプレート変数を作成できます。グループ、モニタ、サーバ、警告を作成するときに変数が参照されるため、テンプレートでは最初に変数のオブジェクトを作成する必要があります。

- テンプレートのテンプレート変数を作成します。ユーザ・インタフェースの詳細については、856ページ「[新規変数]ダイアログ・ボックス」を参照してください。
- テンプレート内の1つ以上の設定オブジェクトで、変数を参照します。このトピックの詳細については、835ページ「テンプレート変数の参照」を参照してください。

注:

- プレフィックスまたはサフィックスの文字が追加されていない変数名(%%hostname%% など)を使用してリモート・サーバを指定し、同じ変数をモニタのいずれかのフィールドで指定している場合、デプロイ後その値は、デプロイで指定した単なる変数値ではなく、UNIX では **Remote-##**, Windows では **\\<変数値>** として表示されます。これを避けるには、変数名をリモート・サーバに使用する場合は、プレフィックスまたはサフィックスの文字を変数名に追加する必要があります。
- ユーザ定義および事前定義のシステム変数は、テンプレートを設定する時にすべてのテキスト・フィールドおよびテキスト・テーブル・セルで使用できます。利用可能な変数のリストを表示するには、フィールドに %% または \$\$ のいずれかを入力し、関連する変数を選択します。これでフィールドに変数が表示されます。

5. テンプレート・リモート・サーバの作成

テンプレートで、監視対象のオブジェクトが含まれるリモート Windows サーバまたはリモート UNIX サーバを定義できます。テンプレート・モニタは、テンプレートのデプロイ時にテンプレート・サーバで定義されたサーバ、またはリモート・サーバで手動で定義されたサーバで実行できます。テンプレートのデプロイ時に、[Microsoft Windows リモート サーバ]または[UNIX リモート サーバ]のリモート・サーバ・ツリーにテンプレート・サーバが追加されます。

ユーザ・インタフェースの詳細については、858ページ「[新規テンプレート リモート サーバ]ダイアログ・ボックス」を参照してください。

注: テンプレートには 1 つのリモート・サーバのみ追加できます。

例:

Windows テンプレート・リモート・サーバが「%%host%% remote windows」の名前で作成されています。

The screenshot displays two configuration windows. The top window, titled '一般設定' (General Settings), has a '名前:' (Name) field containing '%%host%%remote windows' and an empty '詳細:' (Details) field. The bottom window, titled 'メイン設定' (Main Settings), contains several sections. The '* サーバ:' (Server) section has a text field with '%%host%%'. Below it, the '資格情報:' (Credentials) section has a radio button selected for 'ユーザ名およびパスワードを使用' (Use username and password), with fields for 'ユーザ名' (Username) containing '%%user%%' and 'パスワード' (Password) containing '.....'. There is also an option for '事前定義された資格情報を選択' (Select predefined credentials) with a dropdown for '資格情報プロファイル' (Credential profile) and a button '資格情報の追加' (Add credentials). A checkbox for 'トレース' (Trace) is unchecked. The '* 接続方式:' (Connection method) section has a dropdown set to 'NetBIOS'. The 'リモート・サーバのエンコード:' (Remote server encoding) section has a dropdown set to 'Cp1252 (windows-1252)'.

6. テンプレート・グループの作成

テンプレートで、モニタおよび関連付けられた警告のデプロイメントを組織で管理して効率的にする場合にテンプレート・グループを作成します。

ユーザ・インタフェースの詳細については、859ページ「[新規テンプレート グループ] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

注:

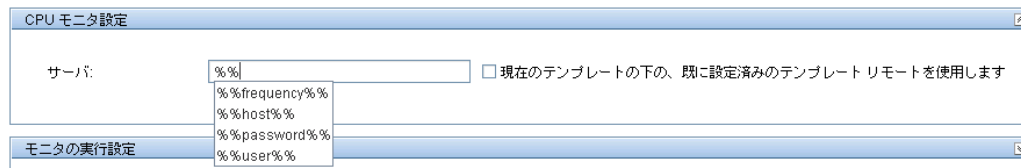
- 標準設定では、モニタをテンプレート・グループに作成する必要があります。[プリファレンス] > [インフラストラクチャプリファレンス] > [テンプレート設定]で、[テンプレート エンティティの直下にテンプレートの作成を許可する]を選択することでこの設定を上書きできます。
- コンテンツがテンプレートに含まれないようにテンプレート・グループを定義することも可能ですが、デプロイ済みグループに変更が適用される時には無視されます。これによってさまざまなデプロイ済みグループ内にテンプレートをデプロイできます。詳細については、メイン設

定の 860 ページ「変更を公開するとき、グループを無視する」フィールドを参照してください。

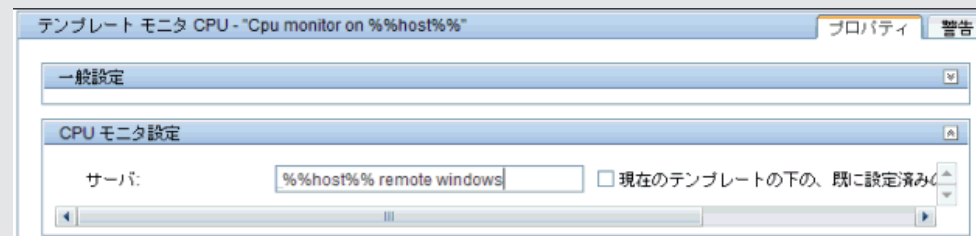
- テンプレートには、その直下に 1 つのテンプレート・グループ(親グループ)のみを含めることができます。

7. テンプレート・モニタ・インスタンスの作成

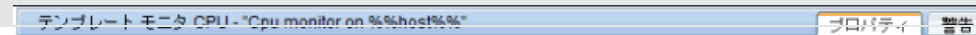
- テンプレート・グループに追加するモニタ・インスタンスを選択します。ユーザ・インタフェースの詳細については、863 ページ「[新規テンプレート モニタ] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
- モニタのプロパティの値を入力します。
 - テンプレート変数を使用している場合、値が変数と置き換えられるすべてのフィールドの変数の構文を入力します。これには \$\$SERVER_LIST\$\$ システム変数の使用が含まれます。概念の詳細については、834 ページ「システム変数の構文」を参照してください。
 - 変数を入力するには、%% と \$\$ のいずれかを入力します。そのタイプの利用可能な変数のリストが自動的に表示されます。関連する変数をクリックして選択します(キーボードを使用した利用可能な変数のリストのナビゲートはサポートされません)。これでフィールドに変数が表示されます。



例：モニタ設定時に変数を使用



この例では、テンプレート・モニタ(SiteScope CPU モニタ)をテンプレート・リモート・サーバ「%%host%% remote windows」で実行するように設定されています。



注：

- テンプレート・モニタは、テンプレートのデプロイ時にテンプレート・サーバで定義されたサーバ、またはリモート・サーバ・ツリーのリモート・サーバ・コンテナで手動で定義されたサーバで実行できます。どちらの場合でも、[サーバ] ボックスの値は、テンプレート変数に値が代入された後のテンプレートのデプロイ時の、実際のサーバのホスト名と一致する必要があります。サーバ名が実際のサーバのホスト名と一致しない場合、監視は失敗します。テンプレート・リモート・サーバ名(作成済みの場合)を自動的に取得するには、[モニタ設定] フィールドの[現在のテンプレートの下、既に設

定済みのテンプレート リモートを使用します チェック・ボックスを選択します。ユーザ・インタフェースの詳細については、[863ページ「\[新規テンプレート モニタ\] ダイアログ・ボックス」](#)を参照してください。

- モニタの[サーバ]フィールドとリモート・サーバの[名前]と[サーバ]フィールドには、「\」を使用しないでください。
 - [プリファレンス] > [インフラストラクチャ プリファレンス] > [テンプレート設定]で[テンプレート エンティティの直下にテンプレートの作成を許可する]を選択した場合、テンプレート・エンティティに直接モニタ・インスタンスを追加できます。
- c. 参照可能なカウンタを含むモニタの場合、カウンタを選択して監視対象システム固有の測定値を監視します。
- [カウンタの取得]ボタンをクリックして、サーバを選択するか、監視対象のサービスまたはアプリケーションを実行しているサーバの接続情報を入力します。
 - [カウンタの取得]ボタンを再度クリックして利用可能なカウンタを取得します。カウンタの選択ダイアログ・ボックスが更新されます。
 - 監視する測定値またはカウンタを選択します。監視対象システムの特定のカウンタがデプロイメントによって異なる場合、監視するカウンタのタイプまたはカテゴリを表すパターンを照合する正規表現を使用できます。タスクの詳細については、[848ページ「正規表現を使用するためのカウンタ選択文字列の変更方法」](#)を参照してください。
- d. [プロパティ]タブで次のようなその他のモニタ設定を設定します。
- 報告される各モニタ・インスタンスの状態を決定するロジック条件を設定して、モニタのしきい値を手動で設定します。ユーザ・インタフェースの詳細については、[374ページ「しきい値の設定」](#)を参照してください。

注: テンプレートのデプロイ後、ベースラインを使用して1つ以上のモニタのしきい値を設定することもできます。タスクの詳細については、[344ページ「ベースラインを使用したモニタしきい値の設定方法」](#)を参照してください。

- グループと主要なモニタの依存関係を作成し、過剰な警告を制御できるようにします。概念の詳細については、[329ページ「グループの依存関係の監視」](#)を参照してください。
- 一般的なユーザ設定の完全なリストについては、[367ページ「共通モニタ設定」](#)を参照してください。

8. モニタとグループ警告の設定

イベントが発生したか、インフラストラクチャの要素やシステムのステータスが変化したときに通知を送信する警告を作成します。

タスクの詳細については、[1226ページ「警告の設定方法」](#)を参照してください。

9. テンプレートのデプロイ

SiteScope 監視テンプレートの作成後、テンプレートをグループにデプロイできます。

- ユーザ・インタフェースから1つのテンプレートをデプロイする、または複数のテンプレートをグループに同時にデプロイできます。タスクの詳細については、[878ページ「ユーザ・インタフェースを使用したテンプレートのデプロイ方法」](#)を参照してください。

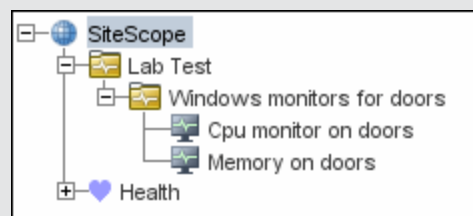
- SiteScope ユーザ・インタフェースの外側で CSV ファイルを使用することで、1 つテンプレートの一括デプロイメントを実行できます。1 つの CSV ファイルですべてのテンプレート変数値の入力と更新がしやすくなるため、一括デプロイメントの実行には CSV ファイルが適しています。概念の詳細については、[877 ページ「CSV ファイルを使用したテンプレートのデプロイ」](#)を参照してください。タスクの詳細については、[880 ページ「CSV ファイルを使用したテンプレートのデプロイ方法」](#)を参照してください。
- SiteScope ユーザ・インタフェースの外側にある XML ファイルを使用してテンプレートをデプロイできます。概念の詳細については、[905 ページ「自動テンプレート・デプロイメントの概要」](#)を参照してください。タスクの詳細については、[914 ページ「XML ファイルを使用した監視構造のデプロイ方法」](#)を参照してください。

10. 結果

SiteScope によって、モニタ・ツリーの指定したグループにグループ、モニタ、警告が追加されます。

例：

テンプレートの例では、**Windows basic template** が、**Lab Test** という名前のグループ・コンテナにデプロイされています。テンプレートには **CPU モニタ**と**メモリ・モニタ**が含まれ、**doors** という名前のサーバでリソースの使用率を監視するためにデプロイされています。



11. モニタ・ビューでのモニタとグループ・レポートの設定 - オプション

時間の経過に伴う監視対象のサーバおよびアプリケーションのパフォーマンスに関する情報を表示するレポートを作成します。

タスクの詳細については、[1278 ページ「レポートの作成方法」](#)を参照してください。

12. 監視ソリューションへの変更の適用 - オプション

デプロイ済みテンプレートに対して、変更 (モニタの追加や削除、モニタのプロパティの変更など) を加えることができます。この変更を実行するには、テンプレートを編集し、テンプレート変更適用ウィザードを使用して、テンプレートでデプロイされたすべての関連オブジェクトへの変更を適用します。

タスクの詳細については、[892 ページ「関連グループ・デプロイメントへのテンプレートの更新適用方法」](#)を参照してください。

13. ほかの SiteScope ユーザとのテンプレートの共有 - オプション

テンプレートを個々の SiteScope ユーザに送信するか HP Live Network にテンプレートをパブリッシュすることによって、テンプレートを共有できます。HP Live network はオンライン・コミュニティで、HP カスタマが情報を共有し、アドオン・コンテンツ、エクステンション、HP Software ポートフォリオにわたる関連アクティビティについて知るための中心的な場所を提供します。

タスクの詳細については、[196 ページ「コンテンツ共有のための HP Live Network の使用方法」](#)を参照してください。

既存の設定のコピーによるテンプレートの作成方法

このタスクでは、既存のグループ、モニタ、またはリモート・サーバを SiteScope からテンプレートにコピーして、テンプレートとして使用するために要素を編集する手順について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- [847ページ「前提条件」](#)
- [847ページ「テンプレートへの設定のコピー」](#)
- [847ページ「テンプレート変数の編集」](#)
- [847ページ「結果」](#)

1. 前提条件

既存の設定を SiteScope からテンプレートにコピーするには、エンティティをコピーするテンプレート・コンテナおよびテンプレートがテンプレート・ツリーに存在している必要があります。

注: 既存のモニタまたはリモート・サーバをテンプレートにコピーする場合、テンプレート・グループもテンプレートに存在している必要があります。

テンプレート・コンテナ、テンプレート、およびテンプレート・グループの作成の詳細については、[840ページ「テンプレートを使用した SiteScope 監視ソリューションの設定方法」](#)を参照してください。

2. テンプレートへの設定のコピー

コピーするグループ、モニタ、またはリモート・サーバを右クリックし、**[テンプレートにコピー]**を選択します。**[テンプレート ツリーにコピー]**ダイアログ・ボックスで、コピーした設定を追加するテンプレートまたはテンプレート・グループを選択します。

ユーザ・インタフェースの詳細については、[398ページ「\[テンプレート ツリーにコピー\]ダイアログ・ボックス」](#)を参照してください。

3. テンプレート変数の編集

新しいテンプレートでテンプレート変数を使用する場合、該当する設定フィールドの値を必要な変数の構文に置き換えて、コピーした各オブジェクトを編集します。

概念の詳細については、[835ページ「テンプレート変数の参照」](#)を参照してください。

4. 結果

SiteScope によって、テンプレート・ツリーの指定したテンプレートまたはテンプレート・グループにグループ、モニタ、リモート・サーバが追加されます。

正規表現を使用するためのカウンタ選択文字列の変更方法


このタスクでは、測定値カウンタの選択に正規表現を使用するためにテンプレート・モニタを変更する手順について説明します。

注: このタスクは、参照可能なカウンタを使用するモニタのみに適用されます。

1. テンプレート・ツリーで、変更するモニタ・テンプレートをクリックして、テンプレート・モニタの[プロパティ]ビューを開きます。
2. [モニタ設定] パネルを開き、[測定値] セクションまたは[カウンタ] セクション(モニタ・タイプによって異なる)で、モニタに設定するカウンタのパターンを表すカウンタ選択文字列を選択します。
3. カウンタ選択文字列の先頭と末尾にスラッシュ("/")文字を追加して、正規表現に変更します。必要に応じて、ほかのパターン照合構文を使用するように文字列を変更します。

カウンタ選択の例については、[837ページ「正規表現を使用したカウンタ選択」](#)を参照してください。

正規表現構文の詳細については、[198ページ「正規表現の使用」](#)を参照してください。

注: テンプレート・モニタの設定時に、入力した正規表現を使用して照合可能なカウンタを明示的に選択している場合は、[カウンタの削除]  をクリックして余分なカウンタ文字列を削除できます。

予約済みテンプレート・グループ・タイプ

次の表は、SiteScope アプリケーションで使用するテンプレート・タイプを示します。これらのディレクトリにあるテンプレートは予約されており、警告では使用されません。警告で使用するテンプレートのリストについては、[1231 ページ「SiteScope 警告テンプレートのディレクトリ」](#)を参照してください。

注: 製品のドキュメントに記載された特定の手順に従う場合や、HP ソフトウェア・サポートから指示された場合を除き、これらのディレクトリ内のテンプレートを変更することはお勧めしません。

テンプレート・グループ	説明	場所
MIB	SNMP トラップで使用するテキスト	< SiteScope のルート・ディレクトリ > \ templates.mib
オペレーティング・システム	リモート UNIX サーバの監視時に実行するシェル・コマンド	< SiteScope のルート・ディレクトリ > \ templates.os
パフォーマンス・モニタ	Windows パフォーマンスの監視に使用	< SiteScope のルート・ディレクトリ > \ templates.perfmon
サウンド	サウンド警告に使用するオーディオ・ファイル	< SiteScope のルート・ディレクトリ > \ templates.sound
ビュー	クエリおよび XML/XSL テンプレート	< SiteScope のルート・ディレクトリ > \ templates.view

SiteScope テンプレートのユーザ・インタフェース

本項の内容




- [850ページ「\[SiteScope テンプレート\] ページ」](#)
- [851ページ「テンプレート・ツリー - \[プロパティ\] ページ」](#)
- [852ページ「テンプレート・ツリー - \[警告\] タブ」](#)
- [853ページ「\[新規テンプレート コンテナ\] ダイアログ・ボックス」](#)
- [854ページ「\[新規テンプレート\] ダイアログ・ボックス」](#)
- [856ページ「\[新規変数\] ダイアログ・ボックス」](#)
- [858ページ「\[新規テンプレート リモート サーバ\] ダイアログ・ボックス」](#)
- [859ページ「\[新規テンプレート グループ\] ダイアログ・ボックス」](#)
- [863ページ「\[新規テンプレート モニタ\] ダイアログ・ボックス」](#)
- [865ページ「\[新規警告\] ダイアログ・ボックス」](#)
- [866ページ「\[タグの検索/フィルタ\] ダイアログ・ボックス」](#)

[SiteScope テンプレート] ページ

このページには、選択したテンプレート・コンテナの名前と詳細が表示されます。このページでは、テンプレート・コンテナを追加、または既存のテンプレート・コンテナのプロパティを編集できます(ソリューション・テンプレート以外)。

アクセス方法	[テンプレート] コンテキストを開きます 。テンプレート・ツリーで、 [SiteScope] ノードを選択します。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none">• テンプレートの操作時に SiteScope API を使用することもできます。詳細については、43ページ「SiteScope 設定 API の使用」を参照してください。• SiteScope 管理者ユーザ、または適切なテンプレート権限を付与されたユーザのみがテンプレートを表示、追加、編集できます。ユーザ権限の詳細については、792ページ「権限」を参照してください。
関連タスク	840ページ「テンプレートを使用した SiteScope 監視ソリューションの設定方法」
関連情報	88ページ「テンプレート・ツリー」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
	新規テンプレート・コンテナ : 新しいテンプレート・コンテナを作成できる[新規テンプレート コンテナ]ダイアログ・ボックスが開きます。ユーザ・インタフェースの詳細については、 853ページ 「[新規テンプレート コンテナ]ダイアログ・ボックス」を参照してください。
	テンプレート・コンテナの編集 : 選択したテンプレート・コンテナを編集できます。
	テンプレートの削除 : テンプレート・コンテナを削除します。
<SiteScope テンプレート・テーブル>	SiteScope に含まれている定義済みテンプレート(テンプレート例, モニタ デプロイメント ウィザードのテンプレート, ソリューション・テンプレート)およびユーザ定義のテンプレート・コンテナが表示されます。テンプレート・コンテナをダブルクリックすると, 選択したテンプレートのテンプレート・コンテナ・ページが開きます。
名前	テンプレート・コンテナに割り当てられている名前文字列。
詳細	テンプレート・コンテナを作成または編集したときに割り当てたテンプレート・コンテナの詳細。

テンプレート・ツリー - [プロパティ] ページ

このページには、選択したテンプレート・オブジェクトの名前と詳細が表示されます。テンプレート・ツリーでテンプレート・オブジェクト(テンプレート・グループ, テンプレート・モニタ, テンプレート変数)を選択して、特定のオブジェクトのプロパティを表示します。このページでは、テンプレートのプロパティを編集します。

アクセス方法	<ul style="list-style-type: none"> [テンプレート]コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、テンプレート・オブジェクトを選択してそのオブジェクトのプロパティを表示します。テンプレートの[プロパティ]タブが表示されるのは、テンプレート・グループまたはモニタが選択される時だけです。 SiteScope 管理者ユーザ、または適切なテンプレート権限を付与されたユーザのみがテンプレートを表示、追加、編集できます。ユーザ権限の詳細については、792ページ「権限」を参照してください。
関連タスク	840ページ 「テンプレートを使用した SiteScope 監視ソリューションの設定方法」
関連情報	88ページ 「テンプレート・ツリー」

メイン設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
名前	テンプレートの名前。
詳細	テンプレートの詳細。

UI 要素	詳細
最終編集者	テンプレートを最後に編集した SiteScope ユーザ。このフィールドは読み取り専用です。 注: このフィールドが表示されるのは、テンプレート・ツリーでテンプレートが選択される時だけです。
最終編集時刻	テンプレートまたはテンプレート内の任意のオブジェクトが最後に編集された日時。このフィールドは読み取り専用です。 注: このフィールドが表示されるのは、テンプレート・ツリーでテンプレートが選択される時だけです。

タグの検索/フィルタ

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します(ラベルのない要素は山括弧内に表示されます)。






UI 要素	詳細
<タグ名と値>	SiteScope オブジェクト(グループ、モニタ、リモート・サーバ、テンプレート、プリファレンス・プロファイル)を検索およびフィルタするために、キーワード・タグが使用される。SiteScope にタグが作成されていない場合、このセクションは空白で表示されます。タグが作成されている場合はここに表示され、必要に応じてタグを選択できます。 概念の詳細については、106ページ「SiteScope オブジェクトの検索」を参照してください。
既存のタグを追加	クリックして既存のタグを追加します。[検索/フィルタ]ダイアログ・ボックスが開きます。詳細については、866ページ「[タグの検索/フィルタ]ダイアログ・ボックス」を参照してください。

テンプレート・ツリー - [警告]タブ

このタブには、ソリューション・テンプレートに関連付けられている警告のリストが表示されます。このページを使用して、テンプレートに関連付けられている警告を追加、削除、編集します。テンプレート・ツリーで、選択したオブジェクトの警告を表示するテンプレート・グループまたはモニタを選択します。


アクセス方法	[テンプレート]コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、警告を表示、追加、編集するグループまたはモニタに移動します。[警告]タブをクリックします。
関連タスク	<ul style="list-style-type: none">932ページ「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」1226ページ「警告の設定方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none">88ページ「テンプレート・ツリー」1241ページ「SiteScope 警告 ページ」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
	新規警告 : [新規警告] ダイアログ・ボックスが開き、新しい警告を定義できます。ユーザ・インターフェースの詳細については、 1242 ページ「[新規警告]/[警告の編集] ダイアログ・ボックス」 を参照してください。
	警告の編集 : [警告の編集] ダイアログ・ボックスが開き、警告を編集できます。ユーザ・インターフェースの詳細については、 1242 ページ「[新規警告]/[警告の編集] ダイアログ・ボックス」 を参照してください。
	警告のコピー : 警告がコピーされます。
	警告の貼り付け : 警告が貼り付けられます。
	警告の削除 : 警告を削除します。
名前	警告定義に割り当てられている名前の文字列。
状態	警告の状態(有効/無効)。 <ul style="list-style-type: none"> • 有効 : 無効化された警告アクションが上書きされ、定義した条件に基づいて警告が実行されるようになります。 • 無期限に無効化 : このラジオ・ボタンをクリアして警告定義を更新するまで、警告の条件に一致しても SiteScope で警告アクションが実行されないようになります。 • <Time1> から <Time2> へ 1 回限定のスケジュールに基づいて無効化 : 指定した期間、条件に一致しても SiteScope で警告アクションが実行されなくなります。警告は、この期間の開始時に無効になり、この期間を過ぎると再度有効になります。
詳細	警告の作成時または編集時に割り当てられた警告定義の詳細。
アクション名	警告がトリガされたときに実行されるアクションの名前。警告の名前ではありません。

[新規テンプレート コンテナ] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、新しいテンプレート・コンテナを定義できます。テンプレート・コンテナは、テンプレートの格納と管理に使用します。テンプレート・コンテナでは、目的または分類別に複数のテンプレートをグループ化、整理できます。

アクセス方法	[テンプレート] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、SiteScope ノードまたは既存のテンプレート・コンテナを右クリックし、[新規作成] > [テンプレート コンテナ] を選択します。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> • テンプレート・コンテナは、テンプレート・ツリーの SiteScope ノードにのみ追加できます。 • テンプレートは、テンプレート・ツリーに  アイコンで表示されます。テンプレート・コンテナにはテンプレートのみを格納できます。

関連タスク	<ul style="list-style-type: none">840ページ「テンプレートを使用した SiteScope 監視ソリューションの設定方法」847ページ「既存の設定のコピーによるテンプレートの作成方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none">828ページ「テンプレートについて」831ページ「テンプレート例」88ページ「テンプレート・ツリー」

メイン設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。


UI 要素	詳細
名前	テンプレート・コンテナの名前。 最大文字数 :250 文字
詳細	テンプレート・コンテナの詳細。

タグの検索/フィルタ

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します(ラベルのない要素は山括弧内に表示されます)。

UI 要素	詳細
<タグ名と値>	SiteScope オブジェクト(グループ、モニタ、リモート・サーバ、テンプレート、プリファレンス・プロファイル)を検索およびフィルタするために、キーワード・タグが使用される。SiteScope にタグが作成されていない場合、このセクションは空白で表示されます。タグが作成されている場合はここに表示され、必要に応じてタグを選択できます。 概念の詳細については、106ページ「SiteScope オブジェクトの検索」を参照してください。
タグの追加	[新規タグ]ダイアログ・ボックスを開き、新しいキーワード・タグを追加できる。ユーザ・インタフェースの詳細については、111ページ「[新規タグ]/[タグの編集]ダイアログ・ボックス」を参照してください。

[新規テンプレート]ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、テンプレート・コンテナにテンプレートを追加できます。個々のテンプレートは、テンプレートのデプロイ時に作成されるオブジェクトのオブジェクト定義から構成されます。テンプレートは、テンプレート・ツリーに  アイコンで表示されます。

アクセス方法	[テンプレート]コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーでテンプレート・コンテナを右クリックして、[新規作成]>[テンプレート]を選択します。
--------	--

重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> • テンプレートには、直下にテンプレート・グループが1つだけあります(親グループ)。 • テンプレートには、グループ、サブグループ、変数、リモート・サーバを含めることができます。また、[プリファレンス]>[インフラストラクチャプリファレンス]>[テンプレート設定]で[テンプレート エンティティの直下にテンプレートの作成を許可する]が選択されている場合は、モニタを含めることができます。
関連タスク	<ul style="list-style-type: none"> • 840ページ「テンプレートを使用した SiteScope 監視ソリューションの設定方法」 • 847ページ「既存の設定のコピーによるテンプレートの作成方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> • 828ページ「テンプレートについて」 • 831ページ「テンプレート例」 • 88ページ「テンプレート・ツリー」

メイン設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。


UI 要素	詳細
名前	<p>テンプレートの名前。入力する名前は、テンプレート・ツリーにテンプレート・コンテナの子ノードとして表示されます。</p> <p>最大文字数 :250 文字です。</p>
詳細	テンプレートの詳細。
最終編集者	<p>テンプレートを最後に編集した SiteScope ユーザ。このフィールドはテンプレートが作成された後でなければ更新されません。</p> <p>標準設定値 : N/A</p>
最終編集時刻	<p>テンプレート(またはテンプレート内の任意のオブジェクト)が最後に編集された日時。このフィールドはテンプレートが作成された後でなければ更新されません。</p> <p>標準設定値 :N/A</p>

タグの検索/フィルタ

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します(ラベルのない要素は山括弧内に表示されます)。

UI 要素	詳細
<タグ名と値>	<p>SiteScope オブジェクト(グループ、モニタ、リモート・サーバ、テンプレート、プリファレンス・プロファイル)を検索およびフィルタするために、キーワード・タグが使用される。SiteScope にタグが作成されていない場合、このセクションは空白で表示されます。タグが作成されている場合はここに表示され、必要に応じてタグを選択できます。</p> <p>概念の詳細については、106ページ「SiteScope オブジェクトの検索」を参照してください。</p>
タグの追加	<p>[新規タグ]ダイアログ・ボックスを開き、新しいキーワード・タグを追加できる。ユーザ・インタフェースの詳細については、111ページ「[新規タグ]/[タグの編集]ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p>

[新規変数]ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、テンプレートにテンプレート変数を追加できます。変数を使用することで、テンプレートのデプロイ時にユーザ入力が必要になります。テンプレート変数は、ユーザ定義の変数か、SiteScope の既知のリモート・サーバ接続リストにアクセスできる定義済みシステム変数のいずれかです。テンプレート変数は、テンプレート・ツリーに  アイコンで表示されます。

アクセス方法	<ul style="list-style-type: none"> • [テンプレート]コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーでテンプレートを右クリックして、[新規]>[変数]を選択します。 • [テンプレート <モニタ>]ページで、[新規変数]をクリックします。詳細については、863ページ「[新規テンプレート モニタ]ダイアログ・ボックス」を参照してください。 • [新規テンプレート警告]ダイアログ・ボックスで、[新規変数]をクリックします。詳細については、865ページ「[新規警告]ダイアログ・ボックス」を参照してください。 • [警告アクション]ダイアログ・ボックスで、[新規変数]をクリックします。詳細については、1252ページ「[警告アクション]ダイアログ・ボックス」を参照してください。 • [新規 Microsoft Windows リモート サーバ]ダイアログ・ボックスで、[新規変数]をクリックします。詳細については、858ページ「[新規テンプレート リモート サーバ]ダイアログ・ボックス」を参照してください。 • [新規 UNIX リモート サーバ]ダイアログ・ボックスで、[新規変数]をクリックします。詳細については、858ページ「[新規テンプレート リモート サーバ]ダイアログ・ボックス」を参照してください。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> • [モニタの実行設定]で[頻度]と[エラー時頻度]の変数を設定する場合、変数の値は秒単位でのみ指定できます。 • モニタをテンプレート間でコピーまたは移動すると、モニタ内のユーザ定義変数もコピーまたは移動されます。 • 割り当てたテンプレート変数の名前を変更した場合は、その変数を使用しているすべてのモニタが自動的に新しい変数名に更新されます。


関連タスク	840ページ「テンプレートを使用した SiteScope 監視ソリューションの設定方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none">• 828ページ「テンプレートについて」• 833ページ「テンプレート変数を使った作業」• 831ページ「テンプレート例」• 88ページ「テンプレート・ツリー」

メイン設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
名前	テンプレート変数の名前。入力する名前は、テンプレート・ツリーでテンプレートの変数を識別するために使用されます。これは、ほかのテンプレート・オブジェクトの変数を参照するときに使用する必要がある名前です。 注： 変数を追加した後に変数の名前の編集はできません。変数名を変更するには、その変数を削除してから、正しい名前で新しい変数を作成します。
表示名	デプロイ時の変数名の代わりに別の名前を表示する場合に使用する表示名。ただし、テンプレート・オブジェクトの変数を参照するときには、変数名を使用する必要があります。
詳細	変数の詳細。
標準設定値	この変数に使用する標準設定値。このボックスの値が必須である場合、値を入力しないと、テンプレートのデプロイ時に値の入力を求められます。
テンプレートでの表示順序	変数の表示シーケンス番号。これは、デプロイ時に SiteScope から変数の値の入力が要求される順序です。変数は昇順で表示されます。表示番号のない変数は最後に表示されます。 注： 表示順序によってテンプレート定義内の変数の順序が変更されることはありません。
パスワード変数	標準設定値とデプロイ時に入力した値を非表示にします。 標準設定値： 選択されていない 注： このオプションは、名前の末尾に PASSWORD または passord が使用されている、以前のバージョンの SiteScope の変数に自動的に選択されます。
必須変数	変数フィールドには値が必須で、テンプレートのデプロイ時に値の入力が要求されます。変数を必須でない値として設定するには、チェック・ボックスをクリアします。このオプションがクリアされると、SiteScope では、必須でない変数の値に空の文字列("")が使用されます。 標準設定値： 選択されている

[新規テンプレート リモート サーバ]ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、テンプレートに UNIX または Windows リモート・サーバを作成できます。テンプレート・リモート・サーバは、テンプレートのデプロイ時に作成されるリモート・サーバのプリファレンスを定義するために使用されます。テンプレート・リモート・サーバは、テンプレート・ツリーに  アイコンで表示されます。

アクセス方法	[テンプレート]コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーでテンプレートを右クリックして、[新規作成]>[新規 Microsoft Windows リモート サーバ]/[新規 UNIX リモートサーバ]を選択します。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none">テンプレートのデプロイメント全体を通して一定のままであるフィールドには、実際の値を入力します。テンプレートのデプロイ時に変数値で置換される値のフィールドには、テンプレート変数を入力します。詳細については、835ページ「テンプレート変数の参照」を参照してください。テンプレートには 1 つのリモート・サーバのみ追加できます。サーバがテンプレート・モニタから参照されている場合は、リモート・サーバ・リストからそのサーバを削除できません。そのリモート・サーバを参照する各モニタの[モニタ設定]パネルにある[サーバ]ボックスで別のサーバを選択すると、リモート・サーバ・リストからそのリモート・サーバを削除できます。[新規テンプレート リモート サーバ]ダイアログ・ボックスから新しい変数を追加するには、[新規変数]ボタンをクリックして、856ページ「[新規変数]ダイアログ・ボックス」に説明されている方法で変数を設定します。テンプレート変更適用ウィザードまたは自動デプロイメント更新(911ページ「XMLを使用したテンプレート変更適用」)を使用して既存の監視対象サーバを置換することはできませんが、必要に応じて監視対象サーバ自体のプロパティ値は変更できます。リモート・サーバの[名前]および[サーバ]フィールド、およびモニタの[サーバ]フィールドでは、「\」を使用しないでください。標準モードでオブジェクトを設定するときにドロップダウン・リストが表示される一部のフィールドは、テンプレート・モードではテキスト・ボックスとして表示されます。
関連タスク	840ページ「テンプレートを使用した SiteScope 監視ソリューションの設定方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none">828ページ「テンプレートについて」524ページ「リモート・サーバの概要」831ページ「テンプレート例」88ページ「テンプレート・ツリー」


次のユーザ・インタフェースはページの全領域に共通です。

UI 要素	詳細
新規変数	クリックして新規変数を定義します。詳細については、856ページ「[新規変数]ダイアログ・ボックス」を参照してください。

[新規 Microsoft Windows リモート サーバ] ダイアログ・ボックスの要素の詳細については、535ページ「[新規 Microsoft Windows リモート サーバ]/[Microsoft Windows リモート サーバの編集]ダイアログ・ボックス」を参照してください。

[新規 UNIX リモート サーバ] ダイアログ・ボックスの要素の詳細については、541ページ「[新規 UNIX リモート サーバ]/[UNIX リモート サーバの編集]ダイアログ・ボックス」を参照してください。

[新規テンプレート グループ]ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、テンプレートまたは既存のテンプレート・グループにテンプレート・グループを追加して、サブグループを作成できます。テンプレート・グループは、インフラストラクチャの複数の場所に監視のデプロイメントを複製するために使用します。テンプレート・グループは、テンプレート・ツリーに  アイコンで表示されます。

アクセス方法	[テンプレート]コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーでテンプレートまたはテンプレート・グループを右クリックして、[新規作成]>[グループ]を選択します。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> テンプレートには、その直下に1つのテンプレート・グループ(親グループ)のみを含めることができます。 標準設定では、親グループまたはサブグループのみにテンプレート・モニタ、警告、サブグループを作成できます。テンプレート・エンティティの直下にテンプレート・モニタを作成する場合は、[プリファレンス]>[インフラストラクチャプリファレンス]>[テンプレート設定]で[テンプレート エンティティの直下にテンプレートの作成を許可する]チェック・ボックスを選択します。 [新規グループ]ダイアログ・ボックスから新しい変数を追加するには、[新規変数]ボタンをクリックして、856ページ「[新規変数]ダイアログ・ボックス」に説明されている方法で変数を設定します。
関連タスク	840ページ「テンプレートを使用した SiteScope 監視ソリューションの設定方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> 828ページ「テンプレートについて」 831ページ「テンプレート例」 88ページ「テンプレート・ツリー」

次のユーザ・インタフェースはページの全領域に共通です。

UI 要素	詳細
新規変数	クリックして新規変数を定義します。詳細については、856ページ「[新規変数]ダイアログ・ボックス」を参照してください。

一般設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。


UI 要素	詳細
グループ名	<p>テンプレート・グループの名前 (テンプレート変数を使用するのが望ましい)。テンプレート変数を使用すると、テンプレートをデプロイするたびにグループに異なる名前を指定できます。グループ名に変数が含まれていない場合は、グループ名が一意でないため、同じディレクトリ内にテンプレートを複数回デプロイすると失敗します。テンプレート変数の使用の詳細については、835 ページ「テンプレート変数の参照」を参照してください。</p> <p>注： 各グループの親グループが異なっても、テンプレートに同じ名前のグループが複数ある場合、テンプレートのデプロイメントは失敗します。</p>
グループの詳細	<p>テンプレート・グループの詳細。テキスト・スタイルの一般的な HTML タグ (
, <HR>, など) とハイパーリンクを含めることができます。詳細は、SiteScope ダッシュボードでグループのプロパティを表示または編集するときのみ表示されます。ハイパーリンクの追加の詳細については、313 ページ「グループの詳細に URL リンクを追加 - オプション」を参照してください。</p> <p>注： このフィールドでは、JavaScript, iframes, frames やその他の高度な機能はサポートされていません。このボックスに入力した HTML コードは、有効性とセキュリティがチェックされ、コード (複数行にわたるために切り捨てられたコードなど) を修正する修正アクションが実行されます。</p>
変更を公開するとき、グループを無視する	<p>(このオプションはルート・グループには使用できません。またソリューション・テンプレートには非アクティブです。)</p> <p>デプロイ済みグループに変更を適用する時、このグループ内の任意のオブジェクトに行った変更は無視されます。</p> <p>このオプションにより、次のことが可能になります。</p> <ul style="list-style-type: none"> 無視されたグループ内の SiteScope オブジェクトに影響を与えることなく、既存のデプロイ済みグループ内でテンプレートをデプロイし、デプロイ済みグループにテンプレートの変更を適用します。つまり、変更を適用する時に影響を与えることなくデプロイ済みグループでモニタ、グループ、警告を編集または削除できるということです。 ソーステンプレートに含まれなかったデプロイ済みグループで作成されたその他のオブジェクトを削除することなく、ソーステンプレートから削除されたデプロイ済みグループでオブジェクトを削除します([更新による削除の有効化]オプションが選択されている時)。 <p>標準設定値： 選択されていない</p> <p>異なるアクションを実行する時にこの設定を有効にする方法は、以下の表を参照してください。</p>

次に、異なるアクションが実行される時の[**変更を公開するとき、グループを無視する**]設定の影響をリストします。

アクション	[変更を公開するとき, グループを無視する]が選択された時に有効
デプロイ済みのグループ名を変更する	変更の適用フローで名前の変更は無視されます。
テンプレート・グループ名を変更する	
デプロイ済みのグループの削除	変更を適用する時にグループが再作成されます。
テンプレート・グループの削除	変更の適用フローでは, [更新による削除の有効化]が選択された時にデプロイ済みグループが削除されます。
テンプレート・グループのコピー	テンプレート・グループとそのコンテンツをテンプレートにコピーする時 [変更を公開するとき, グループを無視する]設定は変わりません。
テンプレートへコピー	グループとそのコンテンツをテンプレートにコピーする時 [変更を公開するとき, グループを無視する]設定は False(クリア)に設定されます。
テンプレート間でコピー	[変更を公開するとき, グループを無視する]設定は, その他のテンプレート・グループ設定とともにコピーされます。
テンプレートを以前のバージョンの SiteScope からインポート	[変更を公開するとき, グループを無視する]設定は False(クリア)と解釈されます。
テンプレートのエクスポート	テンプレートをエクスポートする時 [変更を公開するとき, グループを無視する]設定は変わりません。

依存関係

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
依存対象	<p>[依存対象]  をクリックして[依存の対象モニタの選択]ダイアログ・ボックスを開き、モニタの実行を依存させるモニタを選択します。[依存の対象モニタの選択]ダイアログ・ボックスの詳細については、396ページ「[依存対象モニタの選択]ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p> <p>1つのシステムの異なる側面を監視している複数のモニタからの過剰な警告を避ける場合に、このオプションを使用します。</p> <p>例：システムの基本的な可用性をチェックするシステム・モニタを作成して、システムのより詳細なテストを実行するほかのモニタを作成します。基本的な可用性をチェックするモニタの状態に依存するように、詳細テスト・モニタを設定します。</p> <p>システム・モニタによって対象システムが利用不可になったことが検出されると、依存関係によってほかのモニタが自動的に無効になります。また、依存するモニタによって生成される警告も無効になります。</p> <p>標準設定値：モニタ・インスタンスに設定された依存関係はありません。</p> <p>注：[変更をパブリッシュするときに、依存関係を無視します]を選択したときは、このフィールドはクリアされ、使用できません。</p>
依存条件	<p>[依存対象]設定を使用してモニタを別のモニタの状態に依存させた場合、このオプションを使用して、現在のモニタが通常どおりに実行されるように[依存対象]のモニタの状態の条件を選択します。</p> <p>次の状態カテゴリがあります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 正常 • エラー • 利用可能 • 利用不可 <p>設定対象のモニタは、[依存対象]ボックスで選択したモニタがこのボックスで選択した条件をレポートしている場合、正常に実行されます。</p> <p>例：[正常]を選択して、[依存対象]ボックスで選択したモニタが「正常」の状態をレポートする場合にのみこのモニタが有効になるようにします。[依存対象]ボックスで選択したモニタが「正常」以外のカテゴリまたは条件をレポートした場合、現在のモニタは自動的に無効になります。モニタがエラーを検出した場合に依存するモニタを有効にすることもできます。</p> <p>標準設定値：正常</p>
依存関係をパブリッシュするときに、依存関係を無視します	<p>デプロイしたオブジェクトにテンプレート変更がパブリッシュされた場合、選択したテンプレート・グループに対する依存関係は無視され、デプロイしたオブジェクトの既存の依存関係が保持されます。詳細については、330ページ「テンプレート・モニタおよびグループを設定するときの依存関係」を参照してください。</p> <p>標準設定値：選択されていない</p> <p>注：選択すると、[依存対象]フィールドがクリアされ使用できません。</p>


タグの検索/フィルタ

SiteScope オブジェクト(グループ、モニタ、リモート・サーバ、テンプレート、プリファレンス・プロファイル)を検索およびフィルタするために、キーワード・タグが使用される。

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します(ラベルのない要素は山括弧内に表示されます)。

UI 要素	詳細
<タグ名と値>	次のいずれかを実行できます。 <ul style="list-style-type: none">• [既存のタグを追加] ボタンをクリックして、[タグの検索/フィルタ] ダイアログ・ボックスを開きます。このダイアログ・ボックスで既存のタグを選択できます。詳細については、866ページ「[タグの検索/フィルタ] ダイアログ・ボックス」を参照してください。• [タグ名] ボックスと[値] ボックスに値を入力し、新しいタグを作成します。タグと値として変数を使用することも可能です。概念の詳細およびタグ名と値の書式設定方法については、106ページ「SiteScope オブジェクトの検索」を参照してください。 [タグ名] ボックスと [値] ボックスに選択または入力された値が表示されます。タグを選択するまでボックスは空です。
既存のタグを追加	[タグの検索/フィルタ] ダイアログ・ボックスを開きます。これで既存のキーワード・タグを追加または新しいタグを定義できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、 866ページ「[タグの検索/フィルタ] ダイアログ・ボックス」 を参照してください。

[新規テンプレート モニタ] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、テンプレート・グループまたはサブグループにテンプレート・モニタを追加できます。テンプレート・モニタは、テンプレートのデプロイ時に実際のモニタの作成の土台として使用されます。テンプレート・モニタは、テンプレート・ツリーに  アイコンで表示されます。

アクセス方法	[テンプレート] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーでテンプレート・グループを右クリックして、 [新規作成]>[モニタ] を選択します。テンプレートに設定するモニタ・タイプを選択します。
--------	--


重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> 標準設定では、テンプレート・モニタはテンプレート・グループ内に作成されます。テンプレート・エンティティの直下にテンプレート・モニタを作成するには、[プリファレンス] > [インフラストラクチャ プリファレンス] > [テンプレート設定] で [テンプレート エンティティの直下にテンプレートの作成を許可する] チェック・ボックスを選択します。テンプレート・モニタには警告を含めることができます。 テンプレート・モニタはアクティブなモニタ・インスタンスではありません。モニタは、テンプレートをデプロイしたときにのみ、これらのテンプレート設定に基づいて作成、アクティブ化されます。 モニタの [サーバ] フィールドとリモート・サーバの [名前] と [サーバ] フィールドには、「\」を使用しないでください。 正規表現を使用して測定値カウンタを選択するか、しきい値を照合する場合、SiteScope では、相等性チェックを実行するのではなく、1 つの文字列が別の文字列の一部であるかどうかのみを確認します。このため、デプロイ後にモニタで誤ったカウンタおよびしきい値のセットが定義される可能性があります。これは、SiteScope は標準設定で、カウンタ・テーブル内のすべてのカウンタを正規表現で処理し、この表現に適合するすべてのカウンタとしきい値設定を一致させるためです。たとえば、選択されているモニタのしきい値が x/y である場合、x/yy も正規表現に一致するので、このしきい値も定義されます。これを回避するには、正確な要件を満たすために特定の正規表現を追加します(837 ページ「モニタ・テンプレートのカウンタ選択」を参照してください)。 [タグの検索/フィルタ] をテンプレート・モニタに追加する時は、同じタグ値グループで実際のパラメータと変数パラメータの両方を使用できません。 テンプレートからスクリプト・モニタをデプロイするときには、リモート・スクリプト名の大文字と小文字が、スクリプト・サブディレクトリ内のスクリプト名の大文字と小文字と一致する必要があります。一致しない場合、選択されたスクリプトは「なし」と表示されます。 ネットワーク帯域幅モニタの標準設定以外のしきい値は、テンプレートに正しくコピーされません。
関連タスク	840 ページ「テンプレートを使用した SiteScope 監視ソリューションの設定方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> 367 ページ「共通モニタ設定」 828 ページ「テンプレートについて」 831 ページ「テンプレート例」 88 ページ「テンプレート・ツリー」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
	<p>以下は、テンプレート・モードでの作業時に限り[新規モニタ]ダイアログ・ボックス固有の設定です。すべてのモニタに共通する設定については、367 ページ「共通モニタ設定」を参照してください。</p>

UI 要素	詳細
現在のテンプレートの下の、既に設定済みのテンプレート・リモートを使用します	監視するサーバを選択する時は、名前を入力しなくても、テンプレート・リモート・サーバ(作成されていれば)の使用が可能となります。 標準設定値：選択されていない
新規変数	[新規変数]ダイアログ・ボックスを開きます。このダイアログ・ボックスによって、[新規モニタ]ダイアログ・ボックスと別の場所にナビゲートせずに新しい変数を作成できます。ユーザ・インターフェースの詳細については、 856 ページ「[新規変数]ダイアログ・ボックス」 を参照してください。

[新規警告]ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、テンプレート・グループまたはテンプレート・モニタに警告を定義できます。テンプレート警告は、テンプレートのデプロイ時に作成されるモニタの警告を定義するために使用されます。テンプレート・グループまたはモニタに警告が設定されている場合、グループまたはモニタ・アイコンの横に警告  記号が表示されます。

アクセス方法	[テンプレート]コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーでテンプレート・グループまたはテンプレート・モニタを右クリックして、[新規作成]>[警告]を選択します。
重要な情報	警告テンプレートを作成するときには、[モニタの無効化/有効化]警告アクションは選択できません。テンプレート警告は、その定義の対象であるオブジェクトに属するすべてのモニタに対して有効になります。たとえば、警告がモニタに対して定義されている場合、そのモニタのみでアクティブ化されます。警告がテンプレートに対して定義されている場合、そのテンプレートにあるすべてのモニタでアクティブ化されます。
関連タスク	840ページ「テンプレートを使用した SiteScope 監視ソリューションの設定方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> • 367ページ「共通モニタ設定」 • 828ページ「テンプレートについて」 • 1241ページ「SiteScope 警告 ページ」 • 831ページ「テンプレート例」 • 88ページ「テンプレート・ツリー」

次の要素はすべてのアクション・タイプに共通します。

UI 要素	詳細
新規変数	クリックして新規変数を定義します。詳細については、 856ページ「[新規変数]ダイアログ・ボックス」 を参照してください。



[新規警告]ダイアログ・ボックスのその他の要素の詳細については、[1242ページ「\[新規警告\]/\[警告の編集\]ダイアログ・ボックス」](#)を参照してください。

[タグの検索 / フィルタ] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスによって、1 つ以上の既存のタグを選択でき、また新しいタグを作成できます。

アクセス方法	テンプレート・グループ、テンプレート・モニタ、およびテンプレート警告の[タグの検索 / フィルタ] パネルで[既存のタグを追加]をクリックします。
関連タスク	840 ページ「テンプレートを使用した SiteScope 監視ソリューションの設定方法」
関連情報	761 ページ「タグの検索 / フィルタの概要」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
タグの追加	クリックして、新しいタグを作成します。詳細については、 111 ページ「[新規タグ] / [タグの編集] ダイアログ・ボックス」 を参照してください。
	SiteScope モニタ・グループまたはサブグループ(有効化されたモニタを含む、モニタを含まない、または有効化されたモニタがない)を表します。
	タグを表します。

第 46 章

テンプレートのインポートまたはエクスポート

本章の内容

概念

- 868ページ「テンプレートのエクスポートおよびインポート」

タスク

- 869ページ「テンプレートのエクスポートとインポートの方法」
- 871ページ「PDF へのエクスポート時の Unicode フォントの有効化方法」

参照情報

- 872ページ「テンプレートのインポートおよびエクスポートのユーザ・インタフェース」

テンプレートのエクスポートおよびインポート

本項では、テンプレートのエクスポートおよびインポート機能の詳細について説明します。

ほかの SiteScope インストールでできるようにテンプレートをエクスポートできます。これにより、標準化されたモニタ設定を企業全体で複製できます。複数のテンプレートを含むテンプレート・コンテナをエクスポートする場合、そのテンプレート・コンテナとテンプレートがエクスポートされます。テンプレートは、エクスポートした後もテンプレート・コンテナに残ります。

モニタをテンプレートにエクスポートした後、個々の SiteScope ユーザに送信することで、または [HP Live Network](#) にパブリッシュすることで、テンプレートを共有できます。詳細については、[195ページ「HP Live Network およびコンテンツ共有の概要」](#)を参照してください。

パッチ 9.10.210 および Hotfix QCCR1A125751 を適用した HPOM 9.10 または、9.10.210 よりも後のパッチを適用した HPOM 9.10 に SiteScope が接続されている場合は、HP Operations Manager (HPOM) に SiteScope テンプレートをエクスポートすることもできます。これにより、HPOM ポリシーの割り当てとデプロイメントを介して、SiteScope のテンプレートおよびモニタを設定できます。詳細については、HP Operations Manager 9.10 のマニュアルを参照してください。

また、ほかの SiteScope インストールからテンプレート設定をインポートできます。これにより、標準化されたモニタ設定を企業全体で効率的に複製できます。

関連タスクの詳細については、[869ページ「テンプレートのエクスポートとインポートの方法」](#)を参照してください。

テンプレートのエクスポートとインポートの方法

このタスクでは、テンプレートをエクスポートおよびインポートする手順について説明します。

関連概念の詳細については、868ページ「テンプレートのエクスポートおよびインポート」を参照してください。

このタスクには次の手順が含まれています。

- 869ページ「ほかの SiteScope インストールへのテンプレートのエクスポート」
- 869ページ「Operations Manager(HPOM)へのテンプレートのエクスポート」
- 870ページ「テンプレートのインポート」
- 870ページ「結果」

注: インポートが失敗するか、または[ソリューション テンプレート]ツリーのソリューション・テンプレートを表示できない場合、< SiteScope のルート・ディレクトリ> \export フォルダから< SiteScope のルート・ディレクトリ> \persistency\import フォルダにコピーするとこれらのテンプレートを回復できます。 \export フォルダにテンプレートのサンプルも含まれている場合、前述の一意の名前に関する違反を避けるためにテンプレート・コンテナの名前を変更する必要があります。

1. ほかの SiteScope インストールへのテンプレートのエクスポート

テンプレート・ツリーで、エクスポートするテンプレートを含むテンプレートまたはテンプレート・コンテナ・オブジェクトを右クリックして、[エクスポート]をクリックします。テンプレート・ファイルを保存する名前と場所を入力し、エクスポートするテンプレートを選択します。

モニタをテンプレートにエクスポートした後、個々の SiteScope ユーザに送信することで、または HP Live Network にパブリッシュすることで、テンプレートを共有できます。詳細については、195ページ「HP Live Network およびコンテンツ共有の概要」を参照してください。

制限事項: コンテナなしでテンプレートをエクスポートする場合でも、コンテナはテンプレートとともにエクスポートされます。

ユーザ・インタフェースの詳細については、872ページ「[テンプレートのエクスポート]ダイアログ・ボックス」を参照してください。

2. Operations Manager(HPOM)へのテンプレートのエクスポート

HPOM ポリシーの割り当てとデプロイメントによって SiteScope テンプレート(ソリューション・テンプレートでない)およびモニタを設定できるようにするには、テンプレート・ツリーでエクスポートするテンプレート右クリックし、[Export to OM]をクリックします。

HPOM による SiteScope テンプレートの管理方法の詳細については、HPOM のドキュメントを参照してください。

注: このオプションは、HPOM 9.x 以降および SiteScope が UNIX 環境の同じマシンにインストールされている場合で、OM 統合が SiteScope で有効化されている場合にのみ利用可能です。OM 統合の設定の詳細については、268ページ「SiteScope を使用して HPOM または BSM にイベントを送信する方法」を参照してください。

3. テンプレートのインポート

テンプレートをエクスポートしたら、エクスポート・ファイルを別の SiteScope サーバにコピーし、使用する単一または複数のテンプレートを含むテンプレート・コンテナをインポートできます。テンプレート・ツリーで、テンプレートのインポート先のテンプレート・コンテナを右クリックして、**[インポート]**をクリックします。インポートするファイルの名前と場所を入力します。

ユーザ・インタフェースの詳細については、873 ページ「[\[内容のインポート\] ダイアログ・ボックス](#)」を参照してください。

注: SiteScope の以前のバージョンの廃止されたモニタが含まれるテンプレートを SiteScope にインポートすると、廃止されたモニタはテンプレート・ツリーに表示されません。

4. 結果

ファイルに含まれているテンプレートがテンプレート・コンテナに追加されます。インポートしたテンプレートは、直接使用するか、必要に応じて変更できます。

PDF へのエクスポート 時の Unicode フォント の有効化方法

このタスクでは、PDF にレポートをエクスポートするときに現在のロケールとは異なる文字を表示する Unicode フォントを設定する方法について説明します。これにより、複数の言語の文字で構成されるテキストを表示できます。

注: Microsoft Office がインストールされているマシンを使用している場合、Arial Unicode MS フォントはすでにインストールされているため、このフォントをダウンロードまたは設定する必要はありません。

フォント・ライブラリを使用して Arial Unicode MS フォントを設定するには、次の手順を実行します。

1. SiteScope サーバのフォント・ライブラリに移動します。例：

環境	フォント・ライブラリ
AIX	/usr/lpp/Acrobat3/Fonts
HPUX	/usr/contrib/xf86/xterm/fonts /usr/lib/X11/fonts/ms.st/typefaces
Linux	/usr/share/fonts/truetype /usr/share/fonts/local
UNIX	/usr/openwin/lib/X11/fonts/TrueType /usr/X11/lib/X11/fonts/TrueType /usr/X11/lib/X11/fonts/Type1
Windows	C:\Windows\Fonts C:\WINNT\Fonts

2. 選択したフォント・ライブラリに Arial Unicode MS フォントをダウンロードします。このフォントは <http://www.microsoft.com/typography/fonts/family.aspx?FID=24> から入手できます。
3. SiteScope を再起動します。

テンプレートのインポート およびエクスポート のユーザ・インタフェース

本項の内容

- 872 ページ「[テンプレートのエクスポート] ダイアログ・ボックス」
- 873 ページ「[内容のインポート] ダイアログ・ボックス」

[テンプレートのエクスポート] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、ほかの SiteScope インストールで使用するためにテンプレートをエクスポートできます。これにより、標準化されたモニタ設定を企業全体で複製できます。テンプレートは、エクスポートした後もテンプレート・コンテナに残ります。

アクセス方法	<p>[テンプレート] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、エクスポートするテンプレートを含むテンプレート・コンテナ・オブジェクトを右クリックして、[エクスポート] を選択します。</p> <p>テンプレート・ツリーのテンプレートを右クリックし、[エクスポート] をクリックすることもできます。</p>
重要な情報	<p>SiteScope テンプレートは、バイナリ・データとして保存されます。これは、SiteScope の以前のバージョンで使用されたテキストベースのモニタ・セットとは異なります。テンプレートの変更は、SiteScope インタフェースを使用して行う必要があります。</p> <p>制限事項: コンテナなしでテンプレートをエクスポートする場合でも、コンテナはテンプレートとともにエクスポートされます。</p>
関連タスク	869 ページ「テンプレートのエクスポートとインポートの方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none">• 367 ページ「共通モニタ設定」• 828 ページ「テンプレートについて」• 868 ページ「テンプレートのエクスポート およびインポート」• 88 ページ「テンプレート・ツリー」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
ファイル名	<ol style="list-style-type: none"> 1. [ファイル名] ボタンをクリックし [保存] ダイアログ・ボックスを開きます。このダイアログ・ボックスではエクスポートするファイルを保存する場所を参照し選択できます。 2. [保存] ダイアログ・ボックスの [ファイル名] フィールドに、エクスポートするテンプレートのわかりやすい名前を入力します。 3. [保存] をクリックし、[テンプレートのエクスポート] ダイアログ・ボックスに戻ります。選択したパスとファイル名が、[テンプレートのエクスポート] ダイアログ・ボックスの [ファイル名] フィールドに表示されます。
テンプレート・ツリー	<p>エクスポートするテンプレートを選択します。</p> <p>標準設定値: テンプレート・コンテナ内のテンプレートは選択されていません。</p>

[内容のインポート] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、1 つ以上のテンプレートおよびテンプレートの依存関係を含むほかの SiteScope インストールおよび内容パッケージから、テンプレート設定をインポートできます。これにより、標準化されたモニタ設定を企業全体で複製できます。

アクセス方法	[テンプレート] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、テンプレートまたはコンテンツ・パッケージのインポート先のテンプレート・コンテナを右クリックして、[インポート] をクリックして、インポートするコンテンツ・タイプを選択します。
関連タスク	<ul style="list-style-type: none"> • 869 ページ「テンプレートのエクスポートとインポートの方法」 • 196 ページ「コンテンツ共有のための HP Live Network の使用方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> • 367 ページ「共通モニタ設定」 • 828 ページ「テンプレートについて」 • 868 ページ「テンプレートのエクスポートおよびインポート」 • 88 ページ「テンプレート・ツリー」 • 195 ページ「HP Live Network およびコンテンツ共有の概要」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
内容のタイプ	<p>内容のタイプ・オプションを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none">• テンプレート: ほかの SiteScope インストールからテンプレート設定をインポートする場合に選択します。• 内容パッケージ: 1 つ以上のテンプレートおよびテンプレートの依存関係を含む内容パッケージをインポートする場合に選択します。依存関係は jars や設定ファイルのような追加ファイルです。カスタム・モニタをエクスポートする場合、モニタ・テンプレート、およびスクリプトとほかのリソースで使った別の jar は、1 つのコンテンツ・パッケージにまとめられます。 <div><p>注: コンテンツ・パッケージは zip 形式で、少なくとも 1 つのテンプレートを含む必要があります。各テンプレートは、さまざまなタイプのモニタ(カスタム、標準)を含むことができます。</p></div> <p>内容パッケージの詳細については、324 ページ「コンテンツ・パッケージの作成」を参照してください。</p>
ファイル名	<p>インポートするテンプレートまたは内容パッケージ・ファイルの名前。</p> <p>[ブラウズ] ボタンをクリックし [開く] ダイアログ・ボックスを開きます。このダイアログ・ボックスではインポートするファイルの場所を参照し選択できます。このファイル・ブラウザには、zip ファイルのみ表示されます。</p> <p>ファイルを選択したら、[開く] をクリックして [内容のインポート] ダイアログ・ボックスに戻ります。選択したパスとファイル名が [ファイル名] フィールドに表示されます。</p>
既存のテンプレートのオーバーライド	<p>インポートしたテンプレート・ファイルまたは内容パッケージのテンプレートで、同じ名前の既存のテンプレートを上書きする場合にこのオプションを選択します。</p> <p>注: テンプレート・ツリーのテンプレート・コンテナがインポートしたファイルのテンプレート・コンテナと同じ名前の場合、このオプションを選択すると、コンテナ内の同じ名前の既存のテンプレートが上書きされ、インポートされたファイルのほかのテンプレートが既存のテンプレートにマージされます。</p>

第47章

テンプレートのデプロイ

本章の内容

概念

- [876ページ「SiteScope テンプレートのデプロイの概要」](#)
- [877ページ「CSV ファイルを使用したテンプレートのデプロイ」](#)

タスク

- [878ページ「ユーザ・インタフェースを使用したテンプレートのデプロイ方法」](#)
- [880ページ「CSV ファイルを使用したテンプレートのデプロイ方法」](#)

参照情報

- [883ページ「テンプレートのデプロイのユーザ・インタフェース」](#)

SiteScope テンプレートのデプロイの概要

インフラストラクチャ内にある、同じような特性を持つシステムをチェックする一連のモニタを迅速にデプロイするには、テンプレートを使用します。テンプレートを作成、設定した後で、SiteScope 階層にデプロイします。SiteScope 監視テンプレートの作成後、そのテンプレートを次の方法でグループにデプロイできます。

- 単一のテンプレート、または複数のテンプレートをユーザ・インタフェースから同時にグループにデプロイできます。タスクの詳細については、[878ページ「ユーザ・インタフェースを使用したテンプレートのデプロイ方法」](#)を参照してください。
- SiteScope ユーザ・インタフェースの外部の CSV ファイルを使用して、単一のテンプレートに対して一括デプロイメントを実行できます。1つの CSV ファイルですべてのテンプレート変数値の入力と更新がしやすくなるため、一括デプロイメントの実行には CSV ファイルが適しています。概念の詳細については、[877ページ「CSV ファイルを使用したテンプレートのデプロイ」](#)を参照してください。タスクの詳細については、[880ページ「CSV ファイルを使用したテンプレートのデプロイ方法」](#)を参照してください。
- SiteScope ユーザ・インタフェースの外部にある XML ファイルを使用してテンプレートをデプロイできます。概念の詳細については、[905ページ「自動テンプレート・デプロイメントの概要」](#)を参照してください。タスクの詳細については、[914ページ「XML ファイルを使用した監視構造のデプロイ方法」](#)を参照してください。
- SiteScope が HPOM と統合されると、HPOM 内から複数の SiteScope インスタンスからのテンプレートを一元的に管理およびデプロイできます。詳細については、[256ページ「HPOM からのテンプレートの中央管理」](#)を参照してください。

その後、ソース・テンプレートを変更する場合、テンプレート変更適用ウィザードを使用すると、テンプレートによってデプロイされたすべての SiteScope オブジェクトに変更を自動的に適用できます。テンプレートの更新の詳細については、[890ページ「テンプレート・デプロイメントの更新」](#)を参照してください。

注意事項および制限事項

- テンプレートに同じ名前の複数のグループが含まれている場合は、各グループが異なる親グループであっても、テンプレート・デプロイメントは失敗します。
- テンプレート・グループ名に変数が含まれていない場合は、グループ名が一意でないため、同じディレクトリ内にテンプレートを複数回デプロイすると失敗します。
- モニタ・カウンタの正規表現を使用するテンプレートをデプロイする場合、**[リモート サーバでモニタプロパティを検証]** オプションを選択する必要があります。選択しないとモニタ・デプロイメントが失敗します。

CSV ファイルを使用したテンプレートのデプロイ

テンプレートを作成、設定した後で、SiteScope 階層にデプロイします。テンプレートは、ユーザ・インタフェースから直接デプロイできます(878ページ「[ユーザ・インタフェースを使用したテンプレートのデプロイ方法](#)」を参照)。または外部のカンマ区切り(CSV)ファイルからデプロイできます。CSV ファイルは、テンプレートに定義された変数値のデプロイに使用します。

SiteScope CSV テンプレート・デプロイメントを使用すると、次のような利点があります。

- 1 つの CSV ファイルですべてのテンプレート変数値の入力と更新がしやすくなるため、一括デプロイメントの実行にはユーザ・インタフェースよりも適しています。
- ユーザ・インタフェースでデプロイメントごとに変数値を手動で入力しなくても、複数のデプロイメントを 1 回で実行できます。
- テンプレートはサイレントにデプロイされます(テンプレート・デプロイメント要求はキューに送信され、デプロイメントはバックグラウンドで処理されます)。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、< SiteScope のルート・ディレクトリ > \logs\silent_deployment.log に記録されます。

注: サイレント・デプロイメントの最大キュー長は 2000 です(CSV ファイル内の各行がキュー内の 1 デプロイメントを表します)。

このタスクの実行方法の詳細については、880ページ「[CSV ファイルを使用したテンプレートのデプロイ方法](#)」を参照してください。

ユーザ・インタフェースを使用したテンプレートのデプロイ方法

このタスクでは、ユーザ・インタフェースを使用して SiteScope テンプレートをデプロイする手順について説明します。

ヒント:

- 単一テンプレートの一括デプロイメントの場合、CSV ファイルを使用してテンプレートをデプロイすることもできます。概念の詳細については、[877 ページ「CSV ファイルを使用したテンプレートのデプロイ」](#)を参照してください。
- また、SiteScope ユーザ・インタフェースの外部にある XML ファイルを使用してテンプレートをデプロイおよび更新することもできます。トピックの詳細については、[905 ページ「自動テンプレート・デプロイメントの概要」](#)を参照してください。

このタスクには次の手順が含まれています。

- [878 ページ「前提条件」](#)
- [878 ページ「単一のテンプレートのデプロイ - オプション」](#)
- [879 ページ「複数のテンプレートのデプロイ - オプション」](#)
- [879 ページ「結果」](#)

1. 前提条件

- SiteScope 監視テンプレートを作成するか、テンプレート・ツリーから既存のユーザ定義テンプレートを選択します。タスクの詳細については、[840 ページ「テンプレートを使用した SiteScope 監視ソリューションの設定方法」](#)を参照してください。
- 複数のサーバにモニタを同時にデプロイする場合、テンプレート・リモート・サーバの Host 値として変数を使用する必要があります。デプロイメントのホスト変数に、複数のサーバ名をカンマ(",")区切りで指定します。

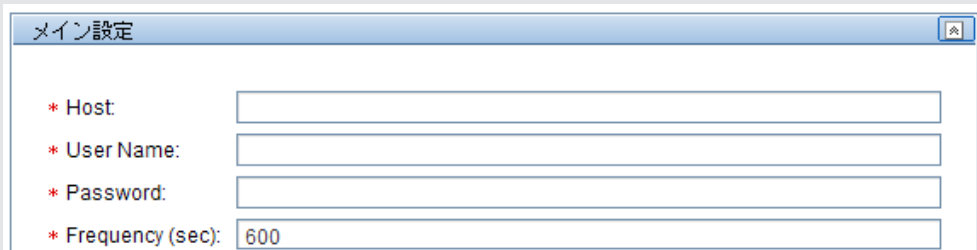
2. 単一のテンプレートのデプロイ - オプション

- テンプレートをグループにデプロイします。
 - モニタ・ツリーで、テンプレートをデプロイするグループを右クリックし、[\[テンプレートのデプロイ\]](#)を選択します。[\[テンプレートの選択\]](#)ダイアログ・ボックスで、デプロイするテンプレートを選択します。ユーザ・インタフェースの詳細については、[397 ページ「\[テンプレートの選択\] ダイアログ・ボックス」](#)を参照してください。
 - テンプレート・ツリーで、デプロイするテンプレートを右クリックし、[\[テンプレートのデプロイ\]](#)を選択します。[\[グループの選択\]](#)ダイアログ・ボックスで、テンプレートをデプロイするグループを選択します。または、[\[新規グループ\]](#)ボタンをクリックし、テンプレートをデプロイできる新しいグループを作成することもできます。ユーザ・インタフェースの詳細については、[883 ページ「\[グループの選択\] ダイアログ・ボックス」](#)を参照してください。
- [\[デプロイメント値\]](#)ダイアログ・ボックスで、表示される入力ボックスに必要な変数値を入力します。表示される入力ボックスは、テンプレート・オブジェクトで使用するテンプレート変数に対応します。ユーザ・インタフェースの詳細については、[885 ページ「\[デプロイメント値\] ダイアロ](#)

グ・ボックス」を参照してください。

例 :

テンプレート・ツリーの[**Template Examples**]フォルダから[**Windows basic template**]を SiteScope グループにデプロイする場合、次の入力ボックスが[デプロイメント値]入力ウィンドウに表示されます。



メイン設定

* Host:

* User Name:

* Password:

* Frequency (sec):

3. 複数のテンプレートのデプロイ - オプション

- a. テンプレート・ツリーでテンプレート・コンテナを右クリックして、[テンプレートのデプロイ]を選択します。[グループの選択]ダイアログ・ボックスで、テンプレートをデプロイするグループを選択します。または、[新規グループ]ボタンをクリックし、テンプレートをデプロイできる新しいグループを作成することもできます。ユーザ・インタフェースの詳細については、[883ページ](#)「[グループの選択]ダイアログ・ボックス」を参照してください。
- b. [複数のテンプレートのデプロイ]ダイアログ・ボックスでは、次のとおりに実行します。
 - 左側の表示枠で、グループにデプロイするテンプレートを選択します。テンプレート・コンテナを選択する場合は、そのコンテナ内のすべてのテンプレートが自動的に選択されます。
 - 右側の表示枠で、表示される入力ボックスに必要な変数値を入力します。
 - 右側の表示枠の変数値セクションの下で、デプロイされているすべてのテンプレートの永続オプションを設定します。

ユーザ・インタフェースの詳細については、[884ページ](#)「[複数のテンプレートのデプロイ]ダイアログ・ボックス」を参照してください。

4. 結果

テンプレート・デプロイメントのサマリが表示されます。デプロイメントが成功すると、テンプレート・オブジェクトがモニタ・ツリーに追加されます。

テンプレート・デプロイメントが失敗すると、失敗の理由を示すメッセージが表示されます。ディスク領域モニタを例に挙げると、テンプレートで指定したディスク・ドライブがデプロイ先のサーバに存在していない場合、テンプレート・モニタのデプロイが失敗する可能性があります。

CSV ファイルを使用したテンプレートのデプロイ方法

このタスクでは、CSV ファイルを使用して SiteScope テンプレートをデプロイする手順について説明します。

ヒント:

- 代わりに、ユーザ・インタフェースを使用してテンプレートをデプロイすることもできます。詳細については、[878ページ「ユーザ・インタフェースを使用したテンプレートのデプロイ方法」](#)を参照してください。
- また、SiteScope ユーザ・インタフェースの外部にある XML ファイルを使用してテンプレートをデプロイおよび更新することもできます。このトピックの詳細については、[905ページ「自動テンプレート・デプロイメントの概要」](#)を参照してください。

このタスクには次の手順が含まれています。

- [880ページ「前提条件」](#)
- [880ページ「テンプレート変数の表示順序の確認」](#)
- [881ページ「CSV ファイルの作成」](#)
- [882ページ「テンプレートのデプロイ」](#)
- [882ページ「結果」](#)

1. 前提条件

- 新しい SiteScope 監視テンプレートを作成するか、既存のユーザ定義テンプレートまたはソリューション・テンプレートをテンプレート・ツリーから選択します。タスクの詳細については、[840ページ「テンプレートを使用した SiteScope 監視ソリューションの設定方法」](#)を参照してください。
- CSV ファイルを使用してソリューション・テンプレートをデプロイするには、最初にテンプレート・コンテナにソリューション・テンプレートのコピーを作成し、コピーしたテンプレートに次の手順の必要な変更を加えます。
- テンプレート・グループ名は、各デプロイメント・インスタンスで一意的な値にする必要があります。値を一意的にするには、グループ名に変数を使用し、各デプロイメントでそれぞれ異なる変数の値を入力します。[Template Examples] フォルダの %%host%% 変数を含む [Windows basic template] のグループ名で、この例を確認できます。

2. テンプレート変数の表示順序の確認

CSV ファイルを作成する前に、各変数のテンプレート変数の表示順序を確認します。CSV ファイルの列の順序は 0 から始まります。そのため、テンプレート変数の表示順序も 1 ではなく 0 から開始することを確認します。この確認により、デプロイメントで CSV ファイルの正しい列が変数に確実にマップされます。

テンプレート変数の表示順序を確認するには、次の手順を実行します。

- a. [テンプレート] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、CSV ファイルを使用してデプロイするテンプレートを含むテンプレート・コンテナを展開し、テンプレートを選択します。
- b. テンプレートのデプロイ時に最初に表示するテンプレート変数を選択し、[テンプレートでの表

示順序]の値が 0 であることを確認します。

- c. テンプレートの各変数でこの手順を繰り返し、正しい表示番号(毎回 1 ずつ増加)が使用されていることを確認します。

注: 各変数に表示順序を定義していない場合は、デプロイメントが失敗します。

3. CSV ファイルの作成

新しいテキスト・ファイルを開き、次の手順を行います。

- a. デプロイメントに必要な各変数の値をカンマ(,)区切りで入力します。テンプレートに定義したすべての変数を十分理解している必要があります。[テンプレートでの表示順序]フィールドに、表示される順序の値を入力します(表示順序 0 の変数から開始)。
- b. 各デプロイメント・インスタンスの別の行に変数の値を追加します。

注:

- 空白はフィールドの一部とみなされるため、無視されません。
- 必須でない変数または標準設定の変数の値は、CSV ファイルに入力する必要はありません。その代わりに、変数の値を示すカンマを前のカンマに続けて入力する必要があります(,)。ただし、あるモニタのデプロイメントに失敗すると、テンプレートのデプロイメントにも失敗します。
- 資格情報を使用する場合、パスワードは CSV ファイルで暗号化できないため、資格情報名の変数のみ使用することをお勧めします。

- c. ファイルを CSV 形式で保存します。テンプレートのデプロイ後、CSV ファイルの各行にグループが作成されます。

例:

CSV ファイルを使用して **Windows basic template** をデプロイするため、変数の表示順序がホスト(0)、ユーザ(1)、パスワード(2)、頻度の変数(3)に設定されていることを確認します。host テンプレート変数の設定を次に示します。

テンプレート変数 host

メイン設定

* 名前: host

表示名: Host

詳細: The host name of the windows host

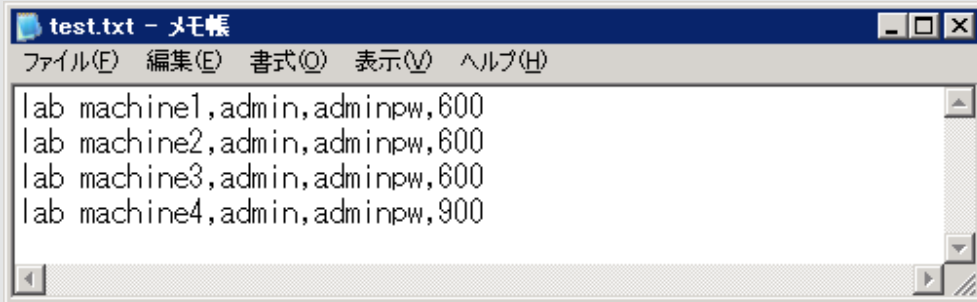
標準設定値:

テンプレートでの表示順序: 0

☐ パスワード変数

☒ 必須変数

次に、各デプロイメント・インスタンスに対して、CSV ファイルを作成してホスト、ユーザ、パスワード、頻度の値をカンマ区切りで入力します(これがテンプレートで使用する変数の表示順序です)。



頻度の変数はテンプレートで標準設定値が設定されているため、この変数が必須の場合でも CSV ファイルに値を入力する必要はありません(標準設定値の 600 秒を使用する場合)。

4. テンプレートのデプロイ

- a. テンプレートの CSV ファイルを作成したら、そのテンプレートをグループにデプロイします。
 - モニタ・ツリーで、テンプレートをデプロイするグループを右クリックし、**[CSV を使用してテンプレートをデプロイ]**を選択します。[テンプレートの選択]ダイアログ・ボックスで、デプロイするテンプレートを選択します。ユーザ・インタフェースの詳細については、[397ページ「\[テンプレートの選択\]ダイアログ・ボックス」](#)を参照してください。
 - テンプレート・ツリーで、デプロイするテンプレートを右クリックし、**[CSV を使用してテンプレートをデプロイ]**を選択します。[グループの選択]ダイアログ・ボックスで、テンプレートをデプロイするグループを選択します。または、**[新規グループ]**ボタンをクリックし、テンプレートをデプロイできる新しいグループを作成することもできます。ユーザ・インタフェースの詳細については、[883ページ「\[グループの選択\]ダイアログ・ボックス」](#)を参照してください。
- b. [CSV ファイルの選択]ダイアログ・ボックスで、テンプレート・デプロイメントに使用する CSV ファイルを選択します。ユーザ・インタフェースの詳細については、[887ページ「\[CSV ファイルの選択\]ダイアログ・ボックス」](#)を参照してください。

5. 結果

デプロイメントが成功すると、テンプレート・オブジェクトがモニタ・ツリーに追加されます。モニタ・ツリーは定期的に更新されます。ツリー・ツールバーの**[更新]**をクリックしてツリーを更新し、デプロイメントを確認します。

silent_deployment.log ファイルでデプロイメントのサマリを確認することもできます。ユーザ・インタフェースの詳細については、[1191ページ「\[ログファイル\]ページ」](#)を参照してください。

注: 入力したパスワードの値はログ・ファイルには表示されません。実際のパスワードの代わりに、一連のアスタリスク(****)が表示されます。

テンプレートのデプロイのユーザ・インタフェース

本項の内容




- 883ページ「[グループの選択]ダイアログ・ボックス」
- 884ページ「[複数のテンプレートのデプロイ]ダイアログ・ボックス」
- 885ページ「[デプロイメント値]ダイアログ・ボックス」
- 887ページ「[CSV ファイルの選択]ダイアログ・ボックス」

[グループの選択]ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、モニタ・ツリーでテンプレートのデプロイ先のグループを選択できます。または、SiteScope ノードを選択して、テンプレートのデプロイ先のグループを新規作成できます。

アクセス方法	[テンプレート]コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、デプロイするテンプレートを右クリックして、[テンプレートのデプロイ]または[CSV を使用してテンプレートをデプロイ]を選択します。
関連タスク	<ul style="list-style-type: none">• 840ページ「テンプレートを使用した SiteScope 監視ソリューションの設定方法」• 892ページ「関連グループ・デプロイメントへのテンプレートの更新適用方法」• 932ページ「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none">• 890ページ「テンプレート・デプロイメントの更新」• 927ページ「SiteScope ソリューション・テンプレート」• 88ページ「テンプレート・ツリー」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
 SiteScope	SiteScope ルート・グループを表します。SiteScope ルート・グループにテンプレートをデプロイするか、[新規グループ]ボタンをクリックして、テンプレートのデプロイ先のグループを新規作成できます。
	SiteScope モニタ・グループまたはサブグループ(有効化されたモニタを含む、モニタを含まない、または有効化されたモニタがない)を表します。テンプレートのデプロイ先のグループを選択するか、[新規グループ]ボタンをクリックして、テンプレートのデプロイ先のグループを新規作成します。
	SiteScope モニタの適切な機能をチェックするためにデプロイされる利用可能な状況モニタの集合を表します。


[複数のテンプレートのデプロイ] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、(各テンプレートを別々にデプロイするのではなく)複数のテンプレートを選択して、グループに同時にデプロイできます。

アクセス方法	[テンプレート]コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーでテンプレート・コンテナを右クリックして、[テンプレートのデプロイ]を選択します。[グループの選択]ダイアログ・ボックスで、テンプレートのデプロイ先のグループを選択して[OK]をクリックします。[複数のテンプレートのデプロイ]ダイアログ・ボックスが表示されます。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none">同時に複数のサーバにモニタをデプロイするには、サーバ名またはアドレスをカンマ(",")で区切って入力します。このとき、モニタによって参照されるテンプレート・リモート・サーバの Host プロパティの値は、変数値で構成される必要があり、かつ使用できる変数は 1 つのみです。デプロイ先グループの編集権限がある場合は、テンプレートの内容に関係なくテンプレートをデプロイできます。モニタ、リモート、警告などのテンプレート・オブジェクトの編集権限は必要ありません。モニタをデプロイできない場合は、エラー・メッセージが表示されます。これは、たとえば、ディスク領域モニタ・テンプレートをデプロイするときに、デプロイ先のサーバにディスク・ドライバが存在しない場合に発生します。
関連タスク	<ul style="list-style-type: none">840ページ「テンプレートを使用した SiteScope 監視ソリューションの設定方法」878ページ「ユーザ・インタフェースを使用したテンプレートのデプロイ方法」892ページ「関連グループ・デプロイメントへのテンプレートの更新適用方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none">890ページ「テンプレート・デプロイメントの更新」88ページ「テンプレート・ツリー」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します(ラベルのない要素は山括弧内に表示されます)。

UI 要素	説明
	テンプレートの選択(左側の表示枠)

UI 要素	説明
<テンプレート・ツリー>	<p>テンプレート・ツリーからデプロイするテンプレートを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> テンプレート・コンテナを選択すると、コンテナ内のすべてのテンプレートが選択されます。SiteScope ルートを選択すると、テンプレート・ツリー内のすべてのテンプレートが選択されます。 SiteScope ルートまたはテンプレート・コンテナの左側に表示される  アイコンは、SiteScope または特定のコンテナ内でテンプレートの一部が選択されていないことを示します。
テンプレート・デプロイメント設定(右側の表示枠)	
<テンプレート変数値>	<p>選択した各テンプレート内で使用される変数の一覧は、右側の表示枠の当該テンプレートのフル・パスとともにラベル下に表示されます。変数のデプロイメント値を入力します(必須の変数は赤のアスタリスクで示されます)。</p>
サイレント・デプロイメント	<p>テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信されます。SiteScope ではバックグラウンドでデプロイメントを処理するため、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、<SiteScope のルート・ディレクトリ> \logs\silent_deployment.log に記録されます。</p> <p>標準設定値：選択されていない</p>
リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証	<p>テンプレートがデプロイされるリモート・サーバと比較して、各テンプレートのモニタ設定プロパティが正しいかどうかを検証します。</p> <p>注：このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。</p> <p>標準設定値：選択されている</p>
リモート・サーバのテスト	<p>テンプレートのデプロイ後、テンプレート・リモート・サーバから作成した接続をテストします。テストはバックグラウンドで実行されるので、引き続き SiteScope を使用できます。</p> <p>標準設定値：選択されていない</p>

[デプロイメント値]ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、テンプレートのデプロイ時に変数の値を入力できます。

アクセス方法	<p>[テンプレート]コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、デプロイするテンプレート(変数が含まれていること)を右クリックして、[テンプレートのデプロイ]を選択します。[グループの選択]ダイアログ・ボックスで、テンプレートのデプロイ先のグループを選択して[OK]をクリックします。[デプロイメント値]ダイアログ・ボックスが開きます。</p>
--------	--

重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> 同時に複数のサーバにモニタをデプロイするには、サーバ名またはアドレスをカンマ(",")で区切って入力します。このとき、モニタによって参照されるテンプレート・リモート・サーバの Host プロパティの値は、変数値で構成される必要があります。かつ使用できる変数は 1 つのみです。 デプロイ先グループの編集権限がある場合は、テンプレートの内容に関係なくテンプレートをデプロイできます。モニタ、リモート、警告などのテンプレート・オブジェクトの編集権限は必要ありません。 モニタをデプロイできない場合は、エラー・メッセージが表示されます。これは、たとえば、ディスク領域モニタ・テンプレートをデプロイするときに、デプロイ先のサーバにディスク・ドライバが存在しない場合に発生します。
関連タスク	<ul style="list-style-type: none"> 840ページ「テンプレートを使用した SiteScope 監視ソリューションの設定方法」 878ページ「ユーザ・インタフェースを使用したテンプレートのデプロイ方法」 892ページ「関連グループ・デプロイメントへのテンプレートの更新適用方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> 890ページ「テンプレート・デプロイメントの更新」 88ページ「テンプレート・ツリー」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
<変数名>	テンプレートのデプロイ時に、テンプレート・オブジェクトで参照される各変数によって対応する入力ボックスが表示されます。変数名がテキスト入力ボックスのラベルとして使用されます。変数のデプロイメント値を入力します。
サイレント・デプロイメント	<p>テンプレートのデプロイメント要求をキューに送信し、SiteScope がバックグラウンドでデプロイメントを処理するように指定します。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、< SiteScope のルート・ディレクトリ> \logs\silent_deployment.log に記録されます。</p> <p>標準設定値：選択されていない</p>

UI 要素	説明
リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証	<p>テンプレートがデプロイされるリモート・サーバと比較して、テンプレートのモニタ設定プロパティが正しいかどうかを検証します。</p> <p>注：</p> <ul style="list-style-type: none"> このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。 モニタ・カウンタの正規表現を使用するテンプレートをデプロイする場合、このオプションを選択する必要があります。選択しないとモニタ・デプロイメントが失敗します。 カスタマイズ可能なモニタにテンプレートをデプロイする場合は、このチェック・ボックスをクリアしても問題はありません。これは、テンプレート内のモニタ設定プロパティは、テンプレートのデプロイ先のリモート・サーバに対してチェックする必要があるためです。 <p>標準設定値：選択されている</p>
リモート・サーバのテスト	<p>テンプレートのデプロイ後、テンプレート・リモート・サーバから作成した接続をテストします。テストはバックグラウンドで実行されるので、引き続き SiteScope を使用できます。</p> <p>注：このオプションは、リモート・サーバを含むテンプレートをデプロイする場合にのみ表示されます。</p> <p>標準設定値：選択されていない</p>

[CSV ファイルの選択] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、テンプレートのデプロイ時に使用する CSV ファイルを選択できます。

アクセス方法	<p>次のいずれかを使用します。</p> <ul style="list-style-type: none"> [テンプレート] コンテキストを開きます。テンプレート・ツリーで、デプロイするテンプレートを右クリックして、[CSV を使用してテンプレートをデプロイ]を選択します。[グループの選択] ダイアログ・ボックスで、テンプレートのデプロイ先のグループを選択して[OK]をクリックします。 [モニタ] コンテキストを開きます。モニタ・ツリーで、テンプレートのデプロイ先のグループを右クリックして[CSV を使用してテンプレートをデプロイ]を選択します。[テンプレートの選択] ダイアログ・ボックスで、デプロイするテンプレートを選択して[OK]をクリックします。
関連タスク	<ul style="list-style-type: none"> 840 ページ「テンプレートを使用した SiteScope 監視ソリューションの設定方法」 880 ページ「CSV ファイルを使用したテンプレートのデプロイ方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> 890 ページ「テンプレート・デプロイメントの更新」 88 ページ「テンプレート・ツリー」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
CSV ファイル	<p>テンプレートで定義された変数値をデプロイするために使用するカンマ区切り値 (CSV) ファイル。[選択] ボタンをクリックして、テンプレートのデプロイメントに使用する CSV ファイルを選択します。</p> <p>注： CSV 拡張子のファイルのみを使用できます。</p>
リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証	<p>テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。</p> <p>注：このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。</p> <p>標準設定値：選択されている</p>
リモート・サーバのテスト	<p>テンプレートのデプロイ後、テンプレート・リモート・サーバへの接続をテストします。テストはバックグラウンドで実行されるので、引き続き SiteScope を使用できます。</p> <p>注：このオプションは、リモート・サーバを含むテンプレートをデプロイする場合にのみ表示されます。</p> <p>標準設定値：選択されていない</p>

第48章

ユーザ定義テンプレート変更の適用

本章の内容

概念

- 890ページ「テンプレート・デプロイメントの更新」

タスク

- 892ページ「関連グループ・デプロイメントへのテンプレートの更新適用方法」

参照情報

- 897ページ「テンプレート変更適用ウィザード」

テンプレート・デプロイメントの更新

テンプレート変更適用ウィザードを使用すると、テンプレートを変更し、その変更をテンプレートによってデプロイされたすべての SiteScope オブジェクトに適用できます。しきい値の変更や、新しいモニタや警告が必要になるなど、テンプレート・オブジェクトに変更が必要な場合、テンプレートを 1 回更新すれば、各オブジェクトを個別に更新せずに変更をすべてのデプロイ済みグループに適用できます。

テンプレート変更適用ウィザードを使用して、実際の監視対象のデプロイメントがソース・テンプレートで定義された標準化デプロイメントに従う方法を表示できます。これにより、監視対象環境に発生した変化は監視側のインフラストラクチャで迅速に更新されます。また、監視側のインフラストラクチャでは、ソース・テンプレートの標準セットへの準拠が維持されます。

注: テンプレート変更適用ウィザードを実行するには「**グループを追加、編集、または削除します**」権限が必要で、[許可されているグループ] リストで権限が付与されているグループのみで実行できます。[許可されているグループ] リストに含まれていないデプロイ済みのグループは、ウィザードには表示されません。

テンプレートをデプロイすると、デプロイ済み親グループが自動的にそのソース・テンプレートに関連付けられます。その後、そのソース・テンプレートを変更した場合、テンプレート変更適用ウィザードを使用して、そのテンプレートでデプロイされた SiteScope オブジェクトに自動的にその変更を適用できます。このウィザードでは、各オブジェクトを個別に更新しなくても、ソース・テンプレートが更新されるたびに組織全体の関連するデプロイ済みグループを更新できます。

デプロイ済みグループは、テンプレートで設定したグループ、モニタ、警告、変数、リモート・サーバで構成されます。テンプレートのデプロイ方法の詳細については、[845 ページ「テンプレートのデプロイ」](#)を参照してください。

テンプレート変更適用ウィザードでは、次の方法でデプロイ済みグループを更新できます。

- ソース・テンプレートの変更のみをデプロイ済みグループに適用できます。これにより追加オブジェクトが作成されて既存のオブジェクトの値が更新されますが、ソース・テンプレートに存在しないその他のオブジェクトは変更されません。
- ソース・テンプレートの変更をデプロイ済みグループに適用して、SiteScope で上記の変更を実行し、デプロイされたグループからソース・テンプレートに含まれないその他すべての SiteScope オブジェクトを削除できます。
- 変更を公開するとき、SiteScope でルート・グループ下のグループへの変更の適用を無視できます。これにより、
 - テンプレートを既存のデプロイ済みグループ内にデプロイし、無視されるグループに含まれる SiteScope オブジェクトに影響を与えずに、デプロイ済みグループにテンプレートの変更を適用できます。これによってさまざまなデプロイ済みグループ内にテンプレートをデプロイできます。
 - ソース・テンプレートから削除されたデプロイ済みグループのオブジェクトを削除できます([更新による削除の有効化] オプションが選択されている場合)。ただし、ソース・テンプレートに含まれていないデプロイ済みグループで作成されたその他のオブジェクトは削除されません。
 - テンプレートを使ってモニタやグループをデプロイする場合、モニタおよびグループの依存関係もパブリッシュされます。これによってユーザが手動で操作しなくても、テンプレートがグループやモニタをツリーの正しい位置に自動的に書き込んだり、依存関係をいくつでも自動的に作成したりできるようになります。

- 変更を適用すると、手動で実行しなくてもモニタとグループの依存関係も更新されます(テンプレートは、グループとモニタをツリー内の適切な場所に自動的に書き込み、自動的に依存関係を作成します)。選択したテンプレート・モニタやグループの依存関係設定を、デプロイしたテンプレート・オブジェクトの依存関係設定に上書きしない場合は、[依存関係]パネルの[変更をパブリッシュするときに、依存関係を見捨てます]を選択します。選択したテンプレート・モニタとグループの依存関係設定が無視され、デプロイしたオブジェクト内の既存の依存関係設定が保持されます。詳細については、[329ページ「グループの依存関係の監視」](#)を参照してください。

テンプレート変更の適用方法の詳細については、[892ページ「関連グループ・デプロイメントへのテンプレートの更新適用方法」](#)を参照してください。

テンプレート変更適用ウィザードのユーザ・インタフェースの詳細については、[897ページ「テンプレート変更適用ウィザード」](#)を参照してください。

注意事項および制限事項

- テンプレートとデプロイ済みグループはIDによって内部でリンクされています。そのため、テンプレート名またはデプロイ済みグループのルート・グループが変更された場合でも、変更を適用できます。ただし、ルート・グループの[ソーステンプレート]プロパティを使用してテンプレートにグループを手動で関連付ける場合、デプロイメントでルート・グループ名が変更されたときには変更を適用できません。
- 変更を適用するには、ルート・グループ階層のすべての変更が成功する必要があります。グループへのいずれかの変更が失敗すると、そのグループへのすべての変更がロールバックされます。
- [テンプレート変更適用ウィザード]の[整合性の確認]ページに表示されていない[タグの検索/フィルタ]値に変更します。ただし、変更はデプロイ済みグループに適用されます。
- テンプレート変更適用ウィザードは、しきい値の設定で正規表現をサポートしません。
- レポートをPDFにエクスポートするときに、ほとんどの言語で文字を表示できるようにするには、PDFの表示に使用するマシンにArial Unicode MSフォントがインストールされている必要があります。詳細については、[871ページ「PDFへのエクスポート時のUnicodeフォントの有効化方法」](#)を参照してください。
- SiteScopeがインストールされているサーバのロケールに従って、テンプレート変更適用ウィザードにプロパティが表示されます。ブラウザのロケールは、プロパティの表示には影響しません。
- テンプレート変更適用ウィザードまたは自動デプロイメント更新([911ページ「XMLを使用したテンプレート変更適用」](#)を参照)を使用して既存の監視対象サーバを置換することはできませんが、必要に応じて監視対象サーバ自体のプロパティ値は変更できます。
- 参照可能なモニタ・カウンタでの変更をデプロイ済みグループに適用するには、モニタ・グループをデプロイするリモート・サーバに接続されている必要があります。
- SiteScope APIを使用して、テンプレートでデプロイされたグループ、モニタ、警告、リモート・サーバを更新することもできます。詳細については、[43ページ「SiteScope設定APIの使用」](#)を参照してください。
- 変更がカスタム可能なモニタ・タイプに適用されると、変更が実行された後、モニタは一時的に無効になってから変更が適用され、有効な状態に復帰します。

関連グループ・デプロイメントへのテンプレートの更新適用方法

このタスクでは、テンプレート変更適用ウィザードを使用してテンプレートの変更を関連グループ・デプロイメントに適用する手順について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- 892ページ「ウィザードの実行」
- 893ページ「構造および内容の相違の表示」
- 894ページ「新規変数の値の追加」
- 895ページ「テンプレート変更適用の結果の確認」
- 895ページ「サマリ・レポートへのテンプレート変更のエクスポート - オプション」

1. ウィザードの実行

ウィザードを実行するには、テンプレート・ツリーでテンプレートを右クリックして、**[変更の適用]**を選択します。最初のページで、更新する関連テンプレート・グループを選択します。さらに次のオプションも選択できます。

- **[更新による削除の有効化]**を選択すると、ソース・テンプレートに含まれない SiteScope オブジェクトがデプロイ済みグループから削除されます。
- **[リモート サーバでテンプレートの変更を検証]**を選択すると、テンプレートのデプロイ先のリモート・サーバと比較し、選択したテンプレートのモニタ設定変更が正しいかどうかを検証されます。

注: カスタム・モニタ・テンプレートの変更を適用する場合、このチェックボックスをクリアしても何の影響ありません。これは、テンプレート内モニタ設定プロパティが、テンプレートがデプロイ中のリモート・サーバと照合される必要があるためです。

ユーザ・インタフェースの詳細については、897ページ「テンプレート変更適用ウィザード」を参照してください。

例 - デプロイ済みのグループの選択**デプロイ済みグループの選択**

テンプレート変更を適用するデプロイ済みテンプレートと関連するグループを選択します。



☐ 更新で削除できます

(ソース テンプレートに含まれないすべての SiteScope オブジェクトをデプロイ済みテンプレートから削除できます)

☐ リモート サーバでテンプレートの変更を検証

2. 構造および内容の相違の表示

テンプレートとデプロイ済みグループの構造上の相違を表示します。[整合性の確認]のユーザ・インタフェースの詳細については、[897ページ「\[整合性の確認\]ページ」](#)を参照してください。

テンプレート・オブジェクトの内容の相違を表示するには、[相違の表示]リンクをクリックして[コンテンツの変更]ダイアログ・ボックスを開きます。このリンクは、内容の相違があるテンプレート・オブジェクトにのみ表示されます。[コンテンツの変更]のユーザ・インタフェースの詳細については、[898ページ「\[コンテンツの変更\]ダイアログ・ボックス」](#)を参照してください。

例 - [整合性の確認] ページ

整合性の確認

テンプレートとデプロイ済みグループ間の構造上の相違を表示します。
 テンプレートとデプロイ済みグループオブジェクトのプロパティ間の相違がある場合は、
 [相違の表示] リンクをクリックして、これらの相違を表示できます。

変更を適用するデプロイ済みグループの総数: 2
 2 のデプロイ済みグループに構造およびコンテンツの相違があります

グループ名	コンテンツの差異	
[-] SiteScope\Lab Te...		<input checked="" type="checkbox"/>
[-] Memory on 16...		
[-] Cpu monitor o...		
[-] Unix リモート ...		
[-] 16.148.24.2...	相違の表示	
[+] SiteScope\Lab Te...		<input checked="" type="checkbox"/>



例 - [コンテンツの変更] ページ

コンテンツの変更

オブジェクトのプロパティに行われる内容の変更の詳細をレビューします。

タイプ: モニタ

名前: Cpu monitor on localhost

プロパティ名	現在の値	置換する値	アクション
すべて更新	600	60	Modified
エラー条件	utilizationPercentage == ...	utilizationPercentage == 90e...	Modified
エラーの検証		on	Added

3. 新規変数の値の追加

テンプレートにある新規変数に値を追加します。必須の変数値は、赤のアスタリスク(*)で示されます。既存の変数の値を編集することもできます。[適用] をクリックするとウィザードが完了し、テンプレートの更新が適用されます。

ユーザ・インタフェースの詳細については、899 ページ「[変数の変更] ページ」を参照してください。

例 - [変数の変更] ページ

変数の変更

デプロイされたグループの新しい変数に値を追加するか既存の変数値を編集する、またはその両方を行ってください。

変更を適用するデプロイ済みグループの総数: 4

4 のデプロイ済みグループに既存の変数値があるか変数がありません

既存の値を持つ変数を持つ、あるいは変数のないデプロイ済みグループは以下の通りです。

変数値を持つグループは展開でき、必要に応じて変数値を変更できます。

変数名	変数の値	
SiteScopeLab Test 4...		<input checked="" type="checkbox"/>
user*		
host		
frequency	60	
test	Cp1252	
password	
SiteScopeLab Test 1...		<input checked="" type="checkbox"/>
user*		
host		
frequency	600	
test	Cp1252	
password	
SiteScopeLab Test...		<input checked="" type="checkbox"/>

4. テンプレート変更適用の結果の確認

テンプレート変更適用の結果を確認し、必要な場合は、更新に失敗したデプロイ済みグループに変更を再適用します。[結果サマリの適用] のユーザ・インタフェースの詳細については、900 ページ「[結果サマリの適用] ページ」を参照してください。

例 - [結果サマリの適用] ページ

結果サマリの適用

テンプレート変更による影響を受けるデプロイ済みグループのサマリを表示します。

PDF レポート アイコンをクリックして、デプロイ済みグループに行われた変更を確認してください。

1 個のデプロイ済みグループが正常に更新されました。

1 個のデプロイ済みグループが更新されませんでした。

変更されなかったルート グループ:

グループ名	理由
SiteScopeLab monitors\Windows m...	
Memory on cinderella(1)	Parameter error occurred propertyThe fo...
Cpu monitor on cinderella	Parameter error occurred propertyThe fo...
Microsoft Windows リモート サーバ	Parameter error occurred propertyThe fo...
cinderella remote windows	更新できませんでした

5. サマリ・レポートへのテンプレート変更のエクスポート - オプション

任意で、テンプレート変更適用の結果をサマリ・レポート(PDF ファイル)にエクスポートできます。サマリ・レポートの詳細については、[901 ページ「テンプレート変更適用 サマリ・レポート」](#)を参照してください。

テンプレート変更適用ウィザード

このウィザードでは、デプロイ済みグループのテンプレートの整合性を確認し、ソース・テンプレートが更新されるたびにテンプレートによってデプロイされる SiteScope オブジェクトを更新できます。

アクセス方法	[テンプレート]コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、テンプレートを右クリックして[変更の適用]を選択します。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none">テンプレート変更適用ウィザードを実行するには「グループを追加、編集、または削除します」権限が必要で、[許可されているグループ]リストで権限が付与されているグループのみで実行できます。[許可されているグループ]リストに含まれていないデプロイ済みグループは、ウィザードには表示されません。選択したテンプレートに関連付けられたデプロイメントがある場合にのみ、ウィザードが開きます。テンプレートのデプロイの詳細については、845ページ「テンプレートのデプロイ」を参照してください。
関連タスク	892ページ「関連グループ・デプロイメントへのテンプレートの更新適用方法」
ウィザード・マップ	このウィザードには、次のページが含まれています。 [デプロイ済みグループの選択]ページ > 897ページ「[整合性の確認]ページ」 > 898ページ「[コンテンツの変更]ダイアログ・ボックス」 > 899ページ「[変数の変更]ページ」 > 900ページ「[結果サマリの適用]ページ」 > (901ページ「テンプレート変更適用サマリ・レポート」)
関連情報	<ul style="list-style-type: none">890ページ「テンプレート・デプロイメントの更新」88ページ「テンプレート・ツリー」

[整合性の確認]ページ

このウィザードでは、ソース・テンプレートとデプロイ済みグループ間の構造上の差異を表示可能にし、デプロイ済みグループ・オブジェクトの内容の差異へのリンクを提供します。

重要な情報	<ul style="list-style-type: none">このウィザードに関する一般情報は、897ページ「テンプレート変更適用ウィザード」で入手できます。[テンプレート変更適用ウィザード]の[整合性の確認]ページに表示されていない[タグの検索/フィルタ]値に変更します。ただし、変更はデプロイ済みグループに適用されます。
ウィザード・マップ	897ページ「テンプレート変更適用ウィザード」 には、次のページが含まれています。 897ページ「テンプレート変更適用ウィザード」 > 897ページ「[整合性の確認]ページ」 > (898ページ「[コンテンツの変更]ダイアログ・ボックス」) > 899ページ「[変数の変更]ページ」 > 900ページ「[結果サマリの適用]ページ」 > (901ページ「テンプレート変更適用サマリ・レポート」)
関連情報	890ページ「テンプレート・デプロイメントの更新」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
<N> のデプロイ済みグループに構造およびコンテンツの相違があります	ソース・テンプレートとの間に構造上または内容の差異があるデプロイ済みグループとグループ・オブジェクト(サブグループ、モニタ、警告、リモート・サーバ)を表示します。
<N> のデプロイ済みグループに構造およびコンテンツの相違がありません	ソース・テンプレートとの構造または内容の差異がないデプロイ済みグループを表示します。デプロイメントの差異がないグループは、折りたたまれて表示されます。
グループ名	<p>デプロイ済みグループとそのすべてのオブジェクト(サブグループ、モニタ、警告、警告アクション、リモート・サーバ)の名前を表示します。オブジェクトの構造上の差異は、グループ・ツリー階層に次のテキストと色分けで表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 追加済み: デプロイ済みグループに追加された新規オブジェクトを示します。オブジェクトは緑色で表示されます。 ● テンプレート内に存在しない([更新による削除の有効化]オプションが[デプロイ済みグループの選択]ページで選択されていない場合のみ利用可能): ソース・テンプレートに存在しないオブジェクトを示します。オブジェクトは青色で表示されます。 ● 無視: [変更を公開するとき、グループを無視する]オプションが選択されたサブグループが表示されます。無視されたグループが灰色で表示されます。 ● 削除([更新による削除の有効化]オプションが[デプロイ済みグループの選択]ページで選択されている場合のみ利用可能): デプロイ済みグループから削除されるオブジェクトを示します。オブジェクトは赤色で表示されます。 ● 未使用: テンプレート・リモート・サーバが使用されていないことを示します。未使用のリモート・サーバは灰色で表示されます。
コンテンツの差異	<p>プロパティ、しきい値、その他の構造上以外の差異での内容の差異を含むオブジェクトでは、[相違の表示]リンクが表示されます。リンクをクリックすると[コンテンツの変更]ダイアログ・ボックスが開き、デプロイ済みグループまたはオブジェクトのプロパティ・レベルの差異が表示されます。ユーザ・インタフェースの詳細については、898ページ「[コンテンツの変更]ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p> <p>デプロイされたテンプレート・リモート・サーバは、[Microsoft Windows リモートサーバ]または[UNIX リモートサーバ]セクションに表示されます。Microsoft Windows/UNIX リモート・サーバにリモート・サーバがすでに存在する場合、テンプレートのデプロイ時にリモート・サーバは再デプロイされません。</p>

[コンテンツの変更]ダイアログ・ボックス

このウィザード・ページでは、更新に選択したオブジェクトのすべてのプロパティ、現在の値と置換する値、プロパティ・アクションの状態のリストを表示できます。

重要な情報	このウィザードに関する一般情報は、897ページ「 テンプレート変更適用ウィザード 」で入手できます。
ウィザード・マップ	897ページ「 テンプレート変更適用ウィザード 」には、次のページが含まれています。 897ページ「 テンプレート変更適用ウィザード 」 > 897ページ「 [整合性の確認] ページ 」 > (898ページ「 [コンテンツの変更]ダイアログ・ボックス 」) > 899ページ「 [変数の変更] ページ 」 > 900ページ「 [結果サマリの適用] ページ 」 > (901ページ「 テンプレート変更適用サマリ・レポート 」)
関連情報	890ページ「 テンプレート・デプロイメントの更新 」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
タイプ	オブジェクト・タイプ(グループ、モニタ、警告、警告アクション、リモート)。
名前	選択したオブジェクトの名前。
プロパティ名	変更の適用で影響を受けるプロパティの名前。
現在の値	デプロイ済みグループの既存のプロパティ値。プロパティがデプロイ済みグループに追加される場合は、この値は空です。 注：既存のパスワードのプロパティは暗号化されて表示されます。
置換する値	テンプレートの置換するプロパティ値。プロパティがデプロイ済みグループから削除される場合は、この値は空です。 注： <ul style="list-style-type: none"> 置換するパスワードのプロパティは暗号化されて表示されます。 テンプレート・モニタの[依存対象]プロパティを変更すると、依存関係にあるテンプレート・モニタのフル・パスが表示されます (SiteScope\tc\template\group\CPU など)。
アクション	アクションの状態(「Modified」、「Added」、「Deleted」、「Ignored」)。ベースラインしきい値に変更がない場合、ベースライン・モニタには「Ignored」状態が使用されます。

[変数の変更] ページ

このウィザードでは、デプロイ済みグループの新規変数に値を追加できます。既存の変数の値を編集することもできます。

重要な情報	このウィザードに関する一般情報は、897ページ「 テンプレート変更適用ウィザード 」で入手できます。
-------	--

ウィザード・マップ	897ページ「テンプレート変更適用ウィザード」には、次のページが含まれています。 897ページ「テンプレート変更適用ウィザード」 > 897ページ「[整合性の確認] ページ」 > (898ページ「[コンテンツの変更] ダイアログ・ボックス」) > 899ページ「[変数の変更] ページ」 > 900ページ「[結果サマリの適用] ページ」 > (901ページ「テンプレート変更適用サマリ・レポート」)
関連情報	890ページ「テンプレート・デプロイメントの更新」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。


UI 要素	説明
変数名	デプロイ済みグループの新規または既存の変数の名前。赤色のアスタリスクは、変数の値が必須であることを示します。 注：値が入力された変数を含むグループを展開して、必要に応じてその変数を変更できます。変数が含まれないグループは展開できません。
変数の値	デプロイ済みグループに追加された新規変数の値。既存の変数の値を編集することもできます。 注： <ul style="list-style-type: none">リモート・サーバの変数の値は、読み取り専用で変更できません。変数文字列にハイパーテキストのタグが含まれていると、その文字列が切り捨てられて[変数の値]ボックスに正しく表示されません(文字列の一部がテキスト・ラベルに表示されます)。

[結果サマリの適用] ページ

このウィザード・ページでは、適用されたテンプレートの更新のサマリを表示できます。

重要な情報	このウィザードに関する一般情報は、897ページ「テンプレート変更適用ウィザード」で入手できます。
ウィザード・マップ	897ページ「テンプレート変更適用ウィザード」には、次のページが含まれています。 897ページ「テンプレート変更適用ウィザード」 > 897ページ「[整合性の確認] ページ」 > (898ページ「[コンテンツの変更] ダイアログ・ボックス」) > 899ページ「[変数の変更] ページ」 > 900ページ「[結果サマリの適用] ページ」 > (901ページ「テンプレート変更適用サマリ・レポート」)
関連情報	890ページ「テンプレート・デプロイメントの更新」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
	エクスポート :各 ルート・グループの適用の結果を PDF ファイルにエクスポートします。詳細については、901 ページ「テンプレート 変更 適用 サマリ・レポート」を参照してください。
グループ名	ルート・グループ名とグループのオブジェクト(サブグループ、モニタ)を表示します。
理由	SiteScope でデプロイ済みグループへの変更を適用できない場合、失敗した原因がそのグループの各 モニタに表示されます。


テンプレート 変更 適用 サマリ・レポート

このレポートには、デプロイ済みグループに適用されるテンプレート変更に関する情報が表示されます。更新に失敗したまたは無視されたグループ・オブジェクトの情報も表示されます。結果はオブジェクト・レベル(グループ、モニタ、警告、警告アクション、リモート・サーバ)で表示されます。

テンプレート 変更 適用 サマリ レポート

変更を適用するデプロイ済みグループの総数: 4
 更新されていないデプロイ済みグループの総数: 0
 正常に更新されたデプロイ済みグループの総数: 4

正常に変更されたデプロイ済みグループ				
デプロイ済みルート グループ: SiteScope\Lab Test 4\Unix monitors for 16.16.16.16				
タイプ	名前	理由	メッセージ	
モニタ	SiteScope\ Lab Test 4\ Unix monitors for 16.16.16.16 Memory on 16.16.16.16	未変更		
	プロパティ 名	デプロイメント 値 (以前)	テンプレート 値 (現在)	プロパティ 値の アクション
	すべて更新	150	120	正常に変更 されました
リモート サーバ	16.16.16.16 remote unix	正常に変更 されました		

アクセス方法	[テンプレート変更適用ウィザード]の[結果サマリの適用]ページで、[レポート 
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> このウィザードに関する一般情報は、897ページ「テンプレート変更適用ウィザード」で入手できます。 テンプレート変更適用サマリ・レポートのPDF版は、Firefox 2.x ではサポートされていません。 レポートをPDFにエクスポートするときに、ほとんどの言語で文字を表示できるようにするには、PDFの表示に使用するマシンにArial Unicode MSフォントがインストールされている必要があります。詳細については、871ページ「PDFへのエクスポート時のUnicodeフォントの有効化方法」を参照してください。
関連タスク	892ページ「関連グループ・デプロイメントへのテンプレートの更新適用方法」
ウィザード・マップ	<p>897ページ「テンプレート変更適用ウィザード」には、次のページが含まれています。</p> <p>897ページ「テンプレート変更適用ウィザード」 > 897ページ「[整合性の確認]ページ」 > (898ページ「[コンテンツの変更]ダイアログ・ボックス」) > 899ページ「[変数の変更]ページ」 > 900ページ「[結果サマリの適用]ページ」 > (901ページ「テンプレート変更適用サマリ・レポート」)</p>
関連情報	890ページ「テンプレート・デプロイメントの更新」

レポートの内容

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
<レポートのサマリ>	変更の適用対象として選択したルート・グループの総数。変更成功したグループ数と失敗したグループ数を含みます。
[デプロイ済みルートグループ<グループ・パス>]	<p>テンプレートの変更による更新に成功または失敗した、デプロイ済みグループとすべてのグループ・オブジェクトの名前。更新されなかったデプロイ済みグループが最初に表示されます。</p> <p>注：変更を適用するには、ルート・グループ階層のすべての変更が成功する必要があります。グループ・オブジェクトへのいずれかの変更が失敗すると、そのグループへのすべての変更がロール・バックされます。</p>
タイプ	オブジェクト・タイプ(グループ、モニタ、警告、警告アクション、リモート・サーバ)。
名前	オブジェクトの名前とそのパス。
理由	オブジェクトの適用状態(「Successfully added」, 「Successfully modified」, 「Successfully deleted」, 「Failed to add」, 「Failed to modify」, 「Failed to delete」, Ignored」, 「Unchanged」)。

UI 要素	説明
メッセージ	テンプレートの変更によって更新されなかったデプロイ済みグループ・オブジェクトの、変更の適用に失敗した理由。
<プロパティの詳細>	<p>内容が変更されたデプロイ済みグループ・オブジェクトの場合</p> <ul style="list-style-type: none">• プロパティ名 : 更新されたプロパティの名前。• デプロイメント値 (以前) : デプロイ済みグループの以前のプロパティ値。プロパティがデプロイ済みグループに追加された場合は、この値は空です。以前のパスワード変数は暗号化されて表示されます。• テンプレート値 (現在) : デプロイ済みグループの置換するプロパティ値。これがテンプレートの現在のプロパティ値です。プロパティがデプロイ済みグループから削除された場合は、この値は空です。置換するパスワード変数は暗号化が解除されて表示されます。• プロパティ値のアクション : プロパティ値に加えられた変更のタイプ(「正常に変更されました」、「正常に追加されました」、「正常に削除されました」)。

第49章

自動テンプレート・デプロイメント

本章の内容

概念

- 905ページ「自動テンプレート・デプロイメントの概要」
- 906ページ「XML ファイルの作成と操作」
- 907ページ「XML ファイルの例および変数」
- 910ページ「XML バリデータ」
- 911ページ「XML を使用したテンプレート変更適用」
- 913ページ「デプロイメントの結果」

タスク

- 914ページ「XML ファイルを使用した監視構造のデプロイ方法」
- 917ページ「テキストの暗号化方法」
- 918ページ「デプロイメントの更新方法」

参照情報

- 920ページ「XML タグ参照情報」
- 923ページ「[自動デプロイメント XML の生成] ユーザ・インタフェース」
- 924ページ「トラブルシューティングと制限事項」

自 動 テンプレート・デプロイメント の 概 要

SiteScope では、SiteScope ユーザ・インタフェースの外 部にある XML ファイルを使用して SiteScope テンプレートまたはソリューション・テンプレートを自動的にデプロイできます。XML ファイルを使用して、テンプレートで定義したオブジェクトをデプロイします。このテンプレートには親グループを含める必要があります。また、サブグループ、モニタ、リモート・サーバ(1 つ)、警告、変数定義を含めることができます。XML ファイルを編集して、変数定義を必須変数、グローバル変数、インスタンス変数に割り当てることができます。

テンプレートの作成の詳細については、[826 ページ「SiteScope テンプレートの概要」](#)を参照してください。ソリューション・テンプレートを使った作業の詳細については、[928 ページ「ソリューション・テンプレートの概要」](#)を参照してください。

自動テンプレート・デプロイメントを使用して、テンプレートの変更をデプロイ済みグループに適用することもできます。自動テンプレート・デプロイメントでは、テンプレート変更適用ウィザードと同じ機能が使用されます。このウィザードの動作の詳細については、[890 ページ「テンプレート・デプロイメントの更新」](#)を参照してください。

ユーザ・インタフェースの代わりに自動テンプレート・デプロイメントを使用してテンプレートをデプロイし、テンプレートの変更をデプロイ済みグループに適用できます。それは、スクリプトで作業して複数の SiteScope にデプロイするためのユーザ・インターフェースよりもより適しています。これは、自動テンプレート・デプロイメントが標準 XML スクリプティングを使用して、1 つのファイルを使用して複数の SiteScope にデプロイできるからです。

XML ファイルの作成と操作

次のいずれかの方法で XML ファイルを作成します。

- テキストがサポートされている任意のツールで XML を生成および編集します。ファイルは、SiteScope ファイル・ディレクトリにある XSD ファイルに基づいている必要があります。XSD ファイルは基本となる XML ファイルで、各自のバージョンのデプロイメント XML を作成するのに適したタグ、要素、属性がすでに含まれています。
- SiteScope インタフェースを使用して、テンプレート・コンテナまたはソリューション・テンプレートからデプロイメント XML ファイルを生成します。各テンプレート・コンテナおよびソリューション・テンプレートには、該当の自動テンプレート・デプロイメント XML ファイルを生成するためのオプションがあります。詳細については、[923 ページ「\[自動デプロイメント XML の生成\] ユーザー・インタフェース」](#)を参照してください。

テンプレートまたはソリューション・テンプレートから生成する場合も、手動で作成する場合も、使用する XML は有効な XML で、ATD スキーマ(XSD)に適合している必要があります。専用ツールを使用して XML ファイルを検証できます。

XML ファイルのデプロイは、関連するテンプレートまたはソリューション・テンプレートがモニタ・ツリーにある対象 SiteScope によって異なります。テンプレートまたはソリューション・テンプレートをデプロイするには、関連するテンプレートまたはソリューション・テンプレートがある対象 SiteScope の永続フォルダに XML ファイルをコピーします。複数のデプロイメントを 1 つの XML ファイルにグループ化できます。

XML ファイルの例および変数

自 動 テンプレート・デプロイメント・ファイルに含まれているすべての XML タグ、要素、属性の詳細については、920 ページ「XML タグ参照情報」を参照してください。

各 自 動 テンプレート・デプロイメント XML は、必ず次の宣言で始まります。

- **<?xml version="1.0" encoding="UTF-8" ?>** これは、UTF-8 文字エンコーディングの XML であることを宣言しています。
- **<sitescope:sitescopeRoot ...>** これは、スキーマの宣言です。URL が記載されますが、どのようなときでも SiteScope 外部の場所に接続することはありません。

XML ファイルの各 セクションは次のいずれかのタグで始まり、そのアクションを実行するための指示があります。

- **<sitescope:templateDeployment>** テンプレートまたはソリューション・テンプレートをデプロイします。同じ XML ファイルに複数のインスタンスを含めることができます。
- **<sitescope:templateDeployUpdate>** 既存のデプロイメントに変更が適用されます。

各アクション内で、次を指定する必要があります。

- **<deploy:fullPathToTemplate>** ユーザ・インタフェースの SiteScope ツリー内のテンプレートへのパス。SiteScope ルート・ノードは含まれません。XML ファイルの例では、この値は `Templates\Windows` になります。
- **<deploy:fullPathToDestinationGroup>** アクションを実行するデプロイ先グループの SiteScope ツリー内のパス。たとえば、XML ファイルの例では、テンプレート・グループ・オブジェクトはグループ `SiteScope\Windows_Monitors` のサブグループとして作成されます。

本項の内容

- 907 ページ「XML ファイルの例」
- 908 ページ「変数」

XML ファイルの例

次に、自 動 テンプレート・デプロイメント XML ファイルの例を示します。このファイルは、ユーザ・インタフェースから生成されました。

```

<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<!-- SiteScope deployment descriptor -->
<sitescope:sitescopeRoot xmlns:sitescope="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance" xmlns:deploy="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance" xsi:schemaLocation="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance" />
<!-- To deploy use "templateDeployment", to update an existing deployment use templateDeploymentUpdate
(this element can have the attribute enableDeleteOnUpdate with values of yes/no) -->
<sitescope:templateDeployment>
  <!-- Path to source template in SiteScope tree (not including the root node) -->
  <deploy:fullPathToTemplate>Template Examples/Windows basic template
</deploy:fullPathToTemplate>
  <!-- Path to destination group in SiteScope tree (not including the root node). New group will be
  created if need be -->
  <deploy:fullPathToDestinationGroup></deploy:fullPathToDestinationGroup>
  <deploy:login user="admin99" password="(sisp)n9JRVAlxIsq=" />
  <!-- Mandatory variables names -->
  <deploy:mandatoryFields>host frequency password user</deploy:mandatoryFields>
  <!-- Global values for variables in current template -->
  <deploy:globalVariables>
    <deploy:variables encrypted="no" name="frequency" value="600"/>
    <deploy:variables encrypted="no" name="password" value="(sisp)d5JLOSwaVfe="/>
    <deploy:variables encrypted="no" name="user" value="admin"/>
  </deploy:globalVariables>
  <!-- Add here local variables for a deploy instance (overrides global variables with same name) -->
  <deploy:templateInstanceDeployVariable>
    <deploy:variables encrypted="no" name="group" value="Critical_monitors"/>
    <deploy:variables encrypted="no" name="frequency" value="600"/>
  </deploy:templateInstanceDeployVariable>
  <deploy:templateInstanceDeployVariable connectToServer="no">
    <deploy:variables encrypted="no" name="group" value="Minor_monitors"/>
    <deploy:variables encrypted="no" name="frequency" value="6000"/>
  </deploy:templateInstanceDeployVariable>
</sitescope:templateDeployment>
</sitescope:sitescopeRoot>

```

変数

テンプレートとデプロイ先グループのパスを指定したら、XML ファイルの次のセクションでテンプレート変数と値に対応します。XML ファイルでは、変数とその値の定義、必須変数の宣言、対応する値の適用範囲(デプロイメント全体またはインスタンス単位)の決定を柔軟に行うことができます。

ユーザ・インタフェースから XML ファイルを生成し、変数に定義済みの値がある場合、その値が XML ファイルの変数に割り当てられます。

必須変数

テンプレートの必須変数の宣言は、**<deploy:mandatoryFields>** タグ内に表示されます。変数が必須変数として宣言されている場合、変数に対応する値をファイルで定義する必要があります。

ユーザ・インタフェースから XML を生成し、変数の作成時または編集時に **[Mandatory]** オプションを選択している場合、その変数は、**<deploy:mandatoryFields>** タグ内に表示されます。変数名を手動でこのリストに追加し、必須変数として宣言することもできます。

上記のファイルの例では、`group` と `frequency` が必須変数として定義されています。これらの変数の値は、**<deploy:globalVariables>** または **<deploy:templateInstanceDeployVariables>** のいずれかの **<deploy:variables>** タグ内に表示されます。

グローバル変数またはインスタンス変数

任意指定の `<deploy:globalVariables>` タグには、デプロイメントの標準設定のグローバル・テンプレート変数が含まれています。グローバル・テンプレート変数を定義するかどうかは任意です。グローバル・テンプレート変数を定義する場合、ファイルのデプロイメント・インスタンス領域 (`<templateInstanceDeployVariables>` タグ) で別の変数の値を指定して変数の値を上書きできます。グローバル変数の値は、各デプロイメント・インスタンスの別の値で上書きできます。

XML ファイルの例のように、テンプレートの複数のインスタンスが同じ SiteScope の同じ場所にデプロイされる場合、各インスタンスにグループ名の変数を含める必要があります。グループ名は必須変数にし、各デプロイメント・インスタンスで異なる値を指定する必要があります。グループ・テンプレート・オブジェクトには、その値として同じ変数が定義されている必要があります。テンプレートには、名前値が変数ではないほかのグループを含めることができます。このグループは一度だけデプロイされます。

上記の XML ファイルの例では、デプロイメントのインスタンスが 2 つあるため、変数 `group` は必須変数として定義されており、各インスタンス・デプロイメントで異なる値 (`Critical_monitors` と `Minor_monitors`) が指定されています。この結果、テンプレートのグループ・オブジェクトの下に、同じモニタ・オブジェクトの 2 つのグループが作成されます。

XML ファイルの例では、次のグループがデプロイされます。

- SiteScope/Windows_Monitors/Critical_monitors (デプロイメントの最初のインスタンス)。

このグループに該当するモニタおよび警告がテンプレートで定義されます。頻度値が変数 `frequency` として定義されているテンプレート・モニタ・オブジェクトの値が 600 秒 (10 分ごと) になります。

- SiteScope/Windows_Monitors/Minor_monitors (デプロイメントの 2 番目のインスタンス)。

このグループに該当するモニタおよび警告がテンプレートで定義されます。頻度値が変数 `frequency` として定義されているテンプレート・モニタ・オブジェクトの値が 6000 秒 (1 時間 40 分ごと) になります。このグループには、`connectToServer="no"` 属性が追加されています。つまり、テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティは検証されません。

XML ファイルの例には、ユーザ名およびパスワード (`<deploy:login user="admin99" password="(sisp)n9JRVALxIsq=" />`) のログイン情報も含まれています。セキュリティ保護された環境を使用している場合、各デプロイメントで有効なユーザ名およびパスワードを指定する必要があります。暗号化ツールを使用してユーザ名とパスワードを暗号化できます。

注: テンプレートにシステム変数を定義している場合 (%% ではなく \$\$ で定義されます)、自動テンプレート・デプロイメント XML ファイルでは通常の変数として扱われます。テンプレートでシステム変数を使用する場合に適用される制限は、XML ファイルで使用する場合にも適用されます。

XML バリデータ

XML バリデータは、自 動 テンプレート・デプロイメントで使用するスキーマに対して XML ファイルを検証するユーティリティです。SiteScope デプロイメント自体は検証されません。バリデータ・ファイルへのパスは次のとおりです。

- Windows の場合 : < SiteScope のルート・ディレクトリ> /tools/AutoDeployment/validate_template_xml.bat
- UNIX の場合 : < SiteScope のルート・ディレクトリ> /tools/AutoDeployment/validate_template_xml.sh

このユーティリティでは、XSD ファイルに対して XML の構造がチェックされ、ファイルの内容が有効な XML であることと、XSD に対応していることが確認されます。また、すべての必須変数に値が定義されているかどうか検証されます。値は、グローバル変数またはデプロイメント・インスタンス変数のいずれかとして定義できます。検証に失敗すると、失敗の理由が画面に出力されます。

XML を使用したテンプレート 変更適用

自動テンプレート・デプロイメント XML を使用してテンプレートの変更を適用し、デプロイ済みグループの値または構造を更新することもできます。グループの[ソース テンプレート]フィールドが、XML で参照しているテンプレートとして識別される場合、自動テンプレート・デプロイメント XML を使用してグループの値およびオブジェクトを更新できます。

XML では、テンプレート変更適用ウィザードと同じ機能が使用されますが、ユーザ・インタフェースにアクセスする必要はありません。XML ファイルでは、テンプレートの変更を適用するために使用される変数に値を指定できます。ウィザードおよびテンプレートの更新機能の詳細については、[890 ページ「テンプレート・デプロイメントの更新」](#)を参照してください。

自動テンプレート・デプロイメントでは、XML を使用してグループ・デプロイメントを作成する場合と同じように、テンプレートの変更をテンプレートのデプロイ済みグループに適用できます。テンプレートを変更したら XML を作成し、編集済み XML をコピーしてデプロイ先 SiteScope マシンの永続フォルダに貼り付けます。

本項の内容

- [911 ページ「デプロイメント XML タグの更新の詳細」](#)
- [911 ページ「テンプレート更新レポート」](#)

デプロイメント XML タグの更新の詳細

デプロイ済みグループの値またはオブジェクトを更新する場合、XML ファイルでは `<sitescope:templateDeploymentUpdate>` タグ(テンプレートをデプロイする場合に使用する `<sitescope:templateDeployment>` タグではありません)を使用する必要があります。XML ファイルで使用する要素および属性の詳細については、[920 ページ「XML タグ参照情報」](#)を参照してください。

`<sitescope:templateDeploymentUpdate>` タグ内で、`enableDeleteOnUpdate` 属性に「yes」を入力し、XML ファイルを使用してデプロイメントを更新するときにデプロイ済みグループ内のオブジェクトを削除できます。自動テンプレート・デプロイメント XML で参照されるテンプレートに表示されていないオブジェクトが削除の対象になります。「no」を入力すると、XML ファイルで参照されるテンプレートに表示されていない場合でも、グループ内のすべてのオブジェクトがデプロイメントの更新後も保持されます。テンプレート変更適用ウィザードのこのオプションの詳細については、[\[デプロイ済みグループの選択\] ページの「更新による削除の有効化」](#)を参照してください。

更新を正常に実行するには、デプロイ済みグループのデプロイ先 SiteScope グループの名前を `deploy:fullPathToDestinationGroup` タグの値として定義する必要があります。 `fullPathToDestination` は、デプロイメントのルート・グループ(テンプレートのルート・グループ)で終わる必要があります。デプロイメント・セクションごとに 1 つのグループが更新されるため、複数のグループがある場合はそれぞれに個別のデプロイメント更新セクションとグループ名を定義する必要があります。

テンプレート更新レポート

自動テンプレート・デプロイメントの更新を実行したら、XML 形式のレポートを使用できるようになります。このレポート・ファイルの名前には、XML ファイルの名前、タイムスタンプ、`string_reports` が含まれています。これらのレポートは、`< SiteScope のルート・ディレクトリ> \persistence\autodeployment\reports` にあります。

レポートは XML 形式で、次のタグが最初に含まれています。

- **totalNumberOfDeployments**
- **totalNumberOfFailedDeployments**
- **totalNumberOfSuccessDeployments**

デプロイメント・インスタンスごとに、XML の **<publishChangesSummaryPage>** セクションが表示されます。ここには、更新された内容の詳細が表示されます。正常に変更されなかったデプロイメントは、ファイルの最初に表示されます。

SiteScope ユーザ・インタフェースを使用してデプロイ済みグループを更新する場合、このファイルはテンプレート変更適用ウィザードによって作成される XML バージョンの PDF ファイルになります。レポートの詳細については、[901 ページ「テンプレート変更適用サマリ・レポート」](#)を参照してください。

デプロイメントの結果

デプロイおよび更新の両方の XML ファイルをコピー先 SiteScope の永続フォルダにコピーする場合、ファイルは次の 2 つのディレクトリのいずれかにコピーされます。

- **< SiteScope のルート・ディレクトリ> \persistency\autodeployment\successHistory** ディレクトリ。デプロイ済みグループのすべてのインスタンスを正常にデプロイまたは更新した XML ファイルが含まれます。
- **< SiteScope のルート・ディレクトリ> \persistency\autodeployment\failHistory** ディレクトリ。デプロイ済みグループのインスタンスのデプロイまたは更新に失敗した XML ファイルが含まれます。1 つでも失敗したインスタンスがあると、ほかのすべてが成功していても XML はこのフォルダに適用されます。

XML ファイルの名前が変更されます(アンダースコアとタイムスタンプが元の XML ファイルの名前に追加されます)。たとえば、すべてのグループとインスタンスのデプロイに成功した CPUgroups.XML という名前の XML ファイルは、**< SiteScope のルート・ディレクトリ> \persistency\autodeployment\successHistory** ディレクトリに保存され、CPUgroups_1203951216931.xml という名前になります。

XML ファイルを使用した監視構造のデプロイ方法

このタスクでは、自 動 テンプレート・デプロイメントを実行する方法について説明します。ソリューション・テンプレートをデプロイする場合も同じ手順を使用できます。

このタスクには次の手順が含まれています。

- [914 ページ「前提条件」](#)
- [914 ページ「XML ファイルの作成」](#)
- [915 ページ「XML ファイルの編集」](#)
- [915 ページ「ログインの詳細の指定 \(セキュリティ保護された環境で作業している場合に必須\)」](#)
- [915 ページ「パスワードなどのフィールドの暗号化 - オプション」](#)
- [915 ページ「XML ファイルの検証」](#)
- [916 ページ「SiteScope サーバ・マシンへの検証済み XML のコピー」](#)
- [916 ページ「デプロイメントが成功したかどうかのチェック」](#)

1. 前提条件

テンプレートを自動的にデプロイする各 SiteScope には、テンプレート・コンテナ内にそのテンプレートが含まれている必要があります。テンプレートの最上位レベルには、グループ・オブジェクトが必要です。ほかのすべてのオブジェクトはそのグループ内に作成する必要があります。テンプレートには、サブグループ、モニタ、警告、リモート・サーバ(1 つ)、変数を含めることができます。

複数の SiteScope を使った作業の場合：

- 1 つの SiteScope でテンプレートを作成したら、[テンプレート コンテナ] ショートカット・メニューの [エクスポート] / [インポート] オプションを使用してほかの SiteScope にエクスポートできます。タスクの詳細については、[872 ページ「\[テンプレートのエクスポート\] ダイアログ・ボックス」](#) および [873 ページ「\[内容のインポート\] ダイアログ・ボックス」](#) を参照してください。
- BSM を使って作業している場合、[SAM 管理] の [SiteScope の同期] ウィザードを使用して、SiteScope 間でテンプレートをコピーできます。ユーザ・インタフェースの詳細については、BSM ヘルプの『システム可用性管理の使用』の「SiteScope の同期 ウィザード」を参照してください。

2. XML ファイルの作成

次のいずれかの方法で XML ファイルを作成できます。

- テンプレート・コンテナを右クリックし、コンテキスト・メニューの [XML の生成] を選択します。ソリューション・テンプレートをデプロイする場合、このオプションはテンプレート・レベルで表示されます。ユーザ・インタフェースの詳細については、[923 ページ「\[自動デプロイメント XML の生成\] ユーザ・インタフェース」](#) を参照してください。
- 専用の XML アプリケーションを使用して XML ファイルを作成します。ファイルは有効な XML ファイルで、次のディレクトリにある XSD ファイルに基づいている必要があります。
 - < SiteScope のルート・ディレクトリ > \conf\xsds\deploy.xsd
 - < SiteScope のルート・ディレクトリ > \conf\xsds\sitescope.xsd

3. XML ファイルの編集

XML ファイルを編集して、デプロイメントに必要な値を入力する必要があります。ファイルの編集およびファイルのサンプルの詳細については、907 ページ「XML ファイルの例および変数」を参照してください。

XML ファイルのタグの詳細については、920 ページ「XML タグ参照情報」を参照してください。

注: ユーザ・インタフェースから XML が生成された場合、必須変数フィールドはテンプレートの必須変数に基づいて生成されます。XML ファイルを作成するときに、デプロイメントの成功に不可欠なフィールドがある場合、XML をデプロイする前にこれらのフィールドに値が割り当てられていることを確認する必要があります。

4. ログインの詳細の指定 (セキュリティ保護された環境で作業している場合に必須)

セキュリティ保護された環境で作業している場合、各デプロイメントで有効なユーザ名およびパスワードを指定する必要があります。ログイン資格情報を `audit.log` ファイルを使用して、テンプレートを変更するユーザの ID を追跡することもできます。

- 標準設定では、< SiteScope のルート・ディレクトリ > \groups\master.config ファイルの `_accessControlled` プロパティは `=true` に設定されています。これは、SiteScope をセキュア・モードで使用していることを意味します。SiteScope がセキュア・モードのときに自動テンプレート・デプロイメントを使用するには、SiteScope マシンの各デプロイメントで生成された XML ファイルの `</deploy:fullPathToDestinationGroup>` の後に次の文字列を追加する必要があります。

```
<deploy:login user="<myUserName>" password="<myPassword>" />
```

暗号化ツールを使用して、ユーザ名とパスワードの暗号化手順を実行します。タスクの詳細については、917 ページ「テキストの暗号化方法」を参照してください。

- セキュアでない環境を使用している場合は、この文字列を次のように変更します。

```
<deploy:login user="" password="" />
```

- `_accessControlled=false` と設定した場合は、文字列を XML ファイルに追加しなくても自動テンプレート・デプロイメントを使用できます。この場合、セキュアな環境を使用しているかどうかに関係なく、正常に渡されます。

注: セキュリティ保護された環境で作業している場合、ログインを追加すれば以前のバージョンの SiteScope で生成された XML ファイルを使用できます。

5. パスワードなどのフィールドの暗号化 - オプション

視認可能なテキスト形式で表示されないようにするフィールドが含まれているテンプレートをデプロイする場合、暗号化ツールを使用してテキストの暗号化手順を実行します。タスクの詳細については、917 ページ「テキストの暗号化方法」を参照してください。

6. XML ファイルの検証

デプロイする前に XML ファイルを検証することをお勧めします。デプロイするときに XML ファイルが検証にパスしないと、デプロイメントは失敗します。

次のディレクトリにある検証ツールを使用します。

- Windows の場合 : < SiteScope のルート・ディレクトリ> /tools/AutoDeployment/validate_template_xml.bat
- UNIX の場合 : < SiteScope のルート・ディレクトリ> /tools/AutoDeployment/validate_template_xml.sh

概念の詳細については、910ページ「XML バリデータ」を参照してください。

7. SiteScope サーバ・マシンへの検証済み XML のコピー

各 SiteScope マシンの \persistency\autodeployment ディレクトリ(XML 形式のテンプレートをデプロイする場所)に XML ファイルをコピーします。

標準設定では、テンプレートは2分ごとに自動的にデプロイされます。[インフラストラクチャブリファレンス]の[自動デプロイメントチェックの頻度]フィールド(プロパティ名: `autoDeploymentCheckFrequency`)で頻度を変更できます。

8. デプロイメントが成功したかどうかのチェック

デプロイメントが成功したかどうかをチェックするには、デプロイ先 SiteScope の < SiteScope のルート・ディレクトリ> \persistency\autodeployment ディレクトリを検索して、XML が `successHistory` サブディレクトリまたは `failHistory` サブディレクトリのどちらにコピーされているかを確認します。

概念の詳細については、913ページ「デプロイメントの結果」を参照してください。

また、SiteScope のエラー・ログをチェックすることもできます。

テキストの暗号化方法

このタスクでは、視認可能なテキスト形式で表示されないようにする、パスワードなどのフィールドのテキストを暗号化する方法について説明します。このツールでは XML のフィールドのみが暗号化されます。テンプレート自体で永続ディレクトリの変数の暗号化が制御されます。

デプロイメント XML で使用するテキストを暗号化するには、次の手順を実行します。

1. 次のバッチ・ファイルを実行します。
 - Windows の場合 : < SiteScope のルート・ディレクトリ > /tools/AutoDeployment/encrypt_password.bat
 - UNIX の場合 : < SiteScope のルート・ディレクトリ > /tools/AutoDeployment/encrypt_password.sh < SiteScope
2. コマンド・プロンプト・ウィンドウを開きます。
 - Windows の場合 , ファイルをコマンド・プロンプト・ウィンドウにドラッグ・アンド・ドロップします。
 - UNIX の場合 , .sh ファイルをそのディレクトリから実行する必要があります。
3. スペースとパスワード値を入力します(Mypassword など)。ENTER キーを押します。
4. XML ファイルの暗号化された変数の値として、戻り文字列を使用します。属性 **encrypted** の値を **yes** に、変数属性 **value** の値を戻り文字列に変更する必要があります。

たとえば、暗号化ツールによって <deploy:variables encrypted="yes" name="password" value="(sisp)d5JLOSWaVfE="/> のような値が生成されます。>

デプロイメントの更新方法

このタスクでは、自 動 テンプレート・デプロイメント XML を使用して、既 存 のデプロイ済 みグループを更新する方法について説明します。テンプレートを変更した場合、デプロイメントの構造を更新できます。また、テンプレートで宣言されている変数に新しい値を指定してオブジェクト・プロパティを更新することもできます。

このタスクの手 順 は、テンプレートをデプロイする場合のタスクと同じです(ただし、この手 順 で挙げる例外や追加情報はあります)。デプロイメント・タスクの詳細については、[914 ページ「XML ファイルを使用した監視構造のデプロイ方法」](#)を参照してください。

このタスクには次の手 順 が含まれています。

- [918 ページ「前提条件」](#)
- [918 ページ「オブジェクトおよび値を更新するための XML ファイルの作成および編集」](#)
- [918 ページ「コピー先 SiteScope へのテンプレート更新適用 XML のコピー」](#)
- [918 ページ「パスワードなどのテキストの暗号化\(任意指定\)」](#)
- [918 ページ「テンプレート更新適用 XML の検証」](#)
- [919 ページ「結果のレポート」](#)

1. 前提条件

デプロイ済 みグループの更新する[ソース テンプレート]フィールドは、XML デプロイメント更新ファイルのテンプレートと同じである必要があります。これは、更新するテンプレートとともにデプロイ先 SiteScope に存在します。

2. オブジェクトおよび値を更新するための XML ファイルの作成および編集

XML ファイルを使って作業する場合、次の操作を実行する必要があります。

- `<templateDeployment>` タグの代わりに `<templateDeploymentUpdate>` タグを使用します。
- `<templateDeploymentUpdate>` タグの `enableDeleteOnUpdate` 属性に「yes」または「no」の値を入力します。
- `deploy:fullPathToDestinationGroup` タグを定義します。このタグの値として更新するグループ名を使用します。

これらのタグおよび更新 XML ファイルの詳細については、[911 ページ「XML を使用したテンプレート変更適用」](#)を参照してください。

3. コピー先 SiteScope へのテンプレート更新適用 XML のコピー

自 動 テンプレート・デプロイメント XML ファイルをデプロイするときのように、テンプレート更新適用 XML をコピー先 SiteScope の永続ディレクトリにコピーします。

4. パスワードなどのテキストの暗号化(任意指定)

タスクの詳細については、[917 ページ「テキストの暗号化方法」](#)を参照してください。

5. テンプレート更新適用 XML の検証

自 動 テンプレート・デプロイメント XML ファイルをデプロイするときのように、バリデータ・ツールを使

用して編集済み XML ファイルを検証します。

6. 結果のレポート

更新用の自動テンプレート・デプロイメント XML をデプロイすると、結果のレポート・ファイルが XML 形式で作成されます。これらのレポートは、< **SiteScope のルート・ディレクトリ** > \persistency\autodeployment\reports にあります。

ユーザ・インタフェースの詳細については、[911 ページ「テンプレート更新レポート」](#)を参照してください。

XML タグ参照情報

次の各表では、自動テンプレート・デプロイメント XML ファイルで使用するすべての要素と属性について説明します

- 921ページ「属性表」
- 920ページ「要素表」

要素表

要素	説明
sitescope:sitescopeRoot	<p>これは、デプロイメントを作成するための指示、使用する XML のバージョン、XSD ファイルの場所を指定する XML ファイル内の最初のタグにする必要があります。</p> <p>注：これは、SiteScope に関連するすべての XML ファイルで最初の要素になります。</p>
sitescope:template Deployment	<p>このタグを使用すると、テンプレートまたはソリューション・テンプレートをデプロイして、デプロイ先 SiteScope に新しいグループ構造を作成できます。これは、ユーザ・インタフェースからの生成時に XML ファイルで使用される標準設定のタグです。</p>
sitescope:template DeploymentUpdate	<p>このタグを使用すると、更新したテンプレートの変更を公開できます。この変更は、XML で識別されたテンプレートと一致する[ソーステンプレート]フィールドを持つグループの監視構造に適用できます。この XML ファイルではまた、テンプレートで使用する変数の値を更新できます。</p> <p>たとえば、テンプレートで作成した既存のグループに警告やモニタを追加する場合、テンプレートを変更し、このタグを使用してデプロイできます。</p>
deploy:fullPathToTemplate	<p>このタグは、デプロイするテンプレートまたはソリューション・テンプレートの SiteScope ツリー内でのフル・パスを示します。</p> <p>構文：<テンプレート・コンテナ名>/<テンプレート名></p>
deploy:fullPathTo DestinationGroup	<p>このタグは、デプロイした監視構造の作成先となるグループ名の、SiteScope ツリー内でのフル・パス位置を示します。このタグに値がない場合、デプロイメントは SiteScope ノード・レベルに作成されます。</p>
deploy:mandatoryFields	<p>このタグ内の値は、テンプレート作成時に必須フィールドとして選択された変数です。このタグ内に値が存在する場合、グローバル変数には <deploy:globalVariables> タグで、その他の変数には <deploy:variables> タグで値を指定する必要があります。これらの必須フィールドに対応する値がない場合、XML は検証に失敗します。</p>

要素	説明
deploy:globalVariables	<p>このタグは、選択したテンプレート全体にデプロイされる変数が含まれるファイルのセクションをマークします。</p> <p>属性が含まれます。詳細については、この後の属性表を参照してください。</p>
deploy:templateInstance DeployVariable	<p>このタグは、選択したテンプレートのインスタンスごとにデプロイされる変数が含まれるファイルのセクションをマークします。</p> <p>同じ変数が <deploy:globalVariables> に存在する場合、インスタンスの変数の値は、同じ変数が存在するインスタンスについてのみグローバル変数の値を上書きします。それ以外のすべてのインスタンスの値は、<deploy:globalVariables> セクションの入力値になります。</p> <p>属性が含まれます。詳細については、この後の属性表を参照してください。</p>
deploy:variables	<p>このタグでは、変数とその値を定義します。</p> <p>属性が含まれます。詳細については、この後の属性表を参照してください。</p>

属性表

親要素	属性	説明
templateDeploymentUpdate	enableDeleteOnUpdate	<p>テンプレートのデプロイメントに存在するオブジェクトのインスタンスが、デプロイメントの構造の更新に使用する XML ファイルに存在しない場合、そのインスタンスを削除するかどうかを示します。</p> <p>利用可能な値 : yes, no</p> <p>このオプションの詳細については、[デプロイ済みグループの選択] ページ の「更新による削除の有効化」を参照してください。</p>

親要素	属性	説明
deploy:globalVariables deploy:templateInstanceDeployVariable	description	デプロイメントのユーザ説明(任意指定)。
	connectToServer	<p>テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティを検証します(任意指定)。これは、(この属性が指定されていなくても)標準設定の動作です。リモート・サーバに接続しないようにするには、connectToServer="no" を <deploy:globalVariables> または <deploy:templateInstanceDeployVariable> タグに追加します。</p> <p>利用可能な値 : yes, no</p> <p>詳細については、884ページ「複数のテンプレートのデプロイ」ダイアログ・ボックスの「リモートサーバでモニタプロパティを検証」を参照してください。</p>
	accessControlled	<p>(任意)テンプレートのデプロイ後、テンプレート・リモート・サーバから作成した接続をテストします。</p> <p>利用可能な値 : true, false</p>
deploy:variables	encrypted	<p>変数フィールドの値が暗号化されているかどうかを示します。</p> <p>利用可能な値 : yes, no</p> <p>値を暗号化するには、暗号化ツールを使用して変数の値を指定します。詳細については、917ページ「テキストの暗号化方法」を参照してください。</p>
	name	変数の名前。
	value	変数の値。

[自動デプロイメント XML の生成] ユーザ・インタフェース

このダイアログ・ボックスでは、強調表示されたテンプレート・コンテナのテンプレートを自動的にデプロイするために使用する XML ファイルを作成できます。XML ファイルを生成した後、このファイルを編集して、SiteScope ユーザ・インタフェース以外のファイル・ディレクトリからテンプレートをデプロイするために使用できます。

アクセス方法	[テンプレート]コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、作成する自動デプロイ XML ファイルの対象とするテンプレート・コンテナを右クリックして、[XML の生成]を選択します。
関連タスク	914ページ「XML ファイルを使用した監視構造のデプロイ方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none">905ページ「自動テンプレート・デプロイメントの概要」88ページ「テンプレート・ツリー」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
ファイル名	作成する XML ファイルの名前。これは、このテンプレート・コンテナ内のテンプレートを自動的にデプロイするために編集して使用できるファイルです。
パス	<p>XML ファイルの保存場所。標準設定の場所をそのまま使用するか、別の場所を入力します。パスが空の場合、XML ファイルは SiteScope がインストールされているルート・ドライブに保存されます。</p> <p>標準設定値： < SiteScope のインストール・パス > \SiteScope\persistency\autodeployment\drafts</p> <p>注：以前に同じファイル名とパスを使用して XML ファイルが作成されている場合、以前に保存した XML ファイルは上書きされません。以前のファイルは、_bck<バックアップ番号>を末尾に追加した名前に変更されます。たとえば、[ファイル名]に「CPUtemplate」と入力し、標準設定の場所を受け入れた場合、標準設定のフォルダにある既存のファイルは CPUtemplate.xml_bck1 となり、生成されている現在の XML ファイルは CPUtemplate.xml として保存されます。</p>
テンプレート・ツリー	XML ファイルを作成するテンプレート。XML ファイルの内容は、選択するテンプレートにあるオブジェクトに基づきます。生成される XML ファイルには、選択したテンプレートごとに別々のデプロイ・セクションがあります。

トラブルシューティングと制限事項

このセクションでは、自動テンプレート・デプロイメントを使って作業する場合のトラブルシューティングと制限事項について説明します。

注: SiteScope テンプレート、ソリューション・テンプレート、テンプレート変更適用ウィザードに適用される注意事項、制限事項、トラブルシューティングの問題は、すべて自動テンプレート・デプロイメントの機能にも適用されます。

本項の内容

- [924 ページ「I18N ユーザ」](#)
- [924 ページ「ソリューション・テンプレート」](#)
- [924 ページ「XML で禁止されている文字」](#)
- [925 ページ「グループのないテンプレートを自動デプロイできない」](#)
- [925 ページ「自動テンプレート・デプロイメント XML を使用したデプロイ済みグループの更新」](#)

I18N ユーザ

- メモ帳を使用して XML ファイルを編集しないでください。メモ帳ではファイルの先頭に余分な文字が追加されるため、XML ファイルを解析できなくなります。この文字は表示されませんが、英語以外のファイルを解析不能にします。メモ帳ではなく、ワードパッドまたは XML エディタを使用してください。
- SiteScope のルート・ディレクトリへのパスに英語以外の文字が含まれている場合、XML を SiteScope の永続ディレクトリにコピーするまでは XML の検証に検証ツールを使用できません。このため、XML が XSD に準拠しているか、必須フィールドに値があるかが検証されません。

ソリューション・テンプレート

次のソリューション・テンプレートでは変数が動的に作成され、XML ファイルで値を指定できないため、自動テンプレート・デプロイメントを実行できません。

- JBoss Application Server 4.x
- WebLogic アプリケーション・サーバ
- WebSphere 5.x アプリケーション・サーバ
- WebSphere 6.x アプリケーション・サーバ

XML で禁止されている文字

アンパサンド(&), 引用符("), 山括弧(< >)文字は、XML 属性値で禁止されているため、使用は避けてください。

不正な XML 文字をエスケープするには、一般的なエンコーディングを使用するか(&ではなく&を使用するなど)、文字をCDATA(文字データ)セクションで囲みます。詳細については、http://xmmsc-www.star.le.ac.uk/SAS/xmmsas_20070308_1802/doc/param/node24.html(英語サイト)を参照してください。

グループのないテンプレートを自 動 デプロイできない

親グループが定義されていないテンプレート(つまり、ルート・テンプレートの直下にモニタがあるテンプレート)を自 動 デプロイしようとする、デプロイメントは失敗し、次のエラーが < SiteScope のルート・ディレクトリ > \logs\error.log ファイルに書き込まれます。

```
[Autodeployment new XML detection] (XMLAutomationParser.java:294)
ERROR - Prerequisites of template structure are unmet.Template must be
rooted by only one group.
```

[プリファレンス] > [インフラストラクチャ プリファレンス] > [テンプレート設定] で [テンプレート エンティティの直下にテンプレートの作成を許可する] を選択した場合でも、自 動 デプロイメントは失敗します。

回避策： テンプレートを手動でデプロイします(テンプレート・ツリーで該当するテンプレートを右クリックしてから、[テンプレートのデプロイ] を選択します)。

自 動 テンプレート・デプロイメント XML を使用したデプロイ済みグループの更新

自 動 テンプレート・デプロイメント XML を使用した既存のデプロイメントの更新の制限事項については、890 ページ「テンプレート・デプロイメントの更新」を参照してください。

第8部分

ソリューション・テンプレート

第 50 章

SiteScope ソリューション・テンプレート

本章の内容

概念

- 928ページ「ソリューション・テンプレートの概要」

タスク

- 932ページ「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」

参照情報

- 934ページ「[ソリューション テンプレート] ページ」

935ページ「トラブルシューティングと制限事項」

ソリューション・テンプレートの概要

SiteScope ソリューション・テンプレートは、一般的なエンタープライズ・アプリケーションやネットワーク・システムを監視するために設計された、事前設定済みのモニタ・セット・テンプレートです。ソリューション・テンプレートを使用すると、標準の SiteScope モニタ・タイプとソリューション固有のモニタを組み合わせ、対象アプリケーションやシステムの可用性、パフォーマンス、状況を監視するために最適化された設定により迅速にデプロイできます。たとえば、Microsoft Exchange 監視のソリューションには、パフォーマンス・カウンタ、イベント・ログ、Exchange アプリケーション固有のモニタ・タイプが含まれます。

ソリューションをデプロイすると、新しいモニタ・グループ・コンテナが作成され、その中に個々のソリューション・モニタが追加されます。ソリューション・テンプレートは、環境内のサーバごとにデプロイできます。ソリューション・テンプレートでシステム変数 **SERVER_LIST** を使用すると、複数のリモート・ホストにソリューションをデプロイできます。

本項の内容

- 928ページ「ソリューション・テンプレートのリスト」
- 931ページ「ソリューション・テンプレートのカスタマイズ」
- 931ページ「注意事項および制限事項」

ソリューション・テンプレートのリスト

次の表に、SiteScope で利用可能なソリューション・テンプレートを示します。ソリューション特有のモニタ・タイプやサポートされているバージョンなど、各ソリューションの詳細については、各ソリューション・テンプレートに関する章を参照してください。

ソリューション名	説明
936ページ「Active Directory ソリューション・テンプレート」	グローバル・カテゴリの有無にかかわらず Microsoft Windows サーバ用 Microsoft ドメイン・コントローラのパフォーマンスと効率を監視します。
942ページ「AIX Host ソリューション・テンプレート」	AIX ホスト・マシンのパフォーマンス、可用性、状況を監視します。
946ページ「フェールオーバー監視ソリューション・テンプレート」	SiteScope Failover Manager を使用する場合は、プライマリおよびフェールオーバー SiteScope マシンの可用性を監視します。
954ページ「HP Quality Center ソリューション・テンプレート」	Windows 上とUNIX 上の HP Quality Center アプリケーション・サーバのパフォーマンス、可用性、状況、Oracle データベース・サーバ上の HP Quality Center ライセンスの使用状況と有効期限、および HP QuickTest Professional ライセンス・サーバ・アプリケーションとシステムの可用性を監視します。

ソリューション名	説明
967ページ 「HP Service Manager ソリューション・テンプレート」	Windows および UNIX プラットフォーム上の HP Service Manager アプリケーション・サーバの可用性とシステム状態を監視します。
975ページ 「JBoss Application Server ソリューション・テンプレート」	JBoss 環境のパフォーマンス、可用性、状況を監視します。
980ページ 「Linux Host ソリューション・テンプレート」	Linux ホスト・マシンのパフォーマンス、可用性、状況を監視します。
984ページ 「Microsoft Exchange ソリューション・テンプレート」	Microsoft Exchange サーバのアプリケーション状況、メッセージ・フロー、使用統計を監視するための個別のソリューション・オプションが含まれます。
990ページ 「Microsoft IIS ソリューション・テンプレート」	Microsoft IIS 環境のパフォーマンス、可用性、状況を監視します。
995ページ 「Microsoft Lync Server 2010 ソリューション・テンプレート」	次の Microsoft Lync Server 2010 Server のパフォーマンス、可用性、状況を監視します。A/V Conferencing サーバ、Archiving サーバ、Director サーバ、Edge サーバ、Front End サーバ、Lync Server Event Log、Mediation サーバ、Monitoring サーバ、Registrar サーバ。
1002ページ 「Microsoft SharePoint 2010 ソリューション・テンプレート」	Microsoft SharePoint 2010 のパフォーマンス、可用性、状況を監視します。

ソリューション 名	説明
1007ページ 「Microsoft SQL Server ソリューション・テンプレート」	Microsoft SQL サーバのパフォーマンス, 可用性, 使用統計を監視します。
1013ページ 「Microsoft Windows Host ソリューション・テンプレート」	Microsoft Windows ホスト・マシンのパフォーマンス, 可用性, 状況を監視します。
1017ページ 「.NET ソ リューション・テンプレート」	Microsoft Windows マシン上の .NET アプリケーションおよび環境のパフォーマンス, 可用性, 状況を監視します。
1021ページ 「Oracle Database Solution Templates」	Oracle データベースのパフォーマンス, 可用性, 使用統計を監視します。
1029ページ 「SAP ソ リューション・テンプレート」	SAP システム・コンポーネントのパフォーマンス, 可用性, 使用統計を監視します。
1034ページ 「Siebel ソ リューション・テンプレート」	Windows および UNIX オペレーティング・システムにインストールされた Siebel アプリケーション・サーバのパフォーマンス, 可用性, 使用統計を監視します。
1045ページ 「Solaris Host ソリューション・テンプレート」	Solaris ホスト・マシンのパフォーマンス, 可用性, 状況を監視します。
1058ページ 「VMware Host ソリューション・テンプレート」	VMware Host サーバ, ホスト・サーバのゲスト仮想マシン上の CPU, メモリ, ストレージ, 状態, ネットワーク・パフォーマンス, 使用統計を監視します。

ソリューション名	説明
1049ページ 「VMware キャパシティ 管理ソリューション・テンプレート」	SiteScope で VMware モニタからデータを収集して、HP Operations Agent 上のデータ・ストアにデータを報告できます。このデータは、この後、サポートされている各種レポート製品 (たとえば、HP の容量管理ソリューションである HP Service Health Optimizer(SHO)、および HP のサービス中心クロス・ドメイン・レポートング・ソリューションである Service Health Reporter(SHR))で使用できます。
1063ページ 「WebLogic ソリューション・テンプレート」	Oracle WebLogic アプリケーション・サーバのパフォーマンス、可用性、使用統計を監視します。
1069ページ 「WebSphere ソリューション・テンプレート」	IBM WebSphere アプリケーション・サーバのパフォーマンス、可用性、使用統計を監視します。

ソリューション・テンプレートのカスタマイズ

ソリューション・テンプレートに適合しないシステム設定もあるため、システム要件に合わせて次のようにソリューション・テンプレートをカスタマイズできます。

- ソリューション・テンプレートをテンプレート・コンテナにコピーし、システム要件に合わせて変更して、変更後のソリューション・テンプレートをデプロイする。
- ソリューション・テンプレートをデプロイし、デプロイ後にシステムの要件に合わせて変更する。

たとえば、HP Quality Center アプリケーション・サーバ・ソリューション・テンプレートを使用して、アプリケーション・サーバとは別のホスト上にあるリポジトリのディスク変数を監視する場合、テンプレートのデプロイ後に、リポジトリのディスク使用率モニタをほかのホストを使用するように変更する必要があります。

注意事項および制限事項

- ソリューション・テンプレートを使用したモニタの作成中に検出されたエラーは、個々のモニタの実行時に返される状態とは関係ありません。つまり、モニタが正常に作成されていても、設定が正確な場合や監視対象のシステムが使用できない場合があります。
- ソリューション・テンプレートのデプロイ後、関連するモニタが[BSM への測定値レポートを無効化する]の BSM レポートング・レベルで定義されている場合があります。そのため、ソリューション・テンプレートのデプロイ後、モニタのレポートング・レベルをチェックすることをお勧めします。デプロイされたモニタのレポートング・レベルを変更する場合、[グローバル検索と置換]ウィザードを使用してレポートング・レベル・オプションを変更できます。
- ソリューション・テンプレートでは、作成したモニタに対して自動警告やレポートは設定されません。警告定義やレポートを1つ以上作成し、ソリューション・テンプレートで作成したモニタまたはモニタ・グループに関連付ける場合があります。

SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法

このタスクでは、ソリューション・テンプレートをデプロイする手順について説明します。環境内のサーバごとにソリューション・テンプレートをデプロイします。

このタスクには次の手順が含まれています。

- 932 ページ「前提条件」
- 932 ページ「テンプレートのデプロイ」
- 933 ページ「テンプレート・デプロイメントの変数値の入力(ユーザ・インタフェース・デプロイメント用のみ)」
- 933 ページ「警告およびレポートの設定」
- 933 ページ「結果」

1. 前提条件

- ソリューション・テンプレートを使用するには、適切な SiteScope オプション・ライセンスが必要です。ソリューション・ライセンスの詳細については、HP の営業担当にお問い合わせください。
- ライセンスは、[プリファレンス] > [一般プリファレンス] > [ライセンス] のライセンス・ファイルからインポートする必要があります。ユーザ・インタフェースの詳細については、639 ページ「[一般プリファレンス] ページ」を参照してください。

2. テンプレートのデプロイ

ソリューション・テンプレートをグループにデプロイする方法を次から選択します。

- ユーザ・インタフェースからソリューション・テンプレートを直接デプロイできます。テンプレート・ツリーで、デプロイするソリューション・テンプレートを右クリックし、[テンプレートのデプロイ]を選択します。[グループの選択]ダイアログ・ボックスで、ソリューション・テンプレートをデプロイするモニタ・グループを選択します。ユーザ・インタフェースの詳細については、883 ページ「[グループの選択]ダイアログ・ボックス」を参照してください。

注: 多数のテンプレート(テンプレート・コンテナ内でグループ化されている)を用意しているソリューションでは、グループを個別にまたは同時にデプロイできます。たとえば、Microsoft Exchange 2010 ソリューションをデプロイする場合、必要なテンプレートのみを選択し、別のサーバに分散された Exchange サーバのインストールに対し、このテンプレートをデプロイできます。複数のテンプレートを同時にデプロイする詳細については、878 ページ「ユーザ・インタフェースを使用したテンプレートのデプロイ方法」を参照してください。

- テンプレート内に定義した変数の値が含まれる CSV ファイルを使用して、ソリューション・テンプレートをデプロイできます。概念の詳細については、877 ページ「CSV ファイルを使用したテンプレートのデプロイ」を参照してください。タスクの詳細については、880 ページ「CSV ファイルを使用したテンプレートのデプロイ方法」を参照してください。
- SiteScope ユーザ・インタフェースの外部にある XML ファイルを使用してテンプレートをデプロイし、更新できます。概念の詳細については、905 ページ「自動テンプレート・デプロイメントの概要」を参照してください。タスクの詳細については、914 ページ「XML ファイルを使用した監視構造のデプロイ方法」を参照してください。

3. テンプレート・デプロイメントの変数値の入力(ユーザ・インタフェース・デプロイメント用のみ)

選択したソリューション・テンプレートの[デプロイメント値]ページの項目を入力します。ユーザ・インタフェースの詳細については、各ソリューション・テンプレートの[デプロイメント値]ページを参照してください。

4. 警告およびレポートの設定

新しく作成したソリューション・モニタに警告とレポートを設定します。

警告の設定の詳細については、[1226ページ「警告の設定方法」](#)を参照してください。

レポートの設定の詳細については、[1278ページ「レポートの作成方法」](#)を参照してください。

5. 結果


ソリューション・テンプレートによって新しいモニタ・グループ・コンテナが作成され、その中に個々のソリューション・モニタが追加されます。このモニタ・グループ・コンテナには、<ソリューション・テンプレート名> on <サーバ名> の形式で名前が割り当てられます。サーバ名は、[サーバ]ボックスで選択したサーバです。

これらのモニタは、SiteScope のほかのモニタと同じ方法で表示、編集、削除できます。

注: デプロイに失敗したモニタがある場合、モニタ名のリストを含むメッセージが、エラーを説明するメッセージと一緒に表示されます。

[ソリューション テンプレート] ページ

選択したソリューション・テンプレートの名前と説明が表示されます。

アクセス方法	[テンプレート] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで, [ソリューション テンプレート] コンテナを展開し, 必要なテンプレートを選択します。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none">ライセンスが供与され,  アイコンと一緒に表示されているソリューション・テンプレートのみを設定できます。[タグの検索/フィルタ] パネルは, ソリューション・テンプレート・オブジェクトのフィルタリングには使用できません。
関連タスク	932 ページ「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」
関連情報	88 ページ「テンプレート・ツリー」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
名前	ソリューション・テンプレートの名前 (読み取り専用)。
説明	ソリューション・テンプレートの説明 (読み取り専用)。

トラブルシューティングと制限事項

本項では、SiteScope ソリューション・テンプレートのトラブルシューティングおよび制限事項について説明します。

- 935ページ「ソリューション・テンプレートの再インストール」
- 935ページ「テンプレートのインポート」

ソリューション・テンプレートの再インストール

インストールされたソリューション・テンプレートは、< **SiteScope** のルート・ディレクトリ > \persistency ディレクトリにあります。このディレクトリの内容が削除されると、ソリューション・テンプレートはテンプレート・ツリーに表示されません。ソリューション・テンプレートを再インストールするには、ソリューション・テンプレート・ファイルを永続ディレクトリに再度コピーする必要があります。

注: persistency ディレクトリを削除すると、SiteScope 設定データとBSMの履歴データ (SiteScope がBSMと統合されている場合) がすべて永続的に削除されるため、お勧めしません。

ソリューション・テンプレート・ファイルを再インストールするには、次の手順を実行します。

1. ソリューション・テンプレート・ファイルを次のディレクトリで特定します。< **SiteScope** のルート・ディレクトリ > \export。
2. < **SiteScope** のルート・ディレクトリ > \export の内容を< **SiteScope** のルート・ディレクトリ > \persistency\import にコピーします。
3. ソリューション・テンプレートが再インストールされたことをチェックするには、テンプレート・ツリーの[ソリューション テンプレート]フォルダでそのソリューション・テンプレートを見つけます。

テンプレートのインポート

- テンプレートをインポートする場合、同じテンプレート・コンテナに同じ名前のテンプレートがすでにある場合は、一意の名前に関する違反によりインポートが失敗する可能性があります。これを回避するには、既存のテンプレート・コンテナの名前を変更します。
- インポートが失敗するか、または[ソリューション テンプレート]ツリーのソリューション・テンプレートを表示できない場合、上記の「ソリューション・テンプレートの再インストール」の説明に従ってソリューション・テンプレートを回復できます。 \export フォルダにテンプレートのサンプルも含まれている場合、前述の一意の名前に関する違反を避けるためにテンプレート・コンテナの名前を変更する必要があります。

第51章

Active Directory ソリューション・テンプレート

本章の内容

概念

- [937ページ「Active Directory ソリューションの概要」](#)

タスク

- [939ページ「Active Directory ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」](#)

参照情報

- [940ページ「\[Active Directory ソリューション テンプレート\] ページ」](#)

Active Directory ソリューションの概要

Active Directory ソリューション・テンプレートを使用して、ドメイン・コントローラのパフォーマンス、Active Directory が依存するサービス、分散 Active Directory パフォーマンスを監視できます。

Active Directory ソリューション・テンプレートでは、特定のドメイン・コントローラに対して一連のモニタがデプロイされます。これらのモニタは、Active Directory の監視のベスト・プラクティスを網羅しています。このテンプレートには、Windows イベント・ログ、サービス、LDAP、パフォーマンス・カウンタ、Active Directory レプリケーションのモニタが含まれています。

Active Directory ソリューション・テンプレートでは包括的な監視が可能です。SiteScope ユーザまたは IT 組織にアプリケーションの専門知識は必要ありません。また、モニタの設定やデプロイの時間が短縮し、パフォーマンスのボトルネック(リアルタイムおよび長期間)の特定が容易になります。さらに、実運用システムにはほとんど負荷がかかりません。

Active Directory ソリューション・テンプレートは Microsoft Windows Server 2000, 2003, および 2008 R2 をサポートします。

注:

- Active Directory ソリューション・テンプレートを使用するには、適切な SiteScope オプション・ライセンスが必要です。ソリューション・ライセンスの詳細については、HP の営業担当にお問い合わせください。
- Active Directory ソリューションの詳細については、『SiteScope Active Directory Best Practices』を参照してください。このドキュメントは SiteScope インストールに含まれています(収録場所は、< SiteScope のルート・ディレクトリ > \sisdocs\pdfs\SiteScope_Active_Directory_Best_Practices.pdf です)。このドキュメントはパスワードで保護されています。パスワードは、Active Directory ソリューション・ライセンス・キーとともに HP から提供されます。

ソリューション・テンプレート・モニタ

Active Directory ソリューション・テンプレートでは、Active Directory パフォーマンスの次の側面を対象とするモニタがデプロイされます。

- **ドメイン・コントローラのパフォーマンス** : このカテゴリの対象は、環境の各ドメイン・コントローラの低レベルの状況です。Active Directory ソリューション・テンプレートでは、ドメイン・コントローラの状況のモニタが自動的に設定されます。
- **依存するサービス** : Active Directory は、複数の重要なサービスに依存しています。これらのサービスがないと、Active Directory は反応しなくなるか、完全に機能しなくなります。Active Directory ソリューション・テンプレートでは、Active Directory パフォーマンスを左右する重要なサービスのリストのモニタが自動的に設定されます。
- **分散 Active Directory パフォーマンス** : Active Directory パフォーマンスの最も重要な側面であり、鍵となる指標は、Active Directory によってすべてのドメイン・コントローラに変更が複製される速度だと考えられます。Active Directory ソリューション・テンプレートでは、変更や更新のレプリケーションを監視およびテストするようにモニタが自動的に設定されます。

注: ソリューション・テンプレートによってデプロイされるモニタ・タイプの中には、Active Directory ソ

リユーション・セットを使用しないと SiteScope に追加できないものもあります。詳細については、特定のモニタ・タイプのセクションを参照してください。

Active Directory ソリューション・テンプレートのデプロイ方法

このタスクでは、Active Directory ソリューション・テンプレートの変数を入力する手順について説明します。

1. **ソリューション・テンプレートのデプロイ**

ソリューション・テンプレートのデプロイに関連する手順の詳細については、932ページ「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」を参照してください。

2. **ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力(ユーザ・インタフェース・デプロイメント用のみ)**

Active Directory ソリューション・テンプレートの[デプロイメント値]ページの項目を入力します。ユーザ・インタフェースの詳細については、940ページ「[Active Directory ソリューション テンプレート]ページ」を参照してください。

[Active Directory ソリューション テンプレート] ページ

このページでは、SiteScope Active Directory ソリューション・テンプレートをデプロイできます。

アクセス方法	[テンプレート] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、[ソリューション テンプレート] を展開し、必要な Active Directory ソリューション・テンプレートを選択します。
関連タスク	932 ページ「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none">936 ページ「Active Directory ソリューション・テンプレート」88 ページ「テンプレート・ツリー」

メイン設定

ユーザ インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
ReplicatingDomain Controllers	上記で選択したドメイン・コントローラのデータを複製するドメイン・コントローラのカンマ区切りリスト。
LDAPSecurity Principal	ドメイン管理者アカウントの LDAP セキュリティ・プリンシパル。Active Directory の場合、これは cn=Domain Admin User,cn=users,dc=yoursite,dc=com の形式になります。
LogicalDrive	該当のドメイン・コントローラで使用しているデータベースとログ・ファイルの論理ドライブ。
PASSWORD	上記で選択したユーザのパスワード。
HostName	ドメイン・コントローラのホスト名のホスト部分 (完全修飾ドメイン名は含まれません)。
Global Catalog (グローバル・カタログを有する AD のみ)	ドメイン・コントローラがグローバル・カタログ・サーバである場合に選択します。
SERVER_LIST	監視するドメイン・コントローラ。監視対象サーバがリストにない場合、サーバへの接続プロファイルを定義する必要があります。
サイレント・デプロイメント	テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、< SiteScope のルート・ディレクトリ > \logs\silent_deployment.log に記録されます。 標準設定値：選択されていない

UI 要素	説明
リモート・サーバでモニ タ・プロパティを検証	<p>テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタ の設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。</p> <p>注 :このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が 遅くなります。</p> <p>標準設定値 : 選択されている</p>
リモート・サーバのテス ト (AD 2008 R2 のみ)	<p>テンプレートのデプロイ後、テンプレート・リモート・サーバから作成した接続 をテストします。テストはバックグラウンドで実行されるので、引き続き SiteScope を使用できます。</p> <p>標準設定値 : 選択されていない</p>

第 52 章

AIX Host ソリューション・テンプレート

本章の内容

概念

- [943ページ「AIX Host ソリューションの概要」](#)

タスク

- [944ページ「AIX Host ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」](#)

参照情報

- [945ページ「\[AIX Host ソリューション テンプレート\] ページ」](#)

AIX Host ソリューションの概要

AIX Host ソリューション・テンプレートは、標準設定の測定値で設定された一連のモニタ(AIX ホストの状況、可用性、パフォーマンスをテスト)をデプロイする場合に使用できるテンプレートです。このテンプレートでは、SiteScope でサポートされているバージョンの AIX がサポートされます。詳細については、HP SiteScope デプロイメント・ガイド の「システム要件」を参照してください。

UNIX リソース・モニタの場合、監視対象サーバの 3 つの異なる測定値のデータが表示される、サーバ中心のレポートを作成できます。

ヒント: 必要なモニタおよび測定値があらかじめ設定されているため、UNIX リソース・モニタを作成する場合はソリューション・テンプレートを使用することをお勧めします。サーバ中心のレポートの生成の詳細については、[1104 ページ「サーバ中心のレポートの生成」](#)を参照してください。

AIX Host ソリューション・テンプレートは包括的な AIX オペレーティング・システムの監視が可能です。SiteScope ユーザまたは IT 組織にアプリケーションの専門知識は必要ありません。また、パフォーマンス・モニタの設定やデプロイの時間が短縮し、パフォーマンスのボトルネック(リアルタイムおよび長期間)の特定が容易になります。さらに、実運用システムにはほとんど負荷がかかりません。

注:

- AIX Host ソリューション・テンプレートを使用するには、適切な SiteScope オプション・ライセンスが必要です。ソリューション・ライセンスの詳細については、HP の営業担当にお問い合わせください。
- AIX Host ソリューションの設定の詳細については、『SiteScope Operating System Host Best Practices』を参照してください。このドキュメントは、<SiteScope のルート・ディレクトリ\sisdocs\pdfs\SiteScope_OS_Best_Practices.pdf にあります。このドキュメントはパスワードで保護されています。パスワードは、オペレーティング・システムのホスト・ソリューション・ライセンス・キーとともに HP から提供されます。

ソリューション・テンプレート・モニタ

AIX Host ソリューション・テンプレートでは、AIX のパフォーマンスと状況の次の側面を対象とするモニタがデプロイされます。

- CPU の状態と使用率の詳細
- メモリの状態と使用率の詳細
- ファイル・システムの状態と使用率の詳細

AIX Host ソリューション・テンプレートのデプロイ方法

このタスクでは、サーバ環境を設定する手順と、AIX Host ソリューション・テンプレートの変数を入力する手順について説明します。

注: AIX Host ソリューション・テンプレートでは、対象ホストごとに UNIX リソース・モニタがデプロイされます。これは、サーバ中心のレポートをサポートするために必要となる補足モニタです。

1. 前提条件

- SiteScope サーバから対象 AIX ホストに接続する必要があります。
- 対象サーバを UNIX リモート・マシンとして SiteScope に追加し、UNIX リモート・テストにパスする必要があります([**リモート サーバ**] > [**UNIX リモート サーバ**])。詳細については、[531 ページ「リモート UNIX サーバを監視するための SiteScope の設定方法」](#)を参照してください。

注:

- サポートされている AIX オペレーティング・システムが SiteScope サーバで実行されている場合、そのサーバ自体を監視することもできます。
- このテンプレートでは、SiteScope でサポートされているバージョンの AIX がサポートされます。詳細については、HP SiteScope デプロイメント・ガイドの「システム要件」を参照してください。

2. ソリューション・テンプレートのデプロイ

ソリューション・テンプレートのデプロイに関連する手順の詳細については、[932 ページ「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」](#)を参照してください。

3. ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力(ユーザ・インタフェース・デプロイメント用のみ)

AIX ソリューション・テンプレートの[デプロイメント値]ページの項目を入力します。ユーザ・インタフェースの詳細については、[945 ページ「\[AIX Host ソリューション テンプレート\] ページ」](#)を参照してください。

[AIX Host ソリューション テンプレート] ページ

このページでは、SiteScope AIX ソリューション・テンプレートをデプロイできます。

アクセス方法	[テンプレート] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、[ソリューション テンプレート] を展開し、[AIX Host] を選択します。
関連タスク	932 ページ「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none">942 ページ「AIX Host ソリューション・テンプレート」88 ページ「テンプレート・ツリー」

メイン設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
SERVER_LIST	監視するサーバの名前。監視対象サーバがリストにない場合、サーバへの接続プロファイルを定義する必要があります。UNIX 接続プロファイルを作成する手順については、531 ページ「リモート UNIX サーバを監視するための SiteScope の設定方法」を参照してください。
サイレント・デプロイメント	テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、< SiteScope のルート・ディレクトリ > \logs\silent_deployment.log に記録されます。 標準設定値：選択されていない
リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証	テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。 注：このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。 標準設定値：選択されている

第 53 章

フェールオーバー監視ソリューション・テンプレート

本章の内容

概念

- [947ページ「フェールオーバー監視ソリューション・テンプレートの概要」](#)

タスク

- [949ページ「フェールオーバー監視ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」](#)

参照情報

- [951ページ「\[フェールオーバー監視ソリューション テンプレート\] ページ」](#)

フェールオーバー監視ソリューション・テンプレートの概要

SiteScope Failover は、自動フェールオーバー機能を備えた特殊なバージョンの SiteScope です。SiteScope マシンに障害が発生した場合、サービスをほとんど中断せずに自動的に素早く別のマシンに置き換えることで、インフラストラクチャ監視のフェールオーバー機能を実装できます。

フェールオーバー監視ソリューション・テンプレートは、フェールオーバー環境を監視するために設計された、事前設定済みのモニタ・セット・テンプレートです。フェールオーバー監視ソリューション・テンプレートを使用すると、プライマリおよびフェールオーバー SiteScope マシンの可用性の監視が最適化された設定で、ソリューション固有の SiteScope モニタを迅速にデプロイできます。

プライマリ SiteScope がフェールオーバー・マネージャ設定ファイルに登録されている場合、SiteScope を実行しているプラットフォームに応じてフェールオーバー監視ソリューション・テンプレート (Windows または UNIX 用) をプライマリ SiteScope にデプロイすることをお勧めします。フェールオーバー監視ソリューション・テンプレートは、Failover Manager が監視するプライマリ SiteScope サーバごとにデプロイする必要があります。

ソリューション・テンプレートによってプライマリ SiteScope 上にモニタ・グループ・コンテナが作成され、その中に特別に設定されたフェールオーバー・モニタが追加されます。これらのフェールオーバー・モニタは、対象のプライマリ SiteScope の可用性とフェールオーバー・サービスを監視するために最適化された設定を持つ SiteScope ログ・モニタです。

ソリューション・テンプレートのデプロイ後、デプロイしたモニタに警告を設定して、プライマリ SiteScope の状態の変化や、フェールオーバーの発生時期について通知を受けることができます。たとえば、プライマリ SiteScope が停止したときに電子メール通知を受け取るようにフェールオーバー警告を設定できます。

注: SiteScope Failover Manager の使用の詳細については、< SiteScope のルート・ディレクトリ> \sisdocs\pdfs\SiteScopeFailover.pdf にある『HP SiteScope Failover Guide』を参照してください。

フェールオーバー・テンプレート・モニタ

フェールオーバー監視ソリューション・テンプレートは SiteScope テンプレート・ツリーの[ソリューション テンプレート]フォルダにあります。すべてのモニタは、Failover Manager の **ha.log** ファイル内で一致する特定のテキストを検索するように設定されたログ・ファイル・モニタです。このファイルからの情報は、警告アクションをアクティブ化するためのトリガとして使用します。

監視の頻度は、フェールオーバー・モニタの[モニタの実行設定]パネルにある[頻度]設定で定義します。標準設定では、各モニタを 60 秒おきに実行するように設定されています。

次の表では、フェールオーバー監視ソリューション・テンプレートのモニタの概要を説明します。

フェールオーバー・モニタ	説明	しきい値設定
Failed to Start SiteScope Failover	<p>これは、プライマリ SiteScope の停止後、フェールオーバー・サービスが開始に失敗したかどうかを検出するために使用するログ・モニタです。</p> <p>モニタがエラー状態の場合、Failover Manager は ha.log ファイルにメッセージを記録し、モニタは一致を確認します。モニタがエラー状態の場合に通知するよう警告を設定します。</p>	<p>一致が「n/a」または 0 以上の場合、エラー</p> <p>0 の場合、正常</p>
Failed to Stop SiteScope Failover	<p>これは、フェールオーバー・マネージャからシャットダウンを要求された後、フェールオーバー・サービスが停止に失敗したかどうかを検出するために使用するログ・モニタです。</p> <p>モニタがエラー状態の場合、Failover Manager は ha.log ファイルにメッセージを記録し、モニタは一致を確認します。モニタがエラー状態の場合に通知するよう警告を設定します。</p>	<p>一致が「n/a」または 0 以上の場合、エラー</p> <p>0 の場合、正常</p>
Primary SiteScope has Recovered	<p>これは、プライマリ SiteScope が障害の後、回復したかどうかを検出するために使用するログ・モニタです。</p> <p>モニタは、一致がある場合はエラー状態になるように設定されます。</p>	<p>一致が「n/a」または 0 以上の場合、エラー</p> <p>0 の場合、正常</p>
Primary SiteScope is Down	<p>これは、プライマリ SiteScope が停止したかどうかを検出するために使用するログ・モニタです。</p> <p>プライマリ SiteScope が停止すると、このモニタはエラー状態になります。</p>	<p>一致が「n/a」または 0 以上の場合、エラー</p> <p>0 の場合、正常</p>
Primary SiteScope Status Unknown	<p>これは、プライマリ SiteScope が不明かどうかを検出するために使用するログ・モニタです。プライマリ SiteScope の状態が不明な場合、フェールオーバーはバックアップとして起動および稼働していない必要があります。</p> <p>モニタは、一致がある場合はエラー状態になるように設定されます。</p>	<p>一致が「n/a」または 0 以上の場合、エラー</p> <p>0 の場合、正常</p>

フェールオーバー監視ソリューション・テンプレートのデプロイ方法

このタスクでは、フェールオーバー監視ソリューション・テンプレートをデプロイする手順について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- 949ページ「フェールオーバー監視ソリューション・テンプレートのデプロイ」
- 949ページ「フェールオーバー・モニタ設定のプロパティの変更 - オプション」
- 949ページ「警告およびレポートの設定」
- 950ページ「フェールオーバー時の監視結果の表示」
- 950ページ「プライマリ SiteScope 回復時の監視結果の表示」

1. フェールオーバー監視ソリューション・テンプレートのデプロイ

次のいずれかの方法を用いて、フェールオーバー監視ソリューション・テンプレートをデプロイします。

- ユーザ・インタフェースのテンプレート・ツリーから。タスクの詳細については、878ページ「[ユーザ・インタフェースを使用したテンプレートのデプロイ方法](#)」を参照してください。
- CSV を使用する。タスクの詳細については、880ページ「[CSV ファイルを使用したテンプレートのデプロイ方法](#)」を参照してください。
- SiteScope ユーザ・インタフェースの外部にある XML ファイルを使用する。タスクの詳細については、914ページ「[XML ファイルを使用した監視構造のデプロイ方法](#)」を参照してください。

デプロイされると、フェールオーバー監視ソリューション・テンプレートによって新しいモニタ・グループ・コンテナが作成され、その中に個々のフェールオーバー・モニタが追加されます。このモニタ・グループ・コンテナには、Failover Monitors on <プライマリ SiteScope インストール・パス> の形式で名前が割り当てられます。

フェールオーバー監視ソリューション・テンプレートのプロパティについては、951ページ「[\[フェールオーバー監視ソリューション テンプレート\] ページ](#)」を参照してください。

2. フェールオーバー・モニタ設定のプロパティの変更 - オプション

フェールオーバー・モニタのモニタ設定のプロパティは、SiteScope のほかのモニタと同じ方法で変更できます。

たとえば、報告された各モニタ・インスタンスの状態を判別する条件は、[しきい値の設定]で変更できます。モニタしきい値の変更の詳細については、374ページ「[しきい値の設定](#)」を参照してください。

3. 警告およびレポートの設定

デプロイしたフェールオーバー・モニタに警告を設定して、プライマリ SiteScope の状態の変化や、フェールオーバーの発生時期についての通知を受けます。警告の設定の詳細については、1226ページ「[警告の設定方法](#)」を参照してください。

新しく作成したフェールオーバー・モニタのレポートを設定することもできます。レポートの設定の詳細については、1278ページ「[レポートの作成方法](#)」を参照してください。

4. フェールオーバー時の監視結果の表示

プライマリ SiteScope が停止した場合、プライマリ SiteScope の状態の変化を通知する警告がトリガされます。フェールオーバー時の監視結果を表示するには、次の形式を使用して Web ブラウザをフェールオーバー SiteScope サーバのアドレスにリダイレクトする必要があります。

`http://<Failover Manager 名>:<Failover Manager ポート>/SiteScope`

例: `http://localhost:8080/SiteScope`。

5. プライマリ SiteScope 回復時の監視結果の表示

プライマリ SiteScope が回復すると、[**Primary SiteScope has Recovered**] モニタに警告が設定されている場合は警告がトリガされます。監視結果を表示するには、次の形式を使用して Web ブラウザをプライマリ SiteScope インスタンスのアドレスにリダイレクトします。

`http://<プライマリ SiteScope 名>:<プライマリ SiteScope ポート>/SiteScope`

[フェールオーバー監視ソリューション テンプレート] ページ

このページでは、プライマリ SiteScope サーバにフェールオーバー監視ソリューション・テンプレートをデプロイできます。

アクセス方法	[テンプレート] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、[ソリューション テンプレート] コンテナを展開し、必要なフェールオーバー監視テンプレートを選択します。
関連タスク	949 ページ「フェールオーバー監視ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」
関連情報	947 ページ「フェールオーバー監視ソリューション・テンプレートの概要」

Windows 用フェールオーバー監視ソリューション・テンプレート

[メイン設定] には次の要素が含まれています。

UI 要素	説明
Failover Manager host	フェールオーバー・マネージャ・ホストの名前。
Failover Manager user name	SiteScope がフェールオーバー・マネージャへの接続時に使用する管理者資格情報を持つユーザ名。
Failover Manager password	SiteScope がフェールオーバー・マネージャへの接続時に使用するユーザ名のパスワード。
Failover Manager ha.log path	Failover Manager の ha.log ファイルへのフル UNC パス。 標準設定値: \\< Failover Manager サーバ> \SiteScope\logs\ha.log
Primary SiteScope installation path	プライマリ SiteScope サーバのフル・インストール・パス。 標準設定値: \\< 共有フォルダ> \< プライマリ・サーバ> \SiteScope 構文の例外: インストール・パスにメタ文字を使用している場合、その文字に通常の意味を持たせる場合はエスケープする必要があります。メタ文字をエスケープするには、メタ文字の前に円記号 (\) を付けます。
Log file encoding	監視するログ・ファイルの内容で、SiteScope を実行するサーバとは別のエンコーディングを使用している場合、使用するエンコーディングを入力します。これは、SiteScope が使用するコード・ページが記録先ログ・ファイルで使用する文字セットをサポートしていない場合に必要となる可能性があります。ここで指定することで、SiteScope がエンコードされたログ・ファイルの内容を正確に照合および表示できます。 標準設定値: UTF-8

UI 要素	説明
サイレント・デプロイメント	<p>テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、<SiteScope のルート・ディレクトリ>\logs\silent_deployment.log に記録されます。</p> <p>標準設定値 : 選択されていない</p>
リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証	<p>テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。</p> <p>注 : このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。</p> <p>標準設定値 : 選択されている</p>

UNIX 用フェールオーバー監視ソリューション・テンプレート

[メイン設定]には次の要素が含まれています。

UI 要素	説明
Failover Manager Host	フェールオーバー・マネージャ・ホストの名前。
Failover Manager User	SiteScope がフェールオーバー・マネージャへの接続時に使用する管理者資格情報を持つユーザ名。
Failover Manager Password	SiteScope がフェールオーバー・マネージャへの接続時に使用するユーザ名のパスワード。
Failover Manager HA Log	<p>フェールオーバー・マネージャの ha.log ファイルへのフル・パス。</p> <p>標準設定値 : \opt\SiteScope\logs\ha.log</p>
Primary SiteScope Installation Path	<p>プライマリ SiteScope サーバのフル・インストール・パス。</p> <p>構文の例外 : インストール・パスにメタ文字を使用している場合、その文字に通常の意味を持たせる場合はエスケープする必要があります。メタ文字をエスケープするには、メタ文字の前に円記号 (\) を付けます。</p> <p>標準設定値 : //<HA マウント> //<プライマリ・サーバ> //SiteScope</p>

UI 要素	説明
サイレント・デプロイメント	<p>テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、<SiteScope のルート・ディレクトリ>\logs\silent_deployment.log に記録されます。</p> <p>標準設定値 : 選択されていない</p>
リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証	<p>テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。</p> <p>注 : このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。</p> <p>標準設定値 : 選択されている</p>

第 54 章

HP Quality Center ソリューション・テンプレート

本章の内容

概念

- 955ページ「HP Quality Center ソリューション・テンプレートの概要」

タスク

- 957ページ「HP Quality Center ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」

参照情報

- 959ページ「[HP Quality Center ソリューション テンプレート] ページ」
- 966ページ「トラブルシューティングおよび制限事項」

HP Quality Center ソリューション・テンプレートの概要

HP Quality Center ソリューション・テンプレートは、HP Quality Center 9.x および 10.x アプリケーション・サーバの可用性、HP Quality Center 9.2 および 10.0 データベース・サーバのライセンスの状態、HP QuickTest Professional ライセンス・サーバ・アプリケーションおよびシステム可用性をテストする、標準設定の測定値で設定された一連のモニタをデプロイするために使用できるテンプレートです。

HP Quality Center ソリューション・テンプレートは、包括的な HP Quality Center による監視を提供します。SiteScope ユーザまたは IT 組織がアプリケーションのエキスパートである必要はありません。また、パフォーマンス・モニタの設定やデプロイの時間が短縮し、パフォーマンスのボトルネック(リアルタイムおよび長期間)の特定が容易になります。さらに、実運用システムにはほとんど負荷がかかりません。

注:

- HP Quality Center ソリューション・テンプレートを使用するには、適切な SiteScope オプション・ライセンスが必要です。ソリューション・ライセンスの詳細については、HP の営業担当にお問い合わせください。
- HP Quality Center ソリューションの詳細は、『SiteScope Quality Center Best Practices』を参照してください。このドキュメントは SiteScope インストールに含まれており、<SiteScope のルートディレクトリ> \sisdocs\pdfs\SiteScope_HP_QC_Best_Practices.pdf にあります。このドキュメントはパスワードで保護されています。パスワードは、HP Quality Center ソリューションのライセンス・キーとともに HP から提供されます。
- HP Quality Center Application Server for Windows と HP QuickTest Professional License Server ソリューション・テンプレートは、UNIX プラットフォームにインストールされた SiteScope ではサポートされていません。

本項の内容

- 955ページ「ソリューション・テンプレート・モニタ」
- 955ページ「Quality Center のサードパーティ・アプリケーションの監視」

ソリューション・テンプレート・モニタ

HP Quality Center ソリューションには、次の主要コンポーネントを監視するソリューション・テンプレートが含まれます。

- **HP Quality Center Application Server for UNIX/Windows** : このソリューション・テンプレートは、アプリケーションがインストールされているオペレーティング・システムの HP Quality Center アプリケーション・サーバの可用性とパフォーマンスを監視するために使用します。
- **HP Quality Center 9.2/10.0 License Status** : このソリューション・テンプレートは、HP Quality Center データベース・サーバでの HP Quality Center のライセンス使用状況と有効期限を監視するために使用します(ソリューション・テンプレートは Oracle および Microsoft SQL データベースで認定されています)。
- **HP QuickTest Professional License Serve** : このソリューション・テンプレートは、HP QuickTest Professional ライセンス・サーバの可用性とパフォーマンスを監視するために使用します。

Quality Center のサードパーティ・アプリケーションの監視

Quality Center がデプロイされているアプリケーション・サーバ、使用されるデータベースなど、Quality Center のサードパーティ・コンポーネントの監視には、ほかの SiteScope ソリューション・テンプレート、モ

ニタ、あるいはその両方を使用することをお勧めします。

Quality Center のサードパーティ・コンポーネントの監視に推奨されるソリューションの詳細については、次の表を参照してください。

データベース・サーバの監視

データベース・タイプ	推奨ソリューション
Oracle	1021ページ「Oracle Database Solution Templates」
Microsoft SQL Server	1007ページ「Microsoft SQL Server ソリューション・テンプレート」
LDAP	LDAP Monitor

アプリケーション/Web サーバの監視

アプリケーション/Web サーバのタイプ	推奨ソリューション
Apache サーバ	Apache Server Monitor
JBoss	975ページ「JBoss Application Server ソリューション・テンプレート」
Microsoft IIS	990ページ「Microsoft IIS ソリューション・テンプレート」 Microsoft IIS Server Monitor
WebLogic 6.x-8.x, 9.x-10.x	1063ページ「WebLogic ソリューション・テンプレート」
WebSphere 5.x, 6.x	1069ページ「WebSphere ソリューション・テンプレート」
JMX アクセス(JSR 160)をサポートするその他の Web/アプリケーション・サーバ	JMX Monitor

HP Quality Center ソリューション・テンプレートのデプロイ方法

このタスクでは、変数を入力する手順と HP Quality Center ソリューション・テンプレートをデプロイする手順について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- [957 ページ「前提条件」](#)
- [958 ページ「ソリューション・テンプレートのデプロイ」](#)
- [958 ページ「ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力\(ユーザ・インタフェース・デプロイメント用のみ\)」](#)

1. 前提条件

HP Quality Center Application Server for Windows :

- SiteScope サーバから Quality Center コンポーネントにアクセスできる。
- 次の情報がわかっている。
 - Quality Center アプリケーションのバージョン(9.2, 10.0)
 - アプリケーション・サーバの完全なホスト名とログイン資格情報
 - Quality Center リポジトリ・ディスクまたはリポジトリの場所(別のホストにある場合)
 - ログイン URL で使用されるポート(通常は指定なし。つまりポート 80 が使用される)

注: このソリューション・テンプレートは UNIX プラットフォームにインストールされている SiteScope ではサポートされません。

HP Quality Center Application Server for UNIX :

- SiteScope サーバから Quality Center コンポーネントにアクセスできる。
- 次の情報がわかっている。
 - Quality Center アプリケーションのバージョン(9.2, 10.0)
 - UNIX オペレーティング・システムのタイプ
 - アプリケーション・サーバの完全なホスト名とログイン資格情報
 - System file system
 - Quality Center リポジトリ・ディスクまたはリポジトリの場所(別のホストにある場合)
 - ログイン URL で使用されるポート(通常は指定なし。つまりポート 80 が使用される)
 - UNIX オペレーティング・システムで Quality Center アプリケーションを実行する java プロセス・コマンドの名前("ps -ef | grep java" を使用できる)。

HP Quality Center 9.2/10.0 License Status :

- SiteScope サーバから Quality Center 9.2 または 10.0 コンポーネントにアクセスできる。
- Quality Center データベースに関する次の情報がわかっている。
 - データベースのホスト名
 - タイプ(Oracle, Microsoft SQL, MSDE 2000)
 - ドライバ(SiteScope に組み込まれているデータベース・ドライバの可能性あり)
 - データベース接続 URL

HP QuickTest Professional License Server :

- SiteScope サーバから HP QuickTest Professional ライセンス・サーバにアクセスできる。
- HP QuickTest Professional ライセンス・サーバのホスト名とログイン資格情報がわかっている。

注: このソリューション・テンプレートは UNIX プラットフォームにインストールされている SiteScope ではサポートされません。

2. ソリューション・テンプレートのデプロイ

ソリューション・テンプレートのデプロイに関連する手順の詳細については、932ページ「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」を参照してください。

3. ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力(ユーザ・インタフェース・デプロイメント用のみ)

HP Quality Center ソリューション・テンプレートの[デプロイメント値]ページの項目を入力します。ユーザ・インタフェースの詳細については、959ページ「[HP Quality Center ソリューション・テンプレート]ページ」を参照してください。

[HP Quality Center ソリューション テンプレート] ページ

このページでは、Windows および UNIX プラットフォームの HP Quality Center 9.x と 10.x アプリケーション・サーバの監視、さらに HP Quality Center 9.2 または 10.0 データベース・サーバのライセンス使用状況と有効期限の監視を行うために、HP Quality Center ソリューション・テンプレートをデプロイできます。また、これらのテンプレートで、HP QuickTest Professional ライセンス・サーバ・アプリケーションとシステムの可用性も監視できます。

アクセス方法	[テンプレート] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで[ソリューション テンプレート]を展開し、必要な HP Quality Center ソリューション・テンプレートを選択します。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none">ソリューション・テンプレートでは、Ping モニタを使用してシステムの可用性を監視します。ネットワークで Ping トラフィックがブロックされている場合は、代わりにポート・モニタを使用する必要があります。HP Quality Center Application Server for Windows と HP HP QuickTest Professional License Server ソリューション・テンプレートは、UNIX プラットフォームにインストールされた SiteScope ではサポートされていません。
関連タスク	932 ページ「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none">955 ページ「HP Quality Center ソリューション・テンプレートの概要」966 ページ「トラブルシューティングおよび制限事項」88 ページ「テンプレート・ツリー」

HP Quality Center Application Server for Windows

[メイン設定]には次の要素が含まれています。

UI 要素	詳細
Application server host name	Quality Center アプリケーション・サーバのホスト名。
Application server user name	Quality Center アプリケーション・サーバのホストのログイン・ユーザ名。
Application server password	Quality Center アプリケーション・サーバのホストのパスワード。
System disk	Quality Center アプリケーション・サーバがインストールされている論理ディスク・ドライブ。 標準設定値 : C

UI 要素	詳細
Repository disk	Quality Center リポジトリがインストールされている論理 ディスク・ドライブ。リポジトリが別のホストにある場合は、システム・ディスク・ドライブを入力し、テンプレートをデプロイした後にリポジトリ・ディスク使用率 モニタを変更します。 標準設定値 : D
Site Administration path	Quality Center Site Administration の URL のサフィックス。 標準設定値 : qcbin/SiteAdmin.htm(Quality Center バージョン 9.x の場合は sabin に変更します)。
Application port	Quality Center アプリケーションへのログイン URL で使用されるポート。通常はポートが指定されません。つまり、ポート 80 が使用されます。 標準設定値 : 80
Maximum round trip time (milliseconds)	アプリケーション URL から応答を得るのに妥当な往復時間のエラー・ステータスしきい値として使用されるミリ秒の値。 標準設定値 : 1500 ミリ秒
Quality Center service name	Quality Server サービスの名前。 標準設定値 : HP Quality Center。Quality Center バージョン 9.x の場合は、これを Mercury Quality Center に変更します。
サイレント・デプロイメント	テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、< SiteScope のルート・ディレクトリ>\logs\silent_deployment.log に記録されます。 標準設定値 : 選択されていない
リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証	テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。 注 : このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。 標準設定値 : 選択されている
リモート・サーバのテスト (HP Quality Center Application Server for Windows/UNIX のみ)	テンプレートのデプロイ後、テンプレート・リモート・サーバから作成した接続をテストします。テストはバックグラウンドで実行されるので、引き続き SiteScope を使用できます。 標準設定値 : 選択されていない

HP Quality Center Application Server for UNIX

[メイン設定]には次の要素が含まれています。

UI 要素	説明
Application server host name	Quality Center アプリケーション・サーバのホスト名。
Application server user name	Quality Center アプリケーション・サーバのホストのログイン・ユーザ名。
Application server password	Quality Center アプリケーション・サーバのホストのパスワード。
UNIX operating system	UNIX オペレーティング・システムのタイプ。Solaris, Red Hat Enterprise Linux など。UNIX オペレーティング・システム・タイプのリストは、[新規 UNIX リモート・サーバ]/[UNIX リモート・サーバの編集]ダイアログ・ボックスの[オペレーティングシステム]フィールドに表示されます。 標準設定値：Linux
System file system	Quality Center アプリケーション・サーバがインストールされているファイル・システム。
Repository file system	Quality Center リポジトリがあるファイル・システム。リポジトリが別のホストにある場合は、システム・ディスクのファイル・システムを入力し、テンプレートをデプロイした後にリポジトリ・ディスク使用率モニタを変更します。
Site Administration path	Quality Center Site Administration の URL のサフィックス。 標準設定値：qcbn/SiteAdmin.htm(Quality Center バージョン 9.x の場合は sabin に変更します)。
Application port	Quality Center アプリケーションへのログイン URL で使用されるポート。通常はポートが指定されません。つまり、ポート 80 が使用されます。 標準設定値：80
Maximum round trip time (milliseconds)	アプリケーション URL から応答を得るのに妥当な往復時間のエラー・ステータスしきい値として使用されるミリ秒の値。 標準設定値：1500 ミリ秒
Quality Center process unique name	システムで実行されているほかのプロセスと Quality Center の java プロセスを識別するために使用する名前。Quality Center プロセス名、または UNIX オペレーティング・システムで Quality Center アプリケーションを実行する java プロセス・コマンドの一意の部分を使用できます(ps -ef grep java を使用できます)。

UI 要素	説明
サイレント・デプロイメント	<p>テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、< SiteScope のルート・ディレクトリ> \logs\silent_deployment.log に記録されます。</p> <p>標準設定値 : 選択されていない</p>
リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証	<p>テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。</p> <p>注 : このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。</p> <p>標準設定値 : 選択されている</p>

HP Quality Center 9.2/10.0 License Status :

[メイン設定]には次の要素が含まれています。

UI 要素	詳細
Site Administration database host	Quality Center Site Administration がインストールされているホスト名。
Database driver	<p>データベースへの接続に使用するデータベース・ドライバ。カスタム・ドライバを使用する場合は、ドライバを <SiteScope のルート・ディレクトリ> \WEB-INF\lib ディレクトリにインストールする必要があります。</p> <p>標準設定値 : com.inet.ora.OraDriver(Oracle データベースをサポート)。Microsoft SQL の場合、次を使用します : com.mercury.jdbc.sqlserver.SQLServerDriver。</p>
Connection URL (full)	<p>Quality Center データベース接続 URL。</p> <p>例 :</p> <p>jdbc:inetora:[host]:[port]:[sid](Oracle データベースの場合)</p> <p>jdbc:mercury:sqlserver://labm1qcmd05.devlab.ad:1433;DatabaseName=May-22_2008_db(Microsoft SQL の場合)</p>

UI 要素	詳細
Connection URL (part 0-3)	<p>接続 URL がセミコロン(;)で区切られた値で構成されている場合は、全体を [Connection URL (full)] フィールドに入力し、各部分を別々のフィールドに入力します。</p> <p>例 :</p> <p>Connection URL (part 0) = jdbc:mercury:sqlserver://labm1qcmd05.devlab.ad:1433</p> <p>Connection URL (part 1) = DatabaseName=May22_2008_db</p> <p>セミコロンで区切られていない場合は、次のように [Connection URL (part 0)] に接続 URL 全体を入力します。</p> <p>Connection URL (part 0) = jdbc:inetora:[host]:[port]:[sid]</p> <p>注 :このように分割するのは、接続 URL がスクリプト・モニタのパラメータとして使用され、セミコロン(;)文字がセキュリティ上の理由で許可されないためです。</p>
Database user	<p>データベースのクエリに必要なユーザ名。</p> <p>指定するユーザ名には、Site Administration データベースの ADMIN と SESSION_LICENSE テーブルで SELECT クエリを実行する権限が必要です。</p>
Database password	<p>特定のユーザ名でデータベースにログオンし、SELECT クエリを実行するために必要なパスワード。</p>
Database password - encrypted	<p>暗号化形式のデータベース・パスワード。暗号化されたパスワードを取得するには、パスワードに対して次のツールを実行します。</p> <p><SiteScope のルート・ディレクトリ>\tools\AutoDeployment\encrypt_password.bat <password></p> <p>UNIX プラットフォームの場合は、encrypt_password.sh <パスワード>を実行します。</p> <p>注 :暗号化パスワードは、スクリプト・モニタのパラメータとして使用され、セキュリティ上の理由から必須です。</p>
Admin table name	<p>Quality Center ADMIN テーブルの名前。</p> <p>標準設定値 : ADMIN(Oracle データベースをサポート)。Microsoft SQL データベースの場合は td.ADMIN を使用します。</p>
Session license table name	<p>Quality Center セッション・ライセンス・テーブルの名前。</p> <p>標準設定値 : SESSION_LICENSE(Oracle データベースをサポート)。Microsoft SQL データベースの場合は td.SESSION_LICENSE を使用します。</p>

UI 要素	詳細
SiteScope expiration error status (days remaining)	<p>ライセンス有効期限のエラーしきい値。ライセンス有効期限のステータスがデプロイされた各 モニタは、ライセンスの有効期限の残り日数がここで指定した数より少なくなるとエラー・ステータスになります。</p> <p>標準設定値 : 7 日</p>
SiteScope expiration warning status (days remaining)	<p>ライセンス有効期限の警告しきい値。ライセンス有効期限のステータスがデプロイされた各 モニタは、ライセンスの有効期限の残り日数がここで指定した数より少なくなると警告ステータスになります。</p> <p>標準設定値 : 30 日</p>
Number of free licenses for error	<p>ライセンス使用状況のエラーしきい値。ライセンス使用状況のステータスがデプロイされた各 モニタは、利用可能なライセンスの数がここで指定した数より少なくなるとエラー・ステータスになります。</p> <p>標準設定値 : 5</p>
Number of free licenses for warning	<p>ライセンス使用状況の警告しきい値。ライセンス使用状況のステータスがデプロイされた各 モニタは、利用可能なライセンスの数がここで指定した数より少なくなると警告ステータスになります。</p> <p>標準設定値 : 20</p>
サイレント・デプロイメント	<p>テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、< SiteScope のルート・ディレクトリ> \logs\silent_deployment.log に記録されます。</p> <p>標準設定値 : 選択されていない</p>
リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証	<p>テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。</p> <p>注 : このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。</p> <p>標準設定値 : 選択されている</p>

注:

- Quality Center ライセンスは、XML 形式で Site Administration データベースの ADMIN テーブルに格納されます。これには、さまざまな Quality Center モジュール(不具合、要件など)の Quality Center ライセンスの有効期限およびクォータに関する情報が含まれています。この XML 形式は、Quality Center 9.2 と Quality Center 10.0 では異なります。SESSION_LICENSE という名前の別のテーブルには、ログインした各セッションのリアルタイムのエントリと使用されているライセンス・タイプが表示されます。
- ライセンスの使用状況と有効期限を計算するために、SiteScope ソリューション・テンプレートではスクリプト (Microsoft Windows プラットフォームの場合は **runQCLicenseTool.bat**, UNIX

プラットフォームの場合は **runQCLicenseTool.sh**)を実行するスクリプト・モニタが使用されます。スクリプトによって Quality Center データベースに照会され、要求したライセンス・タイプに関する次の情報がスクリプト・モニタに返されます。

Total=<総割り当て額>;used=<このタイプの現在の使用量>;free=<総空き容量>;exp_days=<ライセンスが期限切れになるまでの日数>。

HP HP QuickTest Professional License Server

[メイン設定]には次の要素が含まれています。

UI 要素	詳細
QTP license server host name	HP QuickTest Professional ライセンス・サーバのホスト名。
QTP license server user name	HP QuickTest Professional ライセンス・サーバ・システム・ログインのユーザ名。
QTP license server password	HP QuickTest Professional ライセンス・サーバ・システム・ログインのパスワード。
サイレント・デプロイメント	<p>テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、<SiteScope のルート・ディレクトリ> \logs\silent_deployment.log に記録されます。</p> <p>標準設定値 :選択されていない</p>
リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証	<p>テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。</p> <p>注 :このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。</p> <p>標準設定値 :選択されている</p>

トラブルシューティングおよび制限事項

ソリューション・テンプレートをデプロイした後に、モニタで**内容の照合エラー**が発生した場合、使用している Quality Center ではこのライセンス・タイプがサポートされていない可能性があります。

- その場合は、サポートされていないモニタを削除する必要があります。
- モニタがサポートされている場合は、
<SiteScope のルート・ディレクトリ>\scripts\qc_license_tool.log にあるログ・ファイルを確認してください。

デバッグするためにログ・ファイルを設定するには、<SiteScope のルート・ディレクトリ>\conf\ems\tools\conf\core\Tools\log4j\PlainJava\log4j.properties を開いて、

次のように設定します。

```
loglevel=DEBUG
```

第 55 章

HP Service Manager ソリューション・テンプレート

本章の内容

概念

- [968ページ「HP Service Manager ソリューションの概要」](#)

タスク

- [969ページ「HP Service Manager ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」](#)

参照情報

- [971ページ「\[HP Service Manager ソリューション テンプレート\] ページ」](#)

HP Service Manager ソリューションの概要

SiteScope の HP Service Manager ソリューション・テンプレートでは、Windows および UNIX プラットフォーム上の HP Service Manager アプリケーション・サーバの可用性とシステム状態を監視し、トラブルシューティングできます。HP Service Manager のロード・バランサ状態と共有メモリの使用率を測定し、致命的エラーがないかログを監視します。水平拡張モードの HP Service Manager の監視にも使用できます。このテンプレートは Service Manager 7.11 をサポートしています。

HP Service Manager ソリューション・テンプレートは包括的な監視を提供します。SiteScope ユーザまたは IT 組織にアプリケーションの専門知識は必要ありません。また、パフォーマンス・モニタの設定とデプロイにかかる時間を短縮し、リアルタイムのパフォーマンス・ボトルネックと長期的な傾向のどちらの特定にも役立ちます。

注:

- HP Service Manager ソリューション・テンプレートを使用するには、適切な SiteScope オプション・ライセンスが必要です。ソリューション・ライセンスの詳細については、HP の営業担当にお問い合わせください。
- Service Manager ソリューション・テンプレートの詳細については、『Service Manager Best Practices』ドキュメントを参照してください。このドキュメントは、SiteScope インストールに含まれており、< **SiteScope のルート・ディレクトリ** > \sisdocs\pdfs\SiteScope_HP_SM_Best_Practices.pdf にあります。このドキュメントはパスワードで保護されています。パスワードは、HP Service Manager ソリューションのライセンス・キーとともに HP から提供されます。

ソリューション・テンプレート・モニタ

HP Service Manager ソリューション・テンプレートは、Windows および UNIX プラットフォーム上の HP Service Manager サーバのパフォーマンスと状況を監視対象とする動的なモニタのセットを作成します。モニタの詳細については、『SiteScope HP Service Manager Server Best Practices』ドキュメントを参照してください。

HP Service Manager ソリューション・テンプレートのデプロイ方法

このタスクでは、サーバ環境を設定する手順と、HP Service Manager ソリューション・テンプレートの変数を入力する手順について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- 969ページ「前提条件」
- 969ページ「sm-lbstatus-win-ssh.bat および sm-shm-win-ssh.bat スクリプトの実行 (Windows 用 HP Service Manager 向け)」
- 970ページ「ソリューション・テンプレートのデプロイ」
- 970ページ「ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力 (ユーザ・インタフェース・デプロイメント用のみ)」

1. 前提条件

- HP Service Manager ソリューション・テンプレートがサポートするのは Service Manager 7.11 のみです。
- テンプレートのデプロイ時、監視対象のプロセスはすべて起動し、稼動している必要があります。SiteScope が対象モニタを作成しようとしたときにプロセスが検出されない場合、「カウンタが選択されていません」というエラーが表示され、モニタが作成されません。

回避策 :稼動していないプロセスがある場合、テンプレートを独自のテンプレート・コンテナにコピーし、プロセス・モニタを削除できます。後でプロセス・モニタを手動で作成するか、プロセス・モニタのみが含まれるテンプレートの別のコピーをデプロイします。

- HP Service Manager for Windows ソリューション・テンプレートの場合、HP Service Manager がインストールされている Microsoft Windows リモート・サーバ上で **sm-lbstatus-win-ssh.bat** および **sm-shm-win-ssh.bat** スクリプトを実行する必要があります。詳細については、次のステップを参照してください。

注: HP Service Manager for UNIX ソリューション・テンプレートは < SiteScope のルート・ディレクトリ > /scripts.remote にある **sm-shm.txt** および **sm-lbstatus.txt** ファイルを使用して、リモート Service Manager UNIX ホスト上でコマンドを実行します。

2. sm-lbstatus-win-ssh.bat および sm-shm-win-ssh.bat スクリプトの実行 (Windows 用 HP Service Manager 向け)

- a. SSH サーバ (OpenSSH) をインストールして設定します。詳細については、569ページ「リモート Windows サーバでの SSH 監視の設定方法」を参照してください。
- b. SiteScope がインストールされているマシンで、< SiteScope のルート・ディレクトリ > \tools ディレクトリにある **RemoteNTSSH.zip** ファイルを検索します。監視対象のリモート Service Manager ホスト上で **RemoteNTSSH.zip** ファイルを展開します。SiteScope がリモート・サーバにアクセスするために使用するアカウントのホーム・ディレクトリの中のスクリプト・サブディレクトリに、zip ファイルの内容を入れます (UNIX および Windows-Windows SSH のみ)。例：
home/sitescope/scripts

注: Windows プラットフォームでは、ホーム・ディレクトリへのパスは、個々の SSH サーバに依存します。たとえば、Cygwin SSH サーバを C:\Cygwin にインストールする場合、管理者ユーザ用ホーム・ディレクトリへの標準設定パスは、C:\Cygwin\home\Administrator となります。詳細については、ご使用の SSH サーバのマニュアルを参照してください。

- c. SiteScope がインストールされているマシンで、< **SiteScope のルート・ディレクトリ** > \tools\ServiceManager ディレクトリにある **SM_Scripts_win_ssh.zip** というファイルを見つけます。リモート監視対象の Service Manager ホスト上のファイルを、SiteScope が使用するアカウントのホーム・ディレクトリ内のスクリプト・ディレクトリに解凍します。(その zip は **sm-lbstatus-win-ssh.bat** および **sm-shm-win-ssh.bat** ファイルを含みます。)両方のスクリプトに実行権限があることを確認します。Service Manager を水平拡張モードで実行している場合、これをすべてのシステムで繰り返す必要があります。
 - d. Service Manager ログ・フォルダを共有します。**logs** フォルダを右クリックし、[**プロパティ**] > [**共有**]を選択します。[**このフォルダを共有する**]を選択し、[**共有名**]を入力します。SiteScope モニタがそのマシン上でモニタの実行に使用するユーザに共有権限を設定し、[**OK**]をクリックします。
3. **ソリューション・テンプレートのデプロイ**
- ソリューション・テンプレートのデプロイに関連する手順の詳細については、932ページ「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」を参照してください。
4. **ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力(ユーザ・インタフェース・デプロイメント用のみ)**
- HP Service Manager ソリューション・テンプレートの[デプロイメント値]ページの項目を入力します。ユーザ・インタフェースの詳細については、971ページ「[HP Service Manager ソリューションテンプレート]ページ」を参照してください。

[HP Service Manager ソリューション テンプレート] ページ

このページでは、HP Service Manager ソリューション・テンプレートをデプロイできます。

アクセス方法	[テンプレート] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで[ソリューション テンプレート]を展開して、必要な HP Service Manager ソリューション・テンプレートを選択します。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none">HP Service Manager を水平拡張モードで実行している場合、HP Service Manager ソリューション・テンプレートをすべてのシステムでデプロイして設定する必要があります。テンプレートのデプロイ時、監視対象のプロセスはすべて起動し、稼動している必要があります。「カウンタが選択されていません」というエラーが表示された場合、停止しているプロセスがあることを示します。この問題を解決するには、テンプレートのコピーを作成し、エラーが発生したモニタを削除してからテンプレートをデプロイします。ソリューション・テンプレートでは、Ping モニタを使用してシステムの可用性を監視します。ネットワークで Ping トラフィックがブロックされている場合、ポート・モニタを使用し、[グローバル検索と置換]を使用して依存関係を Ping モニタからポート・モニタに置き換えます。
関連タスク	932ページ「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none">967ページ「HP Service Manager ソリューション・テンプレート」88ページ「テンプレート・ツリー」

HP Service Manager for Windows

[メイン設定]には次の要素が含まれています。

UI 要素	説明
SM installation partition	HP Service Manager がインストールされているディスク・ドライブ。 標準設定値 : C
Application server host name	アプリケーション・サーバ・ホストの名前。
User name	このプロファイルを使用してアプリケーション・サーバにアクセスするためのログイン名。
Password	このユーザのアプリケーション・サーバ・ログイン・パスワード。
Installation path	HP Service Manager バイナリが実行されているディレクトリへのパス。 標準設定値 : C:\Program Files\HP\Service Manager 7.11\Server\RUN

UI 要素	説明
CPU error threshold	CP エラーを起動するためのしきい値。 標準設定値 : 90
CPU warning threshold	CPU 警告を起動するためのしきい値。 標準設定値 : 80
Memory error threshold	メモリ・エラーを起動するためのしきい値。 標準設定値 : 2,202,012 KB
Memory warning threshold	メモリ警告を起動するためのしきい値。 標準設定値 : 1,782,580 KB
サイレント・デプロイメント	テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、<SiteScope のルート・ディレクトリ> \logs\silent_deployment.log に記録されます。 標準設定値 : 選択されていない
リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証	テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。 注 : このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。 標準設定値 : 選択されている
リモート・サーバのテスト	テンプレートのデプロイ後、テンプレート・リモート・サーバから作成した接続をテストします。テストはバックグラウンドで実行されるので、引き続き SiteScope を使用できます。 標準設定値 : 選択されていない

HP Service Manager for UNIX

[メイン設定]には次の要素が含まれています。

UI 要素	説明
SM installation partition	HP Service Manager がインストールされているディスク・ドライブ。
Application server host name	アプリケーション・サーバ・ホストの名前。

UI 要素	説明
User name	このプロファイルを使用してアプリケーション・サーバにアクセスするためのログイン名。
Password	このユーザのアプリケーション・サーバ ログイン・パスワード。
UNIX operating system	HP Service Manager が実行されている UNIX オペレーティング・システム。
UNIX connection method	UNIX オペレーティング・システムへの接続に使用する方法。
Shell prompt	リモート・システムがコマンドを処理できるときのプロンプト出力 (Telnet および Rlogin 接続方法のみ)。
Installation path	HP Service Manager バイナリが実行されているディレクトリへのパス。
CPU error threshold	CP エラーを起動するためのしきい値。 標準設定値 : 90
CPU warning threshold	CPU 警告を起動するためのしきい値。 標準設定値 : 80
Memory error threshold	メモリ・エラーを起動するためのしきい値。 標準設定値 : 2202012 KB
Memory warning threshold	メモリ警告を起動するためのしきい値。 標準設定値 : 1,782,580 KB
サイレント・デプロイメント	テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、< SiteScope のルート・ディレクトリ> \logs\silent_deployment.log に記録されます。 標準設定値 : 選択されていない
リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証	テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。 注 : このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。 標準設定値 : 選択されている

UI 要素	説明
リモート・サーバのテスト	テンプレートのデプロイ後、テンプレート・リモート・サーバから作成した接続をテストします。テストはバックグラウンドで実行されるので、引き続き SiteScope を使用できます。 標準設定値 : 選択されていない

第 56章

JBoss Application Server ソリューション・テンプレート

本章の内容

概念

- [976ページ「JBoss Application Server ソリューションの概要」](#)

タスク

- [977ページ「JBoss Application Server ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」](#)

参照情報

- [979ページ「JBoss ソリューション・テンプレート・ページ」](#)

JBoss Application Server ソリューションの概要

JBoss Application Server ソリューション・テンプレートは、標準設定の測定値で設定された一連のモニタ(JBoss アプリケーション・サーバの状況、可用性、パフォーマンスをテストします)をデプロイする場合に使用できるテンプレートです。このテンプレートでは、JBoss アプリケーション・サーバのバージョン 4.x と 5.x がサポートされます。

JBoss Application Server ソリューション・テンプレートでは包括的な JBoss 監視が可能です。SiteScope ユーザまたは IT 組織にアプリケーションの専門知識は必要ありません。また、パフォーマンス・モニタの設定やデプロイの時間が短縮し、パフォーマンスのボトルネック(リアルタイムおよび長期間)の特定が容易になります。さらに、実運用システムにはほとんど負荷がかかりません。

注:

- JBoss Application Server ソリューション・テンプレートを使用するには、適切な SiteScope オプション・ライセンスが必要です。ソリューション・ライセンスの詳細については、HP の営業担当にお問い合わせください。
- JBoss ソリューションの詳細については、『SiteScope JBoss Application Server Best Practices』ドキュメントを参照してください。このドキュメントは、< **SiteScope のルート・ディレクトリ**> \sisdocs\pdfs\SiteScope_JBoss_Best_Practices.pdf にあります。このドキュメントはパスワードで保護されています。パスワードは、JBoss Application Server ソリューション・ライセンス・キーとともに HP から提供されます。

ソリューション・テンプレート・モニタ

JBoss Application Server ソリューション・テンプレートを使用すると、JBoss アプリケーション・サーバのパフォーマンスと状況を監視対象とするモニタのセットが動的に作成されます。正確なモニタ・セットは、ソリューション・テンプレートのデプロイ時に選択したエンティティにより異なります。モニタの詳細については、『SiteScope JBoss Application Server Best Practices』ドキュメントを参照してください。

JBoss Application Server ソリューション・テンプレートのデプロイ方法

このタスクでは、JBoss Application Server ソリューション・テンプレートのサーバ環境を設定し、変数を入力する手順について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- 977 ページ「前提条件」
- 977 ページ「JBoss の開始」
- 978 ページ「ソリューション・テンプレートのデプロイ」
- 978 ページ「ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力(ユーザ・インタフェース・デプロイメント用のみ)」

1. 前提条件

- JBoss ソリューション・テンプレートでは、JBoss アプリケーション・サーバのバージョン 4.x と 5.x がサポートされます。
- 収集する JMX 統計情報(JMX インスタンスのホスト名とポートなど)の URL と、JMX のユーザ名およびパスワードを把握しておく必要があります。
- SiteScope と監視対象サーバは、同じホスト上で実行できます。
- SiteScope で監視できるように、JBoss を特定の方法で開始する必要があります。詳細については、次のステップを参照してください。

2. JBoss の開始

SiteScope で JBoss を監視するには、JBoss JVM の次のオプションを指定する必要があります。

```
-Dcom.sun.management.jmxremote.port=12345 (他のポートもちろん使用できますが、その場合は ST のデプロイメントで指定する必要があります) -  
Dcom.sun.management.jmxremote.authenticate=false -  
Dcom.sun.management.jmxremote.ssl=false -  
Djavax.management.builder.initial=org.jboss.system.server.jmx.MBean-  
Server  
BuilderImpl -Djboss.platform.mbeanserver -  
Dcom.sun.management.jmxremote
```

次のバッチ・ファイルを使用して、この指定を実行できます。

```
@echo off set JAVA_OPTS=%JAVA_OPTS% -  
Dcom.sun.management.jmxremote.port=12345 set JAVA_OPTS=%JAVA_OPTS%  
-Dcom.sun.management.jmxremote.authenticate=false set JAVA_  
OPTS=%JAVA_OPTS% -Dcom.sun.management.jmxremote.ssl=false set JAVA_  
OPTS=%JAVA_OPTS% -  
Djavax.management.builder.initial=org.jboss.system.server.jmx.MBean-  
Server  
BuilderImpl set JAVA_OPTS=%JAVA_OPTS% -Djboss.platform.mbeanserver  
set JAVA_OPTS=%JAVA_OPTS% -Dcom.sun.management.jmxremote call  
run.bat -b my-jboss-host
```

注:

- **run.bat** が JBoss の開始に使用される標準設定のスクリプトです。
- **-b** は、JBoss 4.2.2 を正しいネットワーク・インタフェースにバインドするオプションです(標準設定ではローカルホストにのみバインドされ、その他のホストからはアクセスできません)。
- UNIX 用に同様のスクリプトを作成できます。

3. ソリューション・テンプレートのデプロイ

ソリューション・テンプレートのデプロイに関連する手順の詳細については、[932ページ「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」](#)を参照してください。

4. ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力(ユーザ・インタフェース・デプロイメント用のみ)

JBoss Application Server ソリューション・テンプレートの[デプロイメント値]ページの項目を入力します。ユーザ・インタフェースの詳細については、[979ページ「JBoss ソリューション・テンプレート・ページ」](#)を参照してください。

JBoss ソリューション・テンプレート・ページ

このページでは、JBoss Application Server ソリューション・テンプレートをデプロイできます。

説明	[テンプレート]コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、[ソリューション テンプレート]を展開し、[JBoss AS 4.x-5.x]を選択します。
関連タスク	932ページ「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none">975ページ「JBoss Application Server ソリューション・テンプレート」88ページ「テンプレート・ツリー」

メイン設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
JMX_URL	JMX 統計情報を収集する URL。通常 URL の形式は次のとおりです。 <code>service:jmx:rmi:///jndi/rmi://{hostname}:{port}/jmxrmi</code> 。 監視する JMX インスタンスのホスト名とポートを入力します。
USERNAME	JMX アプリケーションに接続するユーザ名(任意指定)。
Password	JMX アプリケーションに接続するパスワード(任意指定)。
Counters	このモニタでチェックするサーバのパフォーマンス・カウンタを表示します。[Get Counters]ボタンを使用してカウンタを選択します。
Get Counters	[Get Counters]ダイアログ・ボックスが開き、監視するエンティティを選択できます。各インスタンスに対して、モニタとしい値の特定のセットが作成されます。詳細については、< SiteScope のルート・ディレクトリ> \sisdocs\pdfs\SiteScope_JBoss_Best_Practices.pdfにある『SiteScope JBoss Application Server Best Practices Guide』を参照してください。
サイレント・デプロイメント	テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、< SiteScope のルート・ディレクトリ> \logs\silent_deployment.log に記録されます。 標準設定値：選択されていない
リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証	テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうか検証されます。 注：このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。 標準設定値：選択されている

第 57 章

Linux Host ソリューション・テンプレート

本章の内容

概念

- [981ページ「Linux Host ソリューションの概要」](#)

タスク

- [982ページ「Linux Host ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」](#)

参照情報

- [983ページ「Linux Host ソリューション・テンプレート・ページ」](#)

Linux Host ソリューションの概要

Linux Host ソリューション・テンプレートは、標準設定の測定値で設定された一連のモニタ(監視対象 Linux ホストの状況、可用性、パフォーマンスをテストします)をデプロイする場合に使用できるテンプレートです。このテンプレートは、SiteScope でサポートされているバージョンの Linux がサポートされます。詳細については、HP SiteScope デプロイメント・ガイドの「システム要件」を参照してください。

UNIX リソース・モニタの場合、監視対象サーバの3つの異なる測定値のデータが表示される、サーバ中心のレポートを作成できます。

ヒント: 必要なモニタおよび測定値があらかじめ設定されているため、UNIX リソース・モニタを作成する場合はソリューション・テンプレートを使用することをお勧めします。サーバ中心のレポートの生成の詳細については、[1104ページ「サーバ中心のレポートの生成」](#)を参照してください。

Linux Host ソリューション・テンプレートは包括的な Linux オペレーティング・システムの監視が可能です。SiteScope ユーザやIT組織にアプリケーションの専門知識は必要ありません。また、パフォーマンス・モニタの設定やデプロイの時間が短縮し、パフォーマンスのボトルネック(リアルタイムおよび長期間)の特定が容易になります。さらに、実運用システムにはほとんど負荷がかかりません。

注:

- Linux Host ソリューション・テンプレートを使用するには、適切な SiteScope オプション・ライセンスが必要です。ソリューション・ライセンスの詳細については、HP の営業担当にお問い合わせください。
- Linux Host ソリューション設定の詳細については、『SiteScope Operating System Host Best Practices』ドキュメントを参照してください。このドキュメントは、<SiteScope のルート・ディレクトリ\sisdocs\pdfs\SiteScope_OS_Best_Practices.pdf にあります。このドキュメントはパスワードで保護されています。パスワードは、オペレーティング・システムのホスト・ソリューション・ライセンス・キーとともに HP から提供されます。

ソリューション・テンプレート・モニタ

Linux Host ソリューション・テンプレートでは、Linux のパフォーマンスと状況の次の側面を監視対象とするモニタがデプロイされます。

- CPU の状態と使用率の詳細
- メモリの状態と使用率の詳細
- ファイル・システムの状態と使用率の詳細

Linux Host ソリューション・テンプレートのデプロイ方法

このタスクでは、Linux Host ソリューション・テンプレートのサーバ環境を設定し、変数を入力する手順について説明します。

注: Linux Host ソリューション・テンプレートでは、対象ホストごとに UNIX リソース・モニタがデプロイされます。これは、サーバ中心のレポートをサポートするために必要となる補足モニタです。

1. 前提条件

- SiteScope サーバから監視対象 Linux ホストに接続できる必要があります。
- 対象サーバを UNIX リモート・マシンとして SiteScope に追加し、UNIX リモート・テストにパスする必要があります([**リモート サーバ**] > [**UNIX リモート サーバ**])。詳細については、[531 ページ「リモート UNIX サーバを監視するための SiteScope の設定方法」](#)を参照してください。

注:

- サポートされている Linux オペレーティング・システムが SiteScope サーバで実行されている場合、そのサーバ自体を監視することもできます。
- このテンプレートは、SiteScope でサポートされているバージョンの Linux がサポートされます。詳細については、HP SiteScope デプロイメント・ガイドの「システム要件」を参照してください。

2. ソリューション・テンプレートのデプロイ

ソリューション・テンプレートのデプロイに関連する手順の詳細については、[932 ページ「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」](#)を参照してください。

3. ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力(ユーザ・インタフェース・デプロイメント用のみ)

Linux Host ソリューション・テンプレートの[デプロイメント値]ページの項目を入力します。ユーザ・インタフェースの詳細については、[983 ページ「Linux Host ソリューション・テンプレート・ページ」](#)を参照してください。

Linux Host ソリューション・テンプレート・ページ

このページでは、Linux Host ソリューション・テンプレートをデプロイできます。

アクセス方法	[テンプレート]コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、[ソリューション テンプレート]を展開し、[Linux Host]を選択します。
関連タスク	932ページ「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none">980ページ「Linux Host ソリューション・テンプレート」88ページ「テンプレート・ツリー」

メイン設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
SERVER_LIST	監視するサーバの名前。監視対象サーバがリストにない場合、サーバへの接続プロファイルを定義する必要があります。UNIX 接続プロファイルを作成する手順については、531ページ「リモート UNIX サーバを監視するための SiteScope の設定方法」を参照してください。
サイレント・デプロイメント	テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、< SiteScope のルート・ディレクトリ> \logs\silent_deployment.log に記録されます。 標準設定値：選択されていない
リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証	テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。 注：このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。 標準設定値：選択されている

第 58 章

Microsoft Exchange ソリューション・テンプレート

本章の内容

概念

- [985ページ「Microsoft Exchange ソリューションの概要」](#)

タスク

- [987ページ「Microsoft Exchange ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」](#)

参照情報

- [988ページ「\[Microsoft Exchange ソリューション テンプレート\] ページ」](#)

Microsoft Exchange ソリューションの概要

Microsoft Exchange ソリューション・テンプレートは、次のパフォーマンス、可用性、使用統計を監視できます。

- Microsoft Exchange 5.5 Server
- Microsoft Exchange 2000 Server
- Microsoft Exchange 2003 Server
- Microsoft Exchange 2007 Server(バージョン 8.0)
- Microsoft Exchange 2010 Server

選択したセットに応じて、Windows イベント・ログ・エントリ、MAPI 操作、システム・パフォーマンス・カウンタ、メッセージ・システムの使用統計をチェックするモニタが含まれます。

Microsoft Exchange ソリューション・テンプレートでは包括的な Microsoft Exchange システムの監視が可能です。SiteScope ユーザまたは IT 組織にアプリケーションの専門知識は必要ありません。また、モニタの設定やデプロイの時間が短縮し、パフォーマンスのボトルネック(リアルタイムおよび長期間)の特定が容易になります。さらに、実運用システムにはほとんど負荷がかかりません。

注:

- Microsoft Exchange ソリューション・テンプレートを使用するには、適切な SiteScope オプション・ライセンスが必要です。ソリューション・ライセンスの詳細については、HP の営業担当にお問い合わせください。
- Microsoft Exchange ソリューションの詳細については、『SiteScope Microsoft Exchange Best Practices』ドキュメントを参照してください。このドキュメントは SiteScope インストールに含まれています(収録場所は、< **SiteScope のルート・ディレクトリ** > \sisdocs\pdfs\SiteScope_Exchange_Best_Practices.pdf です)。このドキュメントはパスワードで保護されています。パスワードは、Microsoft Exchange ソリューション・ライセンス・キーとともに HP から提供されます。

ソリューション・テンプレート・モニタ

Microsoft Exchange ソリューション・テンプレートでは、Microsoft Exchange のパフォーマンスと状況の次の側面を対象とするモニタがデプロイされます。

- **基本的なサーバ/OS パフォーマンス** : このカテゴリの対象は、サーバのシステム・レベルの状況です。Microsoft Exchange ソリューション・テンプレートでは、サーバ状況のモニタが自動的に設定されます。
- **アプリケーション・パフォーマンス** : アプリケーション・パフォーマンスは、特定の Exchange コンポーネントの稼働状況の指標です。Microsoft Exchange ソリューション・テンプレートでは、一連の重要な Exchange アプリケーション・コンポーネントのモニタが自動的に設定されます。
- **メール・プロトコル応答時間** : Microsoft Exchange のパフォーマンスでおそらく最も重要な側面であり、主要なインジケータと言えるのがメール・プロトコルの応答時間です。Microsoft Exchange では多くのプロトコルを利用できますが、Microsoft ネットワークで一般的に使用されるのは MAPI プロトコルです。

- **使用統計** : さらに, Microsoft Exchange のパフォーマンス関連のカテゴリとして使用状況があります。使用状況自体は, 必ずしもパフォーマンスの主要なインジケータではありませんが, 使用状況の変化が Microsoft Exchange の全体的なパフォーマンスに影響を与える可能性があります。また, Microsoft Exchange の使用統計は, IT 組織が傾向を見極め, 将来の計画を立てる際に役立ちます。Microsoft Exchange ソリューション・テンプレートでは, 一連の重要な Microsoft Exchange 使用状況パラメータのモニタが自動的に設定されます。

注: ソリューション・テンプレートによってデプロイされるモニタ・タイプの中には, Microsoft Exchange ソリューション・テンプレートを使用しないと SiteScope に追加できないものもあります。詳細については, 特定のモニタ・タイプに関するセクションを参照してください。

Microsoft Exchange ソリューション・テンプレートのデプロイ方法

このタスクでは、Microsoft Exchange ソリューション・テンプレートのサーバ環境を設定し、変数を入力する手順について説明します。

1. 前提条件

Microsoft Exchange ソリューション・テンプレートをデプロイする前に、デプロイするソリューション・テンプレートに応じて特定の手順を実行する必要があります。

- **Microsoft Exchange 5.5, 2000, 2003 ソリューション**：これらのソリューション・テンプレートでは SiteScope MAPI モニタを使用します。このモニタ・タイプを正常にデプロイするには、メールボックス所有者と SiteScope サービスに関連して特定のセットアップが必要です。MAPI モニタのシステム要件については、『HP SiteScope Monitor Reference』の「[MAPI Monitor](#)」を参照してください。
- **Microsoft Exchange 2007, 2010 ソリューション**：このソリューション・テンプレートは、Microsoft Exchange 2007 モニタおよび 2010 モニタを使用します。これらのモニタ・タイプを正常にデプロイするには、特定の設定を必要とします。詳細については、『HP SiteScope Monitor Reference』の「[Microsoft Exchange 2007/2010 Monitor](#)」を参照してください。

2. ソリューション・テンプレートのデプロイ

ソリューション・テンプレートのデプロイに関連する手順の詳細については、[932ページ「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」](#)を参照してください。

注：Microsoft Exchange 2010 ソリューションは、テンプレート コンテナに多数のテンプレートを提供します。これらは個々にまたは同時にグループにデプロイできます。これによって、必要なテンプレートだけを選択する、また個別のサーバに分散された Exchange サーバのインストールに対してデプロイできます。複数のテンプレートの同時デプロイの詳細については、[879ページ「複数のテンプレートのデプロイ - オプション」](#)を参照してください。

3. ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力(ユーザ・インタフェース・デプロイメント用のみ)

Microsoft Exchange ソリューション・テンプレートの[デプロイメント値]ページの項目を入力します。ユーザ・インタフェースの詳細については、[988ページ「\[Microsoft Exchange ソリューション テンプレート\]ページ」](#)を参照してください。

[Microsoft Exchange ソリューション テンプレート] ページ

このページでは、Microsoft Exchange 5.5, 2000, 2003, 2007(バージョン 8.0), 2010 サーバを監視するための Microsoft Exchange ソリューション・テンプレートをデプロイできます。

アクセス方法	[テンプレート]コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、[ソリューション テンプレート]を展開し、必要な Microsoft Exchange ソリューション・テンプレートを選択します。
関連タスク	932ページ「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none">984ページ「Microsoft Exchange ソリューション・テンプレート」88ページ「テンプレート・ツリー」

メイン設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
Domain (Exchange 2007 および 2010 のみ)	使用するメールボックスの所有者と Microsoft Exchange サーバの両方が属するドメイン。 注 :このソリューションで使用するメールボックスの所有者も SiteScope を実行しているマシン上の管理アカウント権限を持つ必要があります。SiteScope にも、Microsoft Exchange サーバを実行しているドメインへのユーザ・アカウント・アクセスが必要です。
Mailbox	MAPI を使用した電子メール往復時間テストに使用するメールボックスの名前(別名)。多くの場合、これは電子メール・アカウント名ですが、別の名前にすることもあります。 ヒント :このソリューションに使用している電子メール・アカウントの[E-Mail Account]プロパティに表示されるメールボックス名をコピーすることをお勧めします。
MailUser (Microsoft Exchange 5.5, 2000, および 2003 のみ)	MAPI を使用した電子メール往復時間テストのユーザの Windows アカウント・ログイン名。
MailDomain (Microsoft Exchange 5.5, 2000, および 2003 のみ)	使用するメールボックスの所有者と Microsoft Exchange サーバの両方が属するドメイン。 注 :このソリューションで使用するメールボックスの所有者も SiteScope を実行しているマシン上の管理アカウント権限を持つ必要があります。SiteScope にも、Microsoft Exchange サーバを実行しているドメインへのユーザ・アカウント・アクセスが必要です。

UI 要素	説明
MAILPASSWORD (Microsoft Exchange 5.5, 2000, および 2003 のみ)	入力したユーザ名の Windows アカウント・ログイン・パスワード。
SERVER_LIST	監視するサーバの名前。監視対象サーバがリストにない場合、サーバへの接続プロファイルを定義する必要があります。Windows 接続プロファイルを作成する手順については、 525 ページ「リモート Microsoft Windows サーバを監視するための SiteScope の設定方法」 を参照してください。
AuthenticationUser (Microsoft Exchange 2003 のみ)	サーバにメールボックスとパブリック・フォルダの統計情報をクエリするときに使用するユーザ名。この統計情報の収集には WMI (Windows Management Instrumentation) を使用するため、ここで入力するユーザ名には WMI namespace root\MicrosoftExchangeV2 にある WMI 統計の読み取り権限が必要です。このボックスを空白のままにすると、SiteScope を実行しているユーザが使用されます。
AUTHENTICATION PASSWORD (Microsoft Exchange 2003 のみ)	WMI 統計情報の収集用に入力したユーザのパスワード。ユーザ・ボックスを空白のままにした場合は、このボックスも空白にします。
Exchange PS Console File Path (Microsoft Exchange 2007 および 2010 のみ)	Microsoft Exchange Management Shell PowerShell コンソール・ファイルのパス。 標準設定値 : C:\Program Files\Microsoft\Exchange Server\Bin\ExShell.psc1
サイレント・デプロイメント	テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、 < SiteScope のルート・ディレクトリ > \logs\silent_deployment.log に記録されます。 標準設定値 : 選択されていない
リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証	テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。 注 : このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。 標準設定値 : 選択されている

第 59 章

Microsoft IIS ソリューション・テンプレート

本章の内容

概念

- [991ページ「Microsoft IIS ソリューション概要」](#)

タスク

- [992ページ「Microsoft IIS ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」](#)

参照情報

- [994ページ「\[Microsoft IIS ソリューション テンプレート\] ページ」](#)

Microsoft IIS ソリューション概要

Microsoft IIS ソリューション・テンプレートは、標準設定の測定値で設定された一連のモニタ (Microsoft IIS 6 および IIS 7.x サーバの状況、可用性、パフォーマンスをテスト) をデプロイする場合に使用できるテンプレートです。

Microsoft IIS ソリューション・テンプレートでは包括的な IIS 監視が可能です。SiteScope ユーザまたは IT 組織にアプリケーションの専門知識は必要ありません。また、パフォーマンス・モニタの設定やデプロイの時間が短縮し、パフォーマンスのボトルネック(リアルタイムおよび長期間)の特定が容易になります。さらに、実運用システムにはほとんど負荷がかかりません。

注:

- Microsoft IIS ソリューション・テンプレートを使用するには、適切な SiteScope オプション・ライセンスが必要です。IIS 6 および IIS 7.x ソリューション・テンプレートには異なるライセンスがあることに注意してください。ソリューション・ライセンスの詳細については、HP の営業担当にお問い合わせください。
- IIS ソリューション・テンプレートの詳細については、『SiteScope Microsoft IIS Best Practices document』ドキュメント ([SiteScope_IIS_Best_Practices.pdf](#))を参照してください。このドキュメントは、<SiteScope のルート・ディレクトリ>\sisdocs\pdfs ディレクトリにあります。このドキュメントはパスワードで保護されています。パスワードは、IIS ソリューション・ライセンス・キーとともに HP から提供されます。

IIS ソリューション・テンプレート・モニタ

Microsoft IIS ソリューション・テンプレートでは、IIS サーバのパフォーマンスと状況の次のサービスと側面を対象とするモニタがデプロイされます。

- Active Server Pages(ASP エラー、要求、テンプレート、セッション、トランザクション)
- FTP サービス、Web サービス、SMTP サーバ、NNTP サーバ、HTTP/HTTPS サービス、MSMQ キュー・サービス、IIS サーバ、グローバル IIS の状態、IIS WAS、IIS W3SVC、IIS Windows ログ、インデックス・サービス
- Windows プロセスとしての IIS 統計情報

Microsoft IIS ソリューション・テンプレートのデプロイ方法

このタスクでは、Microsoft IIS ソリューション・テンプレートのサーバ環境を設定し、変数を入力する手順について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- 992ページ「前提条件」
- 992ページ「サーバ環境の設定 (Microsoft IIS 6 のみ)」
- 993ページ「サーバ環境の設定 (Microsoft IIS 7.x のみ)」
- 993ページ「ソリューション・テンプレートのデプロイ」
- 993ページ「ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力 (ユーザ・インタフェース・デプロイメント用のみ)」

1. 前提条件

- SiteScope サーバは、監視対象 Microsoft IIS ホストに接続できる必要があります。Microsoft Windows リソース・モニタを使用して、リモート Windows サーバからサーバのパフォーマンス統計情報を監視します。Microsoft Windows リソース・モニタに特別な設定が必要になる場合があります。詳細については、『HP SiteScope Monitor Reference』の「[Microsoft IIS Server Monitor](#)」を参照してください。
- 対象サーバを Windows リモート・マシンとして SiteScope に追加し、Windows リモート・テストにパスする必要があります ([リモート サーバ] > [Microsoft Windows リモート サーバ])。詳細については、535ページ「[\[新規 Microsoft Windows リモート サーバ\]/\[Microsoft Windows リモート サーバの編集\] ダイアログ・ボックス](#)」を参照してください。

または、ドメイン権限を設定して SiteScope からリモート・サーバへのアクセスを許可することもできます。詳細については、527ページ「[SiteScope 監視のドメイン権限の設定方法](#)」を参照してください。

注: SiteScope と監視対象 IIS サーバは、同じホスト上で実行できます。

2. サーバ環境の設定 (Microsoft IIS 6 のみ)

コンポーネント・ツリーに ASP コンポーネント・パスを含むように IIS サーバを設定します。

- a. [コントロールパネル] で、[プログラムの追加と削除] > [Windows コンポーネントの追加と削除] を選択します。
- b. [Windows コンポーネント ウィザード] の [Windows コンポーネント] のページで、[アプリケーション サーバ] を強調表示し、[詳細] をクリックします。
- c. [アプリケーション サーバ] で、[ASP.NET] チェックボックスを選択します。
- d. [インターネット インフォメーション サービス(IIS)] を強調表示し、次に [詳細] をクリックします。
- e. [インターネット インフォメーション サービス(IIS)] で、[World Wide Web サービス] チェックボックスを選択し、次に [詳細] をクリックします。
- f. [World Wide Web サービス] で、[Active Server Pages] チェックボックスを選択し、[OK] をクリックします。

- g. [インターネット インフォメーション サービス(IIS)] で, [OK] をクリックします。
- h. [アプリケーション サーバ] で, [インターネット インフォメーション サービス(IIS)] チェックボックスが選択され, 次にコンポーネントをインストールするために[OK] をクリックします。
- i. [次へ] をクリックして, [Windows コンポーネント ウィザード] の完了画面で, [完了] をクリックします。
- j. ASP.NET を有効にするには, [コントロール パネル] で[管理ツール]>[インターネット インフォメーション サービス(IIS) マネージャ] を選択します。
- k. コンソール・ツリーで, ローカル・コンピュータを展開し, [Web サービス拡張] をクリックします。
- l. [詳細] ペインで, [ASP.NET] をクリックし, 次に[許可] をクリックします。

3. サーバ環境の設定 (Microsoft IIS 7.x のみ)

コンポーネント・ツリーに ASP コンポーネント・パスを含むように IIS サーバを設定します。

- a. サーバ・マネージャを起動します([スタート]>[ファイル名を指定して実行] をクリックし, `CompMgmtLauncher` と入力します)。
- b. ツリー・ビューで, [役割] を選択し, [役割] ペインで[役割の追加] をクリックします。
- c. [役割の追加 ウィザード] で, [サーバの役割の選択] をクリックし, [Web サーバ(IIS)] チェックボックスを選択して, [次へ] をクリックし, 次に[次へ] を再度クリックします。

「Web サーバ(IIS)に必要な機能を追加しますか?」というメッセージが表示されたら, [必要な機能を追加] をクリックします。
- d. [役割 サービスの選択] ウィンドウで, [ASP.NET] および[ASP] サービスが選択されていることを確認します([アプリケーション開発] の下にある)。

4. ソリューション・テンプレートのデプロイ

ソリューション・テンプレートのデプロイに関連する手順の詳細については, 932 ページ「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」を参照してください。

5. ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力(ユーザ・インタフェース・デプロイメント用のみ)

Microsoft IIS ソリューション・テンプレートの[デプロイメント値] ページの項目を入力します。ユーザ・インタフェースの詳細については, 994 ページ「[Microsoft IIS ソリューション テンプレート] ページ」を参照してください。

[Microsoft IIS ソリューション テンプレート] ページ

このページでは、Microsoft IIS 6 ソリューション・テンプレートをデプロイできます。

アクセス方法	[テンプレート] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、[ソリューション テンプレート] を展開し、必要な Microsoft IIS ソリューション・テンプレートを選択します(Microsoft IIS 6 または Microsoft IIS 7.x)。
関連タスク	932 ページ「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none">990 ページ「Microsoft IIS ソリューション・テンプレート」88 ページ「テンプレート・ツリー」

メイン設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
SERVER_LIST	監視するサーバの名前。監視対象サーバがリストにない場合、サーバへの接続プロファイルを定義する必要があります。Windows 接続プロファイルを作成する手順については、525 ページ「リモート Microsoft Windows サーバを監視するための SiteScope の設定方法」を参照してください。
サイレント・デプロイメント	テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、< SiteScope のルート・ディレクトリ > \logs\silent_deployment.log に記録されます。 標準設定値：選択されていない
リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証	テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。 注：このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。 標準設定値：選択されている

第 60 章

Microsoft Lync Server 2010 ソリューション・テンプレート

本章の内容

概念

- [996ページ「Microsoft Lync Server 2010 ソリューションの概要」](#)

タスク

- [999ページ「Microsoft Lync Server 2010 ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」](#)

参照情報

- [1000ページ「Microsoft Lync Server 2010 ソリューション・テンプレート・ページ」](#)

Microsoft Lync Server 2010 ソリューションの概要

以下にリストされた Microsoft Lync Server 2010 ソリューション・テンプレートを使用して Microsoft Lync Server 2010 サーバのさまざまな側面を監視できます。これらのテンプレートを使用して包括的に監視できます。SiteScope ユーザや IT 組織がアプリケーションの専門家である必要はありません。また、モニタの設定やデプロイの時間が短縮し、パフォーマンスのボトルネック(リアルタイムおよび長期間)の特定が容易になります。さらに、実運用システムにはほとんど負荷がかかりません。

Microsoft Lync Server 2010 モニタの場合は、監視対象のサーバについて 3 つの測定値のデータを表示するサーバ中心のレポートを作成できます。

注:

- Microsoft Lync Server 2010 ソリューション・テンプレートを使用するには、適切な SiteScope オプション・ライセンスが必要です。ソリューション・ライセンスの詳細については、HP の営業担当にお問い合わせください。
- Microsoft Lync Server 2010 ソリューションの詳細については、『SiteScope Microsoft Lync Server 2010 Best Practices』ドキュメントを参照してください。このドキュメントは SiteScope インストールに含まれており、<SiteScope root ディレクトリ> \sisdocs\pdfs\SiteScope_MS_Lync_Server_2010_Best_Practices.pdf にあります。このドキュメントはパスワードで保護されています。パスワードは、Microsoft Lync Server 2010 ソリューション・ライセンス・キーとともに HP から提供されます。

Microsoft Lync Server 2010 ソリューション・テンプレートは次を含みます。

Microsoft A/V Conferencing サーバ

Microsoft Lync A/V Conferencing サーバのサーバ・パフォーマンス統計情報を監視します。A/V 会議によって、リアルタイムのオーディオ/ビデオ(A/V)通信をユーザ間で行うことができます(オーディオ会議用のヘッドセットやビデオ会議用の Web カメラなどの適切なクライアント機器を有することを条件として)。A/V Conferencing サーバは、A/V 会議機能をデプロイメントに提供します。このサーバは Front End サーバと一緒に使用するか、1 つのサーバまたは A/V Conferencing サーバ・プールとして個別にデプロイできます。

Microsoft Archiving サーバ

Microsoft Lync Archiving サーバのサーバ・パフォーマンス統計情報を監視します。Archiving サーバによって、規則への準拠のためにインスタント・メッセージング(IM)通信や会議の内容をアーカイブできます。企業や組織は、特定のタイプの通信の保管を求める業界および政府の多数の規則を受けています。Archiving サーバ機能を使用することで Microsoft Lync Server 2010 通信ソフトウェアは、Lync Server 2010 を介して送信される IM コンテンツや会議内容(一方または両方)をアーカイブする方法を提供します。Archiving サーバをデプロイして Front End プールと関連付けると、IM や会議をアーカイブするように設定したり、アーカイブを有効に設定されるユーザを指定できます。

Microsoft Director サーバ

Microsoft Lync Director サーバのサーバ・パフォーマンス統計情報を監視します。Director はユーザ要求を認証する Microsoft Lync Server 通信ソフトウェアを実行しているサーバですが、ユーザ・アカウントを保管したりプレゼンスまたは会議サービスを提供しません。Director は外部ユーザのアクセスを可能にするデプロイメントで最も役立ち、内部サーバに外部ユーザを導く前に要求を認証できます。Director は複数の Front End プールを用いている組織のパフォーマンスを改善することもできます。

Microsoft Edge サーバ

Microsoft Lync Edge サーバのサーバ・パフォーマンス統計情報を監視します。Edge サーバによって、ユーザは組織のファイアウォールの外側のユーザと通信したり共同作業できます。外部ユーザとしては、現在社外で作業中の組織のユーザ、連合するパートナー組織のユーザ、そして Lync サーバのデプロイメントにホストされる会議への参加を要請されている外部ユーザが挙げられます。Edge サーバは、Windows Live、AOL、および Yahoo! を含むパブリック IM 接続サービスへの接続も可能にします。

Microsoft Front End サーバ

Microsoft Lync Front End サーバのサーバ・パフォーマンス統計情報を監視します。Front End サーバはコアとなるサーバ・ロールで、多くの基本的な Lync Server 機能を実行します。Front End サーバは、データベースを提供する Back End サーバとともに、Lync Server Enterprise Edition デプロイメントで必要となる唯一のサーバ・ロールです。

Front End プールは、完全に同じように設定され、ユーザの共通グループにサービスを提供するために連動する一連の Front End サーバです。プールはユーザにスケラビリティとフェイルオーバー機能を提供します。

Front End サーバの機能は次の通りです。

- ユーザ認証および登録
- プレゼンス情報および連絡先カード交換
- アドレス帳サービスおよび配布リスト拡張
- 複数人による IM 会議を含む IM 機能
- Web 会議およびアプリケーション共有 (デプロイされている場合)
- Lync Server (たとえば、Conferencing Attendant および Response Group アプリケーション) およびサードパーティ・アプリケーションに含まれる両アプリケーションのためのアプリケーション・ホスティングサービス。
- アプリケーション・ホスティングおよびホスト・アプリケーション (たとえば、Response Group アプリケーションなど) のためのアプリケーション・サービス。

Microsoft Mediation サーバ

Microsoft Lync Mediation サーバのサーバ・パフォーマンス統計情報を監視します。Mediation サーバは、Enterprise Voice およびダイヤルイン会議を実装するために必要なコンポーネントです。Mediation サーバは信号を変換しますが、一部の設定では、内部の Lync Server インフラストラクチャと公衆交換電話網 (PSTN) ゲートウェイ、IP-PBX、または Session Initiation Protocol (SIP) トランク間でメディアを変換します。Lync Server 側では、Mediation サーバは単一の相互 TLS (MTLS) 転送アドレスでリスンします。ゲートウェイ側では、Mediation サーバは単一の TCP および単一の TLS 転送アドレス、または単一の TLS 転送アドレスでリスンします。すべての正規のゲートウェイは TLS をサポートする必要がありますが、TCP も有効にできます。

Microsoft Monitoring と CDR サーバ

Microsoft Lync Monitoring and CDR サーバのサーバ・パフォーマンス統計情報を監視します。Monitoring サーバは、Enterprise Voice コールと A/V 会議の両方においてネットワーク・メディアの品質に関するデータを収集します。この情報は可能な限り最高のメディア・エクスペリエンスをユーザに提供する支援となります。コールの失敗を解決するために使用できるコール・エラー記録 (CER) も収集します。さらに、さまざまな Lync Server サーバ機能に関する使用情報を通話詳細記録 (CDR) の形式で収集するので、デプロイメントの投資に対するリターンを計算したり、将来におけるデプロイ

メントの拡張を計画できます。

Microsoft Registrar サーバ

Microsoft Lync Registrar サーバのサーバ・パフォーマンス統計情報を監視します。Lync Server 2010 Registrar は、クライアント登録および認証を可能にし、ルーティング・サービスを提供する新しいサーバ・ロールです。このサーバは、Standard Edition サーバ、Enterprise Front End サーバ、Director、または Survivable Branch Appliance で他のコンポーネントと共に置かれます。Registrar プールは、Lync Server プールで実行し、同じサイトに置かれている Registrar Service で構成されます。

Microsoft Lync Server 2010 ソリューション・テンプレートのデプロイ方法

このタスクでは、Microsoft Lync Server 2010 ソリューション・テンプレートの変数を入力する手順について説明します。

1. ソリューション・テンプレートのデプロイ

ソリューション・テンプレートのデプロイに関連する手順の詳細については、932ページ「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」を参照してください。

2. ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力(ユーザ・インタフェース・デプロイメント用のみ)

Microsoft Lync Server 2010 ソリューション・テンプレートの[デプロイメント値]ページの項目を入力します。ユーザ・インタフェースの詳細については、1000ページ「Microsoft Lync Server 2010 ソリューション・テンプレート・ページ」を参照してください。

注: Microsoft Lync Server 2010 ソリューションは、テンプレート コンテナに多数のテンプレートを提供します。これらは個々にまたは同時にグループにデプロイできます。これによって、必要なテンプレートだけを選択できます。複数のテンプレートを同時にデプロイする詳細については、878ページ「ユーザ・インタフェースを使用したテンプレートのデプロイ方法」を参照してください。

Microsoft Lync Server 2010 ソリューション・テンプレート・ページ

このページによって、さまざまな Microsoft Lync Server 2010 ソリューション・テンプレート (Microsoft Archiving サーバ、Microsoft A/V Conferencing サーバ、Microsoft Director サーバ、Microsoft Edge サーバ、Microsoft Front End サーバ、Microsoft Mediation サーバ、および Microsoft Monitoring and CDR サーバ、Microsoft Registrar サーバ) をデプロイできます。テンプレートの説明については、[996 ページ「Microsoft Lync Server 2010 ソリューションの概要」](#)を参照してください。

アクセス方法	[テンプレート] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、[ソリューション テンプレート] > [Microsoft Lync Server 2010] を展開し、必要な Microsoft Lync Server 2010 ソリューション・テンプレートを選択します。
関連タスク	932 ページ「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> 995 ページ「Microsoft Lync Server 2010 ソリューション・テンプレート」 88 ページ「テンプレート・ツリー」

メイン設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
Host	監視対象の Microsoft Lync Server 2010 インスタンスのホスト名。
User	Microsoft Lync Server 2010 インスタンスの管理者権限を持つユーザ名。
Password	Microsoft Lync Server 2010 のユーザのパスワード。
Connection method	<p>サーバに接続するために使用される方法。オプションは、NetBIOS、WMI、または SSH。</p> <p>標準設定値: NetBIOS</p>
Remote server encoding	<p>リモート・サーバのエンコーディング。</p> <p>標準設定値: Cp1252</p>
サイレント・デプロイメント	<p>テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、< SiteScope のルート・ディレクトリ > \logs\silent_deployment.log に記録されます。</p> <p>標準設定値: 選択されていない</p>

UI 要素	詳細
リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証	<p>テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。</p> <p>注 : このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。</p> <p>標準設定値 : 選択されている</p>
リモート・サーバのテスト	<p>テンプレートのデプロイ後、テンプレート・リモート・サーバから作成した接続をテストします。テストはバックグラウンドで実行されるので、引き続き SiteScope を使用できます。</p> <p>標準設定値 : 選択されていない</p>

第61章

Microsoft SharePoint 2010 ソリューション・テンプレート

本章の内容

概念

- [1003ページ「Microsoft SharePoint 2010 ソリューションの概要」](#)

タスク

- [1004ページ「Microsoft SharePoint 2010 ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」](#)

参照情報

- [1005ページ「\[Microsoft SharePoint 2010 ソリューション テンプレート\] ページ」](#)

Microsoft SharePoint 2010 ソリューションの概要

Microsoft SharePoint 2010 ソリューション・テンプレートを使用して、SharePoint Server 2010 システムの稼働状況を理解するために SharePoint 環境を監視したり、SharePoint 2010 製品にある重要なイベント、パフォーマンス・カウンタ、サービスの監視を行うことができます。

Microsoft SharePoint 2010 ソリューション・テンプレートは、Microsoft SharePoint 2010 のパフォーマンスおよび状態のサービスおよび側面を対象とする一連のモニタ(Microsoft Windows イベント・ログ、Microsoft Windows リソース、CPU、ディスク領域、および SQL)をデプロイします。これらのモニタは、Microsoft SharePoint 2010 の監視のベスト・プラクティスを網羅しています。

Microsoft SharePoint 2010 ソリューション・テンプレートでは包括的な監視が可能です。SiteScope ユーザまたは IT 組織にアプリケーションの専門知識は必要ありません。また、モニタの設定やデプロイの時間が短縮し、パフォーマンスのボトルネック(リアルタイムおよび長期間)の特定が容易になります。さらに、実運用システムにはほとんど負荷がかかりません。

注:

- Microsoft SharePoint 2010 ソリューション・テンプレートを使用するには、適切な SiteScope オプション・ライセンスが必要です。ソリューション・ライセンスの詳細については、HP の営業担当にお問い合わせください。
- Microsoft SharePoint 2010 ソリューションの詳細については、『SiteScope Microsoft SharePoint 2010 Best Practices』ドキュメントを参照してください。このドキュメントは SiteScope インストールに含まれており、< **SiteScope のルート・ディレクトリ** > \sisdocs\pdfs\SiteScope_SharePoint_Best_Practices.pdf にあります。このドキュメントはパスワードで保護されています。パスワードは、Microsoft SharePoint 2010 ソリューション・ライセンス・キーとともに HP から提供されます。
- Microsoft SharePoint 2010 ソリューション・テンプレートは、監視対象のリモート・サーバが SSH 用に設定されており、SSH 接続方法がテンプレートで使用されている場合には、UNIX バージョンで稼働する SiteScope でもサポートされます。詳細については、[562 ページ「セキュア・シェル\(SSH\)を使用した SiteScope 監視」](#)を参照してください。

ソリューション・テンプレート・モニタ

Microsoft SharePoint 2010 ソリューション・テンプレートでは、SharePoint 環境の次の側面の可用性、パフォーマンス、および状態を対象とするモニタがデプロイされます。

- IIS Process
- InfoPath Service
- Publishing Service
- Search Service
- Service Application
- SharePoint Server
- SQL Server

Microsoft SharePoint 2010 ソリューション・テンプレートのデプロイ方法

このタスクでは、Microsoft SharePoint 2010 ソリューション・テンプレートをデプロイする手順について説明します。

1. ソリューション・テンプレートのデプロイ

ソリューション・テンプレートのデプロイに関連する手順の詳細については、932ページ「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」を参照してください。

2. ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力(ユーザ・インタフェース・デプロイメント用のみ)

Microsoft SharePoint 2010 ソリューション・テンプレートの[デプロイメント値]ページの項目を入力します。ユーザ・インタフェースの詳細については、1005ページ「[Microsoft SharePoint 2010 ソリューション テンプレート] ページ」を参照してください。

注: Microsoft SharePoint 2010 ソリューションは、テンプレート・コンテナに多数のテンプレートを提供します。これらは個々にまたは同時にグループにデプロイできます。これによって、必要なテンプレートだけを選択できます。複数のテンプレートの同時デプロイの詳細については、879ページ「複数のテンプレートのデプロイ - オプション」を参照してください。

[Microsoft SharePoint 2010 ソリューション テンプレート] ページ

このページでは、SiteScope Microsoft SharePoint 2010 ソリューション・テンプレートをデプロイできます。

アクセス方法	[テンプレート] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、[ソリューション テンプレート] > [Microsoft SharePoint 2010] を展開し、必要な SharePoint テンプレートを選択します。
重要な情報	Microsoft SharePoint 2010 ソリューション・テンプレートは、監視対象のリモート・サーバが SSH 用に設定されており、SSH 接続方法がテンプレートで使用されている場合には、UNIX バージョンで稼働する SiteScope でもサポートされます。詳細については、 562 ページ「セキュア・シェル(SSH)を使用した SiteScope 監視」 を参照してください。
関連タスク	932 ページ「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none">• 1002 ページ「Microsoft SharePoint 2010 ソリューション・テンプレート」• 88 ページ「テンプレート・ツリー」

メイン設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
Host	Microsoft SharePoint インスタンスのホスト名。
User Name	監視対象の Microsoft SharePoint インスタンスの管理者権限を持つユーザ名。
Password	監視対象の Microsoft SharePoint インスタンスのユーザのパスワード。
Connection method	サーバに接続するために使用される方法。オプションは NetBIOS, WMI, および SSH です。 標準設定値 : NetBIOS
Remote server encoding:	リモート・サーバで実行されているオペレーティング・システムのバージョンが、SiteScope が稼働するサーバとは異なる文字エンコーディングを使用する場合、リモート・サーバのエンコーディングを設定します。このエンコードによって、エンコードされた内容を SiteScope で適切に表示できます。 標準設定値 : Cp1252

UI 要素	説明
サイレント・デプロイメント	<p>テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、<SiteScope のルート・ディレクトリ> \logs\silent_deployment.log に記録されます。</p> <p>標準設定値 : 選択されていない</p>
リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証	<p>テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。</p> <p>注 : このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。</p> <p>標準設定値 : 選択されている</p>
リモート・サーバのテスト	<p>テンプレートのデプロイ後、テンプレート・リモート・サーバから作成した接続をテストします。テストはバックグラウンドで実行されるので、引き続き SiteScope を使用できます。</p> <p>標準設定値 : 選択されていない</p>

第 62 章

Microsoft SQL Server ソリューション・テンプレート

本章の内容

概念

- [1008ページ「Microsoft SQL Server ソリューションの概要」](#)

タスク

- [1009ページ「Microsoft SQL Server ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」](#)

参照情報

- [1010ページ「\[Microsoft SQL Server ソリューション\]テンプレート・ページ」](#)

Microsoft SQL Server ソリューションの概要

Microsoft SQL Server ソリューション・テンプレートは、標準設定の測定値で設定された一連のモニタ (Microsoft SQL サーバの状況、可用性、パフォーマンスをテスト) をデプロイする場合に使用できるテンプレートです。このテンプレートでは、Microsoft SQL Server 2005、2008、および 2008 R2 がサポートされています。

Microsoft SQL Server ソリューション・テンプレートを使用して、Microsoft SQL サーバを包括的に監視できます。SiteScope ユーザまたは IT 組織がアプリケーションに精通している必要はありません。また、パフォーマンス・モニタの設定やデプロイの時間が短縮し、パフォーマンスのボトルネック(リアルタイムおよび長期間)の特定が容易になります。さらに、実運用システムにはほとんど負荷がかかりません。

注:

- Microsoft SQL Server ソリューション・テンプレートを使用するには、適切な SiteScope オプション・ライセンスが必要です。ソリューション・ライセンスの詳細については、HP の営業担当にお問い合わせください。
- Microsoft SQL Server ソリューションの詳細は、『SiteScope Microsoft SQL Server Best Practices』ドキュメントを参照してください。このドキュメントは、< **SiteScope のルート・ディレクトリ** > \sisdocs\pdfs\SiteScope_MSSQL_Best_Practices.pdf にあります。このドキュメントはパスワードで保護されています。パスワードは、Microsoft SQL Server ソリューションのライセンス・キーとともに HP から提供されます。

ソリューション・テンプレート・モニタ

Microsoft SQL Server ソリューション・テンプレートでは、Microsoft SQL サーバ・パフォーマンスおよび状況の次の側面を対象とするモニタがデプロイされます。

- CPU の状態と使用率の詳細
- メモリの状態と使用率の詳細
- ディスク使用率情報
- SQL Server の可用性
- SQL Server オブジェクト (Buffer Manager、データベース、ロック、トランザクション、バッチ要求、キャッシュ)
- SQL Server のリソース (空き領域、現在のユーザ接続率、I/O 使用率、ラッチ、ミラーリング、レプリケーション、データ・アクセス)
- SQL Server のエラー

Microsoft SQL Server ソリューションでは、SiteScope データベース・カウンタ・モニタ、Microsoft SQL Server モニタ、Microsoft Windows リソース・モニタが使用されます。これらのモニタの詳細については、[Database Counter Monitor](#)、[Microsoft SQL Server Monitor](#)、[Microsoft Windows Resources Monitor](#)を参照してください。

Microsoft SQL Server ソリューション・テンプレートのデプロイ方法

このタスクでは、サーバ環境を設定し、Microsoft SQL Server ソリューション・テンプレートの変数を入力する手順について説明します。

1. 前提条件

- SiteScope サーバから監視対象の Microsoft SQL ホストに接続できる必要があります。Microsoft Windows リソース・モニタを使用して、リモート Windows サーバからサーバのパフォーマンス統計情報を監視します。Microsoft Windows リソース・モニタに特別な設定が必要になる場合があります。詳細については、『HP SiteScope Monitor Reference』の「[Microsoft Windows Resources Monitor](#)」を参照してください。
- 対象サーバを Windows リモート・マシンとして SiteScope に追加し、Windows リモート・テストにパスする必要があります（[\[リモート サーバ\]>\[Microsoft Windows リモート サーバ\]](#)）。詳細については、[535ページ「\[新規 Microsoft Windows リモート サーバ\]/\[Microsoft Windows リモート サーバの編集\]ダイアログ・ボックス」](#)を参照してください。

または、ドメイン権限を設定して SiteScope からリモート・サーバへのアクセスを許可することもできます。詳細については、[527ページ「SiteScope 監視のドメイン権限の設定方法」](#)を参照してください。

- SQL Server ユーザは、SQL Server システム・ビューからデータを取得するために、監視対象の SQL Server インスタンスの **VIEW SERVER STATE** 権限が必要です。Microsoft SQL Server に対する権限付与の詳細については、<http://msdn2.microsoft.com/en-us/library/ms186717.aspx>を参照してください。

注: SiteScope と監視対象の Microsoft SQL Server は、同じホストで実行できます。

2. ソリューション・テンプレートのデプロイ

ソリューション・テンプレートのデプロイに関連する手順の詳細については、[932ページ「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」](#)を参照してください。

3. ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力(ユーザ・インタフェース・デプロイメント用のみ)

Microsoft SQL Server ソリューション・テンプレートの[デプロイメント値]ページの項目を入力します。ユーザ・インタフェースの詳細については、[1010ページ「\[Microsoft SQL Server ソリューション\]テンプレート・ページ」](#)を参照してください。

[Microsoft SQL Server ソリューション]テンプレート・ページ

このページでは、Microsoft SQL Server の主要コンポーネントを監視する Microsoft SQL Server ソリューション・テンプレートをデプロイできます。

アクセス方法	[テンプレート]コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで[ソリューション テンプレート]を展開し、必要なソリューションを選択します (Microsoft SQL Server または Microsoft SQL Server 2008 R2)。
関連タスク	932ページ「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none">1007ページ「Microsoft SQL Server ソリューション・テンプレート」88ページ「テンプレート・ツリー」

Microsoft SQL Server(Microsoft SQL Server 2005 および 2008 用)

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
Login to Microsoft SQL Server	監視対象の Microsoft SQL Server インスタンスのユーザのログイン名。
Microsoft SQL Server password	監視対象の Microsoft SQL Server インスタンスのユーザのパスワード。
Microsoft SQL Server URL	<p>監視対象の Microsoft SQL Server インスタンスの URL。</p> <ul style="list-style-type: none">`\${host}` を Microsoft SQL Server が実行されているホスト名で置き換えます。これは、Windows リモート・マシンに定義されているホスト名と同じである必要があります。詳細については、535ページ「[新規 Microsoft Windows リモート サーバ]/[Microsoft Windows リモート サーバの編集]ダイアログ・ボックス」を参照してください。`\${port}` を Microsoft SQL Server で接続が許可されるポート番号で置き換えます。標準設定のポートは 1433 です。 <p>例: jdbc:mercury:sqlserver://doors:1433</p>
SERVER_LIST	監視するサーバの名前。監視対象サーバがリストにない場合、サーバへの接続プロファイルを定義する必要があります。Windows 接続プロファイルを作成する手順については、525ページ「リモート Microsoft Windows サーバを監視するための SiteScope の設定方法」を参照してください。

UI 要素	詳細
サイレント・デプロイメント	<p>テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、< SiteScope のルート・ディレクトリ>\logs\silent_deployment.log に記録されます。</p> <p>標準設定値 : 選択されていない</p>
リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証	<p>テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。</p> <p>注 : このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。</p> <p>標準設定値 : 選択されている</p>

Microsoft SQL Server 2008 R2

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
Microsoft SQL Server URL	<p>監視対象の Microsoft SQL Server インスタンスの URL。</p> <ul style="list-style-type: none"> <code>\${host}</code> を Microsoft SQL Server が実行されているホスト名で置き換えます。これは、Windows リモート・マシンに定義されているホスト名と同じである必要があります。詳細については、535 ページ「新規 Microsoft Windows リモート サーバ」/[Microsoft Windows リモート サーバの編集]ダイアログ・ボックスを参照してください。 <code>\${port}</code> を Microsoft SQL Server で接続が許可されるポート番号で置き換えます。標準設定のポートは 1433 です。 <p>例 : jdbc:mercury:sqlserver://doors:1433</p>
Login to Microsoft SQL Server 2008 R2	監視対象の Microsoft SQL Server 2008 R2 インスタンスのユーザのログイン名。
Password to Microsoft SQL Server 2008 R2	監視対象の Microsoft SQL Server 2008 R2 インスタンスのユーザのパスワード。
Microsoft SQL Server 2008 R2 agent service name	<p>SQL Server 2008 R2 エージェント・サービスの名前。</p> <p>標準設定値 : SQL Server (MSSQLSERVER)</p>

UI 要素	説明
Microsoft SQL Server 2008 R2 service instance name	SQL Server 2008 R2 サービス・インスタンスの名 前。 標準設定値 :SQL Server (MSSQLSERVER)
Microsoft SQL Server 2008 R2 service name	SQL Server 2008 R2 サービスの名 前。 標準設定値 :SQL Server
SERVER_LIST	監視するサーバの名 前。監視対象サーバがリストにない場合、サーバへの接続プロファイルを定義する必要があります。Windows 接続プロファイルを作成する手順については、 525ページ「リモート Microsoft Windows サーバを監視するための SiteScope の設定方法」 を参照してください。
サイレント・デプロイメント	テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、< SiteScope のルート・ディレクトリ>\logs\silent_deployment.log に記録されます。 標準設定値 :選択されていない
リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証	テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。 注 :このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。 標準設定値 :選択されている

第 63 章

Microsoft Windows Host ソリューション・テンプレート

本章の内容

概念

- [1014ページ「Microsoft Windows Host ソリューションの概要」](#)

タスク

- [1015ページ「Microsoft Windows Host ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」](#)

参照情報

- [1016ページ「\[Microsoft Windows Host ソリューション テンプレート\] ページ」](#)

Microsoft Windows Host ソリューションの概要

Microsoft Windows Host ソリューション・テンプレートは、Windows ホストの状況、可用性、パフォーマンスをテストする標準設定の測定値で設定されたモニタの収集をデプロイするために使用できるテンプレートです。このテンプレートでは、Microsoft Windows 2000、Windows XP、Windows Server 2003、Windows Server 2008 がサポートされています。

Microsoft Windows リソース・モニタの場合は、監視対象のサーバについて 3 つの測定値のデータを表示するサーバ中心のレポートを作成できます。

ヒント: 必要なモニタおよび測定値があらかじめ設定されているため、Microsoft Windows リソース・モニタを作成する場合はソリューション・テンプレートを使用することをお勧めします。サーバ中心のレポートの生成の詳細については、[1104 ページ「サーバ中心のレポートの生成」](#)を参照してください。

Microsoft Windows Host ソリューション・テンプレートを使用して、Windows オペレーティング・システムを包括的に監視できます。SiteScope ユーザまたは IT 組織がアプリケーションに精通している必要はありません。また、さまざまなパフォーマンス・モニタの設定やデプロイの時間が短縮し、パフォーマンスのボトルネック(リアルタイムおよび長期間)の特定が容易になります。さらに、実運用システムにはほとんど負荷がかかりません。

注:

- Microsoft Windows Host ソリューション・テンプレートを使用するには、適切な SiteScope オプション・ライセンスが必要です。ソリューション・ライセンスの詳細については、HP の営業担当にお問い合わせください。
- Microsoft Host ソリューションの設定の詳細については、『SiteScope Operating System Host Best Practices』を参照してください。このドキュメントは、<SiteScope のルート・ディレクトリ\sisdocs\pdfs\SiteScope_OS_Best_Practices.pdf にあります。このドキュメントはパスワードで保護されています。パスワードは、オペレーティング・システムのホスト・ソリューション・ライセンス・キーとともに HP から提供されます。

ソリューション・テンプレート・モニタ

Microsoft Windows Host ソリューション・テンプレートでは、Microsoft Windows のパフォーマンスおよび状況の次の側面を対象とするモニタがデプロイされます。

- CPU の状態および使用率の詳細
- メモリの状態および使用率の詳細
- ディスク使用率情報

Microsoft Windows Host ソリューション・テンプレートのデプロイ方法

このタスクでは、サーバ環境を設定し、Microsoft Windows Host ソリューション・テンプレートの変数を入力する手順について説明します。

注: Microsoft Windows Host ソリューションでは、各監視対象ホストに Microsoft Windows リソース・モニタがデプロイされます。このモニタは、サーバ中心のレポートをサポートするために必要な追加モニタです。

1. 前提条件

- SiteScope サーバから監視対象 Windows ホストに接続できる必要があります。Microsoft Windows リソース・モニタを使用して、リモート Windows サーバからサーバのパフォーマンス統計情報を監視します。Microsoft Windows リソース・モニタに特別な設定が必要になる場合があります。詳細については、『HP SiteScope Monitor Reference』の「[Microsoft Windows Resources Monitor](#)」を参照してください。
- 対象サーバを Windows リモート・マシンとして SiteScope に追加し、Windows リモート・テストにパスする必要があります ([[リモート サーバ](#)] > [[Microsoft Windows リモート サーバ](#)])。詳細については、[535 ページ](#)「[新規 Microsoft Windows リモート サーバ](#)」/[\[Microsoft Windows リモート サーバの編集\] ダイアログ・ボックス](#)」を参照してください。

または、ドメイン権限を設定して SiteScope からリモート・サーバへのアクセスを許可することもできます。詳細については、[527 ページ](#)「[SiteScope 監視のドメイン権限の設定方法](#)」を参照してください。

- SiteScope がテンプレートでサポートされる Windows オペレーティング・システムにインストールされている場合、SiteScope と監視対象サーバは同じホストで実行できます。このテンプレートでは、Microsoft Windows 2000、Windows XP、Windows Server 2003、Windows Server 2008 がサポートされています。

2. ソリューション・テンプレートのデプロイ

ソリューション・テンプレートのデプロイに関連する手順の詳細については、[932 ページ](#)「[SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法](#)」を参照してください。

3. ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力(ユーザ・インタフェース・デプロイメント用のみ)

Microsoft Windows Host ソリューション・テンプレートの[デプロイメント値]ページの項目を入力します。ユーザ・インタフェースの詳細については、[1016 ページ](#)「[\[Microsoft Windows Host ソリューション テンプレート\] ページ](#)」を参照してください。

[Microsoft Windows Host ソリューション テンプレート] ページ

このページでは、Microsoft Windows 2000, Windows XP, および Windows Server 2003 オペレーティング・システムを監視する Microsoft Windows Host ソリューション・テンプレートをデプロイできます。

アクセス方法	[テンプレート] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで [ソリューション テンプレート] を展開し、[Microsoft Windows Host] を選択します。
関連タスク	932 ページ「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> 1013 ページ「Microsoft Windows Host ソリューション・テンプレート」 88 ページ「テンプレート・ツリー」

メイン設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
SERVER_LIST	監視するサーバの名前。監視対象サーバがリストにない場合、サーバへの接続プロファイルを定義する必要があります。Windows 接続プロファイルを作成する手順については、 525 ページ「リモート Microsoft Windows サーバを監視するための SiteScope の設定方法」 を参照してください。
サイレント・デプロイメント	<p>テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、< SiteScope のルート・ディレクトリ > \logs\silent_deployment.log に記録されます。</p> <p>標準設定値：選択されていない</p>
リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証	<p>テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。</p> <p>注：このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。</p> <p>標準設定値：選択されている</p>

第 64 章

.NET ソリューション・テンプレート

本章の内容

概念

- 1018ページ「.NET ソリューションの概要」

タスク

- 1019ページ「.NET ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」

参照情報

- 1020ページ「.NET ソリューション・テンプレート・ページ」

.NET ソリューションの概要

.NET ソリューション・テンプレートでは、Windows オペレーティング・システムが実行されているサーバの .NET アプリケーションを監視できます。このソリューション・テンプレートでは、Windows ホストの .NET アプリケーションおよび .NET 環境の状況、可用性、パフォーマンスをテストする一連のモニタがデプロイされます。このテンプレートでは、Windows 2000、Windows XP、Windows Server 2003 がサポートされます。

.NET ソリューション・テンプレートでは包括的な .NET 監視が可能です。SiteScope ユーザまたは IT 組織にアプリケーションの専門知識は必要ありません。また、モニタの設定やデプロイの時間が短縮し、パフォーマンスのボトルネック(リアルタイムおよび長期間)の特定が容易になります。さらに、実運用システムにはほとんど負荷がかかりません。

注:

- .NET ソリューション・テンプレートを使用するには、適切な SiteScope オプション・ライセンスが必要です。ソリューション・ライセンスの詳細については、HP の営業担当にお問い合わせください。
- .NET ソリューションの詳細については、『SiteScope.NET Best Practices』ドキュメントを参照してください。このドキュメントは、<SiteScopeのルート・ディレクトリ>\sisdocs\pdfs\SiteScope.NET_Best_Practices.pdf にあります。このドキュメントはパスワードで保護されています。パスワードは .NET ソリューション・ライセンス・キーとともに HP から提供されます。

ソリューション・テンプレート・モニタ

.NET ソリューション・テンプレートでは、.NET のパフォーマンスと状況の次の側面を対象とするモニタがデプロイされます。

- **.NET CLR データ** :このカテゴリの対象は、共通言語ランタイム・データ(.NET アプリケーションの環境)です。このカテゴリは、選択したアプリケーションを対象として .NET CLR の複数のリソースの統計情報をチェックするように設計されています。.NET ソリューション・テンプレートでは、サーバの状況のモニタが自動的に設定されます。
- **ASP.NET** :このカテゴリは、ASP.NET の複数のリソースの統計情報をチェックするように設計されています。アプリケーションの再起動とASP.NET システム全体の安定性に関する一般的な情報が収集されます。.NET ソリューション・テンプレートでは、サーバの状況のモニタが自動的に設定されます。
- **ASP.NET アプリケーション** :このカテゴリは、選択した ASP.NET アプリケーションの複数のリソースの統計情報をチェックするように設計されています。アプリケーションのキャッシュやエラーなどの重要な情報に関する一般的な情報が収集されます。.NET ソリューション・テンプレートでは、サーバの状況のモニタが自動的に設定されます。

.NET ソリューション・テンプレートのデプロイ方法

このタスクでは、.NET ソリューション・テンプレートのサーバ環境を設定し、変数を入力する手順について説明します。

1. 前提条件

- SiteScope サーバから監視対象 Windows ホストに接続する必要があります。Microsoft Windows リソース・モニタを使用して、リモート Windows サーバからサーバのパフォーマンス統計情報を監視します。Microsoft Windows リソース・モニタに特別な設定が必要になる場合があります。詳細については、『HP SiteScope Monitor Reference』の「[Microsoft Windows Resources Monitor](#)」を参照してください。

- 対象サーバを Windows リモート・マシンとして SiteScope に追加し、Windows リモート・テストにパスする必要があります ([[リモート サーバ](#)] > [[Microsoft Windows リモート サーバ](#)])。詳細については、[535ページ](#)「[新規 Microsoft Windows リモート サーバ](#)」/[\[Microsoft Windows リモート サーバの編集\] ダイアログ・ボックス](#)」を参照してください。

または、ドメイン権限を設定して SiteScope からリモート・サーバへのアクセスを許可することもできます。詳細については、[527ページ](#)「[SiteScope 監視のドメイン権限の設定方法](#)」を参照してください。

- SiteScope がテンプレートでサポートされている Windows オペレーティング・システムにインストールされている場合、SiteScope および対象 .NET アプリケーションを同じホストで実行できます。このテンプレートでは、Windows 2000, Windows XP, Windows Server 2003 がサポートされます。

2. ソリューション・テンプレートのデプロイ

ソリューション・テンプレートのデプロイに関連する手順の詳細については、[932ページ](#)「[SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法](#)」を参照してください。

3. ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力(ユーザ・インタフェース・デプロイメント用のみ)

.NET ソリューション・テンプレートの[デプロイメント値]ページの項目を入力します。ユーザ・インタフェースの詳細については、[1020ページ](#)「[.NET ソリューション・テンプレート・ページ](#)」を参照してください。

.NET ソリューション・テンプレート・ページ

このページでは、.NET アプリケーションおよび .NET 環境を監視する .NET ソリューション・テンプレートをデプロイできます。

アクセス方法	[テンプレート]コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、[ソリューション テンプレート]を展開し、必要な .NET ソリューション・テンプレートを選択します。
関連タスク	932ページ「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none">1017ページ「.NET ソリューション・テンプレート」88ページ「テンプレート・ツリー」

メイン設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
Server	監視するサーバの名前。監視対象サーバがリストにない場合、サーバへの接続プロファイルを定義する必要があります。Windows 接続プロファイルを作成する手順については、 525ページ「リモート Microsoft Windows サーバを監視するための SiteScope の設定方法」 を参照してください。
ASP.NET Application (ASP.NET アプリケーションのみ)	監視する ASP.NET アプリケーションの名前。この名前は、タスク・マネージャに表示される名前と同じにする必要があります。
Instance (.NET CLR データのみ)	監視するアプリケーションの名前。この名前は、タスク・マネージャに表示される名前と同じにする必要があります。同じでない場合はシステム全体の統計情報(標準設定)になる可能性があります。
サイレント・デプロイメント	テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、<SiteScope のルート・ディレクトリ>\logs\silent_deployment.log に記録されます。 標準設定値：選択されていない
リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証	テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。 注：このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。 標準設定値：選択されている

第 65 章

Oracle Database Solution Templates

本章の内容

概念

- 1022ページ「Oracle Database ソリューションの概要」

タスク

- 1024ページ「Oracle Database ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」

参照情報

- 1025ページ「Oracle Database ソリューション・テンプレートのツール」
- 1027ページ「Oracle Database ソリューション・テンプレート・ページ」

Oracle Database ソリューションの概要

Oracle Database ソリューション・テンプレートを使用すると、Oracle データベースの状況、可用性、パフォーマンスをテストする一連のモニタをデプロイできます。デプロイしたモニタは、キャッシュ・ヒット率やディスク I/O などの一般的なシステム統計情報をチェックします。また、データベースの重要な側面に関する診断情報を提供するツールを備えています。このソリューションは、Oracle 9, 10g, 11g データベースに使用できます。

このソリューションは、データベース・カウンタ・モニタを使用して JDBC でアクセス可能なデータベースからパフォーマンス測定値を収集します。さらに、Oracle Database ソリューション・テンプレートを使用して標準設定の測定値が設定された一連のモニタをデプロイできます。

重要なシステム測定値は、Oracle データベースのシステム・テーブルから取得したデータを使用して計算されます。これらの測定値を作成するために、V\$SYSSTAT, V\$LATCH, V\$ROLLSTAT, V\$BUFFER_POOL_STATISTICS などの幅広い Oracle システム・テーブルを参照します。このように、Oracle Database ソリューションは、Oracle インストールにバンドルされているシステム監視スクリプトの多くと同等の機能を実装します。

Oracle Database ソリューション・テンプレートでは包括的な Oracle データベースの監視が可能です。SiteScope ユーザまたは IT 組織にアプリケーションの専門知識は必要ありません。また、モニタの設定やデプロイの時間が短縮し、パフォーマンスのボトルネック(リアルタイムおよび長期間)の特定が容易になります。さらに、実運用システムにはほとんど負荷がかかりません。

注:

- Oracle Database ソリューション・テンプレートを使用するには、適切な SiteScope オプション・ライセンスが必要です。ソリューション・ライセンスの詳細については、HP の営業担当にお問い合わせください。
- Oracle Database ソリューションの詳細については、『SiteScope Oracle Database Best Practices』ドキュメントを参照してください。このドキュメントは SiteScope インストールに含まれており、<SiteScope root ディレクトリ> \sisdocs\pdfs\SiteScope_Oracle_Database_Best_Practices.pdf にあります。このドキュメントはパスワードで保護されています。パスワードは、Oracle Database ソリューション・ライセンス・キーとともに HP から提供されます。

ソリューション・テンプレート・モニタ

Oracle Database ソリューション・テンプレートでは、Oracle のパフォーマンスと状況の次の側面を監視対象とするモニタがデプロイされます。

- **一般的なシステム統計情報** : 最も重要な V\$SYSSTAT 統計は、Oracle Database ソリューションでデプロイされたモニタによって標準設定で監視されます。必要に応じて、これらの測定値は組み合わされ、1 秒または 1 トランザクションあたりの差異や速度が計算されます。データベース内の V\$ テーブルから重要な測定値を監視する場合、手動で生成した SQL スクリプトの代わりに Oracle Database ソリューションを使用できます。
- **Oracle ログ** : ORA- エラーがないかどうか、重要な Oracle ログ・ファイルを監視します。データベース設定に応じて、ユーザがこれらのモニタをログ・ファイル内の特定のテキストを検索するようにカスタマイズすることも可能です。
- **データベース問題の診断** : デプロイしたモニタに加えて、Oracle ソリューションは、データベースに関

する診断情報の取得に使用できる複数のツールを備えています。これらのツールでは、リソースを集中的に消費する SQL ステートメント、共有サーバプロセスの競合、特定のイベントを待機しているセッション数などの診断データを利用できます。

Oracle Database ソリューション・テンプレートのデプロイ方法

このタスクでは、Oracle Database ソリューション・テンプレートのサーバ環境を設定し、変数を入力する手順について説明します。

1. 前提条件

- Oracle Database ソリューション・テンプレートを正 常にデプロイするには、「CREATE SESSION」システム権限が必要です。
- Oracle Database ソリューション・テンプレートをデプロイする前に、データベース・カウンタ・モニタとログ・ファイル・モニタについてのドキュメント(『HP SiteScope Monitor Reference』の「[Database Counter Monitor](#)」と「[Log File Monitor](#)」)を参照し、このソリューション・テンプレートで要求される前提条件とパラメータの詳細を確認してください。たとえば、データベースとの通信に必要な Oracle JDBC ドライバのインストールや、ログ・ファイル・パス・パラメータの形式に関する詳細な情報を参照できます。

2. ソリューション・テンプレートのデプロイ

ソリューション・テンプレートのデプロイに関連する手順の詳細については、[932ページ「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」](#)を参照してください。

3. ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力(ユーザ・インタフェース・デプロイメント用のみ)

Oracle Database ソリューション・テンプレートの[デプロイメント値]ページの項目を入力します。ユーザ・インタフェースの詳細については、[1027ページ「Oracle Database ソリューション・テンプレート・ページ」](#)を参照してください。

Oracle Database ソリューション・テンプレートのツール

Oracle Database ソリューション・テンプレートでは、Oracle データベースに関する診断情報の収集に使用できる複数のツールがデプロイされます。これらのツールは、ソリューション・テンプレートでデプロイしたモニタと同じグループにデプロイされます。ツールは、モニタと同じように表示されますが、無効に設定されています。これらのツールは、グループ内容テーブルの[状態]フィールドに太字で表示されたテキスト「**Solution Tool**」で識別します。ソリューション・ツールはモニタ・テーブルに表示されますが、モニタ・インスタンスではありません。ソリューション・ツールが自動的に実行されることはありません。また、アクション結果に基づいて状態が表示されたり、警告が起動されることはありません。これらのツールは事前に設定されたアクションであり、SiteScope 診断ツールを利用して Oracle データベースからパフォーマンス問題を示す特定の統計情報をチェックします。

ユーザがいくつかのソリューション・ツールをクリックすると、SiteScope はデータベース接続テスト・ツールを使用して、データベースへのカスタム SQL クエリを実行します。クエリの結果は、ページ下部にあるテーブルに表示されます。このページで[接続とクエリ実行]ボタンをクリックすることで、ツールを必要に応じて何回でも実行できます。ツールによっては、データベースに著しいオーバーヘッドが発生するため、連続して実行することはお勧めしません。

Oracle Database ソリューション・テンプレートのリスト

次に、Oracle Database ソリューションの一部としてデプロイされるツールについて説明します。

Oracle ソリューション・ツール名	説明と使用ガイドライン
Top Ten SQL Statements in Logical IOs Per Row	<p>このツールは、データベースで実行されている SQL ステートメントのうち、最もリソースを集中的に消費するステートメントを見つけるように設計されたクエリを実行します。V\$SQL テーブルに対して、1 行あたり最も多くの論理 IO を実行する SQL ステートメント上位 10 個を求めるクエリが実行され、テーブルに表示されます。</p> <p>これらの 10 個のステートメントのステートメント ID が、ステートメントごとの追加のリソース使用データとともにテーブルに表示されます。</p> <p>次のような追加データがあります。</p> <ul style="list-style-type: none">● 物理 IO ブロック数：ステートメントのために実行されたディスク読み取り回数。● 論理 IO 数：ステートメントのために実行されたバッファ取得回数。● 処理された行数：ステートメント実行時に処理された行数。● 1 行あたりの論理 IO 数：ステートメント実行時に処理された 1 行あたりのバッファ取得実行回数。● 実行回数：ステートメントの実行回数。● 1 回の実行あたりの論理 IO 数：1 回のステートメント実行あたりのバッファ取得回数。 <p>注：実行するアクションはデータベース・リソースに重大な影響を与える可能性があるため、頻繁に実行しないでください。</p>

Oracle ソリューション・ツール名	説明と使用ガイドライン
Number of Sessions Waiting Per Event	このツールは、応答しなくなったセッションのトラブルシューティングに使用できます。複数のセッションが応答しなくなった場合、このツールを使用して、応答しなくなったセッションがすべて同じイベントを待機しているかどうかを判別できます。ツールのアクションによって、特定のイベントを待機しているセッション数を含むテーブルが表示されます。
Shared Server Process Contention (Common Queue Average Wait Time)	このツールは、共有サーバ・メッセージ・キュー(V\$QUEUE に記録された共通キュー)の平均待機時間を計算します。平均待機時間が長い場合、共有サーバ・プロセス間の競合を示している可能性があります。

Oracle Database ソリューション・ツールを実行するには、次の手順を実行します。

1. Oracle ソリューション・モニタがデプロイされているグループのグループ名をクリックします。[Group Detail] ページが開きます。
2. 実行するアクションに対応するソリューション・ツールを見つけます。ソリューション・ツールで実行されるアクションの説明については、そのツールの[名前]列を参照してください。
3. アクションを実行するには、ツールの[名前]の右にある[ツール]リンクをクリックします。[データベース接続テスト] ページが開きます。このページで[接続とクエリ実行] ボタンをクリックすることで、ツールを必要に応じて何回でも実行できます。

注: クエリによっては、ソリューション・ツールがデータベースにとって著しいオーバーヘッドとなる場合があります。ツールを短い間に連続して実行することはお勧めしません。

[データベース接続テスト] ページの上部には、テストに使用したデータベース接続パラメータが表示されます。ツール・クエリの結果は、ページ下部近くのテーブルに表示されます。該当するツールの説明と使用ガイドラインに基づいて、結果を確認します。

Oracle Database ソリューション・テンプレート・ページ

このページでは、Oracle Database ソリューション・テンプレートをデプロイできます。

アクセス方法	[テンプレート]コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、[ソリューション テンプレート]を展開し、[Oracle Database 9i and 10g]または[Oracle Database 11g]を選択します。
重要な情報	Oracle Database 9i and 10g ソリューション・テンプレートを正 常にデプロイするには、「CREATE SESSION」システム権限が必要です。
関連タスク	932ページ「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none">• 1021ページ「Oracle Database Solution Templates」• 88ページ「テンプレート・ツリー」

メイン設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
DatabaseConnection URL	監視対象のデータベースの接続 URL。構文は、jdbc:oracle:thin:@<server name or IP address>:<database server port>;sid=<sid> になります。 例：ポート 1521 を使用してマシン上の ORCL データベースに接続するには、次の URL を使用します。 jdbc:oracle:thin:@206.168.191.19:1521:ORCL. 注：前述の例のようにコロン(:)とアットマーク(@)記号を含める必要があります。
DatabaseDriver	このモニタで使用する JDBC ドライバの名前。各ドライバがサポートするのは特定の接続 URL パターンであるため、[データベース接続 URL]に入力した URL とその URL パターンは一致する必要があります。
OracleAlertLogPath	Oracle 警告ログへのフル・パス。Windows マシンの場合、これはフル UNC パスです。Oracle 警告ログへのフル・パスを入力します。このファイルへのアクセス方法については、データベース管理者に問い合わせるか、Oracle のドキュメントを参照してください。
OracleListenerLog Path	Oracle リスナ・ログへのフル・パス。Windows マシンの場合、これはフル UNC パスです。このファイルへのアクセス方法については、データベース管理者に問い合わせるか、Oracle のドキュメントを参照してください。
DatabaseUserName	SiteScope がデータベースへの接続に使用するユーザ名。

UI 要素	詳細
DATABASEPASSWORD	SiteScope がデータベースへの接続に使用するユーザ名のパスワード。
Log File Encoding	<p>監視するファイル内容で、SiteScope を実行するサーバとは別のエンコーディングを使用している場合、使用するコード・ページまたはエンコーディングを入力します。これは、SiteScope が使用するコード・ページが対象ファイルで使用する文字セットをサポートしていない場合に必要となる可能性があります。ここで指定することで、SiteScope がエンコードされたファイルの内容を正確に照合および表示できます。</p> <p>例 : Cp1252, Cp1251, Cp1256, Shift_JIS, EUC_JP</p>
SERVER_LIST	<p>監視するサーバの名前。監視対象サーバがリストにない場合、サーバへの接続プロファイルを定義する必要があります。</p> <p>接続プロファイルを作成する手順については、525 ページ「リモート Microsoft Windows サーバを監視するための SiteScope の設定方法」 または 531 ページ「リモート UNIX サーバを監視するための SiteScope の設定方法」 を参照してください。</p>
サイレント・デプロイメント	<p>テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、< SiteScope のルート・ディレクトリ > \logs\silent_deployment.log に記録されます。</p> <p>標準設定値 : 選択されていない</p>
リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証	<p>テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。</p> <p>注 : このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。</p> <p>標準設定値 : 選択されている</p>

第 66 章

SAP ソリューション・テンプレート

本章の内容

概念

- 1030ページ「SAP ソリューションの概要」

タスク

- 1031ページ「SAP ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」

参照情報

- 1032ページ「SAP ソリューション・テンプレート・ページ」

SAP ソリューションの概要

SAP ソリューションには、次の重要な SAP コンポーネントを監視するためのソリューション・テンプレートが含まれています。

- SiteScope SAP R/3 Application Server ソリューション・テンプレートには、SAP R/3 システムの可用性の監視、使用状況の統計、サーバ・パフォーマンスの統計に使用するツールが用意されています。このソリューション・テンプレートでは、SAP R/3 サーバの状況、可用性、パフォーマンスをテストする一連のモニタをデプロイします(バージョン 4.5B 以降)。
- SiteScope SAP NetWeaver Application Server ソリューション・テンプレートでは、SAP Java Web アプリケーション・サーバ・クラスタの可用性とサーバ統計情報を監視できます。このソリューション・テンプレートを使用して、サーバ全体のリソースと測定値のモニタをデプロイできます。

SAP ソリューション・テンプレートは、可用性およびパフォーマンスに関してレポートするためにメトリックスで構成されたモニタのコレクションをデプロイします。これらの監視設定は、ベスト・プラクティス・データとさまざまな情報源から得た専門知識を使用して調査されています。

SAP ソリューション・テンプレートは包括的な SAP 監視を提供します。SiteScope ユーザまたは IT 組織に専門的な知識は必要ありません。また、モニタの設定やデプロイの時間が短縮し、パフォーマンスのボトルネック(リアルタイムおよび長期間)の特定が容易になります。さらに、実運用システムにはほとんど負荷がかかりません。

注: SAP R/3 Application Server ソリューション・テンプレートと SAP NetWeaver Application Server ソリューション・テンプレートを使用するには、適切な SiteScope オプション・ライセンスが必要です。ソリューション・テンプレートのライセンスの詳細については、HP の営業担当にお問い合わせください。

SAP ソリューション・テンプレートのデプロイ方法

このタスクでは、サーバ環境を設定する手順と、SAP ソリューション・テンプレートの変数を入力する手順について説明します。

1. 前提条件

SAP R/3 アプリケーション・サーバ:

- SAP Java コネクタのライブラリを、必要な SiteScope フォルダにコピーする必要があります。
- SiteScope で SAP R/3 サーバへのログインに使用するユーザ名とパスワードが必要です。

システムと設定要件の詳細については、『HP SiteScope Monitor Reference』の「[SAP CCMS Monitor](#)」を参照してください。このモニタは、SAP R/3 ソリューション・テンプレートの一部としてデプロイされます。

SAP NetWeaver アプリケーション・サーバ:

- SAP Java Web アプリケーション・サーバのライブラリを、必要な SiteScope フォルダにコピーする必要があります。
- SiteScope で SAP Java Web アプリケーション・サーバへのログインに使用するユーザ名とパスワードが必要です。

システムと設定要件の詳細については、『HP SiteScope Monitor Reference』の「[SAP Java Web Application Server Monitor](#)」を参照してください。このモニタは、SAP NetWeaver Application Server ソリューション・テンプレートの一部としてデプロイされます。

2. ソリューション・テンプレートのデプロイ

ソリューション・テンプレートのデプロイに関連する手順の詳細については、[932ページ「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」](#)を参照してください。

3. ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力(ユーザ・インタフェース・デプロイメント用のみ)

SAP ソリューション・テンプレートの[デプロイメント値]ページの項目を入力します。ユーザ・インタフェースの詳細については、[1032ページ「SAP ソリューション・テンプレート・ページ」](#)を参照してください。

SAP ソリューション・テンプレート・ページ

このページでは、SAP CCMS と SAP Java Web アプリケーション・サーバ上の主要コンポーネントを監視する SAP ソリューション・テンプレートをデプロイできます。

アクセス方法	[テンプレート]コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで[ソリューション テンプレート]を展開して、必要な SAP ソリューション・テンプレートを選択します。
関連タスク	932ページ「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none">1029ページ「SAP ソリューション・テンプレート」88ページ「テンプレート・ツリー」

SAP R/3 アプリケーション・サーバ

[メイン設定]には次の要素が含まれています。

UI 要素	説明
CLIENT_NUMBER	SAP への接続に使用するクライアント。
Password	SAP サーバへの接続に必要なパスワード。
USER_NAME	SAP サーバへの接続に必要なユーザ名。
SYSTEM_NUMBER	SAP サーバのシステム番号。
APPLICATION_SERVER	監視する SAP サーバのアドレス。
サイレント・デプロイメント	<p>テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、<SiteScope のルート・ディレクトリ>\logs\silent_deployment.log に記録されます。</p> <p>標準設定値：選択されていない</p>
リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証	<p>テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。</p> <p>注：このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。</p> <p>標準設定値：選択されている</p>

SAP NetWeaver アプリケーション・サーバ

[メイン設定]には次の要素が含まれています。

UI 要素	詳細
TARGET_SERVER_NAME	監視する SAP Java Web アプリケーション・サーバのアドレス。
USER_NAME	SAP Java Web アプリケーション・サーバへの接続に必要なユーザ名。
PORT	SAP Java Web アプリケーション・サーバのポート。
Password	SAP Java Web アプリケーション・サーバへの接続に必要なパスワード。
サイレント・デプロイメント	<p>テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、< SiteScope のルート・ディレクトリ> \logs\silent_deployment.log に記録されます。</p> <p>標準設定値 :選択されていない</p>
リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証	<p>テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。</p> <p>注 :このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。</p> <p>標準設定値 :選択されている</p>

第 67 章

Siebel ソリューション・テンプレート

本章の内容

概念

- [1035ページ「Siebel ソリューションの概要」](#)

タスク

- [1037ページ「Siebel ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」](#)

参照情報

- [1039ページ「\[Siebel ソリューション テンプレート\] ページ」](#)

Siebel ソリューションの概要

SiteScope Siebel ソリューション・テンプレートでは、Microsoft Windows および UNIX オペレーティング・システムにインストールされている Siebel アプリケーション・サーバ、ゲートウェイ・サーバ、Web サーバのパフォーマンス、可用性、使用率の統計情報を効率的かつ詳細に監視できます。UNIX および Windows プラットフォームにインストールされているサーバに対応する個別のソリューション・テンプレートがあります。

Siebel の主なソリューション・テンプレートは、Siebel Application Server テンプレートです。このテンプレートを使用して、中核となる Siebel アプリケーションの監視をデプロイします。これらの任意指定のコンポーネントを IT 環境にデプロイする場合、Siebel Gateway Server テンプレートおよび Siebel Web Server テンプレートを使用します。

Siebel ソリューション・テンプレートは包括的な Siebel 監視を提供します。SiteScope ユーザまたは IT 組織にアプリケーションの専門知識は必要ありません。また、さまざまなパフォーマンス・モニタを設定およびデプロイする時間の削減や、リアルタイムのパフォーマンス・ボトルネックと長期的な傾向の特定に役立ち、実運用システムには最小限のオーバーヘッドのみが追加されます。

注:

- Siebel ソリューション・テンプレートを使用するには、該当の SiteScope オプション・ライセンスが必要です。ソリューション・ライセンスの詳細については、HP の営業担当にお問い合わせください。
- Siebel ソリューションの詳細については、『SiteScope Siebel Best Practices』ドキュメントを参照してください。このドキュメントは、SiteScope インストールに含まれており、< **SiteScope のルート・ディレクトリ** > \sisdocs\pdfs\SiteScope_Siebel_Best_Practices.pdf にあります。このドキュメントはパスワードで保護されています。パスワードは Siebel ソリューション・ライセンス・キーとともに HP から提供されます。

ソリューション・テンプレート・モニタ

Siebel ソリューションには、次の重要な Siebel コンポーネントを監視するためのソリューション・テンプレートが含まれています。

- **UNIX/Windows の Siebel アプリケーション・サーバ:** SiteScope Siebel Application Server ソリューションでは、Windows および UNIX プラットフォームにインストールされている Siebel アプリケーション・サーバの可用性、使用率の統計情報、サーバ・パフォーマンス統計情報を監視できます。これらのソリューション・テンプレートでは、Siebel 6.x, 7.x, 8.x のアプリケーション・サーバの状況、可用性、およびパフォーマンスをテストする一連のモニタがデプロイされます。
- **UNIX/Windows の Siebel ゲートウェイ・サーバ:** SiteScope Siebel Gateway Server ソリューションでは、Windows および UNIX プラットフォームにインストールされている Siebel ゲートウェイ・サーバの可用性およびサーバ統計情報を監視できます。これらのソリューション・テンプレートでは、Siebel ゲートウェイ・サーバの状況、可用性、およびパフォーマンスをテストする一連のモニタがデプロイされます。これらのソリューション・テンプレートを使用して、サーバ全体のリソースと測定値のモニタをデプロイできます。
- **UNIX/Windows の Siebel Web サーバ:** SiteScope Siebel Web Server ソリューションでは、Windows および UNIX プラットフォームにインストールされている Siebel Web サーバの可用性

およびサーバ統計情報を監視できます。これらのソリューション・テンプレートでは、Siebel Web サーバの状況、可用性、およびパフォーマンスをテストする一連のモニタがデプロイされます。

Siebel ソリューション・テンプレートのデプロイ方法

このタスクでは、サーバ環境を設定する手順と、Siebel ソリューション・テンプレートの変数を入力する手順について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- [1037ページ「前提条件」](#)
- [1038ページ「ソリューション・テンプレートのデプロイ」](#)
- [1038ページ「ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力\(ユーザ・インタフェース・デプロイメント用のみ\)」](#)

1. 前提条件

Siebel Application Server ソリューション・テンプレートの場合：

- (Siebel アプリケーション・サーバがUNIX にインストールされている場合でも)Siebel サーバ・マネージャ・クライアントは、SiteScope が実行されている、または SiteScope マシンにアクセスできる Windows マシンにのみインストールする必要があります。これを行う方法はいくつかあります。詳細については、Siebel サーバ・マネージャ・モニタのドキュメントを参照してください。
- SiteScope で Siebel サーバ・マネージャ・モニタを設定するには、サーバ・マネージャ・クライアントのインストール・パスを把握しておく必要があります。SiteScope が実行されているマシンにクライアントをインストールする場合、このマシンのパスがインストール・パスになります。リモート・マシンにクライアントがインストールされている場合、そのマシンに対するクライアント実行ファイルの完全修飾パスを把握しておく必要があります。
- ネットワークで利用できる Siebel アプリケーションの名前を把握しておく必要があります。たとえば、call center や sales などです。
- Siebel データベース・マシン名、ユーザ名、パスワード、接続 URL、およびデータベース・ドライバを把握しておく必要があります。
- Siebel サーバにログインするために SiteScope で使用するユーザ名とパスワードを把握しておく必要があります。このユーザには、Siebel サーバの Siebel 管理者権限を付与する必要があります。
- 次の Siebel サーバ・コンポーネント・グループが有効であることを確認する必要があります。
 - Siebel コール・センター(CallCenter)
 - Siebel リモート(Remote)
 - システム管理(System)
 - 補助システム管理(SystemAux) - Siebel 8.x のみ
- Siebel システム・コンポーネントの名前とそれに対応する別名の重要なリストを把握しておく必要があります。コンポーネントの名前と別名のリストについては、[1039ページ「\[Siebel ソリューション テンプレート\] ページ」](#)を参照してください。

注：システムと設定要件の詳細については、「[Siebel Web Server Monitor](#)」および「[Database Query Monitor](#)」のセクションを参照してください。これらのモニタ・タイプは、Siebel Application Server ソリューション・テンプレートの一部としてデプロイされます。

Siebel Web Server ソリューション・テンプレートの場合 :

- Siebel Web サーバが実行されているマシンに SiteScope サーバから接続 できる必要 があります。
- Siebel Web Server ソリューションは、Microsoft Windows プラットフォームで実行されている Siebel で使用するよう に設 計されています。
- テンプレートでは、Siebel Web サーバが Microsoft Internet Information Server(IIS)で実行 されていることを想 定しています。

2. ソリューション・テンプレートのデプロイ

ソリューション・テンプレートのデプロイに 関 連する手 順の詳 細については、[932 ページ「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」](#)を参照してください。

3. ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力(ユーザ・インタフェース・デプロイメント用のみ)

Siebel ソリューション・テンプレートの[デプロイメント値]ページの項目を入力します。ユーザ・インタフェースの詳 細については、[1039 ページ「\[Siebel ソリューション テンプレート\] ページ」](#)を参照してください。

[Siebel ソリューション テンプレート] ページ

このページでは、Windows および UNIX プラットフォームの Siebel 6.x, 7.x, 8.x アプリケーション・サーバ、Siebel ゲートウェイ・サーバ、Siebel Web サーバを監視するための Siebel ソリューション・テンプレートをデプロイできます。

アクセス方法	[テンプレート]コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで[ソリューション テンプレート]を展開して、必要な Siebel ソリューション・テンプレートを選択します。
関連タスク	932ページ「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none">1034ページ「Siebel ソリューション・テンプレート」88ページ「テンプレート・ツリー」

Siebel アプリケーション・サーバ

[メイン設定]には、Windows および UNIX 環境の Siebel アプリケーション・サーバ 6.x, 7.x, 8.x を監視するための次の要素があります。

UI 要素	説明
Application	Siebel アプリケーション・サーバ・マシンの名前。
CG_Auxiliary_System_Management_Alias (Siebel 8.x のみ)	Siebel 補助システム管理コンポーネント・グループの別名。
CG_Auxiliary_System_Management_Name (Siebel 8.x のみ)	Siebel 補助システム管理コンポーネント・グループの名前。
CG_Callcenter_Alias	Siebel CallCenter コンポーネント・グループの別名。
CG_Callcenter_Name	Siebel CallCenter コンポーネント・グループの名前。
CG_System_Management_Alias	Siebel システム管理コンポーネント・グループの別名。
CG_System_Management_Name	Siebel システム管理コンポーネント・グループの名前。

UI 要素	説明
CP_Callcenter_Alias	Siebel CallCenter コンポーネントの別 名。
CP_Callcenter_Name	Siebel CallCenter コンポーネントの名 前。
CP_Client_Administration_Alias (Siebel 6.x ~ 7.x のみ)	Siebel クライアント 管 理コンポーネントの別 名。
CP_Client_Administration_Nam (Siebel 6.x ~ 7.x のみ)	Siebel クライアント 管 理コンポーネントの名 前。
CP_eService_Alias	Siebel eService コンポーネントの別 名。
CP_eService_Name	Siebel eService コンポーネントの名 前。
CP_File_System_Manager_Alias	Siebel ファイル・システム・マネージャ・コンポーネントの別 名。
CP_File_System_Manager_Name	Siebel ファイル・システム・マネージャ・コンポーネントの名 前。
CP_Server_Manager_Alias	Siebel サーバ・マネージャ・コンポーネントの別 名。
CP_Server_Manager_Name	Siebel サーバ・マネージャ・コンポーネントの名 前。
CP_Server_Request_Broker_Alias	Siebel サーバ要 求ブローカ・コンポーネントの別 名。
CP_Server_Request_Broker_Name	Siebel サーバ要 求ブローカ・コンポーネントの名 前。
CP_Server_Request_Processor_Alias	Siebel サーバ要 求ブローカ・コンポーネントの別 名。

UI 要素	説明
CP_Server_Request_Processor_Name	Siebel サーバ要求プロセッサ・コンポーネントの名前。
Database_Connection_URL	<p>データベース接続の URL。</p> <p>例: ODBC 接続の名前が test の場合, URL は jdbc:odbc:test になります。</p> <p>接続するデータベースの接続 URL を入力します。構文は, jdbc:oracle:thin:@<サーバ名または IP アドレス>:<データベース・サーバ・ポート>;sid=<sid> になります。</p> <p>例: ポート 1521 を使用して, マシンの ORCL データベースに接続するには, 次の接続 URL を使用します。</p> <p>jdbc:oracle:thin:@206.168.191.19:1521:ORCL.</p> <p>注: 前述の例のようにコロンと @ 記号を含める必要があります。</p>
Database_Driver	データベース接続に使用するドライバ。
Database_PASSWORD	Siebel データベースにアクセスするために使用するユーザ名のパスワード。
Database_Username	Siebel データベースにアクセスするために SiteScope で使用する必要があるユーザ名。
Enterprise	Siebel Enterprise サーバの名前。
Gateway	Siebel ゲートウェイ・サーバ・マシンの名前。
PASSWORD	Siebel クライアントのパスワード。
SERVER_LIST	Siebel アプリケーション・サーバが実行されているサーバの名前。
Server_Logical_Instance_Name	Siebel サーバの論理名。
Server_Manager_Path	<p>Siebel サーバ・マネージャ・クライアントのローカル・パス。</p> <p>例: D:\sea703\client\bin。</p>
Siebel_Database_Machine_Name	Siebel データベース・マシンの名前。
Siebel_Disk	Siebel がインストールされているディスク・ドライブの名前。

UI 要素	説明
Siebel_Root_Dir	Siebel の共有ルート・ディレクトリのパス。 例: Siebel 7.5.2 サーバの共有ルート・ディレクトリは <code>sea752</code> になります
Username	Siebel クライアントのユーザ名。
サイレント・デプロイメント	テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、 < SiteScope のルート・ディレクトリ> \logs\silent_deployment.log に記録されます。 標準設定値: 選択されていない
リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証	テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。 注: このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。 標準設定値: 選択されている

Siebel ゲートウェイ・サーバ

[メイン設定]には次の要素が含まれています。

UI 要素	説明
Siebel_Root_Dir	Siebel のルート・ディレクトリのパス。このディレクトリには、少なくとも管理コンソールがインストールされている必要があります。
Siebel_Disk	Siebel ゲートウェイ・サーバが実行されているディスク・ドライブ。
Siebel_Logical_Instance_Name	Siebel サーバの論理名の値 (UNIX のみ)。
SERVER_LIST	Siebel ゲートウェイ・サーバが実行されているサーバの名前。サーバ名の一部として、UNC パスを示す円記号 (\\) は入力しないでください。
サイレント・デプロイメント	テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、 < SiteScope のルート・ディレクトリ> \logs\silent_deployment.log に記録されます。 標準設定値: 選択されていない

UI 要素	説明
リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証	<p>テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。</p> <p>注 : このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。</p> <p>標準設定値 : 選択されている</p>

Siebel Web サーバ

[メイン設定]には次の要素が含まれています。

UI 要素	説明
Application	<p>監視する Siebel アプリケーション。</p> <p>例 : callcenter_enu。インストールされている Siebel アプリケーションの名前については、Siebel 管理者にお問い合わせください。</p>
Siebel_Disk	Siebel Web サーバがインストールされているディスク・ドライブの名前またはドライブ文字。
Siebel_Root_Dir	<p>Siebel の共有ルート・ディレクトリの名前。</p> <p>例 : Windows の Siebel のルート・ディレクトリ : sea752。</p>
Siebel_Logical_Instance_Name	Siebel サーバの論理名の値 (UNIX のみ)。
Username	Siebel Web サーバにログインするために必要な Siebel クライアントのユーザ名。
Password	Siebel Web サーバにログインするために必要な Siebel クライアントのパスワード。
SERVER_LIST	Siebel Web サーバ・マシンの名前。選択した Siebel Web サーバを使用して、サーバ選択ページを表示します。[サーバ]ドロップダウン・メニューを使用して、Siebel Web サーバが実行されているサーバを選択します。
サイレント・デプロイメント	<p>テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、< SiteScope のルート・ディレクトリ> \logs\silent_deployment.log に記録されます。</p> <p>標準設定値 : 選択されていない</p>
リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証	<p>テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。</p> <p>注 : このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。</p> <p>標準設定値 : 選択されている</p>

第 68 章

Solaris Host ソリューション・テンプレート

本章の内容

概念

- [1046ページ「Solaris Host ソリューションの概要」](#)

タスク

- [1047ページ「Solaris Host ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」](#)

参照情報

- [1048ページ「\[Solaris Host ソリューション テンプレート\] ページ」](#)

Solaris Host ソリューションの概要

Solaris Host ソリューション・テンプレートは、Solaris ホストの状況、可用性、パフォーマンスをテストする標準設定の測定値で設定された、モニタの収集のデプロイに使用できるテンプレートです。このテンプレートは、SiteScope でサポートされているバージョンの Solaris をサポートしています。詳細については、HP SiteScope デプロイメント・ガイド の「システム要件」を参照してください。

UNIX リソース・モニタの場合、監視対象サーバの 3 つの異なる測定値のデータが表示される、サーバ中心のレポートを作成できます。

ヒント: 必要なモニタおよび測定値があらかじめ設定されているため、UNIX リソース・モニタを作成する場合はソリューション・テンプレートを使用することをお勧めします。サーバ中心のレポートの生成の詳細については、[1104 ページ「サーバ中心のレポートの生成」](#)を参照してください。

Solaris Host ソリューション・テンプレートを使用して、Solaris オペレーティング・システムを包括的に監視できます。SiteScope ユーザや IT 組織がアプリケーションに精通している必要はありません。また、さまざまなパフォーマンス・モニタの設定やデプロイの時間が短縮し、パフォーマンスのボトルネック(リアルタイムおよび長期間)の特定が容易になります。さらに、実運用システムにはほとんど負荷がかかりません。

注:

- Solaris Host ソリューション・テンプレートを使用するには、適切な SiteScope オプション・ライセンスが必要です。ソリューション・ライセンスの詳細については、HP の営業担当にお問い合わせください。
- Solaris Host ソリューションの設定の詳細については、『SiteScope Operating System Host Best Practices』を参照してください。このドキュメントは、<SiteScope のルート・ディレクトリ\sisdocs\pdfs\SiteScope_OS_Best_Practices.pdf にあります。このドキュメントはパスワードで保護されています。パスワードは、オペレーティング・システムのホスト・ソリューション・ライセンス・キーとともに HP から提供されます。

ソリューション・テンプレート・モニタ

Solaris Host ソリューション・テンプレートでは、Solaris のパフォーマンスと状況の次の側面を対象とするモニタをデプロイします。

- CPU の状態と使用率の詳細
- メモリの状態と使用率の詳細
- ファイル・システムの状態と使用率の詳細

Solaris Host ソリューション・テンプレートのデプロイ方法

このタスクでは、Solaris Host ソリューション・テンプレートのサーバ環境を設定し、変数を入力する手順について説明します。

注: Solaris Host ソリューション・テンプレートでは、各監視対象ホストの UNIX リソース・モニタをデプロイします。これは、サーバ中心のレポートをサポートするために必要となる補足モニタです。

1. 前提条件

- SiteScope サーバは、監視対象 Solaris ホストに接続する必要があります。
- 対象サーバを UNIX リモート・マシンとして SiteScope に追加し、UNIX リモート・テストにパスする必要があります([リモート サーバ] > [UNIX リモート サーバ])。ユーザ・インタフェースの詳細については、541ページ「[新規 UNIX リモート サーバ]/[UNIX リモート サーバの編集]ダイアログ・ボックス」を参照してください。

注:

- サポートされている Solaris オペレーティング・システムを実行している SiteScope サーバ自体を監視することもできます。
- このテンプレートは、SiteScope でサポートされているバージョンの Solaris をサポートしています。詳細については、HP SiteScope デプロイメント・ガイドの「システム要件」を参照してください。

2. ソリューション・テンプレートのデプロイ

ソリューション・テンプレートのデプロイに関連する手順の詳細については、932ページ「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」を参照してください。

3. ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力(ユーザ・インタフェース・デプロイメント用のみ)

Solaris Host ソリューション・テンプレートの[デプロイメント値]ページの項目を入力します。ユーザ・インタフェースの詳細については、1048ページ「[Solaris Host ソリューション テンプレート]ページ」を参照してください。

[Solaris Host ソリューション テンプレート] ページ

このページでは、Solaris ソリューション・テンプレートをデプロイできます。

アクセス方法	[テンプレート] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、[ソリューション テンプレート] を展開して [Solaris Host] を選択します。
関連タスク	932 ページ「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none">1045 ページ「Solaris Host ソリューション・テンプレート」88 ページ「テンプレート・ツリー」

メイン設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
SERVER_LIST	監視するサーバの名前。監視対象サーバがリストにない場合、サーバへの接続プロファイルを定義する必要があります。UNIX 接続プロファイルを作成する手順については、531 ページ「リモート UNIX サーバを監視するための SiteScope の設定方法」を参照してください。
サイレント・デプロイメント	テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、< SiteScope のルート・ディレクトリ > \logs\silent_deployment.log に記録されます。 標準設定値：選択されていない
リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証	テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。 注：このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。 標準設定値：選択されている

第 69 章

VMware キャパシティ管理ソリューション・テンプレート

本章の内容

概念

- 1050ページ「VMware キャパシティ管理ソリューションの概要」

タスク

- 1053ページ「VMware キャパシティ管理ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」

参照情報

- 1054ページ「[VMware キャパシティ管理ソリューション・テンプレート] ページ」

VMware キャパシティ管理ソリューションの概要

VMware キャパシティ管理ソリューション・テンプレートを使用して、SiteScope で VMware モニタからデータを収集して、HP Operations エージェント上のデータ・ストアにデータを報告できます。このデータは、この後、サポートされている各種レポート製品 (たとえば、HP の容量管理ソリューションである HP Service Health Optimizer(SHO)、および HP のサービス中心クロス・ドメイン・レポート・ソリューションである Service Health Reporter(SHR)) で使用できます。

キャパシティ管理ソリューション・テンプレートは包括的な監視を提供します。SiteScope ユーザまたは IT 組織にアプリケーションの専門知識は必要ありません。また、モニタの設定やデプロイの時間が短縮し、パフォーマンスのボトルネック(リアルタイムおよび長期間)の特定が容易になります。さらに、実運用システムにはほとんど負荷がかかりません。

注: キャパシティ管理ソリューション・テンプレートを使用するには、VMware ホスト・ソリューション・テンプレート・オプション・ライセンスが必要です。ソリューション・ライセンスの詳細については、HP の営業担当にお問い合わせください。

ソリューション・テンプレート・モニタ

VMware キャパシティ管理ソリューションは、次のテンプレートから構成されます。

- 1050ページ「VMware データストア・テンプレート」
- 1050ページ「VMware ホスト・テンプレート」
- 1051ページ「VMware リソース・プール・テンプレート」
- 1051ページ「VMware 仮想マシン・テンプレート」

注: テンプレート・モニタは、しきい値設定で設定されていません。これは、レポート製品には生データとポログだけが必要だからです。

VMware データストア・テンプレート

VMware データストア・テンプレートは VMware データストア・モニタを使用して、VMware データセンター内の VMware データストア仮想マシン(VM)上のパフォーマンス関連のリソース(接続性、容量、空き容量、スナップショット・サイズ)を監視します。

テンプレートをデプロイするときに指定する必要のあるテンプレート変数は、connection_link(VMware データストアの URL)、username(ホスト表示権限を持つ VMware データストア管理者の)、password(VMware データストアの)、vc_name(VMware データストア名)です。そして、テンプレート・デプロイメント時に「リモート サーバでモニタ プロパティを検証」チェック・ボックスを選択します。

ユーザ・インタフェースの詳細については、1054ページ「VMware データストア・デプロイメント値」を参照してください。

VMware ホスト・テンプレート

VMware ホスト・テンプレートでは、VMware ホスト・モニタを使用してホストのパフォーマンスと設定測定値を監視します。このテンプレートは、ホストと1対1に対応しており、すべてのホストに対してデプロイさせます。

テンプレートは、次のモニタなどから構成されます。

- VMware ホスト CPU モニタ
- VMware ホスト・メモリ・モニタ
- VMware ホスト・ストレージ・モニタ
- VMware ホスト・ネットワーク・モニタ
- VMware ホスト状態モニタ

注: これらのモニタの内蔵カウンタは、VMware ホスト・ソリューションのものと同じカウンタではありません。

テンプレートをデプロイするときに指定する必要のあるテンプレート変数は、Host name, connection_link(vCenter または ホスト URL), username(vCenter またはホスト表示権限を持つホスト・ユーザー名), password(vCenter またはホスト・パスワード), is vCenter(vCenter の場合 true, ホストの場合 false)です。また、テンプレートのデプロイメント時に[リモート サーバでモニタプロパティを検証]チェックボックスを選択します。

ユーザ・インタフェースの詳細については、[1054ページ「VMware ホスト・デプロイメント値」](#)を参照してください。

VMware ホストの各モニタは、BSM への次のトポロジのレポートも実行します。

- クラスタ -> ホスト
- データセンター -> ホスト
- データセンター -> クラスタ

VMware リソース・プール・テンプレート

リソース・プール・テンプレートでは、VMware パフォーマンス・モニタを使用して、リソース・プールのパフォーマンスと設定測定値を監視します。このテンプレートは、プールと1対1に対応しており、すべてのリソース・プールに対してデプロイさせます。

テンプレートをデプロイするときに指定する必要のあるテンプレート変数は、resource pool name, vCenter url, username(vCenter またはリソース・プール表示権限を持つホスト・ユーザー名), password(vCenter パスワード)です。また、テンプレートのデプロイメント時に[リモート サーバでモニタプロパティを検証]チェックボックスを選択します。

ユーザ・インタフェースの詳細については、[1055ページ「VMware リソース・プール・デプロイメント値」](#)を参照してください。

VMware パフォーマンス・モニタは、BSM への次のトポロジのレポートも実行します。

- クラスタ -> リソース・プール
- ESX ホスト -> VM
- クラスタ -> VM
- クラスタ -> リソース・プールから VM

VMware 仮想マシン・テンプレート

VM テンプレートでは、VMware パフォーマンス・モニタを使用して、VM のパフォーマンスと設定測定値を監視します。このテンプレートは、VM と1対1に対応しており、すべてのVMに対してデプロイさせます。

テンプレートをデプロイするときに指定する必要のあるテンプレート変数は、vm(VM 名)、vCenter URL、username(VM 表示権限を持つ vCenter ユーザ名)、password(vCenter パスワード)です。

ユーザ・インタフェースの詳細については、[1056 ページ「VMware バーチャル・マシン・デプロイメント値」](#)を参照してください。

注: テンプレートのデプロイメント時には[リモート サーバでモニタ プロパティを検証]チェックボックスをクリアすることをお勧めします。このオプションをクリアすると、サーバを接続しなくてもモニタがデプロイされ、したがって、VM の電源入切時にテンプレートのデプロイメントが可能となります。このオプションが選択されると(標準設定)、電源が投入されていない VM にはデプロイメントはできません。

VMware キャパシティ管理ソリューション・テンプレートのデプロイ方法

このタスクでは、VMware キャパシティ管理ソリューション・テンプレートの変数を入力する手順について説明します。

1. ソリューション・テンプレートのデプロイ

ソリューション・テンプレートのデプロイに関連する手順の詳細については、932ページ「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」を参照してください。

注: VMware ホスト・ソリューション・テンプレートを使用するための VMware ホスト・ソリューション・テンプレート・オプション・ライセンスを必要とします。

ヒント:

- CSV ファイルを使用してソリューション・テンプレートをデプロイすることをお勧めします。これは、ユーザ・インタフェースでデプロイメントごとに変数値を手動で入力しなくても、複数のデプロイメントを1回で実行できるからです。
- ファイル・オプションへの vSphere クライアント・エクスポートを使用して VMware キャパシティ管理テンプレート用の CSV ファイルを作成できます([**ファイル**] > [**エクスポート**] > [**エクスポート リスト**])。この方法で、すべての VM 名、リソース・プール名、ホスト名を CSV ファイルにエクスポートできます。ファイルの作成後、ファイルを編集し、vCenter URL、ユーザ名、パスワードなどのテンプレート変数を追加できます。
- CSV ファイルを使用したデプロイの詳細については、880ページ「CSV ファイルを使用したテンプレートのデプロイ方法」を参照してください。

2. ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力(ユーザ・インタフェース・デプロイメント用のみ)

VMware キャパシティ管理ソリューション・テンプレートの[デプロイメント値]ページの項目を入力します(VMware データストア、VMware ホスト、VMware リソース・プール、VMware 仮想マシン)。ユーザ・インタフェースの詳細については、1054ページ「[VMware キャパシティ管理ソリューション・テンプレート] ページ」を参照してください。

ヒント: テンプレートのデプロイメント時には[リモート サーバでモニタ プロパティを検証]チェックボックスをクリアすることをお勧めします。このオプションをクリアすると、サーバを接続しなくてもモニタがデプロイされ、したがって、VM の電源入切時にテンプレートのデプロイメントが可能となります。このオプションが選択されると(標準設定)、電源が投入されていない VM にはデプロイメントはできません。

[VMware キャパシティ管理ソリューション・テンプレート] ページ

このページでは、SiteScope VMware キャパシティ管理ソリューション・テンプレートをデプロイできます。

アクセス方法	[テンプレート]コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、[ソリューション テンプレート]を展開し、必要な VMware キャパシティ管理ソリューション・テンプレートを選択します(VMware データストア、VMware ホスト、VMware リソース・プール、VMware 仮想マシン)。
関連タスク	932ページ「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none">1049ページ「VMware キャパシティ管理ソリューション・テンプレート」88ページ「テンプレート・ツリー」

VMware データストア・デプロイメント値

VMware データストア・テンプレートは VMware データストア・モニタを使用して、VMware データセンター内の VMware データストア仮想マシン(VM)上のパフォーマンス関連のリソース(接続性、容量、空き容量、スナップショット・サイズ)を監視します。

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
connection_link	監視する VMware データストアの URL。
vc_name	監視する VMware データストアの名前。
username	ホスト表示権限を持つ VMware データストア管理者のユーザ名。
password	VMware データストアのパスワード。
サイレント・デプロイメント	テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、< SiteScope のルート・ディレクトリ> \logs\silent_deployment.log に記録されます。 標準設定値：選択されていない
リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証	テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうか検証されます。 注：このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。 標準設定値：選択されている

VMware ホスト・デプロイメント値

VMware ホスト・テンプレートでは、VMware ホスト・モニタを使用してホストのパフォーマンスと設定測

定値を監視します。このテンプレートは、ホストと 1 対 1 に対応しており、すべてのホストに対してデプロイさせます。

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
host	監視する VMware ホストの名前。
connection_link	監視する vCenter またはホスト・サーバの URL。
username	VMware VirtualCenter またはホスト表示権限を持つホスト管理者のユーザ名。
password	VMware VirtualCenter またはホストのパスワード。
is vCenter	vCenter の場合 [true], ホストの場合 [false]を入力します。
サイレント・デプロイメント	<p>テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、< SiteScope のルート・ディレクトリ> \logs\silent_deployment.log に記録されます。</p> <p>標準設定値 :選択されていない</p>
リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証	<p>テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。</p> <p>注 :このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。</p> <p>標準設定値 :選択されている</p>

VMware リソース・プール・デプロイメント値

リソース・プール・テンプレートでは、VMware パフォーマンス・モニタを使用して、リソース・プールのパフォーマンスと設定測定値を監視します。このテンプレートは、プールと 1 対 1 に対応しており、すべてのリソース・プールに対してデプロイさせます。

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
resource_pool_name	監視するリソース・プールの名前。
vccenter_url	監視する vCenter の URL。
username	リソース・プール表示権限を持つ VMware vCenter の名前。
password	VMware vCenter のパスワード。

UI 要素	説明
サイレント・デプロイメント	<p>テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、< SiteScope のルート・ディレクトリ> \logs\silent_deployment.log に記録されます。</p> <p>標準設定値 : 選択されていない</p>
リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証	<p>テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。このオプションは、必ずテンプレートのデプロイメント時に選択します。</p> <p>注 : このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。</p> <p>標準設定値 : 選択されている</p>

VMware バーチャル・マシン・デプロイメント値

VM テンプレートでは、VMware パフォーマンス・モニタを使用して、VM のパフォーマンスと設定測定値を監視します。このテンプレートは、VM と 1 対 1 に対応しており、すべての VM に対してデプロイさせます。

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
vm	監視する VM の名前。
vccenter_url	監視する vCenter の URL。
username	VM 表示権限を持つ VMware vCenter の名前。
password	VMware vCenter のパスワード。
サイレント・デプロイメント	<p>テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、< SiteScope のルート・ディレクトリ> \logs\silent_deployment.log に記録されます。</p> <p>標準設定値 : 選択されていない</p>

UI 要素	説明
リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証	<p>テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。</p> <p>注 :このオプションは、テンプレートのデプロイメント時にはクリアすることをお勧めします。このオプションをクリアすると、サーバを接続しなくてもモニタがデプロイされ、したがって、VM の電源入切時にテンプレートのデプロイメントが可能となります。このオプションが選択されると(標準設定)、電源が投入されていない VM にはデプロイメントはできません。</p> <p>標準設定値 :選択されている</p>

第70章

VMware Host ソリューション・テンプレート

本章の内容

概念

- [1059ページ「VMware Host ソリューションの概要」](#)

タスク

- [1061ページ「VMware Host ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」](#)

参照情報

- [1062ページ「\[VMware Host ソリューション テンプレート\] ページ」](#)

VMware Host ソリューションの概要

VMware ホスト・サーバの異なる側面を監視するために VMware Host ソリューション・テンプレートを使用できます。これには、VMware ホスト・サーバおよびそのゲスト仮想マシンの CPU、メモリ、ネットワーク、状態、およびストレージに関連するカウンタの監視が含まれます。

VMware Host ソリューション・テンプレートでは、特定の VMware VirtualCenter に対して一連のモニタがデプロイされます。これらのモニタは、VMware Host の監視のベスト・プラクティスを網羅しています。このテンプレートには、VMware ホスト状態、VMware ホスト CPU、VMware ホスト・メモリ、VMware ホスト・ストレージ、および VMware ホスト・ネットワーク・モニタが含まれます。

VMware Host ソリューション・テンプレートは包括的な監視を提供します。SiteScope ユーザまたは IT 組織にアプリケーションの専門知識は必要ありません。また、モニタの設定やデプロイの時間が短縮し、パフォーマンスのボトルネック(リアルタイムおよび長期間)の特定が容易になります。さらに、実運用システムにはほとんど負荷がかかりません。

このテンプレートがサポートするものは次のとおりです。

- VMware VirtualCenter 2.x
- VMware ESX 3.x, 4.0, 4.1
- VMware ESXi 3.5, 4.0, 5.0
- VMware ESX 2.5 via VirtualCenter 2.x
- VMware ESX 3.x via VirtualCenter 3.x
- VMware vCenter Server 4.0, 4.1, 5

注:

- VMware Host ソリューション・テンプレートを使用するには、適切な SiteScope オプション・ライセンスが必要です。ソリューション・ライセンスの詳細については、HP の営業担当にお問い合わせください。
- VMware Host ソリューションの詳細は、『SiteScope VMware Host Best Practices』ドキュメントを参照してください。このドキュメントは SiteScope インストールに含まれており、<SiteScope ルート・ディレクトリ>\sisdocs\pdfs\SiteScope_VMware_Host_Best_Practices.pdf にあります。このドキュメントはパスワードで保護されています。パスワードは、VMware Host ソリューション・ライセンス・キーとともに HP から提供されます。

ソリューション・テンプレート・モニタ

VMware Host ソリューション・テンプレートでは、VMware Host パフォーマンスの次の側面を対象とするモニタがデプロイされます。

- VMware ホスト CPU
- VMware ホスト・メモリ
- VMware ホスト・ネットワーク

- VMware ホスト・ストレージ
- VMware ホスト状態

VMware Host ソリューション・テンプレートのデプロイ方法

このタスクでは、VMware Host ソリューション・テンプレートの変数を入力する手順について説明します。

1. ソリューション・テンプレートのデプロイ

ソリューション・テンプレートのデプロイに関連する手順の詳細については、[932ページ「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」](#)を参照してください。

ヒント:

- VMware ホスト・ソリューション・テンプレートでは、< vCenter 経由 > と < ESX で直接 > の 2 つの方法で ESX ホストを監視できます。vCenter マシンに対する負荷を抑えるために ESX ホストを直接監視することをお勧めします。
- CSV ファイルを使用してソリューション・テンプレートをデプロイすることをお勧めします。これは、ユーザ・インタフェースでデプロイメントごとに変数値を手動で入力しなくても、複数のデプロイメントを 1 回で実行できるからです。CSV ファイルを使用したデプロイの詳細については、[880ページ「CSV ファイルを使用したテンプレートのデプロイ方法」](#)を参照してください。

注: 参照可能なモニタがテンプレートにデプロイされている場合、選択したパターンに一致するカウンタ数は、< SiteScope ルート・ディレクトリ > \groups\master.config ファイルの `_maxCountersForRegexMatch` パラメータ(これは、参照可能なモニタが持つことができるカウンタ数を制限する `_browsableContentMaxCounters` パラメータに追加されている)によって制限されます。デプロイの間、パターンに一致するカウンタ数がこの値を超えると、この値までのカウンタ数だけが保存されます。これらの両パラメータに同じ値を使用することをお勧めします(これらの両パラメータの標準設定値は 1000 です)。

2. ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力(ユーザ・インタフェース・デプロイメント用のみ)

VMware Host ソリューション・テンプレートの[デプロイメント値]ページの項目を入力します。ユーザ・インタフェースの詳細については、[1062ページ「\[VMware Host ソリューション テンプレート\] ページ」](#)を参照してください。

[VMware Host ソリューション テンプレート] ページ

このページでは、SiteScope VMware Host ソリューション・テンプレートをデプロイできます。

アクセス方法	[テンプレート] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、[ソリューション テンプレート] を展開し、必要な VMware Host ソリューション・テンプレートを選択します。
重要な情報	VMware ホスト・ソリューション・テンプレートでは、2 つの方法で ESX ホストを監視できます：< vCenter 経由 > と < ESX で直接 > vCenter マシンに対する負荷を抑えるために ESX ホストを直接監視することをお勧めします。
関連タスク	932 ページ「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none">• 1058 ページ「VMware Host ソリューション・テンプレート」• 88 ページ「テンプレート・ツリー」

メイン設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
VirtualCenter URL	監視するサーバの VMware VirtualCenter インフラストラクチャの URL。
User name	VMware vCenter サービス管理者のユーザ名。
Password	VMware VirtualCenter サービス管理者のパスワード。
Host	監視する VMware ホスト・サーバの名前。
サイレント・デプロイメント	<p>テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、< SiteScope のルート・ディレクトリ > \logs\silent_deployment.log に記録されます。</p> <p>標準設定値：選択されていない</p>
リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証	<p>テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。このオプションをクリアすると、サーバに接続しなくてもモニタがデプロイされ、したがって、VM の電源入切時にテンプレートのデプロイメントが可能となります。このオプションが選択されると(標準設定)、電源が投入されていない VM にはデプロイメントはできません。</p> <p>注：このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。</p> <p>標準設定値：選択されている</p>

第71章

WebLogic ソリューション・テンプレート

本章の内容

概念

- [1064ページ「WebLogic ソリューションの概要」](#)

タスク

- [1065ページ「WebLogic ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」](#)

参照情報

- [1066ページ「監視対象のWebLogic モジュールの選択」](#)
- [1067ページ「\[WebLogic ソリューション・テンプレート\] ページ」](#)

WebLogic ソリューションの概要

WebLogic ソリューション・テンプレートを使用すると、標準設定の測定値が設定された一連の WebLogic モニタをデプロイできます。このモニタは、WebLogic アプリケーション・サーバとデプロイしたアプリケーションおよびコンポーネントの状況、可用性、パフォーマンスをテストします。デプロイしたモニタは、サーバ全体の統計(メモリ使用率など)と、個々の J2EE コンポーネントに固有の測定値(特定の EJB のアクティブ化とパージングの数など)をチェックします。

WebLogic ソリューションは、WebLogic 6.x, 7.x, 8.x, 9.x, 10.x サーバからの統計の監視に使用します。このソリューションは、重要なアプリケーション・サーバ測定値を監視する複数のグループを標準設定で自動的に作成しますが、ユーザが監視可能な個々のコンポーネントのすべてまたは一部を選択できるユーザ・インタフェースも備えています。

WebLogic ソリューション・モニタのデプロイメント・プロセスは、高度なカスタマイズが可能で、ユーザがアプリケーション・サーバ上の特定の J2EE コンポーネントを選択して SiteScope でアクティブに監視できます。

WebLogic ソリューション・テンプレートを使用して、WebLogic を包括的に監視できます。SiteScope ユーザや IT 組織が WebLogic の専門家である必要はありません。また、モニタの設定やデプロイの時間が短縮し、パフォーマンスのボトルネック(リアルタイムおよび長期間)の特定が容易になります。さらに、実運用システムにはほとんど負荷がかかりません。

注:

- WebLogic ソリューション・テンプレートを使用するには、適切な SiteScope オプション・ライセンスが必要です。ソリューション・ライセンスの詳細については、HP の営業担当にお問い合わせください。
- WebLogic ソリューションの詳細は、『SiteScope WebLogic Best Practices』のドキュメントを参照してください。このドキュメントは SiteScope インストールに含まれており、<SiteScope ルート・ディレクトリ>\sisdocs\pdfs\SiteScope_WebLogic_Best_Practices.pdf にあります。このドキュメントはパスワードで保護されています。パスワードは、WebLogic ソリューション・ライセンス・キーとともに HP から提供されます。

ソリューション・テンプレート・モニタ

WebLogic ソリューション・テンプレートは、WebLogic のパフォーマンスと状況について次の側面を対象とするモニタをデプロイします。

- **サーバ・パフォーマンス統計**：このカテゴリは、WebLogic アプリケーション・サーバの管理インタフェースを介して公開されるサーバ全体の一連のリソースを参照します。
- **アプリケーション・パフォーマンス統計**：デプロイしたアプリケーション、EJB、Web アプリケーション、サーブレットのすべての測定値を WebLogic ソリューションを介して監視できます。モニタの自動デプロイ先となる J2EE コンポーネントは、ユーザが選択します。WebLogic ベスト・プラクティスに基づいた一連の測定値が、選択した J2EE コンポーネントごとに監視されます。
- **WebLogic ソリューションの測定値**：監視可能なコンポーネントのリストについては、『SiteScope WebLogic Best Practices』ドキュメントを参照してください。

WebLogic ソリューション・テンプレートのデプロイ方法

このタスクでは、WebLogic ソリューション・テンプレートのサーバ環境を設定し、変数を入力する手順について説明します。

1. 前提条件

WebLogic ソリューション・テンプレートは、ユーザ・インタフェースから選択したモジュールごとに WebLogic アプリケーション・サーバ・モニタをデプロイします。このモニタは、Java JMX インタフェースを使用して WebLogic サーバのランタイム MBean にアクセスします。MBean は、パフォーマンス測定値を保持するコンテナです。SiteScope が MBean を監視できるようにするには、WebLogic サーバに特定の権限の設定が必要になる場合があります。SiteScope モニタ用の WebLogic サーバへのアクセス設定の概要については、『HP SiteScope Monitor Reference』の「[WebLogic Application Server Monitor](#)」を参照してください。

2. ソリューション・テンプレートのデプロイ

ソリューション・テンプレートのデプロイに関連する手順の詳細については、932ページ「[SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法](#)」を参照してください。

3. ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力(ユーザ・インタフェース・デプロイメント用のみ)

WebLogic ソリューション・テンプレートの[デプロイメント値]ページで各項目を入力します。ユーザ・インタフェースの詳細については、1067ページ「[\[WebLogic ソリューション・テンプレート\] ページ](#)」を参照してください。

4. 監視対象の WebLogic モジュールの選択

EJB 監視のタイプごとに監視される測定値については、1066ページ「[監視対象の WebLogic モジュールの選択](#)」を参照してください。

監視対象の WebLogic モジュールの選択

WebLogic ソリューションには階層リストが表示され、そこからユーザが WebLogic モニタのデプロイ先とするモジュールを選択できます。このリストは次の 2 つのメイン・セクションに分類されています。

- サーバ単位のリソース
- アプリケーション別に編成される J2EE コンポーネント

これらのカテゴリのモジュールの中には、システムの重要なコンポーネントを表すため、標準設定で自動的に選択されるものがあります(アプリケーション・サーバの JVM 統計など)。それ以外のモジュールは、自動的に選択されません。このため、ユーザはこのソリューションのデプロイメントを、特定のアプリケーション、特定タイプの EJB、一連のサーブレットや Web アプリケーション、その他何らかのアプリケーション・サーバの側面に特化するようにカスタマイズできます。

このモジュールのリストのほとんどの部分は、直感的に編成されています。アプリケーション、EJB、Web アプリケーション、サーブレットの階層は、WebLogic 管理コンソールに表示されるこれらのエンティティの編成とよく似ています。ほとんどの場合、モジュールを選択すると、関連するすべての測定値を持つモニタが、WebLogic サーバの対応する部分にデプロイされます。ただし、監視対象の EJB を選択する場合、EJB は 3 つの測定値タイプ(プール、トランザクション、キャッシュ)に従って分類されています。これには次の 2 つの理由があります。(1)警告と編成を目的とする場合、WebLogic モニタ単位よりも特定の EJB の 1 つの側面を監視できる方が利便性が高く、(2)すべての EJB がこれら 3 つの測定値タイプのすべてを使用できるとは限りません。

次に、EJB 監視のタイプごとに監視される測定値について簡単に説明します。

- **EJB 単位のトランザクション統計** : この EJB モニタのカテゴリには、EJB に対して実行されたトランザクションに関する測定値が含まれます。測定値には、ロールバックされたトランザクション数、タイムアウトしたトランザクション数、正常に確定されたトランザクション数などがあります。
- **EJB 単位のプール統計** : この EJB モニタのカテゴリには、EJB のプールに関連する測定値が含まれます。この見出しの下にある EJB をユーザが選択すると、プールから Bean インスタンスを取得しようとして失敗した回数、プール内で現在利用可能なインスタンス数、現在インスタンスを待機中のスレッド数、アプリケーション以外の例外が原因で Bean インスタンスが破棄された回数など、多くの有用な測定値が監視されます。
- **EJB 単位のキャッシュ統計** : キャッシュ統計には、特定の EJB のキャッシュに関する測定値が含まれます。この見出しの下にある EJB を監視対象に選択すると、キャッシュ・ヒット数とキャッシュ不在数、EJB のアクティブ化数とパッシブ化数などの測定値が監視されます。

ポップアップ・ウィンドウでモジュールを選択し終わったら、[Module Selection] ウィンドウの下部までスクロールし、[Select Modules] ボタンをクリックします。これにより、ブラウザのメイン・ウィンドウが更新され、選択したモジュールのリストが表示されます。選択したモジュールを確認し、モニタの作成対象外にするモジュールがあれば削除します。

ブラウザのメイン・ウィンドウに表示されている選択したモジュールのリストに問題がなければ、[送信] をクリックします。

[WebLogic ソリューション・テンプレート] ページ

このページでは, Oracle WebLogic 6.x, 7.x, 8.x, 9.x, 10.x アプリケーション・サーバを監視するための WebLogic ソリューション・テンプレートをデプロイできます。

アクセス方法	[テンプレート] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで, [ソリューション テンプレート] を展開し, 必要な WebLogic ソリューション・テンプレートを選択します。
関連タスク	932 ページ「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none">1063 ページ「WebLogic ソリューション・テンプレート」88 ページ「テンプレート・ツリー」

WebLogic 9.x-10.x

[メイン設定] には次の要素が含まれています。

UI 要素	詳細
WEBLOGIC_URL	WebLogic 9.x または 10.x アプリケーション・サーバの URL。 標準設定値 : service:jmx:rmi:///jndi/iiop://<ローカル・ホスト>:7001/weblogic.management.mbeanservers.runtime <ローカル・ホスト> は, WebLogic アプリケーション・サーバ 9.x または 10.x を実行するマシンの名前です。
Counters	このモニタでチェックするサーバのパフォーマンス・カウンタを表示します。[Get Counters] ボタンを使用してカウンタを選択します。
Get Counters	[Get Counters] ダイアログ・ボックスが開き, 監視対象のカウンタを選択できます。
サイレント・デプロイメント	テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され, SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより, テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は, <SiteScope のルート・ディレクトリ> \logs\silent_deployment.log に記録されます。 標準設定値 : 選択されていない
リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証	テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して, テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。 注 : このオプションを選択すると, リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。 標準設定値 : 選択されている

WebLogic 6.x, 7.x, 8.x

[メイン設定] には次の要素が含まれています。

UI 要素	詳細
WEBLOGIC_PORT	WebLogic サーバが応答するポート番号。 標準設定値: 7001
WEBLOGIC_PASSWORD	WebLogic サーバへのログインに必要なパスワード。
WEBLOGIC_USERNAME	WebLogic サーバへのログインに必要なユーザ名。
WEBLOGIC_SERVER	WebLogic が実行されているサーバの名前またはアドレス。
WEBLOGIC_TIMEOUT	データ要求が WebLogic サーバに到達するまで待機する秒数。 標準設定値: 180
WEBLOGIC_JAR_FILE	SiteScope マシンの <code>weblogic.jar</code> ファイルへの絶対パス。このファイルは、SiteScope サーバにインストールされている必要があり、WebLogic サーバからダウンロードできます。 例: <code>c:\bea\weblogic7\ebcc\lib\ext\weblogic.jar</code> 。
Counters	このモニタでチェックするサーバのパフォーマンス・カウンタを表示します。[Get Counters] ボタンを使用してカウンタを選択します。
Get Counters	[Get Counters] ダイアログ・ボックスが開き、監視対象のカウンタを選択できます。
サイレント・デプロイメント	テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、< SiteScope のルート・ディレクトリ > \logs\silent_deployment.log に記録されます。 標準設定値: 選択されていない
リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証	テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。 注: このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。 標準設定値: 選択されている

第72章

WebSphere ソリューション・テンプレート

本章の内容

概念

- [1070ページ「WebSphere ソリューションの概要」](#)

タスク

- [1071ページ「WebSphere ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」](#)

参照情報

- [1072ページ「\[WebSphere ソリューション・テンプレート\] ページ」](#)

WebSphere ソリューションの概要

WebSphere ソリューション・テンプレートを使用すると、標準設定の測定値が設定された一連の WebSphere モニタをデプロイできます。このモニタは、IBM WebSphere アプリケーション・サーバ 5.x, 6.x, 7.x, 8.x の可用性、サーバ統計、デプロイした J2EE コンポーネントをテストします。このソリューション・テンプレートを使用して、サーバ単位のリソースと測定値(スレッド・プールや JVM の測定値など)のモニタをデプロイできます。また、このソリューション・テンプレートを使用して、デプロイした EJB、Web アプリケーション、サーブレットのモニタも作成できます。

WebSphere ソリューション・モニタのデプロイメント・プロセスは、高度なカスタマイズが可能で、ユーザがアプリケーション・サーバの特定の J2EE コンポーネントを選択して SiteScope でアクティブに監視できます。

WebSphere ソリューション・テンプレートを使用して、WebSphere を包括的に監視できます。SiteScope ユーザや IT 組織が WebSphere の専門家である必要はありません。また、モニタの設定やデプロイの時間が短縮し、パフォーマンスのボトルネック(リアルタイムおよび長期間)の特定が容易になります。さらに、実運用システムにはほとんど負荷がかかりません。

注:

- WebSphere ソリューション・テンプレートを使用するには、適切な SiteScope オプション・ライセンスが必要です。ソリューション・ライセンスの詳細については、HP の営業担当にお問い合わせください。
- WebLogic ソリューションの詳細については、『SiteScope WebLogic Best Practices』ドキュメントを参照してください。このドキュメントは SiteScope インストールに含まれており、<SiteScope ルート・ディレクトリ>\sisdocs\pdfs\SiteScope_WebSphere_Best_Practices.pdf にあります。このドキュメントはパスワードで保護されています。パスワードは、WebSphere ソリューション・ライセンス・キーとともに HP から提供されます。

ソリューション・テンプレート・モニタ

WebSphere ソリューション・テンプレートは、WebSphere のパフォーマンスと状況について次の側面を対象とするモニタをデプロイします。

- **サーバ・パフォーマンス統計** : このカテゴリは、WebSphere アプリケーション・サーバの管理インタフェースを介して公開されるサーバ単位の一連のリソースを参照します。
- **アプリケーション・パフォーマンス統計** : デプロイしたアプリケーション、EJB、Web アプリケーション、サーブレットのすべての測定値を WebSphere ソリューションを介して監視できます。モニタの自動デプロイ先となる J2EE コンポーネントは、ユーザが選択します。WebSphere ベスト・プラクティスに基づいた一連の測定値が、選択した J2EE コンポーネントごとに監視されます。
- **WebSphere アプリケーション・サーバ・ソリューションの測定値** : 監視可能なコンポーネントのリストについては、『SiteScope WebSphere Best Practices』ドキュメントを参照してください。

WebSphere ソリューション・テンプレートのデプロイ方法

このタスクでは、WebSphere ソリューション・テンプレートのサーバ環境を設定し、変数を入力する手順について説明します。

1. 前提条件

WebSphere サーバ環境は、使用される環境に基づいて設定する必要があります。詳細については、『HP SiteScope Monitor Reference』の「[WebSphere Application Server Monitor](#)」を参照してください。

注: 標準設定では、WebSphere 6.x アプリケーション・サーバ・ソリューション・テンプレートは内部的な JVM メカニズムを使用します。そのため、このソリューション・テンプレートを使用する場合、内部 Java を使用するように監視環境を設定する必要があります。詳細については、「[How to configure the WebSphere 6.0x server environment using internal Java](#)」および「[How to configure the WebSphere 6.1x server environment using internal Java](#)」を参照してください。

2. ソリューション・テンプレートのデプロイ

ソリューション・テンプレートのデプロイに関連する手順の詳細については、932 ページ「[SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法](#)」を参照してください。

3. ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力(ユーザ・インタフェース・デプロイメント用のみ)

WebSphere ソリューション・テンプレートの[デプロイメント値]ページで各項目を入力します。ユーザ・インタフェースの詳細については、1072 ページ「[\[WebSphere ソリューション・テンプレート\] ページ](#)」を参照してください。

[WebSphere ソリューション・テンプレート] ページ

このページでは、IBM WebSphere アプリケーション・サーバ 5.x および 6.x を監視するための WebSphere ソリューション・テンプレートをデプロイできます。

アクセス方法	[テンプレート] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、[ソリューション テンプレート] を展開し、必要な WebSphere ソリューション・テンプレートを選択します。
関連タスク	932 ページ「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none">1069 ページ「WebSphere ソリューション・テンプレート」88 ページ「テンプレート・ツリー」

メイン設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
WEBSPPHERE_SERVER	WebSphere アプリケーションが実行されているサーバの名前。サーバ名の一部として UNC パスを示すために円記号 (\) を入力しないでください。
WEBSPPHERE_PORT	WebSphere サーバのポート番号。これは、WebSphere 5.x の SOAP ポートである必要があります。 標準設定値：8880
WEBSPPHERE_USER_NAME	SiteScope が WebSphere アプリケーション・サーバへのログオンに使用するユーザ名。 WebSphere 6.x では、ソリューション・テンプレートでグローバル・セキュリティはサポートされていません。つまり、任意のテキストを入力できますが、テキスト・ボックスを空白のままにすることはできません。グローバル・セキュリティの作業が必要な場合は、このテンプレートを完成させます。WebSphere モニタを編集し、[モニタ設定パネルで、グローバル・セキュリティの各ボックスを更新します([トラストストア]、[トラストストアのパスワード]、[キーストア]、[キーストアのパスワード])。
WEBSPPHERE_PASSWORD	SiteScope で WebSphere サーバへのログオンに使用するパスワード。 WebSphere 6.x では、ソリューション・テンプレートでグローバル・セキュリティはサポートされていません。つまり、任意のテキストを入力できますが、テキスト・ボックスを空白のままにすることはできません。グローバル・セキュリティの作業が必要な場合は、このテンプレートを完成させます。WebSphere モニタを編集し、[モニタ設定パネルで、グローバル・セキュリティの各ボックスを更新します([トラストストア]、[トラストストアのパスワード]、[キーストア]、[キーストアのパスワード])。

UI 要素	詳細
WEBSPPHERE_CLIENT_PROPERTIES_FILE	<p>クライアント・プロパティ・ファイル。</p> <p>標準設定値 : /properties/soap.client.props</p>
WEBSPPHERE_DIRECTORY	<p>WebSphere アプリケーション・サーバからの /java および /lib サブディレクトリが含まれる WebSphere ディレクトリへのパス。</p> <p>WebSphere 6.x では、このディレクトリには /profiles サブディレクトリも含まれている必要があります。このサブディレクトリには、グローバル・セキュリティに必要なキー・ストア・ファイルとトラスト・ストア・ファイルがすべて含まれています。/profiles サブディレクトリ内のサーバ・プロファイルは、default という名前にする必要があります。サーバ・プロファイルに別の名前が付いている場合は、名前を「default」に変更します。</p>
WEBSPPHERE_VERSION (WebSphere 6.x ソリューションのみ)	<p>WebSphere 6.x ソリューション・テンプレート (6.0x または 6.1x) を使用している場合、WebSphere のバージョンを選択します。</p>
WEBSPPHERE_USE_EXTERNAL_JVM	<p>外部 JVM を使用して監視が行えるようにします。標準設定では、WebSphere モニタは内部 JVM を使用します。外部 JVM は大量のリソースを消費し、起動に時間がかかる上、エラー処理が適切に行われません。</p> <p>注 : 外部 JVM を使用する場合は、証明書管理を介して追加される証明書は使用できません。</p> <p>標準設定値 : false</p>
Counters	<p>このモニタでチェックするサーバのパフォーマンス・カウンタを表示します。[Get Counters] ボタンを使用してカウンタを選択します。</p>
Get Counters	<p>[Get Counters] ダイアログ・ボックスが開き、監視対象のカウンタを選択できます。</p>
サイレント・デプロイメント	<p>テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、<SiteScope のルート・ディレクトリ> \logs\silent_deployment.log に記録されます。</p> <p>標準設定値 : 選択されていない</p>
リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証	<p>テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。</p> <p>注 : このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。</p> <p>標準設定値 : 選択されている</p>

第9部分

SiteScope ダッシュボード

第73章

SiteScope ダッシュボードを使った作業

本章の内容

概念

- 1076ページ「SiteScope ダッシュボードの概要」
- 1077ページ「ダッシュボード・フィルタの概要」
- 1078ページ「モニタの状態の確認」
- 1079ページ「SiteScope ツールへのアクセス」

タスク

- 1080ページ「SiteScope ダッシュボードのカスタマイズ方法」
- 1082ページ「SiteScope ダッシュボードのデータ分析方法」

参照情報

- 1085ページ「SiteScope ダッシュボードのユーザ・インタフェース」

SiteScope ダッシュボードの概要

SiteScope 監視では、システムの可用性とパフォーマンスが視覚的にリアルタイムに表示されます。SiteScope モニタを設定して、さまざまなインフラストラクチャ・コンポーネント (Web、アプリケーション、データベース、ファイアウォール・サーバなど) の測定値を収集します。次に、SiteScope ダッシュボードで表示するために状態と測定値が集計されます。

ダッシュボードは SiteScope モニタ・ツリー階層にリンクしています。ダッシュボードに表示されるデータは、モニタ・ツリーで選択したコンテキストを表しています。最上位レベルは、SiteScope ノードおよび適用可能なモニタ・グループです。[ダッシュボード] ビューに表示される最下位レベルの要素は、個々の SiteScope モニタとその測定値です。

ダッシュボードには、モニタ情報の表示をカスタマイズできる機能があります。この機能では、名前付きフィルタ設定を定義して、定義済みの条件に一致するデータのみを表示できます。また、さまざまなデータ表示オプションを選択することもできます。

ダッシュボードには、モニタ要素の階層の移動、モニタの手動実行、モニタの無効化、警告定義へのアクセスを行うために使用できるハイパーリンクやメニューもあります。

ダッシュボード・フィルタの概要

次の条件を使用して、モニタまたはグループをフィルタできます。

- 特定のテキスト文字列を含むモニタまたはグループの名前
- 特定のホストやサーバを監視するモニタまたはグループ
- エラーを報告するモニタまたはグループ
- 特定のテキスト文字列を含む測定値の結果

フィルタは主にモニタに適用されます。フィルタ条件は、グループ、警告、レポートには適用されません。ビュー設定を使用してほかの要素をフィルタできます。詳細については、[113ページ「SiteScope オブジェクトのフィルタ処理」](#)を参照してください。

フィルタはすべての[ダッシュボード]ビューに適用されます。つまり、フィルタ条件および選択したノードによっては、一部のモニタが表示されない可能性があります。通常、フィルタは[**子孫モニタをすべて表示**]ビュー・オプションとともに使用することが最適です。フィルタは、[ダッシュボード フィルタ]ウィンドウでフィルタ条件を変更またはリセットするまでアクティブな状態が維持されます。

ダッシュボード・フィルタは、SiteScope ツリー・フィルタとは異なります。ダッシュボード・フィルタまたは SiteScope ツリー・フィルタのいずれかを使用して、特定のモニタ・タイプのみが表示されるようにノードをフィルタできます。ただし、ダッシュボード・フィルタは、現在選択されているツリー・フィルタ設定の結果に適用されます。ツリー・フィルタ設定がアクティブな場合、SiteScope 環境にフィルタ条件に一致するモニタが存在していても、ダッシュボード・フィルタでこのモニタが検出されない可能性があります。

フィルタ設定を保存するには、フィルタ設定を定義して、ダッシュボードのお気に入りとしてビューを保存します。

ダッシュボード・フィルタの設定の詳細については、[1095ページ「\[ダッシュボード フィルタ\]ダイアログ・ボックス」](#)を参照してください。

モニタの状態の確認

確認機能を使用して、SiteScope によって検出されたシステムおよびネットワーク・インフラストラクチャの問題の解決を追跡できます。この機能を使用すると、問題が確認された時間、実行されたアクション、実行したユーザが SiteScope によって記録されます。

この機能では、モニタの警告を一時的に無効化することもできます。これは、問題に対処している間、警告の重複を回避する場合に便利です。また、複数のユーザが SiteScope を使用してシステムの可用性を管理する場合、確認機能を単純な問題のチケット・システムとして使用することもできます。

注: 確認機能は、[ダッシュボード]ビューでのみ使用できます。確認アイコンは、ダッシュボード [詳細ビュー]にのみ表示されます。


個々のモニタまたはモニタ・グループに確認を追加できます。モニタに追加された確認は、そのモニタにのみ適用されます。確認で選択した警告の無効化条件は、そのモニタ・インスタンスにのみ適用されます。グループを確認すると、確認の詳細と警告の無効化条件がグループ内のすべてのモニタに適用されます。グループに適用された確認は、グループのモニタごとに編集または削除できます。

モニタまたはグループに適用できる確認は 1 つのみです。これはいつでも適用できます。確認のコメントとインジケータは、該当の警告の無効化スケジュールの期限が切れても、削除されるまでインタフェースに表示されたままになります。

確認のデータおよびコメントは、SiteScope マシンのログ・ファイルに書き込まれます。確認を追加、編集、削除するたびに新しいログ・エントリが作成されます。問題のモニタまたはグループが確認されるか、確認済みの状態がクリアされると、確認ログでその履歴を表示できます。現在適用されている確認がない場合でも、項目の確認ログを表示できます。

[確認応答の追加]のユーザ・インタフェースの詳細については、[1093 ページ「\[グループ内のモニタを確認\]ダイアログ・ボックス」](#)を参照してください。

SiteScope ツールへのアクセス

SiteScope には、監視環境のテストに使用できる多数のツールがあります。これらのツールを使用して、監視対象となるシステムに照会し、アクションの詳細な結果を表示できます。これには、簡単なネットワーク接続のテストや、外部のデータベースまたはサービスにアクセスするためのログイン認証の検証などがあります。これらのツールは、ダッシュボード・ツールバーにあるモニタの[ツール]  ボタンをクリックして直接実行できます(特定のモニタの診断ツールが使用できる場合)。

利用可能な各種ツールの詳細については、[139ページ「SiteScope ツールの概要」](#)を参照してください。

注: [SiteScope ツール] オプションは、個々のモニタに対してのみ使用できます。

SiteScope ダッシュボードのカスタマイズ方法

このタスクでは、レイアウトやフィルタを設定して SiteScope ダッシュボードの表示および内容をカスタマイズする手順や、ビューをお気に入り保存到る手順について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- 1080 ページ「ダッシュボード・レイアウトの設定」
- 1080 ページ「ダッシュボード・フィルタの選択および設定 - オプション」
- 1081 ページ「お気に入りへのビューの保存」

1. ダッシュボード・レイアウトの設定

[ダッシュボードの設定] ダイアログ・ボックスの設定を使用して、グループおよびモニタの情報の表示をカスタマイズします。

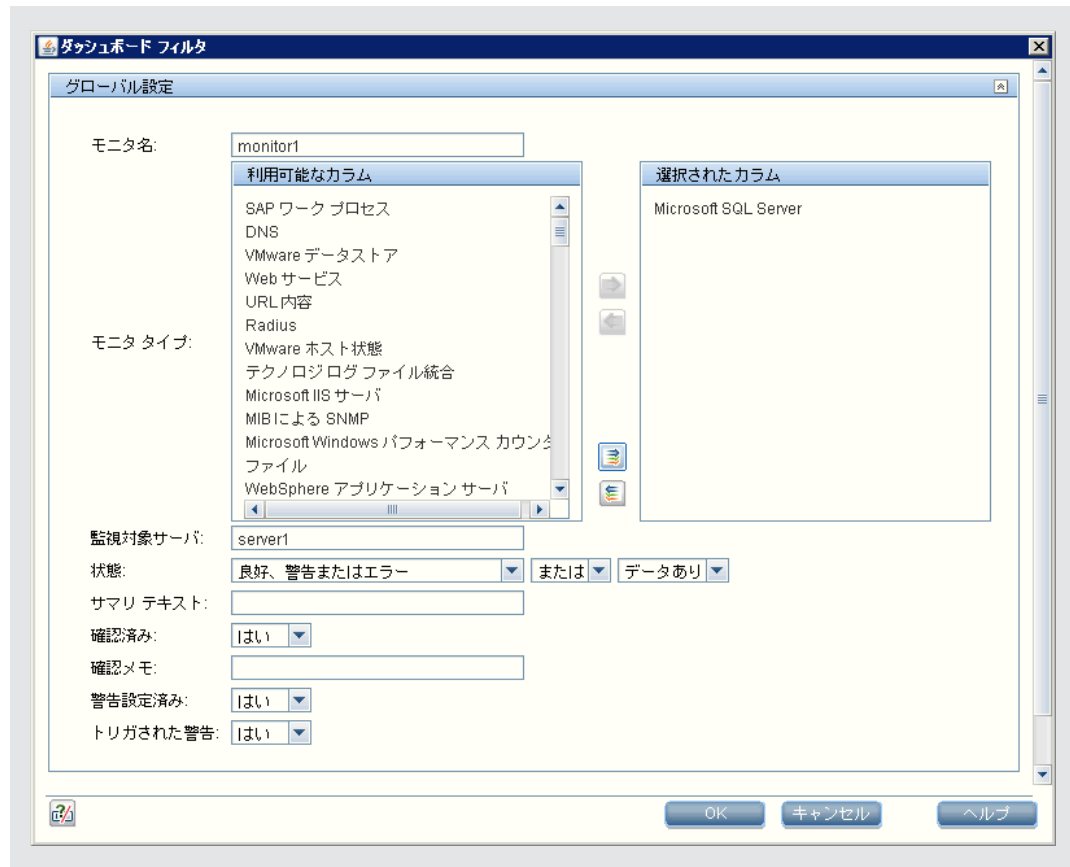
ユーザ・インタフェースの詳細については、1097 ページ「[ダッシュボードの設定] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

2. ダッシュボード・フィルタの選択および設定 - オプション


[ダッシュボード フィルタ] ダイアログ・ボックスにあるオプションを選択して、ダッシュボード・フィルタを設定します。

ユーザ・インタフェースの詳細については、1095 ページ「[ダッシュボード フィルタ] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

例：ダッシュボード・フィルタ



3. お気に入りへのビューの保存

ダッシュボード・フィルタおよびレイアウト設定を定義したら、**[お気に入りへの管理]**  ボタンの横の矢印をクリックして**[お気に入りへ保存]**を選択して、お気に入りリストで名前付きのお気に入りビューとして保存できます。

ユーザ・インターフェースの詳細については、1094ページ「**[ダッシュボードのお気に入りへ保存]**ダイアログ・ボックス」を参照してください。

SiteScope ダッシュボードのデータ分析方法

このタスクでは、SiteScope ダッシュボードでデータを分析する手順について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

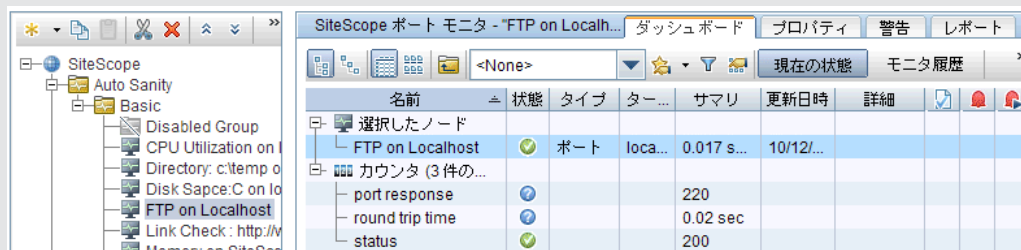
- 1082ページ「モニタや測定値の状態および可用性を表示するためのドリルダウン」
- 1082ページ「設定された警告および起動された警告の表示」
- 1083ページ「モニタの確認」
- 1083ページ「Microsoft Windows / UNIX サーバのリソースの監視」
- 1083ページ「モニタ履歴の表示」

1. モニタや測定値の状態および可用性を表示するためのドリルダウン

ダッシュボードの[現在の状態]ビューで SiteScope データを表示中に、モニタ・ツリーをドリルダウンしてモニタや測定値の状態および可用性を表示できます。

ユーザ・インターフェースの詳細については、1085ページ「SiteScope ダッシュボード - [現在の状態]ビュー」を参照してください。

例：モニタの測定値の状態と可用性



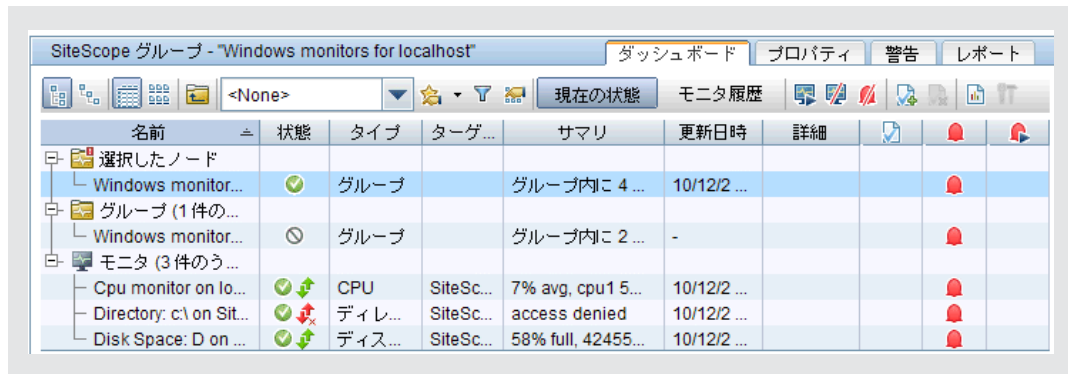
名前	状態	タイプ	ターゲット	サマリ	更新日時	詳細	アラート	履歴
選択したノード								
FTP on Localhost	OK	ポート	localhost	0.017 s...	10/12/...			
カウンタ (3 件の...)								
port response	OK			220				
round trip time	OK			0.02 sec				
status	OK			200				

2. 設定された警告および起動された警告の表示

設定された警告および起動された警告の列で警告のデータを表示できます。モニタに警告が設定されている場合、[設定された警告] アイコンをダブルクリックして設定された警告のリストを表示し、警告を選択して警告のプロパティを表示または編集できます。

ユーザ・インターフェースの詳細については、1085ページ「SiteScope ダッシュボード - [現在の状態]ビュー」を参照してください。

例：設定された警告

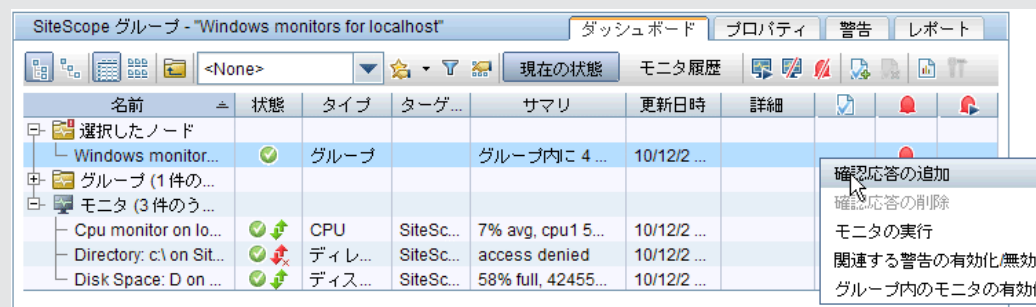


3. モニタの確認

モニタの状態を確認するには、[確認応答の追加] アイコンをクリックするか、コンテキスト・メニューから[確認応答の追加]を選択し、[グループ内のモニタを確認]ダイアログ・ボックスで詳細を入力します。

ユーザ・インタフェースの詳細については、1093ページ「[グループ内のモニタを確認]ダイアログ・ボックス」を参照してください。

例：[グループ内のモニタを確認]ダイアログ



4. Microsoft Windows / UNIX サーバのリソースの監視


Microsoft Windows リソース・モニタまたは UNIX リソース・モニタを作成して、Windows サーバまたは UNIX サーバを監視し、サーバ中心のレポートを生成できます。タスクの詳細については、1105ページ「サーバ中心のレポートの作成方法」を参照してください。

5. モニタ履歴の表示

[一般プリファレンス]でモニタ履歴を有効化および設定します。ユーザ・インタフェースの詳細については、644ページ「ダッシュボード・モニタ履歴表示オプション」を参照してください。

モニタ履歴を表示するには、SiteScope ダッシュボードの[モニタ履歴]ボタンをクリックします。ユーザ・インタフェースの詳細については、1091ページ「SiteScope ダッシュボード - [モニタ履歴]ビュー」を参照してください。

例：[モニタ履歴]ビュー



The screenshot shows the HP SiteScope dashboard interface. At the top, there is a title bar with the text "SiteScope グループ - 'Windows monitors for local...'" and several tabs: "ダッシュボード" (Dashboard), "プロパティ" (Properties), "警告" (Warnings), and "レポート" (Reports). Below the title bar, there is a toolbar with icons for various functions and a dropdown menu showing "<None>". To the right of the toolbar, there are buttons for "現在の状態" (Current Status), "モニタ履歴" (Monitor History), and a refresh icon. The main content area displays a table with the following data:

実行時間	名前	状態	サマリ
10/12/2 午後 7:20	Cpu monitor on loca...		0% avg, cpu1 0%, c...
10/12/2 午後 7:21	Disk Space: D on Si...		58% full, 42455MB f...
10/12/2 午後 7:21	Directory: c:\ on Site...		access denied

SiteScope ダッシュボードのユーザ・インタフェース

本項の内容

- 1085ページ「SiteScope ダッシュボード - [現在の状態]ビュー」
- 1091ページ「SiteScope ダッシュボード - [モニタ履歴]ビュー」
- 1093ページ「[グループ内のモニタを確認]ダイアログ・ボックス」
- 1094ページ「[ダッシュボードのお気に入り]に保存]ダイアログ・ボックス」
- 1094ページ「[ダッシュボードのお気に入り]の削除]ダイアログ・ボックス」
- 1095ページ「[ダッシュボード フィルタ]ダイアログ・ボックス」
- 1097ページ「[ダッシュボードの設定]ダイアログ・ボックス」
- 1099ページ「診断ツール」
- 1101ページ「[グループ内のモニタの有効化 / 無効化]ダイアログ・ボックス」






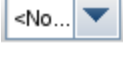



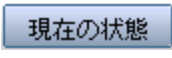
SiteScope ダッシュボード - [現在の状態]ビュー










SiteScope によって監視されているインフラストラクチャ要素の現在のパフォーマンス・データが表示され、フィルタの定義に使用する機能にアクセスできます。ダッシュボードには、モニタ・ツリーで強調表示されている要素またはパスに表示されている要素のグループおよびモニタのテーブルが表示されます。各グループまたはモニタのノードをダブルクリックして、子ノードおよびモニタに移動できます。





ダッシュボードでは、サーバ中心のレポート、事前に設定されたクイック・レポート、モニタの確認の状態、モニタ・ツール、SiteScope 状況ステータス、モニタ履歴情報にアクセスできます。また、モニタや警告を有効化/無効化することもできます。

アクセス方法	[モニタ]コンテキストを選択します。モニタ・ツリーでオブジェクトを選択し、右側の表示枠の[ダッシュボード]タブをクリックします。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> • 標準設定では、選択した要素の[ダッシュボード]テーブルに表示できるオブジェクトの最大数は 4000 で、[アイコンビュー]で表示できるアイコンの最大数は 700 です。これらの数を変更するには、[ダッシュボードの設定]ダイアログ・ボックスで値を変更します。ただし、標準設定を使用することをお勧めします。 • 選択した要素の行数が、[ダッシュボード]テーブルに表示できる最大数よりも多い場合、さらに限定的なツリー・フィルタを作成するか、ダッシュボード・フィルタを設定してください。 • Ctrl+C ショートカットを使用してダッシュボードの中の選択した行から詳細をコピーできます。
関連タスク	<ul style="list-style-type: none"> • 1080ページ「SiteScope ダッシュボードのカスタマイズ方法」 • 1082ページ「SiteScope ダッシュボードのデータ分析方法」
関連情報	1076ページ「SiteScope ダッシュボードの概要」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。










UI 要素	説明
	子グループと子モニタを表示 : 選択したノードの直接の子である要素のみが表示されます。グループおよびモニタの状態情報領域に、サブグループとモニタが個別のセクションで表示されます。
	すべての子孫モニタを表示 : 選択したノードのすべての子孫モニタが表示されます。[アイコンビュー] オプションが選択されている場合、子孫モニタのアイコンと名前のみが表示されます。
	詳細ビュー : グループおよびモニタが表形式のリストとして表示されます。表の各行には要素の名前や状態などの情報が配置されます。
	アイコン・ビュー : グループおよびモニタが一連の状態アイコンとして表示されます。アイコンの下には要素の名前が表示されます。
	上へ : モニタ・ツリーの 1 つ上のレベルに移動します。このオプションは、SiteScope(ツリーの最上位レベル)では使用できません。
	<p>お気に入りボックスには、ダッシュボード・フィルタとレイアウト設定の既存のお気に入りビューのドロップダウン・リストがあります。[現在の状態] ビューまたは[モニタ履歴] ビューで表示するビューを選択できます。</p> <p>注 : お気に入りフィルタはモニタ・レベルで機能するため、グループはフィルタされません。[すべての子孫モニタを表示] ビューで作業している場合、フィルタに一致していない状態のグループが表示されることがあります。フィルタのモニタのみを表示するには、[すべての子孫モニタを表示] ビューを代わりに使用します。</p> <p>標準設定値 : <なし></p>
	<p>お気に入りの管理 : 矢印をクリックして、次のオプションを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> お気に入りに保存 : [ダッシュボードのお気に入りに保存] ダイアログ・ボックスが開き、現在のダッシュボード・フィルタとレイアウト設定をお気に入りにビューとして保存できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、1094 ページ「[ダッシュボードのお気に入りに保存] ダイアログ・ボックス」を参照してください。 お気に入りを削除 : [ダッシュボードのお気に入りの削除] ダイアログ・ボックスが開き、既存のお気に入りビューを削除できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、1094 ページ「[ダッシュボードのお気に入りの削除] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
	ダッシュボード・フィルタ : [ダッシュボード フィルタ] ダイアログ・ボックスが開きます。ユーザ・インタフェースの詳細については、 1095 ページ「[ダッシュボード フィルタ] ダイアログ・ボックス」 を参照してください。
	ダッシュボードの設定 : [ダッシュボードの設定] ダイアログ・ボックスが開きます。ユーザ・インタフェースの詳細については、 1097 ページ「[ダッシュボードの設定] ダイアログ・ボックス」 を参照してください。
	現在の状態 : モニタ・ツリーで強調表示されている要素またはパスに表示されている要素のグループおよびモニタのテーブルが表示されます。

UI 要素	説明
	<p>モニタ履歴 : 過去 24 時間分のモニタ、モニタ・グループ、警告の情報が表示されます。時間、モニタの状態、データ・エントリ数を使用してこの情報をフィルタします。</p> <p>モニタ履歴の表示の詳細については、1091ページ「SiteScope ダッシュボード - [モニタ履歴]ビュー」を参照してください。</p>
	<p>モニタの実行 : 選択したモニタ、またはグループ内に設定されている任意のモニタを実行します。結果を表示する情報ウィンドウが開きます。</p>
	<p>グループ内のモニタの有効化 / 無効化 : モニタ・プロパティの設定に関係なく、選択したモニタまたはグループ内のすべてのモニタを有効化または無効化する [グループ内のモニタの有効化 / 無効化] ダイアログ・ボックスを開きます。[モニタを無効化]を選択すると、このダイアログ・ボックスに戻って[モニタを有効化]を選択するまでモニタは無効になります。[グループ内のモニタの有効化 / 無効化]のユーザ・インタフェースの詳細については、1101ページ「[グループ内のモニタの有効化 / 無効化]ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p>
	<p>関連する警告の有効化/無効化 : [関連する警告の有効化/無効化]ダイアログ・ボックスが開き、モニタやグループ内の全モニタに関連付けられているすべての警告を有効化または無効化できます。詳細については、392ページ「関連する警告の有効化/無効化」を参照してください。</p>
	<p>確認応答の追加 : [グループ内のモニタを確認]ダイアログ・ボックスが開き、確認応答をモニタに追加できます。[グループ内のモニタを確認]のユーザ・インタフェースの詳細については、1093ページ「[グループ内のモニタを確認]ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p>
	<p>確認応答の削除 : モニタの確認応答を削除します。</p>
	<p>クイック・レポート : 選択したモニタの事前に設定された設定を使用して、1 回かぎりの SiteScope 管理レポートが作成されます。レポートの詳細については、1305ページ「クイック・レポート」を参照してください。</p>
	<p>ツール : 選択した監視環境をテストする診断ツールが開きます。このボタンは、適切な診断ツールがあるモニタ・インスタンスでのみ使用できます。SiteScope ツールの詳細については、1099ページ「診断ツール」を参照してください。</p>
	<p>ファイルにエクスポート : [保存]ダイアログ・ボックスが開き、[ダッシュボード]テーブルに現在表示中のすべての列のデータを、カンマ区切り(CSV)ファイルにエクスポートできます。[ダッシュボードの設定]にどの列を表示するかを選択すれば、エクスポートするデータのタイプを変更できます。詳細については、1097ページ「[ダッシュボードの設定]ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p>

UI 要素	説明
	<p>[確認]列: SiteScope ユーザがモニタの現在の状態を確認したことや、そのモニタに関連付けられている警告アクションを一時的に無効化した可能性があることを示します。このアイコンは、ダッシュボード[詳細ビュー]にのみ表示されます。ポインタをアイコンの上に移動すると、ツールチップとして確認応答情報が表示されます。アイコンをダブルクリックすると、[確認応答の編集]ダイアログ・ボックスが開きます。このトピックの詳細については、1078ページ「モニタの状態の確認」を参照してください。[確認の追加/編集]ダイアログ・ボックスの詳細については、1093ページ「[グループ内のモニタを確認]ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p>
 	<p>[設定された警告]列: 1 つ以上の警告がグループまたはモニタに関連付けられていることを示します。アイコンをダブルクリックすると、設定された警告がツールチップに表示されます。リストから該当の警告定義名を選択すると、[警告の編集]ダイアログ・ボックスが開き、警告プロパティを表示または編集できます。このトピックの詳細については、1203ページ「SiteScope 警告」を参照してください。</p> <p>すべての関連付けられた警告が無効化された場合、アイコンはグレー表示されます。</p> <p>該当警告自体ではなく個々のグループやモニタに関連付けられた警告の有効化および無効化の詳細については、343ページ「モニタの警告の設定 - オプション」を参照してください。</p> <p>警告の有効化および無効化の詳細については、1226ページ「警告の設定方法」を参照してください。</p>
	<p>[トリガされた警告]列: モニタの 1 つ以上の警告が起動されたことを示します。起動された警告がない場合、アイコンは表示されません。起動された警告が 1 つの場合、特定の警告タイプを表すアイコンが表示されます。アイコンのリストについては、1242ページ「[新規警告]/[警告の編集]ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p> <p>起動された警告が複数の場合、複数の警告を表すアイコンが表示されます。警告アイコンをクリックすると、警告の詳細が表示されます。トリガされた警告列は、テーブルにモニタが含まれている場合にのみ表示されます。このトピックの詳細については、1203ページ「SiteScope 警告」を参照してください。</p>
<オブジェクト・テーブル>	<p>モニタ・ツリーで強調表示されている要素またはパスに表示されている要素のグループおよびモニタが表示されます。各グループまたはモニタのノードをダブルクリックして、子ノードおよびモニタに移動できます。モニタをダブルクリックすると、そのモニタのパフォーマンス・カウンタが表示されます。</p>
名前	<p>モニタ・インスタンスまたはグループの表示名(別名)。新規グループを作成する場合、その名前を入力します。新規モニタを作成する場合、利用可能なモニタのリストからそのタイプを選択します。[名前]ボックスでこのタイプを上書きしない場合、モニタはそのモニタ・タイプで識別されます。このモニタを識別しやすくする別名を入力することもできます(任意指定)。</p>

UI 要素	説明
状態	<p>[ダッシュボード]ビューの各ノードに色付きのアイコンが表示されます。このアイコンは、該当のコンポーネントに割り当てられている操作の状態(現在のパフォーマンス・レベルに対応します)を表しています。</p> <p>また、[ダッシュボード]ビューには要素ごとに色付きの矢印も表示されます。この矢印は、モニタのデータの可用性の状態を表しています。</p> <p>アイコンの上にマウス・ポインタを置くと、モニタの状態および可用性を表示できます。モニタの状態および可用性のアイコンの詳細については、後述の1090 ページ「状態および可用性のレベル」を参照してください。</p>
タイプ	表示されるモニタのタイプ。モニタ・タイプは、モニタ・インスタンスの作成時に[新規モニタ]ダイアログ・ボックスで選択します。
ターゲット	<p>監視対象オブジェクトがあるリモート・サーバの名前が表示されます(該当サーバが存在する場合)。たとえば、モニタ・タイプが CPU の場合、監視する CPU が搭載されているサーバの名前が対象になります。</p> <p>サーバをモニタ・ツリーに追加したときに[名前]ボックスに入力した内容に応じて、[ターゲット]列に表示される名前は、サーバのシステム ID か、ユーザが割り当てた名前(別名)のいずれかになります。</p> <p>グループに Microsoft Windows リソース・モニタまたは UNIX リソース・モニタが含まれている場合、[ターゲット]列のサーバ名はリンクとして表示されます。リンクをクリックすると、サーバのサーバ中心のレポートが開きます。ユーザ・インターフェースの詳細については、1103 ページ「サーバ中心のレポート」を参照してください。</p>
サマリ	<p>モニタの場合、[サマリ]列には、モニタによってレポートされた最新の測定値の結果が表示されます。モニタ・タイプによっては、複数の測定値が含まれていることがあります。モニタ・グループの場合、サマリにはグループ内のモニタの数や、エラー状態を報告したモニタの数(存在する場合)が表示されます。</p> <p>モニタが無効になっている場合、無効の状態([手動で無効化されています]、[disabled until x time]、または[disabled by <Downtime Name> from BSM])が表示されます。</p>
更新日時	グループまたはモニタで最後にイベントが発生した日時。
詳細	<p>[詳細]列には、モニタまたはグループを説明するテキストか、リンクをクリックするとさまざまなアクションが実行される HTML のいずれかが表示されます。</p> <p>このフィールドにテキストが含まれている場合、そのテキストをダブルクリックすると、HTML 形式の詳細な説明が表示されるダイアログ・ボックスが開きます。</p> <p>この列に情報を入力するには、モニタ・ツリーでモニタまたはグループを選択して[プロパティ]タブを選択します。開いたページで、[一般設定]を展開し、[モニタの詳細]/[グループの詳細]ボックスに詳細を入力します。</p>
グループ名	モニタが所属するグループの名前を示します。SiteScope の階層内のモニタやグループの位置を確認して親ノードに移動する場合、および、子孫モニタ・ビューにすべての子孫を表示するときに警告をグループ名別に分類する場合に便利です。[グループ名]セルをダブルクリックして、モニタ・パスをクリップボードにコピーします(モニタ・パス情報のコピーや貼り付けに便利)。

状態および可用性のレベル

アイコン	説明
	正常な状態 : すべてのパフォーマンス測定値が「正常」のしきい値レベル内にあります。
	警告状態 : 1 つ以上のパフォーマンス測定値が「警告」の範囲内にありますが、「エラー」または「低」の範囲内の測定値はありません。
	エラー/標準以下状態 : 1 つ以上のパフォーマンス測定値が「エラー」または「標準以下」の範囲内にあります。これは、次のいずれかを示しています。 <ul style="list-style-type: none"> パフォーマンス測定値に値はあるが、品質レベルが低い。 なんらかのエラーが原因で測定値がない。
	状態が定義されていません(データなし) : グループまたはモニタのデータがありません。これは、次のいずれかの理由が原因で発生します。 <ul style="list-style-type: none"> 新規モニタがまだ実行されていない。 モニタ・カウンタがまだ収集されていない。 グループまたはモニタが依存するモニタで「正常」状態がレポートされていない。
	しきい値がない状態 : モニタ・カウンタにしきい値が定義されていないため、状態が割り当てられていません。
	手動で無効化されています : グループまたはモニタが現在無効になっているため、データの更新が受信されていません。
	データが収集されました : SiteScope からリモート・システムに接続して、個々のモニタ設定で定義されているアクションを実行できたことを示します。結果として生じるモニタの状態は、モニタ・アクションの結果を表しています。エラーまたは警告が示された場合、対象システムのパフォーマンスまたは対象リソースの可用性の正確な測定値が表示されます。
	可用性に関する警告 : SiteScope で、リモート・システムとの接続に問題がある可能性が検出されたことを示します。
	データを使用できません : SiteScope からリモート・システムに接続できなかったことを示します。結果として生じる個々のモニタのエラー状態は、リモート・サーバとの接続の失敗に起因する可能性があります。これは、必ずしも対象リソースが機能していないことを表しているわけではありません。

ダッシュボードのコンテキスト・メニュー

次のオプションは、グループまたはモニタのオブジェクト行の列を右クリックすると表示されます。

UI 要素	説明
確認応答の追加	確認ダイアログ・ボックスが開き、確認をモニタに追加できます。
確認応答の削除	モニタの確認応答を削除します。
関連する警告の有効化/無効化	[関連する警告の有効化 / 無効化] ダイアログ・ボックスが開き、グループ内の全モニタの警告をすべて有効化または無効化できます。[モニタを無効化]を選択すると、このページに戻って[モニタを有効化]を選択するまで警告が無効になります。詳細については、 392ページ「関連する警告の有効化/無効化」 を参照してください。
モニタの有効化/無効化グループ内のモニタの有効化/無効化	[グループ内のモニタの有効化/無効化] ダイアログ・ボックスが開き、モニタまたはグループ内の全モニタを有効化または無効化できます。[モニタを無効化]を選択すると、このページに戻って[モニタを有効化]を選択するまでモニタが無効になります。ユーザ・インターフェースの詳細については、 1101ページ「[グループ内のモニタの有効化/無効化]ダイアログ・ボックス」 を参照してください。
クイック・レポート	選択したモニタの事前に設定された設定を使用して、1 回かぎりの SiteScope 管理レポートが作成されます。詳細については、 1305ページ「クイック・レポート」 を参照してください。 注：このメニュー項目は、モニタの場合にのみ表示されます。
モニタの実行	選択したモニタまたは選択したグループ内の全モニタが実行されます。
ツール	モニタ設定の問題のトラブルシューティングに役立つ診断ツールが開きます。利用可能なツールの詳細については、 139ページ「SiteScope ツールの概要」 を参照してください。 注：このメニュー項目は、モニタの場合にのみ表示されます。また、特定のモニタの場合にのみ使用できます。


SiteScope ダッシュボード - [モニタ履歴]ビュー

このビューには、過去 24 時間に収集されたモニタ、モニタ・グループ、警告の情報が表示されます。時間、モニタの状態、データ・エントリ数を使用してこの情報をフィルタします。

アクセス方法	[モニタ]コンテキストを選択します。ダッシュボード・ツールバーで、[モニタ履歴]ボタンをクリックします。
--------	--

重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> この機能を有効にするには、[プリファレンス] > [一般プリファレンス] > [ダッシュボード モニタ履歴表示オプション] の [モニタ履歴ビューを有効にする] を選択します。 この機能では、保存するデータ量を厳密に決めることができるため、データベースが過負荷状態になることはありません。 標準設定では、選択した要素の [モニタ履歴] テーブルに表示できるオブジェクトの最大数は 4000 で、[アイコンビュー] で表示できるアイコンの最大数は 70 です。これらの数を変更するには、[ダッシュボードの設定] で値を変更します([モニタ]を選択して、[ダッシュボードの設定] ボタンをクリックし、[ダッシュボードのプロパティ] を展開する)。ただし、標準設定を使用することをお勧めします。詳細については、1097 ページ「[ダッシュボードの設定] ダイアログ・ボックス」を参照してください。 選択した要素の行数が、[モニタ履歴] テーブルに表示できる最大数よりも多い場合、さらに限定的なツリー・フィルタを作成するか、ダッシュボード・フィルタを設定してください。
関連タスク	<ul style="list-style-type: none"> 1080 ページ「SiteScope ダッシュボードのカスタマイズ方法」 1082 ページ「SiteScope ダッシュボードのデータ分析方法」
関連情報	639 ページ「[一般プリファレンス] ページ」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
	トリガされた警告：警告をトリガしたモニタの横に表示されます。
実行時間	モニタの実行時間。
名前	モニタの名前。
状態	実行時のモニタの状態(「エラー」、「警告」、「正常」): ユーザ・インタフェースの詳細については、1090 ページ「状態および可用性のレベル」を参照してください。
サマリ	<p>モニタの実行の詳細。</p> <p>可用性</p> <p>このボックスが表示されるのは、[詳細表示] 表示枠の [モニタが利用可能かを表示] を選択した場合だけです。</p> <p>グループ</p> <p>モニタが属するグループの名前。このボックスが表示されるのは、ダッシュボードの [すべての子孫の表示] を選択した場合だけです。</p>

[グループ内のモニタを確認]ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、モニタまたはモニタ・グループの確認を追加または編集できます。

アクセス方法	<p>[モニタ]コンテキストを選択します。モニタ・ビューでモニタまたはグループを右クリックし、次のように選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> 確認を個別のモニタまたはモニタ・グループに追加するには、[確認応答の追加]を選択します。 確認済みのモニタまたはグループの確認応答を編集するには、[確認応答の編集]を選択します。
関連タスク	<ul style="list-style-type: none"> 1080ページ「SiteScope ダッシュボードのカスタマイズ方法」 1082ページ「SiteScope ダッシュボードのデータ分析方法」
関連情報	1078ページ「モニタの状態の確認」


ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
確認コメント	[ダッシュボード]ビューの確認アイコンに関連付けられたヒントとして表示される確認コメント。確認ログに記録されます。新しい情報が利用可能になると、コメントを更新できます。コメントは確認が削除するまで表示されます。
関連付けられたすべての警告を有効化	関連付けられたすべての警告を有効にします(標準設定)。
次に関連付けられたすべての警告を無効化 :< 期間>	すぐに警告を無効にし、指定した期間、選択したモニタまたはグループに対する警告の抑止を続けます。
1 回限りのスケジュールに基づいて関連付けられたすべての警告を無効化 : 開始< 時刻> ~ 終了< 時刻>	指定した期間、警告を無効にします。これは、監視対象のシステムが特定の期間利用不可になると予想され、その間も警告をトリガせずに監視を続ける場合に便利です。
無効化の説明	<p>確認済みコンテキスト内のモニタに関連付けられた警告アイコンの説明。このテキスト説明は、[ダッシュボード]ビューでモニタに関連付けられた警告アイコンの上にポインタを置くと表示されるツールチップのテキストに追加されます。このテキストは、警告の無効化オプションが有効な間のみ表示されます。このテキストは、確認ログには書き込まれません。</p> <p>1 回限りのスケジュールを元に戻します。</p> <p>1 回限りのスケジュールの無効化の警告をキャンセルします。</p>

UI 要素	説明
確認ログの表示	確認応答ダイアログ・ボックスの起動元であるモニタまたはグループの確認応答エントリをすべて表示します。ログには、確認応答の日付と時刻、確認応答者のユーザ名、モニタまたはグループの状態、確認応答メッセージが含まれます。

[ダッシュボードのお気に入り]に保存]ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、ダッシュボード・フィルタとレイアウト設定 ([ダッシュボード フィルタ] ダイアログ・ボックスおよび [ダッシュボード の設定] ダイアログ・ボックスで選択) の組み合わせを定義し、名前を付けてお気に入りビューとして保存できます。


アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。[ダッシュボード] ツールバーで、[お気に入りの管理]  ボタンの横にある矢印をクリックし、[お気に入り]に保存]を選択します。
重要な情報	ダッシュボードのお気に入りには、[ダッシュボード] ビューに適用可能な設定に制限されます。つまり、ダッシュボードのお気に入りには、ユーザのグローバル・ビュー設定や、お気に入りの保存時にモニタ・ツリーで選択されていたコンテキストは保存されません。
関連タスク	1080 ページ「SiteScope ダッシュボードのカスタマイズ方法」
関連情報	1076 ページ「SiteScope ダッシュボードの概要」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
名前	現在のダッシュボード・フィルタとレイアウト設定をお気に入り]に保存するためのオプションを選択します。 <ul style="list-style-type: none"> 既存：既存のお気に入りのいずれかを現在の設定で置き換えることができます。既存のお気に入りビューのリストが表示されます。標準設定では、リストには事前に設定されたお気に入り]がすべて含まれます。 新規：現在の設定を、ボックスに入力した表示名を付けて新しいお気に入り]ビューに保存できます。

[ダッシュボードのお気に入り]の削除]ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、既存のお気に入り]ビューを削除できます。

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。ダッシュボード・ツールバーで、[お気に入りの管理]  ボタンの横にある矢印をクリックし、[お気に入り]を削除]を選択します。
--------	--


関連タスク	1080ページ「SiteScope ダッシュボードのカスタマイズ方法」
関連情報	1076ページ「SiteScope ダッシュボードの概要」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
既存のお気に入り	<p>現在のお気に入りビューのリストから削除するビューを選択します。標準設定では、リストには次の事前に設定されたお気に入りが含まれます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • All Objects • Disabled • Errors Only • Errors and Warnings • Good • Good and Warnings • No Data • Warnings Only

[ダッシュボード フィルタ] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、一致基準を入力し、メニュー・オプションを選択してダッシュボード・フィルタを設定できます。

アクセス方法	[モニタ]コンテキストを選択します。ダッシュボード・ツールバーで[ダッシュボード フィルタ]  ボタンをクリックします。
重要な情報	1つのフィルタにフィルタ・オプションの組み合わせを含めることができます。たとえば、フィルタ定義では[モニタタイプ]、[監視対象]、[状態]の組み合わせに基づいてフィルタすることができます。
関連タスク	<ul style="list-style-type: none"> • 1080ページ「SiteScope ダッシュボードのカスタマイズ方法」 • 1082ページ「SiteScope ダッシュボードのデータ分析方法」
関連情報	1077ページ「ダッシュボード・フィルタの概要」

グローバル設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
モニタ名	1つ以上のモニタの名前と一致するテキスト文字列または正規表現。このフィルタを[ダッシュボード]ビューに適用すると、[モニタ名]基準に一致するモニタのみが表示されます。

UI 要素	説明
モニタ・タイプ	選択したモニタ・タイプでモニタをフィルタします。
監視対象サーバ	特定のホストまたは監視対象サーバのサーバ名でモニタをフィルタします。
状態	<p>報告された状態でモニタをフィルタします。状態フィルタ基準は、モニタ・カテゴリの状態に基づいて定義できます。</p> <p>次の状態オプションを使用できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 任意の状態：状態に関係なくすべてのモニタが表示されます。これが標準設定のオプションです。このオプションを[データあり]オプションと組み合わせて使用し、接続や可用性が原因でエラー状態にあるモニタを除外できます。 ● 無効：無効と報告されたモニタのみが表示されます。 ● エラー：エラー状態を報告したモニタのみが表示されます。 ● 良好：良好または OK 状態を報告したモニタのみが表示されます。 ● 良好、警告またはエラー：無効と報告されたモニタを除く、すべてのモニタが表示されます。 ● 警告：警告状態を報告したモニタのみが表示されます。 ● 警告またはエラー：警告またはエラー状態を報告したモニタのみが表示されます。 ● 警告または良好：警告または正常状態を報告したモニタのみが表示されます。 <p>例：警告またはエラーを報告したモニタのみを表示するフィルタを作成します。</p>
状態(可用性付き)	<p>モニタ状態カテゴリとデータの可用性の状態を組み合わせて、複合フィルタを作成します。</p> <p>次のデータの可用性の状態オプションを使用できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● データあり：データが利用可能なモニタが表示されます。つまり、モニタが対象システムから測定値を取得できたことを示します。 ● データなし：データが利用不可なモニタが表示されます。つまり、SiteScope が対象システムから測定値を取得できなかったことを示します。 <p>例：[エラー]および[データあり]を報告したモニタのみを表示するフィルタを作成します。つまり、監視対象システムと通信できずにエラーを報告したモニタ([データなし])とは異なり、このフィルタを使用すると、監視対象システムからデータを受信できたもののエラー状態を示すモニタが表示されます。</p>
サマリ・テキスト	<p>サマリ文字列に含まれたテキストに基づいてモニタをフィルタします。リテラル・テキスト文字列または正規表現を入力して、テキスト・パターンと照合することができます。</p> <p>正規表現の詳細については、198ページ「正規表現の使用」を参照してください。</p>

UI 要素	説明
確認済み	「オペレータ認知」の状態に基づいてモニタをフィルタします。確認済みのモニタをフィルタするには、ドロップダウン・メニューから[はい]を選択します。未確認のモニタをフィルタするには、ドロップダウン・メニューから[いいえ]を選択します。
確認メモ	[オペレータ認知]のメモに表示されるテキストに基づいてモニタをフィルタします。リテラル・テキスト文字列または正規表現を入力して、テキスト・パターンと照合することができます。 正規表現の詳細については、 198ページ「正規表現の使用」 を参照してください。
警告設定済み	警告が設定されているかどうかに基づいてモニタをフィルタします。1つ以上の警告が設定されているモニタをフィルタするには、ドロップダウン・メニューから[はい]を選択します。警告が設定されていないモニタをフィルタするには、ドロップダウン・メニューから[いいえ]を選択します。
トリガされた警告	警告イベントをトリガしたかどうかに基づいてモニタをフィルタします。1つ以上の警告を生成しているモニタをフィルタするには、ドロップダウン・メニューから[はい]を選択します。警告を生成していないモニタをフィルタするには、ドロップダウン・メニューから[いいえ]を選択します。


モニタ履歴の設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
表示期間	過去のイベントのタイム・フレーム。 標準設定値：過去 1 時間
モニタの実行の状態	必要なイベント状態、関係演算子、データ可用性。 標準設定値：任意

[ダッシュボードの設定]ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、[ダッシュボード]ビューでのグループおよび監視データの表示をカスタマイズできます。これにより、モニタ測定値の詳細、警告情報、確認機能の表示を有効化または非表示にできます。

アクセス方法	[モニタ]コンテキストを選択します。ダッシュボード・ツールバーで[ダッシュボードの設定]  ボタンをクリックします。
重要な情報	レイアウト・オプションは、[詳細ビュー]にのみ適用されます。[アイコンビュー]の使用時には無視されます。
関連タスク	1080ページ「SiteScope ダッシュボードのカスタマイズ方法」
関連情報	1077ページ「ダッシュボード・フィルタの概要」

ダッシュボード・テーブルのレイアウト

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
カラムの固定	<p>テーブルの列の順序を固定します。設定をクリアしてテーブル・列の順序を変更するには、列・ヘッダを右または左にドラッグします。</p> <p>標準設定値：選択されていない</p>
テーブル・カラム	<p>詳細テーブルに表示される列。選択内容は、該当するすべてのグループまたはモニタの要素に適用されます。</p> <p>次の列が表示可能です。</p> <ul style="list-style-type: none"> • タイプ • サマリ • トリガされた警告 • 警告設定済み • 詳細 • 状態 • ターゲット • 確認 • 更新日時 • 名前 • グループ名 • タグ <p>標準設定値：すべてのプロパティが選択されている</p> <p>列の詳細については、1085ページ「SiteScope ダッシュボード - [現在の状態]ビュー」を参照してください。</p>

ダッシュボードのプロパティ


ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
折り返しテキスト	<p>行の高さを自動的に調整して、ダッシュボード内でセル内容をすべて表示します。</p> <p>標準設定値：選択されていない</p>

UI 要素	説明
モニタが利用可能かを表示	<p>SiteScope がリモート・システムに接続できたかどうか、または接続の問題が原因でリモート・システムを使用できなかったかどうかを示す、モニタの可用性アイコンをダッシュボードに表示します。</p> <p>標準設定値：選択されていない</p>
ダッシュボード・オブジェクトの最大数	<p>選択した要素について、[ダッシュボード]テーブルに表示できるオブジェクトの最大数。</p> <p>標準設定値：4000</p> <p>注：選択した要素のオブジェクトが表示可能な最大数よりも多い場合、この設定を増やすのではなく、オブジェクト数を絞り込むツリー・フィルタを作成するか、ダッシュボード・フィルタを設定してください。</p>
ダッシュボード・アイコンの最大数	<p>ダッシュボード・アイコン・ビューに表示できるアイコンの最大数。</p> <p>標準設定値：700</p> <p>最大推奨値：1500</p> <p>注：選択した要素のアイコンが表示可能な最大数よりも多い場合、この設定を増やすのではなく、アイコン数を絞り込むツリー・フィルタを作成するか、ダッシュボード・フィルタを設定してください。</p>
ダッシュボードの更新間隔 (秒)	<p>ダッシュボードの更新間の待機時間 (秒単位)。</p> <p>標準設定値：60 秒</p> <p>最小値：30 秒</p>

診断ツール

SiteScope ツールを使用すると、監視環境をテストできます。これらのツールを使用して、監視対象となるシステムのさまざまな要求やクエリを作成し、アクションの詳細な結果を表示します。


アクセス方法	<p>[モニタ]コンテキストを選択します。ダッシュボードで、診断ツールを利用可能なモニタ・インスタンスを選択し、[ツール] ボタンをクリックします。</p>
--------	---

重要な情報	<p>[ツール] ボタンは、次のモニタ・インスタンスの設定または表示時に有効になります。</p> <ul style="list-style-type: none">• Active Directory レプリケーション・モニタ• Cisco Works モニタ• CPU モニタ• データベース・カウンタ・モニタ• データベース・クエリ・モニタ• DB2 8.x および 9.x モニタ• ディスク容量 モニタ• DNS モニタ• F5 Big-IP モニタ• FTP モニタ• LDAP モニタ• ログ・ファイル・モニタ• メール・モニタ• メモリ・モニタ• Microsoft Windows イベント・ログ・モニタ• Microsoft Windows Media Player モニタ• Microsoft Windows パフォーマンス・カウンタ・モニタ• ニュース・モニタ• Oracle 9i アプリケーション・サーバ・モニタ• Ping モニタ• ポート・モニタ• Real Media Player モニタ• サービス・モニタ• SNMP モニタ• MIB による SNMP モニタ• SNMP トラップ・モニタ• テクノロジ・データベース統合 モニタ• テクノロジ SNMP トラップ統合 モニタ• URL モニタ• URL 内容モニタ• Web サービス・モニタ• XML 測定値モニタ <p>SiteScope で利用可能な診断ツールの完全なリストについては、左下の表示枠で [ツール] ボタンをクリックします。</p>
--------------	--

関連情報	139ページ「SiteScope ツールの概要」
------	--------------------------

[グループ内のモニタの有効化 / 無効化] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、モニタの[プロパティ]タブの個々のモニタ設定に関係なく、モニタまたはグループ内の全モニタを有効化または無効化するオプションを選択できます。[モニタを無効化]を選択すると、このダイアログ・ボックスに戻って[モニタを有効化]を選択するまでモニタは無効になります。

アクセス方法	[モニタ]コンテキストを選択します。ダッシュボードで、モニタまたはグループを選択して[モニタの有効化/無効化]ボタン  をクリックします。
重要な情報	[モニタを無効化]オプションを使用してモニタまたはグループを無効化する場合、ダッシュボードには、影響を受けるオブジェクトの[サマリ]列の状態として「手動で無効化されています」が表示されます。特定の期間オブジェクトを無効化するには、事前に状態が「手動で無効化されています」のオブジェクトを有効化する必要があります。これは、グループ・レベルでも同様です。たとえば、ある期間グループ内のモニタが無効化されていて、そのグループのサブグループに存在するモニタの状態が「手動で無効化されています」である場合、親グループの無効化期間が経過した後もサブグループのモニタは無効化されたままになります。
関連情報	391ページ「モニタの有効化/無効化」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
モニタを有効化	以前にモニタ・プロパティで無効化されている場合、モニタが有効になります。 標準設定値：選択されている
一時的に無効化されたモニタのみ有効にする	以前にモニタ・プロパティで一時的に無効化されている場合、モニタが有効になります。
モニタを無効化	グループ内のモニタが無効化されている場合、SiteScope では、引き続きモニタの[頻度]設定に基づいてモニタの実行をスケジュールしますが、モニタ・アクションは実行されません。モニタの実行がスケジュールされている場合、SiteScope によってモニタのデータ・ログ・エントリが記録されますが、測定データの代わりにモニタの状態が無効であるとして報告されます。
次の時間設定でモニタを無効化：<期間>	モニタが無効になっている期間。[秒]、[分]、[時間]、または[日]を選択して、適用する無効化期間を定義します。

UI 要素	説明
1 回限りのスケジュールに基づいてモニタを無効化: <時間> ~ <時間>	モニタを将来のある期間だけ一時的に無効にします。1 日より長い期間に設定できます。 hh:mm:ss mm/dd/yyyy の形式で無効化期間の開始時間と終了時間を入力または選択します。
無効化の説明	モニタ・グループのモニタの状態とともに表示される詳細。無効化状態のテキストには、どの無効化オプションがモニタに適用されているかを示す文字列も含まれます。たとえば、「手動で無効化されています」は、[モニタを無効化]オプションを使用してモニタが無効にされたことを示します。

第74章

サーバ中心のレポート

本章の内容

概念

- 1104ページ「サーバ中心のレポートの生成」

タスク

- 1105ページ「サーバ中心のレポートの作成方法」
- 1107ページ「サーバ中心のレポートの作成方法 - 使用例のシナリオ」

参照情報

- 1110ページ「サーバ中心のレポートの測定値」
- 1111ページ「サーバ中心のレポート」

サーバ中心のレポートの生成

Microsoft Windows および UNIX リソース・モニタの場合、監視対象のリモート・サーバに関する 3 つの異なる測定値のデータを表示できる、サーバ中心のレポートを作成できます。

ヒント: Microsoft Windows リソース・モニタまたは UNIX リソース・モニタの作成時に、ソリューション・テンプレートを使用することをお勧めします。ソリューション・テンプレートの詳細については、次を参照してください。

- [942ページ「AIX Host ソリューション・テンプレート」](#)
- [980ページ「Linux Host ソリューション・テンプレート」](#)
- [1045ページ「Solaris Host ソリューション・テンプレート」](#)
- [1013ページ「Microsoft Windows Host ソリューション・テンプレート」](#)

モニタを手動で定義するには、Microsoft Windows リソース・モニタまたは「UNIX Resources Monitor Settings」の説明に従って、必要な[モニタ設定]ページで[「サーバ中心のレポートを有効化」](#)を選択します。モニタを手動で定義する場合、[1110ページ「サーバ中心のレポートの測定値」](#)に記載された表に従って、モニタに必要な測定値を選択する必要があります。

このレポートには、同じグラフ上に次の測定値が表示されます。

- **CPU 使用率:** UNIX リソース・モニタの場合、この測定値は次の 3 つのカウンタの平均として計算されます。システム処理使用率、ユーザ処理使用率、入力/出力処理使用率。Microsoft Windows リソース・モニタの場合、合計処理容量のうち使用された処理容量の割合として測定値が計算されます。
- **メモリ使用率:** 利用可能な合計メモリのうち使用されたメモリの割合として計算されます。
- **ネットワーク使用率:** システム固有のカウンタによって計算されます。ネットワーク使用率の計算は、Windows サーバに対してのみサポートされています。

各測定値は、グラフ上に固有の色で個別の線で表示されます。このレポートでは、異なる測定値間の相関関係を容易に表示できます。

レポートには、CPU 使用率およびメモリ消費別の上位 5 プロセスを表示するテーブルが含まれます。グラフを操作して、テーブルに表示するデータの時間を変更できます。これにより、グラフの問題のある期間に焦点を当て、その時点で実行されていたプロセスを特定できます。サーバ中心のレポートのインタフェースの詳細については、[1111ページ「サーバ中心のレポート」](#)を参照してください。

サーバ中心のレポートの生成方法の詳細については、[1105ページ「サーバ中心のレポートの作成方法」](#)を参照してください。

サーバ中心のレポートの作成方法

このタスクでは、Windows および UNIX サーバを監視するモニタの作成とサーバ中心のレポートの生成に関する手順を説明します。

注: このタスクのシナリオについては、1107ページ「サーバ中心のレポートの作成方法 - 使用例のシナリオ」を参照してください。

このタスクには次の手順が含まれています。

- 1105ページ「前提条件」
- 1105ページ「Microsoft Windows または UNIX リソース・モニタの作成」
- 1105ページ「サーバ中心のレポートの生成」
- 1106ページ「レポート内のデータの分析」

1. 前提条件

サーバ中心のレポートを生成できるようにするには、SiteScope で管理者である必要があります。または、ユーザ管理プリファレンスで「サーバ中心のレポートを生成する」権限を付与されたユーザである必要があります。ユーザ権限の詳細については、773ページ「ユーザ管理プリファレンスの概要」を参照してください。

2. Microsoft Windows または UNIX リソース・モニタの作成

Microsoft Windows または UNIX サーバを監視するには、Microsoft Windows または UNIX リソース・モニタを作成する必要があります。手動で、またはソリューション・テンプレートを使用して(推奨)、モニタを作成できます。

- Microsoft Windows リソース・モニタまたは UNIX リソース・モニタの手動作成の詳細については、次を参照してください。
 - Microsoft Windows Resources Monitor
 - UNIX Resources Monitor

注: [サーバ中心のレポートを有効化]を選択し、必要な測定値を選択します。測定値の詳細については、1110ページ「サーバ中心のレポートの測定値」を参照してください。

- ソリューション・テンプレートを使用したモニタの作成の詳細については(テンプレートには必要なすべての測定値カウンタが含まれるため、これを推奨します)、次を参照してください。
 - 1013ページ「Microsoft Windows Host ソリューション・テンプレート」
 - 942ページ「AIX Host ソリューション・テンプレート」
 - 980ページ「Linux Host ソリューション・テンプレート」
 - 1045ページ「Solaris Host ソリューション・テンプレート」

3. サーバ中心のレポートの生成

次のどちらかを使用してレポートを生成できます。

- SiteScope ダッシュボードに移動して該当する Microsoft Windows または UNIX リソース・モニタのデータを表示し、使用するリソース・モニタに対応する行の[ターゲット]列でサーバ名をクリックします。
- モニタ・ツリーで、選択したモニタ、グループ、または SiteScope ルートを右クリックして、[レポート]>[サーバ中心]を選択します。[サーバ中心のレポート]ダイアログ・ボックスで、レポート生成の対象とするリモート・ターゲット([サーバ中心のレポートを有効化]チェックボックスが選択されている Windows/UNIX リソース・モニタ)を選択し、[実行]ボタンをクリックします。

レポート設定の詳細については、[1111 ページ「サーバ中心のレポート」](#)を参照してください。

4. レポート内のデータの分析

このレポートでは、同じグラフでサーバの CPU 使用率、メモリ使用率、ネットワーク使用率の3つの異なる測定値を表示できます。CPU 使用率およびメモリ消費別の上位 5 プロセスもこのレポートに表示されます。グラフのデータ・ポイントをクリックして、特定の時間に掘り下げることができます。

ユーザ・インタフェースの詳細については、[1111 ページ「サーバ中心のレポート」](#)を参照してください。

サーバ中心のレポートの作成方法 - 使用例のシナリオ

この使用例のシナリオでは、サーバ中心のレポートの作成方法について説明します。

注: このシナリオに関連するタスクについては、1105ページ「サーバ中心のレポートの作成方法」を参照してください。

このシナリオには次の手順が含まれています。

- 1107ページ「背景情報」
- 1107ページ「リモート・サーバの設定」
- 1107ページ「Microsoft Windows Host ソリューション・テンプレートのデプロイ」
- 1108ページ「サーバ中心のレポートの作成」

1. 背景情報

NewSoft 社の SiteScope ユーザが、監視対象サーバ Apollo の CPU 使用率、メモリ使用率、ネットワーク使用率に関するデータを表示するレポートを作成します。

2. リモート・サーバの設定

レポートの作成前に、リモート Windows サーバ Apollo を監視するように SiteScope を設定し、Microsoft Windows リモート・サーバのサーバを設定します。

メイン設定

* サーバ: WApollon

資格情報:

☒ ユーザ名およびパスワードを使用

ユーザ名: administrator

パスワード:

☐ 事前定義された資格情報を選択

資格情報プロファイル: [dropdown] [資格情報の追加]

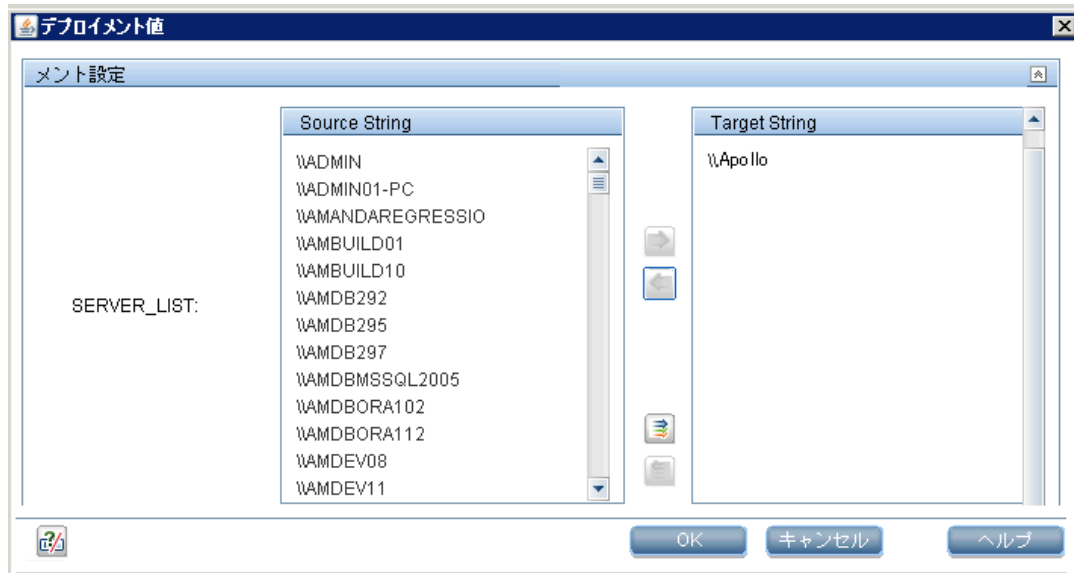
☐ トレース

* 接続方式: NetBIOS

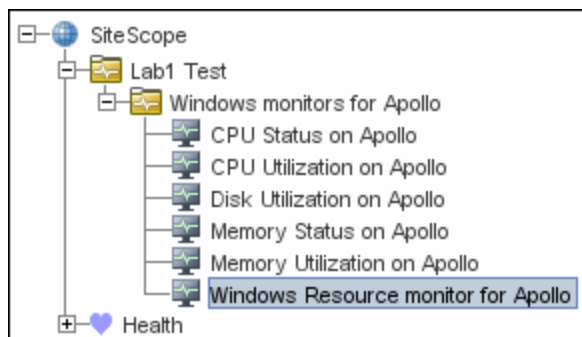
リモートサーバのエンコード: Cp1252 (windows-1252)

3. Microsoft Windows Host ソリューション・テンプレートのデプロイ

Apollo のデータを監視する SiteScope の有効化後、Microsoft Windows Host ソリューション・テンプレートを選択したグループ・コンテナにデプロイし、監視するサーバとして [Apollo] を選択します。サーバ中心のレポートの生成に必要なモニタと測定値がすでに設定されているため、Microsoft Windows リソース・モニタの作成時にソリューション・テンプレートを使用します。



ソリューション・テンプレートのデプロイ後、Microsoft Windows リソース・モニタを含む「Windows monitors for Apollo」という名前のグループが SiteScope によって作成されます。



4. サーバ中心のレポートの作成

サービス状況の[現在の状態]ビューから、Apollo のサーバ中心のレポートを生成します。

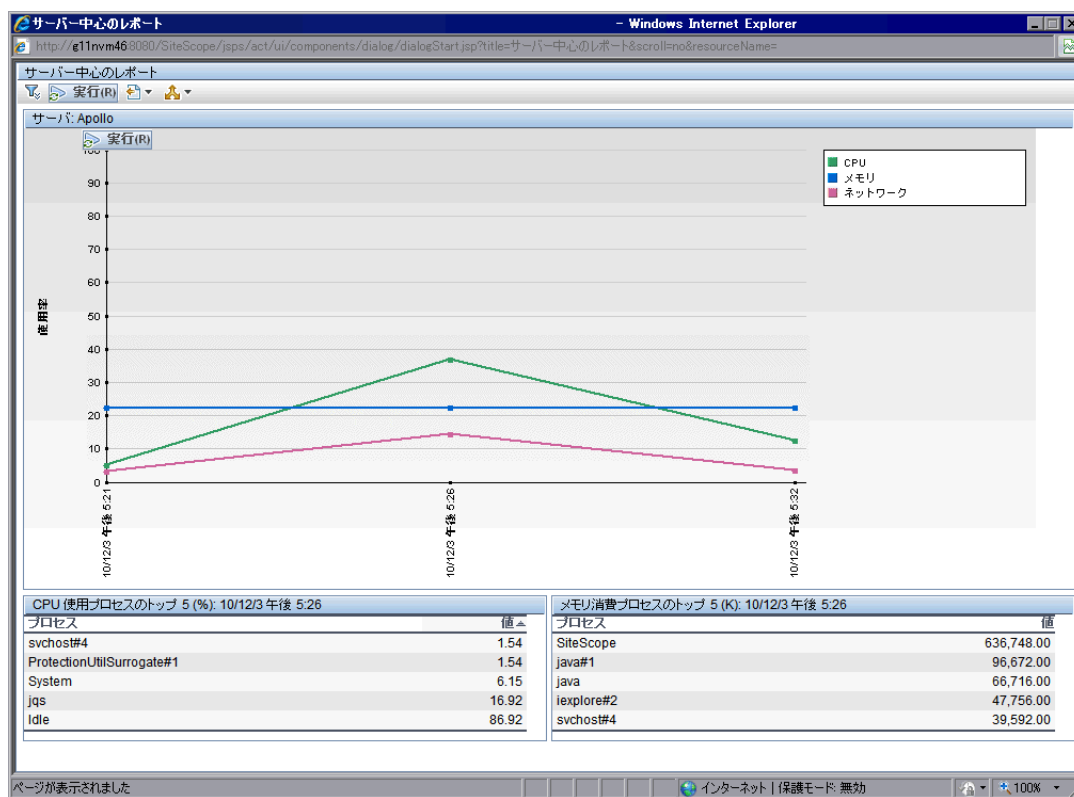
SiteScope グループ - "Windows monitors for Apollo"						
名前	状態	タイプ	ターゲット	サマリ	更新日時	
選択したノード						
Windows monitors for Apollo	✖	グループ		グループ内に...	10/12/3 午...	
グループ (0 件のうち 0 件)						
モニタ (6 件のうち 6 件)						
CPU Status on Apollo	✔	CPU	Apollo	36% avg, cpu...	10/12/3 午...	
CPU Utilization on Apollo	✔	Microsoft Windows Resourc...	Apollo	Processor00...	10/12/3 午...	
Disk Utilization on Apollo	✖	Microsoft Windows Resourc...	Apollo	LogicalDisk...	10/12/3 午...	
Memory Status on Apollo	✔	メモリ	Apollo	11% used, 1...	10/12/3 午...	
Memory Utilization on Apollo	✔	Microsoft Windows Resourc...	Apollo	MemoryAvail...	10/12/3 午...	
Windows Resource monitor for Apo...	✔	Microsoft Windows Resourc...	Apollo	Memory% C...	10/12/3 午...	

サーバ中心のレポートが開き、同じグラフに CPU 使用率、メモリ使用率、ネットワーク使用率の測定値が表示されます。このデータを使用して、異なる時間の CPU 使用率およびメモリ消費別の上位のプロセスを表示し、問題のある期間に焦点を当ててその時点で実行されていたプロセスを特定できます。

例：モニタの測定値の状態および可用性

SiteScope の使用

第 74 章: サーバ中心のレポート



サーバ中心のレポートの測定値

次の表に、サーバ中心のレポートのモニタを手動で定義するときを選択する必要のあるカウンタを示します。

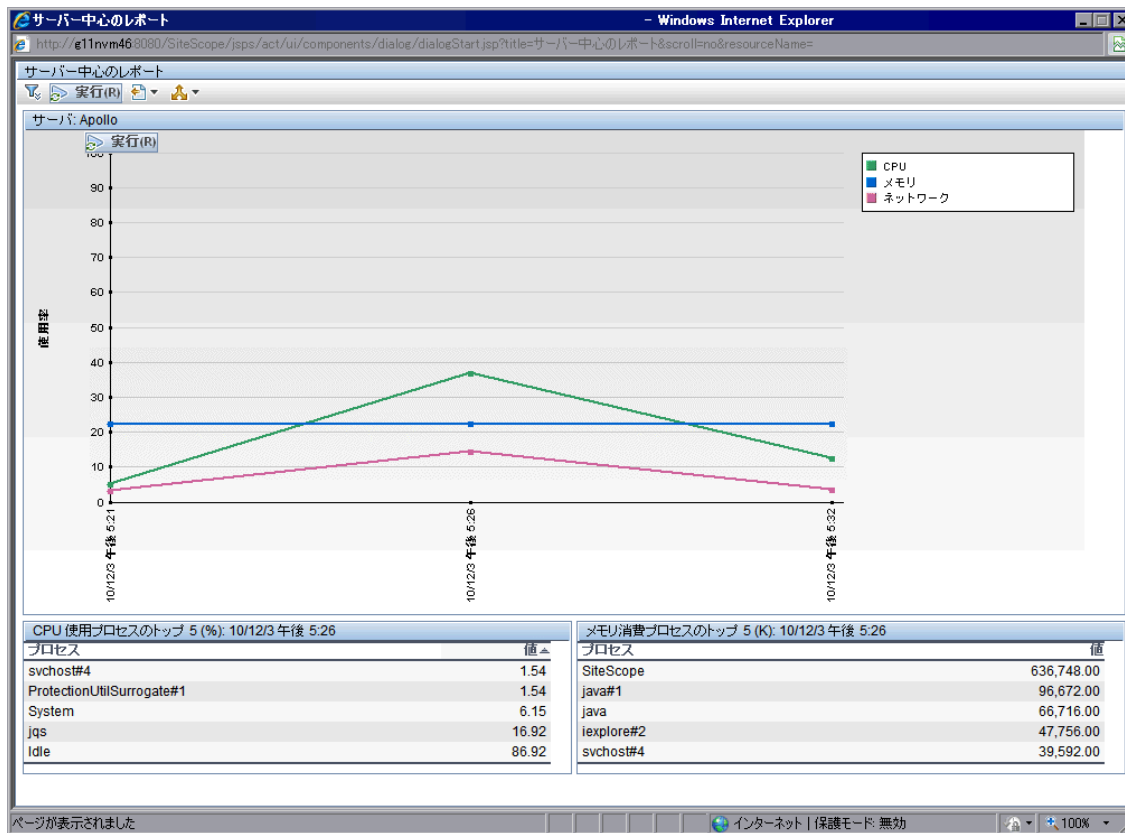
OS Type	サーバ中心の必須カウンタ
Microsoft Windows リソース・モニタのカウンタ	Memory\% Committed Bytes In Use
	Processor_Total\% Processor Time
Solaris プラットフォームの UNIX リソース・モニタのカウンタ	CPU utilization\%sys
	CPU utilization\%sys
	CPU utilization\%sys
	Memory\swap_avail
	Memory\swap_resv
AIX プラットフォームの UNIX リソース・モニタのカウンタ	Processor\Total\%sys
	Processor\Total\%usr
	Processor\Total\%wio
Linux プラットフォームの UNIX リソース・モニタのカウンタ	Memory\MemFree
	Memory\MemTotal
	Processor\Total\System
	Processor\Total\User
	Processor\Total\User low

モニタ定義のカウンタの選択の詳細については、次を参照してください。

- [Microsoft Windows Resources Monitor](#)(Microsoft Windows リソース・モニタ・カウンタの場合)
- [UNIX Resources Monitor](#)(Solaris, AIX, Linux プラットフォームの場合)

サーバ中心のレポート

このレポートには、選択したサーバの CPU 使用率、メモリ使用率、ネットワーク使用率の測定値が表示されます。



アクセス方法







次のどちらかを使用してレポートを生成できます。

- **[モニタ]** コンテキストを選択します。Microsoft Windows リソース・モニタまたは UNIX リソース・モニタの SiteScope ダッシュボードの **[ターゲット]** 列で、サーバ名のリンクをクリックします。
- モニタ・ツリーで、選択したモニタ、グループ、または SiteScope ルートを右クリックして、**[レポート]** > **[サーバ中心]** を選択します。[サーバ中心のレポート] ダイアログ・ボックスで、レポート生成の対象とするリモート・ターゲット (**[サーバ中心のレポートを有効化]** チェックボックスが選択されている Windows/UNIX リソース・モニタ) を選択し、**[実行]** ボタンをクリックします。

重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> このレポートは、[サーバ中心のレポートを有効化]が選択されている Microsoft Windows リソース・モニタまたは UNIX リソース・モニタによって監視されるサーバのみで利用可能です。 これらのモニタの該当するソリューション・テンプレートを使用して、モニタをデプロイすることを強くお勧めします。テンプレートは、適切な測定値カウンタとオプションが選択された状態で事前設定されています。 サーバ中心のレポートは、Firefox 2.x ではサポートされていません。 モニタに問題が発生して不適切なデータを返すと、そのデータ・ポイントはスキップされます。そのため、グラフに欠落したデータ・ポイントが含まれる場合があります。
関連タスク	1105ページ「サーバ中心のレポートの作成方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> 1104ページ「サーバ中心のレポートの生成」 1107ページ「サーバ中心のレポートの作成方法 - 使用例のシナリオ」

レポート設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
	[フィルタ]/[折りたたみ]レポート・フィルタ: レポートの時間範囲設定を表示または非表示にする場合にクリックします。
	実行 : 日付リンクに表示された日付範囲のレポートを作成します([フィルタ])。
	形式 : レポート・データをエクスポートするファイルの形式に合わせます。ファイルの形式を選択します。印刷用, CSV, Excel, XML のオプションがあります。
	エクスポート : レポート・データを電子メールでエクスポートします。ファイルを送信するオプションを選択します。HTML メール, HTML 添付, PDF のオプションがあります。 注 : エクスポート機能を使用するには、信頼されたサイトに SiteScope マシンを追加する必要があります。
	戻る : 現在表示している時間枠の1つ前の時間枠のレポートを表示します。 例 : [表示]ボックスの値が[日]である場合、このボタンをクリックすると、現在表示しているレポートの1日前のデータが表示されます。
	進む : 現在表示している時間枠の1つ後の時間枠のレポートを表示します。 例 : [表示]ボックスの値が[日]である場合、このボタンをクリックすると、現在表示しているレポートの1日後のデータが表示されます。

UI 要素	説明
ビュー	<p>レポートを表示する時間範囲。次の時間範囲を使用できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> カスタム(任意の範囲を設定できます) 時間, 日, 週 過去 1 時間, 過去 1 日, 過去 1 週間
開始/終了<日付リンク>	<p>[開始]リンクをクリックし、レポートの開始日付と時刻を設定します。[終了]リンクをクリックし、レポートの終了日付と時刻を設定します。カレンダーには次のボタンがあります。</p> <ul style="list-style-type: none"> OK: 選択した日付の日付リンクを更新してカレンダーを閉じます。 現在: カレンダーで今日の日付を選択します。 キャンセル: 変更せずにカレンダーを閉じます。

レポートの内容

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
<ツールチップ>	<p>グラフのデータ・ポイント上にポイントを置くと、選択した測定値の選択した時間での使用率の値、および日付と時間を表示する、ツールチップが表示されます。</p>
サーバ名	<p>使用率グラフの上部に表示されるサーバの名前。</p>
使用率グラフ	<p>経過時間ごとの使用率を表示します。CPU 使用率、メモリ使用率、ネットワーク使用率が異なる色の線で表示されます。3 つのすべての測定値は、パーセント単位(つまり、100% の使用率に対する割合)です。</p> <p>グラフのデータ・ポイントをクリックし、より短い時間範囲に焦点を当てることができます。データ・テーブルが更新され、選択したデータ・ポイントの時間の結果が表示されます(同じ時間の 3 つのデータ・ポイントのいずれかをクリックすると、レポートは同じように更新されます)。使用率が非常に高いポイントがある場合に、これを活用できます。そのポイントをクリックすることによって、高い使用率の原因を特定できます。</p> <p>注: ネットワーク使用率は、Windows サーバに対してのみサポートされています。</p>
CPU 使用プロセスのトップ 5 テーブル	<p>グラフの任意のポイントでの CPU 使用率のトップ 5 プロセスを表示します。このテーブルには、プロセス名と、利用可能な合計 CPU 処理の割合として CPU 使用率が表示されます。</p>
メモリ消費プロセスのトップ 5 テーブル	<p>グラフの任意のポイントでのメモリ消費のトップ 5 プロセスを表示します。このテーブルには、プロセス名とメモリ消費の値(キロバイト)が表示されます。</p>

第75章

SiteScope サーバの状況

本章の内容

概念

- 1115ページ「SiteScope 状況の概要」
- 1117ページ「SiteScope 状況のグループ」
- 1119ページ「BAC 統合設定モニタ」
- 1120ページ「BAC 統合統計モニタ」
- 1121ページ「接続統計モニタ」
- 1122ページ「ダイナミック・モニタリング統計」
- 1123ページ「ライセンス使用状況モニタ」
- 1124ページ「ログ・イベント・モニタ」
- 1125ページ「負荷チェッカー・モニタの監視」
- 1126ページ「SiteScope サーバの状況モニタ」

タスク

- 1127ページ「SiteScope の状況監視データの分析方法」

参照情報

- 1130ページ「SiteScope の状況のユーザ・インタフェース」

SiteScope 状況の概要

SiteScope 状況は、SiteScope のパフォーマンスと可用性に関する情報を表示する、特別に設計されたモニタのグループです。状況モニタでは、SiteScope のリソースの使用状況、主要なプロセス、モニタ負荷、サーバのパラメータ、および主要な構成ファイルの整合性に関するデータが取得されます。

標準設定では、毎日のモニタ・ログに SiteScope 状況の監視データが記録され、SiteScope のパフォーマンスと運用状況のレポートを作成できます。これらのログ・ファイルは、SiteScope のパフォーマンスに関する問題の把握、モニタや警告に関する問題のトラブルシューティング、SiteScope の管理アクションの確認に役立ちます。たとえば、SiteScope の監査ログには、モニタ、テンプレート、警告の作成など、新しいユーザ・インタフェースで実行された設定変更が含まれます。

SiteScope 状況の監視とともに、SiteScope 進捗レポートでは、SiteScope アプリケーションのパフォーマンスを監視するために使用する、鍵となるいくつかの指標が提供されます。

本項の内容

- [1115ページ「スキップされるモニタ・イベント」](#)
- [1116ページ「データのレポートの問題」](#)

スキップされるモニタ・イベント

スケジュールされている次の実行時までにはモニタのアクションが完了しなかった場合、SiteScope モニタはスキップとして報告されます。これは、データベースの照会、マルチページ URL シーケンスの処理、スクリプトの実行の待機、ハングアプリケーションに対する待機など、複雑なアクションが実行されるモニタで発生する場合があります。

たとえば、8 ページの一連の Web ページを通過するように設定されている URL シーケンス・モニタがあるとしたします。このシーケンスには、応答時間が遅い可能性がある検索の実行が含まれます。モニタは 60 秒に 1 回実行されるように設定されています。システムの応答が良好な場合、モニタの実行は 45 秒で完了できます。ただし、検索要求が長くかかる場合もあり、その場合はトランザクションが完了するまでに最長で 90 秒かかります。この場合、SiteScope でスケジュールされているモニタの次の実行時までにはモニタが完了しません。SiteScope ではこれを検出し、**SiteScopeskip_monitor.log** にイベントが記録されます。SiteScope ログ・イベント・モニタでは、これを検出し、エラー状態を知らせます。ログ・ファイルの詳細については、[1191ページ「\[ログファイル\] ページ」](#)を参照してください。

モニタがプロセス・プールからのプロセスを必要とするモニタ・タイプで、プロセス・プールの制限に達した場合にも、モニタがスキップされることがあります。一般に発生する可能性は高くありませんが、監視負荷が高い一部の状況で発生することがあります。SiteScope の状況ログ・イベント・モニタでは、プロセス・プール・イベントも監視されます。モニタがスキップされると、前の実行が完了していないために、または応答しないアプリケーションによってハングしたためにモニタの実行が一時的に停止されるときに、データの損失を引き起こす可能性があります。モニタのスキップは SiteScope の自動的な停止、再起動も引き起こし、このようなイベントも SiteScope の状況ログ・イベント・モニタによって監視されます。再起動は、問題を解消し、モニタをリセットするために行われます。ただし、これは監視範囲およびデータのギャップにつながる可能性があります。多くの場合、モニタに設定されている実行頻度を調整、または適切なタイムアウト値を指定すると、モニタのスキップの問題を修正できます。

注:

- 最大許容数を越えたためにスキップしたモニタを自動的に無効にする設定を有効にできません。これが発生すると、SiteScope はエラーを出力してシャットダウンし、無効イベントを知らせるために SiteScope 管理者にモニタのスキップについて電子メールを送信します。この設定を

有効にするには、プリファレンス・ビューで **[インフラストラクチャ プリファレンス]** をクリックして、**[モニタ設定をスキップ]** パネルを展開します。**[スキップされるモニタをシャットダウン]** チェック・ボックスを選択します。モニタを無効にする期間も決定できます。スキップされるモニタの設定の詳細については、[669 ページ「\[インフラストラクチャ プリファレンス\] ページ」](#) を参照してください。

- 利用可能な最大プロセス数を制御できます。この設定は、モニタ・パフォーマンスの問題がモニタ設定の調整によって解決されない場合にのみ変更してください。初期値は 1 プールあたり 200 プロセスです(標準設定の 1 プールあたりの最大プロセス数は 20)。この設定を変更するには、プリファレンス・ビューで **[インフラストラクチャ プリファレンス]** をクリックして、**[一般設定]** パネルを展開します。**[プールあたりの最大プロセス数]** ボックスでプロセス数を設定します。

データのレポートの問題

SiteScope の状況モニタは、BSM インストールへの SiteScope モニタおよび設定データの転送に関する問題を示すイベントをレポートするように設定されています。BSM へのデータのレポートのトラブルシューティングの詳細については、[251 ページ「トラブルシューティングと制限事項」](#) を参照してください。

SiteScope 状況のグループ

SiteScope の状況 モニタでは、モニタ設定の問題や SiteScope サーバ負荷の特定に役立てるために、モニタ自体の環境の主要な側面を監視できます。また SiteScope では、BSM と接続しているときのその接続および関連するデータ・イベントを監視できます。

通常のモニタと同じように、状況モニタは頻度およびしきい値を再設定するために編集できます。管理者は、追加のサーバおよび環境を対象とする新しいモニタを追加することによって状況グループを拡張できます。

状況モニタ・グループは、メインの SiteScope コンテナ内に状況アイコンとして表示されます。状況モニタ・グループの内容を表示するには、[状況] コンテナをクリックします。

SiteScope の状況の監視に含まれるモニタ・タイプは次のとおりです。

モニタ・タイプ	標準設定 の名前	説明
1119ページ 「BAC 統合 設定 モニタ」	BSM 統 合 設 定	SiteScope を BSM のデータ・コレクタとして設定するときに、SiteScope と BSM の間の設定が正しいかどうかをチェックします。
1120ページ 「BAC 統合 統計 モニタ」	BSM 統 合 統 計	SiteScope を BSM のデータ・コレクタとして設定するときに、SiteScope と BSM の間のトラフィック量をチェックします。
1121ページ 「接続統計モ ニタ」	接続統計 モニタ	リモート UNIX または Windows サーバと接続するために使用するとき、SSH および Telnet 接続の状態をチェックします。Perfex、Perfex ディスパッチャ統計、および各 perfex プールの状態もチェックします。
1122ページ「ダ イナミック・モニ タリング統計」	ダイナ ミック・モニ タリング統計	ダイナミック・モニタを定義したら、ダイナミック・モニタリング・フレームワークのパフォーマンスをチェックします。
1123ページ「ラ イセンス使用 状況 モニタ」	ライセンス 使用状況 モニタ	SiteScope ライセンス・ポイントの可用性と使用状況をチェックします。
1124ページ「ロ グ・イベント・ モニタ」	ログ・イベ ント・チェッ カー	SiteScope エラー・ログに記録された特定のイベントをチェックします。
1125ページ 「負荷チェッ カー・モニタの 監視」	モニタ負 荷チェッ カー	実行中または実行待機中のモニタ数に関するデータをチェックします。

モニタ・タイプ	標準設定 の名 前	説 明
1126ページ 「SiteScope サーバの状況 モニタ」	SiteScope サーバの 状況	SiteScope が実行されているサーバの多数のサーバ・プロセスおよびリソースをチェックします。
1143ページ 「[SSL 証書 の状況モニタ] ページ」	SSL 証書 の状況	標準設定のキーストアにある SSL 証明書の状態をチェックします。

BAC 統合設定モニタ

SiteScope を BSM のデータ・コレクタとして統合する場合、BSM 設定との SiteScope の統合が正しいかどうかをこの状況モニタで追跡できます。このモニタは、無効なパス、内部名、または ID が含まれる BSM にレポートされるグループ、モニタ、測定値の数を表示するのに便利です。また、重複する Topaz ID の数、および Topaz ID が(-1)のインスタンスも表示されます。

モニタ設定の詳細については、1130ページ「[\[BAC Integration Configuration Monitor\] ページ](#)」を参照してください。

トラブルシューティングと制限事項

本項では、SiteScope サーバの状況を使って作業する場合のトラブルシューティングと制限事項について説明します。

- 重複する BSM ID や BSM ID == (-1) を使用するオブジェクトがある場合：
 - JMX コンソール(< SiteScope のルート・ディレクトリ> \java\bin\jconsole.exe)を開き、[ポート] フィールドに「28006」と入力します。
 - [MBeans] タブで、`com.mercury.sitescope/Integration/Bac/Tools/BacIntegrationToolsJMX` を選択します。
 - 重複する BSM ID を使用するオブジェクトの場合は、`fixDuplicateBACConfiguration()` をアクティブ化します。
 - BSM ID == (-1) を使用するオブジェクトの場合は、`fixMinusOneBACConfiguration()` をアクティブ化します。
 - 新しい設定を BSM に送信するために、`softSync()` をアクティブ化することもお勧めします。
- 測定値に誤ったカテゴリ ID が使用されている場合は、SiteScope を再起動します。

BAC 統合統計モニタ

BAC 統合統計モニタでは、BSM の状況がチェックされます。SiteScope を BSM のデータ・コレクタとして統合する場合、SiteScope と BSM の間のトラフィック量をこの状況モニタで追跡できます。測定値は、SiteScope から BSM に毎分送信されます。モニタの設定の詳細については、[1131 ページ「\[BAC 統合統計モニタ\] ページ」](#)を参照してください。

接続統計モニタ

接続統計モニタでは、全体的な接続ハンドルの概要が表示されます。接続統計モニタは、SSH および Telnet 接続の動作についてのデータと、Perfex および Perfex_dispatcher プールの統計情報を収集します。このモニタは、接続問題やリモートサーバの設定問題を分析するのに便利です。モニタ設定の詳細については、[1132 ページ「\[Connection Statistics Monitor\] ページ」](#)を参照してください。

ダイナミック・モニタリング統計

ダイナミック・モニタを定義すると、ダイナミック・モニタリング統計に、ダイナミック・モニタリング・フレームワークのパフォーマンスの概要が表示されます。この概要は、ダイナミック・モニタリング・カウンタおよびしきい値を自動的にアップデートするために、ダイナミック・モニタリング・メカニズムを使用する場合、パフォーマンスを表示し問題を分析するのに便利です。モニタ設定の詳細については、[1134 ページ「\[ダイナミック モニタリング統計\] ページ」](#)を参照してください。

ライセンス使用状況モニタ

ライセンス使用状況モニタは、ライセンス・ポイント使用状況に関する情報を示します。このモニタは、SiteScope で利用可能な、必要な、および消費されたライセンス・ポイントの合計数、残りの合計日数、未使用のライセンス・ポイント数(%), ならびに SiteScope に使用されるポイントの数が利用可能なポイントの数を超えた場合の状態を表示します。また、使用する OS インスタンス拡張ライセンス・ポイントの数、および OS インスタンス拡張ライセンスを使用して保存するポイントの数も指定します。

モニタの設定の詳細については、[1136 ページ「\[ライセンス使用状況モニタ\] ページ」](#)を参照してください。

ログ・イベント・モニタ

ログ・イベント・モニタは、SiteScope エラー・ログ(**error.log**)に特定のイベントに関するエラーを書き込む SiteScope モニタ・グループと同じです。これらのイベントには、モニタがスキップされたことを示すログ・エントリや、別のアプリケーションへのデータのレポートで問題があったことを示すログ・エントリがあります。モニタの設定の詳細については、[1136 ページ「\[ログ イベント 状況 モニタ\] ページ」](#)を参照してください。

負荷チェッカー・モニタの監視

負荷チェッカー・モニタの監視では、実行中モニタ数と実行待機中モニタ数が監視されます。監視のパフォーマンスおよび継続性を維持するためにモニタ負荷の監視は重要です。待機中モニタ数が実行中モニタ数に近づいているか超えると、待機中モニタ数を減らすためにモニタ設定を調整する必要があります。これを行うには、一般的に一部のモニタの実行頻度を減らします。モニタの設定の詳細については、[1138 ページ「\[モニタ負荷チェッカー モニタ\] ページ」](#)を参照してください。

SiteScope サーバの状況モニタ

SiteScope サーバの状況モニタは、SiteScope が実行されているサーバのサーバ・リソースを監視する SiteScope モニタと同じです。これには、CPU、ディスク領域、メモリ、主要プロセスのモニタが含まれます。SiteScope サーバのリソース使用率に関する問題は、設定に問題があるモニタが原因であったり、単に特定の SiteScope がパフォーマンス能力の上限に達していることを示していることもあります。たとえば、SiteScope による CPU 使用率が高い場合、実行中のモニタの総数が制限に到達しようとしていることを示す場合があります。ディスク領域使用率が高い場合、SiteScope 監視データのログが、ローカル・ディスク・ドライブの容量を超えようとしていることを示す場合があります。SiteScope データのログ記録オプションの詳細については、[737 ページ「ログ・プリファレンス」](#)を参照してください。

モニタの設定の詳細については、[1139 ページ「\[SiteScope サーバの状況モニタ\] ページ」](#)を参照してください。

SiteScope の状況監視データの分析方法

このタスクでは、SiteScope の状況監視データを分析し、SiteScope ログ・ファイルとサーバ統計を表示する手順について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- 1127ページ「前提条件」
- 1127ページ「SiteScope の状況モニタのデプロイ」
- 1127ページ「SiteScope の状況モニタの表示」
- 1128ページ「SiteScope ログ・ファイルの表示」
- 1128ページ「モニタ・パフォーマンス・データの表示」

1. 前提条件

ログ・ファイルおよび進捗レポートにアクセスするには、適切なユーザ権限が必要です。

- a. 左側の表示枠で[プリファレンス]をクリックして、[ユーザ管理プリファレンス]を選択します。
- b. ユーザ名を右クリックして、[ユーザの編集]を選択します。
- c. [Edit User Profile]ダイアログ・ボックスで[権限]を展開します。
- d. [その他]セクションで[サーバ統計の表示]と[ログの表示]が選択されていることを確認します(これらの設定は標準設定で選択されます)。

2. SiteScope の状況モニタのデプロイ

SiteScope を BSM のシステム可用性管理にインポートするときに SiteScope の状況モニタがない場合は、モニタをデプロイする必要があります。

タスクの詳細については、1129ページ「SiteScope の状況モニタのデプロイ」を参照してください。

注: SiteScope の状況モニタは SiteScope がデプロイされるときに自動的に有効になるので、通常は存在します。

3. SiteScope の状況モニタの表示

SiteScope の状況モニタで収集されたデータは、SiteScope ダッシュボードで表示できます。

ユーザ・インタフェースの詳細については、1130ページ「SiteScope の状況のユーザ・インタフェース」を参照してください。

例: SiteScope ダッシュボード内の状況モニタ

名前	状態	タイプ	ターゲット...	サマリ	更新日時	詳細			
選択したノード									
Health	✖	グループ		グルー...	10/12/3 ...				
グループ (0 件のうち 0 ...)									
モニタ (7 件のうち 7 件)									
Log Event Checker	✖	ログイベント...		*skippe...	10/12/3 ...				
Monitor Load Checker	✔	モニタ負荷		Current ...	10/12/3 ...				
BAC Integration Statistics	✔	BAC 統合統計		Currentl...	10/12/3 ...				
Health of SiteScope Ser...	✔	負荷モニタの...	SiteSco...	Network...	10/12/3 ...				
BAC Integration Configu...	✔	BACIntegratio...		*SiteSco...	10/12/2 ...				
SSL Certificates State	✔	SSLCertificate...		Expired ...	10/12/2 ...				

4. SiteScope ログ・ファイルの表示

[サーバ統計] コンテキストの[ログファイル] ページで、さまざまな SiteScope ログ・ファイルを表示できます。

ユーザ・インタフェースの詳細については、1191 ページ「[ログファイル] ページ」を参照してください。

例: [ログファイル] タブ上のログ・ファイル

ログ ファイル			
タイプ	ログ ファイル	サイズ	最終更新日
その他のログ	alert.log	1 K	11/6/2 14:13
その他のログ	amazon_ec2_integrat...	0 バイト	11/5/27 14:25
監査ログ	audit.log	516 バイト	11/6/3 13:50
監査ログ	audit.log.2011-05-27	73 バイト	11/5/27 14:25
監査ログ	audit.log.2011-05-30	86 バイト	11/5/30 16:32
監査ログ	audit.log.2011-06-01	470 バイト	11/6/1 18:01
監査ログ	audit.log.2011-06-02	1 K	11/6/2 14:45
その他のログ	authentication.log	0 バイト	11/5/27 14:25
その他のログ	baselining.log	0 バイト	11/5/27 14:25
その他のログ	data_integration.log	0 バイト	11/5/27 14:25
その他のログ	downtime.log	0 バイト	11/5/27 14:25
その他のログ	dynamic_monitoring_...	0 バイト	11/5/27 14:25
エラー ログ	error.log	8 K	11/6/3 13:44
その他のログ	ha.log	223 バイト	11/5/27 14:25
その他のログ	HPSiteScopeOperatio...	0 バイト	11/5/27 14:25
その他のログ	HPSiteScopeOperatio...	0 バイト	11/5/27 14:25

5. モニタ・パフォーマンス・データの表示

[サーバ統計] コンテキストで、SiteScope サーバの負荷および最近実行されたモニタのリストを表示できます。

概念の詳細については、1145 ページ「サーバ統計の使用」を参照してください。

SiteScope の状況モニタのデプロイ

このタスクでは、SiteScope を BSM のシステム可用性管理 にインポートしたときにモニタがなかった場合に、SiteScope インストールに SiteScope の状況モニタをデプロイする方法について説明します。

注: このタスクは高度なタスクのうちの 1 つです。詳細については、[1127 ページ「SiteScope の状況監視データの分析方法」](#)を参照してください。

SiteScope の状況モニタを SiteScope インストールにデプロイするには、次の手順を実行します。

1. 状況モニタを表示する SiteScope コンテナを開きます。SiteScope に状況モニタ・グループ・コンテナが含まれていることを確認します。

注: 状況モニタ・グループ・コンテナは、状況インジケータ・アイコンで識別されます。

2. モニタ・ツリーで **[Health]** テンプレートを見つけます。クリックしてコンテナの内容を展開します。利用可能な状況モニタのテンプレートが表示されます。
3. 監視対象の SiteScope が実行されているオペレーティング・システムの状況モニタ・テンプレートを選択します。次を選択できます。
 - UNIX 状況モニタ
 - Windows 状況モニタ
4. テンプレート・アイコンを右クリックして、ショートカット・メニューから **[コピー]** を選択します。
5. 状況モニタのデプロイ先の SiteScope の **[Health]** モニタ・グループ・コンテナを右クリックして、**[貼り付け]** を選択します。選択したテンプレートのモニタが設定され、選択した SiteScope サーバにデプロイされます。

SiteScope の状況のユーザ・インタフェース

本項の内容

- [1130ページ「\[BAC Integration Configuration Monitor\] ページ」](#)
- [1131ページ「\[BAC 統合統計モニタ\] ページ」](#)
- [1132ページ「\[Connection Statistics Monitor\] ページ」](#)
- [1134ページ「\[ダイナミック モニタリング統計\] ページ」](#)
- [1139ページ「\[SiteScope サーバの状況モニタ\] ページ」](#)
- [1136ページ「\[ライセンス使用状況モニタ\] ページ」](#)
- [1136ページ「\[ログ イベント状況モニタ\] ページ」](#)
- [1138ページ「\[モニタ負荷チェッカー モニタ\] ページ」](#)
- [1143ページ「\[SSL 証書の状態モニタ\] ページ」](#)

[BAC Integration Configuration Monitor] ページ

このページでは、BSM 設定との SiteScope の統合が正しいかどうかをチェックできます。

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで [Health] を展開して、 [BAC Integration Configuration] をクリックします。
重要な情報	監視データは、SiteScope が BSM のデータ・コレクタとして統合される場合にのみ関係します。
関連情報	<ul style="list-style-type: none">• 1119ページ「BAC 統合設定モニタ」• モニタ固有の設定を次に示します。すべてのモニタに共通する設定の詳細については、367ページ「共通モニタ設定」を参照してください。

メイン設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
カウンタ	<ul style="list-style-type: none"> • Total Groups : データを BSM に報告するグループの総数。 • Total Monitors : データを BSM に報告するモニタの総数。 • Duplicate BSM ID : BSM に報告された重複する BSM ID の数。すべての SiteScope オブジェクトには、一意の BSM ID があります。2 つのオブジェクトで同じ ID が使用されている場合、データを BSM に送信できるのは、これらのオブジェクトのうちの 1 つのみです。この問題のトラブルシューティングについては、1119 ページ「トラブルシューティングと制限事項」を参照してください。 • BSM ID == (-1) : すべての SiteScope オブジェクトには、一意の BSM ID があります。SiteScope オブジェクトの ID 値が(-1)の場合、そのデータは BSM に送信されません。この問題のトラブルシューティングについては、1119 ページ「トラブルシューティングと制限事項」を参照してください。 • Group with invalid path : SiteScope グループに有効なパスがない場合、そのグループは BSM に送信されません。 • Groups with duplicate name : SiteScope グループに一意の内部名がない場合、そのグループは BSM に送信されません。 • Monitor with invalid path : SiteScope モニタに有効なパスがない場合、そのモニタは BSM に送信されません。 • Monitors without internal ID : SiteScope モニタに一意の内部 ID が含まれていない場合、そのモニタは BSM に送信されません。 • Monitors without internal name : SiteScope モニタに有効な内部名が含まれていない場合、このモニタは BSM に送信されません。 • Measurements with wrong category ID : SiteScope 測定値に有効なカテゴリ ID が含まれていない場合、その測定値は BSM に送信されません。この問題のトラブルシューティングについては、1119 ページ「トラブルシューティングと制限事項」を参照してください。 • Target with BSM ID == (-1) : すべてのリモート・ターゲットには、一意の BSM ID があります。リモート・ターゲットの ID 値が(-1)の場合、そのデータは BSM に送信されません。この問題のトラブルシューティングについては、1119 ページ「トラブルシューティングと制限事項」を参照してください。

[BAC 統合統計モニタ] ページ

このページでは、SiteScope と BSM の間のトラフィック量をチェックできます。

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで [Health] を展開して、[BAC Integration Statistics] をクリックします。
重要な情報	監視データは、SiteScope が BSM のデータ・コレクタとして統合される場合にのみ関係します。
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> • 1120 ページ「BAC 統合統計モニタ」 • モニタ固有の設定を次に示します。すべてのモニタに共通する設定の詳細については、367 ページ「共通モニタ設定」を参照してください。

メイン設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
カウンタ	<ul style="list-style-type: none">• Currently Logging to Business Service Management : 現在 BSM にログ記録されている 1 分あたりの測定値の数を表示します。• Number of Topology Scripts in Queue : 実行待機中のトポロジ・スクリプトの数を表示します。これらのスクリプトによって、BSM にトポロジ・データが転送されます。これらのスクリプトは SiteScope で設定変更があるたびに実行する必要があります。キューは、SiteScope が最初に BSM に登録される時、または SiteScope で多数の設定変更が行われたときに増えます。

[Connection Statistics Monitor] ページ

このページには、全体的な接続ハンドルの概要が表示されます。接続統計モニタは、SSH および Telnet 接続の動作についてのデータと、Perfex および Perfex_dispatcher プールの統計情報を収集します。このモニタは、接続問題やリモート・サーバの設定問題を分析するのに便利です。

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで [Health] を展開して、[Connection Statistics Monitor] をクリックします。
関連情報	<ul style="list-style-type: none">• 1121 ページ「接続統計モニタ」• モニタ固有の設定を次に示します。すべてのモニタに共通する設定の詳細については、367 ページ「共通モニタ設定」 を参照してください。

メイン設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
SSH Connection Counters	<ul style="list-style-type: none"> 開いた合計 : 開いた SSH 接続の総数。この数が[現在割り当て済みのリソース]の数を大きく上回っている場合は、設定の問題を示しています。次の状況が発生していないかを確認する必要があります。 <ul style="list-style-type: none"> 接続キャッシュが無効になった 不正なログインまたはパスワードが使用された リモート・サーバ・タイムアウトが短すぎる 閉じた合計 : 最後に SiteScope が再起動されてから閉じた SSH 接続の数。 V1 を開くのに失敗した合計 : SSH バージョン 1 を使用して開くことに失敗した SSH 接続の数。標準設定では、V2 での接続を試みる前に、V1 を使用して接続が試行されます。この数が大きい場合は、問題が発生しているリモート・サーバで[SSH バージョン 2 のみを使用]オプションを選択することをお勧めします。 V2 を開くのに失敗した合計 : SSH バージョン 2 を使用して開くことに失敗した SSH 接続の数。この数が大きい場合は、リモート・サーバで正しいログインとパスワードが使用されたことを検証し、リモート・サーバ上の SSH バージョンを検証します(V1 または V2)。 再利用 : 最後に SiteScope が再起動されてから再利用された SSH 接続の数。 現在割り当て済みのリソース : 現在開いている SSH 接続の数。 現在使用中 : 現在開いていて、実行中のモニタで使用されている SSH 接続の数。 最後の 10 分間の平均呼び出し時間 : 最後の時間の平均呼び出し時間。 合計平均呼び出し時間 : 平均呼び出し時間。
Telnet Connection Counters	<ul style="list-style-type: none"> 開いた合計 : 最後に SiteScope が再起動されてから開いた telnet 接続の数。 閉じた合計 : 最後に SiteScope が再起動されてから閉じた telnet 接続の数。 再利用 : 最後に SiteScope が再起動されてから再利用された telnet 接続の数。 現在割り当て済みのリソース : 現在開かれている telnet 接続の数。 現在使用中 : 現在開かれていて、実行中のモニタで使用されている telnet 接続の数。

UI 要素	説明
Perfex/Perfex dispatcher Connection Counters	<ul style="list-style-type: none"> • アイドル・プロセス: 現在アイドル状態のプロセスの数。 • 使用中プロセス: 現在使用中状態のプロセスの数。 • プロセス合計: プロセスの総数(アイドル・プロセスと使用中プロセスの合計)。 • プロセス プール キューの長さ: 利用可能な perfex の現在待機中のモニタ数。この値は、perfex で実行中のモニタ数が多すぎる、または perfex プールが小さすぎることを示す場合があります。 • 空きプロセスの平均待機時間: プロセスが利用可能になるまでの平均待機時間(ミリ秒単位)。この値が 30,000 ミリ秒(30 秒)を超えると、それ以降のモニタが失敗します。平均待機時間が長い場合は、プールのプロセス数を増やす必要があることを示します。 • 平均実行時間: perfex の実行にかかる平均時間(ミリ秒単位)。ここでは、次を示します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ ネットワーク速度。要求を送信し、サーバから応答を受信するのにかかる時間。 ■ perfex の可用性。実行を完了し、perfex をプールに戻すまでにかかる平均時間。 ■ perfex を使用しているモニタ数。 • サーバタイムアウトを待機するプロセス: 呼び出しタイムアウトを過ぎたプロセス、接続を閉じるためにサーバ・タイムアウトを待機しているプロセス、またはプールに戻るために応答を待機しているプロセスの数。

[ダイナミック モニタリング統計] ページ

このページには、ダイナミック・モニタリング・メカニズムを使用してダイナミック・モニタリングのカウントとしい値を自動的に更新するときに統計が表示されます。統計には、発生した特定のダイナミック・モニタリング・アクションの合計回数と、最後の 10 分間の発生回数が表示されます。このモニタはダイナミック・モニタリングのパフォーマンスを表示し問題を分析するのに便利です。

アクセス方法	[モニタ]コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで[Health]を展開して、[Dynamic Monitoring Statistics]をクリックします。
重要な情報	この情報は[ダイナミック モニタリング]タブをクリックして、[サーバ統計]コンテキストからも入手できます。
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> • 1122ページ「ダイナミック・モニタリング統計」 • モニタ固有の設定を次に示します。すべてのモニタに共通する設定の詳細については、367ページ「共通モニタ設定」を参照してください。

メイン設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
定義: *ダイナミック・タスク: サーバからカウンタを取得し、モニタに定義されたパターンに一致するカウンタをその中から見つけ出すという定期的なアクション。 **カウンタ・ファイル: カウンタは < SiteScope のルート・ディレクトリ > \templates.application フォルダの下に配置される xml ファイルに保存されます。	
平均タスク実行時間(ミリ秒)	ダイナミック・タスク* の実行を開始するためにかかった平均時間(ミリ秒)。
最後の 10 分間の平均タスク実行時間(ミリ秒)	最後の 10 分間にダイナミック・タスク* の実行を開始するためにかかった平均時間(ミリ秒)。
平均タスク待機時間(ミリ秒)	タスクを受け取ったときからダイナミック・タスク* の実行を開始するためにかかった平均時間(ミリ秒)。
最後の 10 分間の平均タスク待機時間(ミリ秒)	最後の 10 分間にタスクを受け取ったときからダイナミック・タスク* の実行を開始するためにかかった平均時間(ミリ秒)。
最後 10 分間のダイナミック・モニタリング・フレームワークと同時実行のユーザ変更の間のクラッシュの数	最後の 10 分間に、(ユーザ変更をオーバーライドしないように) ユーザが同時実行の変更を実行した結果としてダイナミック・モニタリング・フレームワークの変更を保存できない回数。
最後の 10 分間にカウンタのマッチングの最大数を越えた回数	最後の 10 分間にサーバからパターン用のカウンタのマッチングが限度を超えた回数。
最後の 10 分間にサーバからのカウンタをマッチングできなかった回数	最後の 10 分間にサーバからパターン用のカウンタをマッチングできなかった回数。
最後の 10 分間にファイルからカウンタを抽出できない回数	最後の 10 分間に、カウンタ・ファイル** からカウンタを抽出できない回数。
最後の 10 分間にサーバからカウンタを検索できない回数	最後の 10 分間にサーバからカウンタを検索できない回数。
最後 10 分間にリソース消耗のためにダイナミック・タスクを実行できない回数	最後の 10 分間に、最大ダイナミック・モニタリング・フレームワークしきい値プールとキュー・サイズの限界に達したためダイナミック・タスク* を実行できない回数。 [プリファレンス] > [インフラストラクチャプリファレンス] > [ダイナミック モニタリング設定] でこれらの設定を実行できます。詳細については、669 ページ「[インフラストラクチャプリファレンス] ページ」を参照してください。
最後の 10 分間に変更を保存できない回数	最後の 10 分間に永続 SiteScope にカウンタ変更を保存できない回数。

UI 要素	説明
最後の 10 分間に保存されていないカウンタ・ファイル数	最後の 10 分間に既存のカウンタ・ファイル**を削除, または新しいカウンタ・ファイル保存できない回数。

[ライセンス使用状況モニタ] ページ

このページでは, ローカルの SiteScope インストールの SiteScope ライセンス・ポイントの可用性および使用状況をチェックできます。

アクセス方法	[モニタ]コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで[Health]を展開して, [License Usage Monitor]をクリックします。
関連タスク	1127ページ「SiteScope の状況監視データの分析方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none">1123ページ「ライセンス使用状況モニタ」モニタ固有の設定を次に示します。すべてのモニタに共通する設定の詳細については, 367ページ「共通モニタ設定」を参照してください。

モニタ負荷モニタの設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細	しきい値
カウンタ	% ライセンス・ポイント・フリー	< 10% フリーの場合, エラー < 30% フリーの場合, 警告
	ライセンスの残り日数	< 10 日の場合, エラー < 30 日の場合, 警告
	オーバーライセンス状態	「true」の場合, エラー
	保存された合計 OS インスタンス・ライセンス・ポイント数	
	利用可能な合計 OS インスタンス・ライセンス	
	利用できる合計ライセンス・ポイント	
	消費された合計ライセンス・ポイント	
	必要な合計ライセンス・ポイント	
	状態	「OK」の場合, エラー 「OK」の場合, 正常

[ログイベント状況モニタ] ページ

このページでは, ローカルの SiteScope インストールの **error.log** ファイルで特定のイベントを監視できます。これらのイベントには, モニタがスキップされたことを示すログ・エントリや, 別のアプリケーションへの

データのレポートで問題があったことを示すログ・エントリがあります。

アクセス方法	[モニタ]コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで[Health]を展開して、[Log Event Checker]をクリックします。
関連タスク	1127ページ「SiteScope の状況監視データの分析方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> 1124ページ「ログ・イベント・モニタ」 モニタ固有の設定を次に示します。すべてのモニタに共通する設定の詳細については、367ページ「共通モニタ設定」を参照してください。

ログ・イベント状況モニタの設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
カウンタ	<ul style="list-style-type: none"> skipped #1 : モニタがスケジュールされていた実行を 1 回スキップしました。 skipped #2 : モニタがスケジュールされていた実行を 2 回スキップしました。 skipped #3 : モニタがスケジュールされていた実行を 3 回スキップしました。 skipped #4 : モニタがスケジュールされていた実行を 4 回スキップしました。 skipped #5 : モニタがスケジュールされていた実行を 5 回スキップしました。 SiteScope is shutting down : SiteScope がシャットダウンしました。 Reached the limit of processes in the process pool。プロセス・プールから要求されたプロセス数が、プールで利用可能なプロセス数を超えています。 Error(エラー)。 data reporter failed to report chunk of data。BSM への SiteScope モニタ測定値データの転送で障害が発生しました。 Error(エラー)。 config reporter failed to report chunk of data。BSM のシステム可用性管理への SiteScope 設定データの転送で障害が発生しました。 Error。HPBusiness Service Management failed to process data : SiteScope から送信されたデータの処理で障害が発生したことが BSM からレポートされました。

UI 要素	説明
カウンタ	<ul style="list-style-type: none"> • Error. CacheSender. Got to the max number of cached files : SiteScope は BSM への転送待機中にキャッシュ・データ・ファイルの最大数に達しました。これは、SiteScope と BSM の間のデータ転送が中断された場合に発生することがあります。 • Error. CacheSender. Got to the max old dir size : BSM への転送待機中にキャッシュ・データ・ファイルの最大ディレクトリ・サイズに達しました。これは、SiteScope と BSM の間のデータ転送が中断された場合に発生することがあります。 • HPBusiness Service Management SEVERE : SEVERE ステータスのデータ転送または処理障害が BSM からレポートされました。 • Commit verification failed。 • Error loading monitor。 • Error contacting mirror server。 • Error:open SSH connections limit reached。 • Error:failure in baseline process。 • Error:failed to parse rule。 • Topology Reporter failed to report。
カウンタ値のリセット	モニタのカウンタ値が 0 にリセットされます。

[モニタ負荷チェッカー モニタ] ページ

このページでは、ローカルの SiteScope インストールの進捗レポートでレポートされる SiteScope の負荷統計をチェックできます。

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで [Health] を展開して、 [Monitor Load Checker] をクリックします。
関連タスク	1127 ページ「SiteScope の状況監視データの分析方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> • 1125 ページ「負荷チェッカー・モニタの監視」 • モニタ固有の設定を次に示します。すべてのモニタに共通する設定の詳細については、367 ページ「共通モニタ設定」を参照してください。

モニタ負荷モニタの設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
カウンタ	<ul style="list-style-type: none"> • Current Monitors Run Per Minute • Current Monitors Running • Current Monitors Waiting • Maximum Monitors Run Per Minute • Maximum Monitors Running • Maximum Monitors Waiting

[SiteScope サーバの状況 モニタ] ページ

このページでは、ローカルの SiteScope インストールの SiteScope サーバ・リソースおよびプロセス統計をチェックできます。

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで[Health]を展開して、[SiteScope Server Health]をクリックします。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> • プロセス/perfex カウンタは、SiteScope サーバの状況 モニタから削除されており、現在はサポートされていません。 • テンプレート・モードで作業する場合の注意事項を次に示します。 選択できるカウンタの最大数は 100 です。SiteScope の以前のバージョンからテンプレート・モニタをインポートする場合、またはテンプレートへのコピーを実行する場合、カウンタ数に制限はありません。
関連タスク	1127ページ「SiteScope の状況監視データの分析方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> • 1126ページ「SiteScope サーバの状況 モニタ」 • モニタ固有の設定を次に示します。すべてのモニタに共通する設定の詳細については、367ページ「共通モニタ設定」を参照してください。

SiteScope サーバの状況 モニタの設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
カウンタ(UNIX の場合)	<ul style="list-style-type: none">• Current Monitors Run Per Minute• Current Monitors Running• Current Monitors Waiting• Maximum Monitors Run Per Minute• Maximum Monitors Running• Maximum Monitors Waiting• Used Disk Space on SiteScope Drive(UNIX にインストールされている SiteScope からアクセス可能)• MegaBytes Available on SiteScope Drive• Physical Memory Free• Physical Memory Free Megabytes• Swap Free• Swap Free Megabytes• Load Avg 5min• SiteScope Process Memory• SiteScope Process Thread Count• SiteScope Process Handle Count• Average CPU• PageIns/sec• PageOuts/sec• SwapIns/sec• SwapOuts/sec• ContextSwitches/sec• Net_TotalPacketsIn/sec• Net_TotalPacketsOut/sec• Net_TotalCollisions/sec

UI 要素	説明
カウンタ(Windows の場合)	<p>メモリ</p> <ul style="list-style-type: none">• Page Faults/sec• Pool Paged Bytes• Pool Nonpaged Bytes• % Committed Bytes In Use• Available MBytes <p>システム</p> <ul style="list-style-type: none">• Context Switches/sec• File Data Operations/sec• System Up Time• Processor Queue Length• Processes• スレッド <p>Processor</p> <ul style="list-style-type: none">• _Total<ul style="list-style-type: none">■ % Processor Time■ % DPC Time <p>Process</p> <ul style="list-style-type: none">• java<ul style="list-style-type: none">■ Thread Count■ Pool Paged Bytes■ Pool Nonpaged Bytes■ Handle Count

UI 要素	説明
カウンタ(Windows の場合)	<p>Network Interface</p> <ul style="list-style-type: none"> MS TCP Loopback interface <ul style="list-style-type: none"> Bytes Total/sec Current Bandwidth Bytes Received/sec Bytes Sent/sec < イーサネット・ハードウェア > (特定の SiteScope サーバに固有のハードウェア) <ul style="list-style-type: none"> Bytes Total/sec Current Bandwidth Bytes Received/sec Bytes Sent/sec <p>LogicalDisk</p> <ul style="list-style-type: none"> < 論理ドライブ > (特定の SiteScope サーバに固有のハードウェア) <ul style="list-style-type: none"> % Free Space Free Megabytes Avg.Disk Bytes/Transfer _Total <ul style="list-style-type: none"> % Free Space Free Megabytes Avg.Disk Bytes/Transfer <p>PhysicalDisk</p> <ul style="list-style-type: none"> _Total <ul style="list-style-type: none"> Current Disk Queue Length Disk Transfers/sec < 物理ディスク > (特定の SiteScope サーバに固有のハードウェア) <ul style="list-style-type: none"> Current Disk Queue Length Disk Transfers/sec

UI 要素	説明
カウンタ(Windows の場合)	Server <ul style="list-style-type: none">• Bytes Total/sec• Errors Logon• Errors Access Permissions• Errors System• Files Open• Server Sessions

[SSL 証書の状態モニタ] ページ

このページでは、標準設定のキーストア(<SiteScope のルート・ディレクトリ>\javalib\security\cacerts)にある SSL 証明書の状態を確認できます。この場所に、URL、WebSphere アプリケーション・サーバ、または VMware ベースのサーバを監視するためにインポートされたクライアント証明書が保存されます。

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで [Health] を展開して、[SSL Certificates State] をクリックします。
関連タスク	1127 ページ「SiteScope の状況監視データの分析方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none">• 600 ページ「証明書管理」• モニタ固有の設定を次に示します。すべてのモニタに共通する設定の詳細については、367 ページ「共通モニタ設定」を参照してください。

SSL 証書の状態モニタの設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
期限切れ残り日数	指定の日数で証明書の期限が切れる(ただしまだ期限は切れていない)場合、[Certificates expiring soon] カウンタに追加されます。 標準設定値 : 7 日
カウンタ	<ul style="list-style-type: none">• Expired certificates :すでに期限が切れている証明書のカンマ区切りリスト。• Certificates expiring soon :[期限切れ残り日数]で示される期間で期限切れになる証明書のカンマ区切りリスト。まもなく(N 日後。これはモニタ設定によって決まる固定値です)期限切れになりますが、まだ期限切れではありません。• Number of expired certificates• Number of certificates expiring soon

第76章

サーバ統計の表示

本章の内容

概念

- [1145ページ「サーバ統計の使用」](#)
- [1146ページ「SiteScope サーバの負荷を表す統計情報の解析」](#)
- [1148ページ「ログ・ファイルの使用」](#)

タスク

- [1150ページ「SiteScope サーバ統計の分析方法」](#)
- [1151ページ「監査ログの設定方法」](#)

参照情報

- [1152ページ「SiteScope ログ・ファイルの列」](#)
- [1183ページ「監査ログのエントリ」](#)
- [1188ページ「SiteScope サーバ統計のユーザ・インタフェース」](#)

サーバ統計の使用

SiteScope の [サーバ統計] コンテキストには、いくつかの重要な SiteScope サーバのパフォーマンス測定値の概要が表示されます。このパフォーマンス測定値は、SiteScope のパフォーマンス、安定性、状況の分析、およびボトルネックのデバッグに使用できます。このコンテキストには、SiteScope サーバの負荷を表す統計情報、実行中のモニタや最近実行されたモニタのリスト、perfex プールのサマリ、WMI 統計、SSH 接続、Telnet 接続、ダイナミック・モニタリング統計が含まれます。また、SiteScope ログ・ファイルも表示されます。[サーバ統計] コンテキストは、20 秒ごとに更新されます。

[サーバ統計] コンテキストには、次のページがあります。

ページ	説明
	ダイナミック・モニタリング・メカニズムを使用してダイナミック・モニタリングのカウントとしい値を自動的に更新するときに統計を表示します。ユーザ・インタフェースの詳細については、 を参照してください 。
1190ページ 「[一般] ページ」	SiteScope サーバの負荷を表す重要な統計情報(実行中モニタ数や待機中モニタ数など)およびタイプごとの実行中モニタ数のリストが表示されます。ユーザ・インタフェースの詳細については、 1190ページ「[一般]ページ」 を参照してください。
1191ページ 「[ログファイ ル]ページ」	SiteScope のパフォーマンスの問題の理解、モニタと警告の問題のトラブルシューティング、SiteScope の管理アクションの確認に役立つ、SiteScope のログ・ファイルのリストを表示します。ユーザ・インタフェースの詳細については、 1191ページ「[ログファイル]ページ」 を参照してください。
1194ページ 「[Perfex プ ロセスプー ル]ページ」	プロセス・マネージャ・サマリや、perfex ツールおよび perfex_dispatcher ツールの統計情報テーブルが表示されます。ユーザ・インタフェースの詳細については、 1194ページ「[Perfex プロセスプール]ページ」 を参照してください。
1196ページ 「[実行中 のモニタ数] ページ」	実行中の SiteScope モニタ、最近実行されたモニタ、実行された時間、実行で返された状態のリストを表示します。ユーザ・インタフェースの詳細については、 1196ページ「[実行中のモニタ数]ページ」 を参照してください。
1197ページ 「[SSH 接 続]ページ」	SSH を使用して、UNIX または Windows のリモート・サーバに接続している場合、SSH 統計および SSH 接続サマリが表示されます。ユーザ・インタフェースの詳細については、 1197ページ「[SSH 接続]ページ」 を参照してください。
1199ページ 「[Telnet 接 続]ページ」	リモート UNIX または Windows サーバへの接続に Telnet を使用した場合の Telnet 統計を表示します。ユーザ・インタフェースの詳細については、 1199ページ「[Telnet 接続]ページ」 を参照してください。
1200ページ 「[WMI 統 計]ページ」	Windows Management Instrumentation(WMI)統計のプロセス・マネージャ・サマリを表示します。ユーザ・インタフェースの詳細については、 1200ページ「[WMI 統計]ページ」 を参照してください。

SiteScope サーバの負荷を表す統計情報の解析

監視負荷は、SiteScope の拡大・縮小の問題、モニタ設定の問題、またはネットワーク・パフォーマンスの問題の重要な指標になります。SiteScope モニタの実行モデル、および該当のモデルに応じたサーバ・パフォーマンス・データの解析に関する簡単な説明を次に示します。

SiteScope モニタ・インスタンスは、スケジュールされた間隔で定期的に SiteScope アプリケーションによって実行される不可欠な命令セットです。モニタ・インスタンスを定義すると、SiteScope によって、実行(更新)の頻度とスケジュール・オプションに基づいてモニタが実行用のキューに入れられます。モニタ・インスタンスが「無効」とマークされている場合でも、キューにスケジュールされますが、通常の命令は実行されません。

Java ベース・アプリケーションとして、SiteScope では、マルチスレッドを利用してモニタ・タスクを並列実行できます。実行がスケジュールされた各モニタ・インスタンスはスレッドに割り当てられます。スレッドに割り当てられると、モニタ・インスタンスは**実行中モニタ**になります。モニタの実行命令の結果が得られるか、タイムアウト値(該当する場合)に達するまで、スレッドに割り当てられたままになります。

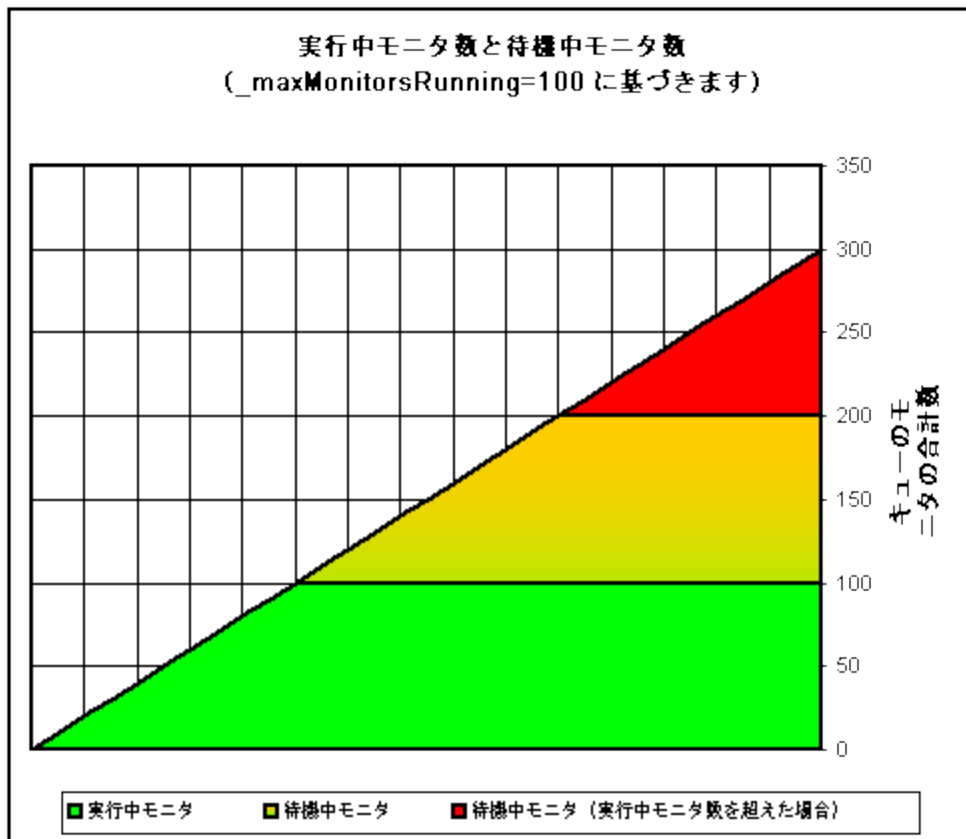
このモデルでも、モニタはすぐに実行されるわけではなく、同時に実行できるモニタ・スレッドの数には制限があります。使用できるスレッドの上限に達すると、実行を要求されたモニタは、実行スレッドを待機する**待機中モニタ**になります。

サーバ容量やネットワーク・デプロイメントの詳細は大きく異なる可能性があるため、特定の値や制限を SiteScope の監視負荷に割り当てることは困難です。また、単純にトランザクションのネットワーク・トラフィックの問題や SiteScope のモニタ設定の問題が原因で、監視負荷が時間の経過とともに大きく変わる場合もあります。

監視負荷を解析するための重要な警告シグナルとして、実行中モニタ数に対する待機中モニタ数の割合が挙げられます。通常、実行中モニタ数に対する待機中モニタ数の割合が常に 1:2 以上になっていなければ、一部のモニタが実行を待機していても問題はありません。たとえば、実行中モニタの最大数が 100 で、待機中モニタ数が 50 の場合、待機中モニタと実行中モニタの割合が 1:2 になります。

注: < SiteScope のルート・ディレクトリ> \groups\master.config ファイルで制御される `_maxMonitorsRunning=` 設定のモニタ実行スレッドの初期最大数は 400 です(`master.xml` の標準設定値は 30 です)。

次のグラフは、実行中モニタ数と待機中モニタ数の関係を視覚的に表しています。このグラフは、モニタ数が 100 に設定されている `_maxMonitorsRunning` に基づいています。緑色の領域は、キューのモニタの数が 100 を超えるまでは、要求されたすべてのモニタを SiteScope で実行できることを表しています。このレベルでは、実行がスケジュールされている追加モニタの状態が[Monitor Waiting]になります。赤色の領域は、待機中モニタ数が実行中モニタ数の 2 倍以上になっていることを表しています。これは、SiteScope モニタ設定がサーバおよびネットワークの容量に対してうまく調整できていないことを示しています。



待機中モニタ数が多すぎる状態が継続する場合、次のモニタ設定を調整できます。

- **頻度** : これは、すべてのモニタ・タイプの基本的なスケジュール・パラメータです。短い間隔で多数のモニタが実行(または更新)されるように設定されていることが原因で、実行中モニタ数と待機中モニタ数が多くなっていることがよくあります。最小更新間隔は 15 秒です。さまざまなシステム要因によって、一部のモニタ・アクションで完了時間が 15 秒より長くなる場合があります。たとえば、Web トランザクション、データベース・クエリ、リモート・サーバへのログオン、正規表現の照合でモニタの完了が遅延する可能性があります。[1307 ページ「モニタ・サマリ・レポート」](#)を使用して、モニタ・グループの**[頻度]**設定を確認し、一部のモニタの値を増やすことを検討してください。
- **エラーの検証** : このオプションを定期的または頻繁に使用すると、該当の SiteScope モニタでエラー状態が検出されるたびにモニタ実行のキューが急激に増加します。このオプションにはその目的がありますが、すべてのモニタに標準設定で使用しないでください。[1307 ページ「モニタ・サマリ・レポート」](#)を使用して、**[エラーの検証]**設定が有効になっている可能性のあるモニタを表示します。

SiteScope サーバのパフォーマンス・データの詳細については、[1196 ページ「\[実行中のモニタ数\] ページ」](#)を参照してください。

ログ・ファイルの使用

SiteScope には多数のログ・ファイルが保持されています。ログ・ファイルは、SiteScope のパフォーマンスの問題の把握、モニタや警告の問題のトラブルシューティング、SiteScope の管理アクションの確認を行う場合に役立ちます。

[サーバ統計] コンテキストの[ログファイル]メニューを使用して、ログ・ファイルにアクセスできます。ログ・ファイルをクリックすると、新しいブラウザ・ウィンドウが開き、ログ・ファイルのテキストが表示されます。スクロール・バーを使用してログの内容を表示できます。また、ブラウザのテキスト検索ユーティリティを使用して特定の情報を見つけることもできます。たとえば、モニタの[名前]プロパティに表示される一意のテキスト文字列を検索して、特定のモニタ・インスタンスのエントリを見つけることができます。各種 SiteScope ログ・ファイルの詳細については、[1191 ページ「\[ログファイル\] ページ」](#) および [1149 ページ「監査ログ・ファイルの使用」](#) を参照してください。

ログ・ファイルはプレーン・テキストで書き込まれ、**< SiteScope のルート・パス > \logs** ディレクトリに保存されます。標準設定では、これらのログ・ファイルはタブ区切りのテキスト・ファイルになります。これらのファイルの順序や内容を理解しておく、特定のモニタの結果を検証する場合や、SiteScope モニタの結果を別のデータベースに移す場合に役立ちます。詳細については、[1152 ページ「SiteScope ログ・ファイルの列」](#) を参照してください。

注: SiteScope ログ・ファイルでは Unicode 文字はサポートされません。英語以外の文字はログで文字化けします。回避策として、対応する OS のロケールにインストールされた SiteScope サーバを使用します。たとえば、日本語ロケールの場合は日本語版の Windows OS にインストールされた SiteScope を使用します。

監査ログ・ファイルの使用

SiteScope の監査ログには、SiteScope で実行されたアクション、実行時間、実行ユーザが記録されています。また、ユーザが SiteScope 設定に対して行った変更の詳細も記録されています。変更が行われるたびに、該当する箇所に対して変更前後の値が表示されます。さらに、監査されたエンティティの完全パスも一覧で表示されます。

監査ログには、新規ユーザ・インタフェースで実行された設定変更が記録されています。次の項目があります。モニタ、グループ、テンプレート、警告、レポートなどの作成 / 更新 / コピー / 削除。ユーザのログイン / ログアウト、ユーザ・パスワードの変更、プリファレンス設定の変更、手動で実行されたモニタに対しても、エントリが作成されます。

それぞれの操作が実行されると、監査ログにエントリが作成されます。複数の手順が実行される操作には、通常 start および end エントリ行が含まれています。例：

```
2011-11-10 08:04:41 - User:SiteScope Administrator.Operation
performed:UPDATE Monitor 'SiteScope\autosanity\cpu' start:
```

```
2011-11-08 14:43:56 - User:SiteScope Administrator.Operation
performed:Monitor 'SiteScope\autosanity\cpu' update: '_alertDisabled'
updated from '-1' to ''.
```

```
2011-11-08 14:43:56 - User:SiteScope Administrator.Operation
performed:UPDATE Monitor 'SiteScope\autosanity' end.
```

現在の監査ログがそのサイズ制限に達すると、監査ログが閉じて新しいログが作成されます。古いログの名前は、audit.log.1, audit.log.2 のようになります(以下同様)。名前に連結される数値が高いほど、古いログになります。保持するバックアップ監査ログのサイズ制限と最大数の設定の詳細については、[1151 ページ「監査ログの設定方法」](#)を参照してください。

現在の監査ログの名前は **audit.log** で、< SiteScope のルート・ディレクトリ > \logs ディレクトリにあります。このディレクトリまたは SiteScope アプリケーションから監査ログにアクセスできます。監査ログの表示の詳細については、[1191 ページ「\[ログファイル\] ページ」](#)を参照してください。

モニタ・ツリーで実行される大部分の操作は、監査ログに記録されます。監査ログ・エントリの詳細については、[1183 ページ「監査ログのエントリ」](#)を参照してください。監査ログに記録されない操作のリストについては、下の制限事項を参照してください。

監査ログの制限事項

- 監査ログのエントリは、英語でのみ作成できます。これは、SiteScope の表示言語に関係なく、監査ログのエントリの表示も英語のみであることを意味しています。
- SiteScope オブジェクトにテンプレートの変更が適用されると、監査ログには更新されたオブジェクトが記録されます。ただし、変更前後の値は表示されません。
- ダウンタイムを変更すると監査ログに記録されますが、変更前後の値は記録されません。
- SOAP メソッドを使用して設定が変更された場合、監査は拡張されません。

SiteScope サーバ統計の分析方法

このタスクでは、SiteScope サーバ統計とログ・ファイルを分析する手順について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- [1150ページ「前提条件」](#)
- [1150ページ「SiteScope サーバ統計の表示」](#)
- [1150ページ「SiteScope ログ・ファイルの表示」](#)

1. 前提条件

サーバ統計コンテキストにアクセスするには、SiteScope の管理者、または**サーバ統計の表示**権限を付与されたユーザ(この設定は標準設定で選択されている)でなければなりません。

ユーザ権限の詳細については、[792ページ「権限」](#)を参照してください。

2. SiteScope サーバ統計の表示

[サーバ統計]コンテキストでは、SiteScope サーバの負荷、実行中および最近実行したモニタのリスト、perfex プロセス・プール、WMI、SSH 接続、Telnet 接続、およびダイナミック・モニタリング統計を表示できます。

ユーザ・インタフェースの詳細については、[1188ページ「SiteScope サーバ統計のユーザ・インタフェース」](#)を参照してください。

3. SiteScope ログ・ファイルの表示

[サーバ統計]コンテキストの[ログファイル]ページで、さまざまな SiteScope ログ・ファイルを表示できます。

ユーザ・インタフェースの詳細については、[1191ページ「\[ログファイル\]ページ」](#)を参照してください。

監査ログの設定方法

このタスクでは、監査ログの最大サイズを設定する手順について説明します。監査ログの詳細については、[1149 ページ「監査ログ・ファイルの使用」](#)を参照してください。

1. <SiteScope のルート・ディレクトリ> \conf\core\Tools\log4j\PlainJava\ ディレクトリにある **log4j.properties** ファイルを開きます。
2. **MaxFileSize** にログの最大行数を設定します。
3. **MaxBackupIndex** に、保持しているバックアップ監査ログが何個に達したら最も古い監査ログを削除するのか、最大数を設定します。

たとえば、**MaxBackupIndex** が 5 の場合、保持するバックアップ監査ログは最大 5 個です。5 個のバックアップ・ログ・ファイルが存在する場合、現在の `audit.log` ファイルが **MaxFileSize** サイズに達すると、`audit.log.5` が削除され、`audit.log.4` が `audit.log.5` に、`audit.log.3` が `audit.log.4` というように名前が変更されます。現在の `audit.log` の名前が `audit.log.1` に変更されて、新しい `audit.log` が作成されます。

SiteScope ログ・ファイルの列

SiteScope が、インフラストラクチャ内のコンポーネントの可用性をテストするようにモニタ指示を実行すると、モニタの結果がデータ・ログ・ファイルに書き込まれます。SiteScope 監視データのログの各ログ・エントリの先頭 6 列は、どのモニタ・タイプでも同じです。各ログ・エントリの第 7 列以降、各列の内容はモニタ・タイプごとに固有になります(個々のモニタについては次のリストを参照してください)。

注: フィールド名は、SiteScope モニタ設定に応じて動的に変わります。データベースに記録されるデータについてフィールド名のリストを生成するには、[739 ページ「データベースにログ記録されるデータのフィールド名の生成方法」](#)を参照してください。

次の表で、それぞれの列の内容について説明します。各ログ・ファイル内の列は、タブ区切りのテキストとして書き込まれます。

列 列のデータ	
1	サンプルが記録された日時。
2	カテゴリ(たとえば, good, error, warning, nodata など)。
3	モニタが定義したモニタ・グループ名 (ownerID と呼ばれます)。
4	モニタ・タイトルのテキスト。
5	stateString([Group details] ページに表示される状態文字列)。
6	ID: サンプル番号 (このモニタの一意的 ID。グループ + ID がモニタの一意的キーになります)。サンプル番号は、そのモニタの一意的サンプル番号です。

モニタ固有のログ列の内容

各ログ・エントリの第 7 列以降、各列の内容はモニタ・タイプに応じて変化します。指示したモニタ・タイプのモニタ結果に書き込まれるデータを、次の表に示します。

Apache モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	カウンタ 1 の値

列	列のデータ
8	カウンタ 2 の値
9	カウンタ 3 の値
10	カウンタ 4 の値
11	カウンタ 5 の値
12	カウンタ 6 の値
13	カウンタ 7 の値
14	カウンタ 8 の値
15	カウンタ 9 の値
16	カウンタ 10 の値
17	カウンタ 11 の値
18	カウンタ 12 の値
19	カウンタ 13 の値
20	カウンタ 14 の値
21	カウンタ 15 の値
22	カウンタ 16 の値
23	カウンタ 17 の値
24	カウンタ 18 の値
25	カウンタ 19 の値
26	カウンタ 20 の値

ASP モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id

BroadVision アプリケーション・サーバ・モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	エラーのカウント数

ブラウザ可能な Windows パフォーマンス・カウンタ・モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	エラーのカウント数

Check Point モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	カウンタ 1 の値
8	カウンタ 2 の値

列	列のデータ
9	カウンタ 3 の値
10	カウンタ 4 の値
11	カウンタ 5 の値
12	カウンタ 6 の値
13	カウンタ 7 の値
14	カウンタ 8 の値

Cisco Works モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	エラーのカウント数

Citrix モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	エラーのカウント数

ColdFusion サーバ・モニタ

列	列のデータ
1	データ

列	列のデータ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id

コンポジット・モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	エラーのカウント数
8	エラーの項目数 (%)
9	警告の項目数 (%)
10	エラーの項目数
11	警告の項目数
12	適切な項目数
13	検査済み項目

CPU モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString

列	列のデータ
6	_id
7	エラーのカウンタ数

データベース・カウンタ・モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	エラーのカウンタ数

データベース・クエリ・モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	状態
8	往復時間
9	結果カラム 1
10	結果カラム 2
11	行
12	内容の照合

DB2 8.x および 9.x モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	エラーのカウント数

ディレクトリ・モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	ファイル数
8	ファイル・サイズ合計
9	ディレクトリ存在
10	アクセス許可
11	修正後経過時間

ディスク容量モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル

列	列のデータ
5	stateString
6	_id
7	エラーのカウント数
8	空き領域 (MB)

DNS モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	状態
8	往復時間
9	statusText

e ビジネス・トランザクション・モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	適切な項目数 (%)
8	エラーの項目数 (%)
9	警告の項目数 (%)
10	エラーの項目数

列	列のデータ
11	警告の項目数
12	適切な項目数
13	検査済み項目

F5 Big-IP モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	エラーのカウント数

ファイル・モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	サイズ
8	ファイル・エイジ
9	内容の照合

フォーミュラ・コンポジット・モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category

列	列のデータ
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	結果
8	状態

FTP モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	状態
8	往復時間
9	サイズ

SiteScope の状況モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	エラーのカウント数

IPMI モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	エラーのカウント数

LDAP モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	状態
8	往復時間

リンク・チェック・トランザクション・モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	リンク・エラー数

列	列のデータ
8	合計リンク数
9	合計グラフィック数
10	平均

ログ・イベント状況モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	. *skipped #1.*
8	. *skipped #2.*
9	. *skipped #3.*
10	. *skipped #4.*
11	. *skipped #5.*
12	. *SiteScope shutting down.*
13	. *Reached the limit of processes in the process pool.*
14	. *Error. data reporter failed to report chunk of data.*
15	. *Error. config reporter failed to report chunk of data.*
16	. *Error. Topaz failed to process data.*
17	. *Error. CacheSender. Got to the max number of cached files.*
18	. *Error. CacheSender. Got to the max old dir size.*
19	. *Topaz SEVERE.*
20	. *Commit verification failed.*
21	. *target not found in LDAP.*
22	カウンタ 16 の値

列	列のデータ
23	カウンタ 17 の値
24	カウンタ 18 の値
25	カウンタ 19 の値
26	カウンタ 20 の値

ログ・ファイル・モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	一致数/分
8	行数/分

メール・モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	往復時間
8	状態
9	内容の照合
10	送信時間
11	受信時間

MAPI モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	送受信

メモリ・モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	使用領域 (%)
8	空き領域 (MB)
9	ページ数 / 秒

ネットワーク帯域幅モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	エラーのカウンタ数

ニュース・モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	状態
8	往復時間
9	記事数

Microsoft IIS サーバ・モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id

Microsoft SQL Server モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id

Microsoft Windows ダイアルアップ・モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	合計時間
8	正常モニタ数(%)
9	monitorCount
10	monitorErrorCount
11	monitorWarningCount
12	接続所要時間
13	認証所要時間

Microsoft Windows イベント・ログ・モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	一致カウント
8	確認済みレコード
9	間隔内の一致

Microsoft Windows Media Player モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	カウンタ 1 の値
8	カウンタ 2 の値
9	カウンタ 3 の値
10	カウンタ 4 の値
11	カウンタ 5 の値
12	カウンタ 6 の値
13	カウンタ 7 の値
14	カウンタ 8 の値
15	カウンタ 9 の値
16	カウンタ 10 の値
17	カウンタ 11 の値
18	カウンタ 12 の値
19	カウンタ 13 の値
20	カウンタ 14 の値
21	カウンタ 15 の値
22	カウンタ 16 の値
23	カウンタ 17 の値
24	カウンタ 18 の値
25	カウンタ 19 の値
26	カウンタ 20 の値

Microsoft Windows Media Server モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id

Microsoft Windows パフォーマンス・カウンタ・モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	カウンタ 1 の値
8	カウンタ 1 パーセント・デリバーション
9	measurement0
10	lastMeasurement0
11	カウンタ 2 の値
12	カウンタ 2 パーセント・デリバーション
13	measurement1
14	lastMeasurement1
15	カウンタ 3 の値
16	カウンタ 3 パーセント・デリバーション
17	measurement2
18	lastMeasurement2
19	countersInError

Microsoft Windows リソース モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	エラーのカウント数

Microsoft Windows サービス・ステート・モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	現在 非実行中のサービス数
8	現在 実行中のサービス数
9	実行中に変更された数
10	非実行に変更された数
11	追加されたサービス数
12	削除されたサービス数
13	非実行に変更されたサービス
14	実行中に変更されたサービス
15	追加されたサービス
16	削除されたサービス

Oracle 9i アプリケーション・サーバ・モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	カウンタ 1 の値
8	カウンタ 2 の値
9	カウンタ 3 の値
10	カウンタ 4 の値
11	カウンタ 5 の値
12	カウンタ 6 の値
13	カウンタ 7 の値
14	カウンタ 8 の値
15	カウンタ 9 の値
16	カウンタ 10 の値
17	カウンタ 11 の値
18	カウンタ 12 の値
19	カウンタ 13 の値
20	カウンタ 14 の値
21	カウンタ 15 の値
22	カウンタ 16 の値
23	カウンタ 17 の値
24	カウンタ 18 の値
25	カウンタ 19 の値
26	カウンタ 20 の値

Oracle データベース・モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	エラーのカウント数

Ping モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	状態
8	往復時間
9	正常パケット数(%)

ポート・モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id

列	列のデータ
7	状態
8	往復時間

Radius モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	状態
8	往復時間

Real Media Player モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	カウンタ 1 の値
8	カウンタ 2 の値
9	カウンタ 3 の値
10	カウンタ 4 の値
11	カウンタ 5 の値
12	カウンタ 6 の値
13	カウンタ 7 の値

列	列のデータ
14	カウンタ 8 の値
15	カウンタ 9 の値
16	カウンタ 10 の値
17	カウンタ 11 の値
18	カウンタ 12 の値
19	カウンタ 13 の値
20	カウンタ 14 の値
21	カウンタ 15 の値
22	カウンタ 16 の値
23	カウンタ 17 の値
24	カウンタ 18 の値
25	カウンタ 19 の値
26	カウンタ 20 の値

Real Media Server モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id

SAP パフォーマンス・モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル

列	列のデータ
5	stateString
6	_id
7	エラーのカウント数

スクリプト・モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	状態
8	往復時間

サービス・モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	状態
8	プロセス
9	cpu
10	メモリ

SNMP モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	状態
8	value

SNMP トラップ・モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	一致数/分
8	一致数/分
9	value
10	値 2
11	値 3
12	値 4

MIB による SNMP モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category

列	列のデータ
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	エラーのカウント数

SunONE Web サーバ モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	エラーのカウント数

Sybase モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	エラーのカウント数

TUXEDO モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category

列	列のデータ
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	エラーのカウント数

UNIX リソース・モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	エラーのカウント数

URL 内容 モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	状態
8	往復時間
9	statusText
10	サイズ
11	エイジ

列	列のデータ
12	DNS 時間
13	応答時間
14	ダウンロード時間
15	接続時間
16	内容の照合
17	matchValue2
18	matchValue3
19	matchValue4
20	matchValue5
21	matchValue6
22	matchValue7
23	matchValue8
24	matchValue9
25	matchValue10

URL リスト・モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	期間
8	エラー数
9	正常
10	左

URL モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	状態
8	往復時間
9	statusText
10	サイズ
11	エイジ
12	内容の照合
13	DNS 時間
14	応答時間
15	ダウンロード時間
16	接続時間
17	全体の状態
18	合計エラー数

URL シーケンス・モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	状態

列	列のデータ
8	往復時間
9	statusText

WebLogic アプリケーション・サーバ・モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	エラーのカウント数

Web サーバ・モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	ヒット数
8	送信バイト数
9	ヒット数 / 分
10	バイト / 分

WebSphere アプリケーション・サーバ・モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category

列	列のデータ
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	エラーのカウント数

WebSphere パフォーマンス・サーブレット・モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	エラーのカウント数

XML 測定値モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	エラーのカウント数

監査ログのエントリ

監査ログの各行には、SiteScope で実行された操作が記述されます。複数の手順が実行される操作には、通常 `start` および `end` エントリ行が含まれています。詳細については、[1149 ページ「監査ログ・ファイルの使用」](#)を参照してください。

監査ログには、SiteScope で実行した次の変更に対するアクションの記録のリストが表示されます。

変更したエンティティ	監査ログに記録されたアクション
グループ / モニタ / テンプレート・エンティティ	<ul style="list-style-type: none">• created in : ユーザがエンティティを作成した場所。• update: 'entity' from '<x>' to '<y>' : ユーザが更新したエンティティと、更新前後の各値。• deleted from : ユーザがエンティティを削除した場所。• copied to : ユーザがエンティティ間で情報をコピーしている。• moved to : ユーザがエンティティ間で情報を移動している。
プリファレンス	<ul style="list-style-type: none">• created : ユーザがプリファレンスを作成している。• deleted : ユーザがプリファレンスを削除している。• update: 'entity' from '<x>' to '<y>' : ユーザが更新したエンティティと、更新前後の各値。
テンプレート	<ul style="list-style-type: none">• DEPLOY template : デプロイしたテンプレート。たとえば、デプロイしたオブジェクト (グループ、モニタ、リモート・サーバ)。• REDEPLOY template : テンプレートが更新された後、デプロイ済みグループ / モニタにパブリッシュされた変更。• IMPORT template : 外部ファイルからインポートされたテンプレート設定。

本項の内容

- [1183 ページ「モニタ / グループ / 警告 / レポート / テンプレート / リモート・エンティティに関するアクション記録」](#)
- [1185 ページ「SiteScope プリファレンスに関するアクション記録」](#)
- [1186 ページ「監査ログに入力されたその他の SiteScope 操作に関するアクション記録」](#)

モニタ / グループ / 警告 / レポート / テンプレート / リモート・エンティティに関するアクション記録

監査ログに入力される SiteScope エンティティに対して実行したアクションのリストを、次の表に示します。

エンティティ	アクション
グループ (モニタ / テンプレート・モード)	<ul style="list-style-type: none"> 作成 更新 削除 コピー / 切り取り / 貼り付け テンプレートにコピー(モニタ・モードのみ) グローバル検索と置換(モニタ・モードのみ) すべての子モニタの手動実行(モニタ・モードのみ)
モニタ (モニタ / テンプレート・モード)	<ul style="list-style-type: none"> 作成 更新 削除 コピー / テンプレートにコピー(テンプレート・モード) 移動(切り取り / 貼り付け) 有効化/無効化 手動実行(モニタ・モードのみ) グローバル検索と置換(モニタ・モードのみ)
モニタの確認応答 (モニタ・モードのみ)	<ul style="list-style-type: none"> 追加 編集 削除
テンプレート (テンプレート・モードのみ)	<ul style="list-style-type: none"> 作成 削除 コピー / 切り取り / 貼り付け デプロイ 変更の適用 ユーザ・インタフェースから、または、< SiteScope のルート・ディレクトリ> \persistence\import フォルダにファイルを置くことによる。 含まれるエンティティの更新
テンプレート変数 (テンプレート・モードのみ)	<ul style="list-style-type: none"> 作成 更新 削除 コピー / 切り取り / 貼り付け

エンティティ	アクション
テンプレート・コンテナ (テンプレート・モードのみ)	<ul style="list-style-type: none"> 作成 更新 削除 コピー / 切り取り / 貼り付け
警告 (モニタ / テンプレート・モード)	<ul style="list-style-type: none"> 作成 更新 削除 コピー / 切り取り / 貼り付け 有効化 / 無効化 (モニタ・モードのみ) グローバル検索と置換 (モニタ・モードのみ)
警告アクション (モニタ / テンプレート・モード)	<ul style="list-style-type: none"> 作成 更新 削除 コピー グローバル検索と置換 (モニタ・モードのみ)
レポート (モニタ・モードのみ)	<ul style="list-style-type: none"> 作成 更新 削除 コピー グローバル検索と置換
リモート・サーバ (リモート・サーバ / テンプレート・モード)	<ul style="list-style-type: none"> 作成 更新 削除 コピー / 切り取り / 貼り付け

SiteScope プリファレンスに関するアクション記録

監査ログに入力される SiteScope プリファレンスに対して実行したアクションのリストを、次の表に示します。

プリファレンス	アクション
一般 プリファレンス	更新
インフラストラクチャ・プリファレンス	更新

プリファレンス	アクション
ログ・プリファレンス	更新
電子メール / ページャ / SNMP / 共通イベント・マッピング(標準設定)	更新
電子メール / ページャ / SNMP / 共通イベント・マッピング(インスタンス)	<ul style="list-style-type: none">作成更新削除
スケジュール・プリファレンス	<ul style="list-style-type: none">作成更新削除
ユーザ管理プリファレンス	<ul style="list-style-type: none">作成更新削除
資格情報のプリファレンス	<ul style="list-style-type: none">作成更新削除
タグの検索/フィルタ	<ul style="list-style-type: none">作成更新削除
証明書管理	<ul style="list-style-type: none">作成削除

監査ログに入力されたその他の SiteScope 操作に関するアクション記録

監査ログに記録されるその他の SiteScope 操作のリストを、次の表に示します。

その他	アクション
ダウンタイム	<ul style="list-style-type: none">追加更新削除
状況のログ記録	<ul style="list-style-type: none">有効化無効化

その他	アクション
BSM 統合	<ul style="list-style-type: none">登録登録解除
認証	<ul style="list-style-type: none">ログインログアウト
ライセンス	<ul style="list-style-type: none">インポート削除
外部ファイル	インポート

SiteScope サーバ統計のユーザ・インタフェース

本項の内容

- 1188ページ「[ダイナミック モニタリング] ページ」
- 1190ページ「[一般] ページ」
- 1191ページ「[ログ ファイル] ページ」
- 1194ページ「[Perfex プロセス プール] ページ」
- 1196ページ「[実行中のモニタ数] ページ」
- 1197ページ「[SSH 接続] ページ」
- 1199ページ「[Telnet 接続] ページ」
- 1200ページ「[WMI 統計] ページ」

[ダイナミック モニタリング] ページ

このページには、ダイナミック・モニタリング・メカニズムを使用してダイナミック・モニタリングのカウンタとしきい値を自動的に更新するときに統計が表示されます。これは、ダイナミック・モニタリングのパフォーマンスの表示と問題分析に役立ちます。

アクセス方法	[サーバ統計] コンテキスト > [ダイナミック モニタリング] を選択します。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none">• 管理者、または「サーバ統計の表示」権限を付与されたユーザのみが、モニタ・パフォーマンス・データのページを表示できます。ユーザ権限の詳細については、773ページ「ユーザ管理プリファレンスの概要」を参照してください。• この情報は[モニタ] コンテキストからも使用できます([Health] フォルダを展開して[ダイナミック モニタリング統計] をクリックします)。
関連タスク	1150ページ「SiteScope サーバ統計の分析方法」
関連情報	1145ページ「サーバ統計の使用」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

パラメータ	説明
定義: * ダイナミック・タスク: サーバからカウンタを取得し、モニタに定義されたパターンに一致するカウンタをその中から見つけ出すという定期的なアクション。 ** カウンタ・ファイル: カウンタは < SiteScope のルート・ディレクトリ > \templates.application フォルダの下に配置される xml ファイルに保存されます。	
最後の 10 分間の平均タスク 待機時間(ミリ秒)	最後の 10 分間にタスクを受け取ったときからダイナミック・タスク*の実行を開始するためにかかった平均時間(ミリ秒)。

パラメータ	説明
平均タスク待機時間(ミリ秒)	タスクを受け取ったときからダイナミック・タスク*の実行を開始するためにかかった平均時間(ミリ秒)。
最後の 10 分間の平均タスク実行時間(ミリ秒)	最後の 10 分間にダイナミック・タスク*の実行を開始するためにかかった平均時間(ミリ秒)。
平均タスク実行時間(ミリ秒)	ダイナミック・タスク*の実行を開始するためにかかった平均時間(ミリ秒)。
最後の 10 分間に保存されていないカウンタ・ファイル数	最後の 10 分間に既存のカウンタ・ファイル**を削除, または新しいカウンタ・ファイル保存できない回数。
最後 10 分間のダイナミック・モニタリング・フレームワークと同時実行のユーザ変更の間のクラッシュの数	最後の 10 分間に, (ユーザ変更をオーバーライドしないように) ユーザが同時実行の変更を実行した結果としてダイナミック・モニタリング・フレームワークの変更を保存できない回数。
最後の 10 分間にカウンタのマッチングの最大数を越えた回数	最後の 10 分間にサーバからパターン用のカウンタのマッチングが限度を超えた回数。
最後の 10 分間にファイルからカウンタを抽出できない回数	最後の 10 分間にカウンタ・ファイル**からカウンタを抽出できない回数。
最後の 10 分間に変更を保存できない回数	最後の 10 分間に永続 SiteScope にカウンタ変更を保存できない回数。
最後 10 分間にリソース消耗のためにダイナミック・タスクを実行できない回数	最後の 10 分間に, 最大ダイナミック・モニタリング・フレームワークしきい値プールとキュー・サイズの限界に達したためダイナミック・タスク*を実行できない回数。 [プリファレンス] > [インフラストラクチャ プリファレンス] > [ダイナミック モニタリング設定]でこれらの設定を実行できます。詳細については, 669 ページ「[インフラストラクチャ プリファレンス] ページ」を参照してください。
最後の 10 分間にサーバからカウンタを検索できない回数	最後の 10 分間にサーバからカウンタを検索できない回数。
最後の 10 分間にサーバからのカウンタをマッチングできなかった回数	最後の 10 分間にサーバからパターン用のカウンタをマッチングできなかった回数。
未保存カウンタ・ファイルの総数	既存のカウンタ・ファイルを削除, または新しいカウンタ・ファイルを保存できない総回数。
ダイナミック・モニタリング・フレームワークと同時実行のユーザ変更の間のクラッシュの総数	(ユーザ変更をオーバーライドしないように)ユーザが同時実行の変更を実行した結果としてダイナミック・モニタリング・フレームワークの変更を保存できない総回数。
カウンタのマッチングの最大数を越えた総回数	サーバからパターン用のカウンタのマッチングが限度を超えた回数。

パラメータ	説明
ファイルからカウンタを抽出できない総回数	カウンタ・ファイル** からカウンタを抽出できない総回数。
変更を保存できない総回数	永続 SiteScope へカウンタ変更を保存できない総回数。
リソース消耗のためにダイナミック・タスクを実行できない総回数	最大ダイナミック・モニタリング・フレームワークしきい値プールとキュー・サイズの限界に達したためダイナミック・タスク* を実行できない総回数。 [プリファレンス] > [インフラストラクチャプリファレンス] > [ダイナミック モニタリング設定] でこれらの設定を実行できます。詳細については、669 ページ「[インフラストラクチャプリファレンス] ページ」を参照してください。
サーバからカウンタを検索できない総回数	サーバからカウンタを検索できない総回数。
サーバからのカウンタをマッチングできなかった総回数	サーバからパターン用のカウンタをマッチングできなかった総回数。

[一般] ページ

このページでは、現在実行中のモニタ数、実行中モニタの最大数、待機中のモニタ数、1 分あたりのモニタ実行数など、主要な SiteScope サーバ・パフォーマンス統計の概要を表示できます。現在実行中のモニタ・タイプのリスト、タイプごとの実行中インスタンス数も表示されます。

アクセス方法	[サーバ統計] コンテキスト > [一般] を選択します。
重要な情報	SiteScope の管理者、または「サーバ統計の表示」権限を付与されたユーザのみが、各モニタ・パフォーマンス・データ・ページを表示できます。ユーザ権限の詳細については、773 ページ「ユーザ管理プリファレンスの概要」を参照してください。
関連タスク	1150 ページ「SiteScope サーバ統計の分析方法」
関連情報	1145 ページ「サーバ統計の使用」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
全体統計	
実行中モニタ数	<p>[現在] 列: 更新頻度またはスケジュールに基づいて実行キューに入っており、現在実行中のスレッドを持つモニタ数が表示されます。つまり、これらのモニタは実行中であることを示します。</p> <p>[最大数] 列と[次で測定] 列: 実行されたモニタの最大数と、いつ実行されたかが表示されます。</p>

UI 要素	説明
待機中モニタ数	<p>[現在]列:更新頻度またはスケジュールに基づいて実行キューに入っており、現在実行待機中のスレッドを持つモニタ数が表示されます。つまり、これらのモニタは実行中ではないことを示します。</p> <p>[最大数]列と[次で測定]列:いずれかの時点で発生した待機中モニタの最大数と、いつ発生したかが表示されます。</p>
実行モニタ数/秒	<p>[現在]列:最後の 10 分間の監視における平均が周期的に表示され、モニタが実行される速度(1 分あたり)が追跡されます。</p> <p>[最大数]列と[次で測定]列:1 分あたりの実行中モニタの最大数と、いつ実行されたかが表示されます。</p>
タイプごとの実行中モニタ数	
<実行中のモニタ・リスト>	現在実行中のモニタ・タイプのリストと、タイプごとの実行中インスタンス数が表示されます。


[ログ ファイル] ページ

このページでは、SiteScope ログ・ファイルを調査できます。

アクセス方法	[サーバ統計]コンテキスト>[ログ ファイル]を選択します。
重要な情報	SiteScope ログ・ファイルでは Unicode 文字はサポートされません。英語以外の文字はログで文字化けします。回避策として、対応する OS のロケールにインストールされた SiteScope サーバを使用します。たとえば、日本語ロケールの場合は日本語版の Windows OS にインストールされた SiteScope を使用します。
関連タスク	<ul style="list-style-type: none"> 1150ページ「SiteScope サーバ統計の分析方法」 1151ページ「監査ログの設定方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> 1148ページ「ログ・ファイルの使用」 1152ページ「SiteScope ログ・ファイルの列」 1183ページ「監査ログのエントリ」 1148ページ「ログ・ファイルの使用」

[ログ ファイル] テーブル

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
	列タイトルの矢印をクリックして列の並べ替え順序を変更します。並べ替え順序を示す矢印の左側に小さい上向き矢印と下向き矢印が表示されます。 注: [タイプ] 列のタイトルの矢印をクリックすると、ログ・タイプのリストが開き、表示するログ・タイプでリストをフィルタできます。フィルタをクリアするには、矢印をもう一度クリックして[(すべて)]を選択します。
タイプ	ログ・ファイルのタイプ。ログ・ファイルの各種タイプの詳細については、 1191 ページ「[ログファイル] ページ」 を参照してください。
ログ・ファイル	ログ・ファイルの名前。ログ・ファイルのリンクをダブルクリックすると、Web ブラウザでファイルが開きます。
サイズ	ログ・ファイルのサイズ。
最終更新日	ログ・ファイルが最後に変更された日時。

ログ・ファイルのタイプ

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
監査ログ	実行された設定の変更(モニタ、テンプレート、警告の作成など)がすべて含まれているログへのリンクが含まれています。監査ログの詳細については、 1149 ページ「監査ログ・ファイルの使用」 を参照してください。
BSM 統合ログ	BSM にレポートするように SiteScope が設定されている場合、接続および監視データの転送に関する情報が含まれています。

UI 要素	説明
日次ログ	<p>個々のモニタ測定値が含まれているログへのリンクがあります。SiteScope によって新規モニタ・ログが毎日作成され、24 時間以内に実行されたすべてのモニタが記録されます。これらのログは、SiteScope レポートのベースになります。</p> <p>日次ログは次の形式になります。</p> <ul style="list-style-type: none"> SiteScope<YYYY_MM_DD>.v2.log このログには、従来のログより詳細なモニタ実行結果が含まれています。 SiteScope<YYYY_MM_DD>.log 従来の日次ログ・ファイル。 <p>注：</p> <ul style="list-style-type: none"> モニタの環境によっては、モニタ・ログのサイズが非常に大きくなる場合があります。サイズが大きくなると、Web ブラウザを使用して表示することが実質的にできなくなります。 標準設定では、両方のタイプの日次ログ・ファイルが生成されます。ベースライン設定を使用しない場合は、< SiteScope のルート>\groups\master.config ファイルのプロパティ _shouldLogToLegacyDailyLog= を false に設定して、従来の日次ログを無効にすることをお勧めします。 両方のタイプの日次ログ・ファイルへのログ記録を無効にするには、< SiteScope のルート>\groups\master.config ファイルのプロパティ _dailySiteScopeLogs=true を _dailySiteScopeLogs= に変更します。無効にされると、SiteScope.log という名前のログ・ファイルが代わりに作成され、毎日更新されます。これは、SiteScope レポートのモニタ実行の結果の履歴データがないということを意味します。(日次ログ・ファイルについては、[プリファレンス]>[ログプリファレンス]の[日次ログ保存日数]設定で、監視データを保存しておく日数を決めることができます。SiteScope では、1 日に 1 回、指定した日数よりも古くなったログを削除します。)
エラー・ログ	<p>SiteScope の操作に関連するさまざまなメッセージが含まれています。このメッセージには、モニタ・アクションやデータ通信アクションの実行時に SiteScope で発生した可能性のあるエラーの記録が含まれます。また、いつ SiteScope が停止または開始されたか、およびタスクを完了できないことが原因でスキップしているモニタがあるかどうかを示すメッセージも含まれます。</p>
実行モニタ・ログ	<p>モニタの管理に関連する特定のモニタの実行やアクションの情報が含まれています。これは、モニタのトラブルシューティングに役立ちます。</p>
その他のログ	<p>次のようなさまざまなログ・ファイル・タイプがあります。</p>

UI 要素	説明
alert.log	SiteScope で警告が生成されるたびに警告情報が記録されます。これは、警告アクションのトラブルシューティングや、警告が送信されたかどうかの確認に使用できます。
monitorCount.log	SiteScope で使用されているモニタおよびライセンス・ポイントの総数が計測されます。また、各タイプのサーバの状況モニタの数やライセンス・ポイントの使用状況も示されます。このログは、SiteScope が起動したとき、1 日に 1 回更新されます(変更ごとではありません)。このログ・ファイルは、[ヘルプ] > [SiteScope のバージョン情報]を選択していつでも更新できます。
Operator.log	SiteScope オペレータのアクション(主に確認機能の使用に関する情報)を記録するために使用する任意指定のログ・ファイル。このログは、1 つ以上のモニタに確認が追加された場合に作成されます。
ログ・ファイルの送信	作成された SiteScope サーバへの HTTP Post 要求を記録するために使用する任意指定のログ・ファイル。このファイルを使用して、実行された管理アクションを追跡できます。このログは、_postLogFile=true 設定が < SiteScope のルート・ディレクトリ> \groups\master.config ファイルに存在している場合にのみ有効になります。
remotes_multi_test	複数のリモートについてテストを行った場合に、リモート・サーバ接続のテスト結果を表示します。
silent_deployment	送信されたサイレント・デプロイメントの要求の詳細と対応するデプロイメントの結果が記録されます。また、失敗したサイレント・デプロイメントのエラー・メッセージも含まれます。このログは、SiteScope が起動したとき、1 日に 1 回更新されます(変更ごとではありません)。 注：CSV ファイルを使用してテンプレートをデプロイする場合、CSV ファイルで使用している英語以外の文字は、silent_deployment ログ・ファイルではサポートされません。正しいエンコーディング・オプションが選択されている場合、デプロイメント値はユーザ・インタフェースに正しく表示されます。
skip_monitor.log	スキップされたモニタの詳細が記録されます。スキップが発生するたびに、スキップの日時、モニタの名前(および ID)、サーバ名、スキップ数、モニタの状態(モニタが無効になっていたかどうか)が含まれる行が追加されます。
URL 詳細ログ	SiteScope URL モニタ・タイプによって作成された HTTP および HTTPS 要求のすべての内容を記録するために使用する任意指定のログ・ファイル。これは、URL モニタ・タイプおよび URL シーケンス・モニタ・タイプのトラブルシューティングに使用できます。 このログは、_urlDetailLogEnabled=true 設定が < SiteScope のルート・ディレクトリ> \groups\master.config ファイルに存在している場合にのみ有効になります。

[Perfex プロセス プール] ページ

このページには、プロセス・マネージャ・サマリ、perfex プールごとのプール統計と状態が表示されます。perfex は、プロセッサ・イベント・カウンタへのコマンド・ライン・インタフェースです。perfex は、指定さ

れたコマンドの完了後に、さまざまなハードウェア・パフォーマンス・カウンタの値を出力します。perfex_dispatcher は、Microsoft Windows リソース・モニタに使用されるプロセスです。

アクセス方法	[サーバ統計]コンテキスト > [Perfex プロセス プール]を選択します。
重要な情報	管理者、または「サーバ統計の表示」権限を付与されたユーザのみが、モニタ・パフォーマンス・データのページを表示できます。ユーザ権限の詳細については、773ページ「ユーザ管理プリファレンスの概要」を参照してください。
関連タスク	1150ページ「SiteScope サーバ統計の分析方法」
関連情報	1145ページ「サーバ統計の使用」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
プロセス・マネージャ・サマリ	
分あたりの呼び出し数	SiteScope サーバで 1 分あたりに発生するプロセス呼び出し数。
二重の失敗	SiteScope が 2 回連続してリモート・サーバへの接続を試みた後に接続に失敗した回数。接続の失敗の詳細については、モニタの実行ログとエラー・ログを確認してください。
停止したプロセス	SiteScope が最後に再起動してから、エラーが原因で停止したプロセスの数 (プロセスがタイムアウトした場合など)。
生成したプロセス	SiteScope が最後に再起動してから、すべてのプールについて生成したプロセスの数。生成したプロセスと停止したプロセスの数が多い場合、[プリファレンス] > [インフラストラクチャプリファレンス] > [一般設定] > [perfex タイムアウト (秒)] で perfex タイムアウト値を増やします。
クリーン済みプロセス	SiteScope は、最大アイドル時間を超えたプロセスを除去します。標準設定で、アイドル・プロセスは 10 分経過すると除去されます。アイドル・プロセスの最大時間は、[プリファレンス] > [インフラストラクチャプリファレンス] > [一般設定] > [perfex プロセスの最大アイドル時間 (分)] で変更できます。クリーニング・プロセスにより、SiteScope マシンのメモリ・フットプリントが改善されます。プロセスの除去が特に重要なのは、ネットワーク速度が低下して perfex の終了までに時間がかかる場合です。この場合、結果的により多くの perfex が作成されますが、それらは使用されません。
プール統計 - perfex/perfex_dispatcher	
プロセス・プール・キューの長さ	利用可能な perfex の現在待機中のモニタ数。この値は、perfex で実行中のモニタ数が多すぎる、または perfex プールが小さすぎることを示す場合があります。
空きプロセスの平均待機時間 (ミリ秒)	プロセスが利用可能になるまでの平均待機時間 (ミリ秒単位)。この値が 30,000 ミリ秒 (30 秒) を超えると、それ以降のモニタが失敗します。平均待機時間が長い場合は、プールのプロセス数を増やす必要があることを示します。

UI 要素	説明
平均実行時間 (ミリ秒)	perfex の実行にかかる平均時間(ミリ秒単位)。ここでは、次を示します。 <ul style="list-style-type: none"> ネットワーク速度。要求を送信し、サーバから応答を受信するのにかかる時間。 perfex の可用性。実行を完了し、perfex をプールに戻すまでにかかる平均時間。 perfex を使用しているモニタ数。
アイドル・プロセス	現在アイドル状態のプロセスの数。
使用中プロセス	現在使用中状態のプロセスの数。
プロセス合計	プロセスの総数(アイドル・プロセスと使用中プロセスの合計)。
プロセス・プールの 最大サイズ	プロセス・プールあたりに利用可能な最大プロセス数。標準設定の値は 200。プロセス・プールの最大サイズは、[インフラストラクチャプリファレンス]>[一般設定]>[プールあたりの最大プロセス数]で変更できます。
サーバ・タイムアウトを待機するプロセス	呼び出しタイムアウトを過ぎたプロセス、接続を閉じるためにサーバ・タイムアウトを待機しているプロセス、またはプールに戻るために応答を待機しているプロセスの数。

[実行中のモニタ数] ページ

このページでは、実行中の SiteScope モニタ、最近実行されたモニタ、実行された時刻、実行で返された状態のリストを表示できます。

アクセス方法	[サーバ統計]コンテキスト>[実行中のモニタ数]を選択します。
重要な情報	管理者、または「サーバ統計の表示」権限を付与されたユーザのみが、モニタ・パフォーマンス・データのページを表示できます。ユーザ権限の詳細については、773ページ「ユーザ管理プリファレンスの概要」を参照してください。
関連タスク	1150ページ「SiteScope サーバ統計の分析方法」
関連情報	1145ページ「サーバ統計の使用」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
実行中のモニタ数	
実行時間	現在実行中のモニタの実行時間(秒単位)。
スキップ	現在実行中のモニタのスキップ数。スケジュールされている次の実行時までモニタのアクションが完了しなかった場合、SiteScope モニタはスキップとしてレポートされます。
グループ名	現在実行中のモニタが属するグループ。

UI 要素	説明
モニタ名	現在実行中の SiteScope モニタの名前。モニタ名リンクをクリックすると、選択したモニタの[ダッシュボード]ページが開きます。実行時間が長引いているモニタやスキップは赤で表示されます。
現在の状態	現在実行中のモニタから返された状態。次に例を示します。
最近のモニタの実行	
日付と時刻	モニタが実行された日時。モニタは、実行を完了した日時の新しい順に表示されます。
グループ名	モニタが属するグループ。
モニタ名	SiteScope が実行したモニタの名前。
現在の状態	モニタが返した状態(正常, 警告, エラー)と測定値サマリの詳細。

[SSH 接続] ページ

このページには、リモート UNIX または Windows サーバに接続するためにセキュア・シェル(SSH)を使用する場合、SSH 統計および SSH 接続のサマリが表示されます。

アクセス方法	[サーバ統計]コンテキスト > [SSH 接続]を選択します。
重要な情報	管理者、または「サーバ統計の表示」権限を付与されたユーザのみが、モニタ・パフォーマンス・データのページを表示できます。ユーザ権限の詳細については、773ページ「ユーザ管理プリファレンスの概要」を参照してください。
関連タスク	1150ページ「SiteScope サーバ統計の分析方法」
関連情報	1145ページ「サーバ統計の使用」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
SSH 統計	
開いた合計	開いた SSH 接続の総数。この数が[現在割り当て済みのリソース]の数を大きく上回っている場合は、設定の問題を示しています。次の状況が発生していないかを確認する必要があります。 <ul style="list-style-type: none"> 接続キャッシュが無効になった 不正なログインまたはパスワードが使用された リモート・サーバ・タイムアウトが短すぎる
閉じた合計	最後に SiteScope が再起動されてから閉じた SSH 接続の数。

UI 要素	説明
すべてクリーン済み	最後に SiteScope が再起動されてからクリーンした SSH 接続の数。
V1 を開くのに失敗した合計	SSH バージョン 1 を使用して開くことに失敗した SSH 接続の数。標準設定では、SiteScope は V2 での接続を試みる前に、V1 を使用した接続を試行します。この数が多い場合は、問題が発生しているリモート・サーバで [SSH バージョン 2 のみを使用] オプションを選択することをお勧めします。
V2 を開くのに失敗した合計	SSH バージョン 2 を使用して開くことに失敗した SSH 接続の数。この数が多い場合は、リモート・サーバで正しいログインとパスワードが使用されたことを検証し、リモート・サーバ上の SSH バージョンを検証します(V1 または V2)。
再利用	最後に SiteScope が再起動されてから再利用された SSH 接続の数。
現在割り当て済みのリソース	現在開かれている SSH 接続の数。
現在使用中	現在開かれていて、実行中のモニタで使用されている SSH 接続の数。
最後の 10 分間の平均呼び出し時間	最後の 10 分間の平均 SSH 呼び出し時間。
合計平均呼び出し時間	平均呼び出し時間。
SSH 接続サマリ	

UI 要素	説明
<ホスト名>	<p>各ターゲット・リモート・サーバについて、次の情報を表示する行があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> マシン名。監視対象のリモート・サーバの名前。 使用中セッション数: 監視対象のリモート・サーバで開かれている SSH セッション数。 アイドルセッション数: 監視対象のリモート・サーバのアイドル SSH セッション数。 最大セッション数: 監視対象のリモート・サーバの SSH セッション(アイドル状態および使用中)の最大数。 キューの長さ: キューにある SSH セッション数。 平均待機時間: SSH セッションが空くまでの平均待機時間(ミリ秒単位)。 最後の 10 分間の平均呼び出し時間: 最後の 10 分間の平均 SSH 呼び出し時間。 合計平均呼び出し時間: 平均呼び出し時間の合計。 <p>注: SiteScope で同時に使用できる SSH 接続数は 500 に制限されています。</p>

[Telnet 接続] ページ

このページには、リモート UNIX または Windows サーバに接続するために telnet を使用する場合、telnet 統計が表示されます。

アクセス方法	[サーバ統計] コンテキスト > [Telnet 接続] を選択します。
重要な情報	管理者、または「サーバ統計の表示」権限を付与されたユーザのみが、モニタ・パフォーマンス・データのページを表示できます。ユーザ権限の詳細については、773 ページ「ユーザ管理プリファレンスの概要」を参照してください。
関連タスク	1150 ページ「SiteScope サーバ統計の分析方法」
関連情報	1145 ページ「サーバ統計の使用」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

パラメータ	説明
Telnet 統計	
開いた合計	最後に SiteScope が再起動されてから開いた telnet 接続の数。
閉じた合計	最後に SiteScope が再起動されてから閉じた telnet 接続の数。
再利用	最後に SiteScope が再起動されてから再利用された telnet 接続の数。
現在割り当て済みのリソース	現在開いている telnet 接続の数。

パラメータ	説明
現在使用中	現在開いていて、実行中のモニタで使用されている telnet 接続の数。
Telnet 接続サマリ	
<ホスト名>	<p>各ターゲット・リモート・サーバについて、次の情報を表示する行があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> マシン名。監視対象のリモート・サーバの名前。 使用中セッション数 : 監視対象のリモート・サーバで開かれている telnet セッション数。 アイドルセッション数 : 監視対象のリモート・サーバのアイドル telnet セッション数。 最大セッション数 : 監視対象のリモート・サーバの telnet セッション(アイドル状態または使用中)の最大数。 キューの長さ : キューにある telnet セッション数。 平均待機時間 : telnet セッションが空くまでの平均待機時間(ミリ秒単位)。 <p>注 : SiteScope で同時に使用できる telnet 接続数は 500 に制限されています。</p>

[WMI 統計] ページ

このページは、Windows Management Instrumentation(WMI)統計のプロセス・マネージャ・サマリを表示します。WMI を使用して、パフォーマンス・ライブラリのオブジェクトのシステム・カウンタ・データにアクセスできます。これは、Perfmon ユーティリティに表示されるパフォーマンス・データと同じデータです。

アクセス方法	[サーバ統計] コンテキスト > [WMI 統計] を選択します。
重要な情報	管理者、または「サーバ統計の表示」権限を付与されたユーザのみが、モニタ・パフォーマンス・データのページを表示できます。ユーザ権限の詳細については、773 ページ「ユーザ管理プリファレンスの概要」を参照してください。
関連タスク	1150 ページ「SiteScope サーバ統計の分析方法」
関連情報	1145 ページ「サーバ統計の使用」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
プロセス・マネージャ・サマリ	
分あたりの呼び出し数	SiteScope サーバで 1 分あたりに発生するプロセス呼び出し数。

UI 要素	説明
二重の失敗	SiteScope が 2 回連続してリモート・サーバへの接続を試みた後に接続に失敗した回数。接続の失敗の詳細については、モニタの実行ログとエラー・ログを確認してください。
停止したプロセス	SiteScope が最後に再起動してから、エラーが原因で停止したプロセスの数 (プロセスがタイムアウトした場合など)。
生成したプロセス	SiteScope が最後に再起動してから、すべてのプールについて生成したプロセスの数。生成したプロセスと停止したプロセスの数が多い場合、[プリファレンス]>[インフラストラクチャプリファレンス]>[一般設定]>[perfex タイムアウト (秒)]で perfex タイムアウト値を増やします。
クリーン済みプロセス	SiteScope は、最大アイドル時間を超えたプロセスを除去します。標準設定で、アイドル・プロセスは 10 分経過すると除去されます。アイドル・プロセスの最大時間は、[プリファレンス]>[インフラストラクチャプリファレンス]>[一般設定]>[perfex プロセスの最大アイドル時間 (分)]で変更できます。クリーニング・プロセスにより、SiteScope マシンのメモリ・フットプリントが改善されます。プロセスの除去が特に重要なのは、ネットワーク速度が低下して perfex の終了までに時間がかかる場合です。この場合、結果的により多くの perfex が作成されますが、それらは使用されません。
サーバ・タイムアウトを待機するプロセス	呼び出しタイムアウトを過ぎたプロセス、接続を閉じるためにサーバ・タイムアウトを待機しているプロセス、またはプールに戻るために応答を待機しているプロセスの数。

第10部分

警告とレポート

第77章

SiteScope 警告

本章の内容

概念

- 1204ページ「SiteScope 警告の概要」
- 1207ページ「警告アクションの作成」
- 1208ページ「SiteScope 警告が送信される時期について」
- 1211ページ「警告テンプレートのカスタマイズ」
- 1213ページ「データベース警告を使った作業」
- 1214ページ「モニタの無効化 / 有効化 警告を使った作業」
- 1215ページ「電子メール警告を使った作業」
- 1216ページ「ログ・イベント警告を使った作業」
- 1217ページ「ページャ警告を使った作業」
- 1218ページ「送信警告を使った作業」
- 1219ページ「スクリプト警告を使った作業」
- 1222ページ「SMS 警告を使った作業」
- 1224ページ「SNMPトラップ警告を使った作業」
- 1225ページ「サウンド警告を使った作業」

タスク

- 1226ページ「警告の設定方法」
- 1228ページ「警告メッセージ内容のカスタマイズ方法」
- 1230ページ「警告テンプレートのタグ・スタイルのカスタマイズ方法」

参照情報

- 1231ページ「SiteScope 警告テンプレートのディレクトリ」
- 1232ページ「SiteScope 警告テンプレートとイベントのプロパティのディレクトリ」
- 1241ページ「SiteScope 警告のユーザ・インタフェース」

SiteScope 警告の概要

SiteScope 警告は、警告定義の状態が検出された場合にトリガされる通知アクションです。警告を使用して、イベント、要素の状態の変更、インフラストラクチャのシステムの変更の通知を送信します。たとえば、「Good」から「Error」への変更（監視対象システムが応答しなくなったことを示します）が SiteScope モニタで検出された場合に警告がトリガされます。

警告定義には、警告をトリガできるモニタ、対象となる条件、送信する情報、警告の受信者を SiteScope に通知する設定が含まれています。たとえば、特定のシステムでエラー状態が検出されたときに、特定のサーバ・アドレスおよびエラー・コードを SiteScope からページまたは電子メールに送信するための指示が含まれる警告を作成できます。また、SiteScope では、スクリプト警告を使用して復旧スクリプトやアクション・スクリプトを自動的に起動することで、問題に対応することもできます。たとえば、システムが応答しなくなったことや、CPU 使用率が 100% に達したことがモニタで検出された場合に、スクリプトを実行してサーバを再起動するようにスクリプト警告を設定できます。警告のタイプの詳細については、[1249 ページ「\[アクションタイプ\]ダイアログ・ボックス」](#)を参照してください。

SiteScope 警告は、複数の方法で設定できます。警告は、1 つ以上の個々のモニタ、1 つ以上のモニタ・グループ、モニタとグループの組み合わせ、すべてのモニタおよびグループにグローバルに関連付けることができます。通常、グローバルまたはグループ全体に警告に関連付けるのが最も効率的ですが、必要な制御ができない可能性もあります。

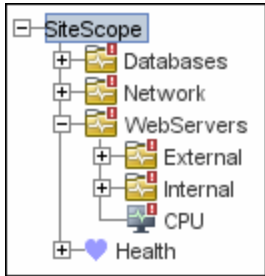
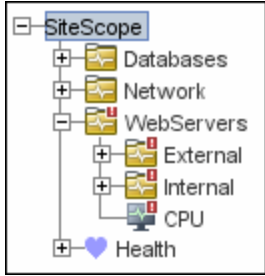
各警告定義ページの[フィルタ設定]機能を使用してフィルタ条件を作成すると、グローバル警告およびグループ警告をより詳細な条件で制御できます。フィルタ条件を使用して、特定のタイプのモニタや特定のテキスト文字列、タグを含むモニタなど、フィルタ条件に一致したモニタに警告を限定することができます。たとえば、CPU モニタのフィルタ条件を使用してグローバル警告を作成すると、CPU モニタ・タイプの場合にのみトリガされる警告が作成されます。タグを使用して個々のモニタ警告を制御することもできます。たとえば、選択されたタグのフィルタ条件を用いて個々のモニタ警告を作成できます。警告は、モニタにこれらのタグのいずれかが含まれる場合に限りトリガされます。グローバルまたはルート警告を設定しタグを割り当て、同じタグをグループに割り当てて、グループ内のどのモニタにも警告の時と同じタグが含まれない場合には、モニタのこのグループに警告はトリガされません。

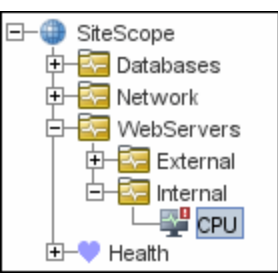
警告を設定する方法の詳細については、[1241 ページ「SiteScope 警告 ページ」](#)を参照してください。

注: また、警告を使って作業する場合、SiteScope API を使用することもできます。詳細については、[43 ページ「SiteScope 設定 API の使用」](#)を参照してください。

警告の関連付けと考慮事項

次の表に、各種警告の関連付けと考慮事項の概要を示します。

警告のクラス	説明
グローバル警告	<p data-bbox="451 258 1385 325">特定の SiteScope の任意のモニタによって、警告に定義されたカテゴリの状態がレポートされたときにトリガされる警告。</p> <p data-bbox="451 346 1385 413">警告定義を作成した後に追加した新規グループおよび新規モニタは、自動的にこの警告に関連付けられます。</p> <p data-bbox="451 434 1385 501">次に、SiteScope ノードに関連付けられたグローバル警告の例を示します。この警告は、すべてのモニタでトリガされます。</p> <div data-bbox="451 525 714 798"></div> <p data-bbox="451 819 1385 892">注：グローバル警告は SiteScope 内のすべてのグループおよびモニタでトリガされる可能性があるため、グローバル警告を作成することはお勧めしません。</p>
グループ警告	<p data-bbox="451 913 1385 980">関連付けられているグループ内のモニタによって、警告に定義されたカテゴリの状態がレポートされたときにトリガされる警告。</p> <p data-bbox="451 1001 1385 1068">次に、グループ警告の例を示します。この警告は、グループ WebServers 内にあるモニタまたはサブグループでトリガされます。</p> <div data-bbox="451 1092 714 1365"></div> <p data-bbox="451 1386 1385 1461">警告定義を作成した後に関連付けられているグループ内に追加した新規サブグループおよび新規モニタは、自動的にこの警告に関連付けられます。</p>

警告のクラス	説明
個別 モニタ 警告	<p data-bbox="456 260 1367 323">関連付けられているモニタによって、警告に定義されたカテゴリの状態がレポートされたときにトリガされる警告。</p> <p data-bbox="456 344 1367 407">次に、個別 モニタ警告 の例を示します。この警告は、関連付けられているモニタでのみトリガされます。</p> <div data-bbox="456 428 732 701"><pre data-bbox="456 428 732 701">graph TD; SiteScope[SiteScope] --- Databases[Databases]; SiteScope --- Network[Network]; SiteScope --- WebServers[WebServers]; WebServers --- External[External]; WebServers --- Internal[Internal]; Internal --- CPU[CPU]; Health[Health] --- CPU;</pre></div> <p data-bbox="456 722 1367 785">警告定義を作成した後に追加した新規モニタは自動的にこの警告に関連付けられませんが、警告定義を編集して追加できます。</p>

SiteScope 警告の定義は、必要な数だけ作成できます。ただし、警告定義の数を最小限に抑えるように警告を計画および統合する必要があります。これにより、警告の管理が容易になり、警告のメッセージやアクションの重複を削減できます。

警告アクションの作成

SiteScope で警告スキームを作成する際には、警告条件を満たしたときにトリガされる警告アクションを作成します。警告アクションは、[警告時のアクション] ダイアログ・ボックスを使用して作成します。このダイアログ・ボックスでは、次の項目を決定します。

- **警告アクションのタイプ。**利用可能な警告アクションの詳細なリストについては、[1249ページ「\[アクションタイプ\] ダイアログ・ボックス」](#)を参照してください。
- **送信する警告のタイプに関する設定。**たとえば、電子メール警告アクションには受信者と受信者アドレスを定義できます。
- **警告をトリガする状態の条件。**たとえば、モニタの状態が「エラー」から「利用不可」に変化した場合に警告アクションをトリガするように SiteScope に指示できます。
- **警告をトリガして送信する時期を決定するトリガ設定。**詳細については、[1208ページ「SiteScope 警告が送信される時期について」](#)を参照してください。

1 つの警告スキームに複数の警告アクションを作成できます。

- **複数の送信方法：**サウンド警告を送信する警告アクションと、電子メール警告を送信する別の警告アクションを作成できます。どちらも警告をトリガすると送信されます。
- **スケジュールに依存した送信：**同じ警告定義内に、異なるアクションのための異なるスケジュールを設定することもできます。たとえば、通常の業務時間中は電子メール警告アクションを送信し、夜間は SMS 警告アクションを送信するようにスケジュールを設定できます。どちらも同じ条件の変化によってトリガされますが、警告がトリガされる時間に応じて異なる時間に送信されます。
- **アクションの依存関係：**ほかの警告アクションに依存する警告アクションを作成することもできます。これにより、トリガ条件が最初に満たされたときにはある警告タイプを送信し、最初の警告タイプが複数回送信されている場合は別のタイプの警告のみを送信するように SiteScope に指示できます。

警告アクションをほかのモニタやグループにコピーして、ほかの警告で使用できます。ほかの警告の警告アクションを使用するには、警告をコピーしてほかのモニタまたはグループに貼り付けます。その警告のすべての警告アクションが新しい警告にコピーされます。その後で、新しいターゲット・モニタまたはグループに対してトリガする警告を編集できます。

異なる警告のタイプを使った作業の詳細については、[1249ページ「\[アクションタイプ\] ダイアログ・ボックス」](#)を参照してください。

SiteScope 警告が送信される時期について

SiteScope では、関連付けられているモニタが警告トリガ条件に一致するとただちに警告がトリガされます。[警告時のアクション]ダイアログ・ボックスの[トリガの設定]オプションを使用すると、特定の条件が検出されたときに、それに関連して警告が送信される時期を制御できます。たとえば、エラー条件が特定のモニタ実行数に対応する特定の間隔で継続して発生した後にのみ SiteScope から警告が送信されるように選択できます。これは、頻繁に変化する動的な環境パラメータを監視する、頻繁に実行されるモニタで使用する利便です。場合によっては、1つのエラー条件では介入が正当化されないことがあります。トリガの設定の詳細については、[1265ページ「\[トリガの頻度\]パネル」](#)を参照してください。

次の例では、異なる警告設定での、複数のモニタ実行でエラー条件が継続して発生した後の警告の送信方法について説明します。サンプリング間隔は、モニタの実行頻度に対応することに留意してください。モニタが 15 秒おきに実行され、3 回目のエラー読み取り後に警告が送信されるように設定されている場合、警告はエラー検出から 30 秒後に送信されます。モニタの実行間隔が 1 時間に 1 回で、同じ警告設定を使用する場合、警告は 2 時間後まで送信されません。

例 1 - 常時: 条件が最低 N 回発生後

例 1a: 最低 3 回のモニタ実行で条件が継続して発生した後、モニタがエラーになるたびに警告が送信されます。これを次の例 1b と比較してください。

警告設定	常時: 条件が最低 3 回発生後								
サンプリング間隔	0	1	2	3	4	5	6	7	8
状態									
カウント	c=0	c=1	c=2	c=3 警告 !	c=4 警告 !	c=5 警告 !	c=0	c=1	c=2

例 1b: 最低 3 回のモニタ実行で条件が継続して発生した後、モニタがエラーになるたびに警告が送信されます。連続するエラー読み取りの間にエラー以外の読み取りがモニタから 1 回返されたときに、カウントがリセットされることを示しています。これを前述の例 1a と比較してください。

警告設定	常時: 条件が最低 3 回発生後								
サンプリング間隔	0	1	2	3	4	5	6	7	8
状態									
カウント	c=0	c=1	c=2	c=0	c=1	c=2	c=3 警告 !	c=0	c=0

例 2 - 1 回のみ : 条件がちょうど N 回発生後

最低 3 回のモニタ実行でモニタがエラーになると、それ以降にエラーが返される期間に関係なく、警告が 1 回だけ送信されます。

警告設定	1 回のみ : 条件がちょうど 3 回発生後								
サンプリング間隔	0	1	2	3	4	5	6	7	8
状態									
カウント	c=0	c=1	c=2	c=3 警告 !	c=4	c=5	c=6	c=7	c=8

例 3 - 最初に X 回, 以後 Y 回ごとに繰り返す

例 3a : モニタが 5 回エラーになると警告が送信され、それ以降はエラー読み取りが連続して 3 回発生するたびに送信されます。これを次の例 3b と比較してください。

警告設定	最初に 5 回, 以後 3 回ごとに繰り返す								
サンプリング間隔	0	1	2	3	4	5	6	7	8
状態									
カウント	c=0	c=1	c=2	c=3	c=4	c=5 警告 !	c=6	c=7	c=8 警告 !

例 3b : モニタが 3 回エラーになると警告が送信され、それ以降はエラー読み取りが連続して 5 回発生するたびに送信されます。これを前述の例 3a と比較してください。

警告設定	最初に 3 回, 以後 5 回ごとに繰り返す								
サンプリング間隔	0	1	2	3	4	5	6	7	8
状態									
カウント	c=0	c=1	c=2	c=3 警告 !	c=4	c=5	c=6	c=7	c=8 警告 !

例 4 - 複数の警告の設定

複数の警告を作成し、モニタに複数の警告を関連付けることができるため、特定の状況で複数のアクションが実行されるように SiteScope に指示できます。たとえば、任意のモニタからエラー状態が返されるたびにユーザを呼び出すように SiteScope に指示する警告を作成できます。次に、ディスク領域モニタからエラーが返されるとサーバの /tmp ディレクトリにあるファイルを削除するスクリプト・ファイルを実行するように SiteScope に指示する別の警告を作成できます。ディスクがいっぱいになると、SiteScope により、最初の警告定義によってユーザが呼び出され、2 つ目の警

告定義によって /tmp ディレクトリにあるファイルを削除するスクリプトが実行されます。

SiteScope 警告は、モニタ読み取りの状態に変化があると生成されます。そのため、OK または警告条件、およびエラー条件に対し警告を設定できます。これを利用する 1 つの方法として、エラーと OK に 1 つずつ、2 つの警告を追加します。条件が 3 回検出された後に警告が送信されるように設定します。OK 警告には、**「モニタが以前に少なくとも 3 回エラー状態だった場合」** チェック・ボックスを選択します。これによって、モニタが何らかの理由で(手動、スケジュール、依存対象によって)無効にされた場合など、一致しない OK 警告が回避され、再起動されます。また、OK 警告が対応するエラー警告が送信された後にのみ送信されるよう使用することもできます。これらの 2 つの警告を使用すると、リンクまたはサービスが停止する(モニタが OK から error への変更を検出する)と呼び出しを受け、正常に戻る(モニタが error から OK への変更を検出する)と再び呼び出しを受けます。

次に、1 つのモニタで 2 つの警告を使用する例を示します。条件が少なくとも 3 回のモニタ実行で継続して発生した後のエラーに対して 1 回送信される Alert on error。少なくとも 1 回のエラーまたは警告間隔の後の「good」状態に対して 1 回送信される Alert on OK。

エラーの警告の設定	対象エラー		1 回のみ：条件がちょうど 3 回発生後						
OK の警告の設定	対象 OK		1 回のみ：条件がちょうど 1 回発生後およびモニタが以前に 3 回以上エラーである						
サンプリング間隔	0	1	2	3	4	5	6	7	8
状態									
カウント	c=0	c=1	c=2	c=3 警告！	c=4	c=5	c=6	c=7	c=1 警告！

モニタの状態が変化すると、関連する状態のカウントがゼロにリセットされます。

警告テンプレートのカスタマイズ

SiteScope では、警告メッセージおよびレポートを生成するときにテンプレートを使用します。ほとんどの場合、警告の作成時には[警告]ページで使用するテンプレートを選択します。既存のテンプレートをカスタマイズするか、既存のテンプレートをコピーして独自のテンプレートを作成できます。テキストの追加や削除、プロパティ変数の追加(1232ページ「SiteScope 警告テンプレートとイベントのプロパティのディレクトリ」のリストを参照)、テンプレートに含まれるテキストやプロパティ変数の順序の変更によって、警告テンプレートをカスタマイズできます。

ヒント: 新しいファイル名でカスタム警告テンプレートを作成することをお勧めします。SiteScope に装備されたいずれかの標準設定テンプレートを変更し、同じファイル名で変更を保存した場合、SiteScope を再インストールするか SiteScope インストールをアップグレードすると、その変更が失われる可能性があります。

カスタム警告テンプレートを SiteScope で使用できるようにするには、該当する警告タイプのテンプレートを含むディレクトリにカスタマイズした警告テンプレートを保存する必要があります。コピーおよびカスタマイズできる SiteScope 警告テンプレートが含まれるディレクトリ名のリストについては、1231ページ「SiteScope 警告テンプレートのディレクトリ」を参照してください。

これらのグループのテンプレートは、プロパティ変数マーカを含むテキスト・ファイルです。これらのテンプレートを作成または変更するには、テキスト・エディタを使用します。示されたディレクトリに保存した新規テンプレートは、[警告]ページの該当する警告で利用可能になります。

警告テンプレート設定のカスタマイズの詳細については、1228ページ「警告メッセージ内容のカスタマイズ方法」および1230ページ「警告テンプレートのタグ・スタイルのカスタマイズ方法」を参照してください。

例 - 電子メール警告に使用される標準テンプレート

次に、電子メール警告に使用される標準設定テンプレートの例を示します。最初のセクションは警告ヘッダです。警告ヘッダの最初の行には、問題を送信した SiteScope インストールへのリンクが含まれます。これにより、問題を報告した SiteScope インストールにアクセスできます。

このリンクの下には、発生した警告の概要を示すテキスト・ブロックが表示されます。次の内容が含まれます。

- 警告をトリガしたモニタの名前。
- モニタが属するグループ。
- モニタにより報告された警告の状態。
- 状態が報告される前にモニタを実行した回数を示すサンプルID番号。
- エラーが発生した時刻。

```
This alert is from SiteScope at <SiteScopeURL>
Monitor:<groupID>:<name> Group:<group> Status:<state> Sample
#:<sample> Time:<time> -----Detail -----
----- <mainParameters> <mainStateProperties>
```

<山括弧> 内に表示される名前は、プロパティ変数マーカーです。警告の生成時に、SiteScope によってこれらのマーカーが警告をトリガしたモニタまたはモニタ・グループの変数の対応する値に置換されます。

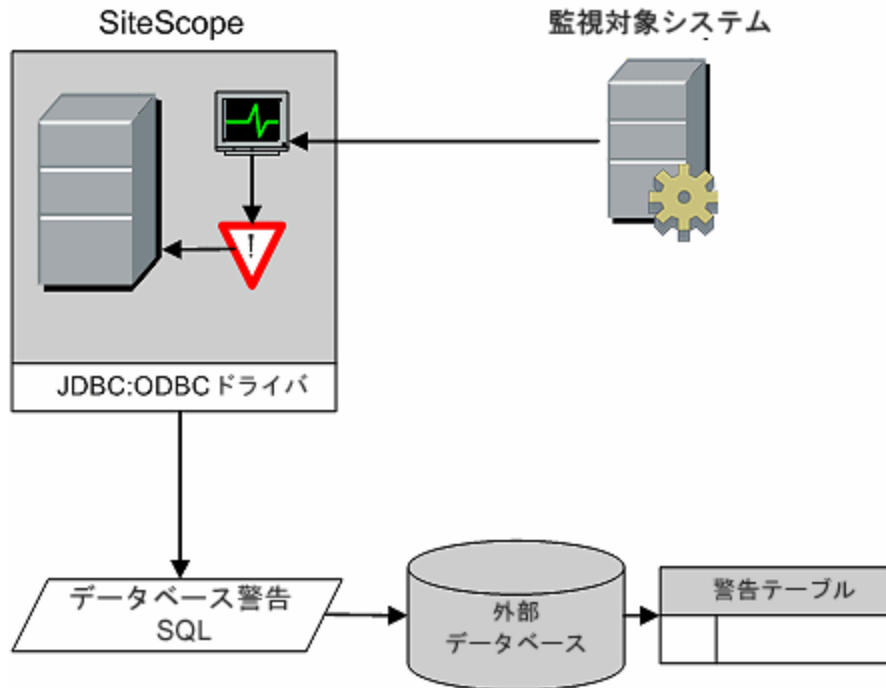
テンプレートのテキスト部分を追加または編集します。たとえば、上記のテンプレートの最初の行の文章を次のように変更できます。

```
<SiteScope URL> で Web 監視の警告が SiteScope によって生成されました
```


データベース警告を使った作業

データベース警告では、システムの障害データやその他の状態の情報を任意の SQL 準拠データベースに転送できます。

次の図に、データベース警告を示します。



データベース警告タイプを使用するには、次の必要があります。

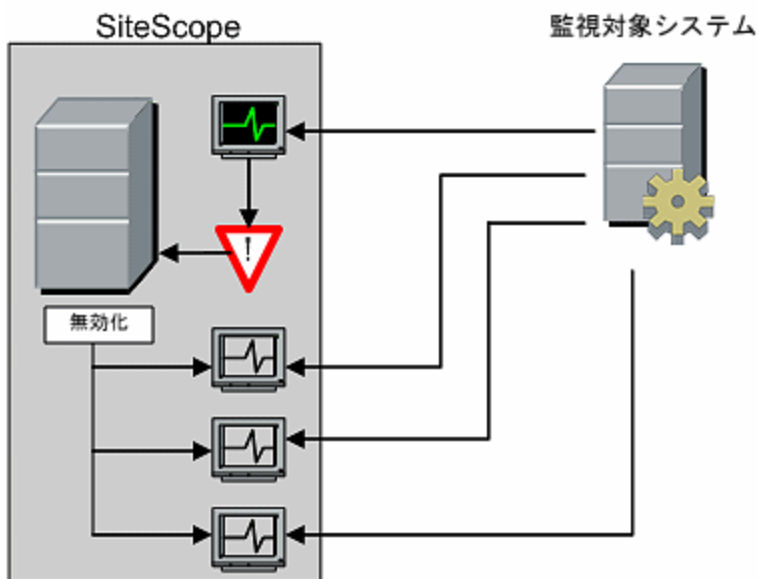
- SQL 準拠データベースへのアクセス。
- SiteScope サーバがデータベースへの接続に使用する適切なデータベース接続 URL。一般的なデータベース接続 URL の例については、関連するデータベース・モニタの「Setup Requirements and User Permissions」セクションを参照してください。
- SiteScope サーバのデータベースと通信するために SiteScope アプリケーションで使用される、適切なデータベース・ミドルウェア・ドライバのインストール。一般的なデータベース・ドライバ設定の例については、関連するデータベース・モニタの「Setup Requirements and User Permissions」セクションを参照してください。
- データベースに警告を入力するために SiteScope で使用される、対応する SQL ステートメントに一致するように作成および構造化されたデータベース・テーブル。

警告を設定する方法の詳細については、[1226 ページ「警告の設定方法」](#)を参照してください。

モニタの無効化 / 有効化警告を使った作業

モニタの無効化 / 有効化 警告では、モニタの警告のトリガをオンおよびオフにできます。これは、一部のモニタでエラーが発生して不要な警告が生成されるサーバの保守やほかの活動を実行する場合に便利です。

次の図に、1つのモニタに報告される条件に基づいて複数のモニタを無効化するための、警告タイプの例を示します。

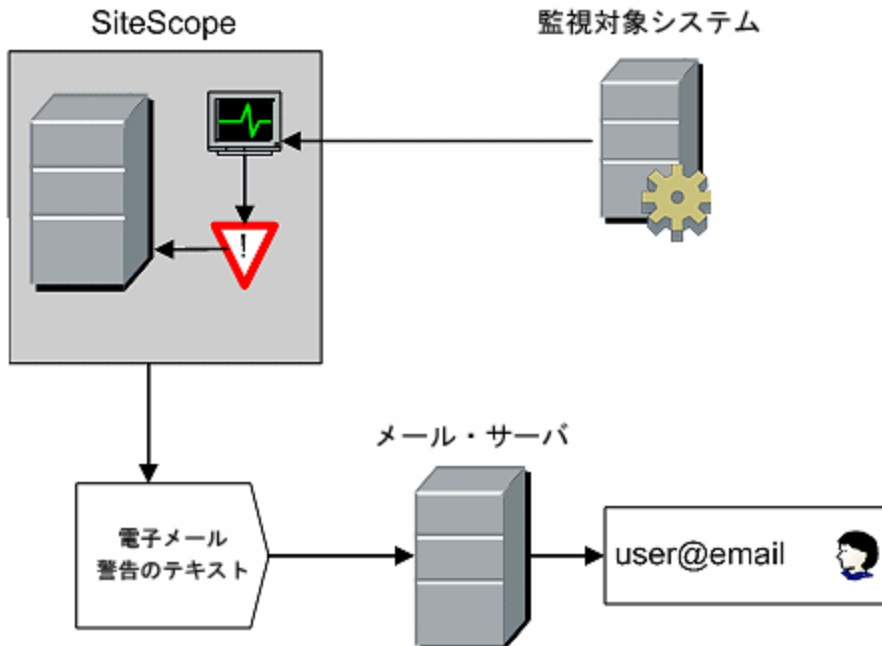


この警告タイプの機能は、モニタとモニタ・グループ間のグループ依存関係を作成する[依存対象]機能と類似しています。重要な違いの1つは、対象のモニタまたはグループの状態が元の状態に戻っても、このタイプの警告によって無効化されたモニタは自動的に再有効化されない点です。モニタを無効化する、警告カテゴリが[エラー]の警告を1つ作成できます。次に、そのモニタを有効化する、警告カテゴリが[良好]の2番目の警告を作成できます。

警告を設定する方法の詳細については、[1226ページ「警告の設定方法」](#)を参照してください。

電子メール警告を使った作業

次の図のように、電子メール警告では SiteScope から指定の電子メール・アドレスにイベント通知が送信されます。



電子メール警告タイプを使用するには、次が必要です。

- アクティブな電子メール・サーバへのアクセス
- 電子メール警告を受信できる1つ以上の電子メール・アカウント
- 外部の電子メール・サーバと連携できるように設定された SiteScope の電子メール・プリファレンス

SiteScope の電子メール受信者の設定の詳細については、[629ページ「電子メール・プリファレンス」](#)を参照してください。

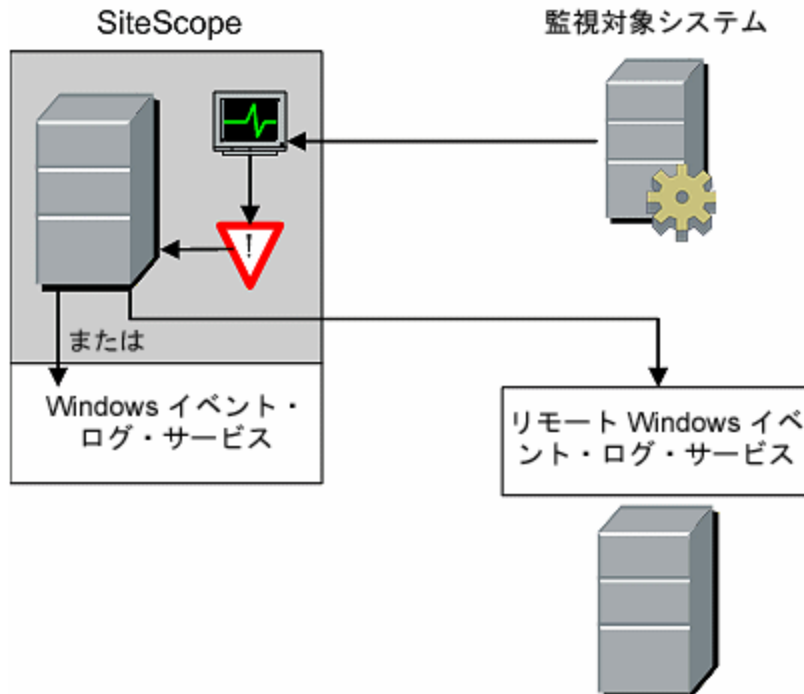
警告を設定する方法の詳細については、[1226ページ「警告の設定方法」](#)を参照してください。

注: 電子メール警告は、プレーン・テキスト形式です。警告リストに表示されたモータ相互間の改行を付けて電子メール警告を受信するには、改行を削除しないように Microsoft Outlook を設定する必要があります。

ログ・イベント 警告を使った作業

ログ・イベント 警告を使用して、Windows アプリケーションのイベント・ログに記録されるイベントのタイプを拡張できます。これにより、通常は Windows オペレーティング・システムによって記録されないイベント・データをログ・クエリ・システムに転送できます。

次の図に、ログ・イベント 警告を示します。



ログ・イベント 警告タイプを使用するには、次のが必要です。

- Windows イベント・ログ・サービスへのアクセス。標準設定では、SiteScope が実行されているマシンのイベント・ログになります。警告定義を設定して、ログ・イベントを別のサーバに送信できます。
- Microsoft Windows プラットフォームで実行されている SiteScope。

注意: SiteScope の Microsoft Windows イベント・ログ・モニタを使用している場合、無限ループ状態が発生してイベント・ログ・ファイルの空き領域がなくなる可能性があるため、ログ・イベント 警告タイプを使用するときには注意が必要です。たとえば、Microsoft Windows イベント・ログ・モニタによって、ログ・イベント 警告をトリガするイベントが検出され、新しいイベントがイベント・ログに書き込まれます。このことがイベント・ログ・モニタで検出され、ログ・イベント 警告がトリガされます。このようなことが繰り返されると無限ループが発生します。これを回避するため、ログ・イベント 警告タイプを Microsoft Windows イベント・ログ・モニタに関連付けないようにしてください。

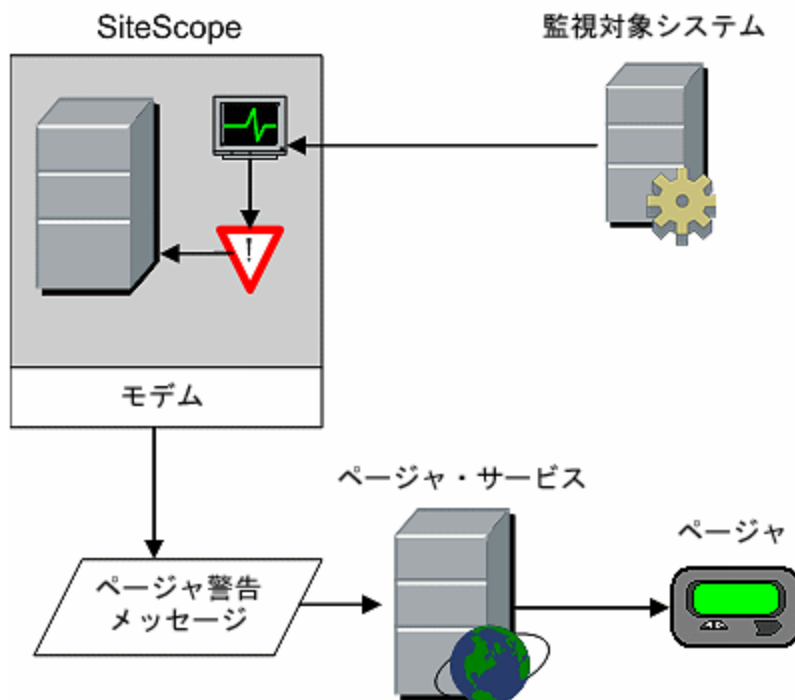
警告を設定する方法の詳細については、[1226ページ「警告の設定方法」](#)を参照してください。

ページ警告を使った作業

注: ページ・アクション・タイプを使用する警告を作成するオプションは利用できなくなりました。次のバージョンの SiteScope ではページ警告アクション・タイプのサポートを削除する予定です。後方互換のために、この警告アクション・タイプは、プロパティ `enableDeprecatedAlertActions=pager` を <SiteScope root directory>\groups\master.config ファイルに追加することで有効にすることができます。値は、大文字と小文字の区別がなく、その他の値が並んでいる場合コンマで区切ります。

ページ警告を使用して、電子ページにイベント通知を送信できます。これは、電子メールにアクセスできない場合に特に便利です。使用するページのタイプやページ・サービスの機能に応じて、問題や検出した条件についての簡略化した説明を含むページ・メッセージを送信するように[ページ警告]を設定できます。

次の図に、ページ警告を示します。



ページ警告タイプを使用するには、次が必要です。

- アクティブなページ・サービスへのアクセス
- SiteScope サーバがページ・サービスへの接続に使用できるモデム
- ページ警告を受信できる 1 台以上のページ
- モデムとページ・サービスが連携するように設定された SiteScope ページ・プリファレンス

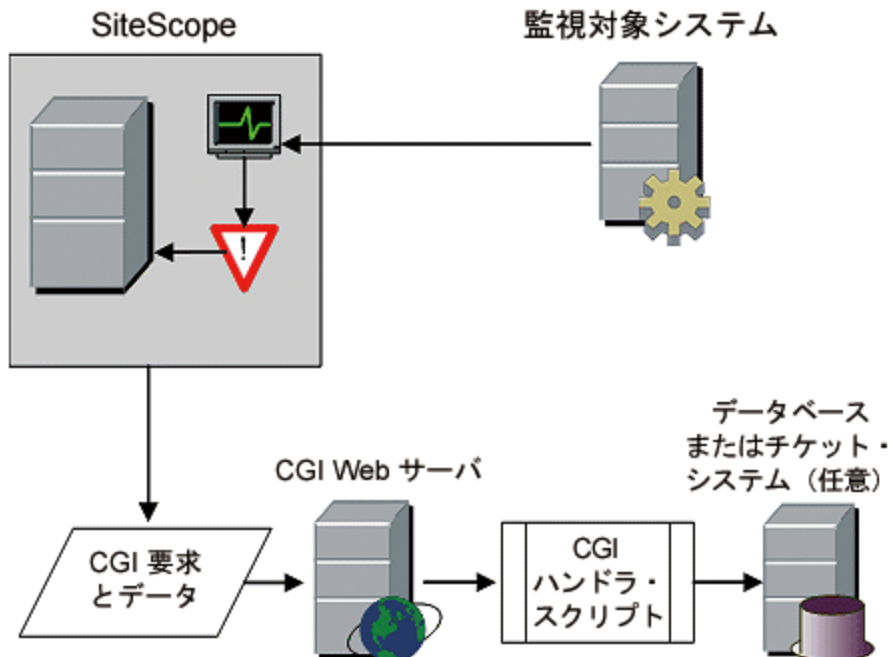
ページ警告の使用を SiteScope に設定する方法の詳細については、[745ページ「ページ・プリファレンス」](#)を参照してください。

警告を設定する方法の詳細については、[1226ページ「警告の設定方法」](#)を参照してください。

送信警告を使った作業

送信警告では、共通ゲートウェイ・インタフェース・プロトコル(CGI)を使用して、POST データが CGI 対応プログラムに転送されます。これは、トラブル・チケット・システムまたはレポーティング・データベースのフロント・エンドである別のサーバの CGI スクリプトにイベント・データを転送するために使用できます。この警告のタイプは、ほかのセキュリティ設定を変更せずに HTTP または HTTPS を使用し、ファイアウォールを通して警告情報を送信する手段を提供します。

次の図に、送信警告を示します。



送信警告タイプを使用するには、次の必要があります。

- SiteScope サーバと、CGI スクリプトまたはサーバを実行しているサーバの間の HTTP アクセス
- 適切な CGI スクリプトまたはサーバへの CGI POST 要求の形式および構文

警告を設定する方法の詳細については、[1226ページ「警告の設定方法」](#)を参照してください。

スクリプト 警告を使った作業

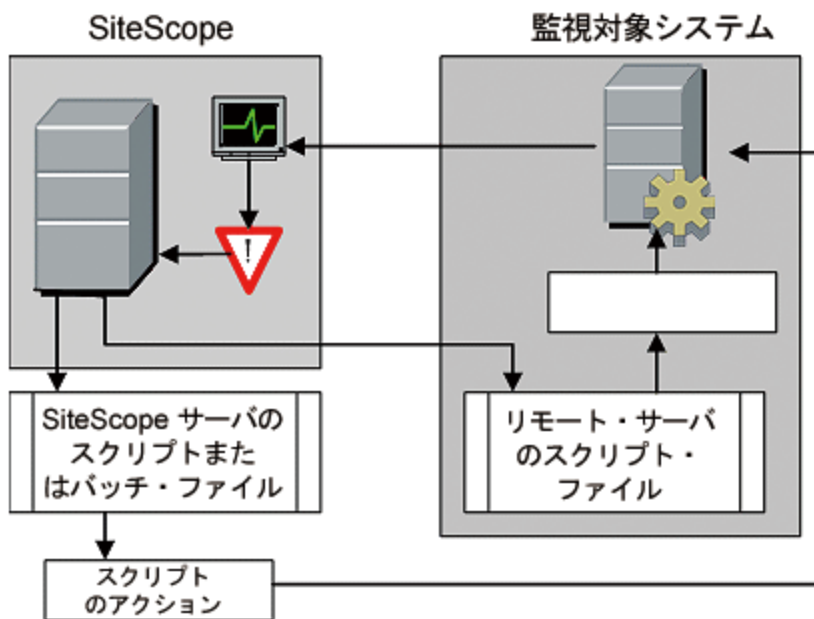
スクリプト 警告 では、自動的に復旧スクリプトを起動できます。スクリプト 警告を設定して、サーバまたはサービスを再起動するコマンドを実行できます。

スクリプト 警告の最も重要なコンポーネントは次のとおりです。

- スクリプト定義自体
- 警告をトリガするために割り当てられたモニタ
- 警告によって実行されるスクリプト

スクリプトの使用目的によっては、警告メッセージのテンプレートや、結果として生成される警告メッセージ・ファイルについても検討する必要があります。データをスクリプトに渡す[パラメータ]設定と共に、スクリプト・テンプレートを使用できます。

次の図に、ローカル・スクリプトおよびリモート・ホストのスクリプトの、一般的なスクリプト 警告の概念を示します。



スクリプト 警告の定義またはインスタンスと、警告をトリガするモニタは、SiteScope のほかの警告やモニタと同様に処理されます。たとえば、リモート UNIX サーバで実行されている Web サーバを監視するモニタを作成するとします。スクリプトを実行するモニタに関連付けられたスクリプト 警告を作成して、モニタでエラーが報告された場合に Web サーバ・プロセスを強制終了して再起動させることができます。

警告を設定する方法の詳細については、[1226ページ「警告の設定方法」](#)を参照してください。

本項の内容

- [1220ページ「スクリプト・ファイルの管理」](#)
- [1220ページ「スクリプトへのデータの引き渡し」](#)

- 1221 ページ「各種スクリプトの実行」
- 1221 ページ「スクリプトのトラブルシューティング」

スクリプト・ファイルの管理

スクリプト警告定義によって呼び出される、または実行されるスクリプト・ファイルを作成することは、SiteScope のこの自動化機能を使用する場合のもう 1 つの重要な手順です。スクリプトによって実行される特定のコマンドおよびアクションは、ユーザが決定できます。スクリプト・ファイルは、スクリプトを実行するオペレーティング・システムと互換性のあるプレーン・テキスト・ファイルで作成する必要があります。これは、SiteScope が実行されているサーバや、SiteScope からアクセスできるリモート・マシンになります。

SiteScope が実行されているマシンでスクリプトを実行するには、スクリプト警告が定義されている SiteScope マシンの < **SiteScope のルート・ディレクトリ** > \scripts ディレクトリにスクリプト・ファイルを保存する必要があります。

リモート・マシンでスクリプトを実行するには、SiteScope にリモート・マシンでの実行権限があるユーザ・アカウントの、ホーム・ディレクトリ・ツリーの \scripts ディレクトリにスクリプトを保存する必要があります。

スクリプト実行時の現在の実行ディレクトリは、< **SiteScope のルート・ディレクトリ** > \classes\ ディレクトリであり、< **SiteScope のルート・ディレクトリ** > \scripts\ ディレクトリではありません。スクリプト自体によって実行されるコマンドの場合、相対実行ディレクトリは < **SiteScope のルート・ディレクトリ** > \classes\ になります。スクリプトによって呼び出されるほかのファイル・システム・コマンドまたはプログラムでは、現在のディレクトリに注意を払う必要がないようにフル・パスを使用してください。また、サーバ・システムの環境変数はスクリプトの実行に対応するように設定されていない場合があります。これも、スクリプトによって呼び出される実行可能ファイルにフル・パスを使用する理由の 1 つです。SiteScope ではなくコマンド・ラインからスクリプトを実行して動作させる場合、ユーザがエラーを特定する必要があります。

スクリプトへのデータの引き渡し

多数のパラメータがコマンド・ライン引数として SiteScope からスクリプトに渡されます。このオプションを使用して、スクリプトのアクションの変更可以使用できるデータをスクリプトに渡すことができます。これにより、スクリプト警告に汎用性が備わります。標準設定では、SiteScope スクリプト警告からスクリプトに 7 個のコマンド・ライン引数が渡されます。コマンド・ライン引数は次のとおりです。

- スクリプト・ディレクトリのパス
- 警告の原因となったモニタの名前
- モニタの現在の状態
- 警告メッセージ・ファイルへのパス
- モニタの ID コード
- モニタのグループ
- 警告フォームの[パラメータ]テキスト・ボックスで指定した追加パラメータ

これらの標準設定の引数の 2 つによって、スクリプトからより多くのデータにアクセスできます。1 つは警告メッセージ・ファイルで、もう 1 つは[パラメータ]テキスト・ボックスです。警告メッセージ・ファイルは、スクリプト警告インスタンスに選択された警告テンプレートに基づいて SiteScope によって作成される、一時的なテキスト・ファイルです。作成または使用するテンプレートに応じて、警告メッセージ・ファイルには、カスタム情報や、警告をトリガしたモニタに固有のデータが含まれます。警告メッセージ・ファイルへのパスをスクリプトに渡すと、スクリプトからこのデータにアクセスできるようになります。

[パラメータ]テキスト・ボックスを使用して、スクリプトに渡す個々のモニタ・パラメータ・データを指定します。パラメータをスペースで区切って複数のパラメータを含めることができます。これにより、スクリプトに渡すパラメータの総数を効率的に増やすことができます。

スクリプト・ディレクトリのパスは、別のプログラムへの実行パスを設定する場合や、スクリプトによって作成される出力のディレクトリ・パスを設定する場合に役に立ちます。

スクリプトへのパラメータやデータの引き渡しの詳細およびその例については、[1267ページ「スクリプト警告のスクリプトの記述」](#)を参照してください。

各種スクリプトの実行

非バッチ・スクリプト (VBScript や Perl など) をバッチ・ファイルにラッピングせずに実行できます。

- スクリプトを拡張子付きで表示するには、`_scriptMonitorExtensions` プロパティを < SiteScope のルート・ディレクトリ > \groups\master.config ファイルに追加します。たとえば、`.pl`、`.py`、または `.php` スクリプトを表示するには、次の形式を使用します。
`_scriptMonitorExtensions=.pl;.py;.php`
- スクリプトの拡張子を使用してスクリプト・インタプリタを実行するには、次のように、`_scriptInterpreters` プロパティを < SiteScope のルート・ディレクトリ > \groups\master.config ファイルに追加します。
`_scriptInterpreters=pl=c:/perl/perl.exe;py=c:/python/python.exe;php=c-:/php/php.exe`

スクリプトのトラブルシューティング

本項では、SiteScope スクリプトを使って作業する場合のトラブルシューティングと制限事項について説明します。

- スクリプトは、SiteScope サービスによって使用されるアカウントの権限で実行されます。スクリプトによっては、さらに権限が必要になります。この場合、[サービス]コントロール・パネルを使用して SiteScope のログイン・アカウントを変更し、SiteScope を再起動する必要があります。たとえば、サービスの再開またはリモート・マシンの再起動を行うスクリプトや、保護されたファイルをコピーするスクリプトがこれに該当します。
- スクリプトは SiteScope サービスによって実行されるため、ログイン時に実行される操作はスクリプトでは実行されない可能性があります。たとえば、マッピングされているドライブ、環境変数、ほかのログイン・スクリプトの項目は使用できません。また、キーボードなどの入力デバイスから対話形式の入力を受け付けることはできません。ユーザの確認や入力が必要なスクリプトのアクションまたはコマンドは、スクリプトがハングアップする原因になります。ユーザのアクションが必要な対話形式のコマンドをスクリプトに含めないでください。また、WIN32 アプリケーション(メモ帳など)を開く場合も、ユーザがアプリケーションを終了するまで待機してからスクリプトの実行が続行されるため、スクリプトがハングアップする原因になります。
- スクリプト警告の状態のサマリに引用符が含まれている場合、スクリプト警告の結果では、SiteScope によって引用符が二重引用符に変更されています。内容の照合フィルタを定義する場合は、このことを考慮する必要があります。

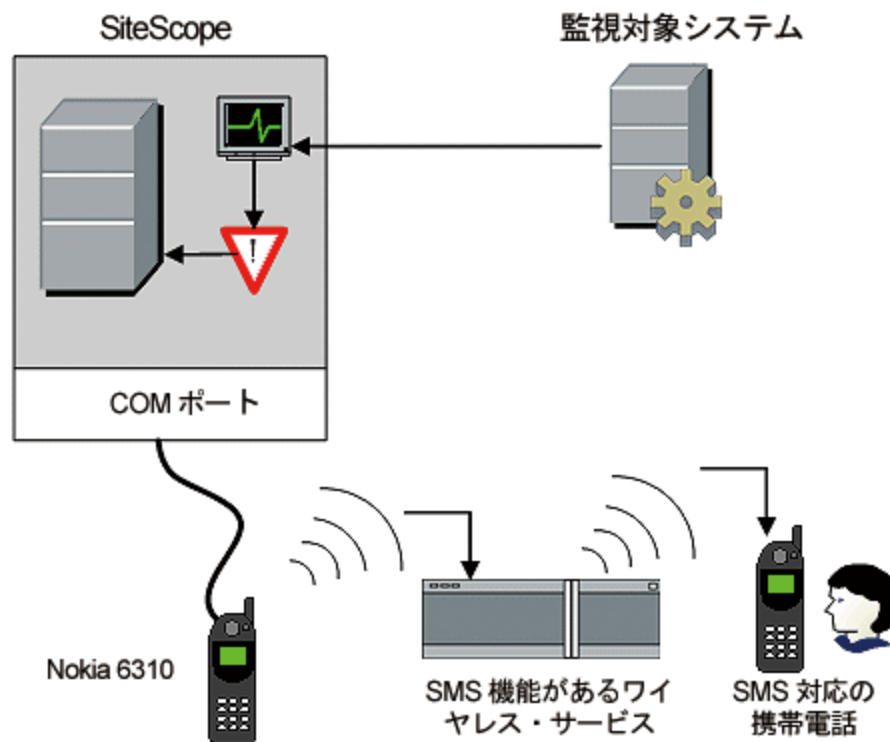
SMS 警告を使った作業

注: SMS アクション・タイプを使用する警告を作成するオプションは利用できなくなりました。次のバージョンの SiteScope では SMS 警告アクション・タイプのサポートを削除する予定です。後方互換のために、この警告アクション・タイプは、プロパティ `enableDeprecatedAlertActions=SMS` を < SiteScope のルート・ディレクトリ > \groups\master.config ファイルに追加することで有効にすることができます。値は、大文字と小文字の区別がなく、その他の値が並んでいる場合コンマで区切ります。

SMS 警告は、イベント条件を報告した SiteScope モニタの名前とそのモニタの状態をメッセージの内容として送信するように設計されています。ページャ警告の代替手段として、モバイル・ユーザに電子メールを使用せずにイベント通知を送信するために使用します。

注: 現時点では、SMS 警告を SiteScope から送信するには、このセクションで指定したハードウェアを使用する必要があります。SiteScope を使用して SMS メッセージを送信する代替方法については、[HP Software Self-solve Knowledge Base](http://h20230.www2.hp.com/selfsolve/documents) (<http://h20230.www2.hp.com/selfsolve/documents>)を参照してください。技術情報を利用するには、HP パスポート ID を使ってログオンする必要があります。

次の図に、SMS 警告を示します。



SMS 警告タイプを使用するには、次のが必要です。

- SMS 警告を送信する SiteScope マシンの空きシリアル通信ポート 1 個
- SiteScope を実行するマシンにワイヤレス伝送デバイスを接続するためのシリアル-ワイヤレス・デバ

イス間 インタフェース・ケーブル(RS-232 アダプタ・ケーブル Nokia DLR-3P)

- 警告を送信する SiteScope マシンに接続された SMS 対応のワイヤレス・デバイス(インタフェース・ケーブルを使用する Nokia 6310 電話)
- SMS 警告を有効にするために必要なソフトウェア(通常, SiteScope 7.6c1 以降に付属)

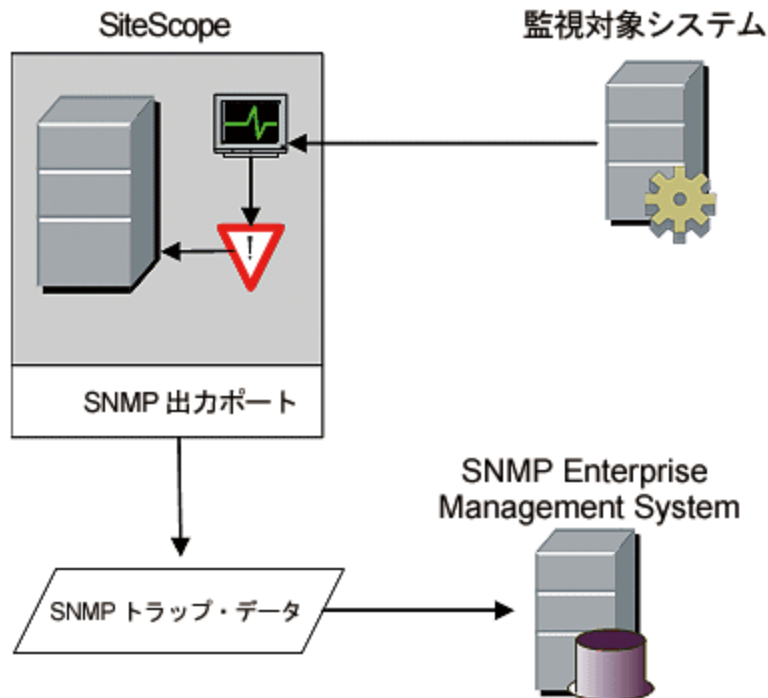
注: Nokia Data Suite, Palm Hot Sync, その他の PDA ソフトウェアが SiteScope を実行するサーバ上で実行されていないことを確認してください。これらのプログラムは, COM ポートをバインドしてダイヤラを正常に動作できなくする可能性があります。

警告を設定する方法の詳細については, [1226 ページ「警告の設定方法」](#)を参照してください。

SNMP トラップ警告を使った作業

SNMP トラップ警告は、任意のタイプの SiteScope モニタから SNMP 対応のホストまたは管理システムにイベント・データを転送します。つまり、SiteScope を使用して、独自の SNMP エージェントを持たないアプリケーションやシステムのイベントを監視および報告できます。たとえば、SNMP トラップ警告を使用して、SiteScope Microsoft Windows パフォーマンス・カウンタ・ベースのモニタ・タイプまたは URL モニタから SNMP トラップの形式で測定値データを送信できます。

次の図に、SNMP トラップ警告を示します。



SNMP トラップ警告タイプを使用するには、次が必要です。

- 適切な SNMP ネットワーク・ポートへのアクセス
- 適切な SNMP 管理コンソールと連携するように設定された SiteScope SNMP プリファレンス

送信 SNMP トラップ警告のエンコーディングは、環境によって決まります。環境が国際と定義されている場合、SNMP トラップは UTF-8 形式で送信されます。それ以外の場合は、環境全体に使用されるのと同じエンコーディングで送信されます(このことは、**< SiteScope のルート・ディレクトリ> \groups\master.config** ファイルの `httpCharSet` プロパティ内で定義できます)。

SNMP 警告の使用を SiteScope に設定する方法の詳細については、[763 ページ「SNMP プリファレンス」](#)を参照してください。

警告を設定する方法の詳細については、[1226 ページ「警告の設定方法」](#)を参照してください。

サウンド警告を使った作業

サウンド警告は、警告の発生時に SiteScope が稼動しているマシンでサウンド・ファイルまたはオーディオ・ファイルを再生します。この警告は、サポート・スタッフが常駐する領域内に SiteScope サーバがあり、関連付けられたサウンド・ファイルを処理できるサウンド・カードがサーバに装備されている場合にのみ効果があります。

または、SiteScope で提供する Web ページに警告オーディオ・ファイルを埋め込むように、SiteScope を設定できます。このオーディオ・ファイルは、メイン表示枠やグループの詳細ページなどの、モニタのエラー状態を含む SiteScope ページに埋め込まれます。これにより、ユーザ・インタフェース経由ですべての SiteScope クライアントにオーディオで通知できますが、これは SiteScope 警告とは異なるため、サウンド警告と同じ設定オプションは使用できません。

SiteScope でブラウザからサウンドを再生するように設定する方法の詳細については、[1228 ページ「警告メッセージ内容のカスタマイズ方法」](#)を参照してください。

サウンド警告のその他の情報については、[HP Software Self-solve Knowledge Base](#) (h20230.www2.hp.com/selfsolve/documents)を参照してください。技術情報を利用するには、HP パスポート ID を使ってログオンする必要があります。

警告を設定する方法の詳細については、[1226 ページ「警告の設定方法」](#)を参照してください。

警告の設定方法

このタスクでは、警告定義を設定する手順について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- [1226ページ「警告の作成」](#)
- [1226ページ「警告のテスト」](#)
- [1227ページ「警告のメッセージ内容のカスタマイズ」](#)
- [1227ページ「警告テンプレートのタグ・スタイルのカスタマイズ」](#)
- [1227ページ「結果」](#)
- [1227ページ「警告の無効化\(任意指定\)」](#)

1. 警告の作成

SiteScope ツリーのグループまたはモニタ・コンテナに、新規警告を作成するか、既存の警告をコピーすることができます。

- **新規警告を作成します。** 警告に関連付けるコンテナを右クリックし、**[新規作成]>[警告]**を選択します。警告の名前を入力し、警告をトリガするターゲットを選択して、警告アクションを設定します(**[警告アクション]**パネルで、**[新規警告アクション]**をクリックして[警告時のアクション]ウィザードを起動します)。各警告スキームに1つ以上の警告アクションを作成できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、[1242ページ「\[新規警告\]/\[警告の編集\]ダイアログ・ボックス」](#)を参照してください。
- **警告定義をコピーします。** **[警告]**タブでコピーする警告を選択し、目的のグループまたはモニタ・コンテナに貼り付けます。警告ターゲットが、自動的に警告のコピー先のグループまたはモニタに変わります。

注: ページャまたは SMS アクション・タイプを使用する警告を作成するオプションは利用できなくなりました。次のバージョンの SiteScope ではページャ および SMS 警告アクション・タイプのサポートを削除する予定です。

注意: 警告定義をグループ・コンテナ間でコピーする場合、貼り付けた警告の**[警告ターゲット]**が自動的にリセットされて、警告の貼り付け先であるコンテナの子がすべて含まれます。警告の貼り付け後、割り当てた**[警告ターゲット]**が新しい警告コンテキストと全体的な警告計画に対し適切になるように、警告定義のプロパティを編集します。

2. 警告のテスト

モニタ・ツリーの**[警告]**タブで警告を選択し、**[テスト]**をクリックします。テストするモニタ・インスタンスを選択し、**[OK]**をクリックします。ダイアログ・ボックスが開き、警告テストに関する情報が表示されます。

注: 警告をテストするために、選択したモニタが、警告をトリガするように選択した状態カテゴリと同じ状態カテゴリを報告する必要はありません。たとえば、エラー条件によってトリガされる警告をテストする場合、テスト時点でモニタがエラーを報告する必要はありません。

3. 警告のメッセージ内容のカスタマイズ

SiteScope 警告 テンプレートをカスタマイズして、警告メッセージの内容と形式を変更します。

タスクの詳細については、1228 ページ「警告メッセージ内容のカスタマイズ方法」を参照してください。

4. 警告テンプレートのタグ・スタイルのカスタマイズ

パーサで特定の区切り文字が必要な場合や、変数の識別に使用する括弧の区切り文字を変更する場合は、SiteScope 警告テンプレートのタグ・スタイルをカスタマイズします。

タスクの詳細については、1230 ページ「警告テンプレートのタグ・スタイルのカスタマイズ方法」を参照してください。

5. 結果

警告がモニタ・ツリーの指定したコンテナに追加されます(🔔 アイコンで示されます)。SiteScope ダッシュボードには、警告が 1 つ以上設定されている各グループまたはモニタの横に警告アイコン🔔も表示されます。

例：



名前	状態	タイプ	ター...	サマリ	更新...	詳細	🔔	🔔
選択した...								
CPU	🟢	CPU	Site...	1% ...	10/1...		🔔	
カウ... (Count)								
utilization	🟢			1%				
utilization c...	🟡			1%				
utilization c...	🟡			2%				

6. 警告の無効化(任意指定)

[警告] タブから警告を無効化できます。無効化する警告を選択して、[無効化] ボタンをクリックします。[警告] タブから無効化した警告は発行できません。これは、モニタの[プロパティ] タブまたはダッシュボードのモニタに対して設定された、関連警告ステータスを上書きします。

注: 特定のグループおよびモニタに関連付けられた警告(警告自体ではなく)の無効化の詳細については、343 ページ「モニタの警告の設定 - オプション」を参照してください。

警告メッセージ内容のカスタマイズ方法

このタスクでは、SiteScope 警告 テンプレート をカスタマイズして、警告 メッセージ の内容 と形 式 を変 更 する 方法 について説明します。

1. SiteScope マシンの警告 テンプレート・ディレクトリにアクセスできるテキスト・エディタを開きます。
SiteScope 警告 テンプレートがあるディレクトリの名 前 のリストについては、[1231 ページ](#)「SiteScope 警告 テンプレートのディレクトリ」を参照してください。
2. カスタマイズする警告 のタイプ の既 存 のテンプレート・ファイル をテキスト・エディタで開きます。
3. テンプレートを変 更 します。警告 のタイプに 応 じて、テキストの追 加 や削 除、テキストまたはプロパティ変 数 の順 序 変 更、ほかのプロパティ変 数 の追 加 ができます。特定のプロパティを追 加 するには、該 当 のプロパティ変 数 名を山括弧 (< >) の間に入れてテンプレートに追 加 します。
特定のプロパティ変 数 のリストについては、[1232 ページ](#)「SiteScope 警告 テンプレートとイベントのプロパティのディレクトリ」を参照してください。
4. 該 当 の警告 のタイプ のディレクトリ内に、一 意 のファイル名 で変 更を保 存 します。新しいテンプレートが [Action Type Settings Template] ドロップダウン・リストに追 加 されます。

例 - 電子メール警告メッセージの短縮

電子メール警告 の長さを短くするには、不 要 な情 報 を表 示 するプロパティを削 除 します。たとえば、特定 の警告 の時間 を報 告 する 必 要 がな い場 合、<time> プロパティをテンプレートから削 除 できます。

ヒント: カスタマイズするテンプレートのベースとして、Typical テンプレート (標準 設 定) を使用 する こと をお 勧 め します。

< SiteScope のルート・ディレクトリ > \templates.mail ディレクトリで、Typical テンプレート・ファイルを開きます。Time: <time> という行を削 除 します。新しいファイル名 で変 更を保 存 します。

例 - SNMP 警告メッセージの変 更

SNMP モニタの状態ではなく、「Error」状態 のカウンタとその値 のリスト が表 示 されるように SNMP 警告 メッセージを変 更 できます。これにより、「Error」のしきい値 を超 えたカウンタのみがメッセージに表 示 されるようになり、ほかのすべてのカウンタは除 外 されます。

< SiteScope のルート・ディレクトリ > \templates.SNMP ディレクトリで、Default テンプレート・ファイル をテキスト・エディタで開きます。このファイルには次の行 が含 まれてい ます。
SiteScope<group>\<name>\<sample>\<state>\

文字列 <state> を文字列 <errorOnly> に置 換 します。山括弧 (<, >) でテキストを囲んだ状態のままにしておきます。

注: 状態 が「Warning」のカウンタのリストを表 示 するには、文字列 <state> を文字列 <warningOnly> に置 換 します。

< SiteScope のルート・ディレクトリ > \groups\master.config ファイルを編集して、次の行を追 加 します。

```
_errorOnlyDelimiter=,
```

同様のエラー定義をほかにも追 加 します。

この例では、区切り文字はカンマ(,)ですが、スペース(" ")やタブ(\t)も使用できます。**master.config** に追加した行は次のようになります。

```
_errorSoundURL=  
_errorOnlyDelimiter=,  
_errorOnlyNewlineFormat=true
```

注:

- 文字列 **<warningOnly>** を使用する場合、**master.config** で文字列 **_warningOnlyDelimiter=<区切り文字>** を使用する必要があります。
- **master.config** で **_errorOnlyDelimiter** が定義されていない場合、標準設定の区切り文字は空白(" ")になります。

例 - SiteScope でブラウザからサウンドを再生するように設定する方法

ブラウザでサウンドを再生してモニタの状態の変化を示すように SiteScope を設定できます。

ブラウザでサウンドを再生できるようにするには、次の手順を実行します。

1. **< SiteScope のルート・ディレクトリ> \groups\master.config** ファイルをテキスト・エディタで開きます。
2. **_errorSoundURL** 設定を見つけます。(
3. この設定を次に変更します。

```
_errorSoundURL=http://< SiteScope のホスト> :< SiteScope のポート> /  
SiteScope/templates.sound/alarm.au
```

4. **master.config** ファイルを保存します。
5. SiteScope を停止および開始します。
6. この変更の後、エラーがトリガしたときは常に SiteScope でアラーム音 (この場合、**< SiteScope> \templates.sound** ディレクトリの **Alarm.au**) が再生されます。上記のタブでソース(src)を変更して再生されるサウンドを変更できます。警告または正常の状態のサウンドを追加する場合には、**_warningSoundURL=** または **_goodSoundURL=** 設定を同様に変更できます。

警告テンプレートのタグ・スタイルのカスタマイズ方法

このタスクでは、たとえば、警告メッセージを処理するパーサで特定の区切り文字が必要な場合に、リストの項目間の区切り文字を変更する方法について説明します。変数の識別に使用される括弧の区切り文字を変更することもできます。これは、XML でメッセージを読み込み、XML 文字列で変数を置換する場合に便利です。

1. 括弧の区切り文字を変更するテンプレート・ファイルを編集します。例: <SiteScope のルート・ディレクトリ> \templates.mail\.

2. テキスト・エディタを使用して、関連するファイルの最上部に次の行を追加します。

```
[Tag-Style:{}]
```

html の山括弧 (<>) の代わりに区切り文字として使用する文字 (この例では {}) を、コロンの後に入力します。

3. Tag-Style 文字列で定義した新しい文字で関連する変数を囲むように編集します。例: {state}。

SiteScope 警告テンプレートのディレクトリ

次に、コピーおよびカスタマイズできる SiteScope 警告テンプレートが含まれるディレクトリ名のリストを示します。

テンプレート・グループ	説明	場所
イベント・ログ	イベント・ログに書き込まれたデータの形式と内容。	< SiteScope のルート・ディレクトリ>\ templates.eventlog
履歴	レポートが生成された受信者に通知する電子メール・メッセージの形式と内容。	< SiteScope のルート・ディレクトリ>\ templates.history
電子メール	電子メールで送信された警告メッセージの形式と内容。	< SiteScope のルート・ディレクトリ>\ templates.mail
テンプレート	ページ警告のグループ、詳細、場所、ページ形式、内容。	< SiteScope のルート・ディレクトリ>\ templates.page
ポスト	送信警告によって CGI スクリプトに送信されたメッセージの形式と内容。	< SiteScope のルート・ディレクトリ>\ templates.post
スクリプト	スクリプト警告がトリガされたときにスクリプトに送信されたメッセージの形式と内容。	< SiteScope のルート・ディレクトリ>\ templates.script
SNMP	SNMP トラップがトリガされたときに SNMP によって送信されたメッセージの形式と内容。	< SiteScope のルート・ディレクトリ>\ templates.snmp

SiteScope 警告テンプレートとイベントのプロパティのディレクトリ

次の共通プロパティは、SiteScope 警告テンプレート、共通イベント・マッピング属性、電子メール・レポートにあるか、使用されます。

本項の内容

- 1232ページ「警告テンプレートとイベントのプロパティ」
- 1239ページ「電子メール・レポートのプロパティ」

警告テンプレートとイベントのプロパティ

次に、SiteScope 警告テンプレートに含まれる共通プロパティと共通イベント・マッピングで使用する属性のリストを示します。

利用可能なプロパティ	説明 / 例	該当するテンプレート
<_customPropertiesValues>		
<_eventCategory>		NTEventlog
<_httpPort>		NTEventlog
<_webserverAddress>		NTEventlog
<alert>		XMLMail
<alertHelpURL>	警告トピックを含む、SiteScope ヘルプの URL。	NoDetails Traceroute WithDiagnostic
<alert::name>	警告の名前。	
<alert::id>	警告 ID。	
<alert::description>	警告定義のテキストの詳細。	
<alert::disableDescription>	無効操作の目的の詳細。	
<alert::actionID>	警告アクションの ID。	
<alert::actionName>	警告アクションの名前。	
<all>	モニタのすべてのプロパティ。	
<allThresholds>	電子メール警告でモニタのすべてのしきい値を返す。	
<automaticSeverityMapping>		

利用可能なプロパティ	説明 / 例	該当するテンプレート
<bacMonitorID>	モニタ BSM ID。	
<bacSessionID>	BSM プロファイル ID。	
<category>	モニタのカテゴリ。	Typical
<_classifier>	電子メール警告でモニタの最初のしきい値を返す。	
<currentTime>	警告の実行時刻。	
<diagnostic>		XMLMail
<diagnosticText>		Default User NoDetails WithDiagnostic
<diagnosticTraceRoute>		Traceroute WithDiagnostic
<errorCounterOnly>	エラー状態のモニタ・カウンタのリスト(カウンタ名のみを返す)。	
<errorOnly>	エラー状態のモニタ・カウンタのリスト(カウンタ名とカウンタ値を返す)。	Typical
<etiType>		
<etiValue>		
<eventID>		NTEventlog
<eventMachine>		NTEventlog
<eventSource>		NTEventlog
<eventType>		NTEventlog
<firstgroupdescription>		
<fullMonitorName>		
<FullGroupId>	SiteScope のルート・ディレクトリからグループへのフル・パス(\\SiteScope を除外)。	
<goodCounterOnly>	正常状態のモニタ・カウンタのリスト(カウンタ名のみを返す)。	Typical
<goodOnly>	正常状態のモニタ・カウンタのリスト。	Typical

利用可能なプロパティ	説明 / 例	該当するテンプレート
<group>	モニタが含まれるグループの名前。	AllErrors Default Default User IrrDefault_mail_template NoDetails NTEventlogt PagerMail ShortMail Traceroute Typical WithDiagnostic XMLMail
<group>.propertyname	モニタが含まれるグループのプロパティ。	
<group>.<parent>.propertyname	モニタが含まれるグループの親グループのプロパティ。	
<groupdescription>	グループの詳細	
<groupid>	グループの ID。	Default Typical WithDiagnostic XMLMail
<id>		XMLMail
<mainParameters>	パラメータとして設定されたメイン・モニタ・プロパティのリスト。	Default Default User NTEventlog WithDiagnostic

利用可能なプロパティ	説明 / 例	該当するテンプレート
<mainStateProperties>	状態プロパティとして設定されたメイン・モニタ・プロパティのリスト。統計結果が[レポート]に表示されます。	Default Default User NTEventlog WithDiagnostic
<metric>		
<metricValue>		
<monitorDrilldownURL>	モニタ URL へのイベントでハイパーリンクを作成します。	
<monitor>		XMLMail
<monitorName>		
<monitorServiceId>	モニタのサービス ID の値を入力して、SiteScope イベントから HPOM に送信されるサービス名をカスタマイズできます。これは、SiteScope モニタが HPOM サービス名と関連する場合に便利です。	
<monitorType>		
<name>	モニタの名前 (as _name と同じ)。	Default Default User lr-Default_mail_template NoDetails NTEventlog PagerMail ShortestMail ShortMail ShortSubject Traceroute Typical WithDiagnostic XMLMail

利用可能なプロパティ	説明 / 例	該当するテンプレート
<newSiteScopeURL>	SiteScope サーバの URL。	Default Typical
<newStatus>	測定値の現在の状態。	
<oldStatus>	測定値の以前の状態。	
<processtext>		
<remoteMachineName>	リモート・サーバ・マシンの名前。	
<sample>	サンプル番号。	AllErrors Default Default User NoDetails NTEventlog PagerMail ShortMail Traceroute Typical Typical.mail WithDiagnostic XMLMail
<secondaryParameters>	メインの状態プロパティとその他の内部プロパティのリスト。	
<secondaryStateProperties>	メインの状態プロパティとその他の内部プロパティのリスト。	
<server>		XMLMail
<sitescope>		XMLMail
<sitescopeURL>	管理者アクセス用の SiteScope のメイン・ページへの URL。	AllErrors Default User NoDetails Traceroute WithDiagnostic

利用可能なプロパティ	説明 / 例	該当するテンプレート
<sitescopeuserurl>	ユーザ・アクセス用の SiteScope のメイン・ページへの URL。	
<state>	モニタが報告する状態文字列 (stateString と同じ)。	AllErrors Default Default User Ir-Default_ mail_ template NoDetails PagerMail ShortestMail ShortMail ShortSubject Traceroute Typical WithDiagnostic XMLMail

利用可能なプロパティ	説明 / 例	該当するテンプレート
<tag>	モニタのタグ(存在する場合)。	Default Default User IrrDefault_mail_template NoDetails NTEventlog PagerMail ShortestMail ShortMail ShortSubject Traceroute Typical WithDiagnostic XMLMail
<tag:[tagName]>	警告をトリガしたモニタに割り当てられた [tagName] を含む検索 / フィルタ・タグの値を表示します。 例: 値 <code>Apache</code> がモニタに割り当てられた <code>AppServer</code> というタグがあり、モニタ用に設定された警告テンプレートに <tag:AppServer> を含めます。警告がトリガされた場合、警告テキストの新しいプロパティが <code>Apache</code> に置き換えられます。	
<targetHost>	ターゲット・ホストの名前	
<templateDeployPath>	モニタがデプロイされたテンプレート・グループのパスを表示します。	
<thresholdCrossed>		

利用可能なプロパティ	説明 / 例	該当するテンプレート
<time>	モニタが最後に実行を完了した時間。	AllErrors Default Default User IrrDefault_mail_template NoDetails NTEventlog Traceroute Typical WithDiagnostic XMLMail
<time-date>	モニタが完了した時間の日付部分。	
<time-time>	モニタが完了した時間の時刻部分。	
<warningCounterOnly>	警告状態のモニタ・カウンタのリスト(カウンタ名のみを返す)。	
<warningOnly>	警告状態のモニタ・カウンタのリスト(カウンタ名とカウンタ値を返す)。	Typical

電子メール・レポートのプロパティ

次のプロパティは、<SiteScope>\templates.history ディレクトリに保存されている電子メール・テンプレートに適用されます。

利用可能なプロパティ	説明
_httpPort	SiteScope へのアクセスに使用するポート番号
_webserverAddress	SiteScope サーバの IP アドレス
basicAlertSummary	トリガされた警告に関する基本情報
detailAlertSummary	警告に関する詳細な情報
reportIndexURL	管理レポート用の索引ページへの URL
reportPeriod	このレポートの対象期間
reportURL	HTML バージョンの管理レポートへの URL

利用可能なプロパティ	説明
summary	サマリと測定値情報
textReportURL	SiteScope で生成されたカンマ区切りのファイルへの URL
userReportIndexURL	ユーザがアクセス可能なレポート用の索引ページへの URL
userTextReportURL	ユーザがアクセス可能なレポートで生成されたカンマ区切りのファイルへの URL
userXMLReportURL	ユーザがアクセス可能なレポートで生成された XML ファイルへの URL
xmlReportURL	管理レポートで生成された XML ファイルへの URL


SiteScope 警告のユーザ・インタフェース

本項の内容



- 1241ページ「SiteScope 警告 ページ」
- 1242ページ「[新規警告]/[警告の編集]ダイアログ・ボックス」
- 1249ページ「[アクションタイプ]ダイアログ・ボックス」
- 1252ページ「[警告アクション]ダイアログ・ボックス」









SiteScope 警告 ページ

このページには、選択したモニタまたはグループに関連付けられている警告に関する情報が表示されます。このページを使用して、警告定義を追加、編集、削除します。

アクセス方法	モニタ・ツリーまたはテンプレート・ツリーで、警告の記号  が横に表示されているグループまたはモニタを選択します。右側の表示枠で[警告]タブをクリックすると、オブジェクトに設定されている警告が表示されます。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none">• 特定のモニタまたはグループに対して作成された警告は、オブジェクトの[モニタ/グループの警告]リストに表示されます。ターゲットのモニタまたはグループは、[モニタに関連付けられた警告]/[グループに関連付けられた警告]リストに表示されます。• 各テーブル・列は、列タイトルを右クリックすると昇順または降順に並べ替えられます。上矢印または下矢印は、並べ替え順序を示します。• また、警告を使って作業する場合、SiteScope API を使用することもできます。詳細については、43ページ「SiteScope 設定 API の使用」を参照してください。• Ctrl+C ショートカットを使用して[警告]テーブルの中の選択した行から詳細をコピーできます。
関連タスク	1226ページ「警告の設定方法」
関連情報	1204ページ「SiteScope 警告の概要」


ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
	子の警告を表示：選択したノードの直接の子の警告のみを表示します。
	すべての子孫の警告を表示：選択したノードのすべての子孫の警告を表示します。

UI 要素	説明
	<p>新規警告 : [新規警告] ダイアログ・ボックスが開き、警告を設定して、選択した SiteScope グループまたはモニタに追加できます。ユーザ・インターフェースの詳細については、1242 ページ「[新規警告]/[警告の編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p> <p>注 : このボタンは、[モニタの警告]/[グループの警告] テーブルでのみ使用できます。</p>
	<p>警告の編集 : [警告の編集] ダイアログ・ボックスが開き、選択した警告のプロパティを編集できます。ユーザ・インターフェースの詳細については、1242 ページ「[新規警告]/[警告の編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p>
	<p>コピー : 警告がコピーされます。</p> <p>注 : このボタンは、[モニタの警告]/[グループの警告] テーブルでのみ使用できます。</p>
	<p>貼り付け : ツリーの選択した場所に警告を貼り付けます。</p> <p>注 : このボタンは、[モニタの警告]/[グループの警告] テーブルでのみ使用できます。</p>
	<p>警告の削除 : ツリーから警告を削除します。</p>
有効化	<p>有効化 : モニタ/グループに関連付けられている警告が有効になります。</p>
無効化	<p>無効化 : モニタ/グループに関連付けられている警告が無効になります。</p>
	<p>テスト : 選択したサーバの警告定義をテストします。</p>
	<p>すべて選択 : 表示されている警告がすべて選択されます。</p>
	<p>選択範囲を解除 : 選択をクリアします。</p>
名前	SiteScope で認識される警告の名前。
状態	警告の状態(有効/無効)。
詳細	警告の詳細。
アクション名	1249 ページ「[アクションタイプ] ダイアログ・ボックス」 の警告アクションの名前。
パス	警告に関連付けられているグループまたはモニタのパス。

[新規警告]/[警告の編集] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、SiteScope、グループ、またはモニタの警告を定義できます。

アクセス方法	警告を定義する SiteScope, グループ, またはモニタを右クリックし, [新規作成]>[警告]を選択するか, [警告]タブ(モニタまたはテンプレート・ビュー)で既存の警告を選択して, [警告の編集]  ボタンをクリックします。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none">• SiteScope 管理者ユーザ, または適切な警告権限を付与されたユーザのみが警告を表示, 作成, 編集できます。ユーザ権限の詳細については, 792ページ「権限」を参照してください。• ページャまたは SMS アクション・タイプを使用する警告を作成するオプションは利用できなくなりました。次のバージョンの SiteScope ではページャおよび SMS 警告アクション・タイプのサポートを削除する予定です。
関連タスク	1226ページ「警告の設定方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none">• 1204ページ「SiteScope 警告の概要」• 1249ページ「[アクションタイプ]ダイアログ・ボックス」• 1252ページ「[警告アクション]ダイアログ・ボックス」• 607ページ「共通イベント・マッピング」

このダイアログ・ボックスには次のペインが含まれます。

- [1243ページ「一般設定」](#)
- [1243ページ「警告ターゲット」](#)
- [1244ページ「警告アクション」](#)
- [1246ページ「HP Operations Manager 統合設定」](#)
- [1247ページ「警告の有効化 / 無効化」](#)
- [1248ページ「フィルタ設定」](#)
- [1249ページ「タグの検索 / フィルタ」](#)

一般設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
名前	警告定義の名前。SiteScope の表示でこの警告定義を識別するために使用します。
警告の説明	警告の詳細。この詳細はほかのコンテキストには表示されません。警告の編集時にもみ表示されます。







警告ターゲット


ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
警告ターゲット	<p>ショートカット・メニュー・ツリーを使用して、この警告をトリガするためのグループまたはモニタ、あるいはその両方を選択します。ショートカット・メニューには、現在選択されているオブジェクトおよびすべての子オブジェクトが含まれます。現在のオブジェクトの横にあるボックスをチェックすると、チェックしたオブジェクト内のすべてのオブジェクトにこの警告が関連付けられます。個々のオブジェクトを 1 つ以上チェックすると、選択したオブジェクトにこの警告定義が関連付けられます。</p> <p>あるいは、SiteScope のルートを選択し、フィルタに設定された条件に一致するオブジェクトに警告の対象を制限する警告フィルタ・ルールを[フィルタ設定]で定義することもできます。詳細については、1242ページ「[新規警告]/[警告の編集]ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p>

警告アクション

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
	新規警告アクション :[アクションタイプ]ダイアログ・ボックスが開き、警告をトリガしたときに実行するアクションを定義できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、 1249ページ「[アクションタイプ]ダイアログ・ボックス」 を参照してください。
	警告アクションの編集 :[アクションタイプ]ダイアログ・ボックスが開き、警告アクションを編集できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、 1249ページ「[アクションタイプ]ダイアログ・ボックス」 を参照してください。
	警告アクションの削除 :警告アクションを削除します。関連付けられたモニタは無効にはなりません。
	重複 :警告アクションを複製します。
	すべて選択 :表示されている警告アクションをすべて選択します。
	選択を解除 :選択をクリアします。

UI 要素	説明
<警告 アクション・ タイプ・アイ コン> 	警告に定義されているアクションの種類を示します。
	データベース : 問題の詳細を含む警告メッセージを SQL データベースへのレコードとして送信します。
	モニタの無効化 / 有効化 : 警告の生成を手動で制御します。
	電子メール : エラーまたは警告の詳細を含む電子メール・メッセージを、1 つ以上の電子メール・アドレスに送信します。
	ログ・イベント : Microsoft Windows イベント・ログにイベントのログを記録します。
	ページャ : SiteScope が特定の条件を検出したことを通知するメッセージをページャに送信します。 注 : ページャ警告タイプを使用する警告を作成するオプションは利用できなくなりました。次のバージョンの SiteScope ではページャ警告のサポートを削除する予定です。
	ポスト : モニタ条件の詳細を含む CGI POST を CGI スクリプト、サーブレット、またはその他の CGI 対応プログラムに送信します。
	スクリプト : SiteScope は、警告トリガ条件が検出されるとスクリプトまたはバッチ・ファイルを実行できます。呼び出されるスクリプトまたはバッチ・ファイルは、コマンド・ライン入力から呼び出し可能なシステム・コマンドまたは任意の言語のプログラムを実行できます。
	SMS : ショート・メッセージ・サービス(SMS)を使用して、短いテキスト・メッセージを SMS 対応の携帯電話やワイヤレス・デバイスに送信します。 注 : SMS 警告タイプを使用する警告を作成するオプションは利用できなくなりました。次のバージョンの SiteScope では SMS 警告のサポートを削除する予定です。
	SNMP トラップ : SNMP ホストまたは管理コンソールに SNMP トラップを送信します。
	サウンド : イベントが検出されると、SiteScope が稼働するマシン上でサウンドまたはオーディオ・ファイルを再生します。
名前	警告がトリガされたときに実行されるアクションの名前。警告の名前ではありません。
カテゴリ	[状態トリガ] パネルで選択した、警告アクションをトリガするカテゴリ。[状態トリガ] のユーザ・インタフェースの詳細については、 1264 ページ「[状態トリガ] パネル」 を参照してください。
いつ	[トリガの頻度] パネルで選択した、いつ警告を送信するかを示すスケジュール。[トリガの頻度] のユーザ・インタフェースの詳細については、 1265 ページ「[トリガの頻度] パネル」 を参照してください。
スケジュール	[アクションタイプの設定] パネルで選択した毎日または毎週のスケジュール。[アクションタイプの設定] のユーザ・インタフェースの詳細については、 1252 ページ「[警告アクション] ダイアログ・ボックス」 を参照してください。

UI 要素	説明
ターゲット	<p>アクション・タイプのターゲット・データが含まれます。タイプに応じて、ターゲット 列には次の内容が含まれます。</p> <ul style="list-style-type: none">データベース: [データベース接続 URL] ボックスで入力した URL が含まれます。電子メール: [電子メールの送信先] セクションで選択した電子メール受信者が含まれます。無効化または有効化: [ターゲット] リストで選択したターゲットが含まれます。ログ・イベント: [電子メールの送信先] セクションで選択したログ・イベント受信者が含まれます。ポスト: [フォーム送信先 URL] ボックスで入力した URL が含まれます。スクリプト: [スクリプト] ボックスで選択したスクリプトが含まれます。SNMP トラップ: [SNMP トラップ] リストで選択した SNMP トラップが含まれます。サウンド: (この列は空です)。

HP Operations Manager 統合設定

注: [HP Operations Manager 統合設定] パネルは、HP 操作エージェントがインストールされて、HPOM/BSM サーバに接続され、かつ、[HP Operations Manager 統合] ダイアログ・ボックスで [イベント送信の有効化] が選択された場合にのみ使用できます([プリファレンス] > [統合プリファレンス] > [HP Operations Manager 統合メイン設定])。詳細については、[268 ページ](#)「SiteScope を使用して HPOM または BSM にイベントを送信する方法」を参照してください。

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
イベント送信	<p>警告がトリガされると HPOM/BSM サーバへのイベントの送信を有効にします。</p> <p>標準設定値: 選択されている</p>
モニタのイベント・マッピングの使用	<p>選択した場合、警告がトリガされると、SiteScope は警告をトリガしたモニタに関連付けられたイベント・マッピング・テンプレートを使用してイベントを送信します。</p> <p>クリアした場合、SiteScope は警告イベント属性値を使用してイベントを送信します。これらの値は、選択した警告イベント・マッピング・プリファレンスに従って入力されます。次の [イベント マッピング] 設定は、警告イベント・マッピングが使用される場合にのみ使用できます。</p> <p>標準設定値: 選択されていない</p>

UI 要素	詳細
イベント・マッピング	<p>モニタ・インスタンスのイベントの送信に使用するイベント・マッピング・テンプレート。このテンプレートには、警告および警告をトリガしたモニタ(測定値レベルの実行時データは利用不可)の SiteScope 実行時データとイベント送信に使用される属性値のマッピングが含まれます。</p> <p>必要なイベント・マッピング・テンプレートを選択するか、標準設定のマッピングを使用します。[新規]または[編集]をクリックして共通イベント・マッピング・ダイアログ・ボックスを開き、新しいイベント・プリファレンスを設定するか、既存のイベント・プリファレンスを変更します。ユーザ・インタフェースの詳細については、612ページ「[新規イベント マッピング] / [イベント マッピングの編集]ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p> <p>注：この設定は、[モニタのイベント マッピングの使用]がクリアされている場合にのみアクティブになります。</p>
イベント・タイプ・インジケータ	<p>このイベントと一緒に送信される警告のイベント・タイプ・インジケータを入力できます。これは、測定値とインジケータの間のマッピングです。この設定は任意で、インジケータがなくてもイベントは送信されます。</p> <p>トリガされた警告の CI タイプは、警告(グループの警告や測定値ごとに CI タイプをレポートするモニタの警告)の設定時に毎回わかっているわけではないので、インジケータを手動で入力すると役に立ちます。</p> <p>注：警告 インスタンスは複数のモニタに関連付けられているか、複数のカウンタによってトリガされる場合があるため、インジケータは自動的に解決できません。</p>
イベント・タイプ・インジケータ状態	<p>このイベントと一緒に送信されるイベント・タイプ・インジケータの状態を入力できます。これは、この状態変化を発生させるしきい値にマップされているイベント重大度レベル(不明、正常域、注意域、警戒域、重要警戒域、危険域)です。このフィールドの設定は任意で、インジケータ状態がなくてもイベントは送信されます。</p> <p>注：警告 インスタンスは複数のモニタに関連付けられているか、複数のカウンタによってトリガされる場合があるため、インジケータ状態は自動的に解決できません。</p>

警告の有効化 / 無効化

警告の生成を手動で制御するために使用します。監視対象のシステムが保守のためにオフラインになっている場合や、警告の受信者が一定期間受信不可能な場合などに役立ちます。

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
警告を有効化	無効化された警告アクションが上書きされ、定義した条件に基づいて警告が実行されるようになります。

UI 要素	詳細
警告を無期限に無効化	<p>このラジオ・ボタンをクリアして警告定義を更新するまで、警告の条件に一致しても SiteScope で警告アクションが実行されないようになります。</p> <p>注 :このオプションを使用すると、一時的な条件に対応するために警告が無効になっている場合、予想される警告機能が失われる場合があります。後でこの状態を確認し、必要に応じて警告定義を手動で有効にしてください。</p>
警告を次の時間設定で無効化: <期間>	指定した期間、警告条件が満たされても警告アクションの実行を停止します。警告はすぐに無効になり、期間が終了すると再度有効になります。
<time1> から <time2>へ 1 回限定のスケジュールに基づいて無効化	指定した期間、条件に一致しても SiteScope で警告アクションが実行されなくなります。警告は、この期間の開始時に無効になり、この期間を過ぎると再度有効になります。
無効化の説明	無効操作の目的の詳細(任意指定)。

フィルタ設定

入力した基準に一致するモニタのみに警告アクションを制限するフィルタ条件を作成します。大量のモニタに警告を定義しておき、選択したリスト内の特定のモニタのみが警告をトリガするようにフィルタを適用できます。これによって警告定義の作成と警告管理を簡素化できます。警告のフィルタリングを無効にするには、該当するフィールドをクリアして、警告定義を更新します。

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
名前の一致	<p>名前の一部に特定のテキストが含まれるものを除き、関連付けられたグループまたはモニタすべてに対する警告を停止します。</p> <ul style="list-style-type: none">• 名前の文字列パターンを照合するための正規表現をこのテキスト・ボックスに入力します。詳細については、199ページ「正規表現の概要」を参照してください。• フィルタ基準として使用するモニタ名文字列の全部または一部を入力します。たとえば、文字列 URL:を入力すると、この警告は名前にURL:が含まれるモニタに制限されます。 <p>注 :照合では大文字と小文字が区別されます。</p>

UI 要素	詳細
状態の一致	<p>特定の状態テキストを返したものを除き、関連付けられたモニタすべてに対する警告を停止します。</p> <ul style="list-style-type: none">警告をトリガするモニタの状態テキストに表示される文字列を入力します。たとえば、テキスト「timeout」を入力すると、この警告に関連付けられ、タイムアウト状態になっているモニタのみが警告をトリガします。状態の文字列パターンを照合するための正規表現をこのテキスト・ボックスに入力します。詳細については、199ページ「正規表現の概要」を参照してください。 <p>注:照合では大文字と小文字が区別されます。</p>
モニタ・タイプの一致	<p>警告アクションを、この警告に関連付けられている一連のモニタの中の特定のモニタ・タイプに制限します。[モニタタイプリスト]から対象とするモニタ・タイプを選択し、[選択されたモニタタイプリスト]ボタンに移動します。</p>
タグの一致	<p>警告アクションを、タグ値を選択したこの警告と関連付けられているモニタのみに制限します。含めるタグを選択します。</p>



タグの検索 / フィルタ

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します(ラベルのない要素は山括弧内に表示されます)。

UI 要素	説明
<タグ名と値>	<p>SiteScope オブジェクト(グループ、モニタ、リモート・サーバ、テンプレート、プリファレンス・プロファイル)を検索およびフィルタするために、キーワード・タグが使用される。SiteScope にタグが作成されていない場合、このセクションは空白で表示されます。タグが作成されている場合はここに表示され、必要に応じてタグを選択できます。</p> <p>概念の詳細については、106ページ「SiteScope オブジェクトの検索」を参照してください。</p>
タグの追加	<p>[新規タグ]ダイアログ・ボックスを開き、新しいキーワード・タグを追加できる。ユーザ・インタフェースの詳細については、111ページ「[新規タグ]/[タグの編集]ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p>

[アクションタイプ]ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、警告がトリガされたときに実行されるアクションを選択できます。

アクセス方法	<ol style="list-style-type: none"> 1. 警告を定義する SiteScope、グループ、またはモニタを右クリックし、[新規作成] > [警告]を選択するか、[警告]タブ(モニタまたはテンプレート・ビュー)で既存の警告を選択して、[警告の編集]  ボタンをクリックします。 2. [新規警告]または[警告の編集]ダイアログ・ボックスの[警告時のアクション]セクションで、[新規警告アクション]  ボタンをクリックします。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> • 一度に選択できる警告のタイプは 1 つのみです。 • 警告を編集する場合、アクションの種類は変更できません。たとえば、警告のアクションの種類が電子メールの場合、[サウンド]には変更できません。 • ページャまたは SMS アクション・タイプを使用する警告を作成するオプションは利用できなくなりました。次のバージョンの SiteScope ではページャおよび SMS 警告アクション・タイプのサポートを削除する予定です。
関連タスク	1226ページ「警告の設定方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> • 1204ページ「SiteScope 警告の概要」 • 1242ページ「[新規警告]/[警告の編集]ダイアログ・ボックス」 • 1252ページ「[警告アクション]ダイアログ・ボックス」



ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
データベース	問題の詳細を含む警告メッセージを SQL データベースへのレコードとして送信します。次にデータベース・ツールを使用して、監視データのより詳細な記録、並べ替え、レポート作成を提供できます。データベース警告の詳細については、 1253ページ「データベース警告のプロパティ」 を参照してください。
モニタの無効化 / 有効化	<p>別のモニタでの状態の変化に基づいて、モニタまたはモニタ・グループを自動的に有効または無効にします。</p> <p>注：このアクションは、テンプレート警告の作成時には使用できません。モニタの無効化 / 有効化警告の詳細については、1255ページ「モニタの無効化 / 有効化警告のプロパティ」を参照してください。</p>
電子メール	1 つ以上の電子メール・アドレスに、警告をトリガした条件の詳細を含む電子メール・メッセージを送信します。電子メール警告の詳細については、 1256ページ「電子メール警告のプロパティ」 を参照してください。

UI 要素	説明
ログ・イベント	<p>Microsoft Windows イベント・ログにイベントのログを記録します。</p> <p>イベント・ログのエントリは、イベント・ビューアで表示、およびイベント・ログから中央管理された警告を実行するほかのソフトウェア・ユーティリティで使用できます。ログ・イベント警告の詳細については、1257 ページ「ログ・イベント警告のプロパティ」を参照してください。</p>
ページャ	<p>SiteScope が特定の条件を検出したことを通知するメッセージをページャに送信します。ページャ警告の詳細については、1258 ページ「ページャ警告のプロパティ」を参照してください。</p> <p>注：ページャ警告タイプを使用する警告を作成するオプションは利用できなくなりました。次のバージョンの SiteScope ではページャ警告のサポートを削除する予定です。</p>
ポスト	<p>CGI POST メッセージを CGI スクリプト、サーブレット、その他の CGI 対応プログラムに送信します。メッセージには、モニタ条件の詳細が含まれます。送信警告の詳細については、1259 ページ「送信警告のプロパティ」を参照してください。</p>
スクリプト	<p>警告条件に一致した場合に SiteScope でスクリプトまたはバッチ・ファイルを実行できます。スクリプトまたはバッチ・ファイルで、コマンド・ライン・エントリから呼び出せる任意の言語でシステム・コマンドまたはプログラムを実行できます。</p> <p>この警告を使用して、重大状態または障害に自動的に対応する復旧スクリプト(サーバの再起動やファイルのコピーなど)を実行できます。スクリプト警告の詳細については、1260 ページ「スクリプト警告のプロパティ」を参照してください。</p>
SMS	<p>ショート・メッセージ・サービス(SMS)を使用して、短いテキスト・メッセージを SMS 対応の携帯電話やワイヤレス・デバイスに送信します。SMS 警告の詳細については、1262 ページ「SMS 警告のプロパティ」を参照してください。</p> <p>注：SMS 警告タイプを使用する警告を作成するオプションは利用できなくなりました。次のバージョンの SiteScope では SMS 警告のサポートを削除する予定です。</p>
SNMP トラップ	<p>SNMP 管理コンソールまたはホストに SNMP トラップを送信します。SNMP エージェントでは通常サポートされないシステム・パラメータの SNMP レポートが利用可能になります。SNMP トラップ警告の詳細については、1263 ページ「SNMP トラップ警告のプロパティ」を参照してください。</p>
サウンド	<p>イベントが検出されると、SiteScope が稼働するマシン上でサウンドまたはオーディオ・ファイルを再生します。サウンド警告の詳細については、1264 ページ「サウンド警告のプロパティ」を参照してください。</p>

[警告アクション]ダイアログ・ボックス

[警告アクション]ダイアログ・ボックスでは、警告のタイプに固有の設定を定義し、警告がトリガされたときに実行するアクションを設定します。



アクセス方法	<ol style="list-style-type: none">1. 警告を定義する SiteScope、グループ、またはモニタを右クリックし、[新規作成]>[警告]を選択するか、[警告]タブ(モニタまたはテンプレート・ビュー)で既存の警告を選択して、[警告の編集] ボタンをクリックします。2. [新規警告]または[警告の編集]ダイアログ・ボックスの[警告時のアクション]セクションで、[新規警告アクション] ボタンをクリックします。[アクションタイプ]ダイアログ・ボックスで、アクションの種類を選択します。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none">• [警告アクション]ダイアログ・ボックスは、次の 3 つの表示枠で構成されます。<ul style="list-style-type: none">■ アクションの種類の設定 : [アクションタイプの設定]は、1249ページ「[アクションタイプ]ダイアログ・ボックス」で選択した警告アクションの種類により異なります。アクション・タイプの詳細については、1252ページ「アクション・タイプの設定パネル」を参照してください。■ 状態トリガ : 詳細については、1264ページ「[状態トリガ]パネル」を参照してください。■ トリガの頻度 : 詳細については、1265ページ「[トリガの頻度]パネル」を参照してください。
関連タスク	1226ページ「警告の設定方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none">• 1204ページ「SiteScope 警告の概要」• 1242ページ「[新規警告]/[警告の編集]ダイアログ・ボックス」

次の要素はすべてのアクション・タイプに共通します。

UI 要素	説明
新規変数	クリックして新規変数を定義します。詳細については、 856ページ「[新規変数]ダイアログ・ボックス」 を参照してください。 このボタンを使用できるのは、テンプレート警告の[新規警告]ダイアログ・ボックス、[警告の編集]ダイアログ・ボックス、および[新規アクション]ダイアログ・ボックスからに制限されます。

アクション・タイプの設定パネル

このパネルのコンテンツは、[アクションタイプ]ダイアログ・ボックスで選択されたアクション・タイプによって異なります。

アクセス方法	警告を定義する SiteScope, グループ, またはモニタを右クリックし, [新規作成] > [警告] を選択するか, [警告] タブ(モニタまたはテンプレート・ビュー)で既存の警告を選択して, [警告の編集]  ボタンをクリックします。[新規警告] または [警告の編集] ダイアログ・ボックスの [警告時のアクション] セクションで, [新規警告アクション]  ボタンをクリックします。[アクション タイプ] ダイアログ・ボックスで, アクションの種類を選択します。
重要な情報	ページャまたは SMS アクション・タイプを使用する警告を作成するオプションは利用できなくなりました。次のバージョンの SiteScope ではページャ および SMS 警告アクション・タイプのサポートを削除する予定です。
関連タスク	1226 ページ「警告の設定方法」
関連情報	1252 ページ「[警告アクション] ダイアログ・ボックス」

次の要素は [アクション タイプの設定] のすべてのアクション・タイプに共通しますが, その他の要素については個別のサブセクションで説明します。

UI 要素	説明
アクション名	警告 がトリガされたときに実行されるアクションの名前。警告 の名前ではありません。 例: すべての Solaris マシンの CPU をチェックして, 警告 がトリガされたときに電子メール・メッセージを送信するように警告を設定する場合, [一般設定] の警告名を Solaris_CPU, アクション名を send_email に指定できます。
新規変数	クリックして新規変数を定義します。詳細については, 856 ページ「[新規変数] ダイアログ・ボックス」 を参照してください。

本項の内容

- [1253 ページ「データベース警告のプロパティ」](#)
- [1255 ページ「モニタの無効化 / 有効化警告のプロパティ」](#)
- [1256 ページ「電子メール警告のプロパティ」](#)
- [1257 ページ「ログ・イベント警告のプロパティ」](#)
- [1258 ページ「ページャ警告のプロパティ」](#)
- [1259 ページ「送信警告のプロパティ」](#)
- [1260 ページ「スクリプト警告のプロパティ」](#)
- [1262 ページ「SMS 警告のプロパティ」](#)
- [1263 ページ「SNMPトラップ警告のプロパティ」](#)
- [1264 ページ「サウンド警告のプロパティ」](#)

データベース警告のプロパティ

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
データベース接続 URL	<p>データベースに接続する URL を入力します。</p> <p>例: Windows では, [設定]コントロール・パネルの ODBC データ・ソース・マネージャを使用して, 「test」という名前の接続を作成し, データベース接続 URL に「jdbc:odbc:test」と入力します。</p> <p>Windows 認証使用時の注意事項: Windows 認証を使用してデータベースにアクセスする場合, 接続 URL として「jdbc:mercury:sqlserver://<サーバ名または IP アドレス>:1433;DatabaseName=<データベース名>;AuthenticationMethod=type2」を, データベース・ドライバとして「com.mercury.jdbc.sqlserver.SQLServerDriver」を入力します。SiteScope サービスの実行元であるアカウントの Windows ユーザー資格情報を使用してデータベースへの接続が確立されるように, [データベース ユーザ名]ボックスおよび[データベース パスワード]ボックスは空のままにします。</p>
データベース・ドライバ	<p>JDBC データベース・ドライバの Java クラス名を入力します。</p> <p>SiteScope では, プライマリとバックアップのデータベース接続の両方に同じデータベース・ドライバを使用します。カスタム・ドライバを使用する場合, < SiteScope のルート・ディレクトリ>/java ディレクトリにそのドライバをインストールする必要があります。SiteScope のデータベース・ドライバの設定の詳細については, 「Database Query Monitor」を参照してください。</p>
SQL ステートメント	<p>データベースへの警告の追加に使用する SQL ステートメントを入力します。</p> <p>山括弧(< および >)で囲まれた項目は, 警告をトリガしたモニタのフィールドで置換されます。</p> <p>標準設定値: INSERT INTO SiteScopeAlert VALUES('>time<', '>group<', '>name<', '>state<')</p>
データベース・ユーザ名	<p>必要に応じて, データベースに接続するユーザ名を入力します。</p>
データベース・パスワード	<p>必要に応じて, データベースに接続するパスワードを入力します。</p>
バックアップ・データベース接続 URL	<p>SiteScope 警告のログ記録にバックアップ・データベースが必要で, メインのデータベース接続が使用できない場合に使用するバックアップ・データベース接続の URL を入力します。</p> <p>例: バックアップ・データベース接続の ODBC 接続の名前が testdb2 の場合, URL に「jdbc:odbc:testdb2」と入力します。</p>

UI 要素	説明
スケジュール	<p>警告の条件が一致し、警告がトリガされた場合に警告アクションを実行する、日次スケジュールと週次スケジュールを選択します。スケジュールを使用すると、適切ではない時間または業務時間外に警告アクションが実行されないように設定することができます。</p> <p>たとえば、モニタを毎日 24 時間実行するが、警告アクションは 7 時から 22 時の間にだけ実行する場合は、スケジュールの範囲を選択して 7 時から 22 時の間だけ有効にします。753 ページ「スケジュール・プリファレンスの概要」で説明したように、スケジュール・プリファレンスでスケジュールを作成することができます。</p> <p>このフィールドで変数を使用することも可能です。このためには %% を入力して利用可能な変数のリストを表示します。</p> <p>標準設定値: 毎日, 全日</p>

モニタの無効化 / 有効化 警告のプロパティ

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
グループ / モニタ・アクション	<p>警告がトリガされたときに、この警告アクションでモニタを無効化するか有効化するかを選択します。</p> <p>標準設定値: 無効化</p>
ターゲット	<p>この警告のアクションによって影響を受けるグループおよびモニタを選択します。[ターゲット] リストには、SiteScope に設定されたすべてのグループおよびモニタが含まれます。この警告アクションのグループ内で実行中のグループまたはモニタを選択し、[選択済みターゲット] リストに追加できます。</p> <p>例: この警告アクションがディスク領域モニタに設定されているとします。このモニタに対してトリガされた警告によって、同じサーバを監視しているすべての CPU モニタを無効にできます。</p> <p>標準設定値: 選択されていない</p>
スケジュール	<p>警告の条件が一致し、警告がトリガされた場合に警告アクションを実行する、日次スケジュールと週次スケジュールを選択します。スケジュールを使用すると、適切ではない時間または業務時間外に警告アクションが実行されないように設定することができます。</p> <p>たとえば、モニタを毎日 24 時間実行するが、警告アクションは 7 時から 22 時の間にだけ実行する場合は、スケジュールの範囲を選択して 7 時から 22 時の間だけ有効にします。753 ページ「スケジュール・プリファレンスの概要」で説明したように、スケジュール・プリファレンスでスケジュールを作成することができます。</p> <p>標準設定値: 毎日, 全日</p>

UI 要素	説明
選択したグループのサブグループにアクションを適用する	<p>選択されている場合、警告アクションは選択したグループのサブグループにも適用されます。</p> <p>標準設定値 : 選択されていない</p>

電子メール警告のプロパティ

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
受信者	<p>[電子メール警告受信者]リストから、警告の1人以上の電子メール受信者を選択します。このリストには、[電子メールのプリファレンス]で設定した受信者が表示されます。詳細については、629ページ「電子メール・プリファレンス」を参照してください。</p> <p>標準設定値 : 選択されていない</p>
アドレス	<p>1つ以上の電子メール・アドレスをカンマ(",")で区切り入力します。このアドレスは、公式規格の RFC 2822 に従って構文が有効かチェックされますが、その他のエラー(電子メールのユーザが存在するかどうかなど)はチェックされません。</p> <p>注 : [アドレス]ボックスにデータが含まれる場合、[電子メール警告受信者]リストからの選択は無視されます。</p>
件名	<p>電子メール警告アクション・メッセージの件名フィールド・テンプレートを選択します。Typical テンプレートには次の値が含まれます。</p> <ul style="list-style-type: none"> メッセージの件名 (SiteScope 警告) モニタ警告のカテゴリ(「エラー」、「警告」、「OK」、「データなし」) モニタの名前またはモニタ・タイトル モニタにより返された状態 警告を送信した SiteScope インストールのアドレス(括弧で表示) <p>標準設定値 : Typical</p> <p>例 : SiteScope警告, エラー, URL : http://gate.company.com, 不明なホスト名 (gate.company.com)</p>
スケジュール	<p>事前に定義したスケジュールが表示されます。</p> <p>注 : [スケジュールプリファレンス]で作成されたスケジュールしか選択できません。詳細については、753ページ「スケジュール・プリファレンスの概要」を参照してください。</p>

UI 要素	説明
テンプレート	<p>電子メール警告アクションのテンプレートを選択します。</p> <p>短い電子メール・メッセージの場合は、電子メール警告アクションで ShortMail テンプレートを選択します。その他のオプションでは、電子メール警告に含める詳細のレベルを選択できます。</p> <p>標準設定値 : Typical。このテンプレートには次の値が含まれます。Monitor:<groupId>:<name>; Tags <tag>; Group:<group>; Status:<state>; Sample #:<sample>; Time:<time></p> <p>注 : < SiteScope のルート・ディレクトリ> \templates.mail ディレクトリに別のテンプレートを追加できます。利用可能なテンプレートの詳細については、テキスト・エディタでこのディレクトリ内のファイルを開き、各オプションで送信される値を参照してください。</p>
警告を解除するようアクションをマークする	<p>状態が変化して警告のトリガ条件が真でなくなった場合、このアクションで警告が解除され、送信メッセージに「解除」を追加した解除通知が送信されます。</p> <p>標準設定値 : 選択されていない</p>

ログ・イベント警告のプロパティ

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
送信先	<p>イベントがイベント・ログに追加される Windows マシンの名前を入力します。</p> <p>標準設定値 : localhost(SiteScope が稼動しているマシン)。</p>
テンプレート	<p>ログ・イベント・タイプの警告アクション用のテンプレートを選択します。</p> <p>標準設定値 : Typical</p> <p>注 : < SiteScope のルート・ディレクトリ> \templates.eventlog で、既存のテンプレートの内容を表示するか、別のテンプレートを追加できます。</p>
メッセージ	<p>イベント・ログに送信されるメッセージのプレフィックスを入力します。</p> <p>次の文字列を入力して警告されたモニタのコンテキストで SiteScope を開くリンクを追加できます。</p> <p>Login:<sitescopeurl>/servlet/Main?activeid=<_internalId>&activerighthttp=dashboard&view=new&dashboard_view=Details&dashboard_model=true&dashboard_favorite=test.</p>
イベント・ソース	<p>ログが記録されたイベントの<ソース>フィールドの設定に使用する文字列を入力します。</p> <p>構文 : テキストで指定する必要があります。</p> <p>標準設定値 : SiteScope</p>

UI 要素	説明
イベント ID	<p>ログが記録されたイベントの <ID> フィールドの設定に使用する数字を入力します。</p> <p>構文: 数値で指定する必要があります。</p> <p>標準設定値: 1000</p>
イベント・タイプ	<p>イベントに使用されるイベント・タイプを選択します。</p> <p>標準設定値: モニタの状態の使用。つまり、イベント・タイプは、モニタの状態が「エラー」の場合は Error, 「警告」の場合は Warning, 「正常」の場合は Informational となります。</p>
イベントカテゴリ ID	<p>この警告で作成されたイベントの <カテゴリ ID> として使用される数字を入力します。</p> <p>標準設定値: 0</p>
スケジュール	<p>警告の条件が一致し、警告がトリガされた場合に警告アクションを実行する、日次スケジュールと週次スケジュールを選択します。</p> <p>このフィールドで変数を使用することも可能です。このためには %% を入力して利用可能な変数のリストを表示します。スケジュールを使用すると、適切ではない時間または業務時間外に警告アクションが実行されないように設定することができます。</p> <p>たとえば、モニタを毎日 24 時間実行するが、警告アクションは 7 時から 22 時の間だけに実行する場合は、スケジュールの範囲を選択して 7 時から 22 時の間だけ有効にします。753 ページ「スケジュール・プリファレンスの概要」で説明したように、スケジュール・プリファレンスでスケジュールを作成することができます。</p> <p>標準設定値: 毎日, 全日</p>
警告を解除するようアクションをマークする	<p>状態が変化して警告のトリガ条件が真でなくなった場合、このアクションで警告が解除され、送信メッセージに「解除」を追加した解除通知が送信されます。</p> <p>標準設定値: 選択されていない</p>

ページ警告のプロパティ

注: ページ・アクション・タイプを使用する警告を作成するオプションは利用できなくなりました。次のバージョンの SiteScope ではページ警告アクション・タイプのサポートを削除する予定です。

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
ページ警告受信者	<p>[ページ警告受信者]リストから、警告の1人以上のページ警告受信者を選択します。このリストには、[ページプリファレンス]で設定した受信者が表示されます。このトピックの詳細については、745ページ「ページ・プリファレンス」を参照してください。</p> <p>標準設定値：選択されていない</p>
テンプレート	<p>ページ警告アクション・タイプのテンプレートを選択します。</p> <p>標準設定値：Typical</p> <p>注：既存のテンプレートの内容を表示するか、< SiteScope のルート・ディレクトリ> \templates.page ディレクトリに別のテンプレートを追加できます。</p>
メッセージ	<p>ページに送信されるメッセージ・テキストを入力します。</p> <p>次の文字列を入力して警告されたモニタのコンテキストで SiteScope を開くリンクを追加できます。</p> <pre>Login:<sitescopeurl>/servlet/Main?activeid=<_internalId>&activerighttop=dashboard&view=new&dashboard_view=Details&dashboard_model=true&dashboard_favorite=test.</pre>
スケジュール	<p>ページ警告受信者の事前に定義したスケジュールが表示されます。</p>
警告を解除するようアクションをマークする	<p>状態が変化して警告のトリガ条件が真でなくなった場合、このアクションで警告が解除され、送信メッセージに「解除」を追加した解除通知が送信されます。</p> <p>標準設定値：選択されていない</p>

送信警告のプロパティ

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
フォーム送信先 URL	<p>SiteScope から警告に送信する CGI スクリプトの URL を入力します。次に例を示します。</p> <pre>http://admindb.server.net/cgi-bin/error.pl.</pre> <p>構文：文字列 http:// を含める必要があります。URL アドレスの構文が有効かチェックされます。</p>
テンプレート	<p>送信警告アクション・タイプのテンプレートを選択します。</p> <p>標準設定値：Typical</p> <p>注：< SiteScope のルート・ディレクトリ> \templates.post ディレクトリで、既存のテンプレートの内容を表示するか、別のテンプレートを追加できます。</p>

UI 要素	説明
認証ユーザ名	<p>送信警告で CGI スクリプトの URL にアクセスするユーザ名を入力します。ユーザ名が不要な CGI スクリプトもあります。</p> <p>または、このエントリを空白のままにし、[一般設定]([プリファレンス]>[一般プリファレンス])の[標準設定の認証ユーザ名]セクションにユーザ名を入力します。複数のモニタで使用する共通の認証資格情報を定義する場合、この方法を使用します。</p>
認証パスワード	<p>送信警告の認証ユーザ名のパスワードを入力します。</p> <p>または、このエントリを空白のままにし、[プリファレンス]>[一般プリファレンス]の[標準設定の認証パスワード]セクションにパスワードを入力します。複数のモニタで使用する共通の認証資格情報を定義する場合、この方法を使用します。</p>
HTTP プロキシ	<p>CGI スクリプトの URL へのアクセスに使用する、HTTP プロキシ・サーバのドメイン名とポートを入力します。</p>
プロキシ・サーバのユーザ名	<p>プロキシ・サーバで必要な場合、CGI スクリプトの URL にアクセスするユーザ名を入力します。</p> <p>プロキシ・サーバがプロキシ認証をサポートしている必要があります。</p>
プロキシ・サーバのパスワード	<p>プロキシ・サーバで必要な場合、CGI スクリプトの URL にアクセスするパスワードを入力します。</p> <p>プロキシ・サーバがプロキシ認証をサポートしている必要があります。</p>
スケジュール	<p>警告の条件が一致し、警告がトリガされた場合に警告アクションを実行する、日次スケジュールと週次スケジュールを選択します。スケジュールを使用すると、適切ではない時間または業務時間外に警告アクションが実行されないように設定することができます。</p> <p>たとえば、モニタを毎日 24 時間実行するが、警告アクションは 7 時から 22 時の間にだけ実行する場合は、スケジュールの範囲を選択して 7 時から 22 時の間だけ有効にします。753 ページ「スケジュール・プリファレンスの概要」で説明したように、スケジュール・プリファレンスでスケジュールを作成することができます。</p> <p>標準設定値 : 毎日、全日</p>

スクリプト警告のプロパティ

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
サーバ	<p>スクリプトを実行するサーバを選択します。</p> <p>スクリプト・ディレクトリは、リモート・スクリプトを SiteScope で実行できるリモート・ログイン・アカウントのディレクトリ・ツリー内にある必要があります。</p> <p>標準設定値 : SiteScope Server</p> <p>テンプレート・モードで作業する場合の注意事項を次に示します。 このフィールドのテンプレート変数の使用を有効にするテキスト・ボックスとして、ドロップダウン・リストが表示されます。</p>
スクリプト	<p>選択した条件に応じて実行するスクリプトを選択します。</p> <p>カスタム・スクリプトは、必要な数だけ作成できます。カスタム・スクリプトは、< SiteScope のルート・ディレクトリ > \scripts ディレクトリまたはリモート・マシンの該当するスクリプト・ディレクトリに置きます。選択したサーバのこのディレクトリにあるすべてのファイルが、SiteScope によってドロップダウン・リストで表示されます。</p> <p>標準設定値 : restartServer.bat</p>
パラメータ	<p>スクリプトに渡すことのできる追加のモニタ・パラメータ。その例を次に示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> スクリプト・ディレクトリのパス 警告の原因となったモニタの名前 モニタの現在の状態 警告メッセージ・ファイルへのパス モニタの ID モニタ・グループ <p>これらのパラメータは、それぞれ 7 番目、8 番目、9 番目のようにコマンド・ラインの引数として送信されます。</p> <p>スクリプトに渡すことのできるパラメータは、警告をトリガするモニタのタイプにより異なります。</p> <p>構文 : プロパティ・リストのプロパティ名変数を山括弧(< >)で囲みます。たとえば、サーバ名をスクリプトに渡す場合、テキスト・ボックスに「<_machine>」と入力します。複数の追加パラメータを渡すには、パラメータを 1 つの空白で区切ります。これは、コマンド・ラインで引数を追加する方法と同じです。</p> <p>標準設定値 : 値なし。スクリプト警告では、コマンド・ライン引数として常に上記のパラメータをスクリプトに渡します。上記のパラメータを値に含める必要はありません。</p>
出力のエンコード	<p>スクリプト出力のエンコードを選択します。ここで選択することで、エンコードされたファイルの内容を SiteScope で正確に照合および表示できます。</p> <p>標準設定値 : windows-1252</p>

UI 要素	説明
テンプレート	<p>スクリプト 警告 アクション・タイプのテンプレートを選択します。</p> <p>標準設定値: Typical</p> <p>注: 既存のテンプレートの内容を表示するか、< SiteScope のルート・ディレクトリ > \templates.script ディレクトリに別のテンプレートを追加できます。</p>
スケジュール	<p>警告の条件が一致し、警告がトリガされた場合に警告アクションを実行する、日次スケジュールと週次スケジュールを選択します。</p> <p>このフィールドで変数を使用することも可能です。このためには %% を入力して利用可能な変数のリストを表示します。スケジュールを使用すると、適切ではない時間または業務時間外に警告アクションが実行されないように設定することができます。</p> <p>たとえば、モニタを毎日 24 時間実行するが、警告アクションは 7 時から 22 時の間にだけ実行する場合は、スケジュールの範囲を選択して 7 時から 22 時の間だけ有効にします。753 ページ「スケジュール・プリファレンスの概要」で説明したように、スケジュール・プリファレンスでスケジュールを作成することができます。</p> <p>標準設定値: 毎日, 全日</p>

SMS 警告のプロパティ

注: SMS アクション・タイプを使用する警告を作成するオプションは利用できなくなりました。次のバージョンの SiteScope では SMS 警告 アクション・タイプのサポートを削除する予定です。

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
SMS 番号	<p>メッセージの宛先を識別する SMS サービスに必要な電話番号を入力します。</p> <p>構文: 数値のみ。最大 16 桁です。</p>
スケジュール	<p>警告の条件が一致し、警告がトリガされた場合に警告アクションを実行する、日次スケジュールと週次スケジュールを選択します。</p> <p>このフィールドで変数を使用することも可能です。このためには %% を入力して利用可能な変数のリストを表示します。スケジュールを使用すると、適切ではない時間または業務時間外に警告アクションが実行されないように設定することができます。</p> <p>たとえば、モニタを毎日 24 時間実行するが、警告アクションは 7 時から 22 時の間にだけ実行する場合は、スケジュールの範囲を選択して 7 時から 22 時の間だけ有効にします。753 ページ「スケジュール・プリファレンスの概要」で説明したように、スケジュール・プリファレンスでスケジュールを作成することができます。</p> <p>注: この警告を使用できるのは Windows プラットフォームに制限されます。このテンプレート・アクションの[スケジュール]フィールドで、変数を使用できます。</p> <p>標準設定値: 毎日, 全日</p>

SNMP トラップ警告のプロパティ

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
SNMP トラップ	警告をトリガする 1 つ以上の SNMP トラップを選択します。 標準設定値 : 選択されていない
テンプレート	SNMP トラップ警告アクション・タイプのテンプレートを選択します。 テンプレートの各行は、別々の SNMP 変数として送信されます。次の方法でテンプレート・ファイルを変更することもできます。 <ul style="list-style-type: none">• [Agent Host:<hostname-or-ip-address>] をテンプレートの最初の行に使用し、トラップ元としてこのホスト名または IP アドレスのあるトラップを送信します。標準設定では、SiteScope が稼働しているマシンの IP アドレスがトラップ元として使用されます。• [Command:<command name>] を使用し、標準設定のコマンドを上書きします。• [Type:<var-type>] を使用し、オブジェクトの標準設定のタイプを上書きします。 [OID:<object id>] 標準設定のオブジェクト ID を変更します。たとえば、var-binding 変数オブジェクト ID の変更にご利用します。 標準設定値 : Typical 注 : 既存のテンプレートの内容を表示するか、< SiteScope のルート・ディレクトリ> \templates.snmp ディレクトリに別のテンプレートを追加できます。
メッセージ	この警告によって送信される、SNMP トラップに追加する任意のプレフィックスを入力します。
スケジュール	警告の条件が一致し、警告がトリガされた場合に警告アクションを実行する、日次スケジュールと週次スケジュールを選択します。スケジュールを使用すると、適切ではない時間または業務時間外に警告アクションが実行されないように設定することができます。 たとえば、モニタを毎日 24 時間実行するが、警告アクションは 7 時から 22 時の間だけに実行する場合は、スケジュールの範囲を選択して 7 時から 22 時の間だけ有効にします。 753 ページ「スケジュール・プリファレンスの概要」 で説明したように、スケジュール・プリファレンスでスケジュールを作成することができます。 テンプレート警告のためのみにこのフィールドで変数を使用することも可能です。このためには %% を入力して利用可能な変数のリストを表示します。 標準設定値 : 毎日, 全日

UI 要素	説明
警告を解除するようアクションをマークする	状態が変化して警告のトリガ条件が真でなくなった場合、このアクションで警告が解除され、送信メッセージに「解除」を追加した解除通知が送信されます。



サウンド警告のプロパティ

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
サウンド・ファイル	<p>< SiteScope のルート・ディレクトリ > \templates.sound ディレクトリから再生されるサウンドを選択します。 .au のサフィックスの AU 形式 (8 ビット, &micro;law, 8000 Hz, 1 チャンネル) で別のサウンドをディレクトリに追加できます。</p> <p>標準設定値 : Default</p>
スケジュール	<p>警告の条件が一致し、警告がトリガされた場合に警告アクションを実行する、日次スケジュールと週次スケジュールを選択します。スケジュールを使用すると、適切ではない時間または業務時間外に警告アクションが実行されないように設定することができます。</p> <p>たとえば、モニタを毎日 24 時間実行するが、警告アクションは 7 時から 22 時の間にだけ実行する場合は、スケジュールの範囲を選択して 7 時から 22 時の間だけ有効にします。753 ページ「スケジュール・プリファレンスの概要」で説明したように、スケジュール・プリファレンスでスケジュールを作成することができます。</p> <p>このフィールドで変数を使用することも可能です。このためには %% を入力して利用可能な変数のリストを表示します。</p> <p>標準設定値 : 毎日、全日</p>

[状態トリガ] パネル

[状態トリガ] パネルは、警告アクションをトリガするオブジェクト・タイプの状態の選択に使用します。ある状態から別の状態に変化したときに警告がトリガされます。警告アクションをトリガするカテゴリを選択します。



アクセス方法	警告を定義する SiteScope、グループ、またはモニタを右クリックし、[新規作成] > [警告] を選択するか、[警告] タブ(モニタまたはテンプレート・ビュー) で既存の警告を選択して、[警告の編集]  ボタンをクリックします。[新規警告] または [警告の編集] ダイアログ・ボックスの [警告時のアクション] セクションで、[新規警告アクション]  ボタンをクリックします。[アクションタイプ] ダイアログ・ボックスで、アクションの種類を選択します。
関連タスク	1226 ページ「警告の設定方法」
関連情報	1252 ページ「[警告アクション] ダイアログ・ボックス」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
利用不可	以前は利用可能だった監視対象マシンが使用不能に変化した場合、警告がトリガされます。
エラー	モニタが報告する状態が「正常」(標準設定)から変化した場合、警告がトリガされます。
注意域	モニタが報告する状態が「正常」から変化した場合、警告がトリガされます。
正常	モニタが報告する状態が「エラー」から変化した場合、警告がトリガされます。

[トリガの頻度] パネル

[トリガの頻度] パネルは、トリガの頻度の選択に使用します。

アクセス方法	警告を定義する SiteScope、グループ、またはモニタを右クリックし、[新規作成]>[警告]を選択するか、[警告]タブ(モニタまたはテンプレート・ビュー)で既存の警告を選択して、[警告の編集]  ボタンをクリックします。[新規警告]または[警告の編集]ダイアログ・ボックスの[警告時のアクション]セクションで、[新規警告アクション]  ボタンをクリックします。[アクションタイプ]ダイアログ・ボックスで、アクションの種類を選択します。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> 利用可能なオプションは、1264ページ「[状態トリガ] パネル」で選択した内容により異なります。 このオプションの詳細については、1208ページ「SiteScope 警告が送信される時期について」を参照してください。
関連タスク	1226ページ「警告の設定方法」
関連情報	1252ページ「[警告アクション]ダイアログ・ボックス」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
エスカレート、次のアクション <N> 回エラー状態だった場合	<p>作成する警告アクションが別の警告アクションに依存する場合、このオプションを選択します。この警告アクションが依存する別の警告アクションの名前を選択し、この警告アクションがトリガされる前に別の警告アクションがトリガされる回数を選択する必要があります。</p> <p>例: 特定の条件に一致したときにサウンド警告を送信する警告アクションを作成したとします。サウンド警告アクションが3回トリガされたときに、電子メール警告を送信するようにします。サウンド警告アクションの名前と3を選択します。</p> <p>注: このオプションは、警告に別の警告アクションが定義されている場合にのみ表示されます。</p>

UI 要素	説明
常時: 条件が最低 <N> 回	<p>警告条件が少なくとも N 回発生後の最初のトリガ以降, 警告条件が再度一致するたびに警告がトリガされます。</p> <p>警告が最初にトリガされる前に, 警告条件が一致する必要のある最小回数を入力します。</p> <p>構文: 数値のみ</p> <p>範囲: 1-99</p>
1 回のみ: 条件がちょうど <N> 回	<p>警告条件が N 回一致した後に, 1 回のみ警告がトリガされます。</p> <p>警告がトリガされる前に, 警告条件が一致する必要のある回数を入力します。</p> <p>標準設定値: 選択されている</p> <p>構文: 数値のみ</p> <p>範囲: 1-99</p>
最初に <X> 回, 以後 <Y> 回	<p>警告条件が X 回連続で発生した後に警告がトリガされ, その後は警告条件が Y 回連続で発生するたびに警告がトリガされます。たとえば, X に 3 を設定して Y に 4 を設定した場合, 警告アクションは警告条件発生 の 3 回目, 7 回目, 11 回目 のように実行されます。</p> <p>構文: 数値のみ</p> <p>範囲: 1-99</p>
1 回のみ: <N> 件のグループ・エラーの後	<p>[状態トリガ] パネルで[エラー]を選択した場合にこのオプションが表示されます。</p> <p>グループ内のいずれかのモニタが警告を N 回連続で報告した後にのみ, 警告がトリガされます。</p> <p>注: このオプションは SiteScope グループでのみ使用できます。</p>
1 回のみ: このグループ内のすべてのモニタがエラー状態になった後	<p>[状態トリガ] パネルで[エラー]を選択した場合にこのオプションが表示されます。</p> <p>グループ内のすべてのモニタがエラー状態になった初回のみ, 警告がトリガされます。</p> <p>注: このオプションは SiteScope グループでのみ使用できます。</p>
モニタが以前に error/warning 少なくとも <N> 回	<p>[状態トリガ] パネルで[正常]または[警告]を選択した場合にこのオプションが表示されます。</p> <p>このオプションは, 対象モニタまたはグループが次のいずれかの状態を報告するまで, 警告のトリガを抑制します。</p> <ul style="list-style-type: none"> 警告カテゴリが「正常」の場合, 「エラー」または「警告」 警告カテゴリが「警告」の場合, 少なくとも入力した回数での「正常」または「エラー」

第78章

スクリプト 警告 のスクリプト の記述

本章の内容

概念

- 1268ページ「スクリプト 警告 のスクリプト の記述 の概要」
- 1269ページ「SiteScope のスクリプトを使った作業」
- 1271ページ「SiteScope からスクリプトへのデータの引き渡し」

スクリプト 警告 のスクリプト の記述 の概要

SiteScope では、エラーまたは警告 ステータスが検出された場合にスクリプトまたはバッチ・ファイルを実行できます。通常、スクリプトのトリガとして機能するスクリプト 警告を作成することによって、これを実行します。スクリプトまたはバッチ・ファイルは、システム・コマンドで実行するか、任意の言語で記述されたほかのプログラムを呼び出すことができます。危険域状態または失敗に自動的に対応する復旧スクリプトを作成する場合に、これを使用できます。

SiteScope 警告 テンプレートに含まれる一般的なプロパティのリストについては、[1232 ページ](#)「SiteScope 警告 テンプレートとイベントのプロパティのディレクトリ」を参照してください。

SiteScope のスクリプトを使った作業

SiteScope スクリプト 警告 を実行するスクリプト・ファイルは、< **SiteScope のルート・ディレクトリ** > \scripts フォルダまたはリモート UNIX マシン(リモート・スクリプトの場合)に置く必要があります。たとえば、SiteScope がディレクトリ C:\SiteScope にインストールされていてスクリプトの名前が actionTest.bat の場合、SiteScope によって、作成したスクリプト 警告 に応じて次のコマンド・ラインが試行されます。

```
C:\SiteScope\scripts\actionTest.bat C:\SiteScope\scripts monitor_name
```

ここで、C:\SiteScope\scripts は最初のコマンド・ライン・パラメータで、monitor_name は 2 番目のコマンド・ライン・パラメータとなります(以下同様)。

注: スクリプト 警告 によって実行されるローカル・スクリプトは < **SiteScope のルート・ディレクトリ** > \scripts に置く必要がありますが、実行パスは < **SiteScope のルート・ディレクトリ** > \classes ディレクトリになります。現在の実行ディレクトリの定義に関する問題を避けるため、スクリプトで呼び出されるファイル・システム・コマンドやプログラムにはフル・パスを使用する必要があります。

スクリプトで実行するアクションは、スクリプトの作成者によって決定されます。SiteScope は、スクリプト 警告 で呼び出される各スクリプトにいくつかのコマンド・ラインの引数を渡します。この引数を使用して、SiteScope から送信された情報に基づいてプログラム・スクリプトを実行できます。標準設定では、SiteScope は次のパラメータをコマンド・ラインの引数として各スクリプト 警告 に渡します。

- スクリプト・ディレクトリのパス
- 警告の原因となったモニタの名前
- モニタの現在の状態
- 警告メッセージ・ファイルへのパス
- モニタの ID コード
- モニタが配置されたグループ
- 警告フォームの[パラメータ]ボックスで指定された追加パラメータ

これらのコマンド・ラインの引数は、通常のコマンド・ライン変数表記規則を使用して、ターゲット・スクリプトによってアクセスできます。これらの表記規則は、Windows システムの場合は %1, %2, %3 の形式で、UNIX スクリプトの場合は \$1, \$2, \$3 の形式です(使用されるスクリプトのシェルまたは言語により異なります)。標準設定では、最初の 6 つのパラメータ(つまり、%1 から %6)が各スクリプトに渡されます。その他のパラメータを渡すには、[パラメータ]ボックスでスクリプト 警告 設定にプロパティ変数またはパラメータを追加する必要があります。[パラメータ]ボックスに入力された最初の変数またはテキストは %7 としてアクセス可能で、以降 2 番目のパラメータは %8, 3 番目のパラメータは %9 のように指定してアクセスできます。

スクリプト 警告 のパラメータにアクセスする、Perl で記述されたスクリプトの例を次に示します。

```
print "スクリプト・ディレクトリのパス名:$ARGV[0]\n"; print "警告の原因となったモニタの  
名前:$ARGV[1]\n"; print "モニタの現在の状態:$ARGV[2]\n"; print "警告メッ  
セージ・ファイルへのパス:$ARGV[3]\n"; print "モニタの ID コード:$ARGV[4]\n";
```

```
print "モニタが配置されたグループ:$ARGV[5]\n";
```

スクリプトに渡されたパラメータを表示する, Microsoft Windows のバッチ・ファイルの例を次に示します。

```
echo スクリプト ディレクトリのパス名: %1echo 警告の原因となっているモニタの名前:  
%2echo 現在のステータス・モニタ: %3echo 警告メッセージ・ファイルのパス名: %4echo モニタ  
の ID コード: %5echo モニタのグループ: %6 %6
```

SiteScope からスクリプト へのデータの引き渡し

7 つの標準 設定 パラメータに加えて、その他 パラメータとデータをスクリプトに渡すための 2 つのメカニズムがあります。一つは、スクリプト 警告 設定 の追加用 パラメータ・ボックスを使用するメカニズムです。もう一つは、警告 メッセージ・ファイルにアクセスするメカニズムです。

本項の内容

- 1271 ページ「スクリプト 警告 設定を使用したデータの引き渡し」
- 1271 ページ「警告 メッセージ・ファイルを使用したデータの引き渡し」

スクリプト 警告 設定を使用したデータの引き渡し

追加のカスタム・パラメータとデータをスクリプトに送る最も簡単な方法は、[警告時のアクション] ダイアログ・ボックスを使用する方法です。スクリプトに渡された 7 番目の標準 設定 パラメータ(警告フォームで指定される追加 パラメータ)には、スクリプトに送られる 1 つ以上のカスタム・パラメータを指定できます。[警告時のアクション] ダイアログ・ボックスの[アクションタイプの設定] パネルにある[パラメータ] ボックスで、スクリプト 警告 のカスタム・パラメータを指定します。

これらのパラメータには、ハード・コーディングされた値も指定できます。複数のパラメータをそれぞれ空白で区切って含めることができます。たとえば、次に示す 4 つのテキスト文字列をスクリプトに渡すとして、[パラメータ] ボックスに、次のように文字列を入力します。

パラメータ:

これらは、スクリプトに送られる 7 番目から 10 番目のコマンド・ライン・パラメータとなります。次の Windows バッチ・ファイル・スクリプトでは、標準 設定 パラメータと、[アクションタイプの設定] ページの [パラメータ] ボックスに入力した上記の追加例のカスタム・パラメータを表示します。

```
echo スクリプト ディレクトリのパス名: %1echo 警告の原因となっているモニタの名前: %2echo 現在のステータス・モニタ: %3echo 警告メッセージ・ファイルのパス名: %4echo モニタの ID コード: %5echo モニタのグループ: %6echo 7 番目のパラメータ (customA): %7echo 8 番目のパラメータ (customB): %8echo 9 番目のパラメータ (customC): %9echo 10 番目のパラメータ (customD): %10
```

警告 メッセージ・ファイルを使用したデータの引き渡し

データと SiteScope モニタ・パラメータをスクリプトに渡す別の方法として、警告 メッセージ・ファイルを使用する方法があります。このファイルは、[警告時のアクション] ダイアログ・ボックスで指定した警告 テンプレートを使用して、SiteScope により作成されます。独自のカスタム警告 テンプレートを作成し、カスタム・テキスト文字列、または利用可能な SiteScope パラメータのいずれかを渡すことができます。SiteScope に含まれる標準 設定 の NTEventLog テンプレートを次に示します。<> 括弧で囲まれたパラメータは、該当するスクリプト 警告 がトリガされるたびに、対応する値と置換されて警告 メッセージ・ファイルに書き込まれます。SiteScope 警告 テンプレートに含まれる一般的なプロパティのリストについては、1232 ページ「SiteScope 警告 テンプレートとイベントのプロパティのディレクトリ」を参照してください。

```
NTEventLog スクリプト 警告 テンプレート: Type:<eventType> Event Time:<eventTime>
Source:<event> Source ID:<eventID> Category:<eventCategory>
Machine:<eventMachine> Message:<eventMessage> Monitor:<name>
Group:<group> Sample #: <sample> Time:<time> <mainParameters>
<mainStateProperties>
```

スクリプトでこのデータを使用するには、4 番目の標準設定コマンド・ライン・パラメータで指定されたパス名の場所にある警告メッセージ・ファイルに、スクリプトからアクセスする必要があります([1269 ページ「SiteScope のスクリプトを使った作業」](#)を参照)。その後、スクリプトで警告メッセージ・ファイルの内容を解析し、スクリプトで使用するデータを抽出する必要があります。

復旧スクリプトの記述方法の詳細については、< **SiteScope のルート・ディレクトリ** > \scripts ディレクトリにあるスクリプト・ファイルを参照してください。**actionTest.bat** のテンプレート例を使用して、独自のスクリプトを作成できます。**perlTest.pl** の例には、Perl スクリプトを呼び出す方法が示されています。**restartIIS.bat**、**restartService.bat**、**restartServer.bat** のスクリプトは、一般的な復旧アクションを実行します。

UNIX 環境のスクリプトの例には、アクションの **Test.sh** と **perlTest.pl** があります。

第79章

SiteScope レポート

本章の内容

概念

- [1274ページ「SiteScope レポートの概要」](#)
- [1275ページ「SiteScope のレポート・タイプ」](#)
- [1277ページ「SiteScope 管理レポートを使った作業」](#)

タスク

- [1278ページ「レポートの作成方法」](#)

参照情報

- [1279ページ「SiteScope レポートのユーザ・インタフェース」](#)

SiteScope レポートの概要

SiteScope レポートには、時間の経過に伴う監視対象のサーバとアプリケーションのパフォーマンスに関する情報が表示されます。SiteScope レポートは、運用パフォーマンスと可用性の監視とトラブルシューティング、監視対象環境の確認を行ううえで重要なツールです。

単一のモニタ、複数のモニタ、さらには多数のモニタ・グループのレポートを作成できます。レポート定義には、特定のモニタの測定値、結果のサマリ、グラフなど、レポートの内容のオプションが含まれます。

セールス、マーケティング、カスタマ・サポート、運営の管理層を含む、組織の多くのユーザが SiteScope レポートを活用できます。SiteScope ユーザ・アカウントによって、レポートを表示する SiteScope サービスへのこれらのユーザのアクセスを制限できます。詳細については、[773 ページ「ユーザ管理プリファレンスの概要」](#)を参照してください。

注:

- UNIX/Linux の SiteScope で特定のレポート要素を表示するには、SiteScope を実行しているサーバで X Window システムが稼動している必要があります。
- SiteScope インストールのアップグレード後に SiteScope バージョン 9.0 以降で生成されたレポートを開くには、レポート・フォルダ < **SiteScope のルート・ディレクトリ** > \htdocs の手動バックアップを作成し、新しいインストール・ディレクトリにコピーする必要があります。
- インジケータ値は SiteScope レポートには表示されません。

SiteScope 監視データ・ログ・ファイル

レポートの生成に使用できる SiteScope 監視データは、SiteScope サーバに格納されたログ・データの量に制限されます。標準設定では、SiteScope では監視データ・ログ・ファイルを 40 日間保持します。ログ・ファイルは循環式で、ログ保有期間よりも古いファイルは自動的に削除されます。

注:

- 長期間監視データ・ログを保持すると、設定したモニタの総数と日ごとに実行するモニタの頻度に応じて、SiteScope サーバのデータ格納上の問題が発生する可能性があります。データの累積率を見積もるため、< **SiteScope のルート・ディレクトリ** > \logs ディレクトリのログ・ファイルのサイズを監視する必要があります。
- SiteScope サーバに最低限 10 GB の格納領域を割り当てること、および、高負荷環境では 30 GB (1 分あたりのモニタ実行回数を 2,000 回に設定した場合モニタの数は 16,000) を推奨します。

ログ・プリファレンスを使用して、SiteScope で監視データを保持する期間を変更できます。監視データを外部の SQL 準拠データベースにエクスポートして、監視データをより長期間保持するか、他のレポート・アプリケーションでできるように、SiteScope を設定できます。詳細については、[738 ページ「ログ・プリファレンスの概要」](#)を参照してください。

SiteScope のレポート・タイプ


次の表で、SiteScope で利用可能なレポート・タイプとその使用法を説明します。

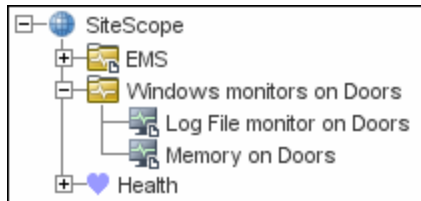
レポート・タイプ 詳細	
警告レポート	<p>警告レポートでは、指定した期間に生成された SiteScope 警告に関する情報を表示できます。警告レポートはその場に応じて作成されます。また、警告レポートの設定は SiteScope 設定には保存されず、後で使用できません。</p> <p>警告レポートの設定の詳細については、1297 ページ「[新規 SiteScope 警告レポート] ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p>
BSM 設定変更レポート	<p>BSM 設定変更レポートでは、BSM に報告する設定に関する統計情報を表示できます。この情報はトラブルシューティングのみに使用します。</p> <p>レポートは BSM から生成されます。BSM に報告する SiteScope が複数ある場合、このレポートに表示される情報には、選択した特定の SiteScope 以外の情報も含まれます。</p> <p>例：プロファイル・データベースへのデータ入力の失敗などの、レポート・ログの例外。</p> <p>注：このレポートは、SAM 管理から SiteScope にアクセスしていて、ユーザに SiteScope ログを表示する権限が付与されている場合にのみ利用可能です。</p>
管理レポート	<p>管理レポートでは、特定の期間のインフラストラクチャの可用性とパフォーマンス・データのサマリを表示できます。管理レポートは、SiteScope モニタによって収集されたデータから、事前に設定されたスケジュールで自動的に生成されます。事前に設定されたスケジュールに従い、SiteScope によって適切なログ・ファイルが読み取られ、指定した時間間隔のモニタ測定値に基づいてレポートが生成されます。レポート・データは、サードパーティ製のアプリケーションへのエクスポートに適したファイルに保存できます。</p> <p>管理レポートの設定の詳細については、1281 ページ「[新規 SiteScope 管理レポート]/[SiteScope 管理レポートの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p>
モニタ・レポート	<p>モニタ・レポートでは、設定のプロパティと既存のモニタの設定を確認できます。モニタ・レポートは 3 つのテキスト・データ形式のいずれかでエクスポートできます。指定したスケジュールに基づく管理レポートと異なり、モニタ・レポートはその場に応じて作成されます。また、モニタ・レポートの設定は SiteScope 設定には保存されず、後で使用できません。</p> <p>モニタ・レポートの設定の詳細については、1294 ページ「[新規 SiteScope モニタレポート] ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p>

レポート・タイプ	詳細
クイック・レポート	<p>クイック・レポートでは、特定の期間の指定したモニタまたはモニタ・グループの監視データを表示できます。</p> <p>指定したスケジュールに基づいて生成される管理レポートと異なり、クイック・レポートはその場に応じて作成されます。また、モニタ・サマリ・レポートの設定は SiteScope 設定には保存されず、後で使用できません。</p> <p>クイック・レポートの設定の詳細については、1290 ページ「[新規 SiteScope クイックレポート] ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p>
サーバ中心のレポート	<p>専用 Microsoft Windows リソース・モニタ、または UNIX リソース・モニタによって監視されているサーバについての 3 つの指標 (CPU 使用、メモリ使用、ネットワーク利用) のデータを表示します。</p> <p>サーバ中心のレポートの設定の詳細については、1111 ページ「サーバ中心のレポート」参照してください。</p>

注: モニタ・レポートと警告レポートは SiteScope 11.20 で更新されて、ユーザインタフェースが簡素化され、外観と操作性が改善され、パフォーマンスが向上しました。コンテキスト・メニューからレガシー・モニタ・レポートと警告レポートを利用できるようにするには、[\[プリファレンス\] > \[インフラストラクチャ プリファレンス\] > \[カスタム設定\]](#)で「showlegacyReports」を「true」に設定します。

SiteScope 管理レポートを使った作業

レポートは、モニタ・ビューの [レポート] タブに要素として追加されます。SiteScope ノード、グループ、または個々のモニタに、レポートを子として追加できます。レポートは、次の例に示すように、レポートを作成したグループまたはモニタの横にある  アイコンで、左側のメニュー・ツリーに表示されます。



レポートには、レポートが追加されたコンテナに基づくスコープがあります。レポートに含めるデータのあるすべてのモニタを含む、コンテナまたは要素にレポートを追加します。その後、[レポートのターゲット] パネルを使用して、レポートに含めるモニタの選択を絞り込みます。

レポート・アイコンのあるノードを選択すると、[レポート] タブに 2 つのテーブルが表示されます。[レポート] テーブルには、このノードで作成したレポートが表示されます。[関連付けられたレポート] テーブルには、祖先ノードで作成され、監視対象の選択でこのノードに適用されたレポートが表示されます。

SiteScope レポート定義は、必要な数だけ作成できます。ただし、レポート定義数を最小に保つために、計画を立ててレポートを統合する必要があります。これによりレポートの管理が容易になり、過剰なレポート・メッセージやアクションを抑えることができます。多数のモニタのレポートを作成する場合、モニタまたは測定値のタイプに基づいて別々のレポートを作成することを検討する必要があります。たとえば、20 の異なるリモート・サーバのシステム・リソースのレポートを作成する場合、CPU やディスク領域などの数値を測定するモニタのレポートと、サービスやプロセスなどの基本的な可用性を報告するモニタのレポートを別々に作成することを検討します。

標準設定では、SiteScope は最近生成された 10 件のレポートを保持します。つまり、1 時間ごとのレポートでは過去 10 時間、日次レポートでは過去 10 日間、週次レポートでは過去 10 週間のレポートが利用可能です。<SiteScope ルート・ディレクトリ>\groups\master.config ファイルにある `_maximumReports` 設定の値を変更して、このレポート保存期間を変更できます。

管理レポート定義を削除すると、対応するレポートの生成は中止されます。以前に生成されたレポートは、基になるデータが削除されるまで引き続き使用できます。

レポート定義はコピーして貼り付けできます。レポート定義の設定は、[レポートのターゲット] 設定 (レポートを貼り付けるコンテナのすべての子を含むように自動的にリセットされる) を除き、新しい場所に貼り付けられます。レポートの貼り付け後、割り当てられた [レポートのターゲット] が新しいレポート・コンテキストと全体のレポート計画に適したものになるように、レポート定義のプロパティを編集する必要があります。

レポートの作成方法

このタスクでは、SiteScope レポートの作成に関する手順を説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- [1278ページ「前提条件」](#)
- [1278ページ「レポート・タイプの選択」](#)
- [1278ページ「レポートの設定」](#)
- [1278ページ「結果」](#)

1. 前提条件

レポートを生成または管理できるようにするには、SiteScope で管理者である必要があります。または、ユーザ管理プリファレンスで必要なレポート権限を付与されたユーザである必要があります。ユーザ権限の詳細については、[773ページ「ユーザ管理プリファレンスの概要」](#)を参照してください。

2. レポート・タイプの選択

レポートを作成するグループまたはモニタ・コンテナを右クリックし、[レポート]をクリックするか、[レポート]タブから新しいレポートを作成します。追加または作成するレポート・タイプを選択します(管理レポートのみ追加できます。その他すべてのレポートはその場に応じて作成され、SiteScope に保存されません)。

レポート・タイプの詳細については、[1275ページ「SiteScope のレポート・タイプ」](#)を参照してください。

3. レポートの設定

レポートに含めるモニタを選択し、レポートを設定します。

ユーザ・インタフェースの詳細については、[1279ページ「SiteScope レポートのユーザ・インタフェース」](#)を参照してください。

注: 標準設定では、選択したコンテナ内のすべてのモニタのデータが含まれます。警告レポートの場合、レポートから選択したコンテナのモニタは削除できません。

4. 結果

管理レポートは、モニタ・ツリーの選択したコンテナに追加されます(レポート  記号で表示)。管理レポートの表示の詳細については、[1301ページ「管理レポート」](#)を参照してください。

その他すべてのレポートは生成され、Web ブラウザに表示されます。


- 警告レポートの表示の詳細については、[1309ページ「警告レポート」](#)を参照してください。
- モニタ・レポートの表示の詳細については、[1307ページ「モニタ・サマリ・レポート」](#)を参照してください。
- クイック・レポートの表示の詳細については、[1305ページ「クイック・レポート」](#)を参照してください。
- サーバ中心のレポートの表示の詳細については、[1305ページ「クイック・レポート」](#)を参照してください。

SiteScope レポートのユーザ・インタフェース

本項の内容


- 1279 ページ「[レポート] ページ」
- 1281 ページ「[新規 SiteScope 管理レポート]/[SiteScope 管理レポートの編集] ダイアログ・ボックス」
- 1290 ページ「[新規 SiteScope クイックレポート] ダイアログ・ボックス」
- 1294 ページ「[新規 SiteScope モニタレポート] ダイアログ・ボックス」
- 1297 ページ「[新規 SiteScope 警告レポート] ダイアログ・ボックス」
- 1301 ページ「管理レポート」
- 1305 ページ「クイック・レポート」
- 1307 ページ「モニタ・サマリ・レポート」
- 1309 ページ「警告レポート」
- 1310 ページ「注釈ツール」
- 1314 ページ「[Mail Details] ダイアログ・ボックス」










[レポート] ページ

このページには、SiteScope で定義されたレポートに関する情報が表示されます。このページでは、レポート定義の追加、編集、削除を行います。SiteScope オブジェクト(グループまたはモニタ)にレポートが設定されている場合、モニタ・ツリーのオブジェクト・アイコンの横にレポート記号  が表示されます。

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。[モニタ] ツリーで、レポート生成対象となる SiteScope オブジェクトを選択し、[レポート] タブをクリックします。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none">• 特定のモニタまたはグループに作成されたレポートは、オブジェクトの[モニタのレポート]/[グループのレポート] リストに表示されます。対象のモニタまたはグループは、[モニタに関連付けられたレポート/グループに関連付けられたレポート] リストに表示されます。• SiteScope 管理者 ユーザ、または適切なレポート権限を付与されたユーザのみがレポートを生成でき、管理レポートを追加、編集できます。ユーザ権限の詳細については、792 ページ「権限」を参照してください。
関連タスク	1278 ページ「 レポートの作成方法 」
関連情報	1277 ページ「 SiteScope 管理レポートを使った作業 」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
	子レポートの表示: 選択したノードの直接の子レポートのみを表示します。

UI 要素	詳細
	すべての子孫レポートの表示 : 選択したノードのすべての子孫レポートを表示します。
	新規レポート : 設定するレポートの種類を選択できます。[レポート]タブに追加されるのは管理レポートのみです(その他のレポート・タイプはすべてその場に応じて作成され、SiteScope には保存されません。[新規 SiteScope 管理レポート]のユーザ・インタフェースの詳細については、 1281ページ 「 新規 SiteScope 管理レポート 」/[SiteScope 管理レポートの編集]ダイアログ・ボックス」を参照してください。 注: このボタンは、[モニタのレポート]/[グループのレポート]テーブルでのみ使用できます。
	レポートの編集 : 選択した管理レポートのプロパティを編集できます。[管理レポートの編集]のユーザ・インタフェースの詳細については、 1281ページ 「 新規 SiteScope 管理レポート 」/[SiteScope 管理レポートの編集]ダイアログ・ボックス」を参照してください。
	レポートのコピー : 選択したレポートのコピーを作成します。 注: このボタンは、[モニタのレポート]/[グループのレポート]テーブルでのみ使用できます。
	貼り付け : ツリー内の選択した場所にレポートを貼り付けます。 注: このボタンは、[モニタのレポート]/[グループのレポート]テーブルでのみ使用できます。
	レポートを削除 : 選択した管理レポートを[レポート]タブから削除します。
	レポートの生成 : 選択したモニタまたはグループの管理レポートを生成します。ユーザ・インタフェースの詳細については、 1301ページ 「 管理レポート 」を参照してください。
	すべて選択 : 表示されているすべてのレポートを選択します。
	選択を解除 : 選択をクリアします。
タイプ	レポート・タイプを示します。
タイトル	SiteScope で認識されるレポートの名前。
詳細	レポートの詳細。
有効	このレポートの生成が有効かどうかを示します。
パス	このオブジェクトを対象とする祖先ノードへのリンクを表示します。 注: この列は、[関連付けられたレポート]テーブルのみに表示されます。

[新規 SiteScope 管理レポート]/[SiteScope 管理レポートの編集]ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、特定の期間のシステム可用性データのサマリを提供するレポートを作成できます。

アクセス方法	<p>[モニタ]コンテキストを選択し、モニタ・ツリーで次のように操作します。</p> <ul style="list-style-type: none">SiteScopeノード、モニタ・グループ、またはモニタを右クリックし、[レポート] > [管理]を選択するか、レポート作成対象となる SiteScope オブジェクトを選択し、[レポート] タブで [レポートの新規作成] > [管理]を選択します。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none">管理レポートを操作するには、SiteScope で管理者である必要があります。または、ユーザ管理プリファレンスで「管理レポートを追加、編集、または削除します」および「管理レポートの生成」権限を付与されたユーザである必要があります。ユーザ権限の詳細については、773ページ「ユーザ管理プリファレンスの概要」を参照してください。レポート・テキスト・ボックスに入力した HTML コードは、有効性とセキュリティがチェックされ、コード(複数行にわたるために切り捨てられたコードなど)を修正する修正アクションが実行されます悪意のある HTML コードや JavaScript が検出されると、フィールド全体が拒否されます。禁止されている HTML 内容は次のとおりです。<ul style="list-style-type: none">タグ: script, object, param, frame, iframe。on で始まる属性を含むタグは拒否される。例: onhover値に javascript が指定された属性。
関連タスク	1278ページ「レポートの作成方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none">1274ページ「SiteScope レポートの概要」1279ページ「[レポート] ページ」1301ページ「管理レポート」

本項の内容

- [1282ページ「一般設定」](#)
- [1282ページ「レポートのターゲット」](#)
- [1282ページ「表示設定」](#)
- [1284ページ「フィルタとスケジュールの設定」](#)
- [1285ページ「レポート・フォーマット」](#)
- [1285ページ「レポート配布」](#)
- [1287ページ「計算メソッド」](#)

- 1287 ページ「管理設定」
- 1288 ページ「タグの検索 / フィルタ」

一般設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
レポートのタイトル	この管理レポートのタイトルを入力します。この名前は、表示される管理レポート定義を識別するために使用されます。
詳細	(任意指定)このテキスト・ボックスは、レポート定義に関するその他の情報を記述するために使用します。たとえば、このレポートの目的、監視対象、設定日、読者などの情報を含みます。

レポートのターゲット

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
レポートのターゲット	コンテキスト・メニュー・ツリーで、このレポートに含めるグループまたはモニタ、あるいはその両方を選択します。コンテキスト・メニューには、現在選択されているコンテナおよびすべての子コンテナが含まれます。 標準設定値：現在のコンテナおよび選択されているすべての子要素。

表示設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
しきい値	
すべてのしきい値	レポートに含まれているすべてのモニタのモニタ・エラー、警告、良好しきい値設定のテーブルを作成します。選択されている場合、このテーブルは最初のレポート・セクションに表示されます。 標準設定値：選択されていない
エラーしきい値	レポート期間中にモニタによって記録された個々のエラー読み取りのテーブルを作成します。 標準設定値：選択されている
警告しきい値	レポート期間中にモニタによって記録された個々の警告読み取りのテーブルを作成します。 標準設定値：選択されている

UI 要素	説明
良好しきい値	<p>レポート期間中にモニタによって記録された個々の正常読み取りのテーブルを作成します。</p> <p>標準設定値: 選択されている</p>
稼働時間および読み取り	
稼働時間サマリおよび測定値サマリ・テーブル	<p>2つのレポート・テーブルを作成:「稼働時間サマリ」および「測定値サマリ」。これらのテーブルに含まれるデータの詳細については、1301ページ「管理レポート」を参照してください。</p> <p>標準設定値: 選択されている</p>
稼働時間: 警告を含む	<p>全体の稼働時間の計算に、警告としてレポートされるモニタ読み取りを含めます。</p> <p>標準設定値: 選択されていない</p>
稼働時間: 警告を無視する	<p>全体の[稼働時間および読み取り]のサマリ・セクションで警告としてレポートされるモニタ読み取りを含めないようにします。</p> <p>注: このオプションでは、テーブルの[警告 %]列が非表示になるだけで、稼働時間 % の計算は変更されません。</p> <p>標準設定値: 選択されていない</p>
稼働時間: エラーを無視する	<p>全体の[稼働時間および読み取り]のサマリ・セクションでエラーとしてレポートされるモニタ読み取りを含めないようにします。</p> <p>注: このオプションでは、テーブルの[エラー %]列が非表示になるだけで、稼働時間 % の計算は変更されません。</p> <p>標準設定値: 選択されていない</p>
一般	
測定値グラフ	<p>ドロップダウン・リストを使用して、グラフ・レポートに含めるグラフ測定値を選択します。オプションの詳細については、1288ページ「グラフの測定値のオプション」を参照してください。</p>
モニタ読み取り	<p>レポート期間中にモニタによって記録された個々の読み取り(エラー、正常、警告のすべての読み取りを含む)のテーブルを作成します。レポートの対象期間およびその期間中にモニタが実行された頻度によっては、このレポート・テーブルに空の「パケット」が含まれる場合があります。</p> <p>標準設定値: 選択されている</p>

UI 要素	説明
警告テーブル	<p>モニタに対して送信される警告のテーブルをレポートに含めるオプションを選択します。警告テーブル・レベルのオプションは次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> 警告テーブルなし：レポートに警告のテーブルは含まれません(標準設定)。 基本警告テーブル：送信された各警告の時間およびサマリ情報を表示します。 すべての警告に対する詳細警告テーブルの表示：レポートに各警告の詳細な警告情報を表示します。 失敗した警告に対する詳細警告テーブルの表示：各警告の時間とサマリ情報、および失敗した各警告の完全診断のブレイクダウンを表示します。
詳細モニタ情報	<p>各モニタについて収集したすべての情報をレポートに表示します。詳細情報を表示しない場合は、各モニタの主要なデータのみが表示されます。</p> <p>標準設定値：選択されていない</p> <p>例：URL シーケンス・モニタでこのボックスがチェックされている場合、シーケンスの各ステップのタイミング情報がレポートに表示されます。</p>
エラーの時刻	<p>レポート用に選択した各モニタを一覧表示するテーブル・サマリを作成し、レポート期間中にモニタの状態がエラーとして計算された時間(分単位)のサマリを表示します。</p> <p>標準設定値：選択されていない</p>

フィルタとスケジュールの設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
モニタ・フィルタ	<p>レポートに表示する、レポートのタイム・フレーム中に指定した状態になったモニタのサブセットを選択します。エラーまたは警告のモニタ、エラーのモニタ、警告のモニタ、OK のモニタのみ、あるいはすべてのモニタを選択できます。</p> <p>標準設定値：すべてのモニタを表示</p> <p>例：[エラーのモニタのみ表示]を選択すると、そのモニタがレポートの時間間隔中にエラーになった場合にのみレポート・データが表示されます。</p>
スケジュール・フィルタ	<p>スケジュールの期間中にサンプルがある、モニタのデータのサブセットのみをレポートに表示するスケジュール・フィルタ・オプションを選択します。</p> <p>標準設定値：レポートには、レポートの期間全体(毎日、終日)のデータが表示されます。</p> <p>例：[平日、09:00～18:00]を選択すると、月曜日から金曜日の午前 9 時から午後 6 時までの期間のサンプルがある、選択したモニタのレポート・データが表示されます。すべての計算にはこのデータのみが使用されます。</p>

UI 要素	詳細
レポートの対象期間	<p>監視データを表示する期間を選択します。設定した期間(時間単位)、過去 1 日、過去数日、過去 1 週間、過去 1 か月、または月の始まりから現在までのデータをレポートできます。</p> <p>毎日および過去 1 か月のレポートは、毎日予定の時間に生成されます。毎週のレポートは、日曜日の予定時刻に生成され、毎月のレポートは、1 か月分のデータが含まれるように、当月の翌月の 1 日に生成されます。</p> <p>標準設定値: 最終日</p>
レポート対象期間の最後	<p>ドロップダウン・リストから時間を選択して、レポートの終了時間を選択します。たとえば、午前 0 時から午前 0 時までレポートを実行できます。</p> <p>標準設定値: レポートの実行時刻 (SiteScope 指定した時間に開始され、レポートが生成された時刻に終了するレポートを生成します)</p>

レポート・フォーマット

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
ファイル形式	<p>このオプションでは、レポートの外観の一部をカスタマイズできます。オプションは次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none">色付きの背景(標準設定)色付きの背景、テーブルの枠線なし白い背景

レポート配布

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
HTML 形式	<p>レポートを HTML 形式で送信するかどうかを選択します。SiteScope レポート・グラフィックを含めるには、このオプションを使用します。このオプションを選択しない場合は、テキスト形式のレポート・サマリのみが送信されます。</p> <p>標準設定値: 選択されていない</p>
レポートを電子メール・アドレスに送信する	<p>生成されたレポートを電子メールで転送するには、生成時に毎回レポートを送信する宛先の電子メール・アドレスを入力します。複数の電子メール・アドレスにレポートを送信するには、電子メール・アドレスをカンマで区切ります。</p>

UI 要素	詳細
フォーマット・テンプレート	<p>SiteScope で電子メール・メッセージを作成するときに使用するテンプレートを選択します。次のテンプレートから選択するか、いずれかのコピーを作成して、必要に応じてカスタマイズできます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • HistoryLongMail : 詳細な履歴レポートを送信するには、このオプションを選択します。ユーザ・リンクと管理リンクの両方が含まれます。 • HistoryLongXMLMail : 詳細な履歴レポートを送信するには、このオプションを選択します。レポートおよび XML ファイルのユーザ・リンクと管理リンクの両方が含まれます。& • HistoryMail : 履歴レポートを送信するには、このオプションを選択します。これが標準設定のオプションです。 • HistoryMailAlertDetail : 電子メールで送信されるレポートにすべての警告を含めるには、このオプションを選択します。 • HistoryMailNoLinks : リンクを含まないレポートを送信するには、このオプションを選択します。
カンマ区切りのファイル	<p>生成された管理レポートをカンマ区切りのテキスト・ファイルに保存する場合に選択します。このファイルは後でスプレッドシート・アプリケーションにインポートできます。</p> <p>これらのファイルは自動的に <SiteScope のルート・ディレクトリ>\htdocs ディレクトリに保存されます。SiteScope 自身のマシンに保存されているファイルの正確な場所を調べるには、レポートの[レポートの表示]タブをクリックして、[情報対象]列にあるレポートのテキスト・リンクの上にポインタを移動します。Web ブラウザのステータス・バーにファイルの完全パスが表示されます。マシンに保存されているファイルを開くには、テキスト・リンクをクリックして[レポート]ページに移動します。[電子メール] テキスト・ボックスに電子メール・アドレスを入力すると、そのアドレスにカンマ区切りファイルのコピーが送信されます。SiteScope</p> <p>標準設定値 :選択されていない</p> <p>注 :カンマ区切りのファイルには、各モニタ読み取りに2つの列が作成されます。1つには値と単位が含まれ、もう1つには値のみが含まれます。サードパーティ・アプリケーションではデータ値と単位を表すテキストが自動的に分離されない場合がありますが、この形式によってカンマ区切りデータをより簡単にそのようなアプリケーションにインポートできます。</p>
カンマ区切りのファイルを電子メールで送信	<p>テキスト・ボックスに電子メール・アドレスを入力すると、そのアドレスにファイルのコピーが送信されます。SiteScope</p>

UI 要素	詳細
XML ファイル	<p>生成された管理レポートを XML テキスト・ファイルに保存するには、このボックスを選択します。これらのファイルが自動的に <SiteScope ルート・ディレクトリ>\htdocs ディレクトリに保存されます。SiteScope 自 分のマシンに保存されているファイルの正確な場所を調べるには、レポートの[レポートの表示]タブをクリックして、[情報対象]列にあるレポートの xml リンクの上にポインタを移動します。Web ブラウザのステータス・バーにファイルの完全パスが表示されます。マシンに保存されているファイルを開くには、xml リンクをクリックして[レポート]ページに移動します。[電子メール] テキスト・ボックスに電子メール・アドレスを入力すると、そのアドレスにカンマ区切りファイルのコピーが送信されます。SiteScope</p> <p>標準設定値 : 選択されていない</p> <p>注 : XML ファイルには、各 モニタ読み取りに 2 つの列が作成されます。1 つには値と単位が含まれ、もう 1 つには値のみが含まれます。サードパーティ・アプリケーションではデータ値と単位を表すテキストが自動的に分離されない場合がありますが、この形式によって XML データをより簡単にそのようなアプリケーションにインポートできます。</p>
XML ファイルを電子メールで送信	<p>テキスト・ボックスに電子メール・アドレスを入力すると、そのアドレスに XML ファイルのコピーが送信されます。SiteScope</p>

計算メソッド

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
サンプリング 間隔	<p>このタイム・スケール・オプションを使用して、モニタ読み取りの時間間隔を選択します。毎分 1 回から毎日 1 回の範囲から間隔を選択するか、自動スケールを使用できます。自動スケールを使用すると、SiteScope では特定のモニタの選択した期間に取得された読み取り数を判断し、管理レポートの適切な間隔が選択されます。</p> <p>標準設定値 : 自動タイムスケール</p>
最大のグラフ 値	<p>グラフに表示される最大値を選択するには、垂直スケール・オプションを選択します。特定のスケール値を選択すると、異なるモニタおよび時間のグラフとの比較が容易になります。</p> <p>標準設定値 : 自動垂直スケール</p>

管理設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
レポートの無効化	このレポートの生成を一時的に無効にする場合に選択します。レポートをもう一度有効にするには、ボックスをクリアします。 標準設定値：選択されていない
次の時間にレポートを生成 (HH:MM)	この管理レポートを生成する時刻。SiteScope レポートには、レポート実行時までの過去 1 日、1 週間、または 1 か月の情報が含まれます。たとえば、毎日のレポートを 18:00(午後 6 時)に生成する場合、前日の 18:00 から当日の 18:00 までの間に生成されたデータが含まれます。標準設定値は 00:00(午前 0 時)です。 標準設定値：04:00 ヒント：全体の監視タスクおよび負荷と比較して、オフピークの時間帯にレポートが生成されるようにスケジュール設定してください。レポート生成は一時的に全体的な SiteScope のパフォーマンスと応答に影響する場合があります(モニタ数、およびレポートの対象期間によって異なる)。毎日多数のレポートを生成する場合は、複数のレポートの「次の時間にレポートを生成」の値をずらして設定することを検討してください。

タグの検索 / フィルタ

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します(ラベルのない要素は山括弧内に表示されます)。

UI 要素	説明
<タグ名と値>	SiteScope オブジェクト(グループ、モニタ、リモート・サーバ、テンプレート、プリファレンス・プロファイル)を検索およびフィルタするために、キーワード・タグが使用される。SiteScope にタグが作成されていない場合、このセクションは空白で表示されます。タグが作成されている場合はここに表示され、必要に応じてタグを選択できます。 概念の詳細については、 106 ページ「SiteScope オブジェクトの検索」 を参照してください。
タグの追加	「新規タグ」ダイアログ・ボックスを開き、新しいキーワード・タグを追加できる。ユーザ・インタフェースの詳細については、 111 ページ「[新規タグ]/[タグの編集]ダイアログ・ボックス」 を参照してください。

注：棒グラフは、すべてのブラウザ・タイプから印刷できるように、標準 HTML を使用して生成されます。折れ線グラフは java アプレットを使用して生成され、すべてのブラウザからは直接印刷できない場合があります。

グラフの測定値のオプション


この表では、レポートに含めることができるグラフの測定値のオプションについて説明します。

グラフ	説明
なし - グラフなし	レポートにグラフは含まれません。レポートには、選択した表形式のデータ内容のみが含まれます。
棒グラフ - 測定値ごとに 1 つのグラフ	この棒グラフ・オプションを選択すると、指定したタイム・フレームで、グラフごとおよびモニターごとに 1 つの測定値タイプが表示されます。複数のモニターをレポートする場合、各モニターの測定値タイプごとに 1 つの棒グラフが生成されるので、グラフの数が最も多くなります。
折れ線グラフ - 測定値ごとに 1 つのグラフ	この折れ線グラフ・オプションを選択すると、1 つのモニターの測定値タイプごとに折れ線グラフが表示されます。棒グラフ・オプションと同様に、測定値タイプの互換性に関係なく、レポートの対象として選択した各モニターの測定値タイプごとに 1 つの折れ線グラフが生成されるので、折れ線グラフの数が最も多くなります。
折れ線グラフ - モニター・インスタンスごとのグループ分け	この折れ線グラフ・オプションを選択すると、1 つのモニター・インスタンスからのすべての測定値が、モニターごとに 1 つのグラフにグループ分けされます。生成される折れ線グラフの数は、モニターでモニター実行 (Microsoft Windows リソース・モニター、UNIX リソース・モニターなどのタイプ) ごとに複数の測定値が記録されるかどうか、および測定値タイプが相互に互換するかどうかによって異なります。測定値タイプに互換性がない場合は、別々のグラフが生成されます。
折れ線グラフ - 同じ測定値の種類のグループ分け	複数のモニター・インスタンスで収集された同じ測定値タイプを 1 つのグラフにプロットするには、このオプションを選択します。折れ線グラフは、レポートの対象として選択したモニターの数に関係なく、互換性のある測定値タイプのセットごとに生成されます。
折れ線グラフ - 互換性のある測定値のグループ分け	選択したモニターからの互換性のある測定値をすべて 1 つのグラフに表示するには、このオプションを選択します。このオプションは、生成される折れ線グラフの合計数を最小化することを目的としています。生成されるグラフの数は、選択したモニター・タイプおよびそれらのモニターによって収集される測定値タイプの互換性によります。レポートで選択されたすべてのモニターが同じタイプ、たとえば URL モニターである場合、各モニターを色分けした線で示す 1 つのグラフが生成されます。

注: 棒グラフは、すべてのブラウザ・タイプから印刷できるように、標準 HTML を使用して生成されます。折れ線グラフは java アプレットを使用して生成され、すべてのブラウザからは直接印刷できない場合があります。

[新規 SiteScope クイック レポート] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、特定の期間にわたるモニタまたはモニタ・グループの 1 回限りの SiteScope 管理レポートを作成できます。

アクセス方法	<p>[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで、SiteScope ノード、モニタ・グループ、またはモニタを右クリックして、[レポート] > [クイック] を選択します。(または、レポート生成対象となる SiteScope オブジェクトを選択し、[レポート] タブで[レポートの新規作成] > [警告] を選択します)。レポートのプロパティを設定し、[レポートの生成] をクリックします。</p> <p>あるいは、モニタを選択して SiteScope ダッシュボードの[クイック レポート]  ボタンをクリックすることで、事前設定を使用してレポートを作成できます。</p>
重要な情報	<ul style="list-style-type: none">クイック・レポートの時間間隔は、自動的に増分されません。つまり、クイック・レポートには必ず、レポート定義で指定した[レポート期間]の絶対的な間隔のデータが含まれます。クイック・レポートでより最近のデータを表示するには、[レポート期間]設定を編集します。レポートを生成するには、SiteScope で管理者である必要があります。または、ユーザ管理プリファレンスで「クイック レポートの生成」権限を付与されたユーザである必要があります。ユーザ権限の詳細については、773 ページ「ユーザ管理プリファレンスの概要」を参照してください。BSM で作業する場合、SAM 管理のクイック・レポート定義は、BSM コンテキストでのみ格納されます。クイック・レポート定義は SiteScope サーバに格納されず、サーバ上に存続しません。
関連タスク	1278 ページ「レポートの作成方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none">1274 ページ「SiteScope レポートの概要」1305 ページ「クイック・レポート」

本項の内容

- [1291 ページ「レポートのターゲット」](#)
- [1291 ページ「表示設定」](#)
- [1293 ページ「フィルタとスケジュールの設定」](#)
- [1293 ページ「レポート・フォーマット」](#)
- [1294 ページ「レポート配布」](#)
- [1294 ページ「計算メソッド」](#)

レポートのターゲット

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
レポートのターゲット	コンテキスト・メニュー・ツリーで、このレポートに含めるグループまたはモニタ、あるいはその両方を選択します。コンテキスト・メニューには、現在選択されているコンテナおよびすべての子コンテナが含まれます。 標準設定値：現在のコンテナおよび選択されているすべての子要素。

表示設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
しきい値	
すべてのしきい値	レポートに含まれているすべてのモニタのモニタ・エラー、警告、良好しきい値設定のテーブルを作成します。選択されている場合、このテーブルは最初のレポート・セクションに表示されます。 標準設定値：選択されていない
エラーしきい値	レポート期間中にモニタによって記録された個々のエラー読み取りのテーブルを作成します。 標準設定値：選択されている
警告しきい値	レポート期間中にモニタによって記録された個々の警告読み取りのテーブルを作成します。 標準設定値：選択されている
良好しきい値	レポート期間中にモニタによって記録された個々の正常読み取りのテーブルを作成します。 標準設定値：選択されている
稼働時間および読み取り	
稼働時間サマリおよび測定値サマリ・テーブル	2つのレポート・テーブルを作成:「稼働時間サマリ」および「測定値サマリ」。これらのテーブルに含まれるデータの詳細については、 1305ページ「クイック・レポート」 を参照してください。 標準設定値：選択されている
稼働時間：警告を含む	全体の稼働時間の計算に、警告としてレポートされるモニタ読み取りを含めます。 標準設定値：選択されていない

UI 要素	説明
稼働時間 : 警告を無視する	<p>全体の[稼働時間および読み取り]のサマリ・セクションで警告としてレポートされるモニタ読み取りを含めないようにします。</p> <p>標準設定値 : 選択されていない</p> <p>注 : このオプションでは、テーブルの [警告 %] 列が非表示になるだけで、稼働時間 % の計算は変更されません。</p>
稼働時間 : エラーを無視する	<p>全体の[稼働時間および読み取り]のサマリ・セクションでエラーとしてレポートされるモニタ読み取りを含めないようにします。</p> <p>標準設定値 : 選択されていない</p> <p>注 : このオプションでは、テーブルの [エラー %] 列が非表示になるだけで、稼働時間 % の計算は変更されません。</p>
一般	
測定値グラフ	<p>ドロップダウン・リストを使用して、グラフ・レポートに含めるグラフ測定値を選択します。オプションの詳細については、1288 ページ「グラフの測定値のオプション」を参照してください。</p> <p>標準設定値 : 棒グラフ - 測定値ごとに 1 つのグラフ</p>
モニタ読み取り	<p>レポート期間中にモニタによって記録された個々の読み取り(エラー、正常、警告のすべての読み取りを含む)のテーブルを作成します。レポートの対象期間およびその期間中にモニタが実行された頻度によっては、このレポート・テーブルに空の「パケツ」が含まれる場合があります。</p> <p>標準設定値 : 選択されている</p>
警告テーブル	<p>モニタに対して送信される警告のテーブルをレポートに含めるオプションを選択します。警告テーブル・レベルのオプションは次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> 警告テーブルなし : レポートに警告のテーブルは含まれません(標準設定)。 基本警告テーブル : 送信された各警告の時間およびサマリ情報を表示します。 すべての警告に対する詳細警告テーブルの表示 : レポートに各警告の詳細な警告情報を表示します。 失敗した警告に対する詳細警告テーブルの表示 : 各警告の時間とサマリ情報、および失敗した各警告の完全診断のブレイクダウンを表示します。
詳細モニタ情報	<p>各モニタについて収集したすべての情報をレポートに表示します。詳細情報を表示しない場合は、各モニタの主要なデータのみが表示されます。</p> <p>例 : URL シーケンス・モニタでこのボックスがチェックされている場合、シーケンスの各ステップのタイミング情報がレポートに表示されます。</p> <p>標準設定値 : 選択されていない</p>

UI 要素	説明
エラーの時刻	レポート用に選択した各モニタを一覧表示するテーブル・サマリを作成し、レポート期間中にモニタの状態がエラーとして計算された時間(分単位)のサマリを表示します。 標準設定値：選択されていない

フィルタとスケジュールの設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
モニタ・フィルタ	レポートに表示する、レポートのタイム・フレーム中に指定した状態になったモニタのサブセットを選択します。エラーまたは警告のモニタ、エラーのモニタ、警告のモニタ、OK のモニタのみ、あるいはすべてのモニタを選択できます。 標準設定値：すべてのモニタを表示 例：[エラーのモニタのみ表示]を選択すると、そのモニタがレポートの時間間隔中にエラーになった場合にのみレポート・データが表示されます。
スケジュール・フィルタ	スケジュールの期間中にサンプルがある、モニタのデータのサブセットのみをレポートに表示するスケジュール・フィルタ・オプションを選択します。 標準設定値：レポートには、レポートの期間全体(毎日、終日)のデータが表示されます。 例：[平日、09:00～18:00]を選択すると、月曜日から金曜日の午前 9 時から午後 6 時までの期間のサンプルがある、選択したモニタのレポート・データが表示されます。すべての計算にはこのデータのみが使用されます。
レポート期間	監視データを表示する期間を指定します。レポートの対象範囲の開始時間を[開始]ボックスに入力し、終了時間を[終了]ボックスに入力します。 標準設定値：期間は、クイック・レポートが生成された時刻の 1 時間前から現在の時刻までです。監視データをクイック・レポートに含める標準設定の期間を設定するには、[プリファレンス]>[インフラストラクチャプリファレンス]>[レポート設定]の[レポートの標準設定時間(時間)]を設定します。 注：時間は 24 時間形式で入力する必要があります。

レポート・フォーマット

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
レポート形式	レポートの表示に使用するフォーマットを選択します:HTMLフォーマット、テキスト・フォーマット、XMLフォーマット 標準設定値：HTML 形式

UI 要素	詳細
ファイル形式	このオプションでは、レポートの外観の一部をカスタマイズできます。オプションは次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none">• 色付きの背景 (標準設定)• 色付きの背景, テーブルの枠線なし• 白い背景

レポート配布

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
レポートを電子メール・アドレスに送信する	生成されたレポートを電子メールで転送するには、生成時に毎回レポートを送信する宛先の電子メール・アドレスを入力します。複数の電子メール・アドレスにレポートを送信するには、電子メール・アドレスをカンマで区切ります。

計算メソッド

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
サンプリング間隔	このタイム・スケール・オプションを使用して、モニタ読み取りの時間間隔を選択します。毎分 1 回から毎日 1 回の範囲から間隔を選択するか、自動スケールを使用できます。自動スケールを使用すると、SiteScope では特定のモニタの選択した期間に取得された読み取り数を判断し、管理レポートの適切な間隔が選択されます。 標準設定値：自動タイムスケール
最大のグラフ値	グラフに表示される最大値を選択するには、垂直スケール・オプションを選択します。特定のスケール値を選択すると、異なるモニタおよび時間のグラフとの比較が容易になります。 標準設定値：自動垂直スケール

[新規 SiteScope モニタ レポート] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、1 つ以上のモニタ・グループで定義されたモニタの詳細情報を含むレポートを作成できます。



アクセス方法	<p>[モニタ]コンテキストを選択し、モニタ・ツリーで次のように操作します。</p> <ul style="list-style-type: none"> SiteScope ノード、モニタ・グループ、またはモニタを右クリックし、[レポート]>[モニタ]を選択するか、 レポート生成対象となる SiteScope オブジェクトを選択し、[レポート]タブで[レポートの新規作成]>[モニタ]を選択します。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> モニタ・レポートは SiteScope 11.20 で更新されて、ユーザインタフェースが簡素化され、外観と操作性が改善され、パフォーマンスが向上しました。コンテキスト・メニューからレガシー・モニタを利用できるようにするには、[プリファレンス]>[インフラストラクチャプリファレンス]>[カスタム設定]で「showlegacyReports」を「true」に設定します。 レポートを生成するには、SiteScope で管理者である必要があります。または、ユーザ管理プリファレンスで「モニタ サマリ レポートの生成」権限を付与されたユーザである必要があります。ユーザ権限の詳細については、773 ページ「ユーザ管理プリファレンスの概要」を参照してください。
関連タスク	1278 ページ「レポートの作成方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> 1274 ページ「SiteScope レポートの概要」 1307 ページ「モニタ・サマリ・レポート」











本項の内容

- 1295 ページ「モニタ・レポート・ツールバー」
- 1296 ページ「モニタ・レポート・テーブル・ツールバー」

モニタ・レポート・ツールバー





ユーザ・インタフェース要素について次に説明します(ラベルのない要素は山括弧内に表示されます)。

UI 要素	詳細
	<p>[フィルタ]/[折りたたみ]レポート・フィルタ。クリックしてレポート・フィルタを折りたたむか展開します。</p> <p>レポート・フィルタを選択すると、SiteScope モニタ・ツリーが表示されます。このレポートに含めるグループ、モニタ、あるいはその両方を選択します。ツリーには、現在選択されているコンテナおよびすべての子コンテナが含まれます。</p> <p>標準設定値：現在のコンテナおよび選択されているすべての子要素。</p>
	<p>実行。レポートに含めるグループとモニタを選択したら、[実行]ボタンをクリックしてレポートを実行します。</p>

UI 要素	詳細
	<p>レポート・データの形式... クリックすると、利用できるレポートの形式が表示されます。レポートが出力されたら、ローカル・マシンに保存できます。</p> <p>ファイルの形式を選択します。</p> <ul style="list-style-type: none">  印刷形式。レポートをプリンタに送信できる形式にします。 <p>ヒント：印刷前に、プリンタ設定がフレームを画面に表示された状態ではなく、選択されたフレームを印刷する設定になっていることを確認します。</p> <p>最適な印刷結果を得るために、Microsoft Internet Explorer を使用している場合は、[背景の色とイメージを印刷する]オプションをオンにします([ツール]>[インターネットオプション]>[詳細設定]タブ>[印刷])。</p> <ul style="list-style-type: none">  PDF。PDF 形式でレポートを出力します。PDF ファイルですべての言語の文字を表示できるようにするには、次のようにサーバで Arial Unicode MS フォント・ファイルが利用可能であることを確認する必要があります。 <ol style="list-style-type: none"> システムのフォント・ライブラリに移動します。たとえば、Windows では次の場所にあります。C:\Windows\Fonts 選択したフォント・ライブラリに Arial Unicode MS フォントをダウンロードします。フォントは、次の Web サイトから入手できます。 http://www.microsoft.com/typography/fonts/family.aspx?FID=24. サーバを再起動します。 <ul style="list-style-type: none">  CSV。CSV 形式でレポートを出力します。  Excel。Excel 形式でレポートを出力します。  XML。XML 形式でレポートを出力します。  ヘルプ。このメニュー・オプションのオンライン・ヘルプにアクセスします。
	<p>レポートのエクスポート先... レポートのエクスポートに利用できるオプションを表示します。</p> <ul style="list-style-type: none">  電子メール。[メール詳細]ダイアログ・ボックスを開き、電子メールを使ってレポートを送信する方法を設定します。ユーザインタフェースの詳細については、1314 ページ「[Mail Details]ダイアログ・ボックス」を参照してください。  ヘルプ。このメニュー・オプションのオンライン・ヘルプにアクセスします。

モニタ・レポート・テーブル・ツールバー

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します(ラベルのない要素は山括弧内に表示されます)。

UI 要素	詳細
<レポートのターゲット>	このレポートに含まれるモニタと、[カラムの選択]ダイアログ・ボックスで選択された情報が表示されます。
	カラム幅をリセット :表のカラム幅を標準設定にリセットします。表のカラムの幅は、カラムの枠線を右または左にドラッグすることによって調節できます。
	カラムの選択 :レポート・カラムに表示するモニタ情報を選択します。[無効]や[頻度]などの特定のオプションが選択されている場合、または[モニタの詳細]などの値が指定されている場合にのみ、選択したパラメータのデータがレポートに表示されます。オプションや値が特定のモニタ・セットアップで定義されていない場合、そのモニタのパラメータの列は空白になります。 注 :隣接する一連のグループを選択するには、SHIFT キーを押しながら選択します。隣接していない複数の項目を選択するには、CTRL キーを押しながらクリックします。
	データの表やレポートのリストをページに分割します。対応するボタンをクリックすることで、ページ間を移動できます。 <ul style="list-style-type: none"> レポートの次/前のページを表示するには、[次のページ]/[前のページ] ボタンをクリックします。 レポートの前/最初のページを表示するには、[前のページ]/[最初のページ] ボタンをクリックします。
<モニタ情報カラム>	このレポートに含まれる SiteScope モニタと、選択されたカラムに対する情報が表示されます。利用可能なカラムと説明のリストは、 1307ページ「モニタ・サマリ・レポート」 を参照してください。 特定のカラムによってレポートをソートするには、カラム・ヘッダをクリックします。カラムがソート可能な場合は、小さな矢印アイコンが表示されます。矢印の方向がカラムのソート方向(昇順/降順)を示します。  アイコンをクリックしてソート方向を変更します。 カラムを使ってレポートをソートした場合、カラム・ヘッダが濃い青色になります。

[新規 SiteScope 警告レポート]ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、特定の期間に送信された SiteScope 警告を表示するために使用するレポートを作成できます。


アクセス方法	<p>[モニタ] コンテキストを選択し、モニタ・ツリーで次のように操作します。</p> <ul style="list-style-type: none"> SiteScope ノード、モニタ・グループ、またはモニタを右クリックし、[レポート] > [警告] を選択するか、 レポート生成対象となる SiteScope オブジェクトを選択し、[レポート] タブで [レポートの新規作成] > [警告] を選択します。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> 警告レポートは SiteScope 11.20 で更新されて、ユーザインタフェースが簡素化され、外観と操作性が改善され、パフォーマンスが向上しました。コンテキスト・メニューからレガシー警告レポートを利用できるようにするには、[プリファレンス] > [インストラクチャプリファレンス] > [カスタム設定] で [showlegacyReports] を [true] に設定します。 警告レポートを生成するには、SiteScope で管理者である必要があります。または、ユーザ管理プリファレンスで「警告レポートの生成」権限を付与されたユーザである必要があります。ユーザ権限の詳細については、773 ページ「ユーザ管理プリファレンスの概要」を参照してください。
関連タスク	1278 ページ「レポートの作成方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> 1274 ページ「SiteScope レポートの概要」 1309 ページ「警告レポート」




本項の内容











- [1298 ページ「警告レポート・ツールバー」](#)
- [1300 ページ「警告レポート・テーブル・ツールバー」](#)

警告レポート・ツールバー

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します(ラベルのない要素は山括弧内に表示されます)。





UI 要素	詳細
	<p>[フィルタ]/[折りたたみ] レポート・フィルタ。クリックしてレポート・フィルタを折りたたむか展開します。レポート・フィルタを選択すると、次の操作が可能です。</p> <ul style="list-style-type: none"> レポートでカバーしたい時間範囲を時間範囲バー(以下に説明)を使って選択します。 左側の表示枠で、このレポートに含めるグループ、モニタ、あるいはその両方を選択します。ツリーには、現在選択されているコンテナおよびすべての子コンテナが含まれます。標準設定では、現在のコンテナおよびすべての子要素が選択されています。 右側の表示枠で、このレポートに含める警告タイプを選択します。標準設定では、すべての警告タイプが選択されています。

UI 要素	詳細
表示期間: <input type="text" value="日"/>	<p><時間範囲バー> レポートの粒度には次のものが含まれます。時間範囲および時間単位。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 表示。レポートでカバーしたい時間範囲を選択します: 過去 1 時間, 過去 1 日, 過去 1 週間, 時間, 日, 週, またはカスタム(ユーザー定義の時間帯) • ボタンは次のように使用します。 <ul style="list-style-type: none"> ■  戻る: 現在表示している時間枠の 1 つ前の時間枠のレポートを表示します。 [表示] ボックスの値が[日]である場合, このボタンをクリックすると, 現在表示しているレポートの 1 日前のデータが表示されます。 ■  進む: 現在表示している時間枠の 1 つ後の時間枠のレポートを表示します。 [表示] ボックスの値が[時間]である場合, このボタンをクリックすると, 現在表示しているレポートの 1 時間後のデータが表示されます。 • 開始 ~ 終了: このリンクをクリックするとカレンダーが表示され, レポートの開始日時と終了日時を設定できます。カレンダーには次のボタンがついています。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 現在: カレンダーで今日の日付を選択します。 ■ キャンセル: 変更せずにカレンダーを閉じます。 ■ OK: 選択した日付の日付リンクを更新してカレンダーを閉じます。
	<p>実行。レポートに含める時間範囲, グループ, モニタ, および警告タイプを選択したら, [実行] ボタンをクリックしてレポートを生成します。</p>

UI 要素	詳細
	<p>レポート・データの形式... 利用できるレポートの形式が表示されます。レポートが出力されたら、ローカル・マシンに保存できます。</p> <p>ファイルの形式を選択します。</p> <ul style="list-style-type: none">  印刷形式。レポートをプリンタに送信できる形式にします。 <p>ヒント: 印刷前に、プリンタ設定がフレームを画面に表示された状態ではなく、選択されたフレームを印刷する設定になっていることを確認します。最適な印刷結果を得るために、Microsoft Internet Explorerを使用している場合は、[背景の色とイメージを印刷する]オプションをオンにします([ツール]>[インターネットオプション]>[詳細設定]タブ>[印刷])。</p>  PDF。PDF 形式でレポートを出力します。PDF ファイルですべての言語で文字が表示されるようにするには、次のように、Arial Unicode MS フォントがサーバで利用できることを確認してください。 <ol style="list-style-type: none"> システムのフォント・ライブラリに移動します。たとえば、Windows では次の場所にあります。C:\Windows\Fonts 選択したフォント・ライブラリに Arial Unicode MS フォントをダウンロードします。フォントは、次の Web サイトから入手できます。 http://www.microsoft.com/typography/fonts/family.aspx?FID=24 サーバを再起動します。  CSV。CSV 形式でレポートを出力します。  Excel。Excel 形式でレポートを出力します。  XML。XML 形式でレポートを出力します。  ヘルプ。このメニュー・オプションのオンライン・ヘルプにアクセスします。
	<p>レポートのエクスポート先... レポートのエクスポートに利用できるオプションを表示します。</p> <ul style="list-style-type: none">  電子メール。[メール詳細]ダイアログ・ボックスを開き、電子メールを使ってレポートを送信する方法を設定します。ユーザインタフェースの詳細については、1314ページ「[Mail Details]ダイアログ・ボックス」を参照してください。  ヘルプ。このメニュー・オプションのオンライン・ヘルプにアクセスします。

警告レポート・テーブル・ツールバー

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します(ラベルのない要素は山括弧内に表示されます)。

UI 要素	詳細
	<p>カラム幅をリセット: 表のカラム幅を標準設定にリセットします。表のカラムの幅は、カラムの枠線を右または左にドラッグすることによって調節できます。</p>
	<p>カラムの選択: レポート・カラムに表示するモニタ情報を選択します。[無効]や[頻度]などの特定のオプションが選択されている場合、または[モニタの詳細]などの値が指定されている場合にのみ、選択したパラメータのデータがレポートに表示されます。オプションや値が特定のモニタ・セットアップで定義されていない場合、そのモニタのパラメータの列は空白になります。</p> <p>注: 隣接する一連のグループを選択するには、SHIFT キーを押しながら選択します。隣接していない複数の項目を選択するには、CTRL キーを押しながらクリックします。</p>
	<p>データの表やレポートのリストをページに分割します。対応するボタンをクリックすることで、ページ間を移動できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> レポートの次/前のページを表示するには、[次のページ]/[前のページ] ボタンをクリックします。 レポートの前/最初のページを表示するには、[前のページ]/[最初のページ] ボタンをクリックします。
<警告情報カラム>	<p>指定された時間帯にフィルタで選択されたモニタおよび警告タイプに対して生成された SiteScope 警告についての情報を表示します。表示された情報は[カラムを選択]ダイアログ・ボックスで選択されたフィールドに対応しています。利用可能なカラムと説明のリストは、1309ページ「警告レポート」を参照してください。</p> <p>注: レポートには、選択されたオブジェクトをターゲットとする親グループからの警告を含む、すべての警告が含まれます。</p> <p>特定のカラムによってレポートをソートするには、カラム・ヘッダをクリックします。カラムがソート可能な場合は、小さな矢印アイコンが表示されます。矢印の方向がカラムのソート方向(昇順/降順)を示します。</p> <p> アイコンをクリックしてソート方向を変更します。</p> <p>カラムを使ってレポートをソートした場合、カラム・ヘッダが濃い青色になります。</p>

管理レポート

このレポートには、特定の期間のモニタおよびモニタ・グループの、インフラストラクチャの可用性およびパフォーマンス・データのサマリと特定の詳細情報が表示されます。管理レポートは、新たに出現した傾向を検出し、危機的状態になる前に潜在的問題を修正するために使用します。

[テーブル形式](#)
[エラーリスト](#)
[警告リスト](#)
[良好リスト](#)

[レポートのインデックス](#)

Core Weekly Report


(情報 10/12/02 16:55 ~ 10/12/03 16:55)

稼働時間サマリ

名前	稼働時間 %	エラー %	警告 %	最終
Cpu monitor on localhost	100	0	0	good
Disk Space: D on SiteScope サーバ	100	0	0	good
Directory: c:\ on SiteScope サーバ	100	0	0	good
FTP: localhost	89.09	10.91	0	good

測定値サマリ

名前	測定値	Max	Avg	最終
Cpu monitor on localhost	utilization	24%	0.85%	8%
Disk Space: D on SiteScope サーバ	percent full	58%	58%	58%
Directory: c:\ on SiteScope サーバ	total of file sizes	0 bytes	0 bytes	0 bytes
Directory: c:\ on SiteScope サーバ	Last time since modified	n/a	n/a	n/a
FTP: localhost	round trip time	0.06 sec	0.05 sec	0.033 sec

アクセス方法	<p>[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで、SiteScope ノード、モニタ・グループ、またはモニタ・コンテナを右クリックして、[レポート] > [管理] を選択します。レポートのプロパティを設定し、[OK] をクリックします。[レポート] タブで、レポートを選択し、[レポートの生成]  ボタンをクリックします。表示するレポート期間の日付が記述されたリンクをクリックします。生成されたレポートがない場合、または更新されたレポートを作成する場合は、[生成] ボタンをクリックします。</p>
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> 管理レポートでは、英語以外のラベルはサポートされていません。 インジケータ値は SiteScope レポートには表示されません。 カウンタを文字列(数字以外)でカスタム・モニタ用に設定した場合、または、文字列(数字以外)の値を含む参照可能なモニタ・カウンタを使用した場合は、[測定値サマリ] テーブルの中の最大値と平均値は「n/a」と表示されます。カウンタ値タイプを変更した場合も同様です(たとえば、カウンタを数値で設定した後、文字列の値に変更したか、または、その逆の場合)。
関連タスク	1278 ページ「レポートの作成方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> 1277 ページ「SiteScope 管理レポートを使った作業」 1281 ページ「[新規 SiteScope 管理レポート]/[SiteScope 管理レポートの編集] ダイアログ・ボックス」 1279 ページ「[レポート] ページ」

本項の内容

- 1303ページ「レポートの内容 - インデックス・ページ」
- 1303ページ「レポートの内容 - 管理レポート・ページ」

レポートの内容 - インデックス・ページ

次の要素が管理レポート・インデックス・ページに含まれます(ラベルのない要素は山括弧内に表示されます)。

UI 要素	詳細
最新のレポート	現在選択されているモニタまたはグループの最新の管理レポートを表示する場合にクリックします。
情報対象 < レポートの日付と時刻 >	現在選択されているモニタまたはグループの、リンクで指定されている期間の管理レポートを表示する場合にクリックします。管理レポート・ページの詳細については、 1301ページ「管理レポート」 を参照してください。
生成	レポートの生成が予定されている日時に関係なく、現在選択されているモニタまたはグループのレポートを新規作成する場合にクリックします。

レポートの内容 - 管理レポート・ページ

次の要素が管理レポート・ページに含まれます(ラベルのない要素は山括弧内に表示されます)。

UI 要素	詳細
テーブル形式	現在選択しているレポートでテーブル形式の測定値データに移動するには、 [テーブル形式] リンクをクリックします。
エラー・リスト	現在選択しているレポートでエラー状態のモニタのリストに移動するには、 [エラー リスト] リンクをクリックします。
警告リスト	現在選択しているレポートで警告状態のモニタのリストに移動するには、 [警告リスト] リンクをクリックします。
良好リスト	現在選択しているレポートで正常状態のモニタのリストに移動するには、 [良好リスト] リンクをクリックします。
レポートのインデックス	管理レポートのインデックスに移動するには、 [レポートのインデックス] リンクをクリックします。管理レポートのインデックス・ページの詳細については、 1301ページ「管理レポート」 を参照してください。

UI 要素	詳細
稼動時間サマリ	<p>このテーブルには、次が表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> 名前: レポートに含まれているモニタの名前。 稼動時間 %: 正常であるとレポートされたモニタ読み取りのパーセンテージ。 警告 %: 警告であるとレポートされたモニタ読み取りのパーセンテージ。 エラー %: エラーであるとレポートされたモニタ読み取りのパーセンテージ。 最終: レポート期間のモニタの最終読み取り値。
測定値サマリ	<p>このテーブルには、次が表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> 名前: レポートに含まれているモニタの名前。 測定値: 監視対象のパラメータ(エラー条件)。 Max: レポート期間中に測定値パラメータについて記録された最大値。 Avg: レポート期間中に記録された読み取りの平均値。 最終: レポート期間のモニタの最終読み取り値。
<測定値グラフ>	レポート期間中に監視された各インスタンスのグラフ形式の測定値データ。
<測定値テーブル>	レポート期間中に監視された各インスタンスの測定値データを 30 分単位でテーブル形式で表示したもの。赤または黄色で強調表示されたエントリは、測定値がモニタのエラーまたは警告ステータスのしきい値を超えたことを示します。青はモニタが無効になっていることを示します。
<エラーリストテーブル>	モニタのエラー・ステータスしきい値を超えたモニタ・インスタンスが一覧表示されます。エントリは赤で強調表示されます。
<警告リストテーブル>	モニタの警告ステータスしきい値を超えたモニタ・インスタンスが一覧表示されます。エントリは黄色で強調表示されます。
<良好リストテーブル>	モニタの正常ステータスしきい値内のモニタ・インスタンスが一覧表示されます。エントリは緑で強調表示されます。

クイック・レポート

このレポートには、特定の期間のモニタおよびモニタ・グループの、インフラストラクチャの可用性およびパフォーマンス・データのサマリと特定の詳細情報が表示されます。クイック・レポートは、その場に応じて生成され、SiteScope 設定データには保存されません。

ライセンス タイプ/ステータス: ポイント ライセンス (59 日間有効). ライセンス ポイント合計 500; 使用ポイント 6。

[テーブル形式](#)
[エラーリスト](#)
[警告リスト](#)
[良好リスト](#)

[Close Window](#)

複数のモニタのサマリ

(情報 10/12/03 15:59 ~ 10/12/03 16:59)

稼働時間サマリ


名前	稼働時間 %	エラー %	警告 %	最終
Ping: 1.1.1.1	0	0	0	データはありません
Log Event Checker	0	0	0	データはありません
Cpu monitor on localhost	100	0	0	good
Directory: c:\ on SiteScope サーバ	100	0	0	good
Disk Space: D on SiteScope サーバ	100	0	0	good
FTP: localhost	92.33	7.67	0	good
BAC Integration Configuration	0	0	0	データはありません
Health of SiteScope Server	100	0	0	good

測定値サマリ

名前	測定値	Max	Avg	最終
Ping: 1.1.1.1	round trip time	n/a	n/a	n/a
Log Event Checker	matches/min	n/a	n/a	n/a
Log Event Checker	lines/min	n/a	n/a	n/a
Cpu monitor on localhost	utilization	8%	3.17%	8%

アクセス方法

[**モニタ**] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで、SiteScope ノード、モニタ・グループ、またはモニタ・コンテナを右クリックして、[**レポート**] > [**クイック**] を選択します。レポートのプロパティを設定し、[**レポートの生成**] をクリックします。

あるいは、モニタを選択して、ダッシュボード・ツールバーの [**クイックレポート** 

重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> クイック・レポートの時間間隔は、自動的に増分されません。つまり、レポートには必ず、レポート定義で指定した[レポート期間]の絶対的な間隔のデータが含まれます。クイック・レポートでより最近のデータを表示するには、[レポート期間]設定を編集します。 BSM で作業する場合、SAM 管理のクイック・レポート定義は、BSM コンテキストでのみ格納されます。クイック・レポート定義は SiteScope サーバに格納されず、サーバ上に存続しません。
関連タスク	1278ページ「レポートの作成方法」
関連情報	1290ページ「[新規 SiteScope クイックレポート]ダイアログ・ボックス」

レポートの内容

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します(ラベルのない要素は山括弧内に表示されます)。

UI 要素	詳細
<ライセンスの詳細>	ページ上部にライセンスの詳細が表示されます。これには、SiteScope のライセンス・カテゴリ、利用可能なモニタ・ポイント数、ライセンスの残り日数が含まれます。
テーブル形式	現在選択しているレポートでテーブル形式の測定値データに移動する場合にクリックします。
エラー・リスト	現在選択しているレポートでエラー状態のモニタのリストに移動する場合にクリックします。
警告リスト	現在選択しているレポートで警告状態のモニタのリストに移動する場合にクリックします。
良好リスト	現在選択しているレポートで正常状態のモニタのリストに移動する場合にクリックします。
稼働時間サマリ	<p>このテーブルには、次が表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> 名前：レポートに含まれているモニタの名前。 稼働時間 %：正常であるとレポートされたモニタ読み取りのパーセンテージ。 警告 %：警告であるとレポートされたモニタ読み取りのパーセンテージ。 エラー %：エラーであるとレポートされたモニタ読み取りのパーセンテージ。 最終：レポート期間のモニタの最終読み取り値。

UI 要素	詳細
測定値サマリ	<p>このテーブルには、次が表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> 名前: レポートに含まれているモニタの名前。 測定値: 監視対象のパラメータ(エラー条件)。 Max: レポート期間中に測定値/パラメータについて記録された最大値。 Avg: レポート期間中に記録された読み取りの平均値。 最終: レポート期間のモニタの最終読み取り値。
<測定値グラフ>	レポート期間中に監視された各インスタンスのグラフ形式の測定値データ。
<測定値テーブル>	レポート期間中に監視された各インスタンスの測定値データを 30 分単位でテーブル形式で表示したもの。赤または黄色で強調表示されたエントリは、測定値がモニタのエラーまたは警告ステータスのしきい値を超えたことを示します。青はモニタが無効になっていることを示します。
<エラーリストテーブル>	モニタのエラー・ステータスしきい値を超えたモニタ・インスタンスが一覧表示されます。エントリは赤で強調表示されます。
<警告リストテーブル>	モニタの警告ステータスしきい値を超えたモニタ・インスタンスが一覧表示されます。エントリは黄色で強調表示されます。
<良好リストテーブル>	モニタの正常ステータスしきい値内のモニタ・インスタンスが一覧表示されます。エントリは緑で強調表示されます。

モニタ・サマリ・レポート

このレポートには、レポートに含めるように選択したグループのモニタの構成および現在の設定に関する情報が表示されます。このレポートは、モニタのセットアップ情報およびモニタ・グループの編成と構成を表示するために使用します。

たとえば、モニタのスキップで問題がある場合は、モニタ実行頻度([[頻度](#)]設定)を確認し、比較できます。モニタのスキップの詳細については、[1115ページ「SiteScope 状況の概要」](#)を参照してください。

また、警告に影響する可能性があるモニタの依存関係を確認するためにレポートを使用することもできます。依存関係の詳細については、[329ページ「グループの依存関係の監視」](#)を参照してください。

HP SiteScope モニタレポート - 表			
モニタタイトル ▲	モニタタイプ	グループ	頻度
BAC Integration Configuration	BAC Integration Configuration	Health	1 day
BAC Integration Statistics	BAC Integration Statistics	Health	100 seconds
CPU	CPU Utilization	test	10 minutes
CPU Test	CPU Utilization	test	10 minutes
Connection Statistics Monitor	Connection Statistics Monitor	Health	10 minutes
Dynamic Monitoring Statistics	Dynamic Monitoring Statistics	Health	10 minutes
Health of SiteScope Server	Health of SiteScope Server	Health	5 minutes
License Usage Monitor	License Usage	Health	1 day
Log Event Checker	Log Event Health Monitor	Health	10 minutes
Monitor Load Checker	Monitor Load Monitor	Health	100 seconds
SSL Certificates State	SSL Certificates Status	Health	1 day
Server Monitor	IIS Server	test	10 minutes
sallytest	CPU Utilization	test	10 minutes

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで、SiteScope ノード、モニタ・グループ、またはモニタ・コンテナを右クリックして、[レポート] > [モニタ] を選択します。レポート設定を設定し、[実行] ボタンをクリックしてレポートを生成します。
関連タスク	1278ページ「レポートの作成方法」
関連情報	1294ページ「[新規 SiteScope モニタレポート] ダイアログ・ボックス」

レポートの内容



ユーザ・インターフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
モニタ・タイトル	モニタの名前を表示します。
モニタ・タイプ	表示されるモニタのタイプ。
グループ	モニタが属するグループ名。
頻度	モニタに設定されている実行頻度。
依存対象	このモニタの実行が他のモニタの状態に依存する場合は、依存する側のモニタを一覧表示します。
ポイント	モニタ・インスタンスによって使用されるライセンス・ポイントの数。
URL	監視対象の URL。
ホスト	監視対象のオブジェクトを含むリモート・サーバの名前。
マシン	マシン名。

UI 要素	詳細
OID	監視対象のパラメータのオブジェクト ID。
無効	モニタが無効かどうかを示します。
スケジュール	標準設定以外のスケジュールが選択されている場合は、モニタのスケジュール。
エラー時頻度	[エラー時頻度]オプションが選択されている場合は、エラー条件をレポートしたモニタの監視間隔(秒単位)。
タイムアウト	モニタのタイムアウト設定。
エラーを検証	[エラーの検証]オプションが選択されている場合は、[On]が表示されます。このオプションを選択すると、モニタでエラーが検出された場合にモニタを自動的に再実行します。
レポートの詳細	レポートの[詳細]ボックスに入力されている場合の、レポートのテキスト説明。
モニタの詳細	[モニタの詳細]ボックスに入力されている場合の、モニタのテキスト説明。
ユーザ名	認証に必要な場合のユーザ名。
プロキシ	使用する場合のプロキシ・サーバ名。
しきい値	モニタ・インスタンスのしきい値条件。
タグ	モニタに割り当てられた検索/フィルタ・タグ。
パラメータ	パラメータとしてマークされたプロパティ・オブジェクトとそれぞれの値のリスト。

警告レポート

このレポートには、選択したコンテナのモニタに対して指定した期間中に生成された SiteScope 警告に関する情報が表示されます。

HP SiteScope 警告レポート					
 					
モニタ	タイプ	ステータス	メッセージ	日付	グループ
16.186.75.42	Sound	Pass	Default	12-5-4 下午12:13	test

重要な情報	モニタのレポートを生成するとき、レポートは、選択したモニタをターゲットにする親グループからの警告を含みません。
アクセス方法	[モニタ]コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで、SiteScopeノード、モニタ・グループ、またはモニタ・コンテナを右クリックして、[レポート]>[警告]を選択します。レポート設定を設定し、[実行]ボタンをクリックしてレポートを生成します。
関連タスク	1278ページ「レポートの作成方法」
関連情報	1297ページ「[新規 SiteScope 警告レポート]ダイアログ・ボックス」

レポートの内容


ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。


UI 要素	詳細
モニタ	警告が起動されたモニタの名前。
タイプ	警告アクションのタイプ(たとえば, Mailto, Sound など)。
状態	警告の状態(たとえば, パス, 失敗など)。
メッセージ	警告のメッセージのタイプ(標準, alarmなど)。
日付	警告が起動された日時。
グループ	警告が起動されたグループの名前。
詳細	レポートに各警告の詳細な警告情報を表示します。これには失敗した各警告に対する完全な診断ブレイクダウンが含まれます。

注釈ツール

このツールを使用して、表示しているレポートのスナップショットに注釈を追加し、重要な領域を強調表示できます。注釈ツールは、ベースライン・モニタ測定値グラフを表示しているときに使用できます。注釈オプションを使用してスナップショットをカスタマイズできます。










注釈メニュー・バーの要素で次を行うことができます。



- スナップショットの外観を変更します。
- 注釈レポートを保存、印刷、電子メールで送信します。
- スナップショットに追加された注釈のテキストの外観をカスタマイズします。これらの要素は、[テキスト・ツール]  ボタンが選択されている場合にのみ有効です。

アクセス方法	ページの右側にある[注釈]  ボタンをクリックします。
重要な情報	注釈ツールを使用するには、マシンに Sun JRE プラグイン 1.6.0_x(推奨される最新バージョン)がインストールされている必要があります。プラグインがマシンにインストールされていない場合は、インストールを促すメッセージが表示されます。
関連情報	335ページ「ベースラインを使った状態しきい値の設定」

注釈オプション

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。
















UI 要素	説明
	パン ツール : スナップショットに移動します。
	選択ツール : スナップショットの特定の領域を選択します。
	<p>図形ツール: スナップショットに図形を追加します。図形ツール・ボタンをクリックすると、次の図形ボタンが有効になります。</p> <ul style="list-style-type: none">  四角形: スナップショットの特定の領域を四角形でマークします。  塗りつぶした四角形: スナップショットの特定の領域を塗りつぶした四角形でマークします。  楕円形: スナップショットの特定の領域を楕円形でマークします。  塗りつぶした楕円形: スナップショットの特定の領域を塗りつぶした楕円形でマークします。  角丸四角形: スナップショットの特定の領域を角丸四角形でマークします。  塗りつぶした角丸四角形: スナップショットの特定の領域を塗りつぶした角丸四角形でマークします。 <p>カスタマイズ: このボタンを選択すると、インタフェースの次の各部分を使用して線の外観をカスタマイズできます。</p> <ul style="list-style-type: none"> 線の種類: 追加する線の種類を、次のいずれかから選択します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 実線 ■ 点線 線の幅: 注釈内の線の幅をピクセル単位で選択します。

UI 要素	説明
	<p>線ツール: 線ツールが有効になります。このツールは、選択したスナップショットの領域を線でマークします。</p> <p>カスタマイズ: このボタンを選択すると、インタフェースの次の各部分を使用して線の外観をカスタマイズできます。</p> <ul style="list-style-type: none">• 線の種類: 追加する線の種類を、次のいずれかから選択します。<ul style="list-style-type: none">■ 標準の線■ エンドポイント付きの線■ 矢印付きの線• 線の種類: 追加する線の種類を、次のいずれかから選択します。<ul style="list-style-type: none">■ 実線■ 点線• 線の幅: 注釈内の線の幅をピクセル単位で選択します。
	<p>テキスト・ツール: スナップショットにテキストを追加します。</p> <p>例: レポートの特定の領域をマークしている線の上に「これは問題のあるトランザクションです」という構文を追加します。</p>
境界線と塗りつぶしの色	<p>該当の四角形を選択して、注釈の境界線と塗りつぶしの色を選択します。次の四角形を使用できます。</p> <ul style="list-style-type: none">• 上の四角形: 線ツールで生成され、塗りつぶされていない図形に表示される線の色を選択します。• 下の四角形: 図形を塗りつぶす色を選択します。 <p>どちらの四角形をクリックしても、色を選択する次のタブを含むダイアログ・ボックスが表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none">• Swatches• HSB• RGB
不透明度	<p>不透明度バーをスライドして、注釈内で選択した図形の線、テキスト行、または図形の色濃さのレベルを選択します。</p> <p>注:</p> <ul style="list-style-type: none">• 不透明度が高いほど、より暗く表示されます。不透明度が低いほど、より明るく表示されます。• このフィールドは、図形ツール、ライン・ツール、またはテキスト・ツール・ボタンのいずれかが選択された場合に有効です。

注釈メニュー・バー

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します(ラベルのない要素は山括弧内に表示されま



す)。

UI 要素	説明
	<p>保存 : スナップショットをローカル・マシンに保存します。</p> <p>注 :</p> <ul style="list-style-type: none"> スナップショットは .png 形式で保存されます。 [マイドキュメント]ディレクトリまたはそのサブ・ディレクトリに保存する場合, [新規フォルダ]  アイコンは選択できません。
	すべて選択 : スナップショットに追加されたすべての注釈を選択します。
	選択項目のクリア : すべての注釈をクリアします。
	元に戻す : スナップショットに対して実行した最新のアクションを元に戻します。
	やり直し : スナップショットに対して実行した最新のアクションのロール・バックをキャンセルします。
	ズーム・イン : スナップショット・ビューを拡大します。
	ズーム・アウト : スナップショット・ビューを縮小します。
	初期サイズの復元 : スナップショットを初期サイズに戻します。
	印刷 : スナップショットを印刷します。
	電子メール送信 : 電子メールでスナップショットを送信します。
	<p>リポジトリに保存 : スナップショットをReports Repository Managerにアップロードします。Reports Repository Managerの詳細については, BSM ヘルプの「レポート・マネージャの概要」を参照してください。</p> <p>注 : このオプションは, SiteScope 機能から注釈ツールにアクセスしているときには使用できません。BSM から注釈ツールにアクセスする場合, スナップショットは Report Repository にアップロードされます。Report Repositoryの詳細については, 「レポート・マネージャの概要」を参照してください。</p>
	ヘルプ : 現在表示しているページのヘルプをオンライン・ドキュメントで表示します。
	<p>太字 : テキストを太字にします。</p> <p>注 : このフィールドは, [テキスト ツール]  ボタンを選択するときのみ有効になります。</p>

UI 要素	説明
	<p>斜体: テキストを斜体にします。</p> <p>注: このフィールドは, [テキスト ツール]  ボタンを選択するときのみ有効になります。</p>
	<p>下線: テキストに下線を引きます。</p> <p>注: このフィールドは, [テキスト ツール]  ボタンを選択するときのみ有効になります。</p>
	<p>アンチエイリアス: テキストまたは注釈行のピクセルの読み込みを調整し, 滑らかに表示されるようにします。</p> <p>注: このフィールドは, [テキスト ツール]  ボタンを選択するときのみ有効になります。</p>
<フォント ファミ リ>	<p>レポート内のテキストのフォントを選択します。</p> <p>注: このフィールドは, [テキスト ツール]  ボタンを選択するときのみ有効になります。</p>
<フォント サイ ズ>	<p>レポート内のフォントのサイズを選択します。</p> <p>注: このフィールドは, [テキスト ツール]  ボタンを選択するときのみ有効になります。</p>

[Mail Details] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは, 電子メールで送信されるレポートを設定できます。

アクセス方法	[Export report to...]  をクリックして,  [電子メール] を選択します。
重要な情報	レポートの内容を電子メール・クライアントに表示するメール・オプションを選択した場合は, 電子メール・クライアントのセキュリティ制限事項で, HTML メールに含まれるスクリプトが実行されるように設定します。このように設定されていない場合, レポートのすべての内容を適切に表示できないことがあります。
関連タスク	1278ページ「レポートの作成方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> • 1274ページ「SiteScope レポートの概要」 • 1294ページ「[新規 SiteScope モニタレポート] ダイアログ・ボックス」 • 1307ページ「モニタ・サマリ・レポート」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
件名	内容を示す件名を入力するか、または標準設定値を受け入れます。
To	レポートの送信先の電子メール・アドレスを入力します。
Reply-to	返信を受信する電子メール・アドレスを入力します。 注：必要な場合は、標準設定で[Reply-to]フィールドに特定の電子メール・アドレスを表示するように設定できます。そのためには、XYZ で Default Reply-To Address エントリを検索します。必要に応じて、この値を更新します。
コメント	必要に応じて、関連するコメントを入力します。
Send report as	レポートを送信する形式を指定します。次のオプションのいずれかを選択します。 <ul style="list-style-type: none"> • HTML mail：レポートを電子メール・クライアント内に表示します(HTML が電子メール・クライアントでサポートされており、表示するように設定されている必要があります)。 • HTML attachment：レポートをブラウザ内に HTML 形式で表示します。 注：You must have a connection to a SiteScope machine to enable you to view the attachment.
Include Images	電子メール内にすべてのレポート・リソース(たとえば、グラフィックス)を含めるにはこのオプションを選択します。 電子メールから画像を削除する場合は、このオプションをクリアします。この場合、画像は SiteScope サーバ上に置かれるため、レポート画像を表示するには、SiteScope にネットワーク接続してサーバにアクセスする必要があります。 注：[Send report as]フィールドで[HTML mail]が選択されている場合にのみ、このオプションが表示されます。
Send as Internet Explorer Archived HTML (.mht)	ブラウザ内にすべてのレポート・リソース(たとえば、グラフィックス)を表示する場合は選択します。ただし、MHT 形式がサポートされている必要があります(Microsoft Internet Explorer など)。添付ファイルを表示するために、SiteScope マシンに接続する必要はありません。 注：[Send report as]フィールドで[HTML attachment]が選択されている場合にのみ、このオプションが表示されます。
Zipped Attachment	添付ファイルを圧縮された形式で送信します。 注：[Send report as]フィールドで[HTML attachment]が選択されている場合にのみ、このオプションが表示されます。

用語集

A

alert

任命された人員にパフォーマンス上の問題を知らせるための通知。警告は、さまざまな手段（電子メール、ページャー、SMS、SNMP トラップ）で送信することができます。また、さまざまなアクションをトリガするように構成できます。

B

BSM

HP Business Service Management (BSM) を参照してください。

C

CIT

「構成アイテム・タイプ」を参照してください。

counter

モニタによって取得された値。SiteScope カウンタには、処理時間、データベース・クエリ時間、CPU 使用率などがあります。

E

EMS 統合

BSM には、サードパーティ・ドメイン・マネージャまたはアプリケーション・システムから情報を収集し、その情報を BSM アプリケーションで使用するために既存の Enterprise Management Systems (EMS) ソフトウェアと統合させる機能があります。BSM アプリケーションでサードパーティ・データの収集および使用するためのさまざまなオプションが用意されています。すぐに使用が可能なサード・パーティの統合または HP 製品の統合を利用できます。収集データのタイプおよび統合の必要性に応じて、次の統合オプションを選択することもできます。EMS ソフトウェアによって生成されたイベント・データ、測定値データ、トポロジ・データを BSM に統合する SiteScope 統合モニタ。イベントを BSM に統合する BSM 統合アダプタ。統合タイプは、サードパーティ・システム（リモート統合またはローカル統合）からデータを取得できる方法によって異なります。

G

group

SiteScope モニタはグループ内で作成されます。SiteScope グループにはモニタ・サブグループを含むことができるため、大規模なマルチサーバ環境の監視管理を簡易化できます。グループを使用すると、監視環境に関連した条件に基づきモニタを組織化できます。たとえば、ネットワーク接続、ブラウザ・タイプ、部門、場所、またはモニタ・タイプごとにモニタを分類できます。グ

ループは、レポートおよびサービス状況統計を整理するために BSM および SiteScope によって使用されます。

H

HP Business Service Management(BSM)

ビジネス、サービス・レベル管理、エンドユーザ管理、システム可用性管理、カスタム・レポート作成に注目したリアルタイムのパフォーマンスおよび可用性の監視に向けた HP のソリューション。SiteScope と BSM の実現により、監視された環境向けの完全な企業レベルのソリューションが実現しています。

HP Live Network

HP Live Network はオンライン・コミュニティで、HP カスタマが情報を共有し、アドオン・コンテンツ、エクステンション、HP Software ポートフォリオにわたる関連アクティビティについて知るための中心的な場所を提供します。

HPOM

HP Operations Manager(HPOM) は、分散型クライアント・サーバ・ソフトウェア・ソリューションです。ビジネスクリティカルな企業システム、アプリケーション、サービスのサービス・ドリブン・イベント管理およびパフォーマンス管理を提供します。

M

monitor

ネットワーク環境のシステムおよびサービスのパフォーマンスおよび可用性を自動的にテストする、個別に構成された指示セット。

P

performance

計測されるエンティティの品質を定義する用語。たとえば、事前定義された目標と比較した、ニューヨークのハブ・ルーターからロンドンにあるハブ・ルーターまでの転送に要した時間。パフォーマンス目標は、構成アイテムによる時間超過の基準となるしきい値を示します。たとえば、ホームページが 8 秒以内にダウンロードされなければならない場合、パフォーマンス時間がその時間を超えると、目標達成に失敗したことになります。パフォーマンスは、ディスク容量、ネットワーク負荷などの計測の観点においても使用されます。

S

SAP サービス

SiteScopes および Business Process Monitor から取得したデータを Data Flow Probe から入力された SAP 関連のエンティティにリンクし、BSM 互換性を実現するサービス。

Siebel サービス

SiteScopes および Business Process Monitor から取得したデータを Data Flow Probe から入力された Siebel 関連のエンティティにリンクし、BSM 互換性を実現するサービス。

SiteScope 状況

複数の主要な SiteScope ログおよび構成ファイルを定期的にチェックする、特別に事前構成されたモニタのセット。SiteScope 状況機能は、構成の問題があるモニタ、SiteScope サーバでのリソース負荷、主要な構成ファイルでのエラーなどの問題を検出および診断する際に役に立ちます。設定および警告しきい値は、ユーザによる構成が可能です。

ア

アカウント権限

SiteScope サーバと監視対象のリモート・サーバの間の権限。SiteScope は、クライアントまたはユーザをエミュレートすることでリモート・システムとサービスを監視します。リモート・サーバ上のいくつかのタイプのサービスおよびリソースの監視では、SiteScope サーバとリモート・サーバ間で特定のアカウント権限を共有する必要があります。SiteScope 監視およびリモート接続を構成する際、リモート・システムおよびサービスによって要求されるアカウント権限およびユーザ認証情報を入力する必要があります。

イ

イベント・タイプ・インジケータ

イベント・タイプ・インジケータ(ETI)は、BSM イベント・サブシステムを使用して、管理対象のIT環境における発生タイプ(CPU 負荷など)に従ってイベントを分類します。それぞれの構成アイテム・タイプ(CIT)には、構成アイテム・タイプでの測定内容を定義する、対応のイベント・タイプ・インジケータが存在します。イベント・タイプ・インジケータの定義に基づき、各イベントが特定の状態(正常より低い、正常より大幅に低い)および重大度(正常、警告など)に変換されます。構成アイテムの状態情報を提供するイベント・タイプ・インジケータは、構成アイテムの状況インジケータを計算するために使用されます。

エ

エージェントレス

SiteScope によって提供される監視ソリューションのタイプ。SiteScope による監視は、監視対象のサーバおよびシステムへの SiteScope エージェント・ソフトウェアのデプロイメントを必要とせず、ネットワーク・プロトコールおよび接続に対するアクティブな監視を介して実行されます。これによりデプロイメントおよび管理が大幅に高速化されますが、監視するリモート・システムおよびサーバへの接続方法を SiteScope に指定する必要があります。

カ

カスタム・データ(UDX)

BSM は、Universal Data Exchange(UDX) フレームワークを使用して、さまざまなデータ・ソース(HP データ・コレクタ、SiteScope 統合モニタ、サードパーティ・データ・ソースを含む)からのデータ・サンプルを BSM レポートに統合します。BSM では、UDX フレームワークを使用して入力されたデータを分類するために「カスタム・データ」という用語が使用されます。

コ

コンポーネント

サービス状況および MyBSM には、ユーザのビジネス・タスクに関連する情報が表示されるページ領域があります。

サ

サービス状況

SiteScope 上で実行されているモニタおよび測定の実タイム・ステータスおよび時間を追ったステータス。サーバ中心のレポートを介して、監視されているサーバについての認識機能およびパフォーマンス統計も提供します。

し

しきい値

パフォーマンス・データを意味ある方法で組織化するためのパフォーマンス範囲。

シ

システム可用性管理

SiteScope データ・コレクタを中央構成および管理するために使用される BSM の領域。グローバル検索および置換、表示フィルタ、迅速なモニタ・デプロイメントを実現するテンプレートの使用を提供することで、複数の SiteScopes の企業レベル管理を有効にします。

デ

データ・コレクタ

BSM は、組織の IT インフラストラクチャ全体にモニタをデプロイすることで、可用性データおよびパフォーマンス・データを収集します。データ・コレクタは、こうしたモニタを実行する機能で、Business Process Monitor、Real User Monitor および SiteScope などがあります。

データ集計

BSM によって使用されるプロセス。BSM モニタによって収集されたデータを管理可能な形式に組み合わせることで、レポート生成の速度およびパフォーマンスを向上させ、データベース・パフォーマンスを最適化させます。

テ

テンプレート

セット・テンプレートに基づいて 1 つまたは複数の SiteScope モニタを迅速に追加するための機能。インフラストラクチャ内にある、同様の特性を共有するシステムをチェックする一連のモニタを迅速にデプロイするには、モニタ・テンプレートを使用します。組織の要件に合わせて独自のテンプレートを作成およびカスタマイズできます。

ビ

ビュー

アイコンによって表される、構成項目および関係の集合。これらの構成アイテムおよび関係は、RTSM に対する TQL クエリの結果であり、それらに割り当てられた表示および組織化ルールに基づいて、ビューとして表示されます。それぞれの構成アイテム/関係は、複数のビューで表示されたり、異なるビュー・レイヤの複数のアイコンによって表されます。

ビュー・エクスプローラ

CI ビュー内での表示および検索を可能にする、モニタ・デプロイメント・ウィザードおよび[モニタを CI にリンクする]オプションで使用されるツール。

フ

フィールドのマッピング

監視環境からデータにアクセスするために、SiteScope 統合 モニタによって使用される構成ファイル。

ペ

ページ

サービス状況および MyBSM 内には、一緒に表示されたり、相互作用する複数のコンポーネントの集合があります。各ページは、タブの形式で表示されます。

ポ

ポイント

SiteScope で使用可能な異なるモニタ・タイプのインスタンスを有効にするために使用される製品ライセンス・クレジット。購入したポイント数によって、監視可能なモニタ・インスタンスの合計数および特定のシステム・パフォーマンス・メトリクスまたはカウンタが決まります。必要とされるポイント数は、モニタ・タイプおよびモニタ・インスタンスごとに実行されている測定数によって異なります。

マ

マッピング・エンジン

互いに仮想関係を持つ異なるデータ・ストアから構成アイテムのリンクを識別するコンポーネント。この識別は、HP Business Service Management の構成アイテムと外部構成アイテムを一致させることで実行されます。

メ

メトリクス(BSM)

SiteScope から BSM にレポートされるメトリクスは、構成アイテム(たとえば、サービス状況、サービス・レベル管理、システム可用性管理)の状況を計算するときにさまざまな BSM アプリケー

ションによって使用されます。

メトリクス(HPOM)

BSM の Operations Management のグラフ作成コンポーネントである Performance Perspective によって使用されるメトリクス。

モ

モニタ・ストレージ

カスタム・タイプのモニタの場合、モニタ・ストレージには、将来のデータ処理スクリプトの実行で使用するスクリプト・データを保存できます。

モニタ・デプロイメント・ウィザード

モニタ・デプロイメント・ウィザードは、事前定義のテンプレートを使用して、HP Business Service Management の RTSM 上の既存の構成アイテムに SiteScope モニタをデプロイします。

モニタの実行

個別のモニタに対して定義されたアクションの 1 回の実行。モニタのアクションは、モニタのタイプおよび選択した構成設定によって決定します。モニタの実行によって、測定結果を返すか、期待した測定が取得されなかったことを伝える状態が返されます。この結果は、SiteScope ログ・ファイルに記録され、モニタの状態は、SiteScope インタフェースで更新されます。モニタの実行頻度は、監視の有用性および SiteScope パフォーマンスにおいて重要な要素です。

モニタの実行頻度

SiteScope によるモニタ・アクションの実行頻度を決定する、個別のモニタに設定された時間間隔設定。[モニタの実行設定]の[頻度]設定を使用して、モニタの実行頻度を設定します。ほとんどのモニタ・タイプのデフォルトは、10 分間です。監視しているシステムまたは測定の重要度を考慮したモニタ実行頻度を選択する必要があります。高すぎる実行頻度を設定すると、監視しているシステムがモニタ実行の間隔内に応答しない場合、モニタ・スキップおよびその他の問題が発生する場合があります。

リ

リモート接続

SiteScope を使用して監視するリモート・システムへの接続。エージェントレス・モニタリグ・ソリューションである SiteScope は、多数のプロトコルおよび方法を使用して、SiteScope がインストールされているマシン以外のマシンまたはサーバ上にあるシステムおよびサービスをチェックします。したがって、SiteScope を使用して監視するさまざまなシステムへの接続方法を認識しておく必要があります。SiteScope では、Windows または UNIX/Linux オペレーティング・システムを動作するサーバにリモート接続できます。

仮

仮想関係

異なるデータ・ストアからの 2 つのグラフ・ノード間の関係。この関係のインスタンスはいずれのデータ・ストアにも存在せず、FTQL 計算時に作成されます。

可

可用性

ビジネス・プロセス、監視 インフラストラクチャ・コンポーネント、サービスが稼動している時間の割合。

解

解決

2 つ以上のソースからのデータを解決させるプロセス。共通命名スキームに解決させるか、レコード内のデータ・オーバーラップの差異を単一の答えに解決させます。

監

監査ログ

ユーザが実行したすべての構成変更を記録する管理ログ。

警

警告アクション

警告の条件が満たされたときに SiteScope にアクションを実行させる命令セット。それぞれの警告アクションは、SiteScope 警告の下オブジェクトとして作成されます。警告には、複数の独立した警告アクションを含むことができます。

警告の依存関係

別の主要な警告に従属する 1 つまたは複数の警告を指定できる機能。主要な警告がトリガされた後に、従属する警告がトリガされると、BSM および SiteScope は従属する警告の定義済みアクションを無効にできます。

構

構成アイテム

システムにおける物理的または論理的なエンティティを表す RTSM のコンポーネント。たとえば、構成アイテム(CI)は、ハードウェア、ソフトウェア、ビジネス・プロセスなどを表します。構成アイテムは、組織の IT 環境での依存性に基づき階層形式で組織化されます。

構成アイテム・タイプ

各構成アイテム(CI)のカテゴリ。各構成アイテム・タイプ(CIT)では、構成アイテムおよびその関連プロパティを作成する際に使用できるテンプレートが提供されます。

主

主要なパフォーマンス・インジケータ

構成アイテムのために計算され、定義済み目標に対して比較された、数量化が可能な測定。主要なパフォーマンス・インジケータを使用すると、ビジネスでの目標の達成度を監視したり、長年にわたってクリティカル・パフォーマンス変数を記録できます。

受

受信者

電子メール、SMS またはページャを介して、警告、定期レポート、パッケージ情報 (HP Software-as-a-Service のみ) を受け取るように構成されたユーザ。

状

状況インジケータ

状況インジケータ (HI) は、監視されたビジネス要素およびプロセスを表す、構成アイテムの詳細な測定値を提供します。状況インジケータには、バックログおよびボリュームといったビジネス・メトリックを表示するインジケータ、パフォーマンスおよび可用性に関連するさまざまな測定値を表示するその他のインジケータがあります。状況インジケータの状態は次の 2 つのタイプによって設定されます。イベント・サンプル (たとえば、しきい値を超えた CPU 負荷) およびメトリック・サンプル (たとえば、応答時間 = 6 ミリ秒)。イベントベースの状況インジケータは、イベントのイベント・タイプ・インジケータ重大度を使用して、状況インジケータの状態を生成します。その一方で、メトリックベースの状況インジケータはデータ・コレクタによって送信されたメトリックに計算ルールを適用することで状況インジケータ値を作成します。

操

操作管理

Operations Management は、組織の IT 環境で発生したイベントの監視、イベントの関連付け、構成アイテムの状況の詳細概要のコンパイルと表示を行うために使用される BSM のアプリケーションです。

相

関連データ

レポート生成の速度およびパフォーマンスを向上させ、データベース・パフォーマンスを最適化させるために、モニタによって収集されたデータを管理可能な形式に変換したデータ。

測

測定値

モニタによって取得された値。たとえば、SiteScope の測定値には、処理時間、データベース・クエリ時間、CPU 使用率などがあります。

通

通知テンプレート

さまざまなタイプの警告通知を送信する際に、SiteScope に含めさせる情報を指定します。